

# 双六で人生を変えられた男

晁甫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神様の遊戯によって勝手に転生させられてしまった主人公。

転生先であるISの世界で知った自分の名前は、どういうわけか『更識』だった。

## 目次

#1	転生はその時点でフラグ	1
#2	原作キャラとの遭遇はその時点でフラグ	5
#3	お兄ちゃんになるのはその時点でフラグ	9
#4	原作キャラとの絡みはその時点でフラグ	14
#5	お揃いの小物はその時点でフラグ	22
#6	神様の能力で悩むのはその時点でフラグ	28
#7	原作と違うのはその時点でフラグ	35
#8	親バカな父はその時点でフラグ	40
#9	平穩という言葉を使うのはその時点でフラグ	45
#10	天才に想われるのはその時点でフラグ	51
	キャラ設定&おまけ	57
#11	学校行事はその時点でフラグ	62
#12	帰宅部でその運動神経はその時点でフラグ	70
#13	騒々しいのはその時点でフラグ	77
#14	挙動不審はその時点でフラグ	86
#15	弁当タイムのあーんはその時点でフラグ	94
#16	天災が見当たらないのはその時点でフラグ	102
#17	ISの完成はその時点でフラグ	113
#18	勘違いはその時点でフラグ	119
#19	天災の失踪はその時点でフラグ	129
#20	IS学園への入学はその時点でフラグ	135
#21	フラグを避ける考えはその時点でフラグ	142
#22	フラグ回避はその時点でフラグ	152

#番外	彼女たちの日常	159
#23	同棲はその時点でフラグ	174
#24	行事参加はその時点でフラグ	182
#25	二人っきりの買い物はその時点でフラグ	191
#26	臨海学校はその時点でフラグ	203
#27	海に出るのはその時点でフラグ	210
#28	フラグのことを考えるのはその時点でフラグ	217
#29	そういうムードはその時点でフラグ	225
#30	模擬戦はその時点でフラグ	234
#31	二人の戦闘はその時点でフラグ	241
#番外(前)	更識家と天災	250
#番外(後)	少年少女	258
#32	新学期はその時点でフラグ	273
#33	生徒会はその時点でフラグ	278
#34	代表候補生はその時点でフラグ	284
#35	決闘はその時点でフラグ	290
#36	思わせぶりはその時点でフラグ	295
#37	密かに近づく影はその時点でフラグ	302
#38	回想はその時点でフラグ	307
#39	決着はその時点でフラグ	315
#40	エプロンはその時点でフラグ	323
#41	見習いはその時点でフラグ	333
#ex	更識シスターズ	343
#42	準備期間はその時点でフラグ	354
#43	再会はその時点でフラグ	365

# 4 4 不審者はその時点でフラグ 374

# 4 5 暗躍はその時点でフラグ 382

# 4 6 シリアスはその時点でフラグ 392

# 追憶 楯無継承(前) 399

# 追憶 楯無継承(後) 411

# 4 7 兄妹水入らずはその時点でフラグ 426

# 4 8 女の勘はその時点でフラグ 437

# 4 9 準決勝はその時点でフラグ 447

# 5 0 引継ぎはその時点でフラグ 456

# 5 1 感傷はその時点でフラグ 465

# 5 2 卒業はその時点でフラグ 480

六年後 原作開始

# 1 入学と再会 493

# 2 三人目と四人目 507

# 3 思惑と矜持 517

# 4 一夏とセシリア 529

# 5 決着と第二試合 539

# 6 妹と四人目 553

# 7 就任と新事実 564

# 8 回想と決意 576

# 9 代表と褒賞 587

# 1 0 想像と現実 599

# 1 1 中心と周辺 613

# 1 2 対決と暗躍 623

# 1 3 乖離と参戦 633

# 3 2	恋話と対面	925
# 3 1	ビーチと夜	914
# 3 0	臨海学校と集結	902
# 2 9	デートと可能性	886
# 2 8	決勝戦と終幕	871
# 2 7	姉妹と影	859
# 2 6	不穏と三回戦	849
# 2 5	姉と妹	840
# 2 4	決着と憩い	829
# 2 3	白と黄	818
# 2 2	緒戦と二回戦	808
# 2 1	開会と開戦	800
# 2 0	変更と思惑	791
# 1 9	遭遇とパートナー	782
# 1 8	錯綜と陰謀	772
# 1 7	過去と邂逅	760
# 1 6	娘と嫁	748
# B F	武器商人と出会った日	724
# B F	武器商人と出会った日	711
# B F	武器商人と出会った日	697
# B F	武器商人と出会った日	685
# B F	武器商人と出会った日	675
# B F	武器商人と出会った日	665
# 1 5	黒執事と無人機	654
# 1 4	妹と証拠	645

# 3 3	三者と三様	935
# 3 4	二番目と四番目	948
# 3 5	第二位と第三位	959
# 3 6	三日目と急変	972
# 3 7	真意と心意	982
# 3 8	天才と天災	994
# 3 9	黒と青、蒼と銀	1005
# 4 0	失踪と計画	1016
# 4 1	陰謀と黄金	1026
# 4 2	共謀と油断	1035
# 4 3	転機と勝機	1047
# 4 4	覚醒と分岐点	1059
# 4 5	収束と終息	1075
#	もうひとつのプロローグ	1088
#	そして少年は生まれ変わる	1099
#	そして青年は海を渡る	1125
#	青年は中枢へと向かう	1144

## #1 転生はその時点でフラグ

『すまなんだ』

『……は?』

『すまなんだ』

『ちよつと待て誰だアンタ』

突然目の前に現れたおっさんがただでさえ禿げかけた額を地面に密着させてなにやら謝ってきた。

うん、早い話が

DO☆GE☆ZA

『なんか分からんけど、とりあえず顔上げろよおっさん』

言われておっさんは顔を上げる。うわ、でこ真つ赤じゃん。

『で? なんで俺に謝ってんだ?』

『……お主覚えとらんのか?』

『……何を』

『いや……、覚えていないのなら無理に思い出す必要もなからう』

なんだよ気になるじゃねーか。

『それでなんじゃが……』

なにやらおっさんが人差し指同士をつんつんさせながらモジモジしました。やめてくれ吐きそうだ。

『お主、転生してみぬか?』

『……はい?』

転生? それって小説とかでよくあるパターンのやつやん。

……あれ、待てよてことは俺ってまさか。

『俺、死んでんの?』

『……うむ』

……orz

まじかよ。

『……なんで?』

『それがのう……神様同士で双六をやつとつたんじゃが、その止まったマスに人を一人転生させる、というものが……ちよ、待つのじゃ!!』



思いっきり拳を振り上げるでない!!』

本気で殺つてしまおうかと思つたよ。つーかなんだそのふざけた双六は。 そんなんで俺殺されて転生させられるのかよ!!

『そんなふざけたもんで俺は理不尽に殺されたと』

『いや、あのほんとすいませんでした』

再びあの土下座スタイルで謝るおっさん。 ……え? てことは  
コイツ神様?

『そうじゃ』

心を勝手に読むな。

『話戻すけど、転生つて具体的には?』

『うむ、お主には「IS」の世界に行つてもらいたいのじゃ』

『小説じゃねーか』

『仕方ないのじゃ。くじを引いたらこれだつたんじゃから』  
くじ引きつて。

つーかISつてあの女尊男卑を体现したみたいな世界だろう。や  
だよそんなあからさまに嫌な思いするつて分かつてる世界は。

『心配無用。テンプレは弁えておるわ。お主には何か能力を授けよ  
う。そうすれば向こうの機械とも戦えるじゃろ』

おいそれ俺生身つてことじゃねーか!!

……ん? あれならいいんじゃないか?

『じゃあ、とあるの一方通行(アクセラレータ)の能力をくれ』

『ベクトル操作か。いいぞい』

よっしや!

あれならまずISに負けることはないだろう。

反射してしまえば大抵の敵は倒せるし。

なんか楽しくなってきたぞ。

『性別の希望はあるかの?』

『男に決まつてんだろ』

『承知した。ではこれから主を転生させるぞい』

おっさんが言った途端、後ろに大きな扉がなんの前触れもなしに現  
れた。

これをくぐればいいって訳か。

『じゃあなおっさん』

『うむ。ほんとにすまなんだ』

『もういいよ。もう会うこともねえだろうしな』

そうして意気揚々と扉へ向かって歩き出そうとした瞬間。

足元に大きな穴が開いた。

『…………へ？』

『達者でのお』

『ごっちかよクソじじいツイッ!!』

そうして俺の意識は闇の中へと沈んで行った。



というのが俺が五年前に体験した出来事だ。

五年後、つまり現在五歳の俺はしっかりとISの世界に転生することと成功していた。しかも何やら金持ちの家計らしく家も中々に豪奢なんだ。

ん？ ISの世界に転生できたのかがどうして分かるのかって？

ハハハ、そんなこと簡単だよ。

「形無。こんなところにいたのか」

「あ、父さん」

目の前に現れた親父（呼び名は今のところ父さん）が部屋を抜け出した俺を見つけ出した。

「戻りなさい」

「はい」

あ、そうそう話の続きだったな。なんでここが『IS』の世界だと

分かるのかっていうと。

俺の名前で一発でした。

俺の名前、形無（かたなし）

俺の苗字、更識（さらしき）

あの更識家に長男として生まれてた。

……それなんてフラグorz

## #2 原作キャラとの遭遇はその時点でフラグ

さて、俺こと更識(さらしき)形無(かたなし)は無事に五歳になり、明日は幼稚園の入園式だ。

生まれてからこれまでのことは余り話したくない。前世で二十歳だった俺が零歳児からやり直して母親のおっぱいしゃぶるなんて羞恥プレイ以外の何物でもなかったしな。

いや実際転生してみても思ったけど、この家すごくね？ 完全に首相官邸かとおもったわ。

俺がそんなことを思っていると、唐突に俺の部屋の襖が開いた(ちなみに俺の部屋は十二畳)。

「形無。勉強は済んだのか」

「終わった」

俺に宛がわれた部屋に入ってきたのは俺の親父、更識(さらしき)楯無(たてなし)。

暗部に対向するための対暗部組織『更識』の十六代目。つまり現当主だ。

「明日からお前は幼稚園に通うわけだが、」

一見とても厳しそうに見えるこの親父だが。

「大丈夫か!? 苛められたりしたらすぐ父さんに言うんだぞ!」

とんでもない親バカだったりする。

「大丈夫だって。何も心配いらなから」

「本当か!? いや心配だ。明日の入園式、やはり俺も——」

そんな親バカっぷりを遺憾無く発揮する親父だが、その言葉を遮るように部屋に入ってきた女性が親父の頬を思いつきビンタした。

おい今のビンタなんか破裂音したぞ。

「あら楯無さん。明日は大事なお仕事があるのでしよう？ 入園式には私が行きますから」

「み、瑞穂!! しかしだな……ッ!」

「タテ ナ シ サン」

ゾクゾクッ!! と背筋に何か得体の知れない悪寒が走る。

こえーよ、瞳から完全に光が消えてるよ。親父も完全に硬直してしまっている。

紹介が遅れたが、この大和撫子みたいな美人は俺の母親、更識(さらしき) 瑞穂(みずほ)。ちなみに二三歳。

この更識家に十七で嫁いで十八で俺を生んだ若奥様だ。

「わ、わかった。形無の入園式はお前に任せる……」

「はい。任せてください楯無さん」

がつくりと肩を落とす親父。なんか哀愁漂ってんなあ。

そんなこんなで入園式。

俺はなにやら幼稚園の制服らしい紺色のブレザーに同色の帽子を被され、少し広めのホールの席に座っている。

どうやらこの幼稚園なかなかレベルが高い私立の幼稚園らしく、入園試験なるものまでやらされ合格したのがここに集まっている園児たちのようだ。

ん? 俺は試験余裕だったよ? だって精神的にはもういい年だぜ。イラスト見てなんの動物か答えるとか簡単すぎるわ。

「形無。緊張していない?」

「ん、大丈夫」

つーか隣に座ってる母さんの方が緊張してんな。まあまだ二三だし美人だから回りからちよー見られてるし仕方ないんだろうけど。

「母さんね」

「?」

「実は今緊張してるわ」

「知ってるよ!」

この人実はとんでもない天然だから困る。料理とか家事とかは完

壁なんだけどな。

あ、なんか始まるっぽい。禿げたおっさん出てきた。

「えー本日は――」

割愛。

式が終わりました。

あんな長つたらしいおっさんの話誰も興味無いだろうし、もし書いたら軽く五万字は行くだろうからカットで。

そんなわけで現在俺は幼稚園のクラス分け、早い話が「ばら組」というクラスにやって来た。ちなみに教室の後方には親さん方が横並びしている。

クラスは全体で二十人という少人数制でそれが『ばら』、『きく』、『ひまわり』、『ふじ』の四クラス計八十人の構成になっている。

……なんか幼稚園児に混ざって座るのって恥ずかしいな。

俺の席はクラスのちようど真ん中あたり。名前順で座席を決められるから『さ』だちようどこの辺りになる。

先生もまだ来ないみたいだから暇なので辺りをキョロキョロと見回してみる。

やっぱみんな幼いなあ。

――ん？

おかしいな。

俺の見間違いか？

俺はごしごしと何度か目を擦ってみた。

……見間違いじゃない。

俺はその子のほうをジッと見つめてみた。

「……何なのかな」

するとムスツと不貞腐れたようにその子がこちらを睨んでそう言った。

腰まで伸びた髪、なにやらカタカタとノーパソを叩くその仕草。

ああ、これは間違いない。

アイツだよ。

俺の座席の左隣に座るこの少女。

左隣ということは名前順できに必然的に『さ行』になるわけだ。

そしてその少女の左胸の位置に付けられた可愛らしいバラをモチーフにした名札に書かれていた名。

しののの たばね

……。

え？ いきなり原作キャラとエンカウントとかこれ完全にフラグ建てちゃ（ry

### #3 お兄ちゃんになるのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

何故か原作キャラとエンカウントしました。

「なんなのかなジロジロこっち見て。鬱陶しいから東さんの視界に入らないでくれる?」

……oh。

流石は『天災』だとか言われるだけあって俺らみたいな凡人は眼中にないらしい。

どうでもいいけどまだこの頃はあのウサ耳(箒ちゃんリーダー)だとか言ってたやつ(付けてないんだな。

あ、当たり前か。

まだ箒とか生まれてすらいねーんだった。

「ああ、悪かったな。綺麗な髪してたから見とれてた」

うん、あながち間違っではない。確かに東の髪の毛は絹みたいにサラサラしてたんだから。

「……ふん」

その言葉を聞いた東は俺を無視して再びパソコンのキーボードを叩き始めた。

……この年で何をやろうとしてんだろうな? まさかもうISの基礎とか考えてんのか?

とかなんとか考えてたらこのばら組の担任らしい幼稚園の先生が入ってきた。肩までのショートカットと黄色いエプロンがよく似合う先生だ。

「はい、今日からみんなの担任になりました。館加耶です、よろしくね」



館 加耶？

やかた かや

やかたかや

……おいこの人やまやの二番煎じ感がぶんぶん漂ってんぞ。

あれ時系列的にはこっちが先になるからあっちが二番煎じなのか？分からん……。

「じゃあみんな自分のお名前を他のみんなに教えてあげようねー」

というわけで名前順に自己紹介が始まった。みんなたどたどしくもしつかりと自己紹介をこなしていく。名前だけでいいって先生が言ってたのに何やら詳細な自己紹介を始める奴まで居たし。

「……は、はい。次の人〜」

見る余りにも詳しくすぎて先生若干引いてるじゃねーか。

お、次の子が立って自己紹介を始めるみたいだ。

「お、織斑千冬です。よろしくお願いします」

……。

……聞き間違いだよきつと。うん、俺耳悪いんだきつとそうだ。

織斑なんて珍しい名字じゃないし。前の奴も名字は織斑だったし。

あ、字が違うわ。あいつは織村だったな。

……完全に主人公の姉さんじゃねえか!!

いや違うと言いたいけどあの髪型と雰囲気は間違いなく将来『ブリュンヒルデ』とか呼ばれる織斑千冬だ。

——なんなんこのクラス。原作キャラとのエンカウント率高すぎだろ。とゆうか俺完全になんかのフラグ建てちゃってるよ。主に死亡フラグとか。

「はい、次の人〜」

俺が沈んでいることなど露知らず、担任の館加耶……やかや（今命名）は自己紹介を進めていく。

「篠ノ之束」

「……………」

「……………」

俺と先生はそれだけ言って再びパソコンに向き合い始めた束に固まってしまった。この子ほんとに他人に興味ないんだな……。

なんとか先生が困りながらも自己紹介を続け出した。うん、頑張れよ先生。

あ、次俺の番だ。

「更識形無です。よろしくお願いします」

我ながら無難で面白みのない自己紹介だと思うが仕方ないだろう。人前で話すのとか苦手なんだよ俺。

「……………」

自己紹介を終えて席についたところで気が付いた。

……何だこの視線の数は（主に女子）。

周りの子からの視線が半端ないんだけどなんでだ。俺変な自己紹介してない筈だぞ？

※主人公は例に漏れずそっち方面において鈍感野郎です。殴って下さい。

その後恙無く自己紹介は終了し、簡単な説明と明日からの日程が伝えられてその日は解散となった。

原作キャラであるあの二人とは、一言も会話をすることなくそそくさと幼稚園を出た。

だって今関わったら間違いなく厄介事に巻き込まれるだろ。少なくとも中学生くらいまでは平穩に過ごしたいんだよ俺は。



入園式も終わり徒歩で自宅へと帰ってきた。やっぱり更識家ってデカイな。裏工作する暗部組織の対暗部組織とか言われてたからひっ

そりと暮らしてるとか一瞬でも考えた俺がバカだと思えるくらいにデカイ。

母さんと手を繋いで家の敷地内に入る。完全に日本風のこの家は門を潜ると庭園が広がっている。なんとというか、どこかのヤクザ者の組長の屋敷みたいだ。

「ただいまー」

「形無っ!!」

帰ってきた途端に座敷から親父が飛んできた。どんだけ心配してんだよ。

「大丈夫かッ!? 苛められたりとかしなかったか!」

「大丈夫だよ。そんなに心配すんなって父さん」

「本当か!? どうなんだ瑞穂!!」

相当心配しているのか俺が大丈夫だと言っているのにも関わらず母さんに確認を取っている。いや大丈夫だから肩を掴んでガクガク揺さぶらないでくれ。

「大丈夫ですよ楯無さん。苛められるどころかみんなの注目的だったの。ねえ?」

「……?」

注目的の? ああ、あの自己紹介の後になぜかバシバシと視線を集めたあれか。どういうわけかあのあと多数の女子が席に集まってきて大変だったんだよな。

「あらあら。形無は分かってないのね」

にこやかに微笑む母さん。できることならどういふことか説明して欲しいが、どうせ教えてくれないんだろうな。

「注目? それは一体どういうことだ?」

親父……、俺は信じてたよ。親父も俺と仲間だってな……!!

あ、母さんが呆れて信じられないくらい大きな溜息をついてる。

「それより楯無さん。今日は大切なお仕事があったんじゃないんですか?」

そう。こんなにも親ばかな親父が何故俺の幼稚園の入園式に来れなかったのかというと、『更識』としての仕事があったからだ。詳しく

は知らないが相当大きな捕物であるらしく二、三日は家に帰って来れないと言っていた筈なのだが。

つまり、我が母が一体何を言いたいのかというところ。

「……何で此処に居るんですか。タ テ ナ シ サン？」

いつの間にか地面に正座させられていた親父の身体はガタガタと震えていた。

これが更識の十六代目当主の姿とは到底思えない。完全に尻に敷かれてるよ親父。

「ぬ……」

「ぬ？」

「ぬけてきちゃった」

テヘツと可愛らしく（実際はおっさんがやっているので全く可愛くはないが）舌を出してコツンと頭を叩く親父。

その後母さんからの連絡を受けた部下が親父を連れ戻しに来たのは言うまでもない。

「あ、そうだ形無」

「なに？」

思い出した、とでも言うように手を叩いて母さんは。

「形無。あなたお兄ちゃんになるのよ」

「……さう。」

とんでもない爆弾を投下しやがった。

更識形無、五歳。

どうやら兄貴になるみたいです。

## # 4 原作キャラとの絡みはその時点でフラグ

前回のあらすじ

我が母がとんでもない爆弾を投下しました。

母さんの爆弾発言から一夜明け、今日から幼稚園児としての生活が始まる。前世を計算に入れば幼稚園に通うのはこれが二回目になるわけなのだが、転生したからか原作キャラと遭遇したからなのか既視感みたいなものはなく、寧ろ新鮮な気持ちで俺は幼稚園の門をくぐった。

基本的には送迎バスが毎朝出ているのだが、あの親バカ（親父）のせいで俺は母さんと二人で通園することに。親バカもここまでくると尊敬に値するよほんと。

一体何の危険性が通園バスにあるってんだ。

「おはようございませす」

「おはよう更識くん」

幼稚園の門をくぐり『ばら組』と書かれたプレートの教室へ向かうと、入口には黄色いエプロン姿のやかやが立っていた。

「早いのね更識くん」

「俺母さんと来たから」

「あら通園バスを使ってないの？」

「……うん」

まあ悪いことじゃないんだけど毎朝歩いて通園は園児の体力的にはキツイんだよ。

今日は初めての通常日程ということで最初クラスのみんなで外に出て遊ぶことになった。

やはり幼いと順応性が半端ではないらしくほぼ初対面だということにすぐに打ち解けて遊びだした。

子供ってすごい。

みんなで鬼ごっこをしたり砂場で城を作ったりと楽しく遊んでいるが、ただ二人。その輪に混ざっていない子たちがいた。言うまでもない。

織斑千冬に篠ノ之束という原作キャラのお二人である。

千冬に関してはみんなに混じって遊びたいみたいだが、生まれもつてのその雰囲気のせいなのか中々馴染めず、束に至っては広場の日陰になっているところでノーパソをカタカタと叩いていた。

千冬はともかく束はなんかもう色々と規格外すぎるだろ。屋外でパソコンとかアウトドアなのかインドアなのかわからん。

はあ、と俺は小さく溜め息をつく。

前にも言ったが俺はあまり厄介事に巻き込まれるのは御免だ。ただでさえあのクソジジイに勝手に殺され転生させられ、平穩などとは程遠い人生を送ることになってしまったのだ。

生まれてきて自分の名字が『更識』だったときはなんかもう色々絶望したが、今は仕方ないと割りきって生活している。

別に更識家に不満があるわけじゃないし。

この幼稚園で原作キャラと遭遇したのは流石に予想外だったが、それはそれでいいかとも思う。関わらなければそれまでだからだ。

だが今の状況を見ると何だか切なくなってくる。

精神年齢が高いせいで千冬も束も手のかかる子供にしか見えないせいもあるのだろうが、なんかこう保護欲を掻き立てられるのだ。特に輪に入れずに涙目になっている千冬。

こんな子供をほっとけるほど、前世で俺は悪い教育をされた覚えはない。

という訳で。

俺は先ず織斑千冬を何とかするべく現在進行形で泣きそうになっている彼女のもとへと歩き出した。

うわ、間近で見たら涙腺が決壊寸前だよ。これ間一髪だよ。

「織斑……さん？」

どういうわけかさん付けで呼んでしまったが仕方ないんだ。やつ

ぱり『ブリュンヒルデ』だよ、気安く呼び捨てできない雰囲気醸し出してよ。

「え……？」

いきなり見知らぬ少年に声を掛けられたせいで涙目だった千冬はキョトンだ。うん、可愛らしいです。

「えーと……」

「更識形無。おんなじクラスの」

どうやら名前が出てこなかったらしいので自己紹介をしておくことに。

「更識くん……」

「そ。一緒に遊ぼうよ」

「っ、うん!!」

言った途端にパアツと千冬の顔が晴れやかになった。やはりまだ子供、遊びたい時期なんだろう。

そうして笑顔になった千冬と俺は二人して近くの砂場に向かう。砂場には既に何人かの先客がいたが砂場自体が幼稚園児には余りあるサイズなので別に問題はない。

だが一応、子供社会の掟に従って。

「ねえ、ここ使っていい？」

と如何にも子供っぽく先客である園児に尋ねた。子供は純粹であるが故に残酷だ。一度嫌われてしまえばクラス内からの孤立は必至。

ここは平和的に行かねば。

「いいよー」

幸いにも先客の園児は友好的で、すぐに了承をくれた。それどころか『一緒にお城つくろうよ』と鶴の一声によって、俺と千冬はその園児たちの集団に混ざることが出来たのだ。

いやはや子供ってすごい。一度仲良くなればすぐに打ち解けてしまうのだ。

大人にもこういうスキルが必要だよ、全く。

さて、千冬が無事に輪の中に入ることが出来たところでもう一人の

問題児のところへ行きますか。

俺は砂場を一時離れ、大きな木の下でパソコンを膝に抱えている束のもとに向かった。

あ、気付いた。

……案の定、めっちゃめっちゃ嫌そうな表情(かお)していらっしやる。

「よう」

「……(カタカタ)」

え、shika☆to?

「なあ」

「……(カタカタカタ)」

やばい、この子まじで俺のこと眼中どころか存在すらないことにされてるよ。

「篠ノ之」

こっちはさん付けしなくても呼ぶことが出来た。呼ばれた本人は本当に不愉快そう顔をしているが。

「……気安く私の名前を呼ばないで近付かないで話し掛けしないで」

……やつと反応してくれたと思っただけなのにこの罵倒。どつかの標語みたいにきれいに罵倒されたのはこれまでの人生で初めてだ。

言って再びパソコンを叩き出した束は私に構うなオーラを全開にしているが、生憎そんなぐらいで引き下がるほど俺はチキンハートではない。

「どれどれ」

「っ!!」

束の所持しているノートパソコンの画面を覗き込む。液晶に映っていたのはやはり幼稚園児には到底理解出来ないような難解な数式やら理論やらで、何をしているのか知らないがこれがISに繋がるんだろうなとは何となく分かった。

「勝手に見ないで」

「お前難しい数式やってんなあ」

「!! ……解るの?」

「まあ多少はな」



言っていないが前世的俺は現役バリバリの大学生だ。詳しく言えば工学部。数式や工学には少なからずの自信がある。

とは言っても、今パソコンに表示されていることの半分しか理解は出来ないが。

ほんとどんな頭脳してんだこの天才は。まあ一人でISの基礎理論やら開発やらをやってしまう程の人物なんだから俺みたいな凡人が敵うわけがないというのは分かってるけどさ。流石に幼稚園児に負けてるといふ現実を突きつけられると凹むわ。

「……、頭いいの?」

「篠ノ之には負けるけどな」

どうやら束は少しだけだが話をする気になったらしい。

「じゃあ、これどう思う?」

言つて束はおずおずとパソコンの画面を見せてきた。ふむ、これつて何かの設計図か? ……いやいや、これどう考えてもISの設計図じゃねーか。下の方にコアがどうか書いてあるし。ほんとに五歳児かこいつ。俺みたいに転生者ですとかいうオチじゃないよな?」

だがまあやはり根本的には幼稚園児だ。幾つか欠陥のようなものを見つけることが出来た。

「この三行目の項目とその下、あとここも。理論としちやあ間違っちゃいないが現実的じゃないな。それだと燃費が悪すぎる」

「……ほんとに頭良いね。束さんもそう思ってたところなんだよ」

いや俺大学生ですから。なんてことを言うわけにもいかないのです。その場は愛想笑いで誤魔化すことにした。ちよつと喋り過ぎたかな。こいつ頭いいからもしかしたら俺の正体バレるかもしれん。

「……名前は何?」

「は?」

「名前だよ君の。君、他の奴とは何か違うみたいだし名前くらいは覚えてあげてもいいよ」

「……そりゃどーも。更識形無だ。よろしくな」

「更識形無。私は篠ノ之束だよ」

俺が頭が良いというのが好印象だったのかは知らんが、無視される

ということではなくなったみたいだ。

結局のところ、こいつは自分のレベルに付いて来ることのできる話  
相手が欲しかったんじゃないだろうか。もしそうだとしたら俺はお  
角違いだなあ……。既についてくのがいっぱいいいってのに  
これから東は天才、いや天災と称されるほどの人間になっていくん  
だ。まず間違いなく俺なんかじゃついていけない。

はあ、またなんかいらんフラグを建ててしまった気がする。

まあ今回は自分で動いた結果だから文句を垂れたりはないが、  
それでもなんだかあ。

せめて中学生までは平穩に過ごしたいとか言ってた昨日の俺をぶ  
ん殴ってやりたい気分だ。



よお。俺だよ俺。

え？ 知らない？

しょうがねえなあ教えてやるよ。

俺の名前は織村（おりむら）一華（いちか）。

所謂転生者ってやつだ。なんでこの俺がこんな小説の世界に転生  
したのかってーと、神とか言う奴の話によれば神様同士で双六やって  
て止まったマスに人間を一人転生させるって書いてあったかららし  
い。その話を聞いた時俺はすごく興奮したね。だって転生とかっ  
て明らかに主人公フラグだろ？ 俺はそれを選ばれたって訳だ！  
つまり俺は選ばれた人種、これが興奮せずにいられるかってんだ。そ  
してテンプレ通りに神から能力も貰ってこの『IS』の世界に転生し  
てきたんだ。

そしてこっちの世界に生まれ、すくすくと成長した俺はつい昨日幼  
稚園の入園式を行なった。そこで運命の出会いを果たすわけだよ。  
そう、この小説のメインキャラであり俺の嫁候補、織斑千冬と篠ノ之

束だ!!

でもそこで俺はある間違いに気付いた。名前だよ。

俺でつきり転生したら主人公の一夏になってると思ってたんだ。いや何か字に違和感あるかなとは思ってたがまさか違ってたとは思ってもいなかった。

だがここで頭の良い俺は思い至った。もしも千冬と家族だったら、合法的に結婚ができないじゃないかと。

流石は神様だ。このことまで計算に入れて俺をこうやって転生させ、幼稚園で運命の出会いを果たしたわけだな。

というわけで先ずは彼女たちと親交を深めねば。そこで俺は自己紹介で彼女たちに自分のことをとても詳しく教えてあげた。実家がどれだけ金持ちで俺がどれだけ頭が良くて……(その他もろもろ時間にしてぎつと十分)。これで彼女たちは俺に興味を持ってこのあと俺のところに来て来ると確信していた。ついでに他の女子たちも。

ところがどうだ。他の女の子たちはどこの馬の骨とも解らない男のもとへと駆け寄り、嫁候補の二人は俺に何の挨拶もなくそそくさと帰ってしまった。

翌日に当たる今日にしてもそうだ。

クラスみんなで遊ぶことになったため俺は真っ先に二人を誘おうとした。しかし、二人はそれぞれ一人きりで過ごしており、それを邪魔するのは野暮だろうという気遣いによつて俺は大人しく彼女たちを見守っていた。

ところが、ところがだ。

現れたあの馬野郎(おそらく形無のことです)は彼女たちの思いなど無視してズカズカと踏み込んでいきやがった!! 嫌がっている千冬を無理やり砂場に連れていき、遊びたくないのにも関わらず他の子供たちと城を作らせた。

束だつて一人がよかつたのに、強引に会話しようとしてパソコンを

奪い取ってやがった。

許せん。許せんぞ!!

俺の嫁候補たちに手を出しやがって。いずれ痛い目に合わせてやる。



「ん!」

何やら得体の知れない悪寒が全身を駆け巡った。なんだ、誰かからの殺意を感じるんだが。

幼稚園から帰宅した俺は現在、更識家の中で一番広い広間に集まっていた。ちなみに親父に母さん、祖父に祖母、更識の部下総勢五十名が一同に介している。

こんな更識家が勢揃いして一体何をしているのかというと。

「では多数決を取る!!」

一際大きな声で親父が何やら半紙程度の紙を両手に持って叫ぶ。

『海為(うみなし)』と『雪洞(ぼんぼり)』と『姫無(ひめなし)』、どれがいい!!」

生まれてくるのが娘、俺から言えば妹であるということが検査で分かったため、どんな名前にするのかを話し合っていたのである。

それだけのためにこんな大袈裟にやるのかと思うかもしれないが、母から聞いたところによると今回はこれでも規模も名前の案も少ないらしい。

俺のときは名前の案は二百を超え、最終的にも十九の候補が残っていたというのだから驚きだ。なかには『玉無(たまなし)』なんて案まであったらしい。

いやそれ男の俺につけたらダメだろう。

途中で眠くなった俺は母とともに退席したが、白熱する名前会議は、結局朝まで続いたらしい。

## #5 お揃いの小物はその時点でフラグ

前回のあらすじ

原作キャラたちと絡んだら、得体の知れない悪寒が走りました。

一ヶ月後。

え？ 飛んだろって？

そこはあれだ。気にしたら負けってやつだ。

あの日以降、幼稚園では何かとあの原作キャラ二人と過ごすようになった。

俺が驚いたのは、原作では小学校から仲良くなる筈の千冬と束が僅か一週間で打ち解け、既に親友というレベルにまで親しくなっていたことだ。彼女たちに俺を足した三人は所謂『いつメン』というものになったらしく、つい先日その証として三人でお揃いのミサンガを付けることになった。

あ、そのミサンガは俺の母さんの手作りだ。最初は千冬が作ると豪語していたんだが、僅か一日で挫折したため母さんにその役を頼んだというわけだ。

天然というただ一点を除けば容姿、性格、技術もろもろパーフェクトな母さんは、たった数十分で三つのミサンガを作り上げてしまった。

それを知った千冬が項垂れていたがそこは置いておいて、三人お揃いの赤いミサンガを俺は右手に、千冬と束は左手に付けてそれから毎日幼稚園に通っている。

さて。

今日は日曜日。

つまり幼稚園は休みなわけだ。時刻はまだ早朝だが、この時間帯になれば更識家ではそれぞれの一日が始まる。親父を始めとする男衆

は朝の鍛錬を始め、母さんたち女衆は全員分の朝食を準備するために大忙しだ。

じゃあ、俺は？

俺はまだ幼稚園児だ。朝食の手伝いくらい出来るのかもしれないが母さんたちのあの手際のよさを見ていると邪魔にしかならないんじゃないかと思う。

父さんたちの鍛錬に参加しようとした時もあったが、メニューの最初にあった町内一周ランニングを見た瞬間に心が折れた。前世で別段体力に自信があったわけでもない俺にとってあのメニューに付いていくのは不可能だ。

だって親父の部下たちメニュー終えたら所構わず大の字で寝てるんだぞ？

朝食食べる元気すら失ってんだぞ？

ということでもやるのが全くと言っていいほどない日曜日の朝。俺が一体何をしているのかというと。

「うくん、どうやって能力使うんだ？」

あの理不尽な神様から貰った一方通行の能力、『ベクトル操作』をマスターすべく頭を悩ませていた。

いや能力を使うのに演算ってのが必要なことは理解できるんだよ。でもさ、まず演算で何するんだ。

この能力を貰った時点で（おそらく）一方通行のこの能力が使える演算処理能力は俺の脳にある筈なんだが、如何せん発動させるまでが解らない。

「何を考えればいいんだ……」

頭を使うイメージで真似てみても、一向に使える気配はない。

結局、この朝は能力を使用することは出来ず、まずは理論立てをしつかりしないといけないことを学んだ。

何だよテンプレ的に能力貰ったんだから簡単に能力使えると思ったら違うのかよ!!

最近、わたしは幼稚園に行くのがとても楽しい。入園したばかりのころはみんなと一緒に遊べないことが悲しかったけれど、そんな私を助けるみたいに一人の男の子が話しかけてきてくれた。

男の子の名前は更識形無。

その日からよく形無と同じくして仲良くなった束の三人で遊ぶようになった。最初は束は嫌がっていたような素振りも見せていたけど、今じゃ三人でお揃いのミサンガを付けるくらいに仲良しだ。

私、織斑千冬は形無たちと友達になれて本当によかった。

だからこそ、今日が日曜日であることが嫌だ。普通の子なら休みだとはしゃぐんだろうけど、私にとって日曜日は幼稚園に行けない退屈な日なんだ。

自分の腕に付けられた赤いミサンガを見ながら、私は思う。

「はやく明日にならないかなあ……」

などと思っていると。

「ちーちゃーん!!」

家の外から私を呼ぶなんとも聞き覚えのある声が聞こえてきた。誰だと思ってもない、最近仲良くなった、あの女の子だ。

私は二階の部屋の窓をガラツと開いて。

「なんだ束ー!!」

「遊ぼうよ!!」

「おまつ、まだ朝の七時だぞ!!」

「束さんに時間という概念は通用しないんだよっ!!」

「わたしをお前と一緒にするなっ!!」

全く、朝の七時から遊ぶなんてどれだけ元気なんだ。などと思いつつもわたしの身体は部屋を出て階段を降り、しっかり外へと向かっている。

そして伸ばした手は家の扉を開き。

「まあとりあえず、入って」

我が友達を家へと招き入れた。

わたしにとつて退屈でしかなかった日曜日が、一瞬で騒がしくも楽しいものへと変わった。

「あ、そうだ」

玄関に上がった束が思いついたように声を上げる。

「どうした?」

「えへへー、あのね」

その内容を聞いたわたしは、すぐに靴を履いて外に出た。



「……で?」

俺は今驚きを通り越して半ば呆れていた。時刻はまだ七時半。日曜日の七時半といえば、俺みたいな特殊な幼稚園児でなければ間違いない。なくまだ夢の中の時間帯だ。

しかし。

「おはよう形無」

「おはようかーくんっ!!」

……何故、この二人の幼稚園児は俺の家の門の前に立ってるんだ?

そもそも俺はこの二人に実家の場所を教えた記憶などない。何れは教えるつもりだったけど、一ヶ月やそこらで実家まで行くことなどなかったからだ。

「何しに来たんだお前ら」

「遊ぼうよかーくん!!」

「今日は日曜日だぞ?それにまだこんな時間だし」

「束さん的にはかーくん家を探検したいな!!」



「うんまず人の話を聞こうか」

最初の頃の『私に近寄るなオーラ』は俺に対しては全くと言っていいほど無くなったけれど、そうしたら次はこんな風に向こうから絡んでくるようになった。

いや自分が招いた結果なのは分かっているよ？ 分かっているけどこ  
うも対応が違おうとビックリするでしょうが。

「ごめん。迷惑だったか……？」

「……いや、そういうわけじゃないけど」

頼むからそんな潤んだ瞳でこつちを見ないで。

罪悪感に磨り潰されそうになるから。

俺は幼稚園児らしからぬ溜め息をついて、

「ちよつと待つてて。母さんに聞いてみる」

そう言つて座敷のほうへと走つていく。

いや、あの天然母のことだダメと言うわけけないのは判りきつていた  
が、形式上勝手にというのもマズイだろう。

俺は朝食の準備を終えた母さんのところに言つて友達が二人来た  
という旨を伝えた。

俺は『いいわよ遊んでらっしゃい』か『どんな子たちなの？』みた  
いな反応を予想していたんだが、流石は天然というか、我が母はそれ  
を上回る発言をしやがった。

「あら、なら一緒に朝食にしましょうか」

「……え？」

「形無朝食までしよう？」

「いやそうだけど……」

「大勢で食べたほうが楽しいじゃない」

「まあ……」

「呼んできなさい」

との事で二人を招き入れ、更識家の食卓につくことに。

千冬は見た目ヤクザみたいな更識家の男衆にビクビクしていたが、  
東は俺の隣でニコニコとかまぼこを頬張っていた。

朝食後は東がどうしてもというので俺の部屋に案内し、仕掛けよう

としていた小型カメラを見つけ出して壊し束を一喝。

どうやらこの家に辿り着いたのも束が俺に仕掛けたGPSのおかげだったらしい。

幼稚園児がオリジナルでそんなもん作んなよ。

その後も似たような流れを繰り返し、結果として幼稚園児は日曜日も遊びたい盛りということを感じする一日となった。

あと束の作る機器は危険。ほんとプライバシーとか丸裸にされるから。

## #6 神様の能力で悩むのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

もう二度と束を俺の部屋にあげないと誓った。

突然ですが、小学生になりました。何故こんなにも時間をすっ飛ばしたのか、理由を言えば、特にこれといったこともなかったからだ。あれから千冬や束とは完全に親友のような関係になり、今も手に付けている赤いミサंगाが何よりの証だ。

このミサंगाでの出来事と言えば、千冬のミサंगाが切れた時のことを思い出す。ミサंगाとは本来願い事をし、それが切れると願いが叶うという一種のおまじないみたいなものだ。だからミサंगाが切れたなら願いが叶うと喜ぶ場面なんだが。

千冬の場合、何故かこれまでにないくらい大泣きしてしまった。理由を聞けば、自分のミサंगाだけ切れて友達ではなくなってしまうと勘違いしていたらしい。確かに普通なら不吉だとか思うかもしれないが、これミサंगाだぞ？

未来の『ブリュンヒルデ』もやはり今は幼稚園児だったことか。ちなみにミサंगाはすぐに母さんが新しいのを用意してくれたので千冬の泣き顔はすぐに晴れやかなものに変わった。

あ、これといった出来事あった。

「あーう」

母さんの腕に抱かれてこちらにジッと視線を向けてくる赤ん坊。

我が妹、更識姫無。

ヤクザみたいな更識家の部下も黙る一歳児である。

最近言葉のようなものが聞こえ始めた。

彼女の名前は親父の部下による多数決の結果、『姫無(ひめなし)』に決定した。親バカであるあの親父はどうしても女の子っぽい姫という字を入れたかったみたいだ。

それに対してまたバカな部下が今度は『棟無(むねなし)』なんて名前を候補に上げたもんだからその時の親父のキレツぷりはそれはもう凄かったらしい。

……俺のとき『玉無』とかふぎけた名前出した奴の仲間だろそいつ。

「まーう」

いつの間にか母さんの腕から脱出を果たした姫無がハイハイで俺の目の前までやってきていた。流石にまだ立って歩くことはできないが、ハイハイが出来るようになってからは姫無の行動範囲が一気に広がり、忽然と姿を消すこともしばしば。

そんな時役に立つのが。

……本当に忌々しいことに役に立つのがあの束が制作したGPSだ。

これを姫無の服につけておくことでどこにいても常に把握することができる。

流石にこんなものを使うのはこの時期だけだが、やはりあまり気は進まない。

うん、やっぱプライバシーって大事だよ。

歩けるようになったらGPS付けるのは止めてあげよう。……あれ。そしたら居なくなったら見つけようがないな。その時はその時だな。

「よつと」

俺は近付いてきた姫無の身体を抱き抱えてやる。小学生の身体で赤ん坊を抱っこするのは楽じゃないが。

「きゃはははっ」

こんな満面の笑みを向けられたらそんな小さなことはどうでもよくなってくる。

うん、妹万歳。

こんな可愛い妹は存在しているだけで正義に違いない。そうなのだ、異論を唱える奴には『玉無』の案を出した部下と同じ運命を辿ってもらう。

ああ可愛いなあ。

こんな可愛い子が成長して『人たらし』になるなんて全く想像がこない。いや、想像したくないがどんな妹であれ俺は妹を（家族として）愛します。

姫無に近づく奴がもしも現れたら更識の全勢力を持って排除するつもりだ。

……いやまず親父が黙ってないだろうな。あの親バカの代名詞のような人間だ。下手したら街が消し飛ぶかもしれん。いや冗談抜きで。



「……………」

姫無を再び母さんに預けた俺は自室に戻り座禅のようなスタイルで目を閉じている。

何をしているのか。

超能力者を使うための特訓に決まってるじゃないか。

幼稚園時代に初めて演算をしようと思っても全く出来なかったのはまだ記憶に新しい。あれから一年以上経ったのだから、多少なりとも進歩があつていいはず。

……なんだが。

「……何か起きる気配はなし、か……」

あれから一ミリも前進していなかったりする。いや、頑張っではいるんだよ。小学校に上がってからは殆ど毎日こうして集中して取り組んでいる。

だがまるで俺のやる気と反比例しているかのように一向に兆しは見えてこない。

……俺、才能無いんじゃないかな……。

なんてことまで最近思うようになってきてしまっていたんだが、ここで俺はふと気付いた。

——俺がまだちっちゃいからダメなんじゃない？

よくよく考えてみれば、俺はまだ学園都市第一位の超能力を使うための演算を行う脳の大きさに至っていないから能力が使えないんじゃないだろうか。

一方通行ってどう考えても小学生じゃないし。もしこれが正しいとしたら俺は中学生、最悪高校生くらいになれば神から貰ったこの能力を使えるようになるかもしれない。

……でもこれが正しいなら俺はそれまで超能力が使えないんだよなあ。

『ベクトル操作』はあの時咄嗟に出たものだったが、いざとなつて考えてみるとこれなんてチート状態だと気付いた。やがて束が開発するだろう『IS』。女性しか動かせないと言うのだから俺にそんなものを動かせる才能はないだろう。動かせるのは主人公である一夏くらいだ。

だとするなら、もしも。極力避けたいが万が一ISと戦わなくてはいけないような場面になった時、この能力が使えなければバッドエンドまっしぐらだ。

つまり今現在俺には死亡フラグが立っていることになる。まるで

どっかの未来のことが分かる日記にバッドエンド表示が出た時みたいな。神様がくれたんだから使えない、なんてことはない（と信じた）だろうが、使えなかつたら……よそう、なんかほんとに現実になりそうで想像したくもない。

「はあ……」

まあでも、と俺は思考を切り替える。

「そこまで焦る必要もないのか……？ 束がISを開発するのつてもっと先の話だし」

それにこちらにばかり気を取られるわけにもいかないのだ。

何故なら。

「形無。いるか？」

「いるよ」

「直に時間だ。準備しておけよ」

「はい」

襖の向こうから親父の声が聞こえてきたが、気を取られるわけにはいかないといった理由がこれだ。

小学校に上がった年から、更識家としての対暗部用の教育が始められたのだ。

対暗部というくらいなのだから、俺はてつきり情報戦みたいなのを勝手に想像してたんだが、実際はそんな生易しいもんじゃなかった。

先ずは体力があつてこそ、ということでしたら体力づくり。小学校低学年の子供がいきなりフルマラソンは無理だよ親父……。

それが終わってからは更識家が発祥だという柔術、『更識流』の特訓だ。

柔術とは日本古来の徒手、あるいは短い武器による攻防の技法を中心とした武術だが、『更識流』はどちらかと言えばその中でも合気道に近い。相手を殺傷せずに捕らえたり、身を守つたりすることを第一とする柔術に加え、関節技や投げを取り入れているのだ。

その理由としては女でも体得するためには相手の力を利用することが必須、という考えと対暗部ということもあり如何に迅速に任務を遂行するかを突き詰めた結果、相手に情報を吐かせることが最速かつ

的確という結論にたどり着いたかららしい。

まあ、そんな風に相手の戦意を喪失させて口を割らせるには高レベルの話術が必要になるんだけどな。

あ、やべ。時間過ぎた。

俺は急いで部屋を出て屋敷の隣に用意されている道場に向かった。

「遅いぞ形無。二分三八秒の遅刻だ」

「いや父さん時計もってないじゃん」

道場内にも時計はない。

「腹時計だ」

「なんてアナログな」

「いいから。ほら昨日の続きからやるぞ」

「二の型からだっけ？」

「復習のために一の型からだ」

言われて俺は軽く呼吸を整えて、ゆっくりと瞼を下ろす。

小学生の俺にはまだまだ腕力なんてついちやいないが、この一の型は相手の力を利用するものだ。多分瞼を開いたら親父の右ストレートが飛んできてるんだろうなあ……。

覚悟を決めて、俺は目を見開いた。

「更識流一の型——!!」



ふんふんふん。

私は上機嫌でノートパソコンのキーを叩いていた。

何故私、篠ノ之東がここまで上機嫌なのか。それは今年、かーくんと同じクラスになれたからだ。去年のクラス発表で私だけが違うクラスになったときは本気で学校中の精密機器に凶悪なウイルスをぶち込んでやろうと考えたが（それは形無によって阻止されました）、今



年は一緒のクラスになれたんだから過去のこととはまあ水に流してやるのではないか。

へっへー。今度はちーちゃんがひとりぼっちだあ。

あ、でもちーちゃん寂しがつてないかなあ。来年は三人一緒になれるようにしておこつと。

「さてと」

私はいつの間にか止まっていた自分の指を再び動かし、ウィンドウに表示された設計図に目を向ける。

「ふむふむ。これじゃまだ完成には程遠いなあ」

かーくんにも意見もらわなくちゃ。そう思うと自然と口元が緩む。かーくんは他の人間と違って頭が良い。それは私に付いてこられる時点で明らかだ。同じレベルで話ができるのがこんなに楽しいなんて、私は知らなかった。

できることなら、二人でこれを完成させてちーちゃんに使ってもらいたいなあ。

「よーし、東さん頑張っちゃうぞー!!」

## #7 原作と違うのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

妹は正義!!

異論は認めない。

さて。俺こと更識形無は小学校二年生に進級した。これは前回も話したんだが、去年は俺と千冬が同じクラスで東が大暴走し、(本気で)学校が使い物にならなくなるところだった。

なんだパソコンのデータを完膚なきまでに破壊し尽くすウイルスつて。しかも無差別。

そんなもんを何処にでもあるような小学校でばら蒔かれてはリアル警察沙汰だ。

……いや、東のことだから足がつかないように何重にも細工してるんだろうな。

取り敢えずそんなことになってはマズイので東の頭にチョップをかまし、そのウイルスを破壊させて一先ずは解決となった。

いや本気であればダメだろ。ウイルスに侵されたパソコンは完全に東の支配下に置かれ暴走し、二度と使い物にならないどころか破壊される前にそのデータは例外なく流出するらしい。

よかったそんなことにならなくて。

今年は東と同じクラスになったことで、あんなことは起こらないかと安心していった。

……安心、していたんだ。

しかし俺の安堵はクラス分けの張り紙を見た千冬の反応を見た瞬間に消し飛ぶこととなった。

『…………だ』

『へっ?』

『形無と違うクラスなんて、いやだ!!』

とんでもない駄々をこね始めた。

『いや千冬。小学校なんだからこういうのは当たり前……』

『いやなんだ!!』

うん、人の話を聞かないパターンのやつですねわかります。

がつくりと項垂れている千冬の隣では、同じクラスになった東がピョンピョン跳び跳ねていたが即座に千冬に蹴り飛ばされた。

ううむ。まさか千冬まで東みたいな駄々をこねるとは思っていなかった。

いや東の無差別テロみたいなのと比べれば全く持って可愛いレベルなんだが。

だけどころなると中々千冬は頑固なんだよなあ……。ミサンガが千切れたときに東が付いていたミサンガを寄越せと言い出したときのことを思い出すよ。

東からしたら『何その理不尽』てきな感じだったんだろうが千冬は必死だったからなあ。結局大泣きしてしまっただが。

あの時は母さんが直ぐ様新しいミサンガを作ってくれたおかげで事なきを得たが、今回ばかりはどうしようもない。

『うう……』  
ガツクリと膝を折って踞る千冬。やばい、泣き出しそうな気がする。

『……はあ』

俺は小さく溜め息をついて。

『千冬』

『形無い……』

あ、目尻に涙が溜まってる。

『別に授業を別々に受けるだけだろ。登下校だって一緒に出来るし、授業が終われば一緒に遊べる』

『そうだよちーちゃん。私たち三人は『いつメン』なんだからっ』

『っ、東にもこの気持ちわかるだろう!?!』

『ふっふー。東さんはあの地獄のような一年をこれで乗りきったんだ

よ』

これ？ 一体何のことだと思っていると、東はポケットから一枚の紙切れを取り出した。あれは、写真？

『東さん秘蔵のかーくん湯上がりブロマ……』

『なにしてんだお前』

即座に没収。

おかしいな更識家に仕掛けられてた小型カメラや盗聴器は俺が全部処分した筈なんだが。

『つたく……、あれ？』

気付けば没収した筈の俺の写真が手から無くなっていた。

あ、犯人はアイツか。

『千冬……』

『こ、これがあれば一年耐えられる!!』

『んなもん無くても大丈夫だろうが』

『いや、絶対必要だ!!』

『返せ』

そして直ぐに焼却処分だ。ついでにもう一度屋敷内のカメラ類を洗いざらい探し出して壊しとかないとな。

『頼むー!』

『……………』

そんな泣きそうな顔をしないでくれ。

俺が知ってる千冬はこんなすぐ泣くような女じゃなかった筈なんだが、これから変わっていくんだろうか。

『はあ。分かったよ……』

これで千冬がいいと言うんだから、ここは俺が退かないといけないみたいだ。

でもいつかあの写真は回収するけどな。



ということがあった四月当初から早二ヶ月。この頃になるとクラス内に友達もできるようになり、休み時間にもなるとドッジボールやサッカーをしにグラウンドへと駆け出していく。

元気だなあ、なんて思う俺はもう思考がおじいちゃん化してしまっているのかもしれないが、実際否定できない俺がいる。

今は給食が終わったあとの昼休み。元気なクラスのみんなは挙ってグラウンドへと駆け出し、それ以外の生徒は図書室へ行ったり教室で一息ついたりと思いつきの時間を過ごしている。

そんな中、俺はと言うと。

「ねえねえかーくん。ここんとこのパーツって変えた方がいいかな？」

「そんなこと俺に聞かれたも解んねえって」

「嘘ばかり。ねえどう思う？」

「……変えると他のパーツと喧嘩して駆動率が下がるからオススメはしない」

「やっぱりねー。東さんもおんなじこと考えてたよ」

……なら俺に聞かなくてもよかったんじゃない？ という疑問は抱いても口には出さない。こんな風なやり取りは一度や二度ではないから、いい加減慣れてきてしまっている。

東は俺の意見を聞いて満足そうに頷いた後、再びパソコンの画面に視線を戻す。

最早言うまでもないかもしれないが、現在進行形で東が完成させようとしているのは『IS』だ。しかも既に基盤は半分ほどが完成し、理論な構造も纏まり始めている。

俺の知識の中では確か完成はもつと後のはずだったんだが、このスピードのまま順調に製作が進行すれば中学生あたりで完成してしまいうそだ。

これは俺にとってはとてつもなく都合が悪い。

なにせ俺が神様からもらった一方通行（アクセラレータ）のベクトル操作はおそらくだが脳が成長しないと使えない。最低でも中学生

くらいにまでは成長しなくては。こんな状態で束がISを完成させ、巻き込まれるようなことになったら間違いない俺は死ぬ。

いやまじで。

そんな死亡フラグは御免な俺だから、一応毎日能力を発動させようと意識を集中させてはいるものの、やはり一向に成果は見られない。もうなんかバッドエンドしか見えてこない。いつそ未来のことが分かる日記とかあればそれも回避できるのになあ。

と、そんなバッドな俺に、この後更にバッドなことが発生してしまう。

昼休みも終わったため次の授業の準備をしているときのことだ。

教室に入ってきた担任の先生、駒田（こまだ）真子（まこ）が何やら大量の書類を教卓の上に置いて一言。

「えー、来週の授業参観についてですが……」

……あつ？

## #8 親バカな父はその時点でフラグ

前回のあらすじ

最悪の行事、襲来。

担任の駒田真子、通称こまこの言った言葉が一瞬理解出来なかった俺は、もう一度よく脳内で彼女が言った言葉を反芻する。

『来週の授業参観についてですが……』

授業参観。

ジユギヨウサンカン。

それはつまりアレか。

我が子が一体どんな授業をどんな風にどんな子たちと受けているのかという学校生活の実態を知るために設けられた特別授業。

——教室の後ろに親が並んで授業を観覧する、あれ。

ということとは当然ながら、二人ともとは限らないが親が来るということになるわけだ。

……呼びたくねえええええええツ!!

断言してもいいが、もしも俺の両親が来た場合、絶対に碌なことにならない。

親父が来たらあのウザイ程の親バカっぷりを所構わず遺憾無く発揮するだろうし、母さんはあの天然っぷりで教室を（別の意味で）支配下に置くだろう。二人揃ったの襲来なんて論外だ。

これはマズイ。

というかこの事を親父たちは知っているんだろうか。知らなかったのなら九死に一生を得た思いだが、既に知っていたなら俺はもう授業参観当日休む。

頼むから授業参観があることを知らないでいてくれ。

そんなことを切実に思いながら、下校を終えて更識家の門をくぐる。

「おう形無！ 来週授業参観があるんだろうっ!? 父さん仕事なんかすっぽかして行くからな!!」

……知っていやがった。

親父よ、仕事はすっぽかしちやいかなだろう。せめて片付けてとか言えよ。

残念なことに、本当に残念なことに既に授業参観があるということを知っていたので俺はもう諦めるしかない。

……なんて言うと思ったか!!

俺は諦めない。平凡な小学校生活を維持するためにも、ここで母さんや、まして親父を学校に来させるわけにはいかない。

どうにかして親父に用事を作らせないと……。

あ。

「父さん」

「ん? どうした形無」

庭で何やら筋トレに励む親父に向けて、俺は口を開く。

「姫無がその日、遊園地かどこかに行きたいって言ってたけど」

一歳児がこんなこと言う訳もないし普通の人間なら信じる訳もないんだが、俺の親父は折り紙つきの親ばかだ。

それはつまりどういうことかというのと。

「んなにいつ!」

こういうことだ。

ほんと、親父が馬鹿でよかった。

俺はとりあえず親父が学校に来ることはなくなったと思えば安堵している。



「こうしちゃおれんツ!! 今からすぐに遊園地に行こうツ!!」  
「……へ?」

今なんておっしやいましたかこのバカは。

「何してる形無。すぐ姫無を呼んでこい!!」

「いやいやちよつと待って。そんないきなり……」

「母さんは無理だろう。お腹の子のこともあるし」

いやそういうことじゃねえよ。

……ていうか、え?

「お腹……?」

「ん? なんだ気づいてなかったのか、母さん妊娠してるんだぞ?」

「そういうことは早く言えよクソ親父ツ!!」

いやマジで知らなかったよ。时期的にはそろそろかなあとは思ってたけどまさかこんな形で知らされるとは夢にも思わなかった。

となるとまたあの更識家勢ぞろいでの名前会議が開かれるのか。今回は変な案出ないといいけど、出るんだろうなあ……。

「早くしろ形無。日が暮れてしまう」

「本気で今から遊園地行く気なのかよ……」

「姫無が行きたいと言ってるんだろう? なら行くしかないじゃないか!!」

(もうダメだこの親ばかは……)

結局、午後三時から俺と親父、姫無は近くにあるテーマパークへと向かうことに。

こんなことになるならあんな事言わなきゃよかった。



ああ、神よ。何故俺はこんなにも慈悲深いのだろう。

本来なら八つ裂きにされるべきあの馬野郎(形無のことです)と同じクラスになったこともそうだが、束に執拗に付き纏う馬野郎をまだ

一度もタコ殴りにしていないのだから。

俺も我慢の限界なんだが、必死に我慢している束を見てみると彼女の意志を尊重しなければ、と思うのだ。

だがもしもこの俺、幼稚園来からの幼馴染であるこの織村一華に彼女が助けを求めてくるのなら、俺は迷わずその手を取ってアイツをボコボコにするつもりだ。

俺が負けることは有り得ない。

何故なら俺は神に選ばれた存在。神が見方についているんだ。負ける道理が見つからないだろう。

それに神より賜った能力だってある。これを使えばただの一般人である凡人なんて俺の敵じゃねえ。

そう、この俺の超能力、『未元物質（ダークマター）』は最強だ!!  
俺はこのチカラで、この世界の頂点に立つ!!



そして、ついに来る授業参観当日。

俺にとってはまさに地獄と言えるこの日は、俺の心とは正反対に快晴だ。

結局両親二人とも授業参観を知っており、そのためにわざわざ仕事を前倒しにしていたり楽しみにしていた両親に来るなど言える筈もなく、何も言えないままこの日が来てしまった。

「なあなあ瑞穂。やっぱり男らしい感じのスーツのほうがいいかなあ!?!」

「あらあら楯無さん。それはスーツじゃなくてツナギですよ」

「あ、いっけね（テヘツ）」

こんな光景を目の前で繰り広げられて拳を握り締めてしまう俺は

間違っていないはずだ。

いやまじでもうアラサーのオッサンがテヘペロしても殺意しか湧いてこないからな。可愛きなんてマイナス値もいいところだ。姫無の満面の笑みでようやく相殺できるようなとんでもないものだから。

「いやあ瑞穂似合ってるよ」

「ありがとうございます」

いやいや母さん。確かに似合ってるけどもそんな真っ赤なドレス着て舞踏会にでも行く気ですかあなた。そんな恰好で行ったら間違いないく他の親父たちを落として帰ってくるよ。頼むからもうちよつと常識つてものを弁えてください。だいたい妊婦なんだろうが。大人し目の服選んでお願い。

「ん？ どうした形無そんな浮かない顔して。あ、もしかして緊張してるのかあ？」

何を勘違いしたのかイイ笑顔で俺を見る親父。俺がこんな顔してる原因はあんたらが原因なんだぞ……。

「はあ……、もおう学校行ってくる」

「おう。千冬ちゃんと束ちゃんたちと仲良くな」

本気で学校行きたくない。

授業参観の時間だけ保健室行こうかな。まあ、そんなことする度胸は俺にはないんだけどな。

こうなればもう腹を括るしかない。

「よし……、」

更識家の門を出て学校への道を歩きだした俺は決心した。

「絶っ対、授業参観中に後ろは振り向かない……!!」

こうして授業参観という名の生き地獄が待つ一日が幕を開けた。

## #9 平穩という言葉を使うのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

親バカが授業参観に来ることは子供にとって脅威以外の何物でもない。

——ついにこの日、この時間がやって来てしまった。

いやまじで来てほしくないんだけど残念ながらあの両親は間違ったスタイル(※前話参照)で来る気満々だったし。はあ……、憂鬱だ。「どうしたんだ形無。そんな腑抜けた溜め息をはいて」

「千冬か……」

教室に入って自分の机に突っ伏していたら既に登校していた千冬がこちらにやってきてそう言った。

「つかお前クラス違うのに毎朝うちのクラス来るよな。だったらあの写真いらないだろ。」

「いや、今日授業参観あるだろ……」

「なんだそんなことか。形無の両親はもちろん来るんだろう？」

「……ああ」

「いいじゃないか。うちは仕事の都合で二人とも来れないんだ、羨ましいぞ」

「……出来ることなら代わってほしいよ」

「……？」

千冬は俺の両親のことは知っているが親父をなんかすごい鍛えてる人、母さんを何でも出来る完璧超人という認識でしかない。つまり知らないんだ。あの二人の本性と言うべきものを。

一体どうして親がこんなにも授業参観にこだわるのが俺には理解できない。だって小学校の授業だぞ？ そんなの後ろで、しかも

立って聞いて一体何が面白いつてんだ。子供が学校でどんな風に過ごしてるかなんて家庭で子供から聞いておけばいいじゃないか。

「おはようかーくんちーちゃん!!」

俺が再度『はあ、』と溜め息をついたのとほぼ同時に束が教室に入ってきた。

「ああ!! かーくん束さんが教室に入ってきた途端に溜め息ついたつ!!」

……もう束の性格がめんどくさく感じてきている俺は悪くない筈だ。朝からこんなワーワー誤解して言われたら本当にいつか束見て溜め息つく日が来るかもしれない。

「束、もうちよつとテンション下げてください……」

「溜め息つかれた上にジト目であからさまにイヤな顔されたつ!!」

がーん!! なんて擬音がまさにピッタリな表情で衝撃を受けて崩れ落ちる束はまあこのままにしておいて、俺は本題である授業参観の対策を立てることに。

先ず、授業参観は給食、昼休みを終えた後の五時間目。科目は算数だ。別に授業自体に問題はない。前世で工学を専攻していたくらいだから数学は得意だし、それ以前に今やってるのは掛け算だ。常識として出来なければ人間失格と言われても反論できない。

……問題は俺の席の位置だ。まだ席替えしていないため、あいうえお順で座っているわけだが俺は『き』、位置は窓側から三番目の一番前だ。つまり、教卓のど真ん前。

いや普通なら嫌がる所なんだろうけど位置的には後ろに並ぶ親たちから最も離れているので俺にとっては好都合だ。

じゃあ一体何が問題なんだと言いたくなるだろうが、まあ最後まで言わせてくれ。

それは。

「かーくんかーくん!! 授業参観だつてさー!!」

……俺の右隣の席が、束だということだ。

どういうわけか『さらしき』と『しののの』の間には皿田やら篠田などの苗字が勢ぞろいしておりこういう構図になったわけだが、ぶつ

ちやけ束の隣は苦勞が絶えない。こんなにも気さくに話しかけてくる彼女だが、やはり他人には興味などないらしく会話をしようとしてもしないのだ。しかも頭脳は既にそこらにいる教師など置き去りにしてしまうほどのもので、教師陣も束に強く言えない状態なのだ。

そんな他人に全くの無関心である束が唯一、会話をしているのが俺。

あとは言わなくても解るだろう。俺は教師と束とのパイプ役にされているのだ。

たかだか小学二年生の少女に頭が上がりないというのもおかしい話だが、実際にそうなのだから仕方ない。

そんなわけで俺はよく先生たちに束への伝言などを預かったり、伝えてと言われたりするんだよ。

たとえそれが授業中であつても。

これが俺が問題だという点だ。

俺の席はさつきも言ったが一番前。しかも教卓に最も近い席だ。当然、先生との距離も最も近くなるわけで。そうすると授業の内容を理解できているかどうかを束に聞くように俺に言ってくるわけで。

そうなると俺は束は余裕で理解していると分かっている形式上聞いておかないといけないんだ。

するとどうだ。教室の一番前で先生と生徒が授業中であるにも関わらず話し合っている構図が出来上がってしまう。

うん。間違いなく目立つ。

親さんたちの好奇の目に晒されることになる。

そんな目立つのは避けたい俺は、どうにかして授業参観に欠席できないものかと考えたりもしたんだが。

「はい皆さん席についてくださいーはい」

無情にも時は流れ五時間目の授業、算数の開始を告げるこまこの声

が教室内に響いた。

朝の宣言通り、俺は後ろを振り向いていない。もし親父たちが居ても、もし目線が合いでもしたらあの馬鹿は親バカっぷりを発動させるに決まっている。

ざわざわと教室内が落ち着きがないことから相応の数の両親が来ているんだろうなということとは予想できる。

始まってしまった以上はもう受け入れて早くこの授業が終わるのを祈るばかりだ。

頼むから、なにも起こらずに終わってくれ……!!

しかし。やはり俺はそんなフラグをいつの間にか建ててしまっていたんだろうか。

授業開始早々、よく聞きなれた、だが今は最も聴きたくない声が教室内に轟いた。

「ここが形無がいる教室かあ、小学校なんて何年ぶりだろうなあ!!」  
……………。

「あらあら楯無さん。あまり大きな声を出すと授業の邪魔になってしまいますよ」

……………。

「おっと。すまんすまん」

俺はこんな声知らないシラナイ。

え？ 誰の声？

心無しか後ろで小さななどよめきが起こった気がする。

大体、予想はつくけど。

だが振り向かないぞ。この時間を無事に終えるためには、あの親バカとは関わっちゃだめなんだ!!

「お、形無!! 来たぞー!!」

無視。

「形無、こっちだこっち」

聞こえない聞こえない。そしてあの言葉に返答、またはツツコミは厳禁だ。

「形……誰だお前」

「誰に話しかけてたんだてめえッ!!」

そいつ俺とは似ても似つかねえポツチャリ君じゃねえか。そんなのと俺を間違えるとか眼球腐ってんじゃねえのか。取り替えてやろうか？

「あ、そつちにいたのか形無」

「どう間違えれば俺とそいつが同一人物に見えるんだよっ!!」

「いやー、今日慌ててたからコンタクト付けるの忘れてきちやっとなあ」

「帰れ!!」

俺の無事に授業参観を過ごすという目標は、ものの五分で親父にぶっ壊された。しかも思いつきり振り向いちやったし。他の親さんからの視線がハンパないんだけどこれ。

……見ちやっただからもう開き直るけどさ、親父たち絶対その格好は間違ってる。

ツナギがダメなら普通はスーツとか来てくるだろ。なんで親父は袴穿いてんだよ。どこの武士だあんた。

母さんも母さんで、ドレスは止めてって言ったけどなんで真っ赤な着物着て来てんだ。

二人そろつたら完全にそつち系の人じゃん。俺もそうだと思われちやうじゃん!!

しかもやっぱ母さん他の父親の視線釘付けにしてるし。

「……はあ」

俺は親父にツツコンだのを思い出し、自己嫌悪に陥りながら授業を受けることに。

案の定俺は注目を浴びちまったし、親父も親父で目立ってるし、母さんも視線を集めまくっている。ほんとに授業どころじゃないんだよ……。

だから呼びたくなかったんだよ、こうなることが分かってたから。平穩って、なんですか。

俺には一生、縁のないものなんですか。

「じゃあこの問題わかる人〜」



「二はい」

「形無、手を上げるんだ!! 答えは64だぞ!!」

「違うよ56だよ」

掛け算間違えるってどんだけだよ親父。

「更識さん授業中はお静かに……」

「あ、すいません」

もうほんと勘弁してくれ。

これ以上親父に授業を引っ掻き回されるのは御免だ。

そんな堂々と間違いを述べた親父を見てクラスの生徒や親御さんたちはクスクス笑ってるが、親父の隣の人物だけは全く笑っていなかった。

「タ テ ナ シ サン? 授業中は静かにと、言ったでしょう……?」

和やかだった教室の空気が、一瞬にして絶対零度に。

親父がカタカタ震えているのはこの寒さのせいなのかそれとも……。

「ちよつと、出ましようか」

「みみみ瑞穂?! なんでそんな怖い顔して……」

「楯無さんのせいですよ……?」

どうやら母さんの逆鱗に触れてしまったらしい親父は、襟首を掴まれ引きずられるようにしてズルズルと教室の外に連れて行かれた。

ピシャンツ、と閉まった教室のドアの先は、怖くて誰も覗けなかった。

「……もうほんと、勘弁してくれ……」

結局この後何事もなかったかのように授業参観は終了したが、俺の両親はクラス内で一躍有名人となってしまう。そしてそれは俺も例外ではなく、散々質問責めにあうことになった。

……もう絶対に親は学校に呼ばない。そう心に誓った小学二年生の春だった。

## #10 天才に想われるのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

授業参観なんて消えて無くなればいいんだ。

さて、あの授業参観からさらに月日が流れ（ツツコンだら負け）、桜は散り、緑の葉は赤や黄に染まり始めた今日この頃、我が更識家に新たな家族が加わった。

更識（さらしき）簪（かんざし）。

うちの部下を黙らせる姫無をも黙らせる最強の0歳児だ。

うん。いやもうね。

姫無も可愛いけど簪もヤヴァイ。可愛さが留まるところを知らないとは正にこのことか。

そして簪が生まれる少し前、例の如く家族総出の名前会議が開かれた。俺こと形無、姫無と『く無』という字が付いているから今回もそういう名前になるのかと思いきや、そういう類の名前候補は驚くほど少なかった。

ただ、前回の姫無の時に却下されたことが諦められなかったのか『棟無』が再び案の中に紛れ込んでいたが、親父が即刻削除した。ついでにこの案を出した部下は一ヶ月間絶食の刑に処された。

というわけで最終的には『簪』、『小鳥遊』、『轍』などが残ったが、多数決の結果最も多かった『簪』に決定したというわけだ。

「あうあう」

まるでオットセイかなにかのような声を上げている簪を、姫無があやしている。姫無も簪も祖母の血を濃く受け継いだのか透き通るような水色の髪色をしている。俺はそんな明白な水色じゃないがやはり少しは祖母の血が流れているのか、紺色の髪の毛だ。まあそれは置

いておいて、姫無ももう二歳だ。言葉も話せるようになってきて、一緒に居る時間も増えた。

立派に育って兄さん嬉しいよ。……二歳じゃまだなんとも言えないか。

家族がまた増えたことで、親父の最早病気とも言える親バカっぷりは更に加速。更識家の十六代目だったのに今やその威厳は俺の中から消し去られようとしている。

仕事ほっぽり出して娘と遊ぼうとする父親なんか尊敬出来るわけねえだろ。

まあそんな体たらくっぷりを見せられて、我が更識家最強との呼び声も高い母さんが黙っているはずも無く、授業参観の時のように襟首ひつつかまれてオハナシされることもしばしばだ。

そんな光景も、もう見慣れたもので『またかよ』くらいにしか思わなくなってきたている自分が居る。慣れつつ怖い。

……そう、本当に慣れつつ怖い。

だって、神様（おっさん）から貰った一方通行（アクセラレータ）の超能力、使えない期間が長すぎてなんかもうこのままでもいいやあ（ヤケクソ）的思考に至ってしまったのだから。

いや超能力、使いたいよ？ つーか使えなかつたら俺この世界で生きていけないし。こんな東やら国家間の謀略のせいで死亡フラグ建ちまくる世界で丸腰じゃ殺してくださいって言うようなもんだ。

もちろん俺はそんな自殺志願者ではない。故に今も毎日かかさず演算を試みてはいるものの、やはりというかなんというか、うんともすんとも反応しない。

これじゃ間違いない能力が開花するより先に俺の心が折れる。というか既に折れ掛けた。

だから演算をしようとするときも『どうせ今日も無理なんだろうなあ、』的諦めが思考の何処かに少なからず存在している。

これじゃお先真つ暗だよ。妹達の花嫁姿を見る頃には俺遺影になつてるよ。

と、こつちがこんなお先真つ暗（比喻でもなんでもなくリアルに）状態だから、必然的に更識流のほうの修行には力が入るわけで。小学二年生ながら親父の部下の下のほうになら勝てるくらいにまで成長している。こつちが案外順調だから、能力のほうもなんとか諦めずにやっていられるんだ。だっていくら一方通行の『ベクトル操作』があるとは言ってもまだ使えないし、なによりも能力に依存しすぎてあんなひよろっちいモヤシにはなりたくない。どうせならしつかりと筋肉つきたいじゃないか。

「形無」

「父さん」

「今日は四の型を教えてやる。道場にこい」

普段はダメ親父全開な我が父だが、こういうときはなにやら精悍だ。仕事してる時もそうだが、いつもこのくらい真面目なら母さんのオハナシも受けなくて済むものに。

俺はそんなことを思いつつも、足早に親父の後を追いかけた。



……何故だ。

必要な条件は全てクリアしている筈だ。

転生者って時点でもう既にフラグは建ってるはずだし（主にハーレム）、名前だってこの世界で重要な意味を持つ名前だった。

幼稚園も原作キャラ二人と同じでもうこれは運命だと思ったし、なんと俺の家の近所にはあの五反田家の食堂まであった。

小学校に上がったも千冬、東とは同じクラスになったし、これはもう間違いなく俺は彼女たちにフラグを建てていると思った。

……思ってたのに!!

クソ、今思い出しても腹が立つ。あれは小学校に入学して千冬、東と同じクラスになり、二人でなにか話していた所へこれからもよろし

くなど話しかけに行った時のことだ。

『よう』

『……』

『小学校でも同じクラスになったな。また一年間よろしくな。千冬、束』

『またお前か……』

『束さんに話しかけてくれるかな。馬鹿と残念なのが感染したらヤだし』

『おいおい二人ともツンデレだな。ま、すぐにデレしてくれるとは思わが。』

『そんなつれないこと言うなよ。俺たちの仲だろう?』

『お前と友達になった記憶はない』

『……(がん無視)』

ガラツ

『はー、今日から小学生かあ』

『形無!!』

『おはようかーくん!! ちよつと今から束さんとかーくんを別々のクラスにしたこの学校に特製のウイルスをぶちまけてくるから!!』

『千冬、とりあえずソイツ押さえて』

『わかった』

『離してちーちゃん!! こんなの横暴だよ、不公平だよ!!』

『何が横暴だよ……。クラス分けなんて運みたいなものだろ』

『きつとかーくんと束さんを引き離すために学校側がなにか巨大な陰謀を』

『あるわけないでしょうが』

『なんて楽しそうにこの俺を差し置いて嫁たちと会話してやがるのは馬野郎。千冬たちにたかるハエみたいな奴だ。』

『っーかこいつ!! こいつが俺の計画を台無しにしてやがるんだ!!』

『本当なら幼稚園の時点で二人から、』

『私、大きくなったら一華くんのお嫁さんになる!』

『みたいなイベントを発生させてラブラブになる筈だったのに、二人』

の近くにはいつもアイツがいて俺の邪魔をしやがる!!

いつもいつもいつもだ!! もう能力使ってアイツぶっ飛ばそうか  
と思ったよ。まあ、まだ使えないんだけどな。

そんなアイツはどうやったのか束にゴマをすって近づき、パソコン  
を見ながら時々アドバイスしているが、お前何様のつもりだよと言  
いたい。

お前が偉そうにアドバイスしてる相手はのちの天才科学者、篠ノ之  
束なんだぞ? お前なんかが気安く話していい相手じゃねえんだ。

千冬だつて『ブリュンヒルデ』と称されることになる最強のIS操  
縦者だ。本来ならお前なんか同じフィールドにすら立てない人間た  
ちなんだ。

ま、俺は彼女たちと同類、所謂天才つてやつだからいいんだけど。  
更識形無。

ここまで俺をムカつかせたのはお前が初めてだ。いいだろう、認め  
てやるよ。お前が俺にとっての障害であるってことを。

俺はそんな怒りを込めて、自宅の部屋で口を開く。

「更識形無。ムカついた、テメエじゃ俺の足元にも及ばねえつてこと  
を教えてやるよ」

某常識が通用しない人のセリフを言つて、俺は不敵に笑う。

ぶっ倒す。……能力が使えるようになったらな。



「ん!?!」

ゾワゾワつと悪寒が全身を駆け抜ける感覚に俺は身震いした。な  
んだ、なんか前にもこんなのがあった気がするぞ。

誰かに恨まれてんのか?

そんなことした記憶はないんだけどなあ。

「どうした形無。集中力が乱れているぞ」

「あ、ごめん」

「さあ続きだ」

俺は気を取り直して再び親父の前に構える。

しっかし今のは一体なんだったんだ？



「ふむふむ。かーくんはこんな修行してるのかあ。なんか漫画の主人公みたいなことしてるねえ」

かーくんの家にこっそり仕掛けた(大部分は形無によって処分された)超小型カメラによって撮影されているかーくんの修行を見て私は素直にそう思った。

しかもあれはどう見ても私と同じ小学校二年生の少年がやるような修行じゃないよかーくん。普通の子供がやったらソツコーで病院送りだよ。

「ふふ。やっぱりかーくんは面白いなあ」

こんな厳しい修行もこなして、私と同等、もしかしたらそれ以上の頭脳を持っている。そしてなによりも、優しい。

むりやり家に押し掛けても意見を求めても、最後は結局了承してくれるのだ。これを他の子にもやってるのは納得いかないけど、それもかーくんだし、と言ってしまえばそれで納得できてしまう。

「また明日、かーくんにコレのアドバイスもらおっと」

目の前にあるノートパソコンに表示された設計図のようなものに視線を移し、彼との会話を想像して頬が緩むのを自分でも自覚する。

「~~~~~、明日まで我慢できない。今からかーくん家に行こう!!」

即断即決が身上の私はノーパソを小脇に抱えて外へ飛び出した。

彼の家の門で困惑する少年は、結局話を聞いてくれるのだろうか。それを考えると、どうしようもなく私は嬉しくなるんだ。

## キャラ設定&おまけ

### ◆更識形無◆

- ・身長 167cm (中学生現在)
- ・体重 52kg (同)
- ・容姿 中の上と下の下

神様たちのお戯れ、双六の出マスに書かれた『人間を転生させる』という理不尽な理由によって『IS』の世界に転生させられてしまった今作品の主人公。

紛れもない日本人だが、外人である祖母の血も若干ではあるが流れておりその影響か紺色の髪色をしている。

裏工作を実行する暗部組織に対抗するための対暗部組織『更識』を要する更識家の長男として生を受けた。

幼稚園入園時に原作キャラである織斑千冬、篠ノ之東と出会い数日の後友達となる。以来『いつメン』とまで呼ばれるようになり、お揃いの赤いミサングをそれぞれ腕に付けている。中学生になった今でも一日の大半はこの二人と過ごすことが多い。

性格は基本的小おらか。死亡フラグやその他もろもろのフラグ満載のこの世界を生き残るためあまりフラグを建てないようにと決意し転生したが、生まれてきたのが『更識』の家であった時点で挫折した。そして幼稚園で千冬、東と知り合ったことが止めとなり、原作とは関わらずに生きていくという選択肢は切り捨て、今はいかにして女尊男卑になる世界を生き抜くかを目下模索中。

神様からもらった超能力、一方通行(アクセラレータ)の『ベクトル操作』は脳がまだその段階まで至っていないのか使える気配が全くと言っていいほどない。

そのせいか父から指導を受ける『更識流』の柔術に力を入れるようになり、小学校低学年の時点で父の部下の下のほうの人間ならば倒せるほどの成長を見せる。



本人曰く、  
『能力に依存しすぎて一方通行のようなヒョロモヤシにはなりたくない』とのこと。

姫無や簪には更識家に代々仕える布仏家の専属メイドがつくようになる（小学校に上がると）が、形無は自分のことは自分で出来るとメイドを拒否したため専属の付き添い人はいない。

……というのは建前で、自分の身の回りの世話をしてもらうのが恥ずかしいというのが本当の理由だったりもする。

小学校を卒業後、千冬、束とともに近くの中学校へと入学する。  
重度のシスコン。

というか妹は正義というよくわからない理屈を持っており、二人の妹のためなら素手で戦車と闘うくらいに愛している（家族として）

#### ◆更識楯無◆

34歳。

更識家の16代目。

つまり現当主。形無、姫無、簪の父であり更識家の大黒柱的な存在である。更識家の部下として実に百数十人を従え、裏工作をする暗部組織に対抗するため仕事に出ていることも多い。

しかし、最早病気以外の何物でもない親バカであり、我が子の為なら例え国の未来が掛かっていたとしてもすっぱかして子供を取るほどの救いようなない親バカ。

それ故に妻である瑞穂からのお話（という名の折檻）は日常茶飯事となっている。

だが部下からの信頼は厚く、また妻である瑞穂も仕事に対しての心配はしていない様子。

#### ◆更識瑞穂◆

31歳。

17歳という若さでこの更識家に嫁いできた若奥様。大和撫子のように長く美しい黒髪とどう考えても20代前半にしか見えない美貌を併せ持ち、炊事洗濯なんでもござれの完璧美人（パーフェクトウーマン）。

しかしただ一点。

彼女自体がとてつもない天然ということだけが形無の悩みの種になっっている。

更識家の全家事を一任しており、楯無の部下からは『姉さん』と呼ばれている。

#### ◆織村一華◆

形無と同じく、神様たちのお戯れである双六の出マス『人間を一人転生させる』が理由でISの世界に転生させられた（一華を転生させたのは形無を転生させた神様とは別人）。

通称、残念君。

転生という二次小説にありがちな展開が実際に起こったことにより自分を主人公だと思っている。故にどこぞの主人公が所持しているフラグ体質やチート性能など備わっていると信じて疑わず、これまで生きてきた。

転生、というのはやはりフラグなのか容姿はそれほど悪くはない。本当の一夏くらいの長さの茶髪をワックスで立たせている。だがその容姿をもつてしても、残念な性格を補えてはいないようだ。

幼稚園入園時に千冬、束と同じクラスになったことでフラグが建つと考えていたが、形無の存在によりその妄想は呆気なく破壊された。

以来形無をなにかと敵視するようになり、事あるごとに馬野郎と罵っている。

小学校を卒業後、千冬たちを追って同じ中学校に入学することに。

転生する時に神様から『未元物質（ダークマター）』の能力を授かるが、どうにもまだ使えないようだ。

五反田食堂の近くに家があり、親父さんとは顔見知り。弾とも馴染

みである。

◆おまけ◆

「お兄ちゃん」

「ん？ どした簪」

自分の部屋で自由な時間を過ごしていると、ノックもせずに簪がトコトコと部屋に入ってきた。これが親父なら締め出すところだが、簪なら話は別だ。むしろ歓迎する。

明日から簪は幼稚園児だ。よほど楽しみなのか既に制服を着て黄色い帽子をかぶっている。

うん。可愛い。

「……似合う？」

その場でクルツと一回転しておずおずと訪ねてくる簪。思わず抱きしめたくなる衝動に駆られたがなんとか我慢して俺は満面の笑みで答える。

「よく似合ってるよ」

「へへ……そっかあ……」

よほど嬉しかったのか満面の笑顔でそう言う簪。やばい、俺の『抱きしめたくなる症候群』が再発してきた。いかんいかん。

「兄さ……」

俺が必死で自分を鎮めていると、今度は姫無が部屋に入ってきた。例の如く、ノックをせずに。

なんなんだ一体。この子らは俺の部屋に入り慣れているのか。そんな感じのはいり方だぞ。

「おう姫無。どした？」

「……兄さんに教えてもらいたい所があつて（簪も来てたのね）」

「お、いいぞ。どこだ？」

「このルートの計算なんだけど」

……………。

あれ、おかしいな。姫無はまだ明日小学校に行くようになるんだぞな。なんでもう数学勉強してんだ？

まあ俺は教えることはできるが普通の中学生には無理だぞ。

というわけで俺はこの部屋で姫無に数学を教えることに。

「……む」

そんな光景を見て面白くないのか簪はその小さな頬を膨らませている。

(お姉ちゃんに……お兄ちゃん、取られた……)

始めは些細な嫉妬から。

それがやがて、とある感情へと変わっていくなんて、このときはま

だ思いもしない二人。

更識形無。 14歳。

更識姫無。 6歳。

更識簪。 5歳。

更識家は今日も平和だ。

## #11 学校行事はその時点でフラグ

「……ん、」

瞼をゆつくりと持ち上げて、自分が目覚めたということを知覚する。ベッドの上でまだ余韻にひたりたいところだが、それをすると二度寝してしまいそうなので睡魔を振り伏せて身体を起こす。

「ふあゝあ……」

ぐいっと腕を持ち上げ、背筋を伸ばす。凝り固まった筋肉がほぐれていく感覚が何とも心地よい。

「朝か……」

更識形無。

十四歳になりました。

……いや、分かっている。言いたいことは分かっているよ。なんでいきなり小二から中二までとんでんだよサボってんじやねえってことだろう？

……大して原作に絡むようなことが無かったんだよ。

普通に千冬、束と学校でつるんで家じゃ更識流と超能力が使えるようになるための修行。あとは愛すべき妹たちとの触れ合い。そんな毎日を過ごしてたらいつの間にか中二になっていた。

この六年で俺は身長も伸び、体格もゴツくはないがそれなりの筋肉がついて男らしくなった。

更識流の修行も大分進み、今じゃ親父ともいい勝負が出来るくらいには成長している。まあ、まだ勝ったことは一度もないけど。

「……ん、」

布団から出ようと身体を動かした瞬間、何かが俺の腰辺りに触れた。

……………。

嫌な予感がしてならない。ようやく覚醒してきた意識を自らの布

団に向けると、明らかに自分以上の体積のふくらみがある。

「……………」

ガバツ、と。

俺は無言で自分の布団をひっぺがした。

「……………」

視線の先には、丸まったまま気持ち良さそうな寝息を立てて眠る我が妹。

更識姫無、六歳である。

「またかよ……………」

ここ最近、というかほぼ毎日。形無の布団にこうして姫無は潜り込んでくる。

というのも、姫無が幼稚園半ばまでは形無と一緒に寝ていたということが関係している。小学校に上がる前に姫無には自室が与えられ、身の回りのことは自分でするようにと言われていたのだが、如何せん自室で一人寝るのは慣れないらしく、結果こういうことになっているというわけだ。

まあ、何だ。

慕ってくれているというのは兄として非常に喜ばしいことなんだが、寝るくらい一人で出来ない心配になる。小学一年だし、これから直していけばいいと思うが。

「ほら姫無、起きろー朝だぞー」

「……………んにゆう」

「……………」

はっ!!

いかんいかん。寝顔が余りにも可愛いんで思わず食い入るように見つめてしまった。ここは兄としてしっかり妹に自分の部屋で寝るように言わねば。

……………少し寂しいような気もするけど。

「姫無。ひーめーなーしー」

「んん……………、あ、兄さんおはよう」

まだ眠いのか眼をこすりながらゆっくり起き上がる姫無。

ぐはっ!!

いかん、なんだこの可愛い生き物。抱き締めたくなっちゃうじゃないか。

「……まったく。自分の部屋で寝てくれていつも言ってるだろう?」  
必死に平静を装ってそう言う俺に、姫無は笑って。

「兄さんと一緒にじゃないと寝れないんだもん」

「そんなだと将来困るぞ?」

「いいもん。兄さんが一緒に居てくれるから」

決定事項ですか。

ニコツと笑ってそう言われてしまうと何も言えなくなってしまう。  
このやり取り、最早毎日の恒例になってしまっている。

「はあ、取り敢えず居間に行くぞ。母さんが朝食作って待ってる」  
「うんっ」

そう返事をした姫無はベッドを降り、俺の隣を歩いて居間へと向かう。これもまた、習慣化しつつあったりするのだ。

居間の前までやってきた俺たちは障子を開き、朝食が並べられた居間へと足を踏み入れる。

「おはよう」

「おはよ〜」

「おう形無、姫無。なんだお前らまた一緒に寝てたのか」

「あらあら。姫無は本当にお兄ちゃんが好きなのねえ」

「うん!」

「……(本当は困ってるが好きと言われて悪い気はしないので何も言えない)」

「お姉ちゃん……また……」

既に食卓についていた簪が頬を膨らませてこっちを見ている。

……なんだ、その俺が悪いみたいな目は。

「ふふんっ」

姫無は姫無で自慢気に簪の隣に座ってるし。

「お姉ちゃんばかり……ずるい……」

「悔しかったら簪も兄さんの部屋で寝ればいいじゃない」

「……まだ、無理だもん……」

簪はそう言つて下を向いてしまった。何故無理なのかというと、それは我が父親に原因がある。

俺の目の前で味噌汁を啜るこの親父は、周知の通り病気レベルの親バカだ。それはもう、夜子供と一緒に寝ないと不眠症になるくらいに。

故にこれまでは親父と母さん、姫無に簪の四人が一部屋に集まって床についていたんだが、つい最近姫無が自立（とは言つてもあの有り様だが）し、三人で寝るようになったのだ。

そんな状態で簪までもが一人部屋に移ってしまったらきつと親父は寂しきで死ぬ。ウサギみたいに。いや全く可愛くはないけどな。

そんなわけで簪はそっちの部屋を抜け出せないのだ。いや簪まで来られたら俺の寝るスペースなくなるから。……イヤではないけど。「ほら二人とも早く食べるよ」

「はーい」

言われて姫無たちは箸を取り食事を始めた。俺も黙々と食事を続ける。食事の最中は誰も喋らないし、テレビも消してある。更識家の家訓の一つだが、食事中は静かに、というものがある。

命に感謝し、口に運ぶことに話し声は無用というのが理由らしい。喋つていいのは『いただきます』と『ご馳走さま』だけだ。

「ごちそうさま」

俺は箸を置き、手を合わせる。食器を下げた居間を出た俺は自室へと戻った。

現在時刻は午前七時四十分過ぎ。丁度いい頃合いだろう。

部屋へと戻った俺はクローゼットから学生服を引っ張り出して袖を通す。真つ黒な学ランは流石に五月半ばのこの時期になると少々暑くなってくる。

「もう五月も半ばかあ」

壁に掛けてあるカレンダーに視線を移しそう溢す。早いものだ、新しいクラスになってからもう一ヶ月以上経つのだ。

二年生に進級し新しくなったクラスにも慣れ、友達も大勢できた。



これはとても喜ばしいことだ。充実した学校生活が送れているという実感もあるし、これと言った不平不満もない。

……あるとすればむしろ『ピンポン!!』……もうそんな時間か。

思いつきり和風な屋敷のこの更識家に鳴り響いたインターホンの音を聞き、俺は大して教科書も入っていない薄っぺらな学生鞆を手にとって自室を後にした。

「親父、母さん行ってくる」

「おう形無。気をつけてな」

「行つてらっしゃい」

親父たちにそう言つて、俺は玄関を出て門をくぐった。

「おはよう形無」

「おつすかーくん!!」

そこに居たのは中学校の学生服に身を包んだ美少女と言つても過言ではない二人。

織斑千冬。

篠ノ之束。

『いつメン』と呼ばれるメンバーだ。

彼女たちも中学生だ。小学校の頃とは比べものにならないくらい成長している。特にあの双丘。千冬も束も立派に成長中のようだ。特に束。あれはもう中学生というレベルを完全に逸脱している。凶器だ。

「おはよう」

まあ、そんなことは決して口には出さないけどな。

彼女たちとは幼稚園からの知り合いだからかれこれ十年近く付き合いになる。早いものだ。最初はなるべくフラグを建てないよう原作キャラとは関わらずひっそりと生きていこうと心に決めていたのに、それを一瞬にして破壊したのが何を隠そうこの二人だ。

幼小中と同じ学校に通う俺たち三人は中学でも有名になりつつある。

千冬は剣道部の二年生エースという肩書きとそのクールビューー

テイさで同性からの支持が多く。

東については言うまでもないがその頭の良さで、中学では自他共に認める天才だ。

そ　して俺なんだが……正直有名な理由がイマイチ解らん。勉強は前世の記憶があるから並よりは出来るが東には遠く及ばないし、運動も更識流を修行しているからこれも並よりは出来るが千冬ほどのセンスはない。

※形無は周りにいる連中が凄すぎて若干ハードルが高くなっています。

それに見た目だつてこの二人に比べたら見劣りしまくる。

「……………」

「……………」

なんか千冬たちがジト目でこっち見てくるんだけど。何これ怖い。

「……形無」

「はい？」

「お前今間違つたこと考えていなかったか？」

「いや、別に」

「……まあいい。それよりも、形無はどれに出るか決めたのか？」

「はい？」

「……まさか忘れていたわけじゃないだろう？」

「忘れる？」

「俺何か忘れてたか？」

「体育祭の競技のことだ。今日のHRで個人競技を決めると先生が言っていたらどう？」

「あ」

「束さんも初耳だけど」

「お前はパソコンずつと触つてたからだろ」

「体育祭。そう言えばそんなこと担任の先生が言ってたなあ。」

「因みに我がクラスの担任の教師の名前は中田（なかた）加奈（かな）。やまやの二番煎じすぎる名前の持ち主だ。」

「体育祭、かあ……」

いや別に体育祭は嫌いじゃないんだ。むしろ身体動かすの好きだし。むしろ授業潰してやってくれるんだから願ったり叶ったりなんだ。

……でもさ。

こういう行事があると病気なオッサンが絶対来るんだよ。

「親父……来るなって言っても絶対来るよなあ……」

親バカ日本代表、更識楯無。

あの親父が来ると碌なことにならない。

事実、去年の体育祭だつてそうだったのだ。

子供と一緒に走りながらビデオカメラ回したり、最早騒音レベルの応援したり。

最終的に変質者扱いされて職員室に連行されてたからね。母さん完全に他人のフリしてたからね。

「お父さん……去年すごかったな」

「……言うな」

千冬の同情がづらい。

「でも競技か。何に出るか全然考えてなかったなあ」

「あ、じゃあさかーくんかーくん！ 束さんと一緒に二人三脚出ようよ!!」

「却下」

「即答!? 酷いよかーくんそれは横暴だ!!」

束と二人三脚？

勝てる気がしない!!

「あのな、束。去年の体育祭思い出してみろ。お前プログラム一番のラジオ体操で日射病になって保健室に運ばれたじゃねえか」

「う……」

束は外、もつと言えば太陽の下で動き回るのが致命的に苦手だ。故に体育の成績だけは他と比べて低い。

「こ、今年は大丈夫だよ!!」

「週末の最高気温三十度近くまで上がるらしいぞ」  
「……………」

押し黙る束。どうやら無理だと悟ったみたいだ。

「な、なら形無。私とはどうだ？」

何やら鼻息荒くして聞いてくる千冬だが、コイツも大切なことを忘れてる。

「確か二人三脚のあとすぐに部活動対抗リレーだろ。そつちに間に合わなくなる」

「う……」

しかし二人三脚か。

それが一番個人競技の中じゃあ簡単そうかなあ。転ばなきやいいだけだし。

「ま、ペアは学校で探せばいいか」

そんな風に適当に考えつつ、俺たち三人は中学校へと通学路を歩いていった。

……まさかのペアに驚くことになるのは、今から約八時間後のことだ。

## #12 帰宅部でその運動神経はその時点でフラグ

前回のあらすじ

体育祭って、完全に親父の暴走フラグやん。

そんなわけで現在六限のHR。俺は自分の教室の席に着き、教壇に立って何やら力説を始めた体育祭実行委員の話聞いていた。

「いいか!! 我々赤組は今年こそ総合優勝を勝ち取る!! その為には団体競技はもちろん、個人競技でも上位に入賞することが優勝のための必須条件だツ!!」

こんな風に如何にして優勝するかを熱く語っているのはクラスが新しくなって俺の初めて友達、相模（さがみ）だ。サッカー部に所属している相模は当然のようにイケメンで、こういう人を纏める仕事は得意な人間だ。

こういう人の前に立つという点においては千冬も相模以上の素質があるんだが、彼女は現在部活動で行う体育祭の仕事の打ち合わせに招集されていてこの教室に姿は見られない。

本来なら部長を含めた三年生が招集されるんだが、どうやら千冬は二年生にしてその地位にいるようだ。

さて、相模の話に耳を傾けようか。俺は頬杖をついて、教壇のほうへと視線を移した。

「というわけで、俺たち体育祭実行委員のほうでどの個人種目に誰が出るかを決めさせてもらった!!」

「ざわっ、と教室全体がどよめいた。

無理もない。みんな仲の良い友達同士で参加しようとしていたのだ。それを向こうで勝手に決められたとあつては文句の一つも出てくるものだ。

「なんでだよー」

「私たちもう何に出るか決めてたのに」

「こっちで決めさせてくれよ」

などなど様々な文句が発せられている。

まあ俺としても出来ることなら自分で出る競技を選びたかったが、あの親父が来る時点で俺の体育祭には暗雲しか立ち込めていない。どの競技に出ようが待っているのは羞恥のみだ。

だから別に俺としてはどれでもいいんだが。

「まずはポイントのでかい団対抗リレー。出るのは俺、更識、織斑に織村の四人だ」

なんだあれに出るのか。まあ走るだけならいいか。

「次に騎馬戦。これは男子全員参加な」

騎馬戦か。

まあ全員参加なら仕方ない。ケガしないように逃げ回ろう。

「んで200m走。これは50m走のタイム上位二十人な」

俺のタイムは六秒前半。上位二十人どころか陸上部に混じってトップ三に入っている。

「んで二人三脚。これはもうペアをこっちで作ったから、この紙を見て出ることになってる奴は確認してくれ」

クラス全員に紙を配る相模。前の席の女子から回ってきたその紙には。

『更識形無・織村一華』

……………。

もしかしたら偶然かもしれないし、相模にも悪いかなあとか思っただけで何も言わなかったが、もう限界だ。

「相模」

俺は挙手して立ち上がる。

「ん？ どうした更識」

「ちよつと言いたいことがある」

「なんだ」

「なんで俺全種目出るようになってんだよツ!!お前ですら二人三脚はエントリーしてねえのに!!」

「お前の運動神経がいいからに決まってんだろうが。帰宅部のくせになんだそのデタラメな運動能力」

さらつと相模に返され、俺は言葉に詰まってしまった。

今相模が言ったが、俺は中学ではこれと言った部活に所属していない。所謂帰宅部というやつだ。入学当初は千冬に熱心に剣道部に勧誘されたが、俺には更識柔術の修行もあるし、超能力を自分のものにするための訓練する時間も必要なのだ。部活に割ける時間は残念ながら無いに等しい。

「デタラメとか言うな!」

「だからたまには学校にその運動能力で貢献しろってんだよ」

相模から折れることはなさそうだ。

結局、俺はこういう押しとつか頼みみたいなものには弱い。最近つくづく思うが。

「……はあ、わかったよ」

「よし。じゃあそんな感じで頼むわ」

相模がこう言って会を締め、この日は解散となった。今日の授業はこれで終わりなので、机の横に掛けてあった中身が入っていない学生鞆を担ぎ、教室を後に――

「あ、待ってよかーくん東さんを置いていかないで!!」

――しようとした所で、天才(災?) 科学者に捕まった。

「いやあずつと熱心にウィンドウ見てたから邪魔しちや悪いかなあと」

「うそだ。東さんの目は誤魔化せないよかーくん。絶対先に帰ろうとしてたでしょ」

「……、いや?」

「その間は絶対そうだつ!!」

いやだつてさっきの体育祭云々の話とかクラスでしてるときも全部無視してひたすら空間投影式のウィンドウ開いてISの開発してんだぞ。集中してるところに声掛けるなんて野暮なことできるわけないじゃないか。

因みに束のこのIS開発だが、実際のところもうすぐ完成というところまで来ている。幾度となく質問や提案されてISの設計に少なからず関わってしまったので分かることだが、下手したらこれ中学卒業までに完成してしまうかもしれない。

……原作つて高校生のときじゃなかったか？

「まあいいや。帰ろうかーくん」

「おう」

？

何か今日はやけに上機嫌だな。何か良いことでもあったのか？

上機嫌で俺の腕に自分の腕を絡めてくる束を見てふと思ったが、聞くのもなんだか憚られたのでそれ以上は聞かず、そのまま俺たち二人は教室を後にした。



今、私はすごく機嫌がいい。理由は簡単で、かーくんと二人つきりで帰れるからだ。

さつきかーくんにスルーされて帰られそうになったときは本気で泣きそうになったけど、この後のことを思えば何てことはない。

なんてつたつて今日はかーくんと二人「きり」で帰ることが出来るのだ。

いつもならかーくんとちーちゃんと三人で帰るんだけど、生憎今日ちーちゃんは部活動の打ち合わせか何かで下校が遅れる。

これは思ってもみなかったラッキーだ。

ちーちゃんには悪いけど、今日は束さんがかーくんを一人占めし



ちやうね。

ぎゅつと絡めた腕の力を強めると、困った顔をしながらもかーくんは受け入れてくれる。それが私にはたまらなく嬉しいんだ。

「かーくん」

「ん？」

「東さん将来は女の子が欲しいなあ」

「ぶはっ!? いきなり何言い出すんだお前は!!」

照れてるのか焦ってるのか、かーくんの顔は真っ赤だ。

でも気付いてる？

何気無く言ってみた私の顔だって、かーくんに負けないくらいに真っ赤なんだよ。



憎い。

今の俺の心境を率直に述べるとこの一言に尽きる。

先程終わった体育祭の種目決め。俺は運動神経がいいから当然のごとく全種目出場だ。ま、俺がいれば総合優勝なんざ楽勝だよ。

だが。

同じクラスにいる馬野郎と二人三脚だけは願い下げだ!!

何で俺があんな帰宅部の陰キヤラと一緒に走らにやなんのだ!!

しかもあんな奴のどがいいのか、俺の嫁は馬野郎と腕を組んで二人で帰りやがった!!

憎い!!

これが妻を寝取られた夫の心境ってやつなのか!!

……見てろよ。

俺がお前よりも優れてるってことを、体育祭で思い知らせてやる。嫉妬の炎を燃やし、俺は体育祭での活躍を誓った。



「じゃあバイバイかーくん!!」

「おう、また明日な」

東と別れた俺は家の門をくぐり、玄関の戸を開く。

「ただいまー」

「あら。お帰り形無」

「ただいま母さん」

「今日も部屋で修行するの?」

「うん。集中したいから今日も誰も部屋に入れないように頼むよ」

「分かったわ」

そんな会話の後、俺は自室へと向かいその戸を開く。学生鞆を適当に放り投げ、学生服を脱いで部屋着に着替えて母さんの言う『修行』の準備を始める。

この修行だが、言ってしまうえば超能力を制御できるようにするための訓練だ。

小学校の六年間、全くと言っていいほど使えなかった超能力。一期はほんとに才能ないんじゃないかと挫折しそうになったが、中学生に上がるのと同時期に一方通行(アクセラレータ)の『ベクトル操作』を行うための演算を脳が出来るようになったのだ。やはり脳の容量が足りなかったみたいだ。

いやさ。

自分であるオッサンにこの能力くれてお願いしといて言うのもなんだけど本当に『これなんてチート』状態だよ。

だってデフォで反射に設定しとけばほぼ殺されることはないんだぞ。この安心感は半端ない。一方通行が能力に依存しちまうのも無理ないな。

流石に常に能力を展開しておくのはまだ厳しいので必要時のみだが、いやはや使えるようになって良かったよほんと。

これまで諦めずにやってきたことが報われた。

このままでIS完成してしまつたら万が一ISとの戦闘になつた時俺の前には死の一択しかなかつたらうし。

「やっし、」

俺は脳に意識を向け、演算を開始する。

今日は何のベクトルを操作してみようか。

やっぱ男ってこういうのに憧れるよな。

マンガの主人公みたいだし。

そんなことを考えつつ、俺は意識を集中させていく。

『ベクトル操作』を完璧に使いこなせるようになる日も遠くはなさそうだ。

そして週末。

いよいよ、それぞれの欲望渦巻く体育祭開幕である。

## #13 騒々しいのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

結局、俺は頼まれたら断れない。

体育祭当日。

どうせなら大雨でも降って延期、もしくは中止になってほしかったが、そんな俺の切実な願いなど知るかとばかり上空には澄んだ青空が広がっていた。

天気、快晴。

体育祭、決行。

親父、始動。

いやいや。

親父、始動とか言ってるけど俺としてはホントに笑い事じゃないんだよ。まじで体育祭がカオスになる未来しか見えてこない。

「母さん!! 写真撮るなら最新のデジカメか、昔ながらの一眼レフかどっちがいいかな!?!」

「あらあら。いいんじゃないですか?.....どうでも」

「どうでも!?! 母さんそれは酷いカウンターだぞ!!」

「楯無さんはしやぎすぎです。子供よりもワクワクしてるじゃないですか」

「当たり前じゃないか!! なんてったって年に一度の行事なんだぞ!!」

「どこにワクワクしすぎて前日一睡も出来ない親がいるんですか」

母さんのが呆れたように親父に言う。母さんの言うとおりの親父は一睡も出来なかったのか目の下に隈を作っている。なのにこのハイテンションっぷりは一体何なんだ。睡眠をとらなかつたくらいじゃ今の親父は止められないってことなのか……！

「ん、おお形無早いな！ さてはワクワクし過ぎて寝れなかつたんだなあ？」

「アンタみてえなのと一緒にすんな」

「酷い!! 親に対してこの言い草、母さんどう思う!？」

「自業自得です」

「母さんまで!!」

……取り敢えず朝っぱらからカオス全開のこの親父が鬱陶しくて仕方がない。なんだこのテンション。遠足前日の小学生でもこんなワクワクしてないぞ。

「……はあ、取り敢えず落ち着けよ親父」

「体育祭だぞ、これが落ち着いていられ……」

「母さーん」

「うん取り敢えず落ち着こうな」

ガクガク震えながら即座に食卓につく親父。やはり今でも母さんがこの更識家で最強の座についている。そのオハナシはこれまで何度親父の心をへし折ってきたかわからない。

先程までのハイテンションぶりが嘘のように大人しくなった親父はそのまま手を合わせ、食事を始めた。

さて。

「なあ姫無。いい加減俺の腕から離れてくれないか」

「いや」

居間に入ってきたときから実はずっと腕にくっついていた姫無に離れるよう進言するが即座に拒否されてしまった。

毎度の如く俺の布団に潜り込んでいた姫無をどうにか起こしこころまで来たはいいが腕にくっついたまま離れる気配が微塵も感じられない。

いや嬉しいは嬉しいんだけどこれじゃ飯が食えない。今日は体育祭だからいつもより早く学校行かないといけないし、余り時間もないんだけど。

当然のようにくっついて離れない姫無に母さんたちも何も言わないし、困ったなあと俺が思っている。

ひしっ

「……………」

空いていた腕のほうに、もう一人の我が妹がしがみついてきた。

「…………簪？ 何をしてるんだ？」

「…………お姉ちゃんばかり、ずるい…………」

「いやずるいとかじゃなくてな、飯が食べられないんだ」

「…………食べさせて…………あげる…………」

顔を赤くしてそう言う簪。うん、それは俺としてはとても嬉しい提案なんだけどな。両腕でしがみついているのにどうやって俺に食べさせるっていうんだ。

「む。何言ってるの簪。それは私の役目よ」

「…………お姉ちゃんばかり…………私だって…………」

俺を挟んで姉妹で口喧嘩みたいなのを始めてしまった。

頼む。誰か助けてくれ。

「姫無、簪。お兄ちゃんが困ってるでしょう？」

「だってお母さん、簪が…………」

「お姉ちゃんが…………」

「そんなことしていると嫌われちゃうわよ？」

シュバツ!!

一瞬にして俺の両隣から妹たちが居なくなり、黙々と食事を開始していた。なんつー速さだ。そして母さんグツジョブ。

「いただきます」

そして俺もようやく食事にありつく。やっぱり日本人は白米と味噌汁だよなあ。何かこう安心する味だ。

「……おっと」

こうしちやいられない。何せ今日は登校してから割り当てられた教室で体操服に着替えなければならぬのだ。故にいつもよりも十五分は早く家を出なければならぬ。起床時間がいつもと変わらぬ俺は、必然的に朝食の時間を削るしかないのだ。

俺は急いで食事を喉に通し、ごちそうさまと告げて居間を後にする。部屋に戻って制服に着替え鞆を手に取り家を出た。

「おはようかーくん」

「おはよう。今日は千冬はいないんだな」

「うん。なんか剣道部とかの運動系部活は朝から機材とかの運び出しやらされてるみたい。ちーちゃんまで行くことなかったのに」

つまらなさそうに言っ隣を歩き出す束。昨日あんな爆弾発言をしてくれやがったわりには全くもって普通だ。まあ俺も冗談だとは分かってるから気にはしてないが。

「あ、なあ束。今日のプログラムとか持って……」

「ないよ」

だよなー。

言い出してから気付いたけど完全に聞く相手間違えた。こいつがプログラムなんか持つてるわけない。なんせ去年は一日中保健室で過ごした奴だからな。ただでさえ出ないと言い張っていた束を俺と千冬で説得し参加させたらあのザマだ。

きつと今日も参加する気はないんだろう。

「あ、でもかーくんの活躍はちゃんと見届けてあげるからね♪」

嬉々と言う束だが、『あ、』と思いつ出したかのようにみるみるその表情を曇らせていき。

「でも二人三脚のペアがあいつなんて……」

眉間に皺を寄せながら本気でイヤそうに言う束。名前を言うのもイヤなのかアイツ呼ばわりだ。まあ、他人に興味を抱かない束にアイツとして覚えられているという点においてはそれなりに興味の沸く人間なんだろうが。

「ああ織村か。アイツ何かと俺につつかかってくるんだよなあ」

「ほんと鬱陶しいよアイツ。私にベタベタ触ってくるし、吐き気がする」  
東にとってアイツ、織村一華は汚物か何かと同レベルの存在みたいだ。

確かに『織村一華』なんてちよつと出来すぎた名前だよなあ。千冬が弟と読みが同じだって言ってる本気で嫌がってたわけ。

……まさか俺みたいな転生者とかじゃないよな？

あるわけないか。まだ原作前だし原作まで生き残れなかったモブキャラなんだろう。

そんな残念なモブキャラである織村だが、実は幼稚園のころからずっと一緒だったらしい（俺は記憶に全く残っていなかったが千冬たちが覚えていた）。

初めて話をしたのは俺が中学に上がったからだ。その時は『俺はお前と違って選ばれた人間なんだ。嫁は誰にも渡さん!!』とかなんとか言っていたが、何のことだか俺にはさっぱりわからん。

……と。

そんなことを考えていたらいつの間にか学校の正門前までたどり着いていた。

グラウンドのほうを見てみれば幾つものテントがトラックを囲み、その上には世界各国の国旗が張り巡らされている。

「じゃあ、男子は更衣室で着替えだからまたあとでな」

「え？ 東さんももちろんついて……」

東が言い切るよりも早く、俺は彼女の頭に拳骨を降り下ろした。

「いったあ!! かーくんそれは暴力だよ!?!」

「馬鹿者これは愛のムチだ」

「あ、ああ愛の!?!」

ん？

何故そこで反応するんだ。取り敢えず気持ち悪いから頬に手を当ててくねくねすんのやめろ。

「形無ー!」

東がくねくねしていると前方から俺の名前を呼ぶ聞きなれた声が響く。



走ってこっちに向かってくる体操服姿の少女の名は。

「おー千冬」

「おはよう形無。……ところであの馬鹿はどうしたんだ？」

「あー、気にするな。病気みたいなもんだ」

「？　そうか。所で、今日は頼むぞ形無。赤組が優勝出来るかどうかはお前の活躍次第なんだからな」

「そんな大袈裟な……」

「大袈裟なものか。形無が一番の主力なんだ。まずは騎馬戦からだが頑張ってくれ」

それだけ言って千冬は本部のほうへと走り去っていった。

やれやれ、やっぱ剣道部だけあって千冬も生粋の体育会系だなあ。あんなやる気満々なの久しぶりに見たぞ。

「さて、」

俺は未だくねくねしている束を放置して、指定された更衣室へと向かった。



『——これをもちまして開会式を終わります。第一種目、男子による騎馬戦に出場される選手のかたは、至急入場ゲートにお集まり下さい』

開会式の司会を務めていた三年生の女子のアナウンスにより、現在は入場ゲート裏で競技の開始を待っている。

この騎馬戦はこの学校でもやるような至って普通のものだが、ただ一つ違うのは奪うのが頭に被った帽子ではなく、タモさん風のサングラスだということだ。

どうやら帽子だとゴムを使ったり手で押さえたりといった反則行為も多く、また時間もかかるため時間短縮の狙いもあってこのサングラスを奪い合うというふうに決定が下されたようなのだが……。

なんでサングラス!?

もうほんとこの学校バカなんじゃないかと思う。だいたい考えてもみる。三人に担がれている上半身裸の男子がサングラス装備って、しかもそれが東西で何十人と腕組んで睨み合ってるて。

シユールすぎるだろうが。

なんか残念なアンダー○ン君みたいじゃねえかよ。

「……なあ相模」

「うん？」

現在俺を担いでいるうちの一番前に位置する相模に俺は話し掛ける。

「このサングラス……取っていいか？」

「だめだ」

「だって明らかにおかしいだろうが!! その上視界最悪だし!! 委員会もちつとましなもんチョイスしろよツ!!」

「そんなこと言うなよ。……似合ってるぞ（ププツ）」

「よしお前あとで殺すからな」

必死に笑いを堪えている相模に死刑を宣告して、俺は審判に指示され入場ゲートをくぐって所定の位置につく。

あ、因みに赤組と白組、どっちがどっちかを判断する基準は騎馬を作っている男子の先頭が被っている帽子の色だ。

そこは帽子被るんかいツ!!

「はあ……、なんかもう帰りたくなってきたよ」

「なこと言うなよ更識。堂々としてりやいいんだよ。ほら、あいつみたいに」

「ああ?」

溜め息をつく俺に相模は顎でとある人物のほうを指し示す。

そこに居たのは。

なんか誇らしげにサングラスかけて胸を張りながら腕を組むクラスメイト、織村一華の姿。

「……なんであいつはあんなにも誇らしげなんだ」

「サングラス似合ってると思ってるんじゃないの？」

「あれで髪オールバックにしたら完璧タ○リだぞ」

「確かに……っと。そろそろ始まるっぽいぜ更識」

言われて正面に向き直ると、審判であろう女子が空砲のピストルを今正に頭上に持ち上げようとしていた。

それを確認した男子たちの表情が引き締まる。闘い前の血がスーツと引いていくような感覚を覚えながら、俺は空砲が鳴るのと同じ時――。

「形無いツ!! やつちまええええええツ!!」

――親父の喧しすぎる応援に、思わず落っこちそうになった。

「……あんのクソ親父……!!」

「更識!! 来るぞ!!」

今すぐにも親父に文句を言いに行きたいところだが、敵がそんな時間をくれる筈もなく、雪崩のようにこちらに襲いかかってきた。

……だめだ緊迫した場面なんだろうけど皆が着けてるサングラスが全てを台無しにしている。

気を取り直し、俺もその流れに乗って白組たちが向かってくる方へと走り出した。

狙うはサングラス。帽子よりは取りやすいだろうが如何せん視界がモノクロだ。下手に動いてサングラスを自ら落とす、なんて可能性もある以上下手に突っ込むのは愚策なんだが。

「うおおおおおッ!!」

クラスメイトである織村一華は愚直なまでに真っ直ぐ白組の密集地帯へと突っ込んでいった。

あ、騎馬のスピードについてこれずに後ろの騎馬役やってた相撲部のやつがコケた。それが影響して他の二人の騎馬もバランスを崩す。

大きく揺らぐ騎馬。  
そして。

織村<sup>バ</sup>一華<sup>カ</sup>は顔面からグラウンドに激突した。

パリンツ、という何とも小気味のいいサングラスの割れる音が青空の下響き渡る。

「……………」

俺や相模だけでなく、観客含めた全員が言葉を失っている。

否、この場合何て言ったらいいのかわからない、というのが正しいのかもしれないが。

そんな状況の中、織村はゆっくりと立ち上がり、鼻を擦りながら一言。

「……………くっ、この俺のスピードに常人では付いてこれないか」

「……………」

会場、絶句。

こうして波乱の体育祭は幕を開けた。

## #14 挙動不審はその時点でフラグ

前回のあらすじ

体育祭がカオスの予感しかしない。

そんなこんなで始まってしまった体育祭。俺が出場する最初の競技でもある全学年男子参加の『騎馬戦』で、同じクラスである織村一華が自滅した。なんとも言えない雰囲気グラウンドを支配しているが、そんなことは気にせず再びサングラスをかけた闘いが始まった。

「形無右から来てるぞ!!」

「了解!」

騎馬の先頭を務める相模の報告で俺は右前方から鼻息荒くしてやってくるデカイ白組へと視線を向ける。

いや、まじでデカイな。

三年生か? 下の騎馬今にも潰れそうになってんだけど大丈夫か?

「グラサン寄越せやガキい!!」

オイオイ俺のことガキ呼ばわりですか。

「寄越すわけないでしょう……が!!」

俺は突き出された腕をいなし、逆に相手のサングラスへと腕を突き出す。

「うお!?!」

まさかカウンターを食らうと思っていなかったのかバランスを崩す三年生。それを俺が見逃す筈もなく。

「よいしょっと」

すかさずサングラスを奪い取った。サングラスしてたら太ったエグ○イルのア○シミみたいだったけどサングラス取ったらクロちゃん

じゃねえか。

「さすが更識。この調子で次行くぞ」

相模がそんなことを言っているが、正直俺はあまり目立ちたくない。い。

何故かと言うとだ。

「おお形無!! 見事な切り返しだあ!! そのまま全滅させてしまえツ!!」

……あのクソ親父が五月蠅くなるからだ。

頼むから身を乗り出して手をこっちに振らないでくれ。関係者だと思われたくない。

「……はあ、」

既に暴走気味の親父に溜め息をもらしつつ、俺は次の騎馬からサングラスを奪うべく進んでいった。



結果から言えば、俺たち赤組は白組に勝利した。この騎馬戦は時間制限がないため相手の大将となる騎馬を倒した方が勝ちになるんだが(大将はサングラスの淵が金色)それを赤組が先に討ち取ったのだ。俺は別段活躍する、というわけでもなく向かってくる手を迎撃していたから余り目立っていない……だがあの親父のせいで全て台無しだ。周りからの視線が痛い。ほんと、帰りたくなってきた。

「お疲れ形無」

「おう千冬。サンキュー」

退場ゲートをくぐると千冬がタオルを渡してくれた。今日は日中三十度近くまでになるって言ってたが、既に暑い。俺の額にも大粒の汗が浮かんでいる。

「流石だな。最後まで脱落せずに相手の騎馬を十一も倒すなんて」

「数えてたのかよ。……それはいいんだがアレがなあ……」

「……やはり凄かったな、楯無さん」

「もう勘弁してくれ……」

親父をこういう行事に連れてきたらダメだということを再認識する。次からは来ないように言うか？

……ダメだなあの親父のことだ何があっても来るだろう。

あの親父は子供のためなら平気で国の重要案件をすっぽかすような親バカだ。それこそ母さんが止めてもきつと止まらない。

結局、こういう結果になるってわけかよ。

「あ、そろそろ私も行かなくては」

「次は千冬が出るのか？」

「ああ。借り物競争だからな」

『またな』と言って入場ゲートのほうへと走り去っていく千冬を見送って、俺は指定されているクラスの待機場所へと歩いていく。すると。

「おい」

すたすたすた。

「おいってば」

すたすたすた。

「待てよおい」

すたすたすた。

「待てつつつてんだろうが馬野郎ツ!!」

……、馬野郎？

何だよその呼び名は。

ようやく足を止めた俺に満足したのか叫んだ少年、最早言うまでもないだろうが織村一華は得意げにこちらに向かってきた。

「さつきはラッキーだったな」

「……は？」

ラッキー？ 一体何の話をしているんだコイツは。などと考えていると、更に織村の口から言葉が吐き出される。

「俺がアイツらの気を引いたおかげで幾つかサングラス取れただろ」

アイツらって、ああ。

白組のことを言ってるのか。いやいやアレは完全にお前のミスだしアレのお陰でサングラスを奪えたなんて俺だけじゃなくきつとコイツを除く赤組の全員が思っていないと思うんだが。

「そんなMVP並に活躍した俺に何か言うことはないのか？」

……？

俺は織村の意味の分からない発言に思考がストップしそうになる。言うことって『鼻痛くないか？』とかでいいのか？　アレは絶対に痛いだろうからな。

「……………」

「何かあるだろう？」

訳が分からず黙りこくっている俺にイライラしてきているのか足の爪先を執拗に地面にトントンと叩きながら織村が言うが。

「……悪い。何のことを言ってるのか俺にはさっぱりわかんねえ」  
しようがないだろ。

分からないものを言えって言われても言えるわけがない。

と、そんな俺の態度が気に食わなかったらしい織村が再度噴火。そして。

「千冬と束から手を引くって言えよ!!」

今度こそ、俺の思考が停止した。

「この際だから言わせてもらうが、いい加減に嫁達アイツらを解放してやれ!!  
自由にさせてやれよ!!」

「……………」

アレなのか。

俺の周りにはまともな人間というのが一人としていないのか。

第一、俺は千冬や束に手を出した憶えなんてこれっぽっちもないし、ましてや縛り付けている事実などどこにも存在しない。

であるにも関わらずこんな根も葉も無いことを真剣に訴えてくる目の前の少年。



結論。

コイツはアブナイ人。

こういう人種とは関わらないのが一番、そう思い至った俺は踵を返して再び待機場所へと向かって歩き出す。

「あ、待てよ!! 自分の立場が悪くなったからって逃げんじゃねえ!!」  
逃げてないし立場を悪くした憶えもない。

背後でぎやーぎやーと喚く織村を無視して、俺は待機場所へと戻っていった。



騎馬戦を終えた俺は、現在進行形で行われている借り物競争を各クラスに宛がわれたテントの下で相模と二人で観戦していた。

この借り物競争のルールはこの学校でもやっているような普通の借り物競争と同じだ。  
ただし。

借りてくるものがとんでもなくハードルが高いことで有名だ。

……ほんとにまともな競技が最初の準備体操くらいしかないのかこの学校は。

去年の例で言えばブルドッグ、ポケベル、自分と身長がミリ単位で同じ人などなど。中にはスキー板などそれ絶対学校にねえだろという物まで出題されていた。

「お、次に走るの織斑じゃないか？」

「ん、ほんとだ」

スタート位置にっていた千冬を相模が発見する。スタートの合図である空砲が響き、千冬を含めた六人が一斉に走り出す。

やはりと言うべきか千冬がダントツに速い。他の五人にみるみる

うちに差をつけていく。そこらの男子なんかよりよっぽど速い。

そうして一番に紙を取った千冬は――。

「……？」

――何だかいきなり顔が赤くなった。

一体何を出題されたんだと俺が思っていると。

「……え？」

何故か一目散に千冬がこっちに走ってきた。こっちに借り物があるってことなんだろう。俺は後ろを振り返って近くに何かがあるのかを確認してみる。

しかし、背後はフェンスしかなくこれといった借り物のお題に出されそうな代物は見受けられない。

何がお題なんだ。

なんて安易に俺が思っていると。

ガシッ

「……え、」

「い、いくぞ」

千冬が俺の腕を掴んで強引に立たせる。

……今年の借り物競争って個人名まで書かれてんのか？ それとも俺に関係するお題なのか？

尚も腕を引かれたまま走る俺は千冬とともにそのまま一着でゴール。親父が何か喚いてたけどどうせ碌でもないことだろうかスルーしておいた。

一着の旗を貰って前方を歩く千冬。なんだかまだ顔が赤いようだが、一体何が書いてあったんだろうか。

ううむ、気になる。

「なあ」

「ひゃっ！？」

軽く肩を叩くとビクツと上ずった声を上げた。

「な、なな何だ形無？」

「その紙に何が書いてあったんだ？」

右手に持っていた紙を見ようと俺がそれに手を伸ばすと。

サツ

「……、」

避けられた。

スツ

サツ

「……なあ」

「何でもない！ 大したものではなかったんだ!!」

いやいや、その挙動不審っぷりじゃあ説得力0だぞ千冬。

「そ、それよりももうすぐ徒競走じゃないか!？」

「いやそれまだ時間あるから」

「アップは必要だ!! さあさあ、もう行ったほうがいいぞ!？」

ダメだ。

こうなったらテコでも千冬は動かないし譲らない。

「……はあ」

小さく溜め息を吐いて俺は内容を諦めた。だって今の千冬顔赤くして瞳潤んでんだもん。なんかこれ以上踏み込んだらヤバい気がしたんだ。

しょうがないので、そのまま俺はクラスの待機場所へと戻ることにした。

しっかし、一体何がああ紙には何が書いてあったんだ？

気になるなあ。



「ふう、」

形無が去っていったことを確認して、私は安堵の息を漏らした。キツく握り締められた右手の中にあつた紙に視線を落とし、ゆっく

りと折り畳まれたそれを開き。  
そこに書かれていたのは。

『想い人』

カアツ、と顔が熱を帯びていくのを感じる。

こんなもの形無に見せられるわけがない。

見られたら最後、私は恥ずかしさで死ぬかもしれない。

少なくとも、今はまだ。

「全く、罪作りの男だ……」

ポツリと千冬の口から漏れたそれは、誰に聞かれることもなく青空の中へと消えていった。

## #15 弁当タイムのあーんはその時点でフラグ

前回のあらすじ  
体育祭は荒れに荒れる

「ふう、」  
徒競走を終えた俺は再びテントの中へと戻ってきていた。結果は一位。いやあやっぱ親父との修行で体力ついてんのかね、余裕だった。

一位のバッジを胸につけて帰還すると既に走り終わっていた相模がスポーツドリンクを放り投げてきた。相模の胸にも一位のバッジが付けられている。流石サッカー部だな。

「お疲れさん」

「おう。流石だな相模」

「当たり前だろ。サッカー部がそこらの奴に負けられるかよ」

いや俺の隣走ってたのサッカー部だったけど。思いつき帰宅部に負けてたけど。

あ、だから何か絶望した表情で二位のバッジ貰ってたのか。

確かに帰宅部にサッカー部が負けたら立つ背が無いよなあ。

「お前に負けた中田めちやくちや落ち込んでたぞ」

「いやそれを俺に言われても」

「まあ更識は帰宅部にカウントしちやいけないよな。運動部にカウントしてもそのチートな運動神経なら間違いなく上位だろうし」

「買い被りすぎたって」

「どこの世界に一〇〇メートルを十秒フラットで走る帰宅部が居るんだよ」

え、此処にいますけど。

……やめろそんな『人外』のものを見るような眼でこつちを見るんじゃない!!

俺の場合は帰宅部って言っても家で更識流の柔術やってるし、一方通行のベクトル操作もあるからスペック的には完全に人外なんだろうが、そんなこと俺は決して認めないぞ。

「お、次走るのアイツじゃねえか」

手で日差しを作りグラウンドのほうを見る相模が言うので、俺もそちらに視線を向けていると。

「……うわ、」

思わず口に出してしまった俺は悪くない。

いやだつてさつき『俺の嫁たちから手を引け!!』的なことを堂々と言い放ちやがった非常に残念でアブナイ性格の持ち主、織村一華なのだから。

「アイツも黙つてればイケメンなのに、口を開いたらホントに残念な奴だよなあ」

相模が苦笑しているがそんな生易しい性格してねえぞアイツは。良いのは多分容姿ルックスだけ。中身はなんだかよくわからん奴だ。難しい問題をスラスラ解いていたかと思えば基礎を全く知らなかったり、運動もまた然り。

周りからも認められて『天才(災)』と称されている束とは違い、織村の場合は自称天才。はつきり言つて束とはレベルが違う。

以前俺と束がIS開発の設計図を二人で見ながら話をしていた時、アイツが我が物顔で話に割つて入ってきたことがあった。俺は何かと思つて話を聞いてみれば、どうやら織村も工学には強いのか設計図らしきものを見てペラペラと自慢気に束に向かってここがどうだのこれはああだの話し出したのだ。

あ、束はガン無視してたけどな。

それに気付いてか気付かずかは分からんが話し続けた織村は『まあ、つまる所』と一拍おいてから。

『束には俺の頭脳が必要なんだ』

……ええ。

今の束のガン無視をどう都合のいいように解釈したらそんな事が言えるんだ。もし俺が束にガン無視されたら完全に心が折れ……たりはしないな。だって束だし。未だに俺の部屋に隠しカメラとか平気で仕掛ける奴だし。

でもこれが姫無や簪だったら俺はもう生きていけない。姫無たちに無視されるとか、考えるだけで寒気がする。

話が逸れたが、まあつまり何が言いたいのかと言うとだ。

俺アイツのことはどうも好きになれん。

というか嫌いの部類に入るな。

小学校の頃まではこうまで露骨なナルシストじゃなかったと思うんだが（形無は中学まで織村の存在を気にも留めていないので覚えていない）、こんな俺毛嫌いされてたのか？

俺何かしたか？

「はあ……」

「どうしたよ更識。じじいみたいな溜め息ついて」

「午後からの一発目でアレと二人三脚しなきゃいけない俺の身にもなってくれ……」

「ああ……御愁傷様」

「……っーかこの組み合わせにしたのお前だろ相模」

「（ギクツ）……え？ いやその……待て待て待て!! 何だその高々と掲げられた右拳は!!」

「そーいや俺騎馬戦のときお前に死刑宣告してなあと思ってた」

「ストップストップ!! 一回落ち着こう更識、早まるなまだ間に合う!!」

「間に合わないから」

直後、テント内に鈍器で殴ったかのような鈍い打撃音が響いた。



さて、午前中の競技が全て終了したので現在俺たちはブルーシートの上で弁当タイムだ。

俺たち、というのは親父に母さん、姫無簪と千冬と束、それと一夏と箒たちである。今日は土曜日だから小学校も幼稚園も休みだからな、やっぱり賑やかなほうが楽しいし。

でも束、お前は今まで一体どこで何をしてたんだ？全く見当たらないかったんだが。

「しっかし流石だな形無！父さんは鼻が高いぞ!!」

「俺は親父のせいでテンション低いんだが……、母さんちゃんと親父を見張っててくれよ」

「あらあら。じゃああとでオハナシしないといけないわね」

「すまん形無父さんちよつとはしやぎすぎたかもしれん」

「いやちよつとじゃねえし」

母さんお手製のおにぎりを食べながら俺は小さく溜め息。いやおにぎりはすごい美味いんだけど親父の暴走が俺の中で味を台無しにしているんだ。

「……お兄ちゃん、これ……」

「ん？ ウインナーか」

隣に座っていた簪がおずおずと先端に均等に包丁を入れた赤いウインナー、俗に言うタコさんウインナーを箸で差し出してきた。

「ありがとな簪」

差し出されたウインナー。これは食べろと言っているんだろうから俺は素直に受け取ることにする。なんたって愛する（家族として）妹からのお願いだからな。断るわけがないじゃないか。

「それじゃ遠慮なく」

そして俺は、簪が箸でつまんだままのタコさんウインナーを手で取って自らの口に放り込んだ。

だって箸渡しは行儀悪いだろう？

「……………」



「……………ん？」

えーと、簪？

なんでそんな『嘘でしょう……………？』みたいな絶望した表情で俺を見てるんだ？

俺が何かマズイことしたのか……………？

因みに今の簪は右手で箸を持ってタコさんウインナーを何故か俺のほうへ近づけ、左手はそれに添えるように少し下に置かれている。

これは言うなれば『あーん』スタイルみたいなんだが……………

そういうことかあ!!

俺はバカか!!

どっかの鈍感主人公みたいなこととしてしまったが普通に考えれば分かるだろう!!

「かか簪!?! 悪かった、だからそんな顔しないでくれ!!」

既に目尻に涙を溜めていた簪を宥めるべく俺はあたふたと画策するが。

ふにつ

生暖かい何かが俺の頬に触れた。

……………何故だろう。

とてつもなく嫌な予感がするんだが。

恐る恐る俺がそちらに顔を向けてみれば。

「……………」

「えーと……………、姫無？」

顔は笑顔だが無言で俺の頬に玉子焼きをぐいぐい押し付けてくる姫無の姿が。

「兄さん、あーん」

「ひ、姫無？ なんでそんな笑顔で背後にどす黒いオーラを纏ってるんだ？」

「あーん、でしょ？」

敢えて言おう。

ガチで怖いと!!

六歳でこんな殺気混じりのオーラを出せるなんて姫無、恐ろしい子。いや、そんなこと言ってる場合じゃないな。右も左も箸片手に『あーん』なるものをさせようとしてくる我が妹たちに挟まれてしまつて完全に逃げ場がない。

いや、嬉しいか嬉しくないかつて聞かれたらそりや嬉しいって答えるさ。答えるけど、それはあくまで自宅内の話で、尚且つ姫無簪が普通の状態だったらの話だ。

俺はこんな冷や汗まみれの両手に花状態は望んでない。

「ほら、あーん」

玉子焼きをぐいぐいと尚も押し付けてくる姫無をまず満足させるべきだろうか。

……いや、そうしたら完全に簪が泣く。既に目は潤んでいてどこかのチワワみたいになってしまっているんだから、限界はかなり近いとみてまず間違いないだろう。

ならまずは簪のタコさんウインナーに手を出すべきか？

……いやそれもダメだ。

そうすると姫無の機嫌がますます悪くなる。最悪口を聞いてくれなくなるかもしれない。もし万が一そんな事態になれば俺は間違いなく寂しさに死ぬだろう。

どっちを取ってもバッドエンドしか見えてこないこんな状態を、一体誰が予想しただろうか。

まあ確かに昔バッドエンドしか見えなくなりそうだとか言った記憶はあるが、まさかそれが体育祭の昼休みに発生するとは夢にも思わなかったよホント。

しかしどうするよ。

どーすんの俺。

この状況を誰も傷付けずに打破するには、一体どうしたらいいんだ。

「形無」

すると、そんな状態の俺を見かねてか正面に座る千冬が声を掛けて

きた。

助けてくれるのかと思い俺は心底安堵した。流石は『いつメン』、仲間がピンチのときに必ず駆けつけてくれるヒーローよろしく、俺を窮地から救い出してくれるのはさながらホントにヒーローみたいだ。

だが。

「その、まあなんだ……このエビフライも、なかなかだぞ……？」

ずいつ、とエビフライを箸でつまんで俺のほうへと差し出してくる千冬。

……こいつ火に油どころか原油一斗缶まるごとぶち込みやがった。

「……千冬さん。兄さんは私の玉子焼きを食べるんだから邪魔しないでください」

「ほう。言うじゃないか姫無。だが形無はエビフライのほうが食べたそうだぞ？」

「……お兄ちゃんは……私のを、食べるの……」

ダメださらにカオスになってる。左右正面から箸を差し出されるなんて経験、きつと俺が世界初なんじゃないだろうか。

どうにかしてこの場を収めて脱出しなくては。俺は助けしてくれそうな人物を見回してみるが。

……ダメだまともな人種がない!!

親父はなんかニヤニヤしながらこつち見てるし母さんも傍観を決め込んでいるのか頬に手を当てニコニコ微笑んでいるだけ。箒も一夏も今のこいつらを止める術は持っていないだろうし。

畜生ここに俺の見方はいないのかよ!!

「かーくんかーくん」

と、そこに今まで黙々と箸を進めていた束がようやく口を開いた。彼女の弁当箱は既にからっぽになっており食材の類は残されていない。

ということとは、この『あーん』に参加されるということはないとい

うことになる。

「束……い」

俺は珍しく頼りになりそうな束を正直見直した。だからこそ、俺は束が次に言った言葉が一瞬理解できなかった。

「かーくんには食べ物なんかじゃなくて、私を食べて欲しいな」

……あ？

その言葉に俺だけでなく千冬の動きまでもが完全に止まる。姫無簪は意味が分かかっていないようで頭上に？マークを浮かべ首を傾げているが、親父たちはニヤニヤ顔がヒートアップしている。

俺が甘かった。

篠ノ之束は『天災』なんだ。

こいつは何の躊躇いもなく、炎の中に核ミサイルをぶち込むような人間だった。

「……はあ」

俺は完全に脱力し大きな溜め息を吐き出す。こうでもしないとやってられない。周りで姫無たちが頻りに何やら騒いでいるが、俺としては早く解放されたい一心なのだ。

結局、千冬、姫無、簪のを三つ同時に食べるということで一応この騒動は終息した。

そして、午後のからの一発目、二人三脚が始まろうとしている。

## #16 天災が見当たらないのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

弁当食べるのにあんなに冷や汗をかくななんて思ってもみなかった

さて、現在俺は騎馬戦のときと同じく入場ゲート裏で整列し、午後からの第一種目である『二人三脚』の開始を待っている。

もう言うまでもないのかもしれないが、うちの学校で行われる二人三脚が、そんじょそこらで行われているような二人三脚であるはずがない。

先ず、前提が間違っているのだ。

通常の二人三脚は二人の右足と左足を紐で縛り肩を組んだり背中に手を回すなり、協力して完走を目指すものだが、生憎うちはそんな生易しいものじゃない。

二人の足を縛っているのは、チタン製のロープ。つまり、人間程度の力では絶対に切れたりほどけたりすることのない紐だ。これにより、紐に関連したりタイヤは皆無となる。

次にコース。通常の二人三脚であればグラウンドに描かれたトラックを一周、というのが定石だが、うちは校外を走る。交通機関も利用する。ゴールは学校から凡そ三キロ離れたテーマパーク。昔俺と親父、まだ赤ん坊だった姫無の三人が行ったところだ。

そんなわけで最早ミニマラソンのような二人三脚。ゴールまでの道順は特に定められてはいない。更に交通機関の利用も自由。もちろんそこは自己負担だが。去年はタクシーを使う強者までいたような気がする。

とまあ色々言ったが、つまりこの二人三脚、めちゃくちゃ時間かか

るし体力的にもキツイってことだ。去年は最後のペアがゴールした時はスタートから二時間以上かかっていた。

当然それに比例して得られる点も高いんだが、はつきり言って割に合わない。

太陽が丁度真上を通過しようというこの昼休み明けの時間帯だ。暑い、ひたすらに暑い。ただ立ってるだけなのに汗が滲んでいる。

そんな過酷な二人三脚をだ。

「……………」

「なんだよじろじろこっち見るな馬野郎」

俺はこんな残念な奴と走らにやいかんのか。死ねる。相模に殺意を抱けるレベルだぞこれ、なんせ相模本人はのうのうとテント下で惰眠を貪ってやがるんだから。

「……………はあ」

今日一日でもう何度目になるかわからない溜め息が俺の口から漏れる。

もうこうなったら腹をくくるしかない。

「おい馬野郎」

「あん？」

馬野郎って前々から思ってたけど何処から来た渾名なんだ？

「俺の足を引つ張りやがったら承知しねえからな。精々必死に走れよ」

……………。

いや、うん。もう織村がこういう奴だったのは分かってるんだけどさ、何でこんなにも上から目線なんだ？俺はそこまで気にしないけど他の奴らはそうとは限らないんだからもう少し友好的になってもいいと思うんだが。

「いいか。俺はこの二人三脚、絶対に勝たねばならん理由があるんだ」

おいなんか饒舌に語り始めたぞ。

どうしようこれ内容聞いた方がいいのか？なんかそんな雰囲気な

んだが。

「その理由（わけ）……聞きたいか？」

聞きたくないです。

「ふん。お前ごときに教えるわけないだろ」

それは良かった。

こつちとしても好都合だ。二人三脚前から何も疲れることもないだろ。

「……だがまあ、一応お前にも関係なくはない話だからな、仕方ないから教えてやるか」

「いや俺は別に……」

「お前がどうしてもって言うからだぞ？心して聞け」

いやまずお前が人の話を聞けよ。

……ダメだコイツ全然人の話聞いてねえ。

「俺はな、決めてるんだ」

どうしよう話し始めちゃったぞこれもう収集つかねえよ。

「この二人三脚で一位を取ったら、彼女たちに嫁に来てもらおうってな」

「……………は？」

彼女たち———というのはいまあ間違いなく千冬と束のことだろうな。これまでも散々アプローチしてみただし。

だが、それが上手く行った試しはこれまで一度もないように思うんだ、うん。千冬には本気でイヤそうな顔をされ、束に至っては取り合おうともせずにガン無視。

なのにこいつも自信満々に言い放てるコイツ、織村のこの自信は一体どこから来ているんだ。

「俺の夢を叶えるため、そして彼女たちと一緒にいるため!! この二人三脚で俺は一位にならなければならんだ!!」

「……………言いたいことは分かった。いや分からんけど。でもさ、その嫁がどうとかって千冬たちには了承は得てんのか？」

もしも、千冬たちがそれを了承しているのなら俺は別に何も口出しするつもりはない。まあ、多分そんなもの取っていないんだろうけど。

「彼女たちは恥ずかしがりや、もといツンデレだからな。好きな相手の前じゃ素直になれないのさ」

なんてめでたい思考回路の持ち主だ。織村にはマイナス思考とかネガティブ思考とかそういうものが備わってはいないらしい。

「というわけで、足引つ張んじゃねえぞ馬野郎!!」

「はいはい……」

うんざりだ。

これから俺はこんな残念な人間とチタン製のロープで足を縛られて校外を走らなきゃいけないのか。

見せしめもいいとこだろ……。

『二人三脚に出場される選手の方々は北門に移動してください』

入場ゲート裏で待機していると体育祭の実行委員が拡声器を使って俺たちに指示して移動を促す。

うん。移動してから足縛ってくれる？

歩き辛くてしようがないんだがこれ。隣の奴は歩幅合わせようともしないし。

「ちよつ、歩幅合わせてくれよ」

「あん？ お前が俺に合わせればいいだろうが馬野郎」

「……………」

此処はキレてもいい場面なんだろうか。

俺滅多に怒ったりしないけど中々にフラストレーションが溜まってきているような気がする。

と、そうこうしているうちにスタート地点である学校の北門に到着。周りをザツと見渡せば二百人、百ペアくらいはいるだろうか。周囲は人でごった返している。この暑さと相まって熱気が半端ない。うわ俺の前に居るの相撲部だ。汗臭いからちよつと離れ……しまった織村の足に縛られたままだった。

『それでは、位置について——』

体育祭実行委員の制度がピストルを高々と掲げて耳を塞ぎ。

『よーい、——ドン!!』

パァン!! という小気味のいい発砲音とともに、総勢一〇〇ペアを



超える生徒たちが一斉にスタートした。俺たちもその流れに乗って走り出す、が。

「おい馬野郎出遅れてんじゃねえか!!」

「織村出す足が逆だ逆!!」

スタートダッシュは完全に失敗。最後尾のほうに一気に下がってしまった。

「チツ、馬野郎のせいで遅れちまったじゃねーか!!」

「お前のせいだよ!!」

いつまで足を逆にしてんだ。普通お互いに確認し合って進むだろうが。一人で走りだそうとしてるコイツを誰か止めてくれ。

そんな開始直後から仲間割れ寸前の俺と織村はやつとの思いで北門を出て、ゴール先であるテーマパークへと向かう。

だが今まで組んだこともないような人間同士、そんなに上手くいくはずもなく、壊れかけのロボットのようにかくかくとゆっくり進んでいく俺たち。

「このままじゃ一位どころかゴールできるかどうかも怪しいなあ……」

「おいブツブツ言っていないでちやっちやと走れよ!!」

「いやもう優勝は無理だと思うぞ? タクシーでも使えば話は別かもしれないが、それも誰かやつてるだろうしな」

「ぐぬぬ……こうなったら逆転のためにはアレを使うしかないか……」

なんか一人でぼやいてる織村は放っておくとして、これからどうしようか。

実質的に一位はほぼ無理だと言っているいいだろう。既に俺たちの周りには誰も居ないし、最後尾であることも間違いない。

だがこの二人三脚の配点は高い。一位は取れないまでも、なんとかして得点圏内でゴールしたいところだが。

となると。

(能力……使うしかないのかなあ……)

全く気乗りはしない。

隣の織村にバレることになるし広まれば面倒なことになる。  
しかし解決策がそれ以外に思いつかないのだから仕方ない。

(走るようにしてベクトルを操作すれば……いけるか?)

そんなことを考えている俺の隣で、織村がおもむろにズボンのポケットの中に手をつ込んだ。  
そこから取り出されたのは。

「携帯……?」

「ああ。これでへりを呼ぶ」

とんでもないことを言い出した。

「はあ!? それルール違反だぞ!!」

「はん、んなもんバレなきやいいんだよバレなきや」

得意気に言い張る織村だが、コイツは二人三脚における監視の厳しさを理解していない。スタートからゴールまでの区間の至るところに監視カメラと監視員が付き、生徒たちに不正がないよう目を光らせているのだ。

それを織村は何のことないと言うように携帯を取り出し、あまつさえへりを呼ぼうとしている。

——バカだろ。

「————あ、もしもしポールか。至急へりを一台用意して………つて何だお前ら!! 離せ、離せよ!!」

携帯を使用した瞬間、学校の教員数人が一気に織村を取り囲み、持っていた携帯を直ぐ様取り上げた。

「携帯の使用、及び交通機関以外の移動手段の使用はルール違反だ」

「ああ!? 知るか、俺には果たさねばならない約束があるんだよ!!」

両腕をガツチリとホルドされた状態で教員に食って掛かる織村に対し、教員たちは数秒目配せして。

「更識・織村組。ルール違反により失格とする」

「なっ!?!」

「はあ……」

俺は織村が携帯を取り出した時点で薄々こうなるんじゃないかと考えていたためそれほどの驚きやショックはないが、織村は信じられないものを見るかのように啞然としている。

「ふざけんな!! 失格なんて俺は認めねえぞ!!」

いやもう失格でいいよ。

これ以上織村と一緒に居ると頭が痛くなってくる。

「教員に反抗。これもまたルール違反だぞ織村」

「うるせえ!! 俺には待ってる人がいるんだ……あいつらのためにも、俺は一位でゴールしなくちゃならないんだよツ!!」

足をチタン製のロープで繋がれたままなので織村の叫びがダイレクトで俺の耳に届く。耳キーンてなるからやめてほしい。

「……(すっ)」

すると教員は無言で織村に向けて何かを差し出した。

トランプのようにも見えるその特徴は、真っ赤であるということ。

レッドカードだ。

意味は言うまでもない。退場である。

バツンツ、と俺と織村を繋いでいたロープを教員の一人が切り、織村を拘束して学校へと引きずっていく。

「なっ、離せ!!」

「織村、お前は一発退場だ。以後一切の競技への参加は認められんしグラウンドへの進入も禁止だからそのつもりでな。ああ、更識はクラスのテントに戻りなさい」

それだけ言って教員たちは織村と教官室のほうに消えていった。

「はあ、出る意味なかったじゃねえか……」

今日一番の溜め息を吐いて、俺はとぼとぼと待機場所であるテントへと戻っていった。

もう織村と関わらないようにしようと誓いながら。



二人三脚を失格になった俺はテントに戻って身体を休めることにした。当然そこで惰眠を貪っていた相模に多大なるダメージを与えてからだが。本当は身体よりも精神が疲れているんだが、このうだるような暑さのせいで体力とやる気も汗とともに外へ流れてしまっているかのようだ。

結局一位でゴールしたのは我らが赤組の三年生で、時間は三十分と少し。例年に比べれば速いタイムだ。

そんなこんなで残されている競技は残り一つ。体育祭の花形と言っても過言ではない、団別対抗リレーだ。

この競技だけは他の学校とルールは同じで、赤組と白組から選出された生徒各十二名がリレー方式でトラックを一周ずつ走るものだ。

例年この競技の盛り上がりは半端ではなく、しかも今年は稀に見る混戦でこれに勝った組が優勝だというから生徒たちの応援も最高潮に達しようとしている。

そんな中、テントから出た俺はというと。

「形無。大丈夫か？」

「まあ、二人三脚は参加してないも同然だからな。体力的には余裕だよ」

「そうか。ならいいんだが」

現在俺はトラックの内側で千冬と会話中だ。選手に選ばれてしまった俺たちは四〇〇メートルを走るわけだが、こんな大声援の中を走るの正直気が引ける。

盛り上がるのはいいことなんだが。

……親父も盛り上がっているのが問題だ。

「形無い!! 一位を取るんだ一位を!!」

お前どっからそんなもん持ってきたんだとツツコミたくなるような代物、チアリーダーとかがよく使うポンポンを上下に振る親父はリレー開始前から既に暴走モードに発展。

勘弁してくれ。

因みにこのリレーにも選出されていた織村がレッドカードで一発退場を食らってしまったため、相模が二回走ることに。御愁傷様だな、ほんと。

「む、どうやら始まるみたいだぞ」

「お、」

赤組の第一走者はサッカー部の相模だ。彼は二回走らなくてはならないためにこの走順に宛てられたんだが、スタートダッシュには持ってこいの人物だ。因みにもう一回はアンカーである。

『位置について、よーい——』

ドンッ!! という言葉と同時に赤組と白組の第一走者がスタートする。

流石は抜擢されるだけのことはあり、二人とも俊足だ。

「流石はサッカー部一の俊足。はえーなあ」

白組の第一走者もバスケット部のレギュラーだが、やはり相模のほうが速くトラック半周の時点で一メートル程の差をつけている。

「頑張れよ千冬」

「ああ、なんとしてもトップで帰ってくる」

赤組の第二走者は千冬。正直相模から千冬へのバトンリレーは最強だと思う。なんてったって千冬は女子で学校一の運動能力を持つてるからな。

「織斑!」

「任せろ!」

パシッ、と相模からのバトンを受け取った千冬は直ぐ様加速。みるみるうちに白組の女子を引き離していく。

これはもう赤組（俺たち）の圧勝だろう。

——そう思っていたんだが。

「……まじか」

相模と千冬が作ってくれた約半周もの差が、第十走者にバトンが渡る頃には差がなくなり、あろうことか白組に逆転を許してしまった。

第十一走者の俺は小さく溜め息。

「はあ……、これ一番プレッシャーかかる場面じゃないか？」

赤組のアンカーは相模だから滅多なことでは負けないと思うが、如何せん彼は既に一周走っている。その疲れを考慮するなら、ここは俺がもう一度逆転するのがベストだろう。

「じゃあない、頑張るか」

少しだけずるさせてもらおうか。バトンを受け取った俺は足の裏にかかるベクトルを操作、流石に原作の一方通行(アクセラレータ)のように弾丸の如く突っ込むみたいなのはせず、以下にも走っていきすという感じでスピードだけ上げている。うん、まあ五十メートル五秒フラットくらいかな。

「うお!!」

前方を走っていた白組の男子がそのあまりの速さに驚愕しているが、無理もない。こんなの普通の男子中学生が出せる速度じゃないからな。

あつという間に俺は白組を抜き去り、再び赤組が一位に。

「流石『究極の帰宅部』だな更識!!」

「お前次にそれ言ったら殴るぞ!!」

アンカーとしてスタンバっていた相模と軽口を叩き合いながらバトンパス。さっきの疲れを感じさせない走りを見せる相模がそのまま逃げ切って赤組が勝利し、総合優勝が決定した。

「お疲れさま」

「おう千冬。お疲れ」

走り終えた俺のところ千冬がやってきて労いの言葉を掛けてくれた。

「しかしまあなんだな。形無の運動能力は最早人外だな」

「お前には言われたくないんだけど」

——ん？

そういえば。

「束はどうしたんだ？」

「二人三脚が始まるまでは一緒にいたんだが、また日射病で保健室にでも籠ってるんじゃないか？」



「んっん」

千冬の予想通り、束は保健室の一番端のベッドの上に居た。

だが具合が悪く寝込んでいるとかいうことではなく、寧ろ今の束には一種の達成感に満ちた表情を浮かべている。

束の視線の先には、空間投影式のディスプレイ。その画面の中央に表示されているのは『complete』の文字。

束は『うくん』と軽く背筋を伸ばして。

「できたっ♪」

## #17 ISの完成はその時点でフラグ

前回のあらすじ

体育祭は散々だった

体育祭が終わった次の日、つまり日曜日。俺と千冬は束に呼び出されて朝早くから篠ノ之道場へ足を運んでいた。昨日の疲れからかまだ睡魔が俺を誘惑してくるがなんとか振り払い、道場内へと足を踏み入れる。

「お、形無君に千冬ちゃん。おはよう」

「おはようございます柳韻さん。相変わらず早いですね」

「はは。道場師範たるもの毎朝の道場掃除は日課みたいなものだからね。もう当たり前になってるよ」

この人は束、箒の父親でありこの篠ノ之道場の師範も務める篠ノ之柳韻さんだ。俺も小学校のころから稽古をつけてもらったりと色々お世話になっている。

……中学で帰宅部だということは伝えていない。

「どうだい形無くん。また稽古しようじゃないか」

俺の専門は更識流の柔術で、それは柳韻さんも当然知っているがどうやら俺は剣の筋がなかなか良いらしく、事あるごとにこうして稽古に誘われている。

誘って貰えるのは光栄なんだが、この柳韻さん。たとえ子供であっても全くと言って言いほど容赦がない。当時小三だった俺は柳韻さんの竹刀に叩きのめされたのは苦い思い出だ。あの時はまだ超能力が使えなかったし。

「いやあ、折角ですけど今日は束に呼ばれて来たので遠慮しておきます」

「ああ、そうだったね」

思い出したように言う柳韻さんは一拍おいて。



「……束が少しずつだが他人に心を開くようになってきたのは君たちのお陰だ。これからも、束のことをよろしく頼むよ」

「……はい」

「分かりました」

俺と千冬は柳韻さんの言葉に確かに頷き、道場を後にして束の私室へと向かう。

「束の部屋に来るなんて久しぶりだな」

「そうなのか？ 私はしょっちゅう来ているが」

「あのな、千冬は女で俺は男だ。俺は気にしないけど普通この年頃の男は頻繁に女の部屋に出入りしたりはしないって」

「むう、そういうものか？」

「そういうもんだ」

「なら形無は束の部屋に入るのに緊張とかしているのか？」

「いんや全然。自分ん家となんら変わらん心境だ」

「ならいいじゃないか」

「俺ん家に盗聴器とか仕掛ける奴の家に進んで来ようとはしないだろ……」

だいぶ数は少なくなったが、未だに束は俺の部屋に盗聴器などを仕掛けている。一体どうやって毎回仕掛けているのか非常に気になるところだが問い詰めたところではぐらかされるのは目に見えているので、最近では反論の余地なく拳骨を束の頭にお見舞いしているが。

「つと、ここのだな」

階段を上がって一番奥の部屋。ドアのやや上に『束』というニンジン型のネームプレートが掛けられた部屋の前に到着した俺と千冬は、数回のノックをしたあとドアノブを回し――

「かーくーん!!」

――ドアを開けた瞬間に、サツと身を屈めた。

「ぶへっ!!」

「うわっ!」

俺が身を屈めて飛び掛かってきた束を避けたために後ろに居た千冬と束が正面衝突。そのまま束が押し倒すような形で廊下にバタリ

と勢いそのままに倒れ込んだ。

「ひどいよかーくん!! 東さんの愛をきちんと受け止めてよ!!」

「断固として断る」

千冬を下敷きにしたままの東が顔だけをこっちに向けて何やら言ってくるが、俺は押し潰されるのはゴメンだ。

「東! さっさと降りろ!!」

「ごっつんっ!!」

千冬の拳骨が東の頭部に振り下ろされた。

「うう、ちーちゃんの愛が痛い〜」

ぶたれた箇所を両手で擦りながら涙目で嘆く東を千冬は見事にスルーして、俺と共に部屋に入っていく。

「で、今日私たちを態々呼んだ理由はなんなんだ?」

ピンクで統一されたなんともファンシーな部屋の、これまたファンシーなこもこベッドに腰を下ろした千冬が早速今日の本題になるであろう話題を切り出した。

これまでも何度かこうして俺と千冬が東の部屋に呼ばれたことはあったが、どれも凡人には理解できないようなびっくり発明品を見せられ自慢気に紹介されるという類のものだった。

今回もそういったものである可能性は高いが、俺は心の何処かであり知れぬ不安を感じていた。

——もしかして、ISが完成してしまったんじゃないだろうか。

その線である可能性は高い、というかほぼ間違いない気がする。だとするなら非常にマズイことになる。

いや、前々から何れそうなるであろうことは原作知識から理解していたが、いざ目の前に迫られてみるとやはり不安が大きい。

だって女尊男卑なんだぜ? 俺これから社会的地位が急降下していくんだぜ?

「ふっふーん」

そんな俺の心情など全く気にかけてない千冬は立ち上がってふふんと鼻を鳴らして。

「ついに完成したんだよ！ あれが!!」

あれ、とは最早聞くまでもない。束が幼稚園の時から構想を練り画面に出力し、何年もの歳月を経て製作した彼女の大発明。

「名付けてインフィニット・ストラトス!!」

……ああ。

やっぱり予想通りだったか。

ばばーん!! という文字が束の背後に見えるような気がする。束が手元のディスプレイを叩くと、空間投影式の画面が頭上に現れた。

「これは……束と形無が二人で話し合っていたものか!？」

「そうだよちーちゃん。束さんとかーくんの合作、謂わばこれは愛の結晶!!」

「いや違うからな?」

大体、合作なんて言っているが九割九分九厘は束の頭脳が造り出したものだ。俺はそれに少し口添えをしただけ。合作なんて大したこととはしていない。

「……これは一体どういう代物なんだ?」

ああ、そうか。

千冬は俺たちの会話に混ぜっこなかった（ハイレベルすぎて混ぜっこしてこれなかったというのが正しい）から、これが一体どんな物なのかをいまいち解っていないんだ。

「これはねちーちゃん。『IS』ってものだよ!」

「IS……?」

「そう。正式名称はさっき言ったけど『インフィニット・ストラトス』。この束さんの頭脳を総動員して開発した、宇宙空間での活動を視野に入れたマルチフォーム・スーツなんだよ」

誇らしげに言う束からは『すごいでしょ! 誉めて誉めて!!』というようなオーラがさつきから全開だ。

いや確かにすごい。

こんな代物、中学生が作れるレベルを遥かに超えているし、実際原

作ではこれを発端として世界の軍事バランスは崩壊したのだ。

「……そんなものを作ってどうしようというのだ？」

ふむ。千冬の言うことも最もだ。

実際これが開発されて男からしたら良いことなんて一つもないしな。

だけど何年も束と過ごし、僅かではあってもこのISの開発に携わった俺から言わせて貰えば、開発した理由なんて言うまでもないし、確認するまでもない。

認めて欲しかったんだ。

周囲の人々から、認めて欲しかったんだよ束は。

天才であるが故の孤独というものなのだろうか、俺みたいな凡人にはきっと完全に理解することは出来ないだろうけど、それでも大事な仲間がどんな想いでコレを作っていたのかが解らないほど、俺はバカじゃない。

束はその頭の良さ故に周りを突き放した。自ら。

それは同年代の子供たちがバカっぽくて一緒に居る気になれなかったというのも理由の一つに確かにあるが、本当は怖かったんだ。周囲から拒絶されるのが。自分の頭脳の異常さは自身もよく解っている。だからこそ、拒絶されるのを恐れた。

そして結論に至る。

拒絶されるのが怖いのなら、自分から拒絶してしまおう。

そうすれば他人のせいで自分が傷つくことはないのだから。

そんな考えを持っていた束の前に現れたのが、当時幼稚園児だった俺だ。

俺の頭の良さはあの時の束にとっては衝撃的だったらしい。なにせ異常だと思っていた自分の理論に付いてこれる幼稚園児が居たんだからな。

そこで束の指針は大きく変わる。

周囲を突放すのではなく、認めさせよう。

自分の存在を無視できなくなるくらいの発明をして、世間に認められよう。

そういった考えの結晶と言えるのがこのISなのであり、決して俺と束の愛の結晶なんかではない。

「すごいな……」

主なスペックを目にした千冬は思わずそう漏らす。

宇宙空間での活動を想定というが、間違いなくこれは地球上で最強の兵器になるであろうことに彼女も気付いたのだろう。基本性能、特性、装備、活動時間。どれをとっても現存するどの戦略兵器よりも上だ。それも圧倒的に。

「……で？ 完成したはいいがこれからどうするんだ？ まさか完成させて終わり、じゃないんだろう？」

「あつたりまえだよかーくん!! 直ぐに日本政府とかにこのこと言っただんだよ!!」

「それで？」

「バカバカしいって一蹴された……」

当然といえば当然の反応だな。

いきなり宇宙空間で使用できる飛行パワードスーツを女子中学生が開発しましたなんて一報を入れて信じるほうがどうかしている。

「まあそれが普通の反応だな」

「だからね」

………なんだかすごく嫌な予感がするんだが。

「これから日本に発射されるミサイルの雨を、このISを使って迎撃させようと考えたの」

あ？ まさかのこのタイミングで？

## #18 勘違いはその時点でフラグ

前回のあらすじ

まさかの爆弾発言に俺、絶句

東は俺と千冬の目の前で、とんでもない事を言い出した。

「私のISがすごいってことを証明するために、日本を射程圏内とする世界のミサイル基地のコンピュータを一齐にハッキングしたの」  
「…………え？」

なんとか硬直から立ち直った俺は冷や汗をだらだらと流しながら東のほうを見る。彼女からは『してやったり』的な悪どい笑みが零れているが、そんな悠長なことをしている場合じゃないだろう。

「とうかこれってまさか『白騎士事件』か？ 白騎士事件ってISの発表から一ヶ月くらい後だったと記憶してたんだが、どうにもイレギュラー因子（俺）がいるせいで少なからず原作に影響を及ぼしているらしい。」

「た、東！ 何てことをしているんだお前はっ!!」

俺に遅れること数十秒、ようやく復活した千冬が発した第一声はそれだった。無理もない。この話が本当だとしたら、世界各国の軍事基地から発射された数千発ものミサイルが日本に向かってくるというのだから。

「今すぐに止める東!!」

「うーん、それがもう無理なんだよちーちゃん」

「なっ!？」

「だって、もうミサイルは発射されちゃってるんだもん」

流石といふかなんというか、この天災は行動が異常に早い。これがISの価値を見せつけるためのマッチポンプだというなら、やっぱりこの後の展開は原作の通りに進んでいくんだろうか。

「――場所は？」

俺はとりあえず、ミサイルの着弾地点として設定されている場所を東から聞くことに。

マッチポンプならば、東が日本各地に着弾地点を分けるようなことはしない筈だ。出来るだけ派手に、かつISがどれほど優れているのかを世界に見せつけるためには、着弾地点は一ヶ所に指定されているはず。

「ミサイルの着弾地点に指定したのはどこなんだ？」

「国会だよ」

サラツとなんとはなしに東は言ったが、それを聞いた千冬は血の気が引いていくかのように顔色が悪くなっていった。俺はなんとなく予想はついていたので千冬みたいに驚きはしないが、それでも目の前にいる少女の規格外さを改めて思い知らされる。

僅か十四歳、中学二年生の少女が全世界の軍事基地のコンピュータを手玉に取り、あろうことか日本の中心である国会に向けてミサイルまで発射させてしまうのだから、異常なまでのその手腕に舌を巻くばかりだ。

……おっと。

そんな悠長なことを考えている場合じゃなかった。このままじゃ日本の中心地が消し飛ぶことになってしまう。比喻でもなんでもなく、リアルに。

「ど、どうするんだ!? このままじゃミサイルが日本に……!!」

「大丈夫だよーちゃん。そのために、このISがあるんだから」

言つて東は空間投影式のディスプレイを見ながらカタカタとキーを叩き、何やら新しいフォルダを呼び寄せる。

――ああ、成程。

アレを呼び出すつもりなんだな。

IS。東が数年の歳月を掛けて製作したIS、その雛型にして第一世代型

「ちーちゃん、これに乗ってミサイルを迎撃しちゃって！」

「なあっ!？」

突然の迎撃宣言に驚愕する千冬だが、直後に現れたISを目にして息を呑んだ。

「……………これは……………」

「束さんが丹精込めて造った第一世代型IS、『白騎士』」

白騎士。

そう呼ばれたその機体は、白すぎるほどに純白の機体だった。

宇宙空間での活動を想定していたためかやや無骨なナリをしているが、これからフィッティングなどを経てよりフォルムはシャープになつていくんだらう。

「さあさあちーちゃん。この白騎士に乗ってミサイルをぶつ飛ばしちゃおう！」

「そんなこと出来るわけがないだろうっ!？」

うん。まあ千冬の言うことも最だな。

いきなり見たこともないような機体出されてハイ乗ってミサイルを撃墜してくださいって、これなんて無理ゲー状態だよ。俺だったらそんな自殺行為は絶対御免だ。

だけど。

これは千冬が乗らないといけない機体だしなあ。ていうか千冬が乗らないと日本が終わる。俺は男だからISには乗れないし、束が乗るとは思えない。

「千冬」

「形無……………」

「これは、お前にしか出来ないことなんだ」

「形無にも出来るだろう!？」

「それは……………」

「無理なんだよ。ちーちゃん」

俺の言葉を次いで、束が変わりに話し出した。

「どういうわけか、このISは女性にしか動かせないんだよね」

「女性だけ……………」

「そう。だから残念だけど、かーくんにはこの白騎士に乗ることはできないんだよ」



「……そういうことだ」

実際に男性がISに乗れないということが分かったのは完成間近になってからだ。起動実験という名目でまだ未完成ながらもある程度の性能は既に出上がっていた白騎士を起動させようと俺が機体に触れても、何も起こらなかった。束が触れると通常通り起動したんだが、やはり俺は何度触れても機体はうんともすんとも言ってくれなかった。

やっぱり男である俺にはISの適性は備わっていないらしい。

というわけで、日本を守るためには千冬がこの『白騎士』に乗るしかないのだ。

本当なら千冬をそんな危険地帯になんて行かせたくないし、出来ることなら俺だけでミサイルを撃墜してやりたい。

でもそれは俺の我が侂であるし、何より束のISを世間に認めさせるためにはISに乗れる千冬が大々的に活躍しなくてはならない。

心苦しいが、千冬に頑張ってもらおうしかない。

「千冬……」

「……分かった」

暫しの沈黙のあと、覚悟を決めたらしい千冬が一言呟く。その表情に戸惑いはない。

「束。コレはどうやって装着するんだ」

「これはちーちゃんが乗ることを想定して造ってあるからフィッティングまではすぐに出来るよ。あとはちーちゃんの思う通りにこの白騎士が動いてくれる」

「ふむ。よし……」

瞳を閉じ、白騎士へと手を伸ばす。そしてその手が白騎士の機体に触れた瞬間、目映い光とともに千冬は世界で最初のIS、『白騎士』を身に纏った。

「どう？　ちーちゃん」

「……まるで生身のようだ。こんなにも動きがスムーズなものなのか」

「まだまだ改良の余地はあるけど、ミサイルを叩き落とすくらいなら

造作もない筈だよ」

流星は織斑千冬というべきか。普通の人間が初めてISに乗ったらこんなふうにいきなり自分の手足のように動かすことなど不可能だろう。

「行けそうか?」

「やってみなければ分からないが、最善は尽くすつもりだ」

手を開いたり閉じたりして感覚を確かめながら言う千冬からは、隠しているつもりのようなだがやはり僅かな不安感を感じとれる。

後の『ブリュンヒルデ』と言っても今はまだ十四歳の中学二年生。IS搭乗時間0の状態でいきなり危険な行為をしようとしているんだから無理もない。

だが、そんな危険地帯に千冬たった一人で行かせるほど俺は腰抜けではないし、最初から覚悟は決めていた。

「俺も行く」

「「え?」」

俺のいきなりの発言に、千冬だけでなく束までもが素っ頓狂な声を上げた。

「か、かーくん? かーくんはISに乗れないんだよ?」

「わかってる」

「連れていけるわけがないだろう!?!」

「大丈夫だ」

はあ。本当なら、千冬や束にだってこの超能力のことは黙っておきたかった。そうすることが俺にとっても彼女たちにとっても最善だと思っていたからだ。超能力なんてオカルト紛いのものを誰が信じ、言ったところで一笑に臥されるのがオチだ。だから俺は本当に必要なとき以外このチカラを使うつもりなんてないし、二人にだって話すつもりはない。

……そう、思ってたんだけどなあ。

千冬は俺と束を信じてISに乗ってくれた。もしかしたら死ぬかもしれない位危険な場所へ、恐怖を押し殺してそれでも行くと言ってくれたのだ。

なら、俺だけのうのうと待っているわけにはいかないだろう。

本質の部分で行かないほうが良いというのはわかっている。原作通りだとしたら二千発以上のミサイルを千冬は撃墜し、無事に帰還するだろう。マツチポンプなのだから、束のハッキングしたカメラが俺の能力を捉えて全世界に中継してしまうかもしれない。

だからどうした。

大事な仲間が戦おうとしているんだ。高見の見物なんぞしてられない。

幸か不幸か、俺にはISにも引けを取らない超能力がある。核ミサイルをモロに受けようが身体には傷一つつかないような代物だ。普通のミサイル如きでやられることはないだろう。

大体、あの時この二人に関わった時点で原作と無縁な生活なんて無理だと分かっていたじゃないか。なのに二人に能力を隠して生活しようなんて、何を中途半端なことをしてるんだ俺は。

決めたんذار。

だったら、貫き通せ。

「形無、大丈夫とは一体どういう意味だ？」

訝しげに尋ねてくる千冬。束も流星に理解出来ないのか首を傾げて俺の返答を待っているようだ。

そんな二人に、俺は先ほどまでどうって変わった笑みを浮かべて言った。

「俺ってちよつと特殊なんだよ」



「……それにしても未だに信じ難いな」

「何がだ？」

「形無が超能力者だってことだ!!」

現在地点、国会上空。

東が言うにはあと十分もすればミサイルの雨がこの国会を襲うようだ。東はこれを回線をハッキングして全世界に中継しているため全世界が知っており、また東京都近辺の人間たちは軒並み避難している。

千冬は白騎士を纏った状態で上空に待機し、俺はというとオペラ座の怪人のような仮面をつけて真つ黒なスーツを身に纏っている。

……うん、何故にこうなった。

正体がバレると面倒だというのはわかる。だからってなんで東が取り出した変装グッズが仮面で千冬がスーツをいやに推してくるんだ。

因みに俺は飛べないので国会の正門前に立っている。

「ほんとはもつと早く言わないといけなかったんだろうけどな」

「……いいさ。形無も私たちを信用して話してくれたのだろうか？」

「……ああ」

「ならば私たちも形無を信じるさ。私の背中、預けるぞ」

そう言つて微笑む千冬。嗚呼、仲間つてこういうことを言うのか。互いに信頼できる、命を預けることができる。

——そんな人たちに巡り会えて、きっと俺は幸せだ。

だから、千冬を全力でサポートする。間違つても、ミサイルに撃墜なんてされてしまわないように。

「時間だ形無……くるぞ!!」

「ああー」

東が設定したミサイルの到着時刻数分前に達し、俺と千冬は揃つて空を見上げる。

すると現れたのは数えきれないほどのミサイルの雨。予想はしてたけど生で見るとこれ確実に東京どころか日本が消滅できるレベルだぞこれ……。

「これは東のISを世間に認めさせるってのが目的だ。だから千冬、お前が頑張ってミサイルを撃墜しろ」

俺はベクトル操作によって一気に国会の屋根まで飛び上がり、

「お前が危ないようなら俺もサポートするから」

「了解！」

千冬は近接型ブレードを展開し、ミサイルへと突き進んでいった。

……うわ、すげ。

アレって本当に第一世代型か？ 千冬が乗るとなんかもう第三世代くらいの機動性がありそうな感じなんだけど。

あれってハイパーセンサーついてんのか？ ていうかもし備わってないのにあの動きができるってんなら俺はもう千冬を人間だとは思わないぞ。

目の前で次々とミサイルを迎撃していく千冬的能力に俺は感嘆した。IS搭乗時間が0でこれだけ乗りこなせるって流石は原作キャラだな。圧倒的だ。

「ッ、形無!!」

なんて思っていたら一発のミサイルを撃墜し損ねたらしく真っ直ぐこつちに向かってきている。

これ着弾したら間違いないく首相官邸とか跡形もないサイズだな。

「任せろっ」

俺は演算を開始、一方通行（アクセラレータ）のベクトル操作、中でも基本的な『反射』を設定する。

更に足にかかるベクトルを操作することで上空高く飛び上がり、ミサイルのもとへと飛び込んだ。

グシャ、つと。

俺の身体に触れるか触れないかというところで空き缶を踏み潰すかのようにミサイルが先端からひしゃげ、その場で爆発した。

遠目で見ていた千冬が驚いているのがこの位置からでも見て取れる。

そのまま落下した俺はタンツと国会の屋根に着地し、千冬が迎撃に間に合わなかったミサイルをことごとく落していく。とは言っても

数にして凡そ五百、残りの二千発近くのミサイルは千冬がたった一人で撃ち落としてしまった。幸いなことに周囲の人間が避難していたため破片などで負傷するような人間もいない。

「……………ん？」

上空を眺めていた俺は新たにやってくる飛行物体を見つけ目（と言っても仮面を付けているので視界は良好ではないが）を細めてそれを注意深く見つめる。

「あれは……………ミサイルじゃないな。てことは……………」

東が全世界に中継してるこの映像を見て『白騎士』を捕獲、もしくは撃破しようと考えた各国が送り込んできた軍事兵器か。

戦闘機なんか送り込みやがって此処で戦争でも始めようってのか？

まあ、こんな鮮烈な映像見せられて平常でいられる訳がないってのは分かるけど。ISの存在を認めてしまったらこれまでの軍事兵器なんて足元にすら及ばないからな。

「千冬。あれも撃墜していいぞ」

「人が乗ってるだろう？」

「お前なら死者を出さずに機体だけを破壊することもできるだろう？」

「……………ふむ。やってみるか」

「そうしてくれ。……………って、え？」

何故か白騎士だけではなく、俺にまで戦闘機やらが接近してきている。

……………ああ、まさか俺もISに載つてると思われてんのか？ いやいや確かにミサイル迎撃してたけど流石に仮面つけて黒スーツ着てる奴がIS装着してるように見えるか？

普通は見えないだろ……………。

「はあ……………」

つついっ溜息が口、もとい仮面から漏れる。

此処までできてまさか溜息が漏れることになろうとは思っていなかったが、向かって来てしまっているものは仕方ない。捕獲なんてさ

れるのはまっぴら御免なので、ここはちよつと痛い目を見て貰うことにしよう。

正当防衛だよ。せいとーぼうえー。

タンツ、と屋根を蹴って俺は戦闘機正面へと飛び上がる。

「!?」

操縦者がなにやら仰天し慌てふためいているが、そんなことはお構いなしに俺は機体を力の限り殴り付けた。

それだけで戦闘機はベコベコとひしゃげ、爆発。操縦者は一早くパラシュートで脱出したようだ。

「さあて、」

上空に視認できる多くの戦闘機に目を向けて、俺は小さく口元を釣り上げる。

「わざわざ演出ゴクロー。華々しく散らせてやるから感謝しろ」

……やべ、なんか思考が若干一方通行（アクセラレータ）化してきた。

この日、ISは世界中に嫌でもその存在を認めさせ、同時に『白騎士』と『黒執事』という名が知れ渡ることになった。

……『黒執事』？

## #19 天災の失踪はその時点でフラグ

前回のあらすじ

白騎士と共に『黒執事』の名が知れ渡ること……orz

あの事件———というか千冬と俺が計二千五百発近くのミサイルとアメリカを始めとする各国が送り込んできた軍事兵器を片っ端から轟沈させた『白騎士事件』………もとい『黒白(こくびやく)事件』が起きた日、東の開発、製作したISは全世界にその名を轟かせることとなった。

国会上空で次々にミサイルを迎撃する二人の映像は東がハツキングした衛星によつて生中継され、その映像は各国に想像以上の衝撃を与えたようだ。

それもその筈、従来の軍事兵器を凌駕するその圧倒的な性能が明らかになったからだ。

そんなISが世界の目に晒されて、おいそれと平穏がやってくるわけもなく。

宇宙空間での活動を想定して開発されたISは宇宙進出よりも寧ろ飛行パワードスーツとしての軍事的な活用を唱えられるようになり、まず世界的な条約が締結されることとなった。

アラスカ条約。

正式名称『IS運用協定』。

IS条約とも呼ばれるこの条約は、軍事運用が可能となったISの取引を規制すると同時に、ISの技術を独占的に保有することとなっていた日本への情報開示とその共有を定めた協定だ。



始め日本はこの条約の締結に異論を唱えようとしていたらしいが、某ヤクザ国とヨーロッパ諸国に圧迫されて結局締結することに。

そして『黒白事件』から約一年半後、このアラスカ条約に基づいて設立されたのが、『I S 学園』だ。

条約に基づき日本に設立されたこの I S 学園はその名の通り I S 操縦者育成用の特殊国立高等学校で、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約のもとで存在している。

つまりこの I S 学園に在籍、又は関係している以上、その個人に対して国家は手出しが出来ないというわけだ。

ただこの規約に各国は反発しているという訳ではなく、他国との I S の比較や新技術の試験に適しているため、そういう意味では重宝されていたりもする。

そんな I S 学園が完成し、いざ来年から開校となったのは俺がまだ中三の冬だった。世間では既に女性にしか起動させることができない I S のせいで男女のパワーバランスが逆転し、徐々に女尊男卑の世界へと成りつつある今日この頃。

俺は平凡な受験生活を送っていた。

女生徒の間では既に I S に関する事前授業などが行われるようになり、最近発表された I S 学園の倍率はなんと前代未聞の一万倍超え。

定員が二百人であるのに対して志望者が二百万人を超えるほどの超難関だ。

そしてその I S 学園を受験するための条件は I S の適性があること。

そして、『女性』であるということ。

というわけで世界的に注目されている I S だが、我々男子からしたら特に興味を持つということもなく、肅々と受験勉強に取り組んでいる。

だってそうだろう。乗れないものに興味を持つことは難しい。どれだけ想像しようが、それが決して実現されることはないんだから。

始めは憧れを抱いていた男子も居なかったわけではないが、それも I S が発表されて一年以上経った今ではすっかりいなくなってしまう。

勿論それは男子である俺も例外ではなく、迫る受験日に向けて目下勉強中なのだ。

「形無」

「ん？ どうした千冬」

現在四時間目、科目は受験も近いということでも自習になり、各々が机をくっ付けて総力戦で苦手科目を勉強したりする者達もいれば、一人で黙々と勉強を進めるものたちもいたりと思いきいの勉強方で自習している。

そんな中、俺と机をくっ付けて化学を勉強していた千冬がふいに口を開いた。

「形無は受験先、決めたのか？」

「ああ。学費が安くて就職のいい藍越学園を受けるつもりだけど」

「……I S 学園を受験しようとは思わないのか？」

「男の俺が受けられるわけないだろ？」

俺は実家からの交通も良くて学費も安い、おまけに就職先も多い藍越学園を受験しようとしている。確か原作で一夏が受けようとした学校だ。ここ、確かに凄く学費が安い。

俺としては姫無や簪の学費を払わなくてはいけない親父たちに余り迷惑を掛けないように、という考えからの決断だ。

「しかし、アレだけの力があるんなら……」

「俺はあの能力を見せびらかすつもりなんてないよ」

千冬は I S 学園を受験する。簡易適性試験においても高い評価を受けていた千冬なら、倍率一万倍だろうが落ちることはないだろう。

なんてったってあの白騎士を操縦していたんだしな。

でも俺は違う。

『黒白事件』の時だって超能力を使っただけで I S に乗っていたわけではない。

……世間ではスーツ型 I S なんて噂されてるけど。

とにかく、俺がIS学園になんて行けるわけがないんだ。というかあんなフラグまみれの場所に行きたくないんだ。

「しかしだな……」

「はいはい。この話はこれで終わり。これ以上喋っていると他の迷惑になるだろ」

「むう……」

そんな頬を膨らませてこっちを見つめてきたってダメだからな。ちよつとドキツとしたけど、それとこれとは別問題だ。

「そーいや束つてどうしてるんだ？」

「私には喋るなど言っておいてお前は普通に喋るのか……。さあな、もともとアイツは自由奔放というかなんというか、掴み所のない奴だからなあ。三週間程前にやることがあると行って家を飛び出したつきり帰ってきていないそーだ」

「そーか……。まあ束なら心配するだけ無駄だろうけど」

中学三年に上がった俺たちは三人とも同じクラスになった。というか束が何か細工を施したら詳しいんだが、詳しいことを聞いたとしてもはぐらかされるだけで明確な答えは返ってこなかった。

……担任の女の先生がガクガクと震えていた理由が是非とも知りたかつたんだが。

だがそんな束も今や世界的な天才科学者。

ISの発表以降情報開示を求める各国の連絡は後を絶たず、篠ノ之道場にまで政府の人間が押し寄せるほどだ。

束は他人との関わりを嫌うのでほぼ柳韻さんが対応していた。

「つたく、どこいったんだか」

そんな天才が失踪してもう三週間になる。千冬が言うにはなにやらやることあるらしくそのために色々と画策しているらしいが、一体何をしているのやら。

なんて思っていると。

不意に、教室に備え付けられたテレビの電源が点いた。

「なんだ……？」

訝しげに点灯した画面を見つめる俺と千冬。モニターは数秒の砂

嵐の後、パツと画面が切り替わった。

「ッ!?!」

「なあッ!?!」

俺と千冬は驚愕と同時に目を見張る。

画面の先に、見知った顔が映っていたからだ。

それと同時に俄に騒がしくなる教室内。

「……何してんだ、アイツは……」

画面に映っていたのは。

『やつほー。束さんだよー、かーくんちーちゃん、見てるー?』

失踪したはずの、篠ノ之束だった。

というか何故に校内放送に束が出てるんだ。

『あ、ちなみにこの映像は全世界に同時中継されてるよー』

マジかよ。

またハッキングしやがったな。

『今日は全世界に発表しなければならぬ重大なニュースがあるから、それを教えてあげようと思ってね』

ニュース? 一体なんだと言うんだ。つーかよく衛星の監視を掻い潜ってハッキングしたよな束。もう束の手腕を上回る国はないんじゃないだろうか。

「なんのこことか知ってるか形無?」

「いんや。全く見当がつかない」

『当たり前だよちーちゃん。だってまだ誰にも言っていないんだもん』

そんな俺たちの会話をまるで聞いているかのように、画面越しの束は俺たちの会話に割り込んできた。他の人がみてたらきつと意味不明だろうな。

『ふふーん。じゃあ発表しちやおうかな』

何やら得意げな束がピンツと人差し指を立てて。

『なんと!! あの「黒白事件」の黒執事が誰なのか判明したんだよ!!』  
………

おい。まさかな、幾らなんでも……

『彼の名前は更識形無。世界初の男性IS操縦者!!』

「束ええええッ!!」

静まり返る教室で、俺は血の涙を流して咆哮した。

いかにも『してやったり』的な笑顔を浮かべる束。隣で唾然とする千冬。

一体何のつもりなんだ。俺の平穩をぶち壊して楽しいのか!?

……やめろクラスの皆こつちを見るんじゃない!!

ていうかまさかこんな事するために三週間も行方を晦ませてたつてのか。

愕然とする俺に与えられた『初の男性IS操縦者』という全くもつて欲しくない称号。

しかも渾名は『黒執事』。

そして、この日俺の辞書から『平穩』という単語が消え失せた。

## #20 IS学園への入学はその時点でフラグ

前回のあらすじ

俺の手から平穩が逃げていきました

「……………」

「……（ジッツ）」

「……（ジッツ）」

「……（ジッツ）」

どうしてこうなった。

俺が居る一年一組の教室。そこに居心地悪そうにして席に着く俺を、他のクラスメイトが食い入るように見つめているのが背中越しからも伝わってくる。

「……はあ、」

最早お決まりになりつつある溜め息を一つ吐き、俺は天井を見上げた。

—— 本当、どうしてこうなった。



時は少し遡り、例の男性IS操縦者発覚という全世界が驚くニュースを束が流したその日の夕方。俺と千冬は再び束の私室へと足を運んでいた。

腕を組んで無言で椅子にかけた俺の正面には、正座させられた状態の天災、篠ノ之束の姿。

「……で？ 何か言い残すことはあるか東」

「ちよっ!? それこれから東さん殺されちゃうみたいな台詞だよかーくん?！」

「よく分かってるじゃないか」

「待つて待つてかーくん!! 確かに何も言わなかったのは謝るよ。でもこうするしか方法がなかったんだよ!!」

「……どうということだ?」

俺が一応話を聞くようになったことで安心したのかしよんぼりしていたウサ耳（いつの間にか装着していた）がピーンツと勢いよく起き上がった。

『黒白事件』の時、かーくんスーツ着てたでしょ?」

「ああ」

「それを見てた各国がああ体格は男じゃないかって疑問を持ち始めたの」

「………、」

「でね、映像を解析された結果、『黒執事』は男性である可能性が非常に高いって」

俺は椅子に掛けたまま、ガツクリと項垂れた。そりやそうだよな。スーツ着て仮面したくらいじゃ性別を誤魔化すなんて難しい。

大体千冬が乗ってた『白騎士』と噂されてる『黒執事』って見た目からして違いすぎるだろう。

「……はあ、つまりそういうことか」

俺は東のあの発表の真意に辿り着いたが故の溜め息を一つ。

全く、俺のことを心配してくれてるってのは分かるけどもうちよっとうこう穩便にやり過ぎすことはできなかつたんだろうか。

……無理かな。

東がこうするしかなかったと言うんなら他に手立てはないだろうし。

「どうということだ?」

意味がよく解っていないのか、今まで話を聞いていた千冬が問いかける。

そんな千冬に俺は自嘲気味に微笑んで。

「どうもこうもない。束が俺を守るためにしたことなんだよ、コレは」  
「？」

いまいち要領を得ない千冬。なにやら目の前のウサギさんは真意を知られたくないのかキョロキョロと左右に視線をさ迷わせているが、千冬ならば知っていてもいいだろう。

「——束は、俺を守るために『黒執事』っていうISをでっち上げて俺を操縦者に仕立て上げたんだ」

思えば俺も軽率だった。全世界の目に晒されるということが分かっていながら、あの程度の変装しかしていなかったのだ。本来ならば顔全体を隠さなくてはならなかっただろうし、男だと判らないくらい体格の区別がつかないような服装をすべきだった。

だというのに、俺は口の出た仮面に黒スーツ。

これで性別を誤魔化せるというほうがどうかしている。

つまるところ、俺の身元や性別がバレる一歩手前まで来ていたのだろう。もしくは既にバレていたのかもしれない。

もし俺の正体がバレて男であるということが解った場合、ISに乗れるのは女性だけという定義に揺らぎが生じる（実際には俺はISに乗れはしないんだが）。

そして稀な男性IS操縦者の俺は間違いなく何処ぞの研究機関のモルモットにされるだろう。人体実験されるなんて笑えない冗談だ。

そんな折、束の全世界同時中継だ。

これによって各国政府しか知らなかった情報は全世界の人間に知れ渡ることとなり、裏で俺を捕らえようとする政府を牽制、動きを封じた。

そんな束の手腕によって俺は各国から追われるという最悪な事態は回避したわけだ。

——したわけなんだが、その代償はなかなか大きかった。



あの発表から数日、うちの屋敷に早速日本政府からの通達があった。内容は言うまでもない、IS学園への入学要請についてだ。因みに拒否権というものはないらしい。

それを見た親父は俺が寮生活を強いられるために号泣していたが（姫無、簪も同様）なるべく帰ってくるということでは了承を得た。

「——まあ、確かに束には感謝するべきなんだろうが何故かな。お前のその表情（カオ）を見てると何か裏がありそうな気がしてならない」

「うえっ!? 何言ってるのさかーくん、束さんがそんな邪な考えを持ってるわけがないじゃない!!」

冷や汗だらだら流しながら言っても説得力ないぞ束。

というか束、絶対俺をIS学園に入学させる気だっただろ。あの表情（カオ）は絶対そうだ。畜生、俺まで道連れにしゃがって。

というのも、実は束もIS学園への入学が決められているからだ。

もちろん最初束は猛反発。篠ノ之神社に足を運んでくる日本政府の役人を突っぱねていた。しかしそこは日本政府も引き下がれなかったんだろう。譲歩に譲歩を重ね、なんとか条件付きでだが束をIS学園に入学させ一箇所に留まらせることに成功したのだ。

……一体どんな条件出したんだろうな束（コイツ）は。

「ということとはあれか。結局俺のこれまでの受験勉強は無駄だったってことか」

「まあそうなるね」

「へー。そうかそうか」

「えへへー……って痛い痛い!! 蟀谷（こめかみ）グリグリしないでかーくん!!」

「やかましい。やり場のない怒りをちよつとは発散させてくれ」

「ギャー!!」



という事があつたために、俺は全く本意ではないが千冬たちと三人揃ってIS学園へ入学することとなった。

長つたらしい入学式も終わり、クラス分けを見て自分の教室に入り（千冬、東とは同じクラス）、宛てがわれた自分の席についたところで最初の場面へと戻るわけである。

(……後ろからの視線がなあ……)

運の悪いことに俺の席は真ん中最前列。この上ないバツドポジションだ。今日ほど名前順で『さ』だったことを恨めしく思った日はない。

千冬はなんだか機嫌悪そうにしているし、東に至っては早速消えやがった。どんだけ自由人なんだアイツは。

なにやら背後から『声かけてみなよ』やら『彼女さんとかいるのかな』やら女子生徒たちの声が聞こえてくるが、そこは気にしないほうがきつと身の為だろう。

因みにこのIS学園。第一期生となる俺たちは年齢の幅が十五歳から十七歳までとされており、学年は二、三年生は存在しない。来年以降になれば別だろうが。チラツと周りを見た感じだと世界各国から生徒は集まっているようだがやはりまだISが発表されてから一年ちよつとしか経過していないということもあつて専用機持ちは圧倒的に少ない。大体ISの数自体がまだ少ないのだから無理もないが、その数は俺が知る限りまだ0だ。

俺のことはカウントしていない。だってこれISじゃないし。

「はい席に着いてくださいーい」

ガラツと教室前方のドアが開き、教員らしき女性が入ってきた。あれ？　なんか見たことあるような顔してんなこの人。

「えー、今日から私がこのクラスの担任になる山田麻世です。みんなよろしくね」

……思いつきりやまやとおんなじ顔だ。てことは姉か何かかな。にしても似すぎだろ。そつくり過ぎて違うところなんてないんじや……あ、あつた。

この人、やまやと違つて貧乳だ。

なにか物足りないと思つていた原因はコレか。いやあるのとないでこんなにも違うんだな。

「えーと更識くん？」

「はい？」

「君今なにかすごく私に失礼なこと考えてなかつた？」

「いや全然？」

「……そう？」

「はい」

危ねえ。なんだこの人読心術でも修得してんのか？ やまやと違つて鋭すぎるだろ。

「はい。じゃあまずは皆自己紹介といきましょうか。名前順で行くから一番端のえーと、会田さん。お願いね」

「は、はい！」

クラス名簿と会田さんを交互に確認しながら自己紹介を促す山田先生。言われた会田さんはガタツと立ち上がった。

「あ、会田仁美です！ 国籍は日本で、バスケットやっています！ 趣味は——」

肅々と進められていく自己紹介。こんな時に思うのもなんなんだが、ISが世界に公表されて一年弱。この教師たちはISについてどこまで把握しているのだろうか。当然『白騎士』の正体が千冬だなんてことは知らないだろうし、ISの性能も完全には把握できていないんじゃないかと思う。

今現在、世界中に普及しているのは第一世代型だが束の中では既に第二世代型が完成しようとしている。各国がようやくISの性能を理解し始めたと思ったら束は遙か先を行っているのだ。

本当に未恐ろしいよ。

「更識くん」

「はい？」

「次、君の番なんだけど」

「どうやら考え事に気を取られて自分の番が回ってきたことに気がつかなかったみたいだ。時間を取らせるのは悪いと思ったので俺はいそいそと立ちあがり。」

「えー。更識形無です。皆さんご存知の通り世界初の I S 操縦者です。以上」

「あまり長い自己紹介をする気もなかったので簡単に言っただけで席に座る。」

「これですぐ後ろの席の女子へと自己紹介が移るのかと思いきや。」

「はいーじゃあ更識くんになにか質問ある人ー？」

「何故か担任の山田麻世……面倒だからやまよは質問を受付始めた。」

「なんで俺の時だけ。」

「シュバツ!!」

「……ほぼ全員が挙手。」

「やばいこれ厄介なパターンだよ。一夏の時そっくりだよ。」

「なんで I S に乗れるんですか!?!」

「I S がスーツってどういうこと!?!」

「黒執事ってなんなんですか!?!」

「もう一人とは何か関係あるんですか!?!」

「うわもう質問攻めだよ。」

「だけど、取り敢えずこの質問にだけは今すぐ答えておこう。」

「もう一人とはなんの関係もないです」

「もう一人、というのは俺の呼び名からも察しは付いただろう。」

『世界初の男性 I S 操縦者』。

決して『世界唯一の男性 I S 操縦者』ではない。

居るんだ。この I S 学園に。

世界で二番目の男性 I S 操縦者が。

## #21 フラグを避ける考えはその時点でフラグ

前回のあらすじ

やまやの姉は貧乳だった件について

『世界初の男性IS操縦者』。

これは俺の呼び名のようなものなんだが、『世界初』というところがこの名の肝だ。

世界で初めて、ということとは当然その後も存在する可能性があるということだ。ISが発表されて一年余り、これほどの短期間では女尊男卑も原作ほどに極端ではなく、さらに男性IS操縦者の登場が早かったこともあった同等とはいかないまでも間違いなく男女平等に近付きつつある。

俺の呼び名が『世界唯一の男性IS操縦者』から『世界初の男性IS操縦者』に変わったのは、あの束の発表から一ヶ月ほど経ってからだ。

予兆などなく、突然沸いて出たかのように二人目となる男性IS操縦者が発見されたのだ。

これには流石に俺も驚いた。原作では当然一夏しか乗ることの出来なかつたISを乗ることの出来る人間が存在したというのだから。当然ながらこの第二の男性IS操縦者は俺のように束によって公表されたわけではない。

名乗り出たのだ。自ら。

後に『世界で二番目の男性IS操縦者』と呼ばれることとなる男の

名前は————織村一華。

そう。あの織村だ。

幼稚園の頃からの知り合い(?)であるアイツとはかつて体育祭で二人三脚をした記憶が鮮烈に残っている。ほんとにあのバ……織村は何がしたかったのか今でも疑問だ。

そんな織村が本来ならば女性にしか動かせないはずのISSを何故起動させられたのか、実際の所まだ俺には解らない。まだ彼がISSを動かしているところを生で見えていないからだ。

だが束が我が子のように可愛がるISSをアイツが使えるなんて有り得ない、と言っていたように俺もなんだか腑に落ちない。

いや、俺が言うのもなんだけどISSを動かせる男子なんて有り得ないんだぞ？ 主人公フラグでも建ってない限り。俺は例外としてもじゃあアイツは……ということになる。

一度束に本当にアイツがISSを起動させられるのか調べてみれば、と進言したこともあったが「あんなのと関わるのは生理的に無理」と一蹴していたために、此処ISS学園に入学した今でも詳細は分からないままなのである。

さて、なんだか前置きが長くなってしまったが、つまり俺が一体何を言いたいのかというのだ。

「俺は二人目とは一切切何の関係もありません。あしからず」

こういうことだ。

確かに俺と織村がISSを扱えるというニュースが全世界に流れたのは同時期でしかも同い年だが、それだけで関係があると思われてしまうのは相手が相手だけに流石に心外だ。

……いや、それも無理のない話かな。

なんてたって俺と織村はこれまでの経歴だけ見れば幼稚園から中学校、そしてISS学園に至るまで全く同じ道を歩いてきているんだ

から。

こつちとしては織村を知ったのは中学に上がったころだし全くと言っていい程に関わりはない。いつだったか織村が俺に向けて『千冬束は俺の嫁』宣言してたけど俺からしたら『何故に俺?』という感じだった。

だから俺は瞳を輝かせてアイツとの関係を聞いてくるクラスメイトたちに言う。

「事実です」

何やらぶーたれるクラスメイトたちがいるが、事実は事実でしかないためにどうすることもできない。

「はい、他の質問あるか?」

やまよさん。もういいんじゃないでしょうか。

ババツ!!

ほら。限界まで手を伸ばした方々が我先にと今にも立ち上がろうとしてるじゃないか。

「はい、じゃあそのえーと……リリイ⇨スターライ」

やまよ。生徒の名前くらい覚えておけよ。

『黒白事件』のことについてお訊きしたいのですが、

リリイ⇨スターライと言う生徒が立ち上がりこちらを伺うようにして口を開く。綺麗な金髪だなあ。イギリス人かフランス人だろうか。俺は外国にあまり詳しくないから解らないが間違いなく美人の部類に入ると思う。

「貴方の専用機だという『黒執事』にも色々とお尋ねしたいところですが、先ず貴方と共闘した『白騎士』とは一体誰なんです?」

誰なんです? と聞かれてもなあ。おいそれと『あそこの席に座ってる織斑千冬です』なんて言えるわけねーし。心無しか千冬が冷や汗を流しているような気がする。

ていうかそれ最重要国家機密に相当する情報だぞ。機密って言うても各国はもちろん当の日本政府でさえ白騎士の操縦者が誰なのか認知できていないんだけど。

理由は簡単、束の手腕のおかげだ。

束が情報封鎖したものを、俺の口からポロツと言えるわけがない。

だから俺は、

「それは俺にもわからない。共闘したのは確かだけど、俺は白騎士の正体は知らないんだ」

こう言うしかない。

怪しまれようがなんだろうが、こうシラを切るしかないのだ。

「あれだけ息のあったコンビネーションだったのに、あれは即興のものであったと?」

「ああ」

事実だ。だって千冬がISに乗ったのはあの時が初めてだったわけだし、二千発以上のミサイルが降ってきてるつてのにコンビネーションもなにもないだろう。

……なのはどうしてお前はちよつと嬉しそうなんだ千冬。ニヤニヤしながら窓の外を眺めるのやめろ。

「……そうですか。では最後に一つだけ」

まだあるんですかりリイIIスターライさん。

「あなたの『黒執事』。アレは一体何なんですか?」

瞬間。

俺の背中から嫌な汗が噴き出すのを感じた。

この少女。疑っている。

俺が本当はISに乗れないのではないかと。

「あの映像は見なかったのか?」

「もちろん拝見しました。だからこそです。ただの黒スーツ、執事服と言ったほうがいいのでしょうか。アレがISだということが私には信じられません」

鋭い眼光が俺に穴を開けるくらいにまっすぐに見つめてくる。

まあ確かに。宇宙空間での活動を想定されたマルチフォーム・スーツであるISが黒スーツで執事服って何の冗談だって感じだよな。俺だって当人じゃなかったら絶対に信じないだろうし。

だから俺はリイイという少女の意見には全面的に肯定するよ。



だけどそれはあくまでも俺の心の内だけの話だ。

束が折角こうして俺を守ろうとしてくれた以上、俺だって相応の対応をしなくてはならないだろ。

だから言う。

束のためにも。

俺は平気で嘘をつく。

「アレは篠ノ之博士の試作品だよ。通常じゃ見えないシールドがあのスーツ全体を覆ってる。まあ他のISと比べて見た目が特殊なのは認めるけど、元々は普通のISだったんだぜ？ アレ」

「貴方が起動させてあの姿になった、と？」

「そういうこと。何と言われようとそれが事実なんだからしようがない」

「ですが……」

「なら、あの映像で俺はどうやってミサイルを迎撃していた？ ただのスーツを着たサラリーマンみたいな人間に、そんな常識はずれなことで君はできると思うのか？」

「そ、それは……」

言い淀むリリイ。彼女自身もまだその理由が説明できないみたいだ。いや、逆に説明されても困るけれども。俺が使ってるのは超能力であってISを動かしているわけじゃない、なんて言われたら俺はその人を超能力者だと断定するぞ。

「リリイ…スターライ。もういいだろう」

このままでは埒が明かないと判断したのかやまよが俺たちの間に割って入る。

「更識も座りなさい」

言われて座った俺たち。リリイはまだ不服そうだったが。そんな二人を見てやまよは自己紹介の続きを始める。

「えーと次は……篠ノ之束。いきなり休み？」

本来ならば俺の後ろの席に座っているはずの束の席は見事に空席。

束はほんとに興味のない人間と関わるのを嫌うからなあ。こんな空間には居たくないんだろう。

「しようがないわね。じゃあ次の――」

続けられる自己紹介をぼんやりと聞きながら、俺は遠目に窓の外に視線を移す。

今更ながらに信じられないという思いが込み上げてくる。

(ほんとに入学しちやっただなあ……、ISS学園)



周囲が俄にぎわめき立つのを感じる。無理もない。何せこの俺、織村一華が今から自己紹介を始めようとしているんだからな。

『世界で二番目の男性ISS操縦者』

それが俺の肩書き。

二番目、というところがとてつもなく不満だが、所詮肩書きなんてもので俺の全てを表現出来るわけがないんだ。そんな些細なことを気にするほど俺は器の小さい人間じゃないからな。

「次、織村くん。自己紹介お願いね」

「はい」

言われて俺は立ち上がり、後ろに振り向く(因みに席位置は形無と同じ)。

「織村一華。みんな知ってるだろうけど世界で二人しかいないISSに乗れる男だ。みんなヨロシクな」

まず手始めはこんなもんだ。掴みは大事だが行き過ぎたアピールはまだ早いだろうしな。

「質問ある子いるかな?」

俺がそう言うとは名かか女子が手を挙げた。そのうちの一人を指名する。

「織村くんはあの篠ノ之博士とは知り合いなんですか? 隣のクラス

の更識くんは篠ノ之博士と仲が良くて専用機まで持つてるみたいですよけど」

更識？

……ああ、あの馬野郎のことかよ。

あの野郎、きつと束に無理言つて専用機造らせたんだ。酷いことしやがる。

「束とは懇意にさせてもらってるけど、あいつとは何の関係もないし親しくはないね」

「そうなんですか？　じゃあ織村くんもいずれ専用機を？」

「束がいつか作ってくれれば、俺も専用機を持てる日が来るかもね」

一応、こういうことにしておこう。専用機。確かに欲しいかと聞かれれば要らないとは言わないだろうが、俺がこのIS学園にやってきた理由は、千冬や束と一秒でも長く同じ時間を過ごすためだ。

それを邪魔するような野郎（主に形無のこと）は、誰であろうと容赦しねえ。

俺の『未元物質（ダークマター）』に常識は通用しねえんだからな。



「……………ふう、」

自己紹介が全員終わったところで一旦休憩となつて一年一組の教室。その一角で俺は机に突っ伏して小さく息を吐いた。ついさっきまでいろんな女子から質問攻めにされ、ようやく解放されたんだ。千冬に助けを求めても全く助けてくれないし、さつきまで嬉しそうにしてたのになんだこの機嫌の豹変は。

「なあ千冬。なんで機嫌悪そうにしてるんだよ」

「……………悪そうじゃない。悪いんだ」

「さつきまであんなニヤニヤしてたのにか？」

「っ!?　べ、別にニヤニヤなどしてない！」

うん、説得力皆無だぜ千冬。

そんなワタワタしてたらいつものクールなイメージが一瞬で崩壊しそうだ。

「そうか？」

「そうだ!!」

本人は断固として認めない気らしい。

「そ、そんなことよりもだ形無」

「ん？」

「どうするんだ」

「何を？」

そこまで言っつて、千冬は俺の耳元まで口を近づけて小声で呟く。

「あのリリイとかいうイギリス人のことだ。彼女、間違いなく形無のことを疑っているぞ」

ああ。そういうことか。

千冬まで心配してくれてるんだな。

「(心配してくれるのか?)」

「(む……。当然だろう。お前の正体がバレてしまえば冗談抜きで実験動物だぞ?)」

「(それは是非とも遠慮したいな。まあ大丈夫だ。そんな自分の正体バラすようなヘマはしないさ)」

「(形無なら心配は要らないとは思うが……。気を付けろよ? 何時ボ口が出るかもわからんからな)」

「(おう)」

俺は千冬に対して頷いて言う。

俺のことを信頼し、心配してくれる友達が持てるなんて、俺はほんとに恵まれてるな。

「はい皆席につくー」

なんて思っていると前のドアから担任のやまよが教室内に入ってきた。いつの間にか休憩は終わっていたみたいだ。

やまよが入ってきたのを合図にして他の女子生徒たちも一斉に席に戻る。

全員が席についたのを確認して、やまよは切り出した。

「えー、みんな入学式のパンフには目を通したと思うけど、このIS学園には幾つかの行事があります」

パンフをパラパラと捲りながら話を続けるやまよ。

「それでこの時期から一番近いのは『クラス対抗戦（リーグマッチ）』ね。これは各クラスで代表者を一人決めて戦うものなんだけど。今からそのクラス代表を決めたいと思います。あ、クラス代表ってことはこのクラスの顔になるわけだから、自薦・他薦は問わないけれど相応の覚悟を持ってね？」

クラス対抗戦か。

確か原作じゃ一夏と鈴が戦ったんだよな。途中で邪魔が入って決着はつかなかったけど。

まあこのクラスじゃ、千冬が一番適任なんじゃないか？ 皆は知らないだろうけどこのクラスの中じゃ唯一ISの搭乗時間が二時間以上あるし。

「はい」

すると、一人の少女が手を挙げた。

「私、立候補します」

先程俺に突っかかってきたイギリス人、リリィースターライだ。

さつきも思ってたけどこの子絶対セシリアタイプだよ。女尊男卑を体現しようとしてるタイプの人だよ。

「他にはいないの？」

まあ彼女でもいいんじゃないか？

他にいないってんならやる気のある人がやるのが一番だろうし。

俺？ やだよ。クラス代表なんてやったらそれだけでフラグ余分に建てちゃいそうじゃないか。

「はい」

するともう一つ手が挙がった。そちらを向いてみれば、誰であろう千冬が手を挙げていた。

なんだ千冬もやる気なのか。

「織斑さん。あなたも立候補ということでもいいのね？」

「いいえ」

……挙手しといて否定しやがった。  
てことは必然的に……。

「私は更識形無を推薦します」

手遅れだった。

千冬さん。アナタは一体俺をどうしたいんだ……!!

## #22 フラグ回避はその時点でフラグ

前回のあらすじ

フラグはいつの間にか建っている

「私は更識形無を推薦します」

挙手したままの姿勢を保ち、そんなことを言い出した千冬に俺は絶句。開いた口が塞がらないとは正にこのことか。

「ち、千冬さん……？」

「形無。何も私は適当に言っているわけではない。形無が適任だと思っっているから推薦しているのだ」

いやいやいや。

絶対俺なんかよりも千冬のほうが適任だろ。十人が十人そう言うって。

「ふむ。他にはいないの？」

黒板にスラスラと俺とリリーの名前を書き、クラスメイトに確認をとる。やばいこれ原作の一夏とセシリアパターンの臭いがぶんぶんするんだけど。

「はい。じゃあ他に候補者がいないみたいだからこの二人にクラス代表をやってもらおうね」

——え？

ちよつと待て一旦落ち着こう落ち着くんだ俺。

今やまよは何と言った？

『この二人にクラス代表をやってもらおう』、だと……？

「ちよ、先生!?! クラス代表って一人じゃないんですか!?!」

「あら。私はそんなこと一言も言っていないわよ?」

いや確かにそうだけど此処は普通クラス代表は一人↓二人も要らない↓決闘↓俺が負けてリリイが代表って流れでしょうがアア!!

そこのフラグはへし折らなくてもよかったです!!

「先生、クラス代表は二人も必要ないと思います」

俺が血涙を流しているとかリリイがそう言った。どうやら彼女も俺とは違う理由だがクラス代表が二人であるということに不満があるらしい。

「お、俺も一人で充分だと思います」

俺もリリイの意見に同意する。そんな俺たちを見て、やまよは『はあ、』と溜め息を吐いたあと。

「いいですか君たち。君たちが今居る場所は一体どこですか、リリイ  
|| スターライ」

「I S 学園です」

「はいではそのI S 学園では一体何を学ぶのでしょうか更識形無」

「えーつと、I S の操縦?」

「はいではそのI S の存在と価値が認められる起因となった『黒白事件』が起きたのはいつですか続けて更識形無」

「一年……半くらい前かな」

「正確には四九三日前です。そしてそれから今までにアラスカ条約を始めとする様々な条約や協定が各国で締結され、それに基づいて此処日本にI S 学園が設立されたわけです」

ペラペラと語り出すやまよ。一体何が言いたいのかあまり分からないが、きつとここで口を挟んではいけないだろう。俺の第六感がそう告げている。

「……それとクラス代表が二人だということと、一体なんの関係があるというんですか?」

リリイも同じくあまり意味が理解出来ていないのだろう。訝しげな表情をしている。

「では質問を変えましょうかりリイ|| スターライ。あなたのI S 搭乗時間は?」



「……三十分未満です」

おそらく彼女は入試の時に用意されたISを起動させ、簡単な操作が出来るか動かしてみた程度なのだろう。千冬みたいな人間でもない限り、ほぼ全員のIS搭乗時間は三十分未満だ。

「更識形無。君は？」

「四十七時間です」

もちろん嘘だ。

ISに乗れない俺の搭乗時間は当然0。だが本当のことを言うわけにもいかないので口から出任せを言っただけ。

「流石は『黒執事』。搭乗時間は断トツですね」

「……先生、搭乗時間なんて女子はみんな似たようなものじゃないですか」

バカにされたと勘違いしたのかリリイは眉をひそめ、やまよを睨むようにして見つめていた。

「そうね」

あつさりとリリイを肯定するやまよにさらにリリイの眉間に寄せられた皺は深くなつていく。

「なら……」

「でもね」

リリイの言葉をやまよは遮って。

「それは私たち、教師たちにも言えることよ」

——ああ。成程。

だからクラス代表は二人ね。てことはこの一年は教師たちもつてことになるのか？

「……どういう意味ですか？」

「言葉の通りよ。私たち教師たちも今のアナタたちとさしてISの搭乗時間は変わらないわ」

俺はなんとなくだがやまよが一体何を言いたいのかを理解した。

ISが発表されてから一年以上経つ。しかし裏を返せば、まだ一年程度しか経っていないということにもなる。束が設計開発したこのインフィニット・ストラトスなるパワードスーツは彼女の天才的

な頭脳あつてこそ誕生した代物。俺たちみたいな今まで普通に平凡な人生を生きてきた人間には、到底理解することのできないようなトンドモ理論の塊なのである。

つまり、教師も生徒もスタートラインはほぼ同じなのだ。

もちろんこの I S 学園の教師に選ばれるような人間は相当の学者か工学分野が専門の人間たちだろうし、それなりの実績を有している者たちなのだろうが、きつとそれでも束には遠く及ばない。篠ノ之束という存在は人類の最先端の更に先を行く人間だ。そんな人間が開発したこの I S、現段階で扱いや操縦に長けた教師や生徒はまず存在しない。

だからこそ、クラス代表は二人にする必要がある。

I S 搭乗時間皆無の人間がクラス代表になつたところでその実力などたかが知れている。それはどこのクラスも同じだ。この学園では I S に関する様々なことを学ぶだろうから、何れは機体にも詳しくなるし扱いも慣れてくるだろう。

しかし今は違う。はつきりと言つてしまえば素人もいいところだ。そんな人間が I S に乗り、もし万が一にでもその人間がトラブルに陥つてしまった時、一人では間違いなく惨事になる。絶対防衛があるのはその I S が稼働しているときだけだ。展開が解除されてしまえば身を守つてくれるものは何一つとしてない。

きつとこの事を考慮してクラス代表を二人にしたんだろう。

二人ならばどちらかがトラブルつてももう一人がカバーできる。当然始めのうちはそれすらもままならないかもしれないが、一人ではないという安心感は想像以上に大きいだろう。

しかも俺は『黒執事』として全世界にその名を知られてしまった I S 操縦者だ。

やまよとしても俺がリリイをカバーすることが望ましいとでも考えているんじゃないだろうか。

「私たち教師陣もはつきり言つて I S には詳しくない。持っている知識はアナタたちとさほど変わらないわ。クラス代表を一人にしてもし万が一トラブルに巻き込まれたとして、私たちに守ることができ

という保障はどこにもないのよ。もちろんそれはクラス代表だけに限った話ではないけれど。でもクラス代表はやはりISに乗る時間は他よりも大なり小なり大きくなる」

「……つまり、二人のほうがリスクが少ないということですか？」

「まあ他にも理由はあるけど、大筋としてはそういうことになるわね」  
「……そういう理由があるというなら、分かりました」

リリイはそれを聞いて納得したようだ。うん、未だに睨まれてるところを見ると俺はまだ疑われてるみたいだけど、この際それはもういいや。それよりも大事なものはだ。

「先生？　俺がクラス代表になることは既に決定事項なんですか……？」  
「そうよ？」

『今更何言ってるの？』的な返答をされて俺は返す言葉なくそのまま机に蹲った。

ああ、結局こういうことになるのか。

クラス代表が決定したことによるクラスメイトからの拍手を背中に受けながら、俺は魂まで抜け出しそうな大きな溜息をついた。



授業終了後、俺は校舎に隣接する寮へとやってきていた。原作ではいきなり男子操縦者が現れたことで部屋を確保できず幼馴染みである筈と相部屋、という半同棲生活を余儀なくされていたが。

「お、あったあった。ここが俺の部屋か」

俺の場合、IS学園が完成するギリギリ前に存在が発覚したために男子専用の寮（とは言っても一軒家に近いIDK）を別に用意してもらうことができた。大浴場などはないが一般家庭にあるようなバスルームは設けられており、ちよつとしたホテルのような感じの部屋だ。因みにこの部屋の場所は女子が住まう寮の隣である。

高級そうなカードキーを通し、ドアを開いて室内に足を踏み入れる。

そこに広がっていたのは。

「お帰りかーくん!! ご飯にする? お風呂にする? それともわ・た・し?」

目を覆いたくなるようなカオスだった。

ちよつと待て。確かこの部屋、ロック掛かってたよな?

何で? 何でドアの先に裸エプロンの束が正座してこつち見てんの?

「……とりあえずだ」

「うん?」

「ちゃんとした服を着ろ」

「えー? かーくん束さんのこんなえろえろな姿見てなんにも感じないのー?」

ゴンツ!!

「いったーい!! かーくんの愛が痛い!!」

「追い出すぞ」

一瞬にしていつもの服に戻っていた。どんな早着替えだ。

というかなんで束がここに居る? コイツ入学式や授業にも出なかつたのに。

「で? 何の用?」

「かーくんに言い忘れてたことがあって」

言い忘れた? なにか『黒執事』に関することだろうか。だとしたら俺の専用機の設定をすっかりさせてもらいたいんだけど。

『黒執事』についてのことか?」

「まあそれもあるんだけど、一応かーくんにも言わないといけないことがあったの忘れてたんだよね」

そう言う束はとびっきりの笑顔で。

「束さんは今日からこの部屋に住むからよろしくね、かーくん♪」

.....  
はい？

## #番外 彼女たちの日常

更識家。

一見して何処にでもあるような家系だが、その本質は暗部に対抗するための対暗部組織『更識』を有する一家だ。その大黒柱として君臨する更識家の主は十六代目当主、更識楯無。

母、更識瑞穂はおしとやかな大和撫子で家事全般をなんでもこなすパーフェクトな母親（性格、天然）であり、長男の更識形無は世界でたった二人しかいないISを操縦できる男子。

そして二人の妹。

長女の名は更識姫無。

次女の名は更識簪。

これは更識家の娘っ子二人のとある日の物語――。

「おはようー」

「ああおはよう姫無」

襖を開いて居間に入った私は、既に食卓に並べられた朝食を見て『今日は鮭かあ』なんて思いながら席につく。一足先に居間にやって来ていた父さんは新聞を広げていた。

「姫無も今日から二年生か、早いもんだなあ……」

感慨深そうに父さんが新聞をたたんで呟く。そう、私、更識姫無は今日から小学校二年生になる。上級生になるのだ。

「学校は楽しいか!? 苛められてたりしないだろうな!?!」

「大丈夫だってば」

まったく。この父は前々から思っていたけど少々……いやすごく過保護だと思う。

思い出されるのは去年の私の入学式。たまたま席が隣になった男

の子とお喋りしていたら、教室の後ろで父さんが負のオーラ全開で腰に差した真剣を抜こうとしていた。

その場は母さんが父さんの襟首を引っ付かんで廊下のほうに連れ出してくれたから事なきを得たけど、男の子とお喋りしていたくらいで抜刀しようとするとかもう常識的に可笑しいんじゃないだろうか。というか銃刀法違反なんじゃ……やめよう考えないほうがいい気がしてきた。

確か兄さんもそんなことを言ってたし。

「兄さん……、はあ……」

私は目の前に置かれた湯気の立つ味噌汁に視線を落として溜め息を一つ。

この溜め息の原因は言うまでもない、私の兄さんである更識形無がこの家に居ないからだ。

それは兄さんがあのIS学園の寮に住むことになったからなんだけど、兄さんがあの『黒執事』だったなんて本当に驚いた。女性にしか動かせないISを兄さんが操縦できるんだから、妹の私としても鼻が高い。クラスの友達に自慢したほど。

……それはいいんだけど、問題は兄さんがIS学園の寮に入ってしまっただけのこと。

そう。会えないのだ。

兄さんに。毎日。

……うわああああああ!!

ほんとにイヤだ!!

兄さんに会えないなんて私はこれから一体どうやって毎日を過ごしていけばいいの!?

今までは夜中にこっそり兄さんの部屋に忍び込んで布団に潜り込み、一緒に朝を迎える（決して卑猥な意味ではない）のが日課だったのに、今ではそれが出来なくなってしまった。

これは私にとっての死活問題だ。

死ぬる。というか最初の一週間くらいは本気で私もI S学園の寮に住もうと考えていたくらいだ。

兄さんの温かみのある布団だからこそ今まで気持ちよく眠れていたのであつて、それがなくなれば私は間違ひなく不眠症になる。というかなつてしまつている。

毎晩兄さんの部屋で寝ているがやはり本人が居ないとダメ。一人で寝るのがこんなに寂しいなんて思つてもみなかつた。

「はあ……」

「どうした姫無。元気がないぞ。……まさかやつぱり苛められて!?」  
「違うから」

私の目の前で騒ぐ父さんも兄さんが家を出ると知つたときはそれはもう大変だつた。

きっと兄さんもあなることが予想できていたからギリギリまで言い出せなかつたんだろうなあ。母さんにはもう言つてあつたみたいだけど、父さんに寮暮らしを告げたのはI S学園に入学する3日前のこと。

兄さんが『黒執事』の正体だつて報道された時も父さんはそれはもうすこぶる暴れたけど、それがまだ可愛く思えてしまうほどの光景だつた。

号泣。

そして暴走。

あの時の父さんの行動を分かりやすくかつ簡潔に表すのならまさにこれがぴつたり。

居間に兄さんと父さん二人きりで入つて行つてから数分後、私や簪が襖の近くで聞き耳を立てていると、いきなり大きな泣き声が聞こえてきた。

ギョツとする私や簪を尻目にその泣き声は段々と小さくなつて



いって――、

ズバンツ!!

抜刀の風圧のせいか私の目の前の襖が横に真つ二つになった。

息子の家離れを認められない父親が起こしたのが真剣を振り回すって……。

どれだけ我が子大好きなんだうちの父さんは。

結局、その場は父さんの部下数十人と最終的に投入された母さんによって兄さんの寮暮らしを本当に渋々認めた父さんだったけど、それからしばらくは魂が抜けたみたいに真つ白だった。

こんなんじや私の時も同じようなことになるんじやないかという気がしてならない。

「姫無どうかしたか？　箸が止まってるぞ」

「あ、なんでもない」

いつの間にか止まっていた箸を再び動かしながら、私は内心でこっそりと決めていたことをもう一度思い出す。

私も、IS学園に入学する。

これは兄さんがIS学園に入学すると知った時から心に決めていたことだ。

ISが発表されて約一年半。『基本的に』女性にしか動かせないISの授業は小学校からも少しづつ取り入れられるようになり、私も兄さんの後を追いたいと思うようになったから。

となると私も当然IS学園に備え付けられた寮に住むことになるだろうから、今のところ父さんには絶対に秘密。

というか絶対に言いたくない。あんな惨事を巻き起こすのは御免だし。

将来IS学園に行くということを告げたあとの父さんの暴走っぷりが簡単に想像できてしまった私は、それを流し込むように味噌汁を

すすった。



「おふあよう……」

「あらおはよう簪」

「おはよう」

「おはよー」

未だに意識が覚醒しないまま居間に入った私にお母さん、お父さん、そしてお姉ちゃんが声を掛ける。

此処でようやく、私は意識が覚醒することに。

理由は簡単。

『おはよう簪。相変わらず眠そうだなあ』

いつもこうやって声を掛けてくれるお兄ちゃんが、ここにいないから。

お兄ちゃんは『IS』とかいうものに乗れる数少ない人で、そのための学校に行くために一人暮らしをするんだって。

……はつきり言って私はお兄ちゃんと離れたくない。

だから私はお兄ちゃんに、

『……私も、行く』

いつもはこんな我が儘は言わないけど、それでもお兄ちゃんとは離れたくなかったんだもん。

だけとお兄ちゃんは。

『ははっ。俺だって簪や姫無とは離れたくないさ。でもこれはあの糞ウサ……友人のためでもあるから』

『私も……行くっ……！』

『……簪？　なんで俺の制服の裾をしわくちやになるまで掴んでるの

かな?』

『……いいって言うまで……、離さない……!』

『ちよ、母さああああん!? 我が妹の瞳からハイライトが消えてるんですけどオオおおおッ!?!』

『あらあら、それは大変ねえ』

『助けようという気が感じられない!!』

結局、お兄ちゃんについていくことはできなかった。うう、今日から小学校に通うから、ランドセル背負った姿とか見て欲しかったのに。

でもまあ、これから先ずつと会えないってわけでもない。夏休みとかのお休みの長い時には家に帰ってくるってお兄ちゃん言ってたし、ランドセル姿はそのときのお楽しみにとっておこう。

「ご馳走様。ほら簪、早くしないと学校遅れちゃうよ?」

「あ……、待って……!」

私よりもひと足先に朝ご飯を食べ終わったお姉ちゃんはそそくさと居間から出て行ってしまった。

なんて薄情な姉なんだ。妹が食べ終わるのを待ってくれてもいいじゃないか。

「簪ー? 早く食べないと遅刻しちゃうわよ?」

お母さんにそう言われ、壁の時計に目をやれば。

「わ……、わわ……ッ」

遅刻ギリギリ。どうやらお姉ちゃんは待っていてくれてたみたいだけど間に合わないと思って私を切り捨てたみたい。……急がないと。

私にご飯を急いで完食し、丁寧に手を合わせた後、直ぐ様居間を飛び出した。



慌てて出てきた簪と一緒に登校した私は、なんとか遅刻することなく教室に入ることができた。

進級してそうそう遅刻なんてしたらクラスの皆に変に思われちゃいそうだし。

「姫無ちゃんおはよう」

「あ、紗季。おはよう」

「今日はなんだか遅かったねえ。寝坊でもした？」

「ううん。そういうわけじゃないんだけど」

全力ダツシユのせいで疲れきった私が机につつ伏していると、ショートカットの女の子が私に話しかけてきた。彼女の名前は椎名（しいな）紗季（さき）。この小学校に入学してから初めて出来た友達で、今では幼いながらに親友といえる存在だ。因みに二年連続同じクラス。

「一時間目体育だよ。早く着替えなきゃ」

「あ、そうだったわね」

紗季に言われ私は机の横に引つ掛けてあつた体操着袋を机上に置き、中から体操服と体操ズボンを取り出す。男女関係なく同じ場所を着替えるのはなんだか気に食わないけど（主に男子たちの存在が）、先生にそんな文句を言っても意味がないので私たちはそそくさと着替え、教室を後にしてグラウンドへと向かった。

「今日は鉄棒をします」

ジャージに着替えた担任の先生（女性）がホイッスルを吹いて私たちをグラウンド脇に設置してある鉄棒の前に集合させてそう言った。

「姫無ちゃん。鉄棒得意？」

「うーん、まあまあかな」

「私、得意なんだあ」

私の隣で体操座りした状態の紗季がはにかみながら言う。自信満々だなあ。紗季は運動得意だし、こういうところで存在感を示してるんだらう。

私は苦手じゃないけど、紗季みたいに一番大きな鉄棒で『大車輪』なんて出来ないから普通の部類に入ると思う。……なんか間違ってる

気もするけど、まあいいや。

「はい、じゃあみんな鉄棒に手を付けてー」

先生の合図で、各々鉄棒に手を掛ける。

でも、こういうときの男子つていやに存在感を主張する生き物みたいで。

「おいそこ俺が使うんだからどけよ」

必ずこんなことを言い出す男子が出てくるのよねえ。他にも場所は沢山空いてるのに、どうして彼はこんな女子が密集した地帯に踏み込んでくるのかしら。

「ここは私たちが使ってるもん。大輝(だいき)くんは空いてるところを使えばいいじゃない」

どけと言われた女の子は最もな正論を大輝とかいう男の子に言い放った。このクラスになってから日が浅いから全員の性格とか立ち位置を知ってるわけじゃないけど、大輝はなんていうかガキ大将みたいな男の子だ。自分の思い通りにならないと癩癩を起こすような子供。ほんと幼稚だなあ。

「なんだと?! いいから俺の言うこと聞けよ!!」

ああ、また癩癩。一体どんな育て方されたらこんな子供に育つんだよ。うちなら絶対こんな子供には育てないと思う。兄さんみたいな大人びた人間になるはず。

「きやあー!」

ドンツ!! という音がした後、地面になにかぶつかった音が響いた。

大輝が女の子を突き飛ばしたんだ。

「……それはやりすぎでしょうよ」

「ああ!? なんだよお前なんか文句あんのかよ!!」

ボソツと呟いた私の声が聞こえていたみたいで、今度は私に突っかかってきた。ほんとにジャイアンみたいな男の子ね。

「女の子突き飛ばすなんて男として恥ずかしくないの?」

「てめ!!」

大輝は私もさっきの女の子と同じように突き飛ばそうと腕を突き

出してきた。

でも、残念。

「おわッ!？」

大輝が素っ頓狂な声を上げる。理由は簡単。いつの間にか自分が地面の上に倒れていたから。

ほんとは『いつぱんじん』相手には使うなって父さんに言われてたけど、こういう時ならいいのかな？

「な、なにしやがった!？」

「更識流よ」

「なんだよそれ!」

「さあねえ」

あんまり言っちゃいけないだろうからこれ以上は言わないでおこう。今のは相手の腕力を利用して相手を投げ飛ばす更識流の技の一つだ。小学校に上がったところから父さんに教わり初めて、二つくらいの技ならなんとか使えるようになった。父さんや兄さんと比べるとまだまだだけどね。

「なにしてるのアナタたち!？」

騒ぎを聞き付けた先生が私と大輝の前までやってきた。先生、出来ることならもう少し早く来てもらえたらよかったですけど。

「更識さん、これはどういうこと?」

「あー、えーつと……」

どうしよう。

女の子を突き飛ばしたのが気に食わなかったので私が彼を突き飛ばしましたなんて言えないし。

突き飛ばされてた女の子とも仲が良いわけじゃないなあ。

一体どうこの先生を言いくるめようかと私が画策していると、

「……俺が鉄棒から落ちたんだ」

大輝がポツリと呟いた。鉄棒から落ちた? 一体彼は何を言っているんだろうか。一部始終を見ていたクラスのみんなも首を傾げている。

「俺が鉄棒から落ちたところに、こいつが来てくれたんだよ」

私のほうを指差しながら俯き加減で言う大輝に先程までの威勢の良さは感じられない。なんかこう、しゅんとした感じになっていた。「そうだったの。とりあえず、大輝君は保健室に行きましよう」先生に言われてゆつくりと立ち上がった大輝は先生に連れられて保健室のほうへと歩いていく。

んん？ んんん？ なんだろう。大輝が執拗にこつちを見てくる。チラチラとかそんなレベルではなく、穴が開くくらいジーツと私のほうを見てくる。

なんだろう。まだ私に突つかかってこようとしているのだろうか。……なんだか顔が赤いな。熱でもあるんだろうか。



「おっ昼、おっ昼」

「……嬉しそう、だね」

「だってえ、待ちに待った給食だよお？」

「私、あんなに食べきれないから……」

「じゃあかんちゃんのプリン食べてもいいい？」

「それは……だめっ」

時間は四時間目が終わった後、つまりは給食。

此処一年一組の教室でも、クラスメイトたちが給食を前にざわざわと楽しそうにしている。

そんな教室内で私とお喋りしているのは袖がだぼだぼの服を着ているおっとりとした少女、布仏（のほとけ）本音（ほんね）。

私の幼馴染みであると同時に、専属メイドでもある少女だ。

もともと更識家と本音ちゃんの布仏家は主従の関係にあるみたいで、小学校に上がるのと同時に私にもこうして専属メイドがついたわけなんだけど。

「んん。おいしいねえ」

はつきり言つてこの子がメイドとして働いているところは見たことがない。というか給食で焼魚や白米をぶつち無視していきなりプリンを食べるってどうなんだろうか。

お姉ちゃんの特属メイドは本音ちゃんのお姉ちゃんの虚さんで、あの人はとてもしつかりしているのに、この姉妹は何だか正反対だなあ。

「……かんちゃん」

「なに？」

「今なんだかすぐおく失礼なこと考えてなかったあ？」

「……全然」

「気になる。最初の間がすぐおく気になるよお」

いつものほほんとしているのにこういうところは敏感ってなんなんだろう。私は内心を悟られないようにご飯を口に運ぶ。

「ああそういういえばあ、最近かたりんとはどんな感じなのお？」

かたりん、とは私のお兄ちゃんである更識形無のことだ。

本音ちゃんはお兄ちゃんによく遊んでもらっていたから、いつの間にかそんなあだ名でお兄ちゃんを呼ぶようになっていた。

「お兄ちゃんとは……この二週間くらい会ってない……」

「IS学園に入学って寮住まいだからねえ」

「……寂しいけど、仕方ない」

嘘だ。

仕方ない、なんて思ってない。出来ることなら直ぐにでもお兄ちゃんのところへ行つて遊んだりしたいし、同じ屋根の下で過ごしたい。

だけどそれはお兄ちゃんに迷惑をかけることになっちゃうし、やっぱり仕方ないのかな。

「かんちゃんは優しいなあ」

「え……う？」

唐突にそう言った本音ちゃんのほうへ、いつの間にか下がっていた顔を上げて視線を移す。

「かんちゃんはかたりんに迷惑かけないようにそう言ってるんやしよ」



「……どうして、そう思うの?」

「だってかんちゃん、今ものすごく寂しそうな顔してるよお?」

言い返せなかった。

ピンポイントで私の感情を当ててきた本音ちゃん。ほんと、いつもはあんなにやる気なさそうなのにこういう時だけ彼女はすごくなるっていうか。

「ああ、当たってたあ?」

「どうして……分かったの?」

「分かるよお」

にへら、と本音ちゃんは屈託のない笑顔で。

「私のかんちゃんの専属のメイドだからあ」

私はそれを聞いて口元が緩むのを感じる。専属メイドっていうよりは親友っていうくくりのほうがしっくりくるような気がするけど、本音ちゃんだからなあ。

「本音ちゃん……」

「なあにかんちゃん?」

「ありがとう」

「えへへえ、どういたしまして」

私たちは笑い合って、給食の続きを楽し——、

あれ。

私のプリンがない。

チラッ（私が本音ちゃんを見る）

テヘッ（本音ちゃんテヘペロ発動）

本音ちゃんの机には、空になったプリンの容器が二つ（・・・）。

……絶交、しようかな。



「ただいまー」

「あらお帰り姫無。今日は早かったのね」

「うん。五時間目までしかなかったから」

私は脱いだ靴を丁寧に並べて廊下を歩いていく。あの体育の時間以降、大輝がなにかにつけてこつちをジロジロ見てくるのが気になって仕方がなかった。根に持っているんだろうか。そんな男の子はモテないだろうに。

私はランドセルを自分の部屋に放り込んで、とある部屋へと早足で向かう。

「ただいま、兄さん」

やって来たのは兄、更識形無の私室。私がいつも寝ている部屋だ。最近兄さんが居なくても躊躇なくこの襖を開けることが出来るようになってきた。

今となつてはここが私の私室と言っても間違いいではないような気さえする。少しずつ私物も持ち込んできているし。

私は軽く周りを見回して、兄さんの勉強机の上に置かれた写真立てを手に取る。

写真には笑顔で写る更識家の面々に父さんの部下たち。総勢五十人にも上る大人数の中心に、私や簪、そして兄さんが居る。

「……はあ、」

会いたいなあ。

出きるなら、今すぐにでも会いに行きたい。

電話とかならいつでも出来るじゃないか、とか思うかもしれないけどそれも実際は難しい。なんと言つても兄さんは世界に今のところたった二人しかいないI Sを操縦できる男性。しかもあの『黒執事』だ。世界各国からしてみれば喉から手が出るほど欲しい人材に違いない。

もちろん日本政府としてもそういった各国からの圧力に屈すると

兄さんを何処ぞに取られちゃうわけだから、兄さんの周囲にはとてつもなく嚴重な情報規制とかがされているみたい。それは家族からの電話一つとつてみても例外はないらしく、たった一回の電話のために幾つもの仲介が入ってしまったって凄く時間がかかる。

だから、滅多に電話なんて出来ないんだよね。

「あ……」

「あら簪、こんなところにどうしたの？」

不意に開いた襖の先に立っていたのは我が妹である簪。向こうもここに私が居るとは思っていなかったのか少しばかり驚いているみたいだ。

「……お姉ちゃんこそ、ここでなにしてるの……？」

「何って、特になにも」

「じゃあ、その手に持つてる写真はなに……」

「あの時撮った写真よ、ほら」

なにやら不機嫌になりつつある簪へ私は持っていた写真立ての写真を見せる。

「ははあん。どうやら簪も兄さん成分をここに撮取しにきたみたい。写真を見た途端に頬が緩んでいくのがわかる。」

「お兄ちゃん……早く帰ってこないかな……」

「夏休みには帰ってくるって言ってたじゃない」

「そんなに、待てない……」

同感。夏休みまでまだ三ヶ月以上もあるわけだし、それまで兄さんに会えないのは苦行以外のなものでもない。簪も耐えられないのか、若干涙目になっているようにも見えた。

「簪」

「……なに」

「そんな顔じゃあ兄さんに笑われちゃうわよ？」

「!?」

「泣いた顔見たって兄さんは喜んじやくれなと思うけど」

「……な、泣いてなんか、いないもん……!」

ぐしぐしと目元を擦りながら言われても説得力ないなあ。

全く、可愛いやつめ。

「ほら」

「え……」

「もうすぐ母さんが夕飯の準備始めるわ。手伝いに行きましょう」

兄さんに会えないのはもちろん寂しいけど、なにも一生会えないわけじゃないし。取り敢えず今はこの泣き虫な妹を一人前にすることが私の仕事かな。更識流もこの子はまだまだ会得できそうな感じじゃないし。

「簪。お姉ちゃん頑張るよ」

「……なにを……?」

「色々っ!」

そう言っつて私は簪の手を取り、母さんが居るであろう台所へと駆け出した。

## #23 同棲はその時点でフラグ

前回のあらすじ

部屋に入ると目の前にはとんだカオスが

よし。

じゃあちよつと状況を整理してみようか。

授業を終えた俺は女子寮に隣接している俺の寮（一軒家に近い）にやつて来た。高級そうなカードキーを通してドアロックを解除して部屋に入って見れば――、

「おかえりかーくん!! ご飯にする? お風呂にする? それとも――」

「言い直す必要ないからな」

取り敢えず目の前のウサギを正座させて、俺は備え付けのベッドに腰掛けた。はあ、今日一日全くとっていいほどに気の休まる時間がない。

「で? さっきの、どういうことだよ束」

一先ず話を聞こう。コイツが何で入学式やら授業やら出なかったのに俺の部屋に居るんだ、という理由とか諸々を。

「んー、束さんが入学式とか授業に出てなかったのは単にその必要がないからなんだよねえ」

「は?」

「だってだってかーくん。ここIS学園は何を学ぶところ?」

「……あー」

今日授業で同じような質問をやまよにされた記憶が蘇ってきたが、束のその言葉で俺は大体納得してしまった。

此処はIS学園。

言うまでもなく、この学園はIS関連の事柄を学ぶ為に設立された

学園だ。ではこのIS、発案制作したのは一体誰だったか。

目の前のこの一見（見た目以外は）普通の少女だ。

つまりはそういうことなんだろう。ISを開発し世に送り出した張本人が、何故今更基礎理論なんだと勉強し直さなければいけないんだと。

俺は額に手を当てて小さく溜め息を一つ。

「……まさか無断で授業さぼったわけじゃないよな？」

「まつさかー。ちゃんと学園長から（無理矢理）許可取ってるよー」  
………

カツコの中は、うん。きつと気にしたら負けなんだろう。

今更ながらこの篠ノ之束という人間には常識が通用しないなあとつくづく思われる。どっかの学園都市第二位じゃないが、束の頭脳や行動力はハッキリ言っつて常識外れ、異常だ。

「流石にこの束さんのいろんな条件をのみまくつてたから学園長も冷や汗ダラダラだったけどね」

「お前一体どんな条件出してこのIS学園に入学したんだよ……」

全くもってイヤな予感しかない。きつと無理難題吹っ掛けまくつて学園長を困らせたんだろう。学園長、南無。

「だつてだつて聞いてよかーくん！ 日本政府の目が常に届く場所ではないかと、つて完全に監視下に置くつてことでしょ？ 束さんにはそんなの我慢できなかつたんだよー!!」

「いや確かにそうだろうけどお前の場合仕方ないような気もする……。すぐ雲隠れとかしそうだし」

「むう。なにかなかーくん。それじゃまるで私が逃げたくて仕方ないみたいじゃない」

正にその通りだろ。

基本的に自由奔放やりたい放題がモットーな束のことだ。政府からの監視の目を嫌って身を隠すなんてことは容易に想像することができる。

「まあまあそんなことはいいんだよ」

「お前が言うな！」

自由奔放すぎるというのも困りものだ。

「それでねかーくん。なんで束さんがこの部屋に住むことになったかって話なんだけど」

「ああ」

「私が此処じゃなきやISの情報提供しないぞって政府とIS学園に打診したから♪」

「ミシッ!!」

「痛い痛い!! 頭蓋骨が! 頭蓋骨が!!」

「束、それを世間では我が儘や横暴というんだ」

俺からしてみれば理不尽以外の何物でもない。ただでさえ束の策略で女子だらけのこの学園で三年間を過ごさなくてはいけなくなつたのだ。常に周囲に女子女子女子というのは想像以上にキツイものがある。何せ男子が俺と織村のたった二人、更には知り合いも現時点では極僅かしかないという孤独な状況。

そんなIS学園の中で唯一プライベートな空間として使用できるのがこの寮だったのだが。

目の前の天災のせいで俺のプライベートな空間は一瞬にして瓦解してしまった。

というかだ。

「なんで束が俺の部屋に強引に住み着く必要があるんだよ。それこそ自分専用の部屋や研究室くらい用意してもらえるだろ?」

「……………」

むっすゝ、と頬を膨らませてジト目でこちらを睨んでくる束。なんだ、その『ダメだコイツ』的な視線は。

「な、なんだよ」

「かーくんは一回女心を真剣に学んだほうがいいと思うよ」

女心。分かっているつもりでいたんだが、どうやら束からしてみれば俺は全く女心が理解出来ていないらしい。姫無や簪のことならなんでも分かると思うんだけどな。

「かーくん」

正座したままでぶすつとしたままの束がジト目そのままに俺に問

い掛ける。

「ん？」

「目の前に束さんが居るのに今別の女のこと考えてたでしょ。しかもちーちゃん以外の」

ギクツ。

何だこの束の勘の鋭さは。……………いやいや、というか俺もギクツて可笑しいだろ。なんかやましいことでもあるみたいじゃないか。

「妹たちのこと考えてたんだよ」

「ああ、ひめちゃんたちのこと？」

ひめちゃん、というの言うまでもなく姫無のことだ。他人にはどこまでも興味を示さない束だが、どういうわけか俺の妹である姫無と簪には少なからず興味を抱いている。俺の妹というのが関係しているのかは定かではないがともかく、束が名前で呼ぶ数少ない人物の中に姫無たちはバツチリとカウントされているのだ。

いや、今はそんなことはどうでもいい。今問題なのは俺の意向を完全に無視して束が俺の部屋に住み着こうとしていることだ。ただ単にイタズラやドツキリのようなものなら良かったのに、この天災は学園長のまで正式に許可を取っていやがるらしい。おい学園長、学生の不純異性交友は禁止されて然るべきだと思うんだが違うかね。

「どうしても住み着く気か？」

「住み着くもなにもここはもう私とかーくんの愛の巣だよ」

「出てけ」

「流された上に扱いが雑ツ!!」

うるさい。いくらいつメンだろうが年頃の男女が一つ屋根の下で同居なんてできるか。いや厳密には俺は年頃ではないんだろうけど。「んー。でも困るのはかーくんだと思うよ?」

「? なんぞだよ」

「リリイースターライ」

げつ。こいつ授業居なかった筈なのになんぞ知ってるんだよ。

「それはもちろんかーくんの制服に仕込んだ超高性能カメラでばっちり……………」



「これか」

「あー!! やめてやめて握り潰さないでー!!」

俺は制服の内ポケットに精巧に隠されてあった隠しカメラを発見し、即座に破壊。束が何か言ってるけどいつものことだから構わない。

「でだ。リリイの名前を出したってことは」

「うん。アイツ、かーくんのこと怪しんでるでしょ」

それはまず間違いない。教室で話をした時も俺を訝しむような視線をバツチリ感じてたし。

セシリア程ではないにせよ、やっぱり女尊男卑って浸透してきているのかなあ……。

「それが理由で俺が困るのはわかる。でもお前がこの部屋に住み着くことでその問題が解消されるかって言ったら、ならないだろ」

正直、リリイという少女に本当にISが乗れるのかと疑われているが、実際はただのチート能力だ。それがバレたら俺はあつという間に実験動物かなにかにされてしまうだろう。

それだけはなんとしても避けたい。いや避けなければならない。

「そこで束さんの出番なんだよー!」

正座を崩して立ち上がった束は意気揚々として。

「私がかーくんの『黒執事』の設定を此処で考えてあげる」  
「設定?」

「そう。かーくんが乗るとされている(……) IS 『黒執事』は、一体どんなスペックでどんな代物なのか。はつきりさせておいたほうが都合がいいでしょう?」

「そりやそうだけど……。それって別にこの部屋じゃなくても出来るんじゃない?」

「それだと万が一の時にうまく対処できない可能性だってあるよ」

ううむ。確かに『黒執事』の詳細なスペックを立てておくことは重要だ。普段の待機形態は……これは言うまでもないか、制服に指定されてしまったこの執事服だな。あとはなんで他のISみたいなパ

ワードスーツじゃないのかとか、武装とか。掘り下げていくと到底俺だけの手には負えないな。

「……てことはなにか、束が俺の情報を操作してあたかもISを操縦してるかのように見せるってことか？」

「もちろん。かーくんのあのチカラがあれば全然可能だと思うし、なにより束さんはかーくんと一緒に居たいんだよ!!」

おい後半部分が本音か。

「……………はあ」

俺はもう癖になりそうな溜息をついて一言。

「とりあえず、保留」

チキンとか言うな。

間違つても超えちゃいけないものがあるんだよ。



「更識、形無……」

ディスプレイに表示された文字を口に出してから、リリイは頬杖を ついてそれをスクロールさせていく。

更識形無。

世界で初めてISに乗れることが発覚した男性IS操縦者。

世界でたった三人しかいない専用機を持つ人間の一人。

「……………」

認めない。

私は、貴方を。

リリイは、授業中の形無を思い出して下唇を噛んだ。

輪郭を掴ませないような飄々とした態度。面倒くさいのかやる気が見えないあの仕事。

思い出しただけで腹が立つ。

「女性の社会的地位が上がり始めたと思ったら、あんなのが……」

彼女の祖国、イギリスではISの研究が世界に先駆けて開始された。その甲斐もあつてか、徐々に骨格のようなものはできあがりつつあるのだ。ISの簡易適正検査でAだったリリイはこの学園に入学したが、それは選ばれた存在であるからだと自負している。女性にしか使えないIS、それに搭乗する資格を得られたのだから。

しかし、入学間際、リリイは信じられないニュースを耳にする。あの『黒白事件』に関わっていた二機のIS。その片方の操縦者が、男性だったというのだ。

信じられなかった。

信じたくなかった。

「見ていなさい……」

ディスプレイを閉じたりリリイは、静かに呟く。

「必ず貴方の化けの皮を剥いでみせます……!」



「ふう」

女子寮から男子寮へ繋がる廊下を歩きながら、私は軽い足取りで目的地を目指す。

授業中そつけない態度を取ってしまったことへの謝罪、という大義名分のもと、織斑千冬は形無の部屋へと向かっているのだ。

「いきなり押し掛けてはマズイだろうか……い、いや。問題はないはずだ。なにせ私たちは『いつメン』なのだからな!」

妄想を最大限に膨らませている少女に、最早周りの声は聞こえない。暴走列車の如く突き進んだ先に見えてきた目的地に、千冬は自身の胸が高鳴るのを感じる。

(あ、あれが形無の部屋か……)

女子寮とは違い一戸建てのような建物。男子は二人いるはずだがもう一人は一体何処にいるんだ、と気にならなくはなかったが、それ

も残念なアイツかと思っただら気にならなくなった。

扉の前で立ち止まった千冬は一度呼吸を整え、ノックするべく右手を扉の前まで持ち上げる。

(よ、よし……)

意を決してノックしようとした瞬間、扉の向こうからそれは聞こえてきた。

『だーから保留だつて!!』

『男らしくないよかーくん!! こういうのは潔さが大事なんだから!!』

『だからって何で選択肢が束と同棲の一択しかないんだよ!』

「……………」

アレ? オカシイナ。

奥から聞こえてくる言い争いに、千冬はヒクツと口元が引きつった。

今有り得ない単語が聞こえたような気がした。

同棲? 形無が? 束と?

ブチッ

ガチャッ

「ん? ……………あ」

「ち、ちちちちちゃん!」

「さあ、どういふことか説明して貰おうか……!!」

修羅と化した千冬に、俺と束はただ恐怖するしかなかった。

## #24 行事参加はその時点でフラグ

前回のあらすじ

鬼、降臨

「……ああ、酷い目にあった」

束が俺の部屋に住み着くだなんだと言い出して問答していたところに鬼千冬が現れ、酌量の余地なく制裁された翌日。

俺は教室の机に突っ伏していた。

あれからたつぷりと絞られた束は取り敢えず（……）退散し、俺はゆっくりと床だったので睡眠はしっかりと取れている。にも関わらず俺がこんなにもげんがりしている理由。それは。

「（更識くん疲れてるのかな）」

「（これチャンスなんじゃない？）」

「（執事服……良いっ！）」

最前列の座席故に話し声しか聞こえないけど、ひそひそ話もしつかり聞こえちゃってますよ。

更に。

「……………」

これを俗に無言の圧力とでも言うのだろうか。

視線の主は多分リリイだろう。疑惑の視線が穴を開けるくらいヒシヒシとこちらに伝わってくる。

俺が机に突っ伏している理由は以上の二つ。総じて言ってしまうと、女子からの視線に耐えられないのだ。

（なんか見せ物にされてるみたいで嫌だなあ……）

俺は客寄せパンダか何かと間違われてるんじゃないだろうか。

「形無」

「ん、おお千冬」

突っ伏していた俺の席までやってきて声を描けてきた千冬に、俺は起き上がって答える。

「結局、どうするつもりなんだ？」

「何を？」

「クラス対抗戦の話だ」

ああ、それか。

俺は今朝のSHRでやまよが言っていたのを思い出した。

『クラス対抗戦はISに慣れていない生徒が多数のため、冬季に行うものとします。尚、クラス代表二名のうち出場するのは一名なので更識とリリイは話し合っ決めておくように』

ということらしい。

考えてみればクラス代表の中でISに慣れている（表面上）のは俺だけだし、この時期にやるのは無理があるか。そしてそのクラス対抗戦（リーグマッチ）に俺とリリイのどちらが出場するかだけど、この刺すような視線を受けた感じじゃありリイが出ることになりそうだな。俺も変なところでフラグ建てたくないし。

「リリイでいいんじゃないか？」

「またそんな腑抜けたことを……」

「彼女イギリス出身らしいじゃないか。ISの研究先進国なら適任だと思うけど」

「それを言うならお前は『黒執事』のIS操縦者だろう」

「俺IS相手にして闘ったことないし」

「誰だってそうだ」

ミサイルや戦闘機相手になら立ち回れる自信があるんだが、ISが相手となるとなあ。まだまだ第一世代の実験機という枠を出ない機体ばかりの中で俺が戦えば、十中八九勝てると思う。だが俺のスペックをどう誤魔化せばいいんだ。

年を経るごとに進化していくISと違って俺の『黒執事』に進化はない。最初からレベルMAX状態だし。

だからあまり手の内とか見せたくないんだよ。

「束にスペックを身繕って貰ったんじゃないのか？」

「その前に千冬が来てあの有り様だ」

「あ、あれは束が悪いんだ！」

「いやいきなり扉蹴破って突入してくるのもどうかと思うけどな!？」

「男女で一緒に住むなんて不純だ！」

「昨日お前も一緒に住むとか喚いてたじゃねーか!!」

顔を赤くして大声を出す千冬について俺も声量が大きくなる。昨日部屋にやってきた千冬が束を説教した後に言い放った一言が、

『わ、私も此処に住んでやる』

意味が解らない。

つい数秒前までお前は束をそのことで説教していた筈だろう。何故に話がそつちに逸れていく。

というか、千冬も束も俺を一体何だと思ってるんだ。僧侶か何かと勘違いしていないか。

俺だって男だ。そりや一線を踏み越えることなんて無いと思うが不眠症になることだけは間違いないだろう。

「はあ……、」

「何だその溜息は」

「察してくれよ……」

まさか休息を取る筈の休み時間にまで溜息をつくことになるとは思ってもしなかった。



「とういうわけで二組のクラス代表は織村一華さんに決定しました。織村くん、よろしくね」

「ういっす」

一年二組の教室。その教壇に立つ担任の女教師の隣に立つ俺は、こちらを見る視線に応えるように笑顔を作ってそう言った。

まあ俺がクラス代表に選ばれたのも当然と言えば当然。何せ世界に二人しかいない男性IS操縦者だ、知名度と実力はこのクラスで頭二つ以上抜けた存在。俺が選ばれない理由がない。

「じゃあ抱負を一言お願いね」

「はい。えー、クラス代表になりました織村一華です。俺がクラス代表になった以上、これから先にある行事では全て優勝するつもりで頑張るんでよろしく」

クラスメイトたちからの拍手を受け、俺は自分の席へと戻った。ふう、掴みは上々、後は俺が活躍するだけだな。

だが、一つ障害が立ちはだかっている。

そう。

馬野郎だ。

クラスの女子たちが話していたのを聞くところによると、どうやらアイツも隣のクラスで代表になったらしい。まったく、どこまでも俺の二番煎じみたいな野郎だな。

しかもアイツと千冬、束は同じクラス。これはもう誰かの陰謀としか思えねえ。そんなに俺と千冬たちとの仲を切り裂きたいのか。

だが残念だったな。これくらいで俺たちの仲は切り裂けねえよ。なんてつたつて幼稚園からの幼馴染だからな。俺は千冬や束が小さい頃からずっと一緒だったんだ、あんな奴（形無）とは年期が違う。見てろ、直ぐに彼女たちを取り戻してやるから。

とは言っても、馬野郎を直接叩き潰せると思っていたクラス対抗戦は冬期に持ち越しになっちゃった。それはまあ他のクラスの女子たちがISに慣れてない状態でやっても話にならないだろうから仕方ないんだが、そうになると奴を叩き潰す大義名分がなくなっちゃうんだよな。裏路地で暗殺なんて真似はできねえし、どうしたもんか。

「ねえねえ、織村君？」

「ん？」

おつといけねえ、考え事してて話し掛けられてることに気付かなかった。えーつとこの子は……ああ、中条さんって言ったか。

「なんだい中条さん」



「名前、もう覚えてくれたんだ」

「まあね」

一応このクラスの子供たちの名前は脳内にインプットしてある。本命は千冬たちとは言え、主人公ってフラグ建てまくっちゃうもんだからな。いざという時のために下準備は万端だぜ。

「それで？ 何の用かな」

「うん、来週のことなんだけど」

?? 来週？

なにか俺はこの子と約束なんてしていただろうか。

「何か約束とかあったっけ？」

「ああそうじゃなくて、ほら来週ってさ」

中条さんは一旦自分の席に戻って机上に置いてあった何かを取り、小走りでこちらに駆け寄ってきた。その取ってきた何か。冊子みたいなものを俺の前に持ってきてきて。

「臨海学校があるじゃない？」



「臨海学校……？」

昼食を摂った後の五時間目。こと睡魔に襲われやすいこの時間帯、その睡魔は漏れなく俺にも襲いかかってきており、うつらうつらしながら話を聞いていると担任であるやまよが教壇に立ちながら手に持った冊子を見せ、そんな言葉を言い放った。

既に意識の八割程が夢の世界に旅立っていたがそれを無理やり現実に戻し、伏さっていた身体をゆっくりと起こす。

うーん……、臨海学校……。

それなんかフラグじゃねッ!?

「? どうかしましたか更識くん?」

「あ、いえ。なんでもないです」

最前列、しかも教壇の目の前というこの席の場所は大いに目立つ。俺の意識が覚醒した瞬間もバッチリと目撃されていたみたいだ。

「では話を再開します。来週の週末の三日間、貴方たちには臨海学校に行ってもらいます。全員パンフレットは貰いましたね?」

言われて俺は自分の机の上に置かれていたオレンジ色の冊子に目をやる。表紙にデカデカと書かれている『校外特別実習』という文字に、俺はワクワクドキドキといった高揚感よりもむしろ焦りや恐怖といった不安感に苛まれていた。

だって臨海学校だぞ? 原作だと一夏たちが思いっきり事件に巻き込まれたあの臨海学校だぞ? 誰が好き好んでそんなフラグ密集地帯みたいな場所に行きたいと思うんだ。正直に言おう。俺は行きたくない!!

「日程は三日間ですが皆さん、これも授業の一環であるということをお忘れないように」

そんなやまよの声は届かないのか、後ろの女子たちはワイワイと騒がしくなっていく。

「ねえねえ水着買った?」

「今週末に買いに行こうよ!」

「水着ってもう売ってるの?」

「駅前のショッピングモールなら売ってるんじゃない?」

え、水着?

皆、まだ四月だぜ。海に入るにはまだ寒いだろう。そもそも海開き自体されてないと思うんだけど。

なんて考えていると配布された冊子には。

『この地域は潮の流れの関係で水温が高く、四月上旬には海開きがされています』

なんて文字が。

なんてご都合主義だろう。

「それでは二日目に行うIS稼働の班を決めてもらいますね」

今日から早速始まったIS関連授業。受けてみれば束の理論を高校生にも理解できるように極限まで噛み砕いたものだった。だから俺は理解できたけど、流石にいきなりこんなものを聞いて彼女たちが完全に理解出来る筈はない。肝心なところはそのまま引用されてたりしたから難易度は高いだろうし。

そう思っていたんだが、彼女たちはあつさり授業をこなしていた。

うーん、流石あの倍率を突破してきたエリートだけはあるってことか。

そんな優秀な彼女たちだけど、やっぱり根は遊びたい盛りの十代女子。やれ水着だのやれ化粧だのといった会話がそこかしこから聞こえてくる。

さっきのやまよの言葉は完全に忘れ去られてんな。

「班は各自今週中に決めて私の方に提出してください。各班三人程度で」

すると。

「更識くん!! 私たちの班に入らない!？」

「是非うちの班に!!」

うわあ。雪崩みたいにくラスの皆が俺の席に押しかけてきた。パワフルにも程があると思うんだ。

「あー……、えーっと」

俺は困ったこの状況をどうにかしようと、千冬のほうに視線を投げて見た。

しかし。

「……………（むっすー）」

なんであんなに不機嫌そうなんだろうか。

助けを求めようにも、まず目を合わせてくれない。

「うーん、ごめん。誘ってくれて嬉しいんだけど、俺は千冬たちと組むよ」

たち、というのはおそらく束も（密かに）来るだろうと思ったからだ。

「織斑さんと？」

「ああ。だからごめん」

「織斑さんとはどんな関係？」

「幼馴染みたいなものかな」

それを聞いた女子たちはかなり残念そうに自分たちの席に戻っていった。まあ確かに俺は専用機持ちつてことになってるから勉強熱心な彼女たちが俺と組みたがる（違います）のはわかるけど、人にモノを教えたりするのって俺そこまで得意じゃないんだよな。だから気兼ねしない千冬とか変態成分を抜いた束とかのほうが俺も楽だし。

その当の千冬だが。

さっきまでの不機嫌顔はどこへやら。なにやら目を丸くしてこっちを見ている。頬が赤くなっているのは俺の気のせいだろうか。

「おい千冬ー」

「ひ、ひやいつ!？」

千冬の席まで行って頬を突っついてみると面白いくらいに驚いていた。

「どうした？ 顔赤いぞ」

「な、なんでもない！」

「そうか？ 無理してないか？」

「してない！ それに近い、近い!!」

鼻先数センチの所まで顔を寄せていたためか俺の顔をグイグイ押し返す千冬。痛い痛い！ 俺の顔面が目も当てられないような造形になるからそんな力で押し返すな!!

「はあはあ……、いいのか？」

「なにが？」

「班のことだ。あんなに言い寄られていたじゃないか」

「なんだそんなことか。いいんだよ」

俺は千冬を真っ直ぐに見つめて。

「俺はお前たちと組みたかったんだから」

我ながらキザかなあとか思いつつも言ってしまったものは仕方ない。

しかし、さつきよりも千冬の顔が更に赤くなってるのはなんで？

## #25 二人っきりの買い物はその時点でフラグ

前回のあらすじ

臨海学校

又の名を旗密集地帯

さて。臨海学校が来週の頭にまで迫ってきた週末のある日。俺はIS学園の敷地外の駅前、噴水の脇に立っていた。服装もいつもの執事服とは違い………なんてことはなく当然のように執事服を着ているんだが。

しようがないだろ!?

これが俺の『黒執事』の待機形態ってことになっちまってるんだから。私服で出掛けて他の生徒に見つかったら言い訳が出来なくなっちゃうし。

………あれ?

じゃあ俺臨海学校で泳いだりするとき一体どうすりやいいんだ?

まさかこのまま泳ぐわけにもいかんだろうし。まさか、一人パラソル差して砂浜で体操座りコース!?

そんな生殺しは勘弁願うぞ。いや眼福には違いないんだろうけど。というかだ。駅前にこんな燕尾服着て立っていると、周囲からの視線がそれはもう凄まじい。

一応束に脱いでも問題がないような設定にしてくれとは言ってるんだけど、如何せんまだ設定が完成していない故にこの恰好で出歩くしかない。

いやほんとにこの服目立って恥ずかしいな。学園じゃそんなことあんまり気にならなかったのに今この場に於いてはもう逃げ出した

い。

じゃあなんでこんな所で一人突っ立っているのか。理由は簡単、待ち合わせをしているからだ。待ち合わせの時間は午前十時、今は九時五十分だからまだ時間的には少し早い。

いや確かに待ち合わせ時間までは少しあるんだけど、おかしいな。アイツのことだからもう来てもいい頃なのに。

ていうか同じIS学園の寮に住んでるわけだから一緒に出ていけばいいだろうに彼女は別々に集合しようと言って聞かなかつたんだよ。まあ特に断る理由も無かつたからそのまま了承したんだけど、今更ながらに内心で叫んでもいいだろうか。

(早く来てくれ千冬ーーッ!!)

こんな周囲から好奇の視線に晒されて俺のライフはガリガリ削り取られているよ。現在進行形で!!

「か、形無……」

耐え難い視線の中に立ち尽くす俺の名前を呼ぶ声が背後から聞こえてきて、そのままゆっくりと振り返る。

そこに立っていたのは、俺がよく知るはずの少女。

「千冬……?」

「な、なんで疑問系なんだ!」

「だってその格好……」

「……似合わないか?」

「いや、よく似合ってるけどなんか新鮮でさ」

これまで私服とか散々見てきてる筈なのに、いやに新鮮に感じる。千冬の格好は真っ白な膝下まであるロング丈のワンピースに薄手の上着を一枚羽織ったなんとも清楚な出で立ち。いつもクールな印象を与える千冬とは正反対と言ってもいい服装だった。

「新鮮とはなんだ新鮮とは。わ、私だってこういう服を着たりもするぞ」

む。どうやら俺がからかっていると思っただらしい。いや千冬、今の

格好見てからかったりする奴はいないと思うぞ。似合い過ぎてどっかの令嬢みたいだからな。なんか隣か後ろに執事でも従えて歩いてそう………俺か!!

改めて自分達の格好を合わせて見てみると完全にこれ『お嬢様と付き従う執事』の構図だぞこれ。

……ああ、なんかより一層周囲からの視線が突き刺さるようになった気がする。気にしないようにしよう、そうしよう。

「? どうした形無」

「いや、何でもない」

訝しげに首を傾げる千冬。彼女はこの周りから突き刺さるような視線が全く気にならない、もしくは気付いていないらしい。流石ブリュンヒルデ、図太い神経をお持ちのようだ。

「んじゃまあ、とりあえず行くか」

「あ、ああ」

こんな人が多い場所じゃあ落ち着ける筈がないし、碌に買い物なんぞ出来そうにない。俺は千冬の手を引いて、ショッピングモールへと向かった。



私は急いで集合場所へと向かっていた。時間は集合時刻の約十分前、本当ならもっと早く着いて形無を待つ筈だったのに、白いワンピースにするか私らしくYシャツにスラックスにするかで迷っていたらいつの間にか流れるように時間が過ぎ去ってしまった。

結局最後の最後で最近購入したワンピースのほうを選択して着替え、駅前へと向かっているというわけだ。形無はもう来ているんだろうか。いや、何も問題はないだろう。こういうときは大抵男性が先に来ているものだし、ああでもそうになると心の準備が……!!

そんな変な矛盾を抱えながら走っていると、視線の先にあるものを



捉えた。これまで散々見てきた男子の背中だ。心なしかワナワナしているのはきつと気のせいだろう。

(……どう声をかけるべきなんだ)

走っていた足が形無を目の前にして止まる。いや、止まってしま

う。  
此処に来るまでは必死で走ってきたために自分の服装のことなどで頭の隅に追いやられてしまっていたが、いざ形無に見られると思うとどんな反応されるのか心配になってきた。

似合わないって言われたり、怪訝な表情されたらきつと私は立ち直れない。お願いだから、そういうことにならないでくれ……!

ゴクツと生唾を飲み込む音がやけに大きく聞こえる気がする。私は意を決して形無の背後から声を掛けた。

「か、形無……」

目の前で執事のような格好をしている少年はそれに反応してゆっくり振り返って。

「千冬……?」

「な、なんで疑問系なんだ!」

恐れていた第一声は、なんとも素頓狂なものだった。

全く、これじゃあビクビクしていた私が馬鹿みたいではないか。

さつきまでの私の緊張は一体何だったんだ。

「だってその格好……」

ドキッ。

瞬間的に私の心臓の鼓動が速くなる。やっぱり似合っていないと言われてしまうのだろうか。

「……似合わないか?」

恐る恐る、聞いてみる。

「いや、よく似合ってるけどなんか新鮮でさ」

それを聞いて、私はホツとした。それと同時に新鮮という単語に引っ掛かるものを覚える。

新鮮?

じゃあなにか。私のこの格好は物珍しいということか。いつもの

制服やデニムといったラフな格好は見飽きたということなのか。

「新鮮とはなんだ新鮮とは。わ、私だっぺこういう服を着たりもするぞ」

形無はいつもこうだ。デリカシーがないとかそういうわけじゃないがどこか抜けているというか、女心を理解していない節がある。そのくせ私や束以外の女生徒にも優しくしたりするから尚のこと質が悪い。

「? どうした形無」

「いや、何でもない」

なんだか顔色が悪いが、一体どうしたんだらう。ついさっきまで普通だったのに。

「んじやまあ、とりあえず行くか」

そう言った形無は、いきなり私の手を取った。

(え、ええ!?)

突然の事に顔が熱くなるのを自覚せずにはいられない。なんだなんなんだなんなんですか。ほんとにこの男は私の寿命を縮めようとしているんじゃないかと疑ってしまうほど心臓に悪いことをする。

でも、それが心地よかつたりもするから不思議だ。

……これってデートではないだらうか。

そんなことを思うと余計に緊張してしまつて。

「あ、ああ」

形無に返せた言葉はこれが精一杯だった。



俺と千冬がやってきたのは駅前に聳え立つ一際大きなシヨツピングモール『レゾナンス』だ。駅前に聳え立つ、というか駅舎を含んだ周囲の地下街と全てと繋がっているため、厳密には駅前とは言わないのかもしれないが昔から駅前と呼ばれているらしいからそこらへん

は気にしない。

此処にやってきた目的は間近に迫った臨海学校で着用する水着を購入すること。

だけどまあ、やっぱりというか何と言うか。考えることは皆同じということなんだろう、シヨッピングモール内にはIS学園の生徒と思われる女生徒たちがちらほらと視界に捉えられる。皆一様にその足の向かう先は水着売り場みたいだ。

うーん、やっぱり混んでるなあ。千冬にこの買い物に誘われた時点である程度予想はついてたけど、はつきり言って居心地が悪い。

「どうした形無。さつきと行くぞ」

「いやいや千冬ちよつと待て」

「……？」

「いや『なにが？』みたいに首を傾げるな！ 普通に考えて男の俺が女物の水着売り場に入るなんておかしいだろうが!!」

さつきも言ったが俺の周りは360度どこを見回しても女性しかない。理由は当然俺と千冬の目の前にあるこの水着売り場があるからだ。ISが発表されてから約一年半。俺や織村といった男性のIS操縦者が早い段階で現れたことにより過去に原作で読んだような明らかな女尊男卑に陥ってはいないものの、それでもやはり少なからず女性優位の社会は築かれつつある。世の男性は女性優位の社会に納得などしていないだろうが男性の操縦者が今の所たった二人しかいないのだ。比率など比べるまでもない。

故に、デートで訪れるカップルでもない限りこういった女性が多く集まる場所に男性は足を向けようとはしないのだ。

「形無。私は水着を買いに来んだぞ？ 水着売り場に入らなくてどうする」

「ここには女物の水着しか置いてないだろうがッ!!」

「あとで男物の売り場に行けばいいだろう？」

「俺に拒否権は!?!」

「ない」

なんつう横暴だ、千冬。逃げようにも繋いだ手が全くと言っていい

ほどに離れない。というか強く握られてしまっているんだ。痛い痛い！ 握力測定してんじやねえんだぞ!!

はあ、と俺は千冬に気づかれないうように小さく溜息を吐く。こうなったらしょうがない。早いトコ千冬に水着買ってもらってここを出よう。ただでさえ女物の水着が周囲にあつて落ち着かないのに、中に居た女性客の視線が突き刺さってすぐにでも回れ右したい気分だ。

「なあ形無」

「うん？」

「こんなのはどうだ？」

「ぶはっ!？」

なにやら自身満々で千冬が手に取ったのは極端に布面積の少ない、所謂キワドイ系の水着。しかも紐。上なんてピンポン玉くらいの面積しかないんじゃないのか!?

「却下!」

「そうか」

言われて元あつた場所に戻す。

そして。

「じゃあこんなのは——」

「やめろ千冬。それは明らかに地雷だ」

こんなものを幼気な女子校生が着けちゃいけません!! つーかこんなのをよく売ってたな。どう考えてもアウトだぞアウト。それもギリでアウトじゃなくてモロにアウト。野球なら危険球。サッカーならボール持つてトライ決めるくらいの代物だ。え、どんなのかつて?

それはこんな所じゃ教えられないな……。

「むう。ならばどんなものがいいのだ」

「せめて普通のにしてくれ……」

今更だけど、千冬の感性つてどこかズレてるよなあ。あんなのチョイスするくらいだし、あの天災に影響されちゃったのかね。

「じゃあこんなのはどうだ？」

そう言つて俺の前に突き出されたのは二枚の水着。一枚はスポーティーながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーさをも醸し出

している黒の水着。もう一枚は対極で、一切の無駄を排除しましたと言わんばかりの機能性重視の白い水着。どっちもビキニタイプのもので最初に千冬が提示してきたもの程ではないにせよ、肌の露出具合はかなり高い水着だ。

……あれ？

なんかこの二つ見覚えというか既視感があるな。

(あ、これ一夏に選ばせた二枚にそっくりなんだな)

原作で一夏に水着を選ばせていた千冬。あの中では一夏の視線でどちらがいいか見抜くほどの洞察力を披露したが、今日の前にいる千冬にそんなものは微塵も感じられない。ただ海で楽しく過ごすために良い水着を選ぶ。それだけに彼女は必死に悩んでいるようだ。

「どっちがいい？」

「うーん、どっちも良いとは思うけど……」

俺は顎に手を添えて数秒考えてから。

「黒い方がいいんじゃないか。千冬に似合うと思うぞ」

一夏と被せたわけじゃなく、千冬に似合うのは黒のクールな感じだと思っただけだからだ。今着てる白いワンピースも似合ってるけど、やっぱりクールな千冬のほうがいいんじゃない。

「そ、そうか。ならこれにしよう」

言われた千冬は若干頬を赤くして白い水着を戻し、黒の水着片手にレジへと向かっていった。

ふう、千冬が買い物に時間をかけるタイプじゃなくて良かった。とりあえず此処を出て外のベンチで待つて——

「ちよつと」

——？

不意に隣から聞こえてきた声に反応して、顔をそちらに向けてみる。そこには全く知らない女性が腰に手を当てて立っていた。

……何だろうな。物凄い面倒くさそうな予感がするんだが。

「……俺？」

「そうよ。アナタ以外に誰がいるっていうの」

「はあ、何か用ですか？」

ああ面倒だ。この女性、言うまでもなく女性優位の代名詞みたいな感じの人だよ。

「アナタ執事かなにかでしょう？　これ片付けておいてちょうだい」  
「断る。自分のことくらい自分でやったらどうですか」

ISが発表されてからこういう人が出てくるのは分かってたけど、やっぱり気に食わないよな。自分がISに乗れるわけでもないってのにあたかも自身が偉いみたいに振る舞われるのは、誰が見ても良い気分じゃない筈だ。

だから俺はキツパリと言い放つ。

「余り偉そうにしないほうがいいですよ。自分の品格を落とすことになる」

「な、な……!!」

端から見てもワナワナと震えていると分かるこの女性。次の瞬間には大爆発。

「何よその言い草は!!　あんたらみたいな男たちは私たちに躰られていればいいのよ!!」

言うに事欠いて躰って。俺たち男はペットか何かなのか。

「別にアナタがISに乗れるわけでもないでしょう?」

「そ、それはアンタだって同じじゃない!!」

「ISに乗れない人がそう威張り散らすのはお門違いだと思いますけど」

間違ったことは言っていない。俺もISに乗れる訳じゃないから威張り散らしたりしないし。

俺と女性がそんな感じで口論(?)をしているとレジを済ませた千冬が満足げな表情をして帰ってきた。

「すまないな待たせて——誰だその人は?」

「知らない人だ」

「……そうか。じゃあ形無、次はお前の水着を見に行くか」

数瞬思考して千冬はそう言った。流石というか、彼女はこの状況を瞬時に把握し最善の方法を取ってくれるようだ。俺も断る理由なんてないのでそれに頷き歩き出すとすると。

「ちよつと！ そいつアナタの彼氏なの!? 躰くらいしつかりしておきなさい!!」

まだ突つかかってくるのかこの女は。いい加減俺も限界だぞ。  
なんて思っていたら。

「形無は犬じゃない。それに貴方なんかよりもよっぽど優秀な人間です」

鋭い眼光で女性を睨みつけている千冬。ギンツ!! なんて擬音が適切なくらいの眼力だ。

「行こう形無」

「あ、ああ」

俺までもちっちゃったよ。

背後である女性が悔しそうに唇を噛んでいるのが視界の端に映った。



「ふう、ありがとうな千冬」

「なにがだ?」

「さっきのことだよ」

「気にするな。私もああいう輩は好かないからな、つい口が出てしまったんだ」

現在の時刻は正午過ぎ。俺たちはショッピングモール内にあるカフェで昼食を取っていた。俺はシーフードドリアで千冬はボロネーゼ。ちよつと値が張るだけあって味は中々に美味しい。あ、ちなみにちゃんと俺の水着も買っておいただぞ? 一応だけどな。

「これでとりあえず目的は達成されたか?」

「そうだな。後は少し見て回りたいのだが」

「いいぞ。ならあとで一階に下りて見て回るか」

「うむ」

まったりとした時間が流れる。ここ最近バタバタしてたからこういう時間は至福だなあ。こんな時間が永遠に続けば俺はきつとさぞ平穏な人生が送れることだろう。

……だけどやっぱり、俺に平穏なんてやってこないんだろうか。突如として鳴った俺の携帯の画面を見て俺は『げっ』的な表情を浮かべる。

「どうした？」

「束からだ」

あの天災、滅多にメールなんてしてこない（用事がる時は直接押し掛けてくる）のにいきなりなんだってんだ？

疑問と嫌な予感を感じながら、俺は通話ボタンを押して耳に携帯を押し当てる。

「もしも……」

『かーくーんツ!!』

鼓膜が破ける。いやまじで。

「……どうしたんだよ。電話なんて珍しい」

『酷いよかーくん!! 束さんのことはほっぽいてちーちゃんとデートなんて!!』

「は？ なに言ってるんだよ。俺は買い物に付き合っただけだぞ。デートじゃないって」

『それを俗にデートって言うんだよ!!』

何を訳の解らないこと言ってるんだ束は。デートするのは恋人同士が遊園地とかに行くことだろう。

『……なんかかーくんには何を言ってもムダな気がしてきた』  
「？」

『なんか束さんのほうがバカらしくなってきちやっただよ。じゃあねかーくん』

それだけ言っただけで一方的に切られる通話。

一体何が言いたかったんだあいつは。束も一緒に来たかったってことなのか？ でもあいつこういう人混み嫌いだしこないだろう。

「……（ムスツ）」



「……千冬?」

「そうかそうか。形無にとってこれはデートという認識ではなかったんだな……」

「へ?」

何やら背後に修羅が見えるような気がするんですが……!!

「そうだな形無。では買い物続きと行こう。勿論、形無の奢りで」

「はッ!? なんでそう……」

「奢り、だろう……?」

怖え!! なんか眼からハイライトが消えてるんだけど、なのに口角はうつすら釣り上がってんだけど!!

そんな千冬に俺は首を縦に振る以外に選択肢は用意されておらず。

結局、その後俺は千冬に財布の中身を搾り取られることになってしまった。

俺の11万が……!!

## #26 臨海学校はその時点でフラグ

前回のあらすじ

俺と平穩はやっぱり無縁

くそう……。

千冬め、なんであんなにご機嫌斜めになっちゃったんだ？ 確か束と電話してからだよなあ。あれか、やっぱり一旦席を外すべきだったか。マナーとして。

でもさ、だからって明らかに臨海学校に関係ない洋服とか買わなくてもいいんじゃないか。しかもブランド物の最新作。値段見てびつくりしたわ、なんだアレ。洋服ってあんな値段するのかよ。俺の前世で来てたTシャツなんてワゴンセールで三枚千円とかのやつだぞ。

とまあ、俺の愚痴はこれくらいにして。

「見えたっ！ 海!!」

「わくっ!!」

長いトンネルを抜けて広がる光景を目の前にしてクラスの女子たちが声を上げる。何を隠そう、今日は臨海学校初日。天候にも恵まれて空には一面の青空が広がり、陽光を反射する海面がとても美しく見える。

バスに揺られること約二時間。やってきたのは都市部とは隔絶されたかのように自然豊かな場所だ。

IS学園に入学してから約二週間。ようやくクラスにも慣れ始めた女生徒たちは今も車内でキヤイキヤイと賑わっている。

こういう空間はなんというか、男の俺には居づらいよなあ。何か場違いなような気がしてならないし、何よりもあのテンションに付いていけるとは俺には到底思えない。

「はあ……」

「どうしたんだ形無。そんな魂の抜けたようなため息について」

最早無意識のうちに俺の口から放出される溜め息に反応したのは、バスの座席で隣になった千冬だ。俺の財布から11万を吹き飛ばした張本人でもある。

先日はあんなに不機嫌そうだったのに、洋服を買ってやった（買わされた）ほうが表現としては適切）途端に機嫌を治して今に至る。ほんと女って生物はよくわからない。あれか、男を振り回すために存在しているのか。

「……形無」

「ん？」

「何か今凄く失礼なことを考えていなかったか？」

ギクツ

「……いや別に？」

「嘘だな。眼が泳いでいるぞ」

なんだこの洞察力。更識の人間でも此処まで観察眼の優れた人間は居ないぞ。

「そ、そんなことないって」

「……まあこれ以上の詮索は止してやる」

ふう。助かった。このまま尋問されてたらず間違いない俺の命が危なくなってただろうし。

なんて冷や汗を流しているうちに俺たちを乗せて軽快に走っていたバスが停車。どうやら目的地に到着したみたいだ。プシューっという何とも気の抜ける音と共にドアが開き、わらわらと生徒たちが降りていく。

「ほら、降りるぞ形無」

「ああ」

千冬に促されて俺もバスから降車、目の前に現れたのはなんとも歴史を感じさせる旅館だった。

「それでは、この旅館が今日から三日間お世話になる花月荘です。皆さん、あまり従業員さんたちに迷惑をかけないようIS学園の生徒と

しての自覚を持って行動するように」

「「よろしくお願ひします」」

我がクラスの担任であるやまよが代表して話した後、全員で挨拶。聞いた話によるとIS学園の学園長とこの花月荘の女将さんは古い友人らしく、この臨海学校の旨を伝えると快く了承してくれたそう  
だ。

俺たちの挨拶に旅館の前に出てきていた山吹色の着物を纏った女将さんが丁寧にお辞儀をした。

「こちらこそ。IS学園の一年生の皆さん、ゆっくりしていつて下さいね」

ニツコリと微笑んで言った女将さん。なんだかとても優しそうな人だ。歳は五十代半ばくらいだろうか、だが皺などでたるんだ皮膚などなく、若々しくしつかりとした所謂デキる女の雰囲気を漂わせている。

「あら、アナタが噂の？」

ふと俺と目があつた女将さんがやまよに尋ねる。

「はい。彼を含めて二人の男子生徒が居ます。いろいろと苦勞をかけるかもしれませんがよろしくお願ひします」

「いえいえ。テレビで見た通りすごくしつかりしている男の子じゃありませんか。『黒執事』と言いましたか、流星はあれの操縦者ですね」  
「はあ、どうも」

こう面と向かつて誉められると何だか気恥ずかしい。しかもまだ周りに他の生徒がいるから尚更だ。

「更識形無です、よろしくお願ひします」

「清洲（きよす） 梗子（きようこ）です。よろしくお願ひしますね」

そう言つて女将さんはまた丁寧なお辞儀をした。それにつられて俺もペコリと一礼。

「じゃあ皆さん、今配布した部屋割りを確認したら部屋のほうに荷物を置きに行つてください。海に行くなら着替えは別館でお願ひします」

何やら資料を配っていたやまよがそう言つと、女子一同は返事をし

てそそくさと旅館の中へと入っていった。荷物を置かないと始まらない。そういうことなんだろう。

俺も今しがたやまよから貰った部屋割り表に目を通す。ふんふん、女子は大体三々四人で一部屋を割り当てられているのか。女子は旅館の二階、俺ややまよたち教員は一階の部屋割りがされていた。

——ん？

此処で俺は気が付いた。俺に割り当てられている部屋が、  
「個室」  
ではないことに。

それはつまりどういうことか。結論から言ってしまうえば、俺に割り当てられた部屋は相部屋。

そして紙にはこう書かれていた。

一〇二号室

更識形無

織村一華

◆  
……俺はこの臨海学校の三日間、無事に乗り切ることが不可能であることを悟った。

◆  
覚悟を決めて一〇二号室のドアノブを回し、中へと入るとそこには誰も居なかった。てつきりあいつが居ると思ってたからちよつと拍

子抜けしたが、あいつの物であろうポストンバックが部屋のど真ん中に鎮座していたのでとりあえず蹴飛ばしてスペースを作る。え？蹴飛ばす必要ないんじゃないかって？ バカだなそれじゃあ折角の畳を満喫できないだろう。

とりあえず換気を、ということであは窓を開けることに。この部屋は外側の壁が一面窓になっており、そこから見える風景がとても美しい。なんと言っても海がばっちり見渡せるのがいいな。東向の部屋だから、日の出なんかも綺麗に見えるに違いない。

「さて、」

どうするかなあ、と俺は考える。一応今日一日は自由時間となっているから、別にここで寝転がっていようが旅館でテレビを見ようが教師陣に怒られることはない。

だけど。

だけどだ。

折角こんな綺麗な海があるところに来たんだ。やっぱり泳ぎたい。

折角千冬が選んでくれた水着も一応持ってきてあることだし、別段泳ぐのが苦手というわけでもないんだから、泳がない理由なんてないんだ。

でもさ。

泳がない理由はないんだけど、泳げない理由ならあるんだよ。

それは言うまでもなく、俺の今現在の格好にある。そう、燕尾服だ。

うん、燕尾服で海水に浸かるなんて冗談じゃない。というか溺れるわ。ベクトル操作を使えば大丈夫かもしれないけど基本的にISの無断使用は禁止だし、そもそも燕尾服来たまま海に入るくらいなら旅館から出ずにこのまま過ぐす。

こんな状況に陥ってしまうのが目に見えていた俺はつい数日前、束に電話でどうにかしてくれと頼んでみたんだ。

『もしもしかーくんどしたの？電話なんて珍しいね。盗聴の心配とかしなくていいの？』

「俺は更識だぞ？ その辺に抜かりはないさ」

『ふふつ。だよね、かーくんがそんな初歩的なミスをするわけがないよね』

「それでだ。東、一つ頼みたいことがあるんだ」

『なにかな？ まあ、大体の察しはついてるけど。『黒執事』についてでしょ？』

「流石は東。なら話は早い、早急に対処してほしいんだ」

『まっかせない！ この東さんがかーくんの満足いく対策を練ってあげるよっ!!』

——なんていう会話があったんだが、それから東からは一切の音沙汰がない。こつちから電話してみても繋がらないし、千冬も同じようなことを言っていたから東は通信を遮断しているんだろう。そんなこんなでうやむやなまま臨海学校当日になってしまったために、俺は手持ちぶさたに陥ってしまっているというわけだ。

「はあ、東の奴何をやってんだか……」

まず前提としてあの天災を頼るといいうのが間違っているのかもしれないが、それは俺が『黒執事』というISに乗っている以上仕方がないことだ。

「——ん？」

なんととはなしに視線を向けてみた窓の外。美しい海や町並みが見渡せるその景色の中に、俺はただならぬ違和感を覚えた。つーか、あれは一体なんなんだ。

俺の視線の先。

澄み渡った青空の向こうから飛来してくる謎の飛行物体。あれは

……ロケット？ いや違うな。

「……ニンジン？」

いや、分かつてる。分かつてるから『お前何言ってるの？』的な視線をこつちに向けないでくれ!!

見たままを言ったらそうなんだから仕方ないだろ!! 巨大なニン

ジンがこつちに向かって飛んできてんだよ。  
ん？

「こっちに……向かって……？」

気付いた時にはもう遅い。

その後、鋼鉄のニンジン型ロケットが花月荘の一〇二号室に直撃した。衝突による轟音が、その威力の凄まじさを如実に表していた。

……何故だ。



## #27 海に出るのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

ニンジンが痛い

とてつもなく

「ゲホツ、ゲホツ……一体何だっただ……？」

襲いかかってきた鋼鉄のニンジンは辛うじて俺に直撃はしなかったが、部屋にはぽつかりとニンジンが開けた穴が。うん、半壊。なんかとてつもなく奇妙な光景が目の前に広がってるんだが、これきつと外からみたら旅館からデカイニンジンが生えてるように見えるんだろうなあ。

———というのだ。

こんな巨大な鋼鉄の塊、しかもとある動物を連想させるニンジンを旅館に直撃させるなんていう破天荒極まりない行為が出来る人間を、俺は世界でたった一人しか知らない。

言わずもがな、それは世界最高の天才。そして同時に天災でもある俺を含むいつメンの一人。

「……出てこいよ束」

篠ノ之束である。

俺がそう言うと、巨大なニンジンからプシューッと空気が抜けるような音が聞こえ、直後にニンジンの横にあったらしい扉が開いて中から少女が飛び出してきた。

「かーくうううん!!」

「やめろ」

「ぶへっ!!」

俺に向かってダイブしてきた束の顔面を足で踏みつけて抑え込む。

なんだそのデタラメな跳躍力は。

「うう、かーくんの愛が痛い……」

「いや愛とかじゃないからな？」

顔を擦りながら起き上がる天災。前々から思ってたけど、こいつ不  
死身なんじゃないだろうか。今の蹴りつて多分骨折じゃ済まないレ  
ベルだったんだけど。

「で？ 束がこんなもんで飛んできた理由は？」

「ふっふー。分かってるくせにかーくんはいじらしいねえ」

ニヤツと悪人が浮かべるような笑みを浮かべて束が言う。どうや  
らアレのことでこんなものを飛ばしてやって来たらしい。

「——『黒執事』のことか」

「ピンポンピンポーン」

「ちゃんと盗聴盗撮対策はしてあるんだろうな？」

「もちろんだよかーくん。束さんはそのへん抜かりないよ」

いやお前の背後にどでかいニンジンが大穴開けてるんですけど。  
見晴らしよくなってるんですけど。

「……騒ぎを聞き付けた人たちが来るかもしれないだろう」

「それも大丈夫。この部屋の周囲100メートルには近付けないよう  
に色々罠（トラップ）を仕掛けてあるから」

しれつと言う束だが、俺としては一体いつの間にという感じだ。と  
いうかトラップってコイツは何を仕掛けたんだろうか。………や  
めよう、考えるだけ無駄な気がしてならないしな。ただ一つ言えるの  
は、東トラップにこれから掛かる人たちが御愁傷様ということだ。

「ならいいか。で？ 結局どんな設定になったんだ」

「ふふーん。これを見てよかーくん」

そう言う束は空間投影式のウィンドウを展開、カタカタとキーを  
叩いてとあるファイルを呼び寄せる。そのファイル名は『Black  
Butler』。まんま黒執事じゃねえか。

「色々考えたんだけどね、やっぱりこれが一番現実的だと思うんだ  
よねえ」

「どれどれ」

俺は開かれたファイルに目を通す。

「!! これは……」

「ふふ。どうかーくん？ これなら執事服のことも説明がつくようになるし、あの能力（チカラ）もISの性能として思う存分使用することが出来るよ」

「確かに……、こういうことなら今までこの格好で学園に居たことにも説明がつかない」

「でしよう？ そしてこれならかーくんは普通に海で泳ぐこともできちゃうんだよ!!」

「ばーんっ!! と腰に手を当てて得意気に言い放つ束。うん、確かにこの設定なら俺がこれから執事服をずっと着続ける必要も無くなるし、ベクトル操作もIS性能としての説明もつく。というか、これよりも良い設定は無いと思う。やっぱり束は天才なんだなあ。そもそもだ。」

俺が束に『黒執事』の正式なISとしての設定を頼んだのはまず第一にこれから先、ISと闘うことになった場合の明確な性能や能力を決めておかなくてはならないからだ。俺の能力である一方通行（アクセラレータ）のベクトル操作では、人間離れた戦闘能力を誇るがまず前提としてISには乗れない。つまりは俺は生身で敵対するISと闘わなくてはならないということだ（俺はまだデフォルトで反射は出来ない）。

となるとまずは見た目。何故執事服で闘っているのか、ISは一体何処に展開しているのかという周りの疑問を解消しなくてはならない。

——それを解消してくれるのが、この設定ってわけか。

これなら大丈夫だろう。この設定なら、誰も俺が執事服を着て闘っても違和感は覚えない筈だ。しかも『黒白事件』のときに既に一度執事服のスタイルで闘ってるしな、データとしては問題も矛盾も出てこない。

「満足してもらえたかな？」

「ああ。これなら問題なさそうだ。ありがとうな、束」

「えへへ、面と向かって言われると照れるなあ」

照れくさそうに笑う束。不覚にも内心でその可愛さにドキツとしてしまったのは秘密だ。

ということとは俺が執事服着たままあの炎天下の浜辺に行く必要もなくなったというわけだ。

さて。じゃあ行くとしますか。青い海へ!!



「あつ！ 更識君だ!!」

「ほんとだ!!」

「いつもの執事服じゃない!!」

「あの身体つき……イイ」

「文句なしでカッコイイよ!!」

男子の更衣室で水着に着替え浜辺にきてみれば、そこには水着の女子女子女子。いや全くもって眼ぷ……なんか殺気を感じたから考えるのはよしておこうかな。

にしてもすごいな。いや、今考えるのをよそうとか思っておいてなんなんだけど皆発育良すぎじゃないか？ なんだ君ら、ほんとに十五歳とかなのか？

なんていうか……目の毒すぎるんですが。

「あ……」

俺がキョロキョロしていると、たまたまりリイと目が合った。彼女は自らの金髪に合うように選んだのかオレンジのビキニ、下には黄色のパレオを巻いている。いやあ、似合ってるなあ。元が美人なものすごく映える。あれで性格が良ければさぞ男たちからモテるだろうに、残念だ。

「なんですか黒執事さん。あまりジロジロこちらを見ないでもらいたいです」

うわ。思いつきり睨まれた。まあ、俺が見ていたってのも間違いではないけども。

「ああ、それは悪かったな。リリーの水着姿が綺麗だったからついな」  
「……………」

ん？　なんか顔赤いな。日射病とかだったら日陰で休まないダメだぞ。

「どうした？」

「……………そうやってこれまでも女性を落としてきたの？」

「は？」

「(……………そりや確かにイケメンでしょうけど、私はこんな程度じゃ落とされないわよ)」

「なんか言ったか？」

「な、なんでもないわッ!!」

いきなり大声を出したせいで近くにいた生徒たちが不思議そうにリリーのほうを見ている。それに気が付いたりリリーはゴホン、と一度咳払いして。

「そ、それよりも。何故今日は水着を？　アナタはいつもあの執事服を着ていたじゃないですか」

「ん、ああ。ようやく『黒執事』の調整とデータを取り終わってな。ようやくあの堅苦しい執事服から解放されたんだよ」

因みに俺はこの前ショッピングに行ったときに千冬に見立ててもらい購入した黒のトランクスタイプの水着を着用している。

「？　調整？　データ？　そんなことは初耳ですけど」

「政府のほうから内密についてお達しがあったからな。たかだか一介の生徒たちに情報は回らないだろう」

「……………成程」

多分たかだか一介の学生つてところに引つ掛かるところがあつたんだろうな。リリーは若干眉を顰めながらそう言った。でもうでも言っておかないとのちのち厄介なことになりそうだからな。主にクラス対抗戦（リーグマッチ）とか。どうにかしてこの男を蔑むような性格を治してやりたいんだけど、それには時間かかりそうだからな

あ。この辺りからいろいろ画策しておかないと。

え？ おせっかい？

馬鹿だなもうこの性格は治らないよ。

あの二人のせいではなくこの性格は治らないよ。  
「ああ誤解しないでほしいのは別に俺はリリイたちと違うってことを言いたいわけじゃないんだ。ほら、俺って世界に二人しかいないIS操縦者だから、色々と面倒なんだよ」

「そういうことですか。それならば分かりました。にしてもアナタ、かなり鍛えているんですね」

俺の上半身を見たリリイは少し驚いたように言った。言うまでもないが、これは更識流の修行の過程で勝手にいった筋肉だ。自分ではあまりガツチリしているとは思わないが、女子から見ればかなりの筋肉質に見えるらしい。

「まあ、それなりに鍛えてはいるかな」

「それなりでつく筋肉ではないと思いますが……」

「俺のことはいいからさ、折角の日本の海なんだ。楽しめよ」

「そうですね、日本の海がこんなにも綺麗なんて思いませんでしたし」  
そう言ってリリイは俺に背を向けて同じクラスの友達の元へと戻っていった。

さてと。俺も折角水着になったんだしちよつとくらい泳ぐかな。

……なんて思ってたら。

「おい」

あまり聞きたくない声が聞こえてきたような気がして、恐る恐る振り返ってみる。

「なんだあ？ いつつも執事服着てるくせに、今日は地味な水着じゃねえか」

今の俺の顔はきつと他人には見せられないような酷い顔をしてい

ることだろう。

なにせそこに居たのは俺と相部屋の人物、織村一華だったのだから。彼の服装は真っ赤なトランクスタイプの水着にアロハシャツにサングラス。おまけに首元にはジャラジャラと金色のアクセサリーが。

それなんて土御門？ 状態の彼だが、次の瞬間とんでもないことを言い出した。

「俺とお前、同じ部屋で寝泊りするなんて冗談じゃねえ。どっちかがあの部屋を出て外で野宿だ」

いや、その部屋も半壊してんだけど。

「勝負だ馬野郎!!」

もうやだなんか今日一日で変なフラグ建ちすぎだろ……。

## #28 フラグのことを考えるのはその時点でフラグ

前回のあらすじ

一日で建つフラグの数が尋常じゃない

………はあ。

なんかもう、ここまで来ると臨海学校に来たこと自体が既に間違いだったんじゃないかと思ってしまう。

いや、分かってたよ？

IS学園に通う男子が俺と織村の二人しかいないって時点でコイツと接点を持たずに乗り切るってことが不可能だつてことくらいは。でもさ。少しくらいの希望は持ってたんだよ。ほら、俺と織村はクラスも違うし、ひよつとしたら部屋とかも違って三日間会わなくても済むんじゃないかって淡い期待をしてたんだ。

そんな俺の微かな希望は臨海学校初日でいきなり木っ端微塵にされてしまったけどな!! (物理的な意味合いも含む)

「おい！俺の話聞いてんのかよ馬野郎ツ!!」

なんて一人で悶々と考え込んでいたら、織村が青筋を額に浮かべてこっちに詰め寄ってきた。近い近い近い、頼むからもう少し離れてくれ。鼻先一ミリなんて吐き気を催すには充分過ぎる距離だから。

「はあ……」

これはいつもの溜め息じゃない。諦めの溜め息だ。え？ それじゃいつもと同じじゃねえかって？ ……気にしたら負けだ。

「聞いているよ……、で？俺に何の用かな織村」



「てめえ人の話聞いてなかったのかよッ!!」

「聞いてたけど、一体どういう風に決着つけるつもりなんだ?」

「ハッ、バカだなあてめえは」

イラッ

「ここは一体何を学ぶ学園なんだ?」

「……ISで決着つけようってのか?」

「ご明答。お前は『黒執事』とかいう専用機を束から貰ってるらしいが俺は訓練用ISでやってやるよ。丁度いいハンデだろ?」

得意げにそう言う土御……じゃなかった織村。いや確かにISで闘うってのに反対はしないけど、これって明らかに自分が不利って解ってて言ってるのかなあ。向こうはISに触れてからまだ一ヶ月も経ってない、謂わば素人も同然。搭乗時間だって女子と大差ないだろう。それに対して俺は(立場上)黒執事なんていう専用機を持ち、搭乗時間だって比べ物にならない。というかベクトル操作がある限り俺の負けはないと思うんだが。

「いや、それじゃお前が不利すぎると思うんだけど」

「ああ? 俺とてめえじゃあこのくらいのハンデがないとまともな試合になんてならねえだろうが」

まともな試合ねえ。もし織村が専用機を持ってて、その性能を100パーセント出し切ることが出来たとしても、まともな試合にならないだろうけれど。

「はあ……。先ず訓練機の私的使用の許可は貰ってるのか?」

「あん? なんだそれ」

頭が段々痛くなってきた。大体、今現在日本国内に数体しかないISを、勝手に使用出来るわけがないだろう。ここIS学園という特殊な場所だからこそ、そのうちの二体を借りて操作の練習を行えるわけで、幾ら世界で二人しかいない貴重な男性IS操縦者だろうとそんな勝手な言い分が上層部に通るとは思えない。

「私用目的なんだから使用許可がいるのは当たり前だろう?そもそもそんな申請が通るとは思えないけど」

「……ああ! 俺も今丁度そう思ってたところなんだよ!! 馬野郎にし

ちやあなかなかやるじゃねえか!!」

絶対にそんなこと考えてなかったなコイツ。

「とりあえず、ISの使用許可が出ないと話にならないからな。許可がとれたならもう一度来てくれ」

「ハッ、言われなくてもそうするつもりだよ馬野郎」

腰に手を当てて言う織村。まあ、そんな申請は受理されないと思うから俺は闘う気なんて更々ないけど。

「首を洗って待つてろよ馬野郎!! その首へし折ってやるからよ!!」

それだけ言って土御……織村は去っていった。ああ、なんかまた面倒なフラグを建ててしまった気がする。千冬や束閔連のフラグはもうとつくに諦めているが、それ以外の余計なフラグは出来ることなら極力回避したいんだ。だって疲れるし、何よりも俺への被害が尋常じゃないからな。

なんだか疲労感がスゴイ。バイト週七で入ったあとみたいな疲労感が俺に襲いかかってきてる。ダメだな。折角の海なんだから、せめて楽しまないと。

「更識くーん!!」

「ん?」

とりあえず休息をとろう、ということとで借りてきたパラソルとブルーシートの準備をしていると前方から声が聞こえてきた。あれは、えーっと、確かおんなじクラスの……ダメだ名前が思い出せない。

「こんなところでなにしてるの?」

「いや少し休もうと思つて。疲れちゃったし」

「もう? 早いよー。ていうか今日はあの執事服じゃないんだね」

「やっつと調整が終つたんだ。流星にこの炎天下の中でのあの服は辛いから」

「だよねー。あ、そうだ更識君。今から私たちがビーチバレーするんだけど、更識君も一緒にやらない?」

ビーチバレーか。前世じゃやったことなかったけど、普通のバレーボールと同じ感覚でやれば大丈夫か。疲れはしてるけど、折角誘って

くれてるんだ。無碍にするわけにもいかないし。

「いいね。やろうか」

「ほんとに!? じゃあこっち来て!!」

というわけで俺は名前の分からないクラスメイト(多分)に連れられ、ネットとポールが用意されたコートへとやってきた。ラインもすっかり作られてるし意外に本格的なコートだな。

「って千冬!?!」

「なんだ形無。私がビーチバレーをしてはおかしいのか?」

なんとビーチバレーを行う面子のなかには我らが千冬さんの姿が。先日買い物に行った時に選んだ黒のビキニタイプの水着をしっかりと着ている。うん、やっぱ千冬は白より黒だよ。なんかこうクールビューティな感じがしてよく似合ってる。

「な、なんだジロジロこっちを見て」

「それこの前選んだ水着だろ? よく似合ってるなと思って」

「な、なな……!」

ボツと顔が瞬間湯沸器のように熱を帯び真っ赤になる千冬。どうしたんだ、具合でも悪くなっただらろうか。

「? どうしたんだよ」

「なんでもない! なんでもないから余りこっちを見るな!!」

ババツと勢い良く左右に手を動かして『こっちを見るな』と暗に示してくる。なんだよ、そんなに水着が恥ずかしいなら上にパーカーとか羽織っておけばいいんじゃないか。日焼け止めにもなるだろうし。

「……………」

なんて考えていると、いつのまにやら仏頂面になっている千冬。

「ただだけ喜怒哀楽が激しいんだこの娘は。」

「なんだよ?」

「形無。多分だがお前は何か勘違いをしている」

「勘違い? 何を」

「…………もういい。さっさと始まるぞ。お前は私たちのチームだ」

「おう」

なにやら額に手を当てて溜息を吐いた千冬。なんだ、なんか呆れら

れているような感じだったぞ今。

ビーチバレーをするのは俺を含めて六人。三対三みたいだな。

「ルールとかどうするんだ？」

さつき俺をこのビーチバレーに誘ってきた女子に訪ねてみる。とは言ってもこれはお遊びだし、そこまで本格的なルールで行うこともないだろう。せいぜい十点勝負くらいの軽いものになると思うが。しかし。

「そうだねえ。まあ楽しむのが目的だし、お遊びルールでいいんじゃない……」

「二五点の三セットマッチ。先に三セット取ったほうが勝ちだ」

そんな生温いルールに、千冬が黙っているはずがなかった。

「えー……。いや千冬、これそんな本格的なもんじゃ……」

「勝負は勝負だぞ形無。それと私は負けるのが大嫌いだ」

あ、これももう引き下がらないパターンをやつたわ。もう何言っても聞く耳もたないモードに入っちゃってるわ。

でもこんなルールで向こう側の三人が納得するはずが……

「面白いじゃない」

あれエエえええッ!!?

「私も一度、アナタと真剣勝負を試してみたかったのよ織斑さん」

「ほう。望むところだ和田さん」

和田さん、と呼ばれた黒髪ロングの少女は挑戦的な笑みを浮かべて千冬のほうを見る。後で聞いて知ったことだが、彼女は中学時代バレー部で全国にまで駒を進めるほどの選手だったらしい。

というかこれ完全に巻き込まれフラグじゃね？

なんて思っているうちに始まったビーチバレー。宙を舞ったバレーボールがネットを超えた瞬間、ソレの火蓋は切って落とされた。



「はあ……、ヒドイ目にあつた」

時刻は午後七時半。

大広間を三つ繋げた大宴会場で、俺たちIS学園の生徒は夕食を取っていた。目の前に並ぶ刺身や鍋などの様々な料理が俺の空腹を刺激している。

はつきり言つて俺の空腹はピークをとづくに超えていた。原因は明確、昼間にやったあのビーチバレーのせいだ。結果だけ言えば俺たちのチームが勝つたんだが、内容は二時間を超える大激戦。当然のようにファイナルセットまでもつれ込む白熱の試合だった。最後のほうなんてコート周りの大勢の観客が出来てたからな。ちよつとしたイベントみたいになつてたし。

つーか後半は完全に千冬と和田さんの対一の勝負になつてたな。俺を含む残りの四人はサーブの順番が回つてきたときと、千冬たちがボールに触れた次の処理の時くらいしかボール触らなくなつてたし。

試合後は千冬たちは熱い握手を交わしてたからな。あれか。スポーツを通して芽生える友情、みたいなやつか。

とまあ、そんなわけで疲労が半端無いことになつて俺は目の前の料理を平らげていく。刺身美味しいなあ、鮮度が違つてこういふことを言うのか。

「かーくんかーくん」

不意に俺の右隣から掛けられた声に首を動かしてそっちを向く。

「はい、あーん」

「……はい？」

「(ガタガタツ!!)」

天災科学者、篠ノ之束。彼女が刺身を箸でつまんで俺のほうに差し出してきた。これは俗に言う『あーん』なるものであることは分かるけど、束さん。少しは状況を考えて欲しいんですけど。今俺が居る場所は大宴会場。ここには一年生の全員が食事を取るために集まっている。

つまり。

突き刺さる視線が痛すぎる。

ただでさえ束がこの場所に居るってこと事態みんなにとつては予想外すぎるつてのに、こんなことしてたら視線を集めるに決まってるじゃねえか!!

「た、束？ これはちよつと……」

「あーん」

「あの、また今度……」

「……ヘタレ（ボソツ）」

「なんだとコラ」

「かーくんのヘタレー。いくじなしー」

何やらブーブー言ってくるウサギに若干イラツとしたが、それよりも先に鉄拳が降り注ぐこととなった。

ガツンツ!!

「いったく!! ちーちゃんがぶったあ!!」

「なんてことしようとしてるんだお前は!？」

「え？ 愛の共同作業、的な」

「平然と言うな!」

俺たちよりも少し離れたところで食事を取っていた千冬が束の頭に拳骨を叩き込んだ。これきつと束以外なら入院確実だろつてレベルの強さで。

「ぶー、なにさちーちゃん。自分がかーくんと離れちやつたからつてー」

「そ、そそういうことじゃないだろう!？」

途端に狼狽する千冬。最近こういう反応多くなってきたよなあ。

「それにしてもかーくんもなかなかやるねえ」

「は？ なんの事だよ」

「まったまたあ。まさかいきなりなんて、束さんも予測してなかったよ」

?? 一体束は何を言っているんだろうか。俺なんか仕出かしたっけか？ なんて俺が考え込んでいると。

「皆さーん。明日の日程について変更があるのでお知らせしますね」

襖を開いてやまよを含む数人の教師たちが大宴会場に入ってきた。どことなく神妙な面持ちの教師陣は、冊子を片手に俺たちに説明を始めた。

「明日の午後ですが、審議の結果更識君と織村君の I S による模擬戦の観戦をすることになりました。近くにある第一アリーナに集合するようにしてください」

……………あ？

いつの間にか回収されているフラグに、俺は気づいていなかった。

## #29 そういうムードはその時点でフラグ

前回のあらすじ

俺の知らない所で勝手にフラグは回収されている

——うん。

ちよっと一回落ち着こうか。このままじゃ俺の精神が木っ端微塵になっちまいそうだし。

一旦深呼吸して、俺は今やまよが言った言葉を心の内で反芻してみる。

『明日の更識君と織村君とのISを使用しての模擬戦——』

はい？

一体やまよは何を寝惚けたことを言ってるんでしようか。俺と織村でISの模擬戦闘？ ヤダなそんなことするわけがないじゃないか。大方教師達が俺たちに見せるISの戦闘のことを間違えて言ってしまったんだろう。にしてもどうやったら俺と織村に間違えるんだ、全くやまよはドジだなあホント。

……………もうこれ以上の言い訳が思いつかねえ。

ああそうだよ。

思い出したよ昼間の織村とのあの会話。つまり上層部からの許可が下りてしまったってことなんだな。

絶対にあんな私的な申請下りるわけがないと高をくくってたんだが、どうやら俺の考えは甘かったらしい。ああ、俺の想像以上に上層部はバカが多いみたいだ。こんな場所で『黒執事』で模擬戦闘なんて



行なってみろ。各国から偵察やら情報開示の要求が来るに決まってるじゃねえか。

「山田先生」

「はい、どうしましたかりりいさん」

「あの二人が模擬戦闘を行うという情報は各国には伝わっているんですか？」

「はい。隠し立てする必要は別段ありませんから」

「でもそれだと各国から日本政府への情報開示や映像などのデータ提供の要請が殺到するのでは……」

「ええ、もう既に殺到しちゃってますね」

リリイが最もなことを言っているが、それに対してのやまよの反応がどうも違和感を感じる。やはり何か対処方法があるってことなんだろう。あのやけに自信満々に胸を張っている（張る胸はない）様子を見るに、そう考えるのが一番適当だろう。

というかだ、なんの対処もなしに許可を出したんだったらほんとに上層部総入れ替えしたほうがいいと思うぞ。

「なら一体どう対応しているんですか？」

「そこはほら、彼女に一任してありますから」

?? 彼女？

何だか妙に嫌な予感がして、俺はやまよの指差す先にいる少女を恐る恐る覗き込むようにして見る。

やまよの指差す先、………つまり、俺の隣を。

「………はあ」

「あ！ なんなのかなかーくん今の溜息は?!」

「そういうことか……。そりゃ溜息もつきたくなるわ」

俺はガツクリと項垂れ、ふと気を抜けばそのまま後ろに倒れてしまいうそになるのをなんとか堪えてそれを溜息として吐き出す。

そうか、そうだな。例えばどんなムチャクチャな要求があつたとしても、この天災、篠ノ之束の手にかければ赤子の手を捻るよりも簡単に対処することが出来る。圧倒的なその頭脳も去ることながら、現在の世界情勢もそれに拍車をかけることになっているのだから。何故な

ら彼女は世界の武力形態をたった一つの発明で変貌させてしまった張本人。今この世界で最も力を持つのがIS、つまりこれを開発した束に現状で逆らえる国は存在しない。なにせISは束の作成したコアが無ければ完成しない。しかもこのコアな完全なブラックボックスで、束以外の人間には解析はおろかその性質すらも解らないときたものだから、どの国もコアを製造してもらったためのご機嫌取りに躍起になっているわけだ。

そんな正に世界の中心的立場にいる束が、協力？ いや、無いとは言わないけど、これにはあの織村も関わってるんだぞ？ 束は以前織村のことを『生理的に無理』と一刀両断していたから、自分によっぽどのメリットがない限り協力するなんて俺には考えられないんだけど。

「……束」

「なにかなかーくん？」

「お前何か企んでないか？」

「(ギクツ)」

「……………」

「……(ダラダラダラ)」

「その辺、後でゆっくりと聞かせてもらおうからな？」

流星にこんな大勢がいる場所で詰め寄るのは憚られたので、とりあえずこの横で冷や汗をたらたらと流しているウサギを尋問するのは後回しだ。

さて。

「やま……だ先生」

「なんででしょうか更識君」

危ねえ、今普通にやまよって言いかけた。いやそんなことは実際のところどうでもよくて、俺がどうしても確認しておかなくてはならない点があるんだ。

「あの、俺のISは余り人目に晒したくはないんですけど」

周知の通り、俺はISなんてものには乗れない。乗れるのは女性か、一夏のような生まれながらにして主人公フラグを建ててしまつて

いる人間だけだ。

——あれ？

となると男でISに乗れる織村には主人公フラグが建ってるってことになるのか？ ……いやないない。アイツに限ってはそんなフラグは存在しないだろう。織村が主人公の物語なんてバッドエンドしか結末が見えてこない。

「うーん、ですが更識君も承認したから申請を出したんでしよう？」

「う……、」

「織村君からはしつかりと両者の了承の上で申請したと聞いています  
が」

確かに。

俺も先ずは申請を出してからだと織村に言った。申請が通るなんて微塵も考えていなかったから、申請さえ通れば良いとそんな風なことも浜辺で言った気もする。

まさか何も考えずに言ってしまった言葉が自分の首を絞める結果になるとは。

「もう諦めなよかーく……いだだだだだだだだだだだだだだだだッ!! 頭がっ!

頭がっ!!」

とりあえず隣のウサギの頭を掴み上げ、そのままありったけの力を込める。なんだか今ならこのまま握り潰せそうな気がするんだ。

「かーくん死ぬ！ 束さん死んじゃうから!! この手を離してえええええええッ!!」

「後でな？」

俺はスクツと立ち上がると（束の頭を引つ掴んだまま）、そのまま無言で大宴会場を後にした。さて、これからたっぷりとオハナシ聞かせて貰おうか束。



ふっ。

俺はこの大宴会場から逃げるようにして出ていった馬野郎（形無）を見て勝利を確信した。どうやらアイツが昼間この勝負を渋っていたのは俺には勝てないと悟っていたからのようだ。

全く、馬野郎は専用機で俺は訓練用ISつつうハンドをやってるにも関わらずあの様子。これじゃあきつと明日は勝負にすらなりやしねえな。俺の鮮やかな立ち回りに翻弄されるアイツの不様な姿が目には浮かぶぜ。

ならば勝利を確信した今、俺がすべきは斜め前に座る千冬と楽しい一時を過ごすことだ。

「全く形無の奴……、何故束だけを連れ出したのだ……」

「なあ千冬、この刺身すごい美味いよな」

「（そりゃあ、あの『黒執事』は束の力添えがあつて完成したようなものだが、にしても私だつて少しは……）」

「すごいよなこっちの鍋も。米沢牛らしいぜ？」

「（後を追つて私も行くべきか……？　　というか形無と束を二人つきりになどさせられん……）」

ブツブツと一人で呟き続ける千冬。きつと俺が言った食材への評論をじっくり吟味しているんだろう。全く可愛いやつめ。

しかし千冬は浴衣が似合うなあ。入浴後だから湯上がり美人って感じだし、周りの女子たちが霞んでしまうほどの美しさだ。こんな千冬と幼馴染みだなんて、俺はホントにツイてるぜ。

だからこそ、俺は千冬と束をあの馬野郎の魔の手から守つてやらねばならんだ。ここまで何だかなし崩し的に来てしまったが、こちらでハッキリさせておかなくてはいけない。千冬たちに相応しいのがアイツではなく俺であるということ。

明日の勝負、俺が負けることはあり得ない。何故なら俺には神様から貰った超能力である『未元物質（ダークマター）』があるからだ。この世に存在しない粒子を操る能力、専用機と言えどもそこいらのISが敵うわけがない。

きつと明日の勝負で、俺のことを世界が認めざるを得ないことにな

るだろう。

『世界で二番目の男性 I S 操縦者』じゃない。

『世界最強の男性 I S 操縦者』として。

見てろよ馬野郎、もう公衆の面前に出られないくらい、ボコボコにしてやるからな!!



「……で？」

大宴会場を後にした俺は束を引き連れてあのニンジン型のロケットの内部にやって来ていた。本来ならば俺と織村の部屋がベストだが、生憎このニンジンが半壊してしまったのと、明日対戦する織村に聴かせるような話でもないので現在は浜辺から生えているこのニンジン内部で話し合うことにしたのだ。

ニンジン内部に設置されていたソファに腰掛けた俺は、目の前でビクビクしているウサギに尋ねる。

「何を企んでるんだ？」

「や、やだなあかーくん。束さんはただの善意で……」

「眼が縦横無尽に泳いでんだけど」

そんな状態で善意だなんだと言われても全く説得力がない。

「……黒執事と織村についてなんだろう？」

俺は一度溜め息を吐いて束へと問い掛ける。

あんなにも毛嫌いしていた織村が関わっているこの模擬戦の各国への対応を買って出るといふんだ。理由があるとするれば、織村が I S を動かせる理由か黒執事の設定を実践で確認するかくらいしか無いだろう。

「……さっすがかーくん。見事にそのとおりだよ。気に入らないんだよアイツ、私が開発した I S を乗れるなんて。それだけで虫酸が走る」

「なんで織村が女性にしか反応しないISに乗れるのか解らないのか？」

「色々と仮説は立てられるけど、どれも夢物語みたいなもので確証はないね」

「……だから明日の模擬戦で確かめたいってことか」

更に言えば、きつと束はこの模擬戦を映像に記録して解析するんだろう、それも束が独占して。諸外国は文句を言うだろうが、それも天災によって封殺されるのが目に見えている。

「そういうこと。ホントならあの変態に関わるなんて考えただけで鳥肌が止まらないんだけど、今回ばかりはそうも言ってられないしね。もしもアイツが本当に（・・・）ISを起動させられならその原因も突き止めないといけないし」

「……はあ」

「あ、なんなのかなーくんその溜息は」

「いや面倒なことになったなあって思ってた」

「物事はプラスに考えるべきだよかーくん。明日の模擬戦で勝てばアイツとは今後関わらなくてもいいかもしれないし」

「いやそれは絶対じゃないと思う」

明日の模擬戦で俺が勝っても何かしらのいちやもんを付けて再戦要求とかしてきそうだし。

いかな。これじゃマイナスにしか考えられない。

俺はこの考えをどうにかしないと、と考えてふと視線を落とすと。

「……………」

「? どしたのかーくん」

「いや……、なんでもない」

俺は束の問いにそう答え、腰掛けたソファに座り直す。

まあ、なんだ。俺と束は今風呂上がりだから浴衣を着ているわけだ。つまり何が言いたいかというと、俺の目線からだとちょうど束の胸元が……いかにいかに!! 冷静になれば俺。そんなことになれば厄介事のフラグが瞬く間に乱立されてしまう。

「さつきから何か変だよかーくん？」

「なんでもない」

「嘘だ。束さんの眼は誤魔化せないよ」

うっ。こういう時に限って食い下がってくるんだよな束は。

……つてちよつと待てなんでこっちにくるんだそしてなんで俺に跨るようになってたれ掛かってくるんだ!?

「束!」

俺の胸元に顔を埋める束。その綺麗な髪の毛からはシャンプーの匂いなのか、女の子特有のイイ匂いがする。

これはやばい。はつきり言つて俺の理性が持たない。

「かーくん……私のこと、きらい?」

若干上気した肌が艶かしく、潤んだ瞳に見上げられては俺の鋼の精神（自称）も崩壊寸前に追い込まれる。

「き、嫌いなわけないだろ」

「じゃあ、なんで隠し事するの?」

「う、それはだな……」

束の胸元について視線が行ってましたなんて言える筈もなく、結果として沈黙が訪れる。

「束さんはね、かーくんのこと、好きだよ?」

「………束」

数分前の俺よ。諦めろ。

最早フラグの乱立は避けられん事態だ。

このニンジン内部には俺と束の二人きり。

目の前には幼稚園からの友人である美少女。

俺（一応）たちは思春期真っ盛り的高校生。

これから行われるであろう行為のことなど、言うまでもない。

「かーくん……、きて……」

俺の耳元で囁く束をそつと抱き寄せ、自らの唇を少女の唇へと近付けていく。

そして――。

「お前達……、一体何をしているんだ……？」

突如として開いたドアの向こうから、額に青筋を浮かべた千冬が背後に鬼を引き連れてやって来た。



## #30 模擬戦はその時点でフラグ

前回のあらすじ

俺の理性と身体が（物理的に）崩壊

東との何やら危ない雰囲気も千冬がぶち壊した翌日の昼過ぎ。右の頬に見事な紅葉を付けた俺は、第一アリーナに備え付けられている控え室のベンチに腰掛けていた。

俺たちが宿泊している旅館から然程遠くない場所に建設された第一アリーナは、基本的にIS学園に存在するアリーナと同じ造りになっており、半円上のドームの内壁を特殊素材の壁が覆い、その上空には理論上（・・・）ISの攻撃性能では破壊不可能な防壁が張り巡らされている。

そんなアリーナのすぐ脇に備え付けられた控え室のベンチで、俺は明日の○ヨーよろしく燃え尽きたように項垂れている。理由は言わずもがな、これから行われる予定の俺と織村によるISの模擬戦闘だ。

此処まで来てしまったのだから男として潔く腹をくくれ、などと言われてしまうかもしれないが、俺に余程のメリツトが存在しない以上、一応専用機ISに分類される『黒執事』を周囲の眼に晒すという行為は極力避けたい。

「———というか、そもそも」

俺が織村と戦わなくてはいけないというのがテンションをガタ落ちさせている最も大きな要因だ。

だってあの織村だぞ？

中学の時の体育祭で堂々と『千冬と東は俺の嫁』宣言をしたあの織村なんだ。誰だってあんな電波紛いの奴と関わり合いになんてなり

たいとは思わないだろう。

そんな織村が女性にしか動かせない筈のISを起動させられることも驚きだが、千冬や束を追ってこんなところまで来るその執念深さにも驚かされるばかりだ。

はあ、なんかもう考えただけで頭が痛くなってきた。なんだろ、俺この年にして頭痛持ちとかになっちまうのかな。将来の自分に不安しか抱けなくなってしまうそうだ。

「形無」

「ん、千冬」

そんな燃え尽きている俺に声を掛けてきたのは、この右頬に紅葉を付けた張本人である織斑千冬だ。

——アレ？

「普通の生徒はこの控え室には入れない筈なんじゃ……」

「……細かいことは気にするな」

いやいや。

思いつきり入口のドアに『関係者以外立入禁止』って書いてあるんですけど。

なんか無理やり引っぱがしたみたいな形跡があるんですけど。

「……緊張、してるのか？」

おずおずといった感じで俺に尋ねてくる千冬。

「緊張？　まさか」

「ならその手の震えはどうしたんだ？」

「ッ!？」

言われて俺は視線を落とす、自らの両手を見て初めて震えているということに気が付いた。

カタカタと小刻みに震える両手は俺の意思では抑えることが出来ず、尚も小さく震えている。

「緊張、ね——」

しているのかと問われれば、ハッキリとしないと言いつ切れ。勿論、多くの人間が周囲を埋め尽くしているような環境で闘ったことなど無いが、二千発以上のミサイルや軍事兵器に囲まれた『黒白事件』

に比べればこんな事は些事に過ぎない。懸念材料としては『黒執事』のデータが表に出てしまうということだったが、それも束が出張ってきた今となつてはそれも杞憂に終わるだろう。

周囲の環境に呑まれているわけではない。

『黒執事』のデータが世界に流出してしまうような事にもならない。ならば、この震えの正体は何だ。

「——ああ、成程」

俺は数秒間の思考の後、納得がいったようにそう口を開く。

この震えは、決して緊張や恐れから来ているものではない。寧ろその逆だ。

怪訝そうに首を傾げる千冬に、俺は小さく微笑んで。

「——これが武者震いってやつか」



ついに来た!!

この日この時この瞬間。

一体どれだけ待ちわびただろうか。

あの忌まわしき馬野郎。千冬と束の周囲にまわりつく憎きアイツを、ようやくこの手で排除できる時が来たのだ。

思えば此れまで長い道のりだった。幼稚園で初めて千冬たちと出会った時、俺は運命だと信じて疑わなかった。だって俺転生チートだし。故にそこから友情や信頼、そして愛を育み彼女たちとのハーレムエンドに辿り着くと思っていたんだ。

だがしかし!!

突如として現れた平凡で愚凶な馬野郎が、俺の計画を一瞬にして瓦解させやがった。

千冬たちの周囲には常に奴が付きまとい手出しが出来ず、碌に話すことすら出来ない始末。

耐えきれなくなった俺は中学の体育祭で楔を打ち込むという意味も込めて馬野郎に千冬と束は俺の嫁だと宣言してやったんだが、どうやらそれでもアイツは千冬たちを解放しようとはしないらしい。

こうなってしまったら、もう実力行使に出るしか手は残されていない。

慈悲深い俺は、これまで散々我慢してきてやったがそれももう限界だ。完膚なきまでに叩き潰す。

俺が敗北する可能性なんてのは皆無、何せあの『未元物質（ダークマター）』の能力を得てるんだからな。あの超電磁砲ですら届かない領域にいるこの能力があれば、馬野郎なんて一瞬で消し炭だ。

『黒執事』だかなんだかよく分からん専用機に乗れるみたいだが、そんな主人公フラグは二つもいらん。

この俺だけで十分だ!!

「見てろよ馬野郎。今日がテメエの命日だ」

俺はそう言って、アリーナへの扉を開いた。

馬野郎を滅殺するため、天高く舞い上がる。



「ふふくん。かーくんのIS学園でのデビュー戦かあ」

第一アリーナから少し離れたニンジン型のロケット内部で、私は空間投影式のウィンドウを開いている。そこに映し出されているのはアリーナの全景。もちろんかーくんが中心だけど。

あの『黒白事件』を除けば、かーくんが自分の超能力を公の前に晒すのはこれで二回目、本人は嫌がってたけど、私の考え込んだ設定のおかげで矛盾は消えたし、思う存分戦ってほしいな。だって相手はアレだし。もう原形すら留めないほどぐちゃぐちゃにしちやっついてい

よ。

「はあ、それにしてもなんであんな奴が私の I S に乗れるのかなあ」

織村一華。

いつくんのパクリみたいな名前だけど、I S に乗れるっていう点だけを切り取ってみれば嫌でも気になる存在だ。かーくんは別として、この世で I S に乗れる男なんて存在しない。だってそういう風（……）に造ったんだから。

にも関わらず、平然と学園に貸し出されている第一世代試作型『白兎』を起動させているアレをウィンドウで確認してしまうと、無性にイライラしてきた。

なんで？　なんであんなのが乗れるの？

頭の中で幾つも仮説が浮かんでは、矛盾があるとして切り捨てられていく。

そんなさなか、私の耳に電子音が届いた。

「むー、もういい加減にしてよね」

その音の正体はメールの受信音。言うまでもないけど、これは各国からの模擬戦のデータや情報開示の請求だ。鬱陶しいから速攻でウィルス付きで偽のデータを転送してるけど、段々それも面倒になってきたなあ。

「いつそのこと束さん特性のバグでも政府に送り込んでみよっかなあ」

なんて事をついぼやきたくもなってしまう。以前学校中のパソコンにウィルスを流そうとした時はすかさずかーくんに止められちゃったけど、今なら私を止める人間はこの場にはいない。政府中枢の表には公表できないようなデータを流出させたら、一体その国はどうなるだろうか。

——なんて考えてはみるけど、そんなことしたら絶対にかーくん怒るからやらないでおこうつと。

再び空間投影式のウィンドウに視線を向けて、上空からの映像角度を変えていく。

するとアリーナには、既に『白兎』を起動させその身に纏ったアレ

の姿があつた。

かーくんはまだ来ていないみたいだ。

「ふっふっ、楽しみだなあ。ボッコボコのベッコベコにしちやっつてよねかーくん」

昨日ちーちゃんにお楽しみを邪魔された腹いせじやないけど、気に食わないアレには痛い目みてもらわないとね。



「……うわあ、」

正直、今すぐにでも此の場から逃げ出してしまいたかった。武者震いだなんだと言っていたつい数分前の俺よ、直ぐに前言を撤回しろ。

この周囲360度全てから向けられる視線で特大の穴が開けられそうだから。

「はあ……、確かに少しは高揚感とかあつたのかもしれないけど、こんなの見るとやっぱ客寄せパンダだよなあ」

アリーナはそれほど大きな物ではなかった。元々こういった観戦者が多く入ることを設計時に想定していないのか、一年生全体である約二百名が入ればそれだけで上部の観客席は満員状態だ。

そんなアリーナの中心に居る俺と織村は完全に晒し者にされている。

あ、いや。

俺の正面に立っている織村の表情を見るとアイツ満更でもなさそうだな。既に『白兔』を装着してるからちよつと無骨だけど仁王立ちしてるように見えなくもないし。

かく言う俺も、すっかり執事服着てるんだけどな。

「よお、よく逃げずに来れたな。誉めてやるよ」

明らかな挑発を仕掛けてくる織村。なんだろうな、このイラツとするような感覚。

「しかしお前もかなりの物好きだよなあ。態々こんな大勢の前で俺に叩き潰されるためにやって来たんだからよ」  
「何もやられに来たわけじゃない。模擬戦だろうと勝負は勝負、負けるつもりなんてないぜ」

襟元をもう一度締め、ゆっくりと深呼吸。

—— 周囲の音が遠ざかる。

—— 景色が変わる。

—— 目の前の敵を倒すために。

刹那。

俺と織村は、やまよの試合開始の合図も聞かずに飛び出した。

## #31 二人の戦闘はその時点でフラグ

前回のあらすじ

なんだかんだISと戦うのは初めての主人公

どうやら俺と織村は全く同じことを考えていたらしい。

一応の審判であるやまよの開始の合図も待たずして互いに飛び出した形無と織村。漆黒の執事と純白の白兔が、飛び出した勢いそのままにアリーナの中心で激突する。

ゴツ!!

甲高い衝突音。それに伴って発生した突風が観客席をも巻き込みんと唸りを上げる。

無理もない。

本人たちはまだ知る由もないが、学園都市第一位の『ベクトル操作』と第二位の『未元物質(ダークマター)』が真正面からぶつかり合ったのだ。世界線が違うとはいえ、その力はある世界と異なる色合い。

故に。



◆  
「ああ!？」

まるで自分の攻撃がそのまま跳ね返されたかのような衝撃を受けて吹き飛んだ俺は、驚きながらも瞬時に体勢を立て直した。これも、第二位という実力を考慮すれば矛盾は生じないことだ。

空中で一回転し直ぐ様背面スラスタを吹かし空中で停止、眼下でこつちを見上げている馬野郎へと視線を向ける。

(何だ……、この俺が、弾き飛ばされた……?)

過ぎるのはつい数瞬前の攻防、なんの武装も展開せずにその拳である馬野郎を攻撃しようとした。

だがその拳は相手を捉えることはなく、触れるか触れないかの所で弾き返された。

しかもそれは馬野郎が意識的に行なった攻撃というよりは、無意識のうちに行われたと考えたほうが納得のいくように思える。

(……あの訳が解らねえ執事服のワンオフ……? いやあれは第一世代型だぞ、そんなものももう備わってるってのか?)

もしもこの織村に未元物質の本来の持ち主である垣根帝督ほどの

頭脳が付随していたのならば、この現状を整理して目の前の敵が自身と同じ超能力を持っているという可能性を見い出せたかもしれないが、残念ながら彼にそんな頭脳は備わってはいない。

よって、今の織村には形無の能力など把握出来る筈がなく。

「ハッ、どうだっといういなこと。てめえのそのちんけなワンオフも纏めて吹っ飛ばしてやるよッ!!」

そう言っつて、白兔の後部スラスタ―翼から大量のエネルギーを放出、それを一部内部に取り込み圧縮。そして、放出。

爆発的に加速した純白の機体が、眼下の馬野郎に向かって落下してくるかのように斜めに降ってくる。

瞬時加速（イグニッション・ブースト）。

それによつて驚異的な推進力を得た俺はあの忌々しい馬野郎目掛けてその拳を振り上げ、叩き込む。

馬野郎は動く気配を見せねえ。ハッ、もうこの俺の腕が届く有効範囲だつてのにブルツちまつて動けねえのか。いいぜ、ならそのまま吹き飛びやがれッ!!



迫り来る織村を見上げながらも、俺は動こうとはしない。そこには自らの能力の一部である『反射』への絶対的な自信が七割、直線的する織村への呆れが三割だったりする。勿論、この反射とて完璧な代物でないことは百も承知だ。

俺自身が無意識のうちに無害であると認識してしまっているものはその反射の膜を摺り抜けてしまうし、何処ぞのイかれた科学者のようにこの能力を知り尽くした人物なら反射を利用して直接攻撃を仕掛けることも可能だ。

だが、間違うこと無かれ。

此処はISの世界。

あの第二位も木原も、存在しないのだ。

執事服の尾（テール）をはためかせ、俺は瞬時加速（イクニツション・ブースト）でこちらに向かってくる織村を迎え撃つ。

二度、激突。

一度目の激突ではどちらも抱かなかった疑問が、二度目で生まれることになる。

今の激突の後、俺は不審げに眉を潜めた。視線の先には反射を受けながらも行動を止めない『白兔』を駆る織村の姿。

（反射が効いてない……？ いや、明らかにシールドエネルギーは減ってる。ならなんでだ？ 瞬時加速を反射したんだ、それがいくら絶対防御があるって言ってもほぼノーダメージって有り得るのか……？）

東に色々と弄ってもらった御陰で今の俺の目先にはIS搭乗時に映し出されるようなモニタが展開されている。それを見る限りなら、『白兔』のシールドエネルギーは確実に消費されている。こちらのシールドエネルギーも幾らか消費されてはいるが、それでも大したものではない。

しかし織村はデータ上ではシールドエネルギーが減少しているものの、そのダメージのようなものが全く見当たらないのだ。機体の一部が損傷、又は破壊されているのでなければ、それどころかほとんど無傷で空中に存在している。

(アレは流石にオカシイ……、白兔にそんな性能(スペック)は無かつた筈だし、反射を受けてあの程度のダメージしかないってのが引っかけか)

俺は何も織村を瞬殺できるとは考えていない。なにせ相手は自分と違ってISに乗れる人間だ。今は第一世代試作型ということもあって原作のような第三世代や第四世代のような性能はないにしろ、軍事兵器としては間違いなく世界で最強。そんなものと一対一で戦うのだから、警戒はしても油断など微塵もしたりはしない。

油断していないからこそ、織村の乗る『白兔』のその性能以上の動きが気にかかる。

男性がISに乗ればああなる、と言われれば反論に困るが、流石に反射でほぼ無傷というのは有り得ない。

(……何かのワンオフ? いや、ないな。あれは機体と極限までシンクロして発動するもんだし、あの試作型をそこまで使いこなせるとは思えない)

だとすれば、一体なんだと言うんだ。

思考は更に加速する。

その思考の最中にも織村の攻撃が繰り返されるがそれをベクトル操作によって回避、あるいは反射によって防御することで自身へのダメージは0に抑える。それでも僅かにシールドエネルギーは消耗してしまいが、織村ほど削れているわけではないので再度思考の海へと潜っていく。

——それがいけなかった。

「ッ!!?」

一瞬の出来事。

油断などしていないつもりだったが、思考の間に生じた僅かな隙を織村が逃さなかった。

何時の間にか展開されていた近接型のブレードが振りおろされ、俺の反射の膜を切り裂いた。

(……ッちよつと待て、核ミサイルだろうが弾き返す一方通行の『反射』が、斬られた(……)……!?)

俺の脳内で一瞬にして警戒レベルが跳ね上がる。

マズイ。一体何をどうやってこの反射を打ち破ったのかはまだ解らないが、織村にはそれだけのチカラがある。

このままでは押し切られる可能性も否めない。

チッ。こうなったら出し惜しみなんて無しだ。

ベクトル操作によって織村から一旦距離を取り、複雑な演算を開始する。

織村が何で反射を打ち破ることができたのか、それは気になるところだが今は目先の戦闘に集中しないといけない。

俺は小さく息を吐き出し、足の裏にかかるベクトルの向きを操作。瞬時加速も真っ青な驚異的な推進力を得て、『白兔』のもとへと突っ込んで行った。



「……どういふこと？」

アリーナに仕掛けた無数のカメラの映像が映し出されたラボの内  
部で、私は信じられないものを見た。

あのかーくんの超能力の一つである『反射』が破られたのだ。

そんなこと有り得ない、って一笑に付したいところなんだけど、実  
際にこうして映像として見せられてしまった以上認めざるを得ない。

——アレ（織村一華）には、ナニカがある。

それがどんなものなのか現状では把握できないけれど、それがかー  
くんの障害になるっていうんなら私は容赦しない。

あらゆる手段を用いて解析、潰す。

「まっこと癪だけど、ちよつと束さんは興味が湧いてきたよ」

そう言う私の顔には、さぞ悪どい笑みが張り付いていることだろ  
う。



よしッ!!

俺は内心で歓喜の声を上げる。さっきまでダメージを与えられな  
い原因になっていた奴のワンオフ（？）を打ち破ることに成功したの  
だ。

しかし賞賛に価するぜ馬野郎。模擬戦とはいえ、この俺に『未元物  
質（ダークマター）』を使わせただからな。

そう、俺が今展開している近接型ブレードには生成した未元物質が

含まれているのだ。正確にはこの世界には存在しない粒子を微量含んだ近接型ブレードだ。通常武装じゃ馬野郎の機体を破壊することは難しそうだからな、少々本気で行かせてもらう。

馬野郎がどんな原理で攻撃を防いでたのかまでは解らねえけど、なんたつてこのチカラはあの一方通行の反射でさえ打ち破った代物だからな。

幾ら束が開発したISが凄かろうが、この世界に存在しない物質まで把握できる筈がない。

要するに、もうあの馬野郎にはこの攻撃を防ぐ手立てが存在しないってことだ。

これ即ち、俺の勝利!!

だがまあ、褒めてやるよ。幾らこの俺が相手だとはいえ、シールドエネルギーを半分以上も減らしたんだからな。

「さあ、そろそろ幕引きといこうぜ」

俺は再びブレードを振り上げ、馬野郎目掛けて思い切り……

「……ん？」

しようとしたところで、ある異変に気付く。

おかしいな、アイツと俺との距離は結構あった筈なんだが、なんで俺の目の前に居るんだ？

直後。

俺は自分がアリーナの壁に叩きつけられているということに気付いた。

「……は？」

そして聞こえてくる試合終了を告げるブザー音。視線の方向を変えると俺のシールドエネルギーは何時の間にか0になっていた。

「はあああああッ!？」

なんだ!?! 一体何がどうなってやがるんだ!!

つうか今あの馬野郎は何をしゃがったんだ!?!

そんな俺の疑問など知るかとも言うようにアリーナから去って

いく馬野郎。

「おい待てよ!!」

それでも立ち止まらない馬野郎。

「俺は……まだ負けてねえええええッ!!」



何やら背後から叫び声が聞こえてきたような気もしたがそれを一切無視して俺はアリーナを後にした。

ふう、まさか織村に反射を破られるなんて思わなかったな。

こりやこれから先反射以外のこともやってかないとキツイか？

というか織村のアレは一体何だっただろうか。ISに備わってる通常兵器で『反射』を破れるとは到底考えられないし………。

『未元物質』とかなら攻略できるかもしれないけど。

……まつさかなあ。

幾らなんでもそれはないだろ。俺もヤキが回ってきたか、主にあの二人のせいだ。

「まあなんにしろ、無事に終われて良かった良かった」

やっぱり平穩が一番だしな。

そう呟きながら俺は控え室へと戻って行った。

フラグまみれの臨海学校は、こうして幕を閉じた。



## #番外(前) 更識家と天災

前回のあらすじ

フラグにまみれた臨海学校

慌ただしかった臨海学校が終わり、季節はそろそろ梅雨に差し掛かろうかというところある休日。

俺はどういう訳か、IS学園を離れ実家にやって来ていた。というのも、親父から直々に呼び出されたからなのである。

本来であればIS学園の生徒である俺はむやみやたらに学園の敷地外に出ることは出来ない筈なんだが、これまたどういう訳か学園長から直接許可を貰い我が更識家に舞い戻ってくるようになってしまった。

「うーん、一体なんだってんだ？」

自分の家の門の前までやって来た俺だが、どうしてかそこから先の一步が踏み出せない。

なんかアレだ。

嫌な予感しか湧いてこないんだこれが。

だってそうだろう？

大抵のことは電話………はムリか、色々と手続きが面倒だし。にしたって他にも連絡手段はある筈だ。にも関わらず直接俺を呼び出すってことは、また何か厄介事に巻き込まれそうな気がしてならない。

そんな感じで俺がうんうんと唸っていると。

「ん？」

何故か門が開いた。

当然の如くこれは俺が開いた訳じゃない。

開いた門の向こうからトタトタと走ってくる小さな二人。

「兄さーんっ!!」

「お兄ちゃん……!!」

言うまでもない、我が愛しき妹たち。姫無と簪の兩名だ。



姫無と簪に両脇をきつちりとガードされた(というか腕にしがみつかれた)俺は門を潜り、長い廊下を歩いている。

「ねえ兄さん、何でいきなり帰ってきたの？ 連絡くらいしてよ」

右腕にしがみついて離さない姫無が若干膨れっ面になりながらそう言う。いや連絡寄越せって言われても学園長からこの事を言われたのが今日の朝食の時だしなあ。

「ごめんな。いきなりだったから連絡する暇も無かったんだ」

「(……まあ兄さんが居てくれるだけで私はいいんだけど)」

「ん？」

「な、なんでもないっ！」

ぎゅっ、と更にしがみつく力を強める姫無。

……随分力が強くなったなあ、これ常人なら骨がイカれるくらいの強さなんだが。

「……お兄、ちゃん……」

姫無とは違い、俺の服の袖をきゅっと握っている簪が俺を見上げてきた。

ああもう可愛いなあチクショウツ!!

頭を撫でてやりたいけど生憎今は両手が塞がっている状態で身動きがとれない。

仕方がないので。

「ひゃっ……っ？」

袖を握られている左腕をそのまま簪の頭に持っついていき撫でてやる。

うん、しかも簪の手は未だに袖を掴んだまま。どんだけ離したくないんだ。

わしゃわしゃわしゃ。

「……………」

俺が頭を撫で終わると、簪は無言で俯いたままひしつと俺の袖から腕へと掴む場所をチェンジ。

「ずるいよ兄さん。私も撫でて」

密着度が急上昇した左腕とは反対方向から今度は姫無が『撫でて撫でて』と猫のように身体を擦り寄せてくる。

いやそんな腕を掴まれたら撫でるものも撫でられないんですが。

まあ可愛いから良しツ!!

そんなわけで両腕に妹たちを従えた(?)まま俺は長い長い廊下を進む。右手には幾つもの障子が並び、左手には如何にも日本風の庭園が広がるこの屋敷。ハッキリ言ってヤ○ザの屋敷にしか見えない。もう十五年も住んでいる俺はすっかり馴れてしまったが、全くうちを知らない人が見たら今後一切近づかなくなりそうだ。

ブンブン、

「……………」

ブンブン。

うん、きつと楽しくなってきたんだなあこの娘たち。

俺の腕でターザンごっこなるものを始めた。いや俺普通に歩いてるけど常人なら間違いなく肩脱臼してるからな？

やってる本人たちは公園のブランコ感覚でやってるんだろうけど、普通ならこんな風にならないからな？

まあ可愛いからいいんだけど。

我が妹たちの可愛さは世界平和を達成出来るレベルだぞマジで。

「で、兄さんは結局どうして急に家に帰ってきたの?」

「なんだ聞かされてないのか?」

「うん、母さんに聞いてもはぐらかされるし。父さんにも聞いてみたけど教えて貰えなかったの」

あの親父が愛する娘にすら教えられない事、ね。

なるほど俺が今回呼ばれた理由はどうやら表向きの用事じゃあないらしいな。

「一体なんなの兄さん」

率直に疑問に思っているんだろう。姫無になんて説明しようか迷っている、これまでとは明らかに雰囲気の違い。部屋の前までやってきていた。

ちなみに妹達はまだこの部屋の内部には足を踏み入れたことはない。親父たちが部屋の内部に立ち入ることを禁止しているからだ。

「この部屋に用事があるの？」

「ああ。姫無と簪はまだ入れないだろう？」

「うん。何でかは知らないけど」

「ま、親父が親バカだってことだな」

「？」

きつと、いや絶対だな。

親父はこの娘たちを『裏』の世界と関わらせたくないんだろう。

そりやそうだ。

普通に学校に行つて普通に友達と遊んで普通に生活を送る。

これ以上の幸せなんてこの世界には存在しない。

更識の本来の姿を知つたが最後、もう厄介事から逃れることはできないし、常に疑念の壁と対峙しなくてはならなくなってしまう。

そんな世界に彼女たちを巻き込むのは親としても、また一人の人間としても気がひける。

——少なくとも、今は（・・・）まだ。

「なら俺はこれから親父と話があるから、自分たちの部屋にでも戻つてくれ」

どちらにせよ、現段階で妹たちにこのことを知らせるのは早すぎるという親父の考えてには基本的に同意している俺は、そう言つて彼女たちを帰そうとするが。

「やだ」

「……（ひしっ）」

二人とも離れるどころか更に力が強まる。

いやいや、早く行かないと今日中に俺 I S 学園に戻れないんだけど。

俺が I S 学園から貰った外出許可は一日のみ。

要するに今日中に親父の話を聞いて行動を起こさなくてはいけないわけだが、この状態じゃあ碌に身動きが取れない。

「なあ姫無?」

「いや」

「簪?」

「……離さない」

えー。

そりや一日って制限が無ければ俺だって嬉々として我が愛しき妹たちと遊ぶところなんだけど、今回ばかりは時間がない。

仕方ない、こうなれば。

「母さーん」

更識家最恐（誤字に非ず）の母さんに二人を頼むしかない。

「あらあら」

後ろの襖から出てきた母さんはいつもの笑顔を張り付けてこちらにやってくる。

「ちよつと二人を頼んでいい?」

「そうね。姫無と簪は向こうに行きましょう」

「ええ、兄さんと離れたくな——」

「行きましょう?」

ぞわり、と背中に何か冷たいものが流れた。

姫無と簪は二人して顔を真っ青にし、慌てて俺の腕を離す。

姫無たちも母さんの怖さはよく理解しているみたいだ。

「また戻ってきたら遊ぼうな」

名残惜しそうにこつちを見つめてくる二人に俺はそう言って、重々しい襖を開いた。



「来たか」

「……親父」

襖を開いて中に足を踏み入れる。内部の造りは他の部屋と全く違う………なんていうことはなく、至って普通の六畳の畳部屋だ。

そこに親父が胡座を掻いて鎮座している。

「態々IS学園から呼び出すなんて、一体何の用だよ」

親父の対面に腰を下ろしながらそう言う。

「ふむ。言うまでもなく、解ってるだろう」

何時ものような親バカ全開のバカ親父の姿はナリを潜め、鋭い視線が俺に向けられる。

今の親父は裏工作を実行する暗部に対抗するための対暗部組織『更識』の長、十六代目の楯無である。

「……『裏』の仕事ってわけか」

「ああ。つい数日前からだ。IS学園のデータベースに不正アクセスが断続して続いていてな。それで学園長から依頼が来たわけだ」

因みに親父と現学園長は旧知の仲らしい。

「IS学園？ あそこのセキュリティは世界最高レベルだぞ、そこらのハッカーじゃまず突破は不可能だ」

「そこらのハッカー、ならな」

意味深な親父の発言に俺は眉を顰める。

「……警戒レベルは？」

「今の所はC+ってところだ。だがこれが継続すると少々厄介なことになる」

「厄介なこと……物理的な行動か」

「それもあるが、どうもこの一件。アレ（…）が一枚噛んでるらしい」

親父の言うアレ、というのは更識と同じように裏で暗躍する暗部組織の一つの家系のことだ。

暗部組織というのは実は日本中に無数に存在しているが、その中でも大きな力を持つのが『四家』と呼ばれる四つの家系。

『更識(さらしき)』

『杠(ゆずりは)』

『氷見(ひみ)』

『京ヶ原(みやこがはら)』

俺たち更識家と杠家は比較的友好関係にある。なんでも遙か昔から関わりがあるんだとかで、何度か俺も会ったことがある。

氷見家との関係はどっちつかず、といったところか。現段階では敵ではないみたいだが、かといって味方というわけでもない。どちらにも転ぶ可能性のある謂わば危うい中立の立場にいるのがこの氷見家。

そして親父がさつきアレと形容したのが京ヶ原家だ。

京ヶ原家と更識家是对立関係にあり、近頃も小さな諍いが頻発している。

なるほど京ヶ原家が絡んでいるとなると、表の人間では対処するには些か荷が重い。

「……IS学園のデータベースにハッキングをかけてるのがあの家系なのか？」

「いや、それは違う。実際に手を下しているのは何処ぞの企業だ。大凡お前や束ちゃん、ISのデータが狙いだろう」

何処ぞの企業、か。

きっと愚かにも京ヶ原の門を叩き、いいように踊らされている操り人形だろう。

どんな経緯で裏四家に辿り着いたのかは知らないが、碌なことにならないのだけは確かだ。

そして、今回のターゲットはIS学園。当然俺や千冬、束の情報もあそこにはある。

——やらせるわけにはいかない。

「でもよ、俺は情報戦あんまり得意じゃないんだけど」

「ああ、それなら問題はないぞ」

「は？」

これまでの厳しい表情から一転してニカツと悪戯っ子のような笑みを浮かべた親父は一度立ち上がると襖に手を掛けて。

「そつち（・・・）方面において絶大な能力を持つ人と呼んでおいたからな」

そつち方面、情報戦に強い人間なんて更識にはそうそう居ないぞ？  
親父はこの見た目の通りバリバリの現場人間だし、俺もそんなに詳しいわけじゃない。工学部にも限度つてもんがあるし。

更識で情報戦が得意なのは母さんか、後は将来的には姫無あたりだが姫無はもちろん、母さんも余り厄介事は押し付けたくはないというのが本音なんだが。

なら、一体誰が――。

そこまで考えたところで俺が最も出たくない結論に行き着いたのと、親父が開いた襖の向こうからとある人物が入ってきたのはほぼ同時だった。

「おまつ……」

「やつほーかーくん!! 話は聞いたよ! 束さんが一肌脱ごうじゃないか!!」

やってきたのは、世界最強の天災だった。



## #番外（後） 少年少女

前回のあらすじ

はい、巻き込まれフラグが建ちました

「やつほーかーくん!! 話は聞いたよ! 束さんが一肌脱ごうじやないかつ!!」

襖の向こうから勢いよくやって来たのはこの世界の軍事形態を一瞬にして変貌させた天災、ご存知篠ノ之束である。

というかちよつと待て。

「なんで束がこんなところに居るんだよツ!」

「細かいことは気にしつこなしだよかーくん!!」

「いや細かいどころかめちやくちやまつとうな疑問だろうがツ!!」

今更だろうが、篠ノ之束という人間は周知の通りISの生みの親である。

当初の目的とは違えど世界最強の軍事兵器を造り出してしまったこの天才で天災な少女が狙われない理由など一体何処にあるというのか。折角IS学園という如何なる国も干渉できない謂わば安息の地が与えられたというのにコイツはこのことこんな場所までやって来たわけだ。

しかも一人で。

つまりコイツはさらつと危険極まりない行動を現在進行形でしているということだ。

はあ……。

まあ束が一ヶ所に留まり続けることが出来るなんて俺も最初から思ってたなかったが。

こんなにも自由奔放やりたい放題を体現しているような人間が上

からの物言いをはいそうですかと受け入れる筈がないしな。

そんな風にして俺が勝手に内心で自己完結した頃合に、親父が今回の仕事の内容について説明を始めた。

「いいか形無。今回お前には単独で行動してもらおう。うちのモンの援護も無し、一人でだ」

「おう」

一人、単独でか。

まあ確かにこれまでの仕事じゃあ更識（うち）の連中を数人連れて行つてたが、まあ一人でも何とかなるだろう。ほら、俺つてスペックだけなら多分人類最強だし。

あ、でも俺つてバレルわけにはいかないから余り過度な能力使用は控えないとな。

「で東ちゃんには形無を後方からサポートしながらIS学園にされるハッキングを食い止めて貰いたい」

「ほいほーい。かーくん、バックアップは任せなさいっ！」

有りすぎる胸を張りながら自信満々にそう宣言する束。

いや実に眼ぶ……げふんげふん。

いかな、こう真面目な場面なのにあの双丘に眼を奪われては。

というか束に任せたら向こうからのハッキングを食い止めるどころか逆にハッキングして手玉にとる構図が簡単に出来上がる気がするんだが。

「……ん？ てことは今回親父は動かないのか？」

正直なところ俺なんか動くよりも親父が動いたほうが時間的にも効率が良いと思うんだけどな。

何か別件でも抱えてるのか？

「ん、まあ、な。そのなんだ、明日に備えてちよつと……」

……うん？ 何だこの歯切れの悪い態度。

明日何かあったか？

普通に月曜日だし学校や会社があるくらい——あ。

「……おい親父」

「(ビクウツ!!)」

俺の通常よりもやや低い声に、そっぽを向いている親父の肩が激しく上下に揺れる。

「まさかとは思うけど……」

「……（だらだら）」

全身から滝のような汗が流れ出した親父。ああ、こりや確定だな。

「——明日、授業参観かなんかあんだろ」

「(ギックウツ!!)」

この反応、間違いない。

さつき姫無たちに腕を掴まれている時にちらつと聞いたような気がしていたんだが、どうやら明日姫無たちの通う小学校で何らかの行事があるみたいだ。

「授業参観か？」

「あ、ああ……」

しどろもどろといった感じでモジモジしながらそう答える親父の姿からは、とてもじゃないが更識家の当主であるとは想像がつかない。

それと同時に俺の内心でふつつつと沸き上がる感情が二つ。

『呆れ』と『怒り』。

「——ははあん、成る程なあ……」

ゆらり、と立ち上がる。態々俺を呼び寄せた理由が親父自身が授業参観に行きたいがために仕事を押し付けるためだと言うんだから、きっと俺の怒りは間違っちゃいないと思う。

「つうか、自分でさつきと片付ければいいんじゃないかねえか？」

「そ、それはだな……明日着る服とか選ぶのに時間がかかるし」

「女子かツ!!」

「あっはっはっはっ!!」

キレる俺とあたふたする親父。そしてそんな俺たちを見て爆笑する東という構図が完成した。とうかそんなことのためだけに普通IS学園から呼び寄せるか？ まともな人間なら………親父はまともじゃなかったな。

「はあ……」

俺は額に手を当てて重々しい溜め息を一つ。

本来ならこのバカ親父を肅正（母さんと呼んで）すべきなんだろうが、生憎と俺には時間がない。こうして更識の仕事が回ってきてしまった以上、個人的な理由で全うしないわけにはいかないし。

「……分かったよ。その企業の住所と内部の見取図、用意してあるんだろうな？」

「当然だ。束ちゃんのデータベースの中にも既に送信済みだからな」

さつきまでの醜態のは一転、再び暗部組織の雰囲気を漂わせるようになった親父がそう答える。

「ならちやつちやと済ませるか。面倒事はもうたくさんだ」

襖に手を掛けた俺は、そう言っつて部屋を後にした。



「此処で間違いないんだな？」

『間違いないよかーくん。此処が今回のターゲット「明日無商事」』

明日無（あすなき）商事ね。なんともまあ絶望感漂う会社名だこと。

家を出て電車に揺られること三十分。俺の目の前に聳えるのは居たつて普通の中小企業のビル。入口付近に表示された『明日無商事』という名前が今回の目的地であることを示している。

「さて、どうするかなあ」

俺はビルを見上げながら無造作に髪の毛を搔く。親父から与えられた仕事内容は簡潔に言っつてしまえば『上層部に更識の恐ろしさを味合わせる』というもの。現在も行われているハッキングに対しては束が出張る時点で詰みなので心配はないだろう。

というわけで残るのはハッキングを指示したこの企業の上層部を肅正すること。

「————ただけど、具体的にはどうするかなあ」

肅正、と一言に言っつてもその内容は多岐に渡る。物理的に危害を加

えるのか、精神的に追い詰めるのかというだけでもかなり違ってくるのだ。

何時もならば更識の人間が色々手回しをしてくれるのだが、今回は自分一人。全ては俺の判断に委ねられている。とはいえ、それなりにこの世界に関わってきた人間である、どうすればいいのかなど、考えるまでもなく決まっている。

『もうズバーンツって乗り込んじゃえば?』

不意に耳元のインカムから束のそんな提案が啓示される。

「アホ。そんなことしたらこの企業丸ごと潰すことになっちまうだろ」

『ダメなの? IS学園にハッキングしようとする企業なんだよ?』

「これは俺の勝手な推測なんだけど、多分この件に関わってるのは上層部のほんの一部で、その他大勢はそんなことに微塵も関わっちゃいないと思うんだよ」

『でもでもかーくん。此処は私のISのデータを盗み出そうとしてるんだよっ』

「解ってる、束の怒りも最もだ。だから当然このまま放っておくなんてことはしない」

俺はほんの僅かに口元を弛めて。

「それなりの報いってヤツを受けてもらおうさ」



ウイン、と自動扉が重量感知によって開きビル内部に俺は足を踏み入れる。

「ようこそ明日無商事へ。本日はどのようなご用件でしょうか」

自動扉をくぐってすぐ目の前に設置されているカウンターから声を掛けてくる受付嬢。ふむ、このエントランスといい対応といい、やはりハッキングに関わっているのは上層部の極一部だけと見て間違

いなさそうだな。

「えーと、知り合いに書類を届けに来たんですけど」

受付嬢にそう当たり障りのない返答を返すが。

「はい。どの部署の誰でしょうか？」

すぐに質問が飛んできた。ヤバいぞ。此処で下手な事を言っただとバレたら追い出されるか最悪お偉いさんの元に突き出されるかもしれない。

——ん？

いや待てよ。

突き出されたほうがいいのか？

そうすればまどろっこしい道のりを大幅に短縮して一気に目的地に辿り着けるんじゃないだろうか。

いやでもこれ追い出されるだけだったら寧ろ逆効果だよな、どうしたもんか。

『書類を届ける風を装った方がリスクは少ないよかーくん』

『でも俺どの部署にどんな名前の人間がいるのかなんて知らないぞ』

『そこはモーマンタイ、もう各部署の名簿は手に入れてるから』

「よし、俺はツツコまないからな」

何故そんなものを入手してるんだ、なんていうツツコミはするだけ無駄だ。

だって束だし。

たったそれだけで驚くほどすんなりと納得できてしまうのだから仕方がない。

そんなわけで書類を届ける風を装うことにした俺は束から適当な人員を選んでもらい、

「企画部の鬼瓦さんなんですけど」

「企画部の鬼瓦一休ですね。確認致しますので少々お待ちくださいませ」

「っ!？」

しまった!!

そりや本人に確認されるに決まってるじゃねえか!!

「(どうするつもりだよ束ツ!?)」

『ああ、大丈夫だよかーくん。受付の電話は全部研究室(こっち)に来るように弄つてあるから、どうとでも言えるし』

流星は天災。

回線は既に掌握済みだったようです。

普通はそんな簡単に出来るようなことじゃないと思うけどな、普通は。

とまあ、そんなわけで受付嬢から立ち入る許可を貰った俺はエントランスを抜けてエレベーターへと乗り込んだ。

「……なんかトントントン拍子に上手くいくな」

『束さんがバックアップしてるんだからこれくらい当然だよ』

インカムの向こう側で恐らく胸を張っているであろう少々を思い浮かべ、俺は小さく微笑む。いや、微笑むというよりは引き吊るというほうが正しいのかもしれない。

こうして束が俺に協力してくれる『味方』であるから実感として湧くことは難しいが、こうして改めて考えてみると彼女の規格外さを思い知らされる。

学園都市第一位の能力を持つてる俺だが、束だけは絶対に敵に回したくはないからな。

物理的な力とか以前に彼女には勝てる気がしない。

『どしたのかーくん。なんか顔が引き吊ってるけど』

「なんでもねえよ」

『束さんはかーくんの味方だよ』

「心を読むなっ」

そんなやり取りをしているうちに、僅かに感じていた浮遊感が消失する。エレベーターが停止し、軽い音と共に扉が左右に開かれた。

「やっ、と」

一步を踏み出し、周囲をザッと見回してみる。事前に確認した内部の見取図と違いはなく、どうやらこの階に目的の上層部の面々が居る

とみて間違いないなさそうだな。

「どの部屋か分かるか？」

目の前に広がる長い長い廊下の左右には幾つもの扉が等間隔で設置されており、幾らなんでも一つ一つ開けて確認していくのは骨が折れる。

『883号の部屋だね。監視カメラで見た限りじゃあ部屋にいるのは十四人。あとは……なんか明らかにカタギじゃなさそうなのが三人』カタギじゃなさそうなのが三人、ね。

親父からの事前情報によれば今日はこの時間IS学園へのハツキングの中間報告が行われているらしい。だからって裏の人間が三人も居るか？

……匂うな。

向こうにも頭の回る人間が居る可能性がある。

裏で糸引いてる『京ヶ原』の人間か、あるいはこの企業の上層部かは定かでないが、中間報告だけならば裏が出張る必要はない筈だとすれば。

「——こっちの動きが読まれてる……か」

そう考えるのが最も妥当だろう。

こんな真つ昼間に裏の人間が複数でいる理由。

「毘だな」

『毘だね』

構図だけで見れば俺はまんまと誘き出されたわけだ。うん、なんともまあ間抜けな話だ。

——但し。

間抜けなのは俺じゃなくて、向こうの方だけだな。

こんな程度で『更識』を手玉に取ったつもりでいるってんなら、この企業は裏四家をなんにも解っちゃいない。



こと関東に於いては絶大なる力を持つ更識をこんな程度で貶めたと思っている時点で、相手方の力量は既に知れている。それに何より、こんなに軽く見られているということに少なからず苛立ちを覚える。

「ふう」

『どうするつもり?』

「決まってるんだろ」

俺は一拍置いて。

「粛正。更識（うち）の本質ってやつを見せてやるよ」



静まり返った室内。

私たちを含めた明日無商事の上層部はコの字型に並べられた長机に座り、皆が皆正面に配置されたウィンドウに目を向けている。

今日はこれまでIS学園に行ってきたハッキングの中間報告を受けることになっているからだ。

そして現在、正にその中間報告の真つ最中なのである。

ウィンドウの横に立ち、マイクを手にして報告を行っている副社長が言うには、やはりIS学園のデータベースは嚴重にハッキング対策が施されており中々望ましい結果が得られていないということらしい。

だがこれは私たちもある程度の予測はしていた。何しろ今やISは世界最強の軍事兵器、それを扱う学園には世界各国のISのデータが存在しているのだ。寧ろ簡単にハッキング出来てしまったら偽物なのではないかと疑ってしまう。

『——であるので、今後もIS学園へのハッキングを続けてISの情報……』

副社長がそう言い掛けたところで、室内の前側に設けられていたド

アが勢い良く開いた。

「……なんだね」

「ふ、副社長っ!! 我が社のデータベースが……ッ!!」

飛び込んできたのはデータベースの管理を任されていた上層部にいる面子の中では比較的若い男。あの慌てようからして、何か失態でも犯したんだろう。

しかしそんな楽観的な私の考えは、次の男の発言で一瞬にして吹き飛ばされることとなった。

「我が社のデータベースが……乗っ取られましたッ!!」

「……は？」

つい呆けてそんな声を発してしまった私は悪くない筈だ。何故なら私以外の全員も同じく間の抜けたような表情を浮かべているのだから。

我が社のデータベースが乗っ取られた？

冗談にしても笑えない。

この明日無商事のセキュリティはIS学園程ではないにせよこれらのハッカー如きじゃファイアウォールすら突破出来ない代物だ。その強固さは未だ嘗てハッキングされたことがないという事実裏付けされている。

しかしながら飛び込んで来た男の表情からはそんな冗談が言えるような精神状態であるとは考えられない。

となれば。

「まさか……本当にハッキングされたのか……？」

誰とはなしに、この室内に居た誰かがポツリと呟いた。

更に。

「はいっ!! 更にウィルスが……」

若い男が全ての言葉を言い終わることなく、糸が切れた人形のようにガツクリと膝から崩れ落ちた。

「っ!？」

理解が追いつかない。私たちが一体どんな状況に陥っているのかさえ、明確に理解することが出来ない。

カチャリ、と。

室内の後ろでこれまで無言で待機していたスーツを着た数人の男たちが何やら懐に手を伸ばしているのを視界の端に捉えた。

(確かアイツらは社長が雇ったとかいうボディーガード……)

何だ。

一体、これから何が始まろうとしているんだ。

グルグルと脳内で答えのない問が回る中、崩れ落ちた男の奥からカツカツと足音を響かせながら誰かが近付いてくる。

「……？」

カツン、カツンと響く足音は臆て消え、ドアの前には先ほど飛び込んで来た男よりも更に若い男が立っていた。身なりが私服である辺り、この会社の人間ではないだろう。

現れた男は一通り室内を見回してから一度だけ頷いて。

「よし、肅正と行きますか」

直後、何かが自分の背後を通り過ぎたと知覚するよりも早く、私の意識は泥沼に沈んで行った。



「…………ふう」

『いやー、いつ見てもかーくんのソレ（・・）は惚れ惚れする綺麗さだねえ』

「見せ物じゃないんだけどな」

小さく息を吐いてそう束に返す俺の周囲には、長机に力無く突っ伏した上層部の連中。全員漏れ無く俺が意識を奪わせて貰った。当然、何故あんなことをしたのか洗いざらい吐いてもらった後に。

『更識流にそんな技があるなんて束さんは知らなかったよ』

「お前が仕掛けた監視カメラの前じゃ使ってないからな」

首をコキコキと鳴らしながらそう答える。俺が上層部を肅正する

に中って一方通行のベクトル操作は一切使用していない。だってアレ使うと俺の正体がバレちゃうし。故に更識流の柔術を使ったわけだが、親父程じゃないにしろ中々使いこなせてきたんじゃないだろうか。うん、大体一人辺り一秒かからないくらいで撃ち込めるようになったし。

「さて、これで残るのは……」

俺はゆっくりと室内の後方に視線を移す。そこに立つのは、スーツ姿の明らかに表側では出せないような雰囲気を纏わせた男たち。

「お前ら、裏の人間だろ。IS学園をハッキングさせた理由は何だ」

「ッ……」

「理由は」

一歩、俺はスーツの男たちの元へと近付く。コイツらは今しがた俺が明日無商事の上層部にしたことを目の当たりにしてるからな、おいそれと手出しなんてしてこないだろうとは思うけど。

「お前ら、『京ヶ原』の人間だろうか？」

「……………」

あくまで沈黙を選ぶつもりなのか、男たちは口を開こうとはしない。い。

そんな様子を見て、俺は小さく息を吐き出す。

「アンタら、現状が上手く飲み込めてないみたいだな」

こんな下衆な連中に、手加減など必要ない。

一度、首をゴキリと鳴らして。

「拒否権なんざねえ。洗いざらい話せ、全てだ」



「つだあー疲れたー」

IS学園の大きめのベッドにぼふつ、と倒れ込む。

ベッドメイキングされたベッドは心地よく、ともすれば襲いかかる

睡魔に屈服しそうになるがなんとかそれを堪え、俺はゆつくりと今日の仕事のことを思い出す。

「京ヶ原か……、どうりで親父が真剣になるわけだ」

仕事を終えて屋敷に帰ってきた俺は親父に今日のことを伝えた。その時の親父は、完全に裏の世界に居る時のソレだった。

「なあんかやな予感がするなあ……」

これまで暗部間の抗争はあるにはあったが、これほどまでに表面的なものではなかった。それがいきなりこんな直接的なものに、しかもIS学園なんて全世界を敵に回しかねないような場所を狙ったのだ。それもこれも全ては。

「……ISの軍事力、か」

今や世界を席卷しているのは間違いないこのISだ。そして世界の中心にあるのがアラスカ条約によって設立されたIS学園と言っても過言ではない。

これから先、また今回のようなことが起こらないとも限らない。

「警戒だけは怠らないようにしないと」

「そうだな、警戒だけはしておく必要があるだろう」

「だよな——つ!？」

「形無。何か私に言いたいことはないか？」

「ち、ちち千冬さん？何でそんな怖……」

ガバツ!! とベッドから直ぐ様身体を起こすと、目の前には腕組みをした千冬がいい笑顔で立っていた。

……やべえよ背後に般若が見えるよ。

「言いたいことが、あるんじゃないのか？」

表面上はにこやかな笑みを浮かべている千冬だが、はつきり言って冷や汗が止まらない。なんだこれ、滝みたいになってんだけど。

「……ほ、本日はお日柄もよくっ?」

「もう夜八時だな」

「……髪の毛切った？」

「切ってない」

……ダメだ。

千冬の怒りの矛先を変えられる気が全くしない。これはアレだな、素直に謝るしかなさそうだ。

「ごめん」

「何がだ」

「今日のこと、俺と束だけで千冬に何も話してなかったことを怒ってるんだろ？」

思えば千冬の怒りも最もだ。束については俺から話を振ったわけではないが、結果的には二人で仕事に当たった。千冬一人だけ取り残すようなことをしてしまったのだ。そりやもちろん、裏の仕事に一般人を巻き込みたくないという気持ちは存在する。でも千冬と束は例外だ。原作キャラだとか『いつめん』だからとかじゃなく、この二人になら自分の背中を預けられると俺が勝手に思っているんだ。

「……はあ」

「？」

しかし、俺の問いに千冬は盛大な溜息を吐いて、

「形無。確かに私一人だけ何も教えてくれなかったことは寂しいが、それはお前が私を危険から遠ざけようとしてくれているからだろう。それに『更識』の仕事にとやかく口出しする権利など私にはないさ」

そう言った千冬は、ベッドに腰掛ける俺の隣に座る。既にシャワーを浴びたのか、彼女の髪の毛からは女の子特有のイイ匂いがした。

「……形無。あまり、私から遠くに行かないでくれ……」

発せられた声は何時もの千冬からは考え付かないくらいにか細く、小さなものだった。

「不意に怖くなるんだ。突然形無が私の目の前から居なくなったら、と……」

俯いた眩く千冬の肩は、僅かに震えていた。

「千冬……」

俺はその肩を、優しく抱き寄せる。

「父さんも母さんも……、一夏だけを残して私の前から消えてしまった。私にはもう、家族は一夏たった一人で……」

「俺もだろ」

「え……？」

「俺だけじゃない。束だって、千冬の家族みたいなもんだろ」

肩を抱いたまま、俺は千冬の瞳を真っ直ぐに見つめる。千冬の両親はまだ赤ん坊だった一夏と幼い千冬を残し、姿を消した。それ以来千冬はたった一人で一夏を守ってきたんだ。

俺や束もこれまで色んなサポートをしてきたが、やはり根幹ではそういう寂しさをずっと抱えていたんだろう。

そんな想いを抱えたままの友人を放っておけるほど、俺は馬鹿でも阿呆でもない。

「千冬。これからは俺たちも家族だ、苦しくなったら俺を頼れ、束を頼れ。きつと力になってやれる」

「……形無……ッ」

ポロポロ、と。千冬の両目から涙が零れ落ちる。

俺は何も言わず、そっと千冬を腕に抱いた。

必然、密着する互いの身体。

潤んだ瞳でこちらを見上げてくる千冬を抱いたまま、俺は彼女の唇に自らの唇を重ねた。

互いの体温が伝わる。絡み合う舌が、互いを更に求め合う。

離れた口と口からは透明な糸が引かれ、頬を紅潮させた千冬と俺は、そのままベッドへと横になった。

ああ、これはもう、無理だな。

なんてことを考えながら、俺はそっと、彼女に触れた。

こうして夜は更けていく。

## #32 新学期はその時点でフラグ

前回のあらすじ

越えちゃいけない一線を越えたような

「ふぁー……」

ピピッ、と鳴る目覚ましを止めて俺は布団からゆっくりと起き上が

「またか……」

——ろうとしたところで、何故か身体が非常に重いことに気が付いた。最早何を言ってもムダですと言わんばかりの我が妹、姫無の寝顔が俺の胸あたりに乗っかっているのが原因だ。

「おーい姫無、起きろー」

すやすやと可愛い寝息を立てながら眠る姫無を起こすのはなんだか気が引けたが、今日からはそうも言っていられないので肩をゆすつてやる。

「ふぁ……」

「おはよう姫無、朝だぞ」

俺の上で眠っていた姫無はまだ睡魔を振り払えていないのか眠たそうに目を擦りながらゆっくりと起き上がる。

ああ、可愛すぎて死ねる。リアルに。

「おふぁよう兄さん」

「おはよう、はやく居間に行くぞ。今日から新学期なんだから」

そう。今日は四月一日。

何を隠そう今日から新学期が始まるのだ。IS学園も姫無や簪の通う小学校も、今日の午前中に入学式が行われ午後からは直ぐに授業が開始される。



ならばこんな朝早く（現在午前六時半）起きなくてもゆつくりでいいじゃないかと思うかもしれないが、生憎俺はそういうわけにもいかないのだ。

それは何故か。

「おはよう」

「おはよう形無、早いな」

「言っただろ親父。俺も入学式に出席しなきゃいけないんだよ」

居間では既に親父が新聞を広げており、台所のほうからは味噌汁の匂いがする。簪の姿が見当たらないがきつとまだ寝ているんだろう。ちなみにまだ眠たいらしく、姫無は制服に着替えた俺の袖の裾をちよこんと掴んでうとうととしている。

「しかし大変だな、朝からもう出て行かなくちやならんとは……」

広げていた新聞を折りたたんで脇に置いた親父は一拍置いて。

「寂しいぞ形無イイイイ!!」

ああヤバイ。また親父に変なスイッチが入ってしまったている。帰省して学園に戻る度にこんな有り様だから慣れたと言われれば確かにそうなんだが……こうなった親父を宥めるのはとてつもなく面倒くさいんだ。

「だああああッ!! 鬱陶しいわ!! 毎回毎回この流れやらねえといけないのかよッ!!」

「あらあら。またですか?」

俺と親父が暑苦しい絡み合いをしていると、台所のほうから朝食の準備を終えたららしい母さんがパタパタとやってきた。

「ちよ、母さんこのダメ人間をどうにかしてくれ!!」

「あらダメよ形無さん、そんなでもあなたの父親なんですからね?」

「いや母さんそれフォローになってないから!?!」

頬に手を添えてニツコリとそう言う母さん。なんだか最近更に天然具合に磨きがかかってきている気がするのは俺だけだろうか。

「それよりも朝食ができたんだけど、形無さんは食べる時間なさそうね」

「は?」

「だってほら」

母さんに指し示された方向に顔を向ける。そこには壁掛け時計。それはいい、問題なのはその時間だ。

「げっ!? もう七時回ってる!!」

親父と余計なことをしていたらあつという間に時間が過ぎ去ってしまったっていらしい。既に家を出なくてはいけない時間になっていた。

くそ、これからまた暫くIS学園での生活になるから母さんの手料理が食べられなくなるってのに。せめてご飯と味噌汁だけでもと俺は数秒でかきこんで合掌し、勢いよく居間を出る。既に必要な物は玄関に纏めておいたのでそれを引っ掴み、扉を開いて俺は自宅を後にした。

「……行きましたね」

「だな、寂しくなる」

息子が去って行った居間で、夫婦は静かに会話していた。

「もうすぐ一年です、そろそろ形無さんも慣れないといけないんですけどね」

「アイツは自分の名前が気に入っているからな。本人にも自覚はあるが、家族にはこっちで呼んでほしいんだろう」

「あらあら。まるでもう隠居したみたいな口ぶりに思えますよ、『筈(こうがい)』さん」

「間違いじゃないだろう?」

「ふふ、そうですね」



「間に合った……」

IS学園の門をくぐり、入学式が行われる体育館に辿り着いた俺は携帯で時間を確認し遅刻していないことにホッと一息つく。新学期

初日から遅刻なんてしたら、彼女に何て言われるか解ったもんじゃない。

いや、実際には解るが恐らく物理的なナニカが襲いかかってくることになりそうだから想像したくないのだ。

「遅刻ギリギリだぞ」

不意に背後から掛けられた声に俺の肩はビクウツ!! と上下に揺れる。

おそるおそる振り返ってみると。

「……は、早いな千冬」

「お前が遅いんだ、集合時刻二分钟前。他の生徒会メンバーは皆とつくに来ているぞ」

そこにはいつめんであり、俺の最愛の人、織斑千冬が立っていた。手には入学式に関する資料が握られていることから、もう打ち合わせは終わってしまったのだろう。集合時間はまだな筈なのに、というか俺がいないのに勝手に進行したのかよ。

「わ、悪かったよ」

「ゴ立腹の千冬にそう謝ると、千冬は大きな溜息を吐き。」

「……私はお前を少し甘やかしすぎているのかもしれない」

「いや甘やかされた覚えは全くねえよ」

「む。……まあいい、あと一時間もすれば入学式が始まる。しっかりと話す内容を復習しておくこと」

「分かってる。千冬もちゃんと開式の挨拶しろよ? 副会長さん」

「無論だとも」

俺の反撃をさらっと躲して千冬は自信満々にそう言い切った。

まあ千冬が失敗するなんて考えられないけどな。

「……もう春なんだな」

何やら感慨深げに千冬はそう呟く。

春か。確かにIS学園に俺たちが入学してから、本当に時間はあっという間に過ぎ去って行った。俺と千冬、そして束。この三人で過ごす学園生活も……、

「あと一年、だもんな……」

IS学園に入学してから三度目の春が、学園生活最後の春が始まろうとしていた。  
そして、物語は大きく動き出す。

### #333 生徒会はその時点でフラグ

前回のあらすじ

三年生になりました

さて。入学式の準備も終わって式が始まるまではまだ暫くの間があるし、これまでのIS学園での経緯を簡単に説明しておくことでしょうか。

とは言っても、条約の改訂だとかそういういった難しかったり厄介な出来事は何も起こっちゃいない。なんと言ってもIS学園はまだ設立されてから二年しか経っていないのだ。そうそう大それたことが発生して貰っても困る。

先ず昨年、俺たちが二年生に進級すると同時に東の言い分によって『整備科』が設立された。

この整備科では文字通りISの整備や開発に重点を置き、どちらかと言えばISの稼働や制御をバックアップするための科だ。因みに授業は生徒の身でありながら東が担当している。

まあ開発者なんだから当然と言えば当然なんだが、何だかまだあの人間嫌いの束が教壇に立つてるって事実には違和感を感じてしまう。

そして次に生徒会の発足だ。IS学園に生徒会が発足したのは俺たちが二年生の秋頃。学園長や各国の要人たちが取り纏めやすいようにとの思惑が当初はあったようだが、今となっては生徒会≡憧れの的のような方程式が出来上がりつつある。

というのも、白騎士の操縦者だった千冬が生徒会副会長という役職に就いているためだ。

なんかもうアレだ。

千冬が放つお姉様オーラに後輩たちは悉くやられてしまってるんだ。

本人は知らないらしいが、非公式ながらファンクラブが出来上がってるらしいからな。

さて、この生徒会の発足に中ってだが、どうやって役職を決めたのか。

俺は当初普通の学校みたい投票するもんだとばかり思っていたんだが、やはりIS学園。そうそう簡単に決定出来るものでもなかったらしく、教師たちは一週間近くも選出方法に頭を悩ませたそう。

IS学園で求められる生徒会の理想像は生徒たちの見本になり、また相応の強さを持ち合わせている者だ。

前半の理由は言わずもがな、生徒会とは生徒の代表で在るがゆえに常に正しくあらねばならない。

後半の理由はISという世界最強の軍事兵器を扱う以上、仮にそれを使って暴れるような事態になった場合に鎮圧出来るだけの技量が必要になるからだ。

この二つの条件に見合う生徒。多少の見当はつくものの、何分発足させるには通常よりも強いリーダーシップやカリスマを持った人間が望ましい。

それから更に頭を悩ませた教師たちだが、ふと一人が口に出した。

『——このIS学園で一番強い生徒が生徒会長でいいんじゃないか?』

とてつもなく安易な発想。

しかし安易であるだけに、それはとても的を射ていた。

このIS学園に於いて、最強と言っても過言ではない生徒に生徒会長を。そしてその生徒会長と親交が深く、基準以上の能力を持つ生徒を生徒会のメンバーに。

そう方針が決定してから直ぐに俺に千冬に束、そして織村が学園長室に呼び出された。

この四人が呼び出された理由はそれぞれ微妙に異なるが、総じて言えば強いからだ。千冬はもう言うまでもないし、束はなんとと言ってもISの生みの親。織村にしても以前俺の反射を打ち破った(偶然に近い)ことがある。俺が呼ばれたのはその織村に勝ったことがあるか

らだろうな。

学園長が言うにはこの四人の中から生徒会長を選出したいらしいが、本人の意思も聞きたいとのこと。それを聞いた瞬間、千冬と束は全く同時に口を開いて。

『形無（かーくん）が適任です（だよ）』

……おい。

それ明らかに面倒事を俺に押し付けようとしてるだけなんじゃないのか。千冬はともかく、束のあの表情（カオ）は絶対そうだと口笛吹いてないでちゃんと視線をこっちに移せこの野郎バレバレだぞ。

『いや、俺はコイツよりも千冬が適してると思うがな』

そう言っつて割っつて入っつてきたのは織村だ。

ん？　なんか違和感がないかって？　まあな、以前のコイツだったら間違いなく『俺が一番相応しい!!』とか言っつてそうだもんな。そこからへんを話し出すと長くなるから、また後々話すことにしてとりあえず犬猿の仲ではないということだけ言っつておこう。……本当に色々あつたんだよ。

『おい織村。私は適してなんていない』

『そうか？　だつて戦闘能力は千冬のほうが上だろう』

因みに織村は俺が黒執事であるという事実をまだ知らない。あれだけ束が大々的に発表していたのに、だ。

そしてこのままでは延々と話し合いが続くのではないかと思った学園長は早々に決めるべく、こんな提案をした。

『ならいつそ闘つてみるかね。勝者が生徒会長、手加減など一切無し  
の真剣勝負で』

どうしてそうなるんだ、と俺はげんなりしたがそんな俺とは裏腹に、千冬や織村は案外乗り気だった。

『真剣勝負か……ふむ、一度形無とは本気で闘つてみたいと思っつてはいたんだ』

『面白れえ。臨海学校でのリベンジには打っつて付けじゃねえか』

いやいや、なんでもう闘う空気になっちゃってんだよ。そして束、腹を抱えて笑うんじゃない。

『はあ……、というかだ。俺も千冬が適任だと思うけど。代表候補生だし』

そう。織斑千冬は二年生の夏、日本としては第一期にあたる代表候補生に選出されているのだ。白騎士の操縦者だったことは東が情報操作していることもあつて日本政府には全く気付かれていないが、それでもIS学園での成績が桁外れなため堂々の選出だ。

余談だが、俺はその話は断らざるを得なかった。というか、そんな話に来るには来ていたんだが何分世界で二人しかいない男性IS操縦者だ。そう簡単に日本のモノにするなど、各国が許さなかったらしく幾度かの議論の末、保留というなんとも曖昧な結論が下されたのだ。

というわけで現在日本の代表候補生は千冬ともう一人の女子生徒のみ。それにカリスマ性から言っても明らかに千冬が向いていると思うんだけどなあ。

しかし今更千冬たちのやる気を無下にすることも出来ず、流されるままに俺は闘う羽目になった――。



「……し、形無っ！」

「はっ？」

『はっ？』じゃない。もう入学式が始まるぞ」

隣に座る千冬に肩を揺さぶられ、俺はようやく体育館内が新入生で埋め尽くされていることに気がついた。

見渡す限り人、人、人。いや、違うか。見渡す限り女、女、女。俺と織村を除く全てが女性。こんな現状が二年前は逃げ出したくなるくらい嫌だったが、人間て凄いな。

慣れた。

女性特有の香水だかなんだかの強烈な匂いも、騒がしい話し声も、



不思議と耐性が付いたかのように慣れたのだ。

我ながら凄いと思う。

しかしアレだな。

年々世界各国から来る生徒が増えているよな。まあ大体が代表候補生かそれに次ぐくらいの実力の持ち主なんだろうけど今年はえーと、六人!? 去年は三人だったから二倍か。どれどれ……ドイツにアメリカにフランス、しかもこのアメリカの子まだ13歳じゃないか。飛び級みたいなことするとかどんな天才児だよ。

手元の資料を確認しながら、俺は空いているほうの手でパタパタと扇子を扇ぐ。

「……形無」

「ん?」

「やはりというか、こちらに突き刺さる視線が尋常じゃないんだが」

「今更だろ。副会長殿、代表候補生なんだから目立つし注目されてるのは当たり前だ」

「いやお前に突き刺さってる視線のほうが多いような……」

「……………気にしたら、負けだ」

「負けたな、今」

「しょうがねえだろ。予想以上だったんだよ……」

パチン、と扇子を閉じて千冬の方を見る。彼女はいつの間にか大勢の前に立つモード（俺命名）になっていた。

（……………始まるか）

時刻は丁度入学式開式を差していた。

千冬はゆつくりと立ち上がると、そのまま壇上へと上がりマイクの前立つ。

『これから第三回、IS学園入学式を開始する。司会進行は生徒会副会長、織斑千冬が務める』

……相変わらずの有無を言わせぬ圧倒的な物言いだ。千冬には教師たちですらあまり強く出れないみたいだからな。

そんな千冬に羨望の眼差しを向ける新入生たち。初々しいというか無知というか。

そうこうしているうちに式は滞りなく進行し、俺の出番がやってきた。

『――から挨拶』

千冬がそう言うのを合図に俺は腰を上げ、飄々と壇上へと上がりマイクの前に立ってまず一言。

『よおみんな。おはよう』

しん、と静まった体育館。俺は自身に集まる視線に答えるように言葉を紡ぐ。

『諸君らは倍率一万という超難関を突破してきたエリートだ。当然、私は出来ると思ってる筈だ』

だが、と俺は付け足して。

『思いつがるなよ。世界つてのは広いんだ、井の中の蛙じゃいけない。その程度で満足するな、もつと上を目指せ。目標つてのは高ければ高いほどいいからな』

そこまで言つて俺は扇子をパンツと開く。そこには『学園最強』の四文字。

『紹介が遅れたな』

そこで一拍置いてから。

『俺は更識楯無（・・・）。君たち生徒の長であり、目標とするに足る男だ。以後よろしく』

## #34 代表候補生はその時点でフラグ

前回のあらすじ

生徒会長になってました

「お疲れ形無。中々良い啖呵だったぞ」

入学式を終えて体育館の後片付けをしていた俺に、何やら分厚い資料を携えた千冬がやってきてそう言った。一年生が去った体育館はパイプ椅子とカーペットだけの姿となり、それを現在生徒会主導で教員たちと片付けている。

「そりやどーも、しっかしナメられないようにってのも難しいな。どう言えば下級生に伝わるのかサツパリだ。あと千冬、学園内では俺は楯無（・・・）だぞ」

「おっと、済まない。慣れたつもりではいたんだが如何せん無意識にな」

さて、あんなことを言っておいて何だが、内心俺は緊張していたりした。何せ眼下から押し寄せる視線に穴を開けられそうになりながらの挨拶だったのだ。これでアガるなというほうが無理な話である。

生徒会長ってのはやっぱり楽じゃないと痛感させられる一場面だ。

「黒執事ともあろう奴が一体何を弱気なことを言ってるんだ。さつき新入生たちがお前のことを話題に出しているのを聞いたぞ」

声には出していないはずだが、何故か千冬にそうツツコまれた。

「へえ、何て言ってたんだ？」

『あの人が噂に名高い更識会長、あの日本代表候補性の織斑さんよりも強いよね。カツコ良かったなあ』、だそうだ」

「ふーん」

「何だ、誉められているというのにその興味無さそうな態度は」

千冬に問われ、俺は片づけていたパイプ椅子を一旦置いてから軽く背筋を伸ばす。凝固まっていたのかゴキリと背骨の辺りが鳴った。「下級生にどう思われようが関係ないだろ、俺は生徒会長。常にこの学園で最強でなくちゃいけないんだから」

それだけだ、と付け足して俺は再び作業に戻る。

そんな俺を見て一体何を思ったのか千冬は笑みを零していた。

「? 何笑ってるんだ?」

脈絡のない千冬の反応に俺が首を傾げると、当人は微笑みながら。

「いや、そうであるからこそ私はお前に惚れているんだと思ってるな」

「は?」

「早く片づけて生徒会室に戻るぞ。奴に紅茶を淹れてもらおう」

「お、おう」

何やら上機嫌の千冬に言われるがまま、俺は速やかに後片付けを済ませ生徒会室へと向かった。

あれ? なんか俺尻に敷かれてね?



「ふう……」

生徒会室へと戻ってきた俺たちは各々の机へと付いて僅かばかりの休息を取っていた。

生徒会長である俺の机を上座に、副会長である千冬の机が俺から見て右手に、俺から見て左手、つまり千冬の対面に座るのが。

「お疲れ様です会長、副会長。ダーズリンです」

「さんきゅ」

「済まないな」

俺、次いで千冬の元に紅茶を運んで来てくれたのは俺たちよりも一つ年下の二年生。生徒会会計を務める山田真耶だ。彼女の第一印象はその小柄な体格から幼い妹のようなものだったが、しかしその印象

は豊満な双丘によって瞬く間に崩壊することになった。

彼女が生徒会に入ることになったのは一年生の後期、つまり生徒会発足当時からであるが、その理由は千冬と真耶が顔なじみであったことに起因している。千冬が生徒会に入ることが決定した際、生徒会メンバーが少数であったために誰か目星いい人材はいないものかと考えた際に千冬から良い人材がいる、とのことで推薦されたのが彼女なのだ。

俺はそれまで真耶のことを全く知らなかったために彼女の実力が如何程か判らなかつたが、これまでの模擬戦やデータを見て驚愕した。

あの一見してオツトリして若干天然が入った少女だが、実力はこの学園でもトップクラスだった。これなら近いうちに代表候補生どころか国家代表にだってなれるんじゃないだろうか。

しかも真耶、とんでもなく仕事ができる。いや俺の原作での知識が偏っているだけかもしれないだが、めちやくちやしっかりしてるよこの子。

生徒会の仕事の半分くらいは彼女が片付けてくれてるんじゃないだろうか。残りの半分は千冬だな、アイツも仕事出来るからなあ。

……あれ？　じゃあ俺いらなくね？

「ん？　どうした楯無、そんな浮かない顔して」

「いや……、俺って生徒会に必要なのかなあって……」

「は？」

「ひ、必要に決まってますよ!!」

ダーズリン片手に『何言ってるんだコイツ』的な反応を示す千冬とすかさず必要だと言ってくれた真耶。うん、真耶って癒し系だよなあ。なんかもう見てるだけで俺の中の邪悪な何かが浄化されていくわ。

千冬がツンデレなのは今に始まったことではないのもう慣れっこだ。それにこうやって公の場で厳しい分、二人きりになった時のデレ具合が半端ないしな。

「ありがとな真耶、俺を慰めてくれるのはお前だけだ……」

「うひゃあッ!?!」

そう言つて俺は真耶の頭を撫でる。真耶はよく分からない声を上げて眼鏡がずり落ちそうになつていたがドジだなあ全く。

「……おい楯無。早く仕事を片付けないと授業に遅れるぞ」

真耶との戯れ(そんなこと)をしてしていると千冬からの一言。おつとそうだった。今日は入学式ということもあつて通常よりも仕事量が多いんだつた。一応教師たちからは授業には遅れてもいいと言われてしているし、そこまで急ぐ必要もないように感じるが実際は急がないとヤバイ。なにせ生徒会には次から次へと仕事が入ってくるのだ。一分一秒でも早く片付けておかないと後々面倒なことになる。

「さて、なら始めますか。ところで、書記とアイツは？」

「書記のほうはアリーナのほうに視察にいってる。アイツはどうせ研究所(ラボ)だろう」

「そつか、じゃあ今いるメンバーだけで進めるぞ。真耶、まず最優先でやらなきやならないのはどの案件だ？」

「今月の学年別個人トーナメントの組み合わせ決めと各国要人への招待状の製作ですかね」

「……組み合わせはともかく、招待状とか俺たちがやらなきやならん必要性はあるのか……？」

「先生たちも生徒会を頼りにしてるってことですかね」

「いやいいように使われてるだけだろう絶対……」

いや純粹に俺たち生徒会を信頼してくれていることは嬉しいんだけど、それも度を超えて仕事を回されるのは御免だ。

俺も千冬も真耶もクラスに戻ればそれぞれの立場や役目もある。生徒会に割く時間が多いと言えども、その他を疎かにする訳にはいかない。

「しかし生徒会に回ってきた以上なにもせずには突き返すことも出来ないだろう」

「そうなんだよなあ……、ならまずは組み合わせのほうから何とかするか」

「そうですね、こちらのほうが早く片付きそうですし」

そう言つて真耶はいそいそと資料を取り出し、俺と千冬に其々手渡

した。これ態々作ってきたのか？ ホントにマメでよくできた子だなあ。第三の妹として可愛がりたくなるな、うん。

「今週中には各クラスで代表を選出してもらい生徒会に報告してもらう手筈ですけど、一応大まかな予想を立てておいたので参考までに目を通しておいで下さい」

……マジでよくできた子だよ。

「ん、今年の新入生の分まであるのか。よく調べたな真耶」

手渡された資料の中には二、三年生はもちろんのこと、今日入学してきたばかりの新入生のデータまでしつかりと書面に起こされていた。

「はい、一応管理局のデータベースも使いましたので間違いはないと思いますよ」

そう言つてニツコリ微笑む真耶。俺と千冬はその資料を迅速に、だが限なく読み込んでいく。

数分後。

「……二、三年生はあらかじめ予想通り。だが今年の一年生、少しばかり厄介だな」

「ふむ、代表候補生六人その全てが専用機持ちか」

資料を読み終えた俺と千冬は大体同じような感想を抱いていた。

昨年に比べて大幅に増えた専用機持ち。その人数は二、三年を合わせた人数よりも多い。これは即ち、

「抑えが効かなくなりそうだなあ……」

生徒会が存在する理由の大きな一つとして生徒たちの抑止力になるというものがある。これに求められるのは人望、知識と様々あるが根本的なものは純粹に『強さ』だ。

それについては俺や千冬を始めとして問題はないが、今年の新入生は少し話が違う。

専用機持ち。国家代表候補生。

これらの言葉が意味するところは、国の代表、国家戦力。つまるところ、強い。

当然俺たちが負けるつもりなどないし、その六人だって国家に属す

る者として節度ある行動を取ってくれる筈だが、如何せん俺の脳内には薄れゆく原作知識の中でも強烈なあゝの五人の代表候補生の記憶が残っている。

心配しすぎて悪いということはない。彼女たちの行動には気がつけておくべきだろう。

「特に気になるのは……」

俺は資料をパラパラと捲り、その中から二枚の資料を抜き出した。

「ドイツの代表候補生で軍隊育ちのクラリツサーハルフオーフ。そして飛び級で入学してきたアメリカの天才児、ナターシャーフアイルス」



## #35 決闘はその時点でフラグ

前回のあらすじ

今年の新入生は一癖も二癖もありそうな予感

「ドイツ代表候補生のクラリツサハルフオーフにアメリカ代表候補生のナターシャーフアイルス、ねえ……」

俺は教室へ向かう道すがら、先程生徒会室で目を通した彼女たちのことを思い出していた。

ドイツの代表候補生であり、同時に軍人でもあるクラリツサハルフオーフ。

アメリカの代表候補生であり、十三歳という若さでありながらIS学園への入学を許可された天才児、ナターシャーフアイルス。

どちらも俺の原作知識の中に存在している人間、つまり原作キャラ達だ。彼女たちがどんな性格をしているのかまでは覚えていないし、そもそもそんな描写されていなかったのかもしれないが原作キャラと関わるということは色々面倒なフラグを建てるということを意味している。千冬や束、それに真耶の時もそうだったが、俺ってなんかそういう厄介事に巻き込まれる属性でも備わっているんだろうか。……備わってんだろうなあ。

「はあ……、どうしたって俺は巻き込まれちゃうわけか」

そんなこと、この世界に転生して千冬と束と出会った時点で分かってきていたことだ。ISの世界で、現在二人しかしない男性操縦者となりIS学園で生徒会長となった。よくよく考えてみれば、これって完全に巻き込まれに行っているような形だ。

俺はそんな自分の性格に溜息を漏らしながら教室の扉を開いた。

「お、楯無いところに来たじゃねえか。ちよつと前に出てお前進行

「役やれ」

「自分でやれ」

「なんだとう楯無この野郎。生徒会長だからって調子乗ってんじやねぞコンチキシヨウめっ」

「真昼間から一杯やってんじやねえよこの野郎」

扉を開いた途端に飛んできた言葉に俺はげんなりしながら答える。

「クラス代表決めることくらい担任がすべきでしょうが」

「うるへいつ。私がやるよりお前がやったほうが早いんだから効率を重視するならお前がやるべきだろ」

そう口を尖らせながらぶつくさ言っている黒縁眼鏡を掛けた女性に俺は大きな溜息を再び吐き出した。

教室のすみに椅子を出して座っている女性、このクラスの担任である橘（たちばな）杏子（きょうこ）は既にクラス代表を決めるための話し合いを進めることを放棄して俺に丸投げするつもりらしく、窓の外を見ながら鼻歌を歌っている。

この橘杏子という教師、今の会話の流れからも分かるように見事に見た目を性格が裏切ってしまった。外見だけを見れば艶のある肩程までの黒髪に知的な印象を与える黒縁眼鏡、スラツとしなやかな体躯に白のスーツがとても良く映える、言ってしまうえば『ものすごくデキそうな人間』に見えるのだ。

……………あくまでも見た目は、の話だが。

いや、実際に能力的には申し分ないんだけど。前職が技術者だったこともあってISの理論にも精通してるし、束程とはいかないまでも間違いなくこのIS学園でトップクラスの頭脳と能力を持ち合わせてるだろう。

しかしそれだけに、この性格が残念でならない。

外見だけならば美人の部類に入るというのに二十代後半になっても婚約者はおろか彼氏すらいなのは100%このだらけきった性格が原因だ。

故に彼女は生徒間で密かに『残念美人の代名詞』などと囁かれているが、本人は全く気づいていない。

閑話休題。

仕方がないので、橘教諭に代わって俺がクラスメート達の前に立ち進进行を任されることに。本来なら職務怠慢だとかで抗議の声を上げるところだが、橘教諭には色々と（・・・）お世話になっていたりでるので渋々口を開く。

「ふむ。というわけで進进行を任されたわけだが、誰かクラス代表に相応しいと思う人は居るか？ 自薦他薦は問わない」

「会長がやればいいんじゃない？」

一人の女子がそう発言する。それに呼応するようにクラスの何人が俺の名前を出すのが、

「生憎と生徒会とクラス代表は兼任できなくてな。というわけで俺の他にも織斑への推薦も無しだ」

このクラスには俺と千冬、東の三人が固まっている。東だけは整備科なので通常ならば違うクラスになるところだが、そこは東本人が学園長に直談判したらしい。なんでも整備科で授業やってやるからこのクラスにしろってせがんだとかなんとか。東本人に聞いてみても毎度はぐらかされるので俺も正確な理由までは分からないが。

「うーん……、じゃあ布仏さんとか」

「里虹（りこう）か」

俺は発言した女子に反応して、指名された生徒へと視線を移す。

廊下側の一番前の席、そこには黒髪ロングの清楚な少女が座っている。

布仏（のほとけ）里虹（りこう）。

苗字から察しがついているかもしれないが、うちの更識に代々仕えている布仏家三姉妹の長女だ。

一応名目上は俺の従者、ということになっているが俺はこれまで里虹に主人と従者というような態度で接したことはない。というか俺には生徒会長になるまで従者なんて居なかった。

いや、居なかったと言っては語弊があるかもしれない。俺が従者をつけることを拒んできたのだ。だってそうだろう？ どういうわけか知らないが従者は漏れ無く皆女なのだ。対して俺は男、これで抵抗

を持つなというほうが無理がある。

という理由でこれまで従者を持つことなく生活してきた俺だが、流石に楯無を継ぐのに従者を付けないというわけにはいかないかと親父に諭されこうして里虹が従者となったわけなんだが。

「里虹、クラス代表をやる気はあるか？」

「主人（あるじ）がやれと仰るのならば」

……なんというかまあ、従順すぎるんだ。

絵に描いたような従者の鏡。

ほんとなんでこんな硬い人間になってしまったんだか、昔は一緒に仲良く遊んだりもしたはずなんだけど。公私混同しなすぎつてもなんだか複雑な気分だ。

いや、実際は俺が以前従者を付けるのを拒んだからだと判っている。それまで里虹は従者とはかくあるべしで育てられてきたのだから、突然従者は要らないと言われては戸惑うだけでなく、ショックも大きかったことだろう。

故に俺は彼女を従者としてではなく、一人の少女として接し、少しでもこの学園生活を送ってもらおうとしていたのだが、自身が生徒会長という座につき里虹を正式な従者として迎え入れてしまったことで、それも難しくなってしまった。

せめて、虚ちゃんや本音ちゃんには姫無や簪と友達みたいな関係でいるように言っておこう。俺と里虹のような主従関係には、なって欲しくない。

「……ならとりあえず里虹も候補に上げるとして、誰か他に——」

「会長ッ!!」

俺が言葉を言い終わる前に、勢い良く開かれた扉から先程まで顔を合わせていた真耶が飛び込んできた。その様子から余程の緊急事態が発生したのではないかと思考を巡らせる。

「どうしたんだ」

「た、大変なんです!! 彼女が……」

「彼女？」

「私だ」

聞き覚えの無い声が自身の耳に届いたのと、真耶の背後から見たことのある人間が前に出てきたのとはほぼ同時だった。

黒髪のショートカット、IS学園の制服には余りにも不釣り合いな左目の眼帯。先ほど資料で見た姿と寸分違わぬ容姿の少女が、教室の入り口に堂々と立っていた。

「……新入生が三年の、しかも俺の所に一体何の用かな」

取り出した扇子をパンツと叩いて新入生——ドイツ代表候補生であるクラリツサⅡハルフオーフへ尋ねる。

そんな俺に対し、クラリツサは鋭い眼光そのままに、

「貴様が生徒会長、あの黒執事だそうだな」

「ああ」

「……認めんぞ、私は貴様如きが最強であるなどと、決して認めるものか」

「……………」

「勝負しろ更識楯無。男の貴様に、引導を渡してやる!!」

俺から視線を逸らすことなく堂々と宣戦布告してきたこの少女、何か裏がありそうだが、なんか思いつきリラウラと被ってるような気がしてならない。

しかしまあ、俺が生徒会長という座に就いている以上誰からの挑戦も拒むことはしない、というか出来ない。

……はあ。俺は内心で溜息をついて、しかしそれを表には曖にも出さずに飄々としながら彼女に答えた。

「いいよ、その決闘受けようじゃないか」

流れるような動きで開かれた扇子には『来る者拒まず』の文字。だがしかし、と俺は付け加えて。

「あまり俺を、生徒会をナメないほうがいい。……じゃないと痛い目見るぞクラリツサⅡハルフオーフ」

挑戦者からの宣戦布告に、俺は不敵に笑ってみせるのだった。

## #36 思わせぶりはその時点でフラグ

前回のあらすじ  
クラリツサと遭遇

『いいか。勝負は三日後、場所は第二アリーナだ』

放課後、入学式という大きなイベントを終えたIS学園はこれまでにない程騒がしかった。

理由は聞くまでもない、クラリツサが俺に宣戦布告してきたことが知れ渡ったからだ。

まああれだけ大勢の生徒の前で啖呵を切ったんだ、噂が広まらないわけがないんだが。

しかしそんな周囲の喧騒とはまるで正反対のように、生徒会室は静寂に包まれていた。俺を始めとして千冬に真耶、織村は座ったまま口を開かない。こういうった下級生からの宣戦布告はこれまでも無かった訳ではないが、こうもあからさまなものは久しぶりだ。

こうして黙っていてももちが明かないので、俺は真耶が淹れてくれた紅茶を一口含んでから口を開く。

「さて、こうやって粹の良い新入生（ルーキー）から堂々と宣戦布告されたわけだが、」

「楯無、何でお前はそうも軽率なんだ」

すかさず千冬から厳しいお言葉が飛んできた。ただでさえ鋭い眼光がもうスゴイことになっている。

「軽率も何も、向こうから来たんだぞ」

「だとしてもだ。ああもアツサリと承諾することはなかったのではないか？」

「仕方ないだろう？俺は生徒会長、誰からの申し出も断ることはない」

原作でもそうだったが、基本的に生徒会長とはこの I S 学園に於いて絶対的な存在でなければならぬ。理由は以前にも説明したような気がするので詳しくは述べないが、要するにこの学園での頂点が生徒会長、並びに生徒会メンバーなのだ。

そして生徒会長に限ってはいつ何時であろうと挑戦者からの申し出を袖にしたりしてはならない。これは俺と学園側が決めたルールだ。

もしも俺がその挑戦者に敗北するようなことがあればその時は直ぐ様生徒会長は入れ替わる。ちなみにこれまでの戦績は十八戦全勝。

「それはそうだが……」

「まあすることなんてこれまでと大差ない、新入生（ルーキー）にちよつと現実を見てもらうだけさ」

「でもクラリツサさん、あの様子だと会長に何か恨みでもありそうな感じでしたけど」

俺の教室までやって来たクラリツサの様子を思い出した真耶がそう言う通り、俺も明らかに敵意以上のものをぶつけられていると感じていた。原作じゃクラリツサの学生時代なんて書かれているわけがないから知らなくて当然なんだけど、一体何があったんだろうか。

もしかしたらラウラのような事情があるのかもしれないが、分からないことをいつまでも考えていても仕方ない。

俺は椅子から立ち上がって窓から学園の運動場を見下ろし。

「いずれにせよ三日後さ、ドイツ代表候補生の実力、確と見させてもらおうじゃないか」

僅かながらに口元が緩んでいることに、俺は自分でも気づかなかつた。



「更識楯無。 I S 学園初代生徒会長にして学園最強の I S 操縦者。そ

して……………男」

IS学園敷地内に建設された一年生寮の一室で、私はパソコンに表示されたウィンドウに目を向けていた。その画面には本国より送られてきたIS学園生徒会長のデータが所狭しと表示されている。

これまで私のように生徒会長と模擬戦を行なった人間のデータを映像と共に見てみたが、成程確かに強い。先ずISが何故執事服なんだという大いなる疑問が浮上してくるがこれはこの際置いて置く。目を見張るべくはその性能だ。一体どんなスペックなのか全く詳細が分からない。ドイツにもそういったデータは存在していなかったのだ。

『黒白事件』で二千発以上のミサイルや軍事兵器を迎撃した。その映像も確かに在る。しかし、どんな機体なのか解らない。

噂によればアレは篠ノ之博士の特別製らしいのでそういったデータが開示されていないのかもしれないが、映像を見る限りでは特に隠す風でもなく理解できないナニカを行使している。

「何故相手の攻撃が全て通じないのだ……………？　まるでそのまま跳ね返されているかのようだ」

何処かその言葉に引っかかるものを感じるが、現状最も適切な表現ではあるような気がする。それが『黒執事』のワンオフなのか、はたまた全く別のナニカなのかは解らないが目の前に映し出される映像を私なりに分析した結果、恐らくは攻撃の軌道を逸らす、又は跳ね返すものだと考える。

「……………なんだそれは」

自分で導き出した考えながら余りにも常識外れなその性能に顔を僅かに顰める。

攻撃の軌道を逸らす？　跳ね返す？

ならばこちらの攻撃は全く通じないではないか。

ギリツ、と奥歯を食縛る。自ら宣戦布告しておきながらだが、やはり生徒会長という肩書きは伊達ではないのだと思ひ知らされる。

しかし、認める訳にはいかない。男が最強であるなどと、決して認める訳にはいかないのだ。少なくともISが世界最強の軍事兵器と



して存在している間は。

あんな俗物たちに、私の前を歩かせるなどあつてなるものか。

「負けはしない。必ず」

ウインドウを閉じ、椅子の背凭れに背中を預け天を仰ぐ。

学園最強は、女で在つて然るべきなのだから。



「……なんだこりゃ」

俺は視界の先に広がる光景に啞然とした。

クラリツサとの決闘当日。放課後に第二アリーナを使用して行うことになっているため俺と生徒会の面々が行つてみると。

「なんでこんなに生徒たちがいるんだ……？」

「ふむ。おかしいな、しっかりと立ち入りのほうは禁止しておいた筈なんだが」

基本的に生徒会が出した御触れは絶対だ。生徒会が立ち入りを禁止したならば、まずこんな人集が出来る筈がないのだが。しかもこんなアリーナの外にまで。

試合開始時刻である午後五時まではまだ三十分もあるにも関わらず、既にアリーナ内の観覧席は生徒たちで埋め尽くされていた。

「流石に多すぎますよね」

俺の隣で観覧席を見回す真耶が小動物のようにキョロキョロと首を動かしている。うん、なんか愛くるしいな。思わず抱きしめてしまいたくなりそうな勢いだ。

「楯無……？」

なんて考えていたら千冬からの殺気がやばい。

「そ、それよりもだ。これは一体どういふことなんだ？」

「私たちが許可していない以上、この判断は先生たちが行なったと考えるのが妥当ですけど」

「そのとおり、私らが許可したんだよ」

背後から現れたのは橘教諭。相も変わらず見た目だけではできそうな人だ。性格が破綻しまくってるが。

「生徒会（俺たち）が許可を出してないのに、どうしてアリーナを開放したんだよ」

「バカ野郎橘無、あんな大々的に喧嘩売られておいて他の生徒どもが黙ってるわけないでしょうが」

「……そういうことか」

つまり、生徒たちが教師陣に直談判でもしたんだろう。考えてもみれば当然と言える、何しろ対戦カードは学園最強を背負う生徒会長である俺とドイツの代表候補生であるクラリツサ。まず間違ひなく滅多に見られない高レベルの戦闘になるだろう。更に新生生たちにしてみれば入学してから初めて生で観るISの戦闘。いくら立ち入りを禁止したって抑えようがなかったのだ。

「橘無の戦闘がいきなり観られるなんて今年の新入生は運が良いなあ、ハツハツハ」

「見世物じゃねえんだぞ俺は……」

はあ、と俺は小さく息を吐く。多分教師たちからしても勉強になるだろうってことでアリーナを開放したんだろうけど、俺としてはあんまり観せたくないんだよなあ。ほら、多分互角の勝負とかにはならないだろうし。新生生たちには申し訳ないけど、クラリツサを含めてちよつと現実を見て貰わないとな。

「大丈夫だいじょーぶ。私も橘無とドイツのいい勝負するなんて思っけないからさあ」

手をヒラヒラと振ってそう言う橘。いやそれは教師としてどうなんだと思わなくもないが、まあ橘杏子という女はこういう人間であるのだから仕方がない。

「……橘無、解ってるとは思うが、アレ（…）は使うんじゃないぞ？」

「……解ってるよ」

数秒前までとは打って変わって真面目なトーンでそう言う橘教諭に俺も小さく答え、そのまま千冬真耶と控え室へと歩を進める。橘も

心配症だな、俺はそこまで大人気無くないってのに。  
そんなことを考えながら、俺は控え室のドアを潜る。  
ドイツ代表候補生との決闘まで、あと十五分――。



辺り一面IS学園の生徒たちで埋め尽くされた第二アリーナ観客席の一角。位置としては観客席後方の座席に俺、織村一華は座っていた。それも自分でもはつきりと分かるくらい不機嫌顔で、だ。

なんでかって？ そんなもん決まってる。生徒会メンバーで俺だけが控え室に入れなかったからだ。理由は人数制限、更識(あいつ)の試合なんざはつきり言っただっていいが、それでも一応はこの俺を倒した男だ。あの約束がある以上、仕方なく付いて行ってやろうと思ったら千冬と真耶が付いていくよ言っただけで聞かず、溢れた俺はこうして他の生徒たちと同じように上から試合を観る羽目になってしまったわけだ。

(つたく、なんで俺が……)

なにやら周囲から『あの人って生徒会の……』やら『世界で二人目の』みたいな話し声が視線と共に伝わってくるが、いつもなら愛想良く笑顔を振りまく俺もこの時は出来なかった。

はあ、と溜息を吐いて頬杖を付く俺。こんなことなら態々アリーナの使用申請とか下見とかした時間返せってんだよ。

なんて今更なことを考えていた時だ。不意に隣から、声をかけられたのは。

「織村先輩」

「……あん？」

目だけを動かして声が出た方向を見ると、そこにはリボンの色から判断するに一年生であろう少女がこちらを向いて立っていた。

……つうか待てよ、コイツなんか見覚えあるぞ。どこで見たんだっ

けか。

ああ、そうだ。真耶が作った資料の写真——

「少しお時間、いただけますか？」

「……一体俺に何の用だ？——ナターシャ||ファイルス」

金髪の少女は微笑んだまま、俺を見据えていた。

## #37 密かに近づく影はその時点でフラグ

前回のあらすじ

クラリツサとの決闘十五分前

「ふう、」

時刻は午後五時十分前になり、クラリツサとの決闘まであと十分になつていた。俺は控え室で執事服に着替え、いつでもアリーナに出られるように準備を終えてベンチに腰掛けてクラリツサのことを考える。

ドイツの二期にあたる代表候補生、クラリツサⅡハルフォーフ。

軍隊での生活が長かったこともあつてその習慣や態度が染み込んでいるようだ。でもなんでクラリツサは左目に眼帯してるんだ？

確かあれってラウラの眼帯を真似てつけてたんじゃなかったか。

……あの突っ掛り様といい眼帯といい、なんだかキナ臭い匂いがするな。

彼女の過去は大方真耶に調べてもらったが、まだ確証に至らない事も幾つかある。あれ程までに俺に固執する態度と、眼帯の理由。

どちらも原作には語られなかった部分だったり矛盾があつたりと少々厄介な所だが、それもきつと戦ってみれば見えてくるだろう。

「戦う……ねえ」

俺はこの後の決闘の内容を考えて、天井を仰ぎ見る。

「まともな戦闘になればいいけど」

あれ、とそこで俺は気がついた。

生徒会メンバーである千冬と真耶はアリーナ上部に設置されている管制室で待機しているが、もう一人このアリーナに生徒会のメンバーが居る筈だ。

この世界で俺を除けば一人しか居ない、男性IS操縦者であるあの

元勘違い人間が。

「織村の奴、一体どこで何やってるんだ？」



「貴方、織村一華先輩ですよね？」

「そういうお前はアメリカの天才児だな」

アリーナ上部の観客席、これといってすることもなくなっていた俺に声を掛けてきたのは金髪の少女。お前ホントに十三歳かよと疑いたくなるようなプロポーションを持つこの少女はアメリカの代表候補生、ナターシャ・ファイルスだな。つうか何で俺に声を掛けてきやがったんだ？俺のファン……ってわけでもなさそうだな、どっちかつつうと何か企でもあつて俺に近づいてきたって感じか。

「あら、私のこと知ってたのね」

「代表候補生に選ばれる程の人間を生徒会がチェックしてないわけないだろう」

「確かにね」

そう言つて微笑むナターシャ。

ほんとにコイツ何しに来たんだ？

更識とクラリッサの決闘を見に来たつてのはもちろんあると思うが、だったら何で俺なんかに声を掛けた？生徒会のメンバーつてのは基本的に生徒たちからしたら高嶺の花どころか手の届かない領域の人間みたいな扱いで見られるからこうして表立って声を掛けてくる人間なんてそうそういない。居るとしたらそれは生徒会長を狙つて決闘を申し込む奴か、余程神経が凶太い奴だけだろう。

でもコイツはそのどちらでもないように見える。くそつ、原作知識の中にナターシャの学生時代なんて無いから何を狙つてんのかサツパリだ。

「それはそうと織村先輩。少し話があるんですけど」

「あん？」

話つて一体何だ、そう言おうとしたがしかし、それを俺は口にする  
ことが出来なかった。

ナターシャの顔が、俺の鼻先数センチのところまで接近していたか  
らだ。

突然の事に驚く俺を他所に、ナターシャは俺にしか聞こえないよう  
な小さな声で、しかし明確な意思を口にした。

「私を、生徒会のメンバーにしてください」

「はあ?」

アメリカの代表候補生はとんでもないことをさも平然と言いつ  
た。



「……時間だな」

壁に掛けてある時計を確認し、俺はベンチからゆっくりと腰を上げ  
る。

生徒会長としてすべてを賭けた決闘。何も今に始まったことじゃ  
ない。幾度も繰り返し、その度にこの座を守ってきた。

だからといって、決して緊張していないわけじゃない。何せ相手は  
ドイツの代表候補生、慢心や油断が許されるような相手でないことは  
重々承知している。

だが同時に、俺は緊張とは別の感情が自身の内から湧いてくること  
も自覚していた。

高揚。興奮。

口元がつい緩んでしまっていることを知覚しながらも、しかし溢れ  
る笑みを抑えることは出来ない。

「……代表候補生」

控え室を出てアリーナへと繋がる通路を歩きながら、俺はポツリと

溢す。

「さて、お手並み拝見というか」

獯猛な笑みをすんでのところで抑え込み、さも悠然と俺はアリーナへと出ていった。

アリーナに出た瞬間、鼓膜を劈かんばかりの歓声が襲いかかった。うーん、毎回思うけどこの歓声はどうかならんものかね。なんか見世物にされてるみたいで余りいい気はしないんだが。だからこの事も含めて今回は決闘を観戦することを生徒たちには禁止したんだけど、結局橘たち教師陣によつてこんな周囲三六〇度生徒たちで埋め尽くされたアリーナが完成してしまった。

なんてこつたい。

「……つと、待たせたみたいだな」

「ふん、私よりも遅れて登場とは随分と余裕そうだな」

俺が上空を見上げると、既にアリーナに入っていたクラリツサがISを起動させて空中で静止していた。空中で微動だにせず静止するつてのは見かけによらず結構難しいものなんだがそれをなんなくやつてのける所を見るに、やはり代表候補生だなと思わされる。

「だがまあ、逃げ出さなかつたことだけは賞賛に値する」

「そりやどーも」

クラリツサがその身に纏っているのはドイツの第一世代型ISである『スクウィージ』。速さや機動性よりも火力や破壊力を重視したせいかそのフォルムは無骨で、本当にこの機体からやがてシユバルツエア・レーゲンが誕生するのかと疑問に思ってしまうくらい、なんというかまあ残念な機体だ。しかしそれを我が物顔で操作するクラリツサも残念だな。そのISの武装だけじゃ、俺の反射を破りうるものは存在しないんだが。

今の二、三年生は知っている。

嘗て生徒会長を賭けて闘った千冬や織村との戦闘を生で見ているから。俺のこの『黒執事』というIS（名義上はだが）が、どれほど今の世界において規格外な存在なのかということ。

新入生は知らない。



故に、これから始まるのが決闘であると、一進一退の好勝負であると信じて疑わない者も多い。

これは、そんな甘っちょろいものでも、生易しいものでもない。

「クラリツサーハルフオーフ」

「……何だ」

「一つ、君に言っておかないといけないことがあつてね」  
「……？」

これから始まるのは、決闘でも、好勝負でもない。

今から始まるもの、それは――。

「これから始まるのは、一方的な蹂躪だよ」

## #38 回想はその時点でフラグ

前回のあらすじ

決闘開始となにやら巻き込まれフラグが建った織村

「…………ふむ」

アリーナ上空に設置された管制室で、私は小さく息をついた。生徒会長である楯無とドイツ代表候補生であるクラリツサハルフオーフとの決闘が始まって十分。私は正直言ってクラリツサの実力を計り違えていたようだ。試合内容はともかくとして、あの楯無に十分も持ち堪えているのだから。

チラリと横目で真耶を見てみれば恐らくは同じような感想を抱いているのだろう。目に見えた驚愕こそ伺えないが、私のように若干アリーナへと向ける視線が変化している。

「先輩」

「ああ、中々どうして、粘るじゃないかあのドイツの小娘は」

「でもアレ、どう見ても会長が手を抜いてますよね？」

「全くだ、試合前に一方的な蹂躪だとか吐かしておいて始まってみればコレだ。が、確かにこれは相手からしたら蹂躪されてるに等しいだろうさ」

「?……」

「見てれば直に解るさ。そら、そろそろドイツの小娘が痺れを切らすぞ」

イマイチ楯無の戦法が理解できていない真耶にそう言って、私は再び眼下のアリーナに視線を落とす。

そこには飄々と攻撃を躲し、反射する生徒会長と歯を食縛るドイツ

代表候補生の姿があった。



「生徒会に、入れろなあ？」

そのあまりに突拍子もない発言に、俺は思わず聞き返してしまっ  
た。

いや、そりや言葉の意味は理解出来る。なんてたつて俺はあの第  
二位の演算能力を備えてんだからな（別に普通の人間でも理解は出来  
る）。だが問題はそこじゃねえ。どうしてコイツが生徒会に入りたい  
のか、その理由が問題だ。一体何を狙ってやがるんだ？

「そ、だからこうして織村先輩に直々にお願ひしにきたんだけど」

「その胡散臭い笑顔やめろ」

そこいらの男どもなら見惚れるくらいの笑顔で言われてもな、生憎  
俺にはそんな戦法は通用しねえぞ。

「へえ、てつきり女の子には弱いものだと思ってたのに」

「舐めんなよガキ、IS学園（ここ）にどれだけ女が居ると思ってやが  
る」

「ふうむ、それもそうよね」

しれっとしたナターシャに、俺は若干の苛立ちを感じながらも毅然  
とした態度を崩すことなく対応する。

「……で？ 生徒会に入りたいつつう理由は何か？」

「うん？ 生徒会長さんとお近づきになりたいから」

「はあ!？」

「ダメかな？ ほら私だって一応はアメリカ代表候補生なわけだし、  
実力が求められる生徒会の中でもやっていけると思うんだけど」

むしろ私を生徒会に入れない手は無いでしょ、と言わんばかりに自

らを売り込んでくるナターシャ。いやコイツは馬鹿なのか？ そんな道理がまかり通る訳ないだろうが。そんなんだったら生徒会の人数大変なことになったるわ。

確かに生徒会ってのは任期制だから何れは後輩たちに後を託すことになるが、それは任期終了の秋であって今じゃない。特例を作つてはいけない、と言うわけではないが（どうか生徒会が発足してまだ半年なので特例もくそもない）、それを決めるのは教師や会長職に就いている更識であつて間違つても俺ではない。

つまり、俺に言い寄られてもどうすることもできないのだ。

「生憎だが、そういう自薦じみたことで簡単に生徒会員を増やすようなことはしねえし役職も足りてるんでな」

というわけで面倒なことになる前にこの話は打ち切り、ナターシャから離れたほうがいいという結論を出して俺はその場から立ち去ろうとする。

が、しかし。そうは問屋が卸さなかつた。

「はいストップです織村先輩」

「げふッ!」

思いつきり首根っこを引っ掴まれて捕縛された。

「そんなつれないこと言わないで下さいよお。絶対私を生徒会に入れておいたほうが都合が良いですよ？ こう見えても私役に立ちます」  
「いや先輩の首根っこ鷲掴みしてる時点でどう見ても役に立つとは思えねえよ!!」

こいつホントに十三歳かというくらい強い力で取り押さえられてしまった俺は仕方なく話だけ聞くといいことで解放してもらい、今一度席に座りなおす。

「……で？　なんで生徒会長とお近づきになりたいんだよ。こういう言い方はなんだが、ただの興味本位だつてんなら悪いことは言わねえ、止めておけ」

「どうしてですか?」

意味が分からない、とでも言いたげに首を傾げるナターシャ。どうやら彼女は分かっているらしい。今自分がしようとしていること

が、どれほど無謀なことなのかを。

まず、基本的に生徒会のメンバーは日本人で構成されている。勿論、海外国籍の人間を生徒会に入会させてはならないなんて規則はどこにも記されてはいないのでナターシャであろうが他の国の人間であろうがその実力さえ証明することが出来れば生徒会に入ることはい出来るだろう。

しかし、此処で問題になってくるのが海外国籍の人間が入ることによって生じる国の間の摩擦だ。何しろ生徒会には俺と更識、二人しかない男性IS操縦者が漏れなくいるのだ。特に謎の多い更識の『黒執事』のデータなんて各国からしたら喉から手が出るほど欲しい情報だろう。

当然、生徒会に入った場合はそんな更識や俺との関わりが多くなるわけだ。そうなれば自然その国とパイプが形成され、他国よりも優先的にデータが回る可能性が発生する。

そりや俺も更識もそんな無責任なことをするつもりはないが、他国から見れば面白いものではない筈だ。

故に現在の生徒会メンバーは全員日本国籍を持つ生徒で構成され、余計な摩擦を生じさせないようにしてわけてあげよう。

そんな訳で、ただの興味本位からくる発言なら、俺はコイツを生徒会に推薦する訳にはいかないし、そのつもりもないのだ。

「私は本気でしよう」

「本気だつてんなら……」

俺は視線をナターシャからアリーナへと移し。

「その本気つてのをうちの会長に見せるんだな」

直後、アリーナ中心で衝撃が駆け抜けた。



「くッ!!」

装備した大型のブレードを振り回しながら、私は歯噛みした。

この決闘が始まってから早十五分、私は一度たりとも目の前の男に攻撃を命中させられないでいた。否、命中はしている、している筈だ。しかし、その全てがまるで鏡のように跳ね返ってきてしまうのだ。当然のように男に傷はない。

「息が上がっているんじゃないか？ クラリツサーハルフオーフ」

息が上がるなんてISに搭乗している間はあるに得ない。皮肉っているのだ、この男は。

ギリツ、奥歯を噛み締める音が自分の耳にも届いた。……どこまで私を愚弄する気だ、貴様は!!

「おおあああッ!!」

肩口に装着されている最新鋭のミサイルを発射し、多角的にあの男を狙う。幾ら強かろうが所詮は人間、必ず何処かに隙は有るはずだ。それを見つけることが出来れば、勝機はある!!  
だが。

そんな私の企ては、瞬く間に瓦解することになる。

「ッ!」

前後左右上下、全方位からの攻撃であるはずのミサイルは、一発残らず跳ね返され、迎撃されてしまった。

なんだあの動きは、あんな動きがISで出来るものなのか？ 少なくとも私のこの機体では不可能なほどの加速、機動力で翻弄されてしまう。

これでは埒があかない。この状況を打開するには、やはり奴を出し抜けるほどの武装が必要だ。

「……よもや、こんなところで使うことになるとはな」

私はアリーナの地に立つ男を見下ろし、空中で静止したままとある武装を起動させる。本来ならばこれはまだ未完成どころか欠陥品もいいたころの代物で、自分にも反動が多大にかかるために多用は控えなくてはならないものだ。

だが、もうそんな甘いことは言っていられない。私はなんとしてもこの男に勝たねばならないのだ。生徒会長の座など正直どうでもい

い。それよりも、自分の上に男が立っているという事実が私は許せないのだ。

七年前、私は親に捨てられた。母親が病気で亡くなった後すぐのことだ。父親は元々気性が荒いところがあつたが、母の死を境にそれにより顕著に表れるようになった。

私が何かをしでかしたわけじゃない。ただ父が私の存在を気に食わなかった、それだけ。たつたそれだけの理由で、私は僅か八歳にして路頭に迷うことになったのだ。その頃は怒りよりも、ただ悲しさが私の心中を埋め尽くしていた。

毎日を生きることに精一杯だった私を救ってくれたのが、今現在も私が所属しているドイツ国軍の軍隊だ。

しかしそこでも、私は男に対して絶望を抱くことになる。

ドイツの軍隊に拾われてから四年、私が十三歳になった頃だ。突然、軍事施設で働く研究者たちに呼び出され、見たこともないような部屋に通された。

丁度そのころ世間では篠ノ之博士が宇宙空間での活動を想定して開発、設計したマルチフォームスーツであるIS（インフィニット・ストラトス）なるものが発表され、女性にしか操縦できないという欠陥を抱えながらも世界の軍事形態を一変させた。私はその欠陥はむしろ都合だと考えていた。女性にしか操縦できない、つまり軍事面において絶大なる戦力となるのはこれからの時代、女性となるからだ。今までのような男ばかりが社会にのさばる姿を変え、女性の地位向上に繋がるならば、これ程嬉しいことはない。

そんな中で通された、全く見覚えのない部屋。これまでの四年間、決して入ることを許されなかった部屋なのだから内部を知らないのは当然と言えば当然なのだが、それでも何か得体の知れない不気味な雰囲気には私は戸惑った。そんな私の肩を、先導していた研究者の一人が叩く。

『これから君には、ある実験に参加してもらおうと思うのだ。クラリッサⅡハルフォーフ軍曹』

『ハッ、してその実験とは一体なんなのでしょか』

『なに、大したことではないんだ。ただの簡単な検査のようなものだよ。直ぐに終わるから時間は取らせない』

そう言うところから研究者たちは何やら奥からカラカラとカートのようなものを押してきた。そこにあるのは、幾つかの試験管とビーカー。その中に、何か解らないモノが浮いている。

『クラリツサーハルフオーフ軍曹、君のIS適合値はなんだったかね』  
『Bであります』

『ふむふむ、そうか。……もつと上を目指したくはないかね？』

『はい……？』

突然の研究者の言葉。私は意味が解らずつい素っ頓狂な返答をしてみました。もつと上とは、一体どういう意味なのだろうか。階級のことを言っているのではないということとは理解出来るが、ISの適合値なんて直ぐに上がるものでもなければ、そうそう変動するものでもない。

『君のISの適合性を、向上させる手段があるのだよ』

『なッ……？』

信じられない話だ。元々備わっているものを、更に向上させることなど出来るのか。

『なに、心配はいらん。なにも君だけがこの実験に参加するわけではないからな。これはドイツから下された正式な実験だよ』

初老の研究者はカートの上に並べられた試験管のうち一つを持ち上げ、私の方へと差し出してくる。試験管の中には形容しがたい色をした液体と、小さな粒のようなものが浮遊していた。

『これを飲み干すだけでいい。そうすれば、君は更に強くなれるぞ』

強くなれる。この時の私は、その言葉に惑わされてしまっていたのだ。今考えてみればこんな実験、ドイツが許す筈がない。正式な通達があるのなら、あんな実験室で行う必要など無かった筈だ。

だがこの時の私は、そこまで考えられなかった。目の前にそれを出され、つい手を出してしまったのだ。

それが私の、最後で最大の過ちだった――。



……あの時の過ちの代償に頼ることになるとは、世界とはなんと皮肉なものなのだろうか。

否、最早何も言うまい。私はそれだけ世界が残酷で、無慈悲であるということを知っている。少なくとも、目の前のこの男よりは。

「……よく見ておけ更識楯無」

私は自らの左目に当てられていた眼帯を勢いよく外し、これまで閉じられていた左目を開く。

「これが、私の全てだ——ッ!!」

その瞳は、金色に輝いていた。

## #39 決着はその時点でフラグ

前回のあらすじ

クラリツサの左眼が金色だった件について

「よく見ておுகいい更識楯無。これが、私の全てだツ!!」

スクウィーヅを展開したままで外されたクラリツサの眼帯。その下に隠されていた左眼は金色に輝いていた。

チツ、と俺は内心で舌打ちする。アレは俺の記憶が正しければドイツがIS適正向上のために行なった処置による産物、『越界(ヴォーダンの瞳(オージェ))』で間違いない筈だ。原作ではラウラが同じ眼をしていた。

しかし、ラウラの金色の瞳は『越界の瞳』の適合のためのナノマシン移植手術に失敗し、オッドアイに変色してしまった。擬似ハイパーセンサーとして機能するこの瞳だが、確かシユバルツェア・ハーゼの部隊全員が移植手術してるとか聞いた気がする。その辺りは原作でも曖昧だったのでハッキリと断言は出来ないが。

あの瞳を見る限り、クラリツサも後のラウラと同様適合に失敗したということなのだろう。

んん？ 原作のクラリツサって多分適合に失敗はしてないよな、失敗してたら出来損ない扱いされてぼっちになってることだろうし。

(まさかこんなところで原作崩壊が起きてるとはな……)

俺がこの世界に絡んだ時点である程度の原作崩壊は考慮していたが、これまでの十七年原作と大きな相違がなかったのですっかり忘れていた。こういう相違だって、当然発生する可能性はある。

これまでであった相違と言えば『白騎士事件』が『黒白事件』に変わったくらいだ。

(俺の所為で金色の瞳になっちまったのかな……)

解っている。クラリツサの瞳がああなつてしまったことに対して、責任を感じる必要はないということも。例え俺という存在が無くてもああなつてしまっていたかもしれないということも。

解ってる、解ってはいる。

頭の中ではきちんと理解している。これは彼女の問題、俺が転生者だと知らない彼女には俺が何を言っても無駄だ。事情を知らない人間が何故そんなことまで知っているのかと糾弾されるのが目に見える。

しかし。

それでも、俺は内心で小さな罪悪感を拭い去れずにいた。勿論、そんなこと表面上は億尾にも出さないようにしていたが。

あの瞳が失敗作であるものとしたら、彼女が俺に限らず男を恨んでいる理由はハッキリする。真耶の調査通り、クラリツサの父親と実験に参加していた男たちが原因だろう。

(……ふう、らしくないな)

心中で俺はそう思いつつも、根底では既に答えは出ていた。

——クラリツサを、救おう。

何時までも男を恨み続けるなんて不毛なことをさせるわけにはいかない。少なくともこうして俺の前に彼女が現れた以上、俺はクラリツサを変える。変えなくてはならない。

……なんてまあ、ご大層な事を考えてはみたが結局の所、俺のやることは当初から何も変わっちゃいない。クラリツサが恨み卑下するような低俗な輩は極一部で、そんな男ばかりではないということを理解してもらえばいい訳だ。つまり、自身よりも優れた男が居るということを認めればそれで問題は解決。万事円満に終わる事が出来る。

差し当っては——

「クラリツサをぶちのめせばいい」

この鬼畜発言は一般回線だったために管制室で待機していた千冬や真耶、果てはクラリツサにまでバツチリと聞こえていた。

「……ほお、この状態の私に勝つだど？ 貴様今置かれている状況が理解出来ていないようだな」

「俺が今置かれている状況なんかには興味はない。それよりも、そんな無防備な状態で空中に静止していいのか？」

「ハッ、一体何を言ってる——」

そこで、クラリツサの言葉は途切れることになる。

「そんなたかだか上空五十メートルは、俺の射程圏内だと言っているんだ」

「!?」

地上からクラリツサを見上げていた俺は足の裏にかかるベクトルを操作し、一瞬にしてクラリツサの目の前にまで跳躍する。そしてそのままベクトル操作された蹴りが、クラリツサの腹部に突き刺さる。

「ガ……ッ」

蹴りの威力そのままに吹き飛ばされたクラリツサが観客席上部の内壁へと叩きつけられる。くぐもった声が漏れ出す。ふむ、これでシールドエネルギーは粗方削れたな。ウインドウを見ればクラリツサの残りシールドエネルギーは五割を切っていた。

なんとか立ち上がりこちらを睨んでくるが、俺からしてみればただの強がりには見えないな。

「どうしたドイツ代表候補生。まさかこんな、たかだか（……）一介の男に、そう簡単にやられはしないよな？」

「貴……様ッ……!!」

安い挑発だ。我ながらそう思うが、怒りで正常な思考能力を欠いているクラリツサには効果は充分だった。彼女はスクウィーヅを駆り、一直線に俺の方へと向かってくる。

「何の策も無しに突っ込むのは愚の骨頂だ」

「私を嘗めるなよ、更識楯無ッ!!」

金色の瞳がこれまで以上に見開かれる。同時に展開される左右の装甲。機体内部から取り出されたのは、俺が見たことのない武装だった。外観はスナイパーライフルに酷似している。しかし、遠距離型の武装をこれでもかと詰め込んでいるスクウィーヅには今更スナイパーライフルなど無用の長物ではないだろう。

となれば、あれはこれまでの武装兵器とは何かが異なるということ

か。

数瞬のうちにそう結論を出した俺は反射が展開されていることを確認し上方から迫るクラリツサを見上げる。

確実な勝利を取るならば、どんな兵器なのか解らないあのスナイパーライフルに似た武器を使わせないのが最も最良な手段だろう。彼女がああ越界の瞳を使って使用する兵器だ。恐らくアレを打ち破ればクラリツサにそれ以上の戦力はない。

しかし、それではまだ彼女を救うには不十分だ。

彼女が男を嫌うその根本をどうにかしなくては、これから先彼女にとっても俺にとってもメリツトはない。

だから、ぶつかる。

正面から。彼女の最強の攻撃を打ち破る。

「喰らえッ!!」

構えられたスナイパーライフルから放たれたのは、銃弾ではなかった。

銃口から放たれたのは線を引くようにして白く輝く熱線。

(アレは……、荷電粒子か!!)

クラリツサが構えていた武装、荷電粒子砲。

砲弾としても用いられる荷電粒子を、粒子加速器を使い加速させ発射する兵器だ。あのスナイパーライフルのような細身の銃身に加速器が備わっているとは思えなかったが、しかしどうやらアレは荷電粒子砲で間違いないようだ。

だがまあ、荷電粒子砲だからといって何も慌てふためくこともない。俺はそれを反射によってそっくりそのまま弾き返す。

辿って来た軌道とは今度は逆方向に進路を変えた荷電粒子が、クラリツサへと襲いかかる。

「なっ、これも跳ね返されてしまうのかッ!?!」

「俺の反射を打ち破りたければ、未元物質(ダークマター)か木原神拳でも修得してくることだな」

「はッ——?」

直後、自身が放った荷電粒子砲がクラリツサに直撃した。ふむ、モ

口に喰らったな。流石にこれまで反射されるとは思ってたか？

彼女の瞳は擬似ハイパーセンサーの役割をしているが、ISの動きなら一挙手一投足分かって俺の場合も全く意味を為さないし。俺はただ執事服着てるだけだからな。

(終わった、か……?)

襟元を直しつつ、荷電粒子砲が直撃したことで地上に叩き落とされたクラリツサのほうへと視線を移す。砂埃が辺りに漂うが、どうやらまだ僅かながらにシールドエネルギーは残っているようだ。微かに砂埃の向こうからもスクウィージの稼動音が聞こえる。

するとそんな周囲の砂埃を薙ぎ払うかのように熱線が放たれた。荷電粒子砲だ。

俺はそれを反射させず身体を右にずらすことで避ける。別に反射しても良かったんだが、彼女にはこのほうが堪えるだろう。

「戦意は衰えていないようだな、クラリツサⅡハルフォーフ」

「負けぬ……、私は、決して男などには負けないッ!!」

……はあ。俺は内心で溜息を一つ。彼女の男に対する価値観は、一筋縄では変えられないらしい。俺も簡単に事が済むとは考えていないが、一体どうしたらここまで男を卑下できるのか聞いてみたいものだ。

——仕方ない。

本当は使わないつもりだったが、彼女に男をある程度認めさせるには多少の荒療治が必要だと判断した。

とりあえず、威力は最低限に抑えてこのアリーナを破壊してしまわないように気をつけたいとな。俺は管制室に待機している千冬へと回線をつなぐ。

「おーい千冬」

『ん、どうした楯無。一方的な蹂躪とやらはもう済んだのか?』

何やら刺をふんだんに含んだ言葉が返って来た。多分そんなこと

言っておいて二十分近く戦ってることを言ってるんだろ。いや俺は全くの無傷だから一方的な蹂躪というのも間違っではないんだが。

「いやそのことなんだけど、ちよつと俺本気出すから」

『はあ……つてまさか楯無、アレをやる気か!?!』

流星は千冬、今の会話のやり取りだけで俺が一体何をするつもりなのか理解したらしい。だからこそこの慌てようなわけだ。

「そんなわけだから、もしヤバそうだったら避難誘導とかよろしくな」  
『オイちよつと待て楯無!! こんな大勢の生徒がいる中で———!!』

プツ、と回線を遮断した俺はクラリツサを見据え、小さく口元を吊り上げる。

「さて、クラリツサハルフォーフ。そろそろ御戸開きといこうか」

「世迷言を、貴様如きに負ける私ではないッ!!」

叫ぶクラリツサを視界に捉えたまま、俺は両手を頭上に掲げる。

———さあ、行くぞドイツ代表候補生。

「……圧縮、圧縮、圧縮。空気を、圧縮……!」

掲げられた両手を中心に、不自然な空気の奔流が形成され始める。

それはまるで、引力に吸い寄せられかのように。風が一点に集まり、凝縮されていく。

「な……ッ、なんだ、それは……!」

驚愕に染まるクラリツサ。無理もない、普通の人間にこんな芸当が出来る訳がないのだから。ISを駆るクラリツサでさえ不可能な芸当だが、生憎俺は普通の人間ではない。某都市で最強と呼ばれた少年の頭脳とその能力をこの身に宿しているのだから。

俺の両手の先に集められていた風は、やがて一つの形を作り出した。

———高電離気体（プラズマ）。

「こんなものが、人間に作り出せるのか……!?!」

作り出せるんだな。一方通行の能力を持つ俺は、大気に流れる風のベクトルを掴み取ることも可能だ。

使い方を間違えば危うく世界を滅ぼすことだってできてしまいうな程に強大な能力だ。今更ながらこの能力のチートさを今一度実感する。

「終わりだ、」

瞬間、圧縮し続けた高電離気体（プラズマ）が、アリーナを中心に炸裂した。



「すみませんでした……」

「お前こっちの身にもなってみろってんだよ楯無い。私はお前の尻拭いするために教師やってんじゃねえんだぞお？」

クラリツサとの決闘があったその日の夜、生徒会室で俺は橘教諭に頭を下げていた。

その理由は明白、俺の前に並べられた書類が全てを物語っている。

「第二アリーナ半壊、被害総額一億一千万。観客だった生徒たちは織斑が緊急避難させたおかげで奇跡的に全員無事だが、一步間違えれば大惨事だったぞお？」

「いや、でもそれはあらかじめ千冬たちにその旨を……」

「口答えすんな」

スパンツ、と軽快な音を立てて出席簿が俺の頭に振り下ろされた。

「楯無い、生徒会長って役職に就いてんなら、もっと考えて行動しろよお」

「はい……」

暗に『私の仕事増やすんじやねえよこの野郎』と言っているように聞こえなくもないが、ここは俺が全面的に悪いので再び頭を下げる。確かに軽率だったと思うしな。流星にアレはやりすぎたとプラズマを放ってから若干後悔したし。

「よし、ならさっさと自室に戻れ。明日からまた忙しくなりそうだし



な」

「……はい？」

「ほら帰った帰った」

手で帰るように促された俺はそのまま生徒会室を後にし、寮へと戻って行った。

最後のあの言葉が少し引つかかったが、聞きそびれてしまい結局聞けずに自室である女子寮の隣に建てられた俺だけの部屋の扉を開ける。

「あ、お帰りなさい会長」

「おうただいま」

靴を脱ぎ、ネクタイを緩めて制服を脱ぎ――

「は？」

――かけたところで俺はようやく気がついた。

いや、あまりにも自然と声を掛けられたので違和感が消滅してたんだ。

というかだ。

「なんでお前がエプロン姿で台所に立ってんだッ!？」

そこにはピンク色のエプロンを装着したドイツ代表候補生、クラリツサⅡハルフオーフが立っていた。

## #40 エプロンはその時点でフラグ

前回のあらすじ

自室に戻れば二秒で唾然

「お帰りなさい会長」

「いや待てなんで当たり前のようにエプロン着用で台所に立ってんだお前」

橘教諭に生徒会室で軽く説教されて自室に戻ってみれば、そこには何故かピンクでフリフリなエプロンを装備したドイツの代表候補生、クラリツサハルフオーフが台所でなにやら作業をしていた。

いやいやちょっと待てよ。然も当然のように居座ってくれているがこの部屋オートロックなんだけど。俺以外に鍵持ってる奴なんていないんだけど。何で普通に室内に居るんだコイツは。

「少し待って下さいね。直ぐに料理ができますから」

「よし、とりあえず手を止めてこっち来い。不法侵入で罰してやるから、会長権限で」

職権乱用？ 馬鹿野郎不法侵入してくるほうが明らかに悪いだろう。IS学園に於いて唯一とも言える安息の地がこうして崩壊させられてしまったのだ、このくらいの事は俺の絶望に比べればどうってことない。というか今すぐにコイツを追い出したい。ただでさえ今日は能力を頻繁に使用して疲れてるんだ。フカフカなベッドと快適な空間で安眠したいんだよ俺は。

というかだ。

なんだこのクラリツサの俺への態度は。つい数時間前まで『お前なんて認めるか死ぬ』みたいな態度だった筈なんだが、今やそんな態度

は見る影もない。一体この数時間で彼女に何があつたというのだろうか。

……なんだろうな。どうしてか分からないが、途轍もなく嫌な予感がしてならない。

「……先ずはどうして部屋の中にいるのか説明してもらおうか」

「はい会長、ツヴィーベルズツペができましたよ」

「俺の話聞いてるっ!？」

俺の話など全く耳に入っていないように、エプロン姿のクラリツサが小さめの鍋を鍋つかみ着用でこちらに運んで来た。

「これはですね、ドイツの伝統的なスープ料理で私の得意料理の一つでもあるんです。材料は」

「なあ俺の話聞いてくれないかな!?! 全く会話が噛み合っていないんだけど!!」

クラリツサはテーブルの上に鍋を置き(ちゃんと鍋敷きも敷いてある)、これがどんな料理なのかを得意げに話し始める。ダメだ、全く会話が進まない。これ食べないと済まない流れなんだろうか。確かに得意料理だと自慢気に言うだけあつてとてもいい匂いがする。オニオングラタンスープのようなものだろう、じっくり煮込まれた玉ねぎとコンソメの香り、上に乗せられたチーズが食欲をそそる。

うん、美味そうだ。でも今俺はこれを食べるためにクラリツサに問いかけているのではない。

「……どうしてロックを解除出来たんだ?」

先程までとは違い、俺は声のトーンを低くして目の前のテーブルにつくクラリツサに尋ねる。

雰囲気の違いを感じ取ったのだろう、彼女も次は料理の話を挟むようなことはしなかった。そしてゆっくりと口を開く。

「勝手に入ってしまったことは謝罪します。この部屋のマスターキーを貸してくれたのは橘先生です」

……あの野郎!!

明日から忙しくなるってこういうことかよ!! 思いつきり災いの種自分で蒔いてんじやねえか!!

先程生徒会室で橘が言っていたことをようやく理解した俺は内心  
での女への怒りを滾らせる。確かに橘教諭には色々世話になっ  
ているが、マスターキーまで渡した覚えは微塵もない。更に言えばこ  
の部屋には指紋認証やらの面倒なセキュリティがついている。それ  
はマスターキーだけでは解除できないと思うんだが。

「あ、それは全部橘先生がやってくれました」

俺にプライバシーってものは存在しないのか。

IS学園なら国家機密だとか当然極秘情報取り扱ってるんだから  
生徒のプライバシーくらい守ってもらいたいものだ。

「はあ……、それで？ 君が此処に来た理由は一体何なんだ、クラリッ  
サハルフオーフドイツ代表候補生」

頭を抱えつつも話を進めないことにはこの状況は一向に進展しな  
いのでベッドに腰を下ろし、クラリッサにそう尋ねる。彼女もエプロ  
ンを外して、静かに頭を下げた。

「申し訳ありませんでした」

そう言い、クラリッサはテーブルに頭ぶつけるんじゃないかとい  
うくらいに深々と謝罪した。何のことだ？ とは口に出さない。これ  
が今までの俺に対する態度のことだと分かりきっているからだ。生  
徒会長への挑戦状はいいとして、上級生に対する態度ではなかったか  
らな。その辺りを反省しているのだろう、彼女は未だに頭を上げよう  
とはしない。

「気にするな……とは言わないけど、とりあえず頭を上げろ」

「いえ、しかし……」

「そんな体勢じゃ、話を聞きづらいだろ」

なおも頭を上げようとしなくクラリッサを宥めつつ、俺は何故彼女  
がここまでガラリと変わったのかを考える。俺との決闘をするまで  
の彼女は男なんて認めない、私が最強だ的な思考を持つ典型的な女尊  
男卑の思考をしていた筈だ。その理由は彼女の左眼だろうが、如何せ  
ん度が過ぎていた。確かにそういった狂った学者のような男も極一  
部いるのかもしれないが誰も彼もがそうではない。

そういうことを分かって欲しかったから、俺は先の決闘で圧倒して

みせたのだ。男でもこれだけでできるのだと、理解して欲しかったが為に。

という観点から考えると、今の彼女を見れば俺の企みは成功したように思える。これだけ謙虚なドイツ人は見たことないしな。

が、しかしだ。これまで十七年、ISの世界で生きてきたことにより培われたらしい俺の第六感が告げている。これはなにかあると。

「クラリツサ」

「は、はい」

「話してくれ、全部だ」

「……はい」

そう言うと、ようやくクラリツサはこれまでの経緯を話し始めた。



放課後に行われた決闘後、私は控え室でたった今まで戦っていた対戦相手のことを思い出していた。

IS学園初代生徒会長、更識楯無。

これまでのデータや噂で強いということは分かっていたが、実際に戦ってみるとその強さを嫌でも思い知らされた。しかも、恐らくあの男は手加減をしていた。私の攻撃を跳ね返したり躲したりはするものの、直接的な攻撃は終盤の蹴りと最後の規格外の攻撃だけ。アーリーナを半分吹き飛ばしておいて言うのもなんだが、後から教師の一人に聞いたところによると以前あの攻撃によって第一アーリーナが消滅したらしい。

つまりは、私は始めから相手にすらされていないなかつたということだ。あの決闘を決闘だと信じて戦っていたのは自分だけ。そういえばあの男は最初に言っていたではないか。『これは決闘じゃない、一方的な蹂躪だ』と。

終わってみれば確かに内容はその通りだ。反論の余地もありはし

ない。

完全な敗北。勝機すら見出せないそれが、私の前に叩きつけられたのだ。

「……何が代表候補生だ、笑わせる」

自嘲気味にそう呟いて、私は控え室の天井を仰ぎ見る。これから私はどうなるのだろうか。これまでに積み重ねてきたものが全て砕け散ってしまった今、私には何も残されてはいない。

このままいつそ、ドイツへと帰ってしまおうか。当然政府からは見放され、路頭に迷うことになるだろうが今この場から抜け出せるならそれで構わない。

「しかし、更識楯無か……」

上げていた顔を戻し、ポツリと零す。

私が憎んできた男。ISに乗れる男。認めたくはないが、あの男の実力は本物だった。恐らく、現時点で既に世界最強クラスだ。

あの二千発以上のミサイルや軍事兵器を迎撃した『黒白事件』のデータあの男の強さは把握しているつもりだったが、あれはいくらなんでも規格外すぎる。先ず全ての攻撃が跳ね返されるとは一体どういうことなんだ。その時点でこちらに勝目はないではないか。

いや、そういえば先日見た試合映像の中に、あの男に物理攻撃でダメージを与えていた人間が居たな。確か今は副会長の職に就いている、織斑千冬といったか。彼女もまた、並外れた実力の持ち主だった。日本代表候補性に選出されるだけのことはある。あの人はどうやってあの男に攻撃していたのだろう。映像では近接型ブレードで攻撃しているようにしか見えなかったのだが。

ダメージを与えたという点では初期の男、織村一華とやらもあの會長に食らわせていたな。何だ、生徒会は化物の集まりなのか。

「しかし……強かったな」

私は目の前に突きつけられるまで知らなかった。これほどまでに強い人間がいるということ。

ドイツで代表候補に選出され有頂天になっていたのかもしれない。こんなことではいつ足元を他の奴らに搦られるか分からない。

「私も、あの男のように強くなれるのだろうか……」  
ギョツ、と拳が強く握られる。心中で渦巻く感情の正体が何なのか、分からないままに。

追いつきたい。追い越したい。男である会長に出来るのだ。私にだって、出来ない道理はない。

ドイツ本国からの打診もあつて入学したIS学園だったが、当初は私は全く乗り気ではなかった。ISの産みの親である篠ノ之博士がいるというのには多少惹かれた部分もあるが、何故女性にしか操縦できないISを扱う学園で男が生徒会長を務めているのだ。この学園にはそんな会長に勝てる技量を持った生徒はいないのか。そう思い、この学園のレベルの低さに落胆していた。

しかし、違った。

あの男こそが、この学園最強。突出した力を有していたのだ。

……面白い。

自然、私の口元は緩んでいた。

この学園に来たのも、実力を高めるためには間違つてはいなかった。どころか、これ以上ない最善の場所だ。

「となると、先ずはこれまでの非礼を詫びなくてはな……」

価値観の違いと言えど、あんな啖呵を切つたのだ。しかも下級生が上級生に対して。軍隊であれば体罰ものの行いだ。

これからどうなるにしても、彼に謝罪を行わなくては始まらない。

「だが、ううむ……」

あれほどまで卑下するような態度と言動をしておいて、今更謝罪したところで許して貰えるものではないというのは解っている。だからこそ、彼と顔を合わせるのが余計に気まずく感じて中々ベンチから腰を上げることが出来ずにいるのだ。

しかし謝らなくては、でもあんなことを言っておいて虫が良すぎやしないだろうか。そんな感情が悶々と心でざわめき合っていた、そんな時だ。

「なあーにやってんだお前はあ」

「ひゃいッ!?!」

頭を抱えてうんうん唸っていた所に突然掛けられた声に、私は奇声にも似た声を発してしまった。

声のした控え室入口へと視線を向ければ、そこには一人の女性が呆れ顔で立っていた。ええと確か、そうだ橘先生。このIS学園の教師の一人で、会長のクラスの担任だった筈だ。

「もう模擬戦が終わって三十分は経ってるぞお、いつまでそこでよじれてるつもりなんだお前はあ」

三十分。いつの間にかそれほど時間が経っていたのか。

「んん？　なんだ、楯無にボッコにされて凹んでんのか。気にするな、アイツはもう人外の領域にいる奴だからなあ、対抗できる人間なんて生徒会の連中くらいのもんだぞ」

「い、いえ。確かに会長は強かったです、私が気にしているのはそういうことではなくて」

首を傾げる橘先生に、私はこれまでの自分の態度や言動など、行き過ぎた行動のことを話した。話してどうこうなるということものでもないが、話した分、少し気持ちが軽くなった。

そしてそんな話を聞いた橘先生は、何を思ったのかクスクスと笑い出した。

「……なにかおかしいでしょうか」

「いやいや、確かにお前の言動は余りあるものだったと思うよ。私もお前が宣戦布告した教室にいたから聞いてたしな。だがしかし……ハハツ、そんなことを気にしていたのか？」

「そ、そんなこととはなんですか」

「そんなことだよ、楯無（アイツ）にとつちやあお前の言動なんて些細なことさ。お前の過去も知ってただろうしな」

「なっ……!?!」

自身の過去を知っていた、という言葉に思わず声が漏れる。あの男は、私の過去を知っていたのか。だから、この左眼を目の当たりにしても大きな驚愕がなかったのか。

「だからクラリツサーハルフオーフ。過ぎたことなんざ気にする必



要ないんだ」

「……!!」

無意識のうちに、私は橘先生の顔を見ていた。対したことを言われたわけではない。しかし、それでも私は何処かで救われたような気がした。

「大体まだ十五のガキが楯無に勝てるわけないだろおが。身の程つてのを弁えろよなあ新入生（ルーキー）」

「なっ!？」

「新入生はどうか知らんがな、二、三年生はこの決闘の結果なんて眼に見えてたんだよ。去年のあの闘いを目の前で観せられてんだからな」

「あの闘い……?」

「お前も映像くらいでなら見たんじゃないか？ 生徒会長を決めるための三人の闘いのことだ」

「あ……!」

言われて、私はあの凄まじい戦闘劇を思い出した。アレは決闘なんて言葉さえも生温い、それこそ戦争のような苛烈さを秘めた激戦。

ブルツ、と今思い出しただけで背筋に冷たいものが伝う。確かに、今私があの中に混じったところで数分、下手をすれば数十秒で撃墜されることは明白だ。

「な、無理だろう」

「は、はい……」

「だがまあ」

そう言つて話を一旦打ち切り、橘先生は何やら口元を吊り上げる。なんだろう、なにか分からないが私の第六感的なものが危険だと悲鳴を上げているような気がする。

「楯無に謝罪して気が済むってんならすりゃあいい。それなりの誠意つてもものを見せてなあ」

「誠意……?」

イマイチ理解出来ていない私に橘先生はズイツと詰め寄り。

「先ずはその軍隊仕込みの言葉だな。もうちつと女っぽい言葉遣いに直せえ?」

「あの、それと謝罪とはどういった関係が……」

「いいから。次は服装だな。楯無って家庭的な子が好きそうだから（杏子の勝手な想像）、エプロン装備でアイツの部屋行け。エプロンの準備と部屋のセキュリティはこっちでやっつくから」

私の意見は完全にスルーされ、なにやら一人で勝手に話を進めていく橘先生。お願いだから話を聞いて下さい。

ダメだ完全に眼が据わってしまっている。あの悪い笑みは絶対個人的な企てがありそうだ。

「ん？ どうしたあ」

「い、いえ!!」

ハイライトの消えた瞳で笑う橘先生に、私はただ頷く他なかった。



「……というわけでして、」

「……………あの野郎……………」

一通りクラリツサから事情を聞かされた俺は頭を抱えてあの似非教師を本気で殴りたくなった。

大体なんで俺の趣向が勝手に設定されてんだよ。あの教師は俺の好感度を地に落としたいのか、そうなのか。だがこれでこのクラリツサの変貌ぶりに合点がいった。全部あいつのせいだ。

でもまあ、と俺は思考を切り替える。

クラリツサが少しでも男を認めてくれるようになったのなら、それだけでこの決闘をした甲斐があったというものだ。元々あの性格さえどうにかなればISの操縦技術は高いのだ。直ぐに強くなるだろう。これからの彼女の成長に期待しつつ、俺は口を開く。

「分かった。さっきの謝罪は受け取っておく」

「あ、ありがとうございます！」

「ところでその言葉遣い、これからずっとそのままで行くのか？」

ふとした疑問を尋ねてみる。これまでの軍隊のような言葉もキビキビとした彼女によく合っていたが、普通の言葉遣いもなんだか新鮮だ。

「一応、そのつもりなんです、おかしいでしょうか……？」

「いや、そっちのほうが新鮮でいいんじゃないか？ 女の子っぽくて」

「お、女の子っぽい!？」

突如として驚いたクラリツサ。なんだ、なんかまずいことを言ってしまったのか？ ただ褒めただけのつもりだったんだが。

「(お、女の子の子……乙女、可愛い、……好き!?)」

ボンツ!! となにか爆発したような音とともに顔を真っ赤にしたクラリツサが机にうつ伏せに倒れる。

「お、おい! 大丈夫か!？」

「(ダメですよ……私たちまだ知り合って間もない……でも愛があれば……)」

なにやらうつ伏せのまま呪文のようになにかをブツブツと呟くクラリツサ。結局この状態から回復するのに一時間かかった。

はあ、と小さく溜息を一つ。

こうして、長かった一日は終わりを迎えるのであった。

## #41 見習いはその時点でフラグ

前回のあらすじ

クラリツサがデレた

「……っはあく、終わらねえ」

「口よりも手を動かしたらどうだ会長殿」

「でもやっぱりこの人数を振り分けるのは難しいですね」

「いつそのこと全部抽選にしまえばいいんじゃないか？」

クラリツサとの決闘があった日の翌日。俺を含む生徒会のメンバー全員は授業時間中であるにも関わらず生徒会室にて膨大な量の書類と格闘していた。其々の机の上にはその束が山積みになれ処理されるのを待っている状態である。

ちなみに上から順に俺、千冬、真耶、織村の言葉だ。

さて、一体俺たちが授業を受ける間も惜しんでこの生徒会室で何をしているのかと言うと、今月末に行われる学年別個人トーナメントの組み合わせ決めだ。このIS学園は一学年が一二〇人前後なので、その組み合わせを三つ作成しなくてはならないのだ。因みにこのトーナメントは生徒は有無を言わず全員参加なので、当然俺たちも参加しなくてはならない。

しかし、それでは組み合わせを作成する俺たち生徒会メンバーが有利になるように山を決める可能性が発生するので、俺たちは当日あらかじめ決められている空白の場所を抽選によって割り振ることになっている。つまり俺たちも当日までどの山に入るかは分からないのだ。でもそんな面倒なことをするくらいなら、この教師たちが組み合わせを作成すればいいのではないかと橘教諭に提案してみたところ。

『あん？　なんでそんな面倒なことをしなきゃならんのだ。ほら、私だつて結構忙しいんだぞう』

とバツサリ。

絶対面倒だからやりたくないだけだろあの似非教師が。

「つーか最近生徒会は便利屋みたいな扱い受けてる気がするんだが」

「そこはかとなくな」

相も変わらず生徒たちからは羨望の眼差しで見られる俺たちだが、こここのところ教師陣からいいように使われている気がしてならない。特にあの似非教師を筆頭にして。確かにあの人には少なからず世話になったので無碍にすることはしないが、それでも少し教師らしい仕事をしたらどうなんだろうか。

「で、でも会長。それだけ信頼されてるってことじゃないですか！」

真耶がそう言う。ああ、なんていい子なんだ真耶は。こんな雑用じみたことさせられてるつてのに健気だなあ。はつきり言つてこの生徒会は真耶がいなかったら成立していないと思う。主に事務的な作業が進まないという点において。

「……まあ、組み合わせについては今週中に作成できれば問題はないらしいから徐々にやっていくとして」

実はこの生徒会室に俺たち以外にもう一人、何故か居座っている人間がいる。

織村の席の後ろにどこからか持ってきたパイプ椅子を置き、そこに鎮座している人物。

「どうしてお前が此処に居る？　ナターシャ・ファイルス」

金髪の少女、アメリカ代表候補生であるナターシャがどういわけかこの部屋に居た。



時は少しだけ遡って、会長とドイツ代表候補との決闘時。

更識楯無生徒会長とドイツ代表候補のクラリツサーハルフオーフ。この二人の決闘を第二アリーナ観覧席上部、織村先輩の隣で見ている私は信じられないような光景を眼にしていた。

国は違うながらも国家代表候補生であるドイツの少女が、この学園の生徒会長に全く手も足も出ないのだ。あの人が『黒執事』であるということとはデータで知っていたが、こうして目の前で闘いを見るとその異常なまでの強さに自然、喉が干上がる。

ドイツの少女、クラリツサだったか。あの人も決して弱くはないはずだ。いや、間違いなくこのIS学園でトップクラスの實力を有している。

「にも関わらず、生徒会長には傷一つ付けることが出来ない。

「……………」

私は呆然として言葉も出なかった。

そんな私に隣で試合を観戦していた織村先輩が問いかける。

「あれが生徒会(うち)の会長だ。アイツ相手に勝負吹っかけて、お前は勝てる自信があるってのか?」

「うツ……………」

こんな闘いをまざまざと見せつけられては、嫌でも實力差を感じてしまう。勝てない、少なくとも今の私がどれだけ努力しようと決して届くことのできない領域にあの人はいる。そう思わずにはいられなかった。

「つつてもアイツ、手え抜いてやがるみたいだけどな」

「へ!?!」

手を抜いている? あれで?

「よく見てみる。アイツ、自分からは全く攻撃してないだろ。物理攻撃を反射あるいは躲すだけ。ま、相手にしてみりやいいように遊ばれてるように感じてイラついてる頃だろうな」

「まったくどんだけ規格外なんだあの野郎は、と零す織村先輩の言葉に私は開いた口が塞がらない。

あれでまだ全力じゃないって? 悪い冗談にも程があるでしょう。

「せ、生徒会長ってやっぱりスゴイんですね……………」

なんとかさそう口に出すことに成功した私だったが、更に織村先輩は爆弾を投下。

「あん？ つーか生徒会のメンバーは全員アイツといい勝負できるくらいには強えぞ。特に織斑なんかほぼ互角だ」

「はいッ!？」

そう叫んでしまった私は悪くないと思う。何せあの生徒会長と互角の闘いが出来ると言うのだこの先輩は。しかも生徒会のメンバー全員が漏れ無く。

だとしたら、間違いなく生徒会是最強の集団ではないか。

「そんな信じられねえみたいなお顔すんなよ。考えてみりや当然のことだろうが。世界各国からIS操縦者が集まるこの学園で、生徒会が生徒たちより弱けりやなんの抑止力にもなりやしねえ」

いや、それはそうなんでしょうけども。

流星にこれは次元が違いすぎるだろう。なんだ、急に私の存在がちっぽけに思えてきた。なんでだろう、泣きたい。

ずーん、と気落ちしている私を不思議そうに眺める織村先輩だったが、アリーナでの戦闘の毛色に変化したのを感じ取ったらしい。そして直後、先輩の顔から信じられないくらい汗が噴き出す。

? 一体、何が起ころうとしているんだらう。

そんな風に私が呑気に思っていると織村先輩が一言。

「……………やべえ」

「え?」

「やべえやべえ!! アイツ、アレ(…)をやる気だ!! 今すぐ生徒たちを避難させねえと!!」

何がやばいんですか、とはとてもじゃないが聞けるような状況ではなかった。直ぐ様携帯を取り出した織村先輩は何処かへと連絡を入れ(恐らく先生か生徒会のところだろう)、その数十秒後にはアリーナ全体に避難命令を告げるアナウンスが流れる。

二、三年生はこれから何が起ころのか知っているらしく我先にと避難を開始するが一年生は理解が及んでいないらしくキョトンとしている。多分これが通常の反応だろう。

しかし、事は意外にも重大のようで。

『何をしている一年共!! さっさとアリーナから出る!! 死にたいのかッ!!』

管制室から、生徒会副会長の怒号が飛ぶ。死にたい? それほどまでに危険な状況なのだろうかと私は思い、何気なくアリーナの中心へと視線を移す。

「……な、なんですか? あれ……」

そこには、私の知らないナニカが渦巻いていた。このアリーナ中の大気を掻き集め、圧縮しているかのような、そんな空気の塊を見ている気分。

「ありやあ、高電離気体（プラズマ）だ」

「プラズマッ!? そんなものがISで生成できるんですか!?!」

出来る筈がない、と暗に込めて言った私に、織村先輩は自嘲気味に笑って。

「ま、常識的に考えりや無理だろうな。でもアイツはそんなものに囚われねえ。生徒会（うち）の会長に常識は通用しねえんだ。……つてんな悠長なこと言ってる場合じゃねえ!! 早くここから逃げねえとマジで吹き飛ばされるぞ!!」

焦る織村先輩に背中を押され、そのまま急いで第二アリーナの外に出る。その数分後くらいだ、私たちが今の今まで居た第二アリーナの北側半分が轟音と共に消滅したのは。

爆風の余波が外に居る私たちにまで届き、思わず手で顔を覆うようにしてそれを防ぐ。

やがて私の視界に飛び込んできたのは、外壁もろとも抉り取られたかのように消え失せた瓦解したアリーナ。

こんな事、普通のISに出来る芸当ではない。少なくとも現在世界に存在するどの機体でも不可能だ。

「……スゴイ」

ポツリと、私の口から漏れ出したのは紛れもない感動と感嘆。

「スゴイ、操縦する人が違うだけで、こんなにもISの性能は引き出されるのね」



アメリカに居た頃から国のトップクラスとして過ごしてきた私には、当然ISに関する知識が膨大に詰め込まれている。でなければ天才児などと呼ばれることはないだろう。

実際、私も他人よりは優れているという優越感が全くもってなかったというわけではない。何かをすれば他人よりも速く的確に出来てしまう故に、少なからず他人を見下していたような節もあつただろう。それはこの学園に来た当初も変わりなかった。生徒会？ 精々が国家代表クラス、善戦、あるいは勝ちを拾えるかもしれないと考えていたのだから。

しかし入学式。

私の目の前で扇子を広げ壇上に立った生徒会長からは、とんでもない言葉が飛び出した。

『思い上がるなよ。世界つてのは広いんだ、井の中の蛙じゃない』  
まるで、私に直接言われているかのような気分させられた。そんな言葉を受けた私は、壇上の会長をじつと見据える。

飄々としながらも全く隙を感じさせないその立ち振る舞い。同年の少女たち（というか実際は二つ上だが）はそのルックスに目を奪われているようだが、真に気にするべきはその圧倒的なカリスマ性なのではないだろうかと思つた。体育館横の椅子に座る一癖も二癖もありそうな生徒会メンバーを束ね、さらにあの篠ノ之博士ともパイプを持つ生徒会長。

気になった。

あの人は、どうしてあんな風になれたのだろう。

関わりたいと思つた。

あの人に近づけば、こなすだけになりつつあつたISの操縦になにかしらの光明が見えるかもしれない。

そして、今。

半壊したアリーナを前に、私のあのとときの考えは正しかったのだと実感する。

その実感がある決意に変化するまで、大した時間はかからなかった。

「……織村先輩」

「あん？」

怪訝そうに私を見る織村先輩に対し、私ははっきりと、もう一度宣言した。

「私を、生徒会のメンバーにして下さい」

興味本位からではない。本心からの言葉が、自然口をついて溢れ出した。



「……織村」

ことのあらましを聞いた俺は、頭を抱えて織村へと刺すような視線を投げつける。

「いや分かってる、うちがなんでみんな日本人のかも全部分かってるんだが、如何せん押し切られて……」

お前言つとくけどつい半年前までそんな常識溢れたキャラじゃなかったからな、と俺は心の中でツッコみ、現在進行形で問題の中心となっている少女、ナターシャへと視線を移す。

「さて、これがちゃんとした初対面になるわけだな。ナターシャⅡ  
ファイルス代表候補生」

「初めまして更識生徒会長。ナターシャです。気軽にナタルと呼んで下さい」

椅子から立ち上がりペコリと頭を下げるナターシャ。なんだか昨日のクラリツサと重なって見えてしまうな。

まあ、そんなことはさておきだ。俺はこの少女にハッキリと生徒会には入れることが出来ないかと断らなくてはならない。これも会長職に就いている人間の仕事だ。これまでも何人か生徒会に入りたいと言ってきた生徒がいたが、その生徒たちは皆一様に実力が伴わないという理由で断ってきた。

今回の件で言えばナターシャは実力的にはアメリカの代表候補ということもあり基準には届いていると思われるので申し分ない。というわけで何か別の口実を見つけたいといけないわけだ。

何故ここまで生徒会に入りたがる生徒たちを拒むのかと言えば、それはやはり抑止力として機能する人間を選ばなくてはならないというのと、各国との摩擦を最小限にするために他ならない。

俺に千冬に織村、そして真耶と現在の生徒会のメンバーは四人。役職は其々会長、副会長、会計に書記だ。まだ役職には庶務などの空きがあるがそこまで、必要性のある役職でもないためにそのまま真耶に兼任してもらおうような形で現在の生徒会は機能している。

ハッキリと言ってしまうえば、今の段階で生徒会は十分に機能しているため生徒を生徒会に入れるようなことはしないのだ。

それは代表候補に選出されるほどの実力を備えた、このナターシャであっても例外ではない。

「ナタル。お前が生徒会に入りたがってるというのは織村から聞いている。しかしだ、生徒会として現在メンバーを増やすつもりは一切ない」

「……私の実力が足りないからですか？」

「いや、実力的には一定値には達しているとは思うよ。だがまあ、生徒会の他の連中には及んじやいないがね」

「……でも!!」

ナターシャは強く拳を握って俺を真っ直ぐに見据えてくる。良い瞳（め）だ。それだけで、彼女がどれほど真剣に生徒会に入りたいと考えているのかが伺える。

だが、俺は自分の意見を曲げるつもりはないのだ、残念だが。

「あー……、更識。俺からも頼む、別に今すぐコイツを生徒会に入れろなんてムチャクチャなことを言うつもりはねえが、ちつとばかし検討してやってくんねえか？」

バツが悪そうにそう言う織村。ふむ、コイツがこんな他人に関心を寄せるような事をするのは珍しいな。よっぽどナターシャに入れ込んでいるのか？ それともなにかコイツなりの考えでもあるのか。

「織村。生徒会(ココ)に多国籍の生徒を入れることの意味を分かった上でそれを言っているのか？」

「ああ」

「織村先輩……」

「いいんじゃないか」

「千冬？」

織村の言葉を肯定するように今まで書類とにらめっこしていた千冬が口を挟む。

「楯無の言うことは尤もだが、これから先、常に日本人だけで生徒会を組織することは難しいだろう。そう遠くない未来、必ず国籍問わず生徒会のメンバーが選出されることになる。ならばいっそ、この女で試してみればいいではないか。実力さえ伴っていれば、生徒会としては何の問題もないのだからな」

「ふむ……」

俺は顎に指を添えてしばし考え込む。確かに遅かれ早かれ生徒会に多国籍の少女が加入することになるだろう。たまたまこの年のメンバーが日本人で構成されていたというだけなのだ。抑止力としての機能さえ失わなければここはどの国も干渉不可能の独立機関、誰が生徒会であろうと問題はない。いや、実際は人望やカリスマ性など細かい部分はあるがそれは些細なことだ。

「あ、あの。私もナターシャさんに試しに参加してもらえばいいと思います」

書類を整理し終わったららしい真耶もオズオズといった感じで言ってきた。

生徒会長だからといって俺全てに決定権があるわけではない。他のメンバーがいいというのなら、俺もそれに従うのは当然のことだ。となれば。

「えーと……、あったあった。ナタル」

俺はナターシャに向かって引き出しから取り出した手のひらサイズのプレートを放り投げる。

それをキャッチしたナターシャはそこに書かれていた文字を見て

驚愕したかのように目を見開く。そこに書かれていたのは。

『生徒会研修中』

つまりは見習いみたいなものだ。正式に生徒会に入ったわけではないが、生徒会と同じように活動はしてもらう。次期生徒会候補みたいなものだと考えてもらえればそれで問題ない。

「会長……！」

「しっかりと働けよ。ナターシャ＆ファイルス生徒会見習」

こうして、我が生徒会に一人の見習いが参入した。

はあ、これなんかまた余計な巻き込まれフラグを建ててしまったよ  
うな気がしてならないんだが。

## # e x 更識シスターズ

前回のあらすじ

ナターシャⅡファイルス研修生

IS学園では新学期早々騒々しい事態になっている頃。

二人の妹達にも新しい出会いや出来事がやってきていた。



「更識姫無です。去年同じクラスだった人も初めて同じクラスになった人も、これから一年間よろしくお願いします」

学年が上がり四年生になった私は、新しい教室で新しいクラスメイトたちと自己紹介をしている真っ最中だ。簡潔かつ分かりやすく自己紹介を終えて椅子に腰を下ろし、グルッと周囲を見回してみる。去年同じクラスだった子もいれば初めて同じクラスになった子もいて、新学期はやはり新鮮な気持ちにさせられる。

「もっと面白い自己紹介期待してたんだけどなあ姫え」

「私にそんなこと期待されても困るわよ。それにそういうのは紗季の役目でしよう?」

「いや違うからね!」

「ほら、次紗季の番よ」

「うわ……ッ」

私に言われて慌てて席を立ち自己紹介を始めたのはこれで四年間同じクラスになった親友、椎名紗季。苗字の関係上必ずと言っていい

ほどに私の真後ろの席になる。

ちなみにはじめは彼女は私のことを姫無ちゃんと呼んでいたが、今ではすっかり気心知れる仲になっていたので姫と呼ぶようになった。うん、私としても互いに気を使わずにいれる友達というのはとても楽しい。

「(もう！ もっと早く教えてよ！)」

自己紹介を終えて着席した紗季が私の耳元で小声で怒鳴るという器用なテクを披露する。

「普通に考えれば分かるでしょう、真後ろなんだから」

「(わかんないときだってたまにはあるでしょうよ！)」

「三年間私の後ろでなにやってたのよ」

「ひどっ!?!」

「椎名ー、うるさいぞ静かにしろー」

思わず声を荒げた紗季に額にイライラマークを浮かべた担任の先生が注意した。こういうのを自業自得というんだろう。先に声を賭けてきたのは紗季なわけだし。

「もう、姫のせいで怒られちゃったじゃない」

え？ これ私のせい？

なんて理不尽にも罪を被せられた私は密かに彼女への仕返しを誓い、続く自己紹介に耳を傾ける。

「げ……」

しかし、そんな私はとある人物を見つけてしまった。

何故だ。どうしてまた今年もアイツがこのクラスに居るのよ。偶然にしても出来すぎているでしょう。先生たちの悪意をひしひしと感じてしまう。いや、私別に先生たちから嫌われるようなことは何一つしていないけれど。

「あちゃあ、姫も大変だねえ。あんなのに目えつけられちゃったばかりに。………南無」

「いや私死んだわけじゃないから」

目を閉じて合掌する親友にツツコミを入れつつ、私は小さく溜息を一つ。最近兄さんのように溜息を吐く回数が増えてきたような気が

する。嬉しいんだか悲しいんだか分からないけど。

私はこの四年間、ずっと同じクラスになり続けている子が二人いる。一人は真後ろに座る紗季。そしてもう一人は、今まさに自己紹介しようとしている身体の大きい男の子。

「丹羽大輝です。特技はバスケット、好きなものはバスケットと体育と、」

そこまで言って、大輝はくるりと振り返って（因みに席位置は私の列の二個隣の一番前）。あ、なんか目が合った。

どうしてだろう、物凄く嫌な予感がするのは。

「更識です」

……………もう勘弁してよ。

啞然とする私に、大輝は物凄いイイ笑顔でハンズアップしてくる。

え、なにこの空気。私にどうしろって言うの？



「かんちやくん、今日の給食プリンだよ」

「……………もう、渡さないからね……………」

「わかってるよお、だからジャンケンしよう」

「話聞いてた？」

四時間目が終わって皆が班ごとに机を移動させていると、本音ちゃんがダボダボの袖をぶんぶん振り回しながら私にそう言ってきた。

彼女の狙いはもう分かっている（というかもう口走っていたけど）、デザートプリンだ。

本音ちゃんはプリンが世界で二番目に好きらしい。因みに一番好きなのは何かというと、『デザート』と言っていた。

……………それ一括りにしちゃってるじゃん、と思わないこともないけど、本音ちゃんなので多分何を言っても無駄だろう。

この子のマイペースっぷりは姉である里虹さんや虚さんでさえも手をやく程だし。



「最初は」

「いややんないからね」

「……さあいしよおは」

「目が怖いよ本音ちゃん」

本音ちゃんはどうしても私のプリンも食べたいらしい。というか自分の分はしつかりあるんだから別に二個目はいらないんじゃないだろうか。

私としてもデザートがなくなるのは回避したいところなのでなんとか本音ちゃんを説得したいところ。

「……本音ちゃん」

「なあにかんちゃん」

某ハンターのツンツン主人公の必殺技よろしくな態勢で私の呼びかけに答える本音ちゃん。

その格好は作品的にも女の子的にも問題があるような気がするので止めたほうがいいと思うな。もしそのまま拳を繰り出されたら念が使えない私は粉々にされちゃいそうだから。

「……今日は一人休んでる子がいるから、プリン一つ余ってる」  
「はっ!？」

盲点だった!! とでも言うかのように目を見開く本音ちゃん。私本音ちゃんがそんな目大きいなんて知らなかったよ。

そこまでしてプリンが食べたいのかな。余り糖分取りすぎると太っちゃうよ。

「だあいじょうぶだよかんちゃん。私の場合はきつとおっぱいに全部の栄養がいくからあ」

「心を読まないで……、それにそんな都合の良いこと、あるわけない」

※この数年後、簪は絶望することになる。

閑話休題。

「そお言えばさかんちゃん」

「なに……っ？」

給食の時間。無事にプリンを守ることに成功した私に、ジャンケンで勝ち取った二個目のプリンを食べながら本音ちゃんが口を開いた。

「かたりん、生徒会長になったんだってえ？」

「……うん、去年の秋頃」

「すごいよねえ、かたりんて布仏の従者いらないうような気がするよお」

お兄ちゃんの話題が不意に出て、私は思わず会いたい衝動に駆られてしまう。

つい最近まで春休みで帰省していたお兄ちゃんだったけど、生徒会の書類が溜まってるとかで長く家に居ることはなく、余り遊んでもらえなかった。お姉ちゃんも私と同じように遊んでもらいたかったみたいだけど、お兄ちゃんにかまって貰えずに不貞腐れていたのを覚えている。

「しっかりしてるお姉ちゃんよりもしっかりしてるからねえかたりんは」

ここの言うところのお姉ちゃんとは布仏三姉妹の長女である里虹さんのことだろう。次女の虚さんもともしっかりしているけれど、里虹さんはそれよりもさらにしっかりしている。なんて言うんだろうか、こう真面目が服を着て歩いているみたいな人だ。

そんな人がお兄ちゃんの従者なわけだから、すごく尽くしてくれると思うんだけど、お兄ちゃんは里虹さんのことを従者だとは思っていないらしい。できれば友達みたいに接して欲しいんだって前に言っていた。

でも里虹さんはお兄ちゃんを主人としか見ていないみたいで、なかなかお兄ちゃんが理想とするような関係にはならないみたい。

「お姉ちゃんは真面目だからねえ」

いつの間にか手にしていたプリンの蓋を嬉々として開けながら、本音ちゃんと言う。

里虹さんは確かお兄ちゃんと同級生だったから、今は高校三年生の筈。成績も優秀で、いつもお兄ちゃんと学年一位を争っているほどの。

「……本音ちゃんは、もう少し真面目になったほうがいいと思う」

「やだなあかんちゃん。私はすつごく真面目だよお」

「……………」

「あ、怖い。かんちゃんの目が怖いよお」

一体本音ちゃんのどこを見れば真面目だと言えるのか、私には到底分からない。故にジトツと彼女を見ていたら、両腕をパタパタさせて心外だ、と言わんばかりの抗議が返ってきた。

(こういうところだと思ふなあ……)

親友のためにも決して口には出さず、私はデザートプリンを手を取った。

「……………」

そこで私は初めて気づく。今手に持っているプリンの容器が、既に空だということに。

正面に視線をやれば、そこには口の周りにプリンの残骸を散りばめた本音ちゃん。何故(・・)か、その口には二つ以上のプリンが入っているように思われる。

「……本音、ちゃん……?」

「なあにかんちゃん」

「絶交」

「ひえっ!」



放課後、新学期初日を無事に終えた私は紗季と共に帰路についていた。これまで三年間も通い続けている通学路だけにこれといった真新しさなど何もない道を、二人で他愛無い話で盛り上がりながら歩く。

「しっかし丹羽には笑った笑った、アイツ本気で姫に惚れてんのねえ」  
「もう、笑いごとじゃないわよ。それに私には兄さんがいるんだから」

「うわ、出たよ姫のブラコン」

「なんとでも言いなさい。私には兄さん以上の男なんて存在しないと思ってるから」

紗季の言い分に、更に強く言い返す。誰になんと言われようが、私には兄さん以外の男なんて眼中にないのだ。同年代の男子なんて論外、子どもっぽすぎて話にもならない。因みに私がブラコン（私自身はブラコンだと思っていないが、紗季にそう強く言われた）を公言しているのは特に親しい友人数人だけなので、ほとんどの同級生たちは私がそうであることを知らない。

だから私が貰うラブレターや告白すべてを断っているのは、他に好きな人がいるからだと思ってるわけではないけれど。ということを経験してはいた。まあ、間違ってるわけではないけど。

「姫のお兄さんかあ、私は直接は会ったことはないけど、世界で二人しかいないI Sを操縦できる人なんだよね」

「ええ、そうよ」

なんととはなしに呟かれたその言葉に、私は自慢げに頷いて見せる。今となっては兄さんは世界的な有名人。知らない人の方がもしかしたら少ないかもしれない。

「しかも姫が言うのを聞いてる限りじゃ、ものすごくカッコよさそうだし。そんなお兄さんなら、私も欲しかったなあ」

ぼやく紗季の横顔を、私は苦笑して見つめる。

彼女にも中学生になるお兄さんがいるけれど、紗季曰くダメ人間を絵に描いたような人なんだとか。きっと家族だから恥ずかしくてあまり他人に言えないだけだと思うけれど、本人は絶対お兄さんのこと好きだと思うなあ。私の勘は十中八九当たることが多いから。

「紗季のお兄さんだっといういい人じゃない」

「はあ!? アレが!? 冗談やめてよ姫、あんなのどこをどう見ればいい人そうに見えるんだか」

「中学一年生にしては大人っぽいところとか?」

「ただ背が高いだけでしょ、中身は幼稚園児以下よ」

どうやら意地でもお兄さんをいい人と認めたくないらしい。私に

はよく分からないけれど、こういうのが普通の兄妹関係だと以前紗季に言われたのを思い出した。

「そんなことよりさ姫、今月末にあるIS学園の学年別個人トーナメント。観に行くんでしょ？」

紗季の口ぶりから考えるに、どうやらこの話題が本題らしかった。問われた答えは、決まりきったこと。

「当然、兄さんは生徒会長をしてるからどの組に入るかは当日まで分からないって言ってたけど、優勝するところを見に行くわ」

「うわこの子さらつとお兄さん優勝宣言したよ」

「当たり前でしょう？ 生徒会長は生徒達の頂点でないといけないんだから」

「いやそれはそうなんだろうけど……、もういいや今更何言っても無駄な気がしてきた」

私を見て大きくため息を吐く紗季。どうして私が呆れられないといけないのよ。

「で？ そんな話を切り出した理由は何？」

「う、いや、その……」

珍しく歯切れの悪い様子で中々切り出せない紗季。そんな姿に疑問を感じたが、意を決したのか口を開いた彼女の言葉でその疑問は解消した。

「あ、あのさ。もし出来ればいいんだけど、私もそれ、観に行きたいなあつて」

ああ、成程。と私は内心で納得。

通常、IS学園には如何なる行事であつても関係者以外は立ち入ることは禁止されている。しかし例外というものはあり、そういった行事の際には生徒一人に対して一枚の招待状が配布され、それを親しい友人などに渡すことでその友人はIS学園内に足を踏み入れることが許されるのだ。

ちなみに私は既に二回IS学園に行ったことがある。勿論、兄さんからの招待状があつたからだ。そして当然簪ちゃんも付いてきた。

本来であれば生徒一人に対して招待状は一枚しか配布されないの

だけれど、その招待状を作成しているのは教員たちではなく生徒会なんだとか。なので特例として生徒会役員にだけは枚数制限がないらしい。かといって何十人にも招待状を配ったりすることはなく、呼んだとしても精々が三人程度みたい。

なので私は紗季の分の招待状も兄さんに頼んでみて、了承を得られればという結論を下し、早速兄さんに電話してみることにした。

数秒の間もなく、コールされた番号は通話状態に入った。

『もしもし、どうしたんだ姫無』

「もしもし兄さん、今時間大丈夫？」

『ああ、別に今な』

『会長手が止まっています!!』

『今日中に仕上げねばならん資料はあと何枚あるんだ!?!』

『だーッ!! こんなので終わるわけねーだろ!!』

『……問題ない』

「そ、そう……」

絶対今生徒会室は地獄だ、と確信しながらも兄さんの優しさに甘えて、私は招待状の件を話した。

『なんだそんなことか、いいよ。じゃあその子の分の招待状も手配しておこう』

「ありがとう兄さん」

『このくらいなんてことないさ。じゃあ、俺はまだ仕事が残ってるから』

「うん」

そう言つて電話を切り、招待状を用意してくれると紗季に告げたら、それはもう大喜びしていた。

そんなにIS学園に行きたいのだろうか。確かにISでの戦闘は生で見ると迫力が違う。テレビ中継で見るとものなんかとは比べ物に成らないほどに。

「あ、じゃあ私こっちだから。また明日、姫」

「またね紗季」

左右に別れる曲がり角で紗季と別れて歩くこと数分、大きな屋敷が

見えてきた。周りに建つ現代的な家とは違い、昔ながらの木造建築で悠然と聳えているのが私の家だ。

私の背丈の二倍程の門を潜り、玄関の戸を開く。

「ただいまー」

そう言った私の元に、奥からトタトタと眼鏡を掛けた少女がやって来た。

「お帰りなさい、今日は早かったですね」

「ええ、新学期初日だしこれといった授業もなかったしね」

ランドセルを少女、布仏（のほけ）虚（うつほ）に持ってもらい、自室へと続く階段を上っていく。彼女は私に去年から仕えてもらっている私専属の従者だ。

年は一つ上の小学五年生。彼女の淹れてくれる紅茶がとにかく絶品。

従者、と言つてもなにからなまでお世話をしてくれるというものではなく、必要な時に私を横でサポートしてくれる存在、謂わばパートナーのようなものだ。虚もIS学園入学を希望しているので、これから先長い付き合いになることだろう。

「紅茶淹れますね」

「ありがとう」

自室にランドセルを置いた虚は、一旦部屋を出て行った。恐らく給湯室に向かったのだろう。しばらくしたら鼻をくすぐるいい香りを振り撒きながらトレーに紅茶を載せて再び姿を現す筈だ。

「……学年別個人トーナメントか」

兄さんに最後に会ったのは今月の始め。つまりまだ二週間も経っていないけれど、一日兄さんの顔をみないだけで私にはもう耐えられない。声を聴けただけで今日はまだマシンな方だろう。酷い時はベッドで塞込んでしまう日もあるくらいなのだから。

「早く会いたいなあ、兄さん」

その時にあの女さえいなければもつといいのに、などと考えてしまったことは決して口には出さない。兄さんの口から彼女が出来たと聞かされたのは去年の春だから、かれこれもう一年になる。

織斑千冬。

兄さんの幼い頃からの友人で、生徒会副会長にして現日本代表候補生。

お似合い、と認めざるを得ないくらい、二人は相性がいいみたい。実際、私も二人を見てそう思った。兄さんと血の繋がってる私はどうしたって結婚なんてすることは出来ないし、そこまでの感情は抱いたことはない。と思いたい。

しかしながら、家族として大好きな兄さんを取られるのはやはり納得がいかないものだ。

「とにもかくにも今月末。兄さん、どうしてるかなあ……」

ベッドに横になりながらそんなことを考えていたからか、自然と襲ってくる睡魔に耐えることが出来ず、いつの間にか私は眠りに付いていた。紅茶を持ってやってきた虚が苦笑しながら毛布を掛けてくれたのは、言うまでもない。



## #42 準備期間はその時点でフラグ

前回のあらすじ

更識姉妹にもそれぞれの新学期到来



今更ではあるが、IS学園に於いて生徒会とは生徒達の中心的存在であり、憧れの的のような立ち位置にある。当然、生徒会役員ともなれば知名度も然ることながら、その実力も折り紙つきの猛者ばかりである。

生徒会長である自身を筆頭に、千冬、織村に真耶。全員漏れなく学園内屈指の実力者だ。

生徒会に任命されるにはこれといった条件は存在しないが、基本的には生徒会長による任命、または他役員の推薦によつて生徒が選ばれ、その素性を全て加味した上で認められれば晴れて生徒会の一員となる。

因みに千冬と織村は俺が直接指名し、真耶は千冬が推薦した。

とまあそんな訳で、生徒会役員は四名。全員が日本人ということと国際的な摩擦も生ませず肅々と生徒会として機能してきたわけであるが。

「……おいナタル」

「は、はい……」

目の前で小動物のように縮こまる金髪少女に対し、今日何度目かの言葉を吐き出さねばならない俺はそろそろ我慢の限界を迎えようとしていた。

「何度言えばデータを全損させずに済むんだあああああッ!!」

「すみませんんんツ!!」

先日から、生徒会に新メンバーが誕生した。とは言っても、まだ見習いとしての扱いのため正式な役職には就いておらず、雑事全般や簡単な事務処理を任せている。

それが今俺の目の前で泣き出しそうになりながらペコペコと頭を下げる少女、ナターシャ・ファイルスなのであった。

彼女が生徒会に入りたいと願い出たのはつい数日前のことだ。俺とクラリツサとの決闘後に生徒会室にやってきて、強く生徒会に入会したいと言われたのだ。俺としては国家間の摩擦などを抜きにしても、いきなり新一年生を生徒会に入れようとは当初考えていなかった。しかし、彼女の実力が確かなことと織村や千冬からも賛成的な意見が出たため、こうして生徒会の見習いとして活動に参加してもらっている。

のほいいのだが。

「ナタル、分かったから。分かったから泣き出さないでくれ」

「すみません……、私こういうのほんと苦手で……」

この少女。実は機械が全く扱えなかった。

え？　じゃあなんでISは使えるんだよという当然の疑問が浮上してくるため、それをナタルに聞いてみたところISは機械ではなく、パートナーと捉えているらしい。

生き物として扱っているため、ISを操縦するのにはなんら支障をきたさない。どころか華麗に空を舞う。

が、デスクワークとなると話は全く別。パソコンを触らせればこれまでのデータは全て消え、復元さえできなくなってしまい、部屋の掃除をしてもらおうと掃除機を渡したらナタル自身が掃除されそうになっていた。

一体これまでどうやってアメリカ代表候補性として活動してきたのか物凄く気になったが、今はそんなことよりも片づけなければならぬ重要な案件があるため、それは一先ず置いておくことにする。

「真耶、そっちはどんな感じだ？」

「概ね順調です。トーナメントの七割がたは完成しました」

キーボードを打ち鳴らしながら俺の問いかけに答える真耶。ほんとに出来る子だ。

「おいおい会長、新人を泣かせるんじゃないよ」

「いや泣かせてねえからな!? 全部俺の所為みたいに言うんじゃないよ織村!!」

割り当てられた仕事に一段落ついたのか、真耶に淹れてもらった紅茶を含みながら言う織村に強く抗議する。大体織村がパソコン触らせたんだろうが、しつかり面倒見て貰わないとこちらとしても困る。

「おい待てなんで俺がそいつの教育係みたいになつてんだ」

「当たり前だろう、お前が推薦したみたいなものなんだから。しつかり最後まで面倒みてやれよ」

「いや全員こいつの参加には反対しなかつただろう!? なら全員で面倒見るのが筋つてもんだらうが!!」

「生憎と俺は生徒会長としての仕事が忙しくてな」

「私は副会長としての仕事がな」

「わ、私もトーナメントの作成が……」

「お前ら取って付けたような理由で俺に押し付けんじゃない!!」

こうして織村は半ば強制的にナタルの教育係に任命されたのだ。た。

さて、若干話は逸れてしまったが、現在俺たち生徒会は今月末にまで迫った学年別個人トーナメントの進行や組み合わせ、各国要人への招待状作成などを授業そっちのけで行っている。本来であれば少なくとも各国への招待状は教師が作成しなくてはならないのだが、今年その役割に抜擢されたのが橘教諭である。

彼女に関して言えば、はつきり言ってる気など存在しない。

技術者としての腕はピカイチだが、如何せん性格に一癖も二癖もあるのだ。あの教師に任せていたらこのトーナメント自体当日まで何も進まないでいただらう。

流星にそんな事態に陥ってしまったからではまずいということと俺と千冬で橘教諭からその仕事を半ば無理やり引き継ぎ（橘教諭は嬉々として押し付けてきたが）、こうして生徒会室で仕事に追われて

いるのだ。

いや、いくらなんでもこれは量が多すぎるだろう。

トーナメントの作成は真耶に丸投げしてしまう形で申し訳ないが、それを差し引いても通常なら生徒数人でこなせる仕事量ではない。

それをこなせているのは偏に俺には高速演算が可能な第一位の頭脳が備わっているのと、千冬たち生徒会メンバーが優秀だからに違いない。まあ、ナタルは置いておくとして。

「ふう、なんとかあと二週間で間に合わせられるか」

二日間に渡って行われるトーナメントの進行予定を作成していた千冬が、一旦ウィンドウから視線を外し肩を揉む。四月末に開催されるこの学年別個人トーナメントまで残り二週間。各国への招待状はそれよりも一週間程早く通達しなくてはならないので、そちらは既にほぼ完了させてあるが、それを抜きにしてもギリギリだ。

「あとは先生たちの会場設備とかですね」

「んなもん勝手にやらせときゃいいだろうに」

真耶の言葉に心底嫌そうに呟く織村。こういう風に悪態ついてる織村だが、最終的にはぶつくさ言いながらも協力してくれる。ほんと最初の頃のキャラの面影が全くと言っていいほどに消滅しているよなあ織村。

「……なんだよ」

「ん？ いや、なんかお前も変わったなあと思って」

俺の視線に気づいたららしい織村が怪訝そうに眉を顰めてこちらに視線を向けた。

「はん、別に俺は変わってなんかねえよ。ただお前との約束だからな」

織村の口から出た『約束』という単語に、俺は僅かに目を細める。丁度今年の今頃だっただろうか。それまでは対立というか意見の食い違いしかしていなかった俺と織村に、徹底的な転機が訪れたのは。

今でも思い出すとつい苦笑してしまうような、そんな珍事件。あの事件を機に、俺と織村は次第に打ち解け、やがてある約束をするに至ったのだ。

「楯無。何度も聞くようだが、お前と織村のその約束とは一体なんな

んだ？」

聞き耳をばつちりと立てていたらしい千冬が、俺たちの会話に割って入ってきた。

「秘密」

「秘密だな」

俺たち二人に揃ってそう言われた千冬は、若干頬を膨らませつつもいつものことかと思いを切り替えて再びウィンドウに視線を落とした。

さて、今の問答からもわかるように、俺と織村との間で交わされた約束の内容は、当人の二人だけしか知らない。当然、千冬や束、真耶でさえもその内容は把握していない。俺たちが完全に黙秘を貫いた結果だ。

何故秘密にしてあるのか。それは約束の内容が千冬や束たちにとって大いに関係しているからなのであるが、そこんところを話し出すと長くなるのでここでは割愛させてもらう。まあとにかく、俺と織村の仲が現在のようなものになったのは、その約束が存在しているからなのだ。

「……っといけね。俺も早くこの仕事片づけちまわないとな」

授業そつちのけで行っているとは言え、流石にまる一日授業に出ないわけにもいかない。出来れば昼休みまでには作業にキリをつけ、教室に向かいたいところだ。というか出ないと流石に虹里になに言われるか分からない。下手すれば説教が待っているかもしれない。生徒会長がそんな失態をするわけにもいかないの、必然、俺はタイピングのスピードを早めた。



「……ふうん」

職員室の一角に用意された自分の机に肘を置いた状態で空間投影型ウィンドウを開いていた教師は、得心言ったとばかりに一つ頷いてスーツのポケットから煙草を取り出した。

シユボツ、と小気味のいい着火音とともに煙草に火を点け、口内に溜め込んだ煙をゆつくりと吐き出す。

教師——橘杏子はそこに映し出されたデータをまじまじと見つめる。

現在は四時間目が行われている時間帯であり、職員室内には彼女以外に教員の姿はない。というかそもそもIS学園内は原則禁煙であり、周囲に教員がいればここまで堂々と煙草を吹かしたりしない。

「なあんか裏でコソコソやってるみたいだけど、まさかこっちにまで手を出そうつてのかねえ」

形無に向かつてむちゃくちゃ言いつけるような時の声色とは違い、明らかに低いトーンの呟きが室内に溶けるようにして消えていく。

「楯無や織斑だけじゃあ、ちよいとばかし荷が重いか……」

もしもこの言葉を学園の生徒が耳にしていたならば、何を馬鹿なと思っただかもしれない。

ここIS学園に於いて生徒会長とは最強の称号そのもの。そこに位置するのが更識楯無という少年であり、その少年と互角以上に闘えるのが織斑千冬という少女なのだから。

言葉の通り、敵無しの彼らに荷が重いことなど学園内には存在しないと言っている。

しかしながら、今回ばかりは橘の言うことの方が正しかった。

何故なら敵は、IS学園に非ず。

そしてその標的も、IS学園には非ず。

「動き出そうつてか——京ヶ原」



「……終わった——!!」

ひたすらに机に向かっていた生徒会メンバー全員が、その場でぐったりと身体を机に投げ出した。

凡そ三時間程同じ姿勢で作業していた身体は凝り固まり、少し捻ればバキバキと骨が鳴る。

「いやあ、一時は本当に終わるのか疑問でしたけど、なんとか終わってよかったですね」

一安心とばかりに笑顔を見せる真耶に癒されつつ、俺は淹れてもらった何度目かの紅茶で喉を潤す。いや終わってくれて良かったホント。真耶がいなかったらいつ終わるか分かんなかっただろうな、優秀な後輩を持って鼻が高いよ俺は。

「ありがとな真耶。真耶のおかげで予定より早く終わらせることができた」

「い、いえそんな!! 私なんて会長に渡された資料を整理しただけですし……」

「トーナメントの作成だって大部分は真耶がやってくれただろう？」

感謝してるよ」

「あ、ありがとうございます。えへへ……」

俺が礼を言うのと頬を赤らめて頭を掻く真耶。なんで赤くなってるのかは分からないが、風邪を引いているというわけでもなさそうなので心配は無用だろう。

そして何故かな、主に千冬の方から突き刺さるような視線を感じるんだが。

「……馬に蹴られて死ねばいい」

「なんだと織村この野郎」

「そうだ織村もつと言ってやれ」

「千冬までなんなんだよ!?!」

理不尽な怒りをぶつけられ、訳が分からず首を傾げる。なんでだ、俺は真耶を褒めたただけだぞ。別に浮気してるわけでもないのに何で千冬はあんなご機嫌斜めになってしまったんだ。

「……そこまで分かっているながら辿り着かないお前の鈍感さは最早賞賛に値するな」

「なんか知らんが褒められてはいないってことだけは分かった」

このままでは俺が標的にされたままになってしまいそうだったので、話題転換も兼ねてさっきから床で這いつくばっている金髪の少女に視線を移した。

「どうだナタル。そろそろ慣れてきたか」

問いかけられた少女、ナターシャは先ほどから織村指導の下パソコンに慣れるためにネットについてあれこれ指導を受けていた。何故床で這いつくばっているのかと言えば、彼女がその指導についてこれぞパンクしたからである。

「ぜ、全然ダメです……。私、機械ホント無理です……」

涙目というか最早半ベそかきながらこちらを見てくるナタル。なんとするかこう保護欲を掻き立てられるような見た目だが、残念ながら彼女の機械音痴加減はその保護欲を掻き消してしまえるほど重症だった。

「参ったな。確かにいきなり慣れろってのは難しいかもしれないが、後に生徒会役員として活動することを考えると、せめてパソコンは使えないと厳しいぞ」

「ふえくん……」

「こら楯無。またナタルを泣かせて」

「いや泣かせてないって!!」

幾らアメリカの代表候補正と言えども、中身はまだ十三歳の幼気な少女だ。こういった事務的な作業は慣れるしかないのです、あとは織村が上手いこと教えていくしかない。アイツも教えることに関してはまんざらでもなさそうだし、教育係にして正解だったかな。

「おいナタル、またフリーズしてんぞ」

「えっ!? ほんとだカーソルが動かない!!」

「おいだからって配線ごと引っこ抜くんじゃねえええええ!!」

「……まんざらでも、ないよな?」



放課後。基本的にIS学園の生徒は部活動に参加するか、訓練機を使って自主トレをするか、寮に戻って自由時間を過ごすかのどれかである。訓練機は使用するのに申請書を出さねばならず、またその数も生徒数に対して余りにも少ないため中々使用許可は下りてこない。



となれば必然、アリーナを使用する生徒も訓練機を借りられた生徒だけに限られるわけで。

そんなアリーナの一角に、俺と千冬は立っていた。

無論、千冬はISを纏った状態で、だが。

「で、なんで俺は執事服着てこんな所に立たされてるんだ？」

真つ黒な執事服に身を包んだ俺は、一応はIS装備状態である。あくまで一応だが。

「ふむ。最近何かと忙しくて形無と手合せしていなかったからな」

「あのかな千冬。ここじゃおれは楯無……」

「もう放課後だ。今くらいはいいだろう？」

「……はあ。ま、いいけどさ。こんな格好でアリーナに立たされてるんだ。今から何するか、なんて野暮なことは聞かねえよ」

「結構。……ならば、行くぞッ!!」

直後、瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使用した千冬は一直線に俺へと斬りかかってくる。因みに千冬が装備している機体はつい最近完成したばかりの彼女の専用機ではなく、訓練機として一般生徒にも貸し出されている純国産の第一世代型IS『鉄（くろがね）』だ。この機体はどちらかというと近接戦向きの機体で、装備もブレードや至近距離用のマシンガンなどを搭載している。

一直線に斬りかかってくるなど、本来ならば愚の骨頂。俺の反射でダメージなど与えられる筈もない。

のだが。

「……ふッ!!」

上から下へとブレードを振り下ろす千冬の軌道が、巻き戻るかのよう一拍置かれてから繰り出される。

（いきなりかッ!!）

何が来るのかを察知した俺は、反射でその攻撃を受けることなく、脚力のベクトルを操作して真横に高速で移動しその斬撃を避ける。

バタバタとはためくテールが落ち着く間もなく、体勢を整えた千冬から繰り出される二撃目。この剣筋も、初撃と同様に一瞬巻き戻るかのような違和感を覚えるものだった。

「チツ、反射対策はバツチリってかあ!？」

「形無が種明かしと対策を教えてくれたのだろう!!」

「まさか本当に出来るとは思ってなかったけどな!!」

繰り出される斬撃を紙一重で交わしつつ、俺もベクトル操作を駆使して千冬でと攻撃を繰り出す。アーリーナに転がる石を蹴り上げ、触れれば吹き飛ぶような突きを繰り出す。しかしそれを、千冬はブレードで、あるいは回避で防ぐ。

相変わらずスゴイ戦闘センスだと俺は内心で舌を巻く。現時点でこれほどの力を持っているのだ。将来的にモンド・グロツソを制するのも頷ける。

だがしかし。

俺とてIS学園最強を背負う生徒会長。例え訓練であつても、負けることなど許されないのだ。

「少しばかり本気で行かせてもらうぜ千冬。遠慮はなしだ」

「フツ、当然だ。行くぞ形無!!」

これまで一直線に加速していた千冬の軌道が、上下左右に目まぐるしく変化する。通常瞬時加速を連続して使用するのは相当にハイレベルな技量を必要とするが、それを千冬は苦も無くやってのける。

一閃。

振りぬかれた剣は、しかし俺を貫くには至らない。

「……読んでいたのか?」

ポツリと千冬が呟く。

あれだけ上下左右に動き回られては、どこから一太刀がくるか予測は困難だ。事実、まさか真上からと見せかけて背後からとは思ってもよらなかった。俺以外であれば、その一撃で決まっていただろう。

「読んだというよりは、脳内で千冬のこれまでの軌道を思い出して、一番可能性が高いルートで張ってただけだけどな」

「……これまでというのは、まさか入学してから今日までの私の戦い全てか?」

「当然」

「はあ……。そんなことが出来るのはお前くらいだ」

ISを待機状態に戻して、千冬は溜息を零す。

なんだ、もうやらなくていいのか？ そっちのシールドエネルギーはまだ残ってるだろうに。

「続きをしたいのはやまやまだがな。もうこんな時間だ」

指示された時計に目をやれば、そろそろ寮に戻らなくてはいけないような時間になっていた。

「だが決着はつけるぞ。個人トーナメントでな」

「まず俺と千冬が当たるかわかんないけどな」

「当たるさ。形無は生徒会長として絶対負けられん。私も負けるつもりなどない。となれば、私たちが戦うことになるのは道理だろう？」

自信満々というように語る千冬は、そのまま俺のほうに近づいてきて不敵にほほ笑んだ。

「さて、兎にも角にもだ。一度部屋に戻るぞ」

腕を絡ませてきた千冬の発言に、俺は一瞬固まって。

「……それって、まさか俺の部屋？」

「当然だろう」

なに言ってるんだお前？ 的な表情を浮かべられ、俺は返す言葉を失った。

こういう時の千冬には、最早何を言っても無駄である。伊達に一年以上付き合っているわけではない。そして俺の部屋に押し掛けるということは、多分そういうことなのだろう。

「……嫌か？」

身長が俺よりも少し低い千冬に、こうして見上げられるような形で聞かれたら、嫌などと言える筈もなく、そして嫌な訳がない。

今すぐにも抱きしめたい衝動に駆られるが、ここがまだアリーナであることを思い出して動きかけた腕を引っ込める。

俺は千冬と並んで歩きながら、寮への道を歩いていった。

そして二週間後、学年別個人トーナメントが、いよいよ開催される。

## #43 再会はその時点でフラグ

前回のあらすじ

ナタルのポンコツ具合が露呈

あと学年別個人トーナメント開幕



さて、いよいよもって今日、今年度最初の大規模イベントである学年別個人トーナメントが開催される。本来であればIS学園関係者以外立ち入ることのできないIS学園だが、今日明日の二日間に限ってはIS学園側から配布された招待状を持つ者は敷地内に足を踏み入れることを許される。

ISというモノが束の手によって世間に広まってから二年弱。黒白事件によってその知名度を格段に上げたISは、やはり今最も注目されている。

更にIS同士の戦いなど、ごく普通に生活している人間はまずお目にかかることなどできないだろう。なにせテレビ中継などされていないのだ。モンドグロツソが行われるのは少なくともまだ数年後、現段階ではIS研究所を除いて日本唯一ISでの戦闘を目にすることが出来る場所が此処IS学園なのである。

そんな訳で、朝からIS学園は大忙しである。

生徒はISスーツに着替えて開会式が始まるまで各々最終準備に追われ、教師たちは会場設備や外部の警備に走り回る。どこかお祭り騒ぎのような雰囲気醸し出しつつ、学園内は騒がしくも楽しそうに開会の宣言を待つ。

今回の学年別個人トーナメントでは、生徒たちの家族以外にも当然IS関係者たちも数多くやって来る。それはISを造る研究者たちであったり、国際IS委員会の者であったり。

そんなISの関係者たちに、三年生は二年間で培ってきたものを、二年生は一年間の成果を、そして一年生は入学して一か月間で学んだ

ことを披露するのがこのトーナメントだ。成果を見せるのであれば年度末が望ましいのではないかと思うかもしれないが、これは三年生にとつては推薦などにも大きく関わってくるトーナメントだ。年度末に行っていたのでは、三年生の受験は切羽詰まったものになってしまう。二年生も今のうちから企業や開発会社に目をかけてもらうことが出来れば、これからの進路で随分役に立つ。

故に、このトーナメントは生徒たちにとつても、また見物に来たI S関係者にとつても重要なイベントなのだ。

とまあ、多くの生徒たちが興奮や緊張などといった感情を持て余して開会を待っている頃。俺はというと。

「……はあく、美味しい。やっぱ真耶の淹れる紅茶は最高だな」

生徒会室で生徒会メンバーとモーニングティーを満喫していた。

うん、柔らかな日差しを背中に浴びながら飲む温かい紅茶はなんでもこんな美味しいんだらうか。

「あ、ありがとうございます会長」

礼を言われた真耶が、嬉しそうに微笑む。

開会式が予定されているのは午前九時で、今の時刻は八時三十分。他の生徒たちは既に寮での朝食を済ませ、校舎内やアリーナ周辺で準備に勤しんでいるが、俺たち生徒会メンバーはそこまで急いで準備する必要などない。そもそも緊張など此処に居る奴らは微塵もしていないだらうから、気持ちを落ち着ける時間なんて必要ないだらうしな。

「楯無、開会式の時の挨拶はもう考えたのか？」

持っていたティーカップを机に置いた千冬がそう尋ねる。因みに入学式の時と同様、開会式の司会も副会長である千冬が進行する。

「ん？ まあ、とりあえずは」

言つて俺は懐から扇子を取り出して慣れた手つきでそれを広げる。書かれている文字は『準備万端』。

というか、生徒会長の挨拶なんて何時も言うことは大して変わらないのだからすっ飛ばしてもいいんじゃないかこの頃よく思う。それを千冬に言ったところ、案の定サボるなどシバかれたが。

「はあ、頼むから今回はマシなことを言ってくれよ？　後始末をするのだから大変なんだ」

「おい千冬、その言いぐさだと俺が毎回碌なこと言っていないみたいに聞こえるんだが？」

「正にその通りだ。入学式の時だったあんなことを言ってもまたファンクラブの会員を増やしおって……」

「あん？」

後半部分はボソボソと小声だったために聞き取ることが出来なかった。

俺そこまで変なことは言っていないと思うんだけどなあ。原作の楯無みたいになろうとキャラ作って壇上に上がるってことに慣れちまったから、ちよつとやりすぎなくらい挑発することはあるけど。

「それはそうと、私たちの組み合わせの抽選はどうするんだ？」

ゴホン、と一度咳払いをして千冬が切り出した。学年別個人トーナメントの作成は俺たち生徒会が作成したため、不正にならないように生徒会メンバーの場所は当日抽選で決めるようにしていたのだ。と言っても、真耶は二年生でただ一人の生徒会役員であるため、自動的に場所は決まってしまったが。

「それは開会式の最後にやるよ。つっても俺と千冬と織村だけだから直ぐに終わるけどな」

「はん、見てろよ更識。今回こそお前に勝ってやるからな」

今まで黙っていた織村が、自信満々の表情で俺を見た。

「はいはいフラグ乙」

「ちよ、なんか最近俺への扱い雑じゃねえか!？」

「いつもだバカ」

織村を軽くおちよくりつつ、俺は壁に掛けてある時計に視線を移す。開会式まであと十五分程、この生徒会室から開会式が行われる第一アリーナまでは歩いて数分の距離なので、ギリギリまでここで寛いでいても問題はない。蛇足だが、俺が高電離気体（プラズマ）によって半壊させた第二アリーナは既に修復が完了している。そこで二年生のトーナメントが行われる予定なので、ISの攻撃がアリーナに直

撃しても問題ない程にはしつかり修復されているのだろう。

「まあ二年生のトーナメントやるアリーナには真耶がいるから何かトラブルが起きても大丈夫だろう。問題は……」

「ナタルか……」

俺の言葉に続いて答えたのは、ナタル教育係に任命された織村だ。織村にはこの二週間、生徒会としての仕事や機械音痴をなんとかすべく奔走してもらったが、やはり機械音痴だけはどうにもならなかった。なのでナタルだけは生徒会の雑事をする時、紙に出力したものを渡して手書きでやってもらっている。アメリカに居た時もそうだったのか、手書きのスピードはもの凄く早く尚且つ丁寧に纏められていた。全部英語なので読む際苦労したが。

「アイツも優秀は優秀なんだが、如何せんまだハッキリ周りを見ることに慣れてねえ。定期的に第三アリーナに見に行つてやったほうがいいだろうな」

「そうか、任せたぞ織村」

「よろしくな織村」

「お願いします織村先輩」

「そこまで俺がやんねえといけないのかよツ!!」

当然だ、と言わんばかりに俺たち三人は織村を見つめる。しばし反論しようと思いを悩ませていた織村だったが、その後ぐつたりと項垂れた。

「……つと、そろそろ移動した方がよさそうだな。一般客も増えてくるだろうし、混雑する前にアリーナに入った方がいい」

時計の長針は五十五分を指しており、俺が席を立ったのを皮切りに千冬たちもそれぞれの席を立つ。

揃って生徒会室を出た瞬間に偶然居合わせた一年生であろう生徒が何故か顔を赤くして固まったが、話しかけるのも変かと思ひ、そのままアリーナへと向かう。何故か背後から突き刺さる視線があったが、気づかないようにして先を急いだ。



アリーナに着くと、そこには既に全員の生徒が揃って座っていた。一般客へのアリーナ開放も既に始まっているため、開会式もまだだというのにアリーナ上部の観覧席には多くの観客たちが押し寄せるようにして席についている。

開会式は生徒がアリーナの前側に、アリーナを中心に円になるように座っている。開会式が終われば生徒たちが今座っているこの場所も観客たちに開放されるが、それまでは立ち入り禁止だ。

そして今、俺はアリーナの中心に居た。設置された壇上に立ち、これから生徒会長としての挨拶をしようとしているところだ。管制室からマイクを使って司会進行を行う千冬の声が、アリーナの隅々にまで響き渡る。

『生徒会長から挨拶』

言われ、俺は一息吸い込んでそれを吐き出しながら声を張る。

「生徒諸君、おはよう。そしてこのアリーナに見えている来賓方、ようこそIS学園へ。俺はこの学園の生徒会長、更識楯無だ」

パンツ、と軽快に開かれた扇子には『歓迎』の二文字。

マイクを使用しているわけではないが、アリーナ全体に自分の声を響かせるのは造作もないことだ。ベクトル操作でちよちよつと工夫するだけである。

「三年生はこのトーナメントで進路が決まるかもしれない。二年生は企業に目をかけてもらえるかもしれない。一年生は今の実力を知りたい機会だ。皆、思う存分に戦ってくれ」

……ああ、もちろん。

と俺は付け加えて。

「——俺を倒せばソイツが最強だぜ」

ニヤリと人の悪い笑みを浮かべて、俺は生徒たちへと発破をかける。学園最強の称号である生徒会長。俺を倒せばそれを得ることができる。黒執事の強さはIS関係者にとっては周知の事実なので、倒したとなればそれこそ企業からは引く手数多になることだろう。

当然、俺も負ける気なんて更々ないが。



「さて、前口上はこのくらいで十分だろう。そろそろ待ちきれなくなってきたる奴も居るみたいだしな」

ぐるっとアリーナを見渡し、ちらほら見受けられる好戦的な目をした生徒たちを視線に捉えながら。俺は高らかに宣言する。

「ただ今より、学年別個人トーナメントを開催するッ!!」

一度閉じられ再度開かれた扇子には、『開幕』の文字が躍っていた。



午前九時三十分。この時間より、学年別個人トーナメントは各アリーナで開始された。

既に上部の観客席は満員状態で、後方では立ち見で試合を観戦する来場者も少なくない。特に人が集まっているのはやはり三年生が使用する第一アリーナで、その観客数は既に一〇〇〇人に迫ろうとしている。

そんな中、生徒会長たる俺はというと。

「兄さん!!」

「……お兄ちゃん……!」

「久しぶりだなあ、姫無。簪」

我が愛しの妹たちとの再会を喜んでいた。

いや、確かに最後に会ったのは今月の初めだから、実質は一か月も経ってないわけだけどさ。やっぱり子供の成長は早いというかなんというか、この短い期間でもしっかり成長してるなど感じられることがもう、ね。

お兄ちゃん的には最高だよな。

外出用の洋服（二人ともワンピース型のドレス）に身を包んだ二人は、俺の元へと駆け寄ってくるなり笑顔で抱き着いてきた。おうおうなんだ、ちよつと背伸びたんじやないか姫無。簪もなんだか普段の引っ込み思案的な性格が改善されてるような気がするぞ。

「流石だったわ兄さん。あの挨拶は完璧」

どうやら開会式での俺の挨拶をバツチリと耳にしていたらしい姫

無からそうお褒めの言葉を頂いた。

「ありがとな、そう言つて貰えると嬉しいよ」

言つて、俺は姫無の頭を優しく撫でてやる。気持ちよさそうに目を細める姫無を横目に、簪の方へも視線を落とす。

「簪も聞いてたのか？」

「うん……。かつこよかつた……」

俺の制服の裾を軽く掴みながら、簪も俺の挨拶を褒めてくれた。やっぱり身内から褒められると素直に嬉しいものだな。

少女二人に囲まれる生徒会長、という何とも珍妙な光景が出来上がっているわけだが、俺は全く気にしない。

可愛い正義だ。異論は認めない。

「……楯無。あまりそうベタベタするなよ」

不意に掛けられた声に俺は振り返る。

そこに居たのは、少年と手を繋いだ状態の千冬だった。

「おう千冬。一夏に招待状渡してたのか」

千冬と手を繋いだ少年——織斑一夏に視線を合わせるためにしやがみこんで問いかける。

「まあな。以前から一夏はISでの戦いを間近で観たいと言っていたしな」

「そうなのか。ま、楽しんでけよ一夏」

「おう!!」

わしやわしやと頭を撫でながら一夏に笑いかける。やはりというか、この年頃の少年にとってはISというのは憧れの的なんだろう。ほら、あれだ。俺で言うところのガン〇ムみたいなものだ。生憎ISに乗れるのは圧倒的に女性だが、それでもやはり憧れずにはいられない。なまじ俺や織村といった例外的な男性IS操縦者が存在するため、余計にその憧れは強いものになっているに違いない。

「形無兄いも頑張れよ！俺応援してるからな!!」

どうやらかなり興奮しているらしい。鼻息荒く、今にでも何処かに飛び出して行ってしまいそうだ。

……ああ、だからさつきから千冬が手を握ってるのか。

などとそんな呑気なことを考えていると。

「……あら千冬さん。お久しぶりです」

「ああ、姫無も元気そうだな」

すぐ横で、二人の少女たちが火花を散らしていた。

「さつきも言ったが姫無。あまりこういった公衆の面前で男にくつつくものではない」

「あら、だって私の兄さんですよ？ くつついたところで何も問題は  
ありません」

「お前ももう十歳だろう？ そろそろ兄離れしないといけないぞ」

「する必要がありませんし、する気ありません」

「……楯無もあまりそうくつつかれると動きづらいだろう。離れてや  
れ」

「兄さんは私一人がくつついたくらいで動けなくなるような軟な人  
じゃありません」

「……………」

「……………」

あー、うん。

俺はこの状況を一体どうしたらいいんだ？

とうるか千冬よ、あまりムキになるな。相手は小学生だぞ。確かに  
姫無の話術は既にかんりのレベルだから言い負かされそうになるの  
は分かるけどな。一旦落ち着かないと。小学生に言い返せない生徒  
会副会長の図が出来上がってしまうぞ。

「とりあえず二人とも落ち着けて。千冬もあんまカツカするな。姫  
無も年上に対する態度は考えろよ？」

「ごめんなさい兄さん……………」

「すまん……………」

「ん、わかればよろしい」

そうしてようやく皆が落ち着きを取戻した頃。本日二度目の火花  
が散ることになる。

最初に気が付いたのは俺だった。この広い第一アリーナ内には大  
勢の人間が集まってきている。それは生徒であったり企業であった

り様々だが、明らかに一人、このアリーナ内で浮いている人物がこちらに猛スピードで向かって来ているのを捉えたのだ。

日本人とは思えない、ピンクにも似た髪色。学園指定の制服など知るかとばかりに着ているのは、不思議の国のアリスに出てくるような水色のドレスにも似たワンピース。

そして極めつけに、頭上でピコピコと動くウサ耳。

その余りにも浮いた格好に、千冬、姫無たちも気が付いた。

ここ一か月行方を眩ませていた彼女が何故突然この場に現れたのかは分からないが、これだけは断言できる。

「……こりや一波乱あるな」

ボソリと呟かれた俺の言葉が聞こえていたのか、千冬が「だな」と答えた。

そんな俺たちの思いもいざ知らず、目の前にまでやってきた少女はこちらを見るなりとんでもないことを言った。

「ひっさしぶりだねえかーくん、ちーちゃん。——あ、東さんは今から国際IS委員会の奴らを皆殺しにしてくるから」

ウサ耳少女、篠ノ之東は満面の笑みでそう殺戮を宣言した。

## #44 不審者はその時点でフラグ

前回のあらすじ  
うさぎさん襲来



「ちよっと待っててねかーくん。今から国際IS委員会の奴らを皆殺しにしてくるから」

「いやいやいやちよっと待て」

俺の横を颯爽と通り抜けようとした束の襟を引つ掴み、とりあえずその場に正座させる。周りの視線が気にならないわけではないが、物騒なことを口走っていたコイツを放っておくわけにもいかない。アリーナ内の視線も気にせず、俺は目の前のウサギに尋問を開始。

「束、とりあえず落ち着け」

「これが落ち着いていられるかってんですよッ!!」

「やばいなキャラがブレまくってる。これ相当キてる時の束だ」

頬を膨らませプンスカしている目の前の少女。

まず第一に今までどこでなにしてたんだという疑問が浮上していくが、今の束には何を言ったところで無駄だろうと思いつき、とりあえずは彼女の激怒の原因を聞き出す方向で考えを纏めた。

千冬とも一旦視線を合わせ、こくと首肯を受けたのちに口を開く。

「一体どうしたんだ？ 束がここまで取り乱すのも珍しい」

「だってだって聞いてよかーくん!! あいつら私の研究所に毎日何千通も新技術の情報公開求めてくるメール送ってくるしそれには漏れなくウィルス付の偽情報で撃退してたんだけどそしたら学園通じて直接話がしたいとか言い出すしウザくて国外逃亡してて今日戻ってきたらアイドルの出待ちみたいな行列作って束さんのこと取り囲ん

で情報搾り取ろうとしたんだよ!!?」

矢継ぎ早にそう話す東の目は血走っていて、今にも凶器片手に飛び出してしまいそうだ。

「というかIS委員会の人間たちも懲りないな本当に。以前にも似たようなことをして痛い目に遭ったことを忘れたわけではないだろうに。確かにそこまでのことをしてでも東のISに関する情報が欲しいのかもしれないが、幾ら頼み込んだ所で東が情報を提供する筈がないし、第一それは条約違反だ。」

「前にも政府のコンピュータに東さん特性ウイルスぶち込んでやったけど、今回はどうしてやろうか……」

「いややめろよ?」

危ない発言が飛び出している束に釘を刺し、チラリとアリーナ内に備え付けられた時計へと視線を移す。午前九時四十分。俺の試合開始時間はまだまだ先だが、そろそろ織村の試合が始まる頃だ。まあ、別段見に行く必要もないんだが。どうせモニターで試合映像は見る事が出来るし。しかもたった二人しか居ない男性IS操縦者の試合だ。間違いなく混雑するだろう。IS関係者はもちろん、一般の観客や生徒たちもこぞって織村の試合を見に行く筈だ。生徒会書記としての名と実績も伊達ではない。

「どうする楯無。直に織村の試合が始まるが」

「まあ見なくても結果は分かりきってるけどな。とりあえず俺は姫無たちを特別席の方に連れて行くけど」

「ふむ。ならば私も一夏をそちらに連れて行ってから奴の試合を見に行くとしてしよう」

「あー!・ずるいよちーちゃん、そんな風にかーくと二人つきりになろうとして!!」

「なツ!? そ、そんな気は全くないぞ!! 大体、私たちは付き合っている者同士であってだな、例え二人きりでも別段問題は……」

「はいアウトー!! そんなのはこの私が許さないよちーちゃん!! 私がない間に勝手に進展しちゃってるみたいだけど、そんなのは無効なのでーすツ!!」

俺の存在など最初からなかったかのように口論を繰り広げる千冬と束。というかそんな話をこんな周囲に大勢の人がいる中でするんじゃない。さつきよりも視線が突き刺さるようになっていいるだろうが。

「……はあ」

ここ最近はこの溜息ともおさらばしていたんだが、如何せん完全に切り離すことなど到底無理だったようである。それと姫無よ、あの二人の口論に混ざろうとするんじゃない。そんな身を乗り出したって駄目だぞ。お前はあんな風には育つちやいけないからな。

「俺はこの子ら連れて先行ってるからな」

「あ、楯無逃げるな!!」

「かーくん逃げるのは無しだよツ!!」

後ろでなにやら叫んでいるのが聞こえてくるが、それに一々反応していたら自分の身が持たないというのはこれまでの経験上分かっているので華麗にスルーし、俺は姫無と簪、そして一夏の手を引いてそくさとその場を後にした。



「……ふう」

第一アリーナの内部に備え付けられた控室でISスーツに着替えた俺は、残りわずかとなった待ち時間をベンチに座って過ごしていた。

別段緊張などはしていない。いくらこのトーナメントが世界的にも注目されるイベントであったとしても、結局はIS学園の生徒同士による模擬戦でしかないのだ。しかも自身は生徒会メンバーの一人。負けるつもりなどさらさらないし、対戦相手には残念だがさつきと終わらせてしまおう。

そんな風に考えていると、不意にロッカーの中からバイブの振動音が聞こえてきた。俺はロッカーを開けて制服のポケットから携帯を取り出す。そのバイブはメールの着信を知らせるものだった。差出

人の欄には、ナターシャIIファイリスの文字。

(ナタル? こんな時に一体なんだってんだ)

まさか何かトラブツたんじやないだろうな、などと嫌な予感を覚えつつも、俺はそのメール内容を確認すべくフォルダを開く。

その内容は、

『一回戦突破しましたよー(´o´) そろそろ織村先輩も試合ですよね? 頑張ってください! あ、あとIS学園の門のところにおいていクレープ屋が来てるみたいですよ』

「知るかつ!!」

思わず携帯を床に叩き付けてしまいたい衝動に駆られるが、それをなんとか押し留め携帯をロッカーの中へと戻す。

ったくなんだったんだよあのメールは。クレープなんざどうでもいいだろうが。あいつは俺の集中力を乱そうとしてんのか?」

「……つと、そろそろ時間だな」

試合開始予定時刻は九時五十分。その時刻まで残り三分を切っていた。

流星にもうアリーナに出ないとまずい。俺は一度呼吸を整え、そのまま控室を後にした。

アリーナに出た瞬間、俺の周囲を包み込むようにして大歓声が響き渡った。生徒会のメンバーとなつて約半年。今となつては慣れてしまった光景だ。対戦相手であるらしい女子生徒は既に純国産の第一世代型、『黒鉄(くろがね)』を装備した状態で俺がやってくるのを待っていた。

俺としたことが、女性を待たせてしまったことを若干反省しつつ、俺はアリーナ中央へと向かう。

「悪いな。少し遅れちまった」

「ふふ。今日はその余裕そうな表情を浮かべる暇なんてないんだからね」

俺の謝罪に対して好戦的な笑みを浮かべながら返答する少女。確かこの子はIS適性がBで中々操縦技術が高かった筈だ。

さて、俺もいつまでもISスーツのままにいるわけにもいかない。



このまま戦えないわけではないが、そんなのは更識の領分だ。俺が態々そんなことをする必要もない。

——何よりも。

俺には専用機があるのだから。

「来い、」

俺が呟いた直後、全身を蒼い装甲が包み込む。現在世界各地に配備されている第一世代型のような無骨さはなく、どこまでもシャープな印象を抱かせるそれは、さながら中世の騎士のようにも見える。これは去年の冬、どういうわけか束が用意してくれた俺専用の機体だ。これまでの彼女との付き合いはお世辞にも良好とは言えなかったのだが、どうやら更識との確執が解消したことでふと気が向いたらしい。

特徴的なのは背後に取り付けられたスラストターのようなモノだろうか。しかしこれ自体にはなんの攻撃性も無く、俺の『未元物質（ダークマター）』によって出現する翼の邪魔をしないようにと設けられたスペースのようなモノだ。後は本当に特徴のない、ある種プロテクターのようなIS。機体面積は最小限に、機動性は最大に。その当然防御力は他の機体に比べて劣るが、そんなものは自身の能力でなんとでもカバーできる。

「ほんとにいつ見てもそれがISだなんて思えないよね」

「それは見た目がか？ それとも——」

試合前にしては互いにリラックスして話している。ように思えるが、俺も彼女もこれが表面上だけのものであるということは分かっている。互いに開始の合図を待ち、始まった瞬間に仕掛けるつもりなんだろう。

そして。

試合開始のブザーが鳴り響いた直後。

「せいッ!!」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）によって奇襲をかけてきた少女が、近接型のブレードを横薙ぎに振るう。剣道部だという彼女の太刀筋は見事なものだ。正確に俺の装甲が薄い部分目掛けてブレードを振るってくる。

しかし。

それは、俺には通用しない。

「——この戦闘能力が、か？」

言うと同時に、彼女の機体が暴風に晒され体勢を大きく崩す。俺の能力によって生み出された暴風は、否応なく彼女をアリーナ外壁へと叩きつけた。

「ぐっ!!」

「悪いな。生徒会の一員としても男としても、俺は負けるつもりはねえんだ」

瞬時に少女への距離を詰めた俺は、そのまま手を彼女の機体へと宛がう。未元物質の混入によって新物質へと変貌を遂げた衝撃波が、彼女の装甲を一瞬で貫いた。

瞬く間にシールドエネルギーの残量を減らしていく少女の機体は、やがて沈黙した。俺の勝利を告げるアナウンスがアリーナ内に響き、それに呼応するかのように観客たちの歓声が轟く。ざっと周囲に視線をやれば、観客席の一角に更識や織斑の姿があった。どうやら観戦に来ていたらしい。一回戦など、見なくても結果はわかりきっているというのに。

「……あん？」

そんな更識たちを含む観客席の一角に、奇妙な人間を捉えた。全身黒づくめの長身の男。首にはしっかりと許可証が下げられているが、その男の纏う雰囲気は明らかに一般人のものではなかった。

匂う。

この匂いは、厄介ごとの匂いだ。更識の周囲に居たが故に鍛えられてしまった自身の感覚が言っている。更識たちはまだあの男の存在には気づいていないのだろう。あの男との距離は更識たちの方が離れている。丁度このアリーナ内の対極だ。

(……いや、更識たちに気づかれないようにあの場所に居た……?)

だとすれば可笑しい。そこまで気付かれないように慎重に行動している筈の男が、俺がアリーナ内に居るのを知らない筈がない。しかもたった今まで戦っていたのだ。この歓声の中で俺の存在に気付か

ないというほうが異常だ。であるとすれば。

「……罨、か？」

その可能性は高い。あえて自身にだけ己の存在を明かし、俺を誘き寄せるための罨。そう考えるのが最も妥当だと言える。

どうする？ 誘いに乗ってみるか？

幸いにして次の試合までは一時間以上のインターバルがある。相手がどのような腹積もりなのかは知らないが、片づけるには十分な時間だ。

更識たちには伝えておいたほうがいいか、と考えたところで俺はその考えを放棄した。

今更識たちは久々に家族と会っているのだ。それに水を差すような真似は出来ることならばしたくない。俺が招待した弾はきつと今頃どこかではしゃいでいることだろうから放っておいても問題は無い。というかどつか走って行っちゃったし。

「さて、そうと決まればさっさと片付けるか」

俺はISを待機状態のブレスレットに戻し、アリーナを出て男を追った。



「かかったようです」

「ふむ、詳細は？」

「織村一華。世界で二番目の男性IS操縦者。IS学園の三年生、生徒会に所属し書記を担当。その実力は『ビッグ4』に名を連ねているように学園、いえ。世界的にもトップレベルの超人です」

IS学園から遠く離れたとある国内のオフィスビル。  
オペレーターから発せられた内容に、背後に立つ男は満足そうに頷く。

「よし。釣れた獲物は特大だ。何としてでも捕えろ。最悪四肢の一本くらいは削ってもかまわん」

「了解しました。こちらM-3、対象の捕縛内容を変更。生命に支障

をきたさない範囲での攻撃を容認」

『M-17。了解』

返ってきた返事を聞き、男はIS学園付近に仕掛けられた望遠カメラの映像をモニタに映し出す。学園内のセキュリティは天才科学者、篠ノ之束の存在もあって非常に高く、敷地内に監視カメラを設置することは不可能だったが、その敷地内ギリギリの所にカメラを設置することには成功した。男たちの目的のためには、有能なIS操縦者の存在が必要不可欠。特に男性の。

その点において織村一華は非常に都合が良かった。生徒会長を務める更識楯無のほうは捕縛するのは非常に困難だと推測された。彼は非常に賢く、なによりあの更識の家の人間だ。早々こちらの都合のいいように動いてはくれないだろうとデータが暗に語っていた。

反して、織村一華はとても扱いやすそうな人物像だった。プライドが高く自己中心的。更識楯無のことを毛嫌いし、自分が一番でないと気が済まない。典型的な直情型。このデータは以前のものだが、人間性格はそんな簡単に変えられるものではない。たとえこのデータから乖離していたとしても、修正できる範囲のものだろう。

よって男たちは彼の捕縛に至る。

更識楯無たちには気づかれぬよう細心の注意を払い、織村一華にはギリギリ認識できるような場所で姿を現す。

案の定、彼は男の存在に気づき、アリーナを出て男の後を追い始めた。

「クク、全く単純すぎて仕事のし甲斐がないね」

思わず笑いが漏れるのも構わず、男は画面上の織村を見つめる。

「さあ、礎になってもらおうか織村君。僕らの——京ヶ原の悲願のために」

## #45 暗躍はその時点でフラグ

前回のあらすじ

織村主役回



第一アリーナを出た俺は、先ほど観客席で見つけた男を追うべくその姿を捜す。既にトーナメントが始まって一時間近くが経過していることもあってか、アリーナ周辺はアイドルのライブ会場のようになり、溢れかえっている。更には自身がここに現れたこともあり、周囲にはより多くの人が集まってくるようになってしまった。

こういった時に視線を集めるとするのは邪魔でしかない。かといって寄ってくる人たちを無碍にすることもできず、追わなくてはならない男を見失ってしまいそうになる。

その男は俺のことを誘っているのか、走ったり跳んだりといった移動はせず、歩いてその場を離れようとしていた。

——まるで、俺が見失わないよう気を使っているかのようだ。

「……ッハ」

自然、俺は口元を吊り上げていた。

辺りの人間が何事かと怪訝そうにするが、俺には一切気にならない。

「そうかよ。俺を釣ろうつての……」

人混みを掻き分けながら、男の後を早足で追いかける。男も気が付いたのか、これまでとは違い走って移動を開始した。男の身なりは全身を黒で覆ったコートにサングラス。この季節と今の学園内の状況的にその格好は酷く目立つ。その格好が俺が見失わないように配慮

されたものなのか、はたまた奴が馬鹿なだけなのかはともかくとして。

あの男が俺を誘き出そうとしているというのは間違いないだろう。だが、一体何のために？

確かに今現在 I S を動かせる男性は俺と更識の二人しか存在しない。検体としては言うことないだろう。研究者たちからしてみれば、喉から手が出るほど欲しい存在の筈だ。

しかし、にしてはタイミングや送り込まれた人間というのが些か雑すぎるように感じられる。今日は学年別個人トーナメント初日。当然各国から様々な人間が集まってくる。そんな中で、普通の人間ならば行動を起こそうとはしないだろう。

そして今俺の目の前を走るあの男。

I S 学園に侵入してくる上で、男は通常有り得ない。

いくらトーナメントで外部からの男が幾らか入ってくるとは言っても、I S を操縦するその殆どは女性なのだ。こういった場面なら女性を送り込んでくるのが普通だ。それに俺を相手取るつもりならば尚の事、I S に乗れる女性でなくてはいけない筈だ。

「……何を企んでやがるんだ……？」

考えられる可能性としてはあの男が対 I S のスペシャリストとかいうものだが、そんな人間は更識だけで十分だ。あんなチート野郎は世界に二人もいない。

「あ、いや。よく考えりゃ俺だって充分チートの領域にいるのか」

身近に更識や織斑といった化物どもがいるせいで自身の戦闘能力を過小評価しがちになってしまっていたが、『未元物質（ダークマター）』なんて代物を引っさげてる俺だって充分に化物だ。

……つか、そうやって考えると何のアシストもなしに純粋な操作能力だけで俺たちと互角に闘える真耶って実は一番化物なんじゃねえのか？

なんてことを考えていると、男は I S の整備室に備え付けられている格納庫へと入っていった。

確かここは一年生の整備のために割り当てられている格納庫の筈

だが、流石に初日の午前中なので使用している生徒はいないらしい。コツン、と靴を鳴らして中に入れば、男がサングラスを取ってこちらに向き直っていた。

「よお、鬼ごっこはもう終わりでいいのか？」

「織村一華で、間違いないな？」

「あん？ 俺だつて判つててここに誘い込んだんじゃねえのかよ」

筋骨隆々なその男は、俺の問いかけに静かに答える。

「念のためだ。万が一にも更識楯無のほうを誘い込んでいたなら、危うくこちらが滅ぼされかねんからな」

小さく口元を綻ぼせるその男に、俺は内心で苛立ちを覚えた。

そしてその苛立ちは、内心に留まることなく口をついて溢れ出す。

「ああ？ なんだそりや、その言い草だとまるで俺なら問題ねえように聞こえるんだが」

「聞こえなかったか？ ……そう言つたんだッ！」

途端、男は懐からナイフを取り出し、俺のもとへと突っ込んでくる。剣術の心得でもあるのか、そのナイフ捌きは様になるものだ。

ていうか、俺のこと舐めてんじやねえかコイツ。いくら俺が素手だからってISを起動させるのに数秒もかからない。まあ、起動せずともこのくらの連中なら問題なく対処できるが。

俺は向かつて突き出されたナイフを半歩ずれることで躲し、伸びきった状態の肘を蹴り上げる。

「がっ!？」

突然の痛み思わずナイフを落とす男。落ちたナイフを適当な所に蹴り飛ばし、俺は腕を抑えて呻く男へと近づいていく。

途轍もなく、イイ笑顔を浮かべて。

「なあ、言つとくが、俺を簡単に捕らえられるとか考えんじやねえぞ」  
しかし、そんな俺の言葉は激痛に苦しむ男の耳には全く届いていないらしい。

多分肘粉碎しちまったな。一切加減してなかったせいもあるが、そんなのは襲ってきたコイツの自業自得なので全く気にしない。

「グツ……、馬鹿な。……手に入れた情報と、人物像が全く違う……」

!!

「あ？ 情報なあ？」

「貴様は自己中心的で気性が荒く、更識を毛嫌いしている……！」

……なんか聞いていい気分ではないことをペラペラと話すなこの男は。

それがしかも否定できないってんだから、尚更苛立つ。その情報は、確かに俺のものだ。

但し、去年までの。

「残念だったな。その情報つてのをどこで手に入れたのかは知らねえが、生憎それは過去のもんだ」

「グツ……、しかし、そんな簡単に性格など……」

「変わるもんだぜ？ 案外簡単に、些細な切っ掛け一つで劇的に、な」  
最早戦闘能力を失ったこの男には俺を捕縛する力は残されていない。奥の手でも隠し持っていれば話は別だが、俺の見たところではその可能性は低い。

とすれば、俺がこれからすることは一つだ。

「さて、抵抗するなら今のうちだぜ。つってもその腕じゃ満足に武器も握れないだろうがな」

そんな男の前に立ち、俺は告げる。

「尋問（オタノシミ）の時間だ。洗いざらい吐いてもらうぜ」



時間は僅かに遡り、織村が第一アリーナから出て行く直前。俺は千冬と不審な男を発見していた。全身を黒いコートで覆い、帽子とサングラスをかけた男は、丁度俺たちとは反対側の観客席の通路に立っていた。明らかにカタギの人間には見えない。IS学園に侵入した男の目的などは不明だが、俺の直感がアイツはIS学園にとって害なす者だと言っている。

「千冬」

「ああ、私も今見つけた。あの男だな？」



「どうやらこつちには気づかれないように細心の注意を払ってるみたいだけど、この程度の距離で見つからないわけないだろう」

「ふむ……、こちらを誘っているのではないか？」

確かにその考えは一理ある。

通常、あんな格好で大勢の人間の中にいれば嫌でも目立つ。何せ周りには学園の制服を着用した生徒とビジネススーツを着た関係者しかいないのだ。そんな中で真つ黒なコートを着込んでいれば、明らかに浮く。

「あ、織村が追った」

「アイツで大丈夫なのか？ 確かにアイツは強いが、如何せん詰が甘い」

男の後を追う織村の姿を認めたところで、千冬が不安げに呟いた。

「ま、今のアイツなら問題ないだろ」

過去の織村であったなら、確かにああいった人間に遅れを取るという可能性は多大にあったことだろう。しかし、織村は今や生徒会役員。『ビッグ4』と呼ばれる人物の一人なのだ。ああいった人間一人対処できなくては、生徒会の名など語ることは不可能だ。

というか、俺としても態々出張ってまで片付ける必要はないと考えていたのだ。最悪の場合は俺も出るが、経験を積ませるためにナタルに行かせてもいいとさえ思っていた。まあ、流石に誰かが同行することになるだろうが。そんな思考の最中に織村が動いたのだ。アイツもこちらに連絡の一つも寄越さないところを見ると一人で片を付けるつもりでいるようだし、無闇に手出しする必要もない。

そんな訳で、俺的に問題なのは織村たちのほうではなく。

「……………」

「……………な、なあに簪ちゃん」

俺の両サイドで火花を散らしている、うちの妹たちの方であったりする。

「…………お姉ちゃん、さっきお兄ちゃんからクレープもらってた…………」

「そ、それはあれよ。兄さんがもういらなくなって言うから…………」

因みに、要らないなどは一言たりとも口にしていない。俺が半分

くらい食べた所で、姫無が残りを無理矢理持っていったのだ。いや、別に俺はいいんだけども。

「というか簪の視線が突き刺さって痛い。『何で私にはくれなかったの?』という含みを持った視線が俺と姫無の両方にグサグサと容赦なく突き立てられる。なんとというか、最近簪ってなんかヤンデレ気味になっっているような気がして仕方ないんだが。」

アレか、これが俗に言う反抗期というヤツなのか。

「……と、ゴメン姫、簪。そろそろ俺の試合開始時間が迫ってる」

「じゃあ私と簪ちゃん観客席の方に戻るね」

「……頑張つて……」

つい数秒前まで唾み合っていたのがまるで嘘のように、妹たちは実に素早く自分たちの席へと戻っていく。こういった所に気を使ってくれるのは俺としても有難い。というか、普通小学生はこんなに物分りがよくないと思うが、やっぱりうちの妹たちは優秀だなあ。

「楯無の試合は何時からだった?」

「十時半だな」

「そうか。どうせなら私も観戦したかったんだが、そういうわけにもいかんらしい」

「千冬の試合もその後すぐだもんな」

第一アリーナはこれから恐らく最大の観客数を動員することだろう。

何故なら俺、千冬が連続で試合を行うのだから。千冬は既に日本の国家代表候補としての地位を磐石のモノにし始め、俺は言わずと知れた世界初の男性IS操縦者。これで注目されないというのが不自然だ。

「なら俺は控え室に向かう。また後でな」

そう千冬に告げ、俺は静かに控え室へと向かうのだった



「こちらM-3。M-17、応答願います」

こちらから問いかけるオペレーターの声に、しかし向こうからの反応はない。

可笑しい。

こんな、こんな筈ではなかった。

織村一華。あの男は短絡的で直情的。自己中心的を絵に描いたような人間であった筈だ。そんな男であれば、少しプライドを刺激してやれば直ぐに捕獲できるものだと思われていた。

それがいけなかったとでもいうのか。

「おい！ 応答しろM-17!! 聞こえないのか!？」

「無理です。こちらからの通信は全て向こうから遮断されているようです」

「煩い!! 私に意見するんじゃない!!」

オペレーターの言葉を聞こうともせず、スーツの男はマイクへと罵詈雑言を吐き出し続ける。

全く、使えない上司を持つと苦労させられる。そう思わずにはいられないオペレーターの女性だったが、それを口にしてしまえばどんな末路が待っているのかは想像に難しくない為、決して口には出さなかった。

と、そんな時だ。

これまでこちらの言葉には一切の反応を示さなかった向こう側。砂嵐の雑音しか発していなかったその音が、急にクリアになったのは。

『——あ、あー。聞こえているかな? そこにいる者共』

「ッ!？」

突然聞こえてきた聞き覚えのない声に、スーツの男の身体が強ばる。男からしてみれば、その声には全く覚えがなかった。普通に考えれば、この声の主は織村一華だろう。だが、違う。少なくとも、この声は男のものではない。

であるならば、これは一体誰だ。

『ああ、こちらを逆探知しようだとか私が誰だとか、そんなチャチな詮索は止したほうが賢明だぞ』

響く声は、男には酷く無機質に感じられた。そして直感する。この声の主は一切の躊躇なく、理由さえあれば人を殺せる人間だと。裏（こちら）側の人間であると。

「……要件は何だ」

『話が早くて助かるね。じゃ、早速だが本題といこうか』

なんとなく、通信機の向こう側で女が不敵に笑ったような気がした。

『——このトーナメント期間中、そして今後一切。IS学園には干渉するな』

「……ッ!!」

その要求は、男にも容易に想像できたものだった。

しかし同時に、そこは決して妥協できない点でもある。

男とて組織の人間である。それも裏側の。任務を全うできなかった人間がたどり着くであろう最期など、考えるまでもない。

『どうした？ 返事が聞こえないのだが』

「グッ……!」

『安心しろ。この要求を飲むのなら確保したこの男も条件付きでだが解放してやる』

向こう側からの声も、男には余り聞こえていなかった。今男の脳内にあるのは自身の保身、たったそれだけだ。どうすれば己の身を守ることができなのか。その一点だけが彼の脳中を支配していた。差し向けた男の安否などどうでもいい。とにかく自身が生き残ること。それが最優先事項だ。

「……分かった。我々は今後一切、IS学え——」

結局向こうの要求を飲むことが最もいいだろうと結論を出したスーツの男の言葉は、最後まで口に出ることはなかった。

いつの間にか男の背後に立っていた女性が横薙に振るった小太刀が、男の首を綺麗に斬り落としたからだ。

「はあ。こんなのがウチの上司にいたとか、組織の汚点でしかないわ」  
その女性は、つい先程までM-3と名乗っていたオペレーターの女

性であった。但し、これまでとは纏う雰囲気が明らかに異なっている。

『……貴様、』

「はろー、何処かの誰かさん」

今しがた人を殺したとは思えないほどに軽薄な声が通信機越しの女へと向けられる。

「そっちに居る男だけど、勝手に処理しちゃっていいよ。もう要らないし。ま、元々使い捨てだったし」

オペレーター的女性——黒髪を腰辺りまで伸ばした見た目十代後半くらいの少女は、信じられない程にあっさりと言った。

「京ヶ原は——止まらない」



「……ツチ」

一方的に切られた通信機を見て、橘杏子は小さく舌打ちした。

京ヶ原。四家の一角。近畿、中国地方を根城にする劔（つるぎ）の家系。

怪しい男を捕獲したという織村の言葉によって格納庫へと赴けば、そこには成程確かに怪しい男が縄で雁字搦めにされた全身黒の男が気絶させられていた。聞けば織村が尋問紛いのことをして気絶させてしまったらしい。これだから尋問や拷問の初心者がやるといかんだ。こういうのは意識が落ちるか落さないかの絶妙なラインでやるからこそ意味があるというのに。それを織村に言ったら何やら青い顔をされたが。

その後織村をトーナメントへと戻らせ、私は男の胸ポケットに仕舞われていた通信機を使い向こう側へと交渉を持ち出したのだが、最後に出てきた女に強引に通信を切られてしまった。

（あの女……まさか、）

私も直接の面識があるわけではないが、声を聞くだけでも背中に冷や汗が止まらなくなったあの感覚。

あんなものを私に味合わせることが出来る人間など、この世界に何人もいない。

「京ヶ原、劔……」

このトーナメントはただでは終わらない。そう予感させるには十分な程の大物が、表舞台へと上がろうとしていた。

## #46 シリアスはその時点でフラグ

前回のあらすじ  
伏線バラ撒き回



「うし、」

第一アリーナ備え付けの控え室。試合開始予定時間が迫る中、俺は執事服に身を包んで準備を整えていた。準備と言ってもISに乗るわけではないので単に執事服に着替えを済ませるだけなのだが。それでもやはりこの服に身を包むと気合の入りが違う。はじめはこんな服装死ぬほど嫌だったが、人間慣れとは恐ろしいもので、今となってはこの執事服のほうが制服よりも落ち着けるくらいにまでなってしまった。

一回戦の対戦相手は三組の女子生徒。IS適性はC。俺はISに乗れないから適性なんてものはわからないが、C程度ならさして時間をかけることなく試合を展開することができるだろう。

自慢でもなんでもなく、俺を相手取るならIS適性Sクラスを連れてこないと話にならない。

準備を整えゆつくりと立ち上がると、控え室を後にしてアリーナへと向かった。

『これより第三学年、第十八試合。三年一組更識楯無、三年三組安形翠両名の試合を開始します』

そう第一アリーナ内にコールがかかった瞬間、場内のボルテージが一気に上がる。そんな大歓声の中、俺はテールを揺らしながら悠々と

歩いてアリーナへと足を踏み入れた。見渡す限り人、人、人。周囲三百六十度どこを見てもこちらに視線を向ける人々で埋め尽くされている。

たかだか一介の学生にこんな目を向けられるなんてことは通常有り得ないだろうが、学園最強の肩書きを背負い、男性操縦者の俺からすればもう見慣れてしまった光景だ。

「来たわね、会長」

ザツと周囲を見回していると、正面にISを起動させた状態で待ち構えていた少女が俺に声をかける。肩口で揃えられた髪の毛を靡かせ、挑戦的な表情でこちらを見据えている。

「待たせたか？ 安形」

「別に。対して待ってないわ。私もついさっき出てきたところだしね」

彼女が纏っているのは今年度からIS学園で『黒鉄』と共に正式採用されたフランスの第一世代型、『ラファール』だ。この機体は黒鉄のような近接格闘型ではなく、どちらかといえば中、遠距離型の後方支援型の機体として造られたものだ。とは言っても近接格闘が苦手というわけでもない。タイプで言えば遠距離型に分類されるというだけであって近接型の武装が搭載されていないわけではなく、その腕にはしっかりとブレードも握られていた。

試合開始のコールがかかるまでの僅かな時間、俺と彼女は秘匿通信（プライベート・チャンネル）を利用して昔話に興じていた。

会話の内容は、専ら昨年のことである。

「覚えてる？ 更識会長。私が貴方に決闘を申し込んだ時のこと」

「まあな。何せ俺に挑んできた生徒第一号だ。忘れようにも中々忘れられないさ」

「そう……。あの時の私とは、一味違うわよ？」

「そりゃ楽しみなだ」

お互いに軽口を叩きつつ、しかしその臨戦態勢を一瞬たりとも崩したりはしない。

安形は解りきっているからだ。俺と闘う場合、最初の一瞬で間合い



を詰められてしまえば直ぐに終結してしまうということ。

俺は嵌めた白い手袋の口を少し引つ張り、タイを整える。全く、今となつてはこんな動作もしないと落ち着かない。大分毒されてきているなあと内心で苦笑しつつ、俺はまっすぐに彼女を見据えた。

「……まあ、」

一瞬の静寂。

そして。

「——それは俺もだけどな？」

試合開始を告げるブザーがアリーナに轟いた瞬間、俺は安形の元へと突っ込んだ。



各アリーナに特設された大型の電光掲示板に、今日一日のトーナメントの結果がスクロール式に表示されている。

午後五時。学年別個人トーナメント初日を無事に終えたIS学園では、試合を終えた生徒の一部が格納庫やアリーナ周辺で機体の整備を行ったり、食堂で早めの夕食を摂ったりと思ひ思ひの時間を過ごしていた。今日の試合で参加生徒の半分が敗退し、勝ち残った半分は明日以降の二回戦へと駒を進めたが、俺を含む生徒会の面々は順当に勝利し、現在は生徒会室にて真耶の淹れたお茶を堪能していた。

「はあ、疲れたなあ」

「何を言ってるんだ。お前の試合時間はたったの数秒だっただろう」

「いや試合自体にはそこまで疲れてないんだけどな。各国要人の接待までさせられるなんて聞いてなかったからなあ……」

「それもこれも全ては押し付けてきた橘教諭のせいだな」

そんな愚痴を零しつつ、俺は残ったお茶を一息に飲み干す。というか、トーナメントが始まってから俺は橘教諭に会っていない。別段会う必要もない為そこまで重要視していなかったということもあるが。

真耶におかわりをもらい、そこで一つ呼吸をおく。その意味を正確

に理解したのだろう。千冬や真耶。そして織村とナタルも会話を止めてこちらに視線を送る。それを確認して、俺はそつと口を開いた。「さて。……織村。今日あの男について補足を頼む」

「ああ」  
そう言われて織村は今日アリーナで発見した全身黒の男についての詳細を話し始めるため一度目を閉じる。

と、そこで一旦ん？ と首を捻り、

「気付いてたのか!？」

と若干声を荒げた。どうやら織村は俺や千冬があの男の存在に気がついていないと思っていたらしい。心外だな、そこまで俺たちの視野は狭くない。というかあんな格好されてたらアリーナのどこにしようかと直ぐに分かる。

「そりや気づくだろう」

「当然だな」

そう答える俺たちを見て頭を抱える織村。

そんな話の内容についていけていない真耶とナタルは首を傾げているが、一先ず彼女たちへの説明は後回しにしたらしい織村は再び口を開いた。

「俺が捕まえたあの男だけだな、どうやら企業のスパイとかかってわけじゃないみたいだ。俺じゃそこまでしか口を割らせることができなかったが、あとは橘が上手くやってんじやないか？」

「ん？ あの人が出張ったのか？ わざわざ？」

「ああ。なんかあの凄いイイ笑顔で男を引き摺って行ったな」

橘教諭が態々出てきた、という点に俺は僅かに眉を顰める。あの仕事嫌いの女が、こんな面倒くさそうなことに首を突っ込んでくるだろうか。

俺の記憶の中では、あの女がそこまでしたのはたった一度しかない。という事は、今回の事はそれなりに厄介な事だというのだろうか。横を見てみれば千冬も引っかかるのだろうか。『あの橘教諭が？』と顎に手を添えて考え込んでいる。

と、そんな折。

唐突に生徒会室の扉が開かれた。

生徒会室の扉を開き、ずかずかと中に踏み入ってきたのは今しがた丁度話に上がっていた橘教諭だった。相も変わらずだるそうな顔をしている。

「おい楯無い。なんだその『だるそうな顔してんなあ』みたいな表情はあ」

おいコイツ読心術でも修得してんのか。俺ポーカーフェイスは得意の筈なんだが。

そんな俺の内心の同様など露知らず、橘教諭はどこからか引つ張り出してきたパイプ椅子に腰を下ろし真耶にお茶を淹れてもらっていた。それを一口飲み、静かにカップを机に置いてから口を開く。

「織村が捕縛した黒スーツの男だが、楯無にすりやちよいとばかり面倒な相手の下部組織ってことが判明した」

「俺の……？ つつうことは、」

俺にとつての面倒な相手。そう言われて真つ先に思い浮かんだのは、俺というよりは更識の家にとつて面倒な相手だった。そしておそらく、その予想は当たっているのだろう。千冬や織村は訝しげに俺を見つめているが、橘教諭はそんな疑問の視線には答えず、簡潔にだけ言った。

「京ヶ原が動き出した」

京ヶ原。そう聞いて少しだけ身体に力が入る。

『四家』。

この日本国内には、そう呼ばれる四つの家系がある。それは国内に点在し、古くから陰ながら暗躍してきた所謂暗部の家系だ。表向きはそんなことは出さず、普通の家として振舞っているが裏ではそういった仕事を粛々とこなしていたりする。

北海道・東北に住む『氷見』。

関東を束ねる『更識』。

四国・九州の『杠』

そして、関西を牛耳る『京ヶ原』。

この四つの家系は基本的に互いに干渉し合うことはない。友好関

係を結んでいる家系同士ならば幾度か顔を合わせたりもするが、そういった関係でなければお互い顔すら知ることはない。俺たち更識家で言うところ、杠の家が友好関係を結んでいる家系に当たる。何度かうちで顔を合わせたこともあるし、次期当主となるであろう俺の二つ上の男のこともよく知っている。

しかし氷見家とは全くと言っていい程関わりはないし、京ヶ原に至ってはむしろ完全に敵対している。一体いつからだったのだろうか。京ヶ原の家が、更識の人間に敵意を向けるようになったのは。原因は俺には分からない。だが、たとえ何らかの理由があつたとしても、それで『三ヶ条』の一つ、『侵不』おかしを破つていい理由にはならない。あのことがなければ、きつと今でも――。

「楯無」

「っ、」

そこまで考えたところで、その思考を遮るように橘教諭の声が掛かった。

「お前が何を考えてるのは知らんが一つ言っておくぞ。アレはお前の所為ではないし、抱え込む必要もない。全ては対処仕切れなかつた側に責任がある」

懐から取り出した煙草に火を点け、そう俺に言う。普段はちやらんぽらんなクセに、こういうところだけ無駄に敏感なのだから夕チが悪い。

確かにあの事を今更掘り返したことでどうこうなるわけではない。あの日がなければ、俺は今こうしてここに居ることもなかつたのだろうから。

「……はあ、まさか杏子ちゃんに励まされる日がくるとは」

「なんだとう形無。これでも年上なんだ敬え馬鹿野郎」

互いにそう呼び合う。俺も橘教諭もある日を境に呼び方を改める前、そう呼んでいたときのものに戻っていた。

「あのー……、」

「全く話が見えてこないんですが……」

俺と橘教諭がそう話していると、横からおずおずと言った感じで真

耶とナタルが会話に加わってきた。考えてみればこの事を知らない二人や織村は今まで蚊帳の外だった。俺としたことがすっかり忘れていた。因みに千冬は四家についても説明はしてあるので俺たちの会話の内容にはついてこれている。

「大体、京ヶ原ってなんなんだよ」

そろそろ我慢の限界が近いのか若干イラついた織村がそう尋ねる。

そうだな、杏子ちゃんが言う通り、ここに居るメンバーくらいには話しておいてもいいかもしれない。俺はそう考え、一旦千冬と杏子ちゃんへ目線を送る。千冬は頷き、杏子ちゃんは煙草の煙をこちらに吹くという暴挙で話すことを了承してくれた。つーかここ禁煙だぞニコ中が。

「……そうだな。何時かは話さないととは思っていたことだ。こうなった以上、皆にとつても無関係ではない」

会長席にもう一度座り直し、一旦間を取る。生徒会のメンバーも席について、俺が口を開くのを待っている。

話、と言つても大それた話ではないのだ。京ヶ原が動き出した。その事実とはあまり関係のない話かもしれない。俺自身、あまり自信はない。

しかし現にこうしてIS学園に干渉してきている以上、また以前のような惨事にならないとは限らない。もう、あんな事はたくさんだ。

俺は約半年程前になる記憶を脳内から掘り出し、やがて言葉を紡ぐ。

「あれは去年の秋だったか。——俺が楯無を継ぐことになった理由を、今からお前らに話そう」

## #追憶 楯無継承（前）

「これから話すのは、俺が楯無を継ぐに至った理由だ——」  
そう言つて、俺は静かに瞼下ろした。

今でも鮮明に思い出すことができる。いや、忘れられないといった方が正しいのかもしれないが。あの時ほど俺は自身の無力さを嘆いたことはない。超能力なんて、いざとなれば役に立たないのだと思ひ知らされた。大切な人間を守ることができない力に、一体何の意味があるというのか。

思えば当時の俺は何処か達観していた部分があったのだ。この世界で俺に勝てる人間など片手で数える程もない。いい勝負が出来たとしても、本気を出せば勝てないことはないだろうと。今考えればどれだけそれが愚かなことだったか。

つまるところ俺はただのガキでしかなかったのだ。

親に守られ、家に守られるだけのただの子供。井の中の蛙もいいところだった。

そしてやって来た、あの日が——。



遡ること約六ヶ月。十月下旬。

日が暮れるのも徐々に早くなり、夜ともなればそれなりの肌寒さを感じるようになるこの時期。つい先日生徒会長の職に就いた俺は夜八時を回った今も申請書類の印押しに追われていた。ついさつきまでは千冬も一緒に仕事を手伝ってくれていたのだが、まだ夕食を摂っていないということ为先に上がらせた。俺は大丈夫だりポビタンがあればどうとでもなるから。机の端に置かれた空き瓶の山を見ながらそんなことを考える。

実はここ三日寝ていない。というのも今まで存在しなかった生徒

会長という役職に回される仕事量というのが想像以上に多く、徹夜でもしなければとても期限までに終わらせることは不可能だったからだ。

「つーか何で生徒会長になったからって海外にまで出向かないといけないんだよ……っ」

だはあ、と大きなため息が室内に溢れる。

この書類に手を付ける前、俺は世界七カ国程を転々と渡ってきた。全て各国 I S 委員会への挨拶だ。 I S 学園の生徒会長つてのはこんな面倒なことをしなきゃならんのかといきなり会長職を辞めたくなったが、どうやらこんなことをするのは俺が男であるかららしい。いやその理屈はおかしいだろとツツコミたかったが、研究者たちの実験体を見るかのような怪しげな視線を前にしてそんなことは言えなかった。

そんなこんなで現在に至るわけなのだが。

「やべえ、これ朝までに終わんのか……？ いや、終わらんדר……」

思わず反語にしてしまう程に俺は切羽詰っていた。

それは明日の日曜日、実家に帰る用事があるからだ。まあ、用事つて言っても妹たちと出かけるだけなんだけど。あんな上目遣いで二人に詰め寄られては、断ることなど普通の男なら不可能だと思う。いや、もし俺以外の男にもやってたらそれはそれでその男と物理的に話し合う必要があるけれども。

そんなわけで今日の前に聳え立つ書類の山をなんとかして終わらせなければいけないわけなのだが、ハツキリ言って終わる気がしない。机の上に五十センチはありそうな高さの書類の山が三つもあれば、終わりが見えないのも当然だ。これを処理仕切る脳は持っていないも、その速さについてこられる運動能力は持ち合わせていない。

しかしだからといって投げ出すわけにもいかない。此処で諦めてしまつては妹たちとの買い物諦めることになる。それだけは二人の兄としてするわけにはいかない。

「というか妹たちと戯れる機会をみすみす逃してたまるか！ とう感情の方が強かったりするわけだが。」

「待つてろよ姫無、簪……！ 兄ちゃんは死んでもこの書類は片付けるぞ……！」

引き出しの一番下から新しいりポピタンを取り出し、一気に流し込む。

既に何本飲んだか覚えていないその空瓶を無造作にゴミ箱に投げ捨て、俺は目の前の書類へと向き直る。

生徒会室の明かりは、夜遅くまで消えることはなかった。



「……お、終わ……った……！」

朝八時。山のように積まれた書類を妹たちと戯れるという根性だけで片付けると、既に東の空には朝日が昇っていた。

いや、まじで終わったのは奇跡だな。途中何度か挫折しそうになったけどそこはリポピタンや眠眠打破を補給することでなんとか乗り切った。とにかく、これで妹たちとの約束を果たすことができる。外届けは既に出してあるし、千冬たち生徒会の面々にもその旨は伝えられている。

よって俺の目的を阻むものはもう存在しない。  
もしあるとすれば、

「この、睡魔か……！」

かれこれこれで四徹目。流石に限界が近い。約束の時間まではまだ数時間程あるし、ここで少し仮眠をとってからでもいいだろうかという考えが過ぎる。しかし同時に、ここで眠ってしまったら間違いなく寝過ごすだろうとも思う。

結局妹たちを優先する俺は、襲いかかる睡魔を気合だけで撃退し、のろのろと外出の準備を始めるのだった。

「ふあ……、いかな。こんな顔じゃ姫無たちに何言われるか」

寮の自室に備え付けられた洗面台の鏡で自身の顔を見て思わず呻



く。目の下には見事な隈がくつきりと。これじゃどこの日暮だか。

とりあえず顔を勢いよく洗って眠気をできる限り飛ばし、IS学園の制服から私服へと着替える。秋も終わりというこの時期だが俺はそこまで私服に拘るほうではない、紺のシャツにジャケツトを羽織り、スキニーパンツを穿いて部屋を出た。一応変装のためのサンングラスも忘れない。一応世間では有名人だからな……。

ここIS学園から更識の屋敷まではそう遠い距離ではない。電車を使えば三十分もかからないし、車ならもう少し早いだろう。まあ俺免許なんて持ってないから当然電車一択なんだけど。

乗り込んだ電車に揺られながら、ふと姫無たちのことを考える。

最後に会ったのは夏休みの最期のほうだったから、かれこれ二ヶ月くらいは会っていない。元気にしてるかなあ、いや断じてシスコンとかじゃなくてな。兄だったら妹たちの健康を気遣うのは当然だろ。断じてシスコンとかじゃないからな。

そう言えば、親父達も元気にしているだろうか。妹たちと同じく最後に会ったのは夏休みだが、その時の親父はなにやらデカイ案件を抱えていたらしくあまり話をする時間もとれなかったのだ。母さんに事情を聞いても教えてくれなかったあたり、相当でかいヤマを抱えていたのだと想像することはできるが、俺にさえ内容を教えまいとするのは何故なのだろうか。実力でいえば親父にも引けは取らないと思うんだが。

まあ、そんな今更なことを考えていても仕方がない。今日の俺は妹たちと買い物へ行くために帰ってきたのだ。更識の仕事を手伝うためではない。

駅の改札をくぐり抜け、自宅への道を歩いていく。

「……………」

見慣れた屋敷が見えてきた頃。何やら見覚えのある人影を捉えた。というか、屋敷の門の前に突っ立っているようだが。何やら備え付けのインターホンを押すかどうかで悩んでいるらしく、さっきから手が伸びたり引っ込んだりしている。

どうしようか。どうやら向こうはまだこちらの存在には気づいて

いないらしいのだが、俺の中の悪戯心が膨らみつつあるのだ。

彼女にしてみれば、きつと俺が此処に居ることにまず驚くだろう。そしてきつと羞恥に顔を赤くするに違いない。そんな想像をしつつ、俺はゆっくと彼女の元へと向かっていき、

「よっ。こんなところで突っ立ってないで中に入ったらどうだ？」

——杏子ちゃん」

「!!? か、形無いッ!? 何でこんなとこにいるんだよお前え!」

普段のだらけ切った態度からは想像できないほどに俊敏な動きでこちらに振り向く杏子ちゃん。この人は母さん、更識瑞穂の妹でありIS学園の教師を勤めている橘杏子。昔からの仲なので、今更上下関係など存在しない。むしろ最近俺の方がからかったりしている気がする。

何せ彼女、世間一般でいうシスコンと呼ばれる存在なのだ。いつもは周到にそのことを隠しているが、残念なことに母を前にするとそんな化けの皮は直ぐに剥がれる。いつもやる気無さげに垂れ下がっている眉が、持ち上がってしまいうくらいには。

「俺は姫無たちと買物にな」

「そ、そうなのか……」

「母さんに会いにきたんだろ？ 上がってけよ」

普段は遠慮などせずズカズカと敷地内に踏み入っていく杏子ちゃんだが、何だか今日は様子がおかしい。

あれか、思春期特有の気恥かしさとかか。

「何か失礼なこと考えてるだろうお前」

「イエ、ナニモ」

「……まあいい。にしても形無、お前何も聞かされていないのか?」

懐から取り出した煙草を咥え、杏子ちゃんがそう俺に問いかける。聞かされていない? 一体なんのことだ。更識(うち)に関係のある事柄が俺の知らないところで起こっているとでもいうのだろうか。

暗部に対抗するために存在する対暗部組織である更識。俺の実家でもあるこの更識は表舞台では、処理しきれない仕事を請け負うのが基本的な活動だ。依頼の種類は様々だが、データの改竄から組織の壊

滅まで幅広く仕事を請け負っている。とは言っても、一見さんは完全にお断り状態で、親父とパイプを持つ信頼できる人間の仕事しか請け負ったりはしないのだが。

「どういうことだよ」

「いや……、聞かされてないってことは姉さんや十六代目がその必要はないと判断したんだ。私の口から言うのは筋違いだな」

「いやいや勝手に納得されてもこっちは全然話の概要が掴めてこないんですが。」

しかし何時までもこんな所に留まっているわけにも行かない。なにせこの後には妹たちと買い物へ出かけるという重要な任務があるのだから。最優先事項を脳内ではじき出した俺は、杏子ちゃんに一礼して敷地内へと入っていく。大きな庭を抜け、幾つかの道場を通り過ぎると屋敷が見えてくる。

「ただいまー」

玄関に入ってそう告げる。数秒してから、奥からドタドタと数人の野郎どもがやって来た。皆何処かに傷を負ったヤクザ的な人……なんてわけでもなく、一人は道着を着た長髪長身の青年、一人はガタイのいいオツサン、もう一人は眼鏡をかけたインテリっぽい印象を抱かせる白衣を纏った優男である。

「お帰りなさいませ若」

「ただいま竜真（たつま）」

俺のことを若と読んだ道着の青年、竜真は深々と頭を下げる。年齢的には俺よりも三つくらい上の筈だが、竜真は年下の俺にもこういった礼儀正しさを忘れたりしない。親父の息子だからってのも幾分かはあるのかもしれないが、彼はこういった所はキチンとする性分なので俺もそこを指摘したりはしない。

「今日は確かお嬢たちと街に出るんですけどっけ？」

「ああ。……つうか玄十（くろと）、お前は何で上半身裸なんだよ」

「今しがた筋トレ終えたところですわ。いやあ暑くて敵わん」

やたらと体格がいいオツサン、玄十はガハハと豪快に笑いながら俺の肩をバシバシ叩く。痛い痛い、お前筋力やばいんだからちよつとは

自重しろよ。因みにこのオツサン、まだ二十代である。

「玄十、そんなに叩いたら若が潰れちゃうぞー」

「おっと。すみません若」

「気づくの遅え！ てか痛えよ！」

白衣の優男にそう指摘されようやく叩くのを止めた玄十に俺は若干声を荒げる。反射は切つてあるから普通に痛い。何故かつて？ 妹たちと手を繋ぐために決まっているだろう。

玄関先で何時までも立ちっぱなし、というわけにもいかないのでもりあえず俺は靴を脱いで居間へと歩を進める。長い渡り廊下を歩きながら、俺は後ろを歩く白衣の優男、虎鉄（こてつ）に話しかける。「そういや虎鉄、なんでお前らが此処に居るんだ？ ……つうか待てよ、お前らが居るつてことはまさかとは思うけど……」

「最初の質問はですなー若。私らが当主に呼ばれたからなんですよ、直々に」

にへら、と虎鉄は答える。

「それと後半部分のことですがー、来てますよ。彼女も」

「……………」

それを聞いて俺は直ぐにでも逃げ出したい気分になる。姫無や簪との買い物はそりやもう実に楽しみなんだが、それ以前に俺自身の身に危険が及ぶなどという事態は避けねばならない。

はて、しかし妙だなとも思う。彼女と此処に居る三人は更識家の大幹部『四士（しし）』である。彼ら四人は関東四箇所配置され、滅多なことではその場所から動くことはない連中だ。俺も幼い頃はこの四人と正月くらいしか会った記憶がない。最も、裏の仕事に携わるようになってからはそこそこ面識を持つようになったが。

そんな連中が一体どうして本家にやってきているのだろうか。しかも、親父直々に呼び出しをかけたときたものだから余計に意味が分からない。

「親父が召集を、ねえ」

何か引っかけかりを覚えながらも俺は歩く速度を緩めることなく今へと向かう。

もしかしたら先程杏子ちゃんが何か煮え切らないような表情を浮かべていたのと関係があるのかもしれないが、考えても一向に答えが出る気配はない。あれこれ考えているうちに居間の前に付いてしまったので一旦思考を中断し、三人に一言言ってから居間の襖を開く。

「あら形無さん、おかえりなさい」

「ただいま、母さん」

畳が敷かれた居間では、母さんが湯呑を傾けていた。室内には親父の姿はない。

「あれ、親父は？」

「楯無さんは所用で外に出ています。夕方までには戻ると思いますがよ」

相も変わらず微笑みを浮かべながらそう話す母さんは、俺を生んだとは思えないほどに若々しくて綺麗だ。この前ふと更識の部下が零していたことを聞いたが、なんと大学生から告白されたらしい。なんでも向こうは三人の子供を生んだ母親だとは微塵も思っていないなかったらしく、二十代前半のお嬢様だと勘違いしていたらしい。

まあ、分からなくもないがにしてもすごいな母さん。しかも笑顔で断つたらしいし。親父もその話を耳にして『俺の妻は大学生を惚れさせるくらい綺麗なんだぜワハハハハ！』てな感じで爆笑していたみたいだし。

「そっか。姫無たちはもう起きてる？」

「昨日から楽しみ過ぎて眠れなかったみたいで、まだ寝室で寝ていますよ」

寝ているのなら無理に起こしても悪いかな。そう思い、俺は姫無たちが目覚めるまで暫し母さんと談笑を楽しむことにした。積もる話があるというわけでもないが、たまにはこういうのもいいだろう。淹れてもらったお茶を飲みながら、そんなことをしみじみ思う。

「そう言えば形無さん」

「ん？」

「そろそろ千冬ちゃんと東ちゃんのどつちを婚約者にしてどちらを愛

人にするか決めたんですか？」

「げっふあッ!？」

飲んでいたお茶を盛大に吹き散らし、俺はゲホゲホと咳き込んで母さんの方を見る。

分かってる、分かってるよ。これは息子の恋愛事情をおちよくるとかそんなんじゃないやなくて、ただ純粹に聞いているだけだってことは。だが尚更タチが悪い。母さんの天然っぷりは留まるところを知らないのだ。

「か、母さん!? 何でいきなりそんな話持ち出すんだよ!」

「あらあら。形無さんももうすぐ結婚出来る年齢でしょう? 日本は一夫多妻制を認めていないのだから国籍を変えないならそうするか——」

「はいストローップ!! その言い分だと二人とくつつく事には何の疑問もないようんだけど母さん!!」

やばい話は何だかともんでもない方向へと突き進んでいるような気がしてならない。

「え? 形無さんはどちらかとしか肉体関係」

「アウトローツ!!」

結局姫無たちが起きてくるまでの数十分間、俺は母さんからの責め苦に耐えることとなった。



「兄さーん」

「お兄ちゃん、こっち……」

先行する我が妹たちに呼ばれ、俺は目の前に聳え立つショッピングモールへと入っていく。

姫無たちが起きてきたのは午前十時頃。予定とは若干ずれがあるが、そんなことは全く気にしない。何故なら目の前には嬉しそうに俺

の手を引く姫無と簪の姿があるからだ。ああ、やっぱり癒される。実年齢以上に精神年齢が離れているせいなのかもしれないが、目に入れても痛くないとは正にこのことなんじゃないだろうか。

今日の姫無は白のワンピース、簪は水色のワンピースを着ているので、その可憐さは通常の三割増しだ。

やって来たのは本家の近くに最近出来たショッピングモールで、雑貨やらの小物からブランドモノまで幅広く取り揃えた大型店舗だ。

俺も姫無たちも何か買いたいものがあるわけではない。どちらかと言えばこうして兄妹水入らずでショッピングを楽しみたいというほうが強いだろう。現に姫無も簪もショーケースの展示品などに興味を示すものの、その店の中には一歩も入っていない。こういうったシチュエーションが楽しいんだろう、姫無と簪は終始ご機嫌である。

「えへへ、兄さーん」

「どうした？」

「なんでもないーい」

さつきからこんな調子である。

俺の右手を握る姫無は笑顔でそう答え、次はあの店の見てみたいとぐいぐいと腕を引っ張る。

一方の簪も簪で左手をぎゅつと掴み、一向に話す気配が感じられない。いや、嬉しいんですけどね。

「あ、これ可愛い」

はたと立ち止まった店の前で、姫無が不意にそう呟いた。彼女の視線の先には店頭に並べられた紺色のブレスレット。何か貴重な石でも使っているのかお値段のほうは若干若者向けとは言い難いが、それでも確かに姫無に似合いそうだなあと内心で思った。

「欲しいのか？」

「……ううん、」

「遠慮するなよ。たまには俺からプレゼントでもさせてくれ」

値段が視界に入ったのか、姫無は要らないと言葉ではそう言う。が、そう言いつつも視線はチラチラとそのブレスレットの方へと注が

れていた。

遠慮なんてすることないのに、本当に姫無はいい子に育ってくれたものだ。欲を言えば、こういった時はもつと我儘でもいいんだけど。

「……………いいの？ 兄さん」

「おう。簪もどれがいい？ 一緒に買おう」

「……………私は隣の水色がいい……………」

「よし。すいませーん、これとこれ、サイズは……………問題なさそうだな」  
購入を決めた俺は奥から店員を呼び、ガラスのショーケースから紺と水色のブレスレットを取り出してもらう。即金で大丈夫ですか？  
という若い女性店員の声に大丈夫ですと答えて会計を済ませ、そのまま姫無たちに手渡す。

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます……………お兄ちゃん」

そう言つて笑顔を向けてくれる妹たちの姿は、はつきり言つて反則級に可愛かった。

いかんな、このままじゃ将来姫無たちがお嫁に行く時俺泣き寝入りしてしまいそうだ。いや、冗談なしで。



三人で買い物満喫し、家に帰つてくると既に陽が落ちかけていた。そろそろ秋も終わりとあつて流石に上着がないと肌寒さを感じる。因みに妹たちはしっかりワンピースの上から上着を着ているので問題ない。仲良く三人手を繋ぎながら帰路を辿っていくと、何やら家の方が騒がしいような気がする。

「なんだ……………」

妙な胸騒ぎを覚えた俺は、手は繋いだまま早足で家の門を潜る。

そこにはどういわけか本家にいる更識の人間の大半が集まっております、忙しなく走り回つていた。



「どういうことだ？　これは……」

訳が分からないままに姫無と簪を自室へと戻し、事情を聞こうと母さんが居るであろう居間の襖を勢いよく開いた――瞬  
間。俺の目に飛び込んできたのは。

「なっ……」

「……よお、元氣してたか形無」

母さんに包帯を巻いてもらっている、血塗れの親父の姿だった。

## #追憶 楯無継承（後）

「……よお、元気そうじゃねえか」

「親、父……？」

一瞬、俺は目の前の光景を信じることが出来なかった。

畳を赤く汚し、息も絶え絶えに身体中に赤い染みを作っている親父。そしてそれを懸命に治療する母さんと、周りを取り囲む更識の上位陣。

何も理解できないでいる俺に、大怪我を負っているであろう親父はそんなことなど曖気にも出さず、まるで何事もないかのように話しかけた。

「悪いな。ちつとばかし用が立て込んでお前に顔見せれてなかった」

「なっ……、」

どうして、今そんなことを言うんだ。

そんなことを言っている場合じゃないのは親父自身が一番よく分かっているだろう。見るからに出血が多い。一体どうなればこんな大怪我を負えるのか全く分からないが、このままの状態が続けば危険だということくらい素人にも理解できることだ。

なのに、何故そんな顔が出来るんだ。

「そんな事言ってる場合じゃねえだろ！ 一体何があつたんだよっ！！」

「……まあ、そんな大声出すなよ。別段何かあつたわけじゃねえ……、ちつとばかしツメを誤つたつてだけだ」

「それがちつとだつてのか……!?!」

いつの間にか俺はズカズカと室内に踏入り、親父の目の前にまで迫っていた。

間近で見ると更にその怪我の重さが判る。母さんを中心に、何人かの治療班らしき部下たちが全力でその処置にあたっているが一向にその出血は止まろうとはしない。これ以上は本当に危険だ。無意識のうちに歯を食縛る。こうなってしまったら仕方ない、俺の能力で血

流の流れを操作するしかない。

そう思い、俺は親父の身体で最も出血が酷い腹部へとその腕を伸ばす。

しかし。

「え……、」

伸ばしたその腕は、他でもない親父自身の手には握まれた。

「何、する気だ……」

「何って、俺のあのチカラで……！」

「ハッ……、子供が親にいらん心配をするんじゃないよ……」

無造作に俺の腕を振り払った親父は自嘲気味な笑みをその顔に浮かべ、口元に垂れる血を拭う。その動きでさえも緩慢で、俺はいてもたってもいらなくなる。

どうして母さんは何も言わないんだ。どうして四士の面々は苦渋に顔を歪めながらも、親父のことを止めようとしらないんだ。

「瑞穂……、もういい」

「いえ楯無さん。……せめて、処置くらいはさせてください」

額に包帯を巻いていた母さんにそう言って親父は立ち上がる。するが、母さんは静かに否定の意を示す。そんな母さんの表情は親父からは見えていないはずだが、一言『すまない』と告げてから再び浮かせていた腰を静かに下ろした。

それから数分後、ある程度の処置を終えた母さんは一度立ち上がり居間から出て行った。それに倣って他の連中も席を立ちその場を後にする。居間に残ったのは四士の四人に親父、そして俺だけ。

処置がある程度効いているのか最初よりは顔色が良くなった親父は、羽織を着てキセルを啜えている。

沈黙が、居間を包む。

俺はそんな沈黙を破ることができないでいた。聞きたいことなんて山ほどある。だが、聞けない。親父の全身から放たれる鬨気のようなものが、俺にその聞きたいことを言葉に出させる事を阻んでいた。

そんな俺の心情を察しているのか、親父の後ろに控えている四士も何も言わない。いや、きつと言えないんだろう。四人の表情から簡単

に察することができた。これは今までの案件とは次元が違う。下手を打てば最悪、死ぬかもしれない。

「……何でだ」

沈黙に包まれて何分経ったか分からなくなった頃、ようやく言葉が漏れた。

「何で、親父は何も俺に言わないんだよ」

「……………」

親父は俺の問いに答えない。視線を何度か左右に彷徨わせ、何か答えに困っているような風だ。

俺はそんな返答に困る親父に、続けざまに言葉をぶつける。

「……何で何も言わねえんだ！俺じゃ力不足だったのか!? 何とか

言えよ親父!!」

「若……、十六代目は……」

「竜真」

俺の言葉に何かを言いかけた竜真に、親父は釘を刺す。

再び、沈黙。

だが今回の沈黙はそう長くは続かなかつた。その沈黙を破つたのは、

「……今回の案件は、少々デカすぎる。お前を巻き込むわけにはいかん」

そう言う親父の眼はいつになく真剣なものだった。キセルを数度叩き、俺に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

そんな声で、俺は内心で納得した。どうやら、親父は俺を巻き込んで迷惑をかけたくなかつたらしい。考えてみれば、世間一般で言えば自分の息子を危険なことに巻き込んでもいいと思っている親なんてまず存在しないだろう。それは例え更識の十六代目であっても同じことであつた、そういうことだ。

でも、納得はできても腑には落ちない。

俺だつてもうかれこれ五年以上更識として、暗部に対抗するための対暗部組織の一員として多くの仕事を請け負ってきた。キャリアで言えば親父や大幹部の連中には及ばないまでも、他の連中には引けを

取らないつもりだ。デカイ案件を抱え込んでいるというのなら尚の事、俺もその戦場へと連れて行くべきだろう。親の心情とかいう私情は本来そこに介入してはならないのだから。

「親父」

「……………はあ」

俺の表情を見て何も伝えないということ是不可能だと察したのか、親父は瞼を伏せ一度溜息を零した。

「今回の標的は、京ヶ原だ」

「ツ!? どういうことだよ、四家同士で争ってるってのか!？」

親父の放った言葉に、俺は思わず声を荒げていた。

『四家』。

日本国内に無数に存在する暗部組織に対抗するための対暗部組織の筆頭家系の総称である。更識、氷見、杠、京ヶ原。この四つの家系は何百年も前から日本を影から支えてきた由緒ある家系だ。この四つの家系は、基本的に相互不干渉が守られている。その理由は四家間で結ばれた約定、『四家三ヶ条』に定められているからだ。

上不（あがらず）

侵不（おかさず）

絶不（たやさず）

上不とは、決して対暗部組織として表舞台には上がってはならない。  
い。

侵不とは、決して四家間で干渉し合ってはならない。

絶不とは、この四つの家系は決して絶やしてはならない。

今から凡そ二百年程前に定められた約定は、現在もその形を変えることなく伝えられている。

故に、俺は驚愕した。今親父が言ったのは、どう考えても『侵不』に抵触しているからだ。長い更識の歴史の中で、この掟が破られたことは未だ嘗てない。それを破ってまで遂行しなくてはならない案件とは一体なんだと言うのだ。そんな重傷を負ってまでしなくてはならないことなのか。

「……………理由は言えん。聞けば、お前も巻き込むことになってしまうか

らな」

「構わねえよッ！ 蚊帳の外にいるより、何倍もマシだ!!」

俺の言葉にしかし、親父は首を横に振る。

「ダメだ。この家にだって俺は治療しに戻ってきたんじゃない、ちつと忘れ物を取りに戻って来ただけなんだ」

「忘れ物……？」

そう疑問の声を上げたと同時に、居間の襖が静かに開いた。その先に立っていたのは何やら長い包を両手に抱えた母さんだった。その神妙な面持ちは、母さんの内心がどんな感情で埋め尽くされているのかを推し量るには俺には充分で、ついに、何も言えなくなった。

親父のことを間違いない最も心配しているのは母さんの筈だ。その母さんが自分の感情を必死に押し殺し、親父のことを支えようとしている。それを目の前で見せられてしまったのは、もう俺には口を出すことなど出来ない。

「楯無さん」

「瑞穂。済まないな」

「フフ……。楯無さんが無茶ばかりするのは、今に始まったことではないですから」

母さんから長い包みを受け取りながら、親父は僅かに笑う。笑みを向けられた母さんも、薄く笑う。

受け取った包みを取り外し、その中から現れたのは。

「鳳灯……」

鳳灯（ほうとう）。

更識の家に代々伝わる日本刀だ。初代更識の頃から受け継がれてきたこの鳳灯は時代の変わり目や更識家の危機を幾度も乗り越えてきた家宝。それを親父が持ち出すという意味が分からない程、俺は間抜けではない。

つまり、親父は決死の覚悟でこれからその戦場へ戻ると言うことだ。

一度鳳灯を鞘から抜き、その刀身を柄から剣先まで眺める。親父はそうして今一度鞘に納めると、今度こそその腰を上げた。親父が立ち

上がったことで背後に座っていた四士の面々も立ち上がり、呼応するように周囲の更識の人間も其々の武器を取り立ち上がる。

現代の暗部とは、主に情報戦が主流になりつつある。それはISが世に出てから一層顕著になりつつある。

しかし、四家同士がぶつかる場合、情報戦などはつきり言つて無意味だ。互に互のことは知り尽くしている。となればその勝敗を決するのは単純に武力、戦闘能力がそのまま勝敗を左右するのだ。

「行ってくる」

「お気を付けて……」

居間を出るところで立ち止まり、親父は母さんを抱き寄せる。まるで、これが今生の別れであるかのように二人は暫く身を寄せ合い、最後に口付けを交わす。

襖を開き、四士の面々が廊下へと出ていく中、親父は俺に背を向けたまま俺に声を掛けた。

「形無」

俺にはその時の親父の背中が、これまでにないくらい、大きく見えた。

「お前が俺の心配してくれるのは嬉しいがな。そんなのはいらん心配だ。俺は死なん」

「……………」

「此処に帰ってくる場所があるんだ。瑞穂やお前や姫無、簪に寂しい思いはさせせん。それにな、」

そして。

「お前（息子）の前なんだ。少しはカッコつけさせろ」

親父は振り向かず、戦場へと戻っていった。



親父が四士の四人を始めとする大勢の部下たちを連れ、この本家から出て行って一体どれほどの時間が経っただろうか。居間にある時計を見ても、親父達が出て行った時間が分からない為に推測でしかその時間を測ることができない。

居間に残された俺と、その正面で静かに湯呑を傾げる母さん。その所作からは、一切の迷いも見られなかった。

「……形無さん」

不意に、母さんが口を開く。先ほどの親父のように、いつになく真剣な表情で。

「楯無さんには言うな、と言われていましたが貴方も何も知らぬまま蚊帳の外というのも酷でしょう。現状、貴方がどんな立場にいるのかも知らねばなりません」

「俺の、立場……?」

「そうですね。先ずはこの争いの幾つもの原因について話しましょう」

そう言った母さんは持っていた湯呑を畳の上に置き。

「原因の一端は、貴方にあります」

「は?」

「いえ、こういう言い方をすると誤解を招くかもしれませんが。決して貴方が何かをしでかしたというわけではないのです」

俺には母さんの言っていることが上手く理解できないでいた。俺にこの争いの原因がある? 一体どこにそんなものがあつたというんだ、俺は更識の本懐を忘れたことなんてなかったし、それに準じて行動してきた。三ヶ条も破つたことなどなかった。

……待てよ。そこで俺は一旦考えを改める。取り方によっては、その因縁をつけてくることも可能な材料がある。たった一つだけ。

「……まさか、」

「ええ、形無さん。……貴方が世界初の男性IS操縦者として表舞台に上がってしまったことです。加えて言うならばISの産みの親である東ちゃんと強力なコネクションを持っていることも」



何だそれは。IS乗りとして表舞台には上がったかもしれないがそれは対暗部組織としてではなく、俺個人としてだ。そんな難癖のよなものをつけられる筋合いはこれっぽっちもない。それにどんな理由があろうとも先に三ヶ条破りをしたのは向こうの方だ。

「京ヶ原は、ある腫危機感を抱いているのかもしれない。これまで均衡を保ってきた四家の力量が、これを機に更識一強の時代になってしまうのではないかと」

「そんなものッ」

そんなもの、向こうの勝手な妄言でしかない。親父は俺や束を進んで利用しようなどとは考えていないし、先程のようにできることなら戦場に出したくないと考えている。

しかし、現実はその甘いことばかりも言っていない。事実、俺がこなす仕事というのも年を経る毎に増えている。

「ええ、そんなものは妄執に過ぎません。楯無さんも一度はそう言葉で諭そうとしましたが……」

「結局武力行使ってわけか……」

俺の言葉に、母さんは無言で頷く。

だが、未だに俺はあの親父があれほどの大怪我をするなど信じられなかった。親父は戦国時代であつたなら一人で一城を墮とせる実力者だ。そんなことが出来る人間はそれこそ四家の当主くらいしか考えられない。当主同士の戦いになったとしても、ああも一方的に傷を負うことはないだろう。それに四士も同じ戦場に立っていたのだ。彼らがそれを黙って見ている筈がない。

それにあの傷跡、あれは刀傷なんかじゃなかった。あれは、あれはまるで――。

「楯無さんのあの傷ですが、あれは部下の一人を守ろうとして負ったものです。――ISの、広範囲爆撃から」

「……ッ!!」

やはりか。

あの親父の怪我は、高火力の爆撃でも浴びなければそうはならないという程の火傷や裂傷でその身体を覆っていた。

「ISまで引つ張り出して……、そこまでするのかよ……!」

「ここまで来てしまったら、生半可な決着は望まないでしょう」

「だったら尚の事俺も出たほうが——!」

「なりません」

俺の提案を一瞬で切り捨てる母さん。どうしてだ、俺の超能力のことは母さんも既に知っている。戦力として十分な筈なのに。

「これは更識と京ヶ原だけの闘いではありません。次第によつては……」

それから先の言葉を、母さんは飲み込んだ。

「……それに、楯無さんから言われているの。『アイツが無茶しないように見張っててくれ』って」

自分は平気で無茶するくせに、俺にはそんなこと言うのかよ親父。

「……母さんは、親父のこと心配じゃないのか?」

「信じているもの」

そんな俺の質問に母さんは直ぐ様答え、続けて口にする。

「信じて夫の帰りを待つのが、妻の務めなんですよ」

とびきりの笑顔で、母さんは俺にそう言った。

敵わないな、と俺は思う。心配じゃないわけなのに、それでも信じて待つ。言葉にすれば簡単だが、それを実行できる人はそう多くない。それが出来る母さん、ああ、だからか。こうして母さんがこの家で待っていてくれるから、親父はああして無茶をすることができるのか。安心して暴れられるのか。

「ほんと、敵わないな……」

自嘲気味に笑いながら、俺はようやく腹を決めた。

俺も待つ。親父がああ鳳灯まで持ち出したのだ、終わらせて帰ってくるに決まっている。帰ってきたら一発殴ってやろう。俺や母さんを心配させたんだ、これくらいはいいだろう。そんなことを考えながら俺は時計に視線を移す。午後十時。空にはどんよりと厚い雲が覆っていた。



「雨か……」

居間を出たところの廊下から空を見上げる。昼間はあんなに天気  
がよかったというのに、夜になるにつれて雲行きが怪しくなってきた  
空はどうとう雨を降らした。時刻は既に日を跨いで一時間ほど。  
親父達が帰ってくる気配は一向にない。

「そんな所に居ては風邪を引いてしまいますよ」

ふとそんな声が掛けられる。振り向けば、母さんが肩掛けをもって  
そこに立っていた。

「大丈夫」

「そんなこと言わずに」

こうなった母さんは頑固なことを知っているので、俺はそれ以上は  
何も言わずにその肩掛けを受け取り肩に羽織る。縁側に腰掛けてい  
た俺の隣に母さんも腰を下ろし、同様に雨の降る空を見上げていた。

母さんのそんな横顔を見て、ふと思う。どうして母さんは親父に嫁  
いだのだろうか。更識の家ということである程度の危険があること  
は分かっていた筈なのに。

「……母さんはさ、どうして親父と結婚したんだ？」

「フフ、どうしたんですかいきなり」

優しい笑みを浮かべてそう聞き返す母さんに、俺はなんだか気恥ず  
かしくなってしまった。これまで二人の馴れ初めなんて聞いたこと  
なかったし、普段の親父や母さんはラブラブ度全開で聞きたくもなく  
なってしまうだろうと思っていたからだ。

「いや、なんとなく気になってさ」

「そうですね……、私がここに嫁いできたのは今の形無さんよりも若  
い頃でした」

昔を懐かしむような表情で、母さんは続ける。

「あの人に出会ったのは高校に上がってすぐのことでした。一浪して  
まだ高校三年生だったあの人、入学式の日いきなり告白してきた

んです」

まじか親父。一浪してたなんて知らなかったぞ。つうか入学式の日に告白って完全に初対面だろう。

「フフ。勿論初対面でした。でもどうしてかしら、不思議と私はこの時にああ、私はこの人と結婚するんだなあと思ってしまったんです」

「その時、親父はどんな風に告白したんだ？」

『「一目惚れだ！俺はお前に出会うために一浪したんだ」ですって。笑っっちゃうわよね」

ストレートすぎる。まああの親父が器用に恋愛してるところなんて全く想像できないが。

というかそんな出会い方だったのか。同じ高校だったなんて知らなかったな。

「それから程なくして楯無さんの浪人の理由を聞いたんだけど、仕事で大怪我して半年入院してたんですって」

あの人あんなだけ勉強は学年トップだったのよ、と母さんは面白そうに語る。しかし意外だな、親父あんな大雑把だったのに勉強できたのか。

などと考えていると、俺と母さんの会話をぶった切るように門の方から慌ただしい大勢の足音が聞こえてきた。こんな時間にうちにやって来る人間なんてのは今この現状では親父達しか存在しない。直ぐに母さんが立ち上がり、それに続いて俺も立ち上がり玄関へと急ぐ。

玄関へ行くと、そこには親父達を始めとした大勢の更識の人間の姿があった。

ホッ、と俺は胸を撫で下ろす。とりあえず無事に帰ってきてくれたことに安堵し、親父のもとへと歩いていく。

だがそこで、ん？ と俺は内心で首を傾げた。

無事で帰ってきた筈の更識の人間たちの顔色が何やら優れない。そして同時に気付く。ここを出て行くときの人間の数より今ここに居る人間の数が、微妙に少ないということに。それが一体何を示すの

か理解出来ない俺ではない、少なからず犠牲が出てしまったことは悔やまれるが、うちの人間はそういうところはきつちり区切りをつけられる人間の筈だ。

であるにも関わらず皆の顔色が暗い。

——ポタツ。

何かが垂れたのか、そんな音が聞こえてきた。

何せ外は雨が降っているのだ。皆かなり濡れている。玄関が水浸しになる音だろう、と安易に考えた俺だったが次に鼻についた匂いで気がついた。違う、これは雨の垂れる音ではない。雨はこんなにも鉄臭くはない。

「——まさか、」

その音の元へと視線を彷徨わせ、辿り着く。

そこには玄十に肩を預けている親父の姿。そして理解する。親父の右の袖から零れる大量の、血液。

——親父には、右腕が無かった。



竜真の話によると、あの親父の腕は京ヶ原当主との一騎打ちで失ったらしい。ただし、向こうも相応の深手を負ったらしいが。

結局、更識と京ヶ原との争いはきちんとした決着がつくことなく当主の離脱によって一時休戦のような形となった。今暫くは京ヶ原も過度に動くことはないだろう。少なくとも、当主が回復するまでは。

親父は出血が激しく危険な状態だったが今は何とか一命を取り留め、居間で眠っている。母さんは一睡もせずに親父の看病に付いている。もうかれこれ三日、部下が何度も母さんに休んだほうがいいと促しているが、一向に休もうとはしなかった。

俺は千冬や束には一言連絡を入れ、IS学園を休んでいる。理由を

聞かれたが、彼女たちには本当の理由は伝えていない。伝えてもどうしようもないことだと判っているからだ。

今回の争いで部下が十四人その命を絶やし、親父や四士の面々を含む八十一人が重軽傷を負った。被害は甚大、しかし向こうは待つてはくれないだろう。

何も更識の敵は京ヶ原だけではないのだ。今回の件を聞きつけた暗部はこれを機に一斉に動き出すだろう。特にうちが縄張りになっている関東近郊は活発になるに違いない。

親父は動けない。四士の面々も万全ではない。では、誰がそいつらを止める？

「……………」

あの時のように縁側に腰を下ろし、俺は自分に問うた。親父が十六代目を継いだのは二十の時だ、それを考えればまだ早いのかもしれない。

「形無さん」

「母さん……」

不意に背後から声を掛けられる。そこには居間から出てきたのだろう母さんが立っていた。何も食べていないのか、少し寝れているように見える。

「楯無さんが目を覚ましました。形無さんと二人きりで話したいそうですね」

「そっか、ありがと母さん」

言われ、俺は母さんと入れ替わるように居間へと足を踏み入れた。中には身体中に包帯を巻いた親父が床に入っているが、その身体は起こされている。

「来たか、そこに座れ」

「もう起き上がって大丈夫なのかよ」

「まあな」

促され、俺は親父の対面に座る。容態は安定しているのか、顔色は然程悪くなさそうだ。

「お前にも心配かけた、すまなかつたな」

一言、そう言って親父は軽く頭を下げる。

「気にするなよ。それにそういうのは母さんに言っただけでやってくれ」

「さっき言ったら一発はたかれた」

頬を抑えながら自嘲気味に笑う親父に釣られ、俺も少し口元を綻ばせる。暫し親父と他愛ない会話をしながら時間を過ごす。こんな風に二人きりで話すなんてことは中々なかったからか、会話が途切れることはなかった。

一頻り会話を終え、親父が一度会話を切る。

「さて、……お前を呼んだ本題はこれからだ」

親父の雰囲気が変わる。

それに合わせ、俺もこれまでのような態度をやめて真っ直ぐに親父の眼を見据える。

「お前……楯無を継ぐ気はあるか」

出てきた言葉は、俺の予想に反しないものだった。

「……………」

「俺はお前に継ぐ気がないなら無理にとは言わん。姫や簪だつていい。しかし俺も衰えた、今の俺では京ヶ原の当主を抑え込むのは難しいだろう、このザマだ」

無くなった右腕に視線を一度落とし、親父は続ける。

「いいか形無。楯無つてのは先祖代々受け継がれてきた名だ。これを継ぐつてことは今までのお前の名は暫し捨て去ることになる」

「……ああ、分かってる」

「なら今一度聞こう。……継ぐ気は、あるか」

その問いに対する答えは、もうとっくに出ていた。

もうこんな無力な思いをするなんてまっぴらだ。たとえ未熟だとしても、俺は誰かを守れるようにならなくちゃいけない。もう誰も悲しませてはいけない。

「俺は、楯無を継ぐよ」

「そうか……」

親父は少しの間目を伏せ、横に置いてあつた鳳灯を俺の前に差し出す。

「ならば今この時をもつて十六代目楯無より十七代目楯無へと家督及びその全権限を譲渡する。——あとは任せろぞ、楯無（．．）」

そしてこの時を以て、俺は十七代目楯無を継承した。

正式な任命式はまた後日親父の体調が回復してから執り行われるらしい。

楯無を継ぐ、ということはこれまで親父が背負ってきたものを全て背負つて立つということだ。当然生半可な覚悟では無理だろう。だが、やるしかない。まだ未熟であることなど百も承知、それでも親父はあの場で俺に楯無を継がせたのだ。ならば、親父の期待に応えるだけの成果は上げねばなるまい。

やらねばならない事はたくさんあるが、とりあえずは一度学園に戻らなくてはならない。何せ三日も学園を開けていたのだ、千冬たちにも聞かれるだろうし、仕事も溜まっているに違いない。そう考えながら、俺は居間を後にする。

後には満足気に笑う、親父の姿があつた。

——一週間後。

IS学園の職員室にあるとある名簿には、全校朝礼で話すあるクラスの名前が記載されていた。

『生徒会長挨拶 二年 更識楯無』



## #47 兄妹水入らずはその時点でフラグ

前回のあらすじ

実はまだトーナメント初日

「——とまあ、若干長くなっちゃったがこれが俺の楯無継承の理由だ」

生徒会室で俺が千冬たちに語って聞かせた内容は、一学生が受け入れるには少々重すぎるものだったようだ。織村も真耶も、そして千冬もその口を開こうとはしない。唯一事の内容を既に知っていた杏子ちゃんだけが、懐から取り出した新しい煙草に火を着けていた。いやおい、だからI S学園は全面禁煙だって言ってるじゃねえか。教師が率先して破ってどうすんだよ。

さて、どうしたもんだか。

この事を話せばこうなることくらいは判っていた。俺が相手にしなくてはならないのは最悪一国レベルの強大なものだ。如何に千冬と言えど、そう簡単に受け入れることなんて出来ないだろう。織村も腕を組んで何も言わず天井を仰ぎ、真耶も俯いてしまっただけの顔色を伺うことは出来ない。

まずったかなあ、この事はもつと先にとっておくべきだったか。

否、きつと何時話したところでこの結果には変わりない。そう思っていたからこそ、俺は約半年この事を言うのを避けていたのだ。

「……楯無」

うーむ、と俺が頭を悩ませていると、ポツリと千冬がそう呟いたのが聞こえた。

「更識」

「会長」

続いて織村と真耶も俺のことを呼ぶ。何だ、何かよく解らないが俺

の第六感が直ぐにここから逃げろと緊急警報を発令しているような気がする。何でだ、背中の冷や汗が止まらないんだが。

そして。

三つの拳が、一切の躊躇いもなく俺の元へと飛んできた。

「ぐおッ!？」

いきなりの事態に全く反応が出来なかった俺は見事にその一撃を喰らい、座っていた椅子から無様に転げ落ちる。以前にも述べたが、俺は常に反射を設定しているわけではない。必要最低限でしか使わないように心がけているからだ。ほら、あんまし超能力ばかりに頼りたくないんだよ。将来白モヤシのようにはなりたくないしな。

そんなことはさておき、だ。俺は目の前で尚も拳を振り上げんとする鬼たちに一言申さねばなるまい。即ち。

「痛つてーな！　いきなり三人して何すんだッ!!」

「何するんじゃないだろうッ！　私はその話は初耳だ!!　何だ、話す前に私に目で合図を送ってきたからつきり笄さんが病に倒れたことかと思つたが全然違うじゃないかッ!!」

捲し立てるようにして俺に言う千冬。そうなのだ、俺は千冬に本当のことは伝えていない。継承した後にその理由を聞かれたので咄嗟に親父が病気にかかったと嘘を吐いてしまっていた。罪悪感が全く無かつたと言えは嘘になるが、それでも本当のことを口には出来なかつたのだ。

だから今千冬が俺に怒るのも仕方ない。仕方ないのだが。

「何でお前らまで殴つた?」

「いや、何かムカついた」

「なんとなくそんな雰囲気なのかなって」

「真耶そんなキャラじゃねーだろ!!」

何だそんな雰囲気って。生徒会長を殴らないといけない雰囲気なんてあるのか。あれ、どうしてだろう。いつもは千冬の背後に見える般若が、今は真耶の後ろにも居るような気がする。

「……そんなに私たちのことが信用できないのか?」

不意に、千冬から声が漏れる。

今までの怒声は全くナリを潜め、今にも消え入りそうな声だった。「確かに私はお前より弱いかもしれない。しかし何もおんぶに抱っこというわけでもないだろう、どうしてお前が悩んでいる時、一言でも相談してくれなかったんだ……」

その言葉を聞いて、俺は少なからず後悔した。

この事を話してしまえば、きつと皆には重荷になると思った。だからこそ言わなかったのだし、その考えは千冬にこう言われても完全には変わらない。

だが、同時に俺は千冬たちを信用しきつていなかったのだということに気付かされた。負担をかけたくないという一心とこれは更識の問題であることを踏まえ言わなかったが、此処に居る生徒会の面々は今や身内と言つても何ら問題ないくらいに親しくなっている。

俺は、そんな千冬たちを裏切っていたのではないだろうか。

織村も真耶も、きつとさつきの一発はこれが理由だろう。どうして信用してくれない、仲間じゃないのか。仲間なら、助け合うのに理由なんていらないだろう。そう言いたかったに違いない。

「いや、俺はほんとにムカついただけだが」

「お前この場面でそんなこと言うんじゃないやねえよツ!!」

ものの見事にシリアスをぶち壊す織村にキレつつ、一度言葉を切つて千冬たちを見る。

「あー……、今まで言わなかったのは悪かった。別に千冬たちを信用してなかったわけじゃないんだ。ただお前らの重荷になると思つてな……」

千冬たちは何も言わず、俺に続きを促す。

「……これからは、もう少しお前らを頼る」

その言葉を聞いて納得がいったのか、ようやく千冬が笑みを浮かべた。真耶も先程までの雰囲気や霧散させ通常運転に戻ったようだが織村、お前はあとでちよつと来いよ。

「あの一、全く意味が判らなかつたんですけど」

俺たちがようやくいつもの雰囲気を取り戻した矢先、おずおずと手を挙げてそういったのはナタルだった。あ、確かにナタルにこれまで

の経緯なんかを話すのを忘れていた。彼女からしてみれば何が何やら解らなかつたことだろう。寧ろよくここまで口を挟まずに長い話を聞いていてくれたものだ。

「ああ、ナタルには少し難しい話だったな。俺が名前が変わった理由がそれだつてくらいに知っていてくれればいい」

「はあ」

尚も要領を得ないというように訝るナタルだが、生憎といつまでもこの話を引つ張るつもりはない。俺の過去話なんかは時間を割いてしまったが、重要なのは明日以降、そういつた京ヶ原関連の暗部組織からの介入があるのか否かという点である。学年別個人トーナメントは予定通り明日も行われる。決勝までが予定されている明日は、今日よりも学園に足を運ぶ人数は多くなることだろう。そうなる、生徒会としてはトーナメント以外の所にまで目を光らせていないといけなくなる。

三年生の俺や、千冬、織村はまだお互いでカバーし合うことも出来るが、二年生のアリーナには真耶、一年生のアリーナにはナタルだけしか居ない。たった一人では流石にアリーナ全体を警戒することは難しい。

「どう思う、杏子ちゃん」

「二応学園内では橘先生と呼べ。……だがまあ、今のところ向こうに目立った動きは無いようだ。私が捕縛した男の身体に直接訊いたから間違いない」

ふむ。動きがないとなれば、必要以上に警戒するのも好ましくない。そっち方面のことは杏子ちゃんに任せて自分たちはトーナメントに集中するのがいいだろう。もしもの場合は直ぐに連絡がいくようにしておけば問題もないだろうし。

第一、生徒会の面々が集中を乱して早々と敗退するとか冗談にしても笑えない。

「そうか。なら取り敢えずこの件は俺と橘先生に一任してくれ。お前らは明日のトーナメントに集中、間違つても変な所で負けるんじゃないぞ」

「ハッ、案外お前が一番先に負けるんじゃないか？」

「織村にだけは言われたくないよ。それにお前、準決勝で千冬に当たるんじゃないか」

三年生によるトーナメント。開会式の時に行われた抽選の結果、俺は千冬と織村のヤマとは反対になり、二人が準決勝でぶつかる事になった。織村の手前こんな軽口を叩いているが、この準決勝は相当ハードなものになると予想される。組み合わせを見てもそこまでは大した相手も見当たらないので、千冬と織村が激突するのは最早確定事項といつてもいい。とすると、二人が戦うのは実に半年振りくらいのことだ。

最後に戦ったのは生徒会長を決めるための真剣勝負。あの時は先に俺と戦っていたために若干疲れの色が見えた織村が千冬の猛攻の前に集中力を欠いて敗北したが、対等の条件でとなれば正直どうなるか俺にも想像し難い。それほどまでに両者の実力は拮抗しているのだ。

「言つとくが明日は俺が勝つぜ」

「ほお？ 言うようになったじゃないか。決勝は観覧席で見ることになるというのに」

早くも火花を散らせ始める二人を他所に、真耶はどこまでもマイペースにお茶を啜っていた。

「余裕そうだな」

「いえいえそんなことはないですよ？ まあ、会長たちみたいに強い人は二年生にはいませんけど」

さらつと言うあたり、これが真耶の本心なのだろう。生徒会の一員とあって、やはり彼女も相当な実力を有している。今の二年生には代表候補生に選出されている生徒はいないから、真耶が手こずるようなことはないだろう。となれば、一番不安なのが。

「ナタルだよなあ」

「あつ、なんですかその顔は！ 大丈夫ですよ優勝しますから!!」

俺にジト目を向けられたのが気に食わなかったのかそう言ってくるナタルだが、正直このメンバーの中では一番心もとない。確かにナ

タルは十三歳でこのIS学園への入学を許可された天才児でアメリカの代表候補生だが、彼女たちの学年にはナタルを含め六人の代表候補生が軒を連ねているのだ。その中には四月初旬に俺が闘ったドイツ代表候補生、クラリツサもいる。実際に闘った俺だから分かるが、一年生にしてあの實力ならば将来はかなり有望だ。あの時は俺が高電離気体（プラズマ）をぶっ放して勝ったが、今のナタルと比較すると互角と見てよさそうだ。

「まあ大丈夫だとは思うが、もし負けたら生徒会脱退な」

「うええッ!？」

口元を吊り上げて言う俺に、ナタルが顔を青くして詰め寄ってきた。

「ちよ、冗談ですよね?! いや負けるつもりなんてないですけどもしも万が一負けちゃっても、流石に脱退なんて——」

「他の生徒会員に負けるなら話は別だが、今の一年にはナタルしか役員はいないだろ?」

その言葉に更に顔を悪くするナタル。あ、この子表面上は強気だけど内心は不安なタイプだな。

しかし、こうは言ったが俺はなんとなくナタルは優勝するだろうと考えている。クラリツサとは良い勝負になりそうだが、他の代表候補生たちはまだ実戦経験が圧倒的に不足している。生徒会に入ってからほぼ毎日織村と手合わせしてきたナタルに太刀打ちできるのは、軍隊育ちのクラリツサくらいしかないだろう。組み合わせもこの二人が当たるのは決勝だ、俺も試合があるから観戦には行けないが、もし千冬に織村が負けたら応援にでも行かせてやろう。

「うし。なら一先ず今日はここまでにしよう。明日も早いことだな」

少し長く話すぎたようで、時刻は既に夜七時を回っていた。早くしないと食堂も閉まってしまう。必要最低限の連絡事項だけを皆に伝え、今日の生徒会は解散となった。



「あ、兄さんー!」

「おう姫無、悪いな遅くなった」

寮の自室に戻ると、中から部屋着に着替えた姫無がトコトコこちらにやって来た。

どうして姫無が此処に居るのかと言えば、名目上はインターンである。あくまで名目上は、だが。実際は姫無が帰りたくないと言ったので、一向に帰る気がなかったもので仕方なしに俺の部屋に泊まることになったのだ。その時は簪も泊まると言っていたが、生憎俺の部屋のベッドは一人用だ。流石に三人で一緒に寝ることは難しい。いや、出来るなら皆で寝たかったけど。更に簪が明日小学校で何やら大事な用事があるらしく渋々、本当に渋々といった表情でIS学園から家へと帰っていったのだった。

そんなわけで今夜は姫無と同じベッドで眠ることになる。

その旨を話したら千冬に何故か詰め寄られたが、一体何を心配することがあるというのだろうか。

先程食堂で夕食を済ませたらしい姫無は少し眠いのか目を擦っている。ふむ、確かに小学生はもう眠たくなってしまいう時間なのかもしれない。とはいってもまだ九時前だが。

「眠いか? そのベッド使っていないぞ」

「うにゆう……、まだお風呂入ってない」

風呂か。流石に今日は一日姫無もアリーナにいたから少なからず汗をかいているだろうしそのまま寝るのは嫌だろう。この時間ならまだ大浴場が開いていた筈だ。

「場所教えてやるから大浴場行くか?」

「うーん……、歩くのが面倒だからここのシャワーでいい……」

満腹になったことで襲い来る睡魔に必至で抗う姫無はもう外に出るのが面倒らしい。俺の制服の裾を握り、欠伸を噛み殺す様は非常に可愛い。

ふむ、確かにこの部屋から大浴場までは少し距離がある。面倒だというならこのシャワーを使うのが一番手っ取り早いだろう。

「そっか。じゃあ先に入っていいぞ。俺は先に夕飯食べるから」

姫無がシャワーを浴びている間にさっさと夕食を摂ってしまおう。食堂はもう閉まってしまったが幸い部屋の冷蔵庫には食材が多くある。そうだな、簡単にできる炒飯とかでいいだろう。などと俺が献立を脳内で考えていると。

「——兄さん、一緒に入ろ……？」

姫無が、核爆弾を投下した。

「……………」

裾を掴まれたまま上目遣いで見つめられると、どうしようもなく愛らしい。それは認めよう、何せうちの妹だからな。

だが、流石に一緒にシャワーを浴びるのはどうなんだ。兄妹とは言っても異性だ、しかももう姫無も小学四年生。これは倫理的にアウトなんじゃないだろうか。いや、姫無の裸を見たところで欲情なんて間違ってもしないのだけれども。

だが待て、ここで姫無の願いを断って拗ねられてしまうことのほうが問題なのではないか？　いかん、何か思考が全然定まらなくなってきた。

「兄さん？」

「あー……、」

これはどう対処するべきなんだろうか。普通に考えれば一人で入らせればいいに決まっているが、最近家族団欒の時間を取れていない。そうなれば、背中を流してやるくらいいいような気もしてくるのだ。

——というか俺が妹のシャワー一つでここまで悩ませられなければいけないんだ。もういいや、こういうのは考えたら負けだ。

「姫無、背中流してやるよ」

「ほんとっ？」

瞳を輝かせる姫無に手を引かれ、俺は脱衣所へと向かった。

——その時の姫無が実は全く眠くなかったということを、俺は



知らなかった。

「……………」

「兄さんどうしたの？ ほら早く」

無言で立ち尽くす俺の手を、姫無の小さな手が掴んでぐいぐいと引っ張る。

俺の部屋に設置されているシャワールームは言うまでもなく一人用だ。二人が同時に使用することは想定されていない。俺一人の使用でさえ若干の手狭さを感じていたのでそろそろ改修を頼もうかと考えていたくらいだ。まあ、何が言いたいのかというのだ。

俺と姫無との距離が近い。それはもう近すぎる。

先程までの眠たさなど何処かへと吹き飛ばしたらしい姫無は、鼻唄でも歌いだしそうな程に上機嫌で俺に背中を向ける。無論、バスタオルは二人共巻いている。

しかし姫無、色つぼくなつたな。お兄ちゃんとしてはお前に悪い虫が見つからないか心配だ。

「んー？ 大丈夫だよ兄さん」

どうやらつい声に出してしまっていたらしい。シャワーの音で聞き取りにくい筈なのにしっかりと聞き取ってくる辺り完全に睡魔は断ち切ったようだ。

透き通るような水色の髪を優しく洗いながら、俺は尋ねる。

「大丈夫って？」

「私同年代には興味ないの」

年上好きなのか姫無。それはそれで悪いおじさんに引っかからなにか心配なんだが。

俺がたまーに妹たちの動向を知るために送る更識のエージェント（楯無の職権乱用によるもの）からの定期報告にも何やら姫無に言い寄る男子がいるらしいし、そういう輩とは一度物理的にオハナシする必要があるかもしれない。うん、シスコンとかではなく、一人の兄として妹たちを心配するのは普通のことだ。

「同年代ねえ、姫無のことを好きな男の子が同じクラスにいるんだろ？」

「なんで知ってるの!? あ、また里虹さんに尾行でも頼んだんでしょ!! そういうことに里虹さんを使うからあんな風になっちゃうんだよ!!」

「おおぅ……！ 俺の精神に188のダメージ……」

更識のエージェント、もとい俺の従者である虹里からの情報は非常に正確で迅速なので俺としても重宝しているのだ。たまーに、本当にたまーに私的に使用することはあっても、普段は隠密としてよくやってくれている。

「まったくもう……」

口ではそういつつも、姫無はそのまま髪を洗い流されている。こういうった事をするのは久しぶりなので、何か思うところもあるのだろうか。

「兄さん」

「ん？ 何だ？」

トリートメントを手に馴染ませている俺に、姫無その態勢のまま話しかける。

「私も、IS学園に入る」

その言葉に、一体どれだけの思いが込められているのか俺には思い知ることは出来ない。だが、決して冗談で言っている訳ではないということだけは理解できた。故に、俺は妹にこう答える。

「……そうか。頑張れよ。更識楯無の妹じゃなく、更識姫無として」

足元に流れる水へと視線を落とし、それから優しくそう言った。

妹たちがIS学園に入学することになれば、少なからず俺が引き合に出されることもあるだろう。そんな比較は笑い飛ばすくらいに姫無や簪は優秀だが、ふとした瞬間、それが重荷になってしまうこともあるかもしれない。それは俺にはどうすることもできない。自分で乗り越えるしかないのだ。俺は姫無ならそれができると信じているし、俺なんか軽く越えるくらいの実力者になれると疑わない。

だから今言った言葉は単なる気休めくらいにしかならないのかも

しれない。

それでも、俺は兄として何処かで妹の役に立ちたいと思うのだ。

兄妹水入らず。

狭い空間で過ごす二人だが、不思議と苦痛には感じなかった。

互いに背中を流し合い、同じベッドで一夜を明かす。安心しきった姫無の寝顔は、天使も裸足で逃げ出す程に可愛らしいものだった。うっかり鼻血を出してしまいそうになったのはここだけの秘密だ。言っておくが、間違いなんて起きていないからな。

——そして翌日。

トーナメント二日目がやってきた。

## #48 女の勤はその時点でフラグ

前回のあらすじ

トーナメント一日目終了

多少のアクシデントに見舞われた学年別個人トーナメント初日もようやく終わり、二日目が始まる。

昨日同様晴天に恵まれた為かそれとも代表候補生同士の対戦があるからなのか、昨日よりも更に観戦客が多いように感じられる。今日の日程は午前中で二回戦から五回戦までが行われ、午後からこれまで三年生しか使用していなかった第一アリーナで各学年の準決勝から決勝までが行われる。最も観戦客が多くなるのがこの準決勝からなので、特別措置として第二、第三アリーナに設置されている大型のモニターでもその対戦の様子が放送される手筈となっている。

昨年もそうだったが、第一アリーナで観戦出来るのは外部から来た人間と三年生、一、二年生は其々のアリーナでの中継を観ることになるだろう。如何に収容人数が多い第一アリーナであっても、流石に学園全生徒と大勢の観客全てが収まるわけではないのだ。

さて、そんな訳で朝である。

昨日姫無と一緒に寝た俺は未だスヤスヤと寝息を立てている妹を起こさないように準備をし、書置きを残して部屋を後にした。向かう先は食堂である。今日の進行予定は先程も述べたが、毎年二日目の午前中が最もハードなのだ。何せ四時間弱で四試合もこなさなくてはならず、それが学年全てで行われるのだ。必然、試合開始の時間が早まるわけで。今日の第一試合の開始はなんと朝七時だ。よって食堂は五時から活動を開始しており、俺が食堂に入った時には既に試合を控えた多くの生徒たちが食事を摂っていた。

にしても皆早いな。まだ六時だぞ。

まだ完全には覚醒しきっていない身体を動かし、配膳台へと向かう。

「あ、会長」

「おはようございます、更識会長」

俺が食堂のおばさんから和食セットを貰って近場の席に座ろうとしたところで、その隣の席に座る少女二人から声を掛けられた。視線をそちらに向けてみれば、そこには一年生の代表候補生二人が思い思いの朝食を採っていた。

「おはようナタル、クラリツサ。何だお前ら仲良かったのか？」

金髪の少女ナターシャと黒髪眼帯の少女クラリツサ。彼女たちが席を同じくしていることに少々驚きつつ、俺はナタルに促されその四人席（二人とは対面になる形で）に腰を下ろした。

この二人が仲が良いという話は聞いたことがなかった。確かに二人は同じ代表候補生であるし、IS開発に於いては先進的な両国だ。情報交換は出来ないだろうが、それなりに国の利益となるかもしれない。まあ、そんな打算で近づいたのならここまで親しくはなっていないだろうが。

「だって私たち同じクラスですよ？」

「そうなのか？」

「はい。クラス代表はクラリツサがやっていますけど」

「ナタルは生徒会に入っているからな」

成程確かに仲は良好のようだ。俺と戦うまでのクラリツサだったら多分ここまで親しくはなれなかっただろう。それはきつとナタルにも言えることだが、しかしどうやら上手くやれているようで良かった。

俺はそんな感慨に浸りつつ、味噌汁を啜る。うん、美味しい。やっぱり日本人は味噌汁だな。なんかこう、ホッとする。

因みにナタルはパンにスープ、クラリツサはカロリーメイト的なものを食べていた。

「おいクラリツサ。お前は何食べてるんだ？」

「カロリーメイトです」

「その横にあるのは？」

「ウイダーです」

「味気ねえ……」

軍人てのは皆こうなのかと思わず思ってしまった。もつと他のモノも食べた方がいいと提言しているものの、彼女の食生活が変わる気配はない。

だがこれでも俺の言うことは聞いてくれるようになった。最初は俺のことを恨んでさえいるような態度だったのだから。あの決闘以降、俺への態度がかなり軟化したクラリツサには何度か生徒会の手伝いをして貰ったことがある。軍人だからなのか彼女が得意だからなのかは定かでないが、正直ナルの倍以上は仕事が出来る。いや、ナルだって機械系以外の仕事であれば十分以上の働きをしてくれるんだが、パソコンを使いこなせるクラリツサはその更に上をいく。クラリツサの仕事を手伝ってもらっている時の様子を見ていたが、真面目が服着て歩いているみたいなものだと思った。あの様子では今まで年頃の女の子らしい遊びなんてしてきていないのではないだろうか。当然、軍人にはそんなものは必要ないのかもしれない。が、俺は少しくらいそういった遊びに興じるのも悪くないと思っている。

敷かれたレールを忠実に守り、横道逸れずに人生を過ごしてきた人間を否定するつもりはない。

しかし、そんな大人が今の政府に大勢いる現状、政治はちっとも纏まらない。

俺の帰属問題を始めとしてIS関連のものだけでも十数件が宙ぶらりんのまま放置されている状態だ。

そんな大人たちを見ていると、杏子ちゃんみたいな大人のほうが好きに生きられていいような気がする。いや、あそこまで自由すぎるのも困りものだが。

そうだな、趣味の一つでも見つけるのがいいかもしれない。

趣味ってのはその人の視野を広げるし、同じ趣味を持つ者同士で会話を楽しむことも出来る。何かないだろうか、クラリツサがハマリそ

うな趣味は。

そこまで考えて、俺はふと思いついた。確か原作で彼女がハマっていた、というか愛好していたのは――。

「――つと、そろそろ行かないとやばいな」

考え事をしていたせいで今まで気づかなかったが、時計は既に六時半を指していた。クラリツサの趣味云々のことは一旦思考の隅に追いやり、俺は急いで朝食を平らげる。自分の試合開始時間まではまだ余裕があるが、一度生徒会室に向かわねばならない。それに部屋に戻って姫無も起こさなくてはいけない。今日は姫無の友達もこのIS学園にやってくる予定なのだ、その子が来るまでには姫無にも準備を終えてもらわなくては。

まだ食事の最中だったナタルとクラリツサに一言告げて俺は席を立ち、食器を片付けて足早に食堂を後にした。



午前六時五十七分。

学年別個人トーナメント二日目の第一試合開始まで残す所三分となったこの時間帯、俺は控え室で黒執事と呼ばれる所以の執事服に着替えを済ませ多くの生徒が集まるアリーナの横に備え付けられた準備室に居た。この部屋はこれから試合がある生徒たちがその待ち時間を潰す為の場所で、前の試合が終わるまではここで思い思いの時間を過ごすことになる。

第一試合で闘う二人は既にピットへ向かったのでこの場に姿はないが、二試合目以降の生徒たちの多くはこの部屋に姿があり、その中には俺の見知った女子生徒の姿もあった。最近あまり会っていないこともあってか、その姿を久しぶりに見た気がする。

一年の時とは違い、肩口でバツサリと切り揃えられた綺麗な金髪。この年頃の女子にしては高い身長と、恐らく本人に言えば鉄拳が飛ん

でくるであろう慎ましい胸。モデル並みのスタイルを持つ彼女はその容姿で学園内では周知の有名人だ。

俺はそんな彼女の元へと足を運んだ。そんな俺の存在に気づいたのか、彼女もこちらを向いて俺が来るのを待っていた。

「おはよう、リリイ」

「おはよう、楯無くん」

声を掛けた少女、リリイ＝スターライは俺の挨拶ににこやかに微笑んで応えた。

彼女とは一年、二年と同じクラスだったが今年はクラスが違った。その所為もあってか中々話す機会がなかったのだが、やはり去年までと同じように彼女はとても礼儀正しくそして清楚だった。

ん？ いや、リリイってこんなキャラじゃなかっただろうって声が飛んできそうだから一応言うが、彼女の本質は英国貴族のお嬢様だ。ISが世に当初は女尊男卑の風潮に若干流されているような気があったが、今となってはそんな面影は何処にもなくなっていた。

長く綺麗な髪を切ったのは何故かと以前聞いたところ、ISの操縦に邪魔だからだそうだ。見かけによらずアグレッシブなところもあるのがリリイという少女である。

「組み合わせ見た？」

「おう見たぜ」

「そう、ならわかってるわよね？ ……準決勝、当たるわよ」

そうなのだ。組み合わせで俺とリリイが順当に勝ち進んでいけば、準決勝で激突する。彼女との対戦はこれが初めてではないが、正直今までの相手とはレベルが違うだろう。

何せ彼女は昨年の暮れ、イギリスの第一期代表候補生に選出された優秀な操縦者だ。今IS学園内に居る三年生ではたった二人しかいない代表候補生の一人が彼女なのである。更にイギリスはいち早くIS開発に乗り出した国の一つであり、既に第一世代型の完成を目前としている。リリイに与えられた専用機はその最終形とでも言えればいいだろうか。まだ改良の余地はあるものの、ほぼ世界基準を上回るスペックを誇る。



そんな彼女との対戦だ。楽しみでない筈はない。

「だな。当たるのが今から楽しみだぜ」

「私に負けて会長を辞めることになるから、今のうちに辞表書いておいたほうがいいわよ?」

「言ってくれるぜ。そつちこそ大事な専用機大破されないように頑張れよ」

「ふふ、そんなことさせないから」

「期待してるぜ」

そんな会話を交わして、俺とリイは小さく晒った。こんな会話に意味などないことは互いに理解している。つまるところ、これは前哨戦みたいなものだ。お互い待ちきれないのだ、ぶつかり合うことを。

『これより学年別個人トーナメント第二日目を開始します。第一試合出場の選手はアリーナへと入場して下さい』

部屋の上部に取り付けられたスピーカーから放送部の声が流れる。午前七時、今この瞬間から二日目が始まった。午前中は人によっては四試合もこなさなくてはならないため今日は整備科の人間やピットは大忙しになることだろう。

さて、俺も次期に試合だ。それまで少し他の試合でも見ておこうか。そう考えた俺は試合までの間、中継用のモニタでひたすらに試合の様子を観ていた。



第一アリーナ観覧席上部。午前八時を回った今となつては観覧席は満席状態で、とてもではないが碌に身動きが取れないような状態だった。そんな観覧席の一角、生徒会長が用意した特等席に、二人の少女が座っていた。更識姫無と椎名紗季の両名である。

「もー姫え、何でこんな時に寝坊するのよ」

「ごめんって……、ほらでも兄さんの試合には間に合ったんだし」

「そういう問題じゃないんだけど」

今の会話にある通り、姫無は昨日兄の部屋に泊まったにも関わらず寝坊し紗季との集合時間に遅刻した。

因みに、兄である楯無は部屋を出る際にしっかりと一度姫無を起こした。が、兄の匂いに満たされた空間で彼女がシャキッと起きられるわけがなかった。その後毛布を抱いたまま二度寝をかまし、目が覚めた時には七時半を過ぎていた。

大慌てで身支度を整え、既に学園にやって来ていた紗季と合流し、今に至るといふ訳だ。

「それにしてもIS学園ってすごいね。こんなに人が集まるんだ」

「多分これから兄さんの試合があるからだと思うよ」

紗季の感嘆にも似た感想に、姫無は事も無げに答えた。

「え？ そうなの？」

「うん、昨日兄さんが言ってたけど企業や政府が兄さんのISを解析しようと必死なんだってさ」

「ISってあの執事服でしょ？ 篠ノ之博士特注の」

「そう。それに兄さんは世界初の男性操縦者だから、一般人からの注目度も高いのよ」

ISが世に出てから既に三年。一般人の人にとってみればISとは戦車や戦闘機よりも高い武力を持つ兵器というのが常識となりつつあるが、一方で一種のスポーツのような感覚でいる者も決して少なくはない。それも無理のないことで、戦争や紛争とは無縁と言っていい。ここ日本では、兵器というよりもスポーツという括りにしてしまったほうが馴染みがあり、また企業も売り込みやすいのだ。テレビで野球の中継を見るような感覚でこのアリーナにやってきている人間も多いただろう。そんな中で特に有名なのが男性でISに乗れる人間、更識楯無と織村一華の両名だ。しかも更識楯無はISを一気に世界に知らしめることになった『黒白事件』に関わったうちの一人。知名度がない、というほうが無理な話である。

「あ！ 出てきたよ。あれが姫のお兄さんかあ」

周囲から一際大きな歓声があがったかと思えば、アリーナには二人

の生徒の姿があった。一方はISを纏った女子生徒。一方は漆黒の執事服を纏った男子生徒。アリーナ上部に設置されている大型のモニタにはその顔がくつきりと映し出されている。

「うわ、かっこいいなあ……」

横から聞こえてきた声に、姫無は『でしよう?』とでも言うように微笑んだ。

だが同時に、紗季に余計なフラグが立たないか非常に心配にもなった。

『これより第八試合、更識楯無、沢泉の試合を行います』

アナウンスが流れ、その二人が無言で開始の合図を待つような態勢を取ると、しんとアリーナも静まり返る。なんとも言えない緊張感の中、姫無は兄の姿だけを捉えていた。昨日もその闘う姿は見ていたが、今日は一層輝いて見えた。

そして開始の合図の瞬間。

楯無と沢の二人は全く対照的な行動を取った。

楯無は後方へと飛び、沢は瞬時加速（イグニッション・ブースト）でその距離を殺しにかかる。

沢という少女が取った選択は、対楯無に於いて王道とも言える戦闘方法だった。この戦闘方法を生み出したのは副会長だが、楯無には基本的に物理的攻撃は通用しない。原理は不明だが、まるで反射されるかのように攻撃が跳ね返されてしまうのだ。故に、遠距離からの攻撃にあまり意味はない。

ならばいつそ近接戦に持ち込む、それが千冬が編み出した戦法だ。

楯無の『反射』は常時展開されているわけではない。ならばそれを展開する暇を与えないほどの猛攻を仕掛け、隙が出来た瞬間に攻撃を当てる。というのが基本方針であり、沢もこの考えには賛成だった。何も彼女の機体に遠距離用の武器が無い訳ではないが、それでもやはり近接選に持ち込んだほうが勝機はあると考えたのだ。

そしてそう来ることが予想できていた楯無は瞬時にその距離を取った。

だが別に楯無が近接戦を苦手に行っているという訳ではない。これ

は彼女の出方を伺っているに過ぎず、ある程度様子を見たら距離を詰めようと考えていたのだ。

それから何度か攻防が続き、様子見が終わったらしい楯無は一気にその距離を詰めた。

「うっわ早ー！」

「勝負を決めるつもりね」

楯無の言う通り、楯無はここで勝負を決めるつもりだった。不意にその距離を詰められた沢は驚愕するが流石に三年、一年や二年とはキャリアが違う。慌てつつも近接用のブレードで応戦しようとそれを振るう。しかし、その動作は楯無にすれなあまりにもものろい。

直後、衝撃はでも喰らったかのように沢は吹き飛びそのまま外壁に直撃。シールドエネルギーの大部分が削られてしまった。それでも何とか立ち上がろうと力を込めた瞬間、沢は気付く。目の前に楯無が居ることに。

「……はあく、圧倒的だったねえ楯無のお兄さん」

「当然、兄さんはこの学園で最強なんだから」

試合終了のブザーを聞いて脱力した紗季がそう零す。やはり噂で聞いていたのと実際に生で見るとは受ける印象が随分と違うのだろう。

彼女の瞳には羨望のようなモノが込められているように見えた。それを見て嬉しく思う楯無だが、そう思う半面、どうにも腑に落ちない部分があった。

明らかに、紗季が兄さんに憧れ以上のものを抱いているように見える。

(どうしてかしら、この嫌な予感)

楯無の目の前で、また一つフラグが建設されようとしていた。



トーナメントもこれといったアクシデントはなく順調に進み、午後の対戦が始まろうとしていた。

俺を含む生徒会のメンバーは全員が問題なく勝ち上がり、これから行われる準決勝に駒を進めた。さて、そんな訳でいよいよこれから準決勝が行われるわけだが、生憎俺は第二試合だ。

ということ、俺は控え室でこれから行われる第一試合の様子をモニタで観戦することにしよう。当の二人は既にピットに行っているんで、ここには俺とリリーの二人しか居ない。

「どちらが勝つと思う？」

横のベンチに腰掛けていたリリーからの問いかけに、俺は逡巡した後。

「……わからん」

真面目に考えたが、今日の二人は絶好調でこれまでの試合も圧勝。というのであればあとはもう力を推し量るものがない。

それに二人にも互いに負けたくはないだろう。真正銘のガチンコ勝負だ。

「私は千冬が勝つと思うけれど」

「どうして？」

「女の勘、というヤツかしら」

「女の勘ねえ」

女の勘てやつは、どういうわけかよく当たる。このリリーの勘が当たるか否か、とくと観させてもらおうじゃないか。モニタでは既に二人はアリーナに出てその対戦を今かと待っている。その表情を見る限り、互いにやる気満々のようだ。

暫しアナウンスが流れ、数秒の沈黙。

そして、生徒会同士の準決勝が始まった――。

## #49 準決勝はその時点でフラグ

前回のあらすじ

生徒会副会長対生徒会書記

学年別個人トーナメント二日目も終盤に差し掛かり、午後となった今からはいよいよ準決勝が開始される。

アリーナに立つは生徒会副会長にして日本代表候補生、織斑千冬。そして生徒会書記にして世界で二人目の男性操縦者、織村一華。この兩名の対戦は実に半年ぶりのことである。その時の対戦では千冬が勝利したが、今回もそうなるとは限らない。

モニターに映る二人の表情に硬さは全く見られず、開始の時を今かと待ち構えているようだった。

IS学園の二、三年生の生徒たちはこの二人の以前の闘いを知っている。生徒会長である更識楯無に負けはしたが、この二人も間違いなく化物だ。それだけに、この対戦カードの注目度は圧倒的に高い。生徒たちだけでなく、各企業や委員会の重鎮たちもこの試合から少しでもデータを得ようと画策しているようだった。

否応なく高まる周囲の期待。そんな中、当人たちはというと。

「こうしてるとあの時を思い出すな」

「半年前のことか」

「ああ、あの時は負けちまったが今回はそうはいかねえ。勝たせてもらうぜ」

「ふ、その威勢だけは昔と変わらないな」

周囲の声などまるで聞こえていないかのように言葉を秘匿回線でおぼろげに交わす。今や二人にはアリーナ一面の雑音など聞こえていなかった。

その瞳に映るのは目の前の倒すべき敵の姿のみ。極限まで高められた集中力は、既に二人を世界から孤立させるほど研ぎ澄まされていた。

『これよりトーナメント準決勝、織斑千冬対織村一華の試合を始めます』

管制塔から流れるアナウンスが響くと同時、観客たちの歓声が爆発する。耳を塞ぎたくなるような歓声も、やはり今の二人には聞こえていなかった。

織村は既に自身の専用機『蒼翼』を展開し上空に浮遊している。第一世代型とは思えないそのシャープなフォームはさながら中世の騎士を連想させた。

対する千冬も既にその身にはISを展開させていた。彼女が最初に纏ったIS『白騎士』のように純白ではなく、薄く桃色が混ざったような白。見た目はそこまで変化していないが、しかしその性能は白騎士を遥かに上回る。

天才、篠ノ之束の手によって造られた第一世代型IS。織斑千冬のためにだけに製造されたその専用機の名は『白桜』。

白と蒼。二機のISが対峙する中、アナウンスが試合開始を告げる。

瞬間、二人は全力を以てして相手に向かっていった。



織斑千冬が操る『白桜』は、その機体に二つの武器しか搭載していない。どの機体よりも近接戦に特化した彼女の機体には、それ以外の武装を必要としない。

そしてその手に握られる一振りの日本刀を模した近接ブレードが、彼女の使用する二つのうちの一つ、『枝下(しだれ)』。西洋剣のような両刃で大きなブレードではなく、片刃の日本刀のように細く、鋭いブ

レードだ。それを展開した千冬は、開始直後に瞬時加速（イグニッション・ブースト）を用いて上空からこちらに向かつてくる織村の元へと突っ込んだ。

一撃必殺。

そう呼ぶに相応しい一撃が織村へと放たれる。瞬時加速を使用した千冬の攻撃は織村の攻撃速度を上回り、そのまま上段から振り下ろされるブレードはヒットするかに思えた。

が、そう簡単に攻撃を通させてはくれないようだ。

「いきなり瞬時加速か。お前が間合いを取るなんて考えちゃいなかったが、こうも明からさまにくるとはなあ」

枝下の一撃を空中に浮遊したまま腕で防いだ織村は、眼前に迫る千冬に口元を吊り上げてそう言った。

「ふん、お前が相手なら手加減などできそうにないからな」

「そりゃ光栄だ」

罅迫り合いの状態を良しとしないのはどちらかといえば織村のほうが。なんとと言っても千冬のもう一本の武装がある。アレをこの至近距離で使用されては、いくら織村と言えども完全に防ぐことは不可能だ。よって、織村は防御に回っていない左手を千冬に翳した。

「ッ!!」

その動作を千冬が認識したと同時に、織村の翳した左手を覆うように生まれる光の束。

それはやがてバスケットボール大にまで膨れ上がり、そして、爆散した。

「ちっ！」

爆散した光が無数の矢となり、千冬へと襲いかかる。その粗方を後方への瞬時加速で躲し、それでも迫り来るものは枝下で叩き伏せた。時間に見れば僅か十数秒にも満たない攻防。しかし、観客たちの目を奪うには十分すぎるものだった。

「へえ、やっぱこんなじゃお前にダメージは与えられないか」

「ぬかせ。今の攻撃の目的は私のシールドエネルギーを削ることだろう」



一旦互いに間合いをとった二人は、そう会話を交えつつもその構えを解こうとはしない。

「まあな。あの程度の攻撃でお前を墮とせるなんて思っっちゃいねえよ」

織村はそう言い、僅かに口元を吊り上げる。

「……こっからが、俺の本気だ」

『蒼翼』を纏った織村の背後から、爆発的な光が膨らむ。その様子を観ていた観客たちは思わず目を伏せ、その視界の全てが白で塗り潰されていく。アリーナ全体にまで及んだその光は、やがて一点へと収束し、その輝きを残したまま一つの形を作り出した。

ようやく視界を取り戻した観客たちは、その余りの神々しさに言葉を失い目を見張る。

「……成程、出し惜しみは無しということか」

「そういうこつた。悪いが、こうなった俺には——」

その背中に三対六枚の純白の翼を現界させた織村は、まるで悪役のような笑みを浮かべて。

「——もう、お前の常識は通用しねえ」



「うお、アイツ短期決戦に持ち込むつもりだな」

控え室備え付けのテレビで準決勝の様子を観戦していた俺は、織村の背中に翼が出現したのを確認して織村が短時間での決着を狙っているのだと確信した。

あの翼は織村が纏うIS『蒼翼』のワン・オフ・アビリティだ。いや、正確にはそんなもんじゃないんだが、一応名義上はそういうことになっている。あの翼は織村が本気になると本人の意思に関係なく出現するもので、アイツもどうしてこの翼の形になるのかは分からな

いと言っていた。

いやいや、お前完全にアレ（・・・）に影響されてんじやねえか。俺が言えた義理じゃないが、完全にどっかの第二位だろお前。まあ、お互いにそのことについては言及しない方向で話はついているのでそれ以上の詮索をすることはないが。

「織村のあの翼、いつ見ても病氣的なまでに白いわね」

俺の横で同じように観戦していたリリイがあの翼を見て呆然と咳く。

確かにあの翼は白い。白すぎるのだ。千冬が初めて乗ったIS『白騎士』よりも白い、病氣的なまでに。それはつまり、この世には存在しないような色なのだ。可視することもままならない、純白をも越える白。いつそ半透明と言っても差支えのなさそうな、そんな翼が、織村の背中で優雅にはためく。

「あれが出たってことは、この試合はあと数分もすれば終わりそうだな」

「どうして？」

「あの翼、かなりエネルギーを食うんだ（という設定）。それにあれが出たとあっちゃ、千冬も全力で向かうしかない」

半年前、今二人が纏っている専用機はまだ完成していなかった。故に今の状態の二人が戦うのは初めてである。ハッキリ言ってそこいらの代表候補生など造作もなく圧倒できる二人の全力にこの第一アリーナが耐えきれるかそこはかとなく心配だが、その戦闘も直に終わるだろう。

どちらが最後に立っているかは、俺にもわからないが。



「ほう、もうそれを使うのか」

「お前相手に手加減して勝てるなんて思っちゃいねえからな」

身の丈に迫ろうかという翼を揺らし、織村はニヒルな笑みを浮かべた。当然、この翼は彼の能力『未元物質（ダークマター）』によって生成されたものである。名義上単一使用能力とされているが、実際はエネルギーなど減る筈はない。が、そこは楯無の黒執事同様擬似的なエネルギー残量が使用され、攻撃を受ければ本物と同じようにシールドエネルギーが削られ、0になれば戦闘不能の表示が出るよう束の手によって細工されている。

よって、織村にしてもこの能力仕様は諸刃の剣だ。エネルギーが無くなればその瞬間敗北が決まる。この能力使用時のエネルギー消費量は瞬時加速使用時の凡そ三倍。五分以上の戦闘は理論上不可能である。

だが、それは千冬にも同じことが言えた。

織村が全力で来る以上、彼女もまた全力で応戦せざるをえない。千冬の『白桜』に装備できる二本の武装、そのもう一つを展開する。左手に枝下を展開させたまま右手に呼び出したのは、枝下とは少々異なった近接型のブレードだった。日本刀を模しているものの、柄と呼ばれる部分は無く、刀身が異様に細い。フルンティングのような細さのソレは、しかし異様な空気を纏っていた。

「出やがったか……」

「出し惜しみは無し、とお前も言っただろう。全力で行くぞ」

ガチャツ、とそのブレードを握り、千冬は構える。

『松月』と名付けられたそのブレードは、後の零落白夜の骨子となる性能を備えていた。即ち、一撃必殺。比喩ではなく、命中さえすれば相手を否応なく戦闘不能に追い込むことが出来る最強の剣。

しかし、それ故に燃費の悪さも無視できない。これを展開した状態でその攻撃を行えるのは多く見積もっても二度あるかないか。それを外してしまえばほぼ織村の勝利が決まる。

右手に松月、左手に枝下を構えた千冬はフェイントを織り交ぜながら織村へとブレードを振るう。

しかし、その攻撃を簡単に受けるほど織村も甘くはない。

「甘いゼツ」

翼の上方二枚を射出、それが千冬へと襲いかかる。

翼の一枚を枝下で斬り伏せ、残る一枚を半身になることで躲した千冬は、右手に握る松月を織村へと向けた。

しかし。

「言つたろう。……甘いつてな！」

「ッ!？」

松月を振り上げんとした正にその瞬間、千冬の背後を大きな衝撃が襲った。その衝撃に耐え切れなかった千冬の機体は僅かに揺らぎ、松月を構えた右手も織村を狙うことが出来なくなる。そして、それは千冬にとって決定的なまでの隙となってしまった。

態勢を崩した所に織村の追撃が迫る。

「ナ……、メる、な!!」

追撃となる複数の翼は枝下で迎撃することに成功した。

織村も今の攻撃が千冬に通るとは考えていなかった。重要なのは、この後。つまり。

「こつちが本命だぜ」

瞬時加速を用いて背後に回り込んでいた織村の周囲には、光の矢が無数に生成されていた。この矢一つ一つが未元物質によって作り出された必殺の一撃を秘めたものであり、それは千冬もよく理解していた。

振り払った枝下での迎撃は間に合わない。最早千冬に残された手は一つ、一瞬千冬は逡巡したが、彼女は松月を光の矢に向かって横薙に振った。

直後、爆風が光の矢を薙ぎ払う。

松月に付加されているのは零落白夜の骨子となった『零閃』ともう一つ、『一匣』と呼ばれる広範囲用攻撃が存在した。通常の刀を振るっただけではまず有り得ない威力の衝撃波が放たれ、周囲の敵を一掃する。こちらは零閃と違いエネルギー消費がそこまで多くはないため、千冬も近接戦を避けようとする相手に使うことが多々あった。

今回の場合は迎撃と合わせ織村との距離を一旦開くために使用したが、結果的にその目論見は成功した。

背後に翼を現界させたままの織村は空中で静止し、松月を構える千冬をじっと見据えている。

「いいのかよ、それだって普通の武装よりエネルギー食うんだろ？」

「構わん。元よりエネルギー残量を気にして戦える程お前を見くびってはいないつもりだぞ」

「ハッ、言ってくれるね」

口元を吊り上げ、織村は再び翼を広げる。

「俺の未元物質には、お前の攻撃でさえ通用しないんだぜ」

「なら……、その目で確かめてみろッ!!」

ドウツ!! と千冬が織村目掛けて突っ込む。愚直なまでに真っ直ぐなその機体は、その距離を二十メートルとしたところで、更に加速した。

「二重瞬時加速（ダブル・イグニッションブースト）か!!」

「これで、決める!!」

何度目かの激突。

居合のように松月を振るう千冬と、未元物質によって世界における常識をも塗り替える織村。

試合開始のアナウンスから七分と十八秒、そして、轟音の後に勝敗は決した――。



準決勝第二試合、俺とリリイは既にアリーナに出て互いに向き合っていた。

俺はいつものように漆黒の執事服を着込み、リリイは青い専用機を展開させている。彼女の専用機はイギリスが生み出した第一世代型IS『ティアーズ』。後にティアーズ型としてその形を変えていくことになる機体の第一号だ。既にそのコンセプトは遠距離主体と決まっているのか、彼女の右腕には大層なスナイパーライフルが展開さ

れていた。

対し、俺は白の手袋の裾をキュツと引つ張る。少しだけ口角が上がっているのを自覚しつつ、俺は彼女に話しかける。

「こうして戦うのは一年ぶりくらいか？」

「ええ、正確には三三二八日ぶりよ」

正確に覚えすぎだろお前。何だ、あの時の負けをまだ根に持つてるのか？

「忘れないわ。あの敗戦が、私を英国代表候補生にまで押し上げたのだから」

昨年の四月。俺はリリイとクラス代表対抗戦で戦っている。その時の結果は俺が彼女を圧倒して勝利したが、それ以降リリイは俺への態度を軟化させて己を研鑽し続けてきた。それを見てきた俺は彼女がどれほど努力してきたのか知っているし、だからこそ、今回も勝ちを譲る気はない。

負けたら生徒会長を辞さなくてはならないとかそんな理由は正直どうでもいい。最近になって気づいたことだが、どうやら俺は負けず嫌いみたいだ。それを千冬に言った時は『は？ 今更？』と怪訝な顔をされたが。

つい先程終結した第一試合の興奮冷めやらぬ中、試合開始のアナウンスが響く。

「さて、行くぜ」

「来なさい、蜂の巣にしてあげるから」

黒と青。

二つの影は、瞬く間に激突した。

## #50 引継ぎはその時点でフラグ

前回のあらすじ

学年別個人トーナメント準決勝

「……………」

「そ、そんなに膨れるなよ……」

「別に、膨れてなんていないわよ」

目の前でリスのように頬を膨らませてプンスカしているリリイを必死で宥めつつ、俺はチラリと壁に掛けてある時計に目を向ける。そろそろ一年生の準決勝も終わる頃だろうか。確かクラリツサが第二試合だった筈だ。彼女が勝てば、ナタルとの決勝になる。

二年生のトーナメントでは真耶が順当に勝利を収めて決勝へ進出し、イタリアの生徒とこの後戦う予定である。

さて、今のリリイの現状を見て分かるとおおり、準決勝第二試合の対戦は俺が彼女を二分で沈めて勝利した。

対戦の内容は簡単に言ってしまうえば反射して攻撃という簡単な作業だ、うん。何でもリリイが構えていたあの大層なスナイパーライフルはイギリスのIS研究機関が一年の歳月を掛けて誠意製作した自信作であつたらしい。エネルギー充填率と連射性を特化させ、相手に攻撃の隙を与えずに仕留めるということが最大のウリであつたのだとか。

まあ、俺にはそんなの関係なかつたんだけどな。

連射されようがエネルギーの効率が良くなるうが、俺に物理的に攻撃できる手段を持っていないんじゃない。確かに彼女は昨年とは段違いに強くなっていたし、これまでの相手のように瞬殺とはいかなかった。流石はイギリスの代表候補といったところだろう。

だがしかし、俺の反射はそんなスナイパーライフル如きで破れる代

物ではない。我ながらなんてチートだ、などと思わないこともないのだが、これは俺がこの世界で生き残る為には絶対に必要な力だ。今更な感はあるが。

「……はあ、少しは貴方との差が縮まっていると思っただけだ」

「そんな落ち込むなよ。確かにお前は強かったぜ」

「開始二分弱で撃墜されれば自信失うわよ……」

見るからに落ち込んでしまったりイイ。彼女にもこの闘いにはそれなりに思うところがあつたのだ。まあ、二分で終わってしまったけど。

「こんなんじや本国の上層部になんて言われるか……」

「おいおい。俺相手に二分も持ったのはお前くらいだぜ?」

あくまでこのトーナメントでは、という言葉がつくが。

「あのね、代表候補生って色々と面倒なのよ? それこそ新武装が使い物にならないってことが分かって新しい武装開発に巻き込まれるくらいには」

イギリスの代表候補生は彼女の他にも後三人程いるらしいが、リイ以外はまだIS学園に入学していない。というのも、その年齢がまだ規定に達していないからなのだ。ナタルのような飛び抜けた天才児の場合は学園側も特例としてその入学を許可するが、こういった事例は基本的には発生しない。

皆適齢になってから試験を受け、それを突破してこの学園の門を潜るのだ。

イギリスに今存在する代表候補生たちはリイ以外はまだ十を過ぎたばかりの子供ばかりで、そういった経緯もあって彼女の負担も多くなるという訳だ。

「というかイギリスってそんな小さな頃からISの勉強させてんのか?」

「あら、知らなかったの? というか今やEUじゃそれがスタンダードよ」

まあ言われてみれば我が国日本でも小学校に上がってから徐々に



ISの知識を身につけるようなカリキュラムを組んでいたな。確かに姫無が簡単すぎてつまらないとかそんな事を言っていた気がする。

それでも流石に姫無と然程年の変わらない少女たちが国家代表の候補生にまでなっているとは。時代は変わっていくものなのか。

「イギリスじゃ小学校入学と同時に適性検査を受けるの。そこで良い結果が出れば、他の人間とは別のプログラムを組んで生活していくことになるわ」

「まるでエリート教育だな」

「その言い方はなんだか違う気もするけど。それにこの制度のおかげで多くの優秀な操縦者を育成できているのよ」

得意げに語るリリイ。そういえば以前初めて自分にも後輩が出来たと喜んでいたな。誰だったっけか、えーっと。

「そんなことより、私に勝ったのだから必ずこのトーナメント優勝してよね」

喉まで出かかっていた名前は、リリイのこの一言により何処かへと引っ込んでしまった。なんだろう、こういうもどかしい感覚つてのはやっぱり嫌だな。

「当然だ。決勝の相手にだって負けねえし、今後も誰にも負けるつもりはねえよ」

「ふふ。それでこそ私が認めた男ね」

俺の言葉を聞いて微笑んだリリイに内心少しドキツとしたのは秘密だ。千冬にバレたら多分折檻じゃ済まない。あと束にバレたらナニされるか分からない。必死で平静を装いつつ、俺はリリイに向かって笑みを返した。

モニタを見ればクラリツサが相手のシールドエネルギーを削りきり決着が着いた様子が映し出されている。さて、それじゃそろそろ俺も決勝に備えて準備に取り掛かるとするか。

リリイに一言告げて控え室を出た俺は、そのままの足でアリーナへと向かう。タイを直し、手袋の袖を軽く引っ張る。アリーナへと続く一本の通路を歩いていると、その先から大きな歓声が聞こえてきた。恐らくは相手がアリーナへと出てきたことによるものだろう。アイ

ツが出ると毎回怒号のような歓声が上がるので直ぐに分かる。さてと、それじゃあ行くとしますか。

テールをはためかせながら、俺はアリーナへと足を踏み出した。



「……うし、こんなもんでいいだろう」

「お疲れ様です、会長」

生徒会室で制服のブレザーを脱ぎ作業していた俺は、一段落ついたところで大きく息を吐いて額を拭いた。現在の生徒会室は今までのように整理整頓された空間ではなく、ダンボールや必要書類が至るところに無造作に置かれた無法地帯と化している。因みに俺以外の生徒会役員もこの作業には携わっているが、千冬は所用で学園長室へへ行っており、織村とナタルは書類確認の為職員室へ出ているので現在の生徒会室に居るのは俺と真耶の二人だけである。

小休止となった俺たちははかろうじてスペースのあった机の一角にカップとポットを取り出し、ひと時のティータイムを楽しむことに。「どうぞ」

「ありがとう。それと真耶、俺はもう会長じゃないぞ」

真耶が淹れてくれたお茶を含みながら、俺は彼女の言葉を訂正した。

そうなのだ、俺はもう、この学園の生徒会長ではない。

ああ、勘違いしないで欲しいのは、俺が決してこの学園内の生徒に敗れたから会長の座を明け渡した訳ではない。あ、いや確かに明け渡したつてのは間違いではないんだけども。

うん、何言ってるか分からないだろうが、とりあえず聞いてくれ。先ず、今の時期だけ言っておこう。

十月だ。

正確には、十月ももう終わろうかとしている。学園に植えられた

木々の多くはその葉を落とし、徐々に肌寒さを感じるようになる十月下旬。俺はつい先日、生徒会長の職務を全うし次の世代への引き継ぎを完了させた。このIS学園の生徒会任期は一年。俺が生徒会長になったのが今年の十月なので、丁度一年間が経過したことになる。

思えばあつという間の一年間だった。生徒会長となり学園祭を盛り上げ、様々なイベントを行ってここまで来た。それは大変なこともあつたけれど、それでも充実した一年間だったと言える。

新しく生徒会長となる真耶にはきつと不安もあることだろうが、彼女ならば俺以上の生徒会長になってくれるだろう。

「でも本当に私が会長で良かったんでしょうか」

「何言ってるんだ。真耶以外の適任者なんてこの学園にはいないと思つて俺は指名したんだぞ?」

「いえ、それは嬉しいんですけど……」

淹れたお茶を飲みながら、真耶は自身に会長が務まるのかどうかという不安を俺に話し始めた。

俺から言わせてもらえば現二年生で一番実力があるのは真耶だと確信しているし、これまで生徒会会計として充分以上に働いてくれた実績もあるので何も問題はないと思うのだが、真耶からしてみればまだどこか不安が払拭しきれていないらしい。

因みに、現時点では新生徒会の面々はまだ真耶しか決まつてしない。ナタルを何かの役職に指名しよう、ということは真耶とも話し合つてほぼ確定していることだが、如何せん残りの二席は空席のままである。

順当に行けばクラリッサあたりが生徒会に任命されることになるだろうが、まだ彼女には打診していないためどうなるか分からない。

というのも、彼女は現在クラス代表を務めているのだ。基本的に生徒会とクラス代表は兼任できないことになっているので、その点をどうにかしない限りクラリッサに話を持ちかけることができないのである。

「まあ真耶は心配症だからその気持ちは分からなくはないけどな、お前ならきつと大丈夫だよ」

これは俺の紛れもない本心からの言葉だ。たまに天然なところもあるが、生徒会の仕事はキツチリこなしてくれていたし、何より他人への気配りが人一倍できる子だ。真耶になら安心して今後の生徒会を任せることができる、そう思っていたのは俺だけではなかったらしく、千冬や織村も真耶を会長にすることに大いに賛成だった。

そう言つて頭を撫でてやる。最初は恥ずかしそうに俯いていた真耶だったが、やがてにつこりと微笑んだ。

「……ありがとうございます。私、頑張ってみます」

「おう、期待してるぜ」

そう返して、俺はカップに残ったお茶を一息に飲み干した。まだ作業が完全に終わったわけではないのだ。今日中に片付けなければならぬという訳でもないが、近日中に終わらせなくてはならないのもまた事実。こういったものはさつきと終わらせてしまったほうがいいに決まっている。

俺はカップを流しへと持っていく、再び作業へと取り掛かる。その様子を見ていた真耶も倣つて手を動かし始めた。

「会ちよ……更識先輩、このデータって何ですか？」

「ん？ ああ、それ去年の学園祭でやった出し物をまとめたものだな」

「そんなものありましたっけ？」

「ほら、俺のクラスがやったろ。ピーターパン」

「あー、ありましたね。でもなんでそれがディスクにやかれてるんですか？」

「……束が作った」

「……あー、」

どこか遠い目をした俺を見て全てを察したのか、真耶がそのディスクを持ったまま納得したように頷いた。これを作った時の束の興奮っぷりはそれはもうすごかった。『これは永久保存だよヒヤッハー!!』と血走った眼で訴えるウサギをアイアンクローで黙らせたのは未だに記憶に新しい。

「そーいやアイツ、今何してんだらうな」

ふとあのウサ耳少女のことを思い浮かべる。

東に最後に会ったのは今年の夏休みの最終週だった。何やら込み入った用事を抱え込んでいるらしかった彼女は俺の頬に（ムリヤリ）キスをして颯爽と国外へ高飛びしてしまったのだ。おい俺は何のためはこの学園に入学させられたんだと思わなくもなかったが、今でも週に一度は連絡がくるし完全な音信不通状態ではないので今のところは好きにさせている。卒業式には出席すると言っていたし、案外ひよっこり帰ってきたりするんじゃないだろうか。

「やつほーかーくん!! 愛妻が帰ってきたよー!!」  
「いきなり出てくんじゃねえよ」

本当に帰ってきた。しかも、窓から。

窓の外側に理屈は不明だが浮遊して朗らかに手を振ってくる東。

このまま放置してやろうとも考えたが、外からこの光景を他の生徒が見たら驚くことになってしまうだろうと思いつき、閉められていた窓を開く。

「やあやあただいま!! 妻が帰ってきたよ!!」

「妻じゃねえし今までどこ行ってたんだよ」

東が生徒会室に入ってきてから気づいたが、彼女が浮いていた理由は背中に装着されたロケットブースターのようなものみだ。原理は全くの不明だが、人体に影響が出ない範囲で空中浮遊を可能としている。

「ちよつと色々あってね、世界各地をグルグル回ってたんだよ」

背中の装置を外しながらそう答える。世界各地ね、コイツは自身が世界中の研究機関からその身を狙われているということを理解していないのだろうか。いや、理解していて尚そんなことをしていたのだろうか。……そうなんだろうなあ。昔から東は自身の興味あることに関してはどこまでも貪欲だ。反対に興味ないものにはほとんど無関心だけだ。

そんな彼女が何かしらの考えのもとたった一人で世界を放浪してきたということは、また何か良からぬ考え、否企みがあると見て間違

いなさそうだ。

「今度は何を考えてるんだ？」

「ふっふー、きつとかーくんやちーちゃんも驚くよー。何せ、世界初の試みだからね」

「世界初？」

その言葉を聞いた俺だけでなく、真耶も首を傾げた。

「うん。まだ束さんと他の国じゃあ技術力が違いすぎるから現実になるのはまだ数年先になるだろうけど、私のISが、ただの兵器じゃないうってことを証明できる機会がくるんだ」

ただでさえ豊富な胸を張る束の表情は、これまでにないくらい嬉しそうだった。

ISが、ただの兵器でないことの証明。

それは、きつと束にとってはどんな事よりも大切なものだ。

束が開発したインフィニット・ストラトスは、開発当初は宇宙空間での活動を想定して開発製作されたものだった。しかし、幸か不幸か彼女が作り出した機体は兵器としての側面を大きく評価されてその名を世界中に広めることとなってしまった。

束の世間に認められたいと一心に願う気持ちは、そういった形で叶えられてしまったのである。

確かにそれは悪いことではない。例えそういつた評価であっても、彼女が認められたという事実には違いないのだ。現に、篠ノ之束という若干十八歳の少女の名を知らない人間は恐らく世界に誰一人としていないだろう。

でも、違う。

彼女の願ったものは、認めて欲しかったものは、そういったものではなかったのだ。

故に、束は考えた。どうすれば、ISを兵器以外の側面で評価してもらえるだろうか。常人の思考など理解しようとも思わなかったこれまでの彼女とは大きく異なった考えだ。そして、彼女は思い至ってしまう。世界がこうなってしまう以上、兵器以外の側面のみ（・）を評価させることなんて不可能であるということ。

一度その甘さを知ってしまったらもう戻れない。

兵器としての異様な戦闘能力を知ってしまった各国の軍上層部たちは、決してISを兵器以外のことには利用しようとは思わないだろう。

そこで、彼女は考えの方向性を変えた。

兵器としての側面が評価されているのは現時点では各国の上層部のみである。一般人の多くは高性能な飛行パワードスーツというくらいにしか知識を持っていない。それこそ、IS学園に通う生徒たち以外には、その異常なまでの戦闘能力は知られていないのだ。

今なら、まだ世論を変えられる。

一般人の知識に兵器としての性能以外のものを植え付けてしまえば、軍も大つぴらには兵器として利用することは出来ない。

「東さんは考えたんだ。ISっていうのは、そんなおつかないものじゃないんだってことを世界中の人間に知らしめる方法を」

原理は古代ギリシャのあるものと同じである。

但し、それは現代ではかなり形を変えることになるが。

「おいおい東、何しでかそうってんだ？」

俺は何やら嫌な予感を感じつつ、実にいい笑顔を浮かべる東に問いかけた。

答えは、直ぐに返って来た。

「世界大会をやるんだよ。名前は、そうだなあ……モンド・グロツソ  
!!」

## #51 感傷はその時点でフラグ

前回のあらすじ

東さん発案モンド・グロツソ

「モンド・グロツソ?」

「そう! ISは兵器としてのみ使われるんじゃないってことを、人類の脳髓にまで叩き込むんだ!!」

嬉々として語る東の言葉を、俺は脳内で何度か反芻する。

モンド・グロツソ。

世界二十一の国が集まって行われるISでの世界大会。まさかこういう経緯で行われることになるとは考えていなかった。というか、東は態々そのためだけに世界中を回ってたってことなのか。自身が狙われているにも関わらず。相変わらず無茶をする奴だよ全く。

……ん? 待て。

その世界大会を開催させるってのは東の口ぶりから考えるに確定しているを見てよさそうなんだが、どうやって他国のお偉いさん方と交渉したんだ?

「おい、東……」

「なにかな、かーくん」

「お前、どうやって他の国に打診したんだ……?」

「……………(にっこおおお)」

俺の質問に対する回答は、ゾツとする程のあくどい笑みで返ってきた。

うん、これ以上詮索するのは止しておこう。何か知らない方がいい気がする。そもそも、東が交渉するのにまともな材料を用意する訳がない。彼女のこれまでの行動を少しでも知っている者からしてみれ



ば直ぐに分かることだ。

「……まあそれはいい。で？ モンド・グロッソとやらは、いつ開催するんだ？」

「うーん。さつきも言ったけどまだ他の国のISってシヨボイのぼっかりなんだよねー」

それは東の技術力がずば抜けているだけであって、決して他国の技術者たちが劣っているわけではないのだが。まだ世界的には第一世代型の完成が急がれている中、東は既に第二世代型と後に呼ばれることになる機体を九割がた完成させている。このまま行けば、恐らく数年後には第三世代型をも作り上げているだろう。

しかしこの差は、世界大会を行う上ではあまりいいものではない。勿論東自身が作り上げた機体が圧倒的な性能差を見せつけて勝つのも悪くはないが、それだと他国の機体が余りにも見劣りしてしまう。彼女が望むのは、あくまでも自身が生み出したISというモノが一般人に広く認められること。それも、兵器としての側面を評価されたものではなく。

ということ、少なくともIS先進国となりつつあるイギリスやドイツ、イタリア、アメリカなどが第一世代型となる機体を完成させてからのほうが開催は望ましい。

「ま、開催は早くても二年、あるいは三年先つてとこかな。その頃には、ある程度の骨子は出来上がっているはずだと思うから」

そう話す東は、まるで無邪気な子供のようには笑っていた。

しかし、そうなることを恐らくは出場することになるだろう千冬に頑張ってもらわないとな。日本代表として出ることになる彼女とは違って俺は観覧席から見ることになるだろうが、精一杯応援させてもらおう。真耶ももしかしたら選手に選抜されるかもしれないし、ナタルやクラリツサなんかも出場することになるだろう。

俺も出場したくないかと聞かれれば出たいのは山々だが、何せモンド・グロッソの部門別優勝者に与えられる称号は『ヴァルキリー』、つまり戦乙女だ。男の俺はそんな称号貰いたくはない。原作では千冬が第一回大会の総合優勝者として『ブリュンヒルデ』の称号を得てい

だが、このまま彼女が成長し力をつけていけばまず間違いなくそうなるだろう。現時点で千冬に勝てる女性は恐らく存在しない。

「その時はカーくんも出てもらうからね」

「え」

「あつたりまえだよー。なんせ黒執事でIS学園元生徒会長だよ？」

出ない理由が見つからないよね」

「いやいやちよつと待て。俺男だぞ？」

「だから？」

『何か問題でもあるのか？』とでも言いたげな束の表情を見て俺もどんな問題があるのか一瞬忘れそうになってしまった。いや、問題とかではなく男がそのモンド・グロツソに出ることはないと思うんだよ。大体男の操縦者なんて世界で二人しかいないわけだし、『ヴァルキリー』なんて称号は女性だけのものだろうに。

「いやいや、カーくん何言ってるの？ だいたいヴァルキリーって何？」

怪訝そうに眉を寄せる束の様子を見て、俺はここでようやく合点がいった。おそらく、まだ彼女の脳内ではそこまで詳細な構想はできていない。大まかにISを使った世界大会を行うということだけは完成しているのだろうが、各部門や優勝者への褒賞などは全く蚊帳の外だったのだろう。故に今のような反応が返って来たという訳だ。なら話が早い。この称号の名前を変える、もしくは男用の称号を作ってしまうればいいのだ。

そうすれば、俺も日本の代表に選出さえされれば臆面なくモンド・グロツソに参加することが出来る。

「いや、何でもない」

「変なのー、あ。でもそういう大会なら賞品とか用意しないといけな  
いかなあ」

そんなことを言いながら、束は楽しそうに室内でぐるぐると回る。その所為で室内に散乱していた資料は更に無造作に散らばっていくが、そんなこと彼女はお構いなしだった。

「そうだ！ 優勝者には束さん特製ISを」

「やめろ」

そんなことしたら軍事バランスが大きく傾いてしまう。幸か不幸か、束はその技術力に対して純粹すぎるくらいがある。彼女が特に深い考えなく突拍子のないことを言っただけの技量があるにも関わらず、彼女の内面は幼い少女のようでさえあるのだ。例えるなら、核爆弾の起爆スイッチを持った子供。その基盤は非常に不安定で、ふとしたことでバランスを失い崩壊してしまう。如何に世間で天才科学者だのと言われようと、彼女の本質は変わらない。寂しがり屋で純粹で、少しだけ頭のいい俺の大切な人間だ。

そんな彼女にこれ以上無意識とは言え負担をかけさせたくはないし、先程の言葉のようにそう簡単に勢力図を塗り替えられても困る。俺にそう言われ、考えを改めたらしい彼女は再び何か考えるような仕草を見せてウサ耳をピコピコと揺らす。

「うーん、じゃあ今のところはまだ保留かなあ」

「そうしてくれ」

一応は納得したのか、束の心血を注いで製作される新型ISが賞品として世に出ることはなくなった。

俺は束にお茶を出し、横に座らせた。床には未だに書類やら束の背負ってきたロケットブースターなどが転がっているが、もうここまで散らかってしまったら少し荒れようが変わらない。千冬や織村たちがそろそろ戻ってくるだろうし、全員が揃ったら再び作業再開ということにしよう。

内心で千冬たちに手伝わせることを確定させ、真耶に淹れてもらった二杯目のお茶を飲んでみると、生徒会室の扉が開いた。

「ん？ なんだ束。帰ってきてたのか」

「ちーちゃん！ おひさしおひさしー!!」

散乱した室内し入ってきたのは学園長室に呼び出しを受けていた千冬だった。なにやら小脇に大きめの封筒を抱えている。

千冬は室内に足を踏み入れた瞬間、どういう訳か出て行く前よりも酷い有様に眉を寄せるが、束の姿を確認した瞬間に得心したとばかりにはあ、と溜息を溢した。

「ひどい!! 東さんを見て溜息なんてあんまりだ!!」  
「とりあえず黙れ」

過剰なスキンシップをしようと飛びかかってきた東の蟀谷を掴みあげて動きを封じた千冬は、その状態を維持したまま話を続ける。

「随分と久しぶりだな。今までどこで何してたんだ」

「ふっふー。今はまだちーちゃんには内緒だよー」

「ああ、なんかISの世界大会を計画してるらしいぞ」

「ちよつとかーくん!? 何さらつとバラしてんの!?!」

「いや別に隠すことでもないだろ」

「こういうのはその場の雰囲気とかが大事なんだよ!! 今はまだちーちゃんの興味を引くところでしようがツ!!」

どうやら俺は空気を読めていなかったらしい。いや、完全に東が一人で言ってるだけなんだけれども。そもそも、千冬に隠す必要が無いだろうに。どうせすぐに彼女の耳にも届くことになるのだから、今話してしまおうが変わりはない筈だ。

が、しかし。

東にとつてはどうやらそうでもなかったらしい。

「ちーちゃんにはもう少し先にプレゼントと一緒に言いたかったのに!!」

「は? プレゼント?」

プレゼントとは一体何の事だろうか。補足すると、千冬の誕生日は別に近くない。となると、何かのお祝いごとでもあったのだろうか。

「ふっふーん。ちーちゃん、その小脇に抱えた書類はなんなのかなー?」

「うん? ああこれか。ついさつき学園長から渡されてな」

そう言っつてようやく束を開放した千冬は、その大きめの封筒の中身を取り出す。中から出てきたのは、数枚の紙切れ。紙面に細かく文字がびっしりと書き連ねられているそれを、千冬は俺たちにも見えるようにこちらに差し出した。

一枚目の書類の一番最初。つまりはこの書類の詳細を記した場所には、こう書かれていた。

『国家代表着任』。

この文字を見れば、直ぐにでも理解することができる。というか、それ以外の理解のしようがない。

「おめでとうございます織斑先輩」

「ああ、ありがとう真耶」

目を輝かせた真耶が千冬にそう言う。昨年代表候補性に選出された千冬だが、いよいよ持って日本の一角を担う存在になるのだ。まあ、実力からしてそうなるのは分かりきっていたことだけだ。

「そっか、ついに国家代表入りか」

「まあ正式な任命は学園を卒業してからだがな」

千冬の国家代表入りを、俺は素直に嬉しく思う。ISが束によって開発された当初から、彼女はその機体を纏って戦ってきたのだ。両親が蒸発したせいで一夏と二人きりでこれまで頑張ってきた努力がようやく報われた。代表となれば公務員よりも多大な給金が出るし、今後生活に困ることもなくなるだろう。

「それはそうと楯無。お前にも代表の話が来ていたんじゃないのか？」

「あー……、」

やばい、と俺は内心で狼狽しつつ後頭部を搔く。千冬の言う通り、俺にも国家代表任命の話が来ていたのは事実だ。つい一週間ほどのことである。

今の千冬のように学園長室に呼ばれ、日本政府の人間と学園長と俺の三人で話し合ったのはまだ記憶に新しい。向こう側としては当然俺がこの話を受けるものと考えていたらしいのだが、俺はこの話を断った。正直どうするかかなり迷ったのだが。

これまでならば世界に二人しか存在しないという男性のIS操縦者をどの国の所属にするか大いに多国間で揉めていたが、ここ最近ではそういった話は全くと言っていいほどに聞かなくなっていた。と言うのも、俺や千冬がIS学園に於いて少なくとも功績を残したから、らしい。人伝に聞いた話なので、どういった経緯で他国大人しくなったのかは定かでないが、摩擦が生まれにくいというならそれに越し

たことはない。

そんな訳で俺は日本の国家代表に任命されようと思えば割と気軽に代表入りすることが出来る、というところまでは来ていた。

しかし、今言ったように残念ながら俺は代表入りの話を断っていた。

その理由というのは、実は更識の家が関係している。

更識の家は代々関東を中心にした家で、基本的にその地から離れることはない。幾らか例外はあったものの、この考えは今も受け継がれている。国家代表となれば、日本全国どの地に配属されるのか分からない。今現在、国家代表が点在するのは東京、大阪、福岡、札幌の四ヶ所で、そこにはそれぞれIS研究に特化した研究機関が置かれている。

別に配属される場所がどうこう、という訳でもないのだが、俺が更識の十七代目当主である間、関東の地から出るのは遠慮したい。ただでさえ最近京ヶ原がまた暗躍しだしたようで慌ただしいというのに、俺がこの場から離れるわけにはいかないだろう。流石にまだ姫無や簪には荷が重すぎる。

少なくとも姫無たちが中学に上がるまでは、俺は更識の家を守らなくてはならない。まあ姫無や簪に楯無を継承させる気なんて俺には更々ないから、最悪親父に家督を投げ返してやろう。あのおっさんは片腕失ってるくせに元気だけは人一倍あるからな。隠居なんて名ばかりだ。未だに毎年姫無たちの運動会や授業参観に出席してるから。あ、いや違うか。授業参観は去年から出禁になったんだ。何をしたのかは俺は知らんが、母さんのあの貼り付けたような笑顔が怖かったことだけは覚えてる。

とまあ、そんな経緯で俺は代表にはなっていないんだが、この話はまだ千冬にはしていなかった。

話すタイミングを計っていた、と言えば聞こえはいいがその実嬉しそうに二人して代表になれたらいいなと言っていた千冬に罪悪感を感じて切り出せなかっただけだ。

近いうちに話さなくてはと思っていたが、まさかこのタイミングで

打ち明けることになるとは思いませんでした。

「俺は国家代表の話は断ったんだ」

「は？」

「いや、ちよつと訳ありでな。少なくとも一、二年は代表にはなれそうにない」

「……そうか、」

何か言いたいことはある筈だが、千冬はそれ以上言及してくることはなかった。

「しかし代表になる気が無いわけではないのだろう。ならば早いか遅いかの違いだ」

「いや政府がその時も俺を代表に選出してくれるかは分かんないけどな？」

なにやら話が逸れている気がしてならない。忘れてはいけなひのは、今はまだ新生徒会への引き継ぎ作業の途中であるということだ。千冬や束が来たことで忘れてしまいそうになっていたが、この散乱した生徒会室を綺麗に片付け終らなくては今日は解散することはできない。因みに今の時刻は夜八時半。早くしなくては寮の消灯時間になってしまう。真耶が頑張ってくれていたので半分ほどは終わっているが、それでもこのままのペースでは終わるのは十時を回ってしまうだろう。

いつまでもこうして話していても仕方ないので、俺は席を立ち、近くにあった書類を手に取り作業を再開した。

「千冬も手伝ってくれよ」

「無論だ。私も生徒会の一員だったのだからな」

「お前もだぞ束」

「え、私生徒会じゃないんだけど」

「ここで会ったが百年目だ」

逃げようとする束の襟を引っ掴み、足元の書類を拾わせる。よくよく考えてみれば束関連の書類も多大にあったので彼女も無関係とは言えないのだった。具体的には、整備科や機体関連の書類において。

束が担当していた整備科の学生たちは皆優秀で卒業後はいい技術

者になれるだろう。それもこれも東のおかげ……という訳ではない。というかコイツは授業放り出して世界各地を回ってやがったからな。ろくすっぽ授業なんてしなかった。それでも何とか俺が言い聞かせて渋々作らせた落書き程度の解説書がIS学園が用意した教科書よりも分かりやすいと言うんだから笑えない話だ。

そんな解説書を使って勉強してきた生徒たちは、水準以上の知識と技術を身に付けることが出来たのだ。まあ杏子ちゃんが陰ながら頑張ってたというのもあるが。一応あれで元研究者だから、彼女にも教鞭を取ってもらいなんとか今日まで授業として成り立たせることができたのだ。

まあそれを東に言ったところで『ふーん』としか返ってこないのだろうが。

そんなこともあつて、東にはせめてこの場ではしつかりと働いてもらおう。

決してこれまで振り回されたことに対する仕返しだとかは考えてない、考えてないぞ。大事なことだから二回言いました。

「よっすー。ってあれ東じゃん」

「うええ!! 篠ノ之先輩!」

東に片付けを手伝わせつつ、俺も手元の書類を整理していると再び生徒会室の扉が開いた。入ってきたのはさつきまで職員室で必要書類の確認をしに行っていた織村とナタルの二人である。どうしてこの二人が行動を共にしているのか、それは織村がナタルの指導係（半ば強制的）だからなのだが、彼女を一人にさせると近くの機械を全滅させてしまう恐れがあるからだ。ナタルの機械音痴は一向に快方に向かう気配はなく、寧ろ悪化の一途を辿っているようにさえ思える。

しかしながら、これまで生徒会見習いとして活動してきたナタルもこれからは正式な役員となる訳で、いつまでも機械音痴だからと言ってアナログな方法ばかりを取らせるわけにもいかない。役職まではまだ決まっていないが、どの役職に就くにせよ、パソコンを使う作業というのは必ずついて回る。他のメンバーにおんぶに抱っこでは流石にまずい。



ナタルもそのところは重々承知していたらしく、いつもは敬遠する機械をこの頃は積極的に触るようになり、結果的にその全ての機械は廃棄処分となった。

いやね、あれはもう機械音痴とかそういうレベルでは無いと思う。触った部分から分解なんてされないだろう普通。なんだ、ナタルはどこぞのサーカスの少年のように『分解』でも修得しているのか。

「お、ニセイいちかおっすー」

「おいその呼び方止めろ」

「えー？ だって名前丸かぶりじゃん」

「俺だって好きでこの名前になったわけじゃねえんだよツ!!」

束の言い分に憤慨する織村だが、この二人がここまで会話できるようになるとは正直予想外だった。この二人の付き合いはそろそろ十四年になるが、束から見た織村の第一印象は最低ラインを大きく下回るそれはもう酷いものだった。俺からしても当時の織村と積極的に話そうとは絶対に思わなかっただろうし、束の異常なまでの毛嫌いもあながち行き過ぎたものではなかった。

考えてみれば幼、小、中、高と全て同じなわけだが、この二人が和解したのはつい昨年のことだ。俺と織村がこうして話すようになってすぐのことである。これまでは織村を見ただけで聞いたことも無いような呪詛を吐き続けていた束が、どんな心境の変化からか専用機を作ってもいいと言ったのだ。これによって奇しくも一年時の織村の言葉が現実となった訳だが、織村は始めこの専用機の話を通っていた。アイツにも思うところはあったのだろう。自分には専用機なんて過ぎた代物だとか言って受け取ろうとしなかったのである。

本当に今までの態度からは考えられない変化だが、あの約束によるものだと俺は知っていたのでそこまで驚くことはしなかった。

が、束や千冬にはその変化は天地がひっくり返るほどの驚愕であつたらしい。

『何があつた!?!』

『ついにかーくんが実力行使でアイツをKAISHINさせたんだ

……』

『なんだあの爽やかな笑顔は。キモイを通り越して尚キモいな』

『道端に捨てられた煙草の吸殻以下のアイツにも三葉虫並の思考能力はあったんだね』

それはもう、ひでえ言われようだった。

それでも織村は自分で蒔いた種だと言い返すようなことはしなかったし、それが上辺だけのものではないと理解した千冬たちと打ち解けるのもそう長くはかからなかったので良かったんだが。

さて、それでアイツの専用機を用意した束だったのだが。因みに製作理由は完全なる気まぐれらしい。

受け取らないと言う織村に、束はなんと肉弾戦を持ちかけた。

いや、『は？ 何言ってるんだコイツ』と思うかもしれないが、どんな意図からか束は織村に一对一の勝負を仕掛け、自分が勝ったら専用機を使えと言いだしたのである。普通の高校生の女の子ならそんなこと絶対に言わないのだろうが、残念なことにはこの天災は思考回路が常人とはかけ離れているためになかなかブツ飛んだ提案を出すことがよくある。

女子に勝負を吹っ掛けられ、男としては引き下がるわけにはいかない。

織村はその勝負に乗った。乗って、六秒で地面に叩き伏せられた。

その時の試合の音源がたまたま残っていたので、再生してみることにしてしよう。たまたまだぞ、決して面白いからと千冬と協力して録音した訳じゃない。

『始め！』

『え、はや——』

『ツダアン!!』

『はいしゅーりょー』

『は!?! はあああ!?! な、ちよつと待て、何だよ今の動——』

ここまで六秒である。

織村はどうやら知らなかったらしい。天才的な頭脳を持つ束が、身体能力まで人外じみているということ。能力を使えば俺なら勝て

るが、素手での戦闘なら中々にいい試合ができるほどには東は強い。それこそ千冬とはほぼ互角と言っていていいくらいだ。

とまあ、そんな経緯から無理矢理専用機を進呈された織村だったが、なんだかんだ言って専用機は嬉しかったようで、定期的にメンテナンスを束に頼むくらいには思い入れもあるようだ。

「あ、またメンテ頼むな」

「だが断る」

……仲間も、良好な筈だ。



生徒会室での仕事を何とか終わらせ、俺は自室で風呂上がり炭酸飲料を堪能していた。

あの後どうにか引き継ぎ資料やら提出書類を纏めた元生徒会役員たちは新生徒会役員に引き継ぎを済ませ、これで明日からは正式に山田真耶新生徒会が始動することとなる。

一気飲みして空になったペットボトルをゴミ箱に投げ入れ、俺はベッドに倒れこんだ。ボフンツ、と言う擬音が聞こえるくらいにはふかかなベッドとも、あと半年もしないうちにお別れとなる。感傷的になるつもりはないが、生徒会長という肩書きがなくなったことで、達成感と虚無感が渦巻いているのもまた事実だ。

明日からもう、試合に負けても生徒会長の座を明け渡すことはない。

いや、負けるつもりなんてないけども。

卒業後の進路も皆決まり始め、俺もそろそろハッキリ決めないとなと思う。

いや、内心ではもうほぼ結論は出ている。

千冬や東にも迷惑かけてきたし、今度礼も兼ねてどこか出かけるか。

——いや、俺の財布が悲鳴を上げるだろうから何か別の方法を考えよう。

見慣れた部屋の天井を見つめながら、そんなことを考える。

IS学園二入学してからこれまでの二年半、駆け抜けるような忙しない日々を過ごしてきたが、残りの日々くらいは平穩に過ごしたいものだ。千冬や束と知り合い、親密になっていくうちに半ば諦めていたことだったが、それでも平穩を望まない人間なんてきつと束くらいのものだろうか。

十月もじき終わる。秋が終われば冬が来て、春が来れば俺はこの学園を卒業することになるだろう。

人間としての人生という長いスパンで見れば、高校の三年間なんて極一部にしか過ぎない。

しかし、多くの人間というのはこの高校の三年間を非常に鮮明に覚えていくものなのだ。それはきつと、

そこまで考えていた俺の思考は、突然のノックで中断された。

「かーくん」

ドアの向こうから聞こえてきたのは、束の声だった。

「束か、どうしたんだよこんな時間に」

時計の針は既に日を跨いでいる。普通の学生はこんな時間に男子の部屋の前にまでやってきたりはしない。

「ちよつとかーくんとお話したいなって。……入っても、いい?」

そんな彼女の声を聞いて、俺はベッドから起き上がりドアを開けた。ドアの先に居た束は既に寝るだけなのかうつすいネグリジェ姿で、はつきり言うどキツとした。

しかしそこは男、更識楯無。自称硬派（初耳）な俺は、そんなことを億尾にも出さずに束を部屋へと招き入れた。

「つて、おい?」

「なにかな」

「部屋に入るなり抱きつくくなよ」

「む、私じゃ不満なの?」

「いや、そういう問題でなく」

束の体はとても柔らかくて男としては非常に幸福なんだが、如何せん突飛すぎて反応が遅れてしまった。

束の細い腕は俺の背中へとがっちり回され、密着している所為で彼女の母性の象徴はすごいことになっている。それを直視しないように務めていた俺だったが、束はそれを許してはくれなかった。

「かーくん、私の目を見て欲しいな」

「馬鹿言え、んなことしたらお前の胸が視界に入っちゃうだろうが」

「それが目的なんだけど」

「おい——」

続きを言おうとして、俺の口は束の口によって塞がれた。早い話、キスされた。

彼女の舌が入ってくる。艶かしい音が、二人しかいない部屋で異様に大きく聞こえた気がした。

「——っふは」

十数秒間キスを続けた束は口を離し、俺を見つめる。

いつの間にか束の背中に回してしまっていた俺の腕を見て、男の本能というのは理性で抑えきれるものではないということを知る。

いやさ、しょうがないじゃん。束ってすげえスタイルいいんだ。言ったら殺されるだろうけど千冬よりも胸は大きいしウエストも細い。

必然抱き合う形となってしまうた俺と束。

「かーくん、ベッド大きいね」

「ん、まあそうだな」

「あれなら二人くらい余裕で寝れるよね」

「まあ、そうだな」

「なら、問題ないよね」

「……問題、ないな」

俺は束を抱きかかえ、ベッドに優しく下ろした。薄いネグリジエは彼女の体のラインをくつきりと浮かび上がらせ、蒸気して赤みをさした頬は俺の中の何かを掻き立てる。

「かーくんと私がこういうことするのも、別に問題ないよね」

腕を俺の方へと伸ばしてせがむ様に求めてくる束は、俺を見つめて  
こう言った。

「ちーちゃんは恋人。私は愛人なんだから」

## #52 卒業はその時点でフラグ

前回のあらすじ

生徒会引き継ぎ、そして事後

「ふあ……、」

セットした目覚ましのアラーム音で目を覚ました俺はベッドから起き上がり、閉め切ったカーテンを開いた。今日も良い天気だ。点けたテレビの気象番組から流れる情報によれば、今日は日中青空が広がるらしい。気温も平年並み、湿度も高くないとくれば、これほどまでに過ごしやすい気候はないだろう。

クローゼットから制服を引っ張り出して着替え、洗面台へと向かう。どういう訳か洗面台には歯ブラシが三本あるわけだが(内二本は女物)、そこには気にすることなく自分のものを取って歯を磨き、顔を洗う。一連のルーティーンのように決まりきった習慣行動を取ったあと、俺は部屋を出て食堂へと向かった。

食堂は基本的に朝六時には既に開いている為然程時間を気にするでもなく食堂へと入っていった俺はトレー片手に今日の朝食のメニューを考える。

うん、ここはやっぱり本日のおすすめのシールが貼られた和食セットBにしよう。基本的な白米に豆腐の味噌汁、鯖の塩焼きと浅漬けが付いたこのセットを受け渡し口で貰い、まだ人の少ない食堂の席の一つに腰を下ろした。大抵は千冬や最近学園に居る事の多かった東なんかと一緒に朝食を摂っていたんだが、如何せん今日は二人共忙しいらしく席を共にしていない。

斯く言う俺もこの後いろいろと準備があるので言うほどゆっくりもしてられないんだが。

鯖を口に含んで咀嚼しながらぼんやりと窓から外を眺める。

昇る太陽の日差しが暖かい。

こうしてこの場所からこうやって外を眺めるのも今日が最後なのかと思うと、何でもないうように思っていたはずの胸の奥がツンとして感慨深い。こうしてこの食堂で食事をするのも、歩き慣れた廊下を歩くのも、そしてこの制服を身に纏い、この学園の生徒として過ごすのも。

なにもかも、今日で最後だ。

「……はあ」

不思議と漏れる溜息。しかしこれはいつもの諦めや呆れといったマイナスのものではない。

どこか満たされたような、温かな気持ちから吐き出されたものだった。

「――卒業、か」

三月十日。

今日は、俺たちIS学園第一期生の卒業式だ。



午前八時、もろもろの用事を済ませた俺は、自身のクラスへとやって来た。

今日は卒業式しか行われないためん、九時までに教室に入ればよかったのだが、どういう訳か教室内には多くの生徒が集まっていた。

「あ、おはよー更識くん」

「おはよう、どうしたんだ皆。今日は授業は無いんだぞ？」

「そうなんだけどねー、この教室もこの机もこの椅子も。今日で最後なのかと思うと何か名残惜しくなっちゃって」

「クラスの大半の生徒が集まっているので何事かと思えば、なんてことはない。ただ皆、俺と同じように名残惜しくなってしまうただけのようだ。それぞれの三年間の土台となったのは間違いなくこの学園



で、最後の一年間の土台となったのは間違いなくこの教室だ。建設されてからまだ三年しか経っていない教室には目立った傷は見られないが、それでも俺たちが付けた細かな傷は目を凝らせば見えてくる。そんなものにまで感傷的になるのは非常にらしくないとは思うが。これも女子たちに囲まれて過ごしすぎてきたせいなのだろうか、若干涙腺が緩くなったというか、感性が女子側に引っぱられているような気がする。

「そういう更識くんだって、まだ八時だよ？」

「俺は元生徒会だから色々卒業式の準備に駆り出されててな」

「送られる側なの？」

「ま、生徒会なんてやってるとそういうもんなんだよ」

首を傾げる少女に対し、俺は苦笑を返す。

卒業式と言えども、俺や千冬はその準備に駆り出されていたりする。送られる側であるはずの俺たちがその式場の設置や進行の確認をするのはどうなんだ、と思わないこともないが真耶にお願いされてしまつては断ることなど出来る筈もない。更には杏子ちゃんにまでいいように使われているので、はつきり言って在校生よりも仕事すると思われる。

まあこうして真耶と一緒に仕事をするということもこの学園を卒業してしまえば無いだろうから、今のうちにと思つて自ら参加した節もあるので何とも言えないが。

「あ、そういえばさつき布仏さんが探してたよ？」

「里虹が？」

はて、一体何の用事だろうか。

別段俺としては思い当たる節はなく、彼女がどうして俺のことを探しているのか全く理由が分からない。今日は里虹の卒業式でもあるわけだから楽しめよとは先日言っておいたが、それが何か関係しているのだろうか。

などと俺が考えていると。

「あ、見つけましたよー！」

教室の扉を勢いよく開き、息を若干荒げた俺の専属従者、布仏里虹

がやって来た。

「おう里虹。どうしたんだそんな息荒げて」

「どうしたんだ、じゃありませんよ！ どうして部屋にいなかったんですか！」

「ずいっ、と詰め寄ってくる里虹。近い近い、そんなに詰め寄らないでくれ。」

「どうしてって、真耶たちに呼ばれて今日の準備を手伝ってたんだけど」

「なら何故私をお呼びにならなかったのですか！ その準備、私もお手伝い致しましたのに！」

「いやそこまで大掛かりなものじゃなかったからな」

シヨートカットの黒髪を揺らし、里虹は俺との距離を尚も縮めようと詰め寄ってくる。

こんな風に彼女が怒るとは思っていなかったので若干意外だったが、この反応もこれまでの彼女からすれば考えられないものだろう。俺の専属従者としてやってきたときから高校三年になるまで、彼女はずっと俺と一定の距離を置いて接してきた。それは俺の態度が悪かったということもあるし、彼女が従者という言葉の意味以上のものを成そうとしていたからでもある。

元々俺は従者なんてものには必要ないと親父には常々言っていた。

親父に長年従者として付き従っている偽（いつわ）さんはとても優秀な人だ。

ああいう人が付いてくれているれば、仕事もきつと迅速に進めることが出来るだろう。姫無専属の虚や簪専属の本音もまだ若いが二人共優秀な人材だ。今までも妹たちのサポートを上手くやってきてくれた。

当然、その二人の姉である里虹も優秀な人材であることは違いない。従者とはかくあるべしとこれまで十年以上布仏の家で育てられてきたのだ、俺への態度が当初やけに硬かったのも致し方ないのかもしれない。

しかし、俺はそんな彼女を一旦は遠ざけてしまった。

若気の至りだ、と簡単に片付けてしまうことは簡単だ。

だが、彼女のこれまでに積み重ねてきたものを壊してしまったのも事実。

当時まだ小学生だった里虹は、それ以降俺との接触を絶ってしまっただ。

そんな彼女と再会したのは、俺が楯無を継いだすぐ後のことだ。一度は断った従者の話だったが、当主に従者をつけるのは代々受け継がれてきた伝統であつたらしく、流石にそれに逆らう気はなかった。そして久方ぶりに再開した彼女は、これまでとは別人のようになってしまっていた。

その時のことを、きつと俺は一生忘れることはないだろう。

『形無、楯無を継ぐにあたって、今日から布仏の長女がお前の専属の従者になる』

『里虹のことだろ。一度は断った手前、なんか面目ないな』

『……こう言うのもなんだが、あの子は少し変わったようだ』

『は、変わった？』

『これは偽から聞いた話だが、どうも従者の話をお前が断ったのは自分の技量が至らなかつたからだと思ひ込んでいるらしい』

『え？』

『元々生真面目な子だ。そこで断ったお前を責めない辺りあの子らしいと言えはそうなんだろうが……。お前、そんなあの子とどう接する』

『………、俺は』

親父の問いかけに数秒考え、口にするのに更に数秒。

答えなんてものはそう簡単に用意できるものではないが、それでも答えを出さなくてはいけない時はある。

『俺は、あいつと従者だの主だのなんて関係になりたいわけじゃない。強いていうなら、パートナーであるべきだ』

『………そうか、』

そう言つて頷く親父の顔は、どこか納得したかのようなものだった。

さて。

そんな訳で俺のせいでああなつてしまったと言っても過言ではない彼女を、どうにかして元の笑顔を振りまく昔のように戻りたいと考えた俺は、真っ先に妹である虚や本音を頼った。

非常に情けない話だが、当時の俺に女心や従者としての考えというものは理解できなかった。となれば、彼女に最も近く同じ従者として過ごしている彼女たちに聞くのが最も効率がいいだろうと判断したので。

して、その反応はというと。

『すみません楯無さん。私には姉さんの気持ちはきつと理解できません』

『かたりんは一回おねーちゃんと話し合ったほうがいいよお』  
ということだった。

俺としても里虹と話さなくてはいけないとは思っていたが、如何せん彼女が俺のことを若干避けているようで中々顔を合わせる事ができないでいた。それでも当主としてはどうにかしなくてはと無理矢理時間を作り、座敷に俺と里虹だけで話す機会を設けた。

『……………』

『……………里虹。お前が俺の言ったことを気にしてるってんなら、まずは謝らなくちやいけない。すまなかった』

『……………』

『ただ、一つだけ言いたいのは、俺は決してお前が従者として認められないからあの時断つたんじやない』

『え……………』

眼を丸くして零す里虹に、俺はなんとも言えない気恥かしさを感じながらも告げた。

『あの時はだな、なんて言うか、異性の従者つてのが恥ずかしかったんだ。ほら、親父には偽さんで、姫無や簪には虚や本音だろう？』

今思えば、なんてくだらないことで彼女を傷つけてしまったのだろうと思う。些細な一言で、俺は彼女の数年間を奪ってしまったも同然なのだから。

どれだけの叱責や罵詈雑言も甘んじて受け入れる。そう覚悟して本心を吐露した俺だったが、飛んできたのは罵声や平手打ちではなく、彼女の堪えきれないと言ったような笑い声だった。

『ふふ、ふふふ……』

『あの、里虹……さん？』

『すみません、主。はしたなく笑ってしまつて……』

尚も笑いを抑えきれないのか、彼女は必死に手で口元を隠していた。

『怒ら、ないのか？』

『正直、怒るといふなら私は自分自身に怒っていました。主が私を従者に迎えないのはまだ自身が未熟だからと、一人前となればきつと従者としてくれるだろうと』

『いや、お前はもう一人前だよ』

『よしてください、私はまだまだ父に比べれば半人前もいいところです。……それにしても、そうですね。私は、勝手な思い違いをしていたのですね』

付き物が取れたような晴れやかな表情で、彼女はその言葉の意味を噛み締めるように反芻する。

『元はといえば俺の一言が原因だ。すまなかつた、これからよろしく頼む』

『はい……我が主』

こうして俺が彼女と打ち解けることができたのはIS学園に入学して暫く経つた頃だ。最初は中々敬語が抜けなかつたり（これはどうやら彼女が敬語で話すのが最も自然体だということ）で終ぞ直らなかつた（俺に対して何処か遠慮して一歩引いているような節があつたが、こうして卒業を目の前にした今となつては冗談を言い合えるくらいには打ち解けた。

というか、里虹の本来の性格が表に出てきたと言うべきか。

これは俺も知らなかつたが、どうやら彼女、かなりの世話焼き体質であるらしい。朝は必ず起こしにくるし、大体は朝食を用意している。まあ言つてしまえば、途轍もなく嫁スキルが高いのである。それ

は悪いことではない。悪いことではないが、度を超えると如何なものか。

まるで学園内に母親が居るような気分になる。いや、それが嫌だというわけではないが。

そういうわけでその世話焼き体質を今日も遺憾なく発揮した彼女は、部屋に起こしに行ったのに俺がいなかったことが気がかりでここまで走り回ってやってきたらしい。

「とにかく！ 何かあるごとに私を呼んでください！ 本来なら常に主の動向を見ていなくてはならないというのに……」

「いや俺からプライベートな時間を取らないでくれ」

「だからこれは最大限の譲歩です！」

ダメだ、これは嫁スキルの一つ、お説教モードが発動してしまっている。こうなった彼女はちよつとやさつとじや止まらない。

どうしたものか、と内心で考えていると。

「何だ、ここにいたのか」

教室内に、元生徒会副会長である織斑千冬が入ってきた。どうやら仕事を全て終わらせてやってきたらしい。制服の胸には、卒業生が付けるカーネ이션ジョンがあった。

「ほら、これは楯無の分だ。布仏の分は後からクラスで配布されるだろう」

そう言つて、俺にカーネ이션ジョンを模した造花を手渡す千冬。こうして俺や千冬だけがこれを今の段階で受け取っているのは、俺たち生徒会のメンバーが他の生徒たちよりも早く体育館に行くことになっているからだ。千冬や俺、そして織村にはそれぞれ割り当てられた役目があり、そういった生徒は体育館の横に設置された椅子に着席することになっている。

時計を確認すればもう八時三十分を回っていた。そろそろ体育館に向かわなくてはならない。

「里虹。とりあえず俺はもう行かないといけないから、この話は卒業式が終わってからな」

「む、仕方ありませんね」

すんなりと引き下がってくれた里虹に背を向けて、俺と千冬は教室を後にし、体育館へと向かった。



ざわざわと生徒たちの話し声が聞こえる体育館内。午前九時、三年生の入場を完了させたIS学園体育館では、卒業式がまさに始まるうとしていた。体育館内に設置されたパイプ椅子の前方に卒業生たちが腰を下ろし、一、二年生はその後方の席に着いている。来賓やIS関係の企業の重役たちも集まり、そして、式が始まる。

『只今より、第一回IS学園卒業式を執り行う』

そう壇上で話すのは、いつものだらしなく着崩した服装ではなく黒のスーツを纏った杏子ちゃんだ。

『卒業生一同、起立』

その声の後、俺たち元生徒会のメンバーも含めた三年生全員が立ち上がる。壇上に上がった学園長に一礼し、そのまま学園長の話が始まった。

「楯無」

「ん？」

学園長が壇上で話をしている最中、横に立つ千冬が小さな声で話し掛けてきた。視線は学園長に向けたままの状態であるため、一見しただけでは話しているとは思えない。

「今回は、しっかり考えてあるんだろうな」

何が、とは聞き返さない。

彼女の言葉が何を指しているのかは、火を見るよりも明らかだからだ。故に。

「おう、ばっちりだ」

自信満々に、俺は千冬に言っただけのけりだった。

学園長の話も終わり、来賓の紹介へと移る。それが終わると、真耶

が後ろで立ち上がるのが見えた。因みに現生徒会メンバーである彼女も体育館前方横に並べられたパイプ椅子に腰を下ろしている。ナタルなども同様である。

『送辞。生徒会会長、山田真耶』

「はい」

言われ、壇上へと上がった真耶は一度深呼吸をして、手に持っていた紙を広げた。

『送辞。本来であれば、私たち下級生は先輩方三年生の卒業を笑顔で送り出さなければいけないのでしよう——』

そう言って話を始めた彼女の表情は、既に涙腺崩壊と言った様子だった。お決まりの季節を取り入れた出だしもなにも無く、彼女は瞳を潤ませながら言葉を紡ぐ。

『しかし、私は先輩方がいなくなってしまうのが、寂しくて堪りません。それほどまでに、先輩方と過ごした学園での生活は、有意義なものだったからです』

壇上で静かに話す彼女の言葉を、俺は静かに聞いていた。きっと今、彼女の胸の内には生徒会で過ごした日々のことも浮かんでいるはずだ。それは俺も同様で、千冬とは逆隣に座る織村なんかは既に涙腺が崩壊して涙を零していた。いやそんなキャラじゃないだろ、とか突っ込みはしない。卒業式なんてのは、みんなそうなるものだと思うているからだ。

『今の私があるのは、三年生の先輩方がいてくれたからだと言っても過言ではありません。正直な気持ちを言えば、もつと先輩方とこのIS学園での生活を楽しみたかったです。ですが、そういうわけにもいきません。IS学園の卒業生とは、多くの企業の方や業界の方が必要とする存在です。きっとこれから、先輩方の活躍を耳にすることになるでしょう。私はそれを誇りに思いつつ、残りの一年間を先輩方に負けないくらい濃密に過ごしていきたいと思っています』

いつの間にか、そう話す彼女の頬には涙が伝っていた。それでもしっかりと話す辺りはこれまで生徒会で鍛えられてきた賜物だろうか。時折声が震える場面もあったが、彼女はしっかりと生徒会長とし



て送辞を話しきった。制服の袖で涙を拭いながら、彼女はパイプ椅子に座る。彼女の想いは、きつとこの場に在る全員に伝わったことだろう。それは卒業生たちや下級生の表情を見れば分かる。

さて、となればだ。

『答辞、卒業生代表。更識楯無』

俺も、真耶たちの想いに応えようじゃないか。壇上へと続く階段を上がり、マイクの前に立つ。確か一年生の入学式の時もこうして話したな、あの時とは雰囲気は全く違うが、それも悪くない。制服の懐からいつもの扇子を取り出し、それをパンツと勢いよく広げる。そこにはなんの捻りもなく『卒業』とだけ書かれていた。

『どうも、生徒会元会長。更識楯無だ、生憎と俺は台本通りの答辞なんて御免だから、この場で思ったことを話させてもらおう』

そう言つて予め千冬と話し合つて作成した答辞と書かれた紙を目の前で破く。視界の端では千冬がやれやれとでも言うように溜息を零しているのが見えたが、まあ後で謝れば許してくれるだろう。

『皆知つての通り、俺は世界初の男性IS操縦者としてこの学園に三年前入学した。今だからこそ言えるが、最初は女子ばかりの環境にうんざりしてたんだぜ？ いきなり放り込まれたのがこの学園で、男子はたった二人しかいないんだ。ノイローゼにならなかつただけマシンだ』

俺のそんな物言いに、周囲からはクスクスと笑いが起こる。ウケを狙つたわけではなかつたのだが、まあいいだろう。和やかな雰囲気では話を進めるのは楽しな。

『でも、これも今だからこそ言えるが、俺は高校生活の三年間をこのIS学園で過ごすことができ、本当に良かったと思う。これは紛れもない本心だ。生徒会長なんてものまでやってみたが、なかなかどうしてやりがいのある仕事だったよ。後任の山田は確り者だから、きつと来年度も安泰だ。俺たち卒業生は、何一つ心配することなく卒業していくことだろう。それは君たち後輩が、俺たちをこうして送り出してくれるからだ』

先程まで微かにあつた笑い声は、いつのまにか鼻を嚙る音や小さな

嗚咽に変わっていた。見れば生徒の大半が目元を抑えている。そして、意外なことに俺も目頭が熱くなるのを感じていた。やはり卒業式なんてのはこういうものなのかと勝手に思いつつ、しかしその口を止めることはしない。

『俺たちは今日、卒業する。社会に出れば、挫折しそうになる時、負けそうになる時があるだろう。社会の荒波つてのは残酷だ。でも、此処で過ごした三年間という経験値がある。それはきつと、これからの自分を支えていく上で大きなものになるだろう。————お世話になった先生方、同級生、後輩に、心からの感謝を述べさせてもらう』卒業生代表、更識楯無。そう言って、俺は一步下がってゆつくりと一礼した。

瞬間、爆発的に歓声上がる。大きな拍手に包まれながら、俺は壇上から自身の席へと戻る。

「全く、考えた私の身にもなってもらいたいものだ」

「悪いな。やっぱ、こういう時って思ったことを言うものだろう」

「ふん、まあ、悪くはなかったな」

こうして、恙無く進行していった卒業式は程なくして終了した。

そして——。



「楯無」

「おう千冬。とりあえず卒業おめでとう」

「なんだ改まって、ならこちらもだろう。卒業おめでとう」

卒業式が終わり、各クラスの戻った俺たちはそれぞれ思い思いの間を過ごしていた。この教室ともこれでお別れだ。友達と泣きながら写真を撮るもの、わいわいと打ち上げの話をするものなど様々だが、そんな中で俺と千冬は隅でそんな会話をしていた。

「お前とも、とりあえず今日で一旦お別れってことになるのかな」

「何を言うか。私とお前の縁なんて切っても切れるものではないだろう」

苦笑しながら千冬は言う。彼女は卒業後、国家代表として正式に着任することが決定している。この学園から国家代表となった生徒はたったの二人なので、彼女がどれだけ優秀だったのかは言うまでもないだろう。

そして俺はというと、卒業後は一度ISから離れるつもりだ。更識の家のこともあるし、なによりも――。

「やらなくちゃいけないことがあるからな」

「いいさ。きつとお前と私はまた会うことになる。その時にあの時あんなこと言わなければ、なんて思っても遅いぞ?」

「はは、それは嫌だな」

ニヤツと笑う彼女に、俺はそう返すしかなかった。

「……千冬」

「分かっている」

もう殆どの生徒が出て行った教室内で、彼女は精一杯の笑顔を作って俺へと言った。

「――さよならだ。次に会うときは、もっと良い女になっているぞ」

その笑顔を崩さないように、俺は一度だけ彼女を抱き寄せ、そしてキスをした。

三月十日。

更識楯無。

織斑千冬。

篠ノ之束。

これまでずっと同じ道を歩んできた三人はこの日初めて、別々の道に行くこととなる。

別れた道はしかし、そう遠くない未来で再び交わることになる。その時、ようやく物語は始まる。

## 六年後 原作開始

### #1 入学と再会

IS。

正式名称、インフイニット・ストラトス。

今となっては兵器としての側面を評価されて全世界に普及することとなった、天災科学者篠ノ之束が開発、製作したマルチフォームスーツである。元々は宇宙進出の為に彼女が製作したものだだったが、今や歴史の教科書にも記載されることとなった『黒白事件』によつて軍事兵器としてその名を轟かすことになってしまった。

彼女はそのことを是とはしなかったが、否定もしなかった。愛しい我が子が世界にどのような形であれ認められたという事実が、彼女には嬉しかったのだろう。

束が開発したISに乗る技能や知識を学ぶ為、日本はアラスカ条約に則つてIS学園という専門学校を設立した。この学園には世界各国の優秀な生徒が挙つて集まり、各々切磋琢磨しながら日々自らの腕を伸ばそうと努力している。

さて、そんな究極の軍事兵器としての側面を遺憾なく発揮することとなったISだが、この機体にはたった一つ、致命的な欠陥があった。それは、女性にしか反応しないということ。

この事実によりこれまでの男女の社会的パワーバランスは一変。女尊男卑なる風潮が徐々に広がりつつあった。そんな折だ。二人の男性IS操縦者が出現したのは、『黒執事』と『蒼翼』、この両名の出現により一気に女性優位へと傾きかけていた社会のパワーバランスは、ある程度のところまで食い留められることになった。女性にしか使えないと思われていたこの飛行パワースーツを二人の男性が使えるという事実は、各研究機関としては格好の実験材料だったことだろう。現に、もしも彼らに身を守るだけの力がなければ今頃何処かの研究所で瓶詰めにされていたかもしれない。

しかし、彼ら二人にはそれだけの力があつた。

それも人間の能力を大幅に上回る、人外にも値する力が。

そんな二人を力づくでモノにすることが不可能だと察した各国研究機関はIS学園に入学させることでとりあえずの争奪戦を回避し（実際は日本に丸投げしたわけだが）、彼らは高校生活の三年間を女子に囲まれた状態で過ごすことを余儀なくされたのだった。

さて、そんな彼らの三年間は、言葉では簡単に言い表せない程に濃密なものだった。

それはこれまでももある程度述べてきたが、全ての内容に比べればきつと半分にも満たないだろう。

更識楯無。

織斑千冬。

篠ノ之束。

何時でも何処でも行動を共にし、関わり続けた三人は、三年前を境に別々の道を辿ることとなった。それは彼らの性格や能力、事情などを鑑みれば当然とも言えた。IS学園卒業というのを一つの区切りとして、千冬は日本の国家代表に正式に任命。束は各国からの情報開示を求める声を嫌い日本を出て雲隠れ。そして更識楯無は――

一度別れた道はしかし、幾年を経て再び交わることとなる。

彼らの卒業から六年後。

物語は、再度動き出す。



(き、気まずい……)

身を縮こませた状態で席に付く俺こと織斑一夏は、全身に突き刺さるような視線を背後から一心に受けるこの状況に心底滅入っていた。座席が一番前ということも拍車をかけ、後ろに振り返るということから躊躇われる。はあ、と溜息を溢さずにはいられない。千冬姉にはこの癖をやめるとよく注意されるけれど、これは最早呼吸と同じように極々自然に行ってしまうものなのだ。初めはとある人がよく溜息を

吐いているのを見て真似ていただけだったのだが、いつの間にもやらずっかり身体にこの癖が刻み込まれてしまっていた。

「どうしてこうなったんだか……」

片肘を机に付いてぼんやりと天井を見上げる。本当、どうしてこんなことになってしまったんだか。思い返されるのは、つい一ヶ月前の事だ。

俺はまだ受験生で、その日は丁度受験日だった。併願で二校受験することになっている俺は、たまたまその二校が同じ日に同じ会場で試験を行うというのを聞いて手間が省けると喜んだものだ。受ける高校は、IS学園と藍越学園。口にしてみれば一文字しか違わないが、中身は全くの別物、大間違いだ。藍越学園は私立で学費が安く、就職口を広く設けているのが特徴の一般的な普通科高校。一方のIS学園はISの操縦技術やその他もろもろを学ぶ国立専門学校だ。

俺としては受かればいいかなあ、くらいの軽い気持ちでIS学園を受験し、本命として藍越学園を受験するつもりだった。今だからIS学園も男子に受験資格を与えているが、つい数年前までは女子にしかその受験資格は与えられていなかったのだ。というのも、99、9%の場合、ISなるものは女性にしか扱えないから。俺がこうして此処IS学園に入学する切っ掛けとなった試験当日までは、世界に男性のIS操縦者はたった二人しか存在していなかった。

まあIS学園に来たくなかったわけじゃない。男ならロボのようなゴツイ機体に乗って空を駆け回るといえるのは誰もが一度は抱く憧れであり、当然俺もその例には漏れない。

しかしまさか自分がISを動かしてしまつてこんな女子しか居ない空間に居ることになるとは、当時の俺は全く予想していなかった。人生何が起こるか分からないものである。

「一夏」

「ん、ああ箒」

つらつらと考え事をしていると、腰辺りまで伸ばされた髪をポニーテールにしている少女に声を掛けられた。その見知った顔は、俺をなにやら気まずそうに見つめている。

「まさかお前までISを動かしてしまうとはな、」

少女、篠ノ之箒はあの天才科学者、篠ノ之東の妹だ。だからといってISの知識を膨大に知っているわけではないが、それでも恐らくこの学園の三年よりは詳しい知識を持っているだろう。比べる相手があの東さんだから箒がすごくないように見えるが、実際彼女も非常に優秀な技術者の卵だ。何せその天才と言われる姉にISの何たるかを教わってきているのだから。

箒とは幼い頃からよく遊んだり道場で剣道を学んだりしてきた。もうどのくらい前からこうして関わってきたのか覚えていない。ただ確実に言えるのは、千冬姉と東さん、そして俺の師匠が関わっていたことはまず間違いないだろう。

「まあこうなったことは気にしたってしようがない。前向きに生きるさ」

「随分とポジティブだな」

「師匠ならきつとそう言うぜ」

「楯無さんか、」

俺の師匠、更識楯無。世界初の男性IS操縦者にしてこのIS学園の第一期卒業生。そしてこれはつい最近知ったことだが、初代生徒会の会長だったらしい。

その当時のことを師匠は中々話してはくれないけれど、お酒が入っている時たまに聞かせてくれるときがあった。曰く、当時の生徒会は化物の集まりで、全員漏れ無く世界レベルの人たちだったらしい。そんなすごいメンバーたちを束ねていたのが師匠だ。他のメンバーが一体誰なのかは頑なに教えてはくれなかったけれど、話をしているときの師匠はとても楽しそうにしていたから、きつと素敵な役員たちだったのだろう。

「にしてもまさか箒と同じクラスになるとはな。これからまた一年よろしく頼むぜ」

「うむ。よろしくな一夏」

そうしてふと時計に目をやれば、直にSHRが始まる時間だ。箒もそれに気づいたようで、二言三言交わして彼女は自分の席へと戻って

いった。

さて、と俺は一度気を引き締める。これから三年間勉強する場だ。何事も始めが肝心、他の生徒と仲良くなるにも掴みが大切だ。箒と話したおかげでだいぶ緊張もほぐれ、周囲を見渡す余裕も生まれた。ざつと見るとやはり日本以外の国から来たのだろう生徒が何人も見受けられる。外国からこのIS学園に入学できるのはある程度の実績と地位を確率した生徒だけなので、恐らくは代表候補生かそれに値するレベルの者たちなのだろう。とりわけ俺よりも少し後ろの席にっている金髪の美人さんは、他の生徒たちとは纏っている雰囲気が違うように思えた。

「皆さん、おはようございます」

机に片肘をつけてつらつらとそう考えていると、教室前方のドアが開いて一人の女性が入ってきた。俺は慌てて姿勢を正し、その女性のほうを見る。身長は低めで、緑色のショートカットと眼鏡が特徴的な中々の美人さん。あれ、なんかこの人どこかで見たことあるような気がするな。

と、喉辺りまで出かかっていた答えは、後方からやってきた。

「ぎゃー!!」

「真耶ちゃんだッ!!」

「現国家代表で第二回モンド・グロツソ射撃部門のヴァルキリー!!」  
「このクラスでよかったーっ!!」

ああ、そうだ。この人モンド・グロツソで射撃部門命中率100%叩き出した山田真耶だ。確か千冬姉と同じ日本の国家代表だった筈。あれ、そんなすごい人が何でこんな所にいるんだ。

というか何だ。この人一見おっとりしててドジそうだけど歩き方に一分の隙もないぞ。どんな修行したらこんな所作ができるようになるんだ、俺もある程度の武を嗜んでいるから分かるが、俺や箒にはまだまだ到達できない遥か高みにこの山田真耶という人は立っている。

「えー、皆さん落ち着いてください」

後ろで騒ぐ女子生徒たちを優しく諭し、山田真耶は一度咳払いして



から。

「初めまして。私が今年度このクラスの副担任を務めることになりました、山田真耶です。皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

そう言ってニッコリと微笑む山田先生。へー、この人副担任なのか。ん？ てことはうちのクラスの担任は他にいるってことだよな。というか、国家代表である山田先生が副担任とはどういうことなのだろうか。普通に考えれば山田先生には他にも国家代表の仕事があつて忙しいので担任には就かず副担任となったのだろうが、どうにも俺にはそう考えることが出来なかった。一目見ただけでも山田先生は真面目な人だということが分かるし、国家代表としての責務を優先させるくらいなら副担任を務めるなどという中途半端なこととはせず、国家代表一本に絞っている筈だ。

そうすることなく、副担任に山田先生が就いているということだ。

そこまで考えてたところで、不意に教室の前の扉が開かれた。ガラツ、という音と共に開かれた扉の向こうから、黒いスーツを身に纏った男性が教室に入ってくる。

……あれ、おかしいな。

俺の眼は幻影か何かを写し出してしまっているんだろうか。

何度か瞼を擦ってみる。うん、目の前の光景に一切の変化は見られない。どうやらこれは幻でも何でもないらしい。紛うことなく現実だ。

そう俺が認識した瞬間、先ほどの山田先生が登場したときの倍はありそうな女子生徒たちの声が教室内に木霊した。

「ツキヤー!!」

「黒執事様だーツ!!」

「楯無様ー!!」

「生で見るの初めて!!」

「カツコイイ!!」

「凜々しい!!」

「ほんとこのクラスで良かったー!!」

背後から吹き荒れる少女たちの黄色い歓声。何だ、うちの師匠つてやっぱりIS関連では有名人だったのか。これまで師匠には武術の稽古をつけてもらうことはあってもISの操縦を教わることなんてなかったから全く実感がなかったが、やはり更識楯無という名前はIS界でも通用するらしい。これまでそんな事は一切教えてくれなかったというのに。

などと考えている最中でも、少女たちの歓声は止まらない。

「どうして国家代表やめちやったんですかー!?!」

「執事服はどうしたんですか!!」

「この教室に入ってきたってことはうちのクラスの担任なんですか!?!」

「お付き合いを前提に結婚して下さい!!」

おい最後の奴。それ逆だろ。

「……はあ、何だ。このクラスにはまさか俺の信者でも集めてるのか？ それとも全クラスそうなのか。だとしたら最悪だ」

師匠は額に右手を当ててそうボヤいている。無理もない、俺なんてさつきまで無言の視線だけで参ってしまったのだ。それよりも数倍はキツイだろう声援を一身に受ければ、そりゃ頭も抱えなくなるだろう。

「とりあえずだ。静かに」

教壇の上からだと更に高く感じる背筋を伸ばしたまま、師匠はおもむろに話し始めた。

「二先ず自己紹介だけはしておく。俺は更識楯無だ、IS学園一年生の学年主任を任されている。質問は受け付けない、以上だ」

ぼつさり和一息で言い切った師匠は、山田先生に一言何か言って教室を出て行ってしまった。途端に残念そうな声が俺の後ろから聞こえてきたが、そんな声などお構いなしに朝のSHRは進行していく。

「はい、更識先生は先程仰ったようにこの学年の主任として仕事をしています。主に生徒会関連の仕事で生徒会室に居る事が多いですが、何か分からないことがあれば直接更識先生に聞いてみてくださいね」  
そう言つて山田先生は俺たちの机の上に何枚もの書類を配布して

いく。そこに書かれているのはこの学園の規則だったり校内の案内図だったり、事前学習用に配られていた一見ただけだと分厚い電話帳と間違えてしまいそうな教科書の進行表など様々だが、どれもISに関係するものばかりだ。

このクラスにいる女子生徒たちはそれを事も無げに眺めているが、俺としてはほぼ初めて見るものばかりだと言っている。何せ中学までにISについての授業が行われているのはほぼ女子で、男子は自由履修のようなものだったのだ。IS学園を受験する男子生徒数は毎年決して少なくはないが、まず適性が無いとお話にならない。ということは男子からしてみれば適性があればIS学園に入ることができ。故に勉強など必要ないと知識を持たずに受験する生徒が多いのだ。俺はそんなことなく、一応は基礎知識を叩き込んで望んだが、まさか受かるとは思ってもいなかったので付け焼刃も甚だしい。

つまり、これまでの授業の積み重ねがあり、尚且つこの学園に入學できるほどの適正と頭脳を持つ女子と、つい数ヶ月前までISの知識なんてたまたまテレビで放送されているのを見るくらいでしか知らなかった俺とでは、スタートの時点で天と地程の差があるわけだ。

一応は入学が決まっただけからの二週間ほど千冬姉が直々に勉強を見せてくれたが、それでもはつきり言って詰め込んだだけで詳細まで理解できているわけではない。

これからの授業はしつかり聞いて理解しないとあれよあれよと置いていかれてしまう。そんなのは嫌だ、折角どんな理由があるにせよIS学園に入學することができたのだ。師匠や千冬姉、束さんが過ごしたこの学園で俺も三年間学ぶことができるのだ。こんな幸運を、勉強が分からないからという恥ずかしい理由で捨てるようなことはしたくない。

配られた資料に視線を落としながら、そんなことを考えていたからか。

俺は教室のドアが再び開いたことに気がつかなかった。そして。

「SHR中だというのに考え事とは関心しないな」

スパンツ、と俺の頭に軽い音を立てて出席簿が落とされた。

「すいませ——つて千冬姉!？」

「織斑先生と呼べ、馬鹿者」

顔を上げた先に立っていたのは、これまた黒いスーツを着込んだ我が姉、織斑千冬その人だった。

つてなんでだよ、どうして此処に千冬姉がいるんだ。いや、IS学園と提携した職業に就いてるとは言っていたけど、これじゃあまるで

「教師みたいじゃないか」

「みたい、ではない。今年から私はこの学園の教師だ」

さらつととんでもないことを言った姉に、俺は開いた口が塞がらなかった。

そして何か言おうと俺の口が動いた瞬間、三度女子たちの大歓声が教室内に響き渡る。

「千冬様ーッ!!」

「まさかほんとに会えるなんて!!」

「素敵、私今死んでもこの世に未練はないわ……!!」

「千冬様に会えると思つて私この学園に入学したんです、佐渡島から!!」

そう声を大にして騒ぐ女子たちを前に、千冬姉はさっきの師匠と同じように額を抑えて小さく溜息を零した。

「はあ……、アイツが溜息を吐くわけだ。どうしてこうも馬鹿者が集まるのか不思議でならんな」

「お疲れ様です織斑先生、会議はもう終わられたんですか？」

「ああ、クラスへの挨拶を押し付ける形になってしまつて済まなかつたな」

「いえ、副担任ですから。これくらいは」

そう言い合う二人はなんといか言葉で言い表せないような信頼関係で結ばれているように見えた。

しかし千冬姉がこのクラスにやってきてこのクラスの名簿を持っているという事は、つまりはきつと、そういうことなのだろう。俺の推測が正しいことを証明するように、山田先生の代わりに教壇に

立った千冬姉は一度教室内に居る俺たち生徒をぐるりと見回し、よく通る声で続けた。

「諸君、まずは入学おめでとうと言っておこう。私が織斑千冬だ。私の仕事は君たち新人をこの一年で使い物になる操縦者に育て上げることだ。私や山田先生の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまでみっちり指導してやる。逆らってもいいが、私の話は聞け、いいな」

これがもし普通の人間が言ったのならなんという暴力発言、などと言われてしまうのかもしれないが、うちの姉にはそういった常識というものは通用しない。何せある種のカリスマのようなものを備えている姉は、尊大なことを言ったとしても違和感を感じない。実の弟である俺ですら違和感なく聞き入れることが出来てしまうのだから、普通の、しかも一介の学生がその言葉を横暴だとか思えるはずがない。

その証拠に。

「あの千冬様にぐ指導していただけるなんて……」

「感激で鼻血が出そう……」

「もう死んでもいいや……」

千冬姉に言われたために若干声のトーンは抑えられているものの、その言葉には羨望にも似た尊敬や憧れが感じられた。

あれ、どうしてだろう。何かこのクラスでやっていけるのか急に不安になってきたぞ。

「とりあえずは、そうだな。自己紹介でもしてもらおうか」

出席簿を確認しながらそんなことを言い出した千冬姉は、名前順での自己紹介を俺たちに促した。言われた出席番号一番の相川さんという子が徐に立ち上がり、

「あ、相川清香です。出身は——」

俺はそんな彼女たちの当たり障り無い自己紹介を片肘ついてぼんやりと聞いていたが、その内容は残念ながらあまり頭には入ってこなかった。というかだ、今現在の俺からしたら皆同じようなことばかり言っていて目立つような女子がいないのだ。見た目で目立っている女子もいなくはないが、このクラスの日本人の多くはその謙虚さとい

うものを遺憾なく發揮しているのかつつがなく自己紹介を終える者ばかりで、こう言ってはなんだが、パツとしない。

「では次、織斑」

「あ、はい」

そう言われ、俺はとりあえず席を立ち振り返った。

途端、値踏みするかのような女子生徒たちの好奇の視線が突き刺さる。じーつと見られるというのにはこの一ヶ月で慣れたと思っていたが、どうやらそうでもなかったらしい。どうしよう、今すぐ座りたい。

だがしかし、これまでの女子たちの自己紹介を内心でパツしないと評していた身としてはここでテンプレな自己紹介をする訳にはいかない。きつと女子たちもこのクラス唯一人の男である俺の自己紹介には少なからず期待しているだろう。その純粋な瞳がこちらを見つめている。

「織斑一夏です。なんかISが動かせたのでこの学園に入学しました。えーつと」

何か他に言えることはないだろうか、と表面上は無表情を貫きつつ内心で四苦八苦する。

俺を見つめてくる女子たちも、『え？ まさかこれで終わりじゃないよね？』と言わんばかりの顔で次の言葉を待っている。そんな彼女たちの期待にどう応えるべきか悩むが、俺の脳内にはそれほど使える情報というものは存在していなかったらしい。

「——以上です」

結局、俺も日本人の謙虚さというものには逆らえなかったというところか。いや違うな、只単に緊張してしまっただけだ。女子たちのガクツ、という反応と共に、俺はそそくさと席についた。

ああ、早く休み時間にならないかな。この居た堪れない空気にしたのは自分自身だが、今すぐにでもこの場からいなくなりたい気分だが、そういう訳にもいかず、残りの生徒の自己紹介が終わるまで、俺は縮こまって後ろを見ないように過ごすのだった。



「ちよつと、よろしいですか?」

二時間目の休み時間、机に突っ伏して休んでいた俺に金髪の美少女が話し掛けてきた。教室に入った時に綺麗な人だなとは思っていたが、間近で見ると本当にモデルみみたいだ。艶のある金髪は軽くウエーブがかかり、整った目鼻はそれだけで周囲の眼を惹きつける。所作の一つ一つがまるで貴族のように礼儀正しいので、ただ話しかけられただけだというのに少しドキドキしてしまった。

「あ、はい。えつと」

「セシリア・オルコットですわ」

「俺は織斑一夏だ。よろしくなセシリア」

そう言つて俺は差し出された彼女の手を握つた。

「ところで一夏さん。一つ伺いたいことがあるんですけど」

「ん? 何だ?」

多少なりとも友好的になつたことで幾分か緊張がほぐれた俺は、彼女の質問を待った。

初対面の筈の俺への質問というのは一体どういった類のものなのだろうか。もしかしたら千冬姉関連の話題かもしれないし、俺がここへ来た経緯についてもかもしれない。まあなんであれ淑女の問いかけに答えるのは紳士としては当然のことだ、内心で勝手にジェントルマンぶっていた俺は、セシリアの質問を受けて、一瞬固まった。

「貴方、更識先生とはどういった関係ですか?」

「……はい?」

いきなりの質問に、俺の身体は硬直した。

更識先生、とはつまり俺の師匠である更識楯無のことだろう。どういった関係かと言われれば、師弟関係としか言えない。

「一応俺の師匠……みたいな人だけど」

「……成程、では貴方が」

俺の言葉に何か納得したらしいセシリアはふむ、と考える仕草をした後、何かを言おうとしたところで始業を告げるチャイムが鳴り響い

た。

「また来ますね。では」

「お、おう」

くるりと踵を返して自分の座席に戻るセシリアの後ろ姿を眺めつつ、俺は思い出したように引き出しから教科書を引っ張り出した。

しかしさっきのは一体何だったんだろうか。唐突に師匠との関係を聞かれ、あのままチャイムが鳴らなければきつとまだ質問は続いていだろうか。何か知っている風な彼女だったが、もしかしたら知っているのだろうか。俺はおろか千冬姉や束さんですら知り得なかったあの過去。

師匠の、空白の三年間の事を。



「はあ……、」

職員室の一角、俺に割り当てられた机の上に広げられた書類の束の前に、俺は溜息を吐いた。というのも、今年の一年生には個性豊かな面子が揃いすぎているからだ。千冬と真耶が受け持つ一組には世界三番目の男性IS操縦者である織斑一夏にイギリス代表候補生であるセシリア・オルコット。二組には中国代表候補生である凰鈴音。因みにこの凰は転校生ではなく、入学生として入学式よりこの学園に通っている。というのも、一夏がISを起動させたという発表が迅速に成されたからだ。流石に三度目となると報道陣も手馴れたものである。

だがまあ、ここままでならば原作知識を持っている俺からしてみれば大したものではない。

問題なのは、一年四組だ。

このクラスには俺の妹、更識簪が所属している。現日本代表候補生である妹だが、この事も別段重視するものではない。

ペラッ、と俺は書類の束を一枚捲り、そこに記載されている情報と顔写真をまじまじと眺める。



「参ったな……、まさかの展開だ」

その書類には、こう書かれていた。  
皿式鞆無。

世界で四番目の、男性IS操縦者。

## #2 三人目と四人目

今年の一年生、つまりは第九期の入学生にあたる生徒たちには個性的な人間が多い。

先ず真つ先に上がるのが世界で三番目となる男性IS操縦者となった織斑一夏。何を隠そう彼はあのブリュンヒルデ、織斑千冬の実の弟であり、更に篠ノ之束とも親交が深い。まあ、俺との関係もあるんだがここではその部分を掘り下げることにはしないでおく。

そしてその篠ノ之博士の妹であり一夏の幼馴染である篠ノ之箒。彼女もまた姉と同様に優秀な技術者である。あの天災と比べればまだまだな部分は多いが、それでも現学園二年の整備科の生徒よりは知識技術共に優れていることは間違いない。

更にそんな二人とクラスを同じくしているのは、イギリスの代表候補生であるセシリア・オルコット。彼女との直接の面識は無いが、そのメイドとならば幾度か話したことがある。というか、そこそこの親交がある。いつだったかリリーの紹介でイギリスに渡った時に出会ったのがそのメイドの少女だった。名前は確かチェルシーと言ったか。うん、俺の記憶が間違っていないければ、あのチェルシー・ブラケットで違いない。学園に居た頃にリリーが初めて後輩ができたと言つて喜んでいたが、まさかそれがチェルシーの事だったとは思ひもしなかった。というか彼女代表候補生だったんだな、当時の話だが。

更に更に、このクラスには簪の専属従者である布仏三姉妹の三女、本音も席を置いている。

学年全体を見てみてもこれだけのメンツが固まっているクラスは一組だけだ。が、俺が一番気になつているのはこの一組ではなく、ましてや凰鈴音が在籍する二組でもなく、簪が所属する四組だ。

このクラスには、注目せざるを得ない人物が一人居る。

彼の名は皿式鞘無。世界で四番目となる、男性のIS操縦者だ。

「四人目、ねえ……」

四人目の適性を持つ男性が現れた、と聞いても別段驚きはしない。

何せ自分自身が世界初などという嬉しくない肩書きを承っているのだから。付け加えれば、織村のような事例もある。ISコアに対する適性を持つ男子生徒が出てきたとしても、なんら不思議ではない。

こういった男子を発掘するために、数年前からIS学園の受験資格を男子にも与えるようにしたのだ。

結果的に言えば、この案は見事に的中したということになる。だが、まさか一夏以外の男性IS操縦者が現れることになるとは思ってもみなかった。

いや、確かに俺や織村といった存在もあつて原作とはかなりかけ離れたものになっている、ということは理解していたが、四人目の出現は全く想定していなかった。

机上に置かれた件の彼の書類に視線を落とす。出身は日本。身長、体重共に平均値。容姿は茶髪で肩口ほどまで伸ばされた髪に、男の俺から見ても分かる整った顔立ち。データ上の彼だけを見れば、男性でISを起動できるという点以外は至って普通の生徒のように見受けられる。

——が。

「そんな訳、ないよなあ……」

ハッキリ言ってしまうえば、この男は怪しき満点だった。入学式の際に教師側の席から遠目でちらつと彼を見たが、通常女生徒ばかりに囲まれて一夏のようにテンパるといった様子は全く見られなかった。女慣れしている、と言われてしまえばそれまでだが、どうも腑に落ちない。学園入学当時の織村程のきな臭さは感じないものの、全くの白、という訳でもなさそうだ。

だがただ怪しい、などという証拠も何もない状態ではどうすることも出来ない。結局、俺はこの四人目の男性IS操縦者がどう出るのか見ていることしかできないのだ。

「とりあえずは様子見、ってことか」

はあ、とまた溜息を一つ。

俺は職員室の天井を仰ぎ、どうしようもないもどかしさを感じながら脱力した。

◆

三時間目の授業が始まって暫くして、教壇に立つ千冬姉が思い出したようにとある話題を切り出した。

因みにこの授業ではあの分厚い教科書片手に実践で使用するISの各種装備の確認と特性についての説明を受けている最中で、教壇に立つ千冬姉が基本的に話を進めているが、時折山田先生が解説を加えたりして授業を進めている。そんな最中、持ち上がった話題というの

は。  
「そうだった。再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないんだっとな」

クラス対抗戦、という単語は確かIS学園の年中行事が記載されたパンフレットで見た覚えがある。確かISを使つての試合だった筈だ。詳しく読み込んだ訳ではないのでそれ以上のことは分からないが。

「クラス代表者、というのはそのままの意味だ。クラス対抗戦だけでなく生徒会が開く学生会議や各委員会主催の会議への出席、まあ所謂クラス長と考えてもらえばいい。因みに再来週のクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測る目的で行われる。今の時点では大した差はないだろうが、競争は向上心を生む。一度決まればそれ以降の変更は一切認められないから、そのつもりでな」

千冬姉の言葉に、俄かに教室内が騒がしくなる。

クラス代表、つまりはこの一組を代表するということだ。実力推移を測るといふのなら、恐らくこういうのは実力ある生徒がやるべきなんだろう。幸いこのクラスにはセシリアというイギリスの代表候補生がいることだし、こう言うのもなんだがここは彼女に任せてしまえばいいのではないかと思う。

俺にはクラス代表足り得るだけの実力も知識も無い。自分のことで手一杯だというのに、クラスのことにもで手を回すことなど出来る筈もないのだ。

と、考えていた俺に信じられない言葉が耳に突き刺さった。

「はいっ、私は織斑君を推薦します!」

「私もそれがいいと思います!」

教室の後方に座っていた女子生徒二名が手を挙げて織斑という名前を出した。いや、ちよつと待つてくれよ、このクラスに織斑なんていう名字のやつは俺以外にはいなかった。それはつまり、この俺が現在進行形で推薦されているという事実にはならない。

「では候補者は織斑、他にはいないか?」

「ちよ、ちよつと待つてくれよ!」

推薦されている張本人である俺を蚊帳の外にしてトントン拍子に進んでいく話を一旦止めるべく、俺はガタツと立ち上がった。

その際の背後から感じる視線が痛かったが、そんなことも言っていられない。

「なんで俺なのさ!?!」

「授業中だぞ、席に付け。それと自薦他薦は問わない、推薦されたならそれなりの覚悟をしろ」

何だその理不尽。

大体どうして俺が推薦されるのかが分からない。俺なんてつい数ヶ月前に初めてISに触れたど素人だ。知識や技術だってこのクラスの女子たちに遠く及ばない。それなのに俺なんかを推す理由がないだろう。このクラスにはセシリアっていう代表候補生が居るんだから。それに、彼女だってきつと黙っていないだろう。

何か反論があるんじゃないかと、俺は首を回してセシリアの座る場所へと視線を向けた。

「……………」

彼女は何も言わず、ただ瞼を伏せて何かを考えようだった。あの様子では今すぐの反論は期待できそうにない。いよいよ本格的に俺がクラス代表になりそうな雰囲気教室全体に漂い出してきた。このままじゃ色々やばい。何か手はないか、と俺が必死に考えていた時。何か考えていた風だったセシリアが、静かに右手を上げた。

「織斑先生」

「どうしたオルコット」

静かなながらもはつきりとした声に千冬姉が返す。返されたセシリアはゆっくりと立ち上がって。

「一夏さんがクラス代表をする、ということに関しては別段否定はしません。ですがやはり、クラス代表を務めると思うのであればある程度の実力は必要ではないかと思うのです。クラス対抗戦が現時点での実力を測るといふのなら、当然ではないかと」

「ほう。ではお前が立候補するのか？」

「いえ」

千冬姉の質問に、彼女ははつきりと否定の意を示した。

「わたくしがクラス代表になる、というのも一つの案だとは思いますが、ここは推薦されている一夏さんを優先させるべきだと思います。しかし、」

一旦置いて、セシリアは続けた。

「今の一夏さんでは、恐らくクラス代表は務まらないでしょう」

きっぱりと、セシリアは俺の実力不足を指摘した。

それは自分でも分かっていたことだが、改めて他人から言われるとなんとも言えない気持ちにさせられる。俺の周りには凄い人たちがたくさん居るのに、俺にはそんな人たちの背中すら見えない。それがどうしようもなく悔しくて、少しでも近づこうと師匠に弟子入りしたのが今から五年前のこと。

セシリアの言い分は最もだ、反論の仕様が無い。  
すると。

「ですから、わたくしと戦いませんか？」

「……………は？」

彼女の言い分が一瞬理解出来なかった俺は、素っ頓狂な声を上げてしまった。そんな俺を見て彼女は優しく微笑んで。

「貴方がわたくしと戦って勝つことが出来れば、何の迷いもなくクラス代表になることができるでしょう？ わたくしが勝ったら、その時はクラス代表はわたくしが務めますわ」

つまり彼女はこう言いたいらしい。

俺が代表候補生を倒すほどの実力があればクラス代表として申し分ない。出来なければ、セシリアが代表になる、と。

どうやらセシリアには俺の内心の葛藤が読まれてしまっていたらしい。そしてこんな提案をクラス内でされてしまえば、断れる筈なんてない。

「……いいぜ、分かった。戦おう」

「決まりですわね」

俺の返答に口元を緩めるセシリア。その双眸からは一体何を考えているのか読み取ることが出来ないが、俺を試そうとしていることだけは十二分に理解できた。そんな俺たちのやり取りを暫し静観していた千冬姉が、会話の終了を察して口を開いた。

「話は纏まったようだな。では来週月曜日の放課後、第三アリーナで織斑とオルコットの模擬戦を行う。この試合での勝者がクラス代表になるということで異存はないな?」

「ああ」

「はい」

「ではこの話はここまでにして授業に戻る。テキストの八ページを開け」

こうして俺とセシリアのクラス代表を掛けた試合は、来週の月曜日に決定された。今から約一週間、猶予は少ないが、それまでに出来ることはしておこう。そう思いつつ、俺は我が姉の授業に耳を傾けるのだった。



一夏とセシリアの試合が取り決められている頃、一年四組でも同じようにクラス代表を誰にするかという話題が上っていた。このクラスの中の多くの女子たちの視線は窓側三列目前方に座る少年、皿式鞆無へと向けられている。肩口で切り揃えられた茶髪に整った目鼻立ち。十人中九人がイケメンと評するであろう容姿を持つこの少年は、一夏に次いで世界で四人目となる男性のIS適性を持つ操縦者である。

この少年も現在一組の一夏のように物珍しいという理由でクラス代表に推薦されている訳だが、一夏とは違い、彼はそこまで狼狽していなかった。自分が男性でISを動かせるという時点で周囲の注目を浴びるといのは解りきっていたことであつたし、女子生徒たちの注目を浴びる、というのは悪い気はしていなかつたからである。

「えー、現在候補者は皿式君だけですが、他にはいませんか？」

四組の担任である長髪の女教師がクラス全体を見渡しながら確認を取る。このままの流れならば、まず皿式という少年がクラス代表として再来週のクラス対抗戦に出場することになるだろう。そのことについて反論するクラスの生徒はいない。ただ一人、件の少年の真後ろに座る少女を除いて。

(……なんか、納得いかない)

少女、更識簪は目の前に座る少年の後ろ姿を訝しげに眺めていた。

男性のIS操縦者という事に驚きはない。何せ彼女の兄は世界初かこの少年のことが気に食わないということなのだ。簪は基本的に見た目や第一印象だけで相手の事を決めつけたりはしない。しっかりとその人の内面を見ることのできる少女だ。

にも関わらず、簪はどうにもこの皿式鞘無という少年のことを許容することが出来ないでいた。

(なんだろう、なんか、イラツとする)

などと、自身の胸中に渦巻く不可解な感情を持て余していると。

「更識さん」

「え……、」

思わず顔を上げれば、前の席に座る少年がこちらに振り向いていた。思わず引いてしまいそうになりながらも、初対面の人間にいきなりそれはまずいと簪の良心がギリギリの所で歯止めをかけ、なんとか平静を装うことには成功した。

「更識さんは、立候補しないのかな」

「どうして、私が……？」

「だって、更識さんは代表候補生じゃないか」



目の前の少年は、然も当たり前のように言った。

簪としてはどうして代表候補生であるというだけで立候補しなくてはいけないのだ、と不可解に感じたのだが。

「確かにね」

「更識さんてあの黒執事様の妹なんでしょう?」

「それに代表候補生だし」

「実力も折り紙つきじゃない」

ああ、これはまずい流れだ。と簪は本能的に理解する。どうしてこの少年がいきなりこんなことを言い出したの理解不能だが、このままでは自分までもが立候補させられてしまいそうな雰囲気になりつつある。これはまずい、非常にまずい。彼女からしてみれば彼の行動は完全に迷惑だった。

簪はどちらかといえば内気でインドア派の少女である。兄や姉のおかげで幾分か軽減され、今でこそ初対面の人間であっても多少は人見知りせずに会話することもできるが、根っこの部分では未だにその内向的な性格は変わっていない。まあ、どういふことかと言うと。

(クラス代表なんて……、絶対やりたくない……)

こういうことだ。

クラス代表に興味なんて無かった簪としては、多少の不快感はあってもこの少年がクラス代表になるものだと思っていた。それがまさか、こんな形で自身に飛び火することになるうとは夢にも思わなかった。そんな彼女に、更なる悪夢は続く。

数秒考える仕草を見せた目の前の少年は、あろうことかこう言い放ったのだ。

「そうだ、僕と更識さんが試合をして、勝った方がクラス代表になるというのはどうだろう。これなら実力もハッキリするし、皆も納得するだろう?」

「はっ」

開いた口が塞がらない、とは正に今の簪の状態だった。

何度も言うように、簪にクラス代表になる気は更々ない。こんな勝負、するだけ無駄なのだ。

が。

「そうですね、ではそういうことにしましょう。アリーナの方は私が取っておきます」

担任教師の無慈悲な裁決が下される。周囲の女子もその決定に異論などないらしく、早くも簪たちの対決の結果を楽しげに予想し合っている。発言者である少年に至っては、楽しみだと言わんばかりの笑みを向けて悠々と前を向く始末である。

取り残された簪は、大声で反論することもできず、精一杯の溜息を吐き出した後、内心で呟いた。

(……………どうしてこうなるの)



「ど?」

生徒会室の横にある学年主任用の部屋で、俺は目の前で書類を差し出してくる二人の教師をまじまじと見つめた。一人は織斑千冬、一組の担任である教師だ。もう一人は安形綾、今年からこの学園に赴任してきた新任教師で、四組の担任を任されている。そんな二人がこの部屋にほぼ同時に入ってきたのはつい数分前のこと。二人して同じアリーナの使用許可を求める申請書を提出しに来たものだから、何に使うのかとその理由を聞いてみれば生徒同士の試合のためだとか。

「あのな、お前らこんな理由が通ると思ってるのか?」

少しだけ高価な椅子に腰掛ける俺の言葉に、しかし千冬はぼつさりと言い切る。

「クラス代表を決めるためだ、やむを得ん」

「やむを得んじゃねえよ。なんでそんなことになる前に止めなかったんだ」

「そうは言ってもな、セシリアも一夏の実力を見定めたかったようだし、それはお前にも原因があるんじゃないのか?」

「うぐ……………」

相変わらず痛いところを突いてくるな千冬は……………。まああの時俺

が彼女に俺の弟子は相当できるぞ、なんて軽々しく言わなければこんなことにはならなかったのかもしれない。が、それとこの話を此処まで大きくした千冬の件とは別問題だ。自分の弟が関わっているから熱くなるのは分からなくもないが——

「おい、何か良からぬ事を考えてはいないか？」

「は？ いや一夏が関わってるからそんな熱く——」

「熱くなってるなどいない」

「いやどう見たっておま」

「なってるない」

いや、うん。どう見てもムキになってるんだけどこれ以上茶化すと本気で殴られそうだから止しておこう。とりあえず今はこの申請書を片付けるのが先だ。一応俺は二人から申請書を受け取り、数日中に返事をする伝えて帰した。

「……ふう、これ、許可降りるのか……？ つうかこんなことでアリーナの使用許可って取れるのか……」

一応この申請書は学年主任である俺が目を通し、不備がなければ学園長に提出する手筈となっている。とは言っても学園長は申請書に判を押すだけなので、実質許可を出しているのは各学年の主任たちなのだが。俺は手元に置かれた申請書のもう一枚、安形が持ってきた方に目を通す。確かこつちもクラス代表を決めるためだと言っていたが、一体誰が戦うというのだろうか。あのクラスには例の四人目がいるから、ソイツと誰かが戦うのだろうか。

そこまで考えていた俺は、申請書に書かれていた名前を見て我が目を疑った。

『申請理由：一年四組のクラス代表を模擬戦によって決定する為。対戦者名、皿式鞘無、及び更識簪』

……………。

「はあああああッ!？」

絶叫にも似た声が、学園内に反響した。

### #3 思惑と矜持

千冬と安形からアリーナの使用許可申請書を受け取った日の夜、もろもろの仕事を片付けた俺は自室で一人安酒を煽っていた。

入学式初日ということで職員室も慌ただしく、通常より仕事量も多かったが、流石にこの時間までかかることはなかった。時刻は午後十時。俺の部屋があるのは二年生の寮の一階の一番端だが、消灯時間が過ぎているために廊下や談話室をうろついている生徒はいないだろう。

因みに先程千冬から受けた報告によれば、一夏と箒は同室でしばらく過ごすことになったらしい。

どうして一夏を俺が学園に居た頃に使っていた男子用の寮に入れなかったのかという疑問があるだろうが、俺があそこを使っていたのは六年も昔の事である。それから今年まで男性のIS操縦者は現れなかった。その間使われることがなかったあの部屋は、今では物置がわりに使用されてしまっているのだ。

撤去すれば住めるだろうと思うかもしれないが、六年分の物となる結構なもので、住めるような状態にまで戻すには少なくとも一ヶ月程時間がかかる。という訳で、男子寮が使えるようになるまでの期間、一時的な措置として一夏を箒と同室にすることにしたい。

まあ、見ず知らずの女子と同室になるよりは幼い頃からの付き合いである箒のほうが一夏もいいだろうし、幾分か気も楽だろう。

あの二人が俺の知っている原作のような一夏と箒であったならば大問題になりそうだが、この世界での一夏は冷静で箒は大人しい。違いで見れば些細な点かもしれないが、これは実は人格形成の上ではかなり重要な部分でもあるのだ。

とは言っても、一夏の天然朴念仁ぶりは原作までとは言わなくとも発揮されたりはしているが。

いつか姫無や簪が一夏の毒牙にかかりそうな気がしてならない。

もしそうだったら俺は愛弟子である一夏を殺すことができるのだろうか。いや、殺すと言っても言葉通りの意味ではなく、精々四分の三殺しくらいだから心配いらぬ。などと意味の分からない言い訳を自分自身にしていると。

コンコン、と部屋の扉を叩く音が耳に入ってきた。

先も言ったように、学生の消灯時間は既に過ぎてている。なのでこの部屋にやってくるのは俺と同じこの学園の教師の連中か、規則を破つて大胆にもノックをした学生。もしくは――。

俺は呑んでいた缶ビールを机の上に置き、立ち上がって部屋の扉を開けた。そこに立っていたのは。

「やつほー」

「……消灯時間は過ぎてるぞ」

「そこはほら、会長権限というやつよ」

「職権乱用すぎるだろ」

「あら、兄さんだつてこれくらいしてたんじやないの？ 織斑せんせーとか篠ノ之博士とかと一緒に」

何やら多分に含みのある言い方をしてニヤリと笑うのは、このIS学園の現生徒会長にしてロシアの国家代表を務める少女。分かりやすく言えば、俺の妹である更識姫無だった。既には寝るだけなのか可愛らしいパジャマに着替えた姫無はドアと俺の間を巧みにくぐり抜け、なんともないように俺の部屋の中へと入っていく。

どうして彼女がこんな時間に俺の部屋に、と思ったりはしない。何と言うか、コレはいつもの事だからだ。毎日という程頻繁ではないが、週に二、三度姫無はこうして消灯時間を過ぎた頃に俺の部屋を訪れては此処で時間を潰していく。そのまま俺のベッドで寝てしまう、なんてこともザラだ。

「うわ、兄さんお酒呑んだの？」

「いいだろう別に。勤務時間でもあるまいし」

「そうだけどころいうの、私はあんまり好きじゃないな」

「なら彼氏が出来たときは酒は呑まないようにしてもらえ」

そんなことがあれば俺はその彼氏を処刑しなければならぬだろ

うが。

なんてことは思っても決して表情や口には出さない。

「む、なあに兄さん。兄さんは私に彼氏が出来てもいいってわけ？」

「俺の意向は関係あるのか？　俺が嫌だと言ったらお前は彼氏を作らないと」

「そうよ？」

きっぱりと。あっさりとして。

姫無は真顔でそんなことを言っただけ。

余りにも平然と言うので、一瞬呆気にとられて持っていたビール缶を落としそうになってしまった。

「当たり前じゃない。それに前にも言ったでしょ？　私、同年代には

興味ないのよ」

「一夏とか面白いじゃないか」

いつの間にか妹の恋愛事情の話になってしまっているが、兄としては聞いておきたいところでもあるのでこのままこの話を続行させる。まあ、別に俺としても姫無に彼氏を作って欲しい訳ではない。だが今の彼女は世間一般的には思春期と言われる時期であり、そういうことには少なからず興味を持ってもおかしくはないのだ。

いや、興味と言われれば、確かに姫無もそういうことには興味は抱いているだろう。何か最近スキンシップが過激になってきたし。

だがそれが異性に向いているかと言われると、どうも違うらしい。兄としては妹に好かれていっているというのは喜ばしい限りだが、流石にいつまでもそういうわけにもいかないだろう。

余り想像したくはないが、何れは姫無も理想の人を見つけ一つの家庭を築くようになる。未婚の俺が言えた義理ではないが、そういう幸せを味わって欲しいと思うのだ。

そんな気持ちとは反対に、やっぱり遠くに行って欲しくないと思う気持ちも存在しているわけだが。

一夏のことを引き合いに出したのも只単に真っ先に思い浮かんだ姫無と同年代の男子、というのに当てはまったのが一夏だったただけであり、他意はない。

「一夏君は確かに優良物件だと思うけど、私の好みじゃないわ」

「お前の理想は高そうだからなあ」

「あら、そんなことないわよ?」

そう言つて、姫無は俺の首の後ろから腕を回す。必然、姫無の胸が当たっているが兄なので何とも思わない。そんなことお構いなしに、俺の耳元で姫無は囁くように口を開く。

「ほら、此処に私の理想とする人は居るもの」

普通の男子学生が聞けば卒倒してしまうくらいに艶のある声で言う姫無は、凭れるようにして俺へと体重をかけてくる。

これが姫無なりの甘えだということが分かっている俺は、特に何も言わず妹の好きにさせている。しかしまあ、こうも好かれているのは兄冥利に尽きるが、姫無を狙っている世の中の男共には少しばかり同情してしまうな。まあ、同情はしても容赦はしないが。

「ところで、何か用があつて俺のどこに来たんじゃないのか?」

「あ、そうだった」

どうやら本件の方をすっかり忘れてしまつていたらしい姫無は、俺にくつついたまま本題を切り出した。

「簪ちゃんの模擬戦についてなんだけど」

「やっぱりそれか……、」

妹が切り出した話題は、十中八九俺の想像した通りのものだった。俺が普段居る学年主任室は生徒会室の隣にあるので、恐らくは話が漏れていたのだろう。一応言っておくが、IS学園の重要な部屋には基本的に万全な防音対策が施されている。漏れた、という表現も俺や千冬の声が外部に聞こえていたというものではなく、姫無の情報網に引っかけたかという意味合いでのものだ。

「当然でしょ、何アレ」

「いや、何つて言われてもなあ……」

俺だつてあの申請書の内容を確認したときは驚いたのだ。あの簪が、よりもよつてあの四人目とクラス代表の座を懸けて戦うことになると思ひもしなかつたのだから。放課後簪本人に聞いてみたところ、本人の意思とはほぼ無関係に話がホイホイ進んでしまつて断る

に断れない状況になってしまったらしい。その事については後で安形をシメることで良しとした。

「あんな得体の知れない四人目と戦わせるなんて」

「いや、まあお前がそうやって簪のことを心配する気持ちは分かるけどな。俺はそこまで心配してないぞ?」

「どうして? ついにシスコン脱却?」

「おい」

シスコンだの言うな。そこまでの重度のものじゃない。

それに簪も、いつまでも俺や姫無に守られてばかりの弱い存在ではない。

これまで血の滲むような努力を積み重ねてきたのだ。俺や姫無という存在は、時には簪に重く押し掛ったかもしれない。世界初の男性IS操縦者とロシアの国家代表を兄と姉に持つ妹の気持ちを、俺はそこまで理解できる訳ではない。しかし、いつも比較されて苦しい思いをしてきた簪が少なからず俺や姫無と自信を比べて落ち込んでいたのは知っている。

それでも、簪は決してそんな他人の評価に一喜一憂されたりはしなかった。むしろ他人が付けた評価をひっくり返してやろうとしていたくらいだ。

その努力がようやく報われたのは、IS学園に入学する少し前のことだ。簪からの電話に出てみれば、代表候補生に選出されたことを教えてくれた。これでようやくお兄ちゃんやお姉ちゃんの背中が見えてきたよ、と嬉しそうに話してくれたのだ。

そんな簪が、どこの馬の骨とも分からない奴に負けるとは思えない。いい。

「私だって簪ちゃんが負けるとは思っていない。けど……」

「ま、相手が相手だからな」

唯一、不安要素があるとするならば、それは簪の対戦相手が男であるということなのだ。

俺という存在があつてからなのか、原作の簪よりも基本的に強くなった簪だったが一つだけ難点があつた。



それは――。

「簪ちゃん。極度の男嫌いなよねえ……」



楯無と姫無の二人がそうボヤいている頃。少女、セシリア・オルコットは自室でパソコンの前に鎮座していた。同室の少女は早々にベッドで眠りに付いているが、セシリアはそんな彼女を起こさないよう気遣いいつも目の前の画面から目を離さない。そこに映し出されているのは、一夏の入学式前に行われた山田真耶との試験時の映像だった。

山田真耶と言えば第二回モンド・グロツソで射撃部門を制した世界トップクラスのIS操縦者。セシリアも試験時に一度対戦したが、いようにあしらわれたことは記憶に新しい。何せ山田真耶という女性是世界で五人しか存在しないヴァルキリーの一人。モンド・グロツソの各部門を制した者にだけ与えられる称号を持つているのだ。通称『V5』と呼ばれる彼女たちは、世界中のIS操縦者たちにとって憧れであり頂点。その一人と戦う織斑一夏という少年は、お世辞にもISの操縦が上手いとは言えなかった。

しかし、それでもセシリアは一夏から目を離さない。

もしこの映像を何も知らない女子生徒が見れば、なんと滑稽に逃げ回るのかと思うのかもしれない。事実、映像内の一夏は真耶が放つ弾丸を必至に躲し、時には崩れながらも致命的なダメージだけは避けるようにしているだけで、全くと言って言い程攻撃に転じていない。

だが彼女には視えていた。

一夏の動きの至るところに見え隠れする、あの人の動きと重なる部分を。

(やはり、この動き……、)

映像を見て、セシリアは確信する。

(一夏さんがあの方の弟子ということ、間違いなさそうですわね) 脳裏に過るのは、まだセシリアが代表候補性になって間もない頃。

世界初の男性IS操縦者だという男性が、イギリスまでやってきたのだ。どういった経緯でそうなったのかは当時のセシリアには分からなかったが、セシリアの指導役でもあったチエルシーの師匠、リリイIIスターライ国家代表の伝手を使ったということは何となく聞かされていた。

当時のセシリアは、ハッキリ言ってあまり男性に良い印象を持っていなかった。女尊男卑の風潮というのは徐々に薄れつつあったが、彼女の父は母に媚び諂うようにして生きていたのだ。何をするにも母が中心。婿養子ということも理由にはあったのだろうが、それを差し引いてもあまりにも父の態度は一家の大黒柱と呼ぶには相応しくなかった。

そんな父を間近で見してきたからなのか、セシリアの男性像というのは父を基本にして構築されてしまった。

故に男性は女性に媚びるようにして生きる人間が多いのだと、勝手に思ってしまった。

しかしそんな彼女の勝手な考えは、目の前の男性の戦闘を目にした瞬間消し飛んでしまった。

先輩代表候補生であるチエルシーが、指一本触れることが出来ない。

その師匠でありイギリス国家代表であるリリイが、まともに反撃することも出来ない。

圧倒的。その言葉に尽きる。

男性とは、ここまで強い生き物だったのか。

彼女のこれまでの価値観が、たった一日で塗り替えられた。

リリイたちと模擬戦を終えたその男性のもとへと近づいていくと、何か話しているのが耳に届いた。どうやらその男性を含めた三人で話をしているらしかったが、その輪の中に入っていくことはどうにも憚られたので不躰だとは自覚しつつも、彼女はこっそりと聞き耳を立てることにした。

『相変わらず反則的なまでの強さよね』

『リリイも強くなつたじゃないか』

『当然。これでもイギリスの国家代表を任されている身だから。……  
ていうか貴方に言われても皮肉にしか聞こえないわね』

『そんなつもりは無いよ。それにその、チエルシーって言ったっけ？  
彼女も中々筋がいい』

『あ、ありがとうございます！』

『いつか俺の弟子とも戦うことになるかもな』

『弟子？ そんな子が居るの？』

『まあな。言つとくけど……強えぞ？』

そう言つて笑う男性。彼の弟子。

純粋な興味をセシリアは抱いた。あの人の弟子とは、一体どんな人物なのか。知りたい。そしてその機会は、案外早くやってきた。IS学園の入学前、いつかのように全世界に報道された事実。三人目のIS適性を持つ男性の発覚。その顔写真を見た瞬間、面識は全く無い筈なのに、どういうわけかあの人と被って見えたのだ。

そして入学式当日。セシリアは見た。この学園で教師となつていたあの男性と、例の三人目である少年が親密そうに話しているのを。この時点でセシリアは織斑一夏という少年がああ男性の弟子なのだということをほぼ確信していた。それが確信へと変わったのは、休み時間に彼に質問を投げかけた時だ。

『貴方は更識先生とは一体どんな関係なんですか？』

『一応、俺の師匠みたいな人だけ』

ああ、やはりか。と彼女は得心する。あの人と、同じ瞳をしていたから。

クラス代表を懸けて戦う、というのもセシリアが手取り早く彼の實力を知るのに都合がいいと思つたからであつて、決して一夏が代表になるのを拒むために嫉けたわけではない。とは言つても、余りにも弱ければ考え直すことになるだろうが。

しかし、その心配はないだろうと彼女は映像を見ながら感じていた。

織斑一夏は強い。

ISの操縦技術や身体能力云々ではなく、心が。

「ふふ、楽しみにしていますよ。一夏さん」

誰にも聞こえない声でそう呟いて、セシリアはパソコンの電源を落とした。



「一夏、実際のところどうなんだ？」

「どうって、何が？」

消灯時間を過ぎて暫くした頃、隣のベッドで髪の手入れをしていた箒が横たわって何やら考え事をしていた一夏へと問いかけた。

普通の高校生の男女であれば同室に異性と二人きり、というシチュエーションはとても耐えられるものではないのだろうが、一夏と箒は幼少からの幼馴染である。箒がどう思っているのかは知らないが、少なくとも一夏に限って言えば自宅で寛ぐのと同じくらいリラックスしていた。

「代表決定戦のことだ。勝算はあるのか？」

箒の問いに、一夏はうーんと唸ってから。

「勝算で言えばよくて三割ってところだろうな」

「だめじゃん」

「だめとか言うな。こちららISにまだ一回しか乗ったことないんだぞ？」

「それでよく対戦などと言えたな」

やれやれ、と箒が呆れたように溜息を吐き出す。そんな箒を見ても何も言えないのは、一夏自身無謀であることは理解しているからだ。向こうはイギリスの代表候補生。ISの搭乗時間は三桁をゆうに上回る。対してこちらはISに乗ったのは試験の時の一回きり。これでハンデ無しに戦おうというのだから、無謀以外の何者でもないだろう。

しかし、一夏の表情に陰りは一切なかった。

「確かにISに触れた時間なんてのは数十分だ。でも、師匠に何年も鍛えられてきたんだ。あの黒執事に」

「……ああ。よくあの鍛錬について行ったな」

「いや、本気で何回か死ぬかと思っただけだな」

更識家十七代目当主、更識楯無との修行の日々を思い出し、背中に冷たいものが流れるような錯覚を覚える。一夏にとつて、楯無につけてもらった稽古がセシリアに対抗できる唯一の手段と言っている。世界初の男性IS操縦者にして、一夏の恩人でもある彼がISでの戦闘においても度々使用してきた更識流。これを会得とまではいかないまでも使えるレベルにまで至った一夏には、もう大の大人でも敵わない。楯無や千冬、姫無といった例外は割と多く存在するが。

「とにかく、やれることはやるさ。まだ時間はある、それまでに少しでも……」

「そうだな、稽古ならば私も協力してやれる。ISを使つてとなるとあまり役に立てそうにないが」

「何言つてんだよ。箒には授業の分からないところ教えてもらつてるし、それだけでも充分だ」

そう言つて笑う一夏に釣られて、箒も微笑む。

「さ、もう寝ようぜ。明日も早いんだしな」

「うむ。おやすみ一夏」



同時刻。

一年生寮の一室で、一人の少年がベッドに仰向けになつて今日一日のことを振り返つていた。少年の名は皿式鞆無。楯無、織村、一夏に続いて発覚した世界で四人目のIS適性を持つ男性である。シャワーを浴びたばかりなのかまだ湿り気を帯びた茶髪がベッドに付くのも構わず、彼は天井を見上げる。

彼の部屋は一夏のように女子と同室、ということではなく最上階の一番端にある一人部屋だ。これも楯無が使っていた寮の部屋の掃除が終わるまでの一時的な措置だが、元は用務員室として使われていた部屋を無理言つて使わせてもらったのだ。

「更識、簪か……」

ポツリと、口を開く。

「イメージよりも小さかったな……、」

そんな彼女と、クラス代表を懸けて戦う。ここまではハッキリ言っ  
て予想通りの展開だった。何年も掛けて行ってきたシミュレーション  
通りの展開、間違はずはない。ただ、彼にとっての誤算はこの学  
園に三人も男性IS操縦者がいるということだった。予想では二人  
だけだった筈なのに、いや、そういった事もあるのかと納得すること  
は出来る。何せ自分という存在がある時点で、正史のようなルートを  
歩むとは思えなかったのだから。

だが。しかしだ。

幾ら何でも、これはちよつと歪み過ぎじゃないだろうか。

「会長の兄がここで教師やって二人目はアメリカ、拳句の果てには  
モンド・グロツソのあの事件も水面下で解決。しかもその兄は篠ノ之  
博士と親密な間柄……、どうなってんだこれ……」

おかしい、と彼が思い始めたのは世界初の男性IS操縦者が現れた  
時だ。こんな展開は想像できなかった。しかもあの更識の家の人間  
だ。何か裏がある、と思うのは至極当然のことだった。それに拍車を  
かけるようにして現れた二人目。その名前は彼の知る主人公、織斑一  
夏の漢字をいじっただけとしか言えないような名前の男だった。

イレギュラーが混ざれば世界は歪む、とはよく言われることだが、  
これもきつと自身が紛れ込んだことによる影響なのだろう。そう思  
うことにしていた。

こうして四人目としてこの学園に入学さえしてしまえば、俺には明  
るい青春が待っている。そう信じていた。

「んだよ……話が違うじゃねえかあの野郎……」

先程までの言葉遣いとは違い、乱暴な物言いになった少年は一旦目  
を閉じた。

折角こんな恋愛フラグが乱立する世界にやってこれたというのに、  
これではあんまりだ。

だがこれしきで挫折するほど、皿式鞘無という少年はひ弱ではな

かった。

「まあとりあえず、簪との仲を深めるところから始めよう。俺の能力があればISを動かすのに問題はなし、まず負けないだろう」

ニヤツ、と鞘無の口が三日月のように歪んだ。

こうして其々の思惑が渦巻く中、クラス代表決定戦となる日がやって来る――。

## #4 一夏とセシリア

翌週。月曜日の放課後。

とうとうクラス代表決定戦の日がやってきた。放課後ということもあつて第三アリーナの観客席には大勢の生徒が詰め掛けており、中には直接的には何の関係もない二年生や三年生の姿も見受けられる。流れとしては先ず先に一組の代表を決めるために一夏とセシリアが戦い、それが終わり次第簪と四人目が戦う手筈となっている。

どうして別のアリーナで並行して行わないのか、と思うかもしれないが、基本的に放課後のアリーナは訓練機の使用許可を得た生徒が訓練の為に使うことがほぼ毎日だ。

今日のような事がある場合は例外的にアリーナを貸切の状態にすることもできるが、流石に三つあるうちの二つのアリーナを貸し切るような事をする訳にはいかない。只でさえ数の少ない訓練機をやつとの思いで使えると思つたらアリーナは使えません、なんてことになつたら他の生徒への配慮が至らなすぎる。

という訳でこの二つの対戦は第三アリーナのみで行われる。

対戦するのが日本とイギリスの代表候補生と三人目と四人目の男性IS操縦者だからだろう。たかだか一年生の模擬戦だというのは、アリーナの周囲には殆どの一年生に上級生、教師陣もちらほらアリーナにやってきている。ネームバリューというのはこういう時に効果を発揮するらしい。

そんな中、俺はというとピットに居た。

今この北側のピットに居るのは俺と一夏に筈、そして千冬だ。南側のピットでは恐らくセシリアが既に準備を終えている頃だろう。

「どうだ一夏。いけそうか？」

「この一週間、とにかくISの知識と基礎鍛錬だけを徹底的にやってきましたんだ。それなりに自信はあるぜ、師匠」

「……じゃ更識先生と呼べって。……さて、じゃあ展開してみろ」

俺に言われた一夏は瞼を閉じ、数秒の後、真っ白な機体が全身を包み込んだ。



十年近く前に千冬が初めて乗った機体に酷似したその機体は、どこまでも白く、どこまでも鋭利な印象を抱かせる天災、篠ノ之東の手がけた第四世代。現行機を大幅に上回る機動力と、拡張領域を必要としない新技術を備えた最新機。

「これが……」

「ああ。『白式』だ」

白式。

倉持技研が束の製作した機体に手を加えて完成させた、世代としては第四世代機にあたる一夏の専用機。

初めてそんな専用機を纏った一夏は自身の身体を一通り確認し、動作が正常であることを確かめてから俺へと視線を向けた。

「師しよ……更識先生。行けます」

「そうか。なら、行ってこい。時間がないからフォーマットとフィッティングは試合中に無理にでもやれ」

俺へと一言声を掛けた一夏は、次いで千冬、箒にも一言告げて颯爽とピットからアリーナへと飛び出していった。初期設定のまま戦えというのはIS操縦経験が皆無と言っていい一夏には少々酷かもしれないが、まだ専用機を与えられたばかりの新米だ。何年も専用機を乗りこなしてきた人間がいきなり初期設定の機体に載せられれば混乱するのは当然だが、あの白式が一夏の初となる専用機である。最初からあの状態の機体に乗っておけば、幾分は慣れるだろう。

「さて、じゃあ俺たちは管制塔のほうに移動するか。篠ノ之は観客席のほうに戻るように」

「分かりました」

「千冬、行くぞ」

「ああ」

一夏の居なくなったピットにいつまでも居てもしようがない。アリーナの上部に設置されている管制塔から試合の様子を観せてもらうとしよう。千冬はさつきから気が気でないようだが（それでも表面上は無表情を貫いている）、俺としてはそこまで心配するようなことでもないと思う。

実力の差は本人が一番分かっているだろうし、セシリアも絶対防御が発動するまでのことはしないだろう。

どちらかといえば、俺は楽しみだった。

一夏が現段階で代表候補生相手にどこまでやれるのか。

ひよつとしたら、ひよつとするかもしれない。

ISに関しては一夏はズブの素人だが、事戦闘術については俺が何年も稽古をつけてきたのだ。ある程度のところまでは戦えるとおぼ確信している。後は一夏がどれだけあの専用機を乗りこなせるにかかってくるだろう。

「さて、お手並み拝見というふうか」

管制塔内部に設置された大型モニタを前に、俺はニヤリと口角を上げて小さく笑った。



「来ましたね」

「悪いな。待たせたか?」

「いえ、規定の時刻まではまだ三分ありますわ」

一夏が白式を纏いアリーナへと出ると、既にそこには青い機体を展開した金髪の少女、セシリア・オルコットが空中で静止していた。一見して何でもないように見えるが、空中で微動だにせず静止することがどれだけ難しいことなのか、ISの基礎理論を叩き込まれた一夏には十分に理解できた。

周囲の観客の多さに少なからず驚きながらも、一夏は上空のセシリアから視線を外さない。

「それがブルー・ティアーズか」

「ええ。よくご存知で」

一夏の呟きに、セシリアは慥然として答える。

「流石に相手の機体くらい調べるや」

「そうですね。その程度の事、やって当たり前というレベルです」

セシリアにとって、自身の機体の事を調べられるということは予想

の範疇だった。というより、その程度の下調べも無しに戦いに望むような輩であれば今頃一夏を蜂の巣にしていた事だろう。その点に関して言えば、一夏は及第点だった。

最も、調べられた所でセシリアのすることは全く変わらない。

「わたくしの機体を調べたのなら勿論知っていますよね。この機体のスペックを」

「当然だ」

一夏は事前に頭に叩き込んで置いたセシリアの専用機の情報をもう一度思い返す。

ブルー・ティアーズ。

イギリスが開発した第三世代型の中・遠距離型の機体。

B T兵器と呼ばれる最新鋭の武装の実働データのサンプリングを目的とした試作機という扱いだが、その実B T兵器としてはほぼ完成形だと言っている。このブルー・ティアーズとの適正値、親和性が高ければ偏向射撃フレキシブルという攻撃が可能となるようだが、現時点でセシリアがそれを修得しているかは不明だ。

一方、一夏の専用機『白式』。

件の天災科学者篠ノ束が開発し、倉持技研が完成させた史上初の第四世代機。

その機体内部のあまりにもブツ飛んだ設計は専門科学者である研究人员たちでさえも手を加えることは出来ず、元々完成系に近かった機体を急造で間に合わせた純白の近接系IS。まだ各国では第三世代型の試作機が製造されている段階にも関わらず、恐らくは優秀な科学者でも到達するのに十年は必要とする第四世代である。

一夏にしてみればつい最近までISなんてものを深く知らなかったものだから『へー、最新型なのかすげえな』程度で乗り込んだが、その筋の連中からしてみれば開いた口が塞がらないこと確実だ。

拡張領域を必要としないこの機体に付属された武装はなんと近接型のブレードひと振りのみ。これには一夏も驚愕した。

それはつまり、遠距離型であるセシリアに対して近接戦にまで持ち込まなくてはいけないということ。更識流柔術を使うにしても距離

を詰めなくてはならないことは同じであり、結局一夏に取れる手段と  
いうのはそれしかないのだ。

「さて、お喋りはこのくらいにして。始めましょうか」  
途端、セシリアの纏う雰囲気豹変する。

穏やかな貴婦人のようなものから、獲物を狩る狩猟者のものへ。

その変貌ぶりに思わず一夏は身構える。

「……あら、中々鋭敏な感性をお持ちのようですね」

セシリアの軽口に、一夏は体勢そのままに答える。

「これでも武道を嗜んでてな。そんなあからさまに殺気を出され  
ちゃ、イヤでも反応しちまう」

そうですか、とセシリアは返し、次いで右手に量子変換させたスナ  
イパーライフルのような武装を構えた。

そして鳴らされる、試合開始を告げるブザー音。セシリアは一度だ  
け微笑んで。

「それでは、わたくしと踊りましょう」

瞬間、耳を劈く轟音と共に青白い熱線が発射された。



「ん、あれスターライトか」

管制塔で試合の開始を見ていた俺は、セシリアの使用している武装  
を見てそう呟いた。その武装に見当たりがあったのはどうやら俺だ  
けではなかったらしく、隣に居た千冬や真耶も真っ青なレーザーライ  
フルを眺めている。

「ああ、どうやらそうみたいだな」

「でも前のものとは違いますね。新型でしょうか」

千冬と真耶がそう言うように、セシリアの使用しているあの武装と  
俺たちが知っている武装とは細部や威力、照準補正などが異なるよう  
だ。平たく言えば、知っているものよりも格段にパワーアップしてい  
る。となるとあれは恐らく三代目だろう。以前あの武装を使ってい  
たのは二人だから、セシリアで三人目となる。

イギリスが開発したIS専用のレーザーライフル、『スターライト』。

六七口径の特殊レーザーライフルで、その威力は戦車一台楽々破壊できるほど強力な代物だ。

EU諸国の中でもイギリスは遠距離型の機体に心血を注いでおり、国家代表や代表候補生も近接型主体の人間よりも遠距離型主体の人間のほうが圧倒的に多い。

イギリスが過去二回のモンド・グロツソでも成績を残したのは遠距離型の選手だったことから、今後もこの方針で開発していくのだろう。

そして、このレーザーライフルを一番最初に使用していたのは何を隠そう俺たちと同じ第一期IS学園卒業生、リリイIIスターライだったのだ。というか、あの武装を使ったのがリリイだったのではなく、彼女のために直々に製造されたのがあの『スターライト』であり、この名称もリリイの名前から取られている。

イギリスでは英雄扱いされている彼女こそが、祖国の遠距離型の方針を固定させたと言ってもいいくらいなのだ。

次いでスターライトを使用したのがリリイの愛弟子にしてセシリアの先輩にあたる国家代表、チエルシー・ブランケット。彼女もまた遠距離主体の選手で第二回のモンド・グロツソでは真耶をあと一步にまで追い詰めた優秀な操縦者だ。その時の名称は確か『スターライトmkII』だったから、多分セシリアが使ってるのは『スターライトmkIII』とかそんなだろう。

というかあの武装の使用を許されるのは各世代でトップの人間だけであるので、セシリアはイギリス代表候補生の中でトップということになる。

あれ、おかしいな。さつきまで鮮明に見えてた試合のビジョンが急に不鮮明になってきたんだが。

「織斑君、防戦一方ですね」

真耶が試合状況を見ながらそう零した。

「相手は国家代表候補生。みすみす近づけさせるとはしない

か」

俺もアリーナへと視線を向ければ、セシリアの弾幕から必至に回避行動を行っている一夏の姿を捉えた。とてもISに乗るのがこれで二回とは思えないほどに一夏は白式を乗りこなしている。だが、そんな一夏を完璧にロックオンしているセシリアの射撃の腕が単純な戦況の差として如実に現れていた。

「……………」

千冬は何も言わず、ただその様子を無言で眺め続ける。

きつと内心は弟を応援しているんだろうが、俺たちの手前表情には出さないようにしているんだろう。

俺もその様子を眺めていたが、確かに今の戦況はセシリアが断然有利だろう。このまま押し切られてしまえば一夏の負けは目に見える。いる。

が、先も言ったように俺はそこまでのことは心配していなかった。理由は二つ。

一つは白式がまだ初期設定のままであるということ。一次移行ファースト・シフトを終えた機体と他とでは、そのスペックに天と地の差がある。

そして二つ目。

更識流の存在。

「——誰がアイツを鍛えたと思ってるんだ？」



(くそっ、中々近づけない……！)

降り注ぐ弾幕を寸での所で回避しながら、一夏はアリーナの外壁に沿うように低空で飛行していた。つい数瞬前まで自分が居た場所に無数の光線が降り注ぐというのは肝が冷えるが、それも言っていない。何度か無理矢理にでも近接戦に持ち込もうと特攻じみた事もしてみたが、あっさりとしてセシリアに躲され攻撃を食らってしまった。

未だセシリアは上空で碌に動いてすらいらないというのに、こちらのシールドエネルギーは既に三分の一程が削られてしまっている。

「どうしましたか一夏さん。まさかこのままエネルギー切れで敗北、なんてことは無いですよね？」

挑発にも似た言葉が一夏の耳に届く。尚も光線が一夏を貫かんと迫ってくるが、そこで一夏はあろうことか動きを止めた。

「……………」

突然の停止にセシリアの整った眉が僅かに動く。そこで攻撃の手を休めないあたりは流石代表候補生と言ったところか。

レーザーが一夏に迫る。その刹那、一夏の唇が動いたのをセシリアは確かに目撃した。そして目を見張る。あろうことか、彼はそう口にしたのだ。

安心しろよ。退屈なんてさせない。

一夏の立っていた地点に、幾筋ものレーザー光線が降り注いだ。

ここでようやくセシリアの攻撃の手が止まる。地面の砂が舞い上がり、周囲一体を砂塵が包み込む。

(一夏さんに遠距離の攻撃方法は無かったはず……。なら、何を……?)

一夏がセシリアのことを調べていたように、セシリアもまた一夏のことをある程度調べていた。

かのブリュンヒルデ、織斑千冬の実弟にして世界で三番目となる男性 I S 操縦者。そしてあの黒執事、更識楯無に稽古をつけてもらっていた。残念ながらどんな稽古をしていたのかまでは知るに至らなかったが、織斑一夏という少年が乗る I S の性能とも相まって近接型ということは容易に想像することが出来た。

そしてセシリアの想像は見事に的中していた。

あれほどまでに攻撃を躲されるとは思っておらず驚きもしたが、その後は目立った反撃も特攻にも似た攻撃が二度。大した策もなく行ったであろうその攻撃は酷く杜撰なもので、簡単に躲して反撃に転じた。

正直、この程度が関の山か。と思った。

搭乗が二回目だということにこれ程操作技術が優れていることには率直に関心したが、それだけだ。ひたすら躲すのみ、攻撃には何の意

図もない。これではこの学園の女子生徒のほうがまだ戦えるのではないだろうか。そう思った矢先の、彼の言葉。

——その言葉に、偽りはないのでしょね。

セシリアは嬉しかった。自身が初めて認めた男性の弟子が、この程度では終わらないということに。自らの予想を超えてくるという、その事実。

やがて、砂塵はどこかへと流れていった。

視界良好となったアリーナに立っていたのは織斑一夏。しかし、その身に纏う白式は先程までとは姿を変えていた。

——フォーマットとフィッティングが完了しました。確認ボタンを押して下さい。

「……つたく、危機一髪だな」

そう言う一夏の瞳には、先程までと変わらない闘志がありありと浮かんでいた。

そしてセシリアは理解する。目の前の少年は、

「……ファースト・シフト一次移行。成程、これまで初期設定の機体のままで戦っていたということですか」

その言葉に一切の棘はない。純粋に初期設定の機体のままでここまで戦えていたことに対する賞賛だけがセシリアの言葉には込められていた。

そして一夏も、彼女に対して不敵に告げる。

「ああ、悪いな。これでやっと全力の勝負ができるぜ」

一夏は最適化と初期化を終えた自らの機体に視線を落とす。これまでのどこか無骨な工業的な凹凸はすっかりなりを潜め、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的な中世の騎士を連想させるデザインへと変化していた。そして、その武装もまた姿を変える。

モニタにはこう書かれていた。

近接特化ブレード、雪片式型。

式型、という部分に一瞬だけ違和感を覚えた一夏だったが、雪片の文字で納得する。これは、この武装は。自身の姉が使用していた武装の名称だ。日本刀を模したその刀身は刀というよりは太刀に近く、妙



に機械的な光がISの武装であることを知らせている。

この雪片がセシリアの機体に届きさえすれば、一夏の勝利は確定する。

だがあろうことか、一夏はその雪片を取らなかつた。

「……………どういふつもりですか?」

「別に、この雪片式型は確かに一撃必殺を体現したような武装だが、当たらなきゃ何の意味もない。それにコレ、物凄くエネルギーを食うみたいだしな。まずはセシリアに攻撃が届く範囲にまで詰めることが最優先さ」

「随分と冷静のようですけど、それを聞いてわたくしが貴方を近づけるとでも?」

「だろうな。でも安心しろよ、そこまでほんの一瞬だからさ」

そして一夏は重心を落とし、腕を前方に突き出す形で構えを取つた。

セシリアは一夏のことを調べていた。しかし一点、どうしても調べられなかつたことがある。

更識流。

それはどうやら秘匿されるべきものであるらしく、代表候補生という地位にある彼女でも全く情報を得ることが出来なかつたのである。故に、セシリアは知らなかつたのだ。そして疑わなかつた。

更識流とは、対人戦闘にのみ使用されるものであると。

無言で一夏を見つめるセシリアの耳に、やがて小さなつぶやきが届いた。

「更識流四の型、

—— 雛罌粟ひなげし」

## #5 決着と第二試合

「一夏の奴、やっと気づいたか」

管制塔から試合の様子を見ていた俺は、一夏が更識流の構えを取ったことでようやくその事に気づいたのだと確信した。

更識流とは更識の初代当主が編み出したとされる柔術だ。当然その頃にはISなんてものは存在しなかったから当初は完全に対人戦闘に用いられる流派だった。だがしかし、更識流の特徴はその変幻自在にある。各当主が己の全てをつぎ込んで一つの技を追加していくこととなっているこの更識流は俺が当主を引き継ぐ時点で十六の型が存在した。その中でも特に完成度の高い七つにはその技の頭に奥義の名を冠し、更識流は現代までその流派を存続させてきたのだ。

因みに、俺はまだオリジナルの技は考えていない。

更識流は年月を経るごとに研鑽され、時代の波に合わせるようにして組み上げられた流派だ。それは一つの枠に因われない、故に変幻自在。

そしてこの更識流は、対人戦闘にのみ使用されるのではない。

これまでの先代当主の中には対戦艦、対戦闘機なんてものを考慮して編み出されたものが存在する。それは時代背景を考えれば別段不思議なことではないが、現代となつては使う機会などないだろう。俺もそう思っていた。ISというものが現れるまでは。

ISも戦艦も戦闘機も、無機物として一括りにしてしまえば根本的には同じだ。

つまり、更識流はIS相手にも使用することができる。更に、ISを操縦している人間を対象にしまえば、対人用の技を使用することも可能だ。恐らくは絶対防御やシールドエネルギーといったものに防がれるだろうが、直接的な攻撃であれば通じる可能性は非常に高い。

実際、俺がこれまでに対ISで使用した更識流のいくつかはしつかり通用した。

話を戻すが、一夏が気づいたのはISにも更識流が通用するのではないかという考えだ。

とは言っても一夏はまだ完全に更識の型を修得したわけではないので使える型は少なく、行方までのラグも存在する。

一夏が現時点で修得しているのは十六のうちの七つ。五年という年月でこれだけの数を修得できたのだから大したものだが、その七つの中に奥義とされるものはたった二つしかない。しかもその一つは完全に近接技。今の現状を打破するまでには至らない。

そこで一夏が使ったのが四の型、雛罌粟だ。

「あれは……、遠距離系の型か？」

「まあな。元は四代目が戦艦とかに対して使うことを想定して編み出したもんなんだが、ISにもどうやら効果はあったらしいな」

アリーナの様子を見てそう零した千冬にも分かるようにそう噛み砕いて話す。

千冬も更識流の型は幾つか目の当たりになっているが、どうやら雛罌粟を見るのはこれが初めてだったらしい。真耶に至ってはポカンと口を開けて固まってしまっていた。

「……さて、一次移行も済んだし、こっからが本番だな」



眼下で構えを取る一夏が動きを見せたのは、その数秒後のことだった。

その様子を興味深そうに眺めていたセシリアに謎の衝撃が襲いかかった。

(な……、一体何が……!?)

無防備な腹部に拳を食らったような感覚に、思わずセシリアの体勢が崩れる。空中で崩れた体勢を立て直したのと、背後に殺気を感じたのとはほぼ同時。そしてセシリアは理解はせずとも確信した。一夏が今この瞬間、方法は分からないが自分の背後を取っているということ。

ほぼ無意識のうちに取っていた防御姿勢。そこに一夏の攻撃が打ち込まれた。

「ぐっ……!?!」

あの雪片式型による斬撃ではない。そうであるならば、今頃視界の端に映るシールドエネルギーの残量は尽きている。

「打撃……? それも、更識流とかいうものですか……」

「ああ。更識流、五の奥義。飛花落葉ひからくようだ」

七つある奥義のうちの一つ、飛花落葉。

一夏が使える奥義のうちの一つであり、相手の表面に衝撃を伝える鎧崩しの技である。合掌した手を開きながらぶつける掌底で、IS相手に使える更識流奥義の最たるものと言える代物だ。

この飛花落葉と先程使用した雛罌粟。この二つが、現時点での一夏の攻撃手段だと言っている。十六ある更識流の中にはIS相手に使える技もまだ幾つかあるのだろうが、如何せん一夏はまだ修行中の身。七つの技しか身につけていない一夏には、これが精一杯だった。しかし、そんな事実はセシリアには分からない。

(先程の遠距離攻撃に加えて今の打撃……。更識流は生身でISに対抗するための武術ということでしょうか……)

そうセシリアが考えてしまうのも無理のないことだった。今見せられた二つの技に関して言えばIS相手にもダメージを与えられる。なら他の技にも同様の効果が、と思ってしまうのも仕方がない。

一夏にとっては結果オーライだが、この時点でセシリアは一夏の戦力を過剰に見積もっていた。

一定の距離を取りつつ、セシリアはスターライトmkⅢを構える。相手が想定以上の実力者であるというのなら、それ相応の実力で以てして対処すればいいだけのこと。

慢心など間違ってもしない。それが戦場で最も愚かなことであると知っているから。

再びその銃口から熱線が一夏に向かって放たれる。

幾重もの光線を躲し、一夏はセシリアに近づくと隙を伺っていた。

(くっそ、流星は代表候補生ってことか。微塵も隙が見当たらねえ)

さつき背後に回り込めたのはハッキリ言って運が良かっただけだ。出会い頭の一発みたいなので、相手がこの更識流を初見であったために出来たに過ぎない。ああして背後に回り込める何らかの移動手段がある、と相手に知られてしまった以上、常に背後にも警戒されるようになる。相手が単細胞みたいな人間であればそれでも良かったのだろうが、今回の相手、セシリア・オルコットは非常に冷静で優秀な操縦者だ。多分さつきのような不意打ちじみた攻撃は二度と通しないうらう。

となれば。

(やるしかねえってことか……!)

このままではいずれ白式のエネルギーは尽きる。いくら一次移行を終えて大幅にステータスが向上したとしても、エネルギーが尽きればその時点で敗北だ。それに相手も第三世代の新型。機体の性能差も乗り手の実力差で埋められ、こちらの不利な状況は変わらない。

こういった不利な状況を打開するには、二つの方法しかない。まだ小学生だった一夏は師匠に教わっていた。

『一夏。自分が不利な状況に追い込まれたとき、お前ならどうそれを打破する?』

『頑張る!』

『いやそれは当然だけどな。どうやって相手の策略から抜け出すかってことだよ』

『……………』

『おい耳から煙出てんぞ』

『むー。俺そんな難しいこと考えられねえよ師匠お』

『別に難しいことなんてないぞ一夏。こういう時はな、やれることってのはたった二つしかないんだ。ま、これは俺の持論だけどな』

『二つだけ?』

『ああ、それはな——』

『!? 正面から!』

セシリアは驚愕した。それは試合開始直後にも行なった特攻にも似た愚策。それは一夏自身も重々承知していた筈だ。

しかし、一夏は未だ攻撃の手を緩めないセシリアへと、最短距離で突っ込んでいった。

『——正面突破だ』

『は？ いや、追い込まれてるんでしょ？』

『追い込まれるってのはつまり後がない状況ってことだ、退路を絶たれて目の前には敵、左右に逃げ場は無し。分かるか？』

『それは分かるけど……』

『ほらよく考えても見ろ。左右後ろには道は無いが、前にはちやんとあるだろうが』

『敵がいるだろ敵が！』

『そんなもん薙ぎ払え』

『無茶苦茶だな師匠!!』

『その無茶を通さなきゃ勝てないくらいに追い込まれてんだろ？ その目で二つ目だ』

『二つ目ねえ、』

『——思考を止めるな』

『その直線攻撃は効かないと分かっているでしょう！』

セシリアの攻撃が、突っ込んでいく一夏へと降り注ぐ。如何に一次移行を終えた機体であったとしてもその全てを防ぐことは出来ない。だが、止まらない。身体のうちこちに熱線を掠めようと、決してその直進を止めることはしない。そして同時に、一夏の脳内では同じ言葉が反芻されていた。

(思考を止めるな、考えることを放棄するな。何かある、何かあるはずだ……！ セシリアの弱点、付け入る隙が……!!)

一夏の頬をレーザーの熱が焦がす。それさえ厭わずに、尚も一夏は愚直なまでに一直線にセシリアの元へと突っ込んでいく。

その様子に、セシリアは背筋にゾツとしないものを感じていた。

(何ですか……、何ですかその瞳は……！ まるで、まるで……!!) ここですべて初めてセシリアは気付く。

自分が一夏の放つナニカにあてられてしまっていることに。ギリツ、と彼女は奥歯を噛んだ。自身の想像を超えてくる男性。それは

彼女にとって大歓迎であり望むところだった。

しかし、自分が一夏相手に引いてしまっている。その事実が、何事にも変え難いほどに屈辱的だった。

（わたくしは代表候補生。何を恐れることがあるのでしょうか……！  
叩くべき相手は今、目の前にいるというのに！！）

セシリアの瞳に一夏同様、猛獣のようなギラついた輝きが灯る。

それを一夏も感じたのだろう。僅かに口角を吊り上げた。

一夏はセシリアへと近づきつつも決してその思考を止めることはなかった。限界まで脳を使い、出来る限りの情報を集めて、最善と呼べる攻略法を必死に模索していた。

そして思い至る。

彼女の、セシリア・オルコットの弱点とも呼ぶべき部分に。

「——っは、」

一夏は笑う。

「ふふっ」

セシリアも、笑った。

二人の距離が二十メートルを切った。

ここで初めて一夏は近接型武装、雪片式型を展開。セシリアもスターライトmkⅢを構え直した。

そして一夏の姿がセシリアの視界から消える。

「また先程の……！ 同じ手は二度食いません!!」

「そうかよー」

背後を取られた先程のようにはいくまいと、セシリアすかさず背後に銃口を向ける。案の定、そこには雪片式型を上段に構えた一夏の姿があった。

「獲りましたわ」

「そりや早計だぜ」

銃口を向けられていた場所から、再び一夏の姿が消える。

セシリアは内心でこれも更識流とかいう技の一つか、と考えつつ再び背後へと銃口を向けた。

だが、そこに一夏の姿はない。

「その武装。ぐるぐると振り回すには重すぎるみたいだな」

その声は、セシリアの上空から聞こえてきた。

彼女が上へと視線を移せば、そこには既に振り下ろす動作に入った一夏の姿。スターライトmkⅢは遠距離でこそその威力を発揮する武装。距離を詰めてしまえば、その長い砲身もあって振り回したり細かな動きをするには適さない。それが一夏の見つけた突破口だった。

それに必要だったのは先程セシリアの背後に回り込んだ技。更識流二の型、速歩だ。これは独特の足の運びをすることで移動速度を上げるもので更識の人間にとっては出来て当然の部類に入る基本的な型の一つである。

この型を使用することでセシリアの周囲を移動し、スターライトmkⅢの照準から外れると共に決定的な隙を突くことに成功した。

雪型式型を振り下ろし、一夏は己の勝利を内心で確信した。

が、振り下ろした雪型式型がセシリアのブルー・ティアーズに当たる直前、セシリアは好戦的な笑みを消してはいなかった。

「——お忘れかしら？」

彼女は続けて。

「わたくしの武装は一つじゃありませんのよー！」

直後、セシリアの周囲に漂う四つのビットから光線が一夏へと放たれた。



「馬鹿が……。セシリアの隙を突くことに必死になりすぎてあのビットのことすっかり頭から抜け落ちてたな」

「何だかんだで専用機に浮かれていたからな。どこかでやらかすだろうとは思っていたが、まさかこんな局面でやってくれるとは」

「ふ、二人とも厳しいですね……」

一夏の奴、前もってあれだけセシリアの機体、ブルー・ティアーズについて調べておいたのに肝心な所でハマしやがって。セシリアの隙を突くところまではいいい感じでこなせていたが、本来なら先にセシ



リアのビットを潰してから仕掛けなくてはならなかった。

とは言え、セシリアもどういう訳かビットを途中まで展開させていただけで攻撃に使用していなかったし、一夏がそのことを忘れてしまうのも無理はない……訳がない。

大体機体名にまで使われる武装の存在は普通は忘れない。

完全に一夏のミスだ。

「それにしてもオルコットさん。どうしてブルー・ティアーズを使っていなかったんでしょうか」

「さあな。大方一夏の出方でも伺って必要ないと判断したのか、最後まで取っておくつもりだったのか。どちらにせよセシリアの方が一枚上手だったな」

先の一撃で恐らく一夏のシールドエネルギーは殆ど削り取られてしまっただろう。

戦闘を続けるには苦しい量、雪型式型の攻撃が一度できるかどうか。

一夏にこの後の展開を左右できるような策があれば話は別だが、現状ほぼ勝敗は決したと言っている。セシリアのビットは六基とも空中に漂い、更に彼女に近づくのは苦しくなるだろう。更識の技もそう何度も頻発できるものではない。

「さて、どうするっ？」



（ああ、くそっ……。俺は馬鹿か、ブルー・ティアーズの存在を一時とは言え忘れちゃってたなんて……!!）

その結果かこの様だ。シールドエネルギーは残り二割を切り、このまま戦闘を続ければあと数分でエネルギーが切れる。雪型式型での攻撃を行おうと考えれば、実質あと一分あるかないかという具合だ。

四基のレーザービットと二基のミサイルビット。操縦者のイメージを反映、具現化することで、本来複雑な独立可動ユニットを操縦することを目的とした兵器。これがセシリアの主武装にしてブルー・ティ

アーズがその名を冠する所以の新技术。

一夏はこの事をはじめから忘れていたわけではない。寧ろこの武装あつてのブルー・ティアーズであると重々承知していた。

しかし、セシリアがスターライトmkⅢしか使用していなかったことと一夏自身が彼女の隙を突くことに全神経を集中させていたこともあり一時的にその事を見落としてしまっていたのだ。

結果、ビットの攻撃の餌食となった。

「どうしましたか？ わたくしのこのブルー・ティアーズのことは当然知っていますでしょう？」

「ああ。今ので嫌ってほども思い出させてくれたよ」

「あら、忘れていましたか？」

「セシリアがスターライトmkⅢばかり使ってたからな」

「全力でかかるとは言え、そう簡単に我が国の新技术を見せたりしませんよ」

そう言うセシリアの表情にはまだ余裕があつた。恐らくシールドエネルギーもまだ半分近く残っていることだろう。対し、一夏のエネルギー残量は僅か。

「さて、そろそろ幕引きといきましょうか」

セシリアはガシャン、とスターライトmkⅢを構え、周囲のビットの照準も一夏へと定める。

彼女の中では一夏の評価は上々、これなら問題はないという結論を下そうとしていた。流石はあの人の弟子、自身を相手にここまで持ちこたえ、あまつさえダメージを多分に与えたのだから。IS搭乗がこれで二回目だというのだから、今後の成長を考えれば一夏の今日の出来は充分にクラス代表足り得るものだった。

が、しかし。

セシリアはこの下そうとしていた結論を、書き換えなくてはならなくなる。

「…………ふう、」

一夏は一度深呼吸し、上空でこちらに銃口を向けるセシリアを見据える。

(まだまだ、まだ、終わっちゃいない。この現状、セシリアが圧倒的有利だったのは認める。それは俺の失態が招いた結果だ。だったら、その失敗は取り返さなくちゃならない……!)

見たところ、セシリアは六基のビットと他の武装を同時に使用することが出来る。それだけで厄介だが、二基のミサイルビットがそれを更に面倒なことにしている。ミサイルとレーザーとスターライト。この三種類の攻撃を何とかしなくては一夏の勝利はない。

やるしかない、一夏は単純にそう思った。

こうなってしまうってはセシリアの懐に潜り込むのは困難だ。少なくともあの周囲のビットを破壊しなくては碌に突撃も出来ない。

「……やってやる」

「? 何かおっしゃいましたか?」

ポツリと漏れた一夏の呟きに、セシリアが眉を潜める。

(俺がまだ代表候補生のセシリアに色んな面で劣ってるのは充分に分かった。だが……)

雪型式型を正面に構え、一夏は重心を落として。

「勝ちまではそう易々とやらねえ!」

残るエネルギー残量をほぼ無視する形で、一夏はビットを破壊すべくセシリアの立つ空中へと飛び上がった。

そしてそれから一分と十二秒後、試合終了のブザーが鳴った。勝者は――。



「終わったか……」

アリーナを出て行く一夏とセシリアの姿を視界の端に捉えながら、俺は管制塔内で小さく息を吐いた。

よくやった、と一言で言ってしまうばそれまでだが、もう少しやりようもあったのではないかと思う。ISの搭乗時間がたった二十分ということも加味すれば大したものだが。

「惜しかったですね、織斑君」

横でコーヒーを飲みながら様子を見ていた真耶がそう零す。

「オルコットさんのビットを四つ破壊したまではよかつたんですけど、」

「そこでエネルギー切れ。最後はオルコットも少し焦ってたようだったが、これが今のアイツの限界だろう」

「でもとてもISに乗るのが二回目とは思えないですよ」

「ま、そこはあの姉の才能が遺伝してるんだろう。……ってあれ、その姉は？」

ふと周囲を見回せば千冬がいないことに気付いた。おかしいな、試合が終わるまでは確かに俺の隣にいたんだが。

「あ、織斑先輩なら試合が終わったのと同時に出て行きましたよ」ということらしかった。

大方一夏の戻ったピットへと足を運んだのだろう。頑張った弟を労いに行ったのか試合内容を貶しに行ったのかは分からないが。まああんな態度を取っていても内心、心配していただろうし試合内容にはある程度満足しているだろうからそこまで一夏も精神的ダメージを受けることないだろう。……と思う。

さて、じゃあそろそろ俺も行くとするか。

「真耶、少し外すな」

「はい、もうハンガーに居るみたいですよ」

「サンキュー」

設置されたカメラの映像を確認した真耶がそう言うのを背で聞きつつ、俺は管制塔を後にしてハンガーへと向かった。

ハンガーに来てみれば、そこには既にISを展開した俺の妹、更識簪の姿があった。

簪が纏っているのは日本の第二世代型IS、『打鉄式式』。打鉄の後継機にあたり、機体データには姫無の専用機であるミステリアス・レイデイ、荷電粒子砲などの一部の武器データには白式のデータが流用されている。防御重視の打鉄とは異なり、徹底的に機動性に特化させた仕様となっており近遠距離の両方をこなせるようになってるのが特徴だ。

「よう簪。どうだ調子は」

「あ、お兄ちゃ……更識先生」

「もう放課後だからな、そのままでもいいぞ」

一夏には更識先生と呼べって言ったけどな。

そこはあれだ、兄妹だからだな。千冬が一夏に接する時と同じだ。

「調子は、悪くない……。でも相手が、ちよつと嫌……」

「ほんとなら俺が代わって叩き潰してやりた……。いや何でもない」

「ほとんど言っちゃってるよ、お兄ちゃん……」

おつと、無意識のうちに本心が漏れ出してしまっていたみたいだ。いかな、これでもこの学園の教師なわけだから、どんな生徒にも平等に接さなくてはいけないというのに。

簪は機体のデータに目を通しつつも、今から対戦することになる皿式鞘無のことを思っ少しげんがりしているようだった。簪が男嫌いということは俺や姫無、それと身近な人物なら知っていることなので（但し俺と一夏は例外。親父は例に漏れない）今更だが、やはり若干気後れしているのかもしれない。

そもそもこの試合は簪が望んだ訳ではなく、安形のバカと皿式が半ば無理矢理組んだ対戦だ。簪にしてみれば巻き込まれたも同然なのである。それに乗り気なの方がおかしいだろう。

「確かに男の人は苦手だけど……勝負するからには、負けたくない……」

それでも持ち前の負けず嫌いが発揮されているのか、簪はそう言って最終確認に入る。

この負けず嫌いが無ければ、原作の簪のように引つ込み思案で姫無に引け目を感じていたかもしれないが、うちの簪は姫無同様勝気だ。だからこそ打鉄式を三人で完成させたし、日本の代表候補生の中でもトップクラスと言われるほどの実力も身につけることが出来た。そんな彼女だ、どんな相手であれ、対戦するからには負けたくないのは当然と言える。クラス代表になるかどうか置いておくとしてだ。

「うん……、行ける」

確認を終えた簪は、そのままゲートへと進む。

アリーナのほうはまだ先程の戦いの余韻が残っているのか、観客席に座る生徒たちのざわざわとした声がここまで届いている。しかしそんな周囲の声は既に聞こえないほどに集中しているのか、簪はそれに特に反応を示さず、ゲートでふわりと浮き上がった。

そしてアリーナへと出る直前、簪は俺のほうへと振り向いて。

「行つてきます」

そう言つて微笑む妹に対して俺は。

「行つてい」

その言葉を聞いて、簪の纏った打鉄式は勢いよくアリーナへと飛び出していった。



簪たちの反対側のピットでは、準備を終えた皿式鞘無がその時を今か今かと待ち構えていた。

彼がその身に纏っているのはフランスが開発した第二世代型IS、ラファール・リヴァイヴ。最後期の機体であり、そのスペックは第三世代型初期にも劣らない。現在配備されている量産機の中では最後に開発されたものだが世界第三位のシェアを誇り、操縦しやすく汎用性が高いのが特徴だ。

本来であれば、彼には専用の機体が用意される筈だった。

しかし、急だったことと専用機の製作を認可してくれたのが倉持技研しかなかったこと、その倉持技研も白式の製作にかかりつきりであったこともあって完成を今日に間に合わせることでできなかつたのだ。

だがそうであるからといって、彼にはこれといった心配はなかつた。所詮専用機も訓練機も自分には大した差はない、何せ自分には――

「この能力があるんだからな」

最初は転生だのなんだのと絵空事だと思つていたが、こうして実際

にこの世界に来てみて初めてあの神とやらに感謝した。

転生の理由が双六だと聞かされた時は顔面を蹴り飛ばしてやったが、この能力をくれたのだから水に流してやらないこともない。

ラファールを纏った皿式は、そのままゲートへと向かう。

「よし。……まずは、今このアリーナに居る生徒たちに俺の実力を知らしめるところから始めよう」

先程まで行われていた織斑一夏とセシリア・オルコットの対戦は、その内容に大きな違いがあったものの原作と同じ結果となった。故にそこまで俺の存在はこの世界に影響を与えてはいないのだろうと推測する。イレギュラーな他のキャラたちは、きっと何かの誤差が組み合わさって生まれてしまっただけなのだ。

皿式はそう考え、僅かに口元を綻ばせる。

「さあ始めるぜ。ここから、俺の物語を！」

## #6 妹と四人目

皿式鞆無という少年がISを動かさせたことは、一夏とは違う意味で必然だった。

何せ、そうなるようにこの世界に生まれ、生活してきたのだから。IS学園。

この国立専門学校に入学することが彼の始めの目的であり、学園内で原作のキャラたちと親しくなり、交友を深めていくこと。そして最終的に、原作キャラの誰かとそういった関係になればいいと考えていた。

何せこの学園の女子生徒たちはモブであつても美少女ばかり。両手に余るとは正にこのことで、入学式の日は目移りしてしまつて不審に思われないよう振る舞うのが大変だったのは記憶に新しい。

彼の理想としてはクラスは一組がベストだった。

あのクラスには原作主人公である織斑一夏を始め、ヒロインたちが数多く在籍しているのだから。それに担任は織斑千冬に副担任が山田真耶。他のクラスと比べてその存在感は群を抜いていた。

しかし彼が割り当てられたのは一組ではなく、四組。どうやら転生とは言つてもそう簡単に思い通りに事は運ばないらしい。それならそれで構わないと思つた。障害があればあるほど燃えるのが男という生き物だし、四組にも一人重要な原作キャラが在籍しているのだから。

その少女の名は更識簪。

IS学園の生徒会長を姉に持つ、日本の代表候補生だ。

名字の読みが一緒だったこともあつて、彼女は鞆無の真後ろの席だった。先ず真つ先に思つたのは、原作で知るように物静かだということ。鞆無の知識の中では簪は優秀すぎる姉というものにコンプレックスを持ち、自分を卑下するような少女で、特撮モノが大好きだということくらいしか分からず、こうして目の当たりにするまでは彼女に対して漠然としたイメージしかなかった。

彼としては一組の箒やセシリア、後々転校してくるであろうシャル



ロットなんかと親密な間柄になりたいと考えていたが、簪を目の前にして彼の胸中では。

———アリだな。

他のヒロインたちが目立ちすぎるために埋もれがちだが、簪も十二分に整った顔立ちをしており、良い関係を築いておいてメリツトはあってもデメリツトは存在しないと鞘無はすかさず判断した。

そしてそれを実行する能力に彼は長けていた。というか、後先考えずに突っ走った。

『更識さん』

『……………なに?』

声を掛けてから数秒後、訝りつつも簪は鞘無へ返答した。

そのオドオドとした姿に内心で悶えつつも、決してそれを表には出さず彼は続けた。

『代表候補生なんだってね。俺は皿式鞘無、一年間よろしく』

『……………はあ、』

差し出した手を簪はしばし凝視していたが、やがてゆっくりと自らの手を差し出した。

握手した祭、簪の手がビクツと震えたが鞘無は深く考えず、満面の笑みを浮かべて満足そうに頷いた。

『そういうえば俺と更識さんで名字一緒だね』

『……………そうだね』

なんだか話すごとに簪の話すまでの間が長くなってきているような気がするが、鞘無は気にしなかつつも会話を切らず、

『名字が同じだと分りにくいからさ、簪さんて呼んでもいいかな?』

『え…………?』

『俺のことも鞘無って呼んでくれていいから』

『それは、ちよつと…………』

『あ、先生来たみたいだ。また後で話そう』

そう言うのと鞘無は前に向き直り、そしてこの試合の原因となる出来事が発生するのである。

因みに前に向き直った時の鞘無はたいそうやりきったような表情

をしていたが、その後ろで簪は握手した手をハンカチで擦り切れんばかりの勢いで拭いていた。



簪にとって、皿式鞘無という少年の第一印象は凶々しい。この一言に尽きる。

いきなり話しかけてきたと思えば握手を求め、あろうことか自身の意思を無視してこの試合を組んでしまったのだ。

はつきり言ってしまったえば、簪は今日の前でラファールを展開している少年のことが嫌いだった。

基本的に男性に対して積極的に関わろうとしない簪にぐいぐいと来る鞘無の存在は彼女にとってはマイナスしかなく、またどういう訳かはじめから彼のが気に入らなかつたこともあつて、現在簪の中で皿式鞘無という少年の評価は父である更識筭をも上回ろうとしていた。

『簪、準備はいいか?』

「うん、いつでも……」

打鉄式式の回線越しに訪ねてくる兄にそう答え、簪は今一度正面に立つ少年へと視線を向けた。

男性にしては長い茶髪の髪を肩口で切り揃え、濃緑のラファールを纏う少年は黙っていればイケメンだと判断できなくもない。間違つても簪はそんなことを思わないだろうが。良くも悪くも、少なからずブラコン気質だからである。

そんな彼の表面上に騙されてしまう女子生徒も、決していないとは言えない。

(……させない。この学園の生徒たちに、そんな酷いこと)

ガシヤンツ、と簪は身の丈程の武装を展開し正面に構える。

夢現(ゆめうつつ)。

近接武装である対複合装甲用の超振動薙刀である。これは高周波振動発生機をIS用武装の薙刀に取り付けたもので、刃の部分が超高

速で振動する。その振動によって物体を切削するのだ。

因みにこの武装は高速振動によって発生させた熱で相手の装甲を切断ではなく溶断することも可能だ。

それに対する鞘無は近接用のショートブレードを片手で構え、空いている方の手には何も持っていない。

不敵に笑う鞘無に、簪は若干カチンときたのか。

(……とりあえず、さっさと片付ける)

内心で秒殺を決意しつつ、簪は開始の合図を待つ。

そして管制塔から楯無の声アリーナに響くと同時に、両者は最短距離で突っ込んでいった。



「さて、どうなるかな」

「更識先生はどう思われますかあ？」

管制塔から試合の様子を眺めていると、俺の独り言に反応した隣の安形がこちらを見て問いかけてきた。

安形は俺よりも一つ年下の二三歳だが、なんかこうポヤヤンとした雰囲気的女性だ。常に笑っているというかほんわかしているというか、目の前を蝶が横切るとそれを追いかけてどこかへ行ってしまうというな、そんな空気を纏っている。そんな彼女ではあるが、実は元代表候補生だ。真耶と同期の彼女は国家代表にはなれなかったもののその実力はこの学園で教鞭を取るのになんら問題ないレベルである。

ふんわりとウェーブした腰ほどまで伸びた黒髪を揺らしながら、彼女は俺の返答を待っている。

「どうって、そりゃこの試合結果についてか？」

「はい」

「そりゃ簪の勝ちだ。百パーセントな」

「それは身内最良抜きで、ですかー？」

「最良なんてしてないさ。そんなもん抜きにしたってアイツは強いよ。それだけ努力してるし、目標がハッキリしてる分迷いもない」

「目標、ですか？」

「打倒姉、次は俺。なんだとき」

「ふふ、良い妹さんを持ちましたねえ」

「全くだ」

いつだったか、簪が俺に言った言葉を思い出す。

——今はまだ背中も見えないけど、いつかお姉ちゃんもお兄ちゃんも、超えてみせる。

そう言う簪の瞳は、これまでにないくらいに燃えていた。

そんなこと言うようになるまで成長していたんだなと嬉しく思う反面、簪の前に立ちはだかる壁に相応しく強いようと思った。それはきつと、姫無も同じだろう。

「何考えてるの？ 兄さん」

「……管制塔は教師以外立ち入り禁止なんだが？」

突如として背中に暖かい感触が伝わったかと思えば、聞き慣れた声  
が俺の耳元で囁かれる。

振り向かずとも誰か分かる、何せ俺の視界の端で水色の髪の毛先が  
揺れているのだから。

「そこはほら、会長権限よ」

「職権乱用しすぎだ」

「むう、いいじゃない。もう放課後なんだし固いことは言いつこな  
しってことで」

背中から俺に抱きついてきたIS学園生徒会長、更識姫無は俺の言  
葉も華麗にスルーして管制塔から出ていこうとはしなかった。

俺も別段強要するつもりもなかったが、姫無には口先だけの注意で  
あることなどお見通しだったようだ。全く、いつからこんな風に人を  
くったような性格になってしまったんだか。お兄ちゃん心配。

「あ、安形先生こんにちわー」

「ふふ、こんにちわ更識さん」

俺に抱きついたままの体勢で安形への挨拶を済ませる姫無。他の  
教師の前ではこんなことしないだろうが、安形がこんな性格なので姫  
無も猫を被ることをしないらしい。

「つうか、生徒会の仕事はどうした」

「……………」

「おいコツチ向けよ」

首を回して後ろを向けば、一瞬にして顔を背けられた。

これ絶対虚に仕事押し付けて逃げてきたな。後で虚にはきつくお灸を据えてもらおう。

「そ、そんなことより！ 簪ちゃん、どういう感じなの？」

自身も苦しい話題転換だと感じているのか俺と視線を逸らしたまま尋ねる姫無に俺はハア、と一度溜息を零してから答える。

「どうって言われてもな、今始まったばかりだぞ」

「でも簪ちゃんならアレくらい瞬殺できるでしょう？」

否定はしない。姫無の言うことは別に冗談でもなんでもなく、単純に簪の能力を推し量った結果出されたものである。

あの男、皿式鞘無がどういった経緯でISを起動させることが出来たのか全くの不明だが、どうやら束の差金ではないらしい。束とつい先日連絡を取った際もあの少年の存在を酷く嫌がっていた。それはまるで、昔の織村に対するもののような嫌い方だった。

やれアレはISを汚してるだとか、やれ刻んで解剖してやりたいとか。

そこはとなく昔の織村と同じニオイがしたのは、どうやら俺の気のせいではなかったようだ。

「ま、あの皿式くん、だっけ？ アレが何かとんでもない隠し玉も持っていたら話は違うかもしれないけどね」

ようやく俺の背中から離れた姫無が懐から扇子を取り出してそう言う。

開かれたそれに書かれているのは『即死』の文字。どうやら姫無もかなりあの男のことを毛嫌いしているらしい。いや、俺が言えた義理じゃないけれども。

「安形。彼の情報はある程度あるんだろう？」

「うーん、それがあ、身長体重の基本データや出身地くらいしかハッキリしたことは分からないですよねえ」

頬に手を当てて困ったわあ、と零す安形。

いや、お前担任だろうがもつとよく調べとけよと言いたくもなかったが、彼女に情報処理を任せること自体が間違いであることに気づいて言うのを止めた。彼女にパソコンなんて触らせたらナターシャのようになりかねないと判断したからだ。

「あ、簪ちゃんが動いた」

姫無の言葉につられて視線をアリーナへと戻せば、そこには近距離で戦う二機のISの姿があった。



(くっそ、速え!?)

鞘無は簪の攻撃速度に内心で舌を巻きつつ、必死にそれをブレードで防いでいた。

防戦一方。戦局など確かめるまでもなく、簪の一方的な蹂躪だった。

まず得物のリーチからして違う。

簪の使用する夢現と呼ばれる薙刀と鞘無のショートブレードでは、同じ近距離用の武装と言ってもその間合いが大きく異なるのだ。

鞘無は簪の振るう薙刀のリーチに飛び込まなくてはそのブレードを当てることは出来ないが、簪は鞘無の間合いに入らなくてもそのリーチを生かして攻撃することができる。

更に夢現は高周波振動を発生させており、その威力は通常攻撃の比ではない。一撃もらうごとに、鞘無のシールドエネルギーはぐんと減っていった。

そんな鞘無を正面に捉えつつ、簪は内心で呟く。

(……………弱い)

試合開始後すぐの何度かの攻撃を見て思っていたことだったが、この時点で確信に変わった。

この少年は、大したことがない。

先日教室であれだけ大きなことを言っていたのだから、その実力も

ある程度見合っているのだろうと踏んでいた簪だったが、これでは少し緊張していた自分がバカみたいだった。

———「こんなのが、お兄ちゃんや一夏君と同じ？」

———「冗談にしては、笑えない。」

スツ、と簪の眼が細くなる。

この程度で戦いを挑んできたのかと思うと、何だか馬鹿にされているような気がした。

攻撃の手を休めることなく鞘無のシールドエネルギーを削っている。

向こうもどうにかしようと画策しているようだが、折角ラファールに乗っていても武装をコンマ数秒で切り替えるラピッド・スイッチが使えないのでは大した驚異にはならない。武装切り替えの時間を与えることなく攻撃を続けていけば、いずれ向こうのエネルギーは尽きるのだから。

「……そろそろ、終わらせる」

「ああ!? そんなことさせないってーの!!」

まだ口を開く余力は残されていたのか、簪の言葉に鞘無はいたく反応した。

このままではいけないと判断したのか、多少のダメージは覚悟の上で鞘無は大きく後方へと下がった。簪がそうはさせまいと追撃するが、致命傷を与えるには至らなかった。

なんとか距離を取ることに成功した鞘無は、視界の隅に映し出されたラファールのシールドエネルギーを確認する。

（残り三三……。ちっ、油断した。まさか簪がここまで強いなんて想定外だぜ）

ショートブレードを量子変換して戻し、鞘無は簪へと正面から今一度相対した。

あの薙刀は非常に厄介な代物だ。こちらのブレードでは先のように一方的にやられてしまうし、かといって遠距離から確実に当てられる武装もない。というか、鞘無には射撃のセンスが皆無だった。

（……やるしかねえか）

鞘無としてはこんなところで使用する気は全くなかった。

神様から転生する際に貰った能力は確かに強力なものだったが、それ故に加減を間違えれば相手を傷つけてしまうと考えていたからだ。しかし、どうやらそうも言っていないらしい。

出来るだけ余裕があるように見せるために俯いて小さく笑ってみせる。本当は余裕なんてこれっぽっちもないが、女の子の手前カッコ悪いところを見せたくなかったのだ。

だが、能力の解放を決めた今内心でほぼ勝利を確信してもいた。あのチカラを使えば下手をすればISなんて吹き飛ばす。それほどまでに圧倒的な能力なのだ。

「……………いいよ、わかった。見せてやるよ……………」

俯いたまま、鞘無は口を開く。

「簪さんの強さに敬意を評して、俺も全力でお相手しよう」

「……………何を、言ってるの……………?」

訝る簪を尻目に、彼に自分の世界へと入り浸っていく。

「本当は使いたくなかったんだけどな。君があまりにも強いから、俺も奥の手を使わざるを得なくなりました。ああ、誇っていいよ。これを人間相手に使うのは君が初めてだ」

くつくつと笑う鞘無へ、簪は何か汚物でも見るかのような冷ややかな視線を向ける。

この少年は、一体何を言っているのだろう。まさかどこか打ったのだろうか。これまでの戦いぶりを見る限り戦闘においては全くの素人だということをとっくに見抜いていた簪としては彼の言うことの意味が全く分からなかった。

しかしそんな簪の視線には気づかず、鞘無は大仰に言った。

「これを使うと決めたからには、もう俺の勝ち揺るがない!」

そう言つて鞘無は右手を簪へと突き出した。

その手には、これと言った武装は握られていないが。

（あれは……………、コイン……………?）」

通常のコインのようなものではなく、その何倍もあろうかというサ



イズのコイン。それが鞘無の手に握られていた。

そんなもので、一体何をするつもりなのだろうか。疑問に思いながらも簪は夢現に代えて新たな武装を展開させる。

やがて鞘無を中心として、バチバチと紫電が発生しだした。

「電気……?」

「ああ、これは出来れば使いたくなかった。本当だぜ?」

腕を突き出したまま、鞘無はニヤリと口角を吊り上げる。

(学園のラファールに、そんな武装は無かった筈だけど……、)

それを目の当たりにしながらも、簪はどこまでも冷静に眼前の出来事を分析していた。IS学園に配備されている訓練機であるラファール・リヴァイヴには電撃を撒き散らすような武装は搭載されていない。基本的なブレードとライフルといった扱いやすいものだけが積まれていた筈だ。

そんな簪の思考を知ってか知らずか、ご丁寧にも鞘無は説明を始めた。

「これは言ってみれば単一使用能力みたいなものでね。ああ、と言ってもラファールのじゃないよ、……俺の、だ」

何やらイイ顔で言う鞘無。

今すぐ顔面に夢現を突き刺してやりたくなかったが、簪はそこを堪えて問いかける。

「あなたの、ワンオフ……?」

「ま、実際にはちよつと違うんだとうけど。そういう認識でいいと思うよ」

ちよつと何言ってるかわからないです、と思わずツツコミかけた。

単一使用能力とは専用機を持つ人間がその機体とのシンクロ率を上げることで使用可能になるその機体だけの能力のことだ。この境地に至るのはとても困難で、世界でも数える程度の人間しかその能力は使用することが出来ない。

それを、目の前の少年が使えると言っているのだ。確かにラファールに電撃系統の武装は無い。無いが、

「……あなたに単一使用能力が使えるとは、思えない」

「なら、その目で実際に確かめてみなよ……!!」

コイン、とコインが弾かれる。

舞い上がったコインは、やがて重力によって落下を始める。それに合わせるように鞘無の周囲の電撃も激しさを増していく。

——そして。

「超電磁砲って知ってるか!!」

手元へと落ちてきたコインを、鞘無は渾身の力で弾き出した。

超電磁砲。

フレミングの法則に則って、弾丸を音速の三倍の速度で射出する兵器。轟音と熱を周囲に撒き散らしながら突き進むコインが、簪へと襲いかかる。

「……え、知ってるけど」

「はっ。」

素っ頓狂な声を上げた鞘無が、超電磁砲ごと簪の荷電粒子砲によって消し飛ばされたのはその直後のことだった。

## #7 就任と新事実

「そんな訳で、クラス代表は一夏に決まった」

『いやそっちはいいんだけどよ。お前の妹が戦った四人目の方……』

「ああ、ハッキリ言っているのか？」

『やめてくれ……、言わんでも分かっている』

「まんま昔のお前だ」

『言うなっつってんだろがアツ!!』

クラス代表決定戦が行われた日の夜。

俺は自室で電話機片手に今日の試合の映像データに目を通していった。電話機越しでも分かるほどに声を荒げている俺の友人は、恐らくは昔の自分と己を重ねてさぞ悶えているだろう。

「映像もそっちに送ってやろうか」

『お前俺を殺す気か』

ニヤニヤと笑いながら俺はそう告げる。

いや、送る気は更々ないけど。もし送れば恐らく海の向こうに居るコイツはこの学園まですっ飛んで来るだろう。

まあコイツが何事もなく帰って来れるとは思わないが。

「それはともかくとしてだ。どうだそっちは」

話題転換として俺が切り出したのは向こうの近況。

こうしてたまに連絡を取ることはしているが、もう何年も顔を合わせではない。テレビ電話なんてものもあるから顔を見ようと思えば出来ないこともないのだが、そこまでする必要も感じていないのだ。というか男同士がテレビ電話を使うってのに何か抵抗を感じるからなんだが。

『ああ、もうじきナタルの新しい専用機が完成するぜ。専用機つつうか、テストパイロットに選ばれただけなんだけどな』

「そりや良かったじゃないか。さぞ喜んでただろう？ ナタルの奴」

『一晩中騒いでたよ……。おかげでこっちは睡眠不足もいいとこだ』

「オイオイ。……避妊はしっかりしろよ？」

『そういうのじゃねえよッ!!』

「話を戻すが」

『お前が逸らしたんだけどな』

相も変わらなず騒がしい奴だ。こういう所は昔から変わらないな。

「それで？　いつくらいになりそうだ」

俺の質問に、電話の相手、織村一華は暫し考えてから。

『早ければ臨海学校、遅けりや夏休み前まで押すかもしれないねえ』

「そうか」

その返答に、俺は小さく息を吐いた。

出来れば臨海学校までに間に合ってほしいが、こればかりはどうしようもない。向こうの技術者たちに頑張ってもらうしかないのだ。

『俺は別にいつでもいいんだけどな。ナタルの方が時間を食ってる』

「前の専用機はどうしたんだ？」

『ソイツのコアが使われてる。新機体にな』

「アレ解体しちまったのか？　モンド・グロツソじゃ大活躍だったのにな」

織村の話聞いたところ、ナタルがこれまで使用していた専用機は解体されてコアを新機体に使われるらしい。乗り手は変わらないので初期化する必要があるのかどうか俺には分からないが、機体に馴染ませる期間も考えると成程臨海学校に間に合うかどうかということころだろう。

『ナタルも最初は渋ってたんだけどな、上層部からの命令じゃ流石にどうしようもない』

「アメリカの国家代表も政府には逆らえないか」

『いやめっちゃ食ってかかってたけどな』

そう言われ、ナタルが政府へ乗り込んで反発する姿が簡単に想像できて思わず笑ってしまった。

今やナタルはアメリカだけでなく世界中に知られる一流のI S操縦者。その専用機を解体すると決断した政府もかなり苦汁の決断だったのだろうが、ナタルもそれが分からないほど無知でもないだろうに。

余程その機体に思い入れがあったんだろうな。

『今はテストパイロットに選ばれたから落ち着いているけどな』

「そりゃ政府も気の毒だな」

『まあそれはいいんだけどよ……そっちの四人目、ちよつと気になるな』

声のトーンを幾分か落として織村は話す。

そこにこれまでのふざけた様子は感じられず、あるのは疑うような声色だけだ。

そんな織村が言うように、確かに四人目の存在には俺も前から気にはなっていた。原作ではたった一人しか存在しなかった男性IS操縦者。それがこの世界では四人もいるのだ。俺や織村みたいなイレギュラーを除けば一夏だけなんだろうが、そこに割って入るかのよう  
に現れたのが今日簪と戦った四人目、皿式鞘無である。

「一応ウチの連中に探りを入れさせたが、おかしな点は見当たらなかった」

『おかしな点が無い……つてのは逆に怪しくないか？』

「俺も不信には思ってるけどな、何も証拠や根拠がないんじや手の出し用がない」

少なくとも、今はまだ。

試合映像の中の少年に視線を落としながら、俺は内心でそう呟いた。



翌日の放課後。

昨日の興奮冷めやらぬといった一年四組の少女たちは、一年生用の食堂でクラス代表就任パーティなるものを開催していた。その参加率は驚異の百パーセント、担任の安形まで参加しているという。仕事はどうしたとか言っ  
てはいけない。彼女の性格を考えれば投げ出してきたことなど容易に想像できるのだから。

「という訳で、皿式くん、クラス代表おめでとー！」

パンパンッ！ とクラッカーが勢いよく鳴らされる。食堂の一角で色とりどりの紙テーブルが宙を舞った。

三十人が大きめの円形テーブルを五つほど使って行われているこの就任パーティ。その主役と言っても過言ではない少年、皿式鞆無は中心のテーブルに付いてオレンジジュースが注がれたグラスを片手に居心地悪そうにしていた。

居心地が悪いと感じているのは鞆無一人で、残りの生徒はこのパーティを楽しんでいるように見える。

が、鞆無としてはこの就任祝いが自身を遠まわしに否定しているように感じてならなかったのだ。

あれほどの事を宣っておきながら、いざ試合が始まってみればものの数分で撃沈。あの時の観覧席の生徒たちの表情が、今でもハッキリと脳裏にやきついていている。

（クソがッ……、想定外にも程があるだろ……！ 何であんな簪が強くなってるんだ！？ 原作じゃこの時点ではまだ大したことなかっただろう!! 隠し玉の超電磁砲も通用しなかったし、いやアレはきつと無意識のうちに力をセーブしちまってただけだ。人に向けて撃つなんてしたことなかったからな。そうに違いない、そうに決まってる）

呪詛のようにブツブツと口から出てしまっているということに鞆無は気がつかなかった。

周囲にいた数人の女子生徒がそのあまりの暗さにギョツとしているが、そのことにもやっぱり鞆無は気づかない。

「さ、皿式君？」

「どうしたの？」

流石におかしいと感じたのか、彼の隣に座っていた生徒二人が鞆無の顔を伺いながら話しかけた。彼女たちからしてみればただ気遣っただけだったのだが、鞆無にはそれさえも勘繰ってしまった。

——どうせ心の中じゃ俺の醜態を嘲笑ってんだらう？

「……いや、何でもない」

必死に内心を押し殺し、努めて冷静にそう答える。

「大丈夫？ 元気ないみたいだけど」

「このパーティーは皿式くんが主役なんだから！ もつと盛り上がらないと!!」

そうやって女子生徒の一人が鞆無の前へとお菓子を持ってきた。よく見るポテトスナックだ。

それを一つ取り、口へと放る。

(……そうだな。こんなことでいつまでもウジウジしてても始まらない。まだ四月、物語はここから始まるんだ。これまで十五年も待った、この程度のミス、どうってことねえ。幾らでも取り返してやるさ、俺のあのチカラできつと)

単純というか素直というか。

この時点で鞆無の頭から昨日の敗戦のことなど八割方頭から抜け落ちていた。

「……………」

そんな鞆無を二つ隣のテーブルから見つめるのは、昨日の対戦者である更識簪。彼女はジトツとした視線を彼に向けていた。相も変わらず、皿式鞆無という少年のことが気に入らないらしい。というか、昨日の対戦のせいでそれはより顕著になったように思われる。

簪にしてみればクラス代表になどなりたくなかったし、あの対戦も向こうが無理矢理組んだものであったので勝利したあと、クラス代表は鞆無に任せるということは伝えておいた。

元より人前に立つということを苦手としている簪にとって、クラス代表というのは荷が重すぎた。

(……早く、終わらないかなあ)

簪としてはこの就任パーティーに参加するつもりはなかったのだ。

しかし、放課後になった際に担任である安形に捕まり、周囲の女子生徒たちに連行されるようにしてこうしてこの場所にやってきてしまった。ノーと言えない自分の情けなさに内心で泣きつつ、簪は目の前のコップを傾ける。

すると。

「更識さん」

「更識さんって更識先生の妹さんなんだよね？」

丁度簪を挟むようにして座っていた二人の女子生徒が話し掛けてきた。

「うん……、そうだけど」

「ねえねえ、更識先生っていつつもあんな感じなの？」

「あんな感じ……？」

質問の意味が理解できなかった簪は、コテンと首を傾げる。

「ほら、なんていうのかなあ。こうクールな感じっていうか」

「凛々しいっていうか」

そう言つて二人はきやいきやいと盛り上がっていく。

——クール？ 凛々しい？ 兄さんが？

言われてみれば確かに学園での兄はそういった風に見られるかもしれない。いや、あの兄のことだから生徒たちからはそう見られるように印象操作しているのかもしれないが。

簪の知っている兄、更識楯無は妹思いの良き兄であり、同時にこの世界で最も強く、頼りがいのある人間だ。しかし必ずしもクールや凛々しいといった印象ばかりではない。友人たちとは笑いながら会話をするし、たまにドジをして怒られることもある。

「……皆、兄さんのことそういう風に見えるんだ」

「つて言うと、更識さんからはどう見えるの？」

「……可愛い」

「はっ」

突拍子のない簪の発言に、二人は呆けた声を出してしまった。

「可愛い？ 更識先生が？ カッコイイじゃなくて？」

「うん、可愛い……」

「ぐ、具体的に、どの辺が？」

「……見た目？」

「いや、それはないでしょ」

簪とて可愛いと言ったことにハッキリとした根拠があるわけではないのだ。ただ、なんとなく。理解しているというよりは本能の部分でそう感じているのだろう。

そんな訳で、今正に詰め寄らんとしてくる二人の同級生に対しても



明確な答えが出せる筈がなかった。

「……更識さんてさ、もしかしてブラコン?」

「……………え?」

ふと思ったように問いかけた少女は次の瞬間、一瞬前の自分の愚かさを呪った。

そこに居たのは今の今まで可愛らしくジュースを飲んでいた更識簪ではなく、背後に何かドス黒いものを纏わせた修羅だった。

「え、えーと、更識さん…………?」

「今何て言ったのかな。よく聞こえなかったからもう一度はつきり言っただけだよ」

いつものオドオドしたような口調ではなくハキハキとした物言い。今度こそは簪がぐいっと詰め寄る。

この瞬間、二人は悟る。

——あ、これ地雷踏んだわ。

しかし、気付いた時にはもう遅い。

本人に自覚が全くなかったために余計に質の悪いブラコン少女が、二人の女子生徒を死地へと誘っていった。

後日、その様子を遠目で目撃していた四組の少女たちは口々に言っただ。

——アレはもう、見てられなくて。

——ええ、まるであれは甲羅の割られた亀のような…………。

——あの一带だけ、何故か真っ赤なペンキがブチ撒けられていて。

——目の錯覚でしょうか、更識さんの背後に、邪悪な何か…………。

巻き込まれた二人の少女は、翌日保健室で一日を過ごした。



四組のクラス代表就任パーティより数時間後、夕食を摂り終わった一組の生徒たちも四組と同様クラス代表就任パーティを開催しよう

と食堂を借り、適当にお菓子やジュースを持ち寄っていた。

夕食後ということもあつてそのまま食堂に残っている生徒が大半であり、今この場にいない生徒も部屋に食料を取りに行っている生徒たちばかりだ。

さて、そんな和気あいあいとした空気の中、どういう訳か俺はこの場に呼び出されていた。

「つたく……、こちとらまだ仕事残ってんだぞ」

「まあまあ、こつというのも良いじゃないですか」

俺と同様に呼び出されていたらしい真耶が机を運びながら笑う。

いやさ、真耶はこのクラスの副担任だから別にこの場にいたって不思議じゃないが、俺直接的には関係ないからな。

「そういえば先輩も呼ばれてたと思うんですけど」

「千冬か？　仕事は片付けてたと思うけど」

まあ千冬はあまりこついった事には積極的な方ではないし無理もないが。

そうこうしているうちに準備が完了したらしく、一組の生徒たちは各自配られた紙コップを手にとって一夏へと視線を向ける。

これはアレだろう、何か一言言ってから乾杯する流れだ。

というか、アレ？　何か一夏とセシリアの距離が近くないか？　一夏の隣に座るセシリアとの距離はほぼ無い。二人の肩はもろに触れている。

これはもしかしたら落ちたのだろうか。セシリア・チョロコツトさんになってしまったんだろうか。心なしかセシリアの頬が紅潮しているようにも見えるが。

などと考えているうちに一夏が無難な目標を言って乾杯となった。俺も参加している立場上真耶と乾杯し、そのままこの就任パーティの動向を見守ることにして周囲を見回す。

一夏はなにやらセシリアとの距離が近いことに違和感を感じているようだが、これといった反応を示すことなく彼女と会話している。そんな一夏の逆隣では、箒がもくもくと饅頭を頬張っていた。

「あれ、更識先生じゃないですか」

不意に聞こえた声に俺がそちらへと向けば、そこには見知った生徒がメモ帳片手に立っていた。

「黛か、どうしたんだ？」

「どうしたって、そりゃあ取材に決まってるじゃないですか。何せ世界で四人しかいない男性のI S操縦者ですからね」

黛薫子。

I S学園の二年生で新聞部の副部長の少女だ。因みに姫無と同じクラスで仲が良い。

主に情報を売買する取引相手として。以前姫無とコイツが俺の写真を売り買っていたのを目撃したことがある。当然没収したが。

「ん？ てことは四組にも取材に行ったのか？」

「あー……、あつちのクラス代表は何か癩に触るんで行ってないです。こつちのほうがいい記事書けそうなんで」

そう言っつてシャーペンの先で額をかく黛の顔には、はつきりと『行きたくない』と書かれているように見えた。

「まあ取材熱心なのは関心だが、あんまし根掘り葉掘り聞くなよ？」

「それは先生と織斑君が師弟関係にあることとかですか？」

「オイ待てどつからの情報だ」

「姫ちゃんですけど」

思わず頭を抱えなくなった。

いや、別に隠しているわけではないから何時かは知られる時がくるとは思っていたが、よりにもよって黛に知られてしまうとは。

「おい黛。間違つてもその事記事にするなよ？」

「それはコレ次第ですねー」

そう言いながら手親指と人差し指で丸を作つて手の甲を下にする黛。その動作をそのままに受け取れば『カネ』になるが、この少女の場合は相応の情報である。

「……よし、一夏を売ろう」

「買った!!」

「ちよ、師匠おツ!!」

俺の言葉に、会話が聞こえていたらしい一夏がガバツと立ち上が

る。すまん一夏、背に腹は代えられんのだ。

「よし、そんな訳で織斑君に取材だー!!」

瞳を輝かせた黛は俺に一度頭を下げ、それから一夏の方へと向かった。一夏よ、変なこと口走るんじゃないぞ、一瞬で誇張されて記事にされるから。

売った身ながらそんなことを思っていた俺は、自身の紙コップ片手にぼんやりと天井を見上げるのだった。

あー、そういえばアイツから連絡来てるんだった。



「はーい、そんな訳で織斑に突撃インタビューでーす!」

「すいません黛先輩突拍子無さすぎです」

メモ帳片手に一夏のテーブルまでやって来た黛は箒の隣に腰を下ろし、シャーペンをくるくると回しながら一夏への口撃を開始しようとしていた。

「あ、オルコットちゃんにも取材一緒にするからよろしくねー」

「分かりました」

「セシリア順応早いな……」

黛と元々面識がある一夏でさえこのノリについていくのに苦労しているというのに、初見で対応してくるとは英国貴婦人の余裕というやつなのだろうか。

「さてと、先ず織斑君ね。クラス代表になったわけだけど、どう今の気持ち持ちは」

案外まともな質問が来たことに驚きと安堵を覚えつつ、一夏は暫し考えてから口を開いた。

「正直何で負けた俺が代表になつてんのか分からないですけど、任命された以上は頑張りますよ」

「何か面白みに欠けるなー」

「いや面白さとか求めないでくださいよ」

「まあいいや盛るし」

「ちよつと!？」

「大丈夫だーいじよーぶ。……………ちよつとだけだから」

「その間はなんだ」

先輩であるということも忘れ、一夏は黛へと詰め寄る。

しかし、詰め寄られたところで新聞部副部長は止まらない。

「まあこういった質問はこれくらいにして、次は読者が知りたがっていることを聞いていこー」

何やらメモ帳に書いていた黛がそう言って新たな質問を次々に投げっていく。一夏も段々と慣れてきたのか、最初程狼狽えることなく受け答えしていった。精神的にはガリガリと削られていつているが。その間ずっとセシリアとの距離が近かったことには、誰も突っ込まなかった。

「んー、じゃあ最後の質問かな」

聞きたいことは一通り聞けたのか満足げな笑みを浮かべる黛に対し、根掘り葉掘り聞かれた一夏は若干やつれている。

「ずばり、今彼女はいますか?」

「いませんよ」

「えー? ほんとに? はっきり言うけど、この学園にいるってハーレムじゃない?」

一夏の答えがお気に召さなかったのか、黛は眉を顰めてそう零す。

確かに彼女の言うことも間違いではないし、実際一夏の親友である五反田弾は一夏の状況を酷く羨ましがっていた。

が、しかし。一夏にとっては周囲が女子で溢れているようが関係ないのだ。

「傍から見ればそうかもしれないけど、俺にとっては関係ないですね」

「そりやまたどうして?」

そんな黛の質問に、一夏は平然と言ったのけた。

「だって俺、好きな人いますから」

ピツシイッ!! と一夏の横で何かが割る音が聞こえた。

## #8 回想と決意

「だって俺、好きな人いますから」

そう平然と言つてのける一夏。

そんな彼の発言に対して、周囲はたつぷりと三秒間沈黙した後。

『——っええええええええええっ!!?』

ほとんどの一組女子生徒たちの口から、到底少女のものとは思えない叫び声が轟いた。

その殆どに含まれる生徒の一人、セシリア・オルコットの顔からは表情というものが消え失せ、こつそりと一夏を狙っていたと思われる少女たちからは驚愕と絶望の色が濃く漂っている。

質問した張本人、黛薫子も一組の少女たち程ではないにしろ十二分に驚いていた。まさかこんな情報を得ることができるとは思っていなかったというのもあるが、それ以上に一夏に好きな人がいるなど思ひもしなかったのだ。

しかしいつまでも驚きで固まっているわけにはいかなないと気を取り直し、未だ周囲には絶望する少女が多い中薫は更に質問を重ねる。

「そ、その好きな人とは付き合ってるの?」

「まさか、彼女はいないって言ったじゃないですか」

質問にそう答える一夏は自嘲的な笑みを浮かべていた。

今更ながら照れくさくなってきたのか、居心地悪そうに頬を搔いている。

「その人に想いは伝えないの?」

踏み込みすぎだ、と思われるかもしれないが、そこを思い切つて黛は聞いた。新聞部副部長としてこんなネタを逃す手はないと必然シャーペンを握る手にも力が入る。

そしてそんな質問に対して、一夏は答えた。

「いや、俺一度振られてるんですよ」

本日二度目の衝撃が一組の女子生徒を襲った。

◆

一夏とその少女が初めて出会ったのは、一体いつだったのだろうか。正確な年月までは一夏にも分からない。ただ、気づけばそこに彼女はいて、気づけば一夏は恋というものをしていた。

始めはただぼんやりと彼女を目で追っていた。その理由もわからないままに、ただ漠然とその少女を視界に収めていた。

『貴方が織斑一夏君？』

『はい、そうです』

『よろしく。私は――』

確かそんな会話をしたのが最初だったのではないかと思う。

一夏は小学生時代とある事件に巻き込まれたことを切っ掛けに、姉の友人であった男性に師事を乞うた。その人物こそが世界初の男性IS操縦者としてその名を知らしめることとなった更識楯無であり、後の師匠となる人だった。

強くなる。一夏の心にあったのはたったそれだけの誓い。

守られてばかりじゃ自分は何時まで経っても強くはなれない、自ら行動を起こさなくては。そう考えてたどり着いたのが、更識楯無の下での修行だった。

基礎体力作りから精神統一、果ては更識の人間以外では教わることは出来ない更識流までもその身に叩き込まれた一夏だが、その修行はひたすらに厳しいもの。たった一人でこの修行に取り組んでいたら、もしかしたら逃げ出していたかもしれない。

そんな辛く苦しい修行をこなす事ができたのは、修行をしていたのが一夏一人ではなかったからに他ならない。

一夏の他に楯無から稽古をつけられていたのは二人。

彼の妹である更識姫無と簪という少女たちだ。

自分と同年代である少女たちが自分よりも厳しいメニューをしつ



かりとこなしているのに、自分だけがへこたれているわけにはいかないと必死になって最初の一年は彼女たちに食らいついた。

その日の稽古が終わると道場で倒れこみ、そのまま眠ってしまうことも少なくなかったが、それでも決して根を上げることとはしなかった。

強くなる、そう決意した自分と、二人の少女たちに負けないために。稽古を楯無に付けてもらうようになってから約一年して、ようやく一夏は一日のメニューを倒れることなくこなせるようになった。

平日は学校があるために稽古を付けてもらうのは基本放課後と休日なのだが、楯無が所用でいない時も同じメニューを一夏は欠かさずに続けていった。

一年半が経って、一夏のメニューは楯無や簪たちが行うものと全く同じものになった。

二年が経って、メニュー量が倍になっても一夏は確りとかなせるようになった。この頃になると楯無や簪との組手も行うようになった。初めは全く歯が立たなかったものの、更識流なるものを楯無から教わるようになった一夏の成長は早く、更識の人間とは良い勝負が出来るまでになっていた。

そして一夏が更識の元で稽古を初めて三度目の春が訪れた頃。

更識楯無は、一夏の前から忽然と姿を消した。

いつものように更識の家へと出向き、稽古をつけてもらおうと何時も楯無のいる部屋へと向かったが、そこには楯無の姿どころか、衣類などもごっそりと消えていた。

最初は今日は師匠いないのか、などと考えていた一夏だったが、それが一週間、一ヶ月と続いたところで流石におかしいと思いつつ年上の少女、楯無へとそのことを問いかけた。

『ああ、兄さんならどこかへ行っちゃったわ』

『どこか？』

『ええ、何か事情があったみたいだけど私や簪ちゃんにもその事は話してくれなかった』

ああでも、と楯無は続けて。

『心配しなくても大丈夫よ。兄さんのことだからまた帰ってくるだろうし』

そこまで言って、姫無はニヤリと意地の悪い笑みを浮かべた。

『一夏君の稽古は代わりに私がつけてあげるから』

一夏とたつた一つしか年の違わない姫無だったが、その実力は段違いのものだった。

兄である形無がいなければ、彼女が楯無を継いでいただろうと更識の人間が納得するほどに。

『いい一夏君。兄さんは更識流のことを貴方に教えたわ。それはつまり、貴方を信用してることなのよ』

『信用……?』

『更識流は門外不出。幾ら千冬さんの弟だからって、普通なら絶対に教えることはしないわ』

一日の稽古を終えて道場の掃除を三人でしている際、唐突に姫無はそう口を開いた。

『だから、一夏君』

動かしていた手を止めて、姫無は一夏へと顔を向けた。その表情はいつになく真剣なものだった。

『兄さんの期待に、きちんと応えてね』

そう言って、彼女は微笑んだ。

この時、姫無中学二年生、一夏と簪は中学一年生。

そしてこの時、初めて一夏は他人の笑顔が美しいと思ったのだ。

『うらあっ!!』

『甘いわよ一夏君。——更識流、すみれ董』

『うわあッ!』

『ダメよ一夏君、牡丹はもつと腰の回転を加えないと。軸がブレると今みたいに簡単に投げられちゃうわよ?』

『くっそ……、この前簪にやられたのはそういうことか』

『あら、簪ちゃんにも?』

『今の姫無さんと全く同じようにやれましたよ……』

『そんなんじや奥義の修得はまだまだ先になりそうねー』

道場に大の字で倒れ込んで一夏に手を差し伸べながら、姫無は人の悪い笑みを浮かべる。そんな彼女の手を若干頬を赤らめながら取った一夏は起き上がり、再び稽古が再会された。

この頃になつてくると男女の体格差というのは顕著になつてくる。簪はまだそれほどでもないが（以前簪にそれとなく言つた一夏の頬に見事な手形が付いた）、姫無はそれなりな体型になりつつあった。膨らみだした胸や腰周りなど女性の中でも秀でており、それが視界に入るたびに、一夏は気まずそうに視線を逸らす。所謂、思春期というやつだった。

組手をする度にはだけの胸元が気になつてしまい、この頃の一夏は姫無に全く適わなかった。いや、実力的にも当然ではあったのだが。そんな一夏も、更識での稽古が四年目を迎える頃には体つきも逞しくなり、更識流も徐々に使いこなせるようになってきた。

『ふッ!!』

『っ、甘いわよ!』

『まだまだあ! 更識流、木蓮!!』

『更識流、蒲公英!!』

ガンッ!! と一夏の膝と姫無の手刀がぶつかり合う。一夏の膝は姫無の腹部を、姫無の手刀は一夏の胸部を寸でのところで捉えきれていなかった。互いに瞬間的に腕や足で防御したからだ。

数秒間そのまま膠着していた二人は、同時にバックステップで距離を取った。

『……やるじゃない。おねーさんちよーつと危なかったかな』

『あー……、ようやく一発返せると思つただけどなあ』

『でも格段に良くなつてるわよ。おねーさん嬉しいわ』

そう言つて姫無は一夏の頭を撫でる。

一夏よりも身長の高い姫無は若干背伸びしながら一夏の頭を撫で続け、そんな彼女に一夏は。

『や、やめてくださいよ子供じゃないんだから』

『んー? おねーさんからしたら一夏君なんてまだまだ子供よお』

ドギマギしながらそう言い返す事しか出来ず、それさえも姫無に言

いくるめられてしまったては、最早どうすることも出来なかつた。

この辺りから、一夏は姫無への想いを薄々自覚するようになっていった。

稽古に真面目に取り組みながらも、時折姫無の方へと視線が向いてしまう。ダメだ、集中できていない。そう内心で自分を戒め再び一夏は鍛錬へと向かうが、どうにも没頭しきれていない自分がいることにやり場のない想いを抱えていた。

そんな相談を受けたのは、一夏や姫無と同様に修行に励んでいた少女、更識簪だ。

一日の稽古が終わって縁側で水分を補給していた一夏の隣にやって来た簪は、そのままちよこんと腰を下ろした。

『……どうしたの？』

『どうしたって、何が？』

『何だか最近、稽古に身が入ってないような気がする……』

『うっ……、鋭いな』

『一夏君のことなんて、何でもお見通し……』

『お前エスパーか何か？』

横でそう言う簪は、少しだけ得意気にその胸を張った。

そんな彼女を見て、一夏は一言。

『簪、お前全然成長しないな』

『どこを見て言った？ 身長か？ 胸か？』

『いやそりゃあ……』

『胸だな？ 胸なんだな？ よし、殺す』

笑顔で額に青筋を浮かべてギリギリと拳を握る本来小動物系である筈の少女は、今に限っては般若を後ろに携える鬼と化していた。

これ以上はいけない。本能の部分で察知した一夏はその場で綺麗な土下座を決めて簪に許しを乞うた。

『全く……、まだ中学一年なんだから、これから成長するもん……』

自分の胸に両手を当てて俯きがちにそう零す簪。

——何この生き物超可愛い。

この時の一夏の紛れもない本心だった。

抱きしめたくなくなるような衝動に駆られながらも、彼女の心配してくれている気持ちを不意にする訳にはいかない。一夏は必死に己を自制し、最近の自身の心境を包み隠さず簪へと吐き出した。話している最中、彼女は口を挟むことなく、ただ耳を傾けていた。

が、その話を聞くにつれて、徐々に簪の蟀谷の辺りが引きつっていくことに一夏は気づかなかった。

そして話し終わって、簪は実の兄のような大きな溜息を吐き出した。

『……はああああああ、』

『な、なんだよ。そんな師匠みたいな溜息ついて』

『一夏君……、自分の気持ちにまで鈍感とかそれもう重症とかのレベルじゃない……』

ここまで言っているにも関わらず未だに自身の気持ちに整理がつかない一夏に代わって、簪は口を開いた。

これまで一夏自身全く無関係だと思っていた、その気持ちの名前を。

『その気持ちはね……、恋ってやつだよ』

その言葉を受けて、一夏は数秒間硬直。そしてその硬直が解けると、

『……ツ、恋イイイイッ!?』

素っ頓狂な声と共に大きく後ずさった。

『な、ななな！ 何で俺が恋なんか！ 大体そんなの!!』

『だって、お姉ちゃんを見ると、ドキドキするんでしょう？ 一緒にいると楽しいと思うんでしょう？ だったら、それはもう恋……』

『で、でも……俺が姫無さんを……？ 何で……』

『好きになる理由なんて、きつと無い……。人は知らないうちに人を好きになって、一緒にいたいと思うようになるんだってお兄ちゃんが言ってた』

そこまで言われて、一夏は顔を赤くして俯いた。手で口元を抑えて隠しているが、簪からすればゆでダコのように真っ赤なのはすぐに分かった。

この時、一夏はこれまでの事を思い出していた。

一夏が強くなると決意し、更識の門を叩いたあの日。初めて出会ったのが、彼女だった。まだぎこちなくそわそわしていた一夏に、門の向こうから出てきた少女は優しく問いかける。

—— 貴方が織斑一夏君？

—— は、はい。そうです。

—— ふふ、そんなに緊張しないで大丈夫よ。

—— 私は更識姫無、よろしくね。

ああ、そうか。

一夏の内心で、何かつつかえている物が取れたような気がした。これまでモヤモヤと溜まっていたものが全て落ちたような気がした。

道場で見える凛々しい姿も。

居間で見える家庭的な姿も。

学校で見かける優等生な姿も。

織斑一夏は、そんな彼女の全部を引っ括めて、—— 恋をしているんだと。

『……ありがとう、簪』

『え……？』

『お前のお陰で、自分の気持ちに気がついた』

『……よかったね。でも、いいの？』

『何が？』

小首を傾げる一夏に、簪は告げる。

『お姉ちゃんは今受験生。来年には、IS学園の寮に入るから暫く会えない』

『あ……、』

すっかり忘れていたらしい一夏は簪の一言で思い出した。

姫無は今中学三年生。受験生真っ只中である。彼女は兄の進路を辿ってIS学園への入学を希望しており、このまま行けば適正値の高さも相まって順調にIS学園へと進学することになるだろう。それが本人の希望なのだから、一夏が何かを言う資格はない。

しかし、そうなるこの更識の家から離れねばならなくなってしま

う。

IS学園は全寮制。しかも滅多なことでは外出許可は下りない厳しい規則がある。このままでは一夏が姫無と会えるのは年に一度あるかないか。

それは一夏にとっては耐え難いものだった。

頻繁に連絡を取り合うことくらいは出来なくもないが、彼氏でもなくてもない自分がそうするのはおかしいと一夏は項垂れる。

『……一夏君』

『何だ……?』

『私に一つ、名案がある』

ズビシッ！ と人差し指を立てて一夏へと見せる簪。

そんな彼女を見つめる一夏は素性に『?』を浮かべていたが、そんなことはお構いなしに彼女は言った。

『お姉ちゃんがIS学園に入学するまでに、告白しちゃえばいい』

一夏へと核爆弾が投下された。



「そそそ、それで?! 一夏君を振った相手っていうのは誰なの?!」

興奮気味にペンを走らせる黛に、一夏は苦笑しながら答えた。

「それは言えませんよ。俺とその人との秘密ですから」

「えー!? いいじゃないこの際なんだから!! クラスの皆も知りたがってるわよ!!」

新聞部副部長としてはこんな貴重なネタを逃してなるものかと必死に食い下がる。

一夏の周囲に居る女子生徒たちも気になって仕方がないらしく詰りめ寄ってきてきそうな勢いだが、一夏としてはこれ以上この話題を続ける気はなかった。

隣で灰になりつつあるセシリアのことは一先ず置いておいて、一夏はゴホンと咳払いしてから口を開く。

「俺の話はこれでおしまいです。セシリアにも聞きたい事があったん

でしよう？ そつちを優先させてくださいよ」

「ええ？ でもそのセシリアちゃんは横で燃え尽きてるんだけど」

「なんとかしてやってください」

「いや多分こうさせたのは織斑君だよ」

はあ、と一息零して黛は一夏へのこれ以上の追求を諦めた。

これ以上はプライベートなことであるし、本人たちの関係にとやかく言う気はない。ただ、一人の少女としては一夏の恋愛事情はひどく気になるものではあったが。

「しようがないね。じゃあ気を取り直して次はセシリアちゃんへの質問としようか」

先ずは彼女を復活させねば、ということとで奮起した彼女たちの努力が実を結んだのはそれから十分後のことだった。



「へー、一夏に好きな奴なんかいたのか」

オレンジジュースを飲みながら、俺は向こうのテーブルで盛り上がっていた話題のことを思い返していた。

一夏に好きな人か。うん、高校生なんだから別段普通のことだろう。俺だって千冬や東と付き合ったり関係を持ったりしたのはこのIS学園に居た頃だったしな。

しかし一夏を惚れさせるなんてどんな女の子なんだろうか。あの鈍感野郎を振り向かせるなんてきつと凄い気立てが良くて綺麗な子なんだろう。そうでなきゃ一夏が惚れるなんて有り得ない。何せ原作じゃ箒に鈴、セシリアにシャルロットにラウラと完璧なハーレムを作り上げておきながら誰にも靡かなかったのだから。

「ふふ、いいですねえ。青春って感じで」

「何だよ真耶。混ざりたいのか？」

「いえ、そういうわけじゃないですけど」

まあ確かに俺たちの青春と言われては生徒会時代のことしか思い出せないしな。



特に真耶は生徒会長を経験しているから、色々思うところもあるのだろう。

「……私も、織斑先輩たちに混ざりたかったかなあ、なんて」

ボソツと真耶が零した言葉は、一夏たちの大声で聞き取る事は出来なかった。

ふむ、でもどうしような。

もしも方が一無いとは思うが一夏の好きな女の子が姫無や簪だった場合。

………俺は自分を抑えきれない自信がないんだが、七割殺しくらいで勘弁してやろうか。まあ、ないとは思うけど。



ようやく質問地獄から解放された一夏は背もたれに背を預け、天を仰いだ。

瞳を閉じれば、鮮明に思い出される。恐らくは今まで生きてきた中で最も勇気を振り絞った、あの日の事が。

そして、それに対する彼女の返答も。

『ありがとう。一夏君の気持ちは、凄く嬉しい……』

——でも、ごめんね。

『私を振り向かせたかったら、先ずは兄さんより強くなって見せて。じゃなきや、私を守れないわよ?』

「くそ……、言ってくれるよなあ……」

姫無の兄、即ち更識楯無よりも強くなれ。それはつまり、世界で最強になれということと同義だ。無理難題にも程がある。

だが、一夏の瞳に諦めの色は一切無かった。

「やってやるさ……、惚れた女一人守れなきや、男として失格だ」

強くなる。あの日決意した一夏の心に、新たな決意が加えられる。強くなる。

——惚れた女を守るようになる為に。

## #9 代表と褒賞

四月中旬。

そろそろ遅咲きの桜も散りだそうかという頃。

俺は分厚い書類の束を広げつつ、生徒会室横の学年主任室で先の行事の予定を確立させようと各学年主任たちとの会議を行っていた。

「さて、これでようやくクラス対抗戦の日程が確定したわけか」

「そうですね。例年四月下旬に行われるんですけど、今年に限っては仕方ないですね」

「それにしても今年の一年生は個性豊かというか」

二、三年生の学年主任である教師たちが口々にそう零す。

確かに今年の一年生の面子は例年までとは異なり話題性に富んだ生徒が多い。一組代表は世界で三人目のIS操縦者である織斑一夏。二組代表は中国代表候補生である凰鈴音。四組には世界四人目となる男性IS操縦者の皿式鞆無。三組と五組は代表候補生が努めており、一夏たちに負けず劣らずの個性を有した生徒たちだ。

率直に言ってしまうえば、濃い。

今の二年生や三年生にも代表候補生は当然存在するし、実力も相応に高いことは確かだが、それでもやはり今年の一年生と比較しては見劣りしてしまう。

「大変ですね更識先生」

「言わんでください……」

「ふふ、黒執事と言えども苦勞しますね」

「それ関係ありますか？」

二年の学年主任を務める二十代後半の女性が茶化すように笑いかけた。

彼女は千冬や真耶のような実技の担当ではなく、座学が専門の教員だ。確かこの学園に来るまでは国立の大学院で学んでいた筈だ。そんな彼女は研究者よろしく白衣を纏い背中辺りまで伸ばされた黒髪を無造作に一括りにして束ねている。

俺がこのIS学園の教員になる前から勤めているので教師としては先輩にあたる訳だが、俺に対してはずっと敬語を使っている。どんな理由があるのかは知らないが、彼女は基本フランクなので敬語でもあまり気にならない。

「各国研究機関への手配は？」

「生徒会の方に回した筈ですが」

俺の問いかけにもう一人の女性が答える。

三年の学年主任を務める彼女はきつちりとスーツを着こなしたキャリアウーマンのような女性だ。少々お堅いところはあるものの生徒に対して優しく接することから人望も厚く、なにより教員から信頼されている。

「あー、てこと虚が処理してますかね」

「妹さんではないのですか？」

「アイツはそういう机仕事は丸投げしますから」

「生徒会長としてそれはどうなんでしょうか？」

はは、と苦笑を漏らさずにはいられなかった。

姫無は基本的に机仕事を嫌う。頭が悪いわけではないので、ただ単純に面倒くさがっているだけだ。おそらく虚がいなければ自分で処理するんだろうが、出来すぎる従者がいるのも困りものである。だからと言って本音みたいに仕事に全く手を付けないというのも問題だが。

「はあ、招待状の手配と座席の確保はこちらでやっておきます。組み合わせと時間の調整はお任せしていいですか？」

「わかりました。組み合わせは任せてください」

「時間の都合はこちらで付けておきます」

そう快諾してくれた二人に礼を言い、俺は広げた書類を片付けながら来月行われるクラス対抗戦へと想いを馳せるのだった。



一組と四組のクラス代表を決定するために行われた試合から凡そ

三週間。

そろそろIS学園での生活にも慣れて行動にも余裕が生まれてきた一夏の元へと、とある少女が向かっていた。

頭の高い位置で左右それぞれを結んである所謂ツイントールと呼ばれる髪型をした小柄な少女は、改造が自由とされているIS学園の制服の肩の部分をバツサリとカットしミニスカートのような短い丈にしていた。歩く度に揺れるツイントールが、今の彼女の心境を表しているように見える。

ルンルンと、いつそ鼻唄でも歌いだしそうな程に、少女はご機嫌だった。

この学園に入ったのは各国の専用機や開発状況を知り、本国へと情報を流すことが目的でそこに彼女自身の意思は全くと言って言い程反映されていなかった。

そのことに対して納得いかない、と若干は思ったものの、代表候補生なんてものはどの国も大体同じようなものである。対して抗議するでもなく、この少女はIS学園への入学を受け入れた。

そして、入学する数週間前、少女はそのニュースに驚愕することとなったのだ。

織斑一夏。世界で三番目となるIS適性を持つ男性の発覚。

その少年は、少女にとつてかけがえのない存在だった。

初めて恋をした少年だった。

家族の都合で本国へと帰ることになるまで、同じ時間を過ごした少年は、ISを起動させたことでIS学園への入学を余儀なくされた。

一夏や日本政府にも色々事情はあるのだろうが、ハッキリ言つて鈴音にはどうでも良かった。

また会える。初めて恋をした少年に、この学園で会うことが出来る。そう思つてウキウキで入学した彼女だったが、運命の悪戯かはたまた不運なだけなのか、尽く一夏と出会うタイミングをこれまで逃し続けてきた。入学式の際が一夏を発見することが出来ず、部屋へ行つてみようとすれば図ったかのように不在。休み時間は他の女子に囲まれるかいなか。

なんと今日に至るまで彼女が一夏のことを見たのはクラス代表を決めるセシリアとの試合と合同授業のみである。

これは余りにも不憫だ。彼女本来の性格からすれば周囲の女子など無視してズカズカと一夏に向かつていきそうだが、流石に合同授業でクラス代表である自身が規律を乱す訳にもいかず、結局今日に至るまで碌に話すことすら出来ないという状態が出来上がってしまったのだ。

まずい。

このままでは、非常にまずい。

これではいつか自分の存在を忘れられてしまうのではないか。そうなるってしまったては自分の初恋はそこで終了、想いを伝えることすら出来ずに失恋することになる。そうなるのだけは避けたい鈴音。

そんな彼女に、又とないチャンスが訪れた。

それは今から数十分前のこと、三時間目が終わった直後、担任の教師に呼び止められた時のことだ。

『あ、鳳さんちよつといい？』

『はい？』

『今日の放課後にクラス代表が集まる会議があるから、一組の織斑君にも伝えておいてもらえないかしら』

———これだつ！

今日の今日まで全く目立つチャンスを与えられなかった彼女にも、神様は平等にチャンスというものを与えてくれるらしい。鈴音はつい数分前まで呪っていた神とやらに手のひら返して感謝した。

これを機に一夏と再び関わりを持つことが出来る。何より自身と彼はクラス代表という同じ立場にあるのだ。少なくともこれから一年間はクラスは違えど顔を合わせる機会が増えるだろう。今日はその取っ掛りを生み出す日だ。

そして、話は冒頭へと戻る。

意気揚々と歩を進める鈴音は、やがて目的の一組前へと到着した。

これまで幾度となく前を通ったが、ドアを開くのは今回が初めてだ。若干緊張しつつ、鈴音はドアを開いた。

「一夏、いる？」

自分でも驚く程に小さな声だった。まさかここまで緊張していたとは本人も思っておらず驚いたが、よくよく考えてみれば数年ぶりの再会となるのだ。この緊張も無理からぬことだった。

そしてそんな小さな声でも、件の少年にはきちんと届いていた。

「鈴！ 鈴じゃないか！」

鈴音の姿を見つけた一夏は、周囲に集まっていた少女たちに一言断って目の前へとやって来た。

数年前の面影は残しつつも、ガツチリとした体つきは鈴音に男というものを思わせ頬を染めさせる。心なしか顔つきも精悍になったように感じられる。

——あれ、一夏ってこんなにカッコよかったっけ？

「どうしたんだ？ つうか、この学園に入学してたんだな！」

鈴音のドキドキはしかし、この一夏の一言によって吹き飛んだ。

どうやら信じられないことに、この少年は鈴音がこのIS学園に入学していたことを知らなかったらしい。IS学園に入学して約一ヶ月、一組と二組での合同授業もあったのにも関わらず、だ。この発言には流石の鈴音もカチンときたが、今は怒っている場合ではない。折角こうして一夏と話すことができるのだ。そんなことでこのチャンスが無駄にしたくなかった。

「ま、まあね。それよりあたしもびつくりしたわよ、まさかアンタがISを起動させちゃうなんてね」

「まあ成り行きでな。不本意ながらこの学園で三年間過ごさないといけなくなっちゃった」

「そう、まあ男のあんたじゃあ今まで碌にISのことなんて勉強してないでしょうから、あたしが教えてあげてもいいわよ」

「いやお前頭そんな良くなかったろ」

「んな！ あたしは中国の代表候補生なのよ!？」

「え、そうなの？」

「同じ学年の代表候補生くらいチェックしときなさいよアンタはあ!!」

うがー!! と癩癩を起こす鈴音。

結局怒ってしまっているが、そこでここへ来た本来の目的を思い出した。

「つて、怒ってる場合じゃなかったわ。アンタ、クラス代表になったんでしょ？ 今日の放課後、クラス代表者は会議があるから学年主任室に来なさい」

「ああ、分かった。でもあれ、何でそれを鈴音が俺に伝えるんだ？」

「バカね、あたしもクラス代表だからに決まってるでしょ」

「まだたくさん話したいことはある。積もる話も多い。でも、今そんなことを言う時間はないだろう。それにこんな大勢がいる前では出来ない話だってあるのだから。鈴音は簡潔に要点だけを伝え、一組の教室を後にした。」

そして放課後、一年生のクラス代表たちが一同に集う、クラス対抗戦事前会議が始まる。



生徒会室横にある学年主任室。そこをIS学園での活動拠点としている俺は、端をホチキスで留めた数枚の書類を人数分用意して彼らをやってくるのを待っていた。

書類の内容は言わずもがな五月に行われることが正式決定したクラス対抗戦についてのものだ。今日がクラス代表たち集める最初になるが、これから数回にわたってこういった会議を開くことになるだろう。

まあ今日は真面目な会議、というよりは顔合わせ的な意味合いが強く、そこまで時間のかかる話し合いなどをする予定はない。

大理石で出来た高級そうな長机の上に書類を置き、生徒たちがやってくるのを待つ。

程なくして、最初の生徒がやって来た。コンコン、と丁寧なドアをノックしてから、静かに扉が開く。

「失礼します」

「おうデイーニ。その書類の置いてあるところにかけてくれ」

室内に入ってきたのは綺麗な金髪を腰まで伸ばした長身の少女。年齢以上に大人びて見える彼女は五組のクラス代表にしてイタリアの国家代表候補生、セレーナ・デイーニ。補足しておく、今年度入試の実技試験をトップ成績で突破したかなりの強者だ。

今年度の試験管は真耶だったからかなりレベルは高かったと思うが、このセレーナ・デイーニは真耶に三発のペイント弾を当てることに成功している。

「失礼しまーす」

セレーナ・デイーニより数分遅れて入ってきたのはかなり小柄な茶髪の少女。ショートカットと八重歯がその少女の活動的な性格をよく表している。

「語尾を伸ばすなよ、カノ」

「えへへー、中々直んないよ先生ー」

そう言っただけ苦笑いするのは三組のクラス代表を任されたアルセリア・カノ。スペインの代表候補生だ。

カノにも座って待つように指示し、残りの三人がやってくるのを待つ。厳密な時間指定をしなかったので、集まる時間が多少バラけるのは仕方ない。

それから程なくして、残りのクラス代表たちもこの部屋へとやって来た。一夏に鈴音、皿式も各々書類が置かれた場所へと腰を下ろしとここで、俺は口を開く。

「さて、全員揃ったところで始めよう。今日お前らに集まってもらったのは既に承知しているだろうが、来月開催されるクラス対抗戦についてだ」

皆に配布したものと同じものを片手に、俺は続ける。

「このクラス対抗戦は学園内だけでなく、外部からの人間が多く訪れる。目的は基本的に各国のISデータの採取だが、同時に今年の一年生の実力も見られている。代表候補生の三人は理解していると思うが、こういった各国からの評価が今後重要になってくるだろう。それからお前ら、」



視線を一夏と皿式の二人に移す。

「お前らは男性のIS操縦者つてことで殊更注目度が高い。下手な試合して評価を下げるようなことだけはするなよ」

まあ、セシリアとの試合を見る限りでは一夏はそこまで心配はないだろう。あの時の試合は肝心なところでやらかしたが、それ以降は常に集中を絶やささないよう鍛錬をしているようだし。

心配というか厄介なのは皿式の方だ。以前断言したように俺はこの少年のことがハッキリ言っ嫌いなので正直どれほど無様に負けようが興味はない。

が、しかし。

クラス代表である人間がそうあっさりと負けるのはまずい。何せこのクラス代表を最終的に承認しているのは俺だ。つまり皿式が下手な試合をしてボロ負けでもすると、『こんなのを代表として承認したのか?』という批判が恐らく発生する。そうでなくても簪という国家代表候補生を差し置いて代表になっているというのに。

そんな理由もあつて、男子二人には頑張ってもらわねばならないのだ。主に俺の体裁を保つという面で。

「おう。師し……先生に言われなくても」

「ま、多分大丈夫でしょ」

そう返す一夏と皿式。

お前らその自信はどっから湧いてくるんだと言いたくなかったが、恐らく一夏のほうは自らを鼓舞しているだけで自信自体は虚勢だろう。何年も見てきたのだ、そんなことくらい分かる。

そこに敢えてツッコむような真似はしない。そういつた偽りの強さは、やがて本物へと昇華する可能性を秘めているのだから。

事実、織村一華という人間がそうだったように。

「さて、話を戻そう。このクラス対抗戦だが、基本的には優勝した所で何の褒賞も得られない。精々が学食の期限付きフリーパス程度だ。その商品もお前ら個人に進呈されるものではなくクラス単位で与えられるものだ。あくまでもこれはクラス対抗戦なんだからな」

だが、と俺は続ける。

「それじゃあ頑張ったお前らへのメリットが少ないんじゃないか、と会議で話題に上がってな。俺を含む各学年主任と会議の結果、優勝者には特別配慮を与えることにした」

ピクピク、と一夏たちクラス代表の身体が反応する。

そんな生徒たちを勿体付けるのもあれなので、俺はあっさりとその内容を口にすることにした。

ピンと人差し指を立て、

「一度だけ。一度だけお前らの機体を、束がメンテナンスしてやる」

その発言に、一夏以外の全員が目を丸くして言葉を失った。



その日の夜、俺は部屋で携帯を片手に寛いでいた。電話の画面は通話中である表示がされており、その相手は今日クラス代表たちとの会議で上った一人の天災科学者だ。

「つーことで言っただけど、ほんとに良かったのか？」

『なにが？』

「一夏の白式ならともかく、他の専用機なんてお前が見るメリットはないだろ」

『うーん、まあそうなんだけどねー。あの四人目はちよつと気にかか  
るし』

「でもアイツの専用機まだ完成してないぞ？ 対抗戦までには完成す  
ると思うけど」

『アレの機体ってどこが造ってるんだっけ？』

「杠んところだよ」

あー、あそこかーと受話器越しの天災は気怠そうな声を漏らした。

『確かあそこの社長って……』

「ああ、更識 うちと同類だ」

『でも問題はないんでしょう？』

「まあな。そこの社長とは面識もあるし、何よりも争いを好むような人間じゃない」

そこまで聞いて、束は抱えていた不安を解消したらしい。

全く、いつもは自由奔放に俺や千冬を引つ掻き回すくせに、こういう時は素直に心配してきたりするもんだから質が悪い。ギャツプとでもいうのだろうか、普段おちやらかした奴がいきなり真面目になると感じる違和感のようなものを感じてしまう。まあ、そういうところも含めて篠ノ之束という一個人なのだろうし、そうだからこそ俺も彼女のことが気になって仕方がないのだろう。

「ところでだ、お前が機体をメンテするって話。一、三年の優勝者にも同じように提示したけど良かったか？」

『ほんとは他人のISなんてこれっぽっちも興味ないけどねー。どうせ二年は姫ちゃんが勝つだろうし、三年はその従者あたりかな？ だったら態々ISを見る必要もないでしょ』

「いやさ、姫無も虚も対抗戦には出ないぞ」

……………。

『…………へ？』

「当然だろ。二人共生徒会役員なんだ。原則クラス代表と生徒会は兼任出来ないって俺たちの代からもうあったら」

『そんなの聞いてないよ!!』

「お前が学園にいないことが多かったからだろうが」

学生時代の束の出席率はおそらく相当酷いものだったことだろう。普通の生徒だったら間違いないく除籍されている。

最も長く行動を取っていた俺や千冬でさえ、束と顔を合わせるのには良くて三日に一度。三ヶ月姿を見ないなんてことも一度や二度では無かった気がする。

『ま、まあしょうがないからそこらへんはかーくんが上手くやっついてよ』

「オイ俺に丸投げすんじゃないやねえよ」

さらっと俺へと押し付けようとする束へすかさず言い返す。

『ぶー、いいじゃんいいじゃん！ 束さんなりの甘えなんだよ！ 気づけよ馬鹿!!』

「分かりづらすぎるわー！」

『だってだって！ もう随分かーくんに会ってないんだよ！ 会いたいよハグハグしたいよナニしたいよ!!』

「とんでもねえこと口走ってんぞお前」

『いいのだよかーくん。なんだって私は愛人なんだから!!』

思わず盛大な溜息を吐き出す。

どういう訳か、東はこの愛人というポジションをえらく気に入っているらしい。千冬と別れたあともこの愛人という関係は続いていたし、現在もそのままだったりする。東本人には一番や二番などといった概念は存在しないらしいのだ。以前千冬との三人プレイを強要されそうになったときは流石に抵抗したが。

……へタレとかではない、決して。

「はあ……、だったら臨海学校の時くらいは顔出せよ。織村たちも都合が付けば来られるらしいし。一年生の機体メンテもその時やれば済む話だろう?」

『うーん、まあこの場所から日本まで行くのに時間かかるし、臨海学校になら行けそうかな。なによりかーくんに会いたいしね!! あとちーちゃんたちにも!!』

興奮気味に話す東に苦笑しつつ、俺はふと昔のことを思い出した。

まだ生徒会が発足して間もない頃の記憶。やがて真耶が増え、ナタルが増えた。その当時の面子が、臨海学校で一堂に会するかもしれない。千冬や真耶はともかく、織村やナタルとは暫く顔を合わせていないのでどう変化しているのか気になりはするが、そこまで大きな変化はないだろうなと予想している。

『あ、もうこんな時間。じゃあねかーくん、また連絡する』

「おう、じゃあな」

通話を終了し、携帯を適当にベッドへと放り投げる。

何はともあれ、先ずは目先のクラス代表対抗戦だ、今の東の口ぶりから察するに、おそらくは何か企んでいるのだろう。でなければアイツが自分以外の手がけたISに触れるなんて言い出す筈がないのだ。

「……面倒だけは起こしてくれるなよ」

切実にそう願いつつ、俺や襲い来る睡魔に身を委ねた。

なにやら一夏の部屋のほうが騒がしかったみたいだが、何があったのかは分からない。

ただその翌日、頬に手形のついた一夏と泣きはらした鈴音の姿が目撃されたそうだ。

## #10 想像と現実

皿式鞘無。

恐らくは、今世界で最も有名な男性四人に数えられる少年である。肩口で切り揃えられた茶髪に整った顔立ち。十人の女性が見れば半数以上が『イケメン』だと評するであろうその少年は、しかし今は奥歯を噛み締めて苦痛にも似た表情を浮かべていた。

日付も変わり、寮に住む女子生徒の殆どが寝静まった頃、彼はベッドに横たわりながらも決して寝付こうとは思っていないかった。いや、寝付けないでいた。

理由は簡単に纏められる程単純なものではない。生まれてきてからこれまでに積み重ねてきたものが、彼の中で燻っているのだ。

「……どうして、」

ポツリと、漏れ出るようにして呟かれた言葉は彼以外誰もいない部屋の中で溶けて消えていく。

こんな筈ではなかった。

こんな現実を望んではいなかった。

言葉にならない思いが、少年の中で爆発的に膨らんでいく。

「俺は、俺は……っ！」

十年以上も思い描いてきたシナリオが頭に浮かぶ。

——俺は主人公だ。それ以外の何者でもない。

——じゃあ、この現実は何だ？

彼が思い描いてきたシナリオと現実は、有り得ない程にかけ離れていた。本来であれば存在しない二人の男性IS操縦者の存在。一夏が強くなると決意する切っ掛けとなった第二回モンド・グロツソでの誘拐事件の不発。姉妹仲が最悪だった筈の篠ノ之箒は、休み時間にはあの天災科学者と仲睦まじそうに連絡を取っている。

神様の双六に巻き込まれるという意味不明の理由で転生されるこ

ととなった鞘無だが、貰い受けた能力があればISの世界で十二分に生きていけると思っていた。

電撃使いという某都市ではポピュラーな能力ではあるが、元の持ち主はあの学園都市第三位の常盤台のお嬢様だ。最大十億ボルトの電撃は通常のISであれば多大なダメージを与えることが出来るだろう。

本来ならもつと上位の第一位、第二位の能力あたりを手に入れたかったのだが、生憎とその二つは神から貰い受けることが出来なかった。売り切れだのSOLD OUTだの言っていたが、まあ深く考えなくても無意味だろうと考えうることを放棄する。

第三位とは言ってもその汎用性は非常に高く、この能力のお陰で鞘無はISに搭乗することができる。

元々の頭の出来はともかくとして、この能力を使えば電子回路に手を加えるなんてお手の物だし、ISに干渉して起動させるなんてことも可能である。鞘無自身、どういう理屈で起動できているのかは不鮮明なままなのでご都合主義という可能性も否定は出来ないが。

「本当なら、今頃はとつくに……!」

そう言つて奥歯をギリツ、と噛み締める。

彼の思い描いていたシナリオ。それは――。



「おつす鞘無!」

「おう一夏。今日も早いな」

「俺より早く来てる奴が何言つてんだよ」

まだ太陽も昇っていない早朝。俺がいつもの公園でストレッチをしていると、ジャージ姿の一夏が小走りでやって来た。同じくらいの身長だが髪の毛はやや短く、俺とは別ベクトルの整った顔立ちをしている。一夏と通う中学校では俺たち二人のファンクラブなんてもので存在し、毎日のように女子たちの視線を浴びてしまっている。

ストレッチを終えた俺に、一夏が声を掛ける。

「行くうぜ」

「おう」

そう答え、一夏と二人で公園を出て町内を走り出す。

二人でこうしてランニングを行うようになって、もう何年経つのだろうか。

切っ掛けは、一夏がとある事件に巻き込まれたこと。それを堺に、一夏は貪欲に強さというものを求めるようになった。強くなるためにはまず身体を鍛えなくては、という結論を出したらしい俺の親友はこうして毎朝町内一周のランニングを続けている。

俺が付いて走っているのはおまけみたいなものだ。ランニングが終わってから組手の相手をするのにいるだけであって、決して俺も強くなりたいとは思って走ってるわけじゃない。

まあ、巻き込まれた感否めないけどな。いいんだ、こうして一夏と過ごす時間も、なかなか楽しいのだから。

小学校時代から走り続けてきただけあって、俺も一夏も中学生男子の平均と比較するとかかなり鍛えられている。成長期も相まってガタイも良くなり、それでいてシャープでしなやかな筋肉が全身を覆う。

「なあ鞘無」

「あん？」

走りつつ、一夏が問いかける。

その表情はいつになく真剣だった。

「俺、強くなってんのかな」

一夏の問いに、俺は間髪入れずに答える。

「さあな」

「……そこはもうちょつとフォローしてくれよ」

「だって実際にわかんねえよ。俺とは組手しかしないし、他で強さを確かめる場面なんてないしな」

「うぐ……。確かにそうだけだよ……」

苦虫を噛み潰したような顔をする一夏。

全く、俺の親友は周囲と自分をどうしても比較してしまうらしい。

「ま、少なくとも前には進んでんじやねえか？ あの時よりもな」



「鞘無……、」

「俺に勝てないようじゃあまだただけだな」

口角を吊り上げ、俺は挑発するように一夏へと言葉を投げつける。

「なんだとっ、今に見てるよ？ 直ぐにお前を追い越してやるからな」

「はいはい。期待しねえで待つてるよ」

一夏の反発に俺は苦笑する。

これは俺の見立てだが、徒手格闘だけであれば直ぐに一夏は俺なんて追い抜かすだろう。そこに駆け引きなどの心理戦が加われば話は別だろうが、少なくとも資質だけを見れば流石はあの千冬さんの弟だと言わざるを得ない。

町内一周のランニングを終えた俺と一夏は水道の水で喉を潤した後、そのまま組手の修行へと取り掛かった。

流石はあのブリュンヒルデの弟。俺なんかとは出来が違う。

だが、それでも今は俺のほうが上だ。

突き出される腕を紙一重で躲し、カウンターを一夏の腹部へと叩き込む。予想はしていたのか、俺の打突を喰らいながらもそこで崩れ落ちることなく反撃に出る一夏。繰り出される蹴りはしかし、狙った俺の膝には届かない。

「甘いぜ一夏」

「なっ!？」

一夏の蹴りを足の裏で防ぎ、止めと言わんばかりに隙の出来た一夏のシャツの襟首を引っ掴み、強引に背負投げた。

「……つてえ。くっそ、いい線いつてたと思っただけだな」

「足元を崩して、つてのは定石だからな」

背中を打った一夏に手を差し伸べ、そのまま立ち上がらせる。

公園の中心にある時計へと目をやれば、直に七時を回ろうとしていた。

「そろそろ帰るか」

「だな、鞘無もうちで飯食ってくだろ?」

「ご同伴に与ろうかな」

こうして朝の鍛錬を行うようになってから、その後は織斑家で一緒

に朝食を摂ることが多くなった。というか、殆ど毎回そうだ。朝食を作るのは一夏だが、出来る頃には二階の部屋から千冬さんも降りてきて三人で朝食を摂る。

それはいいんだが、頼むからほぼ下着姿で俺の前に現れるのは勘弁してほしい。いや、一夏じゃまだ家族だからいいかもしれないが俺赤の他人だからな。昨日の夜は疲れていたからそのままとかいう言い訳は聞きませぬ千冬さんよ。

以前頼むからちゃんとして着替えてから降りてきてくれとお願いしたことがあったが、『一夏が作った朝食が冷めてしまっただろう。それにお前、私を見て興奮でもするのか?』などとイイ笑みを浮かべられてしまった。

「はあ、俺たちももう受験かあ」

「いきなりどうしたよ」

「いや、早いもんだなあと思ってさ」

織斑家へと向かう道すがら、一夏がポツリとそう呟いた。

確かに、俺と一夏が出会ってからもう何年になるのだろうか。そう考えてしまうほどの長い時間、俺は一夏と同じ時間を過ごしてきた。箒や鈴たちの顔も思い浮かべながら、俺はこの先の未来へと思いを馳せる。

一夏は学費も安く、多くの分野へ就職口を設けている藍越学園を受験する気である。俺も一応表面上はその学園を受験する気だが、入学する気は更々ない。IS学園に入学するためのプロセスとして受験会場が同じ必要があるので受験はするが、そこで一夏と共に迷うつもりだ。

だってそうしないとISが置かれた部屋まで辿り着けないだろうしな。

「ま、人生なんてあつという間に過ぎていくもんだよ」

「なんかジジくさいぞ鞆無」

「んだと!」

ジジくさい発言を流石に看過することは出来ず、一夏の首へと腕を回して締め上げる。

「ちよ！ 鞆無、キマってる！ キマっちゃってるから!!」

「ジジくさいのはお前だろうが一夏！ じっくり温めのスポドリとか栄養バランスばっか気にしやがって!!」

「それはいいだろ別に!!」

傍目から見れば、まるでそれは兄弟のように。

俺と一夏は、変わらない日常に身を置いていた。

ISを動かしてしまい、IS学園への入学を半ば強要されてしまう一月前のことだ。

◇

「ちよつと鞆無！ 何でアンタが此処に居るのよ!?!」

「いやいやいや、お前ニュースとか見てないのかよ」

入学式当日、掲示板に張り出されていたクラス表に従ってクラスへと入ってみれば俺に出会うなり開口一番、ツイントールを揺らした小柄な少女が詰め寄ってきた。

今俺の目の前で何やら騒いでいるのは中学時代、一夏や弾、俺を含めていつもツルんでいた少女、凰鈴音だ。因みに中国の代表候補生である。

そんな彼女はどうかやら俺がIS学園に特例で入学することを知らなかったらしく、動揺とも驚愕とも取れる表情を浮かべて捲し立てるように俺へと質問を投げかけてくる。

「俺もIS動かしちまったんだよ。一夏と一緒にな」

「はあ!?! なによそれどうなってるの!?!」

「いや俺に聞かれてもわかんねえよ。ただ政府からの通達でこの学園に入学することになったっただけだ」

「……ふうん。まあいいわ、またアンタとツルめるってんなら退屈しなさそうだし」

「一夏とも一緒だしなー」

「ちよ!?! あんま大きい声出すんじゃないわよ!!」

一夏の話題を出した途端にわたわたと慌て出す鈴。何この生き物

超可愛い。

今の反応を見れば分かる通り、この少女は一夏に淡い恋心を抱いている。しかし残念なことに、一夏はそんな鈴の想いなど微塵も気付いていないのである。どうにか二人の仲を進展させようと恋のキューピッド的なことをあれこれとしてみたが、俺の力不足なのかはたまた二人に問題があるのか、全くと言っていいほどその効果を得ることは出来なかった。

「ま、まあ、その……またアンタにお願いすることもあるかもしれないから、その時はその……頼むわよ」

「ハッハッハ、鈴はその素直なところを少しでも一夏に見せてやれば良いと思うんだけどな」

「バツ！ 出来るわけないでしょ!?!」

ツンデレ属性というのとはことんメンドくさいものらしい。

あ、因みに俺。原作組の一夏ハーレムに手を出す気は毛頭ない。確かにシャルやシャルやシャルなど彼女にしたい女子はいるが、そこはやはり一夏の領域だと思うのだ。

が、しかし。俺にその気はなくても、向こうが勝手に靡いちやった場合はしょうがないよな。うん、不可抗力みたいなもんだし。いや、決して俺からは手は出さないと、誓って。

「あ、そうだ。俺生徒会室に呼ばれてるんだった」

「は？ 生徒会？ 何でアンタが呼ばれんのよ」

「いやまあ。その会長とはちよつとした知り合いでな」

入学式が終わった直後に声を掛けられていた事を思い出す。とうか、会長からの挨拶の時点で俺への視線が半端なかったからなあの人。獲物を狙う眼だったぞあれは。

ああして顔を見たのは一年振りくらいだが、相も変わらず綺麗だと思っただけはあの手帳本人には言わない方がいいだろう。絶対調子乗るからな。

「呼ばれてるたってもう授業始まるわよ?」

「そういうの気にしない人なんだよ……」

「……なんか苦労してそうねアンタ」

「言ってくれるな……」

始業のチャイムが鳴るのを聞きながら、俺は重い足取りで生徒会室へと向かう。

担任の教師にはうまく誤魔化しておいてくれと鈴に頼んでおいたので何とかなるだろう。一年生の教室からは離れた二年生と三年生の教室がある棟の二階、そこに生徒会室はある。

扉の前に立ち、一度大きく深呼吸。意を決して、俺は目の前の扉をノックした。

反応は、直ぐに返って来た。

「どうぞ」

「……失礼します」

ガチャリと扉を開き、室内へと足を踏み入れる。

俺の目の前には、よく知る二人の少女。

「よく来たわね鞆無君」

「楯無さんが呼んだんでしようが全く。俺だって暇じゃないんですからね？」

「ひどい！ 鞆無君はおねーさんのことなんてどうでもいいって言うのね!？」

「うわーウザイ虚さんどうかしてください」

入った瞬間にそんな事を言う目の前の生徒会長。いや、嘘泣きとかいいんでさっさと用件を離して下さい。

「ごめんね鞆無君。お嬢様は久しぶりに君に会えてテンションが上がってしまったているの」

「ちよつと虚?」

口元に手を添えてそう微笑む虚さんに、楯無さんは顔を真っ赤にして詰め寄る。

「あー、取り敢えずそこに座ってくれろ?」

「はあ、で? 何で俺を呼んだんですか」

「もう。せっかちなのは相変わらずねえ」

長めのソファに腰を下ろし、楯無さんに今日俺が呼び出された理由を尋ねる。

とは言っても、その理由に大体の検討はついている。楯無さんが俺を呼びつけ時は、決まって何かを押し付ける時なのだから。

「率直に言うわね、鞘無君。私は貴方を生徒会副会長に任命します」

「拒否権を行使します」

「却下します」

俺には拒否権というものは与えられていなかったらしい。

楯無さんが言った事はやはり俺の想像通りで、生徒会への入会を促すものだった。いや、促してねえなコレ。完全に強要だもんな。

「一応、理由を聞いても？」

「有能な人材にはしっかりと働いてもらわないと」

問いかけて返ってきたのは、なんともまあ取ってつけたような答えだった。

この場で拒否をし続けてもいいんだろうが、楯無さんの横の虚さんが無言で笑みを浮かべているところを見るに彼女の援護は期待できそうにない。何より、この部屋に入った時点である程度の覚悟はしていた。

原作じゃあ一夏が収まることになるこのポジションだが、俺と楯無さんが以前からの知り合い、というか幼馴染であったためにこうして俺が副会長の役職に就くことになるうとしている。

しかし一つ、無視できない問題がある。

「でも俺、男ですよ？」

ここIS学園には、俺と一夏以外の男はいない。

只でさえ昨年までは女尊男卑の風潮によつて男性は嫌な思いをしてきたし、女性の中にはそういったことが当然だと捉える輩も少なからず存在する。

まあ俺が何を言いたいのかと言えばだ。

俺がいきなり生徒会の副会長になんて就任したら、周囲の女子生徒たちからの反発や苦情が半端ないんじゃないかってことだ。

「確かに。その点は否定できません」

俺の指摘に反論することなく虚さんが首肯する。

だが、楯無さんはそんな心配は無用だとも言わんばかりに口元を

吊り上げていた。

「大丈夫よ。実力を示しちやえば、誰も反論なんてできないでしょう？」

「……それってつまり、俺に誰かと戦えって言ってるんですか？」

「ご明察。鞆無君ならそこらの代表候補生一人手玉に取るくらい造作もないでしょう」

「いや俺I Sに乗ったことないんだけど」

「さて、じゃあ相手をどうするかだけど」

おい俺の話聞けよ、と大声で叫びたくなつたがこうなつてしまった楯無さんには何を言つても無駄なので必死に堪える。

こうして楯無さんが俺をほぼ無条件で信頼してくれるというのは正直嬉しい。が、それと勝手に巻き込まれるというのは話が違う。俺にだって出来ないことはあるし、幾ら何でもI Sに関して初心者のが一国の代表候補生に勝てるとは思わない。

神様とやらから貰い受けたこの能力を使えばまた違った結果になるのだろうか、やたらめつたらに乱用もしたくないのだ。

「そうね。じゃあ私とやりましょうか」

「はあ!？」

ちよつと待て何でそうなる。

「大丈夫よ。私に負けても至極普通だし、勝つちやえば鞆無君が会長だけど」

「勝つても負けてもお先真つ暗なんですけど!？」

幼馴染の暴拳に、俺はただ声を荒げるしかなかった。



「へー、この時期に転校生ねえ」

「ああ。シャルルとラウラって言うんだけどな」

「ラウラってのにお前はその頬の紅葉をつけられたと」

食堂で昼食を取りながら、俺はうつすらと頬を赤くした一夏と二人で雑談に興じていた。

話によれば先日一組に二人の転校生がやって来たらしい。フランスの代表候補生であるシャルル・デュノアとドイツの代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒ。言うまでもなく原作組のヒロインとなる少女たちだ。

「ま、シャルルとは仲良くやれそうだけど」

「三人目の男性IS操縦者か。大方俺たちの存在が発覚したことに乗じてってどこか？」

などと話していると、食堂の入口あたりが俄かに騒がしくなってきた。

何事かとそちらに視線を向けてみれば、件の少年シャルルがキヨロキヨロしながら入ってくる場所だった。

シャルルは暫し周囲を見回していたが、一夏の存在を見つけるとパアツと顔を輝かせてこちらに小走りでやって来る。

「一夏。良かったやつと見つけたよ」

「おうシャルル、今日は箒たちと昼食じゃなかったのか？」

「う、うん。そうなんだけど、セシリアがサンドイッチを作ってきて……」

ああ、成程と一夏は顔を青くしつつ頷いた。

「あ、えつと。一夏、そっちの人は……？」

「ん？ ああ、そつか。シャルルは初対面だったな、紹介するよ。俺の友達の——」

「皿式鞘無だ」

「皿式鞘無——って入学して三日で生徒会副会長になったっていう!?!」

シャルルと視線が合ったので恙無く自己紹介を行う。と言っても、名前を言ったただけだけど。

しかしそれでシャルルは俺という存在を正しく認識したらしく、目を見開いて声を上げた。

「いやまあ、不本意ではあるんだけど」

「生徒会長と互角の試合をしたんだよね!? 僕その映像データ見たよ! あれが初搭乗なんて思えないよほんとに!」



「あれは只単にラッキーが重なっただけなんだけどな。まあ、男同士よろしく」

「うん！ 僕はシャルル・デュノア、よろしくね皿式君」

「鞆無でいいよ。男同士だしな」

「分かった。僕のことシャルルでいいよ鞆無」

「おう」

◇◇◇

「鞆……無……？？」

「シャルル、か……？？」

唐突、としか言いようがなかった。

誰もいないだろうと思つて入った男子更衣室で、金髪の少女に遭遇した。いや、シャルルのことなんだけどさ。

「僕はね、妻の子なんだよ……、」

俺の部屋で、シャルル改めシャルロットは声を震わせて言った。

「君たち男性IS操縦者たちのデータを取ることが、僕に与えられた役目。でもこうして鞆無に見つかつて良かったかな……。君なら、仕方ないかなつて思えるんだもの」

そう言つてぎこちなく笑うシャルロット。彼女の笑みが偽りのものであるということくらい直ぐに分かる。

俺は自然、彼女の肩を抱き寄せていた。

「ちよ、ちよつと鞆無……？？」

「……お前はどうしたいんだよ」

「え……、」

シャルロットの肩を抱きながら、俺は彼女の本当の気持ちを聞こうとした。

数十秒、沈黙が流れる。

その沈黙を破つたのは、俺に抱かれるシャルロットだった。

「……やだよ」

ギユウツ、と俺の制服を掴む。その声はひどく震えていて、俯いて

いる彼女が泣いているのだと気がついた。

「IS学園から離れたくない……！　鞆無や一夏、それにみんなと、もつと一緒にいたいよ……!!」

「だったら、此処にいろよ」

ガシツと、シャルロットを一層強く抱き締める。

「お前が此処に居たいって言うんなら、少なくとも卒業するまでの三年間は安全な筈だ。会社のゴタゴタした事情なんて知るか。お前の気持ちが一番優先されるべきものなんだからな」

「鞆、無……」

顔を上げ、上目遣いで俺を見上げるシャルロットに、俺も本心を告げる。

「それに、俺だってシャルルと離れるのは嫌だ」

「……ふふ、鞆無は勝手だなあ」

「男なんて身勝手な生き物だよ」

「……うん、ありがとう。鞆無……」

そう言つて、シャルロットは俺の胸に顔を埋めた。

「少しだけ、このままでいさせて……?」

彼女の言葉に無言で頷き、俺は彼女の頭を優しく撫でる。

フワリと、女性特有の甘い香りが俺の鼻腔を擦る。

その日、俺とシャルロットは朝まで抱き合つて眠つた。



——こんなのを想像していた彼にしてみれば、今の現状に満足出来る筈もなかったのである。

いやいやこんなの有り得ないだろとツツコミが飛んできそうではあるが、如何せん彼は割と本気である。それ故に質が悪い。

どうやら彼のこの性格というか妄想は簪に負かされたくらいでは矯正されていないかつたらしく、今尚実現させようと直向きに突っ走っている最中なのだ。

(まあいい。ここまでの事はしようがないとして、先ずはこのクラス

代表対抗戦で俺の地位を確立させる。生徒会や今後のストーリーに絡んでいくのもこれからだ……)

天井に向かって腕を突き出し、グツと握る。

「待ってるよ……! もうすぐ、もうすぐだ。すぐそこまで、俺の時代が来てる……!」

誰もいない部屋で人知れず宣言する鞆無。

彼の思惑通りにクラス代表決定戦が進むのかどうかは定かではないが、ただ一つ、この時点で分かっていることがある。

鞆無本人は知らないが、明日にまで迫った対抗戦の組み合わせは、既に完成しているのである。

そこには、こう記載されていた。

第一試合

一組代表 織斑一夏 対 四組代表 皿式鞆無

そして、当日の朝がやって来る――。

## #11 中心と周辺

五月上旬、クラス対抗戦当日。

今日一日に限っては授業は全て休み、全学年全生徒がアリーナへと足を運ぶこととなる。

第一から第三までの各アリーナを使用して行われるこのクラス対抗戦は、勝者に褒賞が用意されている。一年生に限って言えば、なんとあの天才にして天災であるISの生みの親、篠ノ之東が持ち主の機体を直々にメンテナンスしてくれるというものだ。更にその代表の所属するクラスには半年間の学食デザートフリーパスが進呈される。

これで燃えないという学生は皆無である。

何せIS学園の学食は基本的にレベルが高く、そこいらの高級デザートなど軽く凌駕する程の一品ばかりなのだ。それを半年間食べ放題、年頃の乙女として気にしなくてはならない部分は多々あるが、それを鑑みても是非とも手に入れたい代物なのである。

さて、そんな女子生徒たちの期待を一身に背負って戦うこととなるのが、今俺の目の前で何やらどんよりとした空気を纏わせた少年、織斑一夏だ。

どうしてそんな暗い顔をしているのか、などと問いかけることはない。その頬にくっつきりと付けられた手形が何も言わずとも語っている。原作通り、鈴のあのプロポーズを奢ってくれるものだとは勘違いしてうつかり口にしてしまったんだろう。全く、どれだけ身体を鍛えても心の部分はまるで成長が見られないらしい。

いや、そういうえば中学時代一夏に告白したという少女をその場で振っていたという話を姫無から聞いたことがあるので、それくらいの甲斐性は身につけているのかもしれないが。

「織斑。敢えて何があったかは聞かないが、いつまでもそう暗い顔をしてはいられんぞ」

「……分かってます。切り替えます」

途端、一夏の表情が引き締まる。

これだけ自身のコントロールが出来ているのに、こと恋愛となると疎くなってしまうのは何故なのだろうか。

俺と一夏、千冬の三人が居るピットで、俺は大まかな流れだけを伝える。それは一夏も昨日のうちに把握していたので直ぐに終了し、自然話は今日の対戦へと向かう。

「お前の対戦相手の皿式だが、勝算はあるか？」

「今朝簪との試合映像を見ました。簪にも話を聞いたし、ある程度は動きの予測が付くと思います」

その言葉に、俺の隣に立つ千冬が満足そうに笑った。

「言うじゃないか。そう言うからにはきっちり勝ってくるんだろっかな？」

「……当然」

挑発とも取れる千冬の言葉に、一夏は静かに答える。

本当に、これがISに乗り始めて一ヶ月弱の人間の発言とは思えないな。いや、普通の人間が言うのであれば何を馬鹿なことと思うかもしれない。

が、一夏が言うのであればまた捉え方が変わってくる。

入学早々セシリアと激戦を演じ、更識流を不完全なまでも修得している俺の弟子であれば、寧ろこれくらいやってくれなければ困るというものだ。

今の一夏の表情を見れば、油断はするなだの目の前の相手に集中しろのだといった言葉を掛ける必要は無さそうだ。

この場は千冬に任せて、俺は自分の仕事を全うすることにしよう。

「織斑先生、この場は任せるぞ」

「了解した」

言ってピットから外し、そのまま管制塔へと向かう。既に生徒の多くはアリーナの観客席へと移動を始めており、擦れ違うたびに挨拶の言葉が掛けられる。それに簡潔に答えながら管制塔内部へと足を踏み入れると、一組副担任の真耶と四組担任の安形がコーヒーを飲みながら最終確認を行っていた。

二人に声を掛け、俺も最終確認を行う。

「おはようございます更識先生」

「おはようございますう」

「おはよう山田先生、安形先生。チェックはあらかた済んでいるのか？」

「ええ。後は生徒たちの機体確認が終われば、いつでも開始できます」

コンソールを操作しながら真耶が答える。

流星は現国家代表、IS関連で彼女を超える人間はこの学園には千冬くらいのもだろう。いや、情報量だけならそれをも上回っているかもしれない。

「さて。じゃあ後は開会を待つだけだな。各学年の第一試合に出場する選手たちはもう全員準備できているんだろう？」

「はい。一、三年生もアリーナ内のピットでISを装着済みです」

映像モニタを切り替え、ピット内でISを纏った生徒たちの映像が六分割で表示される。

その中でもやはりというべきか、眼を引くのは男子二人だ。一人は純白の機体を纏い、もう一人は先日完成したばかりの山吹色の専用機を身に付けている。彼の機体は世界シェア第四位の大企業、Y・Cが製作したものだ。因みに少年とその企業には何一つとして接点はなかったのだが、どういう訳か企業の取締役が出張ってきて専用機を完成させた。

いや、別にアイツが作りたいたいというのだから止めはしないが。しかしもの好きだと思わずにはいられない。

「はー、あれがY・Cが製作した第三世代型ですか」

どうやら俺と同じく皿式の映像を見ていたらしい真耶がそう溢す。

「ああ。確か名前は『サンライト・トゥオーノ』だったか」

「確かに装甲のデザインもどことなくそれっぽいですよね」

「つーかアイツのネーミングセンスは安直すぎると思うんだがな」

相も変わらずファースト・インプレッションで全てを決めている男の顔を思い浮かべつつ、俺は皿式の機体をもう一度じっくりと見る。

遠距離用の武装は積んでいないのか全体的にシャープな印象を与える外見。恐らく主力武装は近距離から中距離用のブレードカラン

スあたりなのだろう、肩周りの駆動が重くならないようその辺りは更に装甲が薄く作られていた。限界まで機動力を求めためか、意外な方向からの攻撃を行うためかは現段階では判断しかねるが。

「ふむ。機動力特化という点じゃ、一夏の白式と通じる点があるかもな」

「そうですね。機体性能の開きはある程度は仕方ないですし、後は乗り手の技量の問題になりそうです」

第四世代型に相当する一夏の白式と、第三世代型のサンライト・ストウーノとではどうしても機体の性能差は埋められない。

だとするならば、後はその操縦者の技量如何によつてしか試合の形勢は変わらないだろう。

四月当初の試合を見る限りでは一夏はツメが甘く、皿式はそもそも戦闘の何たるかを理解していないようだった。

あれから一月。たった一月と思うかもしれないが、成長期の一月というのは侮れない。織村があつという間に化けたように、一夏や皿式もまた、俺の知らぬ間に変貌しているかもしれないのだ。

まあ、皿式に関してはハッキリ言つてそこまでの成長はしていないと思うが。

簪と同じクラスである少年の様子を時たま耳にするが、四月当初と変わらず、電撃を基本とした攻撃スタンスを貫いているらしい。

あの電撃がどういった理屈で発せられているかは分からないが、専用機を得た今でも恐らくそのスタンスは変わっていないだろう。というかだ、そこはかとなくあの電撃に某都市第三位の面影を感じるんだが、まさかまたそういうのじゃないだろうな。

若干嫌な予感を覚えつつ、最終確認を終える。  
後は開会式を待つのみだ。

真耶はこの後も此処で一年生の試合の様子を観察するようだが、学年主任を任されている俺はそういうわけにもいかない。何せ各試合の結果を二、三年の学年主任と報告し合い、観戦しに来ている企業以外のIS関連施設にもその内容を書類で随時報告しなくてはならないのだ。

こればかりは仕事なのでどうしようもないが、正直物凄くめんどくさい。

本音を言えば一夏と皿式の試合を見たかったが、教師が仕事を疎かにするわけにもいかなないのでその役目は真耶に任せ、俺は管制塔を後にする。

その後直ぐにアナウンスが流れ、生徒会司会の簡潔な開会式が行われた後、姫無の宣言によってクラス対抗戦の幕は切って落とされた。



### クラス対抗戦。

各クラスの代表がトーナメント方式で優勝を目指すこの行事は、当然のことながらその狙いというものが存在する。

一つはクラスの結束力を高めるため。

自分たちのクラスを背負って戦う代表に必死の声援やサポートをすることで、クラス内の士気を高めて団結力の向上を図ることを想定している。これに付属的に追加されたのが副賞としての半年間学食デザートフリーパスであったり篠ノ之束博士直々のメンテナンステアあたりするのである。

もう一つは、現段階での各クラスの実力を押し量る為。

始業して一ヶ月足らずではあるが、そのクラスの特徴というものはこの段階から徐々に現れ始める。

勝気やマイペースといったクラスの特徴は少なからず代表にも付随し、戦い方にも変化が起こる。当然、自身に合った戦い方というのが基盤にはなるが、思考の隅にそういったクラスの特徴というものは存在し、判断基準の一端になることもあるのだ。

そんなクラスたちの、現段階の実力推移は学園側にしても視察に訪れる企業側にしても手に入れて置きたい情報に相違ない。

二、三年生はそもそも学科が分かれていたりするので特色に関してはハッキリと表に出ているが、実力という面ではこうして戦う以外に明確な答えは提示できない。



さて、こうした対抗戦の狙いではあるが、当の本人たち、つまりクラス代表やその他の生徒たちは実のところそこまで深く考えていない。

どちらかといえば半年間のデザートフリーパスのほうに関心は寄せられており、そのためにクラスの代表を応援しているようなものなのだ。特に一年生は初めての大きな行事である。舞い上がらない方がおかしいと言えるし、授業がなくなることの方が嬉しいような雰囲気がある。

言ってしまうえば、一年生の大半はお祭り気分で現在観客席に陣取っているのである。

クラス対抗戦の第一試合、一夏と皿式の試合まで後数分となったアリーナには、一年生女子と企業の人間、そして生徒会のメンバーが集まっている。

徐々に上がるアリーナのボルテージを感じながら、観客席の一角を陣取る生徒会役員の一人、更識姫無は呟く。

「なんだかこっちは舞い上がってるわね」

「初めての対抗戦ですし、二、三年生と比較するのは酷ですよ」

眼を細めて言う姫無を宥めるようにしているのは同じく生徒会の一人、布仏虚。

姫無の言う通り、確かにどこか舞い上がって落ち着きがない一年生の様子は見ていてあまり気持ちの良いものではない。しかしそれも無理からぬことだ、と虚は割り切っていた。何せこれから第一試合を戦うのは世界にたった四人しか存在しない男性でIS適性を持つ人間なのだから。

「とは言っても、実力的には下の二人だけどね」

「それを比較する方が酷ですね……」

姫無のなんとはない一言に虚は苦笑する。

たった四人しかいない男性のIS適合者。姫無が下の二人と評した一夏と皿式と、暗に上の二人と評される楯無と織村ではその実力差は語るまでもない。たかだか数ヶ月前にISに触った人間とV7に数えられる人間を比べるのは烏澁がましいとさえ言える。

「まあ、一夏君も頑張ってはいるみたいだし」

「楯無さんが稽古をつけているんですし、実力は付いていると思いますよ」

「そうでないと困るわよ。兄さんの顔に泥を塗るようなことしたら、私一夏君のことこれからずっと無視するわ」

ふふふ、と何か黒いものを背後に纏わせて楯無はアリーナを中心へと目を向ける。

そんな会長を横目に見ながら、虚は一夏に内心で合掌。純情な少年の一途な想いは、どうやらまだ届きそうにないらしい。

（というか、一夏君の想いつて楯無さんがいる時点で絶対報われないんじゃない……。お嬢様がブラコン卒業することって……ないわよね）

訂正。

まだではなく、全然であった。

「ていうか、男子の試合とか見てもねー」

「言ってる。たまたまISの適性があったってだけで、試合内容なんておざなりなんだし、さっさと他の代表候補の試合見たいんだけど」

ふと、楯無たちより上の観客席に座る一年生たちの声が二人の耳に届いた。

ピクツと楯無たちの耳が今の言葉に反応する。

「そんなこと言ったら、はつきり言ってるあの先生も強いのかどうか分からないよねー」

「更識先生？ 黒執事とか言ってる昔は凄かったらしいけど、今はそれ起動させてるの見た人いないんでしょ？」

「座学専門の先生なんじゃない？」

「織斑先生とか山田先生とかとよく一緒に居るけど、正直なんか釣り合ってる感じがするよね」

ビキビキツ！ と楯無の額に青筋が浮かぶ。

いけないと直感的に悟った虚は瞬間的に楯無の両脇に腕を回して羽交い絞め動きを拘束。暴れだそうとした生徒会長を必死に抑えた。

「離して虚。あの二人にオハナシがあるの」

「そんな冷静を装ってもダメです。明らかに怒ってるじゃないです

か

「やあね、怒ってないわよ。私は至って普通よ?」

「じゃあ専用機を部分展開しようとしなくてください」

待機状態の専用機に手を添える姫無を抑えつつ、しかし虚も決して怒っていないわけではない。

彼女たちが楯無たちの実力をよく知らないというのも仕方ないのかもしれないが、それでも教員に対しての評価にしては些か低すぎる。

女尊男卑の風潮は、四人の男性IS適合者の出現で殆ど無くなったと言っている。

が、それでもやはりその風潮に流される輩というのは出てきてしまうのだ。

こういった生徒は少数だが、なまじ学園に入学出来るだけの適正があるだけに尚質が悪い。此処で姫無が出て行ったところでどうしようもないということは本人が最も良く理解しているので虚の拘束から逃れることはしないが、しかし内心で燻った感情を完全に押し込めることもどうやら不可能のようだ。

「……………」

「お嬢様、目が怖いです」

ジトツ、というよりはギンツ、と上の観客席で会話をしていた二人を睨みつける。

「兄さんのこと弱いなんて言える人間がこの学園に居るなんて知らなかったわ」

「まあ楯無さんは一年生の学年主任ですけど授業の受け持ちは二、三年生ですし、そう言えるのも今のうちだけだと思いますよ」

「というかあれよ。今のご時世でまだ女尊男卑とか言ってるのが信じられないわ」

その言葉には虚も同意だ。

何せISが発表されてからの約十年、最もその名を知らしめたのが『白騎士』、『黒執事』、『蒼天使』の三機。その操縦者の二人は男性であ

る。これでどうして女性の力が男性よりも上だと言えようか。

適性を持たない多くの男性を標的にする女性も居るが、そういった女性の多くはISの適正值が低い。それなのにどう勘違いしたのか、IS適性を多く持つ女性のほうが男性よりも偉いなどという誤解をしまっているのだ。

先程姫無たちの上で話していた生徒も恐らくはその部類に入るのだろう。

「一度兄さんに相手してもらえばいいのに」

「それは流石に……」

「とりあえず、兄さんの弟子なんだから一夏君にはきっちりしつかり勝ってもらわないとね」

兄さんの為にも、という言葉が後に続いているような気がしたが、そこに突っ込むことは虚はしなかった。

藪蛇は御免だからである。

「あ、織斑君出てきましたよ」

虚の言葉の通り、ピットから二機のISがアリーナへと飛び出してきた。白と山吹色の機体が空中で静止し、互いに開始の時を待つ。

「お嬢様から見ても、織斑君はどうですか？」

「身体能力は申し分無し。ISの操縦はまだ荒いけど、兄さんの稽古を受けてるだけあってそれなりに戦えると思うわよ。皿式つてのは簪ちゃんとの試合映像を見る限り遠距離型みたいだし、更識流を叩き込めればそこで勝負ありつてところかしら」

懐から取り出した扇子でパタパタと仰ぎながら姫無はそう評価する。

なんだかんだ言っても彼女にとっても弟分のような存在なのだ。やはり勝ってほしいと思う。

「ま、じっくり観させてもらいましょう。私を守れるくらい強くなるんなら、こんな所で躓いちやダメよ」

人の悪い笑みを浮かべて言う生徒会長。

彼女がそう言った数秒後、試合開始を告げるブザーがアリーナ内に大きく鳴り響いた。



## #12 対決と暗躍

——何処の国にも属していない、とある海域に浮かぶ小さな無人島。

衛星による監視網のギリギリ及ばない、それでいて何処の国からも干渉を受けない半径二キロ程の小さな島。赤道に近いのか寒さよりも暑さを感じる緑豊かな島の一角に、ソレはあった。

半円状のドームのような白い建造物。屋根と思しきものの上には、二本のウサ耳のようなものがピョコンと突き出している。大きさはそこまで巨大なものではなく、五人も人が入ればぎゅうぎゅう詰めになってしまうほどの建造物の内部にはぎつしりと何らかの機械が詰め込まれていた。

半分以上が機械に埋め尽くされた建造物の内部、一人がかろうじて生活できる程のスペースを残したその場所に彼女は居た。

「ふんふんふん」

桃色の髪の上でうさ耳がぴよぴよこと揺れる。

不思議の国のアリスが着ていたような水色のドレス型ワンピースを着た女性は、鼻唄を唄っていることから分かるようにかなり上機嫌だった。

カタカタと鳴らされるコンソールと相まって一つの音楽として成立してしまいそうなほどである。

「楽しみだなー楽しみだなー。ひっさしぶりにかーくんたちに会えるー。あ、でも直接つてわけじゃないか」

言いつつも手は休めない。おっとりとした口調からは考えられない程に素早く操作されるコンソールと共に、目の前に展開されている幾つものウィンドウが開かれては閉じられていく。常人では決して不可能な処理速度でそれを行っているのはISの生みの親、篠ノ之束である。

彼女が現在いじっているのは主に二つ。IS学園にハッキングして入手したアーリーナのカメラ映像と、今まさに調整を終えようとして

いる真つ黒な I S だ。

「へー、あれが Y・C が開発した四人目の専用機か。ま、束さんには適わないけど流石はあの男ってとこかな。第三世代型にしては随分とまあ過剰なオプション付けてるね」

I S 学園での映像を横目に見ながら、束はニヤリと口元を吊り上げた。

まず前提として I S 学園には様々なハッキング対策が施されているのだが、この天災にとってはそんなもの自宅の鍵を開けるのとなんら大差はないらしい。

一夏に相対する山吹色の機体を暫し見つめていたが、束はそこで始めてコンソールを操作していた手を止める。

「——でも、折角の機体も操縦者がコレじゃあ、Y・C も報われないなあ」

皿式鞄無。

確かそんな名前だったと記憶していた。

基本的に一部の人間以外にはてんで興味を示さない束だが、とある種類の人間に対しては別だ。それは研究対象。被検体と言つてもいいかもしれないその研究対象に、皿式鞄無という少年はぼつちりとカテゴリされていた。

何せ、世界に四人しか存在しないとされる男性ながらに I S に適性を持つ人間なのだ。

一人目の楯無と三人目の一夏、そして二人目の織村は研究対象にすることはない。となれば必然、残された彼が対象になる。

「アレなら私には何の関係もないし、攫つて隅々まで解剖して漬けて調べて、つてしても大丈夫なんじゃないかなあ」

楯無がこの場に居れば間違いなく止めるとツッコむところだろうが、生憎この場には束しかいない。彼女の思考を止める者が不在故に、恐ろしい思考は止まらない。

「そうだよ。きつとかーくんも許してくれるよ。だって皆の為なんだし、うんうん。かーくんやいっくんが実験動物にされないように、束さんが一肌脱いであげちゃう」

いよいよ以て皿式の安否が怪しくなってきたところで、普段は絶対に鳴らない束が所有する小型端末が着信を知らせる音楽を鳴らした。この小型端末のアドレスを知っているのは世界中で僅か数人。彼女の大切な人間のみである。直ぐ様端末を通話状態にして耳に押し当てると、聞き慣れた声が鼓膜を刺激した。

『よう』

「どしたの？ そっちから掛けてくるなんて珍しいねかーくん」

連絡を寄越してきたのは現在IS学園で教師を務める世界初の男性IS操縦者、更識楯無。

普段であれば彼も滅多なことがない限り束に連絡を寄越すことなどしないのだが、一体何の要件があるのだろうか。そこまで考えていた束は、直ぐに思い至った。

「ああ。もしかしてアレのこと？」

アレの事とは当然、今の今までどうやってミンチにするか考えていた四人目のことである。

『どうせお前また学園のカメラハッキングしてるだろ？ だから言うが、余計な横槍は入れるんじゃないやねえぞ』

ギクリ。

通信のみであるにも関わらず、まるで全て見透かされているかのような物言いに思わず表情が強ばる。

「や、やだなあかーくん。束さんは忙しいんだよ、そんなちよっかい掛けてる暇なんてないない」

『ほーう』

やけに間延びした声。これは明らかに疑っている。

『じゃあもしもの話だ。もしも束がこれからの一夏の試合に不躰なものを寄越すとする。その場合、俺は全力で阻止するぞ』

ギクギクツ。

「へ、へー。そんなこと考えてたんだかーくん。心配性だなあ」

だらだらと、嫌な汗が止まらない。

『ま、俺の杞憂ならそれでいいんだが。……一夏の今の実力を測るにはいい機会なんだ。邪魔すんなよ』



そう言つて、楯無はプツリと通話を切った。

小型端末を手にしたまま、わなわなと束は身を震わせる。

これからしようとすることを読まれて先手を打たれたことに対する驚愕と焦り——ではない。

内から溢れてくるのは、愛しい人に自らの考えを予測されたことに対する歓喜。

「そっかそっかー！ やっぱかーくんには全部お見通しかー!! さっすが束さんが認めた男!! そろそろ夜も恋しいぜ!!」

最後の発言は聞かなかつたことにしておこう。色々と面倒なことを掘り返してしまいそうな気がする。

端末を適当に放り投げ、再びウィンドウへと視線を落とす。

その先にあるのはIS学園のカメラ映像ではなく、格納庫のような暗い一室だった。薄暗いので分かりづらいが、そこにはISのような真っ黒な機体が鎮座している。

「……いっくんがどのくらい成長してるのか、もっと手っ取り早く測ろうよ。……コレを使つてね」

つい最近完成したばかりの真っ黒な機体を見つめながら、束は楽しそうに呟く。

格納庫に収納されていた真っ黒な機体を機動させるための操作を終えた束は満足げに一つ頷き、そしてこう溢した。

「このゴーレム。いっくんは何体まで相手にできるかな……?」



さて、と。

携帯端末をポケットに収納しながら、俺はアリーナの方へと視線を向ける。一応の釘は刺しておいたがこれであの天災が止まるとは思っていない。

恐らく、いや間違いなく束はこのクラス対抗戦中にあの黒い無人機を投入してくることだろう。

目的は一夏の成長具合の確認と皿式の様子見といったところだろ

うか。アイツのことだから、下手したら皿式のほうは攫って解剖とか考えているのかもしれないが。

「あれ、どうしたんですか更識先生」

アリーナの外で考えていると、不意に声が掛けられた。

視線をそちらへと向けてみれば、黒髪を靡かせながら見知った女性がやって来るところだった。

「榊原先生」

榊原菜月。

部活棟の管理を任されているIS学園の教員だ。生徒に優しく品行方正で容姿も悪くなく、男など引く手数多だろうという言い方は悪いが優良物件な女性である。

が、しかし。この先生、男運が全くと言って良いほどにない。同じ女性の目から見てもこれはあんまりという相手を毎回好きになり、その度に痛い目に合って自棄酒を煽るはめになっている。

俺も一度その自棄酒に付き合わされたが、なんともまあ酷い有様だった。ぐでぐでになった挙句に俺に付き合えだの言い出したときは流石にこれとは思ったが、それもその後すすり泣く彼女を見たら何も言えなくなってしまったのを覚えている。

あれ以来、俺は彼女と二人きりで呑んだことは無い。

「一年生の試合は見なくていいんですか？」

「見たいのは山々なんです、如何せん学年主任の仕事に追われてまして」

「その割には何か考え事をしてたみたいですけど。私何度も声を掛けたのに、全然気づいてきけませんでしたし」

ぶうつ、と頬を軽く膨らませて言う榊原先生。この人はたまにこういった年齢に合わない可愛らしい行為をするが、どういう訳か全く不快にならない。

これで男運さえ悪くなければきつと完璧だろうに。

「ああすみません。少しだけ思うところがあって」

「いえ、深くは聞きませんから」

引き際も心得ているとは何て出来る女性なのだろうか。ズバズバ

と切り込んでくる千冬にもこれくらいの対応をお願いしたいんだけどな。いや、無理か。

「榊原先生は観戦に？」

「はい。丁度仕事も一段落ついたので、注目の男子同士の戦いを拝見しようかなと」

あ、でも。と榊原先生は付け加えるようにして。

「私的には、更識先生が戦つてるところの方が見たいですけど」

ちらりと上目遣いで告げる彼女に、俺は苦笑しつつ返す。

「俺は教員ですから、有事の際以外は基本的に戦闘行為なんてしませんよ」

「えー、私まだ黒執事生で見たことないんですよ」

「学園の教員は基本見たことないと思うので問題ありません」

今はもう少なくなつたが学園に赴任したばかりの頃はこうして黒執事を見せてくれと言つてくる生徒や教員は少なくなかつた。別に隠す必要も無かつたが、どうも見世物にされているようで気分もよくなかつたので何かにつけて断つてきたのだが、この榊原先生は中々諦めてくれないようだ。いつそ見せてしまえば済む話だろうが、なにやら憚られる。

どう言いくるめようか考えていると、一年生が集めるアリーナから大きなブザーが聞こえてきた。

試合開始を告げるものだ。

「始まったみたいですね」

「そうみたいです。じゃあ、私はこれで失礼します」

挨拶もそこそこに、榊原先生はくるりと背を向けてアリーナの中へと入っていった。

「……さて」

首を鳴らし、ゆつくりと歩き出す。

原作通り行けば凡そ今から七分後、無人機の襲撃があるだろう。今から生徒全員を避難させるのは時間的に難しいのでやはりアリーナの遮断防壁に頼るほかない。ロックされるであろう入口は俺なら突破できるので問題はないが、遮断シールドがレベル4に設定されれば

学園の生徒だけで突破するのは困難だ。

一夏のことだからある程度の対抗はできるだろうが、それでも一人あの無人機に対処できるかと問われれば恐らく五分。皿式が戦力としてカウントできない以上、どうしても一夏が一人で戦わなくてはならなくなる。

ならばアリーナ内部に居て一夏の援護を、とも考えたが即座に却下した。

本心を言えば援護に回ってやりたいところだが、そう思う反面これくらいの危機は自力で乗り越えて見せろとも思うのだ。

そんな訳もあって、俺は真耶や千冬がいるであろう管制塔へと向かう。

試合が始まって盛り上がってきたのか大きな歓声が聞こえてきているが、それも今のうちだけだろう。

出来ることなら最後まで試合をさせてやりたかったが、どうやらそれは無理そうなのだから。



ガギンツ!! と白と山吹色の機体がアリーナの中心でぶつかり合う。

白式を纏う一夏とサンライト・トゥオーノを纏う皿式。両者の戦いの形勢は、試合開始から三分経った今も不変だった。

離れようとする皿式との距離を一夏が詰めて、更識流を叩き込む。遠距離攻撃を仕掛けようとする暇を与えず、攻撃の手を緩めない。攻戦一方の一夏に対して、防戦一方の皿式。機体性能の差があるにしても、些か一方的すぎる展開になっていた。

ガンツ!! と一際強い接触の後、何とか一夏との距離を取る皿式。その心中は穏やかではなかった。

(くそー・くそくそ!! どうなってる!? なんでもこんな強いんだよ!!)

与えられた専用機を必死に操作しながら皿式は内心で悪態をつく。

(簪の場合は代表候補生なんだからしようがないと割り切ってたが、これ簪よりも強くないか!?　なんでISに触れて一ヶ月かそこらの素人がこんな強いんだよ!!)

そう考えている今この時も、一夏の攻撃は止まない。

「更識流、木蓮!!」

「うおッ!」

瞬時加速によって一気に距離を縮めた一夏はそのスピードを殺すことなく、そのまま更識流の木蓮を仕掛ける。

近距離に対応したこの技は、簡潔に言ってしまうえば飛び膝蹴りだ。通常の木蓮でも受ければ大きなダメージを受けるが、そこに更に瞬時加速によって威力を高めている。直撃を喰らえばシールドエネルギーは大きく削られるだろう。

その木蓮を間一髪で躲し、カウンターとばかりに電撃を撃ち込む。

が、電撃が届く前にそれを一夏は紙一重で躲す。もう何度も行われた攻防だった。

(電撃を避けるって有り得んのか!?　何でそんな平然としてんだよ!!　喰らったら最悪死ぬかもしれないんだぞ!)

劣勢。

流石に認めざるを得ない。

(クソツタレが……、超電磁砲を使ってもいいが、躲されたんじや意味がないしカウンターで攻撃を喰らうだけだ……。どうすりやいってんだよ……!!)

ギリリ、と奥歯を噛み締める。

そしてそんな皿式の前に、一夏は奇しくも代表決定戦の時の簪と同じ感想を彼に抱いていた。

(……これが、四人目の男子?　弱いな……)

自身もまだまだ未熟ではあるが、それでも感じずにはいられない。

目の前に浮遊する四人目の男性IS操縦者、皿式鞘無は、弱い。

入学して一ヶ月。操作技術などがおぎなりなのは仕方がないとしても、操作以前にISの事を知らなさすぎるように思えてならない。

スラスターは噴かせすぎで効率が悪いし、移動の軌道も大きくロス

が多い。それに攻撃も単調なものばかりで戦略も何も感じられない。本人とまともな会話したことはないが、彼はこれまでどう学園生活を過ごしてきたのだろうか。

少なくとも、自身のように訓練等まともに行っていないのではないか。

「……嫌だな」

ぽつりと、一夏の口が動く。

「一緒にされるのは、何か嫌だ」

ガシヤリ、と一夏は右手に展開した純白の近接型ブレードを構える。

エネルギー効率がとことん悪い雪片式型だが、使いどころさえ間違えなければエネルギーをそこまで多く持つていかれることはない。この一ヶ月、基礎鍛錬に加えてこの武装を使いこなせるように訓練してきたのだ。まだ完全とは言えないが、実戦で使えるレベルまでは上げてあるつもりである。

雪片式型を一夏が構えたことで試合を終わらせるつもりだと、皿式も気がついた。

（やらせるかよ……い・こんなシナリオ、誰も望んでねえんだ！）

バチ、つと紫電を走らせ、皿式の身体が仄かに嘶く。

帯電させているのか、彼の周囲は視界にもはつきりと捉えられる程の紫電で覆われている。

「見せてやるよ……」

山吹色の機体の一部を切り離し、高々と放り投げる。

皿式はそのまま右拳を引いて、投げた機体が落下してくるのを待つて。

そして、勢いよく拳を落下してきた機体へと叩き込む。

「これが俺の、全力だあああああッ!!」

ボツ!! と勢いよく振り抜かれた拳が弾き飛ばした機体の一部が、音速の三倍の速度で一直線に一夏へと迫る。

簪との対戦の時に使用した大きめのコインの比ではない大きさだ。直径一メートルはあろうかというそれを切伏せるのは、一夏でも難し

いだろう。

しかし、一夏はそれに真っ向から突っ込んだ。  
雪型式型を振り上げ、そして――。

皿式の全力として放たれた攻撃は、突如として飛来した真っ黒な機体の装甲に直撃し、敢え無く弾け飛んだ。

「――は？」

「え――」

呆ける皿式と眉を顰める一夏。そんな二人に、漆黒の機体が襲いかかる。

## #13 乖離と参戦

「状況は！」

「アリーナのシールドエネルギーを貫通！ 正体不明の物体が内部に侵入しました！」

「アリーナ内の生徒の保護を最優先、教師陣はIS展開の用意を!!」

一夏と皿式の戦うアリーナを覆うようにして常時展開されていた遮断シールドを貫いて侵入した正体不明の漆黒の機体。一目見ただけでは判断しかねるが、それでもアレが生徒たちにとって十分に脅威に成り得る事は理解することが出来る。直ぐ様千冬は真耶へと指示を飛ばす。

「ダメです！ アリーナの入口がロックされています！ ……レベル4!?!」

生徒の保護を優先して行うために出口を確保しようと端末を操作する真耶だったが、画面上には無慈悲にも扉が全てロックされていることが表示されていた。

しかも遮断シールドはレベル4に設定されている。これはISの高火力兵器を用いても破れないであろうことを意味している。

つまり現状、アリーナの内部は完全に隔離された状態にある。

「直ぐに整備科三年と教師を向かわせろ。外部からどうにかして扉のロックを解除させるんだ」

「了解しました！ 布仏さん！」

『もうやってます山田先生』

真耶の呼びかけに、直ぐに虚からの返事はあった。

生徒会の面々には個人的に教師たちと連絡を取る回線が小型端末を通して引かれているので、こういった緊急時も連絡を取り合うことが出来る。尚これは電話やメールといったものではなく、どの通信手段からも連絡を取れる優れたものだ。この場合は管制塔から虚の小型端末へと回線を繋いでいる。

『ダメですね。手持ちの機器じゃ解除は不可能です』



「整備室に寄って行かなかったのか」

『それが、私も会長もアリーナの内部に閉じ込められてしまつて』  
思わず千冬は頭を抱えた。

整備科の主席たる虚と学園唯一の生徒国家代表である姫無。この二人も内部に居たとは全くの予想外だった。

正直、虚の機械類に対する技術はIS学園の教師をも上回っているし、姫無の戦力も一教師以上のものであるため、内部に閉じ込められてしまったこの状況はまずいと言う他なかった。

「姫無、聞こえるか？」

『ええ、聞こえてます更識先生』

頭を抱える千冬から端末を取つて、俺は姫無へと声を掛けた。

通常であれば俺のことは学園内であつても兄さんと呼んでくるが、流石にこの事態ではそんな悠長な態度でいるわけにもいかない判断したのでらう。

「アリーナ内に侵入した正体不明の機体だが、お前も必要があれば夏の援護に当たれ。だがそれまでは生徒たちの安全確保が最優先、決して怪我人を出すな。それから布仏、北側のゲートに回れ、そこにこちら側から教師と整備科を向かわせる」

『了解』

『分かりました』

俺の支持に姫無と虚の二人はそう短く答え、即座に行動に移す。

一応こちらからもカメラの映像でアリーナ内部の映像を確認することはできるが、心許ないのが正直な所だ。

出来ることならこのまま何事も無く終わつて欲しいが、束がこれだけで終わるとは考え難い。

かと言つて今の俺に出来ることは何も無い。結局、この管制塔で一夏たちの無事を祈ることしか出来ないのだ。まあ、いざとなれば強行突入するつもりではあるが。

「だから落ち着け、織斑先生」

「落ち着け？ 何を言っている更識先生。私は至つて冷静だぞ？」

「右手のそれ砂糖じゃなくて一味唐辛子だぞ」

「……なんで一味唐辛子がこんなところにあるんだ」

表面上はポーカーフェイスを貫いているが、どうも千冬は一夏の事が心配で気が気でないらしい。コーヒーに一味唐辛子をぶち込もうとするくらいには動揺しているようだし。

確かに心配する気持ちも分かるが、俺たちアリーナの外にいる人間にはこの現状を打破することは出来ない。扉のロックを解除するために向かわせた整備科の三年生たちもロックを解除するには相応の時間がかかるだろうし、力技でこじ開けるには真耶の専用機では火力不足、千冬の暮桜があれば可能だったかもしれないが、無い物ねだりをしては仕方ない。

「山田先生、一夏に通信を繋げてくれ」

「分かりました」

俺の指示に一つ頷いて真耶は端末を操作し、個人秘匿回線（プライベートチャネル）を通じて一夏へと声を掛ける。

「織斑、聞こえるか？」

『この声は、更識先生？』

「そうだ。現状を詳しく説明している時間はないから簡潔にだけ要件を伝える。目の前の黒い機体を破壊しろ」

『破壊しろって言われても、大体あれは何なんですか？』

「詳細はこちらでも不明だ。しかしIS学園に侵入してきた以上ソイツは敵以外の何者でもない。必要があれば生徒たちの安全確保を優先している姫無にも援護するよう伝えてある」

『……分かりました。俺がやります』

一夏の返答に、俺は小さく口元を綻ばせる。

本当に、言うようになったじゃないか。

通信を切って、備え付けの椅子へと腰を下ろす。

「どういうつもりだ？」

途端、千冬が詰め寄ってきた。

「どうって？」

「生徒を戦わせることだ！」

成程。俺の予想以上に、千冬は一夏の事が心配であつたらしい。教

師として生徒を心配するというよりは、姉として家族を心配しているようだ。

「現状、それ以外に方法は無い」

「だが……！」

「心配するな。いざとなれば姫無だっているだろう。あの機体の破壊くらい、今の一夏ならやれる筈だ」

そう言う俺に、千冬はまだ何か言いたいようだったが頭では理解しているのだろう。大きく息を吐いて砂糖を入れ損なつたブラックのコーヒを一気に飲み干した。

此処で見ていることしか出来ない自分かもしかしいのだろう。その気持ちは俺も痛いほどに理解はしている。

生徒を信じる。言葉にしてすれば簡単だが、これを実行するというのは存外難しい。それをひしひしと感じながら、俺はモニタへと視線を向ける。そこには白式を纏つた一夏の懸命に戦う姿があつた。



「あつぶねー」

つい一秒前まで立っていた場所が熱戦で砲撃された。ビーム兵器を展開しているらしく、その威力は恐らくセシリアのスターライトmkⅢよりも上だ。

次々に撃ち込まれる熱戦をアリーナの壁に沿うようにして回避する一夏は、中心地で自身をロックオンしてくる漆黒の機体へと目をやった。

全身を黒い装甲で覆われたそのISは両腕が異様に長く、つま先よりも下まで伸びていた。更に肩と頭が一体化しているような形を取っておりどうやら首は存在しないらしい。

しかしそれよりも一夏の目を引いたのが、『全身装甲（フル・スキーン）』だ。

現存するISは基本的に部分的にしか装甲を形成しない。セシリアのブルー・ティアーズや皿式のサンライト・トゥオーノも、生身の

部分が露になっている箇所が幾つもある。それは何故か。必要がないからである。IS戦に於いて防御は殆どがシールドエネルギーによって行われるし、重い装甲は機動の邪魔にしなければならない。

当然防御に特化したISであれば物理シールドを搭載している機体もあるにはあるが、それでも搭乗者の肌が全く露出していないというのは聞いたことがない。

(にしても厄介だな……。あのビーム兵器を何とかしないと近づくとすら難しい)

機体の左右に二つずつ、計四つのビーム砲口があり、否応なく一夏へと熱戦を放ってくる。

遠距離武装を搭載していない白式では、どう抗っても距離を詰めることは攻撃を当てることは出来ない。

この現状をどう打開すべきか、一夏は動きを止めずに考える。

生徒たちの保護を優先している姫無に援護を頼むか。否、それはダメだと脳内で即座に切り捨てる。彼女が生徒たちの保護を行ってくれているからこそ自身が存分に戦えるのであって、彼女が増援に回ってしまうと周囲の被害を逐一考えながら攻撃しなくてはならなくなる。

それでは本末転倒だ。視線の先で尚も攻撃を続ける漆黒のISを破壊するには、己の力のみで押し切らなくてはならない。

——いや、待てよ。

一夏は思い至る。

このアリーナ内部には、もう一人居るじゃないか。

専用機を持ち、更には自身のように近接型ではなく遠距離攻撃を基本とした機体を操作する生徒が。

「——皿式ッ!!」

「フアッ!」

突如として投げかけられた声に驚いたのか、皿式が場にそぐわない素っ頓狂な声を上げた。

まさか声を掛けられるとは思っていなかったのだろう。被弾しないようアリーナ外壁の隅でアルマジロのように丸くなっていた山吹

色の機体からひよつこりと顔を上げた。

この緊急事態で全く戦闘の意思を見せていない、というのはこの際置いておくとして。一夏をこちらに視線を向けている皿式へと更に大きな声で呼びかける。

「さっきの、もう一回撃てるか!?!」

「さっきのって、超電磁砲のことかよ?!」

どうやらあの自壊技は超電磁砲と言うらしい。

簪の時は装甲を切り離していなかったもので、必ずしも自壊しなくてはならない訳ではなさそうだが。

こうしている今も相手の攻撃は止まない。一夏としてはダメならダメでまた別の方法を探すつもりだったが、返って来た言葉はその予想を覆すものだった。

「……ッハ、誰に言っただよ織斑。そのくらい訳ねえぜ」

ガシャンツ、と体育座りを解いて立ち上がり、今度は腰周りの装甲を引っぺがした。

先程までの態度とは打って変わって強気に口元を吊り上げる。その様子を訝る一夏だったが、そこを詮索している余裕は今はない。遠距離攻撃が行えるのが彼しかいない以上、隙を作るためには必要だ。一夏は迫り来る熱戦を紙一重で回避しながら、皿式が攻撃できるようなスペースを空けた。

そして、そこに紫電を帯びた山吹色の物体が射出される。しかし。

最初の時と同様、皿式の一撃は漆黒の機体の全身を覆う装甲に阻まれ、敢え無く弾け飛んだ。

愕然とする皿式。が、ここまでは一夏の計算通りだ。あのような攻撃を行えば、あの長い腕で弾くか、その必要さえなければそのまま何の抵抗もなく受け止める筈だ、と。

そして事実、あの黒い機体は始めのように装甲に頼り迎撃を行わなかった。つまり、何のモーションも起こさなかった。

初動の差。一夏の狙いは、ここにある。

第四世代に相当する白式と互角の機動力を有する目の前の敵に一

撃を与えるには、どうしても初手をこちらが取らなくてはいけないかった。遠距離武装を搭載していない白式では、どうしてもその差を付けられない。そこで皿式の遠距離攻撃だ。ダメージを与えられれば御の字だが、そこまでは考えていない。

一瞬。たった一瞬だけでも向こうの動きを止めることが出来れば、それでいい。

雪片式型を両手で握り、何の迷いもなく瞬時加速で漆黒の機体の元へと突っ込んでいった。

——零落白夜、使用可能。エネルギー転換率九十四パーセント。

脳内に直接響くように情報が伝えられる。

「う、おおオオおおおッ!!」

一夏に照準を合わせた黒の機体は、再び熱線を放とうとビーム砲口を向けるが一夏は既に雪片式型を振りかぶっていた。

砲口が火を噴く寸前。触れさえすれば否応なくエネルギーを削り取る一撃必殺の純白の刃が、黒を一閃した。



「ほお、やるじゃないか」

「やりましたね織斑君!」

管制塔のモニタ越しに戦闘を見ていた俺は腕組みしつつそう零す。いやいや、普通に強くなってるな一夏。まさかこんな短時間であの無人機を破壊するとは思わなかった。原作でも鈴の衝撃砲を利用した捨て身の攻撃とセシリアの加勢でなんとか撃退したくらいだったのに。

今回皿式の攻撃を囷にして零落白夜をぶち込んだのは咄嗟にしては良い判断だと言えよう。あの無人機の装甲はそれこそ雪片式型でなければ破壊できないだろうし、一夏の操縦技術ではまだアレを振り切れるほどの機動力は持ち合わせていない。生徒たちを守るために行動していた姫無と連携を取ればもう少し上手く立ち回れたかもし

れないが、多分一夏は姫無も巻き込みたくはなかったのだろう。

全く、変な所で姉と似ている。特にその呆れるまでの正義感とか。

「……何だ」

「別に。良かったじゃないか織斑先生。大好きな弟が無事で」

「……ふん、あんな戦い方しか出来ないようじゃ、まだまだ半人前もい  
いところだよ」

とか言いつつも口元が綻んでいることに本人は気付いていないの  
だろうか。

全くこのブラコンは。

「……………」

「……………」

そう思った瞬間、どういう訳か千冬と真耶からジト目で睨まれた。

「な、何だ？」

「お前にだけは言われたくないようなことを言われた気がした」

「私もです」

「え、何。お前らエスパー？」

一夏が無人機を行動不能にしたことで取り敢えずの脅威が去った  
為か、管制塔に居る教師たちにも安堵の表情が浮かんでいる。それは  
表には出さないが千冬や真耶も同じようで、今の会話を聞いても分か  
る通りほつとしているようだった。

さて、これ以後はロックされている扉を整備科の三年生たちが解除  
することが出来れば一先ず一安心だろう。遮断防壁を破壊されたこ  
とは大問題だが、それよりも今は生徒の安全が最優先だ。

「真耶。布仏に通信を回してくれ」

「了解です。布仏さん、聞こえますか？」

「コンソールを操作し、虚へと連絡をつける。」

『はい、聞こえます』

「布仏、ロック解除まであとどれくらいかかりそうだ？」

『こちら側にある道具だけではなんとも……。向こう側の状況にもよ  
りますがあと三十分程はかかるかと思えます。何せレベル4ですか  
ら、そう簡単にはいきませんね』

「そうか。外側からとも連絡が取れるよう管制塔を中継して話をつけるから、何か要望があれば伝えてくれ」

『分かりました。では——』

そこから先の虚の言葉を、俺を含めた教師たちは聞き取ることが出来なかった。

遮断防壁を貫通する際の独特な金属音にも似た衝撃音と爆音が響き渡ったからだ。

「ッ、状況報告！」

「アリーナの遮断防壁が貫通！　アリーナ内に熱源反応、その数、六!?」

真耶の報告に、俺や千冬の顔が強ばる。

原作とは明らかに異なる状況だが、アリーナ内に六体もの無人機が侵入してきたということらしい。それなんて無理ゲーな状態だ。少なくとも一夏一人では六体もの無人機を相手取することは不可能だろう。

即座に一夏と皿式に向けて通信回線を開く。

「織斑、皿式。直ぐにその場から離脱しろ」

返答は、直ぐにあった。

『更識先生ッ、でも！』

「でもじゃない。お前たちにせいづらの相手は無理だ、状況を考えろ」  
『っ、……』

一夏のほうからの返答が無いのは、現状を良く理解しているからだろう。しかしそれでも、自分が戦わなければ他の人を危険に晒してしまう。そのジレンマに悩まされている。

が、そいつは無用な心配だ。

「安心しろ織斑」

『え……？』

俺の言葉の意味が良く理解できなかったのか、呆けた声が通信越しに返ってくる。

俺は視線だけを千冬と真耶に向けて、再び通信を虚へと開いた。

「布仏。今から十秒くらいしたら、扉から離れろ」



『え？ ああ、了解しました』

その返事を聞いて、次は姫無へと。

「更識、今からちよつとした衝撃があるだろうから生徒たちにはうまいこと言っといってくれ」

『え、何その後処理みたいな雑用』

「お前にしか頼めないことだ」

主にその場にいる通信手段を持っているのが姫無しかいないという意味で。

だが、俺のその発言をどう勘違いしたのか。

『な、なら仕方ないわね！ 兄さんがそこまで言うなら、私が必要だつて言うんなら！』

何やら嬉々とした声が聞こえてくるが、そこには触れず、俺は管制塔から離れて学年主任室へと向かう。生徒たちのほぼ全員がアリーナへと集まっていることもあって人影は全く見当たらない。これなら、問題無さそうだ。

普段ならこんな場所で絶対に使わないが、あの第一位の能力を解放させる。

ダンツ、と足に力を込めると、弾丸のような速度で移動を開始した。移動を開始して数秒、直ぐに目的地の前に辿りついた。

学年主任室。その室内の奥にある、普段は使わないクローゼット。それを開いて、中に入っていた一着を取り出す。

「……ふう。コレ、もう着るつもりはなかったんだけどなあ」

今更何言つてんだかと自分自身でも思うが、考えてみればコレに袖を通すのは実に数年ぶりのことだ。慣れた手つきで身に纏い、最後に白の手袋をキュツと嵌める。

さて、と。

「——行こうか」



「くそ、数が多すぎるー！」

一体でもあれだけ手こずったというのに、それが六体。いつそヤケでも起こしたい気分だった。

縦横無尽に走る熱線の数は二十にも及び、その全てを回避する能力は今の一夏にはない。それでなくとも零落白夜の使用によつて殆どのエネルギーを持っていかれてしまっているのだ。飛行のみに専念したとしてもあと数十秒可動できるかどうかといったところだろう。

皿式のほうも装甲を切り離したことで専用機を展開することが不可能になつたらしく、ISスーツの状態でアリーナの隅で蹲っている。

これで本当に一人で戦わなければならなくなつてしまった。楯無には直ぐに離脱しろと言われたが、せめて生徒たちが避難するまでの時間は稼ぎたいというのが本音だった。だがそれも扉のロックが解除されないことには始まらない。八方塞がり、じりじりと削られていくシールドエネルギーに焦燥を募らせていると、目の前に漆黒のISが迫っていた。

(しまつ――)

気を抜いたつもりなど毛頭なかったが、連戦による疲労は脳の回転を鈍らせていたらしい。致命的なまでのミスに、思わず歯噛みする。目の前で相手の砲身が強い光を放つ。熱線を放つ前兆だ。

背後で誰かが叫んだような気がしたが、それももう良く聞こえなかった。

そして。

――目の前に迫っていた一体の黒いISは。真横からの衝撃に紙切れのように吹き飛ばされた。

全身装甲で覆われた機体が冗談のように大きく凹み、そのままアリーナの外壁に激突する。

タンツ、と軽い音を立てて一夏の正面に降り立ったのは、周囲に蔓延る機体と同じ黒。だが、それと比べると余りにも小さかった。その人は、一度だけ一夏へと目をやり、次いで周囲の五体のISを順に見やる。

エネルギーの残量が0になつたのか白式が解除されてしまった一

夏へと、黒の人物は告げる。

「離脱しろって言っただろうが。……だがまあ、よく持ちこたえたな」

テールを靡かせ、更識楯無は僅かに笑う。

「——ここから先は、俺が請け負った」

## #14 妹と証拠

「ここから先は、俺が請け負った」

スタンツ、と。驚く程に軽い音を立てて、自身の目の前にその人物は降り立った。先程真横からあの黒い機体を蹴り飛ばした所為で周囲には砂塵が舞う。それに合わせてはためく執事服のテールが、一夏にはやけに優雅に見えた。

白式が解除されてしまった今の自分の位置からでは、背を向けて立つその人の表情を伺い知ることは出来ない。

しかし、態々確認するまでもないだろうと一夏は思う。自身の師匠にしてIS学園一年生の学年主任を務める男性教諭。そして、世界初の男性IS操縦者。その人の表情はきつと、誰をも安心させる頼もしい表情をしている筈だ。

更識楯無。

ISというものを語る上で、この人の存在無くしてこれまでの歴史を語ることは出来ない。

黒執事、白騎士、蒼天使という三つの機体は世界中にその名を知らしめるビッグネームだが、今現在もその稼働が確認されているのは黒執事だけである。第一世代型の時代に生み出されながらも、第三世代型が主流となりつつある現代に至るまで稼働を続ける伝説の機体。

その稼働が最後に確認されたのは、今から約二年前のとある事件だ。

それからその黒い姿は、公式の上では一度も確認されていない。

その姿が今、一夏の目の前に在った。

「一夏。お前はそこに蹲ってるのを回収してこの場から出来るだけ離れろ」

ピツと指指すその先には、ISが強制解除されて体育座りで蹲る皿式の姿。先程の一撃が通用しなかったことがショックだったのだろうか、超電磁砲を放つ前の不敵な笑みは消え、ブツクサと呪詛のように何かを吐き出している。アレを連れてこの場を離れる、というのは憚られたが仕方ない。ISを展開出来なければ足手纏いにしかなら

ないことは十分理解していたし、何よりもこの場を離れなければ戦闘の余波に巻き込まれてしまうだろう。

一夏は駆け出すと皿式を担ぎ、アリーナの中心から出来るだけ距離を取る。アリーナの内部にいることには変わらないのでそこまで危険度も変わらないが、そこは楯無が考慮してくれるだろう。

未だに五体のISに囲まれる状況で、彼はどこまでも不敵に笑ってみせる。

「さて、——始めようか」



時は楯無がアリーナに侵入する少し前に遡る。

突如としてアリーナの遮断防壁を突き破って侵入してきた漆黒の機体を前にして、楯無は直ぐ様席を立った。

「虚、状況確認……はするまでもないか」

「ですね。侵入者、その数一。ここからでは詳細な箇所までは判りかねますが、あの機体には搭乗者が居ないよう見受けられます」

同じく席を立った虚が大雑把に分析を始める傍ら、楯無はざっと周囲を見渡した。

突然の事過ぎて脳の処理が追いついていないのか呆然とその様子を眺めている生徒が大半だが、中には声を上げて立ち上がる者も居る。このままでは一種のパニック状態に陥ってアリーナ内が混乱してしまうのは時間の問題だと言えた。

どうにかしようと思いを巡らせる彼女の耳に、端末の受信音が届く。それは楯無のものではなく、虚が所持する端末から鳴るものだった。

「はい」

『布仏さん！ 緊急事態です！』

端末越しに聞こえる真耶からの声が大きく響く。というか、言われるまでもなく緊急事態であることは理解していた二人は迅速に行動し一番近くにあった入口にまでやって来ていた。まずは出口の確保

が最優先という考えのもとこうして扉の前にまで移動した姫無たちだったが、案の定ロックが掛けられていた。

「……これはダメですね。手持ちの機器だけじゃあ解除は困難です」  
『整備室には寄って行かなかったのか』

次に聞こえてきたのは真耶ではなく、千冬の声。真耶よりは落ち着いているらしく、その声はいつもと変わりないものだ。

「それが私も会長もアリーナ内部に居たものですから。閉じ込められてしまったみたいです」

『……………』

端末越しに千冬の大きなため息が聞こえてきた。気がした。どういう訳か頭を抱える姿まで容易に想像することが出来る。

そのため息の原因、というのは大凡の検討はついているのでそれを問うようなことはしない。虚が扉を調べたところ、少なくともレベル4クラスのロックが掛けられていることは分かっていた。となると一般レベルの整備科の生徒ではまず解除は不可能。首席クラスの三年生とその教師でなくては難しい。

アリーナ内に機材を持ち込んでいけば内側から解除することもできたかもしれないが、たればを言っても仕方がない。

『姫無、聞こえるか』

「よく聞こえるわ」

聞こえてきた兄である楯無の声に姫無が反応する。

『観客席に居る生徒の安全確保が最優先だ。必要があれば一夏に加勢しても構わんが、基本的に生徒の避難誘導が済むまでは安全確保に徹しろ』

「了解。というか兄さん、アレはなんなの？」

訝しげに眉を潜め、アリーナ中心に佇む漆黒の機体へと視線を移す。見た目からしてアレに人間が搭乗しているとは思えない。しかし、無人機などという存在が確認されているわけでもなく、彼女としてもアレの存在を持て余していた。

返答は直ぐにあった。

『アレの正体は不明だ。が、俺の見立てだと、無人機の可能性が高い』

「無人機、ねえ。そんなものが実在すると言うの？」

『言つたら。俺の勝手な見立てだ、そうと決まった訳じゃない』

「ふうん。まあ、」

そこで一度姫無は言葉を切つて。

「兄さんの言うことなら、間違いないんでしようけど」

妖艶な笑みを浮かべるのだった。

「とりあえず、あそこにいる榊原先生にも協力して貰おうかしら——」

言つて、扉の前で作業を始めた虚をその場に残して観客席上部へと歩き出す。そこにはレディーススーツを着たこのIS学園の教師、榊原菜月の姿があった。向こうもこちらが近づいてくるのには気がついてらしく、小走りで姫無のほうへとやって来る。周囲の生徒への対応に困っていたらしい榊原は、姫無の前へとやって来て安堵の息を漏らした。

「さ、更識さん。良かった、貴方がいてくれて。私だけじゃもう生徒たちの不安を和らげることが出来そうになくて……」

「榊原先生。これから生徒たちの安全が確保されるまで、私と先生で生徒たちの避難誘導を行います。とは言つても、出入り口の扉のロックが解除されないと話にならないんですけど。そこは虚ちゃんがなんとかしてくれると思います」

「でも、あの黒いのは……」

「織斑君が対処してます。大丈夫、あの子は強いですから。それよりも問題なのは……」

爆音が聞こえ始めたアリーナの中心から、その周囲の観客席へと視線を移す。遮断防壁で守られているとは言つても、それを直接破つて侵入してきた敵が相手ではそんなものは慰めにもならない。それは他の生徒たちも理解していた。故に、自身にも身の危険が迫っているということに焦り、安全を確保したいがために我先にと逃げ出そうとする生徒たちが多くなっていた。

しかしロックが解除されない限り、その安全も確保出来ない。不安と焦燥が彼女たちの口から吐き出されるようになるまで、そう時間は

かからなかった。

「何で!? 何で開かないのよ!!」

「早くここから出して下さい!!」

「先生たちはなにしてるんですか!？」

「あの黒いのを何とかしてく下さい!!」

チツ、と。誰にも聞こえないように姫無は舌を打つ。

まともな思考が出来ていない。パニックに陥ってしまったている彼女たちには今何を言っても無駄だろう。かと言ってこのまま放置しておく就更にその数は増える。

暫し考えて、姫無は動き出した。

「榊原先生、生徒たちの避難誘導をお願いします」

「更識さんは?」

「出入口の周りで大声出してる生徒たちを静かにしてきます」

この場合は榊原に任せ、虚が作業している扉とは反対方向の扉に集まっていた生徒たちの元へと向かう。

アリーナの中心では一夏が侵入してきた機体と今も戦闘中だ。見たところあの黒い機体の機動力は一夏の白式をも上回っている。機動力で敵わないとなれば一撃の攻撃性で上回るしかないが、まず敵の動くを止めなくては攻撃そのものが当たらない。瞬時加速を使うか、更識流を使うか。幸いにしてあの場には四人目の男性操縦者もいた筈なので、囿くらいには使えるかもしれない。

いざとなれば専用機を展開して戦闘に加わる算段だったが、その可能性は低いと姫無は考えていた。

彼女は一夏のことを決して過小評価していない。

何せ自身や簪と徒手格闘ではほぼ互角の実力を有しているのだ。それは決してIS戦闘に於いても無駄にはならない。例えば、間の取り方や相手の動きを視る観察眼。未だにレーザーの直撃を受けていないのはこの二つがよく鍛えられているからこそである。

姫無は一夏の努力とその成長を間近で見してきた。だからこそ分かる。一夏の実力であれば、あの程度の敵は倒せると。兄もそう思っているからこそ、自身に必要ながあればと言ったのだろうし、保険程度に



考えてのことだろう。

よって優先させるのは生徒たちの安全確保。その為には今眼前でパニックに陥っている生徒たちを落ち着かせることだ。見たところ集まっている少女たちは二十人前後。その中には先程一夏や楯無のことを罵っていた二人の姿もあつた。

「貴方達。そこから離れなさい」

決して大きな声ではないが、よく通る声で姫無は彼女たちに告げた。

途端、今まで扉へと向いていた彼女たちの視線が姫無へと注がれる。一瞬呆けた顔をした彼女たちだったが、姫無の存在を認識した瞬間、まるで雪崩のように押し寄せてきた。

「会長!! これはどういうことなんですか!？」

「先輩の力でどうにかして下さい!!」

「早く扉を開けてよ!!」

「こういう時の為に生徒会はあるんでしょう!？」

阿鼻叫喚とはこのことを言うのだろうか、姫無は心の内で思う。恐怖や緊張といったものから解放されたい一心で姫無の元へと群がる彼女たちに、何時もの傲岸不遜の態度は見る影もなくなっていた。

アリーナの中心で今尚自分たちの為に体を張って戦ってくれている人間がいるというのに、目もくれずに身の安全を主張したがる少女たち。率直に、姫無は彼女たちのことが恥ずかしかった。くぐり抜けて来た場数や経験が違うとはいえ、一夏はISに乗ってまだ二ヶ月足らずの初心者だ。比べて彼女たちはこれまで何年もISに触れてきた玄人たち。立場的に本来であれば彼女たちがあの中心に居なければならぬ筈だ。遮断防壁があるとは言え、管制塔からカットするとは出来る。それをしないのは、観客席の生徒の安全を確保するためである。

自身の危険を顧みずに戦う一夏が、こんな彼女たちを守るために戦っているのかと思うと苛立ちが募る。決して表情には出さないようにしていたが。

「落ち着きなさい」

きつぱりと、ばつぱりと。

姫無は彼女たちの言い分を切り捨てる。

「私の力を以てしてもこの扉は破壊できないし、整備科のトップたちでも時間がかかるわ。あの黒いISが危険なのは理解できるでしょうけど一夏君が必死に応戦してくれているのだから、少しは冷静になりなさい」

「あんな初心者に任せて安心なんて出来る訳ないじゃないですか!」

そう反論してきたのは、件の少女二人の片割れだった。つい先程まで一夏たちを嘲笑っていた、その少女だ。

その少女の言葉に、姫無の瞳がスツと細くなる。

「大体男子を戦わせるなんてどうかしてます! 会長が戦えばいいじゃないですか!!」

「そ、そうですよ! 国家代表が戦ったほうが確実に決まっています!!」

もう一人の少女も口を挟み、その声を荒げた。そんな彼女たちに姫無は一度大きな溜息を吐き出して。

「……確かに私が戦ったほうが確実なのかもしれないけれど、その場合観客席とアリーナを分断する遮断防壁を一時的にでもカットしなくてはならなくなるのよ?」

「それでもあの男子に戦わせるよりはずっとマシです!!」

「そう、貴方はそれだけの為に他の生徒全員を危険に晒せと言うのね?」

「う……そ、それは……」

黙り込む少女に、姫無は更に続ける。

「貴方たちだけの安全に意味はないの。必要なのは生徒全員の安全確保。その為に私は今ここに居るのだから」

直後、アリーナ中心で甲高い金属の衝突音が響いた。

次いで大きな爆発音。その方を見てみれば、一夏が零落白夜を漆黒のISへと叩き込んだようで、敵の四肢は力なくだらんと垂れ下がっていた。シールドエネルギーは大きく削ってしまったようだが、四人目のようにISが強制解除されたしまった訳ではないようだ。とりあえずの危機が去ったことに小さく息を吐き、再び少女たちへと向き

直る。

「ほら、彼だって中々やるでしょうっ。」

返答はない。二人共、一夏がああの一夏を倒したという事実をまだ上手く飲み込めていないようだった。

いつまでも二人に構つてもいられないので、姫無は扉の前に集まった少女たちを一度元の席へと戻るように促す。いつまでもこの場に留まっていると他の生徒たちの不安を煽る可能性もあるし、なにより避難誘導の障害になる。一夏が敵を倒したことで一応の危機は去ったが、それでも油断は禁物だ。

一度気を締め直して声を発しようとした、その瞬間。

アリーナ上空から、防壁を貫通してナニカが降り立った。

「!？」

思わぬ展開に目を見張る。アリーナの中心に飛来したのは、先程まで一夏が戦っていたあんな漆黒の機体だった。その数は六。一体でもあれだけ手こずった機体が、一度に六体だ。

これはマズイ、と直感的に姫無は思った。今の一夏の状態で一度にあれだけの数の相手をするのはきつと不可能だ。そうでなくてもシールドエネルギーが尽きかけているというのに、これではまともな戦闘など行える筈がない。いよいよもってして戦闘に加わるべきか悩みながらも、兄の言葉を思い出す。

生徒たちの安全確保が最優先。

ちらりと少女たちを見る。一度危機が去って気が緩んでいたせいか、先程よりもあおの動揺が激しい。

「やっぱり男子じゃ無理よ!!」

「先生たちは何してるの!？」

「早くここから出してよお!!」

口々に出る言葉は、更に激しさを増していく。

その矛先はいつしか、数少ない男性IS操縦者へと向けられていた。

「男子をIS学園なんかに入れるからこんなことになったのよ!! こんなことこれまで無かったのに!!」

「大体、あの先生だって胡散臭いです！」

この現状とは何も関係のないことにまで及び、それは何時しか少女たち全体にまで伝播していた。

いい加減我慢の限界に近い姫無。生徒会長という立場でなければ兄の悪口が飛び出した時点で暴れだしそうな勢いであったが、そこは生徒会長という役職がギリギリのところまでセーブしていた。

だが、それもそろそろ抑えられそうになくなってきていた。国家代表、生徒会長と言ってもまだ姫無は十七歳の高校二年生。完璧に理性で抑えきれぬ程人間は出来ていない。

「いい加減にしなさい。貴方たちが言っているのはこの状況とは何一つ関係のないことよ。正体不明の侵入者と一夏君とは、何の関係性もない」

「そんなことどうして言い切れるんですか!?!」

「何故そうだと言い切れるのかしら?」

明確な理由など、当然あるわけが無かった。何かしらはけ口が欲しくて男性IS操縦者という標的を見つけただけの彼女たちに、中身などある筈もない。

「男性と言って見下すのはいただけないわね。少なくとも、一夏君や私の兄は貴方たちよりもずっと強いわよ」

「しよ、証拠はあるんですか!?!」

「証拠?」

そう問われ、姫無はアリーナを見る。その直後、轟く轟音。

それはアリーナの出入り口の一つが吹き飛び、それと共に侵入してきたISを吹き飛ばす音だった。全身を黒で包んだ、ISに比べれば小さな身体。腰の辺りではためくテールと、両手に嵌められた白の手袋が印象的なソレは、軽い音を立てて地面へと着地した。

その姿を見て、思わず姫無は口元を綻ばせる。

「証拠ね。——あれが証拠よ」

兄を視界に収めながら、自信たっぷりな姫無は告げた。

## #15 黒執事と無人機

「さてと、」

ぐるりとアリーナ内を見回して、俺は小さく息を吐いた。

自身を取り囲むようにして立つ五体の漆黒の無人機。一夏が対処したモノも含めればその数は七体だったが、一体は一夏が、もう一体は俺がアリーナ内壁に叩きつけたことでその活動を停止している。そんな訳で残るは目の前の五体。一夏の白式のエネルギーも尽き、待機状態へと戻ってしまったので俺一人で対処するしかないが、正直それに関しては何の心配もしていない。無人機なので手加減は全く不要であるし、観客席に居た生徒たちは姫無が上手く誘導してくれている。

一度姫無の方に視線を向ければ、彼女もこちらを見ていたのか、ばつちりと目が合った。

そして互いに、微かに微笑む。

それだけで十分。血の繋がりがあう兄妹には、言葉さえも不要だった。

一夏のほうも四人目を抱えて避難を完了させたらしく、アリーナの隅で身体を低くしてこれからの戦闘に巻き込まれないよう細心の注意を払っている。

うん。まあ確かに俺が能力を行使したら巻き添えになる可能性も無いわけじゃない。こちらとしても一夏を巻き込まないよう気に掛けるが、それでも五体を相手となると簡単にはいかないのだから被害に合わないよう気を付けてくれるのは有り難い。

何時だったか千冬に言われたことだが、ある一線を越えてしまうとどうやら俺はハイになってしまいうらしい。

一方通行の能力を持った副作用とでも言うのか、そういえば学生時代にも一度あった気がする。自分でもかなり自重はしているつもりだが、それでも偶に言葉遣いが変わってしまったりしている、らしい。「まあその辺は上手くやるしかないとして」

『楯無ッ!』

どう片付けるか思考を巡らせていると、耳に装着していた通信機から怒声が飛んできた。鼓膜を大きく震わせるこの声は管制塔からこちらの様子を見ているであろう千冬のものだ。

ああ、そういえば真耶には伝えただけど千冬には詳しいことは伝えていなかった。

『いきなり管制塔を飛び出したと思ったら、何のつもりだ!?!』

「いや何のって、この恰好見れば分かるだろう?」

ほら、と両手を広げて管制塔へと見せつけるようにポーズを取る。こちらからは千冬表情を窺い知ることが出来ないが、恐らく向こう側では千冬の額に青筋が浮かんでいることだろう。完全なる俺の独断だ。千冬や真耶、ましてや榊原先生に責任は無い。一夏に戦うよう指示を出したのも俺だし、姫無や虚に生徒たちの安全確保を最優先させたのも俺の意向。

簡潔に言えば、これは俺が責任を負わねばならない案件だ。一夏や姫無は立派にその役目をこなしてくれた。となれば、後は監督者である俺がこの事件を終結させなくてはならない。

そんなちっぽけなプライドが、今の俺を動かしていたりする。

「——なんて、そんな大したものでもないんだけど」

千冬からの通信を勝手に遮断し、今一度手袋を嵌め直す。

実は姫無とロックされた出入口に集まった女子生徒たちによる口論は、通信機越しに聞こえていた。

一種のパニック状態に陥っていた彼女達の言い分も、それに対する姫無の反論も。それを聞いた上で、俺は彼女たちの集まる扉とは反対方向の扉を強引に蹴り飛ばして破壊した。

——男子をIS学園に入学させたから、こんな事になった。

——あんな素人に任せるよりも国家代表が対処した方が良いに決まってる。

——あの先生だって本当に強いのか怪しいものだ。

——織斑先生や山田先生と一緒に居るだけで、誰もあの先生の強さを知らない。

彼女達の言い分も、決して間違っている訳ではない。一夏や皿式の情報を得るために束が無人機を差し向けたのは事実であるし、一夏よりも姫無に対処させた方がより確実だっただろう。もしかしたらこの五体の無人機も一人で対処できたかもしれない。

俺はこの I S 学園で教師を始めてから今日までこの黒執事を着用したことがなかったのも、今の世代の彼女たちが俺の戦闘データなどを知らないのも無理はない。いや、熱心な生徒は映像データなどを探したかもしれないが、生憎と俺の戦闘データは国家機密に指定されているらしく一般生徒では映像データを視ることは出来ない。

千冬や真耶と言ったヴァルキリーの経験がある人間は分かり易い強さがあるが、データの殆どない俺の強さなど、誰が想像することが出来るか。

彼女たちは間違っていない。目の前にある事実だけを見れば、男性の I S 操縦者など取るに足らないと考えてしまっても仕方ないかもしれない。一夏が一体の無人機を破壊したことで少しは考えを改めたかもしれないが、冷えかかっていた頭は新たな侵入者の登場によって再び沸騰してしまっただろう。

彼女たちの言い分は、決して間違っていない。

だが、それが正しいという訳でもない。

姫無は言ってくれた。

一夏は彼女たちが考えているよりもずっと強いのだと。

私の兄は、誰にも負けはしないと。

「……我が妹ながら、なかなか言ってくれるね」

兄として、一人の教師として。黒に全身を包まれた俺は呟く。

「——それじゃ、ご期待に沿うでしょうか」

ゴッ!! と爆発的に巻き起こった突風と共に、俺は無人機の群れへと突っ込んだ。



「……何、あれ……」

観客席に座る一人の少女が、呆然と呟いた。

視線の先には、アリーナで戦う黒と黒。執事服を身に纏って戦う更識楯無と異形の無人機だ。

「あんなの、ISで出来る動きじゃ……」

重力を感じさせないその動きに、別の生徒がそう声を漏らした。初めて垣間見る、世界初の男性IS操縦者となった人間の戦闘。これまで歴史の教科書に書かれていただけで実際に見ることのなかった『黒執事』が、遮断防壁を挟んだすぐ先でその実力を遺憾なく発揮している。

一目見ただけでその動きを追い切ることが出来ない。一筋の光のように移動するその様は、宛ら流星のようだった。その移動線上にあった一体の無人機が、彼が移動すると同時に大きく拉げる。数秒の後、爆散。

訓練機は当然のこと、専用機ですら不可能ではないかと思われる速度と軌道で空中を縦横無尽に移動する黒執事は、瞬く間に二体目の無人機を内壁へと叩きつけた。近接型のブレードや遠距離型のライフルといった武装を使用した訳ではない。ただ単純に、殴る、蹴る。それだけだ。それだけなのに、侵入してきた機体は次々に破壊されていく。

「……な、どうなって……」

先ほどまで楯無と口論を繰り広げていた少女の一人が大きく瞳を揺らす。今自分の目の前で繰り広げられているこの光景を、俄かに信じる事が出来ないでいた。

「どうっ？」

その隣で兄の姿を確り捉えていた楯無が尋ねる。心なしか自慢げに胸を張っているように見えた。

「世界初の男性IS操縦者にして黒執事の専属パイロット。中々のものでしょう？」

「中々って、そんな次元じゃ……」

「貴方達、織斑先生や山田先生のごことは尊敬しているみたいだけど、その二人が最も尊敬し信頼しているのがあの人のよ？」



「……嘘ッ!？」

唾然とする少女へ、更に姫無は言葉を続ける。

「初代ブリュンヒルデが唯一勝てなかった人間、それが更識楯無。それがあの黒執事よ」

そう言っている間にも、三体目の無人機が地面に深くめり込んだ。上空からの踵落しが無人機の頭部を撃ち抜いたことによるものだ。直径五メートル程のクレーターの中心に、頭部が破壊されて活動を停止した無人機の残骸が在った。これで残るは二体。タンツと地面に降り立った楯無は、爪先を軽く打ち鳴らす。

たったそれだけの行為で、地面に大きな罅が走る。

「……………」

もう少女たちは言葉も出なかった。

ここまで見せつけられてしまったては、嫌でも納得せざるを得ない。これまでの自分の価値観や評価を変えざるを得ない。

男性操縦者は、決して弱くなどないのだと。少なくとも今日の前で戦う一人の男性教師は、世界最強クラスの強さを有している。

「更識、先生……」

ポツリと、誰にも聞こえないような小さな声で、少女が零す。無人機が侵入してくるまでは楯無や一夏のことを卑下していたもう一人の少女だ。どういうわけか、その両手は胸の前できつく組まれている。まるで何かに祈るように。

そんな様子を横目で見ていた姫無は女としての直感が働いたのか、直様理解した。

—— ああ、兄さん。またなのね。

この一件でまた彼を狙う人間が増えるのだろうか、と内心で溜息を吐き出す。兄が認められるのは妹としてとても喜ばしいことだ。が、その兄を慕う女子生徒が増えるのは正直なところ勘弁してもらいたかった。あの兄はこと恋愛方面に於いて疎い部分があるので、余程の行為を向けられなければその感情に気が付かない。千冬や東の場合には幼い頃からの付き合いもあつてそういった関係になったが、それは特殊な例なのだ。実際、楯無は真耶からの好意には全くと言っていい

ほど気付かなかったのだから。

そんな兄だから、基本的に来るもの拒まずな訳で。誰に対しても優しく接するのだ。それが更に女子たちのアプローチを積極的にしていくとも知らずに。

ある程度の行為までは姫無も黙認するが、度を超えたアプローチは水面下で彼女が手ずから食い止めてきた。それは一度や二度ではない。そんな苦労がこれから更に増えることを想像して、姫無は大きく肩を落した。

（全く、私がこんなに苦労してるって言うのに、兄さんはそんなこと露も知らずにあの二人とよろしくやってるなんて……あ、なんかだんだんムシヤクシヤしてきたわ）

このイライラは兄の部屋に押し入ることで発散しよう、と姫無が考えている内にも四体目の無人機の腹部が大きく凹んだ。更識流の基本型である正拳突き。あれほどの威力で放てるのは間違いない。現当主である楯無だけだろう。バチバチと火花を散らせながら四体目の無人機がガツクリと膝を折った。

ここまでの光景を目の当たりにしてしまえば、最早非難の声など上がらなかった。

皆一様に口を噤み、次元の違う戦闘に見入ってしまったている。

これが、黒執事。ISの基本原理解など無視したそのフォルムも、武装など何一つとして搭載していないその特異性も、この戦闘を見せつけられてしまつては気にならなくなってしまう。それほどまでに、圧倒的。アリーナの遮断防壁を貫通したあのレーザーが当たらない。砲身の照準が定まるよりも速く、楯無は滑空する。彼の移動した後を追うように動く砲身が、観客席の生徒たちにはやけに鈍く見えた。

「――終わりにね」

最後の一体へと楯無が向かったのを確認して姫無が言った。その言葉に、彼女の隣に立っていた虚もゆっくりと首を縦に振る。彼女達生徒会の面々は、基本的に閲覧が禁止されている過去IS学園で行われた戦闘データなどの閲覧も許可されている。

その中には、楯無や千冬、織村が激突した生徒会長決定戦や学年別

個人トーナメントの映像記録も残されている。そのデータを視たことのある姫無たちからしてみれば、この結果は火を見るよりも明らかなもの。あんな機体如きに、黒執事が負けるはずがない。

「生で見ると壮観ですね。清々しいまでの戦闘能力です」

「まあね。でなきやあの世代の生徒会長なんてやってられないわよ」

初代ブリコンヒルデに第二回射撃部門、機動部門、索敵部門ヴァルキリー。更には蒼天使と言った錚々たる顔ぶれの頂点に立つには、それ以上の実力が不可欠なのは明白。

ISは年を経るごとにその性能を向上させてきたが、操縦者の技量という点では初代生徒会の面々を超える人間は未だ現れていないとすら言われているのだ。

「他の子たちも、少しは兄さんの凄さが理解できたんじゃないかしら」

「理解というか……、あの表情を見ると——」

「ストップ。虚、それ以上は駄目よ」

「ですがお嬢様、あの表情はどう見ても……」

——恋する乙女そのものですよ。

そう言おうとして、虚は慌てて口を噤んだ。

隣の姫無から発する雰囲気、何かどす黒く感じられたからだ。

ああ、これはまた苦労するのだろうなあ。と、決して声には出さずに姫無を見つめる虚の瞳は、彼女の従者としてはどうしたものかと悩みの色を濃く映し出していた。

そしてそんな姫無と虚が話している間に、最後の無人機が驚くほど呆気なく、その活動を停止した。



「これで最後、つと」

破壊した最後の無人機の頭部を踏み付けながら、ぐるりと周囲を見渡す。幸いにして一夏たちや観客席の生徒たちに被害を出すことなく場を収めることが出来たようだ。遮断防壁を貫通するような武装を持つ無人機が相手だったこともあり、その攻撃が観客席の方へと向

かないように誘導するのは多少苦勞したが、装甲については特に苦勞もせずに破壊出来た。確かに通常武装では中々ダメージを与えられない程度には頑丈だったが、ベクトルの向きを操作できる俺にはそこまでの脅威ではない。一夏の雪片式型でも破壊出来たくらいなのだから。

「これまで通信を遮断していた通信機を起動させ、管制塔へと繋ぐ。

「もしもし、聞こえるかー?」

『つこの大馬鹿者がツ!!』

開口一番、飛んできたのは辛辣な叱責だった。

思わず通信機を耳から遠ざける。

「おいおい……。いきなりそれはないだろ」

『勝手に突っ走ってお前は！ 何故増援を待たなかったんだ!』

「それじゃ遅い。千冬も分かっていたから無理に止めなかったんだろ?」

『……それでもだ。生徒たちの安全はある程度確保されていた。強行突破する必要はなかったんじゃないのか』

「まあな。でもそれじゃ教師として示しが付かないって言うかさ」

一拍置いて、口元を緩める。

「——学年主任たる者、この程度の敵を排除できないでどうするよ」



「はあー。かーくんが出てきちゃダメでしょうよー」

とある無人島にあるラボの内部で、ウサ耳を装着した天災はボヤいた。

楯無からの着信があった時点でこちらの目論見は看過されているものだと半ば確信していた束だったが、まさかここまで直接的に介入してくると思っていなかった。一体目を一夏に任せた所を見ても、あの場合は傍観に徹すると考えていたのだ。が、見事にその考えは外れてしまった。

それに送り込んだ追加の無人機もまるで紙切れかなにかのように一瞬にして破壊されてしまった。あれを一体制作するコストを思えば泣きたくなるような扱いだったが、何故か彼女は上機嫌だ。先ほどの言葉も溜息が出そうなものではなく、苦笑交じりに呟かれたものだった。

「ま、それでこそかーくんだよなー」

カタカタと、コンソールを操作する束の前に展開されたウインドウには漆黒の無人機ではなく別の機体が映し出されていた。

「もうすぐ会えるねかーくん。束さん今から待ち遠しいよ……あ、なんかドキドキしてきちゃった……」



結局、あの正体不明の機体が侵入してきた事件は教師とIS委員会が対処することで事なきを得た。あの戦闘に参加した一夏と皿式にはそれぞれ精密検査を受けるとの命令が下されたが、それだけで済んだのは僥倖だろう。あの場にいた生徒たちには詳しい情報は一切開示されていないので、あれから数日経った今でも様々な憶測が流れていたりする。

曰く、あれは他国が送り込んできたスパイ。

曰く、反IS団体が制作した新型ロボ。

曰く、篠ノ之博士が生み出した新機体。

偶にこういった噂の類の中に真実が紛れ込んでいるとかいう小説や漫画があるが、正直この噂を耳にしたときは背中に冷たいものが流れた。誰だよそんな噂を言い出した奴。ばつちり真実が紛れ込んでいるじゃねえか。

その話はさて置き、途中で中断されてしまったクラス対抗戦は、あのまま中止となってしまう。他のアリーナで行われていた二、三年生のトーナメントも同様に中止の措置が取られ、当然優勝者に与えられる予定だった束直々のメンテナンスとそのクラスへの副賞の半年間学食のデザートフリーパスも無し。これには多くの生徒からブー

イングがあつたが、俺が直接謝罪に回るとどういふ訳かみんな大人しく納得してくれた。

「はて、何でだろう」

「みんなの顔見れば分かるでしょ」

生徒会室で虚の淹れた紅茶を飲みながら零した俺の言葉に、姫無から返答があつた。

「顔？」

「……もういい。聞いた私がバカだった」

あの日以降、俺に対して話しかけてこなかった多くの生徒が休み時間になると学年主任室を訪ねてくるようになった。その理由は様々だが、多くの生徒はもつと俺と話をしたいのだとかなんとか。俺としても生徒と関わりをもつのは大切だと考えているので願つたりな申し出であり、ここ数日は生徒たちと昼食を摂ることも多い。

だがどうしてか、そのことを姫無に伝えるたびに彼女の機嫌は急降下しているようなのだ。今の返事もどこか棘を含んでいるような気がしてならない。

「なあ姫無。何をそんな怒ってるんだ？」

今は放課後なので更識とは呼ばず、名前で妹を呼ぶ。

「別にいい。兄さんに女心が理解できるはずもないって思っただけ」

「む。それには反論するぞ姫無。俺だってある程度の女心が理解できる」

俺はどこぞのハーレム主人公ではない。そう思つて反論したのだが、一体何がいけなかつたんだろうか。次の瞬間、姫無から感じたことのないプレッシャーが放たれた。

「へえ？ 女心を理解できる？ 兄さんが？ へええ」

酷く平坦な声で言う姫無の目を、俺は合わせることができなかつた。

——あれ、これつてもしかして反抗期つてやつなんじゃないだろうか。

ああ、余談ではあるが、どうやら一夏と鈴の喧嘩は終わつたらしい。何がどうなつたのかまでは知らないが、上機嫌で酢豚をタッパに詰

めている鈴の姿が調理場で目撃されている。

## #BF 武器商人と出会った日

IS学園を卒業して四度目の春を迎える頃。

俺は今、ヨーロッパ某国の地に立っていた。日本では暖かな日差しと舞い散る桜なんか相まってとても気持ちの良い過ごしやすい気候なんだろうが、四月のヨーロッパは正直まだまだ寒い。

さて、どうして俺がヨーロッパ、更に言えば空港のロビーに立っているのかというのだ。

「お、いたいた。ミスター更識！」

先程到着した旅客機から出てきたであろう女性が、後ろに複数の部下を引き連れて俺の元へとやって来る。

腰まで伸ばしたプラチナブロンドの艶のある髪の毛に薄い碧眼を持つその女性はレディーススーツを纏い、その上から暖かそうなコートを羽織っている。

俺がこんな所に居る理由、それは彼女に起因する。

彼女は俺の前に来るなり、強引に握手を求めてきた。

「お初にお目にかかりますミスター。この度は態々申し訳ありません」

「いや、気にしないで下さい。必要なことです」

にこやかに微笑む眼前の女性に、俺も社交辞令的にそう返す。正直に内心を吐露してしまえば巻き込まれたと叫びたいところだが、今そうした所で何も状況は変わらない。結局、俺にはもうどうすることも出来ないのだ。

握手を済ませたところで、彼女は徐に懐に手を伸ばして一枚の紙を俺に差し出してきた。

それが名刺だということに気がついて、俺は差し出されたそれを受け取る。

「改めて初めまして、ミスター更識」

彼女はそこで一旦言葉を切って。

「私がココ・ヘクマティアルです」

その年の春。



俺は、武器商人と数日間の旅をした。



空港からの移動にはタクシーではなく、彼女の私物だという外国産の高級車が使われた。それも見た目は一般車を装っているが、至るところに防弾仕様が施されている特注品の。

三台が縦一列で移動している最中、同じ車に同乗しているココ・ヘクマティアルが口を開いた。

「いやぁ助かりました。貴方が居てくれれば百人力だ」

「……そろそろ詳しい話を聞かせて貰いたいんですけど」

助手席に座る彼女を、後部座席右側に座る俺は一度ジツと見つめる。その視線を感じてか話を切り出すためか、彼女は俺の方へと首を回して。

「それもそうだ。ミスターにも今の私たちの事情を話しておかなければならない、トージョ」

スツ、と俺の横から数枚の書類が渡される。

隣に座るアジア系の男性が、ニツと笑った。

「初めましてミスター更識。アンタの名前はヨーロッパにまで轟いてるぜ」

出てきた言葉が日本語であったことに少々驚きつつ、彼の手にあった書類を受け取る。そこに書かれていたのは今彼女たちが請け負っているという依頼の詳細と、その依頼の障害となる可能性の高い武力団体のデータだった。

「……搬入先は、ドイツ？」

「ええ、コレ（・・）はドイツが単独開発したモノらしいんですけど、その移送に我々を使うあたり色々と面倒が付いて回っているようで」

「面倒、ねえ……」

ホチキスで留められていた書類を一枚捲る。これから搬送することになるであろうモノとそのルートが記載されているそれから目を離し、俺は助手席に座るココへと声を掛けた。

「……これと俺が呼ばれる理由がイマイチ分からないんですが」  
「ミスター更識。貴方にはドイツとのパイプがあると伺っておりますが」

ああ、成程。そういうことか。

ココ・ヘクマティアルの返答を聞いて、俺はようやく喉の問えが取れた気がした。要するに、俺を呼んだ理由はそのドイツとのパイプ役をやらせようとしているわけか。当然護衛も兼ねているのだろうが、先程見たココの私兵だという人間たちを見るに皆一様に死線を何度もぐぐり抜けて来ているだろう。護衛なんてそもそも必要ないように見える。

が、これから運ぶモノがモノだけにそっちの事情に詳しい俺やドイツへの要請も必要と判断したのだろう。ドイツが単独開発した機体にも関わらず、国外で製作し態々国内に運び込むところを見るに、まだ他国に漏洩させたくはない技術が使用されていると見て間違いはなさそうだ。

「パイプなんてそんな大層なものじゃないですよ。高校時代の後輩が居るっただけの話です」

「おや、ハイスクールの後輩なんて十分なパイプではないですか」

「ココ・ヘクマティアル」

冗談交じりに笑うココへ、俺は声のトーンを落とした。

「分かりました、この依頼は受けましょう。この書類に書いてあるとおり護衛と交渉役。ですが、」

スツ、と目を細めて。

「俺の前で、その仮面みたいな笑顔を張り付けるのは止めろ」

「……！」

途端、ココを含めた車内全員の表情が変わる。驚きを多分に含んだその表情の中には、少なからずの賞賛も含まれているように見える。「……仰る意味がよく分かりませぬミスター。私のこの顔は生まれつきです」

どうやら彼女の常に浮かべる笑顔には触れられたくない過去でもあるらしい。今のココの反応からしてここはそのまま掘り返すこと

なく仕事の話を進めるのが筋なんだろうが、生憎と俺は腹を割って話さないビジネスパートナーとは折り合いを付けられない。というか付けたくない。

変えた口調も戻すことなく、俺は口を開く。

「よく言うなミス・ヘクマティアル。その顔が生まれつきだつて？」

だったらアンタは泣くときも怒るときも、そうしてヘラヘラ笑つてんのか？ 部下が目の前で死んだとしても？」

「ミスター更識。あんまり人のプライベートな所に踏み込むのは男としてどうかと思うぜ」

見兼ねたのか、俺の隣に座っていたトージョと呼ばれていた男性が静止の声を掛けた。

が、ここで止まるつもりなど毛頭ない。何よりも俺とココたちとは初めから交渉の立ち位置が違う。彼女たちは俺やその周囲を入念に調べ上げた上でこの話を持ちかけてきているが、俺にしてみれば勝手に国外に送られ気付けばこんな高級車の中に缶詰にされているのだ。依頼を受けるとは言ってもこのままでは良いように使われるのが目に見えている。暗部で長年交渉事を経験してきたからこそ言える事だが、交渉の第一段階として相手との立場を対等以上にする事が不可欠だ。このことはココも知っていたのだろう。だからこそ今の現状がある。

そして二つ目に状況把握。三つ目に状況掌握だ。

この二つは今正に行わんとしていることだが、手始めに彼女の能力のような顔から問いかけることにした。正直ああやって自分を完璧に誤魔化している人間ほど信用ならない。自分の心を黙せる、欺けるというのはそれだけでも才能だ。故に彼女はこれまで武器商人として成功してきているのだろうし、部下にも恵まれる。

だが、それは交渉に関して俺にとつての不都合でしかない。

「男として？ 違うな。俺は今彼女と交渉相手として話をしているんだ。交渉に必要なのは第一に信頼関係、違うか？」

「……………」

「大体俺はこつちに呼び出された時から疑問に思ってたんだ。ドイツ

に移送するだけの仕事で態々日本に居る俺を使う。その必要性はなんだ？ ドイツとのパイプ役なんて銘打ってるが、そんなことしなくたってアンタの会社なら簡単にこなせるはずだ。なあ、H C L I社のココ・ヘクマティアル」

最後の言葉で、ココは俺の言わんとすることを察したようだった。「……成程。こちらのことも、調べはついてたということですか」「調べてほど大層なものじゃない。何せ俺にはそんな時間はなかったんだからな。ちよつとだけ優秀な部下にちやちやつと教えてもらっただけだ」

飛行機の中で携帯端末越しにでも分かるくらいにテンションが高かった自身の従者を思い出し、少しばかり苦笑する。彼女は仕事面では非常に優秀なのでいつも便りにしているが、どうも今回は些か仕事及早すぎる気がする。あれか、どういう訳か俺よりも先に俺がヨーロッパへ行くことを知っていて何故かチケットを二人分取ったりしていたから、下調べでもしていたんだろうか。いや、あくまで一緒に行くつもりだったという回答は除外してあるのだが。

「アンタがどんな意図で俺を呼んだのか気にはなるが、これ以上の詮索はしない。が、俺にもそれなりの対応つてもものを取らせてもらうぞ」

ああ、それと。と俺は付け加えて。

「アンタらが手を伸ばしてる銃、まさか車内<sup>ココ</sup>で弾いたりするなよ？」

ピタツ、とトージョと運転手の動きが止まる。違和感がないように振舞っていたが、暗部で動いてきた俺からしてみればバレバレの動作だ。気づかない筈がない。

何を思っただ銃に手を伸ばしていたのか理由は分からないが、大方ココへの敵意でも俺の言葉の端々から汲み取ったのだろう。

「トージョ、ウゴ」

ココが二人へと声を掛ける。それを合図に、指を掛けていた銃から手が離れた。

「お見逸れしましたミスター。まさかここまでデキる方だったとは、正直思っていますでした」

笑顔の仮面を貼り付けたまま、彼女は後部座席へと顔を向ける。

「ですがこの表情についてはご容赦頂きたい。何分、これは必要なこととして」

「構わない。俺も少し言い過ぎたし、それでだ。この資料に書いてある武装組織は——」

手渡された資料に記載されていた文字へと視線を落とし、ココへと言葉を投げる。

「——ISEO。今ヨーロッパで活発になりつつある、ISEの排斥団体です」



ISEO。

Infinite Stratoss Exclusion Or  
ganization の略称であり、世界からISという存在を排除するために生み出されたIS排斥団体だ。基本的に構成メンバーは男性で、ISの出現によってその社会的地位を直接的に奪われた人間や間接的にその影響を受けた人間で殆どが構成されている。当然非公式の団体なのでその正確な人数までは把握されていないが、少なくとも世界中で数千人規模のメンバーがいるだろうと予測されている。

彼らの目的はISが生み出される前の世界へと戻ること。ISによって失墜した地位などを取り戻すため、世界中で暗躍している。

構成員は基本的に表立って活動することはない。ISを否定して以前の社会を取り戻すと言ってもそう簡単にいかないのは当然理解しているし、そもそもそんなことが可能なのかも分からない状態である。その構成員の大多数はそうした組織に身を置くことで自身が少しでも貢献していると納得がしたいのだ。ただ世間の波に飲まれていくわけではなく、抗っているのだという目に見える証拠が欲しいのだ。そうした構成員というのは大体がIS出現に伴う女尊男卑の風潮による被害を受けた人間で、日本で言えばサラリーマンや社会的地

位の比較的低い男性が当て嵌る。

だが、そういった人間ばかりでこの I S E O は組織されているわけではない。

この組織の中には、I S という世界最強といっても過言ではない兵器の登場で居場所を失った人間もいるのだ。軍人、兵器開発者、兵器売買者などがそれだ。これまでは世界的な兵器として核ミサイルに始まり戦車や装甲車といったものまで多く製造され、それは戦地で数多く消費されてきた。銃やナイフなどの小型なものまで含めれば、その量は数え切れない程に。

しかし、I S が全てを変えたのだ。

これまでの銃弾が一切通用しない。刃が通らない。ミサイルですら、I S の前では無力となる。

たった一機の I S に、特殊部隊と呼ばれていた軍人たちが手も足も出ない。

それは、彼らにとって衝撃以上にショックだった。行き場を追われるに等しい。自身がこれまで磨いてきた技術は、積み重ねてきた実験は、何の意味も無かったのだと理解させられてしまった。

理解して、憤った。そして、彼らは集まったのだ――。

ココは窓の外に顔を向けつつ、視線だけを後部座席に座る日本人へと向けた。

更識楯無。日本国内では有名な家系の当主を務めており、世界で始めて I S を動かした男性。正直、初めに見た第一印象は普通の人、であった。ココ・ヘクマティアルの周りにある日常は、一般の人間からしてみれば非日常そのものである。弾丸の飛び交う戦場に赴き、武器を売る。人が死ぬ光景なんてこれまで何度も目の当たりにしてきたし、人を殺したことも一度や二度ではない。部下の人間にしても元デルタフォースや元対テロ部隊、F B I のブラックリストに載っている者までいる。人殺しの経験なんてのは言わずもがなだ。

そういう『殺し』を知っている人間、闇に関わったことのある人間にだけ判る匂いというものがある。

それが、更識楯無からはしなかったのだ。

だからこそ、彼の口調が変わったときは額を冷や汗が伝った。

違う。先程までの人間とは、まるで別人のようだ。爪を隠す鷹なんてレベルではない。ウゴやトージョが思わず武器に手を掛けてしまったことも頷ける。あのプレッシャーを直に向けられれば、誰だつて防衛本能が働いてしまっただろうから。

(更識楯無。苦勞はしたけれど、彼を呼んで正解だった)

彼を呼んだ理由は、本人にも言ったように移送中の護衛とドイツ本国とのパイプ役をお願いするため——というのは、半分正解で半分不正解だ。そもそもこの依頼はドイツの開発企業から受けたものなので、本来であればパイプ役なんてものは必要ない。だが、受け渡す人物と面識がある人物が居た方が話を進めやすいという意味ではパイプ役というのも間違いではない。移送中の護衛、というのもココの私兵がいれば問題はない。但し、相手がISというのであれば、話は別である。残念ながら、ココの私兵の中にISの搭乗訓練を積んだ人間はいない。アレを相手にしては、流石の私兵たちも勝ち目は薄い。

(世界初の男性IS操縦者にして、現時点で世界最強と言われる彼の實力。出来ればこの目でみたいものだけ)

湧き上がる好奇心を理性で抑えつつ、ココは仕事を終わらせるべく運転手のウゴへと指示を出した。

ここから先のルートは、市街地とは言え妨害が考えられる。なるべく人目に付く道を、ココたちを乗せた車は進んでいく。

先ずは運ぶモノを引取りにいかないと。既にデータで送られてきている引渡し場所へと向かうべく、彼女たちは車を走らせた。



「そういえば隊長」

「む。クラリツサか、どうした？」

ドイツ軍特殊部隊、その施設内。一人の女性隊員が、徐ろに口を開

いた。黒髪のショートカットに切れ長の瞳、その片方を眼帯で隠した長身の女性クラリツサは、自身よりもかなり小柄な銀髪の少女へと丁寧な言葉で先を続ける。

「私と隊長に与えられる専用機、どうやら直に届くみたいですよ」「なに!? それは本当か!?!」

長い銀髪を大きく揺らし、少女は手元にあつた書類を放り出してクラリツサの元へと詰め寄る。その瞳は期待に満ちていて、この様子だけを切り取って見れば軍人などとはとても思えない。

「ええ。早ければ明日にでも此処へ届けられるのではないでしょうか」

「本当か! 遂に私の専用機が!」

「はしやぐ気持ちも分かりますが、他の隊員の前では止してくださいね?」

ぴよんぴよんと今にも飛び跳ねそうな隊長を前に、クラリツサは苦笑を浮かべる。

こんな所、他の隊員の前では見せられない。普段の冷徹な隊長のイメージが一瞬にして砕け散ること間違いなしだ。

「お前は二機目だからそう落ち着いていられるのだクラリツサ! 専用機だぞ! これこそIS乗りの誉れではないか!!」

拳を握り締め、声を大にして言う少女。

彼女が軍人となって十年以上。これまで多くの困難を味わってきたが、ようやくこの少女にも専用機が与えられる。クラリツサは最初の専用機を解体しての二機目だが、それでも嬉しさは少なからずある。まだ試作品の域を出ない武装も積んでいるとは聞いているが、ドイツとしては初めての第三世代型である。その搭乗者選ばれたのだ。これまでの実績を鑑みれば妥当だと言われるかもしれないが、嬉しくないわけがなかった。

(これでまた一步、貴方に近づけます)

思い浮かべるのは、数年前にIS学園を卒業した初代生徒会長。

彼が卒業してからは連絡もぱったりと途絶えてしまったのでその後どうしているのかは定かではないが、自身もこうして卒業後もしつ



かり職務を全うできている以上あの人もしつかりやっていることだろう。ひよつとしたら、どこかではったりと顔を合わせることもあるかもしれない。

次に会った時には、一度手合わせして貰って成長した自分を見て貰おう。そしてその後一緒に食事を摂って、あわよくばそのまま夜は……。

などと考えていたクラリツサが突然の再会に絶叫するのは、今から約二十時間後のことである。

## #BF 武器商人と出会った日 2

高級車に乗って移動すること約二時間。ようやく俺たちを乗せた三台はそのエンジンを止めた。

空港周囲の雑多な喧騒とは全く切り離された、言ってしまったえば閑散とした場所だった。都市の再開発から取り残されてしまったのか、都市部と比べると余りにも荒れ果てている。地面はどこどころが剥がれて土が見え隠れしているし辺りのコンクリート製の建造物には至るところに罅が走っていた。

まるで何処かのスラムのような雰囲気を漂わせるこの場所には、やはりそれに見合うゴロツキというものが住み着いているらしく、高級そうな衣服を纏うココやスーツを着た俺を遠目に何うガラの悪い連中が周囲にちらほらと見受けられた。

「ココが……」

「ええ。都市再開発が遅れ、人も離れた街。『デッライト・ストリート寂れた廃街』」

「寂れた、ね。ピツタリの名前だな」

高級車から降りてぐるりと辺りを見回す。空港のあった都市部の喧騒が嘘のように聞こえない。ココの話によれば再開発に取り残された時点で住んでいた人間の殆どがこの場を離れて行ってしまったのだとか。成程確かにここ数年碌に掃除されていないであろう雑居ビルなんかが目についた。

「で、何処でその引渡してのを行うんだ？」

「ここから少し離れた場所にある我々が管轄する倉庫街の一つです。元々この辺りは工場が立ち並んでいた区画でして、その一角を我々が買い取って管理しているんですよ。まあ、滅多なことでは使いませんが」

そう言つてココは一人歩き出す。コツコツと鳴るヒールが地面を叩く音が、酷く大きく聞こえる。

彼女の後に続き、他の車内に乗っていた私兵たちもぞろぞろと歩き出した。俺もその流れに逆らうことはせず、彼らと共に歩き出す。

「なあ、アンタ」

歩く俺にそう声を掛けてきたのは、煙草を加えた白髪の男だった。見た目は四十代くらいだろうか、しかしその肉体が鍛え上げられていることは一目見れば明らかで、ココの私兵だと言われる彼らの中でも頭一つ抜きん出ている実力を持っているだろうことは簡単に想像できた。

レーム・ブリック。俺よりも一回りは年上だろう彼はそう名乗った。

「ぶつちやけさ、アンタ俺らのこと疑ってるだろう」

「ぶつちやけなくても疑ってるよ」

「ココの奴は基本的に他人に本心を明かさないからな。まあ思うところはあるかもしれないが、暫くは付き合ってくれよ」

煙草の煙を吐き出してレームは笑った。

確かこの男は元デルタフォースだった筈だ。一体どんな経緯でココに雇われるに至ったのかは知らないが。

「ところでさ、ISって乗った感じどうなの？」

「はっ。」

突拍子のない質問に、思わず呆けた声が出てしまう。

「いやさ、あれって基本女しか乗れないんだろう？　うちの女連中は乗れないし、生身で空を飛ぶってどんな感覚なのか前々から気にはなってたんだ」

「いやIS展開させてるから生身じゃないけどな？」

「地肌が出てんだから似たようなもんだろ？　いいよな生身で飛ぶって、戦闘機じゃ味わえない感覚だ」

とは言われても、俺は実際にはISを起動できるわけではないし空を飛べるわけでもない。そういった感覚を尋ねるなら千冬や真耶などの人間に聞くべきだろう。この場にはいないので不可能だが。ていうか今さらっと聞き流したけど戦闘機とか言ってたよな。理解はしてたがやはり一般人とは一線を画す人間たちの集まりらしい。

そうして俺とレームが並んで歩いていると、背後から回り込むようにして前に出てきた人間がいた。

「レームのおっさん！　そんなことよりもコイツには聞かなくちやい

けないことがあるだろうか!!」

ルツ。確かそう呼ばれていたと記憶している。短めの金髪を立たせた俺とそう年齢が変わらないであろう青年は、俺の肩へと腕を回して小声で問いかけてきた。

「なあミスター。IS学園てのはどんなところなんだ?」

「……何言ってるんだ?」

「いや分かるだろ!! IS学園!! 女ばかりの楽園!! 男の浪漫!!」

「うん悪い何言ってるのか全然分らない」

ついさっきまでの小声は何処へやら、大空に向かって声を大にするこの青年。いや、言いたいことは何となく理解は出来るが、それが一体どうしたというのだ。

「羨ましいってんだよチクショーめ!!」

「欲望に忠実だなお前」

血の涙を流すルツに冷めた視線を送る。女ばかりの楽園、と聞こえはいいかもしれないが、そんな中に男一人放り込まれたら気まずさから三日と経たずに逃げ出したくなるから。実際俺も千冬や東という入学前からの友人が居なければあの学園での三年間は地獄以外の何物でもなかっただろう。

「はいはいルツ。ミスターが困ってるでしょう」

尚も食い下がるルツの首根っこを掴んでヒョイツと持ち上げたのは、俺と同じくらいの身長的女性だった。男性からしても高い部類に入る俺と同等の身長に、無駄な筋肉が一切無いよく鍛えられたの肉体。右目に付けた眼帯が目を引く彼女は俺へと一度視線を向けて、小さく頭を下げた。

「すみませんミスター。うちの者が失礼を」

「……いや、気にしないでくれ」

「バルメといます。貴方のことはよく耳にしますよ」

バルメと名乗ったその女性は俺に手を差し出して微かに微笑む。その様子を見たルツをはじめとする周囲の私兵たちが『おい姉御が男と手を握ってるぞ……』『ガチレスじゃねえのか』などと言っているの

が聞こえてきたが、これは聞かなかったことにしておこう。

「俺のことね」

「ええ、世界で始めてI Sを起動させた男性。そして——世界最強の人間だと」

「……買いかぶりだよ。俺は称号を手に入れたつもりはない」

「そうですか？ でもいつかお手合せ願いたいですね」

言葉とは裏腹に獰猛な目付きを見せるバルメの願いをすげなく断りつつ、俺たちは倉庫街を更に奥へと進む。

奥へと進むにつれ、閑散とした風景が工業地帯のように移り変わっていくのが短時間でも理解できた。どうやら彼女が管理しているという倉庫街をうまく隠すためにこの『寂れた廃街』を利用しているようだ。

それはそうと、ここに着いた時から感じるチンピラたちの視線が気にかかる。ココはそんな奴らには目もくれずに歩いていくが、どうもそのチンピラたちから違和感を感じてしまう。元はこの街の住人だったのか、それとも流れ着いただけなのかは定かでないが彼らから放たれているのは、明らかな殺気だ。

ココやその私兵も、気付いていない筈はない。このレベルの殺気を向けられて気づかないのは一般人くらいのものだ。

「放っておいて構わないですよ」

俺の内心を読み取ったのか、ココがそう言った。

「ここに居る連中は皆私たちの素性を大まかにだが知っている。この倉庫街を管理している企業の人間であると。ソイツらに手をかければどうなるか分からない奴らではないです。まあ、私たちが人質に身代金を要求するという可能性も否定はできませんが」

「そこまで分かかって、泳がせてるってのか」

「泳がせているわけではありません。我々は奴らをどうこうするつもりはないですよ、向こうから何かしてこない限りは」

フーフ、と。独特の笑いを漏らす彼女は、とある倉庫の前でその歩みを止めた。周りに軒を連ねる倉庫とこれといった違いのない、至って普通の倉庫だ。ココはその倉庫の扉の横に取り付けられてい

るロックを解除して、重厚な音を立てて扉が開かれるのを待つ。

「ルツ、マオ、ワイリは外で待機。ウゴはトラクターのキーを取ってきて、残りは私と中へ」

「あいよ」

「了解ですココ」

彼女の指示に其々が言葉を返して、明かりの付いていない倉庫の中へと入っていく。そんな彼らに続いて中へと足を踏み入れた俺は、ココが明かりを付けた瞬間に思わず我が目を疑った。

「……おいおいマジか」

「驚きましたか？ 外から見ただけでは分かりませんからね」

俺の視線の先に広がっていたのは、この倉庫の外見からは想像できないような機器が大量に置かれた研究室のような場所だった。束の研究室、とまでは言えないものの、世界基準で言えば間違いなく水準以上のスペックを誇るであろう電子機器の数々が雑多に置かれている。

「ここはHCL I社が管理している、と言いましたよね。まあ私が勝手に持ち込んだものもあるにはあるんですが、言ってしまうえば物置のようなものですよ」

物置、と簡潔に言っているココだが、どう見ても新品同様の機器が見え隠れしている。

彼女がそれ以上の説明をしてこないの俺もそれ以上の詮索はしないが、ここにある機器を売っただけでも会社を一つ買収できそうな気がしてならない。

そして、そんな機器が立ち並ぶ内部の最も奥。周囲の機器とは明らかに違う、大きな鉄製の箱が二つ。

あれが今回依頼を受けたものなのだと、ココに言われるまでもなく悟る。

「アレが、」

「はい、今回ドイツから依頼を受けて輸送することになった新型の I S」

その大きな箱を見つめながら、彼女は告げる。

「——シユバルツエア・ツヴァイクとシユバルツエア・レーゲンです」



クラリツサ・ハルフオーフは意気揚々と隊舎の廊下を歩いていった。普段の彼女を知る部下たちが見たら訝しげに眉を顰めるに違いないその様子を隠そうともせず、いつそ鼻唄でも歌いだしそうな程に、クラリツサは上機嫌だった。

理由は新型の専用機が完成して直に手元へとやってくるから、というわけではない。確かにそれも彼女の機嫌を良くしている一因ではあるのだが、根本的な原因は別のところにあつた。

それは今から数時間前の出来事。

勤務中はまず鳴らないクラリツサのプライベートで使用している携帯端末が、着信を知らせるメロディを鳴らしたのが始まりだ。

「はいもしもし」

『お、繋がった繋がった。やっぱ全世界使用可能ってのはすげえな』

はて、この声の主は一体誰なのだろうか。とクラリツサは考える。自分のプライベートの携帯端末の番号を知っている人間というのは限られている。それこそ部隊の人間かIS学園時代に知り合った友人たちくらいしか思い当たらない。更にこの声の主はどう考えても男性。そこまで考えたところで、クラリツサはその目を大きく見開いた。

「っ、更識先輩ですか!?!」

『おう、久しぶりだなクラリツサ』

認識した途端、彼女の表情がパツと華やいだ。それはまるで恋する乙女のようにだと、クラリツサのこの顔を見た人間が居れば誰もが思うだろう。

「今まで何してたんですか?!」 というか何で私に連絡を!? ま、まさ

か運命の再会的なフラグを建ててるために——」

『うん、取り敢えず落ち着け』

勝手に妄想をおつ始めるクラリツサを電話越しに楯無は宥め、要件を簡潔に伝える。

『今ちよつと私用でヨーロッパに来ててな。用事が終わったら一度そつちに顔出そうかと思ってるんだが、お前時間はあるか?』  
「あります無くても作ります時間なんてのは私の匙加減一つでどうにでもなりますから」

『悪い何言ってるのか全然分かんねえ』

時間を自在に操作できるといふのなら、それはもう人間ではない。生憎彼女にそういつた特殊能力は備わってはいないのだ。

とにかく、楯無が時間を作って会いに来てくれるというのである。これで舞い上がらないクラリツサではない。

「だ、大丈夫です! 時間はありますし、私基本的に暇してますから!」

『副隊長としてその発言は問題あると思うんだが』

ラウラが聞いていたら問いただされるだろう発言をぼろつとしてしまうあたりかなりテンションが上がってしまったているクラリツサ。楯無の発言に一瞬、あれ? 私が副隊長に就任したって何で知ってるんだ? とも思ったが、友人である篠ノ之束などが調べて教えたのだろうと適当に辺りをつけてその思考を終わらせる。

最後に少しだけ話をして通話を終わらせたクラリツサ。そして冒頭へと戻るわけである。

IS学園を卒業して約二年。今では部隊内でお姉様とまで呼ばれるようになったクラリツサだ。ラウラの扱いも今では慣れたものもあり(というかラウラがクラリツサに懐いたという方が表現としては正しい)、専用機が与えられることに喜ぶラウラを微笑ましく見つけているのが彼女の現在の立ち位置となっている。

ドイツの国家代表、又は代表候補生は基本的にクラリツサも所属する部隊シュバルツエア・ハーゼ、通称『黒ウサギ隊』に所属していることが多い。

その中でも彼女の实力は飛び抜けており、要因の一つにIS学園での経験が大きいという事は周知の事実である。故に今も代表候補



生である少女が一人 I S 学園へと在学しており、隊長であるラウラもその年齢に達したら I S 学園へと入学させようというのが軍上層部の共通見解だった。

そのことにはクラリツサも全面的に賛成している。

何せあそこには自身が及ばないような人間がいるのだし、各国の機体性能や代表候補の実力を間近で見ることができなのだ。

これ以上の経験ができる場所をクラリツサは他に知らない。

ただ一つ、不安な点があるとすれば。

「隊長がきちんとコミュニケーションを取れるかどうかだ……」

先程までのハイテンションが嘘のように意気消沈する。箱入り娘というわけではないが、ラウラという少女は外界と接したことが極端に少ない。今でも世界共通の挨拶が敬礼だと思っているし（面白がつて事実を告げていない張本人がクラリツサである）、軍用レーションが三時のおやつだと信じて疑わない（イヤイヤながら食べるラウラを愛でるためではない、断じて）。

よく言えば純粹、悪く言えば単純なのがラウラという少女だった。

そんな少女に、クラリツサはよくこんなことを言っていた。

「むう。私は何時になったらクラリツサに勝てるのだ」

「隊長はまだ訓練機での稼働時間が短いだけです。才能で言うなら私などより余程上です。それに、私程度に勝てないようでは世界では到底通用しませんよ?」

「とは言ってもな。私はお前以上に強い人間を知らん」

「ふふ。機会があればいつ会わせてあげますよ。私を知る限り世界で一番強い男性を」

「男か、へこへここと頭を下げる奴らばかりではないのか」

「そういう輩がいることは否定しませんが、少なくとも I S の操縦者たる男性たちはそんなことはありませんよ」

「そうか。では期待することにしよう」

そんな事を言っていたのだ。

少なからず男性を見下しているラウラに、そんな男性ばかりではないということを知って欲しいという想いからの言葉だったが、よく考

えてみればこれはチャンスかもしれない。ラウラと自身の専用機は近日中に届く。その試運転に付き合ってもらおうという名目で、楯無とラウラに模擬戦を行ってもらえばいいんじゃないだろうか。あの人のことだ、なんだかんだ言っても最後は協力してくれることだろう。そしてその後には一緒にゴニョゴニョ……。

想像が変な方向へ走り出したクラリツサを止める者は、残念ながらこの場にはいなかった。



鉄製の巨大な箱二つを倉庫のすぐ横に付けたトレーラーへと運び込み、ココが倉庫にロックを掛けたと同時にそれは起こった。

パンツ、と。

乾いた軽い音がすぐ近くで響き渡る。

「っ、銃声!？」

「ルツ、ワイリ！ 状況報告!!」

すかさず反応したココが無線を使って周囲を警戒していた私兵へと声を掛ける。

「発砲二発！ お嬢から見て南東に武器所持の男が約二十！ あれっ  
てこの街のチンピラたちじゃねえか!!」

「そんな奴らに構ってる暇はない。ミスター更識、耳を塞いでいて下さい」

「は？ 何言ってる……」

俺の疑問が完全に口に出る前に、ココはあっさりと指示を飛ばした。恐らくは最も簡単で、最も堅実で、最も残酷な方法を。

「ワイリ、やれ」

「イエスマム」

直後、倉庫の周囲一带を円状に仕掛けられていた爆弾が起爆した。膨大な土煙が視界を奪う。爆弾が仕掛けられていたことにも驚きだが、何の躊躇もなく起爆を指示したココにも驚きだ。

何も殺すことはなかったのではないか、などと綺麗事を言うつもり

はない。最初に発砲してきたのはあちら側であるし、向こうも恐らくは玉砕覚悟で乗り込んできたのだろう。その目的はほぼ間違いないから運ぶ新型のIS。敵に何もさせることなく無力化したココは、人を殺した事実などなんとも思っていないように無線機を使う。「ルツ、ワイリ。状況確認」

「全滅ですココさん。襲撃者の中に生存者は無し」

「こつちもクリアー。お嬢、いつでもここを離れられるぜ」

「よし。さっさとここを離れるよ、また変なものに出くわしても面倒だ」そうとだけ言つて、二台あるうちの一台へと乗り込む。彼女の私兵たちもそれに続き、俺はその最後についてトレーラーへと乗り込んだ。

少し気になるのは、今しがた襲撃してきた男達。

先程のココの話では、この街の住人はココたちへの攻撃が何を意味しているのかきちんと理解しているので襲撃などしてこないと言っていた。だが、実際こうして襲撃は行われた。しかもタイミングを見計らったかのように。外部犯という可能性もあったが、ルツの無線での発言でこの街の住人たちが武装して襲撃してきたということが明らかとなった。

これは一体、どういうことなのか。

(何かあるんじゃないのか。俺のまだ知らない、ココたちが隠してる事実って奴が……)

どうもきな臭い。平然と襲撃を押しつけるココも、その周囲も。

俺が呼び出された時点である程度の揉め事は覚悟していたが、ひよつとすると俺が想定している以上の厄介事に巻き込まれているのかもしれない。

はあ、と溜息を吐き出す。一先ずはこの仕事を終わらせてからだ。ココにこれ以上の詮索はしないといった以上、取り敢えずは与えられた仕事に集中しよう。

俺たちを乗せたトレーラーは、ドイツの特殊部隊のもとへと動き出した。

## #BF 武器商人と出会った日 3

ドイツ軍特殊部隊、シュバルツエア・ハーゼ。

ISというものがこの世界に生み出されてから設立されたこの部隊は、ISでの軍事訓練、戦闘が主な任務として行われている。ドイツで開発、生産されたISは基本的にまずこの部隊の隊員へと割り当てられる事が多く、その理由は部隊員たちの殆どがIS適性Aランクという数値を持っているからだ。

IS適性値がAという人間は世界的に見てもそう多くはない。故に、このシュバルツエア・ハーゼの隊員の数は少ない。デスクワークなどの補佐的な人間を抜けば、その数たったの十一人である。

その十一人の一人であり、部隊を束ねる立場に立つ女性クラリツサは今日搬入される予定の専用機の到着を待っていた。とは言っても搬入先の格納庫などに居るわけではなく、個人に割り当てられている私室でだ。

クラリツサにとっては、今回で二機目の専用機となる。IS学園在学時に最初の専用機が与えられ、今回は隊長であるラウラとの姉妹機であるということで一機目が回収された上での新機体だ。

開発した技術者の話によればまだトライアル段階の新武装を幾つか積んでいるということだったが、別段問題はない。その実験段階の武装を実用段階にまで引き上げるのが自分の役目であるということには自覚しているし、その為に与えられるということを理解している。

ラウラは初めての専用機ということで柄にもなく舞い上がっているようだが、まあ問題はないだろう。他の部隊員の前では無表情を装っているし。いや、若干口元がニヤついているのは皆気づいているけれど。

搬入予定時刻は午後七時。まだ一時間以上も余裕はあるが、今日片付けてしまわなくてはならない仕事はとうに終わらせてしまっているので手持ち無沙汰である。

先日死ぬ思いをして日本のビッグサイトに足を運んで手に入れた戦利品は全て読破、十分に楽しませてもらった。本棚を埋め尽くさん

ばかりのコレクションの数々も擦り切れんばかりに読み返したものでばかりなので新鮮味は薄い。

要するに、今現在クラリツサは暇を持て余していた。

本来ならこういった時間はISでの訓練に当てるのだが、今日は専用機が届くということでフィッティングとフォーマットの都合で訓練が禁止されている。となれば何が出来るのか。部屋で出来ることと言えば読書と料理くらいのものである。

「一人分の料理だけ作るというのもな……、」

それこそ学園時代は金髪と同級生と一緒に料理をしていたものだが、今ではすっかりそういったことはなくなってしまった。彼女の場合は趣味の自分とは違い、彼氏の為の努力だったようだが。

そういえば彼女も専用機を与えられたとかどうとか言っていたが、来年のアレには出てくるのだろうか。

などと考えていると、唐突に端末が震えた。

「はい」

『私だ』

「どうなさいましたか隊長」

通信は、自室にいるであろうラウラからだった。

彼女も自身と同じく訓練は禁止されているので自室に居るはずだが、こうして連絡を寄越してくる辺り時間を潰すための話し相手が欲しいのだろう。それとも専用機が待ち遠しくて仕方がないのか。恐らくは両方だ。その声色からも、喜色を伺い知ることが出来た。

『う、うむ。今日届く専用機だが、それまで暫し時間があるのでな。お前も暇していたのではないか?』

「ええ。どうしようかと考えていた所でした」

『そうだろうそうだろう。隊員を気遣うのも長たる者の務めだ。話し相手になつてやろう』

端末越しであるにも関わらず、クラリツサには小さな胸をえへんと張るラウラの様子を幻視することが出来た。え、なにこの生き物。ちよー可愛いんだけど。鼻腔から噴き出そうとする愛をなんとか堪え、決してそんなことになつていっているとラウラに悟られないようにクラ

リッサは口を開いた。

「話しと言われても、別段相談したいようなことは」

現状、何か隊長であるラウラに相談するようなことは思いつかなかった。しかしそれがどうにもお気に召さなかったらしいラウラは、『む、なんだ。上官である私に何も言いたいことはないのか?』

「私は隊長に対して不平不満を抱いたことは一度としてありませんよ」

ラウラの問いに、クラリツサはあっさりそう答えた。

ドイツ軍特殊部隊シュバルツエア・ハーゼ。その隊長であり続けることがどれほど大変であるかなど、今更言葉にするまでもなく理解している。その激務を顔色一つ変えることなく遂行する彼女の姿は、最早尊敬すら覚えるほどである。

しかしこのまま何の話題もないというのも、折角連絡を寄越してくれたラウラの気遣いを無碍にすることになってしまう。暫し思考を巡らせて、一つ昔話をすることにした。

クラリツサが唯一認めた、男性IS操縦者の話を。

「そうですね。では隊長、少し私の昔話に付き合ってくださいか?」

『昔話? お前が過去の話を持ち出すとは珍しいな』

興味深げにそう言うラウラに、クラリツサは小さく微笑む。

「確かにあまり過去には拘らないんですが、こればかりは忘れることなど出来ない話でして」

『聞かせろ』

促され、彼女はその口を開いた。

あの男性操縦者と如何にして出会い、これまでの価値観を覆されたかを。そしてそれが、自分自身にとってどれほど大きな出来事だったのかを――。



何か様子がおかしいと気付いたのは、二機の専用機を積んだトレーラーの先頭が停止して暫くしてからだった。時刻はまだ早く、搬入予

定時間まで幾ばくかの余裕があるが、こんな何もない荒野の一本道で停止する理由など本来ならば無いはずだ。

そして異変を感じ取っているのはどうやら俺だけではないらしく、横に座るルツやトージョも何やら脇に置いた銃器に手を掛けている。

『……ああ、ココさん』

先頭のトレーラーに乗り込んでいた黒人、ワイリからの通信だ。その通信に二両目に乗っていたココが応答する。

「ワイリ、臭うか？」

何が、とは聞かなかった。簡潔に、要点だけ纏められたその問いに、ワイリは淡々と答える。

『ええ、この先のカーブの地点が鼻につきます』

「そうか。総員、戦闘準備」

『待ったココさん。ここは一度様子を見てきましょう。ただの爆弾ならそれでよし、待ち伏せなら殲滅するだけでしょう』

そう言って先頭の車両からワイリが降り立った。特に警戒した様子もなく、散歩でもするかのような気軽さで臭いと評したカーブ地点へと歩を進める。

いやいやいや。平然と歩いて行ってしまったけどあれかなり危険だぞ。カーブ付近の岩場に敵が潜んでたら一瞬で蜂の巣にされる。

「おいおい。アイツ一人で行かせていいのか？」

そんな俺の問いかけに答えたのは、先頭車両に乗り込んでいたレームだった。インカムを通して、彼の声が響く。

『あー、ミスター更識。その点はなんら問題ないよ』

飄々とした彼の言葉に、怪訝そうに眉を顰める。見たところあの黒人は屈強な軍人というわけではない。どちらかと言えばインテリで情報処理を専門にしてそうな風貌の青年だ。そんな人間が武器の一つも持たずに戦場に足を運ばばどうなるか、火を見るよりも明らかにはずである。

俺の疑問を察したのか、レームは再び口を開いた。

『実はうちの連中でFBIのブラックリストに載ってるのが二人いてな。ココと、ワイリだ』

煙草の煙を気持ち良さそうに吹き出しながら、レームはあつさりと言った。

FBIのブラックリストにその名前が記載される。というのはつまりアメリカ全土を敵に回すも同義だ。何を仕出かしたのかは知らないが、そんな奴が今俺の目の前で平然としている事実が上手く飲み込めない。

『こと爆弾に関しては世界屈指と言っていいのがワイリなんだ。アイツの手にかかればホワイトハウスだってペレしゃんこに出来るかもな』  
「あー……。つまり爆弾が仕掛けられてたらあの黒いのが解除するし敵が潜んでたらこつちから狙撃するから問題ない。そういうことか？」

『そういうこと。ミスターも余計な体力は使いたくねえだろう。狙撃は俺とルツに任せときな』

いつの間にか車窓から身を乗り出して大型の狙撃銃を構えていたルツに驚きながらも、俺はカーブ付近を歩くワイリから視線を離さなかった。レームが言うようにブラックリストに載る程の人間だ。どこをどう爆破すれば最も効率がいいのか、なんてことを考えて実行出来てしまうレベルの人間である。そんな人間を心配するのもどうかと思ったが、もしも敵が潜んでいてしかもISを所持していたらと思うとそういうわけにもいかなかった。

しかしそんな俺の心配は、どうやら杞憂に終わったらしい。

『ココさん、ビンゴだ』

敵が潜んではいなかった、という点でだが。

「ワイリ、周辺に人の気配は？」

『今のところは無いですね。この爆弾もトラップにしては杜撰すぎる。こんなところに仕掛けたら見つけてくれと言ってるようなものですよ』

「解除は？」

『問題なく。二分もかかりません』

通信機越しにそう言い、ワイリはいそいそと工具を取り出して解体作業に入った。爆弾はカーブ横の草むらの中に仕掛けられていたら



しい。センサー式だと言うので、車線の向こう側にももう一つ同じものが仕掛けられている筈だとワイリは告げた。一つ目の爆弾を解体し反対車線まで歩き、二つ目の解体に移るまでの時間は一分弱。特殊部隊の爆弾処理班でも不可能ではないかと思われるタイムだった。

「……なあ」

「なんだミスター」

「アイツ、変態だな」

「そうだけミスター。ワイリは変態、こと爆弾に関しちやとびっきりの変態さ」

ケラケラと笑うルツを横目に捉えながら、心の内で溜息を一つ。

ココの私兵たちは一人一人がどこか頭のネジがぶっ飛んでるようだった。いや、悪い意味ではないのだけれど。

『……ルツ』

不意に、先頭車両のレームからの声が響いた。

その声色に、先程まで感じられた陽気さはない。

『銃を構えろ。奴さん、どうやら狙撃手を雇ってるみたいだ』

「あん？ おっさん、方角は」

『西に二百メートル、数は二。俺とルツで仕留めるぞ』

「……見つけた。成程あんなとこに身を潜めていやがったのか」

いや、どこだよ。というツツコミを口にはしなかった。視力はそこそこ良い方なので二百メートル先の人間など見つけられそうなものだが、暗さと岩場が邪魔をして見つけられないでいる。

なんにせよ、このままではトラップを解除しているワイリの身が危険だ。俺はトラックの扉に手を掛け、外へと出ようとした。

瞬間――。

二発の痛烈な発砲音が響き渡った。

「っ!？」

「ツヒユウ！ ビンゴだぜおっさん！ 奴のライフルに花咲かせてやったー！」

『こつちもオーケーだ。ココ、ワイリが仕事を終え次第発進できるぞ』  
発砲音はルツとレームの二人から放たれたものだった。

この位置からでは確認できないが、どうやら敵の無力化に成功したらしい。いやいや、この状況で一発で敵を無力化してどんな視力と精度してるんだ。流石は元デルタと言ったところなのだろうか。通信機越しに鼻唄なんか聞こえてくるあたり、この程度の事は造作もないのだろう。

ココ・ヘクマティアルの私兵たちを、俺は少しばかり見くびっていたのかもしれない。

「ワイリがトラップを解除したみたいだ。戻り次第、直ぐに出発するよ」

ココが先頭のトレーラーにもその旨を伝え、シートに深く座りなおす。

この場に敵が潜んでいたことは危惧すべき事態であるが、与えられた仕事は専用機を無事に運び終えることだ。今暫くは様子を見よう。ココが言っていたようにISなんてものもまで引っぱり出してくるようであればその時は俺が対処すればいいだけの話だ。

内心でそう結論を出し、未だに自らの腕前に酔いしれるルツの隣に腰を下ろす。

数分の後、二両のトレーラーはゆっくりと動き始めた。

ココ・ヘクマティアルという女が何を考えているのか、未だにわからないまま。



クラリツサの口から語られる話は、ラウラ・ボーデヴィツヒにとっては到底信じられるものではなかった。

シユバルツエア・ハーゼの隊の中でもトップクラスの実力を持つクラリツサが手も足も出ない。どころか、傷一つ付けることが出来ないというではないか。ラウラの知る限り、クラリツサの高火力兵器を用いても傷を付けられない相手がいるなどと俄かに信じられなかった。

『冗談に聞こえてしまうかもしれませんが、これは事実ですよ。私はあの人、更識楯無先輩には結局一度も傷を付けることが出来なかつ

た』

その声はしかし、どこか楽しそうなものだった。

疑問に思ったラウラは、率直に尋ねる。

「しかしクラリツサ、勝てなかったと言う割には随分と楽しそうではないか」

『楽しい、ですか？ そうですね。確かに楽しかったかもしれませんが』  
何が楽しいのかラウラには理解が出来ない。

戦いとは勝つから楽しいのが道理である。負ければ悔しいし、勝ちたいから血の滲むような訓練にも取り組むのだ。それがどうしたところか、今のクラリツサはまるで負けることが楽しいかのようである。

これまでの人生をこの軍で過ごししてきたラウラという少女には、到底理解できない感情だった。

「お前は悔しくはなかったのか？」

正直な所、何を腑抜けたことをと思ったラウラの質問に、  
『勿論悔しいですよ。でもそれ以上に、あの人との戦闘訓練は刺激的だったんです。勝ち負けがどうでもよく思えてしまうくらいに、得られるものが大きかったんですよ』

クラリツサが言う『得られるもの』というのが一体何を指しているのか、ラウラには全く見当がつかなかった。

軍人としてこれまで育てられてきた彼女にとって、戦闘から勝利以外の何かを得るなど考えられなかったからである。

「お前は、何を得たんだ……？」

興味深げに尋ねるラウラだが、しかし返ってきたのは僅かに含みを持った笑いだった。

『隊長。きつとそれは私の口から言っても意味などないでしょう。隊長自身があの人と戦い、何かを感じなければ』

「……意味が分からんぞ」

『今はそれでもいいです。今は』

どこか窘められているような気がしなくてもないラウラは釈然としなかったが、ここで彼女を問い詰めたところでやんわりと言いくる

められるのは目に見えていた。ラウラは口下手であるということを目覚めているし、そもそもこの副官に口や実力で勝てる気がしないのだ。

そんな副官に『この話はこれでおしまい』と言外に言われてしまったのは、もう一度話を蒸し返すような真似は出来なかった。

『……と、そろそろ予定の搬入時刻ですね』

クラリツサに言われて部屋の時計に視線を向ければ、予定時刻まで後十分程となっていた。

「入口には既に隊員を配置してある。やってくれば直ぐにわかる」

搬入予定時刻に合わせシユバルツェア・ハーゼの隊員を入口に配置してある。

今回の搬入を担当しているHCL I社が到着すれば直ぐに隊長であるラウラに連絡がいくことだろう。

『そうですか。では私は先に搬入先の格納庫へと向かっておきます』

「了解した。私も連絡が有り次第そちらへと向かう」

そう告げて端末の電源を落とす。

クラリツサと話をしていた間は薄らいでいた期待と緊張が、再び彼女の内心で膨らんでいく。

専用機。

世界で四六七しかないISのコアを使用して作られた、ラウラ・ボーデヴィツヒの為の機体。

無意識のうちに頬が緩んでいく。

こんな表情、きつとクラリツサたちには見せられない。

生まれてからこれまで、この軍の中で必死に生き抜いてきた。その努力が認められ、そしてようやく報われるのだ。これが嬉しくないはずがない。

「……フフ」

思わず笑いが漏れる。

普段無表情で仕事をこなす特殊部隊の隊長も、この時ばかりは年齢相応の可愛い少女の笑顔を浮かべていた。

そしてその少女の耳に、待ちわびていた連絡が飛び込んでくる。



二台のトレーラーが今度こそそのエンジンを止めたのは、ドイツ北方にあるドイツ軍特殊部隊の司令部だった。周囲を高い塀で囲まれたその見た目は宛ら刑務所のようにも見えたが、刑務所なんかよりも警備セキュリティは何倍も上だ。

その出入り口にまでやってきて停車したトレーラーから、ココが降りる。

直ぐに門番のように直立していた隊士がやって来た。

「用件を」

「HCL社のココ・ヘクマティアルです。依頼されたモノを運んでまいりました」

俺と初めて出会った時のあの仮面のような笑顔で、ココは隊士へと用件を伝えた。

一度トレーラーのほうへと視線を向けた隊士だったが、その後懐から通信端末を取り出して誰かと連絡を取った。おそらくそれが合図だったのだろう。隊士が端末をしまったのとほぼ同時に、入口の門がゆっくりと開いた。

「確認が取れました。ようこそココ・ヘクマティアル様」

深々と頭を下げるその隊士を横目に見ながらココはトレーラーへと戻っていく。トレーラーの先頭には別の隊士が立っている、彼女が格納庫まで案内してくれるのだろう。

俺はゆっくりと動き出したトレーラーに揺られながら、ぼんやりとその光景を眺めていた。

腑に落ちない。

はつきりと言ってしまったえば、俺は未だに今回の一件に納得していない。先にも言ったようにこれは仕事として請け負っているものなので今更どうこう言うつもりは毛頭ない。ココという女が一体何を考えているのかは不明のままだが、このまま行けばあと一時間もしないうちにこの仕事は終わるだろう。

彼女が最初に言った I S E O とかいう反 I S 団体の表立った襲撃もなく、至って平穩に。

俺を用心棒として雇った彼女の考えが理解できなくはないが、どうにも違和感が拭えない。

ココ・ヘクマティアルという女に対する違和感だけではない。何かを見落としているような、辻褄が微妙に合わないような、そんな薄い違和感を感じるのだ。

本当にこのまま終わるのか。——そう考えていた時だった。軍内部という有り得ない場所で、有り得ない火柱が上がったのは。



「本当に、こんな作戦で上手くいくのかね？」

「そう心配なさらずともよい。全ては順調、大船に乗ったつもりでその椅子に腰掛けておればよいわ」

とある高層ビルの最上階。

円卓に腰掛ける十人ほどの顔があった。卓に両肘をつき、訝しげに尋ねるのは壮年の男性。それに軽く答えたのは、まだ若い女だった。

「しかしだな……。相手はあのドイツの特殊部隊だぞ？　そう簡単に事が進むとは思えん」

別の男性が女へと言葉を投げる。

投げられた言葉に、しかし女は口元を三日月のように歪めて。

「ほう……。そんなに心配なら貴様が自ら戦場へと出向けばよからう？　なあ、元フランス陸軍少将殿」

「ぐっ……、」

くつくつと笑いながら言う女に、男性は青筋を浮かべながらも反論することは出来なかった。

I S という『兵器』が生み出されるまでならいざ知らず、現時点ではこの女に逆らえる人間はこの場には居なかった。

「まあそう暑くなるでない。お前たちは言われた通りにしていればそれでいい。それだけで、お前たちの社会的地位の改善に繋がるのだ。

それに――」

そこで一度言葉を切って、ダンツと円卓に両足を交差させて乗せる。傲慢なまでのその態度にも、やはり声を荒げる人間はいない。そんな彼らを見下すように視線を向け、女は言う。

「――お前たちが言いだしたのだぞ？　この私、京ヶ原劔に力を貸せと」

## #BF 武器商人と出会った日 4

何処の国にでも有りそうな高層ビル。

都心ともなれば建っていても違和感のないビルがある。一見すればその高さから多少の驚きを受けるが、裏を返せばその程度だ。どこにでもありそうなビル、とはつまり他のビルとの区別が付きづらいということである。

その事實は、表立って行動することのない人間たちにとって非常に都合が良い。

そんなビルの最上階でつい先程まで議論を交わしていた女はその部屋から出るやいなや、面倒臭さを惜しげもなく出して溜息を吐き出した。

見るものを魅了するような透き通る黒髪に、その髪とは不釣合いな真っ白なドレス。足元も白のレギンスとヒールで覆われている。見た目高校生くらいのその少女は、今まで行なわれていた議論を思い返して。

「全く、老害共が何を勝手な事を抜かしているのだから」

思い返すだけでも腹立たしい、あの皺が深く刻まれた男共の顔。

いつまでも自分たちが世界の中心だと信じて疑っていないようなあの態度が、どこまでも女を不快にさせた。

チツ、と誰もいない廊下で女の舌打ちが響く。それを咎める人間は、このビルの内部には一人もいない。

「十三代目」

「矛か」

いつの間にか女の背後に仕えていたのは、グレーのスーツを着込んだ長身でガタイのいい三十程の男性だった。

何処で負ったのか、彼の右目は切り傷によって閉じられている。

「お疲れ様でした」

「フン。お前も聞いていただろう」

何を、とは聞かなかつた。そんなこと言わずとも理解しているだろうと決めつけた上での言葉である。



そしてそんな言葉に、男は声のトーンを変えることなく答える。

「少しばかり頭の悪い連中のようなですな」

「少しばかりではない。何だ、奴らの脳はポップコーンか何かで出来ているのか？」

女、京ヶ原劔は階下へと続くエレベーターに乗り込んでそう悪態をつく。

彼女を今日呼び寄せたのはI S E OというI S排斥団体だ。なんでもドイツの特殊部隊に渡される新型のI Sをくすねたいらしい。

それだけを聞かされては議論などなりはしない。彼らは団体の具体的な最終目標とその足がかり、それを手助けすることで得られるこちらの利益を掲示してきた。のだが。

「奴らが口になっているのは夢物語だ。他人の力に依存して己の力以上のことをしようとしているようにしか見えん」

「過信、ですな」

「何がそこまで奴らを駆り立てるのは知らんがな。I Sをこの世から葬り去るなんてことは所詮無理な話だ」

稀代の天才、篠ノ之束が生み出したインフィニット・ストラトス。

元は宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォームスーツとして発表された代物だった。

しかし、黒白事件をきっかけにして全世界にその名を轟かせたこのI Sは、兵器としての側面を高く評価されることとなってしまった。篠ノ之束という人間の規格外さを知らしめると同時に、I Sは軍事利用される兵器として瞬く間に普及していったのである。

それに伴って社会に浸透していったのが女尊男卑という風潮だ。

劔からすればくだらないと一蹴するようなものだが、世間はそういうわけにもいかなかった。I Sにただ一つ存在した欠陥。女性にしか扱うことが出来ないという事実が、世の女性たちの心の内にあつた傲慢さを刺激したのだ。

「行き過ぎた女尊男卑はあの男たちの存在で食い止められたがな。それでもI Sが発表される前の社会に戻すなんてことは不可能だ」

「更識の十七代目のことですか」

「それと二人目の、なんと言ったか。名前は忘れたが」

数年前までIS学園に在籍していた二人の男性IS操縦者のことを思い浮かべて、彼女は二人目の名前を思い出せずに諦めた。

劔にとって重要なのは一人目の存在であって、二人目は然程気にかけていなかったためだ。

「どういう訳かアイツがISを扱えるということかどうかの上層部は更識への奇襲を企てたわけだからな。まあ、結果として更識と京ヶ原の当主は引き分け。引退して私やアイツに家督が譲られたわけだが」  
ハンツ、と鼻で嗤う。

十三代目劔にとって、先代の十二代目やその上層部は仕来りに拘り過ぎていたのだ。その結果が更識などという家系に痛手を負わされ、引退にまで追い込まれた。浅はかにも程がある。

風習や掟などといったものに全く重要性を感じない彼女には、無駄な行いと思えなかった。

「これからどうするおつもりで」

「疲れた。取り敢えずは屋敷で私の肩を揉め」

「いえ、そういうことではなく……」

矛と呼ばれる男は、ISEOという団体をどう扱うのかという意味を込めて質問したのだが、彼女はそうは捉えなかったらしい。

「奴らのことか？ 下らんと一蹴してやることは造作もないが、それではこちらがここまで出向いてやった労力に見合わん」

チン、と小気味のいい音と共にこれまで感じていた浮遊感が消える。

開いた扉の先には上流階級の人間なのかタキシードやドレスを着こなした人間がちらほらと居たが、そんな人間たちには一瞥もくれずエントランスを抜けて外へと出て行く。予め入口に待機させておいた黒塗りの高級車に乗り込み、劔は口元を吊り上げた。

「せいぜい利用させてもらうさ。奴らの妄執も、利用価値さえ伴えば捨石程度には役に立つ」



突如として上がった火柱は、搬入予定である格納庫のすぐ近くからだった。

一体何が火種となったのかは定かではない。が、どう見ても自然に発生しうるものでないことは理解できる。

つまり、人為的に引き起こされたということである。

新開発された二機の専用機が搬入される予定の日時と時刻に合わせるようにして。これを偶然と呼ぶには、些か無理がある。

未だに状況が飲み込めていない、という人間は幸いにしてこの場には居なかった。

ココ・ヘクマティアルとその私兵たちを始め、ドイツ軍の連中も一様に纏う雰囲気を変えさせる。

このままトレーラーの中にいるわけにもいかない。俺はルツを押しつけて強引にドアを開き外へと出た。その後が続いてルツやワイリなどの私兵たちがその手に銃を構えて降りてくる。

「ココ・ヘクマティアル」

「なんですかミスター更識」

「これも、アンタの想定内か？」

飄々とした態度を崩さないココへと、疑念の視線をぶつける。

「まさか。完全に想定外ですよ。私たちの仕事はこの二機のISをこの場所まで届けることで軍の施設を破壊することではありません」

「……だよな」

飄々とした態度の中にも若干の苛立ちが混ざっていた。どうやらこの爆発とココは無関係であるとみて良さそうだ。というか、こんなことをしても彼女には何のメリットもないだろうが。

「レーム、バルメー！」

「呼んだか？ ココ」

「はい、装備は万全です」

彼女の私兵たちの中でもトップクラスの戦闘能力を誇る二人を目の前に呼び寄せ、周囲には聞こえない大きさの声で告げる。

ここからではココが二人に何を話しているのか聞き取る事は出来

ないが、この事態の中で何か突拍子もないことを仕出かそうとしているわけではないだろう。俺の予想を裏付けるように、ココから何かを言われた二人はその後直ぐ様火柱の上がった方へと走っていった。

……つてちよつと待て。

「何してるんだ！」

「ああミスター。少し様子を見てくるように指示を出しました。大丈夫ですよ、こちらのトレーラーはトージョやアールが護衛していますから」

いや、俺が言いたいのはそんなことではない。

「これがISEOの襲撃で、ISを引っ張り出してきてたらどうするんだ！」

世界に存在するコアは四六七。この数は不変であり、ISが誕生してから今までに束が製作したものだ。

だが、表舞台でそのコアを使用しているのは実際には八割程度である。各国に割り当てられたコアを全て合計しても、その上限には達しないのだ。

それはつまり、裏で使用されているコア、又はISがあるということだ。

ISに対抗できるのはISだけ。

どこの学者が言っていた言葉でもあるが、全く以てその通りだ。これまで戦場の第一線で活躍してきた重火器など、ISの前では何の意味もない。戦車や戦闘機も然りである。

今しがた走っていったレームやバルメの武装はあくまでも対人戦闘を想定したものであり、ISを相手に出来るものではない。

「問題ありません。彼らは一級の戦士たちです。ISが相手でも死ぬことはないでしょう」

表情を変えないココの言葉は、俺には何の気休めにもならなかった。

ココを始め、私兵たちはISとの戦闘経験がないのだろう。だからこそ、ここまで楽観的にもなれる。

アレは兵器だ。使う人間が間違った使い方をすれば簡単に人を殺

せてしまう兵器なのだ。それを、彼女たちは完全には理解していない。ある程度の知識は所持しているのかもしれないが、本質が見えていなければ同じことだ。

「……分かっていない」

「え？」

「ココ・ヘクマティアル。アンタはISってものを分かってないよ」

そうとだけ言つて、俺はトレーラーの荷台に詰め込んであった小型のトランクを引っ張り出す。まさかこんなところでこれを持ち出すころになるとは思っていなかったが致し方ない。こんな非常時だ、コレを使わないわけにもいかないだろう。

トランクを片手に、俺はレームたちが走つていった方向へと走り出した。

出来ることなら、俺の予想は外れていて欲しい。ISなんていなくて、ただの事故であつて欲しい。だが、そこまで樂觀的になれるほど平和ボケしていない。置かれている現状くらいはイヤでも把握できる。

これは恐らく、限りなく最悪に近い状況だろう。

「くそっ」

一先ずは人気のない場所を探すことだ。

トランクを持ちながら、俺は周囲を見渡す。あちこちから軍所属だと思われる人間たちが火柱の上がった方へと走つていく。肩口に掛けられたライフルなどを見るに、やはり俺の嫌な予想は当たつてしまつていたらしい。彼女たちの表情を見ながら、そのまま俺は建物へと入つていった。



火柱が上がったことによる警報は、自室で待機していたクラリツサとラウラの耳にも届いていた。

誤作動を起こす可能性などまず無いと断言できるほど、この軍施設の機器は優秀である。ということつまりそういうことなのだろう。

とクラリツサは表情を引き締めた。

今日搬入される予定の専用機間もなく到着しようかというタイミングでのこの警報。これを偶然だと言えるほどクラリツサは短絡的ではない。脱いでいた軍服に袖を通し、自室の扉を開いて廊下へ出る。

「チツ、このタイミングで襲撃とは。向こうも馬鹿では無いようだな」  
忌々しげに舌打ちして齒噛みする。

専用機が与えられるということ。クラリツサに与えられていたコアは回収されている。今の彼女の手元には専用機は存在しないのだ。

ISを複数配備されている此処に襲撃を仕掛けてくるということ。相手も十中八九ISに搭乗していることだろう。いくら徒手格闘を一通り修めているとはいえ、IS相手に生身で戦うのは自殺行為である。

シユバルツエア・ハーゼの隊員に専用機を持つ人間はクラリツサとラウラ以外にはいない。軍用に整備されたISが三機あるだけだ。恐らく今頃はそれらに乗り込んで隊員たちが現場へと急行している頃だろう。

今のクラリツサに出来ることは二つ。

敵にISを奪われる前に格納庫へと辿り着きそれを展開して戦うか、司令室へと向かって他の隊員へと指示を飛ばすか。

内心で己に問いつつも、足は既にある一方向へと向かっていた。司令室とは反対方向にある、格納庫へと。

「ここで内へ引つ込むなど有り得ないな。国家代表の名折れだ」

カツカツと軍靴を鳴らしながらクラリツサは向かう。

自身の愛機を奪わせなどしないと、その瞳に強い光を宿しながら。

「……………んん？」

格納庫への道のりを進んでいると、前方に不審な人影を捉えた。この緊急事態である。軍の人間はデスクワーク以外現場へと向かった筈であるし、デスクワーク担当のものであれば所定の部屋へと避難している筈だ。故に、こんなところに人間がいるのはおかしい。

敵である人間でもなければ。

「……………」

とある部屋に入っていったその人影をしつかりと目で追いながら、クラリツサは腰から短剣を抜いた。

あの部屋に用がある人間などこの軍内部には存在しない。それにこんな状況だ。逼迫した中で態々あそこに足を踏み入れる理由など存在しない。

侵入者、とあたりを付け、クラリツサは足音を殺してその部屋の入口付近まで忍び寄る。こういった状況を想定しての訓練も行われていることもあって、彼女の動きはとてもスムーズで無駄がなかった。持っていた短剣を握り直し、内部に居る侵入者の気配を感じ取る。

（衣擦れの音……、着替えている？ まさか部隊の軍服を奪って成り済まそうとしているのか！）

扉越しに聞こえてくる音を拾いながら、侵入者の目的を予想する。

（目的はISだけではないのか？ この軍に保管されているデータも奪うつもりか……！）

その絶対数が決まっているISの稼働データはとても貴重なものだ。

それに搭乗しているのが国家代表やそれに準ずるクラスの間ともなれば尚の事。そういったデータの取引は国家間で巨額の金銭が動く。もしもそういったデータが奪われ闇のルートに流されれば、ドイツが受ける損害は計り知れないものになるだろう。

そんなことはさせない、とクラリツサは静まり返った廊下で一度息を吐き、瞳を閉じる。

一瞬の間。そして、彼女は勢いよく扉を開いた。

「動くな！ 両手を挙げて床に這い蹲れ！」

短剣の切先が向けられたその方向。

そこに居たのは――。



「……………へ？」

「え？」

ちよつと待ってくれ。うん、一旦落ち着こうか。状況を整理しよう。

トランク片手に建物内部に入ってうろろしていたら丁度よく男子更衣室なんてものがあったので入って着替えを済ませて出ようとしたら、いきなり学園時代の後輩に短剣を突きつけられた。

というか、クラリツサが俺の目の前で短剣片手に殺気立っていた。

「さ、ささき更識先輩!？」

「おうクラリツサ。久しぶりだな、髪伸びたか？」

「そうですね。最近切りに行く時間も無くて……じゃなくて!」

数年ぶりの再会だというのに、どうにも当初予定していたものとはかけ離れてしまった。

襲撃の真つ只中なのだから仕方ないのだが、クラリツサとはもう少し時間に余裕を持たせて会いたかったものである。現時点に限って言えば、呑気にお喋りしている時間などない。

「どうして先輩がこんな所にいるんですか!」

「こんな所って、男子更衣室に俺が居ても別におかしくはないだろ」

「こんな時にどうして此処にいるんですか!」

クラリツサにすれば、俺が此処へと足を運ぶのはもう少し先だと思っていたのだろう。事実正確な時間などは伝えていなかったし、少しだけ驚かせてやろうという思惑もあった。

だが彼女が言いたいのはそういうことではない。俺が何でこんな事態の時にこんな場所に居るのか、その理由が分からないのだろう。

そういえば、と俺はクラリツサが黒執事の事実を知らなかったことを思い出す。今ここで言ってしまったても良かったが生憎とその時間さえも無さそうである。聞こえてくる銃声が一際大きくなったことで、俺は一旦クラリツサとの会話を打ち切ることにする。

「話したいことは色々であるが、今はそんなことをしている時間はない」

キュツ、と手袋を嵌めて、全身を黒で覆う。

こうして『黒執事』を纏ったことで、ようやく大手を振って戦うこ



とができる。全く使い勝手が悪いと思ったらありやしない。これは本格的に束に某バツタ戦士の変身ベルト的なものを作ってもらったほうがいいのではないだろうか。

「クラリツサ。お前が使うはずの専用機が今狙われてる」

「！ はい。大体の事情は分かっています」

「なら話は早い。このまま格納庫まで連れてってやるから、」

ほら、と俺は両手を前に突き出す。

この動作の意味がよく理解出来ていないのか、クラリツサは目を点にするだけだった。なんだもう、察しが悪いな。

「連れてってやるって言ってるだろ。ほら、乗れ」

「はあっ!？」

ずずい、と更に腕を突き出す。

所謂お姫様抱っこというやつだ。おんぶでもないんだが、それだと移動の際のGに耐えられずクラリツサが吹き飛ばされる危険がある。俺の前で抱えてしまえば止める事ができるので、この形が理想なのだ。

しかしどうやらクラリツサは抵抗があるらしく、

「な、なな何言っているんですか更識先輩！ 先輩には織斑先輩や篠ノ之先輩がいるでしょう！」

「はっ。」

なぜこの場面で千冬や束のことが出てくるのか。

なにやら果てしない勘違い臭が漂っているんだが。

「お姫様抱っこをされた女性は、その男性と婚約しなくてはならない!!」

「おい待てどこ情報だそれは」

どばーん！ と背景に効果音が聞こえてきそうな声でクラリツサは拳を握った。

お姫様抱っこしただけで婚約しなくてはいけないなどという法律は初耳だ。というか、またどこぞの本から仕入れた情報なのだろう。どうしてこうクラリツサの日本に関する知識は偏ってしまっているのか。

ああ、いや、そうか。

このクラリツサの偏った日本の情報は、IS学園時代にナターシャが植え付けたものだった。何故日本人でもないナターシャが日本の情報をクラリツサに教授していたのかは分からないが、ともかくクラリツサの少女趣味というかオタク魂というか、そういったものは全てナターシャによって育まれたものだったのである。

目の前で両手をぶんぶん振りながら身体をくねらせる俺の後輩。なにやらトリップしてしまっているらしいが、こうなったクラリツサは中々現実世界に帰還しないことを知っている俺としてはそんな悠長に待ってられない。

「よつと」

「更識先輩と夫婦夫婦夫婦……げへへへってうわあつ!？」

強引にでもクラリツサを抱きかかえ、そのまま脚に力を込める。

一方通行の能力の一端であるベクトル操作を発動させ、廊下を音速の速さで移動していく。耳元で何かをクラリツサが言っているが全て無視して、俺は格納庫へと急いだ。



「参ったなこりや。銃火器が何の役にも立ちやしねえ」

「レーム！ 無駄口叩いてないで反撃してください！」

「へーへー」

格納庫に収納されていた戦車の陰に身を潜めながら、レームは半分以上が灰になってしまった煙草を地面で消しつつそうぼやいた。

ココや楯無から対IS以外の武器は一切通用しないとされているが、やはりというかなんというか、レームとバルメが所持していた武装は何一つ相手に通用しなかった。レームが今隠れているこの戦車の砲撃でさえも、おそらくは傷一つ付けることはできないだろう。不幸中の幸いというべきか、まだ敵に二機の専用機は奪われていなかった。というか、ココたちがいるトレーラーに積まれたままだ。

向こうはまだそれに気がついていないようだった。それにこの軍

の人間だと思われる女性兵士の数人がISを展開して応戦してくれていることで、なんとかレームとバルメは目立った外傷なくこの場に居られる。

しかし、戦況は思った以上に芳しくなかった。

現状、レームたちに来ることは何も無い。

格納庫内には火薬なども保管されているため、軍の人間たちは大つぴらに攻撃を仕掛けることも出来ない。ISを展開している人間は無事だろうが、そうでない人間たちは方が一火薬が爆発した場合タダでは済まない。だが敵はISを展開している人間のみである。こちらの怪我や建物など気にして戦うはずもなく、敵側の一方的な攻撃が行われているのが今の現状だ。

「つたく。とんでもねえなISってのは」

元デルタをしてそう言わせるほど、ISという兵器の戦力は桁外れだった。たった一機いるだけで戦局が瞬く間に覆される。ISを展開していない人間たちがいくら束になってかかったところであろうも無い。それほどまでに圧倒的な兵器。

「バルメ。ココに連絡だ。お前が出てくれ」

「構いませんが、何故?」

「こういう時のためにミスターを雇ってたんだろ? ならその力を借りない手はねえだろう」

新しい煙草を懐から取り出してレームはバルメに端末を放る。それを片手でキャッチしたバルメはすぐに耳に押し当てる。

はたして、すぐに連絡は繋がった。端末越しのココは、いつもとそんなに変わらない調子で口を開く。

『もしもし』

「あ、ココ? 近くにミスターはいますか?」

『ミスター更識? 彼なら今しがたトランク片手に建物のほうに走っていったけど』

「こんな時に! と内心で毒づいたバルメだったが、直ぐに思考を切り替える。

彼がトランクを持って建物へと向かっていったというなら、少なく

とも交戦の意思はあるのだろうか。

正直、バルメはまだあの更識楯無という男のことを完全には信用してはいない。世界最強の男、黒執事などという彼に関する肩書きは幾つもあるが、バルメの見たところ躰つきはそこその青年という印象しか受けなかった。ISというものに対してそこまで博識なわけではないので身体能力だけでは彼の実力を測れないが、少なくともココが期待するほどのものではないのではないかと考えている。

というか、ココがそこまで気にかけるあの男のことがどうにも受け入れられなかった。

(ミスターが来る前からココは彼の話ばかり……。一体何の考えがあつてそこまで彼に拘るんですか)

ココは更識楯無の前では感情を顕にしていなが、バルメたち私兵はそれ以前の彼がやってくる前のテンションを知っている。

まるで子供のように、新しいおもちゃを与えられた少女のようにしやぐその姿に一同の開いた口が塞がらなかつたくらいだ。

ココが何を考えているのか、一体どこを見ているのか、バルメには考えが及ばない。

そんなバルメの思考を察してか、ココは気軽に口を開いて。

『問題ないよバルメ。ミスターの実力は私が保証しよう。彼がそこに着くまで、何とか持ち堪えてくれ』

「っ、了解です。ココ」

通信を切つて、肩に掛けていたショットガンを構える。

こうしている今も敵の攻撃は止むことなく断続的に行われている。ギリツと奥歯を噛み締める。彼女の専門は近接格闘であつて、こういった銃器を用いた忍耐勝負はあまり得意とするところではない。レームはなんでも行えるオールラウンダーだが、その彼でさえもISでの攻撃には手を焼いているようだった。

ISも当然無限に動き続けられるわけではない。

シールドエネルギーが底をつけばその動きは停止する。

しかしこちらにも弾薬には限りがあり、しかもその半数以上が既に消費されていた。ドイツ軍の人間たちも応戦しているとは言えIS相

手では戦力としての期待は持てない。

ジリ貧、という言葉がバルメの脳裏を過ぎる。

その直後だった。

聞きなれない、この場にそぐわない。

鈴を鳴らしたような少女の声が、この戦場に響いたのは。

「——ふむ。あれが襲撃者か。成程な。ところで、私の専用機はどこにあるのだ」

ドイツ軍特殊部隊、シュバルツエア・ハーゼ隊長ラウラ・ボーデ  
ヴィツヒ。

空気を読まない（というか読む気がない）彼女は、颯爽と戦場のど  
真ん中に降り立った。

## #BF 武器商人と出会った日 5

ラウラが異常に気がついたのは、襲撃が行われるよりも数分前だった。

この軍内部では、定時には必ず隊長であるラウラのもとへと連絡がいくようになっていた。そしてその時間も、何の問題もなく定時連絡は彼女のもとへと送られていた。

ラウラが異変を感じたのは、その連絡そのものではない。

(何だ。ノイズ？ この回線にか？)

一般の回線を利用せず、ドイツ軍が持つ秘匿回線を介して送られるこの定時連絡に、これまで雑音のようなものは一切拾われなかった。そういった無駄な音を排除する理由でも秘匿回線が使われているのだ。それなのに、混じった。通常では有り得ないノイズがたった一瞬でも、確かにラウラの耳に届いた。

この時点ではまだ確かな確証があつたわけではない。

しかしラウラの疑念は、次の瞬間に確信へと変わる。

軍の外郭あたりかららしい轟音。

襲撃という言葉が真つ先に浮かび上がったラウラは直ぐ様軍服へと袖を通し廊下へと飛び出した。

鳴り響く警報が事態の深刻さを表していた。

手元にISがない状態では対処のしようがない。最優先で行うべきは、搬入予定の専用機を敵に奪われる前に手元に置くこと。クラリッサと同じ結論を出したラウラは、足早に格納庫へと向かった。「で、私の専用機はどこにあるのだ？」

きよろきよろと格納庫を見渡してみてもそれらしきモノは見当たらない。視界に広がるのは飛び交う銃弾と光線、そしてIS。ドイツ軍のものではない紫色のISを見据えて、あれが襲撃者なのだろうとあたりを付ける。自身の部下である黒ウサギ隊が応戦しているところを見ても間違いなさそうである。

もう一度周囲を見渡して、そこでラウラは『ん？』と首を捻った。

一列に配置された戦車の影に、見慣れない顔が二つあったからだ、一人は壮年の男性、一人は筋肉質な女性だった。身のこなしから只者ではないということは理解できるが、しかし何故今この場にいるのかは理解できない。

「おい、そのの」

高いソプラノの声が響く。

その声が自分たちに掛けられたものだということを悟って、レームとバルメは視線を少女のほうへと向けた。綺麗な銀髪と眼帯が目を引く少女だった。軍服を着用していることと今の発言から、このドイツ軍の人間であるのだと予測する。

「見たところ軍人ではないようだが、何故こんなところにいるのだ」

「俺たちはドイツに依頼されてここに専用機を搬入する仕事を請け負ってたんだけだ。ま、余計なものまで連れてきちまったみたいだがね」  
「ほう、」

値踏みするような視線がレームを射抜く。

ラウラはそう簡単に他人の言うことを信用するような人間ではないし、それをおそらくレームたちも雰囲気理解しているだろう。

ここで適当に嘘など吐けば、問答無用で攻撃されることは目に見えていた。

「……嘘は吐いていないようだな。で、その専用機はどこにある？」

「俺が言うのもなんだけどよ。お嬢ちゃんこんな銃弾飛び交う中でよく平然としてられるなあ」

レームの見立てではまだ十代半ばに差し掛かったくらい少女が戦場のど真ん中でこうも堂々としていることが驚きだった。自分がこの年齢くらいの頃はここまで落ち着いていられないだろうな、などと取り留めのない事を考える。

「その専用機ですが、此処にはありません。私たちが使ったトレーラーに積んであります」

ラウラの質問に答えたのはバルメだ。

「敵の目的もどうやらその専用機のようなようです。私たちは奪取されるのを防ぐために来たんです」

「そんな装備でか？」

ハッ、と鼻で笑うようにラウラは二人の装備を見る。

対ISにしては随分と粗末な装備だった。人間相手ならまだしも、並の兵器がISに対して有効でないことはIS乗りであれば周知の事実である。身のこなしから視線の動きなどを見て、この二人は軍人ではあるがISとの戦闘訓練は皆無なのだろうとラウラは確信する。

ISと戦えるのはISだけであり、彼らがISに関して素人だというのならこうして出しゃばらずにドイツ軍に戦闘を任せているのは賞賛に値する行動だった。無駄に表に出て死なれては面倒だ。

ラウラは少しの間考え、そして決断する。

「その女、私をそのトレーラーのところまで連れていけ」

「……貴方は、一体何者なのですか？」

バルメからすれば、目の前の少女は軍人だろうということ以外不明な謎の存在だ。

専用機がどのと言っているのですそのパイロットなのだろうかと考えてみるが、幼気な少女がその操縦者選ばれているのか確認する術は今はない。ISの知識に乏しいバルメではあったが、そのコアの数が少なく、専用機を与えられる人間が非常に優秀だということくらいは知っている。

その一人が、この少女だというのだろうか。

バルメの疑問はしかし、少女の次の言葉で払拭される。

「何者だど？ お前たち搬入先のドイツ軍のことも知らないのか。ラウラ・ボーデヴィツヒ、特殊部隊シュバルツエア・ハーゼの隊長だ」



ISEO。

ISが生み出される前の世界へと回帰することを目的とする彼らではあるが、ISを一から十まで全て否定するわけではない。

例えば、その強大な兵器としての能力。

いくらISが世に生み出されたことで嘗ての立場や仕事を奪われ



たとは言っても、現存する兵器の中でも抜きん出た能力を誇るものを利用しない手はない。四六七しか存在しないコアを入手するのは流石に骨が折れたが、それでも不可能ではない。何せこの組織には国のトップクラスの重鎮たちまでもが顔を揃えているのである。書類上ではその国の所有となつているISを裏で流すことなど、そういった人間たちにしてみれば容易いことだった。

今回の件に限つて言えば、動かしたISの数は二。たったの二機と思うかもしれないが、一機だけでもその戦闘能力は大きい。操縦者に左右されるとはいえ、基本スペックだけでも現行の兵器を大きく上回っているのだから。

紫色の機体を操縦しながら女は口元を吊り上げる。

(これだ、これなんだ。私が追い求めて焦がれていたものは！)

右手に展開させたレーザーライフルを照準も碌に定めず放つ。白い軌跡のあとに灼熱の火炎が広がる。吹き飛ぶ瓦礫や兵器を見ながら、女は歓喜に震えた。えも言えぬ快感。破壊衝動にも似たその感情を乗せて、女はただ闇雲に格納庫内を蹂躪する。

女は元々、とある国の代表候補生だった。将来を渴望され、有望とされた少女だった。

しかし、女よりも高い適性を持つ少女たちの出現によってその立場は呆気なく崩れ去ってしまった。将来を期待された少女は、どこにもいる普通の少女へと戻った。戻されてしまった。

そこで女の負の感情は、ISへと矛先を向ける。

コレが無ければ、自分は誉めそやされることも、絶望することも無かったというのに。こんなモノがあるから。コレさえ無ければ。

この時点で、女の思考はどこか壊れ始めてしまったのだろう。そしてそれを止めてくれる人間は、彼女の側には誰ひとりとしていなかったのである。

「見ろ、見ろよ！ 私は強い！ あんな奴らよりも適正値が低いってだけで落とした無能な馬鹿国！ 見てるか!? 私はこんなにも強いんだ！」

乾いた嗚いが格納庫内に響き渡る。

紫色のそのISは、更に周囲を破壊しようと動き出す。

そんなISの行く手を塞ぐようにして立つ、一機の黒いIS。

「随分とまあ、好き放題やってくれちゃって。いい加減、こつちも限界なのよね」

相対する紫色のISのようにシャープではなく、寧ろゴツイと印象を抱かせるような黒いIS。

ドイツが単独で開発した第二世代型、『シュバルツェア・ワーフカーマー』。その名の表すとおり、数多くの武器弾薬を搭載した重装備のISである。その一機を操縦している女性、ドイツ軍特殊部隊シュバルツェア・ハーゼ隊員エリーゼ・ボイスは敵を前にして獰猛に笑う。「とりあえずはそうね。アンタたちの所属から何から吐いてもらおうかしら。再起不能になるまで痛めつけた後でね」

その言葉にピキツと蟬谷をひくつかせて、襲撃者の一人は反応した。

「ああん？ てめえ如きがこの私を倒せるとか思ってるのかあ？」

「寧ろアンタが私たちを抑えられると思ってるの？」

「ハッ、たかが三機集まっただけの有象無象じゃねえか」

「そう。そうとしか見えないなら、アンタの眼は節穴だ」

エリーゼを中心に、三機のワーフカーマーが二機のISの行く手を遮る。格納庫内でこれ以上の戦闘は避けたいエリーゼたちは、出来るだけ相手を引きつげながら外へと出るための算段を練る。

敵の目的が新型の専用機だと判明している以上、トレーラーのある方向へと向かうのは無しだ。となればそれとは逆方向、しかしこちらの思惑が向こうにバレないようにあくまで自然に、成り行き上そうなっってしまったかのように見せかけなくてはいけない。

これまでの操縦技術を見るに、敵も決して素人ではないことはエリーゼたちも理解していた。

それ故に決して油断はせず、緊張の糸は張り巡らせたまま行動へと移す。先ずは二機を分断することからだ。エリーゼと残りの二機で二手に分かれ、逆方向へと動き始める。敵と遠すぎず近すぎずの距離を保ちながら、威嚇射撃程度の攻撃を間断なく撃ち込んでいく。

エリーゼたちの目論見は功を奏し、二機のうち一機を格納庫から離れさせることに成功した。残るは一機。エリーゼと相対する高圧的な女の乗るISだ。じりじりと格納庫の出口付近へと移動し、あと僅かでもこちらにも思惑通りに事が進む。そう思った瞬間である。

エリーゼの耳に、聞き慣れた少女の声が届いた。

(この声、隊長?!)

自室待機を言い渡されていたはずの隊長の声がしたこと、一瞬だけエリーゼの思考に隙が生まれる。

そしてその隙を見逃すほど、襲撃者は甘くなかった。

「余所見してんじゃねえぞオラああああッ！」

「つくうー！」

銃弾の嵐が一瞬止んだことで、瞬時加速を用いて彼我の差を零にする。そして左手に構えていた近接型のブレードを容赦無く振り下ろした。

鈍い衝突音が格納庫内に轟く。

瞬時の判断で防御に徹したエリーゼだったが、やはりそのダメージを完全に受けきることは不可能だったようだ。視界に表示されているエネルギーの残量が中程まで削られていた。

だがそんなことよりも、エリーゼはラウラのことで思考が一杯だった。何故、どうして。彼女は今日搬入される専用機が到着するまでクラリツサと同様自室での待機を命じられていた筈である。確かにこの緊急事態である。が、それにしたって現時点ではISを持たないラウラがこの戦場で出来ることなど無いに等しい。此処に配置されていた三機のISもエリーゼを含めシバルツェア・ハーゼの隊員が全て使用しているので、ISを操縦しての戦闘にも参加はできない。

(一体何を考えて——!?)

彼女の疑問は、次のラウラの行動で解消した。

格納庫内に置かれていた戦車の影に隠れていた運送屋らしい男女の一人、眼帯をした女とラウラが、格納庫を出てトレーラーのほうへと走り出したからである。

その光景を目の当たりにして、そして気付く。

今の光景を一部始終見ていたのは、自分だけではない。

(ま……っず……！)

嫌な予感、というものは総じて的中してしまうものである。

エリーゼの感じた予感も、その例には漏れることなく的中してしまっていた。

「ははあん」

粘り気を纏わせた、女の声が響く。

「成程なるほど。……専用機はそっちにあるってことかあああああッ！」

バレた。完璧に、敵に専用機の在り処が。

だがここで動揺を見せるわけにはいかない。今ここでISでの戦闘が行えるのはエリーゼただ一人。自身が揺らいでしまつては、後々取り返しのつかない事態になりかねない。

ラウラとクラリツサに両名がこの場に居ない現状、エリーゼが戦わなくては誰もこの襲撃者を止められない。

努めて冷静に、動揺など微塵も表に出さず、エリーゼ・ボイスは歯を食いしばる。

「おっと。アンタの相手は私、そう簡単にここから離れられると思つてる？」

「ああ？ 邪魔だなあテメエ。そんなに殺されたいのか？」

ラウラたちが向かった方向へと行かせないように立ちはだかるエリーゼを前に、苛立たしげにレーザーライフルを構える。

「言うじゃない。このエリーゼ・ボイス少尉を前にそんな大口叩けるなんて」

「そんな肩書きに興味はねえ。とりあえず、その面あボコツてお仲間の前に晒してやるよ」

それ以上、互いに言葉は不要だった。

襲撃者の女にしてみれば目的である専用機の場所はほぼ割れた。後は必要な手順を踏んで達成するだけだ。

対してエリーゼは、襲撃者をラウラたちの元へと行かせぬようなんとしてもこの場で食い止めなくてはならない。

目論見が違えている以上、激突は避けられない。一瞬の静寂、黒と紫のISは、全力を以てして相手へと向かった。



格納庫へと到着した俺とクラリツサの眼前に飛び込んできたのは、あちこちが破壊され黒煙を上げる戦場そのものだった。

襲撃者たちが破壊したのだろう入口の隔壁や無残に転がる兵器の数々。ひっくり返った戦車などがここで行われた戦闘の激しさを物語っている。

「ひどいな……」

「あ、あの。更識先輩」

「なんだ？」

「そろそろ下ろしてもらえると嬉しいんですけど……」

「あ、悪い」

クラリツサに言われ、これまで抱きかかえていた彼女を優しく地面に下ろす。何やらクラリツサは俯いて顔を赤くしているようだが、何を今更純情ぶっているのだと思わなくもない。そんな乙女な反応をされても彼女の趣味を知っている俺からすれば狙ってやっているようにしか見えないのである。

つい先程までここで戦闘が行われていたのか、薬莖や使い捨てられた兵器が無造作に放置されている。今この格納庫に居るのはドイツ軍の兵士たち数人と戦車の陰に身を潜めていたらしいレームだけのようだ。

俺は煙草を啜えているレームのところまで歩いていくと、そのまま口を開いた。

「……よお、ミスター」

「レーム。他の人間たちはどうしたんだ？」

「バルメはラウラとかいうちびっことトレーラーのほうに向かったよ」

「っ！ 隊長がここに!？」

レームの言葉に食いついたクラリツサが詰め寄る。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。俺が知る原作の主要キャラの一人か。お目にかかったことはまだないが、クラリツサから聞かされる話によればかなり優秀な軍人であるらしい。そんな彼女が、既に格納庫に来ていたとなれば目的は一つしかないだろう。トレーラーへと向かったのは確実に専用機を取りにだ。ラウラとクラリツサの両名に与えられる予定の専用機に乗り込んで、襲撃者と戦うつもりなのだろう。

「ところで、その襲撃者ってのは何処にいるんだ？」

そういえばその襲撃者とやらの姿が見えないことを思い出して、啞えていた煙草の火を消していたところのレームへと問いかける。

格納庫内の損壊具合から見ても、この場所に襲撃者が現れたのは間違いないだろう。であるならば、その襲撃者は一体何処へと向かったのか。実のところ、レームに聞いたのは自身の推測の答え合わせの意味合いが強い。この襲撃の目的が専用機であることなど今更言うまでもないのだから、目当ての品があるであろう場所へと向かうのは当然のことだ。

しかしそんな俺の推測を裏切るかのように、レームの口から出たのは、

「ああ。——そこだよ」

瞬間。

格納庫の外壁の一部が大きくひしゃげた。外側からの衝撃で内に大きく凹んだその場所から、二度三度と鈍い金属音が連続して響く。その音の正体がISの武装同士が衝突しているものだと理解したのは、黒のISが投げ出されるようにして格納庫内に飛んできてからだった。受身を上手く取れなかったのか、黒のISは地面に叩きつけられたまま起き上がろうとはしない。そんなISに飛びかかる、紫色の機体。

言われるまでもなく、ソレが襲撃者であると確信する。

「エリーゼッ!!」

クラリツサの声が轟く。その声が耳に届いたのか、エリーゼと呼ばれた黒いISの操縦者は俺たちの方へと視線を向けた。

「副、隊長……」

まともな会話を挟むことも襲撃者は許してはくれないようだった。瞬時に間合いを詰めて、近接型のブレードを一直線に振り下ろす。この時点では、向こうは俺たちの存在には気がついていないらしい。

「あつちの黒いIS、お前の部下か」

「ええ……。エリーゼ・ボイス。シュバルツエア・ハーゼ内でも随一のパイロットです」

クラリツサがここまで言うのだから、エリーゼという女性士官もかなりの実力者なのだろう。しかし、その実力者を相手に優勢を保っている相手もまたそれなりの実力者のようだ。俺の眼から見ても、操縦技術はかなり高い。そこいらの女性では到底出来ないような高等技術を素知らぬ顔で行っている。

この施設に配置されているのは専用機以外では三機だと聞いているので、一機しかいないのを見ると残りは他の襲撃者と相対しているのだろう。となれば、エリーゼの援護は期待できない。一般の兵士ではISと戦うなど出来る筈もなく、クラリツサも専用機の無い今はその一般兵士にカテゴリされる。

となればだ。

ここは俺が出るしかないだろう。

その為にココ・ヘクマティアルという武器商人に雇われているのだし(その実具体的な雇用内容は判明していないが)、戦力となるのは現時点では他にいない。

久方ぶりの実戦だ、と内心で気を引き締める。

「クラリツサ」

首元のタイを正しながら、横で不安そうに戦局を見つめるクラリツサへと告げる。

「直ぐに戻る。そこで待つてろ」

彼女の返事を聞くことなく、俺は戦闘の中心地へと飛んだ。

さあ、始めようか。



視界の先に飛び込んできたのは、黒い執事服を着た若い男だった。軍人ではない。身体つきはその服の上からでは判断できないが、少なくともあんな服装をしている人間が軍属なわけがないだろう。女は怪訝そうに眉を潜めて、戦闘に割って入ってきた男をジロリと睨み付ける。

「んだあ？ 自殺志願者か何かかテメエ。挽肉にすんぞ」

IS 同士の戦闘に首を突っ込んできた愚かな男。そう決め付けて女は見下したように告げる。

自殺行為だと思っているのはこの女だけではないようで、黒のISを纏ったエリーゼもまた驚愕に顔を染めていた。

「なっ、貴方一体なにしているの!? ここは危険よ、早く避難を！」

今のこの状況を鑑みれば、彼女の避難警告は至極当然のものだった。

何の力も持たない一般人ならば、の話ではあるが。

そして彼はその枠組みからは、大きく外れていた。

「君がエリーゼか。クラリツサから話は聞いている。此処は俺に任せて退いてろ」

「なあっ!? IS 同士の戦闘に貴方が加わるとでも言うの!? そんなこと出来る筈ないじゃない！」

飛び込んできた時と同じ、全く動じない彼に、エリーゼは再三の忠告を促す。

彼女の声はしっかりと届いている筈だ。にも関わらず、執事服を着た男は敵の前から動こうとはしない。

(……執事、服?)

思考の隅で、なにかが引っかかった。

男、執事服。そこまで考えてようやく、エリーゼは気がついた。気がついて、眼を見開いた。先程までとは違う別の驚愕を感じて。

「まさか……、貴方は……」

エリーゼの雰囲気の変化を感じ取ったのか、男は少しだけ口角を緩めて。



「更識楯無。——黒執事、と言ったほうが分かり易いか」

世界初の男性IS操縦者にして、黒白事件に関わった世界トップクラスの人間。

何故そんな大物がこんなドイツの辺境の地にいるのか、という疑問が浮かぶがクラリツサとの関係を思い出してエリーゼは自身を無理やりにも納得させる。どういった経緯でこの場に彼がやってきたのかは分からないが、これで形勢は一気にこちら側へと傾いた。世界最強との呼び声も高い彼がこの戦列に加われば襲撃者の撃退など容易い。そう思えた。

真正面に立つ楯無をしかし、襲撃者である女は理解していなかった。

女尊男卑に染まりきった女の弊害とも言うべきか、世間の男のことなど全く興味がなかったのである。黒白事件や世界初の男性操縦者を知っているかと問われればイエスとは答えるが、顔まで詳細に記憶しているわけではなかった。その結果、現在目の前で首を鳴らす男がどんな人間なのか把握できていない。

「おいおい、まさか素手でISと戦おうつてのか？　頭沸いてんじやねえかあ？」

「心配してくれるなんて親切だな。なら俺も一つ言っておこう、降伏することをおすすめする」

「……ああ？」

「お前がそこそこの操縦者つてのは見ればわかる。でもな、その程度じゃあ俺には勝てねえよ」

ビキツ、と。女の額に青筋が走る。

「言ってくれるじゃねえか……。そこまで言うんだったら、死んでも文句は言わねえよなあああああつ！」

紫色の機体を駆つて、女は楯無へと突っ込んでいく。片手にはレーザーライフルを、もう片方には近接型ブレードを持って。瞬時加速程のスピードではないにせよ、常人では到底反応できない速度で振るわれるブレード。迷いのない剣戟が楯無へと迫る。

だが喰らえばただでは済まないその攻撃に、楯無はあろうことか向

かかっていった。何の武器も持たないまま、彼は振るわれるブレードに向かって拳を突き出す。裏拳を振るうように突き出された楯無の拳は、そのままブレードと接触する。

人間の拳でISの装備に太刀打ちできる筈もなく、楯無の拳は無残に跳ね飛ばされる。

——そう思っていた女は直後、吹き飛ばされる自身のブレードを前にして我が目を疑った。

「……は？」

宙を舞ったブレードはやがて重力に負け、地面へと甲高い音を立てて落下した。

呆然と立つ女を前に、楯無の表情は先程から全く変化しない。彼の拳は全くの無傷だった。

「な……、どうなってんだ一体!? 人間がISにパワーで勝つなんて聞いたことねえぞ!」

「どうもこうも、目の前にあるものだけが事実であり真実だ」

コキコキと首を鳴らし、まるで自身の体調でも確認するかのように拳を握る楯無。そんな彼の異常性に、女はここにきてようやく気がついた。

気がついたところで、もう女に為すすべは残されていない。更識楯無という男は悪人をおいそれと見逃すほど甘くはない。

「さてと、襲撃者さん」

ここに至ってようやく楯無の雰囲気が変わる。いや、豹変する。今までの大人しく飄々としたものから、好戦的な笑みを隠そうともしない獰猛なものへと。

「洗いざらい話してもらうぜ。覚悟しろ」

一方的な蹂躪が幕を開けた。

## #BF 武器商人と出会った日 6

「これか」

「はい。二台目のトレーラーに、搬入予定だった二機のISは保管されている筈です」

格納庫から軍入口付近に停車されているトレーラーのもとまでやって来たラウラとバルメ。この付近までは戦火が広がっていないのか、辺りに硝煙や血の匂いは充満していなかった。そのことにバルメは安堵しつつ、トレーラーの荷台に背を預けていたココのもとへと小走りで向かう。

「ココー」

「あ、バルメ。そつちはもう済んだの？」

この緊急事態を微塵も警戒していないココの口ぶりは相変わらずだ。バルメもそのことに触れたりはずせ、これまでの経緯だけを簡潔に伝えた。連れてきた銀髪の少女が専用機の受取人であること、襲撃者はISに搭乗していて通常の武器弾薬は通用しなかったこと。レームは未だに格納庫に残っていること。

それら全てを聞いて、ココは数秒沈黙する。

「……バルメ。格納庫にミスターは？」

「私が確認している限り、格納庫に姿はありませんでした」

「そうか。おつかしいなー？」

ココにしてみれば、自身にあればのことの言うておいてバルメやレームの加勢に向かわない筈がないと踏んでいたのだが。それともその途中で何か別の案件に時間を取られてしまっているのだろうか。

どちらにせよ、敵と対等にやりあえるのはあの日本人において他にいないとココは理解している。

通常の武装しか持たせていないレームやバルメがISを相手に戦えるはずがない？ そんなことは彼に言われるまでもなく解っていた。解っていて尚、ココは行かせたのだ。

そうしなければ、更識楯無という男の実力を目にすることなく終わってしまうかもしれなかったから。

「……フーフ」

商談を持ちかける時のような社交的な笑みではなく、なにか黒さを感じさせる笑みを浮かべる。

これまで多少の寄り道はしてしまっただが、どうやらしつかりと最後は目論見通りに事が進んでくれそうだ。バルメが居た時点で格納庫にまだ姿が無かったということは、現時点で彼は恐らく既に格納庫に到着している頃だろう。ひよつとすると襲撃者と対峙しているかもしれない。

ISEOの目的は二機の専用機だ。それがこの場所にある以上、何人かは定かでないにせよ必ずこの場所へとやってくるだろう。そして、その敵を倒すべく更識楯無も。

「見せてもらいますよミスター。貴方の力を、」

誰にも聞こえないようにひっそりと呟かれたココの言葉は、夜の帳へと消えていった。

「……ほう。これが、」

トレーラーの荷台の中に乗り込んで大きな正方形の金属の箱を前に、ラウラは感嘆の声を漏らした。

中身など確認するまでもない。これが、これこそが自身に与えられる専用機なのだと確信する。長年待ち望んでようやく手に入れることが出来た専用機だ。色々と感じ傷に浸りたいところだが、生憎と今はそんな悠長にしていられそうもない。予め与えられていたパスコードを正方形の金属箱へと入力しロックを解除する。

パスコードを入力後、音もなく中身を取り囲んでいた金属箱が支えを失ったかのように周囲に散らばる。

そして現れたのは、漆黒の機体。

軍に支給されているシュバルツエア・ワーフカーマーよりも黒く、その漆黒の輝きから重厚さを感じさせるISの名は、

「——シュバルツエア・レーゲン……」

どくん、と。まだ起動すらさせていない筈の機体が、その名を呼ん

だ途端にまるで息づいたかのように感じられた。何も言わずとも、触れずとも。ラウラにはこの専用機のことを手に取るように理解できた。

「そうか……」

鈍い光を反射させる装甲をそつと撫でながら、ラウラはポツリと呟く。

「——お前も、戦いたいか」

眼帯を外し、左右で色の違う両目でシユバルツエア・レーゲンを見据える。

「行くぞ。私について来い」



「くっそがあああああッ!!」

ロックオンアラートが鳴り響く中、四方八方にレーザーライフルによる熱戦を放つ。がむしやらに攻撃を行う女だがしかし、楯無には全くダメージを与えることが出来ていなかった。それどころか、攻撃を当てることすらままならない。只でさえ杜撰な女の攻撃は心中に渦巻く焦燥も手伝って最早意味を為していなかった。

そんな女を視界の中心に捉えて、黒執事たる男は脚に力を込める。

「ッ!!」

「遅いな、遅すぎる」

瞬時加速を使ったわけではない。あれはIS操縦の高等技術であり、ISに搭乗しているわけでもない楯無はそんなものは使えない。

これはただ能力を使つての移動だ。音速程度の、というのが前に付くが。

ガンツ！ という一際大きな金属音が格納庫内に反響する。対IS武装を使用していない、ただの蹴り。その筈なのに、女の視界端に表示されているシールドエネルギーの残量は大きく削られていた。既にその残りは四分の一を切っている。このまま戦闘を続ければまともな稼働は一分程度しか続けられないだろう。

女にもそれは分かっていた。故に、奥歯を噛み砕かんほどに食縛る。

窮地に立たされた。

ここで女が取れる行動は二つ。

玉砕覚悟で目の前の男に挑むか、目的達成を最優先にして専用機のある場所へと向かうか。

前者を選べば、専用機奪取という目的は果たせない可能性が高い。後者を選べば、一先ずの目的は達成できる、しかし、この男は必ず追ってくるだろう。

どちらにせよ、この男との戦闘は避けられない。一瞬でそれだけを考えて、女が出した結論は、

「つうらあああああッ！」

後者だった。

既に原形を留めている箇所のほうが少なくなってしまった格納庫内で煙幕を張る。これで男を撒けるとは考えていないが、時間稼ぎ程度の役には立つだろう。粉塵が巻き起こる中、女は記憶していた格納庫の出口へと向かう。周囲に動いている人間の気配は感じられない。何よりドイツ軍ISの反応は煙幕を張った時点の場所から変わっていない。あの男さえ撒くことができれば、挽回など容易だと考えられた。

しかし、更識楯無はそれを許さない。

「つたく、煙幕とか。いつの時代の人間の逃走手段だよ」

「っ!?!」

忌々しい男の声が耳に届いたのとほぼ同時に、女の乗る機体は宙を舞っていた。

唐突に腹部に感じた衝撃に、それが男の蹴りによるものだど気付くまでしばしの時間が必要だった。図らずも格納庫から外へと出た女は、鈍痛を感じる腹部を抑えながら立ち上がる。

彼女のその眼は、驚愕と憎悪に染められていた。

「なん、で……、どうして私の居場所を特定できる!? テメエにはその執事服しかないだろうが!!」

黒執事というISが生み出されたのはISが発表されたのと同時期。それはつまり第一世代と呼ばれるISの雛形が完成される前に作り出されたものであることを意味している。いくら篠ノ之束が直々に製作したISだとは言え、世間では第三世代型が普及し始めている現在、到底それらのISに対抗できるスペックなど所持していない筈だ。そうでなければおかしい。

ISというのはその歴史が浅いだけに技術レベルの進歩が並ではない。世代が一つ違えばそれだけで大きな戦力差に直結すると言われているのだ。

今女が乗っているのは第二世代型であるが、それでも男の第一世代型よりはシステムもスペックも大きく上回っている筈である。例えば認知システム。光学迷彩などの擬似視覚システムは、やはり世代が後な程その精度は高い。第二世代のそのシステムを使えば、第一世代の視覚センサーを欺くことも可能なのだ。それを利用して、女は楯無から姿を晦まそうとしたのだが。

「ああ、世代差を利用して俺を出し抜こうとしたのか」

女の意図を察して楯無が呟く。

確かに世代差のあるIS同士の戦闘であればそれなりに有効な手段である。乗り手の技量がほぼ互角、という前提条件のもとで成り立つ話ではあるが。

だがこの前提条件以前に、根本的な部分で女は勘違いをしていた。

「悪いな。この黒執事、スペック的には第四世代以上なんだ」

「なあッ!？」

さらりと、楯無はなんでもないかのように言い放った。

「第四世代だあ!?! なんもんならどこの国も完成させてねえぞ! いや第三世代だってまだトライアル段階のものが殆どだ! だつてのに、第四世代だど!?!」

「信じる信じないは任せるさ。そもそも敵においそれと情報をくれてやる義理もないんだしな」

そう言う男が、再び女の視界から掻き消える。

瞬間的に背後へと首を回した女だったが、楯無の姿はそこにはない。

「残念、ハズレ」

「ッ！ ガアッ!？」

声の出処は、女の真下。次の瞬間顎を突き抜けるような衝撃と痛み、思わず女の身体が仰け反る。楯無の取った行動は至極単純、能力を使用してただ距離を詰めただけだ。ISを装備していることで視線の高くなっていた女の死角を突き、姿勢を低くした状態で懐へと潜り込んでいたのだ。腰の辺りで風圧に靡くテールが地面に付くすれすれまで身を屈めた状態で、楯無は更に右の拳を握る。

「覚悟しろよ、」

それは、女にとつての死刑宣告に等しいものだった。

「俺の最強は、ちつとばつか響くぞ」

それキャラ違う。

何処かで、そんなツツコミが聞こえた気がした。



「一先ずはこれでいいだろう」

ISが強制解除された襲撃者の一人を格納庫にあつたロープで雁字搦めに縛り終えたところでふう、と軽く息を吐く。

久方ぶりの実戦だったが、以前の感覚とそこまで齟齬がなかったことに一安心だ。これで鈍っていて戦えませんでしたとか話にならない。

本当ならこれからこの縛り上げた女に色々とお話を聞くつもりだったんだが、最後の一撃が想定以上に効いたのか気を失ってしまっているために会話を行うことは出来そうもない。いや、無理矢理起こして尋問するという手段もあるにはあるが、黒ウサギ隊のエリーゼの話によれば襲撃者はまだ他にもいるらしく、こちらにばかり時間を取られるわけにもいかないようなのだ。

という訳で、この女はこのままドイツ軍に引き渡すことにするとし



て。

「あ、あのー」

これから何処へ向かうかを考え始めたところで、唐突に声を掛けられた。

縛り上げた襲撃者から声のした方へと視線を動かせば、そこにはクラリツサとエリーゼの姿があった。エリーゼの操縦していたISはダメージレベルがCに達しそうだったので展開を解除し、今は待機形態に戻っている。ふむ、こうして改めてその容姿を見てみるととてもドイツ人のようには見えない。クラリツサが黒髪だからなんとなくそういう先入観を持ってしまっていたのかもしれないが、エリーゼの金髪はそういった先入観を抜きにしてもとても綺麗なものだ。スタイルもクラリツサと同様にスラッとしていて良い。これで私服を着ていたら軍人には見えないかもしれない。

などともいいことを考えていた俺に、エリーゼはどこか緊張した様子で話しかける。

「先程は助けて下さってありがとうございます」

「おや、と俺は小首を傾げる。

戦闘に割って入ったときはもっと口調が荒かったような気がするが。

「そ、それとすみませんでした。助太刀して下さったというのにあの、無礼な物言いをしてしまった……」

両手の指を身体の前で絡め、申し訳なきそうに俯く。ああ、どうやら彼女は俺に対してああいった物言いをしたことを後悔しているらしい。別に全く気にしていないし、そもそも俺が勝手に割り込んだことなのでエリーゼに落ち度はない。そりゃIS同士の戦闘に生身の人間が加わったらああいう反応をしてしまうだろう。

「いや、気になっていい。何も言わずに割って入った俺の方に問題があったらどうし」

「そんなー！ 楯無様に問題なんてありませんー！」

「……ん？ 様？」

これまで以上にエリーゼの口調に違和感を感じる。

何やら過剰な尊敬を抱かれているような気がしてならない。

「……クラリツサ」

「……はい。実はですね、」

エリーゼの横で視線を彷徨わせていたクラリツサへと近付き、エリーゼの態度の原因が何なのかを尋ねる。というか、恐らく原因はクラリツサ（コイツ）だ。俺と視線を合わせようとせず、どう話を切り出そうか迷っている所を見れば嫌でも感づく。つまり、クラリツサが俺のあることないことを彼女に言ったのではないか、と。

そしてどうやら、俺のその考えは当たっていたらしい。

クラリツサがこの特殊部隊に配属されてまだ日が浅かった頃の話。同僚や先輩たちとどうも上手くコミュニケーションが取れていなかった彼女は、苦肉の策としてIS学園での思い出話を使って会話を行うことにしたのだとか。幸いなことにクラリツサの居た三年間はISの世界で勇名を誇ることになる人間が多く、話題作りには事欠かなかった。その時に仲良くなったうちの一人がエリーゼ・ボイスという隊員であり、中でも一際食いついたのが俺の話題だったらしいのだ。

どんなことを言ったのかまでは聞かなかったが、彼女のあの態度からして間違いなく誇張をふんだんに含んだことを言ったに違いない。

はあ、と呆れたように溜息を吐く。

ここでエリーゼの誤解を解いてもいいのだろうか、今はそれよりも先にやる必要がある。クラリツサに新しい専用機を渡し、残りの襲撃者を殲滅することだ。

「取り敢えず俺たちもココたちのトレーラーに向かおう。そこにラウラも居るはずだし、襲撃者もそこを目指しているかもしれない」



トレーラーを停車させてある入口付近へと向かう途中、俺はふと思っていたことをクラリツサへと告げた。

因みに、今の俺は両脇にクラリツサとエリーゼを抱えた状態で能力

を使用し移動している。

「なあクラリツサ。お前ココ・ヘクマティアルを知ってるか？」

「勿論です。彼女はヨーロッパでは特に有名な武器商人ですから」

俺が聞きたかったのは、ココ・ヘクマティアルという女の素性だ。紙面に記載されているような情報なら俺も既に目を通してしている。そういう文字による情報ではなく、俺以外の人間が客観的に見た印象、情報が欲しいのだ。ココの私兵たちと同じ質問をしたところで正確な情報は得られないだろうと思つての判断だ。

「HCL I社、だったか」

「かなり大きな企業ですよ。世界各国に太いパイプを持っていますし、彼女の父や兄はかなりやり手だと聞いたことがあります」

「その会社つてI Sの出現で売り上げが落ちたりしなかつたのか？」

「何も武器販売だけが全てではありませんから。それにI Sが出現したあとも一定の売り上げはキープしていますね。どんな手段を使っているのかは知りませんけど」

二人を抱えて移動しながら考える。ココが俺をここに呼んだ本当の理由。

I S関係者とのパイプが欲しかつたのかとも考えたが、それなら俺なんかではなく政府を通して作るだろう。それだけの力がHCL I社にはあるというのだから。

「あ、あの楯無様」

「ん？」

おずおずと俺を見上げるエリーゼ。何か言いたいことがあるのか、と視線を彼女へと落とす。

「そういえば私聞いたことがあるんですけど」

そこで一旦言葉を区切つて、

「確かその企業つて——」

エリーゼがそう言おうとした、正にその瞬間だった。

正面から、突風が押し寄せてきたのは。いや、爆風というほうが表現が適切かもしれない。一体何が起これば発生するのかわかと思つてしまふ程の強烈な砂塵が俺たちを襲つた。咄嗟に二人の楯になるよう

前に出て能力を行使していなければ吹き飛ばされていたかもしれない。

「っ、何だっただよ」

「更識先輩！ あれをー」

前方で何かを捉えたらしいクラリツサが叫ぶ。

クラリツサに合わせ、視線を前方へと向ける。吹き荒ぶ砂塵で良好な視界を未だ確保できない中で、しかし異様に映るものがあつた。

三つの黒と、一つの赤。次いで甲高い衝突音が鼓膜を刺激する。

何が起きているのかこの時点で理解した俺はISを展開できる状態でないエリーゼとクラリツサをその場に残し、金属音が連続して響く現場へと急行する。

そこには、先程までエリーゼが使用していたのと同じIS『シュバルツエア・ワーフカーマー』と見たことのない二機のISの姿があつた。

見たことがない、とは言つたがそのうちの一機は原作知識で記憶している。ドイツが開発した第三代型、シユバルツエア・レーゲンだ。ということはつまり、アレに搭乗している少女こそがラウラ・ボーデヴィツヒなのだろう。彼女の周囲に居る二人は部下で間違いなさそうだ。

であるならば、その三人と対峙している赤いISこそが、もう一人の襲撃者ということだ。

ついさっきのエリーゼの時といい、なんだか今日はよく戦闘に割り込むなあ。

いや、それもこれも俺が現場に到着するのが遅れてしまっているからなんだが。

一先ずは目前の戦闘に加わることにしよう。

先程の戦闘の高揚が未だ自身の内に燻っているのか、普段は押し込めているはずの好戦的な笑みが表へと出てくる。それを意識しつつ、俺は全速力を以て黒の前に飛び込んだ。

直後、爆風。

移動に能力を使用していたこともあって、人間離れた速度で地面

に着地した衝撃によりアスファルトがクツキーでも潰すかのよう  
に割れていく。

細かな破片が周囲に飛散していくが、ISを装着した彼女たちには  
ダメージにはならない。そう確信した上での行動でもあったが、やは  
り四機のISに傷はない。

ポケットに手をつ突っ込んだまま、はためくテールがその動きを止め  
るまでその場から動かなかった俺にラウラたちシュバルツエア・ハー  
ゼの人間が不審な目を向けてくる。突如として見知らぬ人間が飛び  
込んでくれば怪しむのは当然であるし、それが生身の人間ならば尚の  
事。

首をコキコキと鳴らして、俺はようやく口を開く。

「――よオ」

自分でもびびっくりするくらいに、低い声が周囲に響いた。



自身に与えられた専用機を身に纏い戦線へと躍り出たラウラだっ  
たが、しかしながら未だ一次移行を終えていなかった。本来使用者と  
ISとの親和性が高くなることで発動する一次移行をこの短時間で  
行うことは難しい。こうしている今もシュバルツエア・レーゲンはラ  
ウラ専用のISへと変化を遂げつつあるが、外見上の変化は見られな  
い。表示されるデータによればまだ暫くの時間が必要そうだった。

他二人の隊員の技量も決して低いものではないが、襲撃者の女もか  
なりの腕前だった。

正直なところ、三対一という数であるにも関わらず、戦局はこちら  
側には傾いていなかった。女の駆る赤いISは以前データベースで  
見た記憶がある。確か半年前に行方が消えたカナダの第二世代型だ。  
それが今どうしてあの女の手にあるのか理由は不明だが、あの機体を  
回収できればカナダに貸しを作れる。

そう考えていた数分前の自分を、ラウラは甘かったと恥じる。

出来ることならIS本体に損傷を負わせることなく回収したいと

ころだったが、女の技量がそうはさせてくれなかった。本気で応戦しなければこちらが潰されかねない。ラウラにそう思わせるほど、襲撃者の女の技量は高かったのだ。

こちらの攻撃が躲かれ、防がれ、あまつさえ反撃を食らう。

一次移行を終えていないとは言え、第三世代型に搭載された新武装が効かないというのは問題だ。

いよいよもつてして劣勢に立たされようかという折、突如として目の前に現れた黒の男。顔つきからして東洋人だろうか。生身の人間が着地しただけでは到底有り得ない衝撃が周囲に走る。

「だ、誰だ——」

貴様は、とラウラが問いただすよりも早く、敵対していた襲撃者の女の表情が喜悦に歪んだ。

その表情は歪であり、身の毛も弥立つとはこういうことを言うのだろうか。表情を歪めたまま、女は口を開く。

「ははあん。これはこれは、とんでもない大物が出てきてしまったわねえ」

言葉とは裏腹に、女は舌なめずりしながら現れた男を興味深そうに見つめた。極上の獲物でも前にしているかのように。

そんな女に対して、男はとくに警戒した様子も見せず、横柄に言い放った。

「よオ。いきなりで悪いが、俺の為にここで潰れてもらうぜ」

何を馬鹿なことを、とラウラは内心で思った。

生身でISを纏った人間に太刀打ちできる筈がない。ISという存在がこの世の中において最強の兵器だというのは『黒白事件』の際に判明していることだ。ISを超える兵器は現時点では存在しない。それは揺るぎない事実であり、子供でも知っている常識だ。最も、ISが兵器であると理解している人間はごく一部だが。軍属でない人間や普通に生きている人間たちは、ISをスポーツか何かだと思いついでいる節がある。

この男も、そういった思い違いを起こしている人間なのだろうか。そう考えたラウラだが、襲撃者の女の反応がこれまでと違うことに

違和感を覚えた。

今まで戦闘中であろうと表情を崩すことのなかった女が、明らかに顔を強ばらせたのだ。

「なあんで貴方みたいなのがここに居るのかしらあ？」

「よせよ。理由なんて分かりきってるだろう」

その気になれば人間など粉々になるであろう武装を所持しているISを前にしても、男の態度は全く変わらない。寧ろ煽っているようなきらいすらある。挑発するように口元を吊り上げる男は、ポケットに突っ込んでいた両手を抜いて言い放つ。

「覚悟しろ」

そして。

男の姿が、視界から掻き消えた。

「なっ!？」

展開しているISの視覚補正を以てしても捉えられなかった男の姿は、気がついたときには襲撃者のISの目の前にあった。

一体どうやって移動したのかラウラには検討がつかない。人間の動きを捉えきれないなど、これまで無かったことだ。一瞬にして敵との距離を詰めた男は、スピードそのままに脚を地面へと叩きつける。それだけ。

たったそれだけのことで、襲撃者のISが空中へと跳ね飛ばされた。

今度こそ、ラウラは絶句した。

目の前の光景に啞然としているのはラウラの後ろにいた隊員二人も同様で、その場から動けずに呆然としている。無理もない。隊長であるラウラですら目の前の事実が上手く飲み込めていないというのに、まだ入隊して日の浅い彼女たちが対応出来る筈がなかった。

まるで当然のようにISを弾き飛ばした男は、くるりとラウラたちのほうへと振り返る。

ここでようやく、ラウラは男の顔を見た。端正な顔立ちだ。年の頃は正確には分からないが、二十代前半あたりだろうか。男性にしては高い身長とその服装から嫌でも目立つその男は、ラウラへと視線を向

けて言った。

「初めましてラウラ・ボーデヴィツヒ」

「……何故私の名を知っている?」

「ん? クラリツサから話を聞いていると思っただけ、違うのか」  
ラウラが自身のことを知らなかったというのが意外だったのか、男はこれまでの雰囲気霧散させて答えた。

ラウラには目の前で首を傾げる男に思い当たりはない。クラリツサ、という副官の名前が出たということは彼女と知り合いの可能性が高いが、クラリツサと知り合いの男性など記憶に――。

「あ、」

そこまで考えていたラウラの脳裏に、一筋の電流が走った。

知っている。この男のことを、己は知っている。

クラリツサがこれまで何度も口にしてきた男の名前が、ある。そう言われてみれば、どうして今まで気がつかなかったのだと自身の間抜け具合に嫌気がさした。あの服装も、理解できない戦闘能力も、男があの人であるというのなら全て納得できる。

ラウラの表情の変化から悟ったのか、件の男は少しだけ口元を吊り上げて。

「――更識楯無だ。よろしくな」



さてと。これで一先ず舞台は整った。

俺のことを不審人物を見るような目で見ていたラウラも思い出し、くれたようだし、あとは今しがた吹き飛ばした襲撃者を片付けるだけだ。

先程の一撃でそれなりにシールドエネルギーは削ったつもりだが、それでも稼働停止に至るほどではない。

どうやら相手もそれなりの実力者らしく、機体を捻って直撃を避けていた。初めに対戦した女よりも恐らくは数段格上だろう。これまでにラウラたちが手こずっていたのも頷ける。



「ボーデヴィツヒ。一次移行を終えるまであとどのくらいかかる？」

「は、はいっ。後五分ほどで！」

五分か。それくらいなら問題ないだろう。

俺は数秒考え、ラウラの後ろにいた隊員二人に指示を出す。

「その二人。悪いけどアレをクラリツサのところまで持つて行つてくれないか」

アレ、とは言わずもがな専用機のことだ。ラウラが今搭乗しているシュバルツエア・レーゲンの姉妹機であるシュバルツエア・ツヴァイク。それが保管されているトレーラーを指差して彼女たちへ言う。幾らか言葉足らずだったかもしれないと思つたが彼女たちの理解は早く、直ぐにトレーラー元へと向かつてくれた。

これで専用機がクラリツサの手元へと渡りさえしてしまえば早々奪われる心配はないだろう。

ラウラの専用機もフォーマットとフィッティングは既に終了しているようだし、このまま一次移行が終わるまで時間を稼ぐとしようか。いや、倒してしまふかもしれないが。

「……油断してたわあ。まさかあの黒執事サマが出てくるなんて」

ゆつくりと機体を起こして、女は言う。

俺からはバイザーで女の顔まで確認することは出来ないが、その声音は決して怨嗟を含んだものではなかった。

「これは少しばかり気合を入れ直さないといけないわねえ」

「気合を入れ直したくらいで俺に勝てると思つてるのか？」

「まさかあ。私はそこまで馬鹿じゃないわ、戦力分析は得意分野だし。でもねえ、これは私と貴方だけの戦いではないわ。こちらはその機体さえ回収できればいいわけだし、方法はいくらかでもあるのよねえ」

言つて、女の表情が怪しく歪む。

その言葉通りの意味を受け取るとすれば、それは俺とは戦闘する意思がないということだろうか。いや、戦闘自体は行うが、俺に勝利する必要はないということか。向こうは機体さえ回収できればこんな場所から直ぐに離脱してしまうだろうし。

女の仲間がまだ居るのかは不明だが、居たところでこの戦線に居ないのならば考えるだけ無駄だ。

俺と戦闘を行いつつも専用機を奪取する方法が向こうにはある。そしてそれを実行することも不可能ではない、と。

だが、甘いな。

「……そう簡単に、俺を出し抜けると思ってるのか？」

状況だけを見て言えばラウラと俺の二人で対峙しているのだからこちらが有利だ。相手にどれだけの力量があろうとも、この人数差は覆らない。

単純に戦力だけを比較すれば俺に分があることは向こうも承知していることだ。

「ええ、ええ。そう甘くはないでしょうねえ」

しかしそれでも、女の笑みは消えなかった。

「ねちっこい笑みを浮かべたまま、女は続けて。

「でも、不可能じゃあないわ」

赤の機体が、地面を蹴った。



本音を言えば、女は更識楯無に勝てるなどとは微塵も思っていない。  
い。

今や全世界の人間が知るほどのビッグネームは、当然知名度に比例した実力を有している。いくら自分がIS操縦技術に長けているとは言え、それだけで勝負になるとは思わない。

だが、勝てはしないまでも、ある程度の時間は稼げると踏んでいた。楯無の横に控える専用機もまだ一次移行を済ませていない。それならばまだ奪うチャンスはある。楯無の攻撃を躲しつつ、紙一重のところで機体を回収してしまおうと考えていたのだ。最悪自分は捕縛されてもいい。二機の専用機を軍施設の外で待機している仲間に渡せさえすれば、それで任務は終了なのだから。

先程の戦闘でラウラたちシュバルツエア・ハーゼ隊の大体の戦闘能力は把握している。

後は目の前の男、黒執事さえ何とか出来ればこの任務は成功で終わる。

——そう考えていた。

しかし、黒執事は女の予想を遥かに超えていた。時間を稼ぐ。

負けない戦いならば不可能ではない。

嘘だ。

これは、こんなのは。

「…………人間じゃ、ない……………」

ギリツと奥歯を噛み締める。

こうしている今も、女の機体のシールドエネルギーは刻々と削られていた。

黒執事の戦闘映像はこれまで何度も観てきた女であってもその動きを捉えられない。視覚補正を以てしても残像しか残らないなど、一体どんな動きをすれば可能なのか。

「なんだ。こんなもんか」

不意に頭上から声が響く。

直後、衝撃。

それが頭を抑え込まれて地面へと叩きつけられたのだと気付いた時には、女は身動きが取れなくなっていた。

どれだけ四肢を動かそうにも、一向に反応しない。

「さて、お前には幾つか聞きたいことがある」

「ふふ…………、そんなに口が軽く見えるのかしらあ？」

精一杯の虚勢を張って、女は楯無へと挑発的な視線を向ける。

尋問や拷問に対して一定の免疫を持つ女には、口を割らせることは難しい。一般の軍人であればの話であるが。

「安心しろよ。前線に出てくるような女がISEOの上層部に繋がりを持つてるなんて思っていない」

「っ！ なら…………」

「だが、誰からの指示かは知っているだろう」

メキツ、と頭部を掴む力が強くなる。

「言え。この襲撃を企てたのは、誰だ」

「……………ッ、」

女の頬を、冷や汗が伝う。

楯無の眼は雄弁に語っていた。嘘偽りを話せば、跡形もなく頭部を握り潰すと。

女が予め知っていた情報はたったの三つ。

一つは今日この日にドイツ軍に新型のISが搬入されるということ。

一つはこの任務がISEO上層部の独断で決められたということ。

そしてもう一つは。

「……………あああああッ!!」

話すわけにはいかない。話したが最後、この任務の全てが瓦解する。

シールドエネルギーの残量にも気にせず、女はスラスターを最大出力で噴かす。流星に腕一本でその行動を制限することは出来なかったのか、楯無は頭部から手を離して機体から飛び降りる。しめた、とばかりに女は飛翔する。このままでは機体の展開維持すらままならない。不本意ではあるが、ここは一旦退くとしよう。難易度は今日よりも上がってしまうだろうが、それでも今黒執事と戦うよりはマシだと考えたからだ。

幸いなことに黒執事に飛行能力はない。上空にまで逃れてしまえば手は届かない。

空へと舞い上がった赤い機体を見上げて、黒執事たる楯無は小さく溜息を吐いた。

「……………舐められたもんだ」

ポツリと、楯無は呟く。

「空に逃げれば、俺が手を出せないとでも?」

ゴバツ!! と、彼の足元に大きな亀裂が走る。

脚にかかるベクトルの向きを操作し、一気に空中へと飛び上がった

た。

確かに、楯無の黒執事に飛行能力はない。が、それが弱点には成りえない。

「なっ、こんな高度まで……!」

「お前は俺を過小評価し過ぎだ。それと——」

空中で振り上げられた脚が、女の頭部へと振り下ろされる。

機体のエネルギー残量の殆どを削り取る一撃に、女の意識が遠のく。いかに絶対防御がISには備わっているとは言え、攻撃を受けて痛みを感じないわけではない。あくまでも絶対防御は生命の危機に瀕した時に発動するのであって、基本的にはシールドバリアが攻撃を防ぐ。しかしそれも無限ではない。エネルギー残量が尽きればバリアは展開できないし、衝撃はそのまま身体へと伝わる。

楯無の今の攻撃には更識流の『鎧通し』が応用されていた為、女の身体にはダメージが直接与えられている状態だ。

当然、そんな状態では回避も碌に行えない。

踵落としを受けて上空から地面へめがけて落下していく赤い機体。それをロックする、一つの砲口。

薄れゆく意識の中、女の耳に微かに楯無の言葉が届く。

「——ラウラ・ボーデヴィツヒの事もな」

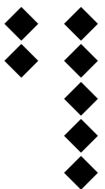
地上からレールカノンを上空へと構えるラウラの専用機の姿は、先程までとは明らかに異なっていた。

搬入時とは違い、その姿はより洗練されている。一次移行を終えたシユバルツエア・レーゲンの新の姿がそこにあった。

「終わりだ」

抑揚のないラウラの最終通告。

砲身を熱が帯びて行き、砲口へと光が一手に集まる。二メートル以上もある砲身を構えて、ラウラはその引き金を引いた。



「この度は、本当にありがとうございました」  
襲撃から一夜明け、早朝のドイツ軍。

目の前で礼儀正しく頭を下げるラウラを前に、俺は苦笑を漏らした。

昨日捉えた二人の襲撃者は会議の結果、一先ずドイツ軍預かりとなったらしい。ISEOという得体の知れない組織の一員ということで国際IS委員会へと尋問に向かうことは確定しているらしいが、それ以降の処遇は宙ぶらりんのままだ。

軍としてはこの襲撃事件のことはあまり公にしたいくはないそうなので、新聞などの一般情報紙にこの事件の事が載ることはないだろう。

流石に半壊した軍の様子なども含めて隠し通せるとは思っていないので、少しばかりの漏洩は免れないだろうが。

俺としては結果的に二機の専用機はきちんと所有者の元へと送り届けることが出来たので、一先ずは安心だ。

これで襲撃者に専用機が奪われるなんて事態になっていたら日本に戻った時に千冬や姫無になんて言われるか。

「貴方のおかげで私たちは専用機を守ることができた。感謝しています」

軍人らしく畏まった口調で話すラウラ。しかしどうにも俺は違和感を感じてしまう。同じ軍人のクラリツサが砕けた口調を使うからだろうか。なんというか、子供が背伸びしている印象を抱いてしまうのだ。

「……………」

「っ!? さ、更識殿!？」

あ。

思わずラウラの頭を撫でてしまっていた。いや、決して邪な思いがあるわけではなく。どちらかというとなんか父性のようなものだろうか。一生懸命頑張る娘を労おうという心情、理解いただけだろうか。

「あ、すまん」

「い、いえ……。驚いただけで、別にそれが嫌だったとかいうことでは

なくて……」

頬を紅くさせて俯く銀髪少女。え、なにこの小動物。

わしやわしや。

「……………」

わしやわしや。

「……………あ、あの」

「ん？」

「それで、何か謝礼をと思ってるんですが……………」

「お父さんって言ってごらん」

ぼろりと。

本当に意識したわけではなく、その場の流れで思わずそんな言葉が口から出てしまっていた。

自分で言った言葉に少しばかり引きながら、頭を撫でていた手を止める。

「いや、今のは冗談で——」

「お……………お父さん」

恥じらいはあるはずなのに、律儀にもラウラは俺の言葉を忠実に実行した。上目遣いを足したコンボで。

いかん。これは何か目覚めてはいけないものに目覚めてしまいそうな勢いだ。

言った本人も実際に口にして羞恥が表に出てきたのか、無言で俯いてしまっている。

なんとかかしてこの場の空気を元に戻さなければ。そう思っていた俺に、思わぬ救世主が現れた。

「あ、更識先輩。ここにいたんですか」

颯爽と登場したのはラウラの副官であるクラリツサだ。

今まで事後処理に追われていたのか、目の下にはうつすらと隈が出来ていた。心なしか軍服も萎れているように見える。

これ幸いとばかりに、俺は話題を強引に切り替える。

「おう。そっちはもう片付いたのか？」

「ようやく一段落です。これから二人の身柄をどうするか会議です

よ。EU諸国で」

「こんな時ばかり結託しやがって」

「これまで尻尾を掴めなかった組織の人間ですから。どこの国も情報が欲しいんでしょう」

「はあ、と溜息を零すクラリツサに少しばかりの同情を向ける。」

ISが絡んだ所為でドイツだけの問題ではなくなってしまった。コアナンバーから二機の所有国が判明したわけだが、どちらも行方不明になっていたのを黙っていたのだ。

その理由など至極単純で、ISを奪われるという失態を表沙汰にしなくなかったからだ。貴重な機体を奪われるような国に、現在の世界は酷く厳しい。

今回の一件でそれが露呈したカナダとイギリスは各国からの非難を浴びることになるだろう。

「それはそうと、二人で何をしていたんです?」

「ん? ああ、ラウラに昨日のお礼をされてたんだ」

「そうでしたか。では私からも、ありがとうございます」

頭を下げるクラリツサに、俺は少しばかりの懐かしさを感じる。

IS学園時代も、こうしてクラリツサに頭を下げられたことがあった。彼女が入学したばかりの四月、俺との決闘を終えた後だ。当時のクラリツサと比べれば、なんともまあり立派になったものだと思う。入学当初身の程を弁えていなかった少女が、今やドイツの国防の一角を担う存在なのだから。

「……こうして先輩に頭を下げるのは二度目ですね」

「どうやら向こうも俺と同じ事を考えていたらしい。」

「だな」

「ふふ、懐かしいです」

互いに微笑む。同じ時間を過ごしていたからこそ分かる話だ。

よって、ラウラにはこの話の意味が理解出来ていない。

だからこそ、ラウラは口を開いた。——先程の会話を少しばかり

引きずった状態で。

「一体何の話ですか? お父さん」



瞬間。クラリツサの目付きが変わる。いや、豹変する。目の下の隈はどこへやら、やけにギラついた眼で俺を見つめてくる。

何度か目を瞬かせていたラウラも、ようやく自身が口にしたことに気がついたのか、先程以上に顔を赤くしている。

「いや違うんだクラリ」

「お父さん……!!」

食い気味のクラリツサの言葉に、俺は背筋に冷たいものが流れるのを感じた。

「あれ、楯無様は？」

「さつき便に間に合わなくなるからと帰られたぞ」

襲撃者と戦闘を行った重要参考人ということでも今しがたまで取り調べを受けていたエリーゼ・ボイスは、同じ特殊部隊の同僚にそう言われてガツクリと肩を落とした。

折角ストレスの溜まる取り調べを乗り越えてもう一度更識楯無に会おうと走ってきたというのに、もう軍を出たあとだったらしい。

「どしたのさそんなに慌てて」

「うん、昨日言えなかったことがあったから」

彼女の胸中にあるのは昨日の事。

楯無にHCL I社について聞かれていた時のことだ。あの時、突風に遮られて最後まで言えなかった事があった。

———確かその企業って、ISの排斥団体の多くを支援してるんです。

◇

「フーフー」

イギリスへと向かう航空機の中。ファーストクラスの座席に腰掛けるココ・ヘクマティアルは窓の外に視線を向けながら、楽しげに笑った。

今この場に限っては、彼女の私兵もいない。私兵の殆どは壁を一枚隔てた座席の腰を下ろしており、唯一隣に座るバルメも席を外している。

「更識楯無。想像以上の人材だ」

間近で見た黒執事の戦闘は圧巻の一言。ISの操縦技術では国家代表レベルにも引けを取らない人間を相手に無傷で勝利を収めた。この結果は、彼女の想像の斜め上を行っていた。

「流石は世界最強と謳われるだけのことはある。……欲しいなあ」

視界一杯に広がる雲海を見下ろしながら、ココは呟く。

「ISなんてものはこの世に必要ないけれど、キミは特別だ。是非とも私の創る世界に欲しい」

周囲に誰もいない機内で、ココは静かに口角を吊り上げた。

## #16 娘と嫁

あのクラス対抗戦から幾許か月日は流れ、今日は六月の第一週の日曜日。

生徒たちは部活動に勤しんだり、外出届けを出して近くのショッピングモールへと出掛けたりと思い思いの休日を堪能していることだろう。一夏も昨日外出届けを提出しているのも、今頃は五反田の家にも出向いているのかもしれない。ここ数ヶ月ずっと女子ばかりに囲まれての生活を強要されてきたので、たまには男友達と騒ぎたいのだろう。その気持ちは痛いほど分かる。

「それにしても、もうこんな時期なのか」

ふと窓から外に視線を向ける。

別に季節が移り変わって行くことを言っている訳ではない。いや、確かにもうじきやって来る梅雨は正直好きではないが。俺が言っているのは、原作の時系列のことだ。俺や織村、それに四人目とかいうイレギュラーが存在することで大筋の原作からはかなり外れてしまっているように思えるが、どうやらこの辺りは原作通りに話が進むらしい。

パラ、と手元に置かれた書類を捲る。

それは、とある生徒たちの転入を記載したものだ。一枚目には金髪の少女、二枚目には銀髪の少女のデータが顔写真と共に記載されている。

「シャルロット・デユノアにラウラ・ボーデヴィツヒか……」

自分で淹れたコーヒーを一口含んで、青空の広がる外の景色から書類へと視線を移す。うん、やっぱりコーヒーは真耶に淹れてもらったものが一番美味しいな。自分で淹れたものはなんというか、コクが足りない気がする。今度そのあたり聞いてみよう。

正直なところ、この二人とは何度か面識があつたりするので初対面特有の緊張はない。寧ろ二人共俺によく懐いてくれていると思うくらいだ。彼女たちと会ったのは今からもう数年前の話なので、どのく

らい成長しているのか会うのが楽しみではある。

「楽しみは楽しみんだけど……、また原作通りにこんなやるんだよなあ……」

二人の書類の隣、少し分厚い書類の束を、忌々しそうに持ち上げる。そこに書かれていたのは今月の末に毎年開催されている学年別個人トーナメントを多少変則的に行うというものだった。因みに、書類の文頭に決定事項であることがばっちり赤字でプリントされている。

「ということは恐らく、また面倒な事が起こる。間違いなく一夏絡みで。というか、ラウラも巻き込んでか。」

「あの二人を戦わせなけりゃいい話なのか？ 多分そこまで仲悪くないよな」

原作通りに話が進まないことを願いつつ、俺は残ったコーヒを一息に飲み干す。原作ではラウラは千冬の顔に泥を塗った一夏のことを憎んでいた訳だが、この世界では一夏の誘拐は未遂で終わっている。千冬の棄権までは変えられなかったが、その場にはラウラも居たのだ。そこまで感情を顕にしていなかった所を見るに、然程心配しなくてもいいように思える。

第二回モンド・グロツソ。ラウラが歪んでしまった原因があるとなればそれ以外に見当つかないが、そのモンド・グロツソでの誘拐事件は水面下で解決されていたのだ。原因が無ければ、過程をすつ飛ばして憎悪という結果には至らないだろう。

そう考えていると、不意に主任室の扉がノックされた。向こう側から聞こえてきたのは、よく通る女性の声。

「楯無、入るぞ」

「どーぞ」

俺の返答を聞いて、グレーのレディーススーツを着た千冬が入ってきた。

「どうしたんだ？ 今日是非番で真耶と出掛けるって聞いてたけど」

「ああ、これから出掛けるつもりだ。その前にこれを渡しておかなくてはと思ってな」

ドサツ、と。到底紙の束を置いただけでは聞こえないような音と共

に、俺の目の前に大量の書類が。いやこれ何枚あるんだよ、千冬の顔が見えないんだが。

「あの、千冬さん……？　これは一体……」

「先月のクラス対抗戦で起こった案件の詳細を教えろという各国からの通達だ。後黒執事の戦闘データがあるならそれも寄越せというな。随分とがめつい奴らだ」

「え、それ千冬の方に行ってたのか？」

「あのな……、あの案件に関しては私と山田君が一任して対処していたんだぞ。少しは感謝して欲しいものだ」

成程。責任を負うとか吐かしていた割に後処理が楽だったのはこうして千冬たちが対処してくれていたからなのか。いや助かる。でもあれ、何でそれを今俺の所に持ってくるんだ。

「私は今から出掛けるからな、残りの書類。私が帰るまでに片付けておいてくれよ」

「……………」

どう見ても一日で終わる量でない書類と千冬の顔を交互に見て、崩れ落ちるように残った机のスペースに突っ伏した。

ああ、俺の休日は無いつてことなんだなそういうことなんだな。楽しげに部屋を出て行く千冬の後ろ姿を眺めながら、俺は現実逃避気味に目を伏せた。自業自得、そう自身に言い聞かせなければとてもじゃないが手が進まない。内心で思いつつ、俺は一番上の書類へと手を伸ばした。



「聞いた？　なんでもこのクラスに転校生がくるらしいよ！」

「ほんと!？」

「なんでも超美少女なんだって!」

HR前の一年一組の教室は、俄かに騒がしかった。

少女たちが口々に話題にしているのは、なんでも今日やって来る転校生のことらしい。

「転校生、ねえ」

そんな騒々しい教室の中。机に片肘をつきながら一夏はぼんやりと騒ぐ少女たちを見つめていた。転校生、と言われてもピンとこない。確かこのIS学園は編入するにあたって入学試験よりも難易度の高い試験をパスしなくてはならなかった筈なので、かなり優秀な人間であるということは理解できる。

ただ、やはり一夏にとってはどこまでも他人事だった。

鈴の時のように友人がやって来るのならまだしも、今回の転校生とは間違いなく初対面だろう。そこに多少の興味はあっても、目の前の少女たちのように興奮は出来ない。

「どうしたのだ？ やけにボーツとしているが」

そんなことを考えていた一夏に声を掛けたのは、今日も今日とてポニーテールを揺らした箒だった。

「ん、箒か。転校生がくるらしいな」

「みたいだな。聞くところだと代表候補生みたいだが」

「そうなのか？」

「詳しくは知らん。鷹月あたりに聞けば分かるんじゃないか？」

「あれ、お前が仲良いのってのほほんさんだろ」

「アイツがそんなこと知ってると思うか？」

「……………」

あの袖がぶかぶかなのほほんとした女の子を思い浮かべて、一夏は苦笑いを漏らした。

確かにあの少女はどこか頭のネジが緩んでいるのではないかと思われるところが多々あるので、そんな情報を知っている可能性は極めて低い。

「というか、未だに箒とのほほんさんが仲良いつて意外なんだが」

「彼女は来年整備科志望らしいからな。私もそうだし、何より機械方面に関しては優秀だぞ、彼女は」

箒の話によれば、普段はあんなふわふわしているのに事機械方面の話や作業になると驚く程スムーズに作業をこなしたりするらしい。何でも友達の代表候補生の専用機のチューニングも一人で請け負っ

ているのだとか。

「というか、その友達というのが簪なんだがな」

「え、そうなのか!？」

そう言われてみれば、放課後二人で一緒にいるところをよく見かけるなど思い返す。

成程あの打鉄式式の調整はのほんさんが行っていたのか。一年生のうちから機体の整備をきちんと行えるということは、既に彼女は二年生以上の技術を要しているということになる。普段の姿からは全く想像できないが、実はすっかりしていたらしい。

「って言っても機体調整なら箒も出来るだろ?」

「まあな。姫無さんのように一から機体を制作するのはまだ無理だが、完成された機体を調整するだけなら造作もない」

「なら俺の白式もたまに見てくれよ」

「構わないが、一夏の白式は武装も一つだけだし基本スペックが高いから微調整だけでいいと思うぞ?」

箒から見れば、一夏はまだまだ白式的能力を十二分に引き出させていない。

近接特化型の武装である雪片式型のせいで他の武装を搭載できず、燃費も悪いのは確かである。が、燃費の面はスラスタの出力調整や回避や移動を最小限に抑えることでいくらかでも向上させることが出来る。武装についてはそもそも一夏に遠距離型の武装を使いこなすことが出来ないのも他のもは必要ない。

そんな状態で調整、と言われても出来ることなど限られている。せいぜい一夏の感覚のとおり微調整するくらいなのだ。

「まあ、俺がこの白式を完全に乗りこなせなきゃ意味ないんだけどな」

「分かっているなら訓練頑張れ。何なら剣道で手合わせしてやろうか?」

待機状態のブレスレットに視線を落として呟く一夏に、そう箒が提案する。

「いや、ありがたいけど遠慮しとくよ。しばらくはISの操作に重点を置いて訓練したいんだ」

一夏にとつても剣道の中学王者との手合わせは願つてもないものだったが、今この時点ではISでの稼働に費やすことが最善だと考えた。今月の末には学年別の個人トーナメントも控えている。専用機を与えられているというのにさっさと負けてしまつては格好がつかない。

優勝は勿論狙っているが、少なくとも準決勝までは残るために今は少しでもISに乗っていたいのだ。

「ふむ。そうだな、専用機持ちが一回戦負けとか恥ずかしいしな」

「うっ……」

「そういえば今のところ一夏つて公式戦まだ勝ち星無しなんじゃないか？」

「ぐはっ……！」

ぐさり。一夏の胸に言葉の刃が突き刺さる。

箒の言う通り、このIS学園に入学してから一夏は公式試合で勝利したことがない。入学して早々のセシリア戦では詰め甘さが露呈し、クラス別対抗の皿式戦は途中で正体不明のISが乱入してきたことにより試合自体を無効にされてしまったのだ。

因みに、ISを使用しない肉体のみでの組手でも姫無や簪に勝てていないのは箒には秘密である。ほぼ互角だというのに勝ち星が得られないのは単純に経験不足なのか。はたまた別の要因があるのか。

「今ので思い出したけどさ。結局、皿式との試合中に乱入してきたあの黒い機体ってなんだったんだ？」

「その点については更識先生と織斑先生が箒口令を敷いただろう。無闇矢鱈に言いふらしていい類の話ではないしな」

「……だな」

腑には落ちないものの、師匠である楯無がこの件は預かるということのだから一夏にそれ以上詮索することは出来なかった。

幸いにして、あの時アリーナにいた生徒の殆どは侵入者ではなく執事服で舞う楯無に視線を奪われていたのでそこまで大きなパニックにはならなかった。

当然ある程度の実力者たちは正体不明の侵入者について各教師た



ちに問いかけたらしいが、明確な答えは返ってこなかった。

「そこはかとなく姉さんが絡んでいるような気もするが、聞いたところではぐらかされるだけだろうしな」

「束さんが？」

「ああ。遠目からだから細部までは見れなかったが、あの黒い機体はおそらく……」

そこまで言いかけて、箒は口を噤んだ。

何かを考え込んでいる様子の箒だったが、一度俯いて顔を上げると、

「いや、なんでもない」

「？　そうか」

箒が何かを言うべきか悩んでいる、というのは一夏も気付いていたが、敢えてそこを問うたりはしない。箒が言うべきではないと判断したことをわざわざ蒸し返すことはない。

そろそろ朝のHRが始まるな、と時計を見ながら一夏が思っている。

「おっはよーおりむー、モッピー」

「おはよう、のほほんさん」

「おはよう本音。あと次にその名前で呼んだらその長い袖同士を結ぶぞ」

基本的にカスタムが自由なIS学園制服の袖部分の長さを、大胆にも三十パーセント程プラスした制服を着用した生徒が二人へと声を掛けた。

布仏本音。通称のほほんさん。

男女を問わずその心を癒すという謎の特殊能力を有する少女である。

「えー？　だってモッピーはモッピーだもんー」

「ようし本音。ちよっとお話をしようか」

箒の剣幕にも臆することなく、そのぼやんとした雰囲気で相殺している。そんな様子に思わず「のほほんさんすげえ」と感嘆する一夏。

見た目はこんなんだが、彼女は更識の家に代々仕える布仏の三女で

あり、簪専属の従者である。本音がそういった活動をしている場面を一度として目の当たりにしたことのない一夏にとっては少々違和感を感じるが、先の箒の話のように実は案外しっかりしているのかもしれない。

「あ、で二人共何の話してたのー?」

未だに呼び名のことと詰り寄る箒をどうどうといなしつつ、本音は一夏へと問いかける。

「ああ。なんか今日転校生が来るらしいからさ。そのことでちよつと」

「なんだその話かー」

一体何の話を想像していたのかは定かでないが、本音の反応は他のクラスメイトの女子たちとは幾分か違うものだった。

「のほほんさんは知ってたのか?」

「うんー。ちよつと前に会長さんから聞いたー」

成程あの人か、と一夏は絶賛片思い中の生徒会長の姿を思い浮かべる。

確かに姫無であればこの程度の情報は知っていても不思議ではない。というか知っていなければおかしいだろう。

「何でもかたり……更識先生の知り合いらしいよー?」

「師匠の?」

本音の言葉に首を傾げる一夏。彼の師匠である楯無の交友関係はどうやら思っていた以上に広いらしい。

まさか代表候補生の知り合いがいるなんて思ってもいなかった。

(……あ。でもセシリアも師匠の事知ってるみたいだったな)

学園生活一日目にセシリアが話していたことを思い出して、ほんとにあの人何者なんだと溜息を吐き出す。

「と、もう時間だ」

気がつけばSHRが始まる数分前になっていた。幾ら何でもこんな朝から出席簿を喰らいたくはない箒と本音はそそくさと自分の席へと戻っていく。一夏も同様に席に座り直し、自身の姉である織斑千冬が教室に入ってくるのを待った。

それから程なくして。

ガラツ、と教室前方のドアが滑らかにスライドした。

扉の先から入ってくるのは、黒のレディーススーツを着たこのクラス  
の担任である織斑千冬。副担任である山田真耶。

その二人の後に続いて、この学園の制服を着用した二人の生徒が  
入ってきた。一人は銀髪と眼帯が目を引く小柄な少女。もう一人は  
金髪と人あたりの良さそうな笑顔が特徴の少女。見覚えのないその  
二人が教室に入ってきた瞬間、周囲の生徒たちがざわつき始める。

「美少女、美少女だ！」

「何あの銀髪！ 綺麗ー！」

「じゅるり」

「げへへへ、たまりませんなあ」

……何やら後半はおっさんがいたような気もするが、一夏はそれ  
意図的に無視して教壇に立つ二人の転校生へと目を向ける。

そのうちの一人と、一夏は既に面識を持っていた。向こうもこちら  
の存在に気付いているのか、一夏のほうへと視線を向けて微笑を浮か  
べている。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。

数年前に出会った、ドイツの少女だ。

「諸君、おはよう。早速で悪いが本日よりこのクラスに配属となった  
転入生を紹介する。二人、順に自己紹介を」

千冬に促され、最初に一步前に出たのはラウラだった。

「ドイツ軍特殊部隊所属、ラウラ・ボーデヴィツヒ。階級は少佐で代表  
候補生も務めている。よろしく頼む」

軍人らしくピンと背筋を伸ばし、手を後ろで組んだ状態でクラスメ  
イトへとそう告げる。その動作は恐ろしくサマになっており、一挙手  
一投足に彼女の軍人としての威厳が見え隠れしている。

のだが、そんな毅然とした動作も彼女の見た目、正確には小柄な身  
長と整った顔立ちによって生徒たちには威厳や貫禄よりも前に可愛  
らしさや愛らしさを覚えたらしく。

「可愛いーッ!!」

「何この生き物！ お持ち帰りいいいいいいッ!!」

「ね、ね！ このウサ耳つけてくれない!?!」

一気にクラスのムードが浮ついたものに変貌した。

まさかの反応に周囲をキョロキョロと見渡して、ラウラは一夏へと視線を向けた。どうやら助け舟を求めているらしい。確かにこれまで軍での生活が長かったラウラにこういった環境は馴染みのないものだろう。女子特有のこういった騒がしさにも免疫がないのが今の彼女の反応で伺える。

とは言え、助けを求められても一夏にはこの騒がしさをどうにかできる力は持っていない。

そういった仕事は一夏の仕事ではなく、教壇に立つ教師の役目である。

「うるさいぞ、黙れ」

途端、これまで口を開いてやいのやいのと騒いでいた生徒が漏れなく全員ピタリとその動きを止めて静まり返った。

ブリュンヒルデ、おそるべし。

「質問等は二人の紹介が済んでからにしろ」

有無を言わせぬ千冬の言葉に、生徒は無言で首を縦に振った。

それを見て、千冬はもう一人の少女へと顔を向ける。それだけで意図を察したのか、一步下がったラウラに代わり、一步前に出て笑顔を浮かべて。

「初めまして、シャルロット・デュノアです。フランスからやってきました。一応代表候補生をやらせてもらっています。それと——」



「ふう、」

朝のSHRが行われているだろう午前八時半。昨日千冬に渡された山積みの書類をなんとか処理し、俺はインスタントのコーヒーを啜っていた。

今頃は一年一組で二人の自己紹介なんかが行われているだろう。

ラウラが転校してくることは一夏には言っていなかったもので、さぞ驚いているに違いない。

因みにラウラとシャルロットとはS H Rが始まる前に既に顔合わせを済ませてある。これでも一応一年生の学年主任を任されている身なので、生徒たちとの関わりはしつかりと確保しておかなくては行けない。とは言っても、ラウラとは何年も前からの知り合いであるし、シャルロットに関しては。

「……会ったのは一年振りくらいか」

再会した時の彼女の反応は、まるで長年引き裂かれていた家族が再会したかのようなものだった。

というか、やけにボディスキンスリップが多かった。フランスはそういったお国柄ではなかった筈なんだが。

断っておくが、俺は決してロリコンではない。いや、確かにシャルロットの立派に成長したバストやヒップには視線が行ってしまったが、それだけだ。そういった感情は一切無い。……俺には、だが。

うん。どうしてだろうな。

何か嫌な予感がしてならないんだが。今すぐにも一組に行かなくてはならない衝動に駆られる。

いやいや。考えすぎだろう俺。流石にそんな場をかき乱すような発言を彼女がするはずない。

根拠のない自信で己を納得させながら、俺は残ったコーヒーを飲み干した。



金髪の少女、シャルロット・デュノアは満面の笑みを浮かべ、さも当然であるかのように言った。

「——更識先生の、未来のお嫁さんです」



## #17 過去と邂逅

「更識先生の、未来のお嫁さんです」

フランスからの転校生、シャルロット・デュノアのこの言葉に、一年一組全員の表情が固まる。皆の耳がきちんと正常に働いていたなら、教壇の前に立つ金髪の少女は確かに言った。未来のお嫁さんだと。

お嫁さん。婚約者、フィアンセ。彼女がしつかりと意味を理解した上でこの発言をしたというのなら、それはつまりそういう意味なのだろう。

未来の、と前につけるあたりかなり先の将来のことまで考えているのかもしれない。それとも学生という身分のうちはそのういった関係にはならないという意味表示だろうか。

満面の笑みを浮かべてそう言うシャルロットの発言に対して、一瞬の沈黙。

そして、教室内を割れんばかりの歓声が埋め尽くした。

「ツキヤー！ 聞いた!? 今の聞いた!?!」

「嫁宣言キター!!」

「更識先生と金髪美少女……じゅるり」

最近オヤジ化してきた一組の少女たちの反応も今回に限っては仕方ないのかもしれない。まさか公衆の面前で嫁宣言するなど思いもしない。教室内が黄色い歓声で満たされてしまうのも無理からぬことだった。

そんな教室の中でしかし、一夏は片肘ついて件の少女をジッと見つめていた。

惚れた、などということでは間違ってもない。彼にはもう何年も片思い中の少女がいるのである。気になるのは、自身の師匠である楯無との関係性だった。

ラウラの場合はどういった経緯で知り合ったのかは一夏も聞いている。しかし、シャルロットという名前はこれまでの楯無との会話で全く出てきたことがなかったのだ。

基本的に自分自身のことは余り話さない楯無だが、必要最低限のこととは教えてくれていた。ラウラのことも、ISのことも。

(俺に言わなかったってことは、必要ないって判断したのか……?)  
一夏にとつて関連性のないことは教えない。そういう風に判断してのことなのだろうか。

疑念というよりは疑問を抱く一夏だったが、なんとはなしに視線を移動させた先にあったものを見て思わず頬がヒクついた。

未だ騒ぎ立てているクラスメイトたちは気づいていないが、箒やセシリア、前に立つラウラも気がついていようだ。

シャルロットのすぐ横に立つ、担任教師の雰囲気は豹変していることに。

より具体的に言うのであれば、一年一組の担任である一夏の姉、織斑千冬の纏う空気がこの世のものとは思えない程にどす黒く染まっていた。

「……………」

さーっと、自分でもハッキリと分かるくらいに血の気が引いていく一夏。

このままでは非常にまずい。何とかしなければ、と一夏は一縷の望みをかけ、幼馴染であり千冬との親交も深かった箒へと視線を向ける。

「……………」

箒も一夏と全く同じ表情をしていた。

多分、彼女も同じ事を考えて一夏へと視線を向けたのだろう。

ばつちり合った眼で、二人はこれまでにないくらいにシンクロする。

—— 箒、助けてくれ。

—— 嫌だ。まだ私は死にたくない。一夏がなんとかしてくれ。

—— 俺にあの修羅をどうにかしろってのか!?

—— たった一人の家族だろう。弟として姉のことをちゃんと

支えろ。

—— 支えるってなんだ!? それ遠まわしに俺に犠牲になれつ



て言っていないか!?

.....

——おいコツチ向けよ。

顔を一夏から背け青空を眺める箒に抗議の視線を向けるも当然のように反応はない。この時点で箒の協力、もしくはサポートは全く期待できなくなってしまった。

箒がダメならば、と一夏はちらりと教室の後方へと視線を向ける。決して首を回したりはせず、人間がギリギリ視界に入れられる範囲でだ。余所見をしていると何が飛んでくるか分かったものではない。

頼むセシリア、この絶望的にヤバイ雰囲気はどうにかしてくれ!との期待を込めて視線を向けた先では。

「.....」

セシリア・オルコットである箒の少女が、自身の縦ロールにくるまって活動休止状態に入っていた。

わー、あの髪の毛ってあんな風にもなるんだーと一夏の現実逃避が加速度的に進行する。

いやいやちよつと待ってくれよ、このままじゃ本当に教室内で惨劇が起こりかねない。冷や汗が滝のように流れる一夏はいよいよ以てして我が身を犠牲にするしか、と最悪の自己犠牲を頭の中で思い描くが、そこでガラツと何の脈絡もなく教室のドアが開いた。

神の天啓かとばかりにドアが開いた先へと顔を向ける一夏。

彼の視線の先、ドアを開いて廊下から顔を出していたのは。

「.....え、何この雰囲気」

IS学園一学年主任、更識楯無その人だった。

一瞬にして、教室の空気が凍りつき。

「いやアンタ今一番来ちゃいけない人だろツ!!」

一夏の全力の咆哮が轟いた。



「で、だ。きちんと話はしてくれるのだろうか?」

「いやあなの？　俺とシャルロットの間にやましいことはなにも……」

「確かに今私とお前の間に関係性はない。付き合っていたのは何年も前のことだ。だがな、あれはお前から言い出したことで、私はそれに納得しただけだ」

昼休み。

学生諸君は食堂で思い思いの食事を楽しんでいるであろう時間、俺は学年主任室で千冬と二人で向き合っていた。応接用にと置かれたソファに腰を下ろして、千冬は先程から腕組みしたまま俺から視線を逸らさない。

今日の朝、何やら不穏な空気を感じてなんとはなしに一組の教室へと足を運んでみれば、そこにはチワワのようにぶるぶる震える一夏たちと満面の笑みを浮かべたシャルロット、そして異形の鬼を背後に具現化させた千冬が居た。

うん、これなんて地獄絵図？　状態である。

呆気にと取られていた俺に次の瞬間襲いかかって来たのは、クラスの女子たちからの質問責めだった。

朝のHRの時間であることも忘れて雪崩込むようにして俺の元へと押し寄せる女子生徒たちの目は、皆一様にやけに輝いていた。

「更識先生！　シャルロットさんと何があつたんですかッ!？」

「まさか教師と生徒の禁断の恋なんですか!？」

「嘘ですよね!？　だって楯無×一夏なんですから!!」

わいわいきゃーきゃーと騒ぎ立てる女子生徒たち。これ以上は他のクラスにも聞こえて迷惑になってしまう可能性が高い。

そう判断して俺は千冬へなんとかしてくれとの意味を込めて視線を向けた。

が。

返ってきたのは温度を全く感じさせない絶対零度の視線だった。

えー、と内心で思わずにはいられない。シャルロットが今しがた何を言ったのか大体の予想はついているが、まさかそんな戯言を真に受けたというわけではないだろうに。

取り敢えずはこの事態を収束させねばなるまい。千冬がああいう状態の今、教師である俺か真耶が動くしかない。本来ならば副担任である真耶に任せればいいのだが、どういうわけか先程から石化したように硬直してしまっていてまったく動く様子がないのだ。

「あー、取り敢えず席につきなさい。それとシャルロット、皆が誤解を招くような発言は控えるように」

「えへへ、すみません」

俺の前にまでやって来ていた生徒たちを自分の席に着かせ、シャルロットへと言いつける。言われた彼女は別段悪びれる様子もなく、少しだけ眉根を下げてそう謝罪した。

こうしてようやく事態が収束へと向かおうとしている所に、しかし新たな火種が投下されることになる。

それは意図したものではなく、恐らくは無意識のうちに溢れてしまった言葉だった。

「あ、お父さんだ」

これまで窓の外へと視線を向けていてこちらの存在に気づいていなかったラウラが、俺を見た途端にそう口走ってしまったのだ。

「……………」

「あ、…………さ、更識先生」

自分でも言葉にしてから気付いたのだろう。見る見るうちに顔を赤くするラウラに、俺は何も言えなかった。

しかし、そんな事はお構いなしに、少女たちは再び瞳を輝かせ始める。

「お、お父さん!?!」

「更識先生いつのまに!?!」

「ていうか誰との子なんですか!!」

「ちよつと待って計算が合わないんだけど!?!」

収束しようとしていた彼女たちの好奇心は、ここで再び爆発するこ  
ととなってしまった。

まさかこんなところで数年前の父性が仇になるとは。というかラウラもラウラで会うたびお父さんとか呼んでるから完全にその呼び

名で定着してしまっているじゃないか。

「静かにしろ」

また教室内が騒がしくなり始めたところで、遂にこのクラスの担任である千冬が動いた。

いや、実際にはたつた一言声を発しただけだったが、それだけで一瞬にして教室内に静寂が訪れる。

腕を組んで瞼を伏せたまま、千冬は続ける。

「今はHR中だ。転入生の自己紹介が終わったのなら、さっさとその口を閉じろ」

ギロリ、と擬音が聞こえてきそうな程に迫力のある眼光が俺と教室中の生徒たちへと向けられる。え、何で俺まで。

「デュノアとボーデヴィツヒは割り振られた席へ付け。必要事項だけ伝えたら、一時限目の授業に移る」

言われてそそくさと席へ向かう転校生二人組を横目に見ながら、俺はこの機に乗じてこの場を退散することにする。これ以上この場に留まっていたは授業の邪魔にしかならないだろうし、何よりも自身の安全を確保したいのである。誰だって命は惜しい。

しかし。

「……それと更識先生」

それを千冬は許してはくれなかった。

「昼休みに少し話したいことがあるんだが」

有無を言わせぬ眼光。

これ人殺せるんじゃないかと思わせるほどのソレを向けられては、俺も首を横に振ることは出来なかった。

そういう訳で現在。俺と千冬はこうして顔を付き合わせているわけなのであった。

昼食をまだ済ませていない俺は先程購買で入手したおにぎりをテーブルの上に置いて、正面に座る千冬へと顔を向ける。

腕組みをしたまま微動だにしない彼女の姿からは、言外に『洗い浚い話せ、全てだ』と某第一位の言葉を借りて語っているようにも見える。

正直シャルロットの事を黙っていたことに多少の罪悪感を感じている俺だが、これにはきちんとした理由があるのだ。話さなかったのではなく、話せなかった。

口外することの出来ない事情があったのだ。それを、今から話すことにしよう。こうしてシャルロットがIS学園に来た以上、もう隠す意味もない。

「シャルロットとの事を黙っていたのは悪かった。話せない理由ってのがあったんだよ」

おにぎりの封を開けながら、俺は口を開く。

「……その事情と言うのは、IS学園の教師であっても話せないことだったのか？」

「ああ」

千冬の質問に、俺は間髪入れずに答える。

その返答に多少の気が削がれたのか、千冬から威圧的な雰囲気は霧散した。

「……それをこの場で言うということは、事情とやらを話してくれるんだろな」

「当然だ。千冬にまで黙っていたのは悪かったと思っているし、何よりもシャルロットがこうしてこの学園に来れた時点で話はもう終わってる」

「？ どういうことだ」

言葉の意味が上手く飲み込めなかったのだろう。千冬が訝しげに眉を顰める。

確かに今の俺の言葉だけで全てを理解することは難しいだろう。というかほぼ不可能だ。

一つ目のおにぎりを胃袋に収めてから、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

俺とシャルロットが、どうやって出会ったのかを。

「——事の起こりは、今から五年前。第一回モンド・グロツソが行われる前年だ」



五年前。俺がまだ二十を迎える前の話だ。

IS学園を卒業して更識の当主として日々を過ごしていた俺の元に、一通の手紙が届いた。

それは知り合いからのものではなく、日本政府からというなんともきな臭いものだ。内容は詳しいことは記載されておらず、ただ指定された日時に成田空港まで来てくれという理不尽なものだった。

気に食わなければ見なかったことにすることも出来たが、流石にそこまでのことでもない空港に足を運んでみれば、そこに居たのは見たことのないような黒服の大柄なエージェントと白髪混じりの壮年の男性。何処かで見たとのことのあるような顔だな、と思っていたところで、向こうからこちらへと近づいてきた。

「初めまして、更識楯無殿。この度は無礼な方法で呼び出して済まなかったね。私は防衛省の樹という」

差し出された多く皺が刻まれたその手を、俺は握り返す。

「初めまして。更識楯無です」

自己紹介を受けて、目の前の人物が防衛省の役人だったことを思い出す。確か何度もテレビに出ていた、どんな内容だったかまでは覚えていないが。

「それで？ 手紙には書かれていませんでしたが、ご用件は？」

「うむ。それなんだが、少し場所を変えよう」

その言葉に、俺は疑問を抱く。

それはつまり、こんな人が雑多なロビーでするような話ではないということなのだろうか。そもそも、防衛省役人である人間がわざわざこんな所にまで出向いてくること自体がよくよく思えばおかしい話である。

「そうだな、その喫茶店にでも入ろう」

彼が指を指した先にあったのは、一軒の喫茶店だ。空港内にあるにも関わらず、どういう訳か人が極端に少ないその店に、俺を含めた三人は入っていく。

店内にやはり他の客はおらず、店員に誘導されるがままに四人がけ

のテーブル席に着いた。

俺はブレンドを、他の二人はブラックをそれぞれ頼み、しばし沈黙が流れる。

少しして、注文の品がテーブルに置かれた。

そのことを皮切りにして、俺はこれまで閉じていた口を開く。

「……で、俺をこんなところに呼び出したのは、一体どんな理由があるんです?」

その問いに、樹は一口コーヒーを含んでから。

「この件はまだ公にはなっていないことなのだがね、発見されたそう  
だ」

「発見?」

「三人目、と言えれば解るだろう?」

その言葉に、僅かに目を見開く。

三人目、この言葉の意味するところが理解できないほど俺は馬鹿ではない。

「……男性ながらに、IS適性を持つ人間ですか」

「いかにもそうだ」

「どうして、それを俺に?」

「君の父上とは私も面識があつてね。君のことも聞いていたんだ。……単刀直入に言えば、君に面会したいと言ってきているんだよ」

誰が、とは聞かなかつた。分かりきっているからだ。話の流れからすれば、それは間違いなく。

「三人目が、ですか」

「そうだ。急で済まないが、フランススへ行つて欲しい。勿論費用はこ  
ちらが全額負担するし、日程の都合もそちらに合わせる」

それはまた随分と急な話だ、と思った。口には出さなかつたが。

「織村のほうには?」

「いや、彼には話していない。彼はアメリカに居るしね」

ふむ。つまりは三人目が同じIS適性を持つ人間に会いたいと言つてきたために俺に白羽の矢が立ったという訳か。まあ織村はアメリカで遠いし、何よりナタルが離れないだろう。

それに比べて俺はこの通り日本にいるし、こうした政府との繋がりもあって接触しやすかった為に呼び出された。全く以てして勝手な話だが、俺もその三人目とやらには少し興味がある。原作では存在しなかった三人目が発見されたというのだ、どういう人物なのか知りたいと思うのも仕方ない事だ。

「……いいですよ。引き受けます」

「そうか！ いやありがとう！ 私としても君に行ってもらえるなら安心だよ！」

「それで、何処に向かえばいいんです？」

コーヒを飲み干してカップを置いた俺の質問に、樹は答えた。

「場所はフランス。デュノア社という企業は知っているかな？」

「——え？」



そういった経緯でやって来たフランス、デュノア社。

いやいやまさかね、と内心でばやく俺だったが、ついさつき聞かされた名を聞いて俺の予想が的中していたと確信してしまった。

彼、三人目の名前はシャルル・デュノアというらしいのだ。

……いやいや。いやいやいや。

一体全体何がどうなればこんな事になってしまうのか。

原作崩壊という訳ではないが、時間軸がめちゃくちゃである。とは言え、全くの突然かと言われればそうでもないのだろう。原作では一夏の出現に合わせるように二人目が現れたわけだが、今回は俺や織村に続くように三人目が現れたというだけの話で。それが本当に男なのかはまた別の話であるが。

黒人のやけにガタイの良い護衛を後ろに付けて、俺はデュノア社の敷地内へと入っていく。来客用のゲートを抜けて、大きな吹き抜けのエントランスへと入る。ISの世界シェア第三位となるラファール・リヴァイヴを発表する企業だけあって、やはりその本社も豪華な造りになっていた。白を基調としたタイルが壁面に貼られ、円形の建物は



三十もの階層に分けられている。

受付へと向かうと、そこには既に一人の男が待っていた。

他の社員たちとは明らかに違う高級そうなスーツを纏い、柔和な笑顔を浮かべてこちらを見てくる男性。

「初めまして、ようこそデュノア社へ。私が社長のシャーロック・デュノアです」

社員数千を超えるデュノア社の社長が自らお出迎えとは、とんだVIP待遇である。

「初めまして。更識楯無です」

「いやはや、かの有名な黒執事に直接お会いできるとは光栄です」

笑みを絶やさなのまま、シャーロックは俺の手を握る。

その笑みに、一見どこにも違和感を感じない笑みに、俺はピクリと蟀谷が動く。

(コイツ、笑ってないな)

握手をしたまま、俺はシャーロックを見る。彼の瞳は、全く笑っていないかった。

この時点で、俺はなにやら不穏な空気を感じ始めていた。何を企んでいるのかまでは定かではないが、碌でもないことを考えていても不思議ではなさそうさ。

「ささ、こちらへどうぞ。息子が最上階で貴方を待っています」

言われるままにエレベーターへと乗り込み、最上階へと向かう。

全く浮遊感を感じさせないエレベーターに内心で少し関心していると、小気味の良い音と共に扉が開いた。

この階に社員の立ち入りは禁じられているのか、他の人間の姿はない。床一面に敷かれた高級そうなカーペットの上を歩き、一つのドアの前でシャーロックは立ち止まった。

どうやら、面会場所はこの部屋みたいだ。

社長自らそのドアを開き、促されるままに室内へと足を踏み入れる。

普段は重役会議にでも使用されているのか、内部にはコの字型の長机が設置されており、その一角に、一人の子供の姿があった。

俺が入ってきたことで立ち上がったその子供は、外見に見合わない見事な作法で俺に頭を下げる。

「は、初めまして」

肩まで伸びた絹のように滑らかな金髪。男子にしては声が高いと感じるのは、まだ声変わりをしていないからなのだろうか。着用しているグレーのスーツも着こなしているというよりはまだ着られていくという印象を受けてしまうのも無理はないことだ。まだ十歳にも満たない子供なのだから。

緊張した面持ちで俺を見るその少年は、たどたどしくも自己紹介を述べる。

「シャルル・デュノアです」

「更識楯無だ。よろしくな、デュノア君」

それが後のシャルロット・デュノアとの、初めての邂逅だった。

## #18 錯綜と陰謀

昼休みの食堂。

午前中の授業を乗り越えて訪れるこの時間の生徒たちは基本的に賑やかだ。凝り固まった頭をほぐす為にも友人同士で他愛もない話を語り合ったり、好きな食事を摂ることで心身共にリラクセスしたり。女三人寄れば姦しいとはよく言うが、喧しいというよりは賑やかで、この学園の生徒の大半が収容できる大きな食堂は彼女たちの声で埋め尽くされる。

そんな食堂のスペースの一角に、トレイを持っていた一夏は腰を下ろした。

六人がけのテーブルには既に箒たちが着いており、一夏の到着を待たずして食事を開始している。

「箒。幼馴染の到着を待ってやろうという優しさは無かったのか」

「無いな。そんなことしていたらうどんが伸びてしまうだろう」

「鈴。お前もだ」

「バカね。麺が伸びちゃうでしようが」

何この幼馴染たち、酷い。一夏は内心でそう慄き、遠い目をしながら席に着いた。因みにメニューは特製カツ丼大盛である。

普段はこうして大勢で食事を摂ることは少ないのだが、今日は転校生が二人居るということで他クラスの鈴まで混ぜての昼食だ。先の言葉からも分かるように箒と鈴は麺類を、セシリアはハンバーグ定食を頼んでいる。今日が初食堂となるシャルロットは前々から興味のあつた日本食をということで和食セット、ラウラは脇目も振らずにお子様ランチを注文した。

「簪も来れば良かったのにな」

揚げたてのカツとトロリとした卵の絶妙な組み合わせを堪能しつつ、一夏がそう言った。

本当ならシャルロットたちと同じ代表候補生である簪も誘ったのだが、生憎用事があるということで断られてしまった。なんでも生徒

会でする仕事があるらしい。

「仕方ないだろう。姫無さんから呼び出されているのなら断るわけにもいかないだろうし」

「だなー。あの人断ると何してくるか分からないし」

主にチョツカイをかけてくるという点で。

「ま、簪のことは追々紹介するとして、どうだ？　IS学園は」

一夏の正面で味噌汁を啜っていたシャルロットに尋ねる。

「あ、うん。皆優しいし、良い人たちばかりだね」

ニツコリと微笑む彼女のその笑みは、思春期の男子たちが見れば勘違いしてしまいそうなほどのものだった。無論、一夏には想い人がいるので以下略。何処かの世界線の鈍感王一夏は死んだのだ。

「そんなことよりさ、朝の事聞きたいんだけど。アタシだけクラス違うからよく知らないのよね」

箸をくるくると回しながら鈴がニヤリと口角を吊り上げる。

一人だけクラスが違うために今朝の一連の騒動の詳細を知らない彼女は、シャルロットの大胆発言のことを人伝にしか聞いていなかったのだ。

とは言っても、一組の面々もそれ以上のことを知っているわけではない。休み時間の度にクラスの女子たちがシャルロットへと雪崩のように押しかけて詳細を聞こうとしていたが、彼女はそれをのらりくらりと躲して話していなかったのだ。

それでも一夏たちの昼食の誘いに乗ったということは、少なくともここに居る面子には話す意思があるのだろうか。

「ああ、俺もそれをデュノアさんに聞こうと思ってたんだ」

「シャルでいいよ。僕も一夏って呼ぶから」

「そうか、じゃあシャル。師匠のお嫁さんってどういうことなんだ？」  
さらりと名前呼びを行ったシャルロットに、セシリアと鈴の両名は戦慄を覚える。出会ってたった一日でそこまで親密度を上げるとは、かなり高い社交性の持ち主である。

彼女の狙いが一夏でなくて良かったと心の底から安堵しつつ、二人はシャルロットの話に耳を傾ける。

「あ、そうか。でも一夏、その前に聞きたいんだけど、あの人から僕のこと何も聞いてないの？」

「全く。今日こうして会うまで存在すら知らなかったぜ」

「むう……。そっか、言ってくれてないんだ」

一夏の言葉を受けて、少し頬を膨らませるシャル。

彼女の内心を知る由もない一夏だったが、その表情だけで分かったこともある。

——ああ師匠。またやらかしたんだなあ。

お前にだけは言われたくねえよ!! という男性IS操縦者の声が何処かから聞こえたような気もしたが、今はそんなことよりもシャルの話を聞くことの方が大事である。故に聞こえなかったことにして、一夏は彼女に続きを促す。

「そうだね。何処から話せばいいのかな——」

そう口火を切って、シャルロットは己の過去を話し始める。

更識楯無という人間にどのようなようにして出会い、そして、惹かれていったのかを。



シャルロット・デユノア。

彼女が自身の生活が貧しいものであることを認識したのはまだ幼かった頃だった。住んでいる家もボロボロで、毎日の食事も一般家庭に比べれば随分と粗末なもの。それを不幸とは思っていないかった彼女だったが、彼女の母はそうではなかったのだろう。時折シャルロットに隠れて泣いている姿を、扉の向こうから何度も目撃した。

シャルロットには父親がいない。

どうして父親がいないのか、と以前母親に聞いたことがある。母は言った、もう死んでしまっているのと。

その答えに何の疑問も抱くことなく数年を過ごし、そして突然、母は倒れた。

過労だと診察した医者と言った。

本来であれば直ぐにでも大きな病院に入院して療養するべきだとも。

だが、そんな費用ある筈もない。

これまでの生活でそんなお金がないことをシャルロットは理解していた。日に日に弱っていく母を、シャルロットは黙って見ていることしか出来なかったのだ。

当然働いた。十歳にも満たない子供を雇う所など当然ありはしない。だから、お金になる鉱石を裏の山で朝から晩まで探した。毎日泥だらけになりながら、その日受け取った僅かばかりの小銭を握りしめて家へと帰るのがシャルロットの日課になっていった。

そうして月日が流れたある日。

母は、固いベッドの上で静かに息を引き取った。

「——シャルロット・デュノアちゃん、だね」

「……誰？」

母が亡くなって数日。すっかり塞ぎ込んでしまっていたシャルロットを訪ねてきたのは、恰幅の良い男性だった。身に付けたアクセサリーからも彼が上流階級の間人であることが伺える。シャルロットにそんな身分の知り合いはいない。泣き腫らした目を向けられて、男は困ったように頭を掻いた。

「そうか。まだ小さかったから覚えていないのも無理はない。私はね、君のお父さんの秘書をしているパーシーという者だ。昔何度か会ったことがあるんだよ」

お父さんの秘書。パーシーと名乗った男の言葉のその部分に、シャルロットは大きく反応した。

父さん？ 自分の？ お父さんが居る？

死んでしまったと聞かされていた父が生きているということにも驚いたが、その父の秘書がどうしてこんな所にまでやってきたのかか彼女には分からなかった。

「エリーのごことは聞いたよ。……残念だったね」

エリーは死んだ母の名前だ。

被っていた帽子を取って胸の前に下げ、頭を下げる。そんなパーシーをじっと見つめて、シャルロットは口を開く。

「……私に、何の用ですか」

「おお。そうだったね、今日は君にとって良い報せを持ってきたんだよ」

「報せ……？」

手紙ではなく、わざわざこうして直接足を運んで来るほどの報せということなのだろう。

未だに警戒を解かず訝るシャルロットへ、パーシーはにこやかに微笑んで言った。

「今日から君は、お父さんと暮らすんだ」



「……成程な」

「納得したか？」

学年主任室で二人、シャルロットとのあれこれを話し終えた俺は、眼前で腕を組んだまま話を聞いていた千冬へと声を掛けた。

シャルロットのあの発言は事故みたいなものだ。そういつた感情があるわけではないだろう。おそらく、俺の言ったあの言葉を正直に受け止めて行動してしまっただけだ。彼女はかなり純粋だから、きっとそうに違いない。

「……楯無。そこはかたなくお前が何かとてつもない勘違いをしているような気がするんだが」

「うん？」

勘違い？ 今までの俺のどこに勘違いをするような要素があるというのだろうか。

「まあ、それはいい。大体の事情は把握した。デュノアがお前に固執する理由もな。しかしこの学園ではお前は教師で彼女は生徒だ。間違っても手を出したりするなよ」

「オイオイ、俺は教師だぞ？ そんなことするわけないだろうが」  
「(どちらかと言うと向こうが進んで出してきそうなんだがな)」

何やら小言をぼそぼそと溢す千冬。何を言っているのかはここからでは聞き取れないが、そこまで気にしなくて大丈夫だろう。というか気にしてはいけない気がする。

さてと、昔話をしていたら思ったよりも時間が経ってしまった。時計を見れば昼休みもあと五分ほどで終わってしまう。

「そろそろ職員室に行った方がいいんじゃないか？ 次の時間は実習だろ？」

「む、もうこんな時間か。そうだな、訓練機の運び出しは真耶がしてくれていたから着替えと資料を取りにいかねば」

顎に指を当てて考え事をしていた千冬も時計を見て我に返る。流石に実習をスーツ姿で行うわけにもいかないのが千冬も着替えなくてはならない。俺も時間さえあれば授業を見学しに行きたいところだが、生憎とこの時間はタッグマッチトーナメントの資料作成を行わなくてはいけないのでそんな時間はなさそうである。

学年主任室に一つだけ置かれたデスクの上の膨大な資料を横目に、俺は溜息を吐き出した。

「溜息ばかりついてても埒があかないな。やるか」

自らを鼓舞しつつ、タッグマッチトーナメントの資料作成に取り掛かった。



シャルロット・デュノアが初めて父を名乗る男性と顔を合わせたのは、ISの開発、性能においてフランス国内で最大手であるデュノア社の社長室だった。

これまでもこの会社の名前は何度も耳にしてきたが、同じ名前を持つ会社として親近感も少なからず感じていた企業の社長がまさか自身の父親だったなどと、俄かには信じられなかった。

緊張からか上手く言葉が出てこないシャルロットに対して、高級そ



うな革張りの椅子に腰を下ろしていた男性は、感情の籠っていないかのような平たい声で言った。

「……お前がエリーの娘か。大きくなったな」

椅子から立ち上がり、シャルロットの前まで歩を進める社長、シャーロックは彼女の目の前にまでやって来て。

「お前にはこれからこの会社の寮で生活してもらう。先程の適性検査の結果が出た。幸いなことにお前はIS操縦の才能があるようだ。これからは候補生を目指し、日々精進しろ」

「え、え……？」

「必要事項は以上だ」

そう言うと、シャーロックは再び椅子へと戻っていった。横に控えていた部下らしき女性が紙媒体の資料を手渡して何やら話をしている。この場にいるシャルロットのことなど、まるでいないかのように。

その事にゾツとしないものを感じながら、シャルロットは社長室を後にした。ドアを閉め、廊下で小さく息を吐き出す。

あれが、あの人が、自身の父親。まるで実感が湧いてこないが、こうして住むところまで用意してくれるところを見ると他人ではないのだろう。いきなりの出来事にまだ上手く脳が処理できていないが、それでもシャルロットは少しだけ嬉しかった。

母の愛した人がちゃんと生きていて、こうして自分を引き取ってくれたのだから。

確かに今まで連絡のひとつも寄越してこなかったというのは問題だし何より母の葬儀に顔すら見せなかったのは許せないが、それでも心の何処かで父親の存在を喜んでいいる部分があった。

——良かった。自分はまだ、天涯孤独ではなかった。

家族がいることの嬉しさが、シャルロットの心をじんわりと暖めていった。

先を歩く秘書のパーシーの後をついて歩いていくと、やがて宿舎のような建物の前へとやって来た。今しがた父と話をしていた社長室のある建物の横に建てられたこの宿舎は、秘書の説明によるとIS操

縦の技術を学ぶための機関であるらしい。この宿舎には八人の少女たちが住んでおり、毎日朝から夜まで操縦技術を磨いているのだという。

「ここが今日から君の家だ。他の子たちとも仲良くするんだよ」

そう言つて、パーシーは宿舎のドアを開く。

内部は至つて普通のアパートのようなどころだった。ドアから廊下が一直線に伸びており、それに沿うように幾つもの扉がある。それらが少女たちに宛てがわれている私室なのだろう。廊下の奥にあるのは食堂だろうか、スライド式のガラスの向こうには大きな長机が設置されていた。

今日からここが、シャルロットにとつての家となる。

期待と不安を綱交ぜにしながら、シャルロットはその一步を踏み出した。



「彼が我社専属パイロットのシャルルです。つい先日の適性検査で発覚しましてね、公式発表はまだですが、近々全世界に発表しようとして討しています」

「……そうですか、彼がね」

俺の目の前に立つ少年は、男というには少しばかり細身な印象を受けた。髪質も絹のように滑らかで、肌も白くきめ細かい。

聞けばまだ十歳を迎えたばかりだというから成長期もまだのようで、一見ただけでは性別の判断は難しかった。こうして説明されなければ、区別がつかない程度には。

「さあシャルル。更識さんに挨拶をしなさい」

「は、はい。初めまして、シャルル・デュノアといいます。よろしくお願ひします」

「ああ、よろしくな。シャルル君」

俺が差し出した手を、彼はおぼおぼと握り返した。小さく、柔らかな手の感触が伝わる。

いや、まあ。

今こうして目の前にいる子が男ではなく実は女である、ということ  
は名前を聞いた時点で確信している。

シャルル・デュノアというのは偽名で、俺の記憶が正しければ本名  
はシャルロット。デュノアという筈だ。もしかしたら原作から乖離  
して本当に男なのではないかとも考えたが、こうして接触してみると  
解る。明らかに男の反応ではない。骨格も男性には程遠く、正に女性  
のそれだ。

本来であれば彼女が男装をしてまでIS学園にやって来るのはま  
だまだ先の話だが、それも大凡の見当はついている。俺や織村の出現  
と、モンド・グロツソへ開催に合わせてのことだろう。来年開催の第  
一回大会には間に合わないかもしれないが、第二回には間に合うかも  
しれない。俺や織村と同様に専用機を纏って出場出来れば、それだけ  
でデュノア社の名前は世界的なビッグネームになる。

男性IS操縦者という肩書きは、それ程までに大きなものになっ  
ているのだ。

「さて、では更識さん。こちらの部屋へどうぞ。男性IS操縦者の先  
達として色々とお話を伺いたいです」

俺とシャルとの対面を済ませたのを見計らって、シャーロックがそ  
う切り出した。

その話にはシャルは必要ないのか、との意味を込めてちらりとそちら  
に視線を向けた。

「ああ、シャルはもう戻っていいぞ。また明日から忙しくなる、今日  
はもう戻って休みなさい」

「……はい」

言われ、部屋を出て行くシャル。その背中を見つつ、俺はシャー  
ロックの後をついて行つた。俺の後を追うように、俺の護衛と秘書の  
男が歩いていく。

移動の最中、俺は半歩先を歩くシャーロックへと話しかけた。

「……今の彼、息子さんですか？」

「……………」

俺の問いに、彼からの返事はない。いや、返答に窮しているのだろうか。何かを話そうと呼吸を整えているのが息遣いから察することができた。

彼が答えに詰まるだろうことは、前もって予想できたことだった。何故なら、事前に彼と会社の周囲を調べたからだ。とは言っても情報を集めたのは俺ではなく従者である里虹なんだが。

彼女の掴んだ情報によれば、シャールロックには息子はいない。

彼と妻との間には、たった一人の娘が居るのみである。

その娘の名は——シャーリー・デュノア。

そう。居るのだ、このデュノア社に。

シャルロットの他にも、彼の娘が。

## #19 遭遇とパートナー

フランス国内でIS研究、開発の最大手であるデュノア社。この大企業を束ねる社長、シャーロック・デュノアには妻との間に授かった一人娘がいる。

その名をシャーリー・デュノア。母の遺伝子が色濃く出たのか、髪は金というよりはオレンジに近く、背中まで伸ばしたストレートヘアが特徴の少女だ。年齢は一夏と同じ。つまりシャルロットとも同じである。

俺が初めて彼女の存在を知ったのは里虹からデュノア社についての調査報告を受けたときだった。社長であるシャーロックには妻がいて、シャルロットが妾の子であるということは前世から所有する原作の知識で知っていたが、その娘のことまでは原作にも書かれていなかった。

別に娘がいたとしても何ら不思議ではない。そもそも正式な相手は今の妻であるのだから。

俺の半歩先を歩くシャーロックは、未だ何の返答もしてはこない。彼の娘ならば、シャーリーもこの企業専属のテストパイロットなどに就いているのだろうかとも思ったが、里虹の調べによればどうやらそうではないらしい。ISの適正值が基準値に達していないのか、はたまた別の理由があるのかは俺の知るところではないが、こうしてシャルロットを男性IS操縦者に仕立て上げようとしているあたりどうもその辺りも調べる必要がありそうだ。

「……彼は、」

と、そこまで考えていた俺の耳に、社長の声が届いた。歩くペースは変えないままに、口を開く。

「私の親戚の子だね。今はここに住まわせているんですよ」

いつの間にか廊下一面に敷かれていたカーペットは姿を消し、艶やかな白いタイルが床に敷き詰められていた。その廊下をコツコツと歩きながら、俺は顔は動かさず、窓から見えるとある建物へと視線を

移す。

そこにあつたのは、宿舎のような二階建ての建造物だった。

「シャーロックさん。あれは？」

「ああ。あれはうちの専属パイロットたちが住んでいる寮です」

「ではシャルル君もあそこに？」

「……いや、流石にあの子をあそこに入れるわけにはいかないのね。何せ周りは女の子ばかりで。彼にはこの会社で寝泊りしてもらっているんですよ」

シャーロックの後ろを歩く俺からでは、彼がどんな表情をしているのか伺い知ることには出来ない。

彼がどんな理由からシャルロットを男として扱おうとしているのかは今のところ不鮮明だが、表沙汰になれば只では済まないということとは理解している筈だ。

「さ、こちらの部屋です。今御茶を出させますので掛けてお待ちください」

通された部屋へと入り、革張りのソファに腰を下ろす。高級ホテルのスウィートルームのような豪華さを見せるこの部屋は、企業の重役たちを接待するために使われる部屋なのだろう。メイドのような傍付きまで控えさせている辺り、かなり強く俺とのパイプを作ろうと望んでいるようだ。

さてと。折角こうして社長自ら会話をする機会を作ってくれたのだから、この際色々と聞かせてもらおう。

あくまで間接的に。相手にそうであると悟られぬように。こちらの知りたい情報を聞き出す。相手はそのことを喋ったなどと自覚すら持たせないように視線で、舌で、会話を誘導する。姫無に手放して賞賛されるほどの俺の話術を、この場でお見せすることにしよう。



少女は一人、簡素な自室でベッドに横たわり天井を見上げていた。年頃の子供の部屋とは思えない程に物の少ないこの部屋は、自身を男

を偽ることになった際に宛てがわれた私室だ。デュノア社の最上階。会社の人間の中でも限られたごく少数の人間しか入ることを許されないフロアの一角に、少女の部屋は用意された。この最上階にあるのはこの私室を除けば社長室と秘書室、そして接待室だけだ。今頃はあの世界初の男性IS操縦者と社長である父が話をしていることだろう。

「……はあ。なんでこんなことになっちゃったのかな」

手の甲を額に当てて、溜息と共にそんな言葉が少女の口から漏れた。父から男として生きるように言われて約一ヶ月。今までの生活は一変し、息苦しい生活が続いていた。これまではデュノア社専属の操縦者たちが暮らす寮に住んでいたが、男として生きることを命ぜられてからはこうして誰の目にも付かないよう部屋を変えられた。当然寮に住んでいる他の操縦者たちはシャルロットが女であることを知っているが、社長が自ら口止めをしているためにその情報が外部に漏れることはない。もしも口を滑らせるようなことがあれば、その先は推して測るべしだ。

基本的にデュノア社に勤める人間たちはシャルロットのことはシャルルだと認識している。考えてみれば当然の話で、企業の間人間全員がこんなことに加担しているわけではないのだ。シャルロットが性別を偽っているというのを知っているのはデュノア社上層部のほんの一部。それこそ社長とその秘書、側近くらいのものだ。残りの大多数の何も知らない社員たちは自分たちの会社に専属の男性IS操縦者がいるというくらいにしか考えていない。現在の複雑な世界情勢を知っていれば男性IS操縦者の出現を怪訝に思う人間もいるのだろうが、残念ながらフランス国内はまだしも世界各国の情勢に精通している人間はこのデュノア社内には居なかった。

……社長であるシャーロットと、その秘書を除いて。

はあ、と再び憂鬱な溜息がシャルロットの口から漏れる。

自分はどうしてこんなことをしているのだろうか、と誤ってしまふ。分かっている、分かっているのだ。全てはデュノア社が世界で確固たる地位を築き上げるため、デュノア社員たちのためだ。そう

自身の肩を掴んで語る父の瞳は真剣そのものだったのだから。

母を失った自身を拾ってくれた恩義も感じているのだろう、そう言われてしまったのはシャルロットに拒否するという選択はなかった。

世界で三人目となる男性のＩＳ操縦者。いずれはそういう肩書きがシャルロットについて回ることになるだろう。世界中にこのことを発表してしまえば、もうこれまでの日常に戻ることは完全にできなくなる。そうなってしまうえば、自分は――。

「っ、何を考えているんだ。私は、もうこうして生きていくって決めたじゃないか」

自身の内心に葛藤が生まれていることを自覚して、シャルロットはきつく瞼を閉じる。

何を今更迷っているのか。戻れる道なんて、とつくの昔に無くなってしまっているというのに。未練がましいにも程がある。母はいない、でも父がいる。世界でただ一人だけのシャルロットの家族だ。その人がそれを望むなら、望むがままに。居場所を作ってくれた父に付いていく。そう決めたのだから。

いつのまにか握りしめていたシーツは皺がついてくしゃくしゃになっってしまった。

と、そんなシャルロットに耳に、扉をノックする軽い音が聞こえてきた。父だろうか、と考えたシャルロットだったが夕食までは時間があるし、第一この部屋には彼は滅多にこない。秘書かその傍付に全てを任せているからだ。では、今扉の向こうに居るのは一体誰なのか。ゆっくりと身体を起こして、簡単に身なりを正して扉へと向かう。

「はい。どなたでしょうか」

ガチャリと、何の警戒も抱くことなく扉を開いたシャルロットの目先に立っていたのは、この会社の人間ではなかった。十歳を迎えたばかりのシャルロットよりも遥かに高い身長に、ヨーロッパではあまり見られない癖のない黒の髪。全身を黒で染めたその人間は、先程シャルロットが初めて対面した男性だった。

出てきたシャルロットが驚いていることを感じ取ったのか、男は柔和な笑みを浮かべて。



「やあ、シャルル君。少し時間はあるかい？」

世界初の男性IS操縦者、更識楯無はシャルロットを前に言ったのだった。



昼休みを終えて午後一番の授業は、どうやったって睡魔との戦いになる。そう一夏は片肘を付きながら思った。一昔前の電話帳程もある分厚さの参考書を机の上に開いてはいるものの、その内容は驚く程頭に入ってこない。現在教壇には副担任である真耶が教本を片手にISの機動力の説明を行っているところだが、如何せん睡魔という魔物と格闘中である一夏にその話は眠気を助長させるものでしかなかった。うつらうつらとし出す自身に活を入れるべく、一夏は己の太ももを力の限り全力で抓る。

「……………」

力を入れすぎて涙目になってしまったが、これで当面睡魔に苛まれることは無さそうだ。只でさえ周りは成績優秀者ばかりだというのに、これ以上おいてけぼりにされるわけにはいかない。

ふと周囲を視線だけ動かして見てみれば、皆真面目に真耶の話を聞いている。あ、いや、教室後方に座るクラスのマスコット担当布仏本音だけは綺麗な鼻ちようちんを膨らませていた。参考書を立てて教師から見えないようにする辺り完全に睡眠モードに入っているらしい。

くそう、と内心で一夏は思う。それは本音の成績を思い返してのものだった。今のように寝ていることが多い彼女だが、成績が悪いわけではない。どころか、学年でもトップクラスの成績を叩きだしているのである。特にISの整備面では学園の教師をも上回る知識量である。本音曰く『授業でやることはかたりんと会長、お姉ちゃんにもう教えてもらった』らしい。確かに周りにいるのがあの面子では、そう言われても納得できてしまう。

授業内容はページを一枚進み、機動性向上に必要な装備の内容へと

入っていく。一夏も参考書を捲り真耶の話に耳を傾けていたが、そこで唐突に教室前方の扉が開いた。そこから入ってきたのは、授業開始前から用事で外していたという千冬。脇には何やら印刷したらしい紙を抱えている。

「済まない山田先生。少し遅くなった」

「いえ、全然大丈夫ですよ。皆さんきちんと授業を受けてくれていましたし」

抱えていた書類を教卓に置き、真耶へと労いの声を掛ける。その言葉にこやかに返して、真耶は教壇を降りていった。まだ授業中であるというのにこれから何が始まるのか。自然に教壇に立つ千冬へと生徒たちの視線が集まる。そんな視線を受けて、千冬は咳払いをしてから切り出した。

「諸君。遅れて済まなかった、ここで一旦授業を中断して連絡事項を伝える。今から配布するプリントに目を通せ」

てきぱきとプリントを後ろの席の生徒へと回して、一夏は受け取ったプリントに視線を落とした。上段には今月末に行われる学年別個人トーナメントの文字。

「今配布したプリントを見れば分かると思うが、今月末のトーナメントについての詳細だ。ここにも記載してあるように、今年度はより実践的な模擬戦闘を行うために二人組での参加を必須とする。ただし、当日までにペアが組めなかった者は抽選でペアを選択することとなる。ペア申請の受付はトーナメントの三日前までだ」

記載されている情報をすらすらと読み上げていく千冬の声聞きながら、一夏はふむと顎に指を添えた。

「なお本来ならば専用機を所有する者は他の生徒たちとは別でトーナメントを作成する予定だったが、実践的な模擬戦闘を一般生徒たちにも経験させるという目的から同一のトーナメントに組み込むこととなった。だが専用機持ち同士のペアは禁止だ」

言われて、セシリアが傍目にもわかるようにがっくりと肩を落とした。

代表候補生では無いが専用機を持つ一夏。この時点で簪やラウラ

と組むということとは出来なくなってしまうた。この二人であればそれなりに付き合いもあるのでコンビネーションに問題はないと思っただが。となればあとは箒や本音などが候補に上がるが、本音の場合はそれこそ簪とペアを組むことになるだろう。主従の関係にあるのだし、付き合いも一夏より長い。学年別でなければ虚と組むことも考えられたが、無いものを強請っても仕方がない。

(となると、箒と組むのが一番無難かなあ)

彼女の剣道の實力は一夏もよく知っているし、互のこともある程度把握できている。急造のパートナーだが、なんとか形にはなるだろう。

そうと決まればこの授業が終わったあとにでも箒に声を掛けることにしよう。そう考えて、一夏は再度プリントに視線を落とした。

「私とか？」

「おう、組もうぜ」

授業後、決めていた通りに一夏は箒へと声を掛けた。ニツと笑う一夏にしかし、箒の表情はすぐれない。

「一夏、残念ながらそれは無理だ」

「え!？」

そして無情な言葉が突き刺さる。

まさか断られると思っていなかった一夏は驚きに目を丸くした。

「あ、いや違うんだ。私も出来ることなら一夏と組んで出場したい」

「だったら何で、」

「……私も、専用機持ちなのだ」

………。時間が止まるというのを、このとき初めて一夏は現実亲身体感した。

「………はあ!?! ま、まじか!?!」

「う、うむ。一夏のところへ白式が届けられたのと同じ時期に、姉さんが送りつけてきたんだ」

初耳である。まさか箒まで専用機を所持しているとは思ってもみ

なかった。確かによく考えてみれば篠ノ之束を姉に持つ箒が専用機を持っていたとしておかしくない。寧ろ重度のシスコンであるあの束が妹のために今まで専用機を製作していなかったことのほうが不思議に思えるくらいだ。

箒が言うには学園側には既にそのことは伝えられており、このトーナメントで初お披露目となる予定なのだそうだ。

しかし、そうであるならば一夏は再びパートナーを探さなくてはならない。友人たちが悉く専用機を所持していることが仇となるとは思ってもみなかった。

「そっかー。じゃあ仕方ないな、他をあたってみるよ」

「済まないな、今まで黙っていて」

「別にいいさ。特に気にすることでもないしな」

表面はそう言いつつ、内心ではどうしようかと若干焦りの色が出始めていた。

幸いにもこの休み時間に一夏に声をかける生徒は多勢いた。四月の一夏とセシリアの模擬戦を目の当たりにしている生徒を中心に、一夏と組もうとしているのだ。トーナメントで優勝しようと本気で考えるならば、まずパートナーの実力が高いことが必須。勿論同じ力量同士が組むことが望ましいが、単純な二人の力量の和を引き上げるならば専用機持ちと組むのが手っ取り早い。実際、先程からあちこちで専用機持ちたちに声を掛ける生徒の姿が多く見える。セシリアやシャルロット、ラウラの周囲には人だかりが出来ていた。この調子だと鈴や簪のところも似たような状況なのだろう。それは一夏も同じで、箒に断られたあと多くの生徒が一夏の周りにやってきたのだ。

かと言ってすぐにパートナーを決める気にもなれず、周りの生徒たちには少し考えさせてくれとだけ伝えて席を立つ。

「はあ。ホント、知らないことばかりだ」

教室を出て、なんとはなしに廊下を歩く。次の授業の始業まではまだ時間があるため、その足取りは比較的穏やかだ。

パートナーのことはトーナメントの三日前までに決めればいいので、そのことは一旦頭の隅に追いやることにした。今一夏の頭を埋め

尽くしているのは、食堂で聞いたシャルロットの話だった。師匠と呼んで慕う楯無が、まさかフランスでやらかしているとは全く知らなかった。それも、世界的な大企業さえも巻き込んで。そのスケールが大きすぎてイマイチ事の重大さが理解できないが、それでも一般人には到底無理だということくらいは理解出来る。

そんな姿を目の前で見せられてしまったのは、シャルロットがああなってしまうのも納得出来るような気がした。自らの好意を隠そうともせず周囲に振りまくシャルロットの性格が、少しだけ羨ましい。少なくとも一夏には、あそこまで素直にはなれなかった。

「……ああ、くそ。遠いなあ」

自らの目標とする背中はまだ見えてこなくて。愛した女性の隣にもまだ立てない。そもそも一夏自身がそこまで辿り着けるのかどうかでさえ定かではない。それでも、一夏は諦めない。一步の積み重ねが大切だと教えてくれたのは、その目標とする人物なのだから。世界のあるところでシャルロットのような少女を助けるなんてことは一夏には出来ない。だからせめて、自分の守りたい人たちだけでも。

……ふと、周りには助けなんて無くても一人でなんとかしてしまいたいような人間たちばかりのような気もしたが、一夏はそれを考えないことにした。

## #20 変更と思惑

「兄さん、これは一体どういうこと？」

放課後、鮮やかな夕日に照らされる学年主任室に二つの影があった。一つは備え付けのソファに座り、一つはその影に向かって一枚の書類を突きつけている。どうやらこの学年主任室に乗り込んできたその少女は持っているプリントのことで物申したいらしく、普段涼しげな瞳は大きく見開かれて鬼気迫る様相だった。

「どういうことって、書いてある通りなんだが」

「それよー」

ずびしつ、とプリントを突き付けた少女、更識姫無は一部分を指差しながら大きな声を上げた。彼女の細い指の先に書かれているのは、今回の学年別トーナメントを二人組で行う旨を記した文。それに何の問題が、と思ったが俺は一応の妹の言い分に耳を傾けることにする。なんでもかんでも突っぱねるのは教育上よろしくない。

「なんで今年はタッグマッチなの!?! 去年はどれだけ私が言っても聞いてくれなかったのに!」

姫無の外側に軽くハネた水色のショートカットが怒りから逆立っているように見えた。フーフーと息を荒げる姫無をどうどうと宥めつつ、俺は至って冷静に一言。

「だから書いてあるだろ。より実践的な模擬戦闘を生徒たちに経験してもらうためだって」

「去年にも私はそう言って提案したわよ」

「いやお前の場合は……」

どうして昨年の自身の提案は却下されたにも関わらず今年になって変更されてのか、それが不満なのだろう。可愛らしく頬を膨らませる姫無だが、コイツは昨年俺にしてきた要求をきちんと正確に覚えているのだろうか。都合の良いように改竄しているような気がしてならない。

「あのな姫無、去年お前が俺に出してきた提案の内容覚えてるか？」

「勿論、より実践的な模擬戦闘を生徒たちが経験できるように二人一

組でのトーナメントに変更してほしい、でしょ?」

「微妙に違うな。一言一句間違えずに言うなら、『より実践的な模擬戦闘を生徒たちが経験できるように、教師も含めて二人一組でのトーナメントに変更してほしい』、だ。そりゃ無理に決まってるだろうが」

「なんでよ。生徒たちに実戦形式のコンビネーションとか経験させられるんだからいいじゃない」

いやそこじゃねえよ、というツツコミは口には出さなかった。もしも姫無の言い分がそのまま通った場合、俺を含めた教師陣までトーナメントに参加しなくてはいけなくなってしまう。このIS学園に勤務する教員は全員がIS操縦の技能を有しているわけではなく、寧ろ半数以上が技術者上がりの座学専門だ。ISに関する知識は確かだが、それを操縦するとなると話はまた変わってくる。だから実際にISを使った授業を行う際はクラスを合同編成にすることで千冬や真耶といった実技にも対応した教員をお願いするのだ。よく一年一、二組が実技の授業を合同で行っているが、それは二組担任が座学専門の教員だからである。

「だから実際にISを操縦できる先生だけでいいって言ったじゃない」

「本当のところは?」

「兄さんとタッグが組みたかったツ!!」

おい、と突っ込まざるを得ない。つらつらと理屈っぽいことを並び立ててきた姫無だが、実を言えばこういうことなのである。俺とタッグを組んで戦いたいというのだ。いやそれオーバーキルだろと思つた諸君、俺もその意見に全面的に賛成だ。

「あのな、今年のプリントにも記載してあるけど専用機持ち同士ではペアが組めないようになってるんだぞ? つうかモンド・グロツソに出場した人間が学生のトーナメントになんか出れるか」

「そんなもの生徒会長権限でなんともなるわよ」

「職権乱用にも程があるわ」

ふん、と鼻息荒く答える姫無に俺は頭を抱えた。全く、どうしてこうフリーダムに育ってしまったんだ。お兄ちゃん悲しい。昔は俺の

後ろをちよちよるとついて回るだけの可愛らしい妹だったんだけどなあ。あれ、どうしてだろう。じんわりと目頭が熱くなってきたような気がする。心なしか視界がボヤけてはいないだろうか。歳は取りたくないもんだなあ、はは。

「兄さーん、どこの世界に旅立ってるのー」

姫無の言葉に我に返る。いかん、どうにも思考が負の側面に傾きがちになってしまっていた。今の姫無だって可愛いんだ。母さん譲りのスタイルに美貌、浮かべる笑顔は老若男女を問わずに魅了する。ん、こう考えると親父に似ているところが出てこないんだが。

「とにかくだ。これは決定事項で以降の変更はない。諦めろ」

「だったら私のパートナー選んでよ」

「自分で探せ」

「いないのよー！　虚ちゃんは三年だし二年で私と同じ技量を持つ人間がいないのー！」

「だからそういう生徒たちに経験を積ませるのが今回のトーナメントの主旨であつてだな……」

子供のわがままのように喚く姫無に、俺は思わず苦笑した。思うに、姫無だって本気でこの要求を通そうなどとは考えていない筈だ。生徒会長という立場上、学園のルールには最も真摯でなければならぬ。それを素でやってのけるのが凄いとこであるが、何も全くプレッシャーやストレスを感じない訳ではない。姫無だってまだ高校生。周囲の人間たち（俺や千冬、束を筆頭に）が少しばかり特殊なせいで忘れがちだが、まだ遊びたい盛りの少女なのである。

しかし彼女の立場上大っぴらに羽目を外すこともできない。そこでストレス発散の場となるのが、この学年主任室だ。ここには基本的には俺しかいない。放課後を迎え教師と生徒の関係から兄と妹という関係に戻った時間であれば、姫無もそういった重荷から解放される。愚痴を零すにも、生徒会室では言えないことだつてあるだろうか。

妹の愚痴やストレスの発散に付き合つてやるのも兄としての役割、そう思つて、俺は姫無の言葉に苦笑いを浮かべながら応える。妹の我



仮に手を焼く兄という構図がぴったりなその光景は、そのあとも数十分続いた。



「……どういふことだ」

少年の視線はある一点に向けられていた。それは奇しくも、同時刻学年主任室で姫無がプリントのある部分に指を指したのと同じ箇所だった。ぶるぶると拳を震わせ、奥歯を噛み締める。肩口で切り揃えられた茶髪が逆立ちそうなくらいには、少年の纏う雰囲気は怒気に満ちていた。

「なんで専用機持ち同士はペアが組めないんだよッ!!」

少年、皿式鞘無は人目も憚らず放課後の廊下で声を張り上げた。突然の大声に周囲に居た生徒たちの肩がビクリと震えるのにも構わず、鞘無は掲示板に貼られたタッグマッチトーナメントの注意事項を食い入るように見つめる。

おかしい。こんなことは許されない。奥歯を噛み砕かんばかりの力を込めて、鞘無は必死に自身を抑えようとする。

彼の想定ではこんな事態にはならない筈だったのだ。これまでの二ヶ月で原作とかなり乖離しているということは理解していたが、それでも話の大筋には逆らわないように物事が進んでいた。一夏とセシリアのクラス代表決定戦に一夏と鈴のクラス対抗戦。そして謎のISの乱入。所々で微妙に異なる出来事が起きていたが、それでも原作を崩壊させるようなことには至らなかつた。

なのに。にも関わらず。

これは一体どういうことなのか。

専用機持ち同士でペアを組むことが出来ない。それはつまり原作のように一夏とシャルロットがペアを組むことが出来ないということである。なら自分にもシャルロットと組むチャンスがとも思ったが、そういえば自身も専用機持ってたっけと思いつく。セシリアと鈴はこのあとラウラとひと悶着起こして参加を辞退するだろうから、残

る原作ヒロインはシャルロット、ラウラ、箒。この中で専用機を所持していないのは箒だけなので、必然的に彼女一人に絞られる。

本当ならば同じクラスで代表を懸けて戦った箒とペアになるうと考えていたのに、このルールのせいで彼女にフラグを建てることが出来なくなってしまった。このままでは名も知らぬモブと組むことになってしまう。それだけは勘弁、いや顔が可愛ければそれはそれでアリなんじゃないか？ とよく分からない思考が箒無の脳内でぐるぐると回る。

「……待てよ、別にペアにならなくとも対戦して俺が勝てばそれを切っ掛けに仲良くなれるんじゃないか？」

名案を得たとばかりに顔を上げる箒無。これまでだって実際に箒とは代表決定戦を期によく話すようになったし、一夏とは謎のISが乱入してきた際に共闘したりもした。今回のトーナメントではラウラのISに仕込まれたVTシステムが発動することになるだろうか、それを期に戦線に加わればいいのではないか。そう考えたのである。

厳密には箒とは現在全く会話をしておらず、一夏との共闘も箒無の専用機の一部を切離して時間を稼いだけただけなのだが、どうもこの少年の中ではかなり事実が捻じ曲がっているらしい。

「そうだよ。今の俺なら余程のことがない限りトーナメントで上位には食い込めるだろうし、ペアがある程度出来る奴ならいけるんじゃないか」

転生、という普通の人間ではまず間違いなく体験できないであろう出来事を経験し、神と呼ばれるものから特典能力まで貰っている。いくら非日常学園ラブコメの世界とはいえ、原作の知識まで有しているのだから何の心配もいらなだろうと箒無は簡単に判断した。

ここでもう少し深くこの世界について考えていけば、この先に待っている事態にももう少し柔軟に対応できたのかもしれないが、それを今言っても仕方がない。現時点での皿式箒無という少年はそこまでの思考を行うことは出来なかった。

「さて、となると何よりもまずペアを探さないとな」

掲示板の前を離れ、宛もなく歩き始める。

専用機持ちと組めないということは原作キャラたちとペアを組むことはほぼ不可能だと考えていいだろう。専用機を持たないキャラも居るが、その殆どが一組の生徒たちであり、鞘無の記憶が正しければ四組に原作に関わるようなキャラは簪以外には居なかった。

しかしそれは別段問題ない。この学園に入学出来る時点で彼女は優秀であり、操作技術も一定の水準には達している。となれば、あとは機体や戦闘タイプの相性だろうか。鞘無個人は遠近両用のオールレンジタイプなので、これといった希望はないのだが。

「はあ。でもやっぱ専用機持ち同士で組めたら話は早かったんだけどなあ……」

皿式鞘無はまだ知らない。

その言葉が、思わぬ形で実現するということ。



「えー……、先日配布したプリントについてだが、訂正を加えることになった」

翌日、一年一組のSHRの時間に俺は教壇に立っていた。隣には千冬、真耶の二人も控えておりこれから何を言われるのか生徒たちはジッと俺のほうを見つめている。先日配布したプリント、というのは当然タッグマッチトーナメントのものだ。昨日配布したばかりのものに訂正を加えるというのはどういうことかと生徒たちは思っているだろうが、俺も内心で思っているので聞かないで欲しい。

「このプリントには学年別タッグマッチトーナメントは専用機持ち同士でのペアは認めないと記載されているが、この点を変更する。正式名称を『IS学園タッグマッチトーナメント』に、代表候補生でない専用機持ちもいるという点から専用機持ち同士のペアも認めることになった」

ざわつ、と教室全体が俄かに騒がしくなる。それも当然のこと、こんなことは前代未聞だ。まさか昨日姫無と冗談のように話してい

たことが現実起きてしまうとは思ってもみなかった。やばい、頭痛  
くなってきた。

勿論この変更には理由があり、それは昨日の夜に遡る。学年主任の  
仕事を片付け、さあ部屋に戻ろうとしていると、たまたま轡木十蔵と  
出会ったのだ。表向きはこの人の妻が学園長として指揮を取ってい  
るが、その実裏で動いているのはこの人だったりする。花の水やりを  
していたという彼に御茶に誘われてしまい断れずに着いて行ったの  
が今思えば失敗だった。話題作りのためにと主任室で姫無と話して  
いたことを口にしたことが膨らみ、いつの間にか。

『ほお。それは中々面白いアイデアではないですか』

『いやいや、ただの戯言ですよ』

『いえ、案外そうでもないかもしれませんよ？ 経験を積ませるとい  
うのなら下級生は上級生と、連携を指揮するという点では上級生が下  
級生と組むというのは理に叶っています』

『いやしかしですね。専用機持ち同士で組んだりすると戦力差が  
……』

『確かにそうかもしれませんが、この学園の三年生ならば代表候補生  
にも応戦はできるでしょう。——流石に貴方や織斑先生を出す  
わけにもいかないのです、教師陣の参加というのは無理ですが』

そう言う轡木十蔵の顔は、新しいおもちゃを手にした子供のよう  
に輝いていた。というか絶対楽しんでるだろ。こんないきなりトーナ  
メントの内容を変更すればその皺寄せが俺に来ることを分かかって  
あんな事を言ったんだ。各国の重鎮たちにだってまた新しく通達を  
送らなくてはいけないし、恐らく当日まで俺の気が休まる時間はもう  
無いだろう。

千冬や真耶も今日の朝そのことを伝えられ驚いていた。無理もな  
い、まさかトーナメントの内容自体が変更になるなんて思わないだろ  
うからな。

尚もざわめく教室内を静かにさせてから、俺は口を開く。

「今言ったように今回のトーナメントは例年とは異なる。学年別では  
なくなった分、一年生には荷が重くなってしまいうだろがそこは上手

くペアを作って補ってくれ。別に一年生同士で組んでも構わないし、知り合いが居るなら上級生と組むのも良いだろう。専用機持ちたちは今回も各国からデータの提出申請が来ているから、それなりの戦いつてのを期待する」

必要なことだけを手短かに伝えて教壇を降りる。さて、今からまたトーナメントの作成を一からやり直さなくてはいけなくなったわけだが、これって給料にきちんと上乘せとかしてもらえるだろうか。



例年とは異なるトーナメント。学年別ではなく、専用機持ち同士がペアを組んでも問題ない。この変更で内心で歓喜している者たちが居た。

——一年一組の教室。

(学年関係無く専用機持ち同士でもいいことは、……姫無とペアが組めるかもしれないってことか!?)

世界で三番目の男性IS操縦者となった少年は、自身にチャンスが来たことを大いに喜んだ。

(こ、これはチャンスなのでは……! 落ち着きなさい、落ち着くのですセシリア。こういう時こそ英国淑女としての姿を保ち、そしてその優雅さで一夏さんにアプローチを……)

イギリスの縦ロールは、脳内がピンク色のお花畑に染まりつつあった。

(流石に楯無さんはトーナメントには参加できないのかあ。残念だなあ。あ、でも成長したところを見せるチャンスかも)

(ふむ。タッグを組むなら一夏がいいと思っていたが、これなら問題なさそうだな。アイツとのコンビネーションを確認するのもいい機会だ)

フランスとドイツからの転校生は、それぞれの思惑を胸に抱き口角を吊り上げる。

——一年二組の教室。

(キタッ！　これは来たわよ！　一夏とペアを組む絶好のチャンス！  
なんだか最近出番少ない気がするしここで目立っておかないと  
後々存在感が……)

ツインテールを揺らしながら、中国の少女は拳を握る。

——一年四組の教室。

(ツツキタキタキタ!!　これ完全に俺の時代来てるだろ!!　俺が思い  
描いてた展開だ、間違いない!!　これで簪を誘えるし、あわよくば生  
徒会長をペアにするのもアリだな。話したことはないけど、男の操縦  
者っただけで珍しいし簪の話題で仲良くなれるだろ……いや待て  
シヤルも捨てがたい……)

四人目の男性操縦者は、巡ってきた最大の好機に気持ち昂まる。  
(……お兄ちゃんとは組めないのか。先生たちも参加だとよかったの  
に……)

四組唯一の代表候補生は、教師は参加しないことを少し残念に思っ  
ていた。

全学年合同で開催されるタッグマッチトーナメント。それぞれの  
思いを胸に、その火蓋が切って落とされようとしていた。

そして、当日の朝がやって来る。

## #21 開会と開戦

六月の最終週。IS学園は今日から一週間、トーナメント一色へと染まる。例年とは異なり学年別でも個人でもなくなってしまった今回のトーナメント。だがどういう訳か諸外国からの反応は思ったよりも良く、寧ろ来年からも継続させてはどうかという提案まで受けてしまった。いや、それは丁重にお断りさせていただいたが。月曜日から金曜日までの五日間をフルに使って行われる学園トーナメントの活気は凄まじく、開会前だというのに各アリーナには未だ準備に追われて奔走する生徒たちの姿が見られる。その周囲では既に観客席の一角を場所取りしたりする生徒やアリーナの周辺で身体をほぐす生徒、ペアと最終確認を行うなどそれぞれが思い思いの時間を過ごしている。

そんな中でも最も忙しく動き回っているのが生徒会役員とこういったイベント時に駆り出される実行委員たちで、雑務や会場整理、訪れた来賓たちの誘導と押し寄せる仕事をこなしていた。

「だってのに、何でお前はここに居るんだ？」

「んー？ ちょっと休憩をね」

第一アリーナの管制塔で、俺は隣で呑気にお茶を飲む姫無を横目に見ながら言った。今述べたように、生徒会の役員は全員が例外なく仕事に追われている。普段は仕事量を増やすという理由から仕事を任せていない本音にまで雑務処理が回ってきているのだ。当然、生徒会長である姫無にはその倍以上の仕事が回ってきている筈である。

だというのにこの余裕の態度。

「……まさか」

「んふふ。虚ちゃんにお願いしてきちちゃった」

「いやそれ絶対丸投げしたんだろ」

開いた扇子を口元に当てて妖艶に微笑む姫無。そこには達筆な文字で『変わり身』と書かれている。変わり身というより犠牲にしかたけだろと思うが。会場のどこかで、虚の悲痛な叫びが聞こえたような気がした。

「こんなところで油売っていいのか？」

「どういうこと？」

俺の質問の意味が分からないのか、不思議そうに小首を傾げる。

「パートナーと打ち合わせとか、することはたくさんあるだろう」

「ああ、その点なら何も問題はないわ。だってあの子と組むのに、余計な言葉なんていらないうじゃないか」

さも当然だと言うかのように、姫無はパチンと開いていた扇子を閉じ、再び開く。今度は『完璧』と書かれていた。俺もこの扇子を使っていた身であるから特に何も感じないが、これ何も知らない人間が見たらどうなっているのか気になって仕方がないんじゃないだろうか。一見ただの扇子にしか見えないしな。実際普通の扇子なんだから。

「学園最強がタッグマッチとは言え負けられないんだから」

「……それパートナーに言ったらプレッシャーにしか感じないと思うぞ」

「あらそう？ 逆に燃えてきそうだけど」

からからと笑う姫無。そんな妹を見て、俺はパートナーとなった生徒に心の内で合掌。なまじ実力があるだけにパートナーとなった訳だが、それでも姫無の実力はこの学園で抜きん出ている。ということ。パートナーの方が狙われるということ、それはつまり掛かる負担が大きくなるということだ。まあその辺りは姫無も考えているだろうし、本人も望むところなんだろうが。

それにしても、と思う。

今回のトーナメント、学年の壁をとっぱらただけでこうも他学年のペアが組まれるとは思ってもみなかった。勿論同学年同士のペアの方が多いわけだが、それでも二割強は違う学年同士のペアである。それは目の前にいる姫無も然り。俺は当然虚と組むものだと思っていたが、虚は既にエントリーしていたらしく、また姫無も初めから虚と組むつもりはなかったのだとか。

パートナーを誰にしようが生徒の自由なので俺が口を出す道理などないが、意外と思ってしまったのは事実だ。まさかこうペアを組んでくるのかと思う反面、皆全力で優勝を狙いに来ているなど感じる。



IS学園の生徒全員がぶつかるイベントというのは実は少なく、それ故に全力を以て望む生徒が多いのだろう。そのことは単純に嬉しく思う。俺の時の学年別個人トーナメントは散々だったからな。特に三年の時は。

「……あ、もうこんな時間。流石に戻らないと虚ちゃんに怒られちゃうわ」

「多分もう手遅れだぞ」

腕時計に視線を落としてそう呟く姫無。どこまでもマイペースを地でいく彼女には虚もさぞ苦勞していることだろう。

俺も同じく時計を確認すれば八時を回ろうとしていいところだった。開会式は九時からなので時間はまだあるが、トーナメント表を電光掲示板に表示したり来賓たちへの挨拶回りなどこなさなければならぬ仕事はまだ残っている。手早く済ませられるものは昨日のうちに終わらせてあるが、それでも時間を考えると余裕があるとは言えなかった。

「じゃあね、更識先生。またあとで」

「ああ、後でな更識」

呼び名を学園内でのものに変えて、姫無は管制塔を後にした。

さて、先ずはトーナメントを掲示板に送らないといけないな。そう考え、俺は目の前のコンソールに手をかけた。



トーナメントの開会式は第一から第三までのアリーナを使用して行われる。流石に一つのアリーナに生徒全員を押し込むには無理があり、来賓たちが今年は多く来ていることから各アリーナに設置されている大型のスクリーンを通して開会式を行うことになったのだ。学年ごとにアリーナを分けて居るので、現在一夏の周囲には一年生の生徒たちしかいない。一番大きな第一アリーナに三年生を集め、そこに企業の人間や各国の来賓を集めているので、一夏たち一年生は第三アリーナの観客席に腰を下ろしていた。

なんとはなしに周囲を見ていた一夏だったが、不意に隣から声が掛かった。

「一夏。余りきよろきよろするものではないぞ」

声の主は箒。どうにも落ち着きがない一夏の様子が気になったようだ。一夏は箒にすまんとだけ答えて、しかしまた忙しなく視線をさ迷わせ始めた。

その様子に箒は溜息を吐いて、小さく微笑んだ。一夏的心情をよく理解している身としては、彼がこれだけ落ち着きを無くしてしまうのも無理からぬことだと思っただのだ。

「一夏。緊張するのは分かるが、少し挙動不審だ」

「お、おお。悪い、どうも落ち着かなくて」

「始まる前からそんな調子では試合が思いやられるな」

「それを言うなよ……」

一夏の緊張の原因は、パートナーのこともあるがまず第一にトーナメントの組み合わせにあった。先程発表された組み合わせを見れば、なんと一夏たちのペアは第一シードに位置されていたのである。そのことを先程あつた楯無に聞いてみれば、四月のセシリアとの戦闘データやパートナーのことを鑑みてのことだと言われた。理解できなくもないが、ISに触れて三ヶ月に満たない一夏には少しばかり荷が重かった。何せ上級生とも戦うのである。IS学園の上級生は、一年生にとっては憧れと羨望の眼差しを向ける的であり、それだけ実力も高い。身近にその最上級を知る人間がいるのでそこまだけ離れているわけではないことは知っているが、それでも今の一夏が単体で渡り合えるかと言われれば明言は出来ない。

「私は一夏とは反対の山だったから、当たるとすれば決勝だな」

そう言う箒のパートナーは本音である。今も生徒会の仕事に追われているのかこのアリーナ内に姿は見えないが、その組み合わせを聞いた時は一夏も成程と納得した。この二人は共に整備科を志望している身であり、優秀な姉を持つという共通点もある。二人の性格を考えればとても馬が合うようには思えないが、実際この二人は特に仲が良かった。ISについて会話している二人に、一夏は全くついていけ

なかつたほどである。

「そういえばのほほんさんて実技のほうはどうなんだ？」

「見た目に反して機敏だぞ。更識の家に仕えているからだろうが、基本的な動作や機体の扱いは学年でも上位だろう」

「こりやまた手強いペアもいたもんだ」

とは言え箒が言ったように一夏たちとは反対のブロックにいるので、決勝まで互いに残らない限りこの対戦が実現されることはない。「にしても意外だったな」

「？ 何の話だ？」

「ペアの話さ。まさかあんな風に組むなんて思ってたなかつた」

一夏の言いたいことを察して、箒も首を縦に振った。今回のトーナメントで注目を集めるのは各学年の専用機持ちたちで、彼女たちとどうやってペアを組むかというのがその他の生徒たちにとっての命題だった。何せ専用機持ちと組むだけで大幅に戦力が増強されるのである。トーナメントの優勝を目指すのであれば、敵として立ちほだかりまた味方として頼もしいのが彼女たちなのだ。

故に専用機持ちたちにはペアの締切日まで連日熱烈なアプローチがあつた。当然一夏にもである。が、それはここでは割愛しておくことにする。

ともあれ、専用機持ち同士で組んではいけないという制約が無くなった時点である程度専用機持ち同士で組むことになる。他の生徒たちも思っていたのだろう。倍率が高いと察して上級生に走る一年生たちの姿も多勢見られた。

そして先程発表されたトーナメントで、そのペアが明らかになったわけである。

それを見た一夏の率直な感想は、『あ、これまじで取りにきてんな』だ。

「そうだな。皆優勝を狙っているらしい」

「一番手強そうなのはやっぱ上級生の代表候補生ペアかなあ」

「あのやる気なさそうだった二人か」

「姫無先輩が言うにはあれが二人の通常運転らしい。技術はやばいら

しいけど」

姫無にやばいと言わせる上級生ペア。三年のダリル・ケイシーと二年のフォルテ・サファイア。両名専用機を所持する学園内でも屈指の実力者である。元々この二人は一緒に行動していることが多く、今回のトーナメントも流れでペアを組んだのだろう。二人のコンビネーションは抜群で、生徒会長で学園最強を背負う姫無も二人纏めて相手をすると言っていると聞いていた。負けるとは言わなかった。

「あとセシリアな。イギリス代表候補の先輩なんだろうペアの人」

そしてセシリアと二年のサラ・ウエルキンのペア。この二年生は専用機こそ所持していないもののイギリスの代表候補生であり、セシリアと共にイギリスで指導を受けていた姉妹弟子のような関係らしい。因みにサラの姉弟子がチエルシーであり、その師匠がリリイである。イギリスというお国柄、遠距離に特化していることは間違いないと思うが、残念ながら一夏はサラの戦闘データは見えていない。

「私はラウラとシャルロットのペアの方が怖いかな。あの二人、ほんとは出会って一ヶ月かと疑いたくなる」

「あー……、確かにラウラの火力とシャルの機動力は脅威だよな」

ラウラと前々から親交のある一夏は、ラウラの専用機の特徴や戦い方などを知っている。第三世代型特有の一点特化型機体でありながら、近遠両方をこなせるのは一重にラウラの技量の高さゆえである。そしてラウラが思う存分戦えるのは、後方でサポートするシャルのカバーリングが完璧に近いからである。現時点の一年生の中では、恐らく実力はずば抜けている。

「ラウラたちは俺たちのブロックに居るから、当たるとすれば俺たちだな」

「私たちのところにはダリル、フォルテのペアだ。お互い楽には上がれそうにないな」

「ま、そんなことはハナから分かってたさ」

——それでも、俺は負けられない。

学園最強を背負う人に、黒星を付けさせるわけにはいかないのだから。

◆◆

三十分以上にも及ぶ開会式が終了し、トーナメント一回戦が始まるうとしていた。一週間という長丁場のトーナメントであるため、一日に行われる試合は一ペア最大で二試合である。機体調整や修復にも時間がかかるため、試合間は少なくとも三時間は空けられる。故にその日の日程が終了するのは午後五時を過ぎるだろうと予想されている。参加ペアが総勢二七二組にもなるこのトーナメント、決勝まで残った場合試合数は八にもなる。シードペアもいるので必ずしもそうではないが、それでも七試合は戦うのである。一日に二試合とは言え、その疲労は日を追うごとに蓄積されていく。生徒たちは根気との戦いにもなることだろう。

などと考えながら、俺は呑気に管制塔でコーヒーを呑んでいた。真耶に淹れてもらったものである。

先程ようやく仕事に一段落つき、こうして休息を得ることが出来た。来賓への挨拶なんてのは学園長の仕事だと思っただが。裏であのジジイがほくそ笑んでいる表情が目には浮かぶ。

今俺の居る第一アリーナではトーナメントの左側の一回戦が開始されたところだ。このトーナメントにはシードのペアが十六いるので、実際に行われる一回戦は一二八試合。それを三つのアリーナに分けて行うので、当然予定はぎっしりだ。まあ制限時間も設けられているし、そこまで大幅な乱れは出ないと思うが。

因みに第二アリーナには二年学年主任が、第三アリーナは千冬が指揮を取って試合を進行している。三年学年主任は整備室や控え室でISの機体確認に走り回っている。

「始まりでしたね」

俺の隣にやって来た真耶が言う。手にはコーヒーカップが握られているので、俺のを淹れるついでに自分の分も淹れたんだろう。

「だな。なんだか懐かしく感じる」

「あの頃は学年別で個人でしたけどね」

「だな。俺としては個人のほうがのびのびやれて好きなんだが」

「先輩は好き放題やりすぎです」

学生だった頃を思い出して、あの頃はまだ若かったなと苦笑する。真耶の言う通り好き放題やりすぎたこともあつて、今の学園の防壁はあの頃よりも頑強に設計されているらしい。俺の所為みたいに言わないで欲しいんだが。

「山田先生だってライフルでアリーナの上部に風穴開けてただろう」

「あ、あれは篠ノ之先輩のトンデモライフルが悪いんです！ あんな威力なんて知りませんでした！」

束がノリで開発した武装を真耶に試させたところ、想像の斜め上を突き抜ける威力のもので冷や汗が止まらなかったとは当時の真耶の話である。凄まじい威力のくせに、その反動が皆無だというのがまた恐ろしい。結局危険すぎるということでお蔵入りとなったが。

「せんぱ……更識先生は今回のトーナメント、どこが勝ち残ると思いますか？」

無意識のうちに昔の呼び方をしていたことに気付いて慌てて呼び方を変える真耶を可愛く思いつつ、彼女の質問に少し考えてから答える。

「ま、普通に考えりや代表候補生同士で組んでるところが強いんだろ  
うが、これはタッグマッチだ。単純な個人の技量だけで測れるもん  
じゃない、コンビネーションも重要になってくる。となると……」

そこで一旦言葉を切つて、俺は真耶に言った。

「面白そうなのは、更識・織斑組とシャルロット・ラウラ組。大穴で――

――鳳・皿式組だな」

## #22 緒戦と二回戦

午前十時、各アリーナは熱狂の渦に包まれていた。実況を担当する放送部の生徒の声が、スピーカーを通してアリーナ全域に響き渡る。こんなにも生徒たちが興奮してしまうのも仕方のない話で、何せ殆どの生徒にとってはこれが今年度最初の公式戦となる。一年生に至っては初めてISでの実戦形式の戦いである。その所為か操作を誤ったり、動きがぎこちない生徒も多く、トーナメント全体の傾向として一年生の緊張が目立っていた。それに比べ二、三年ともなれば流石に慣れたもので、一年生とペアを組むものは上手くカバーして立ち回り、同級生と組んでいる場合は難度の高いコンビネーションを決めてアリーナを沸かせている。

こうしてIS学園タッグマッチトーナメント一回戦が次々に消化されていく中、観客席の一角に一人の少女の姿があった。同年代の女子と比べても小柄な体躯にツインテールが特徴のその少女は、先程から腕組みをしながら一定のリズムで指をトントンと動かしている。

鳳鈴音。一年二組所属の、中国の代表候補生である。

そんな彼女の周囲には、不自然にスペースが出来ていた。まるで彼女の周りにだけ境界が張ってあるかのようには、周囲に人が近づかない。それは鈴が隠そうともせずには発する怒気を恐れているものだった。眼下で繰り広げられている一回戦を視界に捉えながら、鈴はギリギリと奥歯を噛み締める。彼女の怒りの原因は、パートナーにあった。

(何でよりも寄ってアイツとペア組まなきゃなんないのよ！ そりゃ風邪引いて欠席してたアタシが悪いんだけどさ！ それでも他にも生徒はいたでしょーよ!!)

体調を崩していた二日前までの自分を呪ってやりたい気分だった。

鈴が今のパートナーと組んだのは、当日の抽選によるものだ。ペアの提出締切前日まで風邪を引いて休んでいた彼女は、当日になってその事を知ったのである。しかも欠席している間にトーナメントのルールが変更され学年の壁がとつぱられ、友人たちも次々にペアを組んでいった。そのため周囲には余っている知り合いがおらず、まあ当

日のペア抽選でもいいやと半ば投げ遣りに考えていたのが失敗だった。まさかあの四人目もあぶれているとは思ってもいかなかったのだ。(つうかアイツの馴れ馴れしさは一体何処からくんのかしら。アタシ初対面よね？　なんであんな親しげなわけ?)

当日の抽選で例の四人目、皿式鞘無とペアを組むことになり、一応は挨拶くらいしておくかと彼の元へと近づいていくと、こちらの存在に気がついた少年は嬉々として駆け寄ってきたのだ。

『鈴ちゃん、よろしく』

『り、鈴ちゃん……?』

『俺たちが組んだら優勝も狙えると思うから、頑張ろうね』

『え、え?』

『ああ、君は好きに動いてくれて構わないよ。俺が後ろできちんとサポートするから』

それだけ言って、彼は颯爽と駆けていった。どこに行ったのかは定かではない。

「ていうか、勝てるビジョンが見えないんだけど?」

世界で四人目となる男性IS操縦者ということ、鈴もある程度の情報は手に入れている。彼の入学してからの二度の戦闘映像も見た。見た上での感想を言わせてもらえば『アンタIS舐めてんの?』である。折角Y・Cが直々に開発してくれたという専用機も機体性能を半分も引き出せていない。必殺技だという超電磁砲は通常武装の火力に満たない。機動力が高いわけでもない。正直に言えば、皿式鞘無という少年はただISに乗れるだけの男でしかなかった。

そんな四人目と、ペアを組まねばならない。

これはもう罰ゲームとしか思えなかった。

「しかも一回勝つと、一夏たちと当たるのよね……」

どうせ組むなら同じ男でも一夏の方が断然良かったと頭を抱える。単純な技量だけを見ても皿式鞘無より一夏のほうが上だ。加えてペアは生徒会長。大ロシアの現国家代表である。代表候補生と国家代表では地力に大きな差があり、鈴はその差を嫌というほど知っていた。



というか、このままだと一夏たちと戦うどころか一回戦を勝てるかすらも怪しかった。

「はあ……。なんかアタシ、ハズレくじ引かされたような気がする」  
やけに重たい溜息は、沸き立つアリーナの歓声の中に消えていった。



シユツ、と管制塔の扉が開いた。

誰が来たのかと振り返ってみれば、そこにはIS学園には不釣り合いな赤いスーツを着た青年が立っている。俺の姿を認めて、青年はニカツと笑う。

「よう楯無。元気してつか？」

「おう楯くちなし。ボチボチだな」

首に掛けられた関係者であることを示すカードを揺らしながら、楯は俺の横にまでやって来る。

「お前んとこの機体を見に来たのか？」

「それもあるけど、お前の顔も見に来たんだよ」

ガシツ、と楯の腕が俺の首に回される。

彼はISの研究開発を行うとある企業の社長を務める男で、俺とはもう十年以上の付き合いになる。本来であればイベントであっても足を踏み入れることが出来ないIS学園に彼が入ってこれるのは、俺と顔見知りであり役職が高いからである。来賓、という枠組みで今回はこのトーナメントを視察に来ているのだろう。

「そーいやあさ。うちの会社今度新しいISスーツ出そうと思ってんだけど、女の子用でTバックタイプのと紐パンタイプの……」

「やめろそんなもん開発すんな」

「こんなのが社長で本当に大丈夫なのか。」

「そーだよなー、やっぱ楯無はハイレグのほうが」

「んなこと言ってねえよ！」

回された腕を振り払って楯へと声を荒げる。コイツ本当に頭大丈

夫か。毎回毎回変な案内つぎげて来るけど碌なモンがないんだが。

目の前で笑う青年を睨みつつ、俺は話を変えた。

「で？ 専用機のほうはどうなんだ」

「んん。スペック的にはもうちよつとやれる筈なんだけどなー。機動性は第三世代の中でも上位だし、一点特化にもせずオールラウンドに仕上げたから燃費もそこそこ。なのになんで機体が分解されているのか」

「本人がぶっ壊してたからな」

先月の一夏と皿式の試合を思い出しながら、俺は梶の疑問に答えた。

梶の経営する会社『Y・C』は四人目の男性IS操縦者である皿式鞘無の専用機サンライト・トウオーノを開発、製造した会社である。倉持技研などの大手と並び、日本の五本指に数えられる企業で、梶は一代にしてここまでの地位を築き上げた若き社長だ。この会社が設立されてからまだ五年程しか経っていないというのに、今やそのシェアは日本第二位である。

「うーん、この前うちに来て試験飛行とかしてもらったんだけど。どうも彼あんましIS適性高くないみたいだ。あつてB」

「そりゃ誰も彼も男だからつて適性が高いわけじゃないだろうからな。織村や一夏が特殊なだけであつて」

「あとお前な」

真耶の淹れてくれたコーヒーの残りを飲み干して、管制塔からアリーナ全域を見渡す。

いつの間にか梶も真耶にコーヒーを淹れてもらつていて、その手にはマグカップが握られていた。

「……楯無」

不意に、梶の口調が変わつた。これまでの軽いものではない。その変化を察して、俺は目線は動かさないうまま無言で彼に続きを促す。

「これはまだ確定情報じゃないんだがな、」

そこで言葉を一旦切つて。

「……京ヶ原が、亡国機業に接触したそうだ」

梶の口から告げられた言葉に、思わずマグカップを落としそうになる。

「表立った動きは今のところない。が一応お前の耳にも入れておいた方がいいと思ってるな」

「……そうか。わかった」

「おう。……んじゃ俺は来賓の席の方に戻るわ。あんまうちよろしくてつとウチの部下に怒られちまう」

先程までの空気を霧散させて、梶はヒラヒラと手を振りながら管制塔から出て行った。その後ろ姿を見ながら、今の言葉を内心で反芻する。

——京ヶ原が動き出した。

数年間一切の消息を絶っていた四家の一角。第二回モンド・グロツソ以来大きな動きは無かった奴らが、動き出した。

「……何事も無ければいいんだが」



トーナメント一回戦が全て終了し、少しの時間を置いて二回戦が開始される。大方の予想を裏切ることなく代表候補生、専用機持ちたちは順当に勝ち上がり、また二、三年生の多くも二回戦へと駒を進めた。一年生同士のペアは敗退する者が多かったが、それでも実力のある生徒は上級生を相手に勝利を収め一回戦を突破している。

二回戦の開始を待つ控え室の中で、ISスーツを着用した一夏はベントニに腰掛けて瞳を閉じていた。

トーナメント第一シードに位置する一夏は一回戦を戦っておらず、この二回戦が緒戦となる。緊張していないと言えば嘘になるが、しかし戦いに支障を来すほどかと言えばそうではない。不安要素があるとするればそれはパートナーの足を引っ張ってしまわないかということだけだ。

「緊張してるの?」

静かに瞳を閉じていた一夏に、透き通った声が掛けられる。

ゆつくりと瞼を持ち上げて顎を上げてみれば、一夏のパートナーである少女が毅然と立っていた。その表情に一切の気負いは見られない。あるのは絶対的な自信だけ。如何にも姫無らしいなと一夏は思った。

「緊張というか、姫無さんの足引つ張らないようにしないと」

「んふふ。大丈夫よ一夏君。アナタは強いんだから、もっと自信持ちなさい？」

「ISでの戦闘だと、姫無さんに手も足も出ませんでしたけどね」

「それは当然よ。私だって国家代表の面子つてもものがあるもの。更識流の組手でイイのもらった時は焦ったけど」

「いい加減生身で女の人に遅れを取るわけにはいきませんから」

「あら生意気。まだ一度も私に勝ったことないじゃない」

うぐ、と一夏は言葉を詰まらせる。姫無の言う通り未だに一夏は姫無を相手に勝利したことはなかった。引き分けたことは何度かあるが、彼女の背中を畳につけたことは未だ一度もない。

「ま、心配は無用よ。一夏君もISの操縦には慣れたみたいだし、これまで通りに動けば問題無いわ」

「てことは俺がアタッカーでいいんですか？」

「ええ。必要があれば私も前衛やるけれど、基本的に私の機体は遠距離のほうに向いてるし」

このトーナメントまでの期間、一夏と姫無のトレーニングは前衛と後衛のポジションに重きを置いて行われた。理由は簡単、一夏がタッグマッチというものに慣れていなかったからである。一対一の戦闘である場合、見るのは相手だけでいい。しかしタッグマッチの場合、相手二人と味方の三人のポジションを気にしながら戦わなければならない。重要なのは味方との位置。近すぎても互いが邪魔になり、遠すぎてもカバーが間に合わない。どこにどう動けば相手が動き、どう攻撃すれば味方に追い討ちを掛けさせられるのか。そこだけを徹底的に姫無に叩き込まれたのだ。

トレーニングの期間こそ短かったが、姫無の教え方と一夏の覚えが良かったこともありある程度までは形になった。後は、実践あるのみ

だ。

「さあ、そろそろ行きましようか」

「……うし」

姫無に言われ、一夏はゆっくりと腰を上げる。

控え室からもアリーナの歓声が聞こえてくる。どうやら相手はもう出てきているらしい。両手で頬をパンツと叩き、一夏は姫無の後に続いた。

『さあ始まりますトーナメント二回戦!! 第一試合はいきなりの最注目カード!! 更識・織斑組対鳳・皿式組ツ!!』

実況を務める放送部の生徒（一回戦敗退）が声を張り上げる中、四人はアリーナにISを展開した状態で待機していた。

一夏の白式、姫無の霧纏ミステリアス・レイデーの淑女、鈴の甲龍に鞘無のサンライト・トウオーノ。全員がそれぞれの専用機を展開させ、開始のブザーを今かと待っている。一夏と鈴を前衛に、姫無と鞘無がその後ろに陣取っているところを見るに、両ペアが取る行動は大体同じようなものだと予想出来た。

「まさかこんなに早く鈴と当たることになるなんて思わなかったぜ」

「アタシはまさか一回戦勝てるなんて思ってたわ……」

「? なんでそんなげんなりしてんだ?」

「うっさいわね! 一夏! アンタに今から八つ当たりするわよ!」

「なんだその理不尽な宣言!」

ついさつき行われた一回戦の様子を見ていない一夏が知らないのは仕方ない。これほどまでに鈴が疲弊しているのも、単に後ろのすまし顔の鞘無が原因なのだ。鈴曰く奇跡の一回戦突破。鞘無はそうは思っていないようだが。

ともあれ、こうして二回戦の舞台に立った以上は鈴も全力を以てして当たる。何せ相手は学園最強の生徒会長にイギリス代表候補生と互角の戦いを演じた三人目。相手にとって不足はない。中国の代表候補生としてのプライドもあるが、なにより負けず嫌いな鈴は凜猛な光をその瞳に宿して一夏を睨み付ける。

そして前衛の二人が言葉を交わしている頃、後衛の位置にいる二人

もまたオープンチャネルを介して会話していた。

『初めまして。皿式鞘無と言います。まあ、存じ上げているとは思いますが』

『……よろしく、皿式君』

基本的に下の名前で呼ぶことを好む姫無が苗字で相手のことを呼んでいる時点で、その人間への好感度は推して測るべしだ。というか、顔にはつきりと出ていた。普段は飄々としている姫無が、視線すらも鞘無と合わせようとはしない。

『大丈夫ですよ。俺は視線から心情を読むなんてことできませんから』

しかしどういう訳か、鞘無は姫無のその行動を警戒から来るものと判断したようだ。

勘違いだと言つてやりたかったが、そのために会話するのも憚られる。姫無にしてみれば、皿式鞘無という少年は簪にボロ負けした四人目という認識でしかない。そもそもその性格が姫無の肌には合わないようで、出来ることなら卒業するまで関わり合いになりたくないと思つていたほどである。

が、そんなことを知るはずもない向こうは、試合前だということにより饒舌になつていく。

『この前妹さんと戦わせてもらいました。流石は代表候補生、強かったです』

そんなこと知っている。日本代表候補生の肩書きは伊達ではないのだ。態々言われるまでもない。

『俺もいいところまではいったんですけどね。最後は押し切られちゃいました』

押し切られるどころか見せ場無く終わっただろう、と内心で姫無はぼやいた。早くブザーが鳴つてくれないかと思うが、こういう時に限って体感時間というのは遅く感じるらしい。

尚も話を続ける鞘無にいいよ嫌気が差してきた所で、ようやく試合開始を告げるブザーがアリーナ内に響き渡った。そのブザーに誰よりも早く反応したのは一夏でも鈴でもなく、後衛でサポートをする

と言っていたはずの姫無であった。

突然飛び出した姫無に、一夏も目を丸くする。

「ちよ、姫無さん!」

「え、え!」

瞬時加速を使用したのだろう、通常では有り得ない初速から一気に相手の領域へと踏み込む。前方で両端に刃を備えた青龍刀、双天牙月を構えていた鈴を無視して、姫無は右手に武装を展開した。

標的は後方、試合開始をようやく理解した鞘無だ。

「うおっ、いきなり将狙いか! でもね更識先輩、将を射んと欲すればまずは馬を射よって諺があつてですね——」

「ごめんなさい。私将棋もチェスもまず邪魔なものを消していくの」

言外にお前は将ではないと告げて、姫無は展開した武装、ミストルティンの槍を突き立てる。このミストルティンの槍は表面を覆っているアクア・ナノマシンを一点に集中させることで超振動破碎を起こし、相手の装甲を破壊してナノマシンを侵入。その後エネルギーを転換し大爆発を起こすという能力を有する。受けたが最後、装甲に触れた時点で爆発は免れない必殺の槍。その先端が鞘無の山吹色の機体へと迫る。

迫り来る槍の先端を見つめながら、しかし鞘無は微塵も動揺していなかった。

「……全く、忠告してあげたつてのに」

ぼつりと。鞘無が呟いた。

姫無の行動が早く、いくら鈴でもカバーは間に合わない。姫無との実力の差など、改めて比べるまでもない。にも関わらず、鞘無は笑っていた。不敵に、まるで迫る攻撃など問題ではないとでも言うように。

「……簡単な話さ」

迫り来る槍を迎え撃つようにして突き出した右腕は、帯電時特有の紫電を周囲に撒き散らしながら青白く光を放ち始める。そして鞘無はその突き出された腕から、電撃の槍を撃ち出して。

「水は電気をよく通す!! 俺の槍には、貴方の槍じゃ勝てないんですよッ!!」

「あ、ごめんなさい。私のアクア・ナノマシンに単純な電撃は通用しないから」

その言葉に鞘無が反応する間もなく、大爆発がアリーナに巻き起こった。



## #23 白と黄

周囲に粉塵が吹き荒れる中、姫無は怪訝そうに眉を潜めて正面を見据えていた。

開始前に一夏と話していた作戦を破り先行してしまったことは今になって少し後悔しているが、それ以上に姫無は四人目が不快だったのである。故に、開始直後に速攻を仕掛け勝負を終わらせようと試みたのだ。鞘無の機体を目の前にして、彼女の槍は狙い定めた箇所を寸分の狂いもなく射抜いた。これで瞬時にナノマシンが機体内に侵入し、転換されたエネルギーが爆発を引き起こす。そして姫無の想定通り、貫いた箇所から爆発が巻き起こった。

全て計算通り。これで万一にも無事ということはない。仮にシールドエネルギーがかるうじて残っていたとしてもまともな戦闘を続けることは不可能だろう。そう姫無は判断した。

そこまで考えていたからこそ、彼女の表情は晴れない。

これまで培ってきた経験が姫無に告げている。まだ終わってはいないと。

「……確かに命中したと思うんだけど」

未だ舞い上がる砂塵に視界が悪い中、姫無は再びミストルティンの槍を正面に構える。

直後だった。

「ッー」

粉塵の向こう側から放たれた、一筋の熱線。音速の三倍もの速度で射出されるそれは超電磁砲と呼ばれ、鞘無が得意とする攻撃の一つだった。放たれた超電磁砲を身体を斜めにするだけの最小限の動きで躲し、その出処へと視線を向ける。

ようやく晴れてきた視界が捉えたのは、所々を損傷しながらも浮遊するサンライト・トウオーノの姿。先程のダメージの影響なのか肩の装甲は無くなり槍を突き立てられた箇所は大破していたが、ISの起動自体には問題はなさそうだ。

「ア、アンタ無事だったわけ!？」

「いや、ギリギリだったけどね。なんとか戦闘は続行できそうだよ」  
先程の姫無の一撃でつきり鞘無が戦闘不能になったと思っていた鈴は驚愕の声を上げた。同様の感想を周囲の生徒の大多数も抱いていたらしく、俄かに歓声上がる。二回戦最注目の特戦カードだと謳っておきながら試合時間が五秒にも満たないなど、冗談でも笑えない。実況を担当する放送部の生徒は内心で安堵していた。これならダリル・フォルテ組の実況を担当しておけば良かったと後悔しそうになっただけなのである。先輩権限を行使してこの特戦の実況を勝ち取ったのだ、そう簡単に終わってもらっては困る。

『会長の一撃をモロに食らった皿式君、どうやら機体は無事なようだった!! さあこれからどう試合を展開していくのか!？』

ようやく完全に粉塵が流れたアリーナで、四人はそれぞれ違う表情を浮かべていた。

姫無は訝しげに眉を顰め、一夏は驚きに目を丸くしている。驚いているのは鈴も同じだったが、一夏の驚愕が姫無の一撃を食らっても鞘無が平気そうな顔をしていることであるのに対し、彼女の驚愕は今の鞘無の浮かべている表情にあった。

鞘無は、口角を吊り上げて笑っていた。機体は損傷し、どう考えても劣勢だというのに。どこまでも不敵に笑みを刻んでいたのだ。

「……流石は大国ロシアを背負うだけのことはある。あと少しタイミングが遅ければ、俺の機体は絶対防御が発動していたでしょう」

「私の槍は、装甲に傷を付けさえすれば結果は同じになるはずなのだから」

正面に蒼流旋を構えたまま、姫無は鞘無から視線を逸らさない。

不可解。今の姫無の心情を表すなら、この一言に尽きる。これまでこの槍を使用してダメージレベルが小さかったことはない。霧纏の淑女の機体データはある程度開示されているので当然この武装に対する策を講じてくる相手が多いが、それでも結果は変わらなかった。下手な小細工など意に介さない、圧倒的な戦力。これが国家代表というものだ。

だからこそ不可解。どうして鞘無のダメージレベルはそこまで深刻ではないのか、遠目で見ても精々が中くらいだ。突き立てた部分で中なのだから、その他の部分など軽微だろう。肩口の装甲が綺麗さっぱり無くなっているのは今しがたの超電磁砲の弾にでも使用したのだろうと推測する。

「小型気化爆弾四個分に相当するエネルギー総量。どうやって防いだのか教えて欲しいわね」

「ふふ。生徒会長ともあろう者が狼狽ですか。ま、無理もない話かも知れませんが」

カチン。姫無のきめ細やかな肌にうっすらと血管が浮き出る。額には青筋が立っているというようにも見えた。

「だけどそれをむざむざ教えて上げるほど俺はお人好しじゃない。この試合が終われば教えてあげますよ、——貴方から生徒会長の座を奪ったあとでね!!」

言って、鞘無は宙を蹴った。浮遊した状態から一転しての攻勢。その右手には展開されたブレードが握られており、型も何もない杜撰な刃が姫無へと迫る。

と、そこで両者の間に割って入る影が一つ。全身を白く染める三人目の男性IS操縦者、織斑一夏だ。

「忘れたのか皿式。これはタッグマッチだツ!!」

ガンツ!! と鞘無のブレードと一夏の駆る白式の装甲が衝突した。ある程度のダメージを負うつもりでガードしていた為、一夏の表情にこれといった焦燥は見られない。白式の拡張領域には一撃必殺の近接型武器、雪片式型が存在するが、それを展開する必要はないと鞘無の太刀筋から判断した。ただでさえエネルギーを食う諸刃の剣を防御だけの為に展開するなど馬鹿げている。力任せに押し込んでくる鞘無の刃を腕ごと振り払い、一夏は一旦鞘無との距離を取る。

「一夏君。さっきは私が破ってしまったけど作戦に変更はしないわ。どうも私の機体じゃあの四人目に決定打を打てないみたいだし、ここは男の子の奮闘に期待しようかしら」

「っ、了解!」

姫無に背中を押され、一夏は地面を蹴った。狙うは皿式、鈴はパートナーに任せておけば問題ない。そう断じて、先手を取るべく仕掛ける。

「更識流、薔薇!!」

「うおうッ!?!」

体重を乗せた飛び蹴りを放つ。移動の速度と体重移動によって何倍にも威力を高められた蹴りを、鞘無はぎりぎりの所で回避した。アリーナの内壁に一夏の蹴りが叩き込まれ、甲高い金属音と共に観客席から軽い悲鳴が上がる。

基本的な身体能力に於いて、一夏と鞘無では大きな差があった。それも当然で、幼少より鍛錬を欠かさなかつた少年と能力に依存し甘やかされて育つた少年とでは天と地程の開きがあつたのだ。そしてそれは、鞘無本人も悔しながら自覚していた。最も、自覚したのはこの前のクラス代表対抗戦を終えてからであるが。

(ツチ、やっぱり俺と一夏じゃあ身体能力の面でちよつと、ほんのちよつとだけ不利だ。能力さえあれば会長の攻撃はなんとか出来るが、純粋な肉弾戦に持ち込まれると厄介極まりないな)

よつて、この時点で鞘無は一夏を相手取することを放棄する。近距離戦を得意とする一夏には同じく近接型の鈴をぶつけるのが得策だろう。機体操作を行いながら、回線を繋ぐ。

「鈴ちゃん! 一夏の相手は君に任せる!」

『は!?! いきなり何言つてんのよアンタ!』

「どうも俺と彼とじゃ相性が悪いみたいだ。俺は会長の方をなんとかするから、君は一夏を頼む!」

『相性とか以前の問題であるような気がするけど……っっていきなり一夏がこつち来たええいもう!!』

突然の変化について行けない鈴が苛立たしげに双天牙月を振り上げた。パートナーである鞘無に言いたいことは色々とあるが、それも先ずは目先の相手に勝つてからだ。

身を屈め、一気に地面を蹴る。直線上で、白式と甲龍が激突した。



「ほう。中々面白い事になっていないか」

アリーナ観客席の上部で、ラウラは面白そうに口角を上げた。その言葉に反応して、横に座っているシャルロットが口を開く。

「面白いって、一夏たちの試合のこと？」

「ああ。以前ドイツで会った時よりも成長しているようだ、機体操作はまだまだだが、戦闘だけを見れば隙という隙は見当たらない」

軍人であるラウラの目から見ても、一夏の動きは及第点を与えるに足るものだった。ISの操作が完璧ではないというのは、まだ触れて三ヶ月程なのだから仕方がない。寧ろ三ヶ月でよくあそこまで機体を操っていると褒めるべきところだろう。そして一夏の動きは、こと戦闘面に於いては文句の付けようがなかった。

「見ろ。中国の代表候補生が振るう武器を一夏はいなししている」

「いなす？」

「前にお父……更識先生が言っていたんだが、一夏は柔術というものをやっているらしくてな。相手の攻撃を防ぐでも躲すでもなく、受け流すんだそうだ」

「それって合気道みたいなもの？」

「近いと言っていたが、合気道とは違ってとことん殺傷に特化されているらしい」

一夏が習うその柔術とやらに興味を抱いたシャル。もしかしなくとも、師匠と言われている楯無に師事を乞うたものだろう。あの更識楯無の弟子、というだけでシャルは一夏の評価を上げた。シャルの行動の根幹には楯無がいて、彼が関連していれば何も考えずそういった結論に達するのが彼女である。恋は盲目と言うが、そもそも見ようともしないののである。

「でもほら、そう言うなら相手の……えーと何て言っただけ、ほら。四人目の」

現在生徒会長である姫無と対峙している四人目の姿を視界に収めながらシャルはその名前を思い出そうと頭を悩ませるが、残念ながら

出てこなかった。

そんなシャルとは対照的に、ラウラは彼の名前をあつさりと言口にする。

「ふん、皿式鞘無とかいう奴のことか」

「あれ。ラウラは知ってたの?」

「一週間くらい前にペアを組んでくれないかと言われた。追いついたが」

「あ、私もだよ。ペアを組んでくれれば優勝を約束するとか言ってたけど」

二人してパートナーに誘われていたことを知り、鞘無への印象が少しずつ固まっていく。

「ていうか、その時が初対面だったよね」

「ああ。私の記憶にはないぞ」

「軽薄な人なのかな……」

引いた表情を浮かべるシャルロット。どんな打算があったのかは分からないが、話したこともないような人物とペアを組むと本当に思っていたのだろうか。

「動きを見ても玄人には見えん。さっきの攻撃を防いだのは意外だったが、直ぐに片付くだろう」

「どっちが勝つと思う?」

「愚問だな」

シャルの問いかけに、ラウラは間髪入れず即答した。

ふん、と鼻を鳴らして腕を組む。

「どう考えたって、一夏たちに決まってる」

「だよねえ」



第一から第三までの各アリーナで二回戦が開始された頃、俺は千冬と二人で食堂に居た。少し遅めの昼休みだ。先程までアリーナで試合進行やらの調整を行っていたが、真耶が代わってくれたことであ

して少しの休憩時間をつくることが出来た。それは千冬も同じで、彼女の持ち場の第三アリーナは今は一年四組担任の安形が請け負っている。

こうして休憩の時間が重なったのは本当にたまたまで、お互い一人で食堂にやってきた所を鉢合わせ、こうして同じテーブルに着いているわけである。

本当なら腹も減っているのがつつりと食べたいところだが、生憎そこまでの時間は取れそうにないのでサンドイッチとコーヒーという軽めの食事を摂る。千冬もそこまでの時間は取れていないのか、選んだのは似たようなメニューだった。

アイスコーヒーを飲みながら、俺は千冬へと尋ねる。

「そつちの様子はどうだ？」

「大方は予想通りの組が勝ち上がっているな。専用機持ち共は流石に一回戦や二回戦で消えることはないだろう」

「そっか。こつちも似たようなもんだ。今頃姫無と一夏のペアが戦ってるんじゃないか」

サンドイッチを手に取りながら、二回戦のトーナメントを思い浮かべる。当日までペアを組めなかった生徒たちはトーナメントもランダムに振り分けられるので、ああして二回戦で専用機持ち同士が当たってしまうこともある。流石に少し早いような気もするが、そういうことも含めてのトーナメントだ。勝てば何も問題は無い。

「一夏か。姫無にうつつを抜かしてはいないだろうな」

「そこらへんの区別はきちんと出来る奴だろアイツは」

千冬の言ううつつを抜かすという言葉に、苦笑で答える。女に見惚れてやられるような真似はしないだろう。

「……楯無。お前何か勘違いしていないか？」

「ん？ 勘違い？」

「いや、何でもない忘れてくれ」

寧ろお前に気付かれたら一夏の命が危ないような気がする、と千冬は内心で青ざめていた。

残ったサンドイッチを口の中に放り込んで、コーヒーで流し込む。

余り遅いと真耶に負担を掛けてしまうので出来るだけ早く戻らねばならない。俺が席を立ったのと同時に千冬も皿を空にして立ち上がった。トレーを返し、アリーナへと続く廊下を二人並んで歩く。食堂からアリーナまではある程度距離があるというのに、ここからでも生徒たちの歓声が聞こえてくる。

「お祭り騒ぎだな」

「私たちの時もそうだったろう」

「千冬の周りにはファンクラブの連中が多勢集まったからなあ」

「それお前にだけは言われたくないんだが」

学園時代の千冬の周囲に集まっていたファンクラブの姿を思い出しながら笑うと、千冬にジト目で睨まれた。いや、決して自分のことを棚上げしているわけではない。思い出したくないだけだ。

「そういえば、昨日ナターシャから連絡があったぞ」

「ナタルから？」

ふと思いついたのか、千冬がそんなことを言った。

ナターシャ・ファイルス。俺たちの学園時代の後輩であり、現在はアメリカの国家代表を務める正真正銘の天才だ。機械類に滅法弱いという弱点は未だに改善されてはいないらしいが、俺や千冬の二年あとにIS学園を卒業した彼女はそのままアメリカへと帰国し、直ぐに国家代表へと着任したと聞く。俺がこのIS学園を卒業してから会ったのは第二回モンド・グロツソが最後なので、かれこれ二年程顔を合わせていないということになる。織村の方とは定期的に連絡を取り合っているのですこまで感じることはないが、ナタルには久しく会っていないこともあつてどことなく懐かしさを感じる。

「何の話だったんだ？」

「ああ。向こうでの都合もついたから、こっちに来るそうだ」

「それって臨海学校辺りか？」

「よく知ってるな。事前に聞いていたか？」

「いや。この前織村と話した時にそんなこと言ってたんだよ」

この前と言っても、三ヶ月近く前の話になるが。

俺の言葉に千冬は納得したのかそれ以上は踏み込まず、話を続け



た。

「そういうわけだから、生徒たちにはくれぐれも内密にな」

「分かってるよ。現役为国家代表とモンド・グロツソの部門別優勝者が来ると分かったらどうなるか火を見るよりも明らかだ」

入学式の日には俺が教室に入っただけでもあの騒ぎようだったのだ。世界的に有名な二人が現れると聞けばそれ以上の騒ぎになるに決まっている。

「……と、ではな更識先生」

分岐路に出たところで、俺と千冬はそれぞれが担当するアリーナへと戻っていく。

先程から聞こえてくる歓声が未だ止まないところを聞くと、試合が長引いているのだろうか。そんなことをなんとなく考えながら、俺はアリーナ管制塔へと入っていった。



一夏と鈴の戦闘は激化の一途を辿っていた。距離を詰めて攻撃しては離れ、離れては牽制しながら距離を詰める。近接型である二人らしい戦いだった。

何度目かの削り合いの後、二人は一旦距離を取る。警戒を解かない一夏に対して、鈴はニヤリと笑った。

瞬間、鈴の周囲の空間が俄かに歪む。

「ッ!!」

眼に見えない脅威を第六感で感じ取った一夏は、その場から瞬時加速を利用して離脱した。

直後、轟音。強烈な突風が、攻撃自体は避けた筈の一夏に襲いかかる。

「へえ、よく避けたわね」

自身の攻撃を躲かれたにも関わらず、鈴の表情は変わらなかった。いや、寧ろ口笛を吹く程には上機嫌だった。それは単純な一夏の危機回避能力だけでなく、現時点で代表候補生たる自分と互角以上に戦え

る一夏の戦闘センスそのものに対する称賛が含まれている。

今の攻撃を初見で躲せる人間などそう多くない。第三世代型空間圧作用兵器、衝撃砲『龍咆』。

空間自体に圧力をかけて砲身を生成するため、砲身も砲弾も眼には見えない。その上砲身射角がほぼ制限なしで撃てる。故に鈴の正面にしようが後ろにしようがお構いなしに不可視の砲弾は襲いかかる。

「眼には見えない筈なんだけど」

「見えなくても空間に圧力をかけりやそこは歪む。微妙な違和感を感じるんだよ」

「何、アンタ仙人かなんか？」

人間離れした一夏の感覚に、鈴が若干引き気味である。

そうは言っても、一夏も攻めあぐねている感は否めなかった。近づけば双天牙月、離れば龍咆。攻撃方法としては単純だが、単純であるが故に突破口は正面突破しか思い浮かばない。更識の技には遠距離用の技も存在するが、それが代表候補にまで登り詰めた鈴に通用するかは疑問だ。

雪片式型を使用することは控えたい。タッグマッチは片方が戦闘不能になった時点でほぼ決してしまう。エネルギーを多く消費する武装の使用は極力控えたいというのが一夏の本音であり、それはつまり更識流のみで倒すということと同義だった。

「————やっつてやるさ」

己に言い聞かせるように、一夏は呟く。

————こんなところで躓いていたら、師匠の背中なんて一生見えないもんな。

雰囲気が変わ化したことを察したのか、鈴もまた双天牙月を構えた。二基装備されているこの武装は連結することで投擲武器としても使用でき、今彼女が持っているのは既に連結されたものだった。

互いがタイミングを図っている。間違えれば即座に切り捨てられることだろう。それを理解しているからこそ、二人は視線そのままに動かない。

と。

「——ッハア!!」

先制するように鈴が先に動いた。双天牙月を投げるのではなく、刀として使用する腹積もりらしい。龍咆で威嚇しながら一夏との距離を一気に縮めにかかる。振りかざされた青龍刀を前に、一夏は自らの腕を突き出した。

「更識流、おみなえし女郎花!!」

甲高い金属音が、アリーナに響き渡った。

## #24 決着と憩い

『決いまったあああああつ!! 流れるようなコンビネーションで相手を全く寄せ付けず!! ダリル・フォルテ組が三回戦進出を決めました!!』

第三アリーナ。専用機を持つ二人が試合時間三分弱という早さで三回戦進出を決めた。ダリル・ケイシーとフォルテ・サファイアの二人は、ピットに戻ると直ぐ様展開を解除した。彼女たちの表情にこれといった喜悦は見られず、寧ろ面倒くさそうに溜息を吐き出す始末。

「はあ、やっぱダリイよなあ、このトーナメント」

「ダリルだけに」

「ぶつ殺すぞてめえ」

褐色の肌に青筋を浮かべて睨み付けるダリルだが、当のフォルテは全く気にしていない様子だった。

それより、と話題を変えるフォルテにダリルは諦めたように一際大きな溜息を溢した。

「生徒会長さんのところは怎么样了んすかねー」

「んー? ああ、織斑先生の弟と組んでるんだっけか」

別に興味ねーから忘れてたわ、とダリルは頭を搔く。十年ぶりに現れた男性IS操縦者に普通は多少なりとも興味を抱くものだが、生憎この三年生は全く興味がないらしい。その反応が面白くないのか、フォルテは口を尖らせた。

「あー。そんなこと言っていると足元掬われるツスよ? 何でも会長さんが直々にトレーニングしたらしいツスから」

「だったら当たった時はフォルテが相手しろよ」

「てことは必然的に先輩が会長さんとやることになるツスけど」

「……………両方フォルテにやるよ」

「いらないツス」

ぎゃあぎゃああと騒ぎ立てながら、二人は控え室へと向かう。その姿だけを見たら、ただの喧しい高校性にしか見えなかった。しかし侮る

ことなかれ、彼女たち二人は生徒の身でありながら卒業後は国家代表がほぼ確定している程の実力者である。一夏と姫無とは反対の山にいたので、当たるとすれば決勝。しかしこちらの山には他に篠ノ之・布仏組、サラ・セシリア組が名を連ねており、翌日以降の試合は激戦になることが予想される。

対して一夏たちの山はシャルロット・ラウラ組に布仏・更識組が順当に行けば勝ち上がっていくだろう。

だが、そんなトーナメントになど目もくれないのがこの二人である。

「早く戻ってシャワー浴びようぜ」

「私が先に使うツスよ。昨日じゃんけんで決めたもん」

「んだとフォルテ。昨日は昨日、今日は今日だろーが」

「先輩いっつもそうやってはぐらかすんスもん！ もうヤダ今日は絶対私が先に使うツス！」

彼女たちの興味関心は明日の試合よりも目先のシャワーに向けられていた。気だるそうな雰囲気そのままに、二人は部屋へと戻っていくのだった。



皿式鞘無はポーカーフェイスを保ちつつも、内心では歓喜していた。

あの生徒会長と互角の戦いをしている、出来ている。学園最強を背負う彼女と正面切って戦えているという実感が、彼の胸中で渦巻いていた。

こんな展開を待っていたのだ。原作の強キャラたちと互角の戦いを展開し、それを切っ掛けにして彼女たちとの距離を縮めていく。四月の簪との試合やクラス代表対抗戦の時の一夏との戦闘では上手く事が運ばなかったが、鞘無はこれまでの失敗は綺麗さっぱり忘れることにした。過去の失敗など、これから幾らでも取り戻すことが出来る。今日からが、皿式鞘無の本当のスタートである。

未だ牽制のつもりか動きを見せない姫無を相手に、鞆無は口角を持ち上げる。

「どうしたんですか？ 攻撃しないことには、ダメージを与えられませんかよ？」

「……………」

姫無は答えない。

その沈黙を突破口を掴めないことからくるものだと結論を出して、鞆無は更にその笑みを深くした。

押ししている。現時点では、間違いなくあの学園最強を相手にこちらが優位に立っている。試合開始直後の速攻。あの一撃で彼女は試合を決めるつもりだったのだろう。ミストルティンの槍はその攻撃力の高さ故に自身にも危険が付き纏う謂わば諸刃の剣だ。それを惜しげもなく使用したというのに、こうして鞆無は今もISを展開したままアリーナに立っている。その結果が、姫無を焦らせているに違いない。

(ここまででは順調、俺の能力を知らない生徒会長が狼狽えるのも仕方ない。このまま行けば、向こうよりもこっちが先に片がつきそうだな)

超電磁砲を放ったことで肩の装甲が無くなっているが問題はない。いざとなればまだ反対側の装甲も残っている。鞆無にとってISとは能力を隠すための隠れ蓑でしかない。男であるというのにISを操縦できるのも蓋を開ければ第三位の能力を使ってISコアに干渉しているからに過ぎないし、IS学園に入学するためにそうしたただけなのだ。だからこそISは必要最低限の必要性しかない。流石に自身で能力を使用すればどこぞの研究所に目をつけられて実験材料にされることは彼にも理解出来ていた。

(ここまで能力を使いこなせてりやあの学園最強相手でも戦えることは理解できた。後は、押し切るだけだっ!!)

尚も動く気配を見せない姫無に痺れを切らし、鞆無は地面を蹴った。

全ては、己の果たすべき野望のため。鞆無は近接型のブレードを右

手に展開して、力の限り振り下ろした。

鞆無が攻撃を仕掛ける数十秒前。姫無は眼前の四人目の謎の力についての考察を重ねていた。ミストルティンの槍は姫無の霧纏ミスティアス・レイディの淑女が持つ技の中でもかなりの大技である。高い攻撃力を誇るそれを受けてこれまでダウンに追い込めなかった相手は極僅か。片手の指で足りる程である。その中に四人目がカウントされるというのがかなり嫌だったが、現実を受け止めなければ進展はない。よつて思考を切り替える。どうして鞆無は中波程度のダメージで済んだのか。

（私の一撃よりも向こうの装甲の防御力の方が高かった？ いえ、あの機体は防御特化ではないし例えそうであってもミストルティンの槍を防げるとは思わない。槍を命中させる間際に感じた違和感、そこに何かありそうだけれど）

姫無が鞆無のサンライト・トウオーノの装甲に槍を突き立てるその直前に感じた奇妙な違和感。

普段感じたことのないその違和感は、姫無の中で徐々に大きくなっていく。

（可能性だけなら、私の操作するナノマシンに干渉することも理論上は不可能じゃないけれど。でもそれってどんな固有武装があれば……）

そこまで考えていた姫無だが、そこで思考は一旦遮られることとなる。今まで何やらいやらしい笑みを浮かべていた鞆無が、ブレード片手に斬りかかってきたのだ。

それに対して、姫無は動かない。厳密に言えば動く必要がない。

姫無の周りにはナノマシンによって操作された水が膜のように形成されており、ただの武装程度で斬り開くことは不可能だからだ。

普段ならば、だが。最初の一撃で押しきれなかったことで、姫無は一つの仮説を立てた。それは現実的には到底不可能な推論に過ぎなかったが、しかし理論上は確かに不可能ではない仮説。

姫無の操作するナノマシンに干渉し、乗っ取る又は操作性を低下させる武装。粒子レベルのナノマシンに強制的に干渉出来る武装など聞いたことがないし、完成してたとするならばそれは第三世代の範疇に留まらない。

(でもあの機体を造ったのは、Y・Cの梶さんか。あの人だと不可能だとも言い切れないような気がしてくるのよね)

豪快に笑う赤スーツの青年を頭の中で思い浮かべて、姫無は苦笑した。

Y・Cの創設者にして現社長。更識の家とも付き合いの長い彼ならば、突拍子もないアイデアも現実にしてしまいそうである。

だからこそ、姫無は動かなかった。

迫るブレード。他の生徒が相手であれば、水の膜に阻まれて自身にまで刃が届くことはない。しかし姫無の予想した通りであれば。

(っ、やっぱりきた)

ズツ、と水の壁に刃が突き刺さる。

次々とせり上がり押し返そうとする水の壁を、鞆無のブレードが強引に斬り崩した。そして同時に感じる、最初の時と同じ違和感。この時点で姫無は自身の立てた仮説がほぼ正しいことを確信する。常識に囚われていては到底たどり着かない結論だが、姫無はこの仮説に自信を持っていた。

常時形成されていた水の膜を突破できたことが嬉しかったのか、鞆無の表情が喜悦に歪む。そのブレードが姫無に迫る。

火器は殆ど搭載していない霧纏の淑女であるが、何も全く無いわけではない。そして姫無の武器は、何も物理的な戦闘能力だけではない。

「———電磁干渉」

ピクリと、鞆無の身体が反応する。それを見て内心で確信を得た姫無は、更に続けた。

「君、私の操作するナノマシンに干渉してるわね。どうやってるのかは知らないけど、アクア・ナノマシンへの命令が書き換えられている」  
見る見るうちに鞆無の顔色が青くなっていく。まさか言い当てら



れるとは思ってもいなかったのだろう。この時点で、完全に戦いの流れは姫無へと傾いた。楯無をして人たらしとまで言わしめる彼女の前でそんな表情を見せてしまった時点で、既に人心掌握は完了しているようなものだった。

抵抗のつもりなのか、決して口だけは割らない鞆無だったが、表情から心理を読み取ることなど造作もない姫無には意味の無いことだ。

ナノマシンは干渉されてしまう。

なら、ナノマシンは使用しなければいい。単純な火力でもってして、この戦闘に決着を。

(バレた!?! いやハツタリだ、こんな短時間で見破られるなんて有り得ない。生徒会長は人たらし、こうやって俺の動揺を誘っているに違いない!)

この時点で姫無の術中に完全に嵌ってしまったことに、彼はまだ気がついていなかった。

そして彼の耳に、耳慣れない音が届く。ジャコン、と何かが装填されるような音だった。見れば姫無の持つ蒼流旋からは幾つもの砲身が顔を出している。所謂ガトリングガンと呼ばれるものだった。

姫無の纏う霧纏の淑女には火器は殆ど搭載されていない。が、先も言ったように全くないわけではない。この四連装ガトリングガンは、姫無の所有する数少ない火器だ。

これまで表情を変えなかった姫無の顔色が、初めて変わる。

ニヤア、と。人を嵌めた時の快感を喜ぶような、あくどい表情だった。

「これは、どう防ぐのかしら」

飛び込んできたがために、彼我の差はほぼゼロ。ゼロ距離での攻撃を防ぐ手立てを鞆無は持っているのか。どう対応するのかを少しだけ楽しみにしながら、姫無はガトリングガンを撃ち込んだ。

少年の悲鳴は、銃撃音に遮られて聞こえなかった。



「お、向こうも終わったみたいだな」

横目で姫無がガトリングガンを放ったのを確認して、一夏は小さく息を吐いた。眼前には、シールドエネルギーが空になった鈴が膝をついてこちらを見上げている。

「あ、アンタ。今のなによ?」

「ん? 何って?」

信じられないようなものを見た顔をしている鈴に、小首を傾げて一夏が返す。

「アタシの双天牙月を折って投げ返すって何よ!」

「ああ、あれな。女郎花って更識流の技だよ」

「そういうことを言ってるじゃなくて! 振り下ろされる双天牙月掴んで折って投げ返すって人間業じゃないわよアンタ!」

「いやあ、人間やれば出来るもんだな」

棒読み気味に語る一夏に、思わず鈴は歯噛みする。彼が数年前より武道を嗜んでいることは知っていた。それがかなりの実力であることも理解しているつもりだった。しかし、これは余りにも予想外過ぎた。まさか真剣白刃取りを目の前でやられるなど、誰が予想出来ようか。ISの武装というのは総じて一般の武器よりも頑丈だ。ISの装甲を破壊する銃弾を打ち出すのなら、銃身もそれなりの強度がなければならぬしブレードも装甲に匹敵する程の強度が求められる。当然鈴の双天牙月もその例には漏れず、かなりの強度を誇っている筈だった。

だが、余りにもあっさり和一夏は双天牙月をへし折った。

突然の出来事に硬直する鈴。その隙を一夏が見逃す筈もなく、直ぐ様折った双天牙月を鈴目掛けて投げつける。だがそこは流石に鈴とて代表候補生である。一瞬で我に返って投げられた双天牙月は弾いたが、目の前には既に雪片式型を振りかざす一夏の姿があった。

そのまま一夏が甲龍の肩右肩から斜めに一閃。鈴のエネルギーが尽きたのだった。

悔っているつもりなど無かった鈴だったが、やはり心の何処かで傲っていたのかもしれない。代表候補生という肩書きに、余計なプライドを乗せていたのかもしれない。それを自覚して、鈴はハアと溜息を吐き出す。まさかそれを一夏に痛感させられるとは思っていなかった。

「……ま、仕方ないわよね。完敗よ、アタシに勝ったんだから優勝しないと承知しないわよ」

「おう、元よりそのつもりだ。あの人に黒星付けるわけにはいかないからな」

「……そっか」

「ところで、アレは回収しなくていいのか？」

一夏の指し示す先には、無残に打捨てられた鞆無の姿。絶対防御が発動していない所を見るに大したことはなさそうだが、気を失っているのかピクリとも動く気配がない。

「ああ、いいわよあんなヤツ。元々そこまで親しくないんだし、男なんだから自分でなんとか出来るでしょ」

鞆無がアリーナから教員たちの手によってアリーナから運び出されたのは、それから五分後のことだった。



IS学園タッグマッチトーナメント一日目が無事に終了し、生徒たちの多くは食堂で夕食を楽しんでいる。疲れを癒すために風呂へと足を運ぶ生徒も多いが、中には既に自室で休む者も居た。

そんな中、俺はと言えば相も変わらず学年主任室であまりの仕事量に忙殺されそうになっていた。

くそ、何でこんなに仕事量が多いんだ。二年や三年の学年主任たちはそこまで仕事量が多くないっていうのに。これはあのジジイの嫌がらせか何かなのだろうか。だとしたら嫌でもトーナメント終わったら有給取ってやる。無理でも何でも。

「明日も二試合。……お、姫無たち明日簪たちと当たるのか。こりや

また良い試合になりそうだ」

トーナメントを確認しながら自分で淹れたコーヒーを啜る。今日十杯目のコーヒーは、やはり真耶の淹れたものと比べると味も匂いも劣るものだった。

と、唐突に部屋の扉がノックされる。午後六時を過ぎたこの部屋にやって来る人間は限られてくるが、大方姫無か簪、千冬だろうとあたりを付けて返事をする。俺の言葉を聞いて入ってきたのはやはり俺の思いつく人物だった。

「どうした?」

「うん、なんとなく兄さんと話したくなって」

外側にはねた水色の髪の毛を揺らしながら、姫無が入ってきた。手に置いてある来客用のソファに座らせ、コーヒーを淹れてやる。

「ありがとう。……あんまり美味しくないわね」

「真耶みたいに上手くは淹れれん」

「ふふ。兄さんにも苦手なことはあるものね」

そう言つて笑う姫無。俺は完璧超人じゃないんだから当たり前のことだろう。美味しくないと言いつつもコーヒーを飲む姫無に、用件を聞くことにした。

「で、何か用だったのか?」

「何よ、用が無いと来ちゃいけないの?」

「いや普通は何の用も無いのに学年主任室には来ないぞ」

「良いのよ。ほら私生徒会長だから」

「何も関係ないからな?」

妹が兄の顔を見に来てくれるというのは素直に嬉しいが、生憎と今は仕事中だ。相手をしてやれる暇は無さそうなのである。

が、そんなことは関係ないところら側にやって来て姫無は俺の後ろから首へと腕を回してくる。

「あのな姫無、今俺仕事中」

「うん分かってる」

分かっちゃないよな。これ絶対分かっちゃないよな。

「ねえ兄さん。今日の試合のことなんだけど」

「ん？」

唐突に始まった話題に、顔は動かさずに聞き返す。

「ナノマシンに干渉するって、出来ると思う？」

「▽ガンダムなら出来る」

「？ 何の話？」

「いやすまん忘れてくれ」

思わず即答してしまったがこの世界にガンダムという概念は存在していないのである。それにしてもナノマシンに干渉か。大方四人目のことを言っているんだろうと予想する。俺の考えが間違っていないければ、皿式鞘無という少年も俺や織村と同じ存在である可能性が高い。となれば、何かしらの能力を所持していても不思議ではない。ナノマシンにまで干渉できるほどの特典なんてのは少ないだろう。

——例えば、電撃使い。某都市の第三位のような応用性が高いものであれば、或いは可能かもしれない。

「理論的には可能だと思うが」

「そっか。やっぱりあまり現実的ではないわよね」

自分でも理解していたのか、姫無はむうと小さく唸った。

その際、彼女の体重が俺の背中へと掛けられる。ふむ、また少し大きくなったんじゃないか。どこがとは言わないが。

「んふふー。どう兄さん、また少し大きくなったのよ」

声には出さなかったのに向こうからわざわざ言ってきた。妹に恥じらいというものはないのでだろうか。

「あんな姫無。そういうのは兄妹でも言うもんじゃないと思うぞ」

「大丈夫よ、兄さんにしかこんなこと言わないから」

確かに他の男にこんなことを姫無が言っていたら少しばかりお仕置きをする必要が出てきてしまう。その相手の方に。

「そういうえば、明日簪と当たるだろ」

トーナメントを見ながら、後ろから抱きついたままの姫無に言う。生身でも稽古では何度も組手をしている二人だが、ISを展開しての実戦は初めてだ。片やロシアの国家代表、片や日本の代表候補生。一対一なら姫無が有利だろうが、簪のパートナーは長年姫無に付き添っ

ている虚である。姫無の癖なども熟知しているだろうし、整備科の  
Eースである彼女の操作技術も軒並み高い。そこに一夏を加えた戦  
いは、かなりの激戦になることが容易に想像できた。

「ええ、久しぶりに簪ちゃんとの本気の戦いよ」

「簪も燃えてるだろうな」

「今頃虚ちゃんと打ち合わせでもしてるんじゃないかしら」

朗らかに笑う姫無。きっと彼女も妹と本気で戦えることが嬉しい  
のだろう。俺も管制塔から見させてもらうつもりだが、出来れば間近  
で観戦したいものだ。

「でも負けるつもりなんて無いわよ。生徒会長として、姉として。ま  
だまだ簪ちゃんに遅れを取るわけにはいかないわ」

「……俺は教員として平等な立場を取らないといけないから表立つて  
の発言は避けるが、頑張れよ」

「うん、頑張る」

ギョツと腕に力を込めて、姫無は俺の肩に顎を乗せて言った。

それはそうと。

俺はどうしても、一言姫無に言っておかなければならないことがあ  
る。

それは彼女がこの部屋に入ってきた時から、ずっと気になっていた  
ことだ。

「なあ、姫無」

「なあに、兄さん」

猫撫声で返事をする姫無に、俺は凄まじく平坦な声で告げた。

「——何でお前裸Yシャツなの？」

まさかその格好で廊下歩いてたのか？　なあ。

## #25 姉と妹

IS学園タッグマッチトーナメント二日目。今日より行われるのは三回戦から四回戦までの二試合で、昨日使用したアリーナ三つで並行して執り行われる。二日目でありながらも、観客席を埋め尽くさんばかりの来賓たちの数は更に増加していた。彼らが見に来ているのは主に代表候補生などの専用機持ちたち。それらがぶつかり合うことの多くなる二日目以降、各国の来賓や関係者たちの目はより鋭くなっているのだ。

より具体的に言うならば、彼らの注目はIS学園最強を背負う更識姫無と世界三番目の男性IS操縦者織斑一夏。コンビネーションは既に国家代表クラスとまで言わしめるダリル・ケイシーとフォルテ・サファイアの代表候補生コンビ。整備科首席の布仏虚と国内若手ナンバーワンと言われている更識簪。フランスとドイツの代表候補生、シャルロット・デュノアとラウラ・ボーデヴィツヒ。そしてリライ・スターライの愛弟子にしてイギリスの代表候補生、サラ・ウエルキンとセシリア・オルコットに向けられていることだろう。このあたりの生徒は既にある程度知名度も高く、どの国の関係者もチェックを入れていることだろう。本来であればその中には中国の新星鳳鈴音と世界四人目である皿式鞘無も入っていたことだろうが、トーナメントの巡り合わせにより既に敗退してしまっている。

昨日行われた二試合によって既にトーナメントのペアは半分以下にまで減っており、多くの生徒がこの二日目からは観客として試合を観戦することになる。当然授業を止めてまで行うトーナメントなどで敗退した生徒たちにもそれなりの課題は課せられるが、彼女たちにとっては目の前で行われるレベルの高い実戦を観るほうが余程勉強になるだろう。正直出した課題がきちんとこなされるか甚だ疑問だ。

午前八時四十分。

試合開始を二十分後に控えて、各アリーナの電光掲示板に緒戦の組み合わせが表示される。それらを目の当たりにして、周囲の生徒たちからの歓声上がる。そんな声を遠くに聞きながら、俺は第一アリー

ナの管制塔で眼下を見下ろしていた。横には昨日と同じく真耶が控えており、試合前の最終調整を行っている。

「さて、二日目だ」

「今日から皆さん厳しい戦いになりますね」

真耶の言う通り、今日から専用機持ち同士や代表候補生同士の戦いが至るところで発生する。何しろ三回戦の一発目からそうなのだ。これは勝ち上がっていく上では避けて通れない道なので仕方ないことだが、それでもきつと対戦者は互いに嫌がっていることだろう。

今から俺が観る、この試合を除いては。

「妹さんたち、こんなに早く当たるなんてちよつと可哀想ですね」

「ん？ そんなことないぞ。二人共随分やる気だった」

「そうなんですか？ 普通姉妹同士で戦うなんて嫌がりそうなものですよ」

「まあ、うちはちよつと特殊だからな」

俺の妹たちに限って言えば、遠慮なんてものは存在しない。互いが互いの掲げる信念があり、それは決して譲れないものだ。故に負けられない。俺の父である更識筭がそう説いたことも影響しているんだろうが、二人共先程会ったときの表情は獰猛な肉食獣のようだった。この対戦だけに限って言えば、一夏と虚はサポートに徹することだろう。前線で戦うのは姫無と簪、まず間違いない。

姫無は妹に立ちはだかる壁として。

簪は超えるべき目標として。

全力で試合に挑むことだろう。だからこそ、見る価値がある。一夏と虚もサポートとは言えそうそう簡単にその役目を全うさせてもらえらるとは考えてはいない筈だ。特に一夏の相手となるのは整備科のエースにして姫無の従者の虚。ことI Sの知識と状況把握能力は教師にすら迫る実力者である。その彼女を相手に、一夏は姫無のサポートを行わなくてはならない。昨日以上に厳しい試合になるだろうことは想像に難しくない。

逆に虚も一夏のことを警戒している筈だ。何せあの姫無がみつちりと鍛えたのである。昨日の試合を見る限り、少なくともそこいらの



生徒のレベルではない。

「更識先生はどちらが勝つと思えますか？」

興味本位から尋ねる真耶に、俺は暫し考えてから答える。

「……この試合ばかりは予想するだけ無駄だな。俺にもどうなるかは分からない」

本当に、どう転がるか判らない。生徒会長だとか代表候補生だとかそんな肩書きは抜きにして。これが決勝戦でもおかしくない程の対戦カードだ。

時計を確認する。九時まで残すところ後五分程だ、今頃四人は控え室で準備を終えている頃だろう。これから始まる戦いを想像して、少しだけ口元が綻んだ。



「……何でだ」

殆どの生徒がアリーナへと足を運び三回戦を観戦しに行く中、少年は一人自室で頭を抱えて塞ぎ込んでいた。ベッドに腰を下ろし、髪の毛をガシガシと掻き乱す。その顔には苛立ちが如実に表れている。

原因など言うまでもない。昨日のトーナメントの敗戦だ。四月のクラス代表決定戦、クラス代表対抗戦、そしてこのタッグマッチトーナメント。一つとして彼の思い描いた通りに事が進んだことはなかった。

なんだ、まるで神に嫌われているようではないかと鞘無は唇を噛み締める。分かっている、人生生きていればこういうツイていないことも起こりうる。しかし、これは余りにも非道い。

「……途中までは順調だった。鈴とペアを組んで、生徒会長と互角の戦いを演じる所までは完璧だったのに……！」

代表候補生である鳳鈴音とタッグを組み、他のペアを圧倒して優勝する。それでこれまでの失敗は取り返せる筈だったのだ。何せ自身は簪や一夏と互角の実力を持つ四人目、注目度も実力も申し分ない。後はトーナメントのくじ運とその日の体調さえ整っていれば、何も問

題はないと踏んでいたのだが。

「くそ、もう少し鈴とコンビネーションの動作確認をしておくべきだったか……？ 向こうは近接型だし、無闇に俺が突っ込むこともないと思ってたが、彼女には荷が重かったか」

自分が近接戦に特化していない分、鈴には頑張ってもらいたいところだったがどうやらその考えが甘かったらしい。一夏と姫無の両名は想像以上に戦い慣れており、鈴はおろか自分自身ですらギリギリのところまで後塵を排したのである。

いや、とそこまで考えて鞆無は頭を<sup>かぶり</sup>振った。

生徒会長である姫無とは互角の戦いが出来ていた。自身に非は殆どない。向こうの切り札を打ち崩し、あと一步の所まで確実に追い詰めていた。姫無の対戦中の奥歯を噛み締める様がいい証拠だ。後はタイミングと運だけだったと断言できる。そういえば昨日はあまり体調が良くなかったような気もするし、と鞆無の脳内で都合の良い出来事がでっち上げられていく。

「なんにしろ、取り敢えず企業の間人たちはアピール出来た筈だ。この世代を背負って立つのは一夏だけじゃない、俺も居るんだってことを知らしめられた」

負けたとは言え、その内容は卑下されるようなものではない。あの学園最強とぶつかり合い、一矢報いることが出来ていたのだから。そうして思考をプラスへと転換していくうちに、いつのまにか鞆無の脳内は次のイベント、臨海学校へとシフトしていく。

「次、次取り返せば大丈夫だ。確か臨海学校じゃあ銀の福音が襲撃してくる筈。それを他の専用機持ちに混じって撃退すれば、俺の株は更に上がるはず」

この時点ではまだ鞆無はナターシヤの専用機が銀の福音でないことを知らない。

どころか、彼女に恋人がいることなんかも知らなかった。故に、彼の脳内ではナターシヤを恋人にしようとする作戦も絶賛考案中だった。年上金髪美女というワードを思い浮かべて、僅かに鞆無の口元にやける。この場にももしも姫無や簪がいれば、ドン引きは免れないよ

うな表情だった。

「俺は過去を振り返らない男。先を見据えて、今は静かに牙を研ぐ……」



午前九時を回り、第一から第三までのアリーナで一斉に三回戦が開  
始された。ブレードがぶつかり合う剣戟の音や発砲音、衝突の金属音  
がアリーナ内に反響する。

そんなアリーナの一つで、姫無と簪の姿があった。姫無は『ミステリアス・レイディ霧纏の淑女』を、簪は『打鉄式』をそれぞれ展開して真正面に向  
き合っている。試合開始のブザーが鳴ってから十秒、未だに二人に動  
きはない。

簪は一つ息を吐いて、目の前の姉へと視線を合わせる。

自らが目標と定める姉。だが、いつまでも目標のままにするつもり  
などない。いつかは超えていかなくってはならない。ならば、今日こ  
こで。

「……お姉ちゃん、今日こそ、超える……!」

静かな、しかし確かに意志の籠った言葉を耳にして、対する姫無も  
眼を細めた。

「負けないわよ。私だって、まだ超えるべき壁があるんだから」

それ以上、二人に言葉は要らなかった。お互いの考えていることな  
ど手に取るように理解出来る。簪は目標を超えるために、姫無は更  
上の目標のために、負けるわけにはいかないのだ。

姫無は右手に蒼流旋を、簪は夢現を展開し互いに構える。

そして。

二機のISは、アリーナ中心部で瞬く間に激突した。

「さて、一夏君には私の相手をしてもらおうかな」

中心よりも離れた位置に陣取っていた虚が、気軽にそう言った。彼  
女が纏うのはフランスが開発した第二世代型ラファール・リヴァイ  
ヴ。しかし、ただの訓練機ではない。このトーナメントの為に虚自ら

がカスタマイズした、言うなればラファール・リヴァイヴ Ver. U である。操縦し易く汎用性の高いこの機体の装甲の一部を外し、そこに彼女自ら立案した遠距離型武装を取り付けてある。近接戦を得意とする一夏と戦うために整備された対一夏用ラファールだ。通常のラファールよりも幾らか無骨なその機体を前に、一夏は苦笑を漏らす。

「それ、完全に俺用に改造されてませんか？ 昨日までは普通のラファールだったじゃないですか」

「ジェバンニが一晩でやってくれました」

「先輩そんなネタキャラじゃないでしょうが」

「一度言ってみたかったのよ」

冗談のように言う虚に対し、一夏は答えつつも内心では警戒を怠らない。整備科の首席である虚の腕前は一夏も十分理解している。たった一日で機体を改造してくる彼女の力量には流石に驚いたが、それが奇をてらったものでないことは明らかだった。遠距離武装を加えたということはその目的は一夏の足止めであり時間稼ぎ。姫無と簪の対決が決着するまで、一夏を増援に行かせないのが目的だろう。

それが分かっているからこそ、一夏はゆっくりと肩幅に足を開き、両腕を構えた。柔道や空手には見られない、随分と独特な構えだ。

「……油断してくれそうにはありませんね」

「当然です。俺にとっちゃ、対戦相手皆格上みたいなもんですからね」  
ISに乗り始めてまだ三ヶ月にも満たない一夏にとって、周囲の女子生徒たちは皆お手本のような存在だった。姫無や簪をはじめ、多くの生徒たちに操縦技術では未だ敵わない。油断などしている暇はない。

「向こうも始まったことですし、こちらもそろそろ始めるとしましよ  
うか」

「そうですね。……じゃあ、全力で行きます」

直後、轟音。

甲高い衝突音を皮切りに、戦いの幕が切つて落とされた。



真上から振り下ろされた超振動薙刀、夢現を水のヴェールが包み込むようにして受け止める。姫無の専用機、霧纏の淑女は他のISと比べて装甲が少ない。それをカバーするように左右一対で浮遊するアリア・クリスタルというパーツから展開されている水のヴェールが、薙刀のそれ以上の侵入を拒んでいた。

振動させることで通常の刃物よりもかなり威力の高い夢現だが、刃が通らないのでは意味がない。歯噛みする簪へ、反撃と言わんばかりに姫無は口角を吊り上げる。

気がつけば、簪の周囲に霧が発生していた。それを見て、直感的に簪は危険を察知する。スラストアーを噴かせてその場からの離脱を図ろうとするが、それよりも姫無のほうが早かった。

瞬間、爆発。それに伴って熱波がアリーナを駆け巡る。

『清クリアき熱ハッ情』。ナノマシンで構成された水を霧状にして散布し、瞬時に気化させることで水蒸気爆発を巻き起こす。拡散範囲は限定されるものの、有用性は非常に高い。威力も折り紙つきである。

未だ水蒸気で視界がままならないまま、姫無は爆心地へと突っ込んだ。この程度で簪が倒れる訳が無いという確信からの行動だ。この程度の小手調べでやられるように育てられてはいない、だからこそ必ず反撃してくるだろう。その予想は見事に的中する。

ポッ!! と霧を裂くように一筋の熱戦が姫無を襲った。それを身体を半身にするだけの最小限の動きで躲して先を見据える。そこにはやはり簪の姿があった。機体の所々に損傷を見られるが、どれも軽微なもので戦闘に支障を来す程のものではなさそうである。

「……まだまだ、これから」

ガコン、と打鉄式式の背中に搭載された二門の連射型荷電粒子砲が姫無に狙いを定めた。先程の熱線も、この荷電粒子砲『春雷』から放たれたものだろうと推測する。接近する最中だったために、彼我の差は無いに等しい。前傾の状態から完全に躲すのは、普通の人間では不可能だ。

間断なしの荷電粒子砲が姫無を襲う。

一直線に突き進む熱線を、姫無はアクア・ナノマシンを壁にして威力を殺しにかかる。水のヴェールに触れた瞬間水の蒸発に伴う水蒸気が爆発的に広がる。完全に相殺することなど出来ないことは分かっている。一瞬だけでも時間を稼ぐことが出来れば十分。そう考えての行動だ。

「……………ここまででは、想定内」

簪の言葉に、姫無は思わずハッとすする。

わかり易いほどの荷電粒子砲の連射。それを防ぐために壁にした水が瞬時に蒸発して発生する水蒸気。周囲を水蒸気が埋め尽くすことで、その視界は極端に悪くなる。

そこまで簪は計算していた。全てはこの一撃を当てるための布石。

「……………山嵐」

打鉄式式の最大武装。

第三世代技術であるマルチロツクオン・システムにより六機×八門のミサイルポッドから独立稼働型誘導ミサイルを発射する。簪が数年の歳月を掛けて完成させた、切り札とも言える代物だ。

水蒸気が場を埋め尽くす前に、既にターゲットの照準は合わされている。独立で稼働する誘導ミサイルは、発射されればターゲットに直撃するまで止まらない。

肩部ウイングスラスターに取り付けられた六枚の板がスライドし開かれる。その内部から粒子組成を終えた八連装ミサイルが六ヶ所、計四十八発が一斉に顔を出した。

視界の晴れない中、凄まじい音と共に四十八発のミサイルが容赦無く発射される。

姫無をターゲットにしたミサイルはマルチロツクオン・システムによつて寸分の狂いもなく突き進む。幾ら姫無と言えども、一挙に押し寄せるミサイル全てを迎撃出来るとは思えない。それと同時にこれで姫無を落とせるとも簪は考えてはいなかった。だが、それで構わない。アクア・ナノマシンの操作にはかなりの集中力を必要とする筈であり、今の攻撃を防ぐにはナノマシンを利用しなくてはならないだろ

う。となれば全方位にアクア・ナノマシンを展開し、防御に徹する筈である。それだけの水を展開させれば、エネルギー量も大幅に削られる。

持久戦は覚悟の上。後は如何に上手く立ち回れるか。

そこまで考えて、簪はミサイルの着弾した地点を見つめる。

そして聞いた。先程までと変わらない、姉の声を。

「……今のはちよーつと危なかったかしら。流星に予想外だったわね」

「……っ！」

視界に捉えた姫無の機体には、大きな損傷は見られなかった。軽微な損傷というわけでもないが、そこまで気にするレベルのものでもない。自動追尾するミサイルから逃れるには撃墜するしかない。四十八発すべてのミサイルを迎撃したと言うのか。むちゃくちゃだ、と簪は思う。これで終わると思っていなかったものの、もう少し目立ったダメージを与えられると思っただけに歯噛みする。

そんな簪を見て、姫無は僅かに口角を持ち上げて。

「じゃ、そろそろ私も」

言葉と同時。

姫無の姿が、簪の視界から消えた。

## #26 不穏と三回戦

「ふん、それで？ 貴様はどうしたいと言うのだ」

京都、天狗岳山中。

陽も暮れて宵闇の降りた空を眺めながら、女性は携帯電話を片手にそう言った。風に靡く黒髪が女性の頬を撫でる。周囲を雑多な木々に囲まれたこの場所には、女性の他に傍に控える男性が一人。随分とガタイの良い男性だった。右目を縦に走る切り傷が目を引く男性は、女性の会話をただ静かに聞いている。

「巫山戯た事を吐かす。以前の失敗を棚上げとは、いつから貴様は其れ程偉くなったのだ？」

通話口から抗議の声が上がったのか、先程よりも音量がやや大きくなる。

そんな事は全く気にせず、女性は皮肉をふんだんに含んだ言葉を突き付ける。

「困るなあ、困るのだよ。私たちは何でも屋ではない。貴様たちの手助けを簡単に請け負うとも思っているのか？ こちらの利益も明確に揭示出来ない時点でたかが知れているよ。所詮は思いつきの作戦なのだろう？ そんなことであの場所が墮ちると考えているのか、馬鹿馬鹿しい」

そう言い切って、女性は通話を終わらせた。切る間際に向こう側が何やら五月蠅かったが、そんな事気にも止めずに。

通話を終えて用の無くなった携帯を傍に控えていた男に投げ渡そうとした所で、再び着信を知らせる音楽が響く。チツ、と苛立たしげに女は舌打ちした。どうせ先程の相手がかけ直してきたのだろうと思ひ、出ることなく切ろうとして、不意にその手が止まった。

電話の相手は、先程の者ではなかった。今までの苛立ちは何処かへと消え去り、女は口角を上げる。

「私だ」

『ご無沙汰しています。ミス京ヶ原』

「貴様もな」



声は、若い女のものだった。これまで幾度かの面識があるのか、二人の口調に社交辞令的なものは含まれていないように感じる。最初の挨拶も最低限で済ませ、さっさと本題へと入っていった。

『先程、連中から連絡があつたのでは？』

「……喉けたのは貴様か？」

『まさか。私は提案しただけですよ、計画を立案したのはあくまで彼らです』

「つくづく人が悪いな貴様は。そんなことさせても結果は眼に見えているだろうに」

『連中が表立って動いたという事実が大切なのですよ。そうすれば良い隠れ蓑になるでしょう？』

人の悪い笑みを浮かべているのが通話越しにもはつきりと想像出来た。悪人だと罵ってやりたいところだったが、所業的には此方の方が余程悪党だと自負している手前言葉を飲み込む。

「で？ やらせるのか」

『ええ、三日目、遅くとも四日目には動くと思いますよ』

「救えん連中だな。お前の掌で踊らされていることに気がつきもしないとは」

『だからこそ可愛げもあるというものですよ』

「使い捨ての駒にしている癖に言うじゃないか」

『彼らも明確な指標が出来て喜んでるんじゃないですか。これでもうやく念願が叶うとでも考えているかもしれないですよ』

「だとしたら奴らに先はなからう」

互いに笑い、通話を切る。

「矛」

「は、帰還されますか」

「ああ、もうこの場所に用はない」

用済みだと言って女、京ヶ原劔は矛と共に山を降りていく。

漆黒の夜空に紛れるように、二人の姿はその場から見えなくなつた。



皿式鞆無がその場に居合わせたのは、ただ単に偶然だった。

昨日の試合の敗北が尾を引いて他の試合を観戦する気になれなかった彼だが、少し頭を冷やすと直ぐに冷静になり部屋を出てアリーナへと向かった。寮は勿論のこと、教室や廊下などにも生徒たちの姿は全く見られない。まるで休日のようなようだ。しかし正反対にアリーナには生徒全員が密集しており、アリーナの外側からでもその歓声と熱気に驚かされる程である。

そんなアリーナへと続く一本の廊下を、鞆無はポケットに手を突っ込んだままのろのろと歩いていった。

気持ちは切り替わったとは言え、他人の試合なんぞに興味のない彼にしてみればただの試合観戦など拷問に近いものだ。試合を見ての課題が課されているために仕方なしに足を運んでいるが、本音を言えば部屋で休むかクラスの女子生徒たちとお茶でもしていたかった。

「はあ。まあこういう行事に関わっておくことが重要だからな」  
などと自分を必死に言い聞かせながら、鞆無は人気のない廊下を進む。肩口で切り揃えられた茶髪を揺らしながら歩く鞆無はふと、その視界に不可思議なモノを捉えた。厳密に言えばモノではなく、者。つまりまるところ人間だった。

「……んん?」

廊下の窓から覗き込むように、そのおかしな人間たちを見つめる。数は三。いずれも黒いスーツを纏いサングラスをかけている。この二階の窓から鞆無が視線を向けていることには気がついていないのか、その人間たちはIS学園の裏門の周囲を行ったり来たりしている。

「なんだありゃ」

明らかにIS学園の関係者ではない。そもそも来賓だというのなら許可証を持って正門から堂々と入ってくる筈だ。プライドの高い各国の上層部が、こここそと裏門で屯するなど有り得ない。であるならば、今現在あそこで嗅ぎ回るように行き来する彼らは何者なのだろう

うか。

そこまで考えて、ピンと来た。鞘無の脳内に電流が走る。

「……侵入者か」

珍しく、彼にしては非常に珍しく、その予想は的中していた。実際にはま学園の敷地内に足を踏み入れてはいないので侵入者ではないのだが、それでも不審な人物たちであることに違いない。そんな怪しさ満点の三人を校舎の窓から見下ろして、鞘無の口元が弧を描く。

これだ。こんな展開を待っていたんだ。

他の生徒や教師たちはアリーナでトーナメントの進行にかかりきりで彼らの存在にはまだ気がついていない。故に、今この場において彼ら进行处理できるのは自身を於いて他にはいない。原作のように物語が進めばアリーナの方でも異変が発生するだろうが、そんなことよりも目先の事の方が大切だ。侵入者の存在にいち早く気づき、対処したという事実。これのみが重要なのである。

「何だ。天は未だ俺の事を見放しちやいなかったようだな。こうなることが予めわかってりや、昨日の試合ももつと手を抜いて体力を温存できたつてのに」

ゴキリと、首を鳴らして再び歩き出す。目的は変わった。アリーナへは向かわない。ラウラの暴走を止めるのは、原作通り一夏に譲ってやるとしよう。そう決めて、階段を降りていく。態々裏門を使用するあたり、向こうも人目に付きたくないのだろう。それはこちらとしても好都合、存分に能力を發揮することができるのだから。

一階へと降り、そのまま外へと出る。視線の先には、上から見つけた三人の姿があった。向こうはまだ、こちらの存在には気がついていないらしい。

ニイ、と口角が吊り上がる。

「オイオイ、こんな所で何してるんだ？」

相手に聞こえるように、自分の存在を気付かせるように、横柄に言い放つ。

その声に反応して、三人は直ぐ様警戒の色を強めた。

が、声の当人を聞いて、僅かに安堵の息を漏らす。

「……皿式鞘無、か」

「例の四人目、危険度は四人の中で最も低い」

「障害にはならないと判断、先を急ぐか？」

「いや、目撃者をこのままにしておくのもマズイ。不本意ではあるが、この場で拘束しよう」

そんな会話を聞いて面白くないのが、鞘無本人。

何だ、四人の中で一番危険度が低い？ 障害にはならない？ この場で拘束？ まるで自分たち三人は鞘無自身よりも優れているかのような言い様。蛸谷に青筋が浮かぶ。

「……お前ら、言ってくれるじゃん」

バチツ、と前髪から紫電が走った。怒りのボルテージが徐々に上がっていく。言いたい放題の侵入者に、目にももの見せてやらなければ気がすまなかった。

専用機『サンライト・トウオーノ』を展開させるべく臨戦態勢に入る。ただし、右肩部の装甲は無い。昨日のトーナメントで超電磁砲の弾に使用したせいだ。流石に昨日の今日で修復は出来なかったらしい。が、そんなことは些細な問題だった。

某都市第三位の能力を有する少年は、瞳だけは元の持ち主のように強く。

「——覚悟は、出来てんだろうな？」



「ッ、更識先生！」

第一アリーナの管制塔に、真耶の声が響く。その声色から只事ではないと察知して、直ぐに近くへと駆け寄る。真耶の前に展開されている幾つものウィンドウ、その一つに見慣れない人影が映し出されていた。黒いスーツにサングラス、まるでタ〇リが三人いるようだ。さておき、真耶が俺を呼んだ原因は間違いなくコレだろう。

「侵入者か」

「はい。数は三、この裏門以外にそれらしき人影は存在しません」

「態々トーナメント開催期間中に来るってことは、目的はデータか？  
それとも来賓か……ん？」

そこまで考えて、俺はウィンドウに映る生徒が目止まった。俺の見間違いでなければ、この生徒は世界で四人目の男子だ。というか何でこんな所にいるんだ。生徒はアリーナに集合するように昨日連絡してあった筈なんだが。

「皿式君、どうしてこんなところに!？」

「大方昨日の敗戦がショックで寝込んでたとかそんなんじゃないか」

ともかく、侵入者と皿式をこのままにしておくのは問題だ。皿式がその場にいないければ俺が出向いて制圧することも出来たが、生徒の目がある場所で能力を使用するのは出来るだけ避けたいところだ。見たところ敵はこれといった武器は所持していないように見える。なら、ここは真耶に任せても大丈夫なのではないか。

「……真耶。学園の訓練機を使ってこの場に向かってくれるか」

「私が、ですか？」

「ああ、この事は出来るだけ生徒や来賓には伏せておきたい。俺はそっちの根回しを行うから、真耶には皿式の保護と侵入者の制圧を頼みたい」

「……分かりました。至急準備します」

俺の言葉に頷いて、真耶は管制塔から出て行った。それを確認して、ポケットから携帯を取り出す。連絡する相手は、第三アリーナにいるであろう千冬だ。数秒の間を置いて、通話が繋がる。

『私だ』

「千冬か、一応お前の耳にも入れておこうと思うんだが」

『何の話だ?』

「学園の裏門から三名、侵入者が敷地内に踏み込んだ」

『対処は』

「今訓練機を展開して真耶が向かった。現場には皿式もいるが、彼女なら上手くやるだろ」

『……このことは他の先生たちには?』

「まだ話していない。一先ず学園長と学年主任には俺から伝える」

そうか、と簡潔に答えて千冬は通話を切った。生徒の事を第一に考えるなら、先ず最優先で行うべきは侵入者の制圧だ。生徒たちに何かあつてからでは遅い。接触さえもさせる前に敵を行動不能にする必要がある。皿式の場合は仕方がないので、怪我をさせることなく保護するしかない。来賓たちの周囲には各国のSPが待機している。で余程がない限り危険度は低いものの、前回のよう無人機がアリーナに侵入してこないとも限らない。まあ、先程の映像で確認する限り今回の件と前回の件は別のようだが。

「……さてと」

一先ずは学園長に連絡だ。俺は管制塔に居た数人の教師に場を離れるとだけ告げて、静かに学園長室へと向かった。



ひらり、ひらり。

まるで木の葉の舞うように、虚は一夏の繰り出す攻撃を躲す。突き出される拳も、振り下ろされる脚も、虚の機体を捉えることが出来なかった。間一髪という訳でもなく、余裕を持って、優雅ささえも漂わせて彼女は一夏の攻撃を躲し続けていた。

対し、一夏は歯噛みする。分かっていたことだ。対暗部の家系更識に代々仕える布仏の家。その人間が、並大抵のレベルにはいないということは。整備科首席にして実技成績学年次席。それは国の代表候補生に匹敵する実力者であることに他ならない。

「っ、相変わらずやりにくい……!」

虚の取る戦法はヒットアンドアウェイのように攻撃と防御がはつきりしたものではない。近付き過ぎず、離れ過ぎず。その絶妙な距離を保ちつつ、遠距離武装での牽制攻撃を繰り返す。だが少しでもこちらが隙を晒せば、一瞬にして間合いを詰めて間髪入れずに止めを刺しに来るだろう。それが判らない程、一夏は戦闘に於いて愚鈍ではなかった。

姫無と簪の戦いに割って入るつもりは無いとはいえ、ここまで時間

稼ぎに徹してくるとは考えていなかった一夏は虚の表情を視界に収める。

にこやかに、淑やかに、彼女は微笑んでいた。

「一夏君、そんな攻撃じゃあ、私には当たらないわよ？」

一訓練機でありながらその機動力を強化しているのか白式に勝るとも劣らない動きを見せる虚に、一夏は内心を悟られぬように答える。

「虚さんがカウンター型なのは知ってますからね。無闇矢鱈に突っ込むのは愚策でしょ」

「あら、お嬢様にでも聞いたのかしら」

「去年の個人トーナメントの映像も見ましたよ。決勝のダリル先輩とのデータを」

「ふふ、何だか恥ずかしいわ」

一夏の言葉にも、虚は全く動じない。IS学園の生徒であれば各トーナメントの戦闘記録も閲覧することが出来るのは周知の事実。一夏が見ているとしても何ら問題はない。寧ろ、虚は自身のデータを持ってしていると仮定してこれまで戦っていたのだ。

その根底にあるのは自信と自負。

戦闘データを見られたくらいで敗れるようならそれは所詮それまでの実力だったということ。学園最強を名乗る姫無の従者としてこれまで過ごしてきた彼女にとって、手の内を晒されたくらいで揺らぐようなものではないのだ。

「さて、このまま一夏君と一定の距離を保ちながら戦うのも構わないのだけれど」

タンツと跳躍し虚は一夏との距離を開く。その行動を怪訝に思いつつも、一夏は追撃しようとはしなかった。単なる直感から来るものだったが、今この場で距離を詰めるのはまずいと感じたのだ。

「――折角今日の為に積んだのだから、使わないというのも勿体無いわよね？」

言って、虚の肩部と背後に円筒形の砲門が展開された。左右と背中を合わせて合計で三。その砲身が、いずれも一夏に照準を合わせる。

「対IS用追尾ミサイル、『撃鉄』」

「っ、SAM!？」

空中に留まっていた一夏へ、三発のミサイルが発射された。

簪の周囲に漂う霧。姫無が発生させたそれによって、簪は姫無の姿を見失っていた。打鉄式式のハイパーセンサーに反応はあるものの、小刻みに移動を繰り返しているのか反応の場所が数秒ごとに変わっている。無闇に砲弾を使うことは避けたい所、簪は夢現を構えたまま、周囲一帯に警戒を強めた。

そして改めて、姫無の操作するナノマシンが厄介極まりないことを実感する。

(やっぱりお姉ちゃんは強い……、山嵐も通用しなかったし春雷も避けられた。でも、これで終わりじゃない……)

後は純粹な実力勝負。互いの機体性能は熟知している上、戦い方で理解している。

ここから先、突拍子もない奇策でも飛び出さない限りは高水準での戦闘によつて勝敗が決するだろう。

と、そう考えていた簪の視線に飛び込んできたのは。

「……ッ、まさか……」

「簪ちゃんが相手なら、手加減なんて出来ないでしょう?」

蒼流旋を正面に構える姫無の姿。先程まで周囲を覆っていた霧はいつの間にか消え失せ、互いの姿を今ははっきりと視認する事が出来た。その姫無の姿を見て、これまでの霧が姫無の必殺の一撃を放つまでの時間稼ぎだったことを知る。

それは必殺の一撃。強力無比な一撃故に自身への反動も凄まじい諸刃の剣。エネルギーの瞬間的な転換により大ダメージを受けることは無いが、それでも損傷は免れないような一撃だ。

例え妹であろうと、戦う以上は手加減などしない。

その決意が、姫無の瞳にありありと表れていた。



発動までの準備は既に終えていた。片手で蒼流旋を構えて、後部スラストを一気に噴かせる。

瞬時加速。目にも止まらぬ速さで、姫無は槍を簪の機体へと突き立てる。抗う術などなく、防御に徹する時間はない。

——ミルトルテインの槍、発動。

言葉が聞こえた直後、アリーナの中心で大爆発が巻き起こった。それは奇しくも、虚のミサイルが着弾するのと同じだった。

## #27 姉妹と影

侵入者はたったの三人。その体格やISを所持していないのを考えて恐らくは全員が男性。そう考えて鞆無は口角を吊り上げた。

この程度の連中なら自分一人で十分対処可能。部分的損傷のあるサンライト・トウオーノであつても制圧することは造作もない。そう結論を出したからだ。柔道や空手といった対人戦闘の心得など全く持っていない鞆無だったが、厨二的な思考が加速度的に進行していた為に『コレいける』的な妙な自信に満ち溢れていた。

その自信が招くのは、油断以外になく。

「ほら、先手は譲つてやる。こいよ」

ISも展開しないまま、鞆無はくいくいと指を動かす。その自信は一体どこから湧いてくるんだと突っ込みたいところだが、今の彼にはもう何を言つても無意味だった。

鞆無は確信していた。もしもこの状態から侵入者である三人が何らかの攻撃を行ってきたとしても、必ず回避もしくは防御できると。鞆無の能力である『電撃使い』を用いれば、自身の身体に電流を流して強引に動かすことも可能である。それこそ常人では反応不可能な速度であつてもだ。そうでなくとも、ISの展開には三秒もかからない。一度展開してしまえばもう通常の銃器は一切通用しないのだから、侵入者たちに勝ち目は無い。そう高を括っていた。

そんな鞆無を前にして、黒に身を包んだ侵入者たちは。

「アレの準備は」

「既に出来ている」

懐から取り出される、学生には馴染みのない黒い物体。ドラマや映画の中でなら鞆無も見ることがある、人をいとも簡単に殺めることが出来る武器、拳銃。それを三人全員が懐から取り出したことで、にわか緊張が走る。

（おいおい拳銃だど?! いくらISがあるからって学生になんちゅうもん向けやがる!）

流石に拳銃を所持している人間が只者とは思えなかった鞆無は冷水を浴びせられたように先程までの気持ち小さくなっていった。が、一度カッコつけて宣言した手前引くことも出来ない。こうなればもうなるようにしかならないと思い直し、鞆無は自らの専用機を弾丸が発射されるより早く展開させる。

「……………」

もう一度。

「……………」

反応はない。

ここに来て鞆無はハツとする。自分は何か大きな間違いを仕出かしているのではないか。そして結論に至る。

(…………俺、昨日寝てねえ…………！)

鞆無の後頭部辺りにピシヤアンツ!! と雷が落ちたような気がした。

睡眠をとっていない、というのは確かに良くない。人間が活動する上で睡眠は欠かせないものである。何日も徹夜する人間もいるが、その末路は健康状態の悪化に他ならない。そういう意味では問題である。

が、鞆無に限ってはそういった意味ではない。鞆無の場合、睡眠を取らないことで一つの問題が発生するのである。

——電池切れだ。

彼が双六に参加していた神様の一人によって転生する際に得たのは学園都市第三位の能力である『電撃使い』。オリジナルの少女がそうであったように、鞆無もまた電池切れを起こす場合があるのだ。オリジナルの場合、能力を必要以上に行使し脳を酷使したことや体力の消耗によって電池切れ、つまるところのガス欠を引き起こすが、鞆無の場合は違う。本来の持ち主である少女と鞆無の脳の出来が違うと、充電しなくても関係しているのか、鞆無の場合毎日睡眠を取ることによって充電しなければ次の日全く能力を使えないのである。

そんな馬鹿な、と鼻で笑いたくもなるが如何せん事実だ。恐らくは鞆無の容量が小さすぎるのが問題なのだろう。オリジナルのように

何日も徹夜して動き回ることなど不可能なのだ。しかも睡眠を取れば能力を使い放題という訳でもなく、当然超電磁砲などを多用すれば限界が訪れる。能力の応用性の高さに半比例するように、鞆無にとつて使い勝手の悪い能力となってしまうていた。

昨日の場合は一夏と姫無に負けたことと鈴に散々説教されたことが原因で眠りに付けなかった。なんともまあ細かいメンタルである。とまあ、そんな訳で現在。

鞆無は能力を使えない、ただの男子学生と成り下がっていた。能力が使えないのでISのコアに干渉し起動させることも出来ない。

つまり、目の前の黒光りする拳銃から身を守る手立てが無い。

ここでようやく、鞆無は自身の現状を正確に把握した。把握して、背中から滝のような冷や汗が噴き出すのを自覚する。まずい、これは非常にまずい。

(っ、やべえやべえやべえ！ これ俺かなり窮地じゃん！ しまったちゃんと寝ておくんだった！ つうか、え？ 俺まじで死ぬんじやねえのこれ。あ、やばいなんか走馬灯見えてきた)

この世界に転生して十五年。前世も含めれば三十年。鞆無は脳内を駆け抜ける走馬灯のようなものを感じつつ、静かに目を閉じる。余りにも焦りすぎた結果、どういう訳か自らの視界を制限するという暴挙に出たのであった。

思わず視界を閉ざしてから数秒。ふと鞆無は気がつく。

未だに聞こえない発砲音。身体はどこかに痛みを覚えるということもなく、健康そのもの。

「……？」

ゆっくりと、瞼を持ち上げる。

その先に広がっていたのは――。

「大丈夫ですかっ、皿式君！」

鞆無と侵入者たちとの間に割って入るようにして立つ、ラファール・リヴァイヴを展開させた真耶の姿がそこにあった。



アリーナの二箇所で起こった爆発による粉塵が晴れていくと、虚の目に一夏の姿が捉えられた。装甲の至るところを破損し、スラスト系の出力が低下しているのか地面に脚をついたままこちらを見据えている。虚が使用した対IS用ミサイル『撃鉄』は今日この日のために彼女自らが設計したオリジナルの追尾ミサイルだ。一夏の機動力の高さを既に知っていた虚は、ミサイルの速度と命中率の向上を図った。そしてたどり着いたのがこの撃鉄だった。

彼女の想定ではもう少し被弾率が高いと踏んでいたが、そこは一夏の回避能力を褒めるべきだろう。迫るミサイル全てを薙ぎ払うことは不可能だと即座に理解し、出来るだけシールドエネルギーを削られないように致命傷となる箇所絞って防御と回避を行ったのだから。全く、これでISに乗り始めてまだ三ヶ月も経っていないというのだから末恐ろしい。虚は弟分の成長を内心で喜びつつ、しかしそれを表情にはおくびにも出さずに再び構える。

「流石ね一夏君。もう少し追い詰められると思っていたんだけど」  
「狙いが露骨過ぎますよ。何ですか心臓、後頭部、鳩尾って極悪過ぎて笑えてきます」

「その三箇所は被弾だけは避けてたみたいね」  
「あれだけのミサイル、今の俺じゃあ全部迎撃するのは不可能ですから。必要最低限だけのミサイルを迎撃させてもらいました」

言うのは簡単だが、実際にそれをやってのけるとなるとその難易度はかなり高い。何せ虚は一夏がそう来るだろうと予想して幾つかのミサイルにはフェイクの軌道も織り交ぜて攪乱していたのだ。それらに反応していたら本命の迎撃は間に合わない。

「さて。じゃあそろそろ向こうも決着のようだし、こちらも終わりにしましょうか」

「そうですね。尤も俺のエネルギー残量じゃああと数分と持たないでしょうから、こうするしかないんですけどね」

一夏は右足を前に半身に、虚は両手に日本刀を模した近接型ブレードを展開させて脚に力を込める。

ほぼ同時。二人は一直線に突っ込んだ。

ミストルティンの槍はその攻撃力の高さ故に使用者にも危険が及ぶ諸刃の剣だ。姫無もあまりこの技を多用したりはしない。普段ならば周囲に漂わせたアクア・ナノマシンと蒼流旋に内蔵されているガトリングガンの二つを使って戦うことが多い。が、今日に限ってはそんな事を言っていられる余裕は存在しなかった。

大国ロシアの代表を務める姫無と相對するのは、彼女と同等の実力を持つている簪だ。将来の国家代表はまず間違いないと言われる実力は本物で、ISの技術開発の面で言えば姉である姫無をも上回る程。そんな妹を相手に一瞬でも気を抜けば逆にこちらがやられかねない。

周囲に滞空していた砂塵が晴れていく。その中から現れたのは、膝を地面に着いた簪の姿。姫無からは確認することは出来ないが、簪の視界隅にはシールドエネルギーの残量が尽きたことが表示されていた。残量が尽きたことで、展開していた打鉄式が解除される。

「……負けちゃった、か」

ポツリと、誰にも聞こえない声で簪が呟いた。俯いたままの彼女の表情は、アリーナ内の誰にも見えない。

分かっていたことだ。未だ自分の実力では姉には届かないことくらい。国家代表と代表候補生、両者には大きな実力差があることくらい承知の上での戦いだ。出せる武装は全て使い、戦略も三日以上かけて考えた。それでも届かなかった。善戦と呼べるかも怪しい結果だ。悔しさから、思わず奥歯を噛み締める。

「簪ちゃん」

不意に頭上から声が掛けられた。わざわざ顔を上げて確認するまでもない。姉である姫無だ。声を掛けられても、簪は顔を上げようとはしない。悔しさから瞳に溜まった涙が見られなくなかったから。それを知ってか知らずか、姫無は膝を折ってしゃがみこんで。

「強く、なったね」

「——っ！」

聞こえた姉の言葉に、思わず顔を上げる。

穏やかに微笑む姫無の顔が間近にあった。溜まった涙が一筋、音もなく零れる。

「私嬉しいわ。こんなに優秀な妹を持って」

それは、姫無の偽らざる本音だった。簪が形無と姫無の二人に対して多少のコンプレックスを抱えていることは知っていた。それは無理からぬことだと思っていたし、姫無自身も兄に対してそのような感情を持っていた時期もある。根が真面目な簪のこと、そんな弱音は決して口には出さなかったが、姉である姫無には妹の気持ちの機微など手に取るように分かる。悩んで眠れない夜もあったことだろう。誰にも相談しない、できない辛さは想像することすら出来ない。

でも。それでも。こうして簪は腐ることなく自己研鑽を積み、ここまでの実力を身につけた。それを姫無は姉として誇りに思う。

「……でも、届かなかった」

「そう焦らないの。簪ちゃんだつてこれからまだまだ強くなるわよ。それこそ私なんて相手にもならないくらいにね」

「……それは、無理」

割と冷静に返されて姫無の表情が固まった。

「……でも、ありがとう」

羞恥からか姫無と視線は合わせようとせず、あらぬ方向を向いたままま呟いた簪だったが。

「でもいつか必ず、お姉ちゃんの横に立ってみせる」

その言葉を言う時だけは、まっすぐ姫無の顔を見て断言した。

「ふふっ、待ってるわ」

「向こうも終わったみたいね」

「そうですね」

ガシヤンと持っていたブレードを離し、虚は息を吐き出した。向こ

うが終わったというのであればこちらが戦闘を続ける意味は薄い。いや、というか既に決着はついているのだけれど。

「ふう。相変わらず反則じみてるわよね、ソレ」

「虚さんだつて使えるじゃないですか」

「一夏君程の威力は出ないわよ。ほら、女の子だし私」

エネルギー残量の尽きた虚が一夏へとそう言った。最後の激突の末、先にエネルギーが底をついたのは虚の方であった。近接型ブレード二振りを用いて一夏へと斬りかかった虚に対し一夏が使ったのは先の鈴との戦いを彷彿とさせる戦法。ただし今回の場合は三つの技を接続して使用したが、まず、更識流の一つ『菊』である。振り下ろされたブレードを背面と肘関節で受け止め、梃子の原理で真つ二つに折つて見せた。続いて向かってきた二つ目のブレードには折つたブレードを投げ飛ばす『女郎花』わみなえしで時間を稼ぎ、一気に瞬時加速で虚の懐へと入り込む。最後は一夏が使用することの出来る奥義の一つ、『柳緑花紅』りゅうりよくかこうを叩き込んだ。

流れるような技の連撃に、アリーナの観客たちが思わず息を飲んだ程だ。

「まさかここまで完成されてるなんてちよつと予想外だったかな」

「俺だつてIS学園に来てから毎日鍛えてますから」

「……お嬢様を振り向かせないといけないものね」

くすりと虚が笑い、一夏の顔が少しだけ紅くなる。が、それも一瞬のこと。

「姫無さんを守れるくらい強くなるつて決めたんで」

その言葉と瞳に迷いはない。清々しいくらいに真つ直ぐだった。

「あとは楯無さんを説得しないとね」

「うぐつ……、そうなんですよねえ」

げんなりと肩を落とす。一夏の恋路に立ちはだかる最初にして最大の難関、その名を更識楯無。自身では否定しているが周囲から見れば明らかなシスコンである彼の屍(?)を踏み越えていけない限り、一夏の恋は決して成就することはないだろう。それ以前に楯無のことを師匠と慕う一夏は、どうしても楯無への想いを楯無へと伝えること



が出来ていない。主に全殺しされる可能性が非常に高いという理由から。更識楯無の妹たちへの溺愛っぷりを知っている一夏には、そんな自殺志願者のような真似は出来なかった。

「でもいつまでもそんなこと言っていられないのだし、そろそろ覚悟を決めたら？」

「それは俺が死ぬ覚悟ですか」

「……………」

「何か言ってください目を逸らさないで！」



「何とか間に合ったか…………」

管制塔でカメラの映像を目の前に安堵の息を吐く。ラファールを展開させた真耶が皿式と侵入者たちとの直線上に割って入ったことで一先ず生徒の危機は免れた。ここで安心することは出来ないが、山田真耶というIS操縦者の技量を考えればそこまで重大な事態にはならないだろうと推測する。彼女に遠距離用の武装を持たせれば正に鬼に金棒状態のだが、今回の場合は近接での対処になりそうだ。別段近接格闘が苦手というわけではないので大丈夫だとは思いますが、一応周囲の警戒レベルを上げておく。

『楯無。様子はどうか』

着けたインカム越しに聞こえてくるのは千冬の声。

「今現場に到着した。生徒一名は無事のようだ」

『そうか。しかし意外だな』

「なにが」

『皿式のことだから規則を無視してISを展開、そのまま敵を撃退しにかかりそうなものだが』

「流石にそこまで命知らずではないだろ」

そうであると信じたい。幾ら専用機を持っているとはいえ、正体不明の侵入者たちに食ってかかるようなことだけは避けなければいけない。そういう荒事に対処するのは教員の役目である。この約三ヶ

月程皿式を見てきての印象は学園時代の織村を彷彿とさせるものだった。女子生徒たちには愛想を振りまいているようだが、その戦いぶりや言葉の端々から感じられる傲慢さは隠そうとしても隠せるものではない。あとなんか簪にちよっかいかけているとかいう噂を耳にしたので今度会ったときにちよつと話をしよう。大丈夫だ、主任室で消灯時間まで話を聞くだけだから。

などと考えている俺に、通信が入る。現場に到着した真耶からだつた。

『更識先生』

『どうした?』

『学園に侵入してきた三人ですが、ここで揉め事を起こす気はないそうです』

「ふむ、それで?」

『この場は見逃してくれないかと』

「真耶の考えは?」

『論外です』

「同意だ。山田先生、なるべく怪我はさせずに無力化を」

『了解しました』

通信を切つて、暫し考える。奴らがI S学園に侵入してきた理由はなにか。タッグマッチトーナメントが開催されるにあたって各国の要人たちに紛れようと考えていたならばあんな分かり易い黒服を着る意味が分からない。かといって隠密に行動しようとしているには真昼間から目立ちすぎだ。

わざと俺たちの目に付くように行動している可能性もある。だとすると彼らは囷で本命は別にいるということになるが、他の場所でも異変が起こった様子はない。

こうした行事が行われる際は人数不足もたつて警備がザルになりがちなのは分かっているが、だとしてもこの学園は侵入者やなにやら入り込み過ぎではないだろうか。今年だけでもう二件、俺の学園時代も合わせれば片手の指では足りない。そろそろ轡木さんに本気で警備強化を申請したほうが良さそうである。

「と、終わったみたいだな」

映像を見れば真耶が侵入者三人を行動不能にしたところだった。ISで生身の人間の膝を叩き折るとかなかなかえげつないことをするな真耶。俺もなるべく怪我をさせるなとしか伝えていないし、話す口が無事ならそれでいいんだが。真耶が時間をかけることなく事を終えてくれたことで、幸いにもトーナメントのほうに支障は出なさそうだ。唯一の目撃者である皿式には箝口令でも出しておけば大丈夫だろう。あいつはプライドが高そうだから、好んで自分が活躍できなかった場面の話など持ち出さないだろうし。

「さて、じゃあここからは俺の仕事だな」

管制塔から真耶に捉えた三人を地下区画へと連れて行くように言つて、俺もその場へと向かう。無論、尋問のためだ。更識の人間であれば尋問の術は心得ている。俺の場合はそこに肉体的なダメージも付加されることになるが。姫無へ話術を教え込んだのは何を隠そう俺である。カツカツと地下へ続く階段を降りていき、目的の部屋の前に着く。そこには既にISを解除した真耶が待っていた。

「お疲れ、山田先生。苦労かけたな」

「いえ。ではお願いします」

「ああ、山田先生は俺の代わりに管制塔で指揮を取ってくれ。多分遅くなる」

「わかりました」

言い終えて、ロックされていたドアをスライドさせる。何も無い、無機質な正方形の部屋の中央に並べられた三つの椅子に、侵入者の三人は手を縛られた状態で座らされていた。予め武器の類は全て取り上げてあるし真耶が膝を折ったこともあって逃走する可能性など限りなく0に近い。俺は部屋に入り、一人の前にしゃがみ込んで顔を見つめる。

「よ、こんにちは」

返事はない。ただのボロ雑巾のようだ。

「お前ら、何でココに侵入したんだ？ まさか間違えたとか言うなよ。こんなもん持ち込んでんだから」

離れた場所に置いてあった拳銃を取ってくるくと回しながら男の一人を見る。その瞳に写るのは大きな憎悪と、ほんの少しの嫉妬と羨望。ふむ、なかなか珍しい感情だ。こういう場合の人間の感情ってのは恐怖と怒りが大抵で、そこに類似した感情は入り込んでも羨望なんて感情が入り込む余地はない。これは手間取りそうだと内心で溜息を吐く。三人の表情を順に見てみても、絶望や恐怖といった感情は見取れない。真耶に戦闘の意思はないと言っていたことから非戦闘を好むのかとも一瞬考えたが、どうやらそんなことはなさそうだとこの凜猛な瞳が何も言わずとも語っている。

はてさて、どうしたものか。いや、別に口を割らせる手段が無くて困っている訳ではない。どういう角度と切り口から精神を揺さぶっていくか考えているのだ。こういう男にありがちなのは自分たちの弱みを突かれるとつい反応してしまうパターンだ。弱みねえ。IS学園に侵入した理由が分からないままでは弱みもくそもないが、カマをかけることも立派な戦術だ。どれ、一つ適当な話を放ってみるか。「ま、別に言わなくていいぜ。お前らがココに忍び込んだ理由はもう分かっている、トーナメントが開催されてる期間なのがいい証拠だな」  
「……………」

未だ返答はない。が、男の一人の瞳に微かな揺らぎを認めた。

この程度の事で動揺が表に出るってことはこいつら組織の中でも下の方か。使い捨ての駒みたいにされたってとこだな。そして多分、本人たちはそのことに気がついていない。だから、ここまで頑なな態度を崩さないでいられる。

シャツのボタンを二つほど外して息を吐き出す。

いつまでも時間をかける訳にもいかないし、手早く済ませることにしよう。

「さ、洗い浚い吐いてもらおうか——」



## #28 決勝戦と終幕

大方の予想を裏切ることなくトーナメントの上位進出者は決まっていた。やはりというべきかその中心は専用機持ちたちで、他の生徒たちとは一線を画す実力を見せつけて勝ち上がっていった。

かと言って何も上位ペアが全員代表候補生や専用機持ちというわけでもない。中でも健闘が光ったのが篠ノ之・布仏の一年生ペアで、専用機を持たないながらも抜群のコンビネーションによってトーナメント四日目のベスト8にまで勝ち進んだ。これは入学して間もない一年生にしては異例で、他に勝ち残っている一年生は一夏を除いて全員が代表候補生という顔ぶれの中準々決勝にまで進出したのは見事としか言い様がない。その準々決勝はイギリスの代表候補生ペアであるサラ・セシリアのペアに敗れたものの、多くの生徒たちはこのトーナメントで二人の一年生の実力を把握したことだろう。

本来であればこのトーナメントで箒の専用機がお披露目される予定だったが、どういう訳か開発者である束が使用を控えるように進言したらしい。重度のシスコンである箒はその言葉を二つ返事で了承、トーナメントには訓練機である打鉄に搭乗して戦っていた。元々の才覚もあつたのだろう。近接での戦いに秀でた箒と中遠距離での戦闘を得意とする本音のペアはサラ・セシリアペアに対しても臆することなく挑んでいった。流石に経験の差もあつて勝利することは叶わなかったが、セシリアに「あれでIS搭乗時間が百時間以内だというのが信じられない」とまで言わしめた。

という訳で、トーナメント最終日である。今日行われるのは決勝戦の一試合のみ。アリーナに出て戦うことになる四人を除いて、他の全生徒は観客席や大型のスクリーンでその試合を観戦することとなる。

試合の行われる第一アリーナは試合開始時間の三十分前だというのに生徒たちでごった返しており、観客席は満席状態。第二、第三アリーナのスクリーンでも中継されるので試合を見ることは可能だが、やはり自身の眼で実際に見たいという生徒が殆どなのだろう。通路

に立って観戦する姿もそこらじゅうに見られる。

そんな超満員のアリーナの観客席の一角を、一年一組の専用機持ちたちは揃って陣取っていた。

「いよいよ決勝だね。楽しみだなあ」

金髪を後ろで結ったシャルロットが興奮を隠せないように言う。それに対して口を開いたのは、隣に腰を下ろしているラウラだ。

「ふむ。私とシャルロットに勝ったのだから一夏には優勝してもらわなければな」

腕を組みながらアリーナの中心へと視線を向けるラウラに、シャルロットは優しく微笑む。

「ふふ、昨日はあんなに悔しがってたのに。やっぱり一夏には勝って欲しいんだ」

「と、当然だ。私以外の人間に負けるなど許さんっ」

ぷいっと顔を背けて言うラウラは、もう小動物にしか見えなかった。

今の発言の通り、シャルロット・ラウラ組は昨日のトーナメント五日目の準決勝で更識・織斑組と戦い、接戦の末に敗れている。代表候補生二人を相手に勝利を収めるISに乗り始めて間もないルーキーの活躍に観客席で観戦していた多くの人間が驚愕した。当然のことながら戦略を考えたり指示を出しているのは姫無のほうで一夏は言われたことをこなしているに過ぎないのだが、それでも一夏の戦闘能力は代表候補生に匹敵するものとなっていた。一回戦で鈴を、三回戦で虚を倒してみせたのが決して偶然やまぐれではないということを確認してみせたのだ。

「でも本当に一夏ってISに乗り始めて三ヶ月なの？ あの操作技術はおかしいと思うんだけど」

「私も信じられんが事実が事実だ。AICを突破されるなんて考えてもみなかったがな」

ドイツが独自に開発を進めていた第三世代型固有武装であるAIC。強力無比なこの武装をしかし、一夏は強引に突破してみせたのだ。これには流石のラウラも唾然とした。使用すれば自身に制限は

かかるものの相手の身動きを封じることのできるそれが、一夏と姫無の巧妙な作戦によって破られてしまったのだから。そこから先は一夏とラウラの叩き合いとなり、シャルロットのラピッド・スイッチを封殺した姫無が加勢に加わったことで勝敗が決した。

「でも一夏たちの相手もかなり強いみたいだよ」

「ダリル・ケイシーとフォルテ・サファイアだろう？ 第三回モンド・グロツソの部門別優勝候補に既に名が上がっている」

「そうなの？」

「コンビネーション部門など、二人のためにあるようなものだろう」

二年生であるフォルテ・サファイアと三年生であるダリル・ケイシー。二人共が代表候補生にして専用機持ち。学園最強たる姫無に次ぐ実力者だというのは、IS学園二、三年生間では周知の事実だ。目を見張るべきはそのコンビネーション。普段の二人の性格や行動からは想像も出来ないが、一度ISに乗って戦わせれば打ち合わせなどなくても完璧なコンビネーションを見せる。タッグマッチという点では、彼女たちの右に出る者はおそらくいない。

「二人の鉄壁の防御を一夏たちがどう切り崩すのか見物だな」

「昨日の準決勝じゃセシリアたちも完璧には打ち崩せなかったからね」

「そ、そこで私の話を持ち出すんですの？」

ラウラの隣に座っていたセシリアがいきなりの変化球に頬を引きつらせた。

昨日の準決勝、同じくイギリスの代表候補生であるサラ・ウエルキンとペアを組むセシリアはダリル・フォルテ組のコンビネーションを崩しきることが出来ずに敗退した。お国柄遠距離武装の開発に心血を注いでいるイギリスを象徴するようにライフルやビットといった遠距離武装を数多く展開して二人の分断を図ったセシリアたちだったが、結局最後まで二人を一对一の状況に持ち込むことが出来なかった。逆にセシリアたちが上手く誘導されて分断され、二人がかりの攻撃にシールドエネルギーを削られる始末。

「まああれは仕方ないよ。サラ先輩だけ学園の訓練機で戦ってたし。



いくら操縦者の技量が高くても機体のスペックだけではどうにもならないからね」

「セシリアがもう少し上手く牽制を使っていたら撃墜は免れたかもしれないがな」

「うぐつ……」

言い返したくともラウラの発言は的を射ているために言い返せない。下唇を噛んで、悔しそうにセシリアは制服の裾を握った。

「つ、次こそは負けません！」

「戦場なら次はないぞ」

「ラウラさつきからセシリアに辛辣だねえ」



「……よし」

試合開始五分前。ピットで小さく深呼吸して一夏は白式をその身に展開させた。ピット内では既に姫無も霧纏の淑女ミスティアス・レイディを展開させており、ウィンドウを開いて最終調整を行っていた。

「織斑、いけるか」

「はい。問題はありません」

一夏の担任である千冬の問いかけに、掌を開いたり閉じたりしながら返す。

その動作を目の当たりにして、千冬の眉が若干怪訝そうに動いた。

「織斑、お前その動き……」

「分かっています。ちよつと気分が高揚してるみたいですから」

「……自覚しているならいい」

一夏が掌を開いたり閉じたりするのは昔からの癖だ。こうした動作を見せるときは気分が高揚、つまりは興奮している状態にあり小さい時は土壇場でよくミスをしていたものだ。楯無が師匠となって精神的にも成長したおかげなのか滅多なことでは動じなくなったが、それでもこの癖自体を止めることはできないようである。因みに四月

のセシリアとの代表決定戦のときもこの癖が出ていたりする。

「一夏君、準備はいい？」

最後の確認を終えて空間ディスプレイを閉じた姫無が一夏の隣にやって来る。普段通り、飄々とした顔つきで一夏を見据えていた。

「はい。いつでもいけます」

「そう。それは重畳ね」

二人して口角を上げる。ニヤリとでも擬音のつきそうな表情だった。学園最強を背負う姫無にとつて負けることは許されないし、一夏は学園最強たる姫無に黒星を付けさせるわけにはいかない。それ故に少しは緊張していそうなものだが、二人からはそういった気負いは全く感じられなかった。

油断も緊張も等しく身体を奪うということをも、更識流を通じて学んでいるからだ。だからこそ、あくまでも自然体。心は熱く、頭は冷静に。それを正に体現していた。

「さ、じゃあ行きましようか。観客席のみんなも待ちくたびれてるでしょうし」

そう言つて、姫無が先にピットを飛び出した。直後に聞こえる歓声。ピットの先から聞こえるその歓声が、少しずつ遠くに聞こえるようになる。瞼を下ろして、もう一度息を吐き出す。徐々に、徐々に、自分の世界へと入り込んでいく。

向こうからの歓声は、いつの間にか聞こえなくなっていた。

「せんぱーい。そろそろ時間ツスよー」

一夏と姫無のいるピットとは反対方向のピットで、間の抜けた声が響いた。声の主は二年生のフォルテ・サファイア。ピットに備え付けのベンチで仮眠をとるだとか吐かして本格的な睡眠に入りつつあるダリルを起こそうとして発せられた声だった。

が、しかし。時間になったら起こせと宣った本人は未だ起きる気配を微塵も感じない。薄手の毛布を頭まで被って惰眠を貪り続けた。

イラッ、とフォルテの額に青筋が走る。そのままそろそろと足音を殺しながら移動し、ダリルの眠るベンチの前にまでやってくると。

「——いい加減起きろやこのダメ人間がああああアツ!!」

一気に毛布を引っぺがしてベンチを蹴りつけた。

「ぐおおおっ!? 後頭部に異常な痛みがあああああつ!?」

まるでコントのように毛布を剥がされてくると回転しながら地面に落下したダリルはそのまま後頭部を強打して目を覚ました。余りにも突然すぎる事態に目を白黒させて周囲をきよろきよると見回している。

「何寝ぼけてんスカ。さっさと行きますよ」

「フォルテ!? 今の凶行はてめえの仕業か!」

「先輩が試合開始五分前に起こしてくれって言ってきたんでしょーがッ!!」

やいのやいの。決勝戦前だとは思えない程に弛緩した空気が周囲に充満していた。

「……おい。そろそろ時間だぞ」

先程から一部始終を目の当たりにしていた俺は溜息を溢さずにはいられない。何でこうこいつら二人は緊張感に欠けているんだ。ガチガチになれとは言わないが、心地よい緊張感くらいは感じていてもらいたいものである。

俺の声が聞こえたことでようやくこの場に俺という存在が居ることを認識したらしく、取っ組み合いを続けていた二人はパッと掴んでいた腕を離れた。

「や、やだなあ。居るなら居るって言ってくださいよ更識先生」

「いや最初からいたけどな?」

バツが悪そうに後頭部を搔きながら視線を逸らすフォルテ。この二人が朝一の試合で遅刻しなかった試しがないために不安になって直接ピットまで来てみれば案の定これである。本当に悪い意味で予想を裏切らないでくれる。試合開始の時刻までは三分を切っており、そろそろ放送部の放送が入るころだろう。

「でもいいンスか更識先生。先生としちゃー向こうのピットに行きた

「かつたんじゃ?」

「お前らがきちんと出てくるか不安すぎて見に来たんだよばかやろう」

「あ、ハイ。スイマセンでした」

思わぬ切り返しだったのかフォルテは特に何も反論することなく謝罪を口にした。

「でもさー先生。正直どっちを応援してんの?」

横倒れになったベンチを直し終えたダリルがそんな質問を俺に投げかけてくる。大方肉親である姫無を贖っているのではないかと考えているのだろうか。いや、それはないか。今の二、三年生たちは俺がそういった個人的な感情を公の場に持ち込まないことを知っている。だからこれはきつと純粋な質問なのだろう。やんわりと、遠まわしに。どちらが勝つと思うか聞いているのだ。『どちらが勝つと思う?』と直接的な聞き方をしなかったのは、個人的な意見を俺に言わせないようにするためか。それでも個人的な意見を言うことには違いないが、どちらが勝つかを言うよりも幾分オブラートに包みやすくなる。

正直答えなくても支障はないのだろうが、ここで答えずに余計な思考をさせることもない。暫し考えて俺なりの言葉を述べる。

「——いい勝負を期待してるよ」

「……それって、アタシらが負けるってこと?」

「さあな。俺は教師だ、どちらかを贖するようなことはしないよ」

俺の言葉を受けて考え込むような仕草をするダリル。その隣でフォルテが頭上に?を浮かべていた。

まだ何か言いたいことがあったのか、再びダリルが口を開こうとした瞬間。アリーナの方から大きな歓声が上がった。おそらく向こうのピットから一夏と姫無が出てきたのだろう。アリーナ全体を埋め尽くす生徒たちの歓声が、ここまで響いてくる。

「……ま、いいや。アタシも更識と戦うのは楽しみだったし、三人目の男にも興味出てきた」

「お、先輩珍しくやる気ツスねー」

「つたりめーだ。先生にまで発破かけられてやる気ださねーわけにはいかねーだろ」

「よっしやー私も頑張るツスよー」

二人は瞬時に自身の専用機を展開させると、そのままピット中央の射出口から勢いよく飛び出していく。直後、再び大きな歓声。IS学園最強のタッグを決めるための戦いは、今正に始まるうとしていた。



「ふむ、この試合どうみる」

「ん、そうだな……」

第一アリーナの管制塔へと戻ると、アリーナを眼下に眺めながらコーヒーを飲む千冬からそんな質問が飛んできた。俺が入ってきたのを見て直ぐにコーヒーを淹れてくれた真耶に礼を言っただけでマグカップを受け取り、千冬の隣にまで歩を進める。うん、美味しい。やはり真耶に淹れてもらったコーヒーは自分で淹れるのとは全くの別物だな。「キーマンはやつぱり……織斑だな。アイツがどれだけ上手く立ち回るかで戦況は大きく変わってくるだろう」

試合が始まって三分程。アリーナでは四機のISが目まぐるしくその場所を入れ替えながら火花を散らしている。その中で目を引くのはやはりダリル、フォルテの両名が操作する専用機。『ヘル・ハウンド・Ver2.5』と『コールド・ブラッド』だろう。この二人のコンビネーションは既に国家代表クラスとまで称されており、今回のトーナメントでも彼女たちのコンビネーションを打破できたペアはいない。

そのコンビネーションを一夏と姫無がどう突破するのか。それが出来るかどうかで戦況は決定すると言っている。いい。

「でもアイツ、何か動きが荒いな」

「試合前ピットで掌を開いたり閉じたりしていたからな。大方精神を落ち着かせようとして失敗でもしたんだろう」

ああ、成程。気分が高揚している時に出てしまうあの癖か。あれだ

けはどれだけ言っても直らなかつたからな。幾ら更識流で精神集中の重要性を学んだとて、それを実践できるようになるには一夏はまだ未熟だ。完璧な精神コントロールなんて高校生に出来るようなものではない。姫無だって完全にはモノに出来ていないのだ。無理して行くと裏目に出してしまうことだってある。

多分姫無を負けさせるわけにはいかないとしても考えて自然と力が入ってしまったているんだろう。動きに無駄が多い。必要のない場面でスラスターを噴かせてエネルギーを無駄に消費したり初動が遅れているのがその証拠だ。

「まあそこらへんの感情の機微も含めて更識は考えているだろう。俺たちは見届けるだけさ」

「っ、くそー」

突き出された一夏の拳が虚しく空を切る。先程から何度も繰り返される攻防だった。

近接型にとことん特化している一夏にとって、決勝の相手である二人は正に天敵と言っている。ダリルとフォルテはそのコンビネーションを巧みに駆使して遠距離から近距離までの全てをカバーできるオールレンジタイプであり、相手に合わせてその戦闘方法を変更することが出来る。一夏の場合は中、遠距離で。姫無の場合は遠距離でといった具合にだ。

その距離を潰そうと瞬時加速を使って攻める一夏だったが、当然ダリルとフォルテも瞬時加速は修得している。何も真正面に突っ込むだけが瞬時加速ではない。後方、上方或いは下方へスラスターを噴射することで回避することも可能だ。タイミングを誤れば相手の攻撃を受けてしまうリスクが上がるためにその見極めはかなり難しいが、二人にとっては造作もないことだった。

一夏が拳を振り抜いた後に出来る一瞬の硬直を逃すことなく、コールド・ブラッドが持つマシンガンが掃射される。下手な鉄砲数打ちや

当たる、ではない。フォルテの射撃センスは特Aクラスである。一夏が回避することも想定した上で逃げ場のないよう周囲に弾丸を撃ちだしていく。

このままでは埒が明かないと悟り、一旦その場からの離脱を図る。姫無の援護射撃もあつて、それ自体は然程難しくはなかった。ダリル、フォルテ兩名からある程度の距離を取って、空中で静止する。

「一夏君、無理な特攻は彼女たちには仕掛けるだけ無駄よ」

「ですね。すみません、俺少し空回ってたみたいです」

姫無の言葉に素直に頷く。

試合開始当初のような高揚は既に消え去っていた。一度手玉に取られたからだろうか。先程よりも視界は広がっていた。

「先ずはあの『イージス』を攻略しないことには始まらないわね」

「突破口はあるんですか？」

「ふふん、お姉さんに任せなさい」

にっと笑う姫無。彼女の言う通り、この試合に勝利するためにはイージスと呼ばれるダリル、フォルテのコンビネーションを打ち崩すことが絶対条件だ。それが生半可なことではないというのは、これまでの試合を見ていれば嫌でも分かる。昨日の準決勝でも同じ代表候補生二人がかりで挑んで攻略することが出来なかったのだ。それほどまでに隙がない。それほどまでに完成されている。

「あのイージスは言ってしまうえば攻防一体なのよ。二人の位置が常に上下左右で直線上になるよう、必ず一人を中心点として展開されている。互いの得意能力をフルに使って一つの生き物のように機能しているの。それはすべての攻撃を通さない盾にもなれば、必中の矛にもなる」

彼女たちに限って言えば、最強の盾と矛は矛盾せず両立されているのだと姫無は言う。

なんだそれはと率直に一夏は思った。こちらの攻撃が防がれ、向こうの攻撃は全て命中する。そんなものにどうやって対処すればいいのだと。焦燥に駆られる一夏に、しかし姫無はこれまでの態度を変えられることなく言い放った。攻略法なんていうのは簡単なんだと、さも何

でもないというように。

「それはね、——こつちも同じことをすればいいのよ」

一夏の目が、文字通り点になった。



眼前で起こった変化を認めて、ダリル・ケイシーは楽しそうに口角を吊り上げた。まるで鏡の前に立ったように、相手の二機もこちらと全く同じ陣形を取ったのだ。コンビネーション名、イージス。これまでも何度かこのコンビネーションを攻略しようと思つてきた事をしてきた輩はいたが、ここまで堂々と大々的に模倣してくるとは流石に思つていなかった。しかもそれをしているのはIS学園最強の看板を背負うあの更識姫無である。不愉快に思うよりも、何が飛び出すのかダリルは興味津々だった。

「……へえ。イージスをやろうつてのか、面白え」

「せんぱーい。これ完全に舐められてんじやないツスカあ?」

「逆だよフォルテ。向こう完全にこつちを叩き潰す気だぜ」

これまでの相手のようにヤケを起こした猿真似だと思つたらしいフォルテが不満な声を上げたが、それをダリルは一蹴した。これは今までのような浅はかな愚策ではない。何かしらの意図があつて、それを巧妙に隠匿する為のものだ。そうダリルは直感していた。

「じゃあいつちよ試させてもらおうか。……ちゃんとイージスとして機能してんのかッ!」

瞬間、ダリルとフォルテの位置が上下から左右一直線になる。

攻撃に移るときの状態であると、対する一夏は即座に理解した。そして思い返す。寸前姫無に言われていたことを。

『いい。イージスを完全に攻略することは確かに難しい、でもあのコンビネーションだって完璧じゃないの。二人が直線上に並ぶのは基本的に防御の時。攻撃の時はシンクロして行うことが多いわ。だから、攻撃を当てるならそこよ』



『相手の攻撃に合わせてこっちも攻撃する。つてことですか？』

『言ってしまうえばカウンターね。私と一夏君でイージスを完全再現できるなら何も問題はないんだけど、残念ながらアレは一朝一夕で出来るものじゃないわ』

『でもそんな上手くないんですか？』

一夏の尤もな質問に、姫無は間断なく答えた。

『それは大丈夫よ。彼女たち、結局のところ理性よりも本能を取るから。遠距離でちまちまやるよりも近距離でガツガツいきたいのよ、ほんとはね』

ほんとにきたー、と内心で一夏は驚くと同時にダリル・フォルテ組の単純さに呆れた。まさかこうも簡単に二人でかかってきてくれるとは。かといって油断はしない。重要なのはここからだ。全ての攻撃が命中すると言うように、彼女たちの攻撃は基本水準が高い。それが二人同時に来るのだ。一瞬でも気を抜いてタイミングを誤ればこちらが撃墜されかねない。かなりシビアな判断を下さねばならなかった。

チャンスは一度。これを外せば二度目はない。

こういう攻撃があるのだと向こうに知られてしまえば、この状況に持ち込むことはもう不可能だろう。

左右両方から、トマホークのような鋭いハイキックが飛んでくる。横に立つ姫無は蒼流旋を構えたまま動かない。彼我の差が限りなく0に近づいていく。まだ、まだ姫無は動かない。

そして。

姫無の構える蒼流旋の先端が動いた刹那。

瞬間的に一夏はその右手にたった一つの武装を展開させる。その姿を認めると同時に最大出力。一気に下方から上方へと斜めに振り上げた。振り切った腕の向こうに見えたのは、驚愕の表情を浮かべるフォルテ・サファイアの姿だった。

『雪片式型』。鋒が触れさえすれば問答無用で相手のシールドエネルギーを削り取る一撃必殺の刃が、フォルテの乗るコールド・ブラッドを一閃した。

と、同時に爆発的に広がる閃光。予め決めていた手筈通り、一夏は直ぐ様その場から出来るだけ距離を取る。

直後、突き立てられたランスの先端を中心に、小型の爆発が連鎖的に巻き起こった。

ミストルティンの槍は姫無の操作する全てのアクア・ナノマシンが超振動破砕を行う破壊兵器の塊であるが、今回使用したのはその縮小版とも呼ぶべきものだった。一部のアクア・ナノマシンをISの周囲に展開させたまま残りのアクア・ナノマシンを小分けにして順次エネルギーを転換させ爆発に連続性を持たせることで相手に反撃の隙を与えない。またその時周囲のアクア・ナノマシンをヴェールのように自身の周囲に漂わせることで被害を最小限に抑えるようにしている。最大火力には及ばないものの、それでも十分な威力を持った攻撃だ。

『霧雨』<sup>モロス</sup>。使うのはこれが初めてよ！

「……ッ、くそつたれ！」

粉塵の中からヘル・ハウンド・Ver2.5が現れる。その装甲の至るところに損傷が見られ、ダメージレベルBは超えているだろうことは凝視しなくとも判断できた。相棒たるフォルテは一夏の零落白夜によって撃墜されてしまっている。イージスを失ったダリル一人で姫無と一夏の相手を一手に引き受けるというの荷が重かった。幾ら代表候補生として実力があるかと相手はロシアの国家代表と中国、ドイツ、フランスの代表候補生を次々と破ってきた三人目の男子。

舌を打ちながらも善戦を続けたダリルだったが、フォルテが撃墜されてから八分二十秒後。アクア・ナノマシンを駆使した姫無の攻撃によって全てのシールドエネルギーが削り取られた。

その瞬間、試合終了を告げるブザーが鳴り響く。一瞬の静寂の後、怒号と勘違いしそうなほどの大きな歓声。

それを受けて、一夏もようやく肩の力を抜く。不意打ちじみた攻撃であったのは否定しないが、そうでもしないと勝利は得られなかっただろう。姫無にしてもこれまで使うことの無かった技まで使用して落としてにかかったのだ。ダリルは特に一人になつてからもその操縦

技術を以てして一夏のシールドを半分以上持つていった。改めて、彼女たちの強さを思い知る。

（正々堂々あの先輩たちに勝てるようになるには、まだまだ実力不足だな……）

しかし、それでも。今この瞬間だけは優勝という勝利の余韻に浸つてもいいだろう。正直なところ姫無を生徒会長の座から降ろすことにならなくてよかったという安堵が大半を占めているわけだが、全体の二割くらいの貢献はしたのではないかとも思う。今年の男性IS操縦者は以前の二人のようにはいかないかと野次られることもないだろう。今日までの一夏の試合を観戦した関係者であれば、その才能の片鱗に気がついたはずだ。

何はともあれ。

終わってみれば関係者各位の予想通り、更識・織斑組の優勝という結果でIS学園タッグマッチトーナメントは幕を下ろしたのだった。



後日。

「兄さん」

放課後の学年主任室で恐ろしい程までの猫なで声が俺の耳に届く。おそろおそろの声のした方へと顔を向けてみれば、そこには笑顔を張り付けた姫無の姿。

「な、なんだ」

「私トーナメント優勝したじゃない？ そのご褒美が欲しいなー」

ご褒美とな。金銭でも要求されるんじゃないだろうな。

一応何が欲しいのかと尋ねてみる。

「臨海学校。私も行きたい」

「却下」

何を言い出すのかと思えば。というか姫無は去年行ったはずだろう。

「なーんーでー!? いいじゃない私一人増えたくらいでどうこうなる

わけじゃないでしょー!?!」

「いやそういう問題じゃなくてだな」

「じゃあどういいう問題な訳!?!」

「二年生が参加できないわけなんだが。」

「まあなんだ。取り敢えず俺が言いたいことはだな」

「ん?」

「お前なんで学園内で裸Yシャツなわけ?」

なあ。前に俺の部屋でもあったよな。まさかその格好で廊下彷徨  
いてたわけじゃないよな。おいこつち向けよ。

## #29 デートと可能性

「あ、見てみて一夏君！ これなんて良いと思わない!？」

「はあ、そうですねえ」

「む、なあに一夏君その顔は。おねーさんとのデートはそんなにイヤ？」

「いや、そんなわけはないんですけど」

そんな訳はないんだけど、と一夏はもう一度胸の内で反芻する。はあ、と目の前で嬉々として商品を物色している少女には気付かれなないように溜息を吐いた。

おかしい、彼の考えていたものと現実はかなりかけ離れたものになってしまっていた。思えば最初から微妙に噛み合っていなかったような感は否めなかったのだが。天井から吊るされた照明を見上げて、一夏は自嘲気味に呟いた。

「……ほんと、どうしてこうなった」



事の起こりはタッグマッチトーナメントが終了して一週間程たった日のこと。七月に入りそろそろ梅雨も明ける頃だろうに、それを裏切るかのようにしとしとと雨の降る日曜日のことだった。基本的に休日にはISと更識流の鍛錬をしている一夏は、今日も今日とてそのつもりで寮の廊下を歩いていた。クラスメイトであるセシリアやシャルロット、ラウラなんかとは専らアリーナを借りてISでの鍛錬を行っているが、今日は道場で姫無や簪と更識流の稽古をつけることになっている。

IS学園に入学してからは再び顔を合わせる機会が増えたことは素直に嬉しいことである。何せ姫無は初恋の相手、一度振られているとは言えその程度で諦めるようなら初めから好きになってなどない。幸いにして簪は応援してくれているし、今日の稽古も簪が姫無を

誘って行われることになったのだ。

色恋と鍛錬とを混同させたりなど間違ってもしないが、それでも時折視線が姫無へと向いてしまっているのは一夏自身も気が付いている。無意識に彼女の一举手一投足を目で追ってしまうのだ。こればかりは残念なことに一夏にはどうすることもできなかった。

道着を既に着た状態で、二人が待っているだろう道場の扉を開く。

「おはよう一夏君」

「おはよう、一夏……」

「おはよう姫無さん、簪」

やはり二人は既に準備を終えて、道場の端で姿勢を正して座っていた。一夏もそれに倣うように簪の隣に正座し、静かに黙想に入る。一分ほど黙想した所で、横から衣擦れの音が聞こえて瞼を持ち上げる。見れば姫無が立ち上がって道場の中央へと歩いていくところだった。その姫無は一度振り返って一夏を見ると。

「さ、始めましょう。先ずは私と一夏君よ」

「はい」

言われ、一夏もその腰を上げて中央へと進む。簪は未だ背筋を伸ばして黙想していた。

ピンとした空気が張り詰める。一夏が両手を構えたことで、姫無も構えを取る。同じ構え、同じ柔術を学んでいるのだから当然と言えば当然だ。互いに視線は外さないまま、摺足を使って距離とタイミングを図りながら動く。

「——っはあー」

右足で思い切り踏み込んで、一夏は姫無の腹部目掛けて膝を蹴り込んだ。常人であれば直撃は免れないタイミング、しかし姫無は動じない。タンツと床を蹴って後ろへと身体を運ぶ。一夏の脚力やリーチを把握してるが故に、その範囲までも熟知していた。よって、一夏の膝は姫無の道着にぎりぎり当たらない。膝蹴りで一瞬だけ無防備になる一夏の上半、それを姫無は見逃さなかった。重力など感じさせない着地をしたかと思えば、瞬時に一夏の懐にまで入り込み、

「うおっ!?!」

一般的な高校生男子よりもかなりガタイの良い一夏の身体が、綺麗に一回転した。

その後も相手を変えて組手を続け、気がつけば昼を回ろうかという時。水分補給をしていた一夏に、タオルで汗を拭う姫無が思い出したように言ったのだ。

「あ、そうだ一夏君。今週の日曜日って空いてるかしら」

「今週ですか？ 多分空いてると思いますけど」

いきなり何を、と思いなながらも、一夏は姫無の質問にそう返した。その答えを聞いた姫無は満足そうに一つ頷いて。

「じゃあ一夏君。私とデートしましょ」

平然と、そんな爆弾を一夏に放り投げたのだった。

顔を真っ赤にする一夏の正面、姫無の後ろで簪が無言でサムズアップしているのを、動揺していた一夏は見逃していた。



「……分かったた、分かったたよ。期待した俺が阿呆なだけだって、でもこんなのってあるか……？」

時間軸は現在に戻り、シヨツピングモールのベンチで一夏はぐったりと項垂れていた。

あの日姫無にデートの誘いを受けてから今日まで、一夏のテンションは常に高かった。同じクラスの筈にジト目で『どうした、なんだか気持ち悪いぞ』と言われるくらいに。だがそこは分かってほしい。好きな女の子からデートに誘われる、これほど男にとつて嬉しいことはない。今まで幾度となくデートの誘いをしてきた一夏だが、姫無のほうから誘ってきてくれたのは今回が始めてだった。それはつまり、少なからず自身に興味を持ってきているということなのではないか。そう思って妙なテンションになった一夏を誰が責められようか。

そして当日。自身が出来る最大のオシャレをして、待ち合わせの場所へと集合予定時刻の三時間前にはやって来ていた一夏。その服装はグレーの七分シャツに薄手のベスト、黒のスキニーパンツ。一応有

名人であることを考慮して変装用に伊達眼鏡と中折帽子を装着している。正直この格好と元の容姿の所為で下手なモデルよりも目立っているような気がしなくもないのだが、一夏は周囲の視線など全く気にならなかつた。恋する男子も盲目なようである。

集合予定の三十分前程になつたところで、一夏を見つけた姫無が小走りで行つて来た。青いカットソーにホットパンツ。すらりと伸びた脚元は夏を先取りしたヒールの低いベージュのサンダル。そんな姿を目の当たりにして、思わず一夏は鼻を抑えた。普段の制服姿だと脚は黒のタイツで覆われてしまっているし、稽古の時はズボンなので早々姫無のこんな姿をお目にかかることなど出来ない。これは脚フェチになつても仕方ないんじゃないだろうか、なんとなく一夏は悟つた。

「早いわね一夏君、三十分前には来たつもりだつたんだけど」

「いえ、女性を待たせるわけにはいきませんから」

昂ぶつてしまつて三時間前に来ていたなどとは間違つても口にはしない。

「ふふ、そういうところ女の子にはポイント高いわよ」

そう言つて笑う姫無に、一夏の頬も自然と赤くなる。

が、一夏の男子高校生らしいどきどきとした青春のページもここまで。

「じゃ行きましょうか。——兄さんの水着を買いに」

「……………え？」

一夏の中で、何かが崩れる音がした。

一夏がデートだと思つていたのは、蓋を開けてみれば姫無の兄である楯無の水着を一緒に選んで欲しいというものだった。いやいやそれデートじゃないんじゃないかと思つた一夏は思わず質問してしまつたのだが、それに対して姫無は男女と一緒に買い物するのは立派なデートだと言い切つた。最早一夏は何も言えない。

七月の二週目に予定されている校外特別実習期間、いわゆる臨海学校で使うであろう水着を姫無がプレゼントしようと考えていたのだ。男性物の水着は女子の姫無は詳しくないために同じ男である一夏を



誘って、ついでに一夏の水着も買ってしまおう。そういう話なのであった。

言ってしまったえば一夏の早合点。姫無に非があるわけでもなし、一夏はただ嬉しそうに水着を選ぶ彼女の後ろを付いて歩くことしか出来なかった。今もとある若者向けの水着売り場で男物の水着を物色している姫無から一旦離れ、こうしてベンチで精神力の回復に務めているのである。一夏の横には幾つかの紙袋、全て姫無が楯無へと買った水着である。一般的なトランクスタイプのものからかなり際どいブーメランまで、因みに一夏はブーメランを手にとった姫無に全力で首を横に振ったのだが、いつの間にか会計は済んでいた。

「あ、こんな所にいた」

と、休息を取っていた一夏の元に姫無がやって来た。その両手に二着の水着を持って。

「それも楯無さんに買っていくんですか？」

何枚買うつもりなのか見当も付かなくなってきた一夏は苦笑気味にそう尋ねる。

だが、姫無から返ってきたのは彼の予想とは違ったものだった。

「何言ってるの。これは一夏君の水着よ？」

「え？」

「兄さんの水着はもう買えたから。ほら早く、一夏君の好みだつてあるでしょ。それとも私だけで選んじやってもいいのかしら？」

微笑む姫無に釣られて、自然と一夏の頬も緩む。全く、昔からこの人はこうだと一夏は思う。自由奔放マイペースを地で行くくせに、他人にもきちんと気を配っている。

そういうところにも、惹かれるのだ。

しかしそんなことを思っているとは決して表には出さず、一夏はベンチから立ち上がる。

「ブーメランは勘弁してくださいね」

「え、ダメなの？」

「寧ろ何で良いと思っただんですか」

一夏と姫無が巨大ショッピングモールで買い物を楽しんでいるだろう頃、俺は真耶と二人で臨海学校で使用する旅館や海域の現地視察へとやって来ていた。視察と言ってもそんな堅苦しいものでなく、軽い旅行気分で行えるようなものだ。三日間お世話になる予定の旅館『花月荘』は俺がIS学園に在学していた頃から利用させてもらっている場所で、女将とも今ではすっかり顔なじみである。なんでも最近女将が娘に変わったらしい。娘とは言っても俺より幾らか年上だが。「何だか懐かしいですね」

「つつても真耶と一緒にこの場所に来るのは始めてだけだな」

最寄りの駅で降りて、海岸線沿いに旅館に向かって歩く。夏の兆しを見せる太陽の光が海面に反射して美しい。都心から二時間程の場所にこんな場所があるなんて、今更ながらに信じられない。

幸いにして花月荘は駅からそう遠くない場所にあるので、俺も真耶もそれほど疲れることなく旅館に到着することができた。今日俺たちが此処に来ることは事前に連絡してあるのでお邪魔しても大丈夫だろう。正面玄関を通ると、直ぐに奥からパタパタと足音が聞こえてきた。

「ようこそいらっしゃいました。更識くん、いえ更識先生とお呼びしたほうがいいのかしら」

「お久しぶりです梗子さん。一応仕事ですけど、そのまま結構ですよ」

「あらそうですか？ あら、山田さん先生になつてらしたの？」

「はい、今年から副担任を任せました」

清洲梗子。俺が学園時代の花月荘の女将だった人だ。娘の年齢を思えばどう考えても五十を超えている筈だが、その見た目は娘と変わらないと言っても差し支えない程若々しい。いや、娘も娘で異常に若く見えるんだけれども。なんだこのアンチエイジング家族。

「例年通り、今年もよろしくお願いします」

「いえいえこちらこそ。あ、今景子を呼んできますね」

そう言つて、梗子さんは奥へと入つていく。少しして、その後ろに一人の女性を連れて戻つてきた。

「更識さん、お久しぶりです」

「お久しぶりです景子さん」

花月荘の現女将、清洲景子。梗子さんの娘でこの花月荘を切り盛りしている若女将だ。決して派手ではない着物が彼女の雰囲気と良く合っている。

「今年は男子が二人いまして、ご迷惑をお掛けするかとは思いますが」「それ、更識くんが学生だった頃にも言われてましたよ」

「茶化さんでくださいよ梗子さん」

ほほほ、と上品に笑う梗子さん。いや確かに、俺と織村の二人の所為で当時の臨海学校は大変だったんだけど、それをここで掘り起こさなくてもいいんじゃないだろうか。過去を掘り返されるのは思ったよりも恥ずかしい、特にあの頃はまだ俺も若かったから。

「それで、この後はそうするおつもりなの？」

「試験運用する場所の確認をして帰ります。まだ学園に仕事を残してきているので」

「あら残念。うちでゆっくりしてもらおうと思つていたんですけど」

「臨海学校の時は、くつろがせていただきます」

頬に手を当てて残念そうに言う梗子さんにそう言つて、真耶と旅館をあとにする。この後は海外線に沿つて歩き、IS武装の試験運用する場所の安全性を確認すれば学園に帰るだけだ。

帰りに何か千冬に手土産でも買っていつてやるかな、自分一人だけ行けなかったことを拗ねていたし。



「……ねえ、アレ何？」

「一夏だな」

「一夏だね」

陰鬱な少女の問いかけに、その脇に並んでいた二人があっさりとう答えた。真ん中に立つ小柄な少女はその苛立ちからか、ツインテールがうねうねと蛇のように蠢いているように見える。

「へ、へー……。何だ私の見間違いないかなかったのかー。これはうっかりだわー」

棒読みの少女、鳳鈴音。想い人である少年が他の女と二人きりで買物している現場にばったりと出会ってしまったはこの反応も仕方ないのかもしれない。だが隣に立つ二人、箒とシャルロットはそんな鈴とは対照的に生暖かい視線を一夏へと向けている。彼に恋慕を抱いていないのだから当然と言えば当然なのかもしれないが。

「それにしても一夏もちゃんと男だったということか」

「どういうこと？」

腕を組んでうんうんと頷く箒に、シャルロットが尋ねる。

「昔のアイツは超が付く鈍感でな。女性を好きになるなんて有り得なかったんだ。どころかホモなんじゃないかとの噂まであったほどだ」

「そうなの？」

「楯無さんと出会ってからだな。一夏がそうだった事にも明るくなったのは。まあ姫無さんに惚れたからなんだろうが」

和気あいあいと一夏を話題に盛り上がる二人を尻目に、鈴は一夏たちをジッと見つめる。分かっていた。自身が転校する少し前から、一夏の様子が変わったことくらい。それが姫無を理由にしたものだとは思っていないが、纏う雰囲気は柔らかくなったと感じていたのだ。それから少しして中国に帰ってしまったためにその後の一夏の様子は分からなかったが、今の彼を見る限り鈴の入り込めるような余地は見当たらなかった。

「……はあ」

中国へ帰る直前にした約束は曲解されるし、一夏が惚れているらしい相手は自分に無いものを全て持っているように見える、胸部も含めて。もう一度言う、胸部も含めて。

言いようのない敗北感が彼女を襲う。

「鈴」

「いいの、箒。分かってるから」

何かを言おうとした箒に先んじて鈴はその言葉を止めた。他人から言われると余計にみじめに感じてしまうから。一度俯いて、大きく息を吐き出す。ここで諦めてしまえるのならいっそ、どれだけ良かったらうか。いや、そうじゃないかと鈴は頭を振る。ここで諦めてしまえるような感情は、きつと好意ではあっても恋慕ではない。

だからこそ、鈴は目の前の光景を見せつけられても諦めることはなかった。逆境上等、追い詰められれば追い詰められるほど燃えてくるのが鳳鈴音という少女なのだ。決してDMなわけではない。

「よし！ 箒、シャルロット。早く水着買いに行きましょう。一夏に見せつけてやるんだから」

「あの二人のことを追わないのか？」

「そんな無粋なことしないわよ。今は一夏の好きにさせてあげる。ほっといたって最後は収まる場所に収まるもんよ」

それが強がりであることくらい箒たちにはお見通しだったが、敢えてそこを突く必要性も感じない。二人は快く頷いて、一夏たちが居たのとは別の店舗へと入っていった。



目的であった水着も無事に購入し、一夏と姫無はレゾナンス内にあるレストランで昼食を摂っていた。日曜日の昼時ということもあって客足も多く、店内に設置されたテーブルは満席だ。一夏と姫無は混雑する時間を避けて少し早めに訪れたつもりだったが、それでもぎりぎりだったらしい。一先ず席に着けたことに安堵しながら、一夏は目先にあつたメニニューを取った。

「姫無さん、何にします？」

「一夏君は？」

「俺はカツ丼とかでもいいですかね」

「もう、デートなんだからもう少しおしやれなの頼まないの？」

「姫無さんが言うてデートって言葉も薄っぺらく聞こえますね」

普段は言われっぱなしのせめてもの意趣返しとばかりに一夏が言った。が、姫無はまったく堪えていないらしく。

「ん？ なら一夏君の耳元で艶っぽく言っただけよ？」

ずいっと身を乗り出して、姫無の顔が一夏の鼻先数センチのところまで迫る。身を乗り出してしまっているせいで姫無の胸元がかなり危険な所まで見えそうになってしまっているが、一夏は鋼の心で見ないよう視線を逸した。この人はほんとにもう、と思わずにはいられない。こうして思春期の男子の心を弄んで楽しむとはまったくいい趣味をしている。無意識のうちに一夏は溜息を吐いた。

「む、女性の前で溜息なんてダメよ？」

それをばつちりと目撃していた姫無から声が飛ぶ。

普段であればその言葉でバツが悪そうにする一夏だったが、今日は色々とありすぎて容量がいっぱいだった。故に、若干ながらの反論を試みる。

「姫無さん」

「なあに？」

「俺、前姫無さんに告白して振られましたよね」

「そうね」

「なのにデートとか言うんですか？」

「言ったじゃない。男女二人で買い物するのはデートよ」

何を言うのでも言いたげに首を傾げる姫無に、そういうことじゃないんですがつっこみたい気持ちでいっぱいだった。逆に考えれば、振った相手をデートに誘ってくれるということはまだチャンスがあるということなのだろうか。だが中々自分の気持ちを表に出さない姫無が一体何を考えているのかさっぱり一夏には分からなかった。「……何か勘違いしてるみたいだけど、」

と、悶々としたまま水を流し込む一夏の耳に姫無の声が滑り込む。

「——一夏君のことはきちんとききよ？」

思わず水を明後日の方向に吹き出した一夏を、きつと誰も責められない。



1 名前：名無し：20??/7/3 (日) 11:43 / ID:Kg  
f8n1v5p

【速報】

レゾナンスにIS学園の生徒多数確認。中には三人目の男子とロシア代表もいる模様。

2 名前：名無し：20??/7/3 (日) 11:44 / ID:jH  
2bdr09A

>>1

俺もさつき見た。変装してるっぽいけどあれロシア代表の更識姫無だよな、横にいたのって織斑一夏じゃね？

3 名前：名無し：20??/7/3 (日) 11:44 / ID:nD  
k3jpm4Y

ひめちゃんファンの俺にとって死刑宣告にも等しい報告だ

4 名前：名無し：20??/7/3 (日) 11:45 / ID:Td  
Nskbn5g

つうかなんでレゾナンスにそんな学園の生徒いるんだ？  
なんかイベントあったっけ？

5 名前：名無し：20??/7/3 (日) 11:46 / ID:8h  
wic4qFB

>>4

臨海学校が七月にあるからその準備じゃね

6 名前：名無し：20??/7/3 (日) 11:46 / ID:g f  
63Dpoz b

つかIS学園の男子って羨ましすぎだろwww

7 名前：名無し：20??/7/3 (日) 11:48/ID:Td  
Nskbn5g

IS学園の男は人生勝ち組だな

「……レゾナンス？ ああ、今日はその日だったのか」

明かりも点けず、カーテンも締め切ったままの部屋でパソコンの画面を見つめる少年は、ぼんやりとそんなことを口にした。傍から見れば完全に引きこもりだが、残念ながら本人には全くその自覚はなかった。

翌週末に臨海学校を控えていることは知っているが、一夏たちが買い物に行く日までは把握していなかった。

鞆無にとつての臨海学校は正直なところあまり乗り気にはなれないイベントだった。美少女達の水着姿が見られるという点では非常に眼福ではあるのだがそれは三日あるうちの一日だけ。残りの二日は武装のテストをしたり飛行確認をしたりと訓練所のようなメニューをこなさなくてはならないのだ。加えて二日目には銀の福音が暴走してやってくることだろう。万が一にも自身が撃墜されるとは思わないが、そういった面倒事は避けたい所だ。そういうのは一夏にでも任せておけばいいのだ。レベルアップフラグをへし折るようなことはしなくてもいい。

某掲示板のページをスクロールしながらその画面をぼんやりと見つめていた鞆無だが、ふいにそのスクロールが止まった。

8 名前：名無し：20??/7/3 (日) 11:49/ID:jH  
2bdr09A

そーいや先月のトーナメントおまいら見た？

ブリュンヒルデの弟はともかくもう一人のほうどう思うよ

9 名前：名無し：20??/7/3 (日) 11:49/ID:pd  
19Cn4Ws



>>8

あれはないな

10 名前：名無し：20??/7/3 (日) 11:50/ID:K  
gf8nlv5p

会話全部オープンでしゃべってるとかアホすぎww

11 名前：名無し：20??/7/3 (日) 11:50/ID:T  
dNskbn5g

肩の装甲壊してたけどなんなのあれ？

毎回あんなことしてたら開発のほうからキレられたりしないの

12 名前：名無し：20??/7/3 (日) 11:51/ID:n

Dk3jpm4Y

ひめちゃんに楯突いた人間は死ぬ(物理)

13 名前：名無し：20??/7/3 (日) 11:51/ID:j

H2bdr09A

>>12

お前更識姫無のこと好きすぎだろww

「くそが、好き放題言いやがって」

これだからISのことをちつとも理解していない低脳どもは嫌なんだ。あの戦い、事実上の決勝戦と言っても過言ではない激戦をさも分かっているかのように言うこういう奴らは。あの戦いは本当に接戦だった。それこそ、ふとした条件の変化で勝敗が左右されてしまう程に。自身の電磁干渉がもう少しだけ持続していれば勝っていたと鞘無は確信している。アクア・ナノマシンに干渉していると気付いたのは流石生徒会長と言ったところだろう。バレるとは思っていなかった為にその瞬間は驚愕したものだ。が、分かっていたとしても為

すすべはない。ガトリングガンが出てきたのは想定外だったが、きつとあれは彼女の奥の手だったのだろう。滅多なことでは使わない大技に違いない。

とは言え、終わってしまったトーナメントのことをとやかく言っても仕方がない。今鞆無が気になるのは、こうしてネット上でトーナメントの中継を見た世間の男どもがなじるようなことを行っていることだった。所詮はネット上でやりとりであって気にすることはなれなかつた。いとこのことは理解しているが、彼の中のプライドがそれを許してくれなかつた。

「……待てよ、銀の福音の暴走って大ニュースだよな」

顎に手を添えて、暫し考え込む。

「てことはだ。それを俺が解決しちまえば、世間に俺の功績が一気に広まるってことじゃないのか？」

妙案を得たり、と鞆無の口角が吊り上がる。つい数分前までは全く乗り気ではなかつたというのに、今の鞆無の脳内では臨海学校でどう立ち回るかという算段が着々と組み立てられつつあつた。

まず根本的に銀の福音の暴走は世間に秘匿されるべき事態であるということ、彼の頭からはすっぽりと抜け落ちてしまっているようだ。

「見てろよ世の中の男ども。俺の名前がニュースのトップを飾る日がそこまで来てるぜ……！」



ぼふん、と勢いよく一夏はベッドに倒れ込んだ。俯せのままベッドに倒れ込んだために多少の息苦しさを感ずるもの、それとは別の息苦しさを一夏は胸の奥に感じていた。

「なんだよあれ、不意打ちすぎだろ……」

ついさつきまで二人で出掛けていたことを思い出して、頬が熱を帯びるのを自覚する。特に昼食のときの姫無の一言は一夏の精神衛生をひどく乱すものだった。

シワをつくったシートの上から身体を起こし、口元に手を当てて思い返す。

『一夏君のことは、きちんと好きよ』

なんだよそれは、と声を大にして叫びたい気分だった。心境としては嬉しさ半分、驚き半分といったところか。告白しておいてなんだが、一夏は全く相手にされていらないと思っていたのだ。年齢だけを見れば一つしか違わないが、あの兄の影響なのか彼女の精神は非常に大人びている。故に自分は子供扱いされていて、一人の異性としては見られていないのではないかと思っていたのである。

その言葉を聞いた瞬間に明後日の方向へと水を飛ばした一夏を見つめながら、姫無は言葉が続けた。

『でもね、一夏君への好きはきつとライクであってラブじゃない。今はまだね』

グツ、と拳握る。あの言葉を聞いて、一夏は自分にもチャンスがあるのだと確信した。姫無は言った、今はまだと。ならば、いずれ自身をそういった対象として見てくれるようになるかもしれないということだ。そのために超えなければいけないハードルというのが師匠たる更識楯無なのだから無理ゲーもいいところだが、可能性が0ではないと分かっただけでも十分である。

「……やってやるさ。強くなるんだ、好きな女の子を体張って守れるくらいにはならなきゃな」

決意のこもったその言葉は、一人きりの部屋の中に溶けて消えていった。

そして翌週末、臨海学校が始まる――。



## #30 臨海学校と集結

七月も中旬に入り、真上に煌く太陽は更にその存在を主張するようになる。それに伴って上昇する気温と独特の空気に、夏がやってきたことを実感せずにはいられない。

臨海学校初日。天気はこれでもかという程に快晴だった。雲一つ見当たらない青空が広がっている。絶好の海びよりと言っている。初日は到着してから夜まで自由時間になっていたので水着を準備してきている生徒が大半、というか殆どだろうし。曇りならまだしも雨で外に出られないような状況だったなら目も当てられない。

「あ、見えたよ海！」

「うわぁキレー！」

トンネルを抜けた所で見えた一面の海に、一年一組の生徒たちのテンションが上がる。太陽の光を浴びる海面は穏やかで、潮風にゆらゆらと揺られていた。

「わぁ、綺麗ですね更識先生」

「そうだな」

窓に手を付いてそう言うのは、俺の隣に座っているシャルロットだった。人数の関係で一組のバスに乗車することになった俺は予め決められていたらしい座席に座ったのだが、どういう訳かその隣にはニコニコ顔のシャルロットの姿が。千冬と真耶は俺たちの前の列に座っていた。いや、別にいいんだけどさ。いいんだけども千冬さん、ちらちらと俺の方にジト目を向けてくるのは勘弁してほしいんですが。何だ、まさか俺がシャルロット相手にどうこうだと思っっているんじゃないだろうな。ロリコンでもない俺にそんな心配は無用だということに。

確かにシャルロットと俺の距離感は近い。かなり近い。異様に近い。具体的には俺の腕に回されたシャルロットの腕と肩にもたれるようにして預けられている彼女の顔が。シャルロットは美少女である。基本的に可愛い子の多いこのIS学園内でも上位の容姿をして

いるだろう。何年も前から彼女の事を知っている俺としては美しく成長してくれたことを嬉しく思うが、決して邪な気持ちを抱くようなことはないのである。言うなれば姫無や簪に対する気持ちに近いだろうか。妹みたいなものだ。

だから例えシャルロットが自身の胸を俺の腕に押し付けるようにしてきても、髪の毛からすごい匂いがしてきても、俺の心は揺れ動いたりはしない。あ、でもこの匂いすごい匂いだ。

「更識先生？」

「ん。どうしたデュノア」

「先生も今日は仕事はないんですね？」

「旅館の方への挨拶とか明日からの日程の調整とかはあるが、まあそうだな。込み入った仕事は今日は入れていない」

「じゃあ一緒に海に行きましょう。オイル塗って欲しいんです」

ん？ オイル？

「デュノア。教師の前で不純異性交遊とはいいい度胸だな」

「織斑先生。私は肌を守るために自分の手では届かないところを更識先生に手伝ってもらおうとしているだけです」

「だったら私が塗ってやろう。余すところなく隅々までな」

「いえ、手の大きな男性の方が満遍なく塗れますから」

俺とシャルロットの会話を前の席で聞いていたらしい千冬が顔をこちらに向けてそうシャルロットに言う。その言葉の至るところに刺を感じるのは俺の勘違いではないだろう。明らかに不機嫌なようである。そしてそんな千冬に一步も引かないシャルロットの肝はかなりすわっているみたいだ。

「更識先生。教師として節度ある行動するように」

「はい、勿論です」

反射的にそう答える。千冬の瞳からハイライトが綺麗さっぱり消えているのを見てしまっただけはそう答えざるを得ない。隣でシャルロットが不服そうに頬を膨らませているがこればかりは仕方がないと諦めてもらうしかない。誰だって命は惜しい、こんなことで落としたくはないのだ。

千冬とシャルロットの二人が放つ空気に耐えられなくなったというわけでもないが、なんととはなしにバス後方へと視線を向ける。そこには一夏を含めたいつもの面子の姿があった。

「フフ、ドロー2ですわ!」

「残念私も持っているぞ、ほら」

「甘いな。ドロー4だ! 色は赤」

「ナイスだ一夏。それなら私も持っている、そら」

「きやあああああツ!」

なんともまあ楽しそうである。大型バスには珍しく座席の前後を回転して変えられるタイプのものをフルに活用し向き合うようにしてUNOを行っている一夏たち。目の前に集められた十枚のカードを絶望の表情で見つめるセシリアがなんとも言えない雰囲気を出している。席位置はそのセシリアの隣に箒、箒の前に一夏。一夏の隣にラウラである。どうでもいい補足をしておくと、通路を挟んだ隣ではお菓子の袋を抱いて本音が健やかな寝息を立てていたりする。

「どうして、どうしてですの!?! 私の策は完璧だった筈ですのに!」

「いや、セシリアすぐ顔に出るからな」

「やってやるぜ的な表情がなんとも言えんな」

「そのくせカウンターには弱いしな」

上から一夏、ラウラ、箒の言葉である。三人からの言葉を受けてがつくりと肩を落とすセシリア。見てみれば他の三人の手札が残り三、四枚くらいだというのにセシリアだけは十五枚程あるようだ。どんだけUNO弱いんだセシリア。

視線を戻し、前方を見る。道路上方の標識を見れば目的地まで残り三キロを切っていた。千冬もそれに気がついたのだろう。立ち上がって車内全体を見渡すようにして。

「直に目的地に到着する。いつでも降車できる準備をしておくように」

生徒たちがそれぞれ返事を返す。一夏たちも座席を元に戻してそそくさとUNOをしまっていた。唯一セシリアだけが敗北のシヨックを引きずっているのか俯き気味だったが、まあ海に出ればそんな鬱

屈した気分も吹き飛んでしまおうだろう。

海岸線沿いに走るバスは、やがて近くの旅館の側で静かに停車した。生徒たちは持ち込んだ荷物を収納部分から取り出し、ぞろぞろと千冬と真耶の立つ旅館入口付近へと集まっていく。俺はつい先日も真耶とこの場所を訪れているが、やはりこの旅館は何度来ても良いものだと感じる。築間もない訳ではないが外観にまで清掃が行き届いており、日本の和を象徴するような古風な雰囲気が好きだ。

最後の生徒が荷物を持って集まったのを確認して、千冬が口を開いた。

「全員集まったな。それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員従業員の方の仕事を増やさないように」

よろしくお願いします。と生徒たちからの言葉にいつの間にか千冬の横に立っていた女性が柔らかい笑みを浮かべたまま頭を下げる。いつの間にも外に出てきていたのか、真耶も目を丸くしていた。

「こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね、織斑先生」

「元気がありすぎるのも困りものなんですがね」

「まあまあ。貴方たちが一年生の頃に比べれば可愛いものじゃないですか。ねえ更識先生」

「そこで俺に振りますか景子さん」

清洲景子。梗子さんの娘で今の花月荘を切り盛りする若女将だ。俺や千冬がIS学園に在籍していた時からの付き合いで、当時から女将の修行として従業員たちと同じように働いていたのを覚えている。年齢で言えば俺よりも五、六上な筈だが、どういうわけか二十代前半のような外見をしている。結婚していないということも関係しているのだろうか。これだけ綺麗な人なら婿の貰い手なんて多くいるだろうに。

「更識先生たちが学生だった頃は旅館に穴が開いたり砂浜が爆発したり大変だったんですよ」

「やめてください生徒たちの前ですから……」

その原因は東にあるのであって俺はどちらかといえば被害者側な



筈である。というかこの場で昔の話を持ち出すのは勘弁してもらいたい。近くに居て話が聞こえていたらしい生徒たちがポカンとして  
いるから。

千冬に目配せして生徒たちを旅館の中へと誘導する。彼女たちの  
部屋割りなどは事前に配布した資料に記載してあるため余計な説明  
はしない。そろそろと歩く一組の生徒たちに混ざって歩いていく一  
夏の姿を見つけて呼び止めた。

「織斑、ちよつとこつちこい」

「あ、はい」

言われて俺と千冬、そして景子さんの前に出てきた一夏。どうして  
呼ばれてたのか理解できていない顔をしている。

「まあ、こちらが？」

「ええ、世間で三人目と言われている織斑です」

「あ、初めました。織斑一夏です」

ここのでようやく呼ばれた理由を察した一夏が言っ頭を下げた。

「初めました。この旅館の女将をしています清洲景子です」

「不出来な弟なので迷惑をかけるやもしれませんが」

「織斑先生の弟さんなら何も問題はないんじゃないかしら。しっかり  
しているみたいだし」

そう言われて嬉しいのか一夏は表情が緩んでいた。その横で千冬  
がかなり厳しい視線を向けているが、それは見なかったことにしてお  
こう。藪をつついて蛇を出す必要はない。

「それではお部屋のへ案内しますね」

「お願いします」

景子さんに先導されて旅館内へと足を踏み入れる。基本的に生徒  
たちの部屋は本館の一、二階を割り当ててあり、俺たち教員は別館の  
一階を使用する手筈となつている。教師がすぐ近くに居たのでは生  
徒たちも気を休められないだろうし、過ちなんでもものも女子しかな  
いのであれば起こることはない。

「あの、更識先生」

景子さんを先頭に歩く俺の横に並んでいた一夏が口を開く。

「どうした？」

「俺と皿式だけ部屋の割り振りが資料に書かれてないんですけど、これってどういうことですか？」

「ああ。そのことか」

資料片手に問いかける一夏。そういえばまだ一夏には伝えていなかった。普通に考えれば分かると思うが、たった二人しかいない男子を年頃の女子が犇めく本館に泊まらせるわけにはいかない。色々almazいことになりそうだからだ。それは皿式にしても同様で、アイツを女子の近くに泊まらせると問題を起こしそうな気がしてならない。

故に、一夏たち二人は俺たち教員同様別館のほうで宿泊してもらうようにしたのだ。

「あ、そうなんですか」

「そうだ。女子に囲まれたい気持ちは理解できるが」

「そんなこと思ってますよ！」

なんだ、一般的な思春期男子学生ならそんなハーレムを希望しているのかと思つたが一夏はどうやら違らしい。

「てことは俺は皿式と同部屋になるってことですか？」

少しだけ嫌そうに一夏が問う。今の表情を見れば一夏が皿式との同部屋を望んでいないことはすぐに分かる。俺だって鬼じゃない。生徒同士の諍いに本来なら教師が介入するべきではないが、今回は幸い他にも男がこの臨海学校に来ることになっている。彼には悪いが少しばかり自らの過去を思い返してもらおう。うん、仕方ないことだ。決してそれを狙って部屋を割り振ったわけではない。

「いや、織斑は俺と同部屋だ」

「そうなんですか？　じゃあ皿式の方は……」

「皿式も二人部屋だ。夜にはこっちに到着する予定だからな」

あいつはナタルと同じ部屋になると思っているかもしれないが、残念ながらナタルは千冬、真耶との三人部屋だ。

一夏と話をしているうちに部屋の前に着いた。千冬たちは俺と一夏の部屋の隣だ。既に室内に入ったのか襖は既に開いていた。俺たちもさっさと中に入ることにしよう。襖をスライドさせて、畳の匂い

が仄かに香る室内へと足を踏み入れる。間取りは広く、外側の壁が一面窓になっている。その窓から見える景色は美しく、海を遠くまで見渡すことが出来る。

部屋の隅に肩に掛けていた荷物を下ろして、軽く伸びをする。凝り固まった筋肉が解れていく感覚が気持ちいい。

「さて、今日は夜まで一日自由時間だ。泳ぎに行くなり好きにしろ」  
「更識先生は行かないんですか？」

「俺は旅館の方への挨拶があるからな。でもまあ、少しくらいは海に出るさ。折角買ってきてもらった水着もあることだしな」

本当なら俺は海に出る気なんてのはこれっぽっちも無かったのだが、何でも先週の日曜日に一夏と買い物に行ったらしい姫無が俺の水着まで買ってきたのだ。それも一枚や二枚ではない、両手の指では足りないほどだ。一般的なトランクスタイルのものからかなりきわどいブーメラントタイプのものまで多彩な種類を買ってきたようで、その日の夜は姫無から全ての水着の試着をせがまれた。当然ブーメランやその他のヤバめの水着は除外したが。その試着の結果、姫無がこれだと太鼓判を押した水着を一着持ってきているのである。聞けば千冬も一夏から水着をプレゼントされていたらしく、仕事が早めに終われば泳ぎに行くと言っていた。

時計を見てもまだ午前十一時。仕事があるとはいえ流石に夜までかかることはない。少しは泳ぐか、と考え始めた俺は取り敢えず一夏を部屋から追い出してポケットに突っ込んでいた携帯を取り出す。実はこの部屋に向かう時からずっとバイブが振動していたのである。約三分の間電話をかけ続けてくる人間など、俺の知り合いの中にはたった一人しかいない。ディスプレイに表示されている人名はやはり想像通りの人物で、通話ボタンを押す前からげんなりさせられる。いつそのことこのまま出ないつてもアリだな。

暫く振動し続ける携帯を持って眺めていたが、そのままそつと携帯を自らのポケットに戻……、

「何でポケットに戻そうとするのかなッ!？」

「どこから湧いてきたのかな」

……そうとしたところで、窓の外側に張り付くようにしてウサミミが現れた。天才にして天災、皆さんご存知篠ノ之東だ。いや、何で此処にいるんだとかどうして俺の行動を把握しているのとか言いたいことは山程あるが、取り敢えずは一つだけ言わせてもらおう。

「何でお前水着で窓に張り付いてんだ」

「え、気合？」

普段身に付けている不思議の国のアリスが着ていたような水色のワンピースではなく、今の東は空色のビキニを着用していた。しかもかなり際どいやつ。このまま放っておいても面白そうだが、それだと何をされるかわからないので仕方なく窓の鍵を開けて東を室内へと招き入れる。

べちや、となんとともみつともない着地をした東はそのまま正座して。

「やあやあ久しぶりだねかーくん！ あ、今はたつくんって呼んだ方がいいのかな!? 愛しのハニーが帰ってきたよ!!」

「ご苦労さまでしたお帰りはあちらです」

「扱いが雑っ!!」

襖を差しながら頭を下げる俺に束がすかさずツツコミを放つ。相変わらずこのハイテンションにはついていけない。まあ俺が突っ込ませただけけれど。それはそうと、俺は束がこの臨海学校にやって来るなんて話は聞いていない。というか連絡自体寄越さないんだから知らないのは当然なんだが、一体今回は何の企みがあってやって来たのだろうか。

そこまで考えて、ああと一人で納得した。そういえば箒の専用機がこの臨海学校でお披露目になるんだったと。だとすれば、それを設計開発したのは姉である束に違いない。それを直接運んできたというのだろうか。

「箒の専用機を持ってきたのか？」

「うーん。それも勿論あるけど、一番はたつくんに会いに来たんだよ！」

バツ！ と両手を広げて俺に飛び込んでこようとする束。だが先

程までの正座で足が痺れていたらしく、彼女は畳と熱いヴェーゼを交わした。自業自得である。

えへへ、と畳の痕がぼつちりついた顔をさすりつつ、束は上体を起こした。

「そういえばちーちゃんは？」

「千冬なら隣の部屋だよ」

「ふむふむ。じゃあ夜は声聞こえちゃうかもねー」

「何を考えてるか知らんがこの部屋は一夏と相部屋だからな？」

「大丈夫だ、問題ない」

「問題しかねーよ」

身体をくねらせてそんな事を言う束に頭を抱えそうになる。束の相手をするといつもこうだ。自由奔放に生きる彼女に振り回されっぱなしな気がしてならない。そしてそれを不快に思っていない自分自身にも問題はあるのだろうか。

「まあ一先ずだ。折角水着で来てるんだし海に行ってきたらどうだ。箒もいるはずだぞ」

「あ、そうだね。箒ちゃんにも暫く会えてないし、今のうちに妹分を補給しておかないと」

どうやらその妹分というのが枯渇すると束の頭脳に異常が生じるらしい。定期的に摂取することでとんでもないモノを開発できるのだとか。

「じゃあたつくくんまた後でね！ あ、海に来たら束さんに日焼けどめ塗ってよ！ ウサミミからつま先まで余すところなく！」

ウサミミにまで塗る必要があるのかは定かではないが、少なくとも日焼けどめを塗るのなら海に出てからでは遅いような気がする。そこらへんを理解しているのかしていないのか、束は水着のまま窓から飛び降りていった。いきなり現れて颯爽と消えていく様は宛ら台風のようなのだ。

というかその台風が浜辺に行ったら周囲の生徒たちが巻き込まれてしまうのではないだろうか。いや、それ以上考えるのは止しておく。その時はその時だと諦めるしかない。

「つと、こうしちゃいられないな。早く仕事を片付けてしまおう」

東に気を取られて忘れそうになってしまつていたが仕事を疎かにすることは出来ない。暑さを和らげるために上のジャケットを脱いでついでにネクタイをとっぱらう。クールビズだ。挨拶に向かうには少々ラフすぎるかもしれないが、そこはまあ旧知の仲ということで許してもらふことにしよう。荷物を置いてある部屋を出て、そのまま階段を降りていく。

海か。今年も何事も無く終わってくればいいんだけどな。ふとそんなことを思いながら、俺は女将さんがいるであろう厨房へと入つていった。



「ちよつと一華。いつになったらこの渋滞から抜けられるの?」

「それを俺に言われても困るんだけどな。何でもこの先で交通事故があつたみたいだ。あと十数キロはこの渋滞だな」

動きを完全に止めてしまつたタクシーの後部座席で、茶髪の男性と金髪の女性が会話を交わしていた。金髪の女性のほうはこういった渋滞に慣れていないのか苛立たしげに窓の外を見つめている。それを横目に、隣の男性はこっそり溜息をついた。羽田空港に到着し、そこでタクシーを拾つたまでは順調だった。しかし高速道路で発生したらしい交通事故で十キロ以上の渋滞。先程から全く動きを見せる気配が見られない。

「このままじゃ夜までに着けないかもな」

「ええ!? そんなのイヤよ! 更識先輩や織斑先輩に早く会いたいの!」

ぼそつと呟いた男の言葉を確り聞き取つていたららしい女性は男のシャツを掴んで上下に激しく揺さぶる。その動きに合わせて男の身体がガクガクと揺れて気分悪そうにしているが、女性の方はそんなこと完全に無視である。

「いやあ、すいませんねえお客さん。まさか事故で渋滞してるなんて

知らなかったもんで」

そのやり取りをミラー越しに見ていた中年のタクシードライバーが申し訳なさそうに二人に言った。二人もこのドライバーに非がないことくらい理解しているので非難したりはしない。

「いえ、気にしないでください。別段急ぎでもないのです」

「料金は割り引かせてもらうので……あれ？」

申し訳なさそうにしていたドライバーだったが、そこでふと気がついたように声を漏らした。恐る恐る、ドライバーは後部座席に座る二人に尋ねる。

「あの、間違つてたら申し訳ないんだけど。お兄さんたち、テレビか何かに出てる人？」

ドライバーも確信があったわけではない。ただ何かのテレビでこの二人の顔を見たような気がしたのだ。

その質問に答えたのは、女性のほうだった。掛けていた丸いサンングラスを外して、ミラー越しにこちらを伺うドライバーへとウインクをする。その様子を見てドライバーも思い出した。この金髪の女性は確か、以前のISを使った世界大会に出ていた――。

「ナターシャよ。日本の人にも知ってもらえてるなんて、私も有名になつたものね」

「国家代表が何言つてんだか」

「あら、知名度で言えば私よりも一華や更識先輩の方が高いじゃない」  
ここでようやく、もう一人の男性の正体にドライバーは気付いた。背中まで伸びた茶髪を一つに結っていてキャスケット帽を被っているから分らなかったが、この男は全世界の男たちの憧れであるたつた四人しかいない男性IS操縦者の一人であると。

「あ、アンタ……。まさか……」

どうやら正体がバレたらしいと男は察した。折角変装じみたことまでしてここまで身元を隠してきたというのに、今のナタルの行動で水の泡だ。まあ狭い車内の中であるし、タクシードライバーの男一人に知られるくらいなら問題はないかと思つて、男も被っていた帽子を取つた。

「——どうも、織村といいます」

世界で二人目の男性 I S 操縦者とアメリカの国家代表を乗せたタクシーは、その一時間後渋滞を抜けて目的地へと走り始めた。



## #31 ビーチと夜

別館に備え付けられた更衣室で着替えを済ませて、一夏は浜辺へと一歩を踏み出した。薄い壁の一枚向こうが女子が使用する更衣室だということもあって、何やらきやつきやと女子生徒たちの声が聞こえてきたりもしたが一夏は鋼の精神でそれら全てを聞かなかつたことにした。胸がどうか腰回りがどうか、今の一夏には刺激が強すぎる話題ばかりだった為だ。

現在の一夏の格好は先日姫無とのデートをした際に購入した紺色のトランクスタイプの水着に上半身は薄手の灰色のパーカーというものだ。いつでも上を脱げるようにパーカーの前は開けた状態で更衣室を出たのだが、どうやらそれがいけなかったらしい。たまたま更衣室を出るタイミングが重なって出くわした女子生徒が、一夏のその身体を見て頬を染めくねくねし始めたのである。

「お、織斑君!？」

「わあ、腹筋すげーい……」

「私の水着姿大丈夫かな、ちゃんとムダ毛処理したよね!？」

年頃の少女たちにとって、鍛え抜かれた一夏の肉体は少々刺激が強すぎたようである。いつもなら平然と話しかけてきてくれるのに、少女たちは何故か一夏と視線を合わせようとしない。ちらちらと、伺うように一夏の顔と身体を交互に見つめてはきやきやと頬を染めて足早に砂浜へと走って行ってしまった。

何とも言えない複雑な心境だが、折角の自由時間。しかも目の前に広がる大海。こんな気持ちでいるのは少々勿体無い。一夏は気持ち切り替えて、波打ち際へと向かう。足の裏を焼く砂の熱さを我慢しながら進んでいくと、程なくして大勢の女子生徒たちで賑わう砂浜に到着した。右を見ても女子、左を見ても女子。しかも全員漏れなく水着姿である。正直目のやり場に困る。いや、眼福なのは否定しないけれど。

何事も几帳面な一夏はこういつた時でも準備体操は欠かさない。万が一海中で足をツリでもしたらシヤレにならないからだ。膝を曲げて屈伸、前後に開いてアキレス腱を伸ばし、腕を上に向けてゆつくりと上体を傾ける。

「い、ち、かつ！」

「うおっ!？」

伸脚を忘れていたことを思い出して足を広げて屈む一夏の背中にいきなりドンツと衝撃が走った。突然の事に驚く一夏だったが、首に回されている手を見て背中に張り付いている少女を特定する。どうか視界の端でツインテールが楽しげにゆらゆらと揺れているのだ。「いきなり飛びつくなよ。危ないだろ鈴」

「相変わらず真面目ねえアンタは。準備体操はもう終わったわけ？」

「たつた今お前に中断されたところなんだが」

「じゃあいいわ。ほら、泳ぎに行くわよ」

何が良いんだと思う一夏だったが、首に手を回され、腹筋の辺りに足を絡まれたこの状態では準備体操もくそもない。幸い殆ど体操は終えていたし、ここは鈴の言い分を優先することにしよう。そう決めて、一夏はゆつくりと上体を起こす。それを受けて、後頭部の辺りから「うおー」と関心するような声が聞こえた。

「高いわねー。一夏また身長伸びた？」

「おかげさまでな。今百八十ぴったりだ」

慣れない視線の高さが新鮮なのか、鈴はあちこちをきよろきよろと見渡しては嬉しそうに肩を叩く。

周囲から向けられる好奇の視線が気にはなるが、そんなことよりも鈴が楽しそうなので一夏は無理矢理降ろす様な真似はしなかった。小柄な鈴が背中に張り付いたところでさして重く感じることもないし、女子高生と密着出来るのは役得だと言い聞かせる。

さて、そんなことを考えながら波打ち際へと歩いてく一夏の背中にくっついている鈴はと言うとだ。

(うわ、うわあ……。一夏が近い、近いよお……)

一夏の首筋数センチのところに顔を寄せて、耳まで真っ赤な顔を周

困の生徒たちに見られないよう必死に縮こまっていた。女は度胸と勢いよく一夏の背中に突撃したところまでは良かったのだが、そこから先のプランを鈴は全く考えていなかったのである。取り敢えず話しかけたいと思っただけのもの、まさか背中に抱き着いたまま移動することになるとは思っても見なかった。回している腕からは一夏の身体が引き締まっていることを強く感じ、落ちないように絡ませた足は鍛え抜かれた一夏の腹筋に触れている。パーカー越しとは言え、嫌でも男というものを意識せざるを得なかった。

(心臓の音、聞こえてないよね？ 大丈夫だよ？)

自身でもはつきりと自覚できるほどに早い鼓動が聞こえているのではないかと不安に駆られる鈴。しかし一夏は気にする素振りを見せず、その様子に少しだけ安堵する。出来ることならこのまま離れたくないと思っただけ鈴だったが、ここは砂浜。人目につきすぎる。してなにより。

「ああああああッ!? な、何をしているんですか鈴さん!!」

鈴よりも少し遅れてやってきた英国淑女が、それを許してくれる筈がなかった。

一夏にくっついてる鈴を指差して、わなわなと肩を震わせるセシリアに鈴はにやりと口元を歪めて。

「何って、監視塔ごっこよ」

「そんな遊びは知りません!」

「今考えたもの」

何か問題でも? とでも言いたげに鈴はにんまりと笑みを浮かべた。それを受けて恋する乙女セシリア・オルコットが黙っていられるはずもない。

「い、一夏さん! 私も乗せて下さい!」

「いや俺乗り物じゃねえんだけどっ!」

そうは言う一夏だが、残念ながら背中に鈴をくっつけたまま言っても全く説得力が無かった。というかそもそも鈴が降りてくれればそれで済む話なのだが、当人は一夏のパーカーのフードに顔を埋めて離れるような素振りは見せない。腕も足もがっちり回されいるため

に振りほどくことも不可能だ。傍から見ると木にしがみつくとア  
ラのようにある。

「おい、鈴。もう波打ち際だしそろそろ降りてくれ。流石に皆に見  
られるのはなんか恥ずかしい」

「む。何よ私がくつついてちや恥ずかしいっての？」

「普通に考えてそうだと思うんだが」

「……ま、しょうがないか。セシリアが顔真っ赤にしてるし」

言つて、先程までの強情さはどこへ言ったのかぴょんつと一夏の背  
中から飛び降りる。その動きの身軽さは猫のようで、改めて鈴の身体  
能力の高さを思い知る。背中が軽くなった一夏は今一度背中  
の筋肉を伸ばして広大な海を見渡した。快晴も手伝って空と海との境目  
が曖昧になるほど見通すことが出来る。爪先に同じ感覚で寄せては返  
す波が浸かり気持ちがいい。気温も上がって今では三十度近く。真  
夏日に迫る炎天下の中、海を目の当たりにして泳がない選択肢は存在  
しなかった。

「鈴、あの岩場まで泳ごうぜ」

「いいわね。競争する？」

「それもいいけど、今日のところは楽しむのが目的だからゆっくり行  
こうぜ」

泳ぎに多少の自信を持つ一夏は競争することも吝かではなかつた  
が、何せ一日は長い。何もスタートからかつ飛ばす必要もないだろ  
う。昼食を挟むとは言え夕方までである自由時間だ、体力の配分は考  
えようがいい。そんな一夏の考えを察してか、鈴も特に異論を唱える  
ようなことはしなかった。ばしゃばしゃと海水へと身を沈めていく。

「ん？ セシリアは来ないのか？」

膝上まで海水に浸かったところで、セシリアが付いて来ていないこ  
とに気がついた。強制するつもりは微塵もないが、彼女も泳ぐだろ  
うと勝手に思っていた一夏は少々意外そうに呟く。

「え、ええ。私は砂浜にパラソルを立ててゆっくりします。ほら、パ  
レオも巻いていることですし」

「いや、パレオは取ればいいだろ」

セシリアは青いビキニにパレオを巻いた格好をしており、確かにそのままの格好では泳ぐのには向かない。が、泳ぐ時はパレオを取るのが普通であり、そんなことをセシリアが知らない筈がない。よくよく見ればセシリアの頬が若干ヒクついているのが分かった。波打ち際まで来てはいるものの、決して海水に浸かろうとはしていない。ビーチサンダルも履いたままで脱ぐ気配もない。

ふむ、と一夏は考える。そして思い至って、つい口に出してしまった。

「あ、セシリアつてもしかしてカナヅチか」  
「っ!?!」

面白い程にセシリアが狼狽した。

その反応を受けて確信する。

「ち、ちが……」

「無理しなくてもいいぞ。確かに海は危険もあるしな」

何か言おうとして口を開いたセシリアだったが、一夏にそう言われては何も言えなくなってしまった。わなわなと震えていたが、やがて涙目のまま砂浜を駆け抜けて行ってしまった。そんな後ろ姿を眺めながら、一夏は首を傾げる。

「俺、何か悪いこと言ったか？」

「まあ、人に知られたくない弱点だつてあるでしょうよ」



皿式鞄無は瞳を閉じて、静かに集中力を高めていた。誰にも分からないよう、気づかれないうよう、己の集中力を限界まで高める。五感の一つである聴覚に全神経を集中させ、ソレを聞き逃さないよう壁に耳を押し付けていた。そうして聞こえてくるのは、鞄無の居る部屋の隣に居る少女達の陽気な声。

『愛梨また胸おつきくなってるない?』

『えーそんなことないよー?』

『うそだ。ちよつと揉ませてみなさいよ』

『ちよ、ちよつと美香？ 目が据わってるんだけど？』

『その脂肪の塊耖り取ってやろうかしら』

……………イイ。

ニンマリと口角を持ち上げて、鞆無は最大限の笑顔を浮かべていた。早い話が盗み聞きである。男子と女子の更衣室が薄壁一枚挟んだ所で隣り合っている為に、お互いの声はこうして聞こえてしまっている。男子更衣室には現在鞆無しかいないために男子更衣室からの声は聞こえないが、女子更衣室からの声は鞆無の耳にばっちり届いていた。つい十分程前に同じ場所で着替えていた一夏とはえらい違いである。

着替え自体はものの数分で終わった鞆無だが、女子同士故に遠慮のない会話が繰り広げられている向こう側の会話が彼の身体の自由を奪っていた。

と、そこに鞆無にも聞き覚えのある声が届く。

『あーあ。更識先生にオイル塗って欲しかったのにな』

『教官に殺される覚悟があるならそうすればいい。私は逃げる』

聞き間違える訳がない。シャルロット・デュノアとラウラ・ボーデヴィツヒの声だった。鼓動が更に早くなる。誰か分からない女子たちの会話も興奮を煽るが、顔までしつかり思い浮かべられる美少女達の会話は彼の興奮を最大限にまで引き上げた。荒い息が漏れる。傍から見れば完全に犯罪者だった。

『あれ、ラウラそんな水着持ってたの？』

『本国の部下からのアドバイスだ。男を落とすならこのくらい露出しなければいけないらしい』

『にしてもそれはちよつと布面積が少なすぎないかな』

『そうか？ 三箇所隠せればそれで何も問題ないだろう』

『その発言に問題があると思うよ私は』

思わず鼻から深紅の液体が溢れそうになった。二人の話を聞く限りではラウラはかなり際どい水着を着用しているらしい。見たいという欲求が鞆無の中で急速に膨らむ。が、同じタイミングで更衣室を出ればこの会話を聞いていたことがバレる可能性が高い。ビーチに

出れば幾らでも見ることが出来るのだから早まるなど口を自制して、鞆無は再び意識を壁の向こう側へと向ける。

『な、なにラウラ』

『シャルロット。お前バストサイズはいくつだ』

『え、え？』

『もしも九十以上だった場合、私はお前を友人だとは思わない』

『何で!？』

壁の向こうからシャルロットの叫びが届いた。再び鞆無の身体に血流が通う。いかんいかんと鼻をつまみながら邪念を振り払う様は客観的に見ても完全にアウトだった。こんなところを誰かに見られでもしたら社会的抹殺は免れない。大事なことなのでもう一度言っておこう。こんなところを誰かに見られでもしたら、社会的抹殺は免れない。

尚も会話は壁の向こう側で続いているが、このまま更衣室に閉じこもっているわけにもいかない。ビーチには自身の登場を待ち望む多くの女子生徒たちがいるはずであり、彼女たちを待たせるわけにもいかない。謎の使命感に苛まれているためだ。まだまだ二人の会話が気にはなるが、意を決して鞆無は更衣室を出てビーチへと向かう。

彼が出て行った更衣室の天井の隅に取り付けられていた小さな小さなカメラには、ついぞ気がつくことはなかった。



「……………あん？」

一夏たちが海へ出てから約一時間。取り敢えずの挨拶を済ませた俺は、折角鞆無が選んでくれた水着もあることだし少しの間砂浜に出ることにした。束なんかは今頃何をしているのか定かでないが、この近くにはいるのだろう。あんな格好で周囲を彷徨かれても困るので本当なら傍に置いておきたいところだが、束を横に置くと何をされるのか分かったものではない。今は放置しておくのが吉だと判断した。さて、そういう訳で水着に着替えようと男子更衣室にやってきたの

である。人数の関係かどうしても女子更衣室と比べるとこじんまりしているようにも思えるが、実際この更衣室を使うのは多くても四人。この程度の大きさで事足りる。それはいい。それはいいのだが。「なんだありゃ」

視線の先には、更衣室天井の隅にある不可思議なレンズ。ここからでは良く判らないが、カメラのレンズのように見えなくもない。

「……………」

なんとなくあのレンズの向こうから鼻息荒いウサミミ女が瞳を輝かせているような気がして、俺はそのレンズを即座に叩き割った。

どこかで『ああああああッ!!』という絶叫が聞こえたよう気がした。あれは多分、というか間違いなく束が仕掛けた隠しカメラだろう。俺が発見するまでこの場所にあつたことを考えると一夏と皿式の着替えはばっちり映像に残されてしまっている可能性が高い。そんなことがバレたら千冬から物理的な制裁を喰らうことは想像に難くないだろうに。

つらつらとそんなことを考えながら手早く着替えを済ませ砂浜へと一步を踏み出す。正午を越えて尚上がる気温のせいかわかるように熱い砂に苦笑しつつ波打ち際へと向かった。

「あ、更識先生だ!」

「うそ、ほんとに!?!」

「うわすごい腹筋。織斑君のもすごかったけど、先生のはなんか鋼鉄って感じよね……………」

「あの胸板の上でなら私死んでも悔いはないわ…………!!」

しまった、パーカーくらい羽織っておくべきだったな。どうせ泳ぐのだから上着は不要だと判断して着てこなかったのが仇となったようだ。俺の周囲の女子生徒たちからの好奇の視線が突き刺さってとてもじゃないが居た堪れない。かといってここで走り出すなどの教師らしからぬ態度を取るわけにもいかない。結局はこの視線に耐えつつゆっくりと移動するしかないのである。

「随分と騒がれているようだな。更識先生」

「それはお互い様なんじゃないか? 織斑先生」



と。そこで背後から声を掛けられた。その声に反応して振り返ってみれば、そこには一夏が買ってきたのだという黒のビキニを身に纏った千冬の姿。自身の身体を晒すことに羞恥を感じないのか、余りにも堂々としたその姿に思わず一歩後ずさる。

「む。なんだ、そんなに似合っていないか？」

「いや、似合いすぎてんだよ」

「ふむ、そうか。一夏のセンスもあながち捨てたものではないようだな」

寧ろ一夏グツジョブと声を大にして言いたいくらいである。そういえばまだ俺がこの学園の生徒だった時に千冬に買った水着も確かこんな感じのものだったなと思ひ出す。師弟揃って趣味が同じのようだ。いや、似てきたのか。

「山田先生は？」

「山田君なら向こうで肌を焼いている。ああ、心配しなくてもきちん」と眼鏡は取っていたぞ」

「そんな心配はしてないけどな？」

そんなドジっ子属性は真耶には付与されていない。

「さて、折角だし私は少し泳ぐとする」

ぐつと腕を持ち上げて背筋を伸ばしながら千冬が言う。その際強調される豊満なバストを無意識に眼で追ってしまった俺はきつと悪くない筈だ。あんな凶悪なものを目の前で見せられる男の気持ちも少しは考えてみて欲しい。

「俺も少し砂浜を歩いたら泳ぐとするよ。折角の海だしな」

「あまり羽目を外すなよ」

「当然」

颯爽と波打ち際へと向かう千冬の後ろ姿を見届けてからゆっくと顔を上げる。真上を通過して西へ傾き始めた太陽はぎらぎらと輝きを増すばかりだ。いつの間にか肌にはじんわりと汗をかいていた。

周囲の生徒たちの視線は気にはなるが、それとこれとは別問題だ。やはり海というものには男心をくすぐる何かがあるらしい。準備運動もそこそこに、俺は海水の中に入ってしまった。

◆

海の幸がふんだんに使用された夕食を堪能して、生徒たちは消灯時間までの僅かな時間をそれぞれの楽しみ方で満喫していた。各自に割り振られた自室で過ごすのが基本であるが、消灯時間までは誰がどの部屋で何をしていようが咎められることはない。それを利用して浴場の隣りに設置された卓球場で卓球に勤しんだり、マッサージ機に背中を預けて寛いだりとやりたい放題である。

そんな中、一部の生徒たちは楯無と一夏の部屋になんとかして忍び込もうと画策していた。

「ほ、ほんとにこの部屋なわけ？」

「間違いないよ。更識先生の匂いがするもん」

「ちよつとそれなんか変態っぽいんだけど」

ここそと廊下の曲がり角に身体を潜めているのは鈴とシャルロットだった。まず第一にどうして一夏と楯無が同部屋なのを知っているのかとツツコミたいところではあるが、そのところは乙女の行動力を舐めないでもらいたいとだけ言っておこう。

そんなやりとりを繰り返り広げる二人の後ろに、更に人影が二つ。

「い、一夏さんのお部屋……」

「おいこれバレたら教官に殺されるぞ……」

セシリアとラウラである。四人とも既に入浴を済ませて浴衣に着替えており、裾をずるずると引き摺りそうになりながら一夏たちの部屋を指しているのであった。

目的の部屋までは約十メートル。一気に距離を詰められるが、しかし彼女たちの目の前には最初にして最大の関門が待ち構えている。

「どうするっ？」

「どうするって、横切るしかないでしょ」

楯無たちの部屋の隣には、何とも禍々しい雰囲気（のように見えるだけ）の部屋があった。そこには千冬と真耶がおり、一夏たちの部屋にたどり着くにはこの部屋を横切るしかないのである。

「やめておいた方がいいぞ」

「ラウラ。女にはね、死ぬと分かっても逝かなきゃならない時があるのよ」

ラウラの静止の声も最早鈴に意味がないようだった。なにやら大量の死亡フラグを乱立させ、さながら戦場の兵士のような表情を浮かべている。

そんな表情を見て何を言っても無駄だと判断したのか、ラウラはそれ以上何も言わなかった。鈴に続いてシャルロット、セシリア、最後にラウラの順でこそそそと移動を開始する。

が。

「ほう、私の目の前で堂々と夜這いをかけるとは中々いい度胸じゃないか」

ビシリ、と四人の動きが硬直する。次いでギギギと油の切れた人形のようにぎこちなく、その首を声のした方向へと向ける。

そこには、鬼（イメージに非ず）が立っていた。心なしか頬に赤みがさしているのは四人の見間違いののだろうか。

「ち、千冬さ」

恐怖をふんだんに含んだ鈴の言葉は、残念ながら最後まで口にすることは出来なかった。目にも止まらぬ速さで鈴の首を引っ掴んだ千冬が、そのまま部屋の中へと連行したからだ。どしゃあつ！ という豪快な音が部屋の奥で聞こえた。

ゴクリと残された三人は唾を飲み込もうとして、口の中がからからに乾ききっていることに気付く。そんな三人を、教師たる千冬が見逃す筈もなかった。

「安心しろ。夜は長いんだ。たつぷりと話を聞かせてもらおうか」

## #32 恋話と対面

「ん？」

「どうしたんですか？」

「いや、なんか隣からスゴイ音がしたような」

午後八時三十分。消灯時間とされている午後十時まではまだ一時間以上を残している為に生徒たちの殆どは活発に活動中だ。人数の都合上女子が先に使用していた浴場も九時を過ぎれば俺たち男が使用できるようになるので、まだ入浴を済ませていない女子たちが慌てているのかもしれないが。そんな折、隣の部屋からまるで人間を放り投げたような音が聞こえてきた……：ような気がした。気のせいだと思いたい。それを確認しに行くのもなんだか憚られるので、俺は一夏に何でもないだけ告げてそれを聞かなかったことにした。触らぬ神に祟りなし、少しでも嫌な予感がした場合は近づかないのが吉である。

「にしても久しぶりですね、こうやって師匠と二人で寝るなんて」

かなりリラックスしているのか俺のことを先生ではなく師匠と呼ぶ一夏を咎めるようなことはしない。一夏もこれまで女子ばかりの寮での生活を余儀なくされていたのだ。久方ぶりの男水いらすの状態で喜んでいいるのだろう。

「そうだな。更識まうちに泊まった時以来か」

「ですね。姫無さんにボコボコにされて気を失ったとき以来です」

思い出すのもイヤなのか頬を引きつらせる一夏に苦笑する。

「ま、夜は長いんだし今日は男同士楽しくやろう。そのうちアイツも来るだろうしな」

「アイツ？」

首を傾げる一夏に、俺は口角を吊り上げて。

「俺や千冬と同じ、初代生徒会のメンバーだよ」



「……………」

鳳鈴音は戦慄していた。

虎の穴どころか鬼の巣窟に入り込んでしまったことと、目の前の人物への恐怖を隠すことができないう。それは鈴の横で正座するラウラも同様だった。部屋に入った瞬間からバイブ機能のついた携帯のように一定の感覚で身体が震えっぱなしである。その顔からは表情というものが消え失せたただ白い。顔面蒼白とはきつとこういふことを言うのだろうか。

その横ではセシリアが身を竦ませている。正座に慣れていないのか早くも脚がもそもぞと動いているが、そういった痺れとは無関係に彼女の背中には大量の冷や汗が流れていた。シャルロットだけは唯一目立った変化が見られないが、よくよく見てみれば肩が震えているのが分かった。

「ヤッ」

ビクウツ!! と正座した四人の肩が跳ね上がる。生徒たちの宿泊する部屋は本館でありこの教員たちの部屋とは離れている。迷い込んだなどと言うわけにもいかないし、そんなことを言えば目の前の教師から折檻が行われることだろう。

うぬらに生路無しと宣言されたような気分だった。

「何だそんな顔をして。別に取って食いやしない」

言いつつ千冬は座っていた椅子から立ち上がり備え付けの冷蔵庫からよく冷えていそうなアルミ缶を取り出した。

「このことは楯無には黙っているよお前ら。私もこのことは内に秘めておいてやる」

プルタブを開いてその中身を豪快に呷る。ごくごくと喉を鳴らしながら飲む様は女ながらにとても男らしくかった。どうか教師として生徒の前で飲酒はいいのかとつっこみたい四人だったが、そういうことも含めての口封じなのだろう。一夏たちのいる部屋へ忍び込もうとしたことを黙っている代わりに少女たち四人もこのことを口外しない。暗黙の取引のようなものだった。

「む。そうだなお前ら、何か飲むか。当然アルコールは許可せんがジュースも一通り揃っているぞ」

思い出したように言った千冬が再び席を立てて冷蔵庫から無造作に四本のジュースを鈴たちへと投げつけた。これまたよく冷やされたジュースを落とさないように受け取る。投げられた缶の色の違いを見るにそれぞれ投げられた飲料は違うようだが、一体なんなのかと気になってラベルに視線を落として鈴は硬直した。

(……いい、いちごおでん?)

しかも端にコールド専用と書かれている。冷たいおでんとはこれいかに。というかおでんにいちごを突っ込むというブツ飛んだ発想を商品化するこの会社も余程である。

が、そんなブツ飛んだ飲料を渡されたのは鈴だけではなかったようだ。

「き、きなこ練乳……?」

「ガラナ青汁、だと……」

「何これ、黒豆サイダー?」

どれもこれも似たようなものだった。明らかにゲテモノだと分かる飲料を手に戦慄く四人を尻目に、千冬は缶ビールを再び呷ってから。

「何だ飲まないのか? まあ私は絶対口にはしないがな」

確信犯だった。にやにやと意地の悪い笑みを浮かべる千冬に、四人の顔が引き攣る。普段の学園での千冬は完璧な女性教師を演じているためにこういった姿を生徒たちは滅多に見ることはない。まして飲酒して自分でも知らないうちに気分が高揚してきているとなれば、もしかしたらこんな姿を見るのは生徒では鈴たちが初めてかもしれない。空になったのか軽くなった缶を凹ませて、新しい缶ビールを冷蔵庫から引つ張り出す。事ここに至るまで全く気がついていなかったが、よく見れば千冬の後ろには空き缶が山のように積み重なっていた。どう数えても十や二十で済む本数ではない。更にその山の奥には浴衣をはだけさせて轟沈している山田真耶の姿。どう見ても千冬に潰されたようだった。その視線に気がついたのか、これまで言及し

なかつた後ろの光景を横目に。

「ああ、先程まで真耶と呑んでいたんだ。こいつも普段はもう少し呑めるんだがな、今日は少し酔いが早くて三十四缶目で寝てしまった。そんな時に外でお前らが何かこそこそしているのを見かけたのでな」  
まるで何でもないことのように言っているが、缶ビール三十缶など十リットルを超える量である。そんなに飲めば真耶のように潰れるに決まっている。にも関わらず尚も飲み続けるこの人間は本当に人間なのかと鈴は戦慄した。

「まあ、そんなことはいいいんだ。折角の機会だしこの際はつきりとさせておこうじゃないか」

持っていた缶ビールをテーブルに置いて、千冬は座る四人を順に見つめる。

「——お前ら、あいつらとどうなりたいんだ？」

見せ球でもボール球でも変化球でもない。正真正銘のド直球だった。



「……俺が二人部屋ってどういうことだ？」

たつた一人しかしない部屋の中央、布団も敷いていない畳の上に寝転がって皿式鞆無は呟いた。夕食の時に聞いた女子たちの会話によれば一夏は教員である更識楯無との相部屋であるらしい。となれば、自分の部屋に割り当てられているのは一体誰なのか。この臨海学校に参加している男性は自分を含めて三名。そのうちの二人が同じ部屋だということは。

「まさかそんな展開がッ!?!」

思わず声を大にして上体を起こす。男性が三人しかいないというのに、残った自身も二人部屋。それはつまり女子と同じ部屋ということに他ならないのではないか。その結論に辿りついた瞬間、これまで彼を苛んでいた眠気は大気圏の彼方へと綺麗に吹き飛んでいった。

「やべえついに来ちまったか主人公補正。まさかこんなところで発動

するなんて思ってたなかったが問題はない。この学年の女の子は皆可愛いし、誰であつてもオツケーだ」

殆どの生徒は本館の方に部屋が用意されているが、鞆無を含む男子と教員はこちらの別館に部屋がある。ここからならば何かあつても声が本館に聞こえるようなことはない。ナニが起きても大丈夫だと拳を握る。

「きちょうかー。童貞卒業きちょうかー」

男女二人が同じ部屋に寝泊まりしてその可能性が0だとは言いきれないが、鞆無の言葉は少しばかり性急すぎるような気もした。そんなこと本人は全く気にかけていないが。本音を言えば原作ヒロイン組の誰かと同室であることが好ましかったが、その殆どは一組の所属。鞆無の所属する四組とは部屋はどうしても離れてしまう。が、かといって彼は落胆もしていなかった。何故なら四組にも居るからだ、原作ヒロインの一人に数えられる少女、更識簪が。

「最近はまだ少し簪と疎遠になつてたし、いい機会だ」

勝手に簪を同室であると決め込んで、鞆無は満足げに頬を緩める。現実には代表決定戦以来まともに会話していなかったりもするのだが、どういうわけかそのあたりのことを彼はきれいさっぱり忘れてしまつているらしかった。

「先ずは簪の眼鏡を外して、それから……」

すっかり自身の妄想に浸かつてしまった鞆無は、そのまま膨らむ妄想に身を任せていく――。

『簪、寒くないか?』

『少しだけ……』

『良かったらこつちの布団に來いよ』

『……お邪魔、します』

『綺麗だな』

『え……?』

『瞳も、髪も、肌も。全部綺麗だ』

『……恥ずかしいこと、言わないで……』

『嫌か?』



『……………嫌じゃ、ない』

鞘無は華奢は簪の身体をそつと抱き寄せて、優しく包み込む。必然近くなつた互いの顔を、二人はしばしじつと見つめ合つて。

『……………』

簪はそつと瞳を閉じて、小さな唇を少しだけ突き出した。鞘無はそれを受け入れるように微笑んで、彼女の唇に自身の唇を――。

と、そこまで考えてニヤニヤと気色の悪い笑みを浮かべていた時である。二階へと続く階段を上つているのであろう足音が遠くに聞こえたのは。

ドキン、と心臓の鼓動が早くなる。少しの緊張と多大な喜びを内包して、鞘無は自室の襖が開かれるのを待った。

そして。



「で、どうなんだ鳳。それにオルコット」

まるで蛇に睨まれた蛙のようだと、隣りに座っていたラウラは他人事のように思った。先程から続くこの千冬の問いかけに、鈴とセシリアは明確な返答を示さない。額に浮かぶ冷や汗が彼女たちの心境を如実に表していることは傍目に見ても明らかである。が、それでも千冬が口撃を止めることはない。

「確かに一夏は優良物件だ。家事は一通りこなすし武術の心得もある。おまけに身内鬣屑を抜きにしてもそこそこ整ったツラをしている」

ここまで饒舌に弟のことを褒める千冬の姿を四人は見たことが無かった。アルコールの力恐るべし。中身が半分程に減った缶の残りを一息に飲み干して、千冬はニヤリと笑う。

「どうだ。欲しいか？」

それは思わぬ発言だった。その言葉を受けて反射的に二人の乙女は口を開いて。

「くれるんですか!？」

「くださいますの!？」

瞳をらんらんと輝かせ正座を解いて千冬に詰め寄る。

「やるか、馬鹿者め」

期待に胸を膨らませていた彼女たちに返ってきたのは無慈悲な宣告だった。見るからにしよんぼりする二人を楽しげに眺めながら、千冬は視線を鈴たちの奥に座る少女たちへと向ける。

「さて、次はお前たちだ。ポーデヴィツヒはまあいいとしよう。パパ発言は看過できんが害はなさそうだ」

その言葉を受けてラウラはほっと胸を撫で下ろす。どうやら千冬の口撃対象からは外れたようだ。

「問題はお前だ。デュノア」

「……私ですか？」

「お前、楯無に生徒と教師以上の関係を望んでいるだろう」

「それが何か」

鈴やセシリアとは違い、デュノアの口調ははっきりとしたものだった。若干語尾が震えているような気もするが、目に見える動揺は他の少女と比べて少ない。そんな態度を前に、千冬は面白そうに口角を歪めた。

「教師の立場から言えばそんなものは論外だがな。女として言わせてもらえば精々頑張れ小娘と言ったところだ」

「……随分な言いようですね。私と更識先生との間に何があったか知っているんですか？」

「知らん。さして興味もないな。楯無が話すのであれば聞くが、あいつが口にしないことをとやかく詮索したりはせんよ」

「なんだか織斑先生は更識先生のことをよくご存知のようですね」

「子供の頃からの付き合いだからな。互いに知らんことは無いだろう」

言外にお前より楯無と親しいのだと言われたような気がして、シャルロットは心の奥底で嫉妬の炎を灯した。千冬と楯無が過去どういった関係だったのかを知らない彼女にとってみればそれは当然のこと、その感情は少なからず表情に現れてしまっていた。

「オイオイそんな目で教師を見るな。いや、ここは女同士という対等な立場か」

「……織斑先生は、更識先生のことが好きなんですか？」

その質問に千冬は目を丸くした。そして数秒後、彼女にしては珍しく声を出して笑う。意外だったのかシャルロットも固まってしまっているが、普段の千冬のクールっぷりを見ている生徒ののしてみればこんな光景は多分もうお目にかかれない。

ひとしきり笑って落ち着いた千冬は、赤みのさした頬そのままになんなく答える。

「私とアイツはな、もう好きとかそういうったレベルではないんだ」

その答えの意味が理解できず、シャルロットは難しい顔をしたまま固まる。他の三人も同じように頭上にハテナを浮かべていた。

その言葉の意味を説明しないままに冷蔵庫から新たなビールを取り出してプルタブに手をかける。と、その時だ。襖の向こう側、廊下の方からトタトタと軽快に階段を上がる音が聞こえてきたのは。その音を聞き取って、千冬は一旦持っていた缶をテーブルに置く。

「ようやく着いたか。予定より随分と遅かったな」

「えっと、誰か来たんですか？」

こんな夜にこの旅館にやって来るような人間は生徒たちには聞かされていない。鈴の質問は尤もだった。そんな彼女の質問に、千冬は簡潔に答える。

「ああ、私の後輩だ。——あと同期も」

そう言い終わった瞬間、部屋の襖がシュパンツと音を立てて開かれた。その先に立っていたのは、金髪が美しい二十代の女性。鈴たち四人はその女性を見た瞬間、驚愕に身を強ばらせた。知っているどころの話ではない。ISに関わる人間であれば誰もが彼女のことを知り、憧れる。

現在世界に七人しか存在しないモンド・グロツソの部門別ヴァルキリー。その中の一人。大国アメリカの頂点に立つ若き天才。そんな彼女はスーツケース片手に部屋を見回して千冬を見つけると顔を綻ばせて。

「きゃー！ お久しぶりです織斑せんぱーいっ!!」

「元氣そうだな、ナタル」

そんな光景を目の当たりにしてフリーズしていた少女たち四人もようやくのことで再起動を果たす。まっさきに口を突いて出たのは、奇しくも全員が同じ言葉だった。

「ツツ、ナ、ナターシャ・ファイルスウウウウツツ!」

恋する乙女たちの恋バナ、第二라운드의開幕である。



「ナタルの奴、先に行っちゃまいやがって」

目的地であつた旅館に着いたところで、ナタルは我先にと中へ入っていつてしまった。タクシー料金は全額織村負担である。それはまあいいとして、せめてこちらが荷物を下ろすまで待っていて欲しかった。運転手に礼を言つて、ポストンバッグを肩に掛けて旅館の門をくぐる。時間はもう午後九時を回ろうかとしていたが、すぐに女将さんが出迎えに来てくれた。

「お待ちしました。ようこそ織村さん」

「お久しぶりです。景子さん」

「ふふ、随分と精悍な顔つきになりましたねえ」

「そうですか？ 自分じゃよくわかりませんよ」

「お部屋は別館の二階の一番手前の部屋になってますので」

「ありがとうございます」

言われた通りに本館から別館へと移動し、階段を上がっていく。事前に楯無には今日ここに着くことは連絡してあるが、部屋に荷物を置いたら直接挨拶にはいった方がいいだろう。何せ最後にあつたのもう何年も前になるのだ。国際電話で連絡は取り合っているも、やはり学園時代の同級生と顔を合わせるのには密かに楽しみだった。自然と軽くなる足取りはやがて一つの部屋の前に辿り着く。

「二人部屋か。てことはナタルと同室か」

案外楯無も気が利くなし、などと考えながら、織村はとくに何も思

うことなく襖の取手に手をかけ、そして引いた。因みにナタルは事前に部屋割を聞いていたりもするが、それを決して織村には伝えるなどの楯無の指示で口にしていない。

「おいナタル、先に行くなんてひどいんじや——」

「こんばんは簪、浴衣よく似合って——」

……………。

思考が停止する。それは両者全く同じだった。いや、正確に言えば少し違う。鞘無の場合は簪がくると思っていたら現れたのが茶髪の男だったことに驚愕しているのに対して、織村の場合は今正に自身の過去を突きつけられて硬直しているのだ。

直後、織村の脳内に駆け巡る、過去の自分の厨二じみた恥ずかしい過去。わなわなと身体が震えだすのを止めることが出来ない。

「な、何だよアンタ。一体どこの——」

鞘無の言葉は最後まで続かない。それを言い切るよりも早く、織村が爆発したからだ。

「たあてえなあしいいいいッ!? お前は俺を殺す気だったんだなああああああつ!」

掘り返されくない黒歴史との対面を余儀なくされた彼の夜は、まだまだ終わらない。

### #333 三者と三様

時間が止まるという感覚を知っているだろうか。目の前で発射された弾丸が止まって見える、一瞬の出来事が永遠に続いているかのよう錯覚する。一種の走馬灯にも似た現象である。それが今現在、織村一華という青年の身に現在進行形で発生していた。

目の前に居るのは自身よりも一回り小さな高校生くらいの少年。織村とは明るさの違う茶髪を肩口で切りそろえ花月荘の浴衣を着用している少年は、アメリカに居たときに楯無から送られてきた動画に映っていた少年だった。

皿式鞆無。確かそんな名前だったと記憶していた。なんだその原作キヤラをもじったような名前はと思わなくもないが、その点にだけ関して言えば人のことを言えないのでぐつとこらえて飲下す。

だがこれは余りにも酷い仕打ちである。思わず楯無と叫んでしまった彼のことを誰も責めることは出来ないだろう。もう十年近く前になるとはいえ、己の恥ずかしい過去を掘り返されたも同然なのだから。同じ道を一度は辿ったからなのだろうか、目の前の少年から発せられる厨二オーラとでも呼ぶべきなんとも残念なソレを、織村は元同類であるが故にひしひしと感じ取ってしまったのだ。

率直に言おう。

今すぐ帰りたい。

「……………」

「……………」

二人は互いに硬直したまま言葉を発しない。鞆無の方は何かを言おうとしていたようだが、ついさっきの咆哮を目の当たりにして珍しく萎縮してしまっているらしかった。そんな少年を目の前にして、織村は口元をヒクつかせながらも一先ず部屋へと入ることにした。凄まじく重い足をなんとか動かして部屋の中へと入る。それを見て、ようやく鞆無の硬直も溶けたようである。

「ちよ、ちよっと待て……待ってください」

思わず口走ってしまった鞆無へと向けられた殺気を孕んだ視線が、彼に無意識のうちに敬語を使わせた。恐るべし織村。鞆無にしてみればいきなり現れた見ず知らずの男にずかずかと部屋に入り込まれているのだから文句のひとつでも言いたくなるのかもしれないが、残念ながらその文句に正当性は無い。簪との二人部屋だと勝手に決めつけた鞆無の落ち度だ。

「……何だ」

「あ、あなた誰ですか？ この旅館はIS学園の貸切になってるんですけど」

楯無め、さては俺たちのこと生徒たちには教えていないな。織村は脳内に不敵に笑う元生徒会長を思い浮かべた。大方サプライズにでもしようと考えていたのだろうが、こつちにしてみてもとんだサプライズである。こんな驚きは全くもって必要なかった。

正直なところ少年の質問など無視して今すぐ楯無のところへ乗り込むかこのまま不貞寝してしまいたい気分だが、流石に質問を無視するわけにもいかない。不審者扱いされたままというのも釈然としないものがある。

「俺は関係者だ、更識から招待されてる。お前ら生徒たちには明日説明されるんじゃないか」

「更識先生と知り合い、なんですか」

更識という名を聞いた途端に難しい表情になる少年に、織村の第六感が働いた。

（コイツ、もしかしくなくても俺たちと同類なんじゃねえか？）

眉を顰める織村。そんな彼を前にして、鞆無は内心で舌を打った。更識楯無の知り合い、IS学園の関係者、そして男性。この三つに当て嵌る人物などそうそう居ない。幾らそういつた情報に疎い鞆無であっても、流石にここまで情報の揃えられれば嫌でも勘付く。即ち。

（コイツが、織村一華……）

原作には存在しない、二人目のイレギュラー。その容姿を頭の先か

ら爪先まで眺めて、それがとあるキャラクターに途轍もなく似ていることに気がつく。

(……垣根帝督?)

いやいやまさかなと首を横に振る。他人の空似など上げていけばキリが無いことくらいは承知している。

そんなことより大切なことがあると、鞆無は意を決して口を開いた。

「あの、」

「あん?」

明らかに機嫌が悪そうな織村を前に一切の躊躇なく、彼は言い放つ。

「ここ俺と鞆の部屋なんで、出てって下さい!」

「ぶち殺すぞ」



「———なんか叫び声が聞こえませんでした?」

「ん? 気のせいだろう」

「いや、なんか楯無イって声が……」

そう言つて首を傾げる一夏にそれとなく返事をしつつ、その叫び声の主が誰だか分かりきっている俺は小さく口元を歪めた。今頃は自らの黒歴史を体現しているかのような少年を前に悶え苦しんでいることだろう。今会いに行くの不機嫌さが臨界点を突破している織村と鉢合わせることになるので絶対に挨拶しに行ったりはしない。織村にも俺の部屋は教えていないので向こうから来ることも不可能である。

時刻は九時半。そろそろ風呂にでも行こうかと考えて、持ってきた荷物の中から着替えを取り出す。

「あ、風呂いくんですか?」

「おう。ほんとは教員は生徒たちの消灯時間が過ぎてからなんだけだな」



男の教員は俺一人だけだし、まあ少しくらい時間を早めても問題ないだろう。

「じゃあ俺も行きます」

「あ、私もー」

「久しぶりだな一夏と風呂入るの……は……」

はて。何やらこの部屋にいるはずのない人間の声が聞こえたような気がしたんだが、これは俺の聞き間違いか何かだろうか。恐る恐る振り返ってみる。案の定そこには俺のよく知るウサ耳を装着した女が立っていた。昼間に見た水着姿のまままで。

「何でお前水着姿のままなわけ？」

「それ言う!? かーくんが束さんをほっぽって海で遊んでたの知ってるんだからね!? 言ったじゃんオイル塗ってっつて!!」

「取り敢えず着替えろ。一夏の目に毒だし恥ずかしいだろ」

「ふっふーん。束さんのボディに恥じるところなどないんだよ!」

俺の言葉になど耳を貸さずその豊満な胸を突き出すように張る束。非常に眼福であることは否定しないのだがこの場にいるのは俺と束だけではないのだ。青少年である一夏にこんなものを見せるわけにはいかない。ちらりと視線を向けてみれば顔を赤くして一夏は俯いてしまっていた。男の性なのか、ちらちらと視線だけは束の胸を捉えているが。

「そんなことより! 約束をすっぱかさされた私は非常に怒っています!」

腰に手を当てて顔を俺の鼻先数センチにまで近づける。その際に揺れる胸など見ていない。断じて見ていない。

「あー、それは悪かった。お前どうせ監視映像かなんかで見てたろうけどさ、あれは俺にはどうしようもなかったんだ」

「ちーちゃんとのビーチバレー?」

「やっぱ見てたのかよ……。見てたなら分かるだろ、あれ死にかけたからな」

「私初めて砂浜にクレーターが出来るの見たよ」

日中の砂浜での事を思い出して血の気が引いていくのを自覚する。

俺と千冬、それと近くにいた生徒数人を交えて行われたビーチバレー。千冬と敵になった俺はなんとなく嫌な予感を覚えつつもコートに入ったのだが、そういう時に限って嫌な予感というのは的中してしまうもので。

いや、本当であればスポーツという概念を超えたナニカだったと思う。ビニール製のバレーボールをレシーブした瞬間に人間が後方に吹き飛ばなどあつてはならないと思うのだ。たまたま近くにいたという理由で駆り出された相川さんには同情をせずにはいられない。事後処理として相川さんを休ませたり出来上がってしまった深さ一メートル程の穴を埋めたりしていたらいつの間にか日が沈んでしまっていた。束には申し訳ないと思うのだが、こればかりは俺ではなく千冬に文句を言つて欲しい。

「ていうか、束さんもしかして昼間からいたんですか？」

「そうだよー。ずっとたつくんが来るのを待ってたのに。束さんてばなんて健気……！」

「自分に酔つてんじゃねえよ」

頬に手を当ててうっとりしている束の頭を小突く。

「いったーい。たつくん女の子に暴力はダメだぞう。ていうか早くお風呂入りたい」

「残念ながら女子の入浴時間は九時までなんだ。千冬に言えばシャワーくらいは手配してくれるんじゃないか」

「あー。ちーちゃんなら多分無理かなー」

言いつつ思案げな表情を浮かべる束に俺は首を傾げる。

そこはかとなく束が何か仕掛けているんじゃないかという俺の考えは是非とも杞憂であつて欲しいものである。

「ちーちゃんの部屋にね、束さん特性冷蔵庫を置いておいたんだよ。内容量二十倍増し、大ききそのままの超高性能冷蔵庫」

「お前は一体何をしているんだ」

意味の分からない箇所に技術の無駄遣いをしないでもらいたい。束の技術力を身近で目の当たりにしてきた俺からすれば、コイツが作るものは片手間であつても世界中の科学者たちが作れやしないもの

であるということをよくよく理解している。以前東が鼻歌を歌いながら授業の合間に作ったパワードスーツの設計図が流出して全世界が獲得に乗り出したこともあったくらいだ。流石に以後気をつけるようになったのかそういった世界規模での事件は発生していないが。とにかく、東が作るものが普通の範疇に留まるわけがないのである。

「……中身は？」

「東さん特性ビール。アルコール四倍増し」

思わず頭を抱えた。いくら酒豪の千冬と言えども度数二十を超えるアルコールを大量に摂取すれば酔う。部屋を同じくしている真耶もそこそこイケる口だが、そこまでのアルコールを大量に摂取することへの耐性などないだろう。もしかすると潰れてしまっているかもしれない。勘弁してくれまだ一日目なんだぞ。

「気になるなら様子見に行く？」

「……いや、いい」

どうしてだろうか。今千冬の部屋には行かない方がいいと俺の第六感が告げたような気がした。

「……あの、」

俺と東だけで展開される会話の中におずおずと一夏が入ってきた。しまった、なんだかんだで一夏を放置して会話してしまっていた。

そんな俺の心情を知ってか知らずか、一夏は苦笑気味にお風呂セツトを抱えて。

「二人で積もる話もあるでしょうし、俺先に風呂行つてますね」

一夏なりに気を使つたつもりなのだろう。小脇に着替えとタオルを抱えてそそくさと部屋を後にした。一夏よ、その気遣いは逆に俺を追い詰めているということに気がついていないのだろうか。この場で俺と東の二人きりになってしまわないように一夏を俺と同部屋にしたというのに。東がこの臨海学校にもしもやってきた場合、こうして乗り込んでくることは容易に想像出来た。だからこそその二人部屋なのだ。別に教員は一人部屋にすることも出来たのである。そこをわざわざ二人部屋にした理由、その原因は俺にある。

つまるところだ。

「あはは。いっくんはジェントルマンだねえ、気が利く男の子って良いよね」

唐突に腕を絡めてきた束を一先ず座らせる。腕は絡めたまま。どうやら離すつもりは毛頭ないらしい。それだけならまだしも、束は身体を密着させてくる。ようは彼女の豊満すぎる双丘が当たっているわけである。しかも水着だからなのか、その感触はより一層柔らかい。

「ねえ、かーくん」

たっくんではなく、かーくんと呼んだ。その意味するところは簡単で、天才科学者篠ノ之束と更識家十七代目当主更識楯無としてではなく只の篠ノ之束と更識形無としての関係を望んでいるということだ。二人きりになった途端にこうして甘えてくるところは昔から全く変わっていないようだ。学園時代はそのことでよく俺が千冬に説教されていた。束を甘やかすなと頭を叩かれたのは今でもそこはかとなく理不尽だと思っている。

それはそれとして。俺が二人部屋にしたのは単純にこうなった場合自身の抑制に自信が無かったからなのだ。考えてもみて欲しい。目の前に女性として大変魅力的な肢体を持つ女性がこうして甘えてくるのだ。思春期男子高校生ほどでないにしろ俺とて男の端くれ、多少の性的欲求はある。教師という立場上そんなことはあってはならないのだが、保険の意味も兼ねて一夏と同室にしたのだ。生徒が目の前にいれば変な気を起こすこともないだろうと考えての判断である。が、そんな安全装置的役割を担う一夏は本館にある浴場へ行ってしまった。しかも一夏はかなりの長風呂である。恐らく消灯時間ギリギリまで帰ってくることはないだろう。ということは最低でも三十分はこの状態が続くことになる。生殺しとは正にこのことか。

「取り敢えず服着ろよ」

「もお、かーくんのえっちい。そんなに束さんの生着替えが見たいの？」

「誰もこの場で着替えろなんて言ってるねーだろ」

「え、見たくないの!？」

「何でそこで絶望してんだよ……」

背後にピシヤアッ!! と雷でも落ちたかのように硬直する束に口元をヒクつかせつつもなんとか平常を装う。頼むから腕を絡めたままぶんぶん振り回さないでほしい。自覚がないのか狙っているのかは定かでないが感触がかなりやばいことになってきている。

「束、胸。胸が当たってるから」

「んふふ、当ててんのよー」

先程よりも強い力で腕を絡めてくる束。ふんわりと香るこの匂いは彼女の髪の毛から漂うシャンプーのものだろうか。いかん、何だか自制心が音を立てて崩壊しているような気がする。幾ら何でも生徒たちと同じ屋根の下で事を行うのはマズイ。教師としての人生の危機である。頼む一夏、一刻も早く帰ってきてくれ。擦り寄る束を横目に、俺はそう願わずにはいられなかった。



三人よれば姦しいとは言いが、酒の入った教師とその後輩、生徒四人が集まれば最早姦しいなんてレベルではなかった。騒音レベルにまで達している。この部屋が別館ではなく本館であったならさぞ生徒たちから苦情の声が上がっていたことだろう。

部屋の中心で盛り上がるのはいつの間にか部屋着に着替えたナターシヤとセシリアに鈴、シャルロットだ。千冬とラウラは奥のテーブルで何やら雑談に花を咲かせている。

「そ、それで!? 織村さんはその後どうしたんですか!？」

「詳しく聞かせて欲しいです!!」

ずずいっとナタルに顔を近づけて詰め寄るのは鈴とセシリア。大人の恋というものに非常に関心を持つ乙女たちはナタルの話を食い入るように聞いている。そんな彼女たちを内心で可愛いと思いつつ、自分にもこんな時期があったのだと感傷に浸る。

「彼ね、実はとても奥手なのよ。だから最初は私が全部リードしたわ」

「ぜ、全部!？」

「そ、それはつまりその……」

「まあ、明言は避けるけれどね」

織村一華。彼の過去話はこうして流出していくのだった。本人の預かり知らぬ所でこうして黒歴史は製造されているのである。

「ナターシャさんはどうして織村さんと交際するようになったんですか?」

単純に疑問に思ったのだろうシャルロットが口を開いた。その質問を受けてナタルは少し考えてから答える。

「ほんとと言うとね。私最初は更識先輩を狙ってたの」

「はい?」

「なんだと?」

シャルロットと千冬が眉根を寄せたのは全くの同時。いきなり目の前で表情を一変させた千冬にラウラは驚いて肩を跳ね上げていた。ナタルはそれを面白そうに眺めつつ続きを口にする。

「でもほら、あの人の横には織斑先輩とか篠ノ之博士がいて私の入り込む余地なんて全くないじゃない? そんな時に同じ生徒会で色々面倒見てくれたのが彼だったのよね」

言われて千冬は学園時代の織村とナタルのことを思い出す。機械の扱いが壊滅的なナタルをぎやーぎやー言いながらも指導していたのはそういうえば織村だった。というかナタルの指導係を織村に押し付けたのは楯無と千冬なのだが、そんなことは記憶からすっぽりと抜け落ちているようだった。

「それでいざ彼が学園を卒業ってなったときにすごく寂しい、離れたくないって思ったのよね。いつの間にか私、彼無しじゃダメになつたの」

少しばかり恥ずかしそうに笑うナタルの話に、少女たちは真剣に耳を傾ける。恋だなんだと騒ぎ立てることに関して一級の女子高生と言えどもここまでリアルな話を聞くことなどそうそう無い。特に三人には想い人がいるだけにその話の重要性は突き抜けていた。

「てことは、ナターシャさんの方から告白したんですか?」

「そうよ。卒業式の後彼を呼び出してね、私の気持ちを正直に伝えたの。離れたくない、ずっと一緒にいたいって」

自身の想いを伝える。言葉にすれば簡単だがこの上なく難しいことは少女たちはよく知っている。故に尊敬する。目の前にいる女性は、自分たちに出来ないことを平然とやってのけてしまったのだから。

「織村さんは、なんて答えたんですか？」

シャルロットの質問に、ナタルは苦笑した。その意味が分からない少女たちは、ナタルの次の言葉を待つ。

「何て言ったと思う？ 彼ね、私が好きだって言ったら『何だそんなことか。とつくに知ってるよ』なんて言ったのよ？」

「うわあ、すごい……」

真面目な告白の場面で、さも当然と言わんばかりにそう言った織村を想像して若干引き気味のシャルロットは苦笑いを浮かべた。

でもね、とナタルは付け加える。

「その時は知らなかったんだけど、彼進路をアメリカにしてたのよ。どうしてって聞いたらね」

—— 待つてやるから、早く追いついてこい。

「私と二人でアメリカに住むことはもう確定してたみたい。ほんと、何から何まで自分で決めて先に行っちゃうんだから」

—— そんなところが、好きなんだけれどね。ナタルは本当に幸せそうに微笑む。今の彼女を見て、織村という男性は彼女のことを大切にしているのだと鈴たちは確信する。でなければ、こんな花満開な笑顔をさせることは出来ないだろう。

「あ、でも彼夜のほうは——」

いい話をしていたと思つた途端に放り込まれた特大の爆弾に、少女たちの食付きが豹変した。



「あのな、だからそれは何度も言ってるが無理だ」

「何ですか!? 俺のプランに穴なんて無いはずですよ!」

「穴がでかすぎて自覚できてないだけだアホ」

消灯時間まで残り十五分。にも関わらず、この部屋の二人は全く眠るような気配が無かった。どころか、鞆無に至っては段々とヒートアップしているように見える。そんな少年を正面に座らせる一華は、内心で何度目かの溜息を吐いた。

何だこれは、新手的拷問なのか。そう思わずにはいられない。この臨海学校において最も会いたくなかった少年に到着して三分で出会ただけでも悶絶ものだというのに、何が悲しくて少年の多大な妄言を聞かなければならないのだろうか。いつそのこと力づくで黙らせてやろうかとも思うが、それをすると後々楯無に面倒事を押し付けられる可能性があるため無闇矢鱈に能力を行使することも出来ない。結局消灯時間が訪れるまで、織村は鞆無の話に付き合うしかないのだった。

「だってですよ!?! あの試合は本当に接戦だったんです! 互いのコンディションがもしも逆だったら間違いなく勝敗は変わってました!」

「その試合の映像なら楯無から送られてきて見てる。あれは完全に前の負けだよ、楯無の妹は実力の半分も出しちゃいない」

「そんなことありませんでした! だってミストルティンの槍を使っただですよ!?!」

ああもう面倒くさい。これが織村の率直な思いだった。

鞆無が言っているのはこの前のタッグマッチトーナメントの楯無との戦闘のことだ。鞆無の電磁干渉を見破った楯無が鞆無を封殺したというのが大方の見解だが、どうやら鞆無はその見解に不満を抱いているらしい。先程から同じことを何度も口にしては、織村がそんなことはないと言っているの繰り返し。

「試合時間だけで見れば瞬殺だろうが」

「その数分の中に濃密な戦闘が行われてたんです」

「へえ、」

濃密な戦闘ね、織村はいつそ嘲笑したい気分だった。あの程度を濃



密な戦闘だと言い切ってしまう鞆無のレベルの低さを実感する。鞆無の世代には織斑一夏を始めとした多くの実力者が犇めいているはずだが、どうもこの少年はその枠組みには入っていないらしい。本人は自覚していないだろうが。せめて代表候補生程度の実力があればこんな狂言を言うことないだろうに。

本当に濃密な戦闘というのは時間さえ止まるように錯覚する。全てが停止した中で己と対戦相手のみが地面を蹴り、空を翔ける。織村はこれまで鞆無や千冬との戦闘でそれを経験していた。

「……なあ皿式。お前、自分が本当に強いと思ってるのか？」  
「どういう意味ですか？」

「そのままの意味だ。その程度の実力で、本当に自分が強いと思ってるのかって聞いてんだよ」

面と向かってそんな事を言われれば憤るに決まっている。鞆無は眉を吊り上げて不快感を顔にした。

「専用機を持つてるって時点で、俺の実力を把握できませんか？」

「出来ないね。そもそも男ってだけで専用機は用意されるんだ。世の中の女と違って専用機所持ってネームバリューは響かない」

「聞き捨てなりませんね。幾ら学園の卒業生だからって、そこまで言うからにはアナタは強いんですか」

その言葉を待っていたとばかりに織村は口角を吊り上げた。その笑みは獲物がかかった事を喜ぶ肉食獣のように獰猛なもの。思わず鞆無が一步下がる。

「確かめてみるか？」

「はい？」

「明日の試験稼働の合間に近くのアリーナを使って模擬戦してやる。お前の実力とやらを俺に見せてみるよ」

安い挑発であることは織村も重々承知している。だが目の前の少年は必ずこの挑発に乗ってくる。間違いない。何故なら、織村自身、昔はこんな安い挑発に乗せられていたのだから。同じ道を辿っていた先駆者として、同じような人間の考えることなど手に取るように解る。

「……いいでしょう、見せてやりますよ。アンタに、生徒会長と互角に戦ってみせた俺のチカラを！」

—— かった。

織村はその笑みを深めた。これでストレス発散の大義名分を獲得することが出来た。実力を見てやるだのとそれっぽいことを並べているが、織村の根幹にあるのはただのストレス発散である。アリーナの確保などの問題を楯無に押し付けることで少しばかりの嫌がらせも含んでいるわけだが、もう目の前の少年と話すことは無駄だと悟ったのである。彼は一度痛い目を見なければ分からない。きつとこの世界の主人公は自分だとも思っているのだろうが、そんなものは妄想でしかない。

現実を突き付ける。その上で楯無が変わるのかは知らないが、少なくとも織村は学園時代にそういった事柄を経て変わることが出来た。今度は自分が、などと考えている訳ではない。本当にただのストレス発散である。楯無に文句を言いに行っても受け流されるに決まっているし、千冬には鼻で笑われそう。故に目の前の少年、昔の自分と重なる少年を相手にすることで、過去の自分を消し去ろう。そうしよう。

眼前で意気込む少年を尻目に、織村は静かにそう決意した。

消灯時間寸前になって聞こえた一夏の悲鳴は一体なんだっただろうかと、織村は楯無と限界まで離れた布団の中で思った。

## #34 二番目と四番目

臨海学校二日目。昨日までの修学旅行のような気分は消え去り、今日と明日の二日間は朝から晩までISに乗つての試験運用が行われる。当然全員が一日中ISに搭乗するわけではないが、専用機持ちでない生徒でも学園から運んできた訓練機六台を順に利用して各自データを採っていく。平均すれば一人当たりの搭乗時間は一日二十分から三十分程だが、残りの時間も各箇所のパーツ整備や取り付けの技能を学ぶ手筈となっており、朝八時には花月荘近くのIS学園が所有している専用のアリーナに集合することになっていた。

だが、これはあくまでも専用機を所持していない一般の生徒たちに限つた話。一夏や鈴、セシリアといった専用機持ちたちの朝は更に早い。専用機の各種試験運用は当然のこととしてそのデータ採り、本国から送られてきた大量の装備の試験を行わなければならないのだ。装備はパッケージから単品のもので数多くとても悠長に構えていられるような暇はない。そんなわけで専用機持ちたちは六時起床、素早く朝食を済ませて七時にはアリーナに集合する予定になっているのだ。

そういう予定を組んだのだ。三日目に行わなければならないテストとの折り合いを付けるためにも、二日目は多少強引にでも装備の試験運用は終わらせておかなければならない。だというのに、だというのに。

「悪いな。よく聞こえなかった、もう一度言つてくれるか織村」

「だからよ、あの皿式つてやつと模擬戦するから少しの間アリーナ空けてくれないか」

朝五時半。起床早々に俺と一夏の部屋を訪ねてきたのは、昨日の夜にこの花月荘に到着した織村だった。俺の予想では怒鳴り込んでくるもんだと思っていたが、予想に反して彼の様子は大人しかった。それはいいとして、今の織村の発言だ。一体何がどうしてどう転べばそんな話になるのか詳細に説明してもらいたい。

「お前と皿式の間になにかあったんだ？」

「おうコラそういやそうだ。お前よくもアイツと同部屋なんかにしてくれたな、おかげで寝つきも寝覚めも最悪だぜコンチクショウ！」

「学校行事で異性を同部屋にするわけにもいかないだろう」

「……本音は？」

「お前が悶えるのを期待した」

「よし皿式の次はお前だ」

昨日の出来事を思い出したことで俺への怒りが蘇ったらしい織村をどうどうと諫めて一先ず部屋を出ることにする。未だ眠っている一夏と束を起こすのは忍びない。と、部屋を出て廊下を歩き出したところで織村が目細めて。

「……お前さ、俺には異性と同部屋がどうか言っておいて、今篠ノ之いなかっただか？」

「……………」

「おい目を逸らすなこっち向け。そっちじゃねえ窓ガラスに写ってる俺と視線合わせんじゃねえ」

目敏い奴だな。織村の視界に束が入らないように直線上に立つたのに。というか束が俺の部屋にいるのは俺の責任ではない筈だ。向こうが勝手に部屋にやってきてそのまま寝てしまったのだから。布団はもともとの人数分である二人分しか用意されていないので仕方なく束と同じ布団で眠ることはしたが。

「……まあいいや。んで、アリーナは使えるのか？」

「無茶言うな。そうでなくても予定は詰まってるんだ。お前ら二人だけのためにアリーナを貸し切れるわけないだろう」

「へー、じゃあ篠ノ之のこと織斑に言ってもいいのか？」

ぐっ、こいつ一番厄介なことを……！　そこは触れてはいけない領域であると理解した上で問答無用でジョーカーを切ってくる織村を睨み付ける。昨日のお返しだと言わんばかりのドヤ顔は非常に腹が立つが、自身の黒歴史の権化と言っても過言ではない少年との邂逅を仕組まれた織村に比べればまだマシだと割り切ることにした。

とは言え、昨日の今日でそうそう決められた予定を変更できるものではない。俺や織村たちだけの少人数で済むなら話は別だが、アリー

ナを使用するととなると一年生全員の予定が狂ってしまう可能性が高い。そんなことになっては臨海学校の意味がなくなってしまう。今日から生徒たちにとっては本番なのである。どうしたものかと頭を悩ませていると、いつの間にもやら広間に着いていた。

「朝食を摂りながらどうするか考えよう」

「時間帯は別に気にしないし、五分だけで構わないんだが」

その五分でも大変なんだよと返して用意されている朝食の前に腰を下ろす。流石は景子さんと言うべきか、教師と専用機持ちの生徒の分の朝食は既に配膳を終えていた。漆塗りの膳の上には白飯にアサリの味噌汁、出汁巻き卵に目の前の海で取れたのだろう鮭の切り身が並んでいる。

「いただきます」

「いただきます」

手を合わせて箸を手取る。うん、美味しい。味噌汁はアサリがいい出汁を出しているし、鮭の切り身は塩加減が絶妙だ。付け合せのサラダや漬物も自家製でその全てが手作りである。IS学園の食堂で出されるメニューもかなりのレベルだが、花月荘の食事は学園の食事と比べても遜色ないレベルである。しかもこれを作っているのが景子さんと梗子さんの二人だというのも驚きだ。たった二人で一学年分の食事を用意してしまえるスペックの高さには脱帽である。

午前五時五十分。時間が時間だけに広間にはまだ俺と織村の二人しか居ない。静かに味噌汁を啜る音だけが響く。

柔らかな朝陽を窓の向こうに一望しながら朝食なんて中々贅沢だななんて考えていると、段々と近づいてくる足音を耳が拾った。

「む、なんだ。もう来ていたのか」

「ああ。おはよう織斑先生」

ポリポリと漬物を齧っていると襖が開き、レディーススーツを着た千冬が入ってきた。因みに俺と織村は未だ旅館の浴衣姿のままである。私生活はずぼらなくせに生徒たちの前となるとこうもシャキツとするのはどういう訳なんだろうか。あれか、大好きな弟に女子力皆無なところなど見せられないということか。

「何かよからぬことを考えてはいないか？ 更識先生」

「まさか。まあ座りなよ」

そう言つて織村とは反対の俺の隣りを勧める。断る理由もないからか、すんなりと千冬はその席に腰を下ろした。

「あれ、山田先生とナタルは？」

「まだ寝ているよ。起こしたんだがどうも眠りが深くでな、教師としてはどうかとも思うが朝食の時間までは寝かせてやることにした」

ああ、真耶絶対酔いつぶれたんだらうな。千冬に付き合つて飲んだ方がいいが、それがまさか篠ノ之印の特製アルコールだなんて想像もしていなかったに違いない。というか普通にピンピンしている千冬の肝臓は一体どうなっているんだらうか。他の人間と構造が違うんじゃないか。

そろそろ千冬の酒の耐性に本気で疑問を覚えだした俺を間に挟んで、千冬と織村は久しぶりの対面を果たした。

「久しぶりだな織村。向こうでは色々と有名だそうじゃないか」

「初代ブリュンヒルデに言われてもな。まさかIS学園で教鞭取るなんて思いもなかったぜ」

「お前が星条旗を背負つてモンド・グロツソに出てきた時は目を疑つたがな」

第二回モンド・グロツソの話をしつつ、千冬も用意された朝食に手を付ける。久方ぶりに再会したのだからもう少し悠長に会話を楽しみたいところなのかもしれないが、教師という立場上いつまでもくつろいではいられない。時刻は午前六時、そろそろ専用機持ちたちが起きてここにやってくるだろう。一夏たちが朝食を済ませてアリーナに来る前に設備の調整やスケジュール調整の確認を終えておかななくてはいけないのだ。

あ、そうだその前に。先程まで織村と話していたことを思い出して俺は千冬に尋ねる。

「織斑先生。短時間でいいんだがアリーナを貸し切ることって出来るか？」

「無理だな」

にべもない即答だった。

「だってよ織村」

「そこをなんとか頼めないか。五分、いや三分でもいいんだ」

「何だ、お前がアリーナを使用したいのか？」

顔の前で手を合わせて頼み込む織村の様子を見て面食らったのか千冬にしては珍しくきよとんととしていた。

「何でも皿式と模擬戦をしたいんだと」

「更識先生が焚き付けたのではないのか？」

「俺を主犯扱いにしないでくれるか。いや同室にしたのは俺だけだよ」

完全に俺が元凶扱いである。完全には否定できないあたり俺も強く反論出来ないが。それはそうと、やはりアリーナを貸し切るのは難しい。今千冬も断言したようにそれほどまでに予定はぎつしりと詰まっているのだ。

「ふむ。……ほんの少しだけでいいのか？」

少し考えるような素振りを見せて千冬は徐に呟いた。

「ああ、それほど時間は取らないし取らせない」

「ならばこの後、専用機持ちたちのみで試験運用を行う時間なら割けるかもしれない。八時まで一般生徒は来ないし、五分程で終わるなら専用機持ちたちの試験にそこまでの影響も出ないだろう。ただ専用機持ちたちにお前たちの模擬戦を観戦させることにはなるが」

「いいのか？ 千冬」

「仕方ないだろう。このままでは織村も引く気はなさそうだし、折り合いさえつけば問題ない」

専用機持ちたちが利用する筈だった時間を少しだけ割いて模擬戦を行う。その間専用機持ちたちは観覧席でその模擬戦を観戦。千冬が言っているのはこういうことで、確かにそれが一番いいように思う。織村の戦いを間近で見られるのは生徒たちにとってもいい刺激になるだろう。なんだかんだで一國を背負う人間だ、その実力に関して折紙つきである。

「それでいいか、織村」

「ああ。ありがとよ」

「そうと決まればさっさと準備に取り掛からないとな、俺は先にアリーナに行ってるよ」

残っていた味噌汁を飲み干して立ち上がる。一夏や簪といった専用機持ちたちへの連絡は千冬に任せて一足先にアリーナへと向かう。模擬戦を行うという旨を管理者に報告しなければならぬし、試験運用だということまで下げていた遮断防壁の強度を上げなくてはならない。いや全くこんなことになるとは思ってもみなかった。そりや確かにからかうつもりで織村を皿式と同室にしたが、まさか直接戦うことになるとは。

一先ずは部屋に戻って着替えなくてはなるまい。ついでに潰れている真耶も起こしておくか。そう考えながら階段に足を掛けた。



「模擬戦？ 皿式が？」

広間に到着して開口一番に聞かされたことを思わず復唱するように聞き返した一夏が姉である千冬へと返答を求めた。

午前六時十分。既に他の代表候補生たちはそれぞれ腰を下ろして朝食を摂っている。どういうわけか真耶は時折ふらふらと頭を揺らしているが、今はそれよりも気になることが一夏にはあった。不思議なことに昨日の寝る間際のことかすっぽりと抜け落ちてしまっていることも気にはなるが、それは今は置いておくとしてだ。

「そうだ。それによりお前たちの試験運用の時間を五分から十分程繰り下げて開始する」

「模擬戦って、一体誰とするんです？」

「まさかナターシャさんですか？」

一夏と千冬の会話に割って入ったのは鈴だ。昨日の今日でかなり彼女に懐いた鈴は皿式とナタルが戦うことを危惧しているようだった。主に苛立ちが臨界点を突破してしまうのではないかという点において。



「いや、もう一人のほうだ」

「もう一人つてことは、織村さん？」

「ナターシャさんの恋人の？」

「世界で二番目の男性IS操縦者」

織村一華。更識楯無に次ぐ世界で二番目の男性IS操縦者にして自由国籍権を得てアメリカの国家代表となった男。V7に数えられる一人である。その実力は過去のモンド・グロツソで遺憾なく発揮されている。

「お前たちは模擬戦が終わるまで観覧席で観戦してもらうことになる。世界でも指折りの実力者である奴の戦いだ。しっかりと記憶に焼き付けておけ」

千冬をしてそこまで言わしめる織村一華という男の実力に、一夏は心の内で興奮しているのを自覚した。出来ることなら自分が戦ってみたい。未だ学園最強にすら届かない身でありながらも、世界最強クラスというのをその身を以てして感じたいと思わずにはいられない。勝てないことは百も承知。単純な実力では師匠である更識楯無と同等、しかしそれでも確かめたいと思う。今の自分がどこまでやれるのか。その境地に至るまでに、何が足りないのか。

無意識のうちに拳を握る一夏の姿を、箒は横目で何も言わずに見つめていた。



「あのな束。俺はもうアリーナに行かなくちやいけないんだよ」

「やだあ！ 束さんほっぼってどこ行くのさかーくん！」

「だからアリーナだって言ってるんだろ！」

先程から束が腰に抱きついて離れてくれない。折角アイロンをかいたシャツにさつきまでの皺一つない姿はなく無残にもよれよれになってしまっていた。ぎりぎり腰に回された腕に力が込められる。

「束さんにはカタナシウムが不足してるんだよ！ 迅速に摂取しないと生命の危機が!!」

「何だカタナシウムって！ 人をカルシウムみたいに言うんじゃない！」

「主にその主成分はカーくんの手——」

「はいアウト——」

とんでもないことを口走りそうになる束の口を思わず手で塞ぐ。こいつは一体何を言うつもりだったんだ。この作品をR指定にする気が冗談じゃない。

「だってだって束さん的にはもう我慢の限界なんだよ！ 昨日はお風呂から帰ってきたいづくんに一線超えるギリギリのところ見られるし！ 大声上げるもんだから取り敢えず手刀で気絶させなければならぬ！」

「おかげで最後まで出来なくて私はもう我慢できません!!」

「朝っぱらからなんちゆうことを宣言してるんだお前は……」

一概に束に全ての責任があるわけでもないので強く怒ることもできないのが悲しい。男の性には逆らえなかった昨日の俺は、あの時一夏が戻ってきてくれなければ一線を越えていただろう。教師としてやってきているこの臨海学校でそれはマズイ。気絶させられた一夏には申し訳ないがグツジョブだ。

が、そのせいで欲求不満に更に拍車がかかってしまったらしい束は全身からピンク色のオーラを噴出させていた。気のせいかな周囲の間が歪んで見える。

こうしている間にも時間は刻々と過ぎていき午前六時二十分。このままではアリーナでの準備が終わらない。

「束、臨海学校が終わったら家に来い」

「家ってカーくんの実家？」

「おう。積もる話はその時でどうだ、今は時間が惜しいんだ」

「ちゅー」

「……は？」

邪険にするわけではないが苦渋の決断で束を実家へと招待することで解決を図る。正直な話俺自身も生殺し状態なのでこのままいっそ押し倒してしまいたいところなんだが、その場合明日の朝陽を拝むことは出来ないだろう。千冬改め血冬が俺を消しに来る。それだけ

は回避せねばならないのだ。

そんな俺を前に、瞼を下ろして唇を突き出す束。

「ちゅーしてくれたら、我慢してあげる」

「あのな……」

「ちゅー」

頑として譲らない束を前に、俺は内心で葛藤する。が、そう悩んでもいられない。意を決して彼女の顎に指を添えて持ち上げ、一息にその艶やかな唇を塞ぐ。

きっかり二秒頭で数えてから、ゆつくりと口を離れた。

「……えへへ」

目の前に頬を染めて恥じらう美女が現れた。

いかん。このままでは俺の理性が崩壊しそうだ。これ以上この場に留まることは危険だと判断し、ハンガーにかけてあった上着を持って部屋を出て行く。襖を閉める前に見えた束の蕩けたような表情が、いつまでも脳裏に焼きついて離れなかった。



午前六時五十分。既に開放されたアリーナの観覧席には一年生の専用機持ち七人の姿があった。二列使って座っている一夏と少女六人はアリーナの中心に立つ皿式をぼんやりと見つめながら会話を交える。

「でもなんでアイツと織村って人が模擬戦するわけ？」

「さあな。二人に何かしらの諍いでもあったんじゃないか？」

不機嫌さを隠そうともしない鈴の言葉に籌がそっけなく返す。彼女たちに見れば試験運用の時間を削ってまで行うようなことなのかと疑問に思うのも当然の事。何しろ皿式という少年が大した実力を持っているわけでもないのは知っているし、逆に織村一華の実力がずば抜けていることも知っている。はっきり言わせてもらえば、こんな模擬戦に意味などないのではないかと考えていた。世界で二番目の男性IS操縦者と呼ばれる織村の戦いを見られるのは良いが、そ

の相手がああ少年では勝負にすらならないのではないか、そう思っているのだ。

「そういえば簪も一度皿式と戦ったんだよな」

「……一夏、そのことは思い出させないで」

一夏の言葉を受けてみるうちにテンションが下がっていく簪。余程思い出さたくない過去であってらしい。

と、そんな会話を交わすうちに皿式が出てきたピットの反対側から一機のISが緩やかに飛行しながら出てきた。青と紺の中間のようなカラーリング。背中の部分に設けられたスラストと中世の騎士を連想させる全体的にシャープなフォルム。ラウラのレーゲンや鈴の甲龍とは正反対のようなフォルムを持つそのISは、『蒼天使』。天災篠ノ之束が開発した第一世代型IS。全世界でたった二機、稼働を続ける第一世代機だ。

「あれが蒼天使……」

「間近で見るとすごいね。どこまでも無駄を削ぎ落としたみたいだ」

ラウラとシャルロットが感嘆の声を漏らす。

現行の第二世代とも第三世代とも異なるその外見。しかしそれはスペックが劣っていることを意味しているのではないと全員が理解している。世代が一つ違えば別次元とも言われるISにおいて第一世代で尚も戦えているという事実。それは篠ノ之博士が一から作り上げたものであるというのも勿論あるが、操縦者の技量が桁外れに高いことを意味していた。第三世代型に搭載されている固有武装なども無い。にも関わらず世界のトップランカーに名を連ねる織村一華という男。彼が出てきたことで今まで漂っていた緩んだ空気は一瞬にして引き締まり、誰もが彼へと視線を向けていた。

そんな視線の先、アリーナで向かい合う二人。織村は鞘無を見ながら口を開いた。

「それがお前の専用機か」

「ああ、Y・C開発の第三世代型『サンライト・トウオーノ』だ」

「機体だけは一級品だな」

「……なんだと」

挑発を受けて鞘無の鱗谷に青筋が浮かぶ。そんな姿を見て、更に織村は口角を吊り上げた。

「操縦者と機体ってのは二つで一つ。掛け算なんだよ。いくら機体が良くて操縦者が下手くそだと乗りこなすことも出来ない、今のお前みたいにな」

「言わせておけば好き勝手言いやがって……。幾ら先輩と言え、手加減なんてしてやらないからな」

「当然だ。負けたときの言い訳になんてさせるかよ」

試合開始前から繰り広げられる舌戦はオープンチャネルを通して一夏たちの耳にもぼつちりと届いていた。

そんな会話を聞いて管制塔では楯無と千冬が頭を抱えていたりもするのだが、そんなことをアリーナの二人が知る由もない。

「……行くぞ、二番目」

「来いよ四人目」

試合開始を告げるブザーが、アリーナに鳴り響いた。

## #35 第二位と第三位

皿式鞘無にとって、自分以外の男性操縦者など居なければいい。そう考えている。

この世界の主人公である織斑一夏だけは居ても問題ないが、他の二人など不必要である。更識楯無も織村一華も、鞘無の理想の世界には必要な存在だ。鞘無が望むこの世界のゴールは、自身が女性と幸せな家庭を築くこと。明確な相手など決まっていなくてもいいが原作のキャラクターであれば誰であろうと構わなかった。取り分け容姿が整っているのはシャルロットやセシリア、更識姫無であるが彼女たちとはクラスが違う。唯一同じクラスになれた簪とも最近は必要最低限の会話しか交わさなくなっていた。

このままではまずい。彼の直感がそう告げている。これまでも幾つかの戦闘で実力を証明してきたつもりであったが、それだけでは彼女たちの評価を大きく上昇させることは出来ないようだ。ここらで一度大きな見せ場を作っておく必要がある。鞘無が織村の分かり易い挑発に乗ってみせたのはそのためだった。

思い返してみれば鞘無はまだ試合で勝利したことがない。簪に敗れ、一夏との試合は中断し、タッグマッチでは結果だけを見れば敗北している。

運がない、と鞘無は内心で自嘲気味に呟いた。幾ら実力があろうと明確な実績が無ければ評価されないのはこの世界でも元の世界でも全く同じ。試合内容を全く知らない人間がその結果だけを見ればどういふ評価を下すのか、某掲示板に連日張り付いていた彼は良く理解していた。

だからこそ、この辺りで周囲の評価をひっくり返しておく必要がある。

(世界で二番目の男にしてアメリカの国家代表。上等だ、俺の実力を世間に知らしめるための礎となってもらおうぜ……！)

IS学園初代生徒会メンバーにして現アメリカ代表。前回のモンド・グロッソでの活躍ぶりは、未だ多くの人間の記憶に新しいことだ

ろう。そんな大物を倒すことで、己の知名度を上げる。鞆無はその光景を想像して大きく口元を歪めた。

数秒後、試合開始を告げるブザーがアリーナに響き渡る。

直後、鞆無は愚直なまでに一直線に敵目掛けて突っ込んでいった。



(さてと、どう動くか)

試合開始直後、イグニッション・ブースト瞬時加速を使うでもなくただ単純に猛スピード

で突っ込んでくる少年を冷めた目で見ながら織村は数瞬思考する。このまま受け止めるか、躲すか、カウンターを食らわせるか。そのどれもが可能な状態だった。どう見てもあの突撃はフェイクではない。目線にも動きにも重心にも別方向へと誘導させるようなフェイントは挟まれていない。ただ速く、ただ強くを体現するかのような愚かなまでの突撃だった。

そんなものが、織村に通用する訳がない。空中で静止したまま、ゆつくりと腕を持ち上げる。

「先ずは小手調べといこうか」

瞬間。

鞆無を包む空気が歪んだ。

「ッ!？」

「オイオイどうしたよ。そんなにスピードを殺したら突撃の意味がないぜ」

鞆無は何が起こったのか全く理解出来ていない様子だった。それもその筈で、織村は自身の能力を使用している。『ダークマター未元物質』。学園都市第二位の超能力者が有していた能力。三位以下の超能力者を大きく突き放す強度を誇るこの能力によつて、鞆無の周囲の空間を造り変えた。通常では存在し得ない物質を空気中に混ぜることで既存の働きとは全く異なる動きを見せる。

強度の反転。一は百に、百は一に。百の速さで突っ込んできた鞆無の速度は織村の作り出した空間でのみ反転する。謂わば擬似ベクト

ル操作。十年以上の年月を経て研鑽された第二位の能力は、既に第一位のレベルにまで届きうる代物へと昇華していた。

開始直後の速攻は、織村の眼前で勢いを無くしのろのろと進むだけに留まる。そんな無防備に等しい敵を前にして何もしない理由が無い。突き出していた掌を握って、鞆無へ告げる。

「手始めだ。精々絶対防御が発動しないように上手くいなせよ」

そんな織村の言葉に鞆無が何か言い返すよりも速く、織村が振り抜いた腕が鞆無の装甲を打ち抜いた。

碌に防御態勢も取れずに攻撃を受けた鞆無は身体をくの字に折り曲げて内壁へと叩きつけられる。その衝撃まで殺しきることが出来なかつたのか、口からは荒い息が漏れた。そのままずると地面に倒れ込むかと思われたが、意外にも両の足で持ち堪えているのを見て、内心で織村は少しだけ彼のことを見直した。

（六割くらいの力とは言え、普通の国家代表クラスなら今ので終わりなんだけどな。耐久性だけは高そうだ。つっても、あれは操縦者の技量云々じゃなくて単純な機体性能の高さ故なんだろうが）

皿式鞆無の駆るサンライト・トウオーノを開発製造したのはY・C。正式名称は『Yuzuriha Company』という日本の企業だ。この企業は社長がぶっ飛んでいることと機体性能の高さで有名で、アメリカにもファンが多勢いたことを覚えている。そんな企業が鋭意開発した最新型だ。一発でノックアウトになど出来るはずがないかと織村は思い直した。

かといつて今の一発が全く効いていないわけでもない。傍目から見ても衝撃を殺しきれなかった鞆無はダメージを受けているし、シールドエネルギーもかなり削られただろう。戦闘自体は続けられるだろうが、鞆無の身体と機体のエネルギーが切れるのは時間の問題だ。

口内が切れたのか溜まった血を吐き捨てる鞆無は、余裕綽々の態度を崩すことなく内心で叫び散らしていた。

（はえええええええッ!! 何だありや、ほんとにただの拳か!? 俺の眼で捉えきれないって余程の速度だぞ! 生徒会長のミストルティンの槍だって肉眼で見切れるレベルだったのに!!）



この時点で鞆無は勘違いをしていた。世界で二人目の男性IS操縦者、織村一華のレベルの高さ。これまでIS学園でしか戦闘を行ってこなかった鞆無は、世界レベルというものを体感したことがない。原作の知識で千冬が世界最強レベルだということは理解していたが、直接刃を交えたわけではないためにその正確な強さというものを知らなかったのだ。故に、これまで彼の中では生徒会長たる更識姫無が頂点として君臨していたのである。よって織村一華の強さは、それと同等だと思っていた。勝手に決め付けていた。学園最強、ロシアの国家代表である彼女と同レベルであるなら、自分にも勝機があると。

ここでもう一つ鞆無の勘違いを正すとすれば、それは国家代表のレベルが国ごとに異なるという点である。当然ある一定の水準以上であることに違いはないが、IS開発に同時に心血を注ぎ始めたわけではないのだから、操縦者の育成に力を入れ始めた時期によってその国のレベルというのは違ってくる。過去二回のモンド・グロツソがその国家間の力量差というものを如実に表しており、現在世界のトップをひた走るのはV7と呼ばれる世界最高峰の操縦者を有する国家。日本、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリアの五カ国だ。残念ながら、ロシアはその枠組みに入っていない。

というかそもそも、国家の力量差を埋めるために姫無はロシア側から呼ばれたのだ。その点を理解していない鞆無がそうした難しい事情など知るはず無いが。

そんな訳で現在、今正に。鞆無は紛うことのない世界最強クラスと相対しているのだった。先程の一撃を受けたことで、ようやく鞆無も目の前の青年が生徒会長よりも数段強いことを理解し始める。

そして同時に思う。

(……こりゃ本気でかからないとやばいな)

あたかも以前の姫無戦は本気ではなかったと言いたげな発言ではあるが、今の言葉に他意はない。純粋に全力で挑まなければならぬと思つての言葉だった。逆を言えば、これまでどこか本気で挑むということを認めていなかった鞆無にここまでの覚悟をさせた織村の實力が窺える。

ゆつくりと正面を見据えて、演算を開始する。

前回のように充電不足などという阿呆な真似はしない。昨日は快眠、これでもかという程の睡眠を取った。おかげで朝寝坊して朝食抜き、千冬からのありがたい拳骨を頂戴したが愛の鞭として甘んじて受け取っている。コンディションは良好。機体も替えのパーツが届いたことで肩も装甲で覆われ、予備パーツも準備してある。

これだけの中で全力で挑み、もしも負けてしまったのであれば。（もうこりゃ機体が俺についてこれてないって認めないとな）

認める方向を盛大にはき違えていた。

一般的に考えれば新型の第三代型を使いこなせていないという結論に達する筈が、鞆無の脳内では自身の高すぎるスペックに機体がついてこれないという結論に辿りついていた。

が、全力でかかることに違いはない。鞆無はゆつくりと右腕を持ち上げ、肩の装甲を引っぺがした。

「認めるぜ先輩。アンタは強い。でもな、俺にだって負けられねえ理由くらいあるッ!!」

トラックのタイヤ程の装甲を上へと投げて、落下点へ思い切り拳を叩き込む。瞬間的に周囲に紫電が走り、爆発的な光が広がる。その光は瞬く間に装甲を包み込み、次いで音速の三倍の速さで一直線に発射された。

レールガン  
超電磁砲。

皿式鞆無が得意とする超高火力攻撃。常人では反応できない速度で発射された弾丸はフレミングの法則に則って相手に叩き込まれる。食らえばひとたまりもないそんな弾丸を前に、しかし織村は揺らがない。寧ろその背後にはゆらゆらと怒気が立ち上っているようにも見えた。鞆無の言葉を聞いていた織村は俯いてポツリと呟く。

「……負けられない理由だ?」

心の内から、どす黒い何かが溢れ出してくるようだった。それはついに決壊して織村の口から溢れ出す。

「俺にだってあるさ。……どつちかつつと、負けたくない理由だけどなッ!!」

秒速1080メートルの弾丸を、織村は躊躇なく殴り飛ばす。

生身の人間にはまず不可能な芸当。当然ながら彼の能力を使えばこそ出来る荒業だ。未元物質を使用して超電磁砲の核となる装甲に異物を混入。触れただけで崩壊してしまうほどの脆い物質へと造り変えた。それは織村の拳に触れた瞬間跡形もなく粉微塵に崩れ去った。

だが。しかし。

鞘無の攻撃は、ここでは終わらない。

「分かってたよ。アンタが俺の超電磁砲を防いじまうことくらい」

超電磁砲を放った直後、鞘無はそのまま織村との距離を詰めるためにスラスター全開で突っ込んでいた。超電磁砲の散らす閃光が隠れ蓑となつて、今鞘無は織村の間合いにまで詰めてきている。彼我の差は殆ど無いと言つていい。思わず鞘無の口角が吊り上がる。

——殺った!!

間髪入れずに腕を突き出し、織村の操縦する『蒼天使』の装甲に触れる。これで十億ボルトもの電撃をぶつけてやれば、間違いなく絶対防御が発動する。厳密には鞘無の放つことの出来る電撃は最大で六億ボルトだが、四捨五入すれば十億だと己に言い聞かせて納得させる。昂る衝動そのままに、鞘無は吠えた。

「っ喰らえ!!」



「どう見るっ？」

「どう見るも何も、まだ織村さんの方は攻撃らしい攻撃はさっきの打撃だけじゃないか」

観覧席の一角。専用機持ちたちが集まるその席の中でラウラが一夏に問いかけた。その問いかけに意味を見いだせなかったらしい一夏はそう答えるが、どうやら代表候補生たちには目の前の戦闘が一夏の見ているものとは全く違って見えているらしい。

一夏が答えた後、口を開いたのはセシリアだった。

「……怪物ですね」

「全くもって同感だ」

冷や汗でも流しそうな程に顔を強ばらせて言うセシリアにラウラも首を縦に振って同意した。セシリアの意見に概ね賛成なのか、シャルロットや鈴、簪も特に別の意見を述べる様子はない。

意味が分からないままに、一夏はラウラに尋ねる。一体何が見えているのかと。

「一夏、お前は武道を嗜んでいるんだっただな。お前から見てあの人の動きはどう見える」

「どうって……。重心がブレてないのは流石だけど、それだけじゃないか？ 動きからして武道をしているわけじゃないみたいだし、ISの操縦が上手いのは認めるけど」

思ったままに言う一夏の意見を耳にして、ラウラは静かに腕を組んだ。眼前で繰り広げられている戦闘から目を離さないままに、一夏の意見に言葉を返す。

「そうだな。確かにあの人は武道の心得があるわけじゃない。相手があの男だから尚の事解りづらいかもしれないが、あの人の足元を見ても」

「……足元？」

そう言われて視線を地面へと向けたことで、一夏はようやくその違和感に気がついた。

おかしい。これは明らかにおかしい。通常ISでの戦闘を行えば必ず地面にはその爪痕が残るものだ。なのに、どうして。

織村一華の周囲に、その痕跡が見られない。

「どういう、ことだ？」

「見たままだ。あの人は試合開始から今に至るまであの場から動いていない」

ラウラの言ったことが事実だと示すように、アリーナの地面は彼の周囲だけ綺麗に均されたままだった。鞘無の周囲に足跡や攻撃の爪痕が残っているのに対して、余りにも異質に一夏は感じた。

ということは、織村はその場から動くことなく鞘無の攻撃を受け、

逆に攻撃していたというのか。

「そんなこと、出来るもんなのか……?」

「言っただろう。相手があの男だから解りづらいかもしれない。まあ私と一夏の実力差程度では到底出来る芸当ではないがな」

全く、教官の世代は化物揃いだなとラウラはそう付け足した。うつすらとその額に浮かぶ汗は、その実力の高さを垣間見た故のものなのだろう。見ればセシリアや鈴、シャルロットも口を閉じて目の前の戦闘に釘付けになっていた。

そんな中にあつてただ一人、更識簪は事も無げに頬杖をついて試合を観戦していた。他の代表候補生たちとは明らかに違う態度。それを訝つて一夏は尋ねた。

「簪はこの試合どう思うんだ?」

「……どうつて?」

質問の意味が理解出来ていないのか、聡明な彼女にしては珍しくこてんと首を傾げる。

「織村さんの戦いだよ。簪には、どう見えてるんだ?」

ラウラやセシリアが『怪物』と称した織村一華。その凄さを目に見える形で見せつけられた。他の代表候補生たちは皆一様に固唾を飲んで試合を見つめている中、簪だけが眠気眼を擦りながら、退屈そうに頬杖をついていたのは何故なのか。

その返答は、やけにあっさりとしたものだった。

「……どうつて、見たまま。実力差がありすぎる試合程、つまらないものもない」

それに、と簪は言葉を付け加えて。

「あの人よりも強いお兄ちゃんが身近にいるんだから、今更あの程度で驚いたりしない」

そんな言葉を受けて、そりやそうだとやけに納得している自分がいることに一夏は気がついた。ラウラたち他の代表候補生が更識楯無という男の実際の戦闘能力というのを知らない。以前の無人機を相手取ったときでさえ恐らくは五割程度の力だったであろう彼の全力。当然、身内である簪は知っているのだろう。だからこそ桁外れの力を

見せられてもここまで平然としていられるのだ。そう一夏は結論付ける。

「……ただ、」

納得した一夏を再び混沌に叩き落とすような、そんな声が届く。

「あの人昔お兄ちゃんとすごく仲が悪かったのに、今はすごく仲が良  
い。……それが気に入らない」

今のは聞かなかったことにしよう。実の兄が絡むと簪は冷静さを失うから。そう心に固く決めて、一夏は後ろの簪を視界に収めようとはしなかった。背後で蠢くどす黒い何かを感じながら、一夏は戦局が動いたのを感じる。鞘無が得意技である超電磁砲を放ったのだ。当然のように躲されると思ったが、織村はそれをどういう理屈なのか弾き飛ばした。もう理解の範疇を突き抜けている。しかしそれは鞘無も想定していたことだったらしい。超電磁砲の軌道とは別の方向から織村の背後へと回り込み、その蒼の装甲に手を叩きつけたのだ。鞘無の表情は喜悦に満ちている。恐らく狙いが功を奏したのだろう。

そして――。



「あ」

何処か呆けた、間の抜けた声だとは自分でも自覚していた。皿式の放った超電磁砲を能力ありきの拳で弾き飛ばした織村。しかしどうやらそれすらも計算の内だったのか背後に回り込んだ皿式が蒼天使の装甲へと触れた。

それは、丁度スラスターの部分だった。

それがどういうことを意味するのか知らない皿式は、この管制塔からでもはつきりと分かるほど口元を歪めていた。あの部分だけを切り取って見ていれば完全に悪役のそれである。

「アイツ、織村の戦闘資料とか見たことないのか？」

俺とは違いアメリカの代表である織村の資料映像はそれこそM Y

Tubeにも溢れかえるほどある。モンド・グロツソを観戦したことがあるのなら嫌でも目にするだろう。一度でも映像を見たことがある者が今の光景を目の当たりにすれば、きっと俺みたいに間の抜けた声を出してしまうに違いない。

織村の背中の部分にあるスラスタ。そこはある意味、最も危険な場所だ。

隣で食後のコーヒを啜りながら試合を観戦していた千冬も俺と同じ事を考えていたのかなんとも言えない微妙な表情を浮かべていた。因みに未だ真耶とナタルは部屋から出てこない。一応起きてはいるので最悪この試合が終わってからもう一度様子を見に行つたほうがいいだろうか。束特製のアルコールを大量摂取した真耶は勿論、それに加えて時差の影響も受けているナタルもそれなりに心配ではある。

「決まったかな」

「そのようだな」

俺の呟きに千冬が同意する。正直な話、織村がアレを出すのと相当厄介だ。小手先で突破できるような生半可なものではない。

学園時代は俺も苦勞したなアレ、などと物思いにふけながら試合の行く末を見守る。

次の瞬間、アリーナを包み込むような莫大な光が瞬時に広がった。



何が起きたのか全く理解出来なかった。

超電磁砲を弾かれた。そのこと自体に問題はない。元よりそのつもりで撃つたのだし、まだ予備はある。重要なのはそこから先、超電磁砲を打った直後に加速し、相手の背後に回り込む。ここまでは実に順調、思い描いていた通りの展開だ。後は装甲を通して電撃をぶち込めばあっさりと勝負は決まる。そう思っていた。

だが次の瞬間、鞘無の身体はアリーナの外壁に叩きつけられていた。

「……？ ……っ？」

頭から疑問符が消えない。一体何が起きたのか数瞬前のことが綺麗さっぱり消えてしまっているかのようだった。そこから更に数秒を要して、ようやく鞘無はアリーナの中心に立つ織村の出で立ちが変化していることに気がついた。

白。白。白。

どこまでも混じり気の無い純白の翼がそこに顕在していた。出処は織村の背中。丁度鞘無が手を叩きつけて電撃をお見舞いしてやろうとしていた箇所だった。ここでようやく先程の衝撃が翼によるものだと理解する。あの一瞬で翼を出した織村が、片翼を使って鞘無を吹き飛ばしたのだ。

「……っつーかよお」

酷く平坦な声だった。

「俺はムカついてんだぜ。いくら取り繕ったところで過去は消せねえ、そんなことは解ってたんだ。でもよ、だからっつてよ。こんな明<sup>あからさま</sup>白なもん目の前に出されて、黙ってられると思ってるのか？」

織村が何を言っているのか鞘無には半分も理解出来ていない。それでもその口調から大層ご立腹であるということくらいは察することが出来た。

しかしそれが何だと鞘無は己を鼓舞する。姿形が変わっただけで強くなるというのなら誰だって苦労はしない。結局最後にモノを言うのは個人の技量なのだ。

（俺は転生者。そこいらの人間とは根本的なスペックが違う。第三位の能力を使用できることだっつて大きなアドバンテージだ！）

立ち上がり、正面を見据える。視界の端に表示されているエネルギー残量は今の一撃で既に三分の一にまで減っていたが、それよりも先に相手のシールドエネルギーを削り取れば良い話。先程背後に回り込めたことで、妙な自信を芽生えさせていた。

そんな鞘無の心の内を知ってか知らずか、織村が口を開いた。

「なあ、こんな言葉を知ってるか」

「……………」



『一位以外に意味はない。二位も最下位も同じ弱者』ってよ」

一体何を言ってるんだ、と言いつ返し返そうとして。

この時、この瞬間。

初めて鞘無は身の毛が総毛立つというのを体感した。

——可笑しいよな。

「——最下位よりも、三位よりも。二位の方が強いに決まってるだろうがッ!!」

ぞわり、と。危機察知能力の低い鞘無ですら感じる圧倒的な威圧感と恐怖。それら全てを薙ぎ払うように、織村の背中から伸びる翼の枚数が変化した。左右一対から左右二対、計四枚の翼がそれぞれ五メートル大にまで広がる。

「後輩のよしみだ。全力は勘弁しといてやる」

危険だと察知した鞘無がもう片方の肩の装甲を剥がし超電磁砲を放つよりも速く、純白の翼が縦横無尽に降り注ぐ。柔らかな羽は未元物質と強烈な烈風によって幾千もの刃となり、鞘無の機体を貫いた。時間にしてたった数分。目も眩む光量がアリーナから消えたときには、ISが強制解除された鞘無がそこに蹲っていた。



「準備は整った」

「我々にはもう後がない」

「それは君も同じだということを理解しているかね。ミス・ヘクマティアル」

「ええ、それはもう。私も死ぬのは嫌ですのう」

円卓に並ぶ五人の男を前にして、スーツ姿の白髪の女は妖艶に囁く。

「ご心配には及びません。両国ともに攻略済みです。まあ、ゆっくりと詰んで行きましょう」

——翌日。

IS学園を離れている更識楯無のもとへ、一通の連絡が送られる。  
その内容を示すメールの頭には、こう記載されていた。  
英、米両国の専用機が強奪。  
任務レベルSS。

## #36 三日目と急変

三日目の朝。昨日と同じく惚れ惚れする程の青空が視界いっぱい広がっていた。

昨日は朝から織村と皿式の模擬戦に付き合わされたせいで多少時間がずれたものの、当初予定していたスケジュールは何とかこなすことが出来た。専用機持ちたちの試験運用は五分程繰り下がったが他の生徒たちは時間通りに稼働を開始することが出来たのでよしとしよう。ただ一つ模擬戦の弊害というか自業自得というか、皿式の専用機が自己修復が不可能な程に織村に損傷させられた為一人自室待機を命じられていること以外は。

そんな訳で臨海学校も残すところ今日一日。これが終われば俺を含む教師は学園に戻り今日までの稼働データをまとめなくてはならない。生徒たちは明日一日休みになっているので気楽なものだ。昨日は使い物にならなかった真耶も本日は絶好調。二日酔いから解放されたからかいつになくテンションが高いように感じられる。

ああそうだ。一応補足しておく、昨日の夜から織村と皿式の部屋は別になった。織村とナタルが同室になり、皿式は新たに用意された部屋に一人で宿泊している。流石にああした試合のあとに同じ部屋というのも酷だろうという千冬の配慮からだ。俺は別にいいんじゃないかと言ったんだが、織村が全力でそれを否定してきた。それはもう鬼の形相で。

「おはよう、更識先生」

「おはよう、織斑先生」

襖を開いて入ってきた千冬に挨拶を返して、目の前に綺麗に並べられた朝食に手を付ける。相変わらずの美味しさだ。海が近いからなのか魚は特に新鮮に感じられる。

「そういえば束が来ていたと聞いているのだが、何か知らないか？」

「ん？ ああ、昨日のうちに帰ったぞ。人参型のロケットみたいなの  
で」

「帰った？ 全く、一言くらい声を掛けていけばいいものを」

忙しないやつだ、と一言付け加えて千冬は味噌汁をすすった。束の自由奔放さを最も理解しているのは間違はなく千冬だ。それ故に彼女の行動に一々目くじらを立てるようなことはない。今の一言はきつと友人としてのものだろう。久しく会っていない彼女と会話を交えたかったという千冬なりの意思表示とでも言うべきか。

「む、山田先生はここに来ていないか？ 部屋にはもう姿が見えなかったのだが」

周囲を一度見渡して真耶の姿が無いことに気が付いた千冬が問いかける。

「山田先生ならもうアリーナに向かったよ。朝食も摂り終えてる」

昨日は二日酔いでまともに機能していなかった真耶であるが、今日は昨日の分もと言わんばかりに張り切っていた。自分に厳しい真耶のことだから頑張りすぎないか心配ではあるが、行き過ぎるようであれば俺か千冬が止めればいいと安易に考えてアリーナに飛び出していく彼女を見送ったばかりだ。

対面に座った千冬が食事を進めるのをぼんやりと眺めながら、脳内で今日の予定の段取りを確認していく。基本的にやることは専用機持ちも一般の生徒も同じであるが、専用機持ちたちには幾つか今日到着予定のパッケージの試験運用が追加される。数カ月後に行われるキャンボール・ファストなどを考慮してのものだろう。順調に事が進めば午後二時には終了し、後片付けも含めて四時にはバスに乗り込める筈だ。

さて、このままゆつくり朝食を楽しむのもいいが、学年主任として真耶だけに仕事を丸投げするわけにもいかない。残った米を口に放り込んで合掌、部屋着からスーツに着替えるべく立ち上がる。正直なところこの季節に真っ黒なスーツは暑苦しいことこの上ないんだが、それをここで愚痴っても仕方がない。今度東に頼んで通気性の良いものに替えてもらおうと考え、広間を後にした。



——同時刻。イギリス、バーミンガム。

ロンドンに次ぐ大都市に聳えるISの開発研究所は、未曾有の混乱の渦中にあつた。

「侵入者、第四防壁を突破！　ダメです、このままだと最深部にまで潜り込まれますッ!!」

「馬鹿な！　防壁は二十七あるんだぞ!!」

「第五防壁、突破されましたッ!!」

「くそッ、なんとしてでも食い止めるッ!!　最深部にはうちで預かる最新鋭機がある、絶対に渡す訳にはいかんッ!!」

「ダメです！　IS委員会への通信繋がりません!!」

ギリツ、と白髪の男は奥歯に砕かんばかりの力を込めた。イギリスが誇るIS開発研究所を襲撃。この意味を正しく理解している人間は、意外にも少ないのかもしれない。欧州でイタリア、ドイツと並ぶIS先進国であるイギリスで最も大きなこの研究所が狙われた。襲撃者の狙いは恐らく、最近完成したばかりの最新鋭機。それを奪われることの重要性、その事実がもたらす本国への影響。考えただけでゾツとする。

「……サイレント・ゼファイルス……ッ！」

それだけは外部に流出させる訳にはいかない。ブルー・ティアーズ同様イギリスが威信を懸けて作り上げた第三世代。当然多くの新技術が使用されており、搭載されている武装も一新されている。

IS開発において欧州の先駆けたるイギリスで最新鋭機の強奪などあつてはならない。なんとしても阻止しなくてはならない。

だが、そんな思いを嘲笑うかのように侵入者は次々と防壁を突破していく。

「第十三防壁突破されましたッ!!」

「ええい、救援はまだなのか!?!」

どんな手段を用いているのか、厚さ百五十ミリを誇る特別性の防壁が紙切れのように切り崩され突破されていく様子がモニタに映し出される。そこに映るのはISを部分展開しているのか右腕だけが空

色の機体に覆われた仮面を付けた人間。その身長や歩き方からして女性ではないかと思われた。

外部への通信も絶たれてしまっている今、彼ら研究員とサイレント・ゼフィルスを守るのはこの研究所に居合わせたIS操縦者しかない。

「一刻も早く彼女を現場へ向かわせろ！ 彼女ならなんとかしてくれるッ!!」

専用機の機体調整のために、たまたまこの場を訪れていたIS操縦者。

「現場に到着、敵と接触しますッ!!」

調整中の機体を急造で間に合わせたが故の動作不良などが発生しないかだけが気がかりだが、今はそんな贅沢は言っていられない。彼女の肩には今やイギリスの威信が掛かっているのだ。

仮面を付けた女の後ろに立った女性は、無言でスナイパーライフルを構える。IS専用のレーザーライフル『スターライトmk-II』。一分の隙もなくロックオンを済ませた彼女は、敵へ何の言葉も、躊躇いすらもなくその引鉄を引いた。

「——頼んだぞ、チェルシー!!」

直後、モニター一面を眩い閃光が埋め尽くした。



「つーかよ。何でアタシがこんなのに付き合わなくちゃいけないんだ」

「文句言わないの。貴方の専用機でしょう?」

「チツ、ナタルとの姉妹機なんて思ってもみなかったぜ」

「あら。貴方たち仲良いんだしお似合いじゃない」

「アイツ口を開けば一華一華一華一華なんだぞ? ノイローゼになりたいんなら代わってやるよ」

アメリカ、デトロイト。

都市の中心に建てられたIS開発機関内部で、ISスーツの上から

大小様々な電極を付けられたイーリス・コーリングはお付きの研究者にそうぼやいた。

IS開発においてアメリカの中枢を担うこの開発機関では約四百人の研究者たちが働いており、日夜新型制作に心血を注いでいる。今イーリスが行っているのは新しく制作されている新型の機動テストと本人の運動データの抽出を同時に行うもので、イーリスの動きを新型に再現させるというものだ。テストは順調、このままいけばあと十分程で終わることができさるだろう。もうすぐ午後五時を回る。早いところ切り上げてしまいたいイーリスだったが、そこに研究者からの待ったが響く。

「今日の貴方は調子が良いみたいだから、このまま新型の装着までしてしましましょう」

「うえ、勘弁してくれよ。明日じゃダメなのか？」

嫌そうに眉を下げるイーリスに泣き黒子が特徴の研究者は指を突き立てて。

「ダメよ。貴方朝に滅法弱いんだから、できるうちに片付けてしまうのが一番なの。幸いまだ時間はあるしね」

「チツ、わかったよ」

後頭部をがしがしと搔きながら了承する。そういう所を見て研究員の女性はもう少し女性らしくしたらどうかと思わないでもないが、竹を割ったような性格をしている彼女に今更何を言ったところで無駄だろうと思いついて口を噤んだ。

イーリスに付けていた電極を慣れた手つきで外していき、データを一通り纏めてから二人して部屋を出る。向かう先は開発中の新型が保管されている場所だ。そこには現在調整中のナターシャの専用機も保管されており完成に向けての微調整が施されている。

「そういえばナターシャの姿が見えないようだけど」

「は？ 聞いてないのかよ」

「何が？」

何の事を言っているのか理解していないらしい研究員。そんな彼女を前にイーリスは溜息を吐き出した。まさか研究員たちに何の連

絡もなしに日本へ向かったのではないだろうな。いや流石にそんな無責任なことは……織村一華が絡んだ場合はその可能性も捨てきれない。そう結論づけてイーリスは顔色を悪くした。ここで自分もし口にしてその事実が上層部に伝わっていなかった場合、ナターシャはアメリカに強制送還される可能性がある。それはちよつと可哀想なのではとイーリスの友人としての心が――

「ああ。アイツ一華と二人でIS学園に行つたんだよ」

――痛まなかった。全く、これっぽっちも。

これまで散々ナターシャには振り回されてきたのである。この一言で強制送還されたとしてもそれは彼女の自業自得であり自身に一切の非はない。そう断じてイーリスは非常に清々しく言い放った。

「ええ!? そうなの!?!」

やはり知らなかったらしい研究員の女性は顔色を驚愕の色に染めて声を上げる。驚きながらも作業の手を止めないのは流石と言ったところか。新型を纏ったイーリスにこれまた多くの電極とチューブを取り付けていく。

「なあ、こんななペタペタ電極くっつけなくてもいいんじゃないのかー?」

めんどくさがりが顔を出したらしいイーリスは腕の装甲に付けられた電極をぷらぷらさせながら研究員のほうを見る。早く終わらせて夕食を摂りたいのだろう。その顔は『早く終わらせろ』と物語っている。

「ごめんなさいね。でもこれも必要なことよ」

申し訳無さげに頬を掻く研究員。

そこでふと目に止まったものに、イーリスの眼が細くなった。それに気がつくことなく、研究員の女性は作業を続ける。

「……なあリア」

「なあにイーリス」

イーリスの表情が変化していることに気が付かないままの研究員は、軽い調子で答えた。

そんな彼女に、イーリスは言葉の刃を突き立てる。



「お前、泣き黒子の位置逆だ」

ピタリ、と作業していた研究員の手が止まった。

「リアの泣き黒子は左目だ。右じゃねえ」

イーリスの心の内で、ざわついていた警戒心が確信めいたものになる。

それに対して、女の声はどこまでも平坦だった。

「……そう、それは失敗。でももう遅いわ」

一瞬、イーリスは女が何を言っているのか分からなかった。数秒してその言葉の意味を理解する。同時に四肢を動かし、強引に電極やチューブを引き剥がそうとするがそれらは引きちぎれなかった。分厚い防弾ガラスの一枚向こうで、女は先程までとは打って変わって口角を吊り上げる。

尚も藻掻くイーリスを嘲笑うかのように。

「——さようなら、イーリス・コーリング。貴方は——」

女の声が、最後までイーリスに届くことはなかった。



ポケットに仕舞っていた携帯が振動したのは、アリーナで試験稼働を開始して間もなくのことだった。業務中は基本的にマナーモードにしているので着信メロディが鳴り響くなんてこともなく、近くにいた千冬に一言言って携帯を取り出してアリーナ外の廊下に出る。画面を見ればメールを一件受信していた。開けばそれは政府からのもの。以前会ったことのある防衛省の樹さんからだ。シャルロットの一件以来何度かメールのやりとりはしているが、ここ暫くはなんの音沙汰もなかったのに一体どうしたんだろうか。

なんととはなしに、メールを開いて本文を読む。

途端、俺は眼を見開いた。無意識のうちに眉間に皺が寄る。

「……どういう、ことだ……?」

その本文には、こう記載されていた。

本日未明。イギリス、アメリカ両国の専門機関より開発途中の専用

機が強奪。専用機に取り付けられているGPSの位置情報と移動速度、方向を鑑みた結果目的地はIS学園の所有する海岸区画だと断定。専用機の回収を最優先とするが万が一の場合の破壊も止む無し。これをSS任務とする。またイギリス、アメリカからの救援は望めぬものである。現時刻より状況を始められたし。

思わず歯噛みする。俺や織村のようなイレギュラーの存在がまさかここまで事態を大きくしてしまうなどと思わなかった。本筋であればここは銀の福音を一夏が倒すことで二次移行する筈だが、それも事態はその程度では済んでくれそうにないらしい。

これは早急に手を打たなければ手遅れになるだろう。一体どんな手段を使って専用機を強奪したのかは知らないが、問題なのはそこではない。奪われた二機がこの場所を目指しているという事実。狙われているのはまず間違いなく。

「一夏と皿式。……いや、俺や織村も含まれるのか？」

世界にたった四人しか確認されていない男性IS操縦者。その全員が一箇所に集まっている。俺たちを疎んでいる連中からすれば絶好の機会に違いない。

メールには下部に到着予定時刻なども記載されており、現在の時刻と照らし合わせると残り二時間を切っていた。

俺は携帯を仕舞い、早足でアリーナへと戻る。生徒たちには申し訳ないが、今日の試験可動はこれで終わりになりそうだ。

「どうしたんだ更識先生」

「織斑先生、ちよつといいか」

「……只事ではなさそうだな」

俺の表情から何かを察したらしい千冬も一緒にアリーナ外に出る。周りの生徒たちが不思議そうにこちらを伺っていたが、今はそれらを無視した。

すぐに事情をメールと共に伝えてアリーナに戻る。直ぐに千冬が声を発した。

「全員、注目ッ!!」

凜とした声がアリーナ全体に響き渡る。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日の試験可動は中止だ、各班ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること、以上！」

有無を言わさぬその物言いに、何か言いたげだった生徒たちも直ぐ様後片付けへと移った。不測の事態だけに皆思うところはあるのだろうが、それでも俺や千冬の雰囲気から何かを読み取ったのだろうか、ときばきと片付けを済ませていく。

その間に真耶を呼んで事情説明を済ませる。現在の状況を把握した途端、彼女もまたこれまでの雰囲気を一変させて行動を開始した。迅速に片付けを済ませてアリーナから出て行く生徒たちに向かって、俺は千冬が言い忘れていたことを大声で伝える。

「それと専用機持ちは全員集合すること！ 織斑、オルコット、鳳、デユノア、ボーデヴィツヒ、更識、篠ノ之！」

声を掛けた途端に七人は俺の前に集まった。こういう時の対応でもたつくと状況悪化を招くだけなので有難い。詳しい話は旅館の俺の部屋ですることにして、一先ず現状を全く理解していないであろう七人に簡潔にだけ状況を伝えることにする。

「いいか。これから伝えることは機密事項だ、他言は許さん」  
俺の言葉に皆一様に無言で頷く。

こうして、三カ国を巻き込んだ騒動は始まりを告げた。



「では状況説明を開始する。今から二時間前、イギリスバーミンガムとアメリカデトロイトにある開発機関からそれぞれ専用機が強奪された。イギリスは『サイレント・ゼファイルス』、アメリカは『銀の福音』。尚イギリスの研究所では国家代表であるチェルシー・ブランケットが迎撃するも失敗、機体を大破されている。この二機は制御下を離れており監視空域からも離脱している」

楯無の部屋に集められた教員と七人の専用機持ちたち。一夏たち七人は正座したまま目の前に投影された空間ディスプレイを凝視し

ながら楯無の話に耳を傾ける。皆が皆、険しい表情をしていた。こういった事態が初めてな一夏や箒ですら事態の深刻さを大雑把に理解できてしまうほどである。代表候補生たちの表情は更に厳しい。

「その後、GPSと衛星による追跡からこの場所を通過することが分かった。時間にして一時間二十分後。政府、学園上層部からの通達により我々がこの事態に対処する」

あくまでも冷静に、淡々と説明を続ける楯無。一度モニタに視線を移してから、再度口を開く。

「織斑先生と山田先生は学園の訓練機を用いて周囲一帯の海域を封鎖を行う。俺、そして――」

そこで一旦言葉を切って、部屋隅を見る。そこに胡座を掻いているのは、茶髪を肩まで伸ばした青年。

「――織村、専用機持ちたちで二機の回収を行う。尚破壊することも厭わない」

その言葉に思わず一夏は声を上げそうになってしまった。

回収を行う。それはつまり、専用機を纏った状態で強奪されたISと戦わなければならないということだ。学園でのトーナメントや模擬戦とは違う、失敗することは許されない本当の意味での実戦。一夏の額から一筋の汗が流れる。意味もなく心臓が早鐘を打つのは緊張からくるものなのだろうか、それとも。

「一夏」

ハッとして、一夏は声のした方を見やる。

「大丈夫。私が、私たちがついてる」

声の主である簪は視線を目の前のモニタに向けたまま、そう告げた。

「……ああ」

その言葉で、どこか落ち着いた一夏は再び前を向いた。

一夏を除く六人は既に覚悟を決めているのか表情の変化はない。皆理解しているのだろう。自分が、自分たちがやらねばならないのだと。

二機との接触まで、残り一時間十七分――。

## #37 真意と心意

——防衛省、第一会議室。普段通りであるならば各階に別れてそれぞれの職務を全うしているはずの重役たちが、この部屋に一同に会していた。その理由は当然、今朝二カ国の制御下を離れ日本に向かつてきているISの対処をどうするかという問題を解消するためである。国防を担う防衛省が事態の收拾をつけることが出来ず国に被害を与えろということとは、そのまま省の信用が失墜することを意味している。それだけはなんとしても避けなければならぬ。現状、由々しき事態であると言えた。

朝方だとは思えない物々しい雰囲気室内を包み込む中、コの字型のテーブルの中央に座る白髪の男性が小さく息を吐いた。胸に付けられたバッジからもかなりの重役である筈の男性はしかし、現在部屋の前方に設置されたモニタの横に立つ男に強く出ることが出来ないでいた。そしてそれはこの部屋にいる殆どの役人たちも同様のようで、前に立つ三十程の男が口を開くのをただ待っている。

政府の役人約十五名を前にして尚堂々と背筋を伸ばす男の名は樹修<sup>いつきしゅう</sup>。今現在、この防衛省内で最もISというものを理解しているであろう男だ。

「……それで、きちんと説明はしてくれるのだろうか」

中央に座る初老の男がやや前傾姿勢になって机上で腕を組んだ。何のことかまでは口に出さない。言わずとも理解していると確信しているからだ。それは周りの役人たちも同じで、皆一様に前に立つ樹を見据えている。そんな視線を一身に受けながらも、樹の表情に変化は見られない。内心でどう思っているのかは定かでないが、初老の男の質問に間を空けずに答える。

「勿論です。そうですね、どこから説明しましょうか」

「イギリスとアメリカの二国は何と言ってきているのだ」

考える素振りを見せる樹に、初老の男は間髪入れずに問いを投げた。

「両国共に黒執事を始めとした我が国の戦力が対処することで合意し

ています。万が一機体を破壊してしまったとしてもその責任を我々が負うことはありません」

「そうか……」

樹の言葉を聞いて役人の何人かが胸を撫で下ろす。責任を押し付けられないと分かった途端のその仕草に、樹は内心で舌を打った。

「両国は自分たちの手で何とかしたいとは言わなかったのかね」

役員の中でも一際太った男がそう問いかける。内心を悟られぬように無表情を保ちながら、樹はモニタの画面を切り替えた。表示されているのは日本を中心に構成された世界地図で、アメリカのデトロイトとイギリスのバーミンガムから日本の湘南付近に赤い矢印が一直線に伸びていく。

「これは機体に埋め込まれたGPSと衛星による追跡の結果から割り出された二機の進路予定です。この二機が本国の監視空域を離脱したのが今から約二時間前。『銀の福音』は現在太平洋上空を時速2450キロ、サイレント・ゼフィルスは中国北北西を時速約2000キロで移動中です。とても今からでは間に合いません」

「ふむ……、確かに今からではこちらで迎撃するしか手はなさそうだな」

「二機の迎撃には黒執事を出すだろうか？」

納得した男の隣でまだ若い役人が声を上げた。見るからにエリート街道を歩いてきたような男で、どうにもいけ好かない印象を受ける。樹はその男の質問を受けてモニタを切り替えるた。表示されたのはIS学園の一年生が臨海学校で二機の通る地点を訪れているということの詳細だ。

「今現在IS学園の一年生が教員引率のもと試験稼働を行っています。一般の生徒を待機させたのち、更識楯無を始めとする教員と専用機を持つ生徒たちが迎撃に向かいます」

「なに……？ 専用機持ちって学生だろ？ そんな奴らで大丈夫なのか？」

途端に眉間に皺を寄せる男。専用機持ちがそれだけの実力を有していることは知っているだろうが、それでもまだ年端もいかない子供

に任せることに不満があるようだ。ISというものが生まれてから十年程が経つが、その認知度の割には専用機を渡されることの意味合いを正しく理解している人間は少ない。多くの人間がISの操縦が他の人間よりも上手い程度にしか思っていない。この男もその例に漏れず、何か勘違いをしているようだった。

「お言葉ですが、代表候補生であつても専用機の所持を許される人間は多くありません。ISのコアには467という上限があります。それをアラスカ条約を始めとする規約で各国に分配しているのですから、余程有望な人間でない限り専用機に触れることすらできないのです」

「……何が言いたい」

「今年のIS学園一年生で専用機を有する八人は、既に実戦にも耐えうる戦力であるということですよ」

はつきりと、樹は断言した。そんな発言に思わず男は押し黙る。そうきつぱりと言い切られてしまつては言い返す言葉も見つからないようだった。

やれやれ、これで話を進められそうだと思つた樹の耳に、次なる問いかけが滑り込んできた。その声はこれまでの質問のように疑問を含んだものではなく、断定しているかのような言い方。言つてしまえば高圧的なものだった。

「でもその八人のうち、三人は代表候補生でもなんでもないんでしよう？　しかも一人は専用機を大破させてるっていうじゃない」

防衛省という国の中枢を担う場に似つかない、ワインレッドのレディーススーツを着た女性だった。強気というものを人間にしたらきつとこういう風になるんだろうな、となんとなく樹は思う。この女性性は防衛省の役員の中でも新参の部類に入る。ISが生み出されてから女尊男卑の風潮にやや傾きかけていた時期に滑り込んできたのだ。黒執事や蒼天使が世に出たことで女尊男卑がなりを潜めたことを快く思っていないのを樹は知っていた。

高慢ちきな口だけの女。そんな風に樹は彼女のことを評している。決して口には出さないが。

「ええ、しかしご安心ください。現場には織村一華も居ますので、専用機を大破させた少年の代わりを十分に務められるかと思えます」

「おお、」

「あの蒼天使が」

樹の発言に、室内の空気がやや軽くなる。今となつては表舞台に上がらなくなつた黒執事とは違い、織村一華と蒼天使は現役のIS操縦者である。防衛省の役員たちも第二回モンド・グロツソでの彼の活躍を覚えているのだろう。彼がいるのならばと安易に考えているのかもしれない。それは樹としても好都合である。このまま話を纏めてしまえば、面倒な説明などをする必要がなくなる。

しかし、その言葉に尚も食い下がる人間がいた。件の女性である。

「それなら黒執事と蒼天使だけで事足りるんじゃないの？ 現場には織斑千冬や山田真耶もいるんでしょう？ 戦力過多じゃないかしら」

「確かに名前だけ見ていけばそうそうたるメンバーですが、織斑千冬と山田真耶は学園の訓練機を使用します。周囲の海域封鎖は出来ても、とても第三世代の新型と戦うことはできません。学園の訓練機は生徒たちが扱いやすいようデチューンされていますので」

仮に真耶が自身の専用機を所持していた場合、遠距離を得意とする彼女は非常に役に立ったことだろう。射撃部門ヴァルキリーの称号は伊達ではない。高火力のスナイパーライフルさえあれば、飛行中の二機を撃墜させることだって出来たかもしれない。だがそれは無い物ねだりだ。織斑千冬にしても専用機は以前政府へと返却し解体されてしまっている。よつて数えられる戦力は更識楯無と織村一華。そして専用機を持つ七人となる。更に言えば、織斑一夏と篠ノ之箒はこれが初の実戦となる。それを考慮すると、実質の戦力は二人を除いた七人。確かに戦力過多だと言えなくもない。

だが彼女は忘れてしている。これはもう人数の問題ではない。

「本任務はSSとしています。これは各国の国家代表が入念な準備を行った上で望まなければ達成困難なことを意味していることはご存知でしょうか」

「し、知ってるわよそれくらい！」



馬鹿にされたと思ったのか、女は立ち上がって声を荒げる。そんな様子をさして気にすることもなく、樹は彼女を見据えて口を開いた。「今日突然報せを受けた彼らに、入念な下準備など出来ているとお思いですか？」

「……っ、それは」

「これが一機だけならばなんとかなったかもしれませんが。だが今回は二機、それも別方向から。一対一で敗北することが負けなのではありません。誤って取り逃がし、見失ってしまったても敗北なのです。開始の時点でこちらが不利なのですよ」

ぐっ、と女性は思わず下唇を噛み締める。

「わ、私はただ生徒たちの安全を第一に考えて……！」

「一理ありますが、代表候補生たちはこういつた時の覚悟も出来ている筈です。この誓約書にも有事の際は任務の遂行を最優先すると記載されていますし」

ぺらり、と小脇に抱えていたファイルの中から代表候補生となる際を書く事になる誓約書のコピーを取り出して見せる。そこには確かにそういった旨のことが事細かに記載されていた。

「危険であることは承知しています。しかし現状、より多くの戦力を投入することを最優先させるべきです」

「……一つ、聞いてよろしいでしょうか」

今にもヒステリックを起こしかねない女性の隣に座っていた物腰やわらかそうな男性が言った。黒縁眼鏡が特徴的な四十程のその男性は、樹の瞳から視線を逸らすことなく。

「制御下を離れている二機のIS。その進路にIS学園が管理する施設がある。……これは果たして偶然なのでしょうか」

それはこの会議室に集められた役員の殆どが抱いた疑問に違いなかった。

そもそもこの二機のIS、暴走したと報告されているアメリカの銀の福音はともかくとしても、強奪されたサイレント・ゼフィルスが何故行方を晦ますことなく日本へ向かってきているのかということが不可解である。欧州最先端の技術を駆使して制作された機体やその

データが欲しかっただけであるのなら、研究所を襲撃しその機体を回収した時点でその目的は達せられているはずなのだ。

であるにも関わらず、襲撃者はその機体を使用して真っ直ぐに日本へと向かってきている。ISを纏える時点でほぼ襲撃者は女性だと考えてよさそうだが、安直にそう断ずるにはやや早計なような気もする。確認されているのが四人だというだけで、まだ他にも男性のIS適性を持つ人間はいるのかもしれないのだから。

何かがあるのだ。この日本、もつと言えば、二機の進路が重なるあの場所に。そして何かがあるとするとするなら、樹はたった一つしか思いつかなかった。

「これが偶然でないとするのであれば、少なくともサイレント・ゼフィルスで向かってきている襲撃者の狙いは四人の男性IS操縦者である可能性が高いと思われませう」

樹の言葉に、俄かに室内にどよめきが走る。

その考えが浮かばなかった訳ではないのだろう。現に黒縁眼鏡の男性は驚愕する様子もなく、先程の質問も確認の意味合いが強いことを思わせる。二機の、少なくともイギリスの機体の狙いは男性のIS適性を持つ人間。それ以外に考えられなかった。

「考えてもみてください。今現在あの場には世界でたった四人しか確認されていない男性のIS適性を所持した人間が集まっているのです。敵にしてみればこれほど都合のいいことはないでしょう。私ももしも敵の立場であったなら、間違いなくこのタイミングで攻撃を仕掛けます」

「だ、だったら三人を最前線に出すのは向こうの思う壺なんじゃないの!？」

先程まで口喧しかった女性が息を吹き返すように樹の言葉に噛み付いた。彼女の言うことも間違いではない。本当に狙いが男性IS操縦者たちであったのなら、狙いである彼らをむぎむぎ敵前に差し出すような真似をするというのだから。

万が一彼らのうちの一人でも攫われれば、その時点で防衛省の面目は丸潰れだ。

しかし、それでも。現状に対処出来るのが彼らしかいない以上は三人に応戦してもらおうしか手がないのである。齒がゆい状況に樹は静かに拳を握る。だが状況判断に余計な感情は自必要ない。一瞬の判断ミスが、取り返しのつかない事態を引き起こしかねないのだから。それ故に樹は憚然と告げる。これが最善だと、己に言い聞かせるように。

「我々は見極めなければなりません。舞台裏に潜んでいる真の敵を、その目的を。その為にも、彼らの助力は必要不可欠なのです」



「さて、状況説明は以上だが何か質問がある奴はいるか？」

一頻りの説明を終えて、ざっと全体を見回す。いきなりの事態であるにも関わらず代表候補生たちは流石の対応力と言えるだろう。直ぐに思考を切り替えてこの状況を打破するために必要なことを考えているようだった。一夏や箒は最初は戸惑っているようだったが、それも今では落ち着いてある程度の思考能力は取り戻しているみたいだ。とは言え、この二人を最前線に連れて行くつもりは俺はない。二機のISの狙いがもしも俺を含む男性IS操縦者であったのなら織村と二人で応戦し、一夏には皿式と同じ部屋で待機してもらおうと考えていた。他の代表候補生たちを護衛に付ければある程度の安全は確保できるだろうし、何より一夏のあの状態では実戦で使い物にならないような気がしてならないのだ。実力はあれど、その使い方まではマスターしていない。そんな状態のまま出撃させては現場で何が起こるか分からない。

だがやはりというかなんというか、血気盛んな俺の弟子は後方支援なんて柄ではないようである。傍から見てもはつきり分かるほどにやる気十分に燃えていた。これは完全に最前線で戦う気満々だ。どうしたもんだかと内心で悩んでいると、正座を維持したままのラウラが手を挙げた。

「目標二機の詳細なスペックデータを要求します」

「了解した。ただしこれは重要機密だ。他言することは許さんぞ」  
「心得ています」

俺の言葉に頷くラウラを確認して、前のディスプレイに二機のスペックデータを展開する。それらのデータをまじまじと見つめながら、代表候補生たちは各々の見解を仲間内で述べているようだ。

「軍用IS……。この移動速度は尋常じゃないわね」

「イギリスの第三世代もかなり厄介そうだぞ。偏向射撃があるとすれば驚異だ」

「銀の福音を止めようと思ったら、見敵必殺しかないね」

「となると一夏の零落白夜が一番適任なんじゃない？」

「まずい。なんだか一夏が銀の福音を迎撃することで話が纏まろうとしている。」

原作の流れのままだと言ってしまうばそれまでだが、俺や織村が存在する歪がある中でその一点だけ原作を踏襲しているというのも可笑しな話だ。なんとなく嫌な予感を抱いた俺の耳に、これまで口を閉じて状況を静観していた男がここにきてようやく声を発した。

「銀の福音は、俺が止める」

別段大きな声を放った訳ではなかったが、どうしてかその声は室内によく浸透した。

織村の瞳から視線を逸らすことなく俺はその理由を尋ねる。どうして銀の福音に拘るのだと。

「理由だ？ そんなもん決まってる。誰だかは知らねえが、ソイツはアメリカって国に唾を吐きやがった。アメリカ代表の俺の目の前に奪ったISを向かわせてるんだろう？ だったらその喧嘩を買ってやる。新型を奪われたアメリカにも責任はあるしな、身内の不始末は身内でケリを着ける」

「……それだけじゃないんだろ」

見透かしたような俺の発言を受けて、織村は一瞬呆けたあと後頭部をガシガシと搔いた。なんだ、どうせソイツに隠し事なんかできるわけないかとか思ってるんだろう。思い切り顔に書いてあるぞ。というかそれは俺でなくても千冬や真耶にもお見通しなような気もする

が。

「……銀の福音に乗ってるイギリスは、ナタルと俺の親友だ」

その言葉で、今までイマイチ要領を得なかった代表候補生の面々も理解したのだろう。織村がサイレント・ゼファイルスではなく、銀の福音を相手にすると言いだした意味を。俺ももし同じ立場であつたら、今の織村と全く同じ行動を取つたに違いない。だから俺はそれ以上の言葉を織村にかけることはせず、ただ静かに首を縦に振った。

「そういうことでしたら、私はサイレント・ゼファイルスの迎撃に参加させて下さい」

織村が再び静観を始めたのを見計らつてそう言ったのはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコット。まあ実のところ、セシリアもそう言い出すんじゃないかとは思っていた。先程話した内容の中にはイギリスの国家代表、チエルシー・ブランケットが迎撃に失敗して監視空域を離脱されたということも含まれている。チエルシーの実力は俺も十分承知しているし、彼女の専用機が調整中だったために完全なパフォーマンスを発揮できなかったこともあるだろうが、それでも国家代表を退ける襲撃者の実力は本物だ。セシリアもそのところはきちんと理解していることだろう。その上で彼女は今の発言をしたのだ。

「理由は織村と同じ、か？」

「はい。祖国の屈辱はわたくしが晴らします。チエルシーの仇も含めて」

俺から視線を一切逸らすことなくそう語るセシリア。そんな表情をされてしまつては彼女を作戰から外すことは出来そうにない。もともとセシリアの基本能力は高いのだし、遠距離型として俺のサポートにも回つてもらおうと考えていたところだ。俺の考える配置とも矛盾せず彼女の意を汲むこともできる。脳内でそれぞれの配置と役割を振り分け、メリットとデメリットを慎重に吟味していく。

ふむ。粗方の配置は問題なさそうだ。後は専用機のパッケージの問題だが、今日の試験可動は本来ならキャノンボール・ファストのためパッケージを使用する予定だったので殆どの専用機が高機動型

またはそれに順するパッケージを用意していることだろう。

「皆、超音速下での戦闘訓練は十分に行ってきたているな？」

確認の意味を込めて七人にそう尋ねると、一夏と箒以外の五人は直ぐに頷いた。一夏と箒の二人がそんな訓練を経験したことがないのは承知の上なので、今の質問は五人に向けてのものだと考えてもらって構わない。五人が肯定したことを確認して、俺は脳内で纏め上げた作戦と配置を口頭で述べる。

「それでは今より作戦概要を説明する。現在中国北西を移動中のサイレント・ゼフィルスを日本海上空で俺、オルコット、デユノアで迎撃。太平洋上空を移動中の銀の福音を日本の領海に踏み込んだ時点で織村、織斑、更識で迎撃。双方が一撃必殺を要とし、短時間での決着を心掛けること。近海の海域封鎖を織斑先生、山田先生、篠ノ之で行う。また狙われている可能性のある皿式の護衛をボーデヴィツヒ、鳳で行うこと。いいか、この四ヶ所のどれか一つでも失敗すれば作戦の達成は不可能となることを常に意識しろ」

俺が言い終えると、教員を含めた全員が首肯した。

くそ、本当なら今でも一夏を連れて行くのは不安だ。しかし、簪にああ言われてしまっっては仕方ない。まさかこの説明中にこっさり更識の伝達方法を使用してまで一夏を連れていかせようとは。一夏のサポート、尻拭いは全てする時まで言われてしまっっては首を横に振るわけにもいかない。別に妹に甘い訳ではない、決してだ。

ともかく、こうして作戦に組み込む以上、相応の働きをしてもらわなくては困る。嫌な予感は今も収まってはくれないが、それでも敵は待ってくれない。作戦開始の時刻を告げて、各々準備に取り掛かるように促した。



「……？ 何だ？ 何で皆旅館に戻ってきているんだ？」

旅館の一室で一人過ごしていた鞘無は、外が何やら慌ただしいことに気がついた。

昨日の模擬戦によって専用機『サンライト・トウオーノ』が自己修復不可能なほどに破壊されてしまった彼は三日目の試験稼働を中止、期末テストに向けての勉強を行うように教員に言われていた。が、臨海学校に来てまで勉強など手につく筈もなく、こうして窓から青い海を恨めしげに見つめていたのである。

そんな時だ、どういうわけか生徒の殆どが隣接されているアリーナを出て旅館に戻って来くる。これは一体どういうことなのか。

そこまで考えて、鞘無はハツとした。ここが臨海学校、そしてそこで起こる原作のイベントを思い出したのだ。

『銀の福音』の襲撃事件……!」

畜生、と奥歯を噛み締める。どうしてこんな大切なイベントのことを忘れてしまったのか。どう考えても昨日の模擬戦のせいなのだろうが今は気にしないことにしておく。

本当ならこんな部屋を抜け出して今すぐ作戦会議をしているであろう部屋に飛び込みたい。そして他の専用機持ちたちと同様に戦い、仲間との絆を深めていきたい。だがしかし、現在鞘無の専用機は搭乗することが不可能なほどに損傷してしまっている。一度研究機関に見せて専用の修理を行わなければ元通りにならない程だ。

どうにかして作戦の輪の中に入れないものか、と鞘無は必死に頭を働かせる。実際は護衛の対象としてその輪の中に入ってはいるが、そんなことを鞘無が知るはずもなかった。

こんなチャンスはそうそう巡ってくるものではない。なんとかして作戦に参加できないものか。いつそのこと生身で突っ込んでいくなんてのもアリなんじゃ、ととんでもないことまで視野に入れ始めたそんな時だ。不意に鞘無は窓の外に陰りが生まれていることに気がついた。

曇っている訳ではない。現に視界いっぱい広がる海は降り注ぐ太陽光を反射しきらきらと輝いている。

では、一体何が。

疑問に思った鞘無は窓ガラスに手をかけて真横にスライド。覗き込むようにして窓から上を見上げようとして。

——— 何かが鞆無の顔面に直撃した。

「ぶへえッ!？」

奇天烈な声と共に室内を転がり壁に叩きつけられる。強い衝撃を受けたらしい鼻からはダラダラと鼻血が流れてしまっていた。

何だ、一体何が激突したんだ。脳内での処理速度を超えるような速さの一撃だった気がする。直撃する直前の鞆無の視覚が正常に作動していたならば、何か水色のふわふわしたものとウサギの耳みたいなのが見えた、気がした。

頭の中で混乱が止まらない鞆無のことなど無視するかのように、窓から何かが入ってきた。飛び込んできたというよりは舞い降りたと表現する方がしっくりくる程優雅な現れ方だった。重力を感じさせない登場を果たしたその人物を目の当たりにしたことで、鞆無の両眼が大きく見開かれる。それは彼もよく知る人物だった。

不思議の国のアリスが着ていそうなファンシーな水色のワンピースに特徴的なウサ耳。そんな物を身にまとう彼女は鼻を抑えたままの鞆無を見つけるとにんまりと口角を上げて笑う。

「——— やあやあ四人目君。仲間はずれは寂しいでしょう?」

思考の読めない天災が、場を混沌の渦に叩き込もうとしていた。



## #38 天才と天災

——篠ノ之東は天才である。

誰が言い出したのか、天災とも言われている。それは決して過大評価などではないということは本人のみならず世界中の人間が理解していた。並大抵の研究者や科学者では思いつきすらしなかつたISという存在をたつた一人で作り上げ、各国の中枢にお手製のパソコンたつた一つで潜り込む。何処かの国の重役は言う。今や篠ノ之東を敵に回すということは、全世界を敵に回すよりも重いと。その言葉を正銘するかのように、彼女を侮蔑した国の首都は瞬く間に崩壊した。恐ろしく速く、正確に都市の全てを麻痺させて、凍結させてしまった。当時十七歳の少女がである。

IS学園を卒業後、彼女は監視を嫌うという理由から日本を離れて世界各地を飛び回るようになった。当然一般人の作つた監視衛星になど追跡できない手法を用いて。

更識楯無や織斑千冬といった彼女にとって非常に大切な存在の元を離れてまで世界を飛び回つた彼女の理由を世間の人間は知らない。各地に新開発した爆弾を仕掛けたのだとか絶対に見つからない無人島を探すためだとかくだらな憶測は飛び交つたが、その真実は今も本人以外の知るところではない。

「さあ、そんなところで蹲つてないでさ。皆に置いてかれちゃうよ」  
普段の彼女を知っていれば仰天するであろうとびつきの笑顔を浮かべて、東は眼前で鼻を抑える少年へと手を差し伸べる。

昨日帰つたはずの彼女がどうしてこの場にいるのかという疑問は尤もであるが、今はそれよりも重大な問題があることに気がついているだろうか。東が、あの篠ノ之東が。実験動物としか認識していなかった四人目に、剩え己から手を差し出している。基本的に人間との接触を嫌う彼女からすれば信じられない行動である。更識楯無や織斑千冬、一夏に箒といった多数の例外は存在すれど東が心を開く人間というのは両の手で足りてしまう程少ない。他の有象無象のことな

ど見えていないも同然だ。

何を考えているのか思考が読めない。ただ一つ、碌でもないことを考えているのだけは確かだった。

しかし、そんな束を正に天恵と思う少年がここに一人。言うまでもないが、皿式鞘無である。

(……っ、キタ。これだ、これだよ！ 俺が待ってた主人公的ポジションはよお！)

昨日の織村との模擬戦で大破した専用機。それは全てこの為の布石だったのだ。既存の専用機を破壊することで天才科学者たる篠ノ之束のチューニングを受ける。言うなれば昨日の敗北はパワーアップフラグ。

すべてが繋がったと、鞘無は心の内で確信する。このタイミングで束が現れたこと、自身だけが部屋に一人隔離されているような状況にあること。それらは全て己がこの事件を解決に導くためだったのだと。であるならば、ここで選ぶ選択肢などたった一つしかなかった。

「……束さん。俺を、俺たちを連れてってくれ。アイツらのいるところに」

束さん、と呼ばれた瞬間束の表情がひどくヒクついたような気もしたが、そんな微細な変化になど鞘無が気づくはずもなく。まるで漫画の主人公にでもなったかのような心境で右拳を熱く握り締めた。

引き締った表情を刹那に切り替えて、鞘無の言葉を受けて束はニンマリと笑う。弧を描く口元には隠しきれない思惑が現れているような気がした。

「……あれ？ 君外で今なにが起きてるか知ってるわけ？」

ギクリ、と鞘無の心臓が早鐘を打った。原作の知識を有しているから知っているのだなど間違っても口にすることは出来ない。そうしたが最後、実験動物にされてしまうような気がしたからだ。必死にそれらしい理由を頭の中で考える。

「あ、ああ。外が騒がしいし、他の生徒たちが戻ってきてるだろ？ 何か緊急事態が起きてるんだと思ったんだ」

「ふうん」

しどろもどろの返答を示す鞘無を細めた目で見つめる束。しかしそれ以上の追求をすることなく、束は腰に手を当てて言う。

「さあ、善は急げ。ちゃちゃつとやつちゃおうか」

束の思惑など露知らず、戦線へ復帰できることを喜ぶ鞘無はその言葉に大きく頷いた。

当然のことながら、あの束がただの善意で他人が制作したISに手を加えるような真似などするはずがない。こうした手段に出たのには二つの理由がある。まず一つに単純に都合が良いと思ったからだ。世界にたった四人しか存在を確認されていない男性のIS操縦者。他の三人はともかく、この鞘無の存在は束にとって看過できるものはなかった。

更識楯無と織村一華の場合は超能力なんていう理解の外のものを駆使しているし、千冬の弟である一夏はそうなるように束自身が仕組んだ。どのような経緯であれ、この三人が女性に動かすことの出来ないISを動かせるのにはきちんとした理由があるのである。楯無に関してはIS自体を起動させられるわけではないが。

では、四人目はどうか。

IS学園のカメラ映像を見る限り、ISは確かに起動していた。それを操縦できているのだから、ISに乗れるというのはどうやらガセではないらしい。では、どうやって。ISというのはその認知度とは半比例するように内部の構造には謎が多い。例を挙げるなら核たるコア、それにセカンド・シフトなどだろうか。コアに関しては製作者たる束以外には一切干渉することが出来ない完全なブラックボックスである。操縦者と機体との親和性がある一定のラインを超えることで発動されるとされているセカンド・シフトも、その具体的な条件などは明らかになっていない。

そんなISを、四人目と呼ばれる少年が操縦できていることが束には信じられなかった。頭脳は決して悪くはない。学園での筆記試験を見てもいくつかの高得点はある。だが彼には決定的に足りないものがある。ISを起動させるに至る、そのトリガーだ。

(かーくんやチンピラみたいに超能力なんてものを使ってるなら分か

る。でも、コイツはどうしてISを起動できる……)

真つ先に思い浮かぶのは鞘無も超能力を有している可能性と、実は女性である可能性。だがどちらも現実味は低いと束は見ていた。

解けない問題程苛立ちを助長させるものではなく、こうして束は行動を起こすことにしたわけだ。

鞘無の機体を調整するというのはただの口実で、実際は内部に極小のカメラや計測機器などを仕込む魂胆だった。一応専用機に関しては問題なく操作できるレベルまで修復するつもりではあるが、明らかにグレードアップなどするつもりはない。

そんな束の内心を知らない鞘無はどこから湧き出ている闘志を滾らせている。道化にすら劣るかもしれないとしても、一つの駒として利用する分には問題ないだろう。束はそう結論を下して差し出された待機形態の専用機を受け取って窓から飛び降りた。窓の先ではどういう理屈でか浮遊している巨大な人参型のラボが待機しており、慣れた動きで束はその中に入っていく。

コンソールを起動させて、早速作業に取り掛かる。

(アメリカとイギリス。どっちの研究機関も、そう簡単に突破できるレベルのセキュリティじゃなかった)

手は動かしたまま、束は思案する。

イギリスとアメリカの二箇所の研究機関。勿論束にしてみれば突破することは造作もないが、一般人がああのレベルのセキュリティを突破するのはかなり困難だと思われる。何せ国お抱えの機関である。警備が甘い筈がない。その国の持てる技術を総動員させて組み込まれたセキュリティなのだ。それをああも簡単に突破して専用機を強奪した襲撃者。

これが二つ目の理由だ。

鞘無の機体に仕込むカメラを通して襲撃者の正体を暴く。場合によつては始末する必要が出てくるかもしれない。

「……気に入らない、気に入らないね。私の行く手を阻むようなヤツらは、皆いなくなっちゃえばいいんだ」



さて、作戦開始まで一時間を切ろうとしていた。

日本海上空でサイレント・ゼフィルスを迎え撃つにはどう考えても直ぐに移動を開始しなければ間に合わない。そのことはセシリア、シャルロットも重々承知しているようで、全員が集まったの状況説明を終えた途端それぞれが機体調整に入り、現在海岸に専用機を纏った状態で待機している。ふむ、二人共準備は万端のようだ。

セシリアはブルーティアーズに強襲用高機動型パッケージ『ストライクガンナー』を装備した状態である。これは六基あるブルー・ティアーズの射撃性能を封印してスラスターとしての性能のみに特化させたものだ。

横に立つシャルロットが装備しているのは防御パッケージ『ガーデナーテン』。これは本来防御特化型のパッケージだが、左右の肩と背中の部分に一基ずつ増設スラスターが装備されているので機動型パッケージとしても使用可能である。但しセシリアのストライク・ガンナーと比較すると幾分のパワーダウンは否めないため、俺のアシストも所々で必要になってくるだろうが。

さてさて。そんな俺はと言えば、相も変わらず真っ黒な執事服を身に付けている。突き刺すような太陽光が地味にきつい。いや能力を使えば快適に過ごせるんだろうがそこまでしてしまおうとあのモヤシのようになってしまう。そこまで俺は軟弱ではないのだ。やせ我慢と言われてしまえばそれまでだが。

二人が準備を整え終えたことを確認して最終確認。

「これより状況を開始する。目標は現在中国南東を移動中。このまま行けば約一時間程で日本の領海内に侵入するだろう。俺たちは富山県を北上した地点で目標を迎撃する」

俺の言葉に二人は頷く。

二人は元々こういういった不測の事態にも冷静に対処できる人物だ。直情型はこういう時に厄介事を持ち込むと決まっているが、セシリアとシャルロットに限ってそれはないだろう。不安点を挙げるとすれ

ばサイレント・ゼフィルスの迎撃を買って出たセシリアであるが、私情を挟まないだけの思考能力は十分残っている筈である。

何事も決めつけは良くないが、ふわふわとした仮説ばかりを並べ立てても仕方ない。こうしている間も敵は待ってくれない。

「よし、いくぞ」

「はい。では捕まってください更識先生」

そう言って手を差し伸べるセシリアの言っていることが、俺には理解出来なかった。そんな俺の態度を見てセシリアも不思議に思ったのか、きよとんとしている。

「……ん？」

「え？ いえ、あの。私の機体に捕まって移動するのではないのですか？ 先生の『黒執事』に飛行能力は無かったと思うんですけど」

「ああ！ ああ！ そういうことか」

セシリアの言いたいことをようやく理解してポン、と手を打つ。そういうば公式戦じゃあコレを使うことなんて無かったしセシリアが知らないのも無理はない。というか知っているのは千冬と束くらいだと思ふな。セシリアの横でシャルロットも要領を得ないと首を傾げている。

そんな二人を前に、俺はくるりと半回転。

途端、二人の表情が驚愕に染まった。

「俺の黒執事にはこういうのがあつてな。飛行もなんら問題ない。なんならストライク・ガンナー装備のそのブルー・ティアーズ置き去りにしてやろうか？」

「なんかもうムチャクチャですわ……」

背中から発生している小さな竜巻四本を前に、セシリアが呆然と呟いた。



「一華。お願い、イーリを」

「ああ。……分かつてる」

現状を知ったナタルの衝撃は織村にも計り知れないものだった。自身が祖国を離れた隙に敵に襲撃され、それどころか親友とその専用機を強奪されてしまったのだ。元の出身は違えど織村とて今や大国アメリカの一員である。そんな彼でさえ少なくない衝撃を受けているのだ。生まれも育ちもアメリカである彼女が内心でどれだけ傷ついているのかなど、考えたくもなかった。

本当ならナタルも自分が、と戦線に出ていきたいところだろう。国家代表に名を連ねる彼女は戦力として申し分ない。だが、今彼女の手に専用機はない。前回のモンド・グロツソを戦った後機体は回収され、新型として生まれ変わるべく本国で製造されていたのだ。その新型というのがイーリス・コーリングとの姉妹機、『ゴールド・デユミナス金の美德』と『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』だ。

もしかすると敵は、この状況を待っていたのかもしれない。ナタルが本国を離れ、専用機もない今のこの状況を。織村の腕にしがみつきながら、ナタルは彼の胸に顔を埋めた。

「彼女を、あ銀の福音を……助けてあげて……」

消え入りそうなナタルの声を聞いたのは、いつ以来のことだろう。

織村はほっそりとした彼女の肩を優しく抱きながらそんなことを思った。あれは確か、自身がIS学園を卒業し一足先にアメリカへと旅立つ日の朝だったと記憶している。いつも朝はナタルの方が先に起きて食事の準備をしているのに、その日だけは彼女はベッドから、俺から離れようとはしなかった。後から聞けば笑い話だが、俺と最低でも二年間は離れて暮らさなければならぬのを今更になって実感し落ち込んでいたらしい。

今のナタルはあの時とは比べ物にならないほど憔悴している。が、掛ける言葉はあの時となんら変わらないものだった。

「大丈夫だ、安心しろ」

自分でも多少ぶつきらぼうだなとは思う。だがそれ以上の言葉など見つからないし、それ以上の言葉など不要である。少なくとも織村とナタルの間にはそれだけの信頼関係が存在している。

織村の言葉を受けて、ナタルはゆつくりと顔を上げる。

「……うん、任せたっ」

全ての不安を吹き払うかのように、ナタルは笑ってみせた。

日本海へ飛び立っていく三人を見送るようになっている一夏がその視線を落としたのは、隣に座る簪がこちらを見ていることに気がついたからだ。

見渡す限りの青い海を前に浜辺に腰を下ろす二人は、命を懸けた作戦の前だというのに何処か浮いた印象を抱かせる。

一度は一夏に視線を向けていた簪はふい、と視線を元に戻し、一夏もそれに差して何かを言うこともなく大海を眺める。前方を見る二人の間に、沈黙だけが続く。

「……怖いのか？」

唐突に、そう口を開いたのは簪だった。

「怖いって、なにが？」

「自分自身が」

質問の意味が理解出来ないと返した一夏の言葉に、間髪入れずに簪の言葉が返ってくる。最初の質問など会話の切り出しでしかなかったのか、今の言葉に疑問は一切含まれていないようだった。簪はほぼ確信を持って先の質問をした、ということになる。

いつの間にか再び視線を向けられていたことに気がついて、自然と目が合う。ジツ、と向けられた視線にこれは言い逃れなんて出来ないなど一夏は早々に断念して、小さな息を共に言葉を吐き出した。

「……俺さ、思っちゃったんだよ」

「何を……？」

「更識先生から任務の話を聞いたとき、心の中でこのチカラを存分に振るえるって。それを後から自覚して、怖くなった」

このチカラは相手を叩き潰すためにあるわけじゃないのに。

このチカラは自身の大切な者とその小さな世界を守るために磨いてきたものなのに。

「俺がISを動かせるって分かってIS学園に入学して、無意識に悦



に浸ってたのかもれない。姫無さんや簪と同じ場所に立てるって、舞い上がったのかも」

一夏の独白を、簪はただ黙って聞いている。

「この前のトーナメントで優勝して、多分天狗になってたんだ。あれだって殆ど姫無さんのお陰でだったのに。俺のチカラは代表候補相手にも通用するって過信してた」

「……それに気がついただけで、今は十分」

「かもな。もしも気づかないまま戦線に出てたら、俺多分撃墜されたと思う」

自嘲気味に笑う一夏に、簪は先程とは違った視線を向ける。

——この少年のこういうところはほんと、お姉ちゃんにそっくりだ。

誰かに言われるでもなく、己の過ちを過ちとして確りと受け止めることが出来る。言葉で言うのは簡単でも、行動に移すとなるとなかなか難しいことだ。

大切な人を守るようになる為に強さを求めるのは、師匠である更識楯無と。ひたむきに努力を積み重ね、一歩ずつ高みへと昇っていくのは姉である姫無とそっくりだ。ここまで似ていては無意識に笑いそうになる。

「？　なんだよ簪。そんなニヤニヤして」

「………してない」

「いや完全にしてたら」

「してないもん」

頑なな態度を崩さない簪に、一夏は苦笑する。気がつけば嫌な緊張もどこかへと行ってしまっていた。それを自覚して簪のフォローには助けられてばかりだと内心で感謝した。

「絶対、この任務成功させるぞ」

「当然」

どちらかが言い出したわけでもなく、二人は拳を突き出してコツンとぶつけ合った。数秒して、小さく笑い合う。

「準備は、出来てるみたいだな」

数分後、旅館から織村が姿を現した。先程までの部屋着とは違い、一夏や簪と同様に特注のISスーツを身に纏っている。織村は一夏と簪の二人を交互に見て首肯、状況説明の為に小型のタブレットを取り出した。

「目標は現在も太平洋上空を時速2450キロで移動中。このまま行けば残り五十分程で視認できる距離になる。ここら一带の海域は織斑、山田、篠ノ之が封鎖してるから間違っても船舶が通ることはないと思うが一応注意しておけ。作戦内容はさつき更識が言ったように  
ワシアブローチ・ワンダー  
一撃必殺、俺と織斑が前衛、更識は後衛で織斑のフォロー。万が一俺たち二人を突破するようなことがあれば撃墜しろ」

織村が示す作戦内容は至ってシンプル。一夏は零落白夜で、織斑は彼の持つ最高の攻撃で。擦れ違いざまに一撃を叩き込むというものだ。銀の福音は軍用ということもありその機動力は現行機の中でもトップクラス。白式であつても一度引き離されては追い続けるのは難しい。暴走状態の銀の福音の目的が男性IS操縦者だというなら旋回して再び見えることになるだろうが、そう何度もチャンスがあるわけではないのは確実だ。

内心では無傷での回収を望む織村だったが、そう全てが上手くいくとは思っていない。最悪イーリスさえ無事に回収することができれば機体の方は修復不能に陥ろうが構わなかった。

作戦内容を把握して、三人は其々の専用機を展開する。織村と一夏の専用機はそのままだが、簪の専用機『打鉄式』にはシールドパッケージ『不動岩山』が装備されている。これは広範囲防壁を展開できるようにするためのものでもあり、間違つて本土に攻撃が向かないようにするために保険の意味も込められている。

「……時間だ。行くぞ」

時計を確認して織村が呟く。その言葉に続くようにして、三機は太平洋上空へと飛び立った。



篠ノ之束は天災である。

それは誰もが疑いようのない事実であり、また不変である。

天災とは彼女一人のことを呼称するのであり、彼女以外を天災と呼ぶことはない。

「確かに天 災なんてバケモンはアンタだけだろうよ、ドクター篠ノ之」

パソコンのモニタだけが室内を照らす中、その女性は啜っていたタバコを灰皿に押し付けた。

「でもさ、天 才っつーのはアンタ一人だけじゃないんだぜ」

## #39 黒と青、蒼と銀

「こうしちゃいられないわ！ 虚ちゃん、行くわよッ!!」

「落ち着いて下さいお嬢様」

座っていた椅子を蹴り飛ばして飛び出そうとする姫無の襟首を引つ掴んで、冷静に虚が一言。

先程政府の中枢を覗き見た（ハッキング）結果、どうもキナ臭いことに敬愛する兄と妹が巻き込まれているらしい。それを知ってから姫無の挙動は、その専属従者である虚の目から見ても何というか残念なものだった。普段であれば何事にも動じず、冷静に物事を判断できるというのに、肉親が絡んだ途端にこれである。

（あ、お父さんはそれには含まれないのかしらね）

更識家の前当主、更識 笄（こうがい）のことを思い浮かべて虚は苦笑する。尚もじたばたしている姫無の襟首はがっしりと掴んだままだ。部下を前にしたときはあんなにも頼りがいのある人だというのに、息子や娘を前にしたときは嘘のような親バカぶりを発揮させて周囲をドン引きさせたのは未だに鮮明に脳裏に焼きついている。あれはもう親バカなんて可愛いレベルのものではない。公害レベルだ、笄だけに。

ぶふうつ、と自ら思い浮かべたギャグがツボに入って思わず口元を抑える。その拍子に掴んでいた襟元から手が離れてしまった。

その隙を姫無が見逃す筈もなく、脱兎のごとく生徒会室を飛び出して行ってしまった。そんな目の前の様子に虚は頭を抱える。こうして姫無が後先考えずに行動した場合、ほぼ間違いなくそのしわ寄せは従者たる虚にやってくるのだ。それを嫌だとは言わないが、せめてその限度くらいは考えて欲しいものだ。

取り敢えず姫無が行方を完全に眩ませる前に更識の家へと連絡、I S学園のある地域から出られないように警備を敷くことにする。それだけであのブラコン兼シスコンを止められるとは思えないが、時間を稼ぐだけで十分だ。後は更識の家の実質的支配者、姫無の母である瑞穂がなんとかしてくるだろう。どれだけ暴走していても母の言うことには逆らえないのが更識の家全体の風潮である。主に物理的

な面で。

「……大丈夫かしら、楯無さんたち」

その「たち」には当然一夏や簪が含まれている。実際に戦ってみて一夏の戦闘能力は一定の水準には達していると虚は見えていたが、それが実際の命を懸けた戦闘の中で発揮できるかどうかは別問題だ。それにはある程度の経験と場数が必要で、そのどちらも一夏には決定的に不足している。

「まあ、簪ちゃんが上手くフォローするでしょうけど」

もしもこのときの発言を一夏が聞いていれば、千里眼でも持っていないのかと真剣に問いただしていたかもしれない。虚の発言は的を射ており、正にその通りに事が進んでいたからだ。しかしながら今の発言は単に簪のフォロースキルが高いことを知っているが故の発言であり、勿論千里眼なんてものを彼女は持っていない。

「問題になるとすれば、あの四人目君でしようね……」

……持っていない、筈である。



『——織斑先生。こちらの海域の封鎖は完了しました』

「了解した。こちらも既に封鎖は終えている。篠ノ之、お前はどうか」

『はい。周囲の船舶には場を離れてもらいました』

オープン・チャネルを通じて三人の会話が行われる。千冬、真耶は学園から持ち出してきた訓練機『打鉄』と『ラファール・リヴァイヴ』を、箒は姉お手製の第四世代機『紅椿』をそれぞれ身に纏い、割り当てられた海域の封鎖を担当している。今の通信によれば箒も直に担当している海域の封鎖を終えるだろう。そうすれば一先ずの準備は完了である。

後は織村と一夏、簪の三人が無事に任務を全うしてくれることを祈るばかりだ。

(祈る、か……)

同年代の楯無や織村が第一線で戦うというのに、自分はその場に立

てないことへの悔しさが千冬の胸中で渦巻く。その悔しさを自覚して、思わず自嘲する。

(自らの意思で剣を置いたというのに、どうもまだ未練が残っているらしいな)

決めたはずだ。あの時、あの場所です。

だというのに心の内で燻るこの感情。思わず頬を引つ叩きなる衝動に駆られる。女々しいものだと思っても思う。結局、自分は今でも剣を手放したことを後悔しているのだから。過去を悔やんでばかりもいられない。そんなことは分かっている。ケジメも付けた。なのに、今こうして楯無たちと共に戦えないことへのもどかしさは一向に収まる気配を見せない。どころか、それは積もっていく一方だった。

楯無と、織村と。共に空を翔けたい。並び立ちたい。元居たあの場所へと戻りたい。そんな感情が、ぐるぐると渦巻いている。

(……いかな。任務に私情を持ち込むなどルーキーでもなければしない事だ)

二度三度と首を横に振って雑念を振り払う。そんなことは今考えても仕方のないことだ。どれだけ願ったところで、今の状況が変わる訳でもない。己が行うべき任務を全うすることでしか、今楯無たちに強力することは出来ないのだから。

そんな風に考えていると、真耶からの通信。どうやらオープンではなくプライベートの方を使って通信を飛ばしてきているようだった。

『先輩、大丈夫ですか?』

まるで考えていることなどお見通しだと言わんばかりの言葉に、一瞬千冬の思考が止まる。次いで、小さく笑った。

「何だ真耶。まるで私の心情を読み取っているみたいじゃないか」

プライベート・チャネルを通してだからか呼び方も昔のものに戻して千冬は問いかける。返ってきたのは当たり前だと言わんばかりの即答だった。

『勿論ですよ。だって、私もきつと今の先輩と同じことを考えていましたから』

真耶にしてみれば、もしかすると千冬以上にもどかしさを感じてい

るかもしれない。彼女は今現在も日本を代表する国家代表の一角、更には言えば前回モンド・グロツソのヴァルキリーである。中、遠距離を主戦場とする真耶にしてみれば、今回の作戦に後方支援型が少ないことが不安要素だった。後方支援を専門にしているのはセシリアただ一人、オールレンジタイプのシャルロットや簪も後方支援は行えるだろうが、やはり専門の人間に比べればその精度は落ざるを得ない。

自分の専用機さえ手元があれば、と思ったに違いない。IS学園の教師も務めるがゆえに基本的に真耶の専用機は直属の研究所預かりになっており、国際大会などに参加しない限りは厳重に保管されているのだ。もしもこの事件が事前に把握できていれば、その研究所から専用機を運んでこれたかもしれない。そんな事を考えてしまうのだろう。結局は無い物ねだりで、現状こうして訓練機で海域の封鎖をする程度のことしかできないというのに。

その気持ちは、千冬にも十分理解できた。

「……全く、私は後輩に恵まれているな」

『え、何か言いましたか先輩？』

ポツリと呟かれた千冬の音声は、どうやら通信機越しでは上手く拾われなかったらしい。そのことを気にすることもなく、千冬は完全に思考を切り替えた。通信をプライベートから箒にも聞こえるようオープンに変更して、いつもどおり泰然自若の態度を示す。

「これより我々三機は状況を開始する。各機周囲の警戒は最大限に行い、不審な船舶や航空機は適宜追い返せ。間違っても封鎖領域内に侵入させるな。銀の福音を行動不能にし、回収するまでこの封鎖海域を解くことはしない。いいな」

『了解しました』

『了解です』

千冬の言葉に箒、真耶からの通信が入る。三機ともがそれぞれ持ち場に付き、周囲をハイパーセンサーなどを駆使して警戒。不審な船舶や航空機などは現れた場合、それらの殆どは黒執事や蒼天使の戦闘データを取ろうとする輩だろうから力づくで追い払ったとしても大

して問題にはならない。この封鎖海域に近づかないことは一帯の漁船にも通告してあるので、それでも尚近づいてくるような致し方ない。言葉での説得が不可能なら強硬手段も厭わない。

海上に突き出す岩場に立ち、銀の福音が向かってくるであろう方角の空を見上げる。一点の曇りもない澄み切った青空を見つめながら、千冬は切に願う。

——どうか無事で帰ってこい。



インフィニット・ストラトスという名のマルチフォームスーツがこの世に産み落とされて十年。開発者たる篠ノ之東の理想とは裏腹に、ISはその兵器としての性能を高く評価されている。既存の武器や兵器を上回る圧倒的な火力、機動力。それらの全てが世界中の人間の視線を集め、黒白事件を皮切りに各国はISの開発へと乗り出した。

IS学園において、ISの操縦はスポーツの一種であると多くの生徒、教員が考えている。スポーツの祭典であるオリンピッククのようにISの世界にはモンド・グロツソというものが存在し、殆どのIS操縦者たちはその舞台に立つために己の力を磨くのだ。

しかしながら、先にも言ったようにISの最も評価されている部分は兵器としての性能である。各国の上層部は体の言い言葉で取り繕ってはいるが、結局の所ISを欲する理由は軍事力の強化に他ならない。

そんな国の軍事力強化のために制作されたISがある。一般に流用されているようなタイプではなく、軍用に特化された機体。それがアメリカが独自開発した『銀の福音』だ。この銀の福音には姉妹機があり、そちらの機体は軍用とは真逆の競技用に特化された機体である。名を『金の美德』という。ナタルの専用機になる予定の機体だ。

軍用、と名の付くとおり、銀の福音には他の機体には見られないような特徴がある。見た目はともかくとして、多対一を想定しての広域殲滅型として制作されているので多方向同時射撃が可能になってい



ることがその一つだ。また機動力も他の機体より優れており、最高速度維持も何倍も長い。

「……データで見る限りバケモンだなこりゃ」

太平洋上空を能力で具現化させた翼で飛行しながら織村が呟く。視界に表示されているデータを見る限り、恐らくは第三世代の中でも最強に近いスペックを持っているだろうことは理解出来た。原作でもアレだけ一夏たちが苦戦した相手である。最初からそう上手くいくとは思っていない。だが負ける気も毛頭ない織村は、冷静にどう銀の福音を止めるかを考える。一言に一撃必殺とは言ってもその状況に持ち込むまではある程度の戦闘は不可避であり、どう考えても自身が先頭に立たなければならぬだろう。一夏に先陣を切らせると不安要素の方が大きいし、簪は後方支援に徹してもらおうつもりだからだ。

銀の福音を迎撃する予定ポイントに到着し、一夏と簪の二人に通信を入れる。

「衛星の追跡によれば今から二分二十秒後、この地点を銀の福音が通過する。マツハニ二以上で移動している敵に攻撃を当てるのはお前らには難しいだろう、まずは俺が向こうの動きを止める」

時速2000キロを優に上回る速度で移動を続ける銀の福音、何よりも第一にこの機体の動きを止めることが先決だと織村は考えている。白式の持つ雪片式型のような必殺の剣はあれど、それを確実に叩き止めなければ意味はない。

一夏には止めを、簪には一夏とその周囲のフォローを。織村自身は状況に応じてその都度行動を起こすつもりである。元々入念な打ち合わせなどしていないのだから所々でボロが出るのは仕方がない。要はそれをどう処理できるかが問題なのだ。

「織斑、お前の雪片は最後の一撃のために極力エネルギーの消費を抑えろ」

『分かりました』

「更識は銀の福音の広範囲攻撃に備えてシールドを展開。必要なら織斑の援護を行え」

『……了解です』

二人に指示を出して、空中で静止したまま遠方を見つめる。蒼天使に搭載された高感度ハイパーセンサーが、陽光を反射して白銀に輝く超高速で移動する物体を捉えた。わざわざ機体データを確認するまでもない。『銀の福音』だ。

「お出ましたな」

織村の眩きが聞こえていたのか、一夏と簪も身構える。二人の視覚情報にも前方のISを映し出しているだろう。全身を銀で覆われた機体。頭部から生えた一对の巨大な翼が目を引くソレが、ぐんぐんと彼我の差を縮めて接近してくる。

迫る銀の福音を迎え撃つように、織村の纏う蒼天使の背部から顕現する翼が大きく空気を叩く。静止した状態からいきなりトップスピードまで達した蒼天使は真つ直ぐに敵機に突っ込んでいく。

そして、二機が交錯する――。



日本海上空、富山県沿岸を北上した地点で俺を先頭に、セシリア、シャルロットは空中に静止したまま正面を見据えていた。イギリスで強奪された第三世代機、サイレント・ゼフィールス。操縦者不明のその機体が今俺たちの前に現れたからだ。向こうもこちらの存在に気がついていいのか、移動時に出していたスピードの四分の一程でこちらに接近してくる。その距離は凡そ一キロ。

やがて互いに視認できる距離にまで近づいて、サイレント・ゼフィールスは移動を停止し空中で静止した。

セシリアの乗る『ブルー・ティアーズ』と同じく青を基調としたカラーリング。左右に装備された蝶の羽にも似た巨大なスラスターユニットが特徴的なサイレント・ゼフィールスに乗る襲撃者が、その口を開く。

『おやおや、まさかそつちから出てきてくれるなんてね』

誰に向けての言葉なのか確認することなく、俺はその言葉に返す。

「IS学園の教員として当然のことだ」

『ふーん。どうしてもイイけど、後ろの二人も殺しちゃっていいのかな？』

ゾクリと、放たれた殺気に神経がざわつく。平然と放たれた「殺す」という言葉に、後ろに二人は少なからず動揺しているようだった。それも無理からぬことだろう。ドイツ軍に籍を置くラウラとは違い二人は国の代表候補生というだけで実際の命のやり取りなど行ったこととはない。この作戦に参加する時点である程度の危険は覚悟している筈だが、それでも命の危機を実感すると身体は強張ってしまうものだ。

それよりも、IS越しに聞こえる襲撃者の声はどうも女性のようにだ。幾分機械的ではあるが身体も男性に比べると線が細い。まさかの五人目、みたいな可能性はどうやらなさそうだ。

放たれる殺気に一歩下がってしまった二人と襲撃者の間に割って入るようにして、俺は正面から言葉を投げる。

「そんなことさせねえよ。俺の教え子だ、お前こそ撃墜されねえように精々気をつけろ」

『……言うじゃない。男の癖にさ』

俺が言い放った分かり易い程の挑発には流石に乗ってこなかったが、それでもどうやらその気分を害することには成功したらしい。

「……更識先生。少しよろしいでしょうか」

「セシリア？」

「二、三質問したいことがあるだけです」

先程の殺気によく慣れてきたのか、俺の横にまで出てきたセシリアはサイレント・ゼフィリスを睨み付けた。睨みつけられている襲撃者は別段攻撃を仕掛けるつもりはないらしく、興味深そうにセシリアを見つめている。

「……その機体、サイレント・ゼフィリスを強奪した際、一人の国家代表と戦った筈です」

『国家代表？ ……ああ、あの金髪の弱かったあれか』

イギリスの研究所を襲撃していたことを思い出したのか、女はつま

らなさそうに言う。横に立つセシリアの顔には明らかかな怒りが見て取れた。いかな、このままだと私情を混同してしまいそうだ。行き過ぎるようなら止める必要がある。などという俺の心配をよそに、セシリアは続けた。

「戦闘映像を見ました。……何もあそこまでする必要はなかったのではないですか」

俺の部屋に集まって作戦概要を説明した後、セシリアの希望でチェルシーと襲撃者の戦闘を記録していた研究所のカメラ映像を確認した。調整中の機体ということもあって十分な実力を発揮できていなかったとは言え、ほぼ一方的に押し続けた襲撃者に憤りを感じているのだろう。英国貴族としての誇りを持つセシリアには相手に敬意をまるで持たない女の態度が許せないのかもしれない。

しかしそんなセシリアの問いかけを、女は一蹴する。

『は？ 何言ってるんのお前』

下らないと、吐き捨てるように。

『アイツは私の前にISを展開した状態で現れた。敵意があるかなんてわざわざ聞くまでもないでしょ。私は向けられた銃口から身を守っただけ』

罪悪感などまるで感じさせない女はセシリアを見据えながらこう締めくくった。

『あれは正当防衛だ』

「あ、な、たつて人は……ッ!!」

「ストップだよ、セシリア」

激昂して今にも飛び出しそうなセシリアを止めたのは俺ではなく、後ろに控えていたシャルロットだった。シャルロットはセシリアの腕を掴み、前のめりになるセシリアに強い口調で言った。

「これ以上私情を挟むっていうんなら引き返すべきだ。あの戦闘映像を見たなら分かるでしょ、闇雲に特攻して勝てるような相手じゃない」

「……ッ、」

「セシリアの怒りも最もだけど、今は冷静にならなきゃ」

諭す様な口調に、ようやくセシリアも頭が冷えたのか噛み締めていた唇を緩めた。その様子を見て一安心する俺に、シャルロットが目配せ。

——貸し一つですよ。

——パフエー一つで勘弁してくれ。

こんな時でもマイペースなのは流石の胆力だろう。先程の殺気だつて実は演技だったんじゃないのかと疑いたくなる。

「……すみません。取り乱しました」

「気にしないで、誰だつてあんなこと言われたら頭にくるよ。でもあれに乗ったら向こうの思う壺」

そこまで言つて、シャルロットはサイレント・ゼフィルスのほうを向く。

「いるんだよねえ、口先八丁でしか吠えられない人つて」

『……なに?』

「経験上そういう人たちをたくさん見てきたから言えるんだけどさ、君友達いないでしょう?」

あ、実はこれシャルロットもキレてるやつだ。セシリアを見てたおかげで爆発はしなかったけど、内部で燻ってるやつだ。そんなことを思った俺を他所に、とてもイイ笑顔を張り付けたシャルロットは次々と毒を吐いていく。こうなつたシャルロットは中々止まらないのだ。まだ幾分か冷静なだけマシか。

「可哀想だね、誰も君の理解者がいないってことなんだから」

『言つてくれるね、所詮は黒執事と企業の後ろ盾が無ければ何も出来ないお飾りのくせに』

「そうだよ。私はお飾りの人形、でもね」

恐ろしい速さで量子変換したアサルトライフルを構えて、シャルロットは言う。

「——飾られるのには、もう飽きたんだ」

直後、目にも止まらぬ速さでシャルロットの持つアサルトライフルが火を噴いた。



## #40 失踪と計画

サイレント・ゼフィルスを操縦する襲撃者が俺たち三人、もつと言うならば俺を視認してその移動を止めたということはあるまでもその目的は俺であるらしい。二機の移動直線上にあったIS学園所有の設備などが狙いなのではなく、男性IS操縦者を狙っているということがこれではつきりした。先程女が言っていた「後ろの二人も」の発言にあったように初めから標的は俺や織村であって、代表候補生などを狙ったものではないらしい。

なら狙われている俺自身が先頭に立って行動を起こすべき、そう思っていたんだが。

俺よりも早くシャルロットの持つアサルトライフルが火を噴いた。ラピッド・スイッチを使ったのかいつ手に武装を持っていたか俺の目を以てしても捉えきれないほどの早業だ。

突然の砲火に俺だけでなく真横にいたセシリアも呆気にとられているようで何処か呆然としている。仕方ないか、自分を説得しにきたと思ったら内心頭にきていて何の前触れもなく攻撃を始めたんだから。普通の人間なら間違はなく目を丸くする。俺も一瞬なにか起きたか理解できていなかったし。

そんな中、件のシャルロットは非常にイイ笑顔のまま、着弾地点に居るだろう襲撃者に向かって尚も毒を吐く。

「ホント、人が気にしていることをさ。私だって分かってるよ、更識先生とデユノア社がなきやただの小娘でしかないってことくらい。でも理解していることでも他人にそうはつきりと言われるとムカつくっていうかぶつちやけもうこの世から消し去ってしまいたくなるっていうか……」

ぶつぶつ、ぶつぶつ。顔を俯かせて呪詛のように呟くシャルロットを見て思わず頭を抱えたくなる。これ完全にダークサイドに落ちてないか？ いやシャルロットのことだ、それすらも演技である可能性は高い。さつきもそうだったし、きっと相手の油断を誘うための作戦

か何かだろう。

「(ぶつぶつ……。ぶつぶつ……)」

あ、違うっぽい。

こりやいかん。

「オルコット。デユノアを連れて一旦下がれ」

「で、ですが更識先生」

「ま、直ぐに復活するだろうが今の状態じゃ足手まといにしかならん。オルコットは後衛で俺のサポート、流れ弾には気をつけろよ」

セシリアにそう伝えて二人を下がらせる。まあ元々俺が前衛で交戦、二人を後衛に置いてサポートという配置だったから問題はない。シャルロットのサポートが期待できないのは少々痛いけど、それも些事に過ぎない。そもそも俺の戦闘にはあまりサポートなんて必要ないしな。あるとすれば周囲の被害を少なくするための戦闘領域の誘導だが、海上であるここならどれだけ暴れても問題はないだろう。……津波とかの心配は、うん、大丈夫だと信じたい。

と、直後。

頭上からBTライフルの攻撃が降り注いだ。どうやらあれがBTエネルギーマルチライフル『スターブレイカー』らしい。成程、ブルーティアーズの上位互換とも言われているのも納得だ。武装もセシリアの使う『スターライトmkⅢ』よりも威力と狙撃可能距離が増している。

俺は降り注ぐレーザーの雨をその場から動くことなく反射して敵機の情報を集める。やはりデータで見ると実際に目の当たりにするのでは若干の誤差はある。因みに反射したレーザーはセシリアやシャルロットの方向に行かないようにきちんと調節してある。そこらにも抜かりはない。

『つたくさあ……。いきなり撃ってくるのか、どういう教育してるわけ?』

「その言葉そっくりそのまま返させてもらおうぞ」

粉塵が晴れて姿を現したサイレント・ゼフィルスに、目立った外傷は見られなかった。それほど攻撃力の高くないアサルトライフルだ



とは言え、あれだけの数を受けて無傷とは考えにくい。

となると回避したのか？ あの至近距離で？ 不可能ではないだろうがかなり難度は高い筈だ。あの背部から成る蝶のようなスラストーナユニットを使ったのだろうか。どちらにせよ、かなりの使い手であることは今ので理解した。遠慮も加減も必要なさそうである。

『ていうか今の攻撃で一步も動かないとか、相変わらずチートだねえソレ』

「束特製だからな」

『ハンツ、第一世代が言うじゃんツ!!』

言葉と同時に、腰の周りに浮遊させていたビット六基から一斉にレーザーが放たれる。偏向射撃を可能とするビットから放たれたレーザーは、縦横無尽にその角度を変えながら全方位から俺目掛けて襲いかかる。

が、そんな物如きでこの反射の膜を突破できる筈がない。先程と同じく反射を展開したまま攻撃を弾こうとして。

俺目掛けて向かってきていた六つの熱線が、突如その方向を変えて後方へと飛んでいく。

(なっ——！)

しまった。始めからこの攻撃は俺を狙ってはいなかった。後ろで待機するセシリアとシャルロットを狙ってたのか！

俺が舌打ちしたのを見て、女は狡猾に嗤う。

『アンタを簡単に落とせるなんて思っていないよ。でもまあ、たかだか代表候補生くらいなら楽勝だよねえっ！』

俺が今いる場所とセシリアたちがいる場所は多少の距離がある。今から能力を使ってレーザーを打払うのはタイミング的にギリギリだ。

どうするか、と瞬間的に思考を巡らせる俺に、正に攻撃を受けようとしているセシリアが視線を向けていた。その瞳は語らずとも俺に告げていた。

「——全く」

真横でダークサイドに落ちているシャルロットを完全に無視して、

セシリアは呼び出した二メートルのライフル『スターダスト・シユーター』を構えて。

「舐められたものです——ッ!!」

迫り来る六つのレーザーを、意図も容易く撃ち抜いて見せた。ピットを使うまでもなく、単純な射撃技能のみでの迎撃。それは単純であるが故に、彼女の射撃センスが突出していることを物語っていた。

「代表候補生如き？ 全く、貴方はわたしの祖国で代表クラスになることがどれだけ困難であるか理解していないようですね」

右手に構えるライフルで女を捉えたまま、セシリアは続けた。そんなセシリアを不快に思ったのか、女はバイザーでよく見えない表情を歪めてみせる。

『お前の国の代表は私が黴ったあの金髪でしよう？ 代表にもなれないお前が、私に勝てるでも思ってるの？』

「単純な戦闘能力だけを見れば私よりも貴方の方が上でしょう、それは認めます。でも、狙撃の腕なら私のほうが上です。そして、こちらには更識先生がいます」

今は使い物になりませんがシャルロットさんも、と横を見ながら呟く。

一対一で戦ったのなら確かにセシリアよりも女の方が上だろう。先程旅館で見た戦闘データでもそれは明らかだ。だがセシリアは言った。こちらには俺とシャルロットがいると。ブルー・ティアーズに比べれば幾分か近接戦闘にも対応しているサイレント・ゼフィールスであつても前衛特化型の俺と全距離に対応した万能型のシャルロット、そして後方支援型のセシリア。どの距離にあつてもこちらの優位は揺るがない。襲撃者の女が思っている以上に、この人数の利は大きいということだ。

「ほらシャルロットさん、確りしてください」

「私だって、私だって頑張ってるんだもん……」

「いい加減にしないと更識先生が呆れてしまいますよ？」

「それはダメだツツ!!」

今しがたまでの落ち込みっぷりが嘘のように背筋を伸ばすシャル

ロット。一体さつきまでのは何だったんだと言いたくなる変わりぶりだった。だけれどもあ復活したのならそれはそれで助かる。後方支援にシャルロットも加わってくれば俺としても心置きなく戦えるというものだ。下手したら海水巻き上げるとかいう事態になるかもしれないから、津波の対処とかしてもらえるとありがたいんだが、流石にそれは俺が自重するしかなさそうさ。

さて、ということでもそろそろ始めさせてもらおう。

俺としてもこれ以上女と話す気はないし、それは向こうも同じだろう。浮遊するビットが今にも攻撃してきそうである。

首元のタイを正し、嵌めた白手袋をもう一度軽く引つ張る。

「なに、私を殺る気？」

「まさか、人殺しなんてまっぴらだよ」

やや上空に静止している襲撃者を見据えながら、俺は言葉と同時に飛び上がる。

「――俺はあくまで教師だからな」



「ねえラウラ」

「なんだ鈴」

ツインテールを怒気でゆらゆらと蠢かしながら、少女鳳鈴音は隣のラウラ。ボーデヴィツヒに声を掛けた。その声色は怒りからか動揺からか若干掠れており、ラウラも多少の硬さを滲ませる返答を返すが精一杯だった。二人の視線は、とある部屋の中に注がれている。

皿式鞘無。それが本来この部屋の中にいなければならぬ男の子生徒の名前である。

本来、と言うように部屋の内部はもぬけの殻、中心には形の崩れた敷布団だけが存在感を放っている。

簡単に言えば、皿式鞘無の姿がどこにも見当たらないのだった。

我慢に我慢を重ねていた鈴の怒りが、ついに決壊した。

「っだーっ!! あ馬鹿この緊急事態に一体どこをほつつき歩いて

んのよーッ!!」

うがーッ!! とサイドで結ばれたツインテールの形が崩れるのも気にせず、鈴は豪快に頭を掻き毟る。

タッグマッチトーナメントの時からあの少年に振り回されっぱなしの鈴にすれば、そろそろ本気でタコ殴りにしてもいいのではないかと考え始めている程の怒りである。そんな真横で、ラウラは思案げに顎に指を添えている。

「? どうしたのよラウラ」

ふー、ふーと荒い息を吐く鈴を他所に、ラウラは部屋全体を見渡す。

「鈴。今この旅館内から生徒は外に出ることは出来ない筈だ」

「そうね、一歩でも外に出たら先生たちが拘束しに来るって話だし」

私たちは例外だけど、と鈴は付け加えた。

その言葉に、だからこそ不自然だとラウラは言う。

「この部屋は二階だ。奴の専用機が無事なら窓から脱出することも可能だろうが、その専用機は昨日の模擬戦で大破。生身で飛び降りようにも窓の外は岩礁だ」

そう言われて、ようやく鈴もその違和感に気がついた。考えてみると不自然だ。朝からこの部屋に居たはずの鞘無の姿がない。試験稼働が始まってすぐに殆どの生徒は旅館に帰され、その後は一歩も外に出ることは許されていない。試験稼働の開始時に鞘無はアリーナに居なかったのだから、この部屋に絶対居なければならぬ筈なのだ。部屋からも出られないのだ、鞘無がどうやってこの部屋を出て行ったのか、その方法が分からない。

「先生の目を盗んで出て行ったとか?」

「いや、学園の教員は三箇所全ての入口と階段に配置されている。その全ての目をかいくぐるなんてのは常人には不可能だ」

どうにも腑に落ちないというラウラを他所に、鈴はなんだか言葉に出来ないもやもやを感じていた。

あの四人目が姿を消した。通常であれば攫われたのではと思うところだが、どうも鈴には彼が自分から出て行ったようにしか思えない。今回の作戦の概要は聞いていないはずなので詳細までは知らない。

いだろうが、ほかの生徒たちが引き返してきたこと、その中に専用機持ちたちが居なかったことを認めて何かあると思っただのかもしれない。だとしても専用機が使用不能な状態で飛び出すとは考え難いが。「……仮に、」

ポツリと鈴が零す。

「仮にあいつの専用機が使用可能な状態だったら……」

鞆無の専用機『サンライト・トウオーノ』が昨日の模擬戦で大破することなく、自己修復程度で済むものだったなら。それを考えて、鈴とラウラは露骨にその表情を歪めた。というか、青くなった。

「絶対飛び出すだろうな……」

「俺が行かなきゃならねえ」とか言っただけさよね」

「この程度の破損、丁度いいハンデだ」とかではないか？」

「ああ、それありそう」

だはあ、と鈴は大きく溜息を吐き出した。鞆無の失踪自体は鈴たちに責任はない。しかし、彼の不在が招く不測の事態というものもある。先ずは旅館に残っている教員、次いで千冬や真耶に相談しなくてはならないだろう。内容によっては楯無にまで話を持っていかなくてはならなくなる。

この任務の重要性を理解している二人にすれば、いい迷惑以外の何物でもなかった。

鞆無の護衛という目的が果たせなくなってしまう以上、私たちも海域の封鎖か迎撃に向かうべきだろうかと鈴は考える。元より小難しく考えるという行為を嫌う彼女は考えるより前に行動せよという考えに非常に忠実である。しかし、その考えはやんわりと横を歩くラウラに否定された。

「おと……更識先生がこのメンバーをそれぞれ振り分けたには必ず根拠があるだろう。そこに今更私たちが割って入るのはあまり得策ではないな」

「じゃあどうするってのよ」

まさかこのまま手持ち無沙汰に旅館で待機してろなどと言うのではないだろうな、と鈴は訝しげにラウラを見つめる。

そんな鈴の内心が透けて見えるのか、ラウラは苦笑して口を開いた。

「そんな顔をするな。専用機を持つ私たちにしか出来ないこともある」

「? なによそれ」

一階へと降りていく階段に足を掛けて尋ねる鈴に、その先を歩くラウラは振り返って。

「まずは先生たちに相談だ。そうだな、十中八九必要になるだろう役目さ」



「お疲れ様、南」

「はあ、やっぱり国営の専門機関ってだけはあるな。私がハックするのに十二分もかかっちゃうとは」

高級ホテルの一室、そのベッドに倒れこむ女性にココ・ヘクマティアルは劳いの言葉を掛けた。部屋に備え付けのデスクの上にはノートパソコンが二つと大量の吸殻が放り込まれた灰皿。それだけ、たったこれだけを使用して、女はイギリスとアメリカの専門機関を落とすて見せたのだ。

懐から新しい煙草を取り出して火を着ける。一息に肺へと送り込み、鼻からそれを吹き出した。

「南、ココ禁煙よ」

「固いこと言うなよココ。多少のお痛は多目に見てくれ」

寝たまま煙草を加える南と呼ばれる女性に視線を向けたまま、ココはデスクとセットになっているイスに腰を下ろした。

「どう? IS開発の先頭を走るイギリスとアメリカの警備システムは」

「そりゃそこいらのハッカーがほいほい入り込めるもんじゃないよ。普通は逆探知されてお陀仏だろうね。ま、私はそんなへましないけど」

はっはっは、と笑う南は、まるで捕まる心配などしていなかった。両国のシステム中枢に潜り込みダウンさせる。その結果強奪された二機のISのことなど心底どうでもよさそうに彼女は言う。

「ねーココ。私たちって天才じゃん？」

「アナタはそうね。私は何の天才でもないけど」

「武器商人」

そう即答した南に、ココはやや不満げに頬を膨らませる。

「そうむくれるなよ。何の分野でもいいんだけどさ、私たちがみたいな天才って実は結構いるんだよ」

いきなり何の話を、と思わなくもないココだったが、天才という言葉を受けて何人かの人物を心の中で思い浮かべる。

例えば戦闘能力。これに於いて天才と言えるのはやはり更識楯無だろう。以前行動を共にしたことがあるが、あのチカラと洞察力は圧巻の一言である。

例えば人心掌握。これについて思い浮かぶのが現在手を組んでいる女、京ヶ原劔だ。彼女はその見た目に反しとてつもなく冷徹だ。それでいて隙がない。他人を掌握し望むままに動かすという点で、彼女を超える者はおそらくいない。

「でもさ、天災ってのはやっぱりあの篠ノ之束だけだ」

篠ノ之束。ISをたった一人で作り上げた正真正銘の化物。彼女が生み出したそれはその絶対数が決まっていながら世界中の兵器を上回る火力を評価され、今や軍勢力として欠かせないものとなった。

……それが、ココ・ヘクマティアルには許せない。

「私は兵器としてじゃなくて単なる飛行道具としてだけなら好きだよ。だって蝶捕まえられるし」

「南はそれしか言わないわよね」

「だって虫取りあみだけじゃ取れる蝶なんて限られてるだろ？ 全種コンプが私のもう一つの夢さ」

ニツと笑いながら煙草を灰皿に押し付ける。

「この『計画』は私たちが知らない気密性が重要なんだ。あまり滅多なことを言うものじゃないよ南」

「分かっているって。これは私の頭脳とココの商才をもってして初めて完成するんだ」

ココ・ヘクマティアルが持つ武器商人としての才能と、天田南という日本人科学者の持つ頭脳をもってようやく計画は完成され、実行に移すことができる。

そのために利用できるものはなんでも利用してきたし、必要であれば人間を殺すことも厭わなかった。

全ては計画成就のために。

「そのためにも不要なものは消し去らなくてはならない。……特にI Sなんてものはね」



## #41 陰謀と黄金

眼の前で繰り広げられる攻防を目の当たりにして、セシリア・オルコットは己の未熟さを思い知る。

縦横無尽に放たれるレーザーを一つ残らず迎撃したかと思えば、次の瞬間には既に楯無は敵の背後へと回り込んでいる。如何に偏向射撃が可能なビットが六基あろうが、弾速よりも速く移動する人間が相手ではどれだけ追い縋っても被弾させるには至らない。能力などというものでなく、純粹に『黒執事』の性能と楯無の身体能力でそれが成り立っているのだと思っているセシリアにしてみれば、楯無の人外じみたそのスペックに戦慄せざるを得なかった。

イギリス本国で更識楯無という人間の凄まじさは耳にタコが出来るほどに聞かされていた。国家代表でありセシリアの師匠と言つて過言でないリレイ・スターライは楯無のことを化物や怪物と称したが、その実力の片鱗を正に今彼女は目<sup>イグニッション・ブースト</sup>にしている。瞬時加速<sup>イグニッション・ブースト</sup>を用いていないにも関わらず常時展開される高速戦闘。近接格闘に精通していないセシリアであつても一目見ればそれが恐ろしいレベルのものだと理解出来た。

クラス代表対抗戦の時にアリーナに降り立った楯無の戦闘を見て、分かつたつもりではいた。

『原点にして頂点』などと言われる最初の男性IS操縦者の実力を、分かつたようになつたつもりになつていた。だが、違つたのだ。彼の本当の実力は、その底は。あの程度ではなかつたのだ。

今だつて本気で戦っているのかと聞かれればセシリアにはその判断はつかない。

底の見えない楯無の実力に、セシリアは背筋が震えるのを自覚した。彼女は決して弱くない。イギリスというIS界において屈指の強豪国で代表候補の座に就き、限りある専用機を与えられている事実がそれを証明している。

しかし、現時点で代表候補生止まりのセシリアと一時期とは言え国

家代表を務めていた楯無とでは、実力の開きが余りにも大きすぎた。高感度ハイパーセンサーを搭載しているわけでもないのにまるで後ろに目がついている様な回避行動。優雅ささえ漂わせる楯無の動きに、知らずセシリアの視線は釘付けになっていた。

そんなセシリアの隣で、シャルロット・デュノアは嘆息する。

初めて楯無と出会ったあの日から今まで自分なりの努力を続けてきた。成長を実感することも出来ていた。その努力はフランスの代表候補生という形で実を結び、結果として楯無と同じ舞台にまでこうして辿り着くことが出来た。

今日こうして同じ任務を行うとなったとき、不謹慎ながらも喜んだ。待ち望んでいたのだ、こうして彼と同じ舞台で戦えることを。

だがこうして間近で楯無の戦闘を見て、考えを改めざるを得なかった。少しは見えてきたかと思っていた彼の背中とは、実はもつともっと遠くにあつて、今はその影がようやく認識できるようになった程度のことだったのだ。

セシリアとは違い、彼女は楯無の裏の素性がある程度知っている。流石に超能力で戦っているとまでは知らないが、ISが無くてはかかなりの戦闘力を有しているというのは以前より分かっていた。それを加味して戦況を見る。明らかに楯無が優勢である。相手もかなりの実力者であるということは理解できるが、それでも楯無には及ばない。

遠いなあ、と苦笑する。

目標とする異性の背中に手が届くまで、あとどれだけ鍛錬を積みばいいのか。今のシャルロットには、それすら想像出来なかった。

「つたく、ほんとインチキ臭い性能してるねソレー！」

「よく言われるよ」

無数のレーザーを必要に応じて躲し、反射する楯無を見て女は舌打ちする。データとして黒執事の性能を知っていても、いざ実際に目の当たりにするとやはりその異質さは際立っていた。

執事服がIS？　なんだそれ巫山戯てるのかと言いたくなる。しかし現にそれがこうして目の前にある以上は幻でもなんでもなく現

実であり、認めざるを得なかった。

彼女がこうして楯無と戦えているのは、自身の操縦技術と機体のスベックによるものだ。万全ではなかったとは言えチエルシーを倒した実力に加え、サイレント・ゼフィルスの背部に取り付けられている蝶の羽を模した巨大なスラスターユニット。自由に方向を変えて大出力の瞬時加速を行うことができるそれのお陰で、機動力では圧倒的に上回る相手にもこうして戦闘の体裁を保っていられる。一撃強襲離脱型と言われるだけのことはあり、通常自らの間合いに踏み込まれば終わりの遠距離型が楯無を相手にして撃墜されていないのはこのスラスターがあればこそだった。

が、それでも乱発すればエネルギーはそれだけ消費される。見れば女の視界端に表示されているエネルギー残量は半分程に減少しており、ここまでの移動に費やしたエネルギーの四倍以上を数分の戦闘で消費していた。

(つめ 剣も面倒な仕事回してくれたもんだ)

BTエネルギーマルチライフル、『スターブレイカー』を放ちながら女は思う。黒髪の女、京ヶ原劔の話に一枚噛んでこの作戦に参加したが、今更になってハズレくじを引かされたような気がして溜息を吐き出す。よくよく考えてみれば世界最強と言われるあの黒執事を相手にするというのはどうしてあのかのときの自分は快諾したのだろうかと思議に思う。考えるまでもなく勝目がないことなど明らかなのに。(なんかアイツと話していると口車に乗せられちゃうんだよなあ……)

ま、それも楽しいんだけど。女はそう思っ上唇を舐める。この女にとって世の中の物事は二種類に分別される。それが面白い、面白くないか。たったこれだけだ。世の中にISなんてものが生み出されたのは面白い。でもそれを機に調子に乗り出した女どもは面白くない。黒執事なんていう化物の存在は面白い。でも正面切って相手取るのは面白くない。

全ての物事を二種類に分けてしまえるという点では、きっと京ヶ原劔も同じなのだろう。

但し彼女の場合は己の利益となるか、そうでないか。自身よりも余

程悪党だなと女は笑う。だが、だからこそ彼女に協力する気になるのだ。

そう考えていたからだろう。

女は、楯無の姿が消えているという事実に気づくのが一瞬遅れた。そしてその遅れは、高次元の戦闘において致命的な失態へと繋がる。

ハイパーセンサーが捉えた楯無の居場所を視界の端で捉えるも、既に楯無は次の行動に移っていた。

時間にして僅か数瞬、瞬きすら許されない時間の中で、楯無は女をその攻撃範囲に捉える。彼我の差一メートル弱。この距離ではライフルでの狙撃はおろか、単純な飛び道具も使用することは出来ない。

「こ、のッ……い！」

「バイザーに隠したその顔、拜ませてもらおうか」

女が瞬時加速を使用してその場から離脱するよりも早く、楯無の拳がサイレント・ゼフィルスに撃ち込まれた。



一夏と簪が甲高い衝突音を耳にしたのは、先陣を切って飛び出した織村と銀の福音が二手、三手と攻防を繰り広げてからだだった。元々軍用として開発された銀の福音は他のISとは異なりどこまでも戦闘に特化されている。最高速度2450キロを誇るそのスピードも、多対一を想定して搭載された多方向同時射撃も。全てはISという兵器としての性能を限界まで引き出そうとした結果生まれたものだ。現行のISの中でもスペックだけを見れば他国の専用機を優に上回る。一夏の乗る白式はともかくとして、簪が操る打鉄式式のハイパーセンサーでは、銀の福音の初撃を正確に把握できているのか不安なところである。

が、しかし。

織村は音速を上回る銀の福音の初手を完璧に相殺してみせた。マツハ2を超える速度の相手と真っ向からぶつかり合い、そして悠然

と次手を打つ。ほんの僅かな攻防に過ぎなかったが、一夏と簪に織村一華という人間の異常性を知らしめるには十分だった。

「つは、俺の一撃を受けてほぼ無傷か。えらく分厚いじゃねえかイリ」

織村の言葉に、返答はない。

相対する銀色の機体内部にいるであろう友人への言葉は、虚しく溶けて消えていくだけだった。

チツ、と織村は忌々しげに舌を打つ。作戦開始前からある程度予想していたことではあったが、やはりイーリ本人の意識は無いらしい。意識があり機体が暴走してしまっている場合であればまだ幾らかのやりようはあったが、本人の意識が機体起動に関与していないということは外部からの干渉で暴走している可能性が高いということだ。その場合、一時的に機体を停止させても再び暴走してしまう可能性が低くない。

となると取れる行動は二つ。

機体を起動不可能なほどに破壊するか、イーリの意識を覚醒させるか。イーリの意識が戻った場合、操縦者権限で起動を解除出来るかもしれない。

(つっても、この状態じゃイーリの意識が戻るのを待つなんて出来ないだろうな)

ならば必然、機体のある程度破壊するしかない。イーリの身体を傷つけないように注意を払いつつ、展開維持が不可能となるまで損傷させる。

本来であれば一夏の零落白夜、自身の能力で一撃で仕留める予定だった。そのつもりで飛び出した織村だったが、銀の福音は衝突の瞬間僅かに機体を逸らし致命傷を避けていた。この時点で短期決着の作戦は破棄。前衛に織村と一夏、後衛に簪を置いてエネルギーを削る作戦へとシフトした。

一夏の零落白夜を用いれば上手くいけばイーリを傷つけることなく事を終息させられるかもしれない。しかしそれには確実に銀の福音に一撃を食らわせるだけのタイミングと技量が必要だ。タイミン

グはともかく、技量に関して一夏はまだまだ自身に届かない。そう結論づけて、織村は声を張る。経験云々はともかく、あの楯無の弟子だということならある程度の戦闘は可能だろうと踏んでのことだ。

「織斑、出ろッ！」

「はいッ！」

言われ、一夏も最前線へと躍り出た。

零落白夜はあくまでも止めを刺すための手段であって乱発など以外の外。それは一夏も理解しているだろう。雪片式型を手に持っていないことからそれは分かる。一夏の使う更識流は例え軍用ISであっても通用する筈である。織村の記憶が正しければ、確か楯無は『鎧通し』などと呼ばれる貫通攻撃を使えた筈だ。弟子である一夏も使えるのであれば戦闘を優位に進められるかもしれない。

だがそんな織村の考えが纏まるよりも、一夏が距離を詰めて攻撃を繰り出すよりも早く。銀の福音は動いた。

『敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘》稼働開始』

酷く無機質な、機械じみた音声だった。

直感的に危険を悟った織村が静止の声を掛けようとするも、一夏は既に銀の福音の射程距離に踏み込んでいる。

マズイ。脳裏にそんな言葉が過ぎる。その機体にブレード一本しか持たない一夏に、当然身を守る手立てはない。回避行動に失敗すれば直撃は免れない。織村の額にうっすらと汗が滲む。一夏もその危険性に気づいたのだろう。ほんの一瞬、身体が硬直した。

そして、そんな隙を銀の福音は見逃さない。

頭部から生えた一對の巨大な翼。スラスターとしての役割も持つその装甲の一部が左右に大きく広がっていく。

至近距離でその姿を見ている一夏は即座にその正体に気が付いた。

——砲口だ。

一夏、次いで織村に簪がその翼の正体に気が付くと同時、無数の砲口が一斉に開き最も近くにいた一夏に照準を合わせる。次の瞬間、無数の光の弾丸が一夏目掛けて掃射された。

（ま、ずッ——）

瞬時加速を発動させる間もなければ、碌な回避行動も取れない。

回避不可能だと悟った一夏はとっさに腕を身体の前で組んでせめてダメージ量を減らそうと試みる。

一秒、二秒。ダメージを覚悟しながらも至近距離からの攻撃に目を閉じてしまっていた一夏は、いつまで経っても訪れない衝撃に疑問を覚えた。次いで、ゆっくりと瞼を持ち上げる。自らの操縦する白式には、あの無数の弾丸は一発も被弾していなかった。

己の身体が無事なことを怪訝に思う一夏に、前方から声が掛かる。

「……一夏。戦闘中は、例えどんな事があっても、絶対に視界を塞いじゃだめ」

一夏にとつて聞き慣れた、心地のいい声が響く。

見れば銀の福音と一夏の間割って入った簪が装備していたパツケージ『不動岩山』を用いて広範囲に防壁を形成させていた。弾丸が発射されてからでは間に合わない。銀の福音が翼を広げ始め、それが砲口であると気付いた瞬間には飛び出していたのだろう。防御用の武装を持たない一夏が危険だと瞬時に判断し、防御という一点に置いては織村よりも自身が適任であるとすかさず結論を出して。

その思考力、行動力に内心で織村は関心していた。もしも場合は能力を使用して一夏をカバーするつもりだったが、その必要はどうか無いらしい。

(つたく、アイツの妹はつくづく末恐ろしいなオイ)

まだ高校一年生だというのにこの落ち着き、新任の国家代表程度なら撃ち落としてしまいそうである。

あの家系は化物しかないのかと思わず背筋が凍った。楯無は言わずもがな、その妹である姫無や簪も一線級の実力者であることに疑いの余地はない。

と、そこで織村は逸れかけた思考を戻す。簪の防壁が上手く機能すればこちらに大きなダメージは無いだろう。不安要素としてはあの砲口の連射速度と爆発性を持つということだろうか。防壁に当たった瞬間引き起こされた爆発は直撃を食らえば機体を抉られるほどの威力のようで、直撃はおろか掠っただけでも相応の深手を覚悟しなけ

ればならないだろう。

「織斑ッ！ お前は左方向から回り込め！ 俺は右から奴を叩くッ！」

「了解！」

銀の福音を囲うように左右から攻撃を仕掛ける。一夏は更識流を、織村は能力を使用して引き起こした烈風を。

だがそれらは信じられない動きを見せる銀の福音に避けられてしまふ。特殊な外見をしているウイングスラスターの実用性は高く、生半可は攻撃は通用しない。

焦燥が、一夏の顔色から伝わってくる。

その表情を横目に捉える織村も、次手をどう打つか決めかねていた。能力を全開にして戦闘を行えば、恐らく銀の福音を行動不能にすること事態は可能だ。だがそうした場合、内部にいるイーリの安全は保証できない。イーリの安全を第一に考えるのなら、ここは一夏の零落白夜で落とすのが望ましい。

しかしながら今の一夏の技量では確実に銀の福音に一撃を入れられる保証はない。何か大きな隙を作ってやらない限りは難しいだろう。零落白夜は発動させるだけでも相当のエネルギーを食う。展開維持にかかるエネルギーと戦闘時間を考慮した場合、一度外せば次はないと考えて良い。

何か決定的な隙、タイミングを作ってやることが大前提。そう考えていた時だ。

織村だけではない。一夏、簪の両名のISSに搭載されているハイパーセンサーが、後方から高速で接近してくる物体を捉えた。

(なんだこりゃ。ISSか……?)

その移動速度はマッハ2を超えており、軍用ISSとして機動力に特化された銀の福音、高機動パッケージをインストールしたブルー・ティアーズに迫る速度だ。これほどの速度を出せる現行機を織村は知らない。可能性のある楯無は日本海側で迎撃、千冬は周囲の海域封鎖に当たっている。だとしたら、一体誰が。

そう考えている間にも謎の物体はみるみる織村たちに接近し、やが



てその影を視界に収めた。

それはISだった。しかし、その形に一切の見覚えは無い。

「……金？」

そう呟いたのは一夏だった。どこぞの黄金騎士でも想像したのか  
簪がきらきらと目を輝かせ始めていたが、その正体を知って一転がっ  
くりと肩を落とす。

言うなれば、それは金色の流星のようだった。

フォルムは織村の乗る蒼天使のようにシャープだが、両肩に搭載さ  
れた砲口がどこか厳つさを感じさせる。黄金騎士というよりは、某  
サーヴァントのA U Oのような出で立ちだった。金色の流星は戦闘  
空域にまで達するとその速度を緩め、織村や一夏たちの前で停止、  
ゆっくりとその顔を上げた。

自信に満ち溢れた表情を浮かべる少年は、辺りをぐるりと見渡して  
腕を組む。

「待たせたな。東改造三世代後期型『黄金伯爵』、ここに見参ッ!!」

## #42 共謀と油断

——黄金伯爵。

それが四人目の男性IS操縦者、皿式鞆無に与えられた新しい専用機の名前だ。Y・Cの開発した第三代型『サンライト・トウオーノ』をベースに稀代の天才、篠ノ之束が手ずから改良を施した機体。束が一から全てを制作した白式や紅椿にはややスペック的に劣るものの、現行の第三代型を大きく突き放す性能を誇るそれは言うなれば三、五世代型とでも言うべきだろうか。

改造前の美しい山吹色は今や黄金色に変貌し、無骨だったシルエットは多少の名残を見せるものの細く滑らかなシャープなものへと変化している。以前学園を襲撃した全身装甲の無人機とは対照的に、装甲部分の面積は最低限に抑え、また薄かった。黄金の甲冑のように見えるが、頭部には一切の装甲が無い。所々にあしらわれた青い紋様が鞆無とは思えない高貴さを醸し出している。一体何に使用するのか背部にはスラスタではなく深紅のマントが付けられている始末だ。両肩に搭載された砲口だけが唯一目に見える武装だが、あの束がそれだけで済ませる筈がない。

目には見えない部分できっと色々とブツ飛んだ仕掛けを施しているに違いない。そんなことを織村と一夏は考えていた。織村は幼稚園から学園卒業まで、一夏は幼馴染の姉として嫌というほど彼女の性格を熟知している。見てくれのままなどという単純な機体を彼女が制作するはずがない。証拠はない、ただ確信はあった。

そんな二人の懸念を知ってか知らずか、黄金伯爵を操作する鞆無は自信たっぷりという風に織村たち三人を、次いで銀の福音を見据えて一言。

「……どうやら、最悪の事態にだけはなっていないみたいだな」

良かったぜ、間に合ってくれてよ。と鞆無は機体を愛おしそうに撫でる。その仕草に簪の背筋に得体の知れない寒気が走った。織村や一夏も何を言ってるんだコイツはと怪訝な瞳を鞆無へと向けている。

二人の視線をどういう意味で受け取ったのか。鞘無は一度だけ頷いて。

「分かっている。ここから先は俺とこの『黄金伯爵』に任せときな」

組んでいた腕を解き、尊大な仕草で左右に広げる。

「——ここから先は、俺に任せろッ!!」

「いや何言ってるんだお前」

いざ行かんと前のめりになる鞘無の首根っこを織村が引つ掴む。まさか止められるとは露ほども思っていなかった鞘無は喉奥から「ぎゅふうッ」というなんとも間拔けな声が漏れ出した。顔を青くする鞘無の首根っこを掴んだまま、織村はオープン・チャネルを開く。通信先は旅館に居るであろう鳳鈴音だ。

「鳳、聞こえてるか」

『はいはい聞こえますよ。どうしました?』

「お前、確か皿式の護衛が任務だったよな」

『そ、そうですけど』

僅かに言葉に詰まった鈴の声を聞いて半ば確信する。皿式コイツは旅館を抜け出してこの戦闘空域にまでやってきたのだと。思わず頭を抱えなくなる衝動に駆られる。それをなんとか堪えて、織村は尚もじたばたと藻掻く鞘無に視線を移す。

(チツ、面倒になってきやがったな)

皿式鞘無という少年の實力は昨日の模擬戦で十二分に把握している。その上で言わせてもらえば、今回の任務において彼の存在は邪魔にしかならなかった。超電磁砲というある程度の火力を持つ攻撃は持っているしどういいう理屈か電撃なんてものを飛ばすことも可能だ。しかし、本人の操縦技術が機体に全く追いついていない。

Y・Cの制作した第三世代型『サンライト・トウオーノ』でさえその性能を完全に引き出せていなかったのだ。そんな状態の人間が束直々に手を加えたという機体を乗りこなせる筈がない。織村自身が束の制作した機体に乗っているため言えることだが、束が作る機体はとにかく操縦者を選ぶ。乗り手のことなど全く考えずに今手元にある技術を総集集させて機体を作り上げるからだ。故に操縦者には束

の技術力に比例しうるだけの実力が求められるのだ。千冬の暮桜、楯無の黒執事などがこれに当たる。常人がこれらに乗ればまともに飛行することもままならないだろう。

鞘無の実力は甘めに見てもそこいらの一般生徒と大差ない。一般人が紛れ込んでいるのと相違ないのだから、作戦遂行において障害にしかならないと判断するのは至極当然のことだった。

「おい、さっさと旅館に引き返せ」

「なんだと!? いくら俺にギリギリ勝ったからってそんな指図は受けねえぞー!」

「指図じゃねえ命令だ。この場の指揮権は俺にある。何人も俺に齒向かうことは許さん」

「うるさいうるさい! この機体の力さえあれば、銀の福音だって撃破できるんだよツ!!」

「……なんだと?」

癩癩を起こす鞘無の発言の中に、織村は看過できないものを見つけた。それは決して鞘無は知りえない筈の情報。

「お前、アレがどうして『銀の福音』だって知ってる?」

知らない筈なのだ。最重要機密として扱われている銀の福音の名称など、一般の生徒には決して漏れないように秘匿されている。一夏たちでさえ千冬にこれが軍事機密に該当する旨を伝えられ、決して口外しないよう釘を刺されていたのだから。数年間に渡って監視の目に晒されるなどたまったものじゃないと全員が思った筈だ。故に、一夏たち代表候補生たちの仲の誰かが鞘無に情報を漏らしたという可能性はかなり低い。そもそも一夏たち招集メンバーは任務開始まで鞘無と顔を合わせてもいないだろう。ISに自動記録されている口グを調べれば明らかになることだが、今はそれをしている時間の猶予は無い。

対して、そう問われた鞘無は目に見えて狼狽した。先程までの傲岸不遜っぷりが嘘のような挙動不審ぶりである。

「そ、そそれはアンタらがあの機体のことをそう呼んでたからだ」

「大体ここまでどうやって監視の目を掻い潜ってきたんだ」

「俺の『黄金伯爵』のマントには、ISのハイパーセンサーに引つかからない細工が施してある」

一転、己の機体の凄さを饒舌に語り始める鞆無。そんな少年を前にこれはもう口で諭すことは不可能だと判断した織村は、通信機を用いて海域封鎖に当たっている千冬へと連絡を飛ばした。

「織斑、俺だ。ちよつとばかし問題が発生した」

返事は即座に返って来た。

『鳳から皿式が旅館を抜け出したことは既に聞いている。まさか戦闘空域にまで出張っているとは思わなかったが。直ぐに鳳とボーデヴィッツヒを向かわせる』

「頼む。このままじゃまともに動けそうにねえ」

『……皿式は事の重大さに気がついていないようだな』

「旅館に戻ったらみっちりしごいてやってくれ」

視界の端に皿式を収めながら織村は言う。

彼はまだこの任務の重大性に気がついていないのだろう。気づいていて尚出張ってきているというのならそれはそれで問題だが。この任務の難度がSSに設定されているのは、二箇所と同時に迎撃を行わなければならないからだ。少数精鋭とはいえある程度の人数確保は必須であり、また達成条件は単に敵を撃破すればいいだけではない。

銀の福音、サイレント・ゼフィルス共に出来ることなら機体を回収。最悪の場合破壊も厭わないと上層部は言うが、後々諸外国からケチを付けられるのはゴメンだ。

そして本土への被害を最小限に食い止める事、出来るなら無傷が望ましい。だからこそ海上を戦闘領域に指定したのだ。

そんな任務に当たるのである。

少なくとも代表候補生に準ずる実力を持つ人間でなければ、この場に立つことは許されない。

(それ以前にコイツを守りながら任務を遂行させるるのが難点だ。二人が皿式を回収しに来るまで少なくとも十分はかかる)

その間、銀の福音の攻撃から彼を守るのは織村の役割だ。一夏と簪

は自分のことだけで手一杯だろう。そんな所に更に仕事を増やす訳にもいかない。

本当に面倒なことをしてくれる、と心の内で吐き捨てて、織村は直ぐ様行動を起こした。

具体的には、鞆無を前線から後退させ、一夏と二人で銀の福音に対処しようとしたのだ。が、しかし。その行動よりも早く、陽光を受けて眩しく光り輝く黄金の機体は動き始めていた。

「あつ、オイー！」

織村の静止の声も聞かず、鞆無は最前線へと躍り出る。その表情は喜色に染まり、新しいおもちゃを与えられた子供のようにであった。

一歩間違えれば死ぬかもしれない戦場で鞆無がここまで堂々としていられるのにはそれなりの理由があった。

一つは束が直々に機体のチューンアップを行つたこと。原作では束が制作した機体は全て規格外の性能を誇り、主人公サイドの戦力として十分な働きをしてきた。

二つに超能力というアドバンテージ。これは鞆無だけしか持ち得ない(他の人間も有していると考えたことがない)異能。その性能と破壊力は言わずもがな、国家代表にだって引けを取らない代物である。

以上の点から、鞆無は例え軍用ISであっても互角以上に戦えると踏んでいるのだ。

(俺の能力なら電磁レーザーだって使えるし、銀の福音の攻撃にも対処できるはずだ)

織村を差し置いて銀の福音の間近にまで出てきた鞆無。そんな彼に声を荒げたのは、今正に一戦交えている一夏だった。

「皿式ッ！　　んこは危ない、下がれッ！」

遠距離からでは攻撃を命中させられないと判断した一夏は銀の福音のレーザーを掻い潜りその拳を突き出す。

だが、当たらない。機動力では上回っているはずの白式であっても、銀の福音を捉えることが出来ない。

それを目の当たりにしてフンと鼻を鳴らしたのが鞆無だった。あ

の程度のスピードであれば、今の自分で十分だと言わんばかりの態度である。

鞘無は一夏の忠告を無視して更に前へと出た。その位置は銀の福音の攻撃の範囲内。思わず一夏は目を丸くする。

「バカッ！ 何やってるんだ！ 攻撃を食らうぞッ！」

「ふん、俺に指図するなよ織斑。お前が手を拱いているから加勢してやろうって言うのに」

「これは模擬戦とは訳が違うんだぞ！」

「そんなこと分かっている。これは模擬戦でも、ましてや命を懸けた死合でもない」

一拍おいて、鞘無の周囲が俄かにざわめきだす。バチバチと紫電が走る。

これは能力を使用する際の前兆のようなものだ。鞘無自身、未だその能力を完全に使いこなせているわけではなかった。必要量が分ならず微弱すぎる電撃を使用してしまったり、逆に少量で済むのにそれ以上の電撃を使用してしまったり。今の場合は感情が昂ぶっているためか、必要以上の紫電が辺りにまき散らされていた。

己の感情の高ぶりを自覚しているのか、鞘無は正面の銀の福音に視線を固定して敢えて静かに告げた。

「——これは俺による一方的な蹂躪だ」



更識、京ヶ原、杠、氷見。

日本の東西南北各地に拠点を置く暗部の筆頭たる四つの家系だ。

それぞれが楯無、劔、梶、鳳仙の名を代々受け継いできた由緒ある家系で、戦前より日本の裏で暗躍してきた。

しかし、それまで積み上げてきた実績はある時を境に瓦解する。

それがIS、インフィニット・ストラトスの誕生だ。これまでの兵器を遙かに上回るその火力と性能に、既存の武器は塵芥も同然と化した。それに伴い、暗部の仕事もその殆どが汚れ仕事から要人の警護な

どといったかなり難易度の低いものへと移っていった。

それを是としたのが更識と杠の家系だ。自分たちの子供の代にまで手を血に染めさせなくても済むと安堵し、裏に関わる仕事は殆どが当主によって処理された。

逆にこの事態を重く見たのが京ヶ原である。百年以上も続く家系でありながら、このままでは衰退の一途を辿るとして決して汚れ仕事から手を引こうとはしなかった。

価値観の違い、と言ってしまえばそれまでだ。だが更識、杠と京ヶ原の主張は決して交わることはない。意見の食い違いはやがて対立を生み、やがて争いの火種となった。

では残る氷見はどうか。

答えは至って単純、流れのままに。

もともと氷見にはこれといった決まりというのは存在しない。當時たまたまその地域で最も権力を持っていたのが氷見だったがために四家となっただけであり、裏での仕事にも表での仕事にも特に強い思い入れというのは存在しない。

だから更識と京ヶ原の対立にも口を出さず静観を貫いていたし、杠とも一切の交流を絶っていた。

二年前に当主が代わり、二十一代目となった鳳仙はこの世界にある程度満足していた。ISなるものの存在は看過できるものではないが現時点で害はない。更識の当主がISに乗れるなんていうのは反則臭いと思わなくなかったが、それでも直接的な関わりがないのだからと無視していた。

そんな折、氷見の東ねる東北を訪れたのが京ヶ原の現当主、十三代目劔だった。

女は言う。

———この世界に違和感を感じないのか。

ある程度の満足を感じていた鳳仙に、その言葉は全く響かなかつた。何を言いたいのか、そう問い返した。

女は続ける。この世界に存在するISが如何に危険なものなのか、排除しなければならぬものなのか。



最初は話半分に聞いていた鳳仙だが、いつしか真剣に耳を傾けている自分が居ることに気が付いた。

「鳳仙、お前は気がついていないのか」

「……何をだ」

「日本、いや世界は現在、ISに支配されつつあることに」

「支配？」

「467。ISに必要な不可欠なコアの数だ。この数は篠ノ之博士が新たなコアを製造しない限り不変であり、彼女はその製造を拒否している」

「それが何だって言うんだ。そんなことは知っている」

「各国はそのコアの獲得に躍起になっている。史上最強の兵器を所有するためにな」

——私は、ソレが気に入らない。

ゾワリ、と鳳仙の背筋に得体の知れない悪寒が走った。

「更識と杠の当主は頭が良い、ごく自然にISに取り入り、そのチカラを己のものとしたのだからな」

だがお前はどうか？　と言外に告げられているような気がした。そしてそれは、おそらく気のせいではない。女の射抜くような視線が鳳仙に注がれる。

「鳳仙。お前は実に優秀な人間だ。それはお前のこれまでの経歴を見れば分かる。身体能力も仕事の達成率も一級品。氷見の当主たるだけのことはある。……だが、それだけだ」

「……なんだと？」

これまでの態度を一変させて、鳳仙は怒りを顕にした。曲がりなりにも四家の一角である氷見を侮辱されたことで、純然たる殺気を剣へと向ける。

しかし常人なら気絶してしまうような殺気を直に浴びても、女は平然とその場に立っていた。

「ISを持たないお前は、この先起こるだろう革命に飲み込まれて死ぬだろう。その程度の価値しかない人間だよお前は」

「……言いたいことはそれだけか？」

「だから私に付いてこい」

突然の劔の言葉に、思わず鳳仙は目を丸くする。

今、こいつは一体なんと言った？

「私と共に来い鳳仙。お前に新しい翼をくれてやる。ある程度の満足感など捨ててしまえ、私と来れば革命の先を見せてやる」

言っていることが滅茶苦茶だと鳳仙は思った。氷見を乏したと思えば一緒に来いとか、どれだけ唯我独尊なんだと呆れてしまう。

だが不思議と不快感は無かった。その言葉は自身も意外な程すつきりと腹の中に収まった気がした。

悠然と立つ劔の前にして、鳳仙はその誘いを受けた。

「……見ない顔だな」

バイザーの下に隠れていた素顔を目の当たりにして、楯無がポツリと呟いた。

本音程の長さの濃紺の髪に切れ長の瞳。猫や狐よりも狼を連想させるような女だった。

破壊されたバイザーがパラパラと海へ落ちていく。その様子をなんとはなしに眺めてから、件の女は楯無と初めて直接視線を合わせた。

「初めまして。十七代目楯無」



織村と一夏の静止を振り切って最前線へと飛び出した鞆無は、銀の福音を改めて前にして両拳を固く握った。

原作のとおりであればアメリカとイスラエルが共同開発した軍用第三代機。小説やアニメで見ただけでは軍用という部分にピンとこなかったが、こうしていざ目の前に立つとその凄まじさを肌で感じられるような気がした。頭部に生えた巨大な翼が砲口であることは既に知っている。問題なのはその機動力と防御力だろう。最高時速マッハ2を超える機体を相手取るには相応の集中力が必要となる。

(さて、先ずはお手なみ拝見といくか)

右手を前に振り出し、目にも止まらぬ速さで電撃が放たれる。

銀の福音は迫る電撃を数十センチ横にずれることで難なく回避。

ふむ、と鞘無は考える。単純な電撃ではP I C搭載の機体には通用しないことは分かった。

「本当はもつと後に出すつもりだったが、早速お披露目といくか」

背部に取り付けられた深紅のマントをはためかせて、鞘無は大仰に右手を上を翳した。

直後、鞘無の背後の空間が歪む。

「……ああ？」

その様子を見ていた織村は怪訝そうに眉を顰める。なぜだろうか、そこはかとなくどこぞのA U Oを彷彿とさせるような光景だ。というかゲート・オブ・(ピー)ロンのように見えて仕方ない。

実際には後付装備を拡張領域イコライザから取り出しただけなのだが。

だがその数が異常だった。

拡張領域は各機体の量子変換量に依存する。これはどのI Sも例に漏れない。一夏の白式のように雪片に殆どの割を取られてしまうものもあれば、シャルロットのラファールのような大容量拡張領域マルチウエボン・ラックのようなものもある。が、程度の差はあれど量子変換出来る質量には限度がある。

しかし、鞘無の黄金伯爵はその量子変換量が桁違いだった。十や数十ではない。百、あるいはそれ以上の後付装備が、まるで他空間から引き出されるかのように現れる。

シャルロットが操縦するラファール・リヴァイヴ・カスタムIIの拡張領域を遙かに上回る超大容量の拡張領域。

名を『天上天下』。

そこから取り出されるのは、黄金に輝く(メッキも多数)刃の数々。それら全てに鞘無の能力を使用して擬似追尾機能を搭載させている。「さあ征くぞ。この俺を楽しませてみる銀の福音ッ!!」

直後、鞘無の背後に出現した幾百の刃が銀の福音目掛けて射出された。

対して、迎撃モードへと移行している銀の福音の行動は迅速なもの

だった。高出力の多方向推進装置<sup>マルチスラスター</sup>を駆使して襲い来る刃を躲し、また躲しきれないと判断したものは即座に光の弾丸で爆ぜさせていく。光の弾丸に直撃した刃はそのまま爆発に巻き込まれ粉々に砕け散る。そんな光景を見ても、鞆無には微塵の焦りも無かった。不遜に口角を吊り上げ、まるで余興を楽しむかのように両手を広げる。

「まだまだあッー！」

破壊された分は即座に補充し、再び射出。一体天上天下内にどれだけの武装が量子変換されているのか、実のところ鞆無も正確には把握していなかった。

ただ束がどのISよりも大きな拡張領域、戦艦丸々一隻だって余裕などと言っていたこともあってこの程度で底は尽きないと確信していた。あの天災が言うのだから間違いない。

鞆無の刃が銀の福音を貫くのが先か、光の弾丸が鞆無を抉るのが先か。一見持久戦にも見えるこの戦いをしかし、後方で織村が苦々しげに見つめていた。

理由は二つ。

一つに鞆無はあの拡張領域を使用すること自体にエネルギーを消耗することに恐らく気がついていない。あれは常時拡張領域という名の武装を展開させているようなものだ。他のISとは量子変換量が桁違いなものも、恐らく機体のエネルギーをも利用しているからなのだろう。言ってしまうえば一夏の零落白夜と同じ諸刃の劔だ。

そしてもう一つ。銀の福音の砲門の数は全部で三十六、それらすべてが連射を行った場合、鞆無の補充速度では間に合わない。

このままではいずれ押し切られる。そうなる前に前線から引つ込めなくては。そう考えた織村だったが、予想よりも早くその限界が訪れた。

恐るべき連射速度で放たれた光の弾丸が黄金の刃の雨を抜け鞆無へと迫る。この位置からでは簪のフォローも間に合わない。

思わず舌打ちする織村。能力を全開で行使しても、この場からではあの光の弾丸の方が早い。

「皿式ッ!!」

織村さえ間に合わない判断した鞘無と光の弾丸に割って入ったのは一夏だった。その手には雪片式型が握られており、羽の形をした光の弾丸を切り捨てていく。

だが、それも一瞬の時間稼ぎにしかならなかった。光の羽はあっというまに白式の至るところに突き刺さり、次の瞬間一気に爆ぜた。まるで連鎖爆発のように突き刺さった羽が次々に爆発していき、周囲を濃い噴煙が覆う。

「一夏あッ!!」

簪の悲痛な叫びが、海上に響き渡った。

## #43 転機と勝機

「ふんふん。これで軍事機密の漏洩に命令違反の独断専行。完全にレッドカードで退場だねえ」

旅館、花月荘の建つ海岸線から南へ数キロの海上に浮かぶニンジン。篠ノ之束専用の移動ラボの中で、ウサ耳をピヨコピヨコと動かしながら束は楽しそうに言った。空間に浮かぶディスプレイには鞘無の黄金伯爵に仕掛けられたカメラ映像と衛星をハッキングした上空からの映像の二つが映し出されている。

映像の中で鞘無は得意げに手を上へと翳し、自らが改良を施した新型の最たる特徴である超大型拡張領域から後付武装を次々と取り出していく。

「あーあー。そんなにいっぺんに出しちゃったら直ぐに武器使い切っちゃうよー?」

鞘無には戦艦を丸ごと一隻量子変換しても問題ないと告げていたが、実のところそうでもない。確かに他のISに比べれば量子変換量は格段に多いが、一線を画すほどにずば抜けているわけではないのだ。精々がシャルロットのマルチウエボンラックの三倍程だろう。それに加えて一夏の雪片式型のように変換中はエネルギーを食うのだから、使い方を間違えればすぐに具現維持限界を迎えてしまう。乗り手を選ぶかなりピーキーな機体に仕上がっているのが黄金伯爵という機体だった。

「ま、そういう風に作ったんだけどねえ」

頭の後ろで両手を組みながら、興味なさそうに束は呟く。

態々束が手ずから改良を施すという申し出を、きつと鞘無は一切の疑問を抱くこと無く信じたのだろう。だからこそあの興奮ぶりだ。篠ノ之束という科学者がどんな性格をしているのか、小説やアニメの中でしか知らなかった鞘無だからこそ、あそこまで素直に機体を差し出すことが出来た。

これがもし千冬や楯無であったなら、まず第一に何をするつもりだ

と勘繰るに違いない。幼少からの付き合いがある彼らは、東の性格を熟知しているからだ。

基本的に己が認めた人間とその周囲の人間以外に興味を示さない束である。当然その範疇に皿式鞘無という少年は含まれていない。にも関わらず、楯無に嘘をついてまで鞘無本人と接触したのには、勿論理由がある。

「お前、いらなんだよね」

楯無や千冬にすら見せたことのない冷酷な表情で、抑揚なく言い放つ。

「私のISを汚すような奴は要らない。変なチカラを持つてるかもしれない奴は要らない。計画の邪魔にしかならないような奴は要らない」

にんまりと、東は口角を持ち上げる。

「最重要軍事機密の漏洩で委員会から二年以上の監視。上役の命令を無視して独断専行の軍規違反。これでお前はもう碌に身動きがとれない」

東の目的は、皿式鞘無という少年を事実上行動不能に陥れることだった。彼のISをチューンアップしたのも、直接接触したのも、全ては彼の感情を昂ぶらせて世間的に封殺するため。鞘無の性格なんてのはIS学園でのデータと中学時代のデータを見れば直ぐに分かる。

直情型で短絡的。周囲よりも自分の利益を優先する。軍人にとっては最も害悪なタイプだ。

そういう人間というのは総じてプライドが高い。

自尊心の塊と言ってしまう方がいいのだろうか。束にとっては忌み嫌う対象でしかないが、こういった風に実に扱いやすいという点だけは都合が良かった。

結果として、東の狙い通りに鞘無は取り返しのつかないような失態を犯してしまったのだから。

「……とは言え、まさかいつくんがあんなのを庇うなんて思わなかったな」

通信衛星からの映像を見つめながら呟く。

「やつぱりまだかーくんみたいに私情を完全にシャットアウトすることは難しいか。なんたってまだ十五歳の男の子だもんね」

声色は酷く穏やかに、しかしその裏側には隠しきれないような怒りが見え隠れしていた。

これは自分の責任だ。鞘無の行動パターンのみを把握し、一夏の行動予測を怠った自分の非。

「分かってる。いっくんはこんな所で終わるような人間じゃない。絶対」

映像越しで叫ばれた一夏の名が、酷く虚しく聞こえた気がした。



「一夏あつ!!」

喉が張り裂けんばかりに、少女は少年の名を叫ぶ。

だけれど、その声はきつと届いていない。少年は何の抵抗も示さなのままに海面に叩きつけられ、そして海中へと沈んでいった。

呆然とする鞘無、眉間に皺を寄せる織村をよそに簪は己の限界に迫る速度で海面へと一直線に降下していく。

「っ、バカが!」

それを見て吐き捨てたのは織村だ。今の簪は一夏以外が見えていない。自身のことと鞘無のことと、そして銀の福音のことと。

途端、甲高い機械音が周囲に轟く。

銀の福音がその巨大なウイングスラスタを広げ攻撃に移ろうとしている。無数の砲口の向いている先を見るに、標的となっているのは簪で間違いなさそうだ。

「戻れ更識! そこじゃあの攻撃は防げねえ!」

その声さえ、今の簪には聞こえていなかった。

今の彼女の胸中には一夏の安否しか存在しない。速度を更に上げて、音速で一夏が沈んでいった地点へと降下していく。

(一夏、一夏、一夏!!)



思考の全てが一夏のことで埋め尽くされていく。

だからだろう、織村の静止の声も聞こえずあまつさえ敵の攻撃が目前にまで迫っていることに気がつけなかったのは。

時間にしてほんの数瞬。しかしその数瞬は、戦場において致限りなく致命的な時間だった。

(……あ、)

簪が銀の福音の攻撃に気がついたときには、光の弾丸は既に目の前にまで迫っていた。

反撃はおろか、回避すら間に合わない。

そして――。



白く、白く。どこまでも白く。地上と空との境界線がどこなのかも不明瞭な程の白い空間。そこに一夏は立っていた。

上下前後左右どこを見ても白以外が見当たらない場所に首を傾げる。おかしい、どうして自分はこんな所に立っているのか。鞘無を庇って銀の福音の攻撃をもろに受け、そのまま海へと落ちたはずだ。そこまでの記憶は確かに存在している。

だとしたら、俺は死んでここは天国なのだろうか。であるならなんとも殺風景な場所だ、と一夏はなんとはなしに思った。

「残念だけれど、ここは天国なんかじゃないよ」

はっとして振り返る。一夏が振り返った先、そこにはこの空間と同じようにどこまでも白い女性が立っていた。真っ白な帽子にワンピース、履いているサンダルに髪の毛までが白い。どうもあの髪の毛は自毛のようで、染色独特のツヤのようなものは見受けられない。なのに顔立ちは完全に日本人なのだから奇妙な感覚に陥ってしまいうだ。

未だに頭の中の疑問は解消されないが、この場所に自分以外が居たことに少しの安心感を覚えた。

「ここが天国じゃないってんならどこだって言うんだ。まさか地獄な

んて言わないよな」

「そうね。此処が地獄だったとしたら、きつと貴方の罪は己の非力さね」

「……………」

くすくすと笑う女性に、一夏は若干の憤りを感じつつも反論はしなかった。が、表情にはそれがばっちり出てしまっていたらしい。女性の表情が嗜虐的になる。

「あら、そんな表情を浮かべるなんて。まさか自分が強いとでも思ってたのかしら」

「思っていないさ。ただ他人に面と向かって言われて腹が立つのは可笑しなことじゃないと思う」

「見ず知らずの他人に言われて腹を立てるなんて自分から認めているようなものじゃない」

その言葉に言い返すことが出来ずに、一夏は口を噤んだ。

「貴方はあの作戦の前に言っていたわね。心の何処かに油断や慢心があったと。それを自覚したところで完全に切り除けると本気で思っているの?」

カツン、カツンとヒールのついたサンダルのかかとを鳴らしながら女性が続ける。

「そんなわけないじゃない。人間ってのはそんな単純な生き物じゃないわ。思いを自覚したところでそれをどうこうするには時間がかかる。この短時間で修正するなんてのは土台無理な話よ」

その言葉は痛いほどに一夏の胸に刺さった。

反論の言葉さえも見つからない。

「一夏。貴方は何を求めているの?」

「求める……………」

そう問われて考える。

一夏の望むもの、欲しいもの。そんなもの決まりきっていると即座に一夏は口を開いた。

「俺は、守るための力が欲しい。何も世界中の皆を救おうなんて考えちやいない。でも、それでも、俺の周りにいる皆は俺が守りたい」

自らの拳を握り締め、力強く言い切った。

それに対して、真つ白な女性は明白（あからあさま）な落胆の表情を浮かべた。

「守るための力、ね。それは具体的にどんなものなの？」

「え……？」

「武力、権力、挙げていけばキリが無いわね。貴方はその中の何を突き詰めて、周囲の人間を守ろうとしているの？」

「それは……、勿論肉体的な強さを……」

「それはさっきのあの状況を見て言っているのかしら」

にべもない、女性から突きつけられた事実だった。

一夏が強さを求める理由。それは大切な人たちを守りたいがためだった。自らの姉を、敬愛する師匠と愛する人を。そんな人たちを守るような強さが欲しかった。

だけれど現実とは非常なもので、軍用ISの攻撃によって海中へと投げ出される始末。行動が伴っていない現状では、何を言っても夢物語にしか聞こえなかった。それを一夏は自覚して口を閉じる。

「いい？ 貴方は弱い。姉である織斑千冬や師匠である更識楯無なんて雲の上の存在。ISでの戦闘では並の代表候補生と同等がいいところ、それでよくあんな言葉を言えたものだわ」

真つ白な女性は一夏から視線を外さないまま、明確に言い放つ。

お前では力不足だと、大した力も無いのだと。

それに強く反論できない自分が情けなくて、一夏は俯いて下唇を噛んだ。

「大切な人たちを守る。言葉にするのは簡単なこと。でもそれを行動に移せる人間が、貴方の世界には一体何人いるのでしょうかね」

一夏の脳裏をまっさきに過ったのは師匠である更識楯無。

だがそれを予想していたかのように女性はそれを否定する。

「彼もそれを完璧にこなすことは出来なかったわ」

予期しない言葉に思わず一夏の目が見開かれる。

「何を、お前は一体何を知ってるんだ……」

「何もかも。貴方の周囲の世界のことは、創造主を通してすべて見て

きたもの」

「創造主……？」

聞き慣れない言葉に一夏は疑問符を浮かべる。そんな一夏の疑問に女性は答えず、

「彼は、更識楯無は恐らくあの世界で最も貴方の思い描く理想の近くに居る人間。でも、彼でもその理想には届かない。届かなかった」

師匠たる楯無しでさえ到達できないような理想。今の一夏では逆立ちしたってその場所に立つことは出来ないだろう。

——それでも貴方は求めるの？ 決して届かない理想を思い浮かべて、それでも尚手を伸ばすの？

「……俺、は……」

「決めなさい。今、ここで。貴方の進むべき道を、望むべき願いを」

純白が全てを包む空間の中、一夏は決断を迫られる。



「初めまして。十七代目楯無」

その言葉を受けて、多少の驚きを受けた。俺が対暗部の家系、その十七代目であることを知っている人間はそう多くない。殆どの人間が俺のことは世界初の男性IS操縦者として認識しているだろう。そんな中でこの事実を知っているのは俺に近い人間か、または立場の同じ対暗部の家系くらいのものだ。

ということとは、顔に全く見覚えのないこの女は必然的に対暗部の人間ということになる。杠の屋敷にこんなやつは居なかったのだから、京ヶ原かもしくは氷見の一族だろうか。

「……俺のことをそう呼ぶってことは、お前そっち側の人間か」

「ご明察。氷見鳳仙と言えば理解できるかな？」

「なんだと……？」

氷見鳳仙。鳳仙とは更識の家の楯無と同様に代々当主が受け継いできた名前だ。この女の言うことが偽りでなければ、今俺の目の前にいるのは氷見の当主ということになる。

にしても若いな。まだ二十を超えていないんじゃないか。高校生には見えないが、いいとこ十九やそこらじゃないだろうか。

女、氷見鳳仙は空中に静止したまま獰猛に笑う。

「ほんとは正体を明かすつもりは無かったんだけどさ、こうなっちゃったら仕方ないよね。劔も許してくれるだろうさ」

その言葉は、俺にとって看過出来るものではなかった。

劔。その名を持つ人間を、俺はたった一人しか知らない。

京ヶ原の当主にして、親父の片腕を持つていった人間だ。俺を含めた更識の家とは浅からぬ因縁がある相手でもある。

チツ、と思わず舌打ちする。どういうことだ、アメリカとイギリスから強奪されたI Sとそれに乗っての襲撃。この事件に四家が関わっている。話が一気に臭くなってきたことを感じ取る。

何か俺の知らない所でとてつもないナニカが蠢いている気がしてならない。

「……ま、それもこれもお前を捕まえて吐かせればいいだけの話だ」

「ハハッ、出来ると思ってる」

「当然だ。俺たちを舐めるなよ」

そう言つて背後に控えていた二人に視線だけを向ける。

毅然と立つセシリアとシャルロットを見て、何も心配は無さそうだと少しの安堵を滲ませた。二人共いい表情をしている。変に力が入っていることもなく自然体、但し周囲の警戒だけは普段以上に行っている。『俺たち』と複数系で言われたことが嬉しかったのか、シャルロットの口元が若干にやっついていたような気もするがそれも一瞬のこと。直ぐに真一文字に引き結ばれた。

「オルコットは後方支援に徹底。隙あらば俺もろともで構わん。奴を撃ち落とせ」

「了解しました」

「デュノアは俺と標的の鎮圧に移れ。出し惜しみは無しだ。ありったけの武器弾薬を投入しろ」

「はー」

セシリアは六基のビットを全て開放させた上で大型B Tライフル

《スターダスト・シューター》を、シャルロットは両手に面制圧力に特化した六二口径連装ショットガン《レイン・オブ・サタデイ》をそれぞれ構え、俺の指示通りに位置取りを行っていく。

さて、手始めにその面倒なシールドビット二基と背中のスラストユニットを破壊するでしょうか。

一度膝を曲げ、その後飛び上がる際に能力を行使。瞬時加速並の速さでサイレント・ゼフィルスへと突っ込んでいく。

「チッー」

正面からの迎撃は不可能と判断したのかスラストユニットの方向を変えて上空へと瞬時加速で逃れる氷見。

一瞬だけ垣間見えた隙を、俺たちが見逃す筈がない。

「はあっ!!」

先程まで持っていたレイン・オブ・サタデイはいつの間にか近接ブレード《ブレットド・スライサー》へと切り替えられており、空いた手には盾が握られている。

シャルロットが接近してくるのを嫌うように、氷見は取り出した小型レーザーガトリングを真下から突っ込んでくるシャルロットへと容赦なく発射する。この距離からだスターブレイカーは使用出来ないようだった。

にんまりと口角を吊り上げる氷見。だが、その笑みは直ぐ様消え失せることとなる。

発射された弾丸は、シャルロットの握るブレードによって両断された。

「はあッ!？」

「このブレード、《ブレットド・スライサー》って言うんだ。日本語だと『弾丸切り』かな?」

シャルロットが言うには、あのブレードの刃の部分には弾丸を両断可能な特殊金属がコーティングされているとのこと。更に発射された弾丸を見切り、切れるだけの軽さをも兼ね備えているらしい。当然シャルロットの超絶技巧とハイパーセンサーがあっつてはじめて可能となる絶技である。多分俺には無理だ。

発射された弾丸を必要最低限だけ切って捨て、シャルロットはそのまま氷見との距離を詰める。

「ああもう、面倒だなあ!!」

背面のスラスターユニットを使い後ろへと瞬時加速、一瞬にしてシャルロットとの差を開く。氷見はそのまま流れるような動作で武装を切り替え、スターブレイカーを構えた。狙いは当然接近しようとな近づいてきていたシャルロットだ。

瞬時加速を使用して接近していたために急な進路変更は出来ない。このままでは確実にスターブレイカーはシャルロットを撃ち抜くだろう。

だが、俺もシャルロット本人も、そんな心配は微塵もしていなかった。

「任せたよ、セシリア」

「承りましたわ!」

直後、一閃。

氷見が放ったスターブレイカーの一撃を、セシリアの構えるスターダスト・シューターが撃ち抜いた。これまた俺には到底再現不可能な超人技だ。なんだここ超人の見本市だったのかなんてどうでもいい思考が頭を過ぎる。まあ人のことを言えないのは自覚しているが。

「知っていますか？ 貴方のそのスターブレイカーは《星を砕くもの》という意味です」

「……っそれがなんだっていうんだ」

「わたしのスターダスト・シューターは《星屑の撃手》。精密性ならわたしに分があります」

「ハハッ、それを言うなら星屑よりも星を砕ける私のほうが威力は上だッ!!」

「させると思ってたのか」

再び構えの姿勢を見せる氷見の背後を取る。セシリアに気を取られていたおかげもあって移動自体は苦もなく行えた。邪魔なシールドビットはさっきのうちに破壊させて貰ったし。そろそろ心臓部分のスラスターユニットの破壊というところ。

そう考えて俺が拳を握ったときだった。

俺とセシリア、シャルロットの全員に、真耶の狼狽した通信が届いたのは。

その内容は、考えうる限り最悪のものだった。

「……一夏が、墮とされた……?」



「織斑君！ 織斑君！ 聞こえますか?! 返事をしてください!!」

封鎖海域の一角で、真耶の悲痛な叫びが響く。同じ海域にいる千冬は、ただ黙って瞼を閉じていた。

太平洋上空で銀の福音の攻撃が直撃、そのまま海へと落ちていったとの報告が織村から寄せられたとき、意外にも取り乱したのは千冬ではなく真耶であった。大切な生徒がただでさえ危険な場所で戦っているというのに、自分は呑気に海域の封鎖しか行えないことへの罪悪感もあつたかもしれない。

真耶の叫びは、広大な海の中へと消えていく。

千冬はゆつくりと瞼を持ち上げて、陽光の降り注ぐ上空を仰ぐ。

その心境は、如何程のものだろうか。たった一人しか存在しない肉親。下手をすれば己よりも大切な弟が、生死不明のまま海中へと消えていったと聞いた姉の心境は。横顔から除く千冬の顔からは、箒は判断することはできなかった。

悲しみも、憤りも、千冬は表情に出すことなく上空を見つめている。教師としてのプライドがそれらを押し込めているのではないかと箒は思ったが、やがて聞こえてきた言葉にはつとずる。

「……馬鹿者め」

その言葉に込められた真の意味は理解出来ないまま、箒は次の瞬間には教師の表情に戻った千冬の指示に従うこととなる。





## #44 覚醒と分岐点

皿式鞘無は信じられない、というような表情を浮かべていた。無意識のうちに伸ばされていた手は、無情にも空を切る。

どうしてだ。一体、どうして。

脳内に焼きついて離れないのは織斑一夏が自身を庇うようにして敵の攻撃を受け海へと落ちていくその一部始終。

何を思っただろうか。そんなことさねなくても、手元にある武装で確かに対処できたのに。

どうして、どうして。

——あの瞬間の織斑<sup>アイツ</sup>は、あんな表情をしていたんだ。

爆発に飲み込まれ海へと落ちていく一夏を目の前にしても尚、鞘無はそれを何処か現実ではないことのように感じていた。これは本当に現実なのだろうか、自身が引き起こしたことなのだろうかと心の内で何度も呟く。

視界がやけに不明瞭だ。埃でも入ったかのように靄がかかっている。何度瞬きをしてもその靄は一向に晴れる気配がない。

だが、それも一瞬のことだった。

「一夏あッ!!」

簪の喉が張り裂けんばかりの絶叫で無理矢理現実を引き戻される。周囲の状況など意に介さず一夏のもとへと飛んでいく簪。鞘無はそんな彼女を銀の福音がロックオンしていることに気が付いた。

なのにどうしてか、鞘無の身体は思うように動いてくれなかった。意識はしていなくとも人間一人が海へと落ちていったという事実が、彼の心と身体から自由を奪っているのかもしれない。

(何で、何で、何で。アイツは俺を庇ったんだよ……! そんなことしなくたって、俺は、)

答えの出ない問いかけに、鞘無は奥歯を噛み締める。

今彼の胸中を埋め尽くしているのは怒りと虚無感。

その理由は、彼自身にも判らなかつた。



すべてが白い空間の中、一夏は静かに瞼を閉じた。

先程目の前の女性に言われた言葉が、耳の奥にまで浸透していく。  
(……ああ、そうだよ。俺はただISに乗れるってだけの男で、他はただの一般人となんら変わらない)

更識流の柔術を会得していることは、この場では何の足しにもならない。

必要なのは自分の信念を貫くことができるほどのチカラ。空手や柔道を嗜んでいるからといって、己の求めるモノは手に入らない。

きっとそれは、一夏も心のどこかで理解していた。現状、自分のチカラは理想には到底届かない。それを無理に押し込めていたのかもしれない。

この世界でも有数の実力者たる姉が、楯無が間近にいて、手ほどきを受けた。姫無、簪というISにおいても実力者たる二人とある程度戦えるようになったことで自分もそこそこやれるのだと感じるようになった。ISで代表候補生たちと互角に戦えていることに慣れ始めて、どこか慢心があつた。

その慢心は、作戦前に自覚していたはずだった。

自分に守れるものなんてのは極々狭い範囲でしかなくて、それ以上を求めるのは身を滅ぼすことだ。

分かっていたはずなのに。

(無意識のうちに、身体は動いていた。皿式を守ろうと、自分でも気がついていたら飛び出してたんだ)

無鉄砲だったと、今は反省している。あのタイミングで動けたのは多分一夏一人だった。とは言え、あの場には織村だっていたのだ、何らかの対処法を持っていたかもしれない。皿式だってひよつとしたら奥の手を持っていたかもしれない。それを考えもせずに安易に飛び出したのは完全に一夏の失態だ。

とは言え、それを後悔しているかといえはそうではない。結果とし

て自分が落とされることになったが、それで皿式は無事だった。いけ好かない奴ではあるが、それで見殺しにしていい理由になどならぬい。

「それよ」

「え？」

一夏の心の内を見透かしているかののように、白い女性は口を開いた。

「貴方の守りたいという想い。その信念の発端は更識楯無だと思っけれど、その根幹にあるのは貴方自身の自己犠牲でしかないわ」

自己犠牲。己の身は省みずに他者を助けること、となんとなく一夏は考える。それは概ね正しい。

「貴方、まさか自分が死んだとしても他の皆が無事ならそれでいいとでも思っているのかしら」

「……それは、」

「今一瞬でもそう思ってしまったのなら今すぐに思考を改めなさい。自己犠牲の上に成り立つ信念なんてものに価値は無いわ」

女性の強い口調に、一夏は言葉を詰まらせた。知らず奥歯を噛み締めている。

圧倒的なチカラがあれば、自己犠牲なんてものに頼らなくて済むのだろう。もつと賢ければ、状況打開の策を思いつくのだろう。楯無のように、千冬のように。

しかし、自分にはそんな秀でたチカラは存在しない。なら、足りない部分はどこから。自分の身を削るしかないだろう。それが一夏の結論であり、これまでの考えだった。

その考えを女性は真っ向から否定する。そんなものに価値はないのだと断定する。

「全ての人間を守る、そんな聞こえのいい言葉を本当に実行できると思っている？」

「それは、無理だ……」

「でしょう？ 創造主が良い例じゃないかしら。あの人は自分の守れるものの範囲をきちんと理解している。だからこそそれ以外の人間

に容赦は無いし慈悲も無い」

じゃあ、どうしろつていうんだ。俺に皿式を見捨てろつてのかわり場のない怒りから、一夏は拳をきつく握り締めた。

「……そう、そうよね。貴方はそういう人だもの」

先程までの強い口調から一転して、女性は仄かに笑みを浮かべてみせた。

思わず一夏の目が丸くなる。意識しなければその笑みに吸い込まれてしまいそうなほど、女性のその表情は絵になっていた。

周囲が仄かに発光し始める。白一色の空間を更に塗りつぶすように、その光は女性を中心にして少しずつ広がっていく。

「——守りたいんでしよう?」

言葉とは裏腹に、女性は確信しているようだった。一夏が何を考えているのか、手に取るように。

女性から視線を一切外すことなく、一夏は無言で頷いた。

「例えそれが、自身のエゴだと分かっているとしても。例えそれが、現実には到底達し得ないことだとしても。一夏には守らなくてはいけないものがあるのね?」

ああ、そうだ。一夏は思う。

全世界の人間を守るなんて大仰なことは言えない。そんなことが出来るのはテレビの中のヒーローだけだ。実際にこの両の手で守れる人間なんてのはほんの僅かしかなくて、その僅かな人間たちでさえ気を抜けば手から零れ落ちていってしまう。

だからせめて。

自分が守りたいと思う人たちだけは、己の手で守りたい。

そのためのチカラが欲しい。多くを望むことはしない。少し、ほんの少しだけでいい。自分が自分であるために、この信念を果たすために。

「俺は、それでも手を伸ばす。届かないなんて誰かに決められることじゃない。他人に言われて諦めるくらいなら、俺は最初からこんな風に思ったりはしない」

一夏は一度瞼を下ろす。これまでのことが、まるで走馬灯のように

駆け巡る。

姉の親友が開発したISというものがあつた。

姉とその友人は、その扱いがとても上手かつた。

やがて姉は、ISで世界の頂点にたつた。

二度目の世界大会で、謎の集団に誘拐された。

姉とその友人は俺のために大会を捨ててまで奔走してくれた。

———そこで俺は、自身の無力さを思い知つた。

だから弟子入りした。姉に守られてばかりの自分を変えたくて。

稽古を続けていくと、やがて師匠の妹二人と知り合つた。

初めて人を好きになるということを知つた。

———守りたい人が、少しずつ増えていった。

まだまだ皆を守るには力不足だ。そんなこと一夏が一番理解している。

でも。それでも。この想いだけは、決して曲げるわけにはいかない。これは一夏を支える最も重要な芯の部分だ。

そんな一夏の言葉を受けて、あるいは共に走馬灯のような記憶を目にして、女性は優しげな笑みを浮かべて。

「だったら、行かなきゃね」

光がさらに拡大する。正面にいる女性のシルエツトさえもおぼろげとなる程の眩しさに思わず目を瞑る一夏。そんな彼の手を恐ろくだが女性が取る。

「貴方の気持ちは理解した。だから、私が貴方を導いてあげるわ」

ほら、こつちよと女性は一夏の手をぐいぐい引つ張つてどこかへと進んでいく。

視界が塞がれているためにどこへ向かっているのか分かっていない一夏は、されるがままに付いていくだけだ。

いつの間にか地面を歩いているという感覚が無くなり、手を握られているという感覚もう薄くなる。自分が今上を向いているのか、前に進んでいるのかさえも曖昧になっていく。

すべて溶けていくような感覚に陥りながら、程なくして一夏の意識もその中へと溶けていった。

——行きなさい。そのための翼は用意してあげる。  
最後にそんな言葉が聞こえたような気がした。



織村が最初に見たのは、海中から飛び上がる純白の機体だった。そこは丁度一夏が先程撃墜された地点であり、どうやったのか復活して戻ってきたのだと理解はできる。実際には原作知識を使つてなにか思つたのか大雑把に理解しているだけだが、それでも他のこの場にいる連中よりは何倍も早くこの事態を飲み込むことができただろう。

だから飛び上がってきたのが一夏の専用機、白式であることは分かつていた。それが二次移行して雪羅になることも想定内である。セカンド・シフト

実のところ、織村の援護は一夏を銀の福音の攻撃から守ることが出来た。敢えてそうしなかったのは、そこに割り込むことでどんなメリットとデメリットが起こりうるかを考えた末のことである。

まず一夏を守つた場合、当然ながら戦力の確保と一夏の身の安全を確保できるというメリットが存在する。だが雪羅へと二次移行する機会を失うために今後の戦闘に支障をきたす可能性が存在するのだ。

そして守らなかつた場合、二次移行へのチャンスを得るのだ。しかし、失敗した場合そのまま一夏は戻つてこない。

分の悪い賭けであつたことは承知している。それでも織村は一夏が戻ってくることに賭けて手を出さなかつた。楯無や千冬が聞いたら怒鳴るかもしれないが、結果的にその目論見は功を奏した。

だから織村が今驚愕しているのは一夏が海中から浮上してきたことではない。彼の目に移る雪羅の姿が、脳内に残る原作のものとかけ離れていたからだ。

カラーリングに大差はない。陽光を眩く反射させる純白の装甲は織村の知るものと同じと言つていいだろう。

違うのは、雪羅の背部だった。

(翼を模したスラスター。確か原作じゃ二枚じゃなかつたか?)

おぼろげな記憶であるために確信は持てないが、違和感の原因は一

夏の纏う雪羅の背面に装着されているスラストターユニットだと思われた。大型化されているのは原作通りだが、その数は六にまで増えていたのだ。これは一体どういう理由からくるものなのか織村には分からない。

ただ一つ言えるのは、一夏がこれまでになくチカラを手にして戻ってきたということだけだ。

派手な飛沫を上げて海上へと躍り出た一夏は、そのまま一直線に簪の元へと向かう。銀の福音による集中砲火から彼女を守るために。

瞬時加速よりも更に速く、一夏は矢のように突っ込んでいった。数瞬遅れて、一夏の通った海面が大きく割れるように揺らぐ。

音さえ置き去りにして、一夏は簪へと手を伸ばす――。

簪は己の失態を自覚した。我ながら無茶なことをしたものだと思ふ。一夏が落とされた瞬間、頭の中が真っ白になってしまったのだ。作戦遂行のためには私情を切り捨てることも必要だと理解はしていた。そのための訓練も更識で十分に行ってきた。

だがいざその場面に直面すると、人間というのは案外考えなしに行動してしまうものらしい。

銀の福音の攻撃が自身に向けられていると気がついたときにはもう遅い、既に光の矢は対象を爆破するために発射されていた。あれをまともに受ければ大破は免れない。ひよつとしたら一夏のように海へと沈んでいくかもしれない。

そう考えるほどには簪の思考には余裕が残されていた。

光の矢が目の前にまで迫る。

簪はぎゅつと目を瞑った。

「……………」

だが不思議なことに、くると予想されていた衝撃や熱はいつまで経っても簪に訪れない。うっすらと瞼を持ち上げてみる。簪の目に飛び込んできたのは、真っ白な翼を背に生やした少年の姿だった。

無意識のうちに口が開く。声を出そうと形をつくるが、上手く声が出てくれない。



そんな簪を抱えたまま、一夏は優しく微笑んで。

「——悪い。心配かけた」

目尻に溜まった涙が一筋こぼれ落ちた。それは歓喜の涙。一夏の顔を見て、本人だと確信して、簪は人目も憚らずに涙を流した。

「……無茶しすぎ」

「すまん。反省はしてる」

「嘘。……その顔は反省はしてるけど後悔はしてないって顔」

「うぐつ。流石に鋭いなお前……」

「一夏のことなんて、何でもお見通し」

苦い顔を浮かべる一夏に、簪は笑いかける。

それを見て一夏は確信する。守りたいものは、ここにもあると。

「簪、いけるか」

なにをどうする、とは聞かない。聞かずとも簪は理解しているし、また一夏もそれを解っていた。

「……当然」

「よし、ならいくぞ」

二人して視線を前方へと向ける。銀の福音はこちらの動向を伺うようにその場にとどまったまま動こうとはしない。それを確認して、再び一夏は簪へと視線を移す。彼女もこちらを一度だけ見て小さく頷いた。足に力を込め、動き出そうとしたところで。

「おいおい。お前ら俺を忘れてねえか」

織村が口角を吊り上げながら言った。一夏と簪、二人の真横に並び立つ。

「元々銀の福音を止めるために俺はここにいるんだ。お前らだけに任せられるかよ」

言葉と同時に、雪羅にも劣らない純白の光が放出された。

咄嗟に手で顔を覆った一夏が次に見たのは、織村の背中から生えた巨大な三対六枚の翼。以前聞いたことがあった。織村一華は全力で戦う際、背中から六枚の翼が生えるのだと。

「さあ、そろそろ幕引きと行こうぜ」

その言葉をきっかけにして、三人は最前線へと躍り出た。



そんな三人を前にして尚動きを見せない少年がいた。

何をするでもなく、専用機《黄金伯爵》を展開したままそ三人が戦う様子を離れた上空から見つめている。その顔に浮かぶのは、驚愕と羨望、そして嫉妬だった。

鞘無はこの時点でようやく理解した。己が殊更特別な存在ではないということに。気がついてしまった。この世界の主人公はあくまでも一夏であつて、自身はその周囲を形成するその他大勢の一人にしか過ぎないということに。

なんとも言えない虚無感が、鞘無の心に生まれた。

これまでしてきたことは、一体なんだつたのだろうか。思い返してみればバカバカしいことをしてきたものだ。自分のことなのに怒りが込み上げてくるのを抑えれない。

——何だ。俺は所詮ただのモブか。

——なんだ。この世界は俺抜きでも回るんだ。

——ナンダ。ここでも俺は、一番にはなれないんだ。

自身も到底理解出来ない複雑な感情が入り混じり、心の内をぐちゃぐちゃにかき混ぜる。今何を考えているのかさえ曖昧になってしまひそうになる。混乱が混乱を呼び、その連鎖が徐々に大きくなっていく。

その混乱が鞘無の中で一定のラインに達した時、頭の中で何かが切れる音がした。

ブツン、と。まるで血管が破裂するように、両側から引っ張られたゴムが千切れるように。

鞘無の芯の部分にあつた彼を構成する上で最も重要な部分が、崩壊した。

「……はは、」

乾いた笑いが漏れる。

その笑いが外に漏れたのと同じ時、突然鞘無は踵を返した。そして尚

も戦う三人に背を向けて、あろうことが全力でその場から離脱したのだ。

黄金の弾丸と化した鞘無は、一夏たちに一瞥もくれずに戦闘空域から消え失せた。

このときの鞘無はまだ気がついていなかった。

今、この時、この瞬間。

一夏と鞘無の進む道は、決定的に分かたれた。



正直なところ、氷見鳳仙は楯無を相手にすることに限界を感じ始めていた。

いくら氷見家の当主であるとはいえ、ISという分野に関してはこれらの一般人と所有する知識量に差は殆ど無い。京ヶ原劔に話を聞かなければ興味すら抱かなかっただろう。

だからISの操作に関して更識楯無に勝てるなど始めから思っていないし、また劔も勝ち星を計算しているわけでは無いだろう。彼女は言っていた。イギリスの研究所から強奪した専用機《サイレント・ゼファイルス》をイギリスの代表候補生と更識楯無の前に見せること。それが重要なのだと。

鳳仙自身、劔がまだ何か隠していることは薄々感じていた。

この計画の根幹となる部分の説明は受けたがどうも上手くはぐらかされているようで本当の狙いとやらは分からないままである。

(IS学園から離れた地点で男性操縦者を捕獲、ね。それっぽい理由をとってつけちゃあいるけど、それだと二機の専用機をこいつらにぶつける理由にはならないんだよね。本当に捕獲だけが理由なら劔が直々に出れば済む話だし。……サイレント・ゼファイルスと銀の福音、この二機をわざわざ引つ張ってきた理由はなんだ?)

戦闘中であればこんな考え事を行えないだろうが、視線の先では楯無たちが何やら連絡を受けてその動きを止めている。だからといってこれを好機とばかりに飛び込めば手痛い反撃を喰らうだろうこと

は火を見るより明らかだ。楯無の纏う黒執事の性能の化物っぷりを忌々しく思い舌を打つ。

(ま、このまま向こうが引き返してくれればこっちも楽でいいんだけど。あの金髪縦ロールはずっとこっち睨んでるし、そう簡単には行かないか)

更識楯無に勝てるとは思っていない。

しかし、他の二人もそうというわけではない。イギリスでは万全では無かったといえ国家代表のチエルシーを退けているのだ。国家代表クラスの技量を鳳仙は備えている。候補生の二人にまで遅れを取るつもりは無かった。

遂行すべきことは既に終えた。

ならば、後は如何にしてこの場から離れるか。劔と落ち合う場所は既に決めてある。北陸から東海地方へと南下し、太平洋にまで出て更に南へ行った場所に浮かぶ小さな無人島だ。日本の航空自衛隊に感知されるかもしれないが、偵察機や航空機ごとときで第三世代型のISに追いつけるとは思えない。この場さえ切り抜けてしまえば、後はどうでもなるということだ。

(それが一番難しいんだけどねえ、)

ちらりと更識楯無に視線を移す。

向こうまでは少し距離が離れているというのに、こちらの視線に気がついたのか楯無もこちらへと視線を向けてきた。恐ろしいまでの警戒網の広さである。あんな化物を相手にどうこの場を切り抜けるというのか。

そんな思考を巡らせていると、前方で動きがあった。

楯無の横についていたフランスとイギリスの代表候補生が空域を離脱したのだ。向かう先は恐らく銀の福音が居る地点だろう。先程漏れた会話から想像するに、撃墜された三人目の男性IS操縦者を救助に向かったのかもしれない。

(これで更識楯無が居なくなってくればよかったんだけどなあ)

そう都合よく物事は進んでくれない。この場に残ったのが彼である以上、戦闘は避けては通れないと見るべきだ。世界最強とも謳われ

る人間を相手にどこまで足掻くことができるか。鳳仙はじっくりと周囲を見渡し、使えそうなものはないか探す。上空にそんなものあるとは思えないが、それでも一応の可能性は有る。

そして、見つけた。

楯無の立つ方向とは反対方向から向かってくる、一機のヘリコプターを。



「……あん？　なんだありゃ」

背後から聞こえてくるプロペラ音に振り返ってみれば、数キロ先からこちらに向かってくるらしい一機のヘリコプターが視界に飛び込んできた。これが太平洋上空であれば千冬たちが警戒網を敷いているために侵入を阻むこともできたが、残念ながらこちらの日本海側では様々な事情から海域、空域の封鎖が行えないでいた。それでも民間人が迷い込まないよう細心の注意は払っていたはずなんだが。

というかだ、明らかにあのヘリはマスコミや民間のものではない。自衛隊のヘリだってせいぜいが270キロ程度しか出せないというのに、今正に迫ってくるヘリはどう見ても400キロを超えている。しかもご丁寧に社名まで記載されている。

「HCLLIだと……？」

HCLLI社。ココ・ヘクマティアルの所属する巨大会社だ。確か実の父が経営しているんだったか。

それはともかくとしてだ。何でその会社のヘリがこちらに接近してきているのだろうか。まさかあの中からココ・ヘクマティアルが登場するなんてサプライズは御免被りたいものだ。確か彼女はヨーロッパ・アフリカ地域の担当だったはずなので、このアジア地域にまで出張ってくるということは無いんだろうが。

つらつらと思考を巡らせていると、やがてヘリは俺と鳳仙のすぐ傍にまで接近し、ホバリングで留まった。

ガラツ、と側面のドアがスライドされる。機内から現れたのは、見

たことのない白髪の青年だった。見た目からして俺と年齢はそう離れていないように見える。どことなく顔立ちがココ・ヘクマティアルと似ているのは気のせいなんだろうか。

スライドさせたドアに手をかけたまま、青年は俺と鳳仙を交互に見てニコリとほほ笑んだ。うすら寒いものを感じさせる、人形のように温度を感じさせない貼り付けられた笑顔だった。

「御初にお目にかかるミスター楯無、ミス鳳仙。僕はHCL I社のキャスパー・ヘクマティアルという」

ドアを掴んでいないほうの手でネクタイを正し、キャスパーと名乗った青年は俺たちにそう挨拶をしてきた。

「つかファミリィネームがヘクマティアルって、やっぱ彼女の家族だったんだな。」

「ミスターには我が妹もお世話になってると聞いてるよ。どうだい？ これからお茶でも」

「そんな悠長な場面に見えてるのか？ お前には」「おーこわ。妹から聞いてた通りだ。抜身の刀も真つ青な威圧感、こりやバルメたちが一目置くのも頷けるな」

俺が放った威圧も飄々と受け流し軽口を叩くキャスパー。段々と暗雲が立ち込めてきたような気がしてならない。そもそもこの場にHCL I社が介入してくること自体が異常だ。この件に関して一切の企業には情報開示は行われていない。国家間で迅速に取り決められた軍事協定に抵触するからだ。

だからこそ俺はまだ雛も同然な生徒たちをも総動員して事態の収束に努めようとしていたのである。

それを知っているからこそ、俺はこのキャスパーという男が何をしにここまでやってきたのか疑問に思う。

腑に落ちない点はそこかしこに転がっているが、まず知るべきは彼の目的だ。

(HCL I社に情報を横流しした人間がいるってことなのか……?)

そうであれば違反どころではない。情報を流した本人には拘束と数年単位の監視が付くことになっており、さらには国家間の移動も不

可能となる。社会的な地位が消滅することは言うまでもないだろう。そこまでのリスクがあるというのに、情報を流す人間などいるだろうか。

(金が目が眩んだ輩か……)

まあいいさ、全部この場で吐かせてしまえばいいいだから。

そう結論付けた俺だが、意外にも先手を打ってきたのは向こうのほうだった。

「ああいや。誤解をされているようなら言っておきます。僕は別に貴方たちの作戦とやらには何の関係もありませんよ」

大きさに手を左右に振って、キヤスパーは言う。

「本当ならこの海域は僕の担当地域じゃないんですけどね、父に直接頼まれては断れない。東海……ああいやここでは日本海と言うべきかな、ここはうちの重要な拠点の一つでもあるんです。そんな場所でドンパチやれたらたまったもんじゃないでしょう？ だから僕はお二人のいざこぎを止めに来たってわけです」

ああでも、僕は拳で語り合うのは苦手ですよ、と。キヤスパーは一切の表情を変えることなく言い放った。

彼の証言は一応の筋が通っている。が、それを出張ってくる理由とするには少し弱い気がする。まだある、俺には言えないような、何か

が。  
そんな視線を察したのか、ここにきてキヤスパーの目が細められた。値踏みするような視線が俺に向けられる。

だがそれも一瞬のこと、すぐに元の表情に戻ったキヤスパーはやれやれと息を吐いて、降参だといわんばかりに両手を肘の高さにまで持ち上げた。

「ミスターはほんとうに勘が鋭いようだ。僕の言葉の中の嘘にも気が付いているようだし」

俺から視線を逸らさず、彼は真実を語りだす。

「正直な話、この場所で問題を起こされると国家間で揉めるんですよ。ただでさえこの海は日本、韓国、朝鮮が所有を主張している場所なんです。我が社としても大切な商談相手は一人でも多く確保しておき

たい。できることなら今すぐにもお二人にはこの場から離れてもらいたいです。排他的経済水域なんてものつくってまで領海を主張したいなら、ここは穩便に済ませておくべきだと思いますよミスター？」

「それは俺じゃなくてもつと上の人間に言うべき言葉だな」

「ご尤も。ですがこの場所にはあなた方しかいないのでね。それに頭の固い上層部に言つてすぐに何か変わるとは思えませんし。ほらジャパニーズドラマでも言うでしょう？ 『事件は会議室で起きてるんじゃない。現場で起きてるんだと』」

ニコリと、キヤスパーは精巧に作られた人形のような笑みを浮かべる。

向こうの言分は理解した。だが、それで俺もはいそうですかと引き下がるわけにはいかないのだ。立場上、作戦の遂行には全力を尽くさねばならない。IS学園の教師であると同時に黒執事の操縦者として、ここでみすみす敵を見逃すような真似はしない。

俺の意思を汲み取ったのか、キヤスパーは一度小さく息を吐いた。一般のヘリに比べれば揺れや安定感にかなりの違いはあるとはいえ、それでもドアを開け放ったまま平然と会話を続けるキヤスパーは実はかなり身体能力が高かったりするのかもしれない。

「困ったな。ここでミスターが退いてくれないとなると、僕の苦手な実力行使に出なくちゃいけないな」と、僕の苦手な

「出来ると思ってるのか？ 俺を相手に？」

それは出過ぎた発言だ、と言外に示す。傲慢でも強がりでもなく、ことIS戦闘に於いて俺と互角の勝負が出来るのは世界でも両手の指で数えられるほどだと自覚している。それはモンド・グロツソしかり、非公式な試合しかりだ。

しかしキヤスパーは俺の発言に首を横に振る。

「まさか。ISなんてものを使つての戦いでミスターに敵う人間なんて僕はおろか知り合いにすらいませんよ」

「なのに実力行使に出ると？」

「ああ、いや。僕らが実力行使に出るのはあなたじゃない。ミス鳳仙



のほうですよ」

直後。

キャスパーの乗るヘリコプターから、一人の女性が飛び出した。

## #45 収束と終息

「———そうか。いや、ご苦労だった。後は私が話を通しておく」

向こうの通信機のスイッチが切られたことを確認してから、千冬は誰にも悟られぬよう小さく息を吐いた。これまで気を張っていたために伸ばされていた背筋も、少しだけ力が抜けて丸くなる。通信の相手は鞆無を回収に向かうために戦闘空域へと向かったラウラからのものだった。彼女が言うには、既に戦闘空域に鞆無の姿は見当たらなかったという。通信衛星の映像にも彼の姿が映らないことから、地上ではなく地下や海中を移動しているのかもしれないということだ。

IS学園に在籍する生徒が失踪。これが表沙汰となれば由々しき事態になることは明白だが、今千冬の胸中を埋めているのは一夏が無事に生還したことによる安堵だった。

結果だけを見れば銀の福音の機能停止は成功、搭乗者であるイーリス・コーリングも無事に保護することが出来た。だがしかし、その過程はお粗末だと言わざるを得ない。急な作戦遂行にアクシデントは付き物だ。誰もが最悪を想定し、最善を尽くして最良の結果を得るように尽力する。一夏や他の代表候補生たちもそれは頭に叩き込んであったし、そうなるように力を尽くしたのだと思う。

それでも、実戦経験が足りなさ過ぎたことは否めない。そんな生徒たちを戦場へと送り出さなければならぬほどに事態が逼迫していたことは事実だ。だが、そうだとしても自身は奥に引つ込んで教え子たちを送り出さなければならぬ状況には奥歯を噛み締めた。

教鞭を取る立場上、生徒たちの前で狼狽えることはあってはならない。故にこれまで毅然とした態度を崩さなかった千冬だったが、その実心の内は心配と不安が絢交ぜになって気が気ではなかった。

作戦が無事に終了し、無事に生還した今だからこそうしていられるが、失敗していた時は自身がどうなっていたか想像に難しくない。

(……私情に流されそうになるとは、まだまだ青いな、私も……)

旅館の一室、開かれた窓から空を見上げる。

雲一つない澄んだ夏の夜空の中に、綺麗な月が浮かんでいた。



結果から言えば、俺はサイレント・ゼフィルスの操縦者である氷見鳳仙を見逃した。乱入してきたHCL I社の男、キャスパー・ヘクマティアルの言うがままになった形だ。

当然ながらその当初は見逃すなんてことを考えておらず、実力行使も厭わないつもりだった。ことIS戦闘において俺と同等に戦えるのは千冬や織村、あとは他のV7の面々だけだろうと思っていたし、一方通行の能力を使えば最悪へりを墮とすことだって造作もない。だから向こうがどんな出方をしようが俺は自身の考えを変えず、このまま氷見を捕縛してサイレント・ゼフィルスを回収するつもりだった。

そんな俺の考えを、おそらくキャスパー・ヘクマティアルは見透かしていた。

その上で奴は言ったのだ。『実力行使』という言葉を。

次の瞬間、キャスパーの背後から飛び出したのは見覚えのない女だった。首筋程までの黒髪に白い肌。アジア系の顔立ちをしていないことから欧米かロシアあたりの人間だろうと適当にあたりをつける。

その女は何の装備も持たないままに自然体で空へと飛び出し、次の瞬間には全身に装甲を纏っていた。

光沢のある黒い装甲に身を包んだ女は、俺ではなく氷見鳳仙の正面に降り立つ。

「こんにちは、お嬢さん」

「……誰だお前。気安く私の前に立つんじゃない」

「あらまあ。随分と嫌われちゃってるみたいよ？　ちゃんと話は通してあるのキャスパー？」

鳳仙の怒気を滲ませた声にも動じず、女は小首を傾げてキャスパー

へと振り返った。

「伝達事項はきちんと伝えているはずですよチエキータさん。少なくとも僕にこの仕事が回ってきたときにはもうココが手を打ってたんですから。もし認識の祖語があれば向こうの責任です」

「相変わらずドライねえ」

「まさかチエキータさんにそう言われるとは思ってませんでした」

チエキータと呼ばれた女は小さく笑い、くるりとその身体を反転させた。

必然、俺と視線が合う。

「初めまして、楯無くん」

「……………」

「あらあら警戒されちゃってるわねえ。ま、無理もないか」

俺が言葉を返さないことをたいして気にすることもなく、彼女は俺に話しかける。

「チエキータよ。親しい人はチエキと呼ぶわ、あそこにいる白いのボディガードみたいなものね」

「やだなあチエキータさん。それじゃ僕とは親しくないみたいじゃないですか」

「ごめんねえ」

「え、いや、うそでしょう?」

真顔のままのチエキータに冷や汗が止まらないのか、キヤスパーはスーツのポケットからハンカチを取り出して額を拭いた。

さて、いい加減俺もこの進展しない状況には痺れを切らしてしまいたいそうさ。

回りくどい話は止めて、さっさと事を進めよう。そう決めて口を開く。

「で? アンタが割って入ってきたことは、俺の相手はアンタでいいのか?」

「んん。別に相手をするのは吝かじゃないんだけど、今回は仕事のほうを優先させてもらおうかな」

「仕事だと?」

「そ、」

直後、俺の目の前からチエキータの姿が掻き消えた。

「ッ!？」

「こつちを回収するっていう仕事」

気が付けば、チエキータは鳳仙の腹部にアサルトライフルを突きつけた状態で立っていた。愕然とした表情を浮かべる鳳仙を気にする素振りすら見せず、彼女は容赦無くその引鉄を引く。

甲高い金属音が間断無く響く。ゼロ距離からの射撃ゆえに回避はおろかまともに身動きすら取れない鳳仙は、銃撃をもらに受ける形となった。

銃撃に合わせて小刻みに鳳仙の身体が震える。数十秒続いた銃撃が終わったころには、既に彼女は意識を手放しているようだった。

意識を失い、ISの展開が解除された鳳仙を小脇に抱えて、チエキータは嗜虐的な笑みを浮かべた。

「追ってきたいならぐっ自由に。その時は相応のおもてなしをさせてもらうわあ」

気絶した鳳仙をキャスパーに投げ渡し、再び俺と向かい合う。静電気のようにピリピリとした空気が肌を刺激しているのが分かる。最初に目にした時から感じていたことだが、この女は俺と同じニオイがする。表の世界とは違う場所で、文字通り命懸けの戦いを経験しただろう一般人からは決してしないニオイだ。

おそらくは人を殺した数も十や二十ではないだろう。

どうするべきか。このままみすみす見逃すのは避けられないところだが、かといって深追いついて周囲を危険に巻き込むことも出来れば避けたい。

どちらを選ぶべきか天秤にかけようとしていたところ、不意にプライベート・チャンネルが開いた。

『楯無、私だ』

「千冬?」

『銀の福音の活動を停止させることに成功した。一夏も無事だ』

それを聞いて心の内で一息つく。銀の福音を無事に回収すること

が出来たのなら織村の友人だというイギリスも無事なのだろう。セシリアとシャルロットを向かわせたが、その必要はなかったかもしれない。

「そうか」

『そちらの様子はどうか？ 必要があれば増援を出す』

「……いや、大丈夫だ。もう片が付いた。機体の回収は出来なかったが、被害は出さずにすんだ」

『了解した。ならすぐに帰還しろ』

一言返事をして通信を切る。

視線を向ければ、興味深そうにこちらを見つめるチェキータの姿があった。その瞳の奥に見える感情は、少しの驚きと安堵だろうか。

「意外ねえ。てつきりこの場でおっぱじめるものだと思ってたけど」

「元々俺たちに与えられた任務は二機の回収もしくは破壊だが、うちの生徒たちが無事ならそれ以上は望まない。それにこの場でアンタとやりあったところで、お互いにデメリットしかないだろうよ」

俺の言葉が意味するところを理解していたのか、チェキータは何も言わず、ホバリングを止めて帰路につくであろうヘリの中へと乗り込んだ。

その際何かを言いたそうにしている彼女の横顔を、俺は見なかったことにした。

「――結局、<sup>ア</sup>キャスパアの思惑通りにことが進んじまったってことだよな」

あの時の行動に反省や後悔はしていないものの、抱いた疑念はなかなか払拭されない。

あの場所にHCL I社が割って入ってきたこと。鳳仙を回収したこと。普通に考えればこの二つが裏で繋がっているということになるだろう。

だが、何かが引つ掛かる。俺が今見ているものは氷山の一角に過ぎず、更にその裏でもっと大きなことが起こっているような、陰謀めいたものを感じずにはいられなかった。

考えすぎだと言われれば返す言葉も無いが、何年も暗部を見ているとそういった危機感知能力というものは少なからず向上されるものだ。その第六感とも言えるべき部分が警鐘を鳴らしている。これは今までのものとは比較にならないほどに大きな事柄へと繋がっている。

心の準備だけはしておくべきだろう。そう結論付けて一旦その思考を打ち切る。

何はともあれ、こうして無事に銀の福音事件を乗り越えることができたのだから今はそのことを素直に喜ぼう。一夏が海に落ちたと聞いたときはその先を分かっているも肝を冷やしたが、終わってみればきっちり二次移行（セカンド・シフト）して戻ってきたというのだから大したものだ。本人に向かって直接褒めるような真似はしないけれど。

ちらりと部屋に予め備え付けられている壁掛け時計に目をやる。いつのまにか午後九時を回っていた。どうりで腹が減っているはずだ。思えば朝食以降まともな食事を摂っていない。夕食の時間はとうの終わってしまったているし、女将に夕食を作ってくれとお願いするものもなんだか申し訳ない。

「コンビニでも行くか……」

生徒たちは今日一日旅館から外に出ることを禁止されているが、俺を含む教師たちは別だ。

千冬や真耶はおそらくほかの部屋で上層部への報告に忙しいだろう。ついでに何か軽食でも買っておこうと決めて、静かに部屋を出た。

「……………で？　なんでお前と鉢合わせにやなんのだ」

「こっちのセリフだくそつたれが」

旅館を出て目の前の道路を右に曲がったらばったりと織村と出くわしたの凶。

どうやら織村も俺と同じく夕食を食べ損ねたらしい。コイツの都合はイーリスを専門病院に搬送したりアメリカと連絡を取ったりと時間が取れなかったらしいが。

そんなわけで図らずも二人でコンビニへと向かうことになった。ISに興味を持つ人間からしたら知名度がダントツな二人が並んで歩くこの光景をどう思うだろうか。などとどうでもいいことをぼんやりと考えていると、唐突に織村が口を開いた。

「イーリスは大事無いみたいだ。脳への障害も残らないって医者と言ってたよ」

「そうか、良かったな」

お前の大事な友人なんだろう？　そう聞き返すと織村は小さく笑った。

「俺とナタルとの、だな。付き合いだけならナタルのほうが長い。俺はナタルが卒業してアメリカに戻るまでの間にイーリと仲良くなったんだ。ま、最初は男の日本人だってんでかなり険悪だったがな」

「お前人相悪いからな」

「お前にだけは言われたくねえよ」

俺の軽口に軽口で返す。こんなやり取りをするのも、いったい何年ぶりになるだろうか。思えば織村と和解するまでの期間のほうが長いわけだから当然だが、コイツと二人きりで話すというのもかなり久しぶりに感じられる。

「……一夏の二次移行も見た。ありや篠ノ之のやつ、かなり入れ込んで作ってたな」

「そんなに違ったのか？」

話題は切り替わり、一夏の白式の二次移行を間近で見ていた織村が俺の問いに答える。

「ただでさえ機動力だけなら現行トップの白式の二次移行。そのスラストターが六基だぞ。どこまで速度を追求すりゃああの形になんのかね」

「二次移行にはコアとの対話が必須だからな、大方一夏が望んだ何かに関係してんだとは思うけど」

この会話の前提条件として、二次移行するためにはコアとのシンク口率が八割を超えなくてはならないという共通認識が必要である。この知識は原作からの引用ではなく、東から直接聞いた話だ。



通常、I S コアとのシンクログが一割を超えれば起動することができ  
る。大半の女性がこれにあたるわけだが、その中でも親和性が高く二  
割から三割のシンクログを可能とする人間がI S 学園の生徒として入  
学することを許されるのだ。当然頭脳もそれに付随してそれなりに  
なければいけないが。

女性の全体で見ればシンクログ率が二割以上を記録できるのはたつ  
たの九パーセント、一桁だ。これを見れば、I S 学園というのが如何  
に敷居高く、その生徒たちが優れているのかが理解できるだろう。

因みに代表候補性クラスともなればシンクログ率が四割から五割に  
達し、国家代表ともなれば六割以上になる。

しかしながら、たとえ国家代表であっても二次移行できる人間は滅  
多に現れない。

I S が開発されてから十年。これまで二次移行にまで達した人間  
は片手の指で数えられるほどだ。それほどまでに二次移行とは困難  
なものであり、だからこそこんなにもあつさりその領域に足を踏み入  
れた一夏に驚きを隠せない。

「ま、多少脇道に逸れはしたが大体は原作の通りに進んでるってこつ  
た。俺やお前みたいなイレギュラーがいたって、大きな相違にはなら  
ねえってことだな」

「その大きな、つてのがどこまでを言ってるのか知らねえけどさ、男の  
操縦者が四人もいる時点でそれはもう大きな歪みなんじゃねえの？」  
「わかんねえぜ、ひよっとしたら他にもまだ隠れてるかもな」

そう言つて笑う織村。あながち無いとも言切れないのがなんと  
も言えない俺の微妙な表情を作り出していた。

織村の言うようにこの先、五人目、六人目の男性I S 操縦者が現れ  
ないとも限らない。そうなった場合この世界にどんな変化を齎すの  
か想像すら出来ないが、今はただ悪い方向に向かわないことを祈るし  
かない。

「……篠ノ之とはきちんと連絡とってんのか？」

次の角を曲がれば目的のコンビニが見えてくるところまで来て、唐  
突に織村が呟いた。視線は前に向けたまま、静かに俺の返事を待つて

いる。

「ああ。……お前との約束もあるからな、蔑ろになんかするわけないだろ」

「ならいいけどよ。ちよつとでもあいつらを放っておくようなら俺が迷わず貫つてくからな」

「それはナタルに言っていいいんだな？」

「マジすんませんでした言わないでくださいお願いします」

見本のような美しさと速さで直角に腰を曲げて頭を下げる織村。この速さからして、どうやらアメリカでも何度かこういったやり取りはしているらしい。謝罪のやり慣れている感が半端じゃない。なんだ、こいつをからかえるやつが海の向こうにも存在していたのか。こりや近いうちにそいつと二人で織村をからかわなくてはいけないな。

織村と二人で真面目な話をするのは未だに違和感が拭えない。本当に大切な話であってもさっさと要件を済ませ、こうして軽口を叩いていたほうが何かと気が楽なのだ。それはきつと織村も同じだろう。俺が話を変えたところで僅かに口元が綻んでいたのがその証拠だ。「ま、互いに積もる話もあるだろうからな。今夜は二人で飲み明かすとしようぜ」

「IS学園の教師がそんなことしていいのかよ」

「明日に支障が出なきや問題ないさ。お前とナタルの話も聞きたいしな」

「だったらお前ら三人の話も聞かせろよ。篠ノ之がおめでたなんだっけか？」

「んなわけねーだろ勝手に孕ませてんじゃねえ」

遠くの空で私はいつでも準備おつけーだよーと聞こえたような気がしたが、全力でそれを聞かなかったことにした。



「もう、心配したんだからね一夏ツ！」

「わ、悪かったよ。だからその拳を下ろしてもらえると嬉しいんだけ

どな鈴」

「でも本当に良かったぞ一夏。撃墜されたと聞いたときは気が気ではなかった」

「悪い、心配かけちゃったな箒。箒たちが海域の封鎖をしてくれてたおかげで被害も出さずに澄んだ。ありがとう」

夕食を他の生徒たちとは別の場所で済ませて、今回の作戦に携わった一年生八人は大部屋でそれぞれの無事を喜び合っていた。

やはりというべきか真つ先に叱責を受けているのは一夏で、周囲を七人の女子に囲まれ逃げ場がない状態でお小言を甘んじて頂戴している。

「だが二次移行したと聞いたときは驚いたぞ」

「僕もびつくりだよ。まさか一夏が二次移行しちゃうなんてね」

手元に置いてあったせんべいを可愛らしく齧りながら言うラウラにシャルロットも首肯した。

「俺もあれが二次移行だなんて思いもしなかったよ」

「……とにかく、無事で良かった」

緑茶を啜る簪に、全員がそうだなと頷いた。

やんわりとした緩い空気が充満する。そんな中、鈴が口火を切った。

「とここでさ、簪。あんた一夏が落とされた時にいの一番に突っ込んでいったってほんとなの?」

「ぶふっ!? けほっ、けほっ!」

「あ! その反応はほんとなのね!? どういうことか説明してもらおうかしらあん!」

「ど、どうもなにも、仲間が落とされたら駆けつけるのが当たり前……」

「お前らそれは俺のいないところでやってくんない?」

一夏のお願いはあっさりスルーされ、簪さん大尋問会の幕が切つて落とされた。

因みにこの話題に興味のないシャルロット、箒は速やかにその場からフェードアウトしていったそうなの。

そんな話題から一夏の好きな人は誰なのかという話題に切り替わり、逃げ場を無くした少年が火だるまにされるのは、この数分後の話である。



時は少しだけ遡り、キヤスパーが鳳仙を回収したすぐあとのヘリコプター機内。未だ気を失ったままの鳳仙の四肢を拘束具で固定して椅子に横たえ、残った座席にキヤスパーとその護衛、チエキータが腰を下ろしている。ヘリは日本海を越えて今は中国の上空を飛行中だ。本来なら領空侵犯だのと言われているだろうが、HCL I社に限って言えばそれは問題ない。故に悠々自適にヘリは目的地へと進路を取っていた。

最新設備が使われているせいなのか揺れどころかモーター音さえも聞こえないほどに静かな機内でおもむろにキヤスパーが息を吐いた。それは緊張が切れたことによるものだと、隣に座るチエキータは正確に理解していた。

「フウ、流石に緊張しましたねえ。あの場でドンパチ起こされてたらたまったもんじゃありませんよ」

「フフ、確かによく引き下がってくれたわねえ彼」

「あの感じだと僕がまだ何か隠してるってことにも気づいてそうですね。流石はココに最重要視される人物だ。底が知れないってのはああいうことを言うんでしようね」

キヤスパー・ヘクマティアルという男は基本的に自分の目で見たものだけしか信じない。言ってしまうえば超現実主義の男である。だからいくら肉親であり信頼の置ける妹の言葉とは言え、更識楯無という男がそこまで危険視するほどの人物なのかかわずかばかりの疑問を抱いていた。

だがそれも楯無と視線を交えるまで。そこで彼は己の考えを改めた。これはココの言う通り、恐らくは地球上で最も警戒しなくてはならない獣だと。

その意見にはチエキータも概ね同意見らしい。

「ほんと、あそこで刃を交えなくて良かったわ。私も久しぶりだったわよ、鳥肌立ったの」

彼女もココの私兵同様、超のつく凄腕である。その彼女をしてここまで言わせる男の実力を、キャスパーは改めて理解した。

「でもま、うちがつくったISの性能も出来ればチエックしておきたかったんですけどね」

「初飛行でおしゃかにしてもいいってんなら戦ったけど」

「それはゴメンですね。それ一機つくるのに億単位の額を投入してるんですから、もう少し役立てないと」

HCL I社は基本的に武器の販売を行う会社である。海運王と呼ばれたキャスパーとココの父親である現社長を筆頭に、世界各地で武器の販売を行っている。

その商品の中には、当然のようにISが存在した。武器のリストの中に、堂々とその姿を晒しているのだ。当然他の兵器に比べれば金額に天と地ほどの差があるが、それでも注文を取り付けようとする輩はあとを絶たない。

そんな中でHCL I社が独自開発したのが先程チエキータが纏っていた漆黒のISだった。製造方法は全く明かされていないものの、篠ノ之束が作成したコアと同質のものを核としてほぼ同じ性能を発揮できるパワー・スーツ。

「ま、それでもやっぱりオリジナルには及ばないんですが」

「コアの解析は出来なかったんしょう?」

「ええ、世界の名だたる科学者を集めましたがついぞその中身がなんなのか知ることとはできませんでした。でもそれが全くの無駄ってわけじゃないんですよ、それがこの擬似ISの完成に繋がったんですから」

「ま、見た目と性能だけならほぼ同じよねえ」

「そうでしょう? 欠点は二次移行が存在しないのとオリジナルに比べて展開維持時間が短いってことくらいですかね」

と、そんな会話をしていると突然へりを操縦しているパイロットか

ら二人へ通信が寄越された。

『キヤスパー様、前方に正体不明の物体が』

「なに？」

訝しげに眉を潜めて、横の窓から前方を見る。

そこには、黄金の鎧があった。

「なんだ、あれは……」

よくよく見てみれば、その黄金は人の形をしていた。

どうやら緩やかに移動しているらしいその人の形をした黄金の鎧を近くで視認して、キヤスパーはその正体に気がつく。そして口元を手で覆った。堪えきれそうにない笑いを必死で押さえ付けるかのよう。

「僕はついてる。まさかこんな形で彼と接触できるなんて」

黄金の鎧、《黄金伯爵》を纏ったままの皿式鞘無を発見したことで、キヤスパーはその口角を持ち上げる。

手に入れられなかったピースの一つが、こうして転がり込んできたことは僥倖以外のなものでもない。

こうして三人目の男性IS操縦者、皿式鞘無は誰も行方を把握できぬまま、忽然と姿を消したのだった――。

## # もうひとつのプロローグ

「っだあー。散々な二日間だった」

一目で高価だと分かる柔らかな座席の背もたれに身体を預けて茶髪の青年、織村一華は天を仰いだ。

想定外のSSクラス任務の遂行という大変な思いをした昨日から一日経った翌日、織村とナタルはあらかじめ予約を取ってあった飛行機の機内に居た。

はあ、と重たいため息が織村から漏れる。IS学園が毎年行っている一年生の臨海学校に顔を出してみれば到着早々己の過去を体現したかのような少年と相部屋にされ、その翌日は模擬戦、最終日は緊急任務と気の休まる時間をこれっぽっちも確保できなかったのだからそれも無理からぬことだろう。軽い気持ちで来ることを了承した数ヶ月前の自分を呪ってやりたい気分だ。

彼の横に座る金髪の女性、ナターシャ・ファイルスはその疲れを労うように織村の頭を優しく撫でる。

「でもほんと、イーリも一華も無事で良かった」

「……だな」

昨日の事件のことを思い出して、二人は神妙な顔つきになった。

イーリに与えられるはずだった専用機《銀の福音》の暴走。その発端となったアメリカの研究所の襲撃。同時期に起こったイギリスの強奪事件と無関係だと言い切れるほど二人の脳内はお花畑ではなかった。

この二つの事件は裏で繋がっている。そう考えるのが至極真つ当であり、その意見には千冬や楯無も同意していた。楯無の話ではこの件には世界的に有名な企業、HCL I社も一枚噛んでいるらしい。話がどんどん複雑になっていくことに混乱を覚えるが、一先ずはこうして無事に本国へと帰ることが出来るのだから良しとしよう。まさか臨海学校に顔を出すだけで命の危機に晒されるとは露程も思っていなかったわけだが。

今言った件もそうだが、織村にはもう一つ頭から離れない問題が

あつた。

それは彼にとつても他人事では済まされないものであり、責任の一端は自身にもあるだろうと思つてのことだ。

（皿式鞘無が消えた、か……）

ファーストクラスの背もたれに体重を預け、深く沈み込む感覚を味わいながら考える。

皿式鞘無が命令を無視して戦闘空域に現れたこと。確かにそれ自体も問題ではあるが、彼の専用機が束直々にチューンアップしたということも引つかかる。あの天災科学者、篠ノ之束はひと握りの人間を除いて全く興味を示さない。話しかけないとか視線を合わせないというレベルでなく、そこにその人間がいらないかのように振る舞うのだ。その異質さを、織村は身をもって経験している。

そんな彼女が、見るからに不審なあの四人目のために専用機を改造するなんてことが有り得るのだろうか？

（いや、現実にはそうしてるんだからそうなんだろうが、何か企んでるような気がしてならねえな）

稀代の天才と言われる所以は何もその明晰な頭脳だけではない。彼女は戦闘能力も人外じみていることを織村は身に染みて理解している。

以前手合わせしたときは専用機の受け取りを拒否したために無理矢理行われたものだったが、もしかすると皿式鞘無が専用機のチューンアップを断っていた場合もそうになっていたのだろうか。そう考えると背中に冷たいものが流れた。

顔色を悪くする織村に気がついたのか、ナタルが気遣わしげな視線を向けてきた。

「どうしたの？ 大丈夫？」

「ああ、いや。ちよつと昔のこと思い出しててな」

「昔って？」

こてんと首を傾げるナタルのその仕草は美しい見た目とのギャップもあつて一層可愛らしく見えた。機内に居る男性客の多くの視線を集めていることがそれを証明しているだろう。斯く言う織村もそ



んな彼女に一瞬見惚れていたので兎や角言うことは出来ないわけだが。

それをごまかすように視線を宙にさ迷わせ、ぼつぼつと昔のことを掘り返していく。

「お前がまだIS学園に入学する前の話だ」

「それって更識先輩とか千冬さんとかといがみ合ってたときのこと？」

「いがみ合ってたつつうよりも、俺が一方的に突っかかってただけなんだけどな」

当時のことを思い出して、思わず苦笑する。

いくら若気の至りもあつたといえ、今思えば自分でもドン引きしてしまうような行いの数々だったと恥ずかしさに身悶えしてしまいそうになる。

今でこそ楯無とも笑い話として済ますことができるが、もしもあの時のままの自分であつたなら、今こうしてナタルの隣にいることなど出来なかつただろう。

飛行機は離陸して安定飛行に入ったのか、機内にシートベルト着脱のアナウンスが流れる。横の窓からは青々とした空が視界に飛び込んできた。

ここに来て織村は、自身の身体が思ったよりも疲労を溜め込んでいたことを自覚した。緊張の糸がぷつぷつと切れてしまったのか、両の脇が異様に重く感じられる。半目で隣の席を見てみれば、ナタルは既にウトウトと船を漕ぎ始めていた。

そんな彼女の寝顔が、織村の睡魔をさらに刺激する。

しばし抵抗を続ける織村だったが、やがて襲い来る睡魔に押し切られゆつくりと意識を手放していった。



少年、織村一華がこの世に生を受けたのは偶然ではなく必然だった。

彼はいわゆる転生者と呼ばれる存在だ。前世の記憶を維持したまま二度目の生を受けた存在。その影には神様だとか言われる不確かな人間の上位種があるようだが、この時の織村にとってそれはどうでもいいことだった。何よりも重要なのは時分が前世の記憶を保持したままアニメや漫画の世界に行くことができるということ。生前そういう小説を愛読していた彼にとって、それは願ってもないことだった。

詳細を聞かされてからの行動は迅速だった。神様転生にはつきものだというチート能力を貰い受け、容姿も好きなように変更し、必要最低限のことだけを聞いてさっさと新しい世界へと飛び込んでいったのだ。

転生先の世界はインフィニット・ストラトス。ISなんて兵器を中心としたスクールラブコメ。

ラブコメってんなら一大ハーレムを築いてやるぜオラア、と意気揚々と新世界へ殴り込んだ織村だったが、一番はじめに目にしたのは目の前で幸せそうに笑う二人の人間だった。見覚えはない。もとよりあるはずがないが、なんとなくこの二人が自分の両親なんだろうということに察しがついた。

生まれてきた子供を両腕で大事そうに抱いて笑みを零す母親に、実はその子供は普通の人間ではないんですと言ったらどうなるのだろうか。この世界にまだ大した執着を抱いていなかった織村は、そんな邪なことを思いさえした。

「ねえあなた。私、この子の名前もう決めてたの」「へえ。なんて名前なんだい？」

「男の子でも女の子でも、『一華』。他の誰でもなく、この子にしか咲かせられないような立派な華を、人生を歩めますようにって」

幼少期の記憶を、織村はよく覚えていない。

この両親の顔だって、今となってはよく思い出すことは出来ない。彼らは既に、この世を去っているからだ。写真を頻繁に撮るようなこともなかったから、家族写真も残されていない。

でも、だけれど。

このときの母親の言葉だけは、今でもはつきりと彼の中に残されていた。



インフィニット・ストラトスの世界に転生して五年。なんの動きも見せない生活に本当にここはISのある世界なのかと疑問を抱き始めた頃、織村は唐突にその疑問を解消することになる。

五歳にあがったことで近所の幼稚園に入園することとなり、その初日に全ては始まった。

割り振られた教室の中に、原作でも最重要キャラクターである人物の面影を見せる少女たちがいた。彼女たちを見た瞬間、織村は全てを悟った。この世界が余りにも平凡だと思われた理由。そもそもこの世界にはまだISなんてものは存在していなかったのだ。

開発者である彼女がまだ幼女なのだからそれも当然のことだが、織村はそんな彼女たちと同年代に生まれていたことを神に感謝した。

ああ、これは神も俺にハーレムを築き上げろと言っているんだなと、なんともな思い込みを發揮して。

だがしかし、幼女とは言え流石は篠ノ之束と言うべきだろうか。五歳児のくせに最新型のノートパソコンをブラインドタッチで使いこなすのは非常に周囲から浮きまくっている。周りの園児たちはにこと教室の後方に集まる保護者たちのほうをむいて笑っているというのに、一人だけが一心不乱に画面を見つめ続けているのだから。まったく、やれやれ、しょうがねえなあ。

園児らしからぬ態度という点では織村もあまり人のことは言えないが、ここはいつちよ助け舟でも出してやるかと心の内で呟く。

これをきつかけにして篠ノ之束を、あとは芋蔓式に織斑千冬とも仲良くなつて恋愛フラグを構築してやろう。そのための一步を踏み出そうとした、そのときだった。

「……なんなのかな」

まだ話しかけていないというのに、束はモニタから視線を離してそ

う言ったのである。

おいおい俺ってばそんなに存在感放っちゃってんのかと自意識過剰に拍車がかかる織村だったが、どうやら声の向かった先は織村ではなく、その近くに立っていた少年だったらしい。濃紺の髪の毛に日本人にしては多少くつきりとした目鼻立ち。モブキャラにしては濃いな、とこの時の織村はとくに深く考えもせずに思った。

大方作業に集中している束の機嫌でも損ねてしまったのだろう。不機嫌さを隠そうともしない束の表情から容易く推測することができる。

「なんなのかなジロジロこっち見て。鬱陶しいから束さんの視界に入らないでくれる？」

にべもなく切り捨てる束。それを見て、織村はご愁傷様と見知らぬ少年に内心で合掌。ああなってしまった束はもうあの少年と口をきくことはないだろう。興味のない人間にはとことん無関心であることは原作の知識もあつて十二分に知っていた。

だから、織村は全く警戒していなかった。

自分以外に原作キャラクターである彼女たちと親交を深めることができる存在が身近にいるなんて、これっぽっちも思っていなかったのだ。

「ああ、悪かったな。綺麗な髪してたから、見とれてた」

瞬間、織村に衝撃走る。

単なるモブの一人に過ぎないと思いついていた少年は、束の髪を綺麗だと言ったのだ。そしてその言葉に、まんざらでもない表情を浮かべている束がいる。言葉では不機嫌であると主張しているが、五歳児の見栄などお見通しだ。あれは確実に喜んでいる。その事実が、織村には信じられなかった。

その後すぐに教室に担任の先生が入ってきたが、あまりの衝撃に織村はしばらく呆然とするしかなかった。

そんな彼が正気を取り戻したのは、園児たちの自己紹介が始まって間もなくだった。

名前順で座席が決められているために『あ』から順番に自己紹介が

行われていくなか、自分の番が回ってきたのだ。多少慌てたが、今更自己紹介程度でたじろぐわけもない。他の五歳児たちは自分の名前と好きな食べ物を言うくらいが関の山だが、前世から数えて二十になる織村にはもっと詳細な自己紹介が可能である。

「織村一華です。身長は110センチ、体重は24キロ。好きな食べ物と和食で座右の銘は生涯現役、好きな女の子のタイプは強くて博識な子です」

これまでの園児たちが行ってきた自己紹介とは一線を画す織村の堂々としたその態度、言葉遣いに園児たちはおろか担任の先生や保護者までもがあんぐりと口を開けていた。形容し難い空気が教室内に漂う。それには気がつかず、織村は満足げに一つ頷いて着席した。

その動作でハツとなった担任が、自己紹介の続きを次の園児へと促す。腕組みをして意気揚々と瞳を閉じる織村は、その声を聞くまでまったく気がついていなかった。

元より座席が真後ろであること、その園児が時間ギリギリになんて後方の扉から入ってきたことで、これまで織村はその園児の存在を感じ取れずにいたのだ。

だから余計にだろう。予期せぬ衝撃は、束を発見した時以上のものとなった織村の脳天を直撃した。

「お、織斑千冬です。よろしくお願ひします」

本日二度目の衝撃が織村を襲う。

考えてみれば確かにその可能性はあった。原作でも昔から知り合いです。いであることは記されていたのだから、こうして通う幼稚園が同じであつてもなんら問題はない。

想定外の幸運に、織斑は机の下で思わず拳を握った。

織斑千冬、篠ノ之束。

この二人と幼い頃に知り合えたのはこの上ない幸運に違いない。

片や世界最強の名を欲しいままにするIS界の伝説。片やISという規格外の兵器を一から作り上げた真正銘の天才。

そんな二人とこうして同じクラスになれたこと。これはきつと、主人公補正というやつに違いない。

転んだだけで女の子のパンツにつっこむ。無意識のうちに女の子の胸を揉みしだく。その世界の主人公にしか持ち得ないご都合主義の数々、これもそのなかの一つなのだ。織村は確信した。

(俺は主人公……。やっぱ転生者ってすげえ)

転生特典の一つである能力は一向に使える気配を見せないもの、こうして原作キャラクターたちとエンカウトできたことでそんなことはどうでもよくなってしまった。

この世界は自分を中心にして回っている。そう思えることが、なによりも幸せだった。

五歳児だった織村は、このとき単純にそう考えていたのだ。

◇

だが織村一華の前に突如として障害が立ちはだかる。

世界の中心たる自身を差し置いて、あろうことか千冬や東と親し気に話をしている癪に障る男だ。

彼の名は更識形無。入園式の日、東を口説き落とそうとしていた、濃紺の髪の毛が特徴的なモブだと思いついていた少年である。

これまで織村は事あるごとに千冬たちと仲良くなるチャンスを潰されてきた。

幼稚園の頃は砂場で遊ぼうとしていた千冬を誘おうとしたら横から形無が現れて手を引っ張って行ってしまい、一人静かにパソコンをいじる束に気を利かせてそっとしておこうと考えていたら、氣遣いを無視した形無が強引にモニタを覗き込んで何かを話出す。

小学校の頃はクラスが違う形無のほうへと二人は頻繁に顔を出しに行き、織村とはろくすつぽ会話することは無く。

中学校の頃ついに我慢が限界を迎え誰が主人公であるのか説教してやろうかと思ったら体育祭で連行された。

これはもう、更識形無という疫病神に邪魔をされているとしか思えなかった。

初めてまともな彼と会話をしたのは、中学校一年生するときだった。

ろうか。

ばったりと廊下で出会った彼の両隣には、中学生になって女性らしさが際立ち始めた千冬と束。それを見た瞬間、織村の脳内回路が弾けた。

「おいテメエ、嫌がる二人を侍らせて楽しいのか？」

「……は？」

「二人の顔見てみるよ。好きでもねえ男に無理矢理連れられて心底嫌そうさ。すぐにやめろ、そして消えろ」

「いやいや待てよ。お前何言ってるんだ？　つうか寧ろ俺は被害者……」

「被害者ツラすんじゃないやねえよ馬野郎。なんなら今ここで目にも見せてやろうか？」

ああん？　とチンピラまがいの声を上げる。この時学園都市第二位のホスト崩れを若干意識していたのは秘密だ。

この後横の二人が織村へと何か強い言葉を投げたようだったが、自身の口撃に満足して振り返り歩き出していた織村の耳には届かなかった。

これで大丈夫だろう、織村は安堵していた。二人についた悪い虫を追い払い、ここから本当の物語を始めよう。そう本気で思っていた。

中学生にあがったころには超能力も徐々に発動できるようになり、大まかなその性質も理解出来るようになってきた。この能力を自由自在に操ることができるようになれば、ISなど無くとも十分勝負になるだろう。どころか圧倒することさえ造作もないかもしれない。

自らに宿る強大なチカラに、織村の態度はどんどん大きく、そして横柄になっていった。

そして中学三年の冬。

待ち望んだ一報が世界中を駆け巡った。

インフィニット・ストラトス。ISの誕生だ。

原作でも詳しい描写がなかったために想像しにくかった束が起こした事件も、忠実に再現されていた。……かに思われた。

『白騎士事件』。確かそう呼ばれていた筈だ。束が開発したIS《白

騎士』を纏った千冬が、発射された二千発以上のミサイルをその手に握るブレード一本のみで迎撃したという全てのはじまり。

だとすれば、だとするならば。今テレビで放送されている『黒白事件』とは、一体なんのことを指すのだろうか。《白騎士》の横に並び立つ『黒執事』とは、一体なんなのだろうか。

そんな織村の疑問は、数カ月後の東が衛星中継をジャックするまで蟠ったままだった。

『なんと!! あれの『黒白事件』の黒執事が誰なのか判明したんだよ!! 彼の名前は更識形無。世界初の男性 I S 操縦者ツ!!』  
時が止まったような錯覚に陥った。

黒執事というあの I S、操縦者は当然のこと女性だと思い込んでいた。 I S のたった一つの欠陥、女性しか起動させることができないという前提条件が、早くも崩れ去った瞬間だった。ありえない、と思っただって判明するのはずっと先の話だ。

同時に正体を聞いてこうも思った。

「どこまで行っても俺の邪魔をするのか……! 更識形無っ!」

こうしちやいられないと、織村は迅速に行動を開始した。男性の適合者が発見されたことで世界各地で行われることとなった適性検査に乗り込み第二位の能力である『未元物質』を用いて I S を強引に起動。来年度から設立されることとなった I S 学園への入学切符を取り付けたのだ。

この時点で織村の中で更識形無という少年は真っ先に排除しなくてはならない異分子と認定された。

現れるはずのない三人目の男性 I S 操縦者。そんなイレギュラーは必要ない。片付けられるときに片付けておくべきだと判断したのだ。

だが必然かはたまた運命のいたずらか、織村と形無が直接対峙することは入学してから数ヶ月経ってもなかなか訪れなかった。

教室へ直接殴り込んでやろうかとも考えたが、そうした場合間違いなく自身に責任を要求されることになるだろう。やるならば自身に



被害が及ばず、それでいて向こうに最大限の痛手を負わせられる状況がベスト。しかしながらそんな都合の良い状況など、そうそう生まれるわけもなかった。

焦燥ばかりが募り、煮え立つ苛立ちへと変わっていく。こうしている今も形無は千冬や東と同じクラスで会話を楽しんでいるのかと思うと、自身でも怒りを抑えられなくなりそうだった。

その怒りを発散することが出来る場が設けられたのは、七月の臨海学校。様々な思惑が重なりあった結果、形無と模擬戦をすることになったのだ。

願ってもないチャンスだと舌なめずりをした織村の顔は、鼻肩目に見ても主人公を名乗れるような表情ではなかった。

世界初の男性IS操縦者という肩書きを持つ形無は世間からもなにかと持て囃されているが、実際は世界で二番目の男である己のほうが優れていると周囲に知らしめるいい機会だと思ったのだ。そして弱い男なんかよりも、千冬たちは強い男のほうが好きに決まっている。

彼女たちの目の前であの男を倒せば、きつとこちらに戻ってくれるだろう。そんな期待を胸に、織村は当日のフィールドへと降り立ったのだ。

結果は惨敗。

この日初めて織村は敗北を知った。

そしてこの日、初めて更識形無という男の異常さをその身を以てして感じ取ったのだ――。

## # そして少年は生まれ変わる

——織村一華がIS学園に入学してから一年。

学年が一つ上がり、二年生になる頃には更識形無、織斑千冬、篠ノ之束の三人は学園内で確固たる地位を築き上げていた。

ISの発表に押される形で急ピッチで進められることになったIS学園設立。その際に集められたのは十五歳から十七歳までのIS適性を持つ子供であるが、その学年は一つにまとめられている。故に上の学年が上がって後輩は出来ても先輩は存在せず、一期生内での地位を確立させるということはそのまま学園内での地位の確立に等しい。それを三人はこの一年間で見事にやってのけたのだ。

篠ノ之束はもとから技術分野に於いて抜きん出た実力を示していたが、形無と千冬に関しては主にその戦闘の技術と実力の高さで周囲を認めさせた形である。

《黒執事》であると正体を明かしている形無はともかく、《白騎士》の正体が千冬であることは形無と束しか知らない。そんな中でも周囲から認められ、また敬われているのはひとえに彼女の實力と人徳の高さゆえだろう。

ともかく、IS学園が設立されて一年。今や学園内で彼ら三人は密かに『ビッグ3』などと呼ばれ、ISというものを象徴する存在のよう成長していた。

さて。そんな中、織村一華はというとである。

「くそがくそがくそが……、どうしたらアイツに勝てるんだいやそもそも末元物質が通用しないって有り得んのかそんなの一方通行だけだろうがじゃあなんでアイツには俺の攻撃が通用しないんだでも完全に無力化されてるわけじゃねえじゃあどうやってその突破口を拡げていくかだいや待てよ……」

「お、織村くん？ 大丈夫？」

IS学園に入学してから通算二十二回目の敗北を味わい、休み時間も自分の世界にどっぷりと浸かっていた。心配して声をかけてくれたクラスメイトの声さえも、今の彼には一切届いていないようだ。机

に肘をついて額をおさえる彼の顔からは、言い知れぬ悔しさが滲み出ていた。昨日もどうして、形無相手に勝利を収めることは出来なかったからだ。

今年の夏、臨海学校で初めて形無と対戦し敗北してから織村は何かにつけて模擬戦を申し込んでいくのは、全く敗北している。

今となつては織村が形無に挑戦状を叩きつける光景が学園内の日常になつていくほどだ。その頻度は週に一回、多ければ月に五回にも及ぶ。

その回数は昨日で実に二十二回。どの対戦も負けず劣らずの完敗である。試合時間だけを言えば確実に長くなっているのだが、未だに織村は形無に致命的な一撃を与えられないでいた。

そんな戦いがここ一年続いていけば、周囲からの評価というのは自然と決まってくるものだ。形無や千冬が学園を代表する猛者として君臨している傍らで、織村一華という少年はそんな彼らに挑む勇猛果敢な挑戦者だと認定されていた。

本人の預かり知らぬところでは腐った女子が形無×一華本の制作に取り掛かっているというのだから、一華が周囲からどんな目で見られているのかは察するべきだ。

（何でだ、何でアイツに勝てねえ？ 主人公補正つてやつが上手く機能してねえのか？ いや、能力は正常に作動してる。それでも馬野郎に届かねえ……！）

最初に戦った臨海学校の二日目も。夏休み明けの放課後も、学園祭の夜も。どれだけ戦いを重ねようと、更識形無という男に決定打を与えられない。そんな時分がもどかしかった。神が与えた障害というには、あの男は些か無理が過ぎる。第二位の超能力を以てしても勝利できないなど、どう立ち回ればいいのか。

周囲にいつまでも挑戦者だと思われるのも問題だ。あくまでも立場的に上なのは自分なのだとしめなければならぬ。千冬や束と並んで『ビッグ3』などと呼ばれ浮かれている男に、いつまでも苦汗をなめているわけにはいかないのだ。

「っし、そうと決まれば馬野郎のところを殴り込みだッ!!」

「きやあつ!?!」

「あ、ごめん」

織村が机で一人ぶつくさと精神世界にトリップしている間、ずっと横で心配そうに顔色を伺っていた女子生徒が悲鳴を上げる。突如立ち上がった織村に驚かされたのだ。そんな女子に一言謝罪して、織村は残し少ない休み時間を気にもせず教室を飛び出した。向かう先は隣の教室、二年一組だ。そこに彼のハーレム要員である千冬と束、そして憎き更識形無がいる。

ずんずんと廊下を突き進み、一組の教室の扉を勢いよくスライドさせる。近くにいた生徒たちは「ああ、またか」というような生暖かい表情を浮かべているが、織村はそれに気づかず目当ての人物の前にまで一直線に進んでいった。

そんな織村が入ってきたのを見て、げんなりとした表情を浮かべている少年が一人。近くにいた二人の少女も、怪訝そうに眉を顰めている。

「おい馬野郎、勝負だツ!!」

「またかよ……」

ずびしっ! と指を突き出し形無へ向ける織村に、件の少年は深々とした溜息で答えた。

「あのなあ、いい加減にしろよ? この前で最後だって言ったじゃねえか」

「あれはリハーサルだ!」

「かーくんかーくん。コイツ解剖<sup>や</sup>っちゃってもいいかなあ?」

「それはやめろ」

「そうだぞ束。流石にそれはまずい。殺<sup>や</sup>るだけなら構わんが」

「お前らさつきからルビが怖えーんだけど!?!」

形無の両隣に座っていた束と千冬が楽しそうに話しているのを目の当たりにして、織村の嫉妬の炎は更に燃え上がる。それが周囲からは形無に挑むチャレンジャーに見えているのだから、本人の自覚はないがそれは幸運以外のなにもでもなかった。

そんな周りからの視線を受けて色々ときついのは織村ではなく形

無のほうで、このような理由から行われた過去二十二回の戦闘を思い出して軽く目眩を起こしそうになった。

形無の気苦労など全く気にしていない織村は毎度のごとく同じ台詞を言い放つ。

「いいか！ 今日の放課後第一アリーナに来い！ 今日こそてめえに俺が引導を渡してやるツ!!」

それだけを言い終えると、織村は形無の返事も聞かずに踵を返して一組を出て行った。

その場に残された形無は、両脇の二人の不機嫌さをどうにかしようと画策し始めるのだった。



放課後に行われた通算二十三回目の形無との模擬戦は、試合時間九分十四秒で織村の打鉄のシールドエネルギーが尽きたことで勝敗が決した。形無のシールドエネルギーは二割程削られているが、目立った外傷は見受けられない。

最早恒例となりつつあるこのアリーナでの光景に、興味本位で観戦に来ていた少女たちは苦笑いを浮かべていた。

「ホントよくやるよね織村君も。あの黒執事に勝てるわけなのに」

「でもでも、ちよつとずつ善戦は出来るようになってきてるよ?」

「善戦どまりじゃダメってことよ。少なくとも織斑さんくらいの実力が無いと、更識君には敵わないって」

「えーあの二人と一緒にするのは織村君が可哀想だよお」

観覧席で試合を見ていた少女達の悪意ない声が、織村に突き刺さる。

善戦？ 可哀想？ あの二人と同格ではない？ 誰がそんなこと決めたんだ。この手には第二位の能力が備わっている。それを使っても勝てないのは認めよう。だからって、自身があの二人よりも劣っているなんてことは考えたこともない。これは単に超能力と機体操作を高次元で両立させられていないだけだ。どちらか一方に気を取

られ、もう片方が疎かになってしまっているのだ。それを修正することが出来れば更識形無にも織斑千冬にも負けることはない。そう確信している。

滴る汗を無造作に拭って、織村は無言でピットへと戻る。

向こうのピットには千冬と東が居るだろう。形無が無理を言っただけ待たせているのだ。学園内でこそ千冬と東は平静を装ってはいるが、部屋では形無の横暴に枕を涙で濡らしているに違いない。

(許せねえ。千冬、東もう少しだ、もう少しだけ待っててくれ。俺がお前らを救ってみせるから……!!)

アリーナの通路壁を強く叩いて、織村は前を向く。

負けっぱなしでいられない。これが障壁だというのなら乗り越えてやろうじゃないか。織村の独りよがりな妄想は、留まるところを知らなかった。



そして、転機は訪れる――。

それは二度目の夏、七月中旬。終業式を目前にしたある日のことだった。

IS学園はその性質上ISの操作、整備の授業を中心に行いが、一般科目も当然存在している。IS学園の生徒であろうが所詮は高校生である。一般高校と同じような授業スケジュールを組んでいるわけではないが、その範囲は一般の高校よりも広くそして深い。

とは言えIS学園に入学できる時点で頭脳が秀でていることは証明されているようなものなので、今更その範囲をとやかく言うような生徒は殆どいない。

そしてそんな一般科目の集大成とも言える期末テストを午前中に終えて、午後はホームルームを残すのみとなった昼休みのこと。食堂で昼食を摂る織村の耳に、とある情報が飛び込んできた。

織斑千冬が、日本の第一代表候補生に選抜された。

聞いた当初は多少驚いたが、よく考えてみればそこまで騒ぐことで

もない。彼女の実力は昨年一年間で嫌というほど目にしてきたし、白騎士の操縦者であるのだからISの操縦に関して世界でも彼女右に出る者はいないだろうと思う。

だから彼女が代表候補に選抜されるのは予定調和のようなもので、周囲が慌ただしくなる中でも織村は涼しい顔で聞き流していた。このまま行けば学園を卒業するときには国家代表になるだろうな、とぼんやりと考える。その時は恐らく自身もそうなっているだろうから、今からそうなった時の挨拶でも考えておくかと口元を綻ばせながらコップに注がれたお茶を呷った。

と、そこで織村は食堂に入ってくる三人を発見した。

今話の話題となっていた千冬に束、そして馬野郎こと形無である。

(チツ、今日も強引に二人を連れてんのか。まったく見苦しいったらありやしねえ)

一転して不機嫌全開になる織村だったが、ここで名案を思いついた。

代表候補生に任命されたことを祝うという名目で、千冬たちを形無から引き剥がせるのではないだろうか。千冬だっていつまでも形無の横にいるのは辛いだろう。これまではつきりとした理由がないために連れ出すことが出来ずにいたが、今はこうして代表候補生任命のお祝いという大義名分が存在している、これはチャンスなのではないか。そう思い立った織村の行動は迅速だった。直ぐ様席を立ち、まっすぐに三人の居る配膳口へと向かう。

織村が近づいてくることに最初に気がついたのは束だった、それまで掴んでいた形無の腕を離して、しっしと織村を突き放すように言葉を投げる。

「なにお前、近付かないでくれるかな」

だが織村は知っていた。これは形無に勘付かれないようにするために感情を押し殺した、束の精一杯の心配だということ。

だから止まらない。彼女に大丈夫だ、問題ないと視線で告げてさらに一步近づく。

「……何だまたお前か。悪いが今は取り込み中だ」

織村の存在に気がついた千冬は眉を顰めてそう突っぱねた。そんな彼女を見て、織村は全く素直じゃないなど内心で苦笑する。

ひよいと千冬が持っていたトレイを取って、織村はにこやかに微笑む。

「まあそう邪険にするなよ。話したいこともあるし、一緒の席で食べないか？」

「何で私がお前と席を共にしなくてはならんのだ」

親切心から持っていたトレイを千冬は奪い返して、疑念の視線をぶつけた。千冬にとって織村一華という少年は無闇矢鱈に形無にちよつかいをかける面倒な人間だという認識でしかない。無駄に上から目線であることや事あるごとにデートの誘いをかけてくる鬱陶しさも然ることながら、この爽やかぶった表情が千冬は大嫌いだった。

千冬の嫌いな爽やかぶった笑顔を張り付けたまま、織村は挫けず声を掛け続ける。

「ほら、代表候補性に選出されたんだろ？　すごいじゃないか千冬」

「……どこから聞いたんだそのこと」

「もうクラスでも噂になってるよ。第一期の選抜者は二人だけだったのにすごいよなホント」

千冬もまだ高校生、子供だ。他人に褒められて悪い気はしない。普通ならば。

だがどういわけか織村に褒められても先に嫌悪感を感じてしまうのだ。彼を毛嫌いする理由など山ほどあるが、おそらく根本的にあるのは気が合わないという簡単なものだろう。

「なあ、もういいか？　俺たち向こうに席取ってあるんだ」

口を挟んできた形無を織村は思い切り睨み付けた。

「あ？　俺は今二人と話してんだ。会話に混ぜてくん馬野郎」

「なあその渾名まじでなんなんだ？　俺の名前のどの部分をどう解釈すればそうなるんだ？」

「知るか、自分の無い頭捻ってよく考えな」

お前にかまけている暇はないとばかりに、織村は形無との会話を強



引に断ち切って二人のほうへと向き直る。

が、しかし。既にその場には誰も居なかった。慌てて周囲に視線を巡らせれば予め取ってあったらしい座席に二人は腰を下ろして手招きをしていた。

なんだ口ではああ言いつつも結局嬉しいんじゃないかと思いがらそちらへ歩み寄ろうとすると。

「違うお前じゃない」

「消えろ、失せろ、滅びろ」

愕然とする織村の横を、トレイを持った形無が通り過ぎていく。

この瞬間、織村はようやく気が付いたのだ。本来ならもつと早くに気が付いていなければならなかったことを。そうすれば、己の過ちを今こうして恥じることもなかったというのに。

震える拳をめいっばい握り締めて、奥歯に噛み砕かんばかりの力を込める。

——あの野郎、二人に洗脳までかけてやがったのか!!

織村の勘違いは留まるところを知らない。

二人の形無への好意がなんらかの洗脳によって齎されたものであるという結論に一度達してしまえば、あとはもう転がり落ちるようには話ほとんどん拍子に進んで行ってしまふのだ。脳内で何人かの小さな織村たちが数秒で会議を行い即座に判決が下される。

判決、形無死刑。何ともまあ偏った会議である。

そこからの織村の行動は早かった。すぐに三人の居るテーブルに向かい、形無に人差し指を突き立てる。

「おい、勝負だ」

呆気にとられる形無をよそに、織村は続ける。

「どうやったかは知らねえが、お前が今こうしてこの場に居るのは間違ってる」

「……なに?」

その一言に、形無の眉がぴくりと動いた。

「その化けの皮剥いでやる。俺には分かる、普通じゃ有り得ねえ」

「……お前、どこまで知ってるんだ」

ここで決定的に食い違っていることに気がついている人間は残念ながらもいないかったのだ。

形無は織村の「間違っている」発言を受け、自身が本当はISに乗れないのを束に細工されて入学したことだと思っていたし、千冬は超能力でISに乗っていることだと思っていた。束に関しては織村をどうやって刻むかを考えていたので聞いていない。

そして今の形無の「どこまで知っているのか」という言葉を、織村も勘違いしたままに受け入れてしまった。その言葉を洗脳していることまで知っているのかと捉えてしまったのだ。

だから織村は口元を歪める。すべてお見通しだと言わんばかりに。「俺は知ってるぜ、お前の秘密をな」

その一言で、今度こそ形無の動きが止まった。

それは誰にも教えてはいない、知られてはいけない自身の秘密。

更識形無は転生者であるという事実。それを、織村は知っているのだと言う。

「……いつからだ？」

「ずっと前からだ。思えばおかしな点は幾つかあった」

織村は千冬と束のことを指して言ったつもりだが、形無はそうとは捉えなかった。

根本が食い違ったままの会話はしかし、不気味なほどスムーズに進行していく。

「で、勝負だと？」

「ああ。俺が勝てばお前の口から洗いざらい吐いてもらう。お前が勝てば黙っててやる」

「……分かった。今日の放課後、第三アリーナならまだ空いてたはずだ」

「おい形無!?!」

形無の発言を受けて千冬が声を荒げたが、形無はそれを片手で制して織村と向かい合う。対する織村は傲岸不遜な態度を崩さないままに言い放った。

「今日こそはつきりさせてやる。どっちが上なのかをツ!!」

◇

正直な事を言ってしまったえば、更識形無のほうが現時点での実力で言えば上なのだろう。決して口にすることはないものの、織村はそれを薄々感じていた。

転生者特典である『未元物質』。これさえあればこの世界で頂点に立つことなんて造作もないと思っていた。ブリュンヒルデたる織斑千冬も、ISの生みの親たる篠ノ之束も障害にはなり得ない。そう考えていた。無論この二人を敵に回すつもりなどないが、万が一そうなったとしても対処することは簡単だと思っている。

そこに現れたのが原作には存在しないイレギュラー、更識形無。しかもどうやらあの更識の人間であるらしい。

当初は神とやらが一方的な展開になることを防ぐために用意した自身のための踏み台だと思っていた。

だから最初は物語に関与してこないものだと思っていたが、蓋を開けてみればこのざまである。千冬や束と親しくなり、今ではIS学園内で確固たる地位を築き上げている。それが許せない、どうしても。

——そこは俺の居場所だ、引っ込んでろッ!!

ここで話を戻すが、織村は最近ようやく形無がただのモブキャラでない気がつき始めていた。

能力持ちの自身を相手にあそこまえ完璧な勝利など普通の人間が収められるはずがない。可能性を上げるなら同等の能力者くらいだろう。それにしたって『未元物質』とタイマンを張れるなどレベル5の中でも『ベクトル操作』くらいのものだ。

(甚だ不本意だがいいだろう、認めてやるよ……。お前は俺が直々に手を下してやるに相応しい相手だ)

これまでの敗北など無かったかのような思考であるが、そこから何も学ばなかったわけではない。

今までの二十三回の戦いによって更識形無という男の戦い方や癖などはほぼ掴んでいる。唯一疑問として残るのがあの『反射』だとか

いう機体の特殊展開装甲だ。どうやら反射と一口に言ってもその用途は多岐にわたるようで、ただ反射するだけでなく受け流しや擬似ベクトル操作のようなことまで可能であるらしい。織村が言えた口ではないが、とんだチート兵器だ。

そんな装甲に加えて更識流だとかいう体術も相まって、更識形無は強い。

だがそれがどうしたと織村は一蹴する。

こうしている今も、千冬や束は自我を失った状態で苦しんでいる。その事実に気がついていている人間は自身を除いて他にはいない。ならば彼女たちを助け出すのは己の義務だ。彼女たちが鎖から解放されるというのであれば、それに関わるリスクとデメリットはすべて引き受けよう。それだけの覚悟を有した上で、織村は決戦の舞台第三アリーナへと降り立った。

「来たか」

「何だ、随分と早いな。俺より早いとは思わなかったぜ」

「お前には聞きたいことがあるしな。何を知ってんのかはわかんねーけど、とりあえず全部話してもらおうぜ」

織村の正面に立つ形無は、一片の油断も見せず悠然と正面を見据えていた。全身を黒く包む執事服を纏い、嵌めた手袋の裾を今一度引く。

アリーナの中には織村と形無以外の姿はない。秘密を話す際に他の人間に聞かれたくないという思いから形無が教師陣に頼んで立ち入りを制限させたからだ。それは織村にとっても好都合だった。何故なら。

「ところでお前、ISはどうした」

「必要ねえ」

今の織村はISを纏わない、完全な生身でアリーナの地に立っているからだ。

織村の発言に要領を得ない形無は訝しげに眉を潜めた。

「正気か？ IS 同士の戦闘だぞ。生身でどうにかなるわけないだろう」

ISじゃなくて執事服着てる俺が言えたことじゃないけど、と考えている形無の思考など読めるはずもない織村は抑揚のない声で告げる。

「ISなんてもんは俺の全力を制限するための鎧でしかねえ」

「はあ?」

「俺の言ってることが理解できねえか?」

ゆつくりと、スローモーションのように。織村は自らの両腕を広げた。

変化はその直後に起こった。

爆発的な光が膨らみ、織村の背中から神々しいまでの白さを持つ三対六枚の翼が出現した。

まるで絵画の中からそのまま天使が現れたような眩さを感じながら、形無は驚愕に目を見開く。それは、その姿は。

「……未元、物質……?」

ポツリと無意識のうちに口から溢れたその言葉は、織村の耳には届かなかった。驚きと衝撃に身体を硬直させる形無を見て圧倒されているのだと感じた織村は気分を良くし、大声で叫んだ。

「——この姿こそが、俺の全力全開だツ!!」

同時、上空十メートル程まで一瞬で飛翔する。それを戦闘開始の合図だと受け取った形無は、先手を打たれる前に行動を起こした。

ベクトル操作で脚力のベクトルを操作し、瞬きすら許さない程のスピードで上空の織村の眼前にまで飛び込んだのだ。

だが織村は動じない。この程度の動きなら造作もなくやってのけるのが更識形無という男なのだ。身をも以て知っている。それはもう熟知と言つていいレベルである。

轟音が炸裂した。織村一華と更識形無が真正面から激突する。その余波は衝撃波となって第三アリーナへ円状に襲いかかり、内壁や遮断フィールドが俄かに悲鳴を上げた。

二人の激突の結果は、火を見るよりも明らかだった。

形無の一撃を受けた織村はアリーナの内壁に叩きつけられる。常人なら粉々に粉碎されてしまうような速度と威力を備えた形無の攻

撃。しかし形無の表情は曇ったままだった。その拳に、致命的なダメージを与えたという手応えは感じられない。あるのは致命打を外されたことによる不快感だけだ。

「……どうやってんのかは知らねえが、お前の黒執事は擬似的なベクトルの操作まで出来るみてえだ」

内壁に激突した際に巻き上がった砂塵の中から、ゆらりと織村が現れる。ISでの戦闘を想定して設計されたアリーナの内壁はかなりの強度を誇る。その内壁を一撃で大きく陥没させるほどの形無の攻撃を受けて尚、織村の身体には傷一つ付いていなかった。

無傷。背中から出現している純白の翼が、織村の身体から全ての衝撃を吸収しているかのようだった。

「だったらどうやったって動かせねえ程巨大な質量をぶつけてやりやあいいと思っただけけど、ダメみてえだな。俺自身のベクトルも操作されちまうんじゃないでしょうもねえ」

「お前、まさか……」

今の台詞に、形無は聞き覚えがあった。

今はもう擦り切れてしまい出すのも難しくなってきた、転生以前の記憶。学園都市第二位の超能力者が口にしていた言葉とそっくりだった。そしてその見た目もほぼ同じだと言っている。

ここに来て、形無はようやくある可能性に思い至った。

——俺の他にも、転生者がいるってのか？

寧ろどうして自分ひとりしか転生者がいないと思いついていたのだろうか。

転生する際、あの自称神とやらは転生の理由をこう言っていた。

『神が集まって行った双六のマスに、人間を転生させるとあったから』。その言葉を聞いた時点で察するべきだった。神とやらは複数存在し、また同様に異世界へ転生させられる人間がいるという可能性を。

形無はこの推測がほぼ正しいと確信している。でなければ試合の前に織村が自身の秘密を知っているといった根拠が存在しない。

(アイツは前から知ってたのか。転生者って存在が複数存在してるっ

てことを……！)

ならばもう自身の能力もバレていると考えて行動したほうがいいだろう。そう結論づけた形無は、地面が大きく抉れるのも構わず、脚力のベクトルを操作して真っ直ぐ織村へと突っ込んでいった。

対して織村は翼で空気を叩き真横へと飛んだ。瞬間的に十メートル程進んだ織村を追うように、形無は突進したまま大きく腕を振るつた。振るわれた腕は甲高い風切り音を放ちながら大気の流れを掌握する。

それによつて発声した烈風が形無の後ろから前へと突き抜けた。台風など軽く凌駕する空気の塊が、音速を越えて織村に迫る。

これを織村は右側の翼だけを器用に動かして回避すると、お返しとばかりに左側の翼を無造作に翻して烈風を叩き返す。

「知つてるか？ この世界つてのは全て素粒子によつて作られてる」

聞く必要はないと断じて形無は一気に織村の懐にまで飛び込んだ。彼の左手が織村の翼に突き刺さると同時、右側の翼一枚を極小の翼に変換し周囲に拡散させることで破壊的なまでの攻撃力を有した形無の一撃を逃がした。

「素粒子つてのは分子や原子よりも小さな物体だ。ま、その種類はいくつもあるんだが、大体は何個かの種類に分けられる。この世界はそういう素粒子で構成されてんだ」

でもな、と織村は呟いて。

「俺の『未元物質』に、その常識は通用しねえ」

未元物質。その単語が織村の口から出た瞬間、形無の考えていた仮説は完全な事実へと変貌した。やはり転生者、しかも第二位の能力をその身に宿したチート系。自身のことを言えた口ではないが、これで形無の抱く疑問のひとつは解消された。

そんな形無の内心に気づくことなく織村は続ける。

「俺が生み出す『未元物質』はこの世には存在しない物質だ。「まだ見つかってない」だの「理論上は存在するはず」だのそんなチャチなものじゃない。本当に存在しねえんだ」

大仰に話すその仕草はこれまでと変わらない織村そのものだった

が、形無はどこか違和感を感じていた。

これまでにない気迫を内包しているかのような、今までにない戦意を感じさせる。その理由はどこから来るのか形無には解らない。ただ言えるのは。

（今日のコイツは本気だ。本気で俺を倒すつもりでいやがる……！）

何もこれまでの戦いで織村が本気で無かった訳ではない。確信を得た今だからこそ判断できることだが、以前の戦いでも彼は『未元物質』を使用していた。自身の反射の膜を突破したのがそれだ。

だが、今日はこれまでとは違う。なにが織村をそこまで昂ぶらせているのかは定かではない。しかし気を抜けば寝首を掻かれる。そう形無に判断させるほど、目の前に立つ織村からは異常なまでの闘志が感じられた。

改めて形無は織村を見る。

学問上の分類には当てはまらない、超能力によって生み出された新たな物質。

物理法則を一切無視し、こことは異なる世界から無理矢理引きずり出してきたような病的なまでに白い翼。

第三位以下の超能力を大きく突き放すそのチカラは、正しく唯一無二のオンリーワン。

だけれどそれは、更識形無が有する『ベクトル操作』とて同じこと。序列を言えば未元物質さえも上回る第一位の超能力だ。身体の鍛錬も超能力の操作も、織村に負けているとは思わない。なら、負ける道理はない。

「言いたいことはそれだけか？」

織村の説明じみた言葉を吐き捨てて、形無は右足を勢いよく地面に叩きつけた。

暴風など生温い命を刈り取る烈風が、形無を中心として波状に音速を越えて広がっていく。

「理解してねえな、お前」

織村が口にした途端、背中の翼が大きく空間を打ちつけた。迫っていた烈風は、翼の起こした衝撃波に相殺されて霧散する。



形無が異変に気付いたのは、その直後だった。

「ッ!？」

思わず口元を手で押さえてしまうほどの猛烈な目眩と吐き気が形無を襲った。視線だけは織村から外さず、一旦距離を取るために大きく後ろへ跳ぶ。

おかしい。こんなことは通常有り得ない。

あらゆる『ベクトル』を例外なく反射する形無が、外部からの影響を現在進行形で受けている。

身体の異変を察知した形無を見て満足げに笑う織村は一步、なんとはなしに踏み出した。

「空気中に存在する酸素ってのは実は猛毒だ。知ってたか？」

親しい友人にでも話しかけるような気軽さで続ける。

「活性酸素ってのがあるんだがな、こいつは人体が酸素を消費する代謝過程で発生する有害物質だ。通常は細胞内の酵素で分解されるが、分解しきれないほどの活性酸素は細胞を破壊する。アルツハイマーなんかがいい例だな。細胞の自己破壊ってのはこの活性酸素が原因だ」

「……それがどうした。活性酸素が細胞を破壊するつつつても即効性は無い」

「それがこの世界の普通の常識だったならな」

織村は言う。

——言っただろう？ 俺の『未元物質』に常識は通用しないと。

六枚の翼へ弓をしならせるように力を加えていく。

「さつきお前の攻撃を相殺するときには大気をこの翼で叩いただけだろう。あの瞬間からこの空間の空気中の物質に既存の法則は通じなくなる。異物ってのはそういうもんだ。たった一つ混じっただけで、世界をガラリと変えちまうんだよ」

「何陶醉してんだアホが。そんなに第二位に憧れてんのか？」

饒舌に語る織村を前にして、思わず口をついて出た言葉だった。

そしてここで織村は気がつかなければいけなかった。この世界の人間が、この翼を見て第二位などという単語が出てくるはずがないと

いうことに。そこから関連付けなければならなかった。あの反射やベクトルの操作が擬似的なISの装備ではなく、正真正銘第一位の超能力であるということに。

織村は気付かなかった。

目の前の戦いに夢中になるあまり、無意識的に第二位を演じようとするあまり、形無のその一言を聞き流してしまった。

ゴアツ!! と六枚の翼が勢いよく羽ばたいた。巻き起こる烈風を反射で押さえつけた形無は、尚も体内に残る吐き気と嫌悪感を押し殺して反撃の一手を打とうと腕を振り上げる。

ここで形無は織村の意図に気がついた。正面を睨みつけると、先程と変わらず織村は不敵に笑っていた。

「お前は全てを反射してるように見えるが、実のところはそうじゃねえ」

六枚の翼が先程の倍以上に膨張する。剣のような鋭さを持つそれは、ギチギチと硬質な音を立てながら真横に広がっていく。

「音を反射すりゃあ何も聞こえねえ。物体を反射すりゃあ何も掴めねえ。お前は無意識のうちには有害と無害のフィルタを組み上げ、必要のないものだけを選んで反射してるんだ」

垂直に立ち上った六枚の翼が、形無へと振り下ろされる。

回避行動を取った形無だったが、六枚全ては躲しきれずに直撃した。

「さっきの酸素を介しての攻撃が通用した時点で確信した。お前は空気を反射することはできない。無酸素下での戦闘訓練なんて積んでねえだろ。積んでたとしても戦闘可能時間には限界がある」

口に溜まった血を吐き出した形無は、内壁を踏み台にして上空へと跳んだ。

形無目掛けて射出された鋭い翼の砲弾は、空気を引き裂いてアリーナ上部の遮断フィールドに突き刺さった。

「ま、つまりはそういうお前が反射できないような部分から攻め落とすってのが一番効率が良いってわけだ。さっきの烈風と切り離れた翼にはそれぞれ二万五千のベクトルを注入しておいた。久々に味わ

うダメージの味はどうだ？」

形無が織村の未元物質の対策として反射の組立を変更したとしても、すぐにサーチされてしまうだろう。それではいたちごっこ、攻防を繰り返している間にダメージが蓄積されていく一方だ。

「これが『未元物質』。異物の混ざった空間。ここはもう、てめえの知る場所じゃねえんだよ」

内心で形無は舌打ちする。

未元物質という能力がまさかここまで厄介な代物だとは思わなかった。使用者が織村ということもあつて十全に力を発揮できていなかったこともあるだろうが、少々甘く見ていたことは否めない。

ここで原作をはつきりと覚えていれば対処も楽だったのだろうが、あいにくと詳細な攻略法などこの世界に生まれて数年のうちに忘れてしまった。

ならばどうするか。

決まっている。

「……正面突破だ」

周囲の大气を操作して背中に四本の竜巻を巻き起こす。

両者の動きは同時だった。

形無の竜巻が織村の白い翼を刈り取る。織村の翼が烈風を伴って形無の竜巻を吹き飛ばす。

その余波を受けて第三アリーナが軋む。ピシリ、とどこかで亀裂の入る音が聞こえた。余波が消える頃には既にその場に二人の姿はなく、並行するように移動しながら互いの能力を激突させていた。内壁に垂直に立ち、上部の遮断フィールドを足場にしながら高速戦闘が行われる。

タンツ、と一旦地面に降り立った形無は、着地ざまに足元の地面を大きく踏み砕いた。衝撃で浮かび上がる小石を、二段蹴りの要領で蹴りつける。

凄まじい音が炸裂する。ベクトル操作を受け、音速を超える速度で飛んだ小石はすぐに消滅したものの、その衝撃波は生きている。その爆音は、耳当て程度では到底防げないようなものだった。

織村はその衝撃波を翼にありつたけの力を込めて撒き散らした。二人の間でぶつかりあつた衝撃波は、ついにアーリーナの内部を損壊させた。

「お前はいつまでそうやって二人を縛り付けるつもりなんだ！」

声を荒げ、織村は翼を振るう。

「なんのこと言つてんのかわかんねえよ！」

「とぼけんな！ 千冬と束のことだ！ お前が二人をそばに置いておきたいから、あんなことやつてんだろぅがッ!!」

あんなこと、とは黒執事をISと言ひ張つて学園に居座つていることだろうか。織村が転生者でありベクトル操作を持つていと知つているのなら、自身が本当はISに乗れないことなどとうに知つているに違いない。

それは本意ではない、と口にするのは簡単だ。しかし果たして、本当にそうだろうか。

この世に生を受けて十数年。今や家族以上の絆で結ばれている二人だ。はじめは束のマッチポンプから始まつたこの服装と学園生活であるが、楽しんでいたことは否定できない。

口ではあれこれ不平を言いつつも、三人での学園生活に忘れていた青春を感じていたことは紛れもない事実だ。

これまで彼女たちと過ごしてきた日々を否定することなど、出来るはずもない。

「……それは俺の意志だ、紛れもない、俺自身の。二人と一緒に過ごす時間は、俺にとってかけがえのないものだッ!!」

「つつつ！ ……あまつさえ開き直る気かこの馬野郎がああああああッ!!」

二人の身体が交差する。

空気が爆発し、数秒遅れて爆音が鳴り響いた。

形無と織村、双方から血が舞う。

「俺はお前が許せねえ！ てめえの勝手な独占欲のために、二人が犠牲になる必要がどこにあるっ!？」

「ああ、独占欲なのかもしれない。いつのまにか、こんなにもあいつら

を大切に思ってた。お前に気付かされることになるなんてな」

「二人の人生の責任をお前はどうか取るつもりなんだッ!!」

ボロボロになった第三アリーナの中心で、二人は視線を突き合わせたまま動かない。

「織村、お前の言いたいことは理解できる。俺は確かにこれまで二人に無意識のうちに壁をつくってたのかもしれない。二人の存在を軽視してたのかもしれない。分かってたつもりでも、どうしても俺って存在がイレギュラーなんだって気持ちじゃ拭えなかった」

「……何を今更。後悔したところでめえの犯した罪は消えねえ、一生な」

「そうだな、だから……たとえこの先一生掛かることになったとしても、俺は二人の責任をきちんと取る。それが俺の覚悟だ」

何が覚悟だ、責任だ。

結局は二人を手放したくないがために述べられた耳障りのいい言葉でしかない。むしろ一生離さないなどと二人を監禁宣言だ。

これ以上は話し合うだけ無駄だろう。あとはもうこの拳で解らせるしかない。互いに血を流しダメージを負っていることに変わりはないが、明確な攻撃手段を確立できたこちらに分があると織村は考えていた。

織村の六枚の翼が一気に力を蓄える。これが最後の一撃だと言わんばかりの、先程までとは桁違いの輝きを放っていた。長さを変え、質量を変え、殺人兵器と化した翼がアリーナを埋め尽くさんばかりに広がった。まるで引き絞られた弓のようにしなり、その狙いは形無の急所六ヶ所へと正確に定められている。

それを見て、形無は小さく笑っていた。怪訝そうに眉を顰める織村にこう言う。

「なんかスツキリしちまった。心にすんと落ちた気分だ。こんな大切なことに、なんで気づかなかったんだろうなあ……」

「余裕だな。めえの反射は既に攻略済みだ。インチキ臭えその防御能力も、この翼にや通用しねえぞ」

フツと笑みを消して、形無は構えを取った。

「確かにこの世界にはお前の言う『未元物質』なんてものは存在しない」

更識流、形無が取った構えはその基本。

「そいつに教科書の基本は通用しないし、未元物質に触れた分子が有り得ないベクトルに変化することだってあるだろう。だからこの反射に隙間が出来てしまうのも仕方がない」

二人の間で空気がざわつく。

猛烈な勢いで時間が圧縮されていくかのような錯覚を引き起こす。

「なら、それも含めて組み直す。この世界は『未元物質』を含む素粒子で構成されていると定義した上で、その公式を暴けばいいだけの話だ」

「……できると思ってたのか？」

「できないと思うか？」

それが引鉄となった。

バゴツ!! という轟音がアリーナに響き渡った。

互いの交差は一瞬。

それで形無と織村、二人の勝負は決着した。

織村は意識を手放す瞬間、これまでの一連の流れが原作そっくりであることに、ようやくながら気がついた。



目を覚ますと、そこは学園備え付けの医務室だった。仕切りのカーテンが引かれていないために周囲の光景が目飛び込んでくる。

窓から差し込む光が夕日から月明かりに変わっていることから、少なくとも三時間以上は意識を失っていたらしい。

ゆっくりと身体を起こす。至るところが悲鳴を上げているが、中에서도びきり酷いのが頭痛だった。脳みそに間断無く釘を打ち込まれているかのような鋭い痛みが絶え間なく襲いかかってくる。

思わず額を押さえていると、医務室の入口が唐突にスライドされた。

「お、気がついたか」

現れたのは、今最も会いたくない男だった。

「……何の用だ」

「ん」

持っていたトレイをずいっと差し出しながら形無は言う。

「夕飯、まだ食ってないから腹減ってるだろ。食堂のおばちゃんに無理言って作ってもらったんだ」

「お前の施しなんぞ受けねえ」

「いいから食えよ。お前が食わなきゃ捨てなきゃなんないだろ。食物を粗末にする気か」

そう言われてしまつては言い返せない織村は、いやいやながらにトレイを受け取る。その上に乗っているのは熱々の親子丼だった。それを見て思わず喉が上下する。思えばあの昼食以降何も口にしていないのだから空腹なのは当然だ。形無の存在など気にせず、織村は丼を持って中身を豪快にかき込んだ。

その様子を見ながら、形無はどこから持ってきたのか丸椅子を広げてベッドの横に座った。

「さて、昼の話の続きなんだが」

ピタリ、と織村の箸の動きが止まる。

「まずは礼を言わせてくれ。お前のおかげで俺は大切なことに気がつけたし、その覚悟もできた」

それを聞いて内心怒り心頭なのが織村だ。

勝負をふっかけ、負けたら一切口外しないと手前下手なことは言えないが、それでも二人を洗脳している目の前の男のことは許せない。

「いいか、今日は負けたからこのことは黙つといてやるが、俺は絶対にお前の罪を認めねえ」

「は？ 罪？」

イマイチな反応を見せる形無に織村は捲し立てた。

「千冬と束を洗脳にかけてることだ。次俺が勝ったときにはすぐに二人を解放してもらおうぞ」

「……まてまて、俺が二人を洗脳？ そんなことするわけないだろう」「とぼけんなよ、俺は知ってるって言っただろ」

「あ？ そりゃ俺が転生者だってことだろ？ それを知ってるからお前『未元物質』だってあんな高らかにバラしたんじゃないの？」

「あん？ 転生者？ お前が？」

「……………」

数秒の沈黙。

今耳にした言葉を、織村は心の内でゆっくりと反芻する。

（転生者。俺が？ いやあいつが。洗脳？ してない。未元物質がばれてた。つつーことはあれつてもしかしてマジモンの……）

ごちゃ混ぜになってたそれぞれのワードが、綺麗に繋がっていく。

そしてその全てが繋がった瞬間、織村は目を見開いて吼えた。

「つつはあああああつ?! 転生者あ?! お前があ?!」

「は？ え？ まさか気がついてなかったのか?!」

「つたりまえだクソツタレ！ 転生者なんてのは大体が世界にひとりだろうがツ！」

「とうるか待てよ。お前戦いの前に俺の秘密を知ってるって言っただろ。それは俺が転生者だってことじゃないのか？」

「そんなもん催眠かけてるってことに決まってるんだろ!!」

形無の反応を見る限り、どうやら自身が転生者であるということには既に気がついていたらしい。それがなんとも気に入らない。出し抜かれたような気がしてならないからだ。

「……ちよつと待てよ。お前が転生者だつつーなら、あの黒執事とかいうISのあの反射は、」

「正真正銘第一位の『ベクトル操作』だ」

「…………ツツツ」

声にならない叫びが医務室に轟いた、ような気がした。

ここに来てようやく事態を冷静に受け止め始めた織村は転生者が二人いたことを加味してこれまでの人生を振り返ってみる。

幼少期。既に三人で行動し始めていた三人に割ってはいろいろとしていた。



小学校、中学校。原作キャラクターとの親睦を深めるはずが、どう  
いうわけかまともに会話することも出来ず挙げ句の果てに知らない  
ところでISが完成。

昨年までの学園時代。もうひとりの転生者である形無に事あるご  
とに突つかかつては返り討ち。

ここまで考えたところで、織村は冷や汗がどつと噴き出すのを自覚  
した。

今までの行いを客観的に見た場合、どう考えても主人公の行動では  
ない。それどころか。

(これ完全にチート系転生者によくあるかませ踏み台嫌な奴  
だーーツ!!)

そもそもこれまで織村がそういつた自分勝手は行動を起こしてい  
たのは自身が主人公であると信じて疑わなかったからである。この  
世界に転生者はひとりきりで、自分こそが主人公であると確信してい  
たからこそ多少の我儘も通ると思っていたのだ。

だが実際はこの通りである。ああ穴があつたら入りたい。

もうひとりの転生者、形無から話を聞けば千冬や東と出会ったのは  
あの幼稚園が初めてだったらしいが、以後の付き合いを聞く限り完全  
に主人公のポジションについているのは向こうの方だった。

洗脳がうんぬん、というのも勝手な勘違いだったと聞かされた。戦  
いの前だったならそんな嘘信じるかと聞く耳を持たなかっただろう  
が、全力を尽くし、形無が同じ転生者であると知った今だからだろう  
か。不思議とすんなりとその言葉を受け入れることが出来た。

その変わりっぷりに、形無は驚いているようで。

「お前、そんな聞き分けのいいやつだったか？」

「……あほ、見縊んなよ。いくら俺でもお互いの生き様比べればどっ  
ちが主人公なのかってことくらい分かるわ」

「主人公って、この世界じゃ一夏だろ」

「その原作主人公ともパイプ持つてんだろ。俺はまだ会ったことねえ  
し」

転生者、その存在が自分一人だけではないと分かって、無意識のう

ちの安堵していたのかもしれない。

それは織村も、形無も同じだった。

だからこそここまで腹を割って話すことが出来たのだろう。形無に至っては千冬たちにすら話していない事実をだ。

「ま、しょうがねえから千冬たちのことはお前に任せてやるよ」

「はあ？」

「言つてたろお前。ちゃんと責任取るってよ。それってつまり一生傍にいろつてことだろ？」

男に二言は無いだろ？ と織村は意地の悪い笑みを浮かべてみせた。

「元々俺が千冬たちを追っかけてたのも原作の主要キャラだからってだけだしよ。ちゃんとした理由のあるお前に任せるのが一番だ。……その代わり、次に俺が狙う女が出来た時は協力しろよ」

そうして二人は初めて互いを理解した。

これまでの蟠りがお互いの勝手な思い込みであったことは、その胸のうちに閉まっておくことにして。(尚時折黒歴史として掘り返される模様)

こうして最低系かませ転生者の称号を返上することに成功した織村だったが、好きな奴ができたと形無改め楯無に相談を持ちかけるのは、まだ少し先の話である。

◇

放課後の生徒会室に、二人の少年の姿があった。

一人は濃紺の髪が特徴的な現生徒会長。もうひとり茶髪を肩口まで伸ばした生徒会役員である。

殆どの生徒は既に寮へ戻っているであろう時間帯にも関わらず二人が学園内に留まっているのは、約一ヶ月後に控えた学園祭の打ち合わせのためだった。

大まかなことは決まっているので後はそれを煮詰めていくだけなのだが、どうにも各部活の予定と舞台の使用時間が合わず二人して首

を捻っているところである。

そんな折、織村が別の話題を切り出した。

「なあ、そういえばお前生徒会長なのに自由国籍権使ってねーよな」

「ん？ ああ、俺は国家代表にはならないし、そもそも日本を離れる気がないからな」

「……それってよ、他の生徒会役員が譲り受けたりとかできねーのか？」

「どうだろうな。委員会に掛け合ってみないとなんとも言えないが……ははあん」

そこまで言って合点がいったのか、楯無は口角を歪めた。途端に織村は目を逸らす。

「そつかそつか。分かったぞ織村、お前が何考えてんのか」

「な、なんだよ」

「お前、自由国籍<sup>レ</sup>権使ってアメリカ行く気だろ」

楯無の言葉に、思わず無言になる。

「ま、そういうことなら学園長と委員会に掛け合つといてやるよ。大事なお姫様の為だもんなー」

ニヤニヤと殴りたくなるような笑みを浮かべる楯無。それに反論できないのが悔しいのか、織村は顔を赤くしながら唇を噛み締めていた。

「そのことはまあいいんだけどさー」

「あん？」

「いい加減告白しろよこのチキン野郎」

「う、うるせー！」

## # そして青年は海を渡る

「結局さ、どういふのが一番女子的にグツとくるんだ？」

「それを私に聞くのか？ だったら真耶に聞いたほうがいいだろう」

「ええっ!? わ、私に聞かれても困りますよ！」

「あのねあのねー！ 東さん的にはやっぱりガツンと来て欲しいって  
いうかー！」

「悪い東には聞いてないわ」

「たつくんひどい!!」

やいのやいの。

冷たい風が吹き荒ぶ外とは対照的に暖かい生徒会室の中で、生徒会役員たちはどこまでもフリーダムだった。

卒業を来月に控えた三年生たちは当然生徒会は引退しているが、どういふわけかその後もこの生徒会室は溜まり場となってしまうているらしい。現会長である真耶が何も言わないのでそれに甘えている形だ。

今現在この生徒会室で顔を付き合わせているのは楯無に千冬、東の三人に真耶と織村を加えた五人である。先日生徒会見習いという肩書きを返上し、晴れて会計へと昇格を果たしたナターシャは先に寮へと戻ったためにこの場にはいない。新メンバーである二年生も同様だ。

そんなわけで第一期生徒会のメンバーに東を足した五人が席に着いているわけだが、彼らの話す内容は生徒会とは全く関係の無いものだった。

すなわち。

「さて、それで織村がどうやってナタルに告白するかという議題だが……」

「なあそれおかしいよなッ!? 何で俺が告白するの前提でお前らが勝手に話進めてんだよ!!」

顔の前で指を組んだ楯無が至って真面目な声音で呟いたが、残念ながら織村だけはこの話題は御免被りたいものだった。

「だってなあ、お前分かってる？ 来月俺たち卒業だぞ？ そしたら

暫く会えなくなるだろうが」

「んなことお前らにや関係ねえだろ！ 大体ナタルと俺との間にはなんもねえ!!」

捲し立てる織村を、しかし楯無たちは生暖かい目で見つめていた。

「またまたあ」

「往生際が悪いぞ織村」

「流石にそれは苦しいです先輩」

「なんだよやりたいだけかよー」

四人からの集中砲火を浴びてぐつと言葉を詰まらせる。織村自身は誤魔化してきたつもりだが、生徒会として同じ時間を長く過ごしてきたこの四人にはお見通しだったらしい。それを自覚して、思わず顔が熱くなる。

「好きでも無い奴のためにその国に行くか普通？」

「有り得ないな。好きでも無い限り」

「普通はそんなことしません」

それを言われてしまつてはグウの音も出なかった。

以前楯無を通して学園に掛け合った結果、織村は生徒会長に与えられる特権の一つ、自由国籍権を獲得している。それはひとえにナターシャのためであり、彼女と一緒に過ごしたいという織村の思いからの行動にほかならない。それを知っている四人は、今更織村がどんな言い訳を並べ立てようとして孫を見るおばあちゃんのような生温い視線を向けるのみなのだった。

奥歯を噛み締める織村に、尚も追撃の手は止まない。

「でもな織村、お前がどんなにナタルのことが好きでもそれは伝えななくちや意味がない」

「彼氏でもない奴がアメリカまでついて行ってもストーカー扱いされるのがオチだろう」

「……っ！ それは……」

否定できない部分を突かれ、思わず口籠る。

現状ナタルとの関係にこれといった進展は無い。彼女が生徒会で見習いとして活動していた頃はその指導役としてその殆どの時間を

一緒に過ごしてきたが、正式な役員となった今は以前ほどの関係は無くなってしまっていた。それでも寮の部屋を行ったり来たりする程度には友好的な関係が続いているが、それはやはり友好的な関係止まりなのだ。

そこから先へ、進もうと思っているのは織村だけなのだろうか。

ナターシャにそれとなく聞いたことはあった。しかしいつもその話題はすぐに逸らされ別の話題へと移ってしまうのだ。

友人以上、恋人未満。

今の織村とナターシャの関係は正にそれだった。

「どつちにしろ今のままじゃダメだろ。このまま何も言わずにアメリカに行っちゃったら、きつとナタルだって悲しむぞ」

「まだナタルにはアメリカに行くことを伝えていないのだろうか？」

そうなのだ。織村は未だナターシャに卒業後の進路を伝えていなかった。

「……少し、考えさせてくれ」

真面目な織村の表情を見て、楯無たちはそれ以上の発言を避けた。

確かにあまり時間は残されていない。ナターシャにこの想いを伝えることで、何かが変わるのかもしれない。

しかし伝えることで今の関係が壊れてしまうことが怖かった。心地の良い今の距離感が変わってしまうことが怖かった。

そんな二人の関係が変わるのは、卒業式の日。

ナターシャに呼び出された織村は、溜め込み続けていた想いをやつのことで吐き出すことに成功したのだ。

そして、彼は海を渡る――。



「……状況はどうなっている？」

「今日の午後には到着の予定です。その時間帯は大統領は別の案件でこの場を空けるので、水を差されるようなことはないかと」

訛りの少ない格式張った英語で会話が行われているのは、とある執

務室だった。室内には高級そうなスーツに身を包んだ白髪をオールバックにした壮年の男性と、丸眼鏡が特徴の三十程の男性。

白髪の男性が手元に置いてある資料を無造作に取り、まじまじとその内容を見つめる。

「……織村一華。世界で二人目の男性 I S 操縦者か、ネームバリューは問題無しだな」

「実力も折り紙つきです。我が国の重要な戦力となることは間違い無いでしょう」

資料に記載されている個人データとこれまでの戦績を合わせて鑑みても、彼が国内最高の戦力になるだろうことは容易に想像することが出来た。

だが問題はそこではない、と白髪の男は言う。

「重要なのは彼が我が国、ステイツに従順であるかどうかということだ。狂犬などに興味はないのだよ私は」

それを今日、この目で確かめてやろうじゃないか。

そう締めくくった男の目に、どす黒い何か渦巻いていた。



「Please be sure to take all of your belongings when you disembark.」

「……んあ?」

聞き慣れないアナウンスを耳にして、織村は視界を覆っていたアイマスクを親指の腹で持ち上げた。ぼやける視界を左右に振れば、少ない数の人間たちが手元にあった荷物を持って搭乗口へと向かっていく。そんな光景を暫くぼんやり眺めていた彼だったが、ここでようやく飛行機が目的地に到着したのだと頭が理解した。急いで机の上を片付け、足元に置いていた鞆を取って出口へと急ぐ。幸いにして到着してから然程時間が経っていなかったのか、大勢の人間たちの中に紛れて空港へと降り立つことが出来た。

少し前までの自分であったなら敢えてこの場で目立つ様なことを仕出かすんだろうが、今となってはそんなこと露程も思わない。どうか羞恥心がやばい、マツハで。

事前の連絡では空港内に迎えのSPを変装させて寄越しているとのことだったが、そういえば落ち合う場所は決めてあっただろうか。(まさかこのただっ広い空港の中からそのSPを探せ、とか言うんじゃないやねえだろうか?)

流れてきた自身のスーツケースを受け取って、空港内をぐるりと見渡す。日本の空港とは規模の違う大きさがそこには広がっていた。

ワシントン・ダレス国際空港。今織村が立っているのはアメリカのバージニア州に設置されている巨大な国際空港だった。全面ガラス張りの壁から、穏やかな日差しが差し込んでいる。

IS学園を第一期生として卒業した織村は、その後の生活の中心をアメリカで送ることを選択した。

楯無が本来所持していた生徒会長の特権である自由国籍権、それを彼が行使した結果でもある。楯無がとある事情から国家代表を辞退したことで、織村を獲得しようとする国はこぞって国家代表着任を促した。だが織村ははじめからアメリカ以外に行く気もなく、また興味もなかった。

その理由は単純にして明快である。

ナターシャ・ファイルス。彼女の祖国であるからだ。それ以外に理由は無く、また必要もない。

彼女がIS学園卒業後アメリカに戻り国家代表に着任することはほぼ間違いなく、ナタルとの共同生活をしていく上で彼はこうしてアメリカという地を選んだのだ。

しかしながらそんな内情を知る由もないアメリカ以外の国は織村の態度に気を悪くし、揃って根も葉もない噂をばら蒔こうともしていた。流布される前に東が全てシャットアウトしたために実際に世間に公表されるようなことにはならなかったが。

と、そんな訳でIS学園を卒業して一週間程経った三月の下旬。織村はアメリカの国家代表となるべくこうしてアメリカへと飛んだの



だった。

因みにアメリカ国民には既に大々的に織村が国家代表となることを発表しているために、混乱を防ぐため今の彼は軽く変装していたりする。具体的にはサングラスとキャスケット帽である。たったこれだけでも、案外周囲には気付かれならしい。

ここで話は戻るが、織村は今更なことに気が付いていた。

迎えに来ている筈のSPたちとの待ち合わせ場所を聞いていない。

いや、違うなと織村は考えた。

(敢えて話していなかった、か。何だよ、俺の索敵能力でも見定めようってのか?)

毎日何千人もの人間が利用する国際空港で、私服で警戒にあたっているであろうSPを探し出すことなど一般人には到底不可能な芸当だ。どんなに人の機微に鋭い人間でも、これだけ広大な敷地の中となると困難を極めるだろう。

(……えらく舐められたもんだ)

だが、織村一華にとつてこの程度のことでは実力を測られようとしていくことは甚だ本意だった。

たかだか数千人の中から目的の人間を探し出すことなど朝飯前、というかそれ以前の問題だ。織村は一度歩みを止めて、ゆっくりと瞼を下ろした。

『未元物質』。それが彼に与えられた能力の名であり、生命線とも呼べる代物である。その物質に触れたものはこの世界における現象とは全く別の現象を引き起こす、文字通り未知の元となる物質を混入させる能力。発動させれば無類の強さを誇る能力だが、この場に限って言えば発動させるまでもない。

視界を塞いだまま、織村はぼんやりと空港全体をイメージして音のみに集中する。聴覚だけが異様に研ぎ澄まされていく。

足音、話し声から服の衣擦れに至るまで、ありとあらゆる音が織村の耳から脳へと送られていく。と、ここで織村は一般人とは明らかに違う歩き方をする人間たちが居ることに気が付いた。

(俺の背後と二階のエスカレーター付近、あとは正面入口。三人とも歩き方がSPのそれだな)

今述べた三人は、他の人間に比べて歩行音と重心が明らかに異なっていた。それともう一つ、

(いくらアメリカが銃社会だからって、何丁も常時持ち歩くようなものでもねえだろ)

衣擦れの音の中に混じる、確かな拳銃の接触音。変装しているためにおおっぴらに拳銃を見せびらかすわけにもいかず、ホルスタに収納しているわけでもなさそうなので捉えた音だが、ほぼこの三人が迎える人間だろうと当たりを付ける。

自身に向けられている視線が興味ではなく値踏みするようなものであることから間違いはなさそうだ。彼らの心情も理解できないことはない。いくら世界に二人しか存在しないISを操縦できる男だとはいえ所詮は日本人、それも高校を卒業したばかりの世間知らずである。そんな人間がいきなりアメリカである程度の地位につくというのだから、面白く思わない人間だってある程度の数はいるだろう。これから護衛する人間がそうするだけの価値がある人間なのか。そういった疑念が時折向けられる視線から感じ取れた。

そんな視線を浴びて一つ息を吐く。

拍子抜けだ、そう率直に思った。

これが、こんな護衛がかの大国アメリカのエリートだということなのか。これなら同期の卒業生たちのほうがマシなレベルだ。

新天地に心躍らせていた昨日までの自分を殴りたい衝動に駆られる。それをなんとか堪えて、織村は欠伸を噛み殺しながらゆったりと歩き始めた。向かう先は三人がそれぞれ配置された場所ではなく正面入口に比べて若干小さな北口だ。

スーツケースをガラガラと引きながらなんの警戒をも見せずに歩く織村を見て、監視役だった三人は驚愕した。

彼の向かう北口には、迎えの車を停車させてあるからだ。直ぐに気付かれないように無線で連絡を取り合う。

「こちらA1、対象は北口へと進行中」

「A2確認。何処かから情報が漏れたのか？」

「馬鹿な、機密保持は万全だ。偶然じゃないのか？ 迎いの車は力モフラージュの為に見た目は一般車と大差ないんだぞ」

「こちらA3。対象が出入り口を通過、そのまま一台の車両に接近。……おい、あの車両は」

A3と名乗っていたSPの一人が呟いた直後だった。この広い空港内であっても雑音一つ混じることのなかった無線に、ほんの僅かにノイズが走った。

そのノイズの意味を頭で理解するよりも早く、聞き慣れない堅苦し  
い英語が耳に飛び込んでくる。

「……あ、あー。Hello, you either have heard. The Come quickly out. (もしもし、聞こえてるか。さっさと出てこいよ)」

若い男のその声は、それだけを言うと言線と無線を切ってしまった。三人は慌てて持ち場を放棄し車両の元へと向かう。

出入り口を抜けて車両の前まで駆けていけば、そこには見た目一般車両の屋根に肘を置いて空を見上げている青年がひとり。言われるまでもない、今日の任務で無事目的地まで送り届けなければならぬ日本人だ。

SPの三人が一体今何を考えているのか、そんなことまでお見通しだったのだろう。青年は苦笑して言った。

「そう怖い顔すんなよ。別にアンタらをおちよくってるわけじゃない」

「……どうして我々が寄越した車両がコレだと分かった？」

「んなもん見れば分かるだろうが。見た目こそ普通の乗用車だが、グレネード撃ち込まれてもビクともしないだろうな。一体いくらかけてんだこの要塞」

「……大統領も乗ることがある車両だ。防弾性能は完璧にしておかねばならぬ」

それを聞いて織村は笑った。

「おうマジか。俺大統領が乗ってる車に乗るの？ 一気に出世したも



るのがこのホワイトハウスだ。当然内部は徹底された警備が敷かれていると思えばいいが、どうやら実際はそうでもないらしい。至るところにカメラや迎撃用の銃口が覗いているが、人間の姿は殆ど見当たらない。それだけセキュリティがしっかりしているということなのだろうか。

(ま、篠ノ之なら片手間で突破しちまうだろうが)

つらつらと思考を巡らせたまま、織村はやがて目的の建造物の前に到着した。一面を白で統一された建物。ホワイトハウスと称されるものの中心地、エグゼクティヴ・レジデンスと呼ばれるメインハウスだ。

ここは大統領とその家族が暮らす公邸であり、また外国首脳との重要な会談が行われるアメリカ国内で最も警備の厳しい区画である。

が、前を歩くSPはその内部に入ろうとはせず、そのまま左へと続く長い廊下を歩き出した。

(ま、流石にアメリカ人でもねえ俺をいきなり通したりはしねえか)

コ罗纳ードと呼ばれる渡り廊下の先に続いていたのはウェストウイングと呼ばれる区画だ。

この棟には大統領執務室をはじめ国家安全保障会議室や副大統領、首席補佐官といった上級スタッフのオフィスが存在するアメリカ政府の中枢。その地下には世界各地に展開するアメリカ軍やその関係機関、そして最高レベルの情報連携をしているシチュエーションルームがある。

その入口であろう嚴重な扉を前にして、ようやく黒服のSPはその歩を止めた。

「ここから先は我々も立ち入ることは出来ない。一人で行ってもらふことになる」

「いいのかよ、見ず知らずの人間をこんな場所で一人にして」

織村の言葉に、しかし黒服の男は間断無く答える。

「貴方はこれから我が国の代表となる、この程度は信頼の証とでもとって頂ければいいかと」

(信頼の証、ね)

そんなこと思ってもないくせに、と思っても口には出さない。

彼らを始めとしたアメリカ人の一部が自身をあまり好意的に思っていないということはこれまでの移動の中で大方見当がついていた。対応の素振りに出ないのは大したものだが、やはり根底にある感情を完全に押し殺すことは出来ないのだろう。そのあたりの感情の機微に鋭い織村にはお見通しだった。

重厚な扉を開き、織村は一人ウエストウイングの中へと足を踏み入れる。

「……成程ね、こりや金かかつてるわ」

思わずそんな言葉が漏れる。同時に背後で音もなく扉が閉まった。深紅のカーペットが床一面に敷かれた廊下の先に、たった一つの扉。左右を見ても他にそれらしいものが無いところを見るに、どうやらあの扉の向こうが目的地であると見て間違いなさそうだ。

足取りはそのままに、織村は軽い調子でその扉を開いた。

室内は白一色で埋め尽くされていた。唯一中央のソファだけが黒く、それ以外は壁から机、本棚までもが純白で彩られている。

「ようこそ。織村一華君」

するりと織村の耳に入ってきたのは、聞き慣れた言語だった。

「日本語が話せるのか」

「ISの関係者であれば日本語の取得は必須だよ織村君。何せISの基本説明は日本語でしか表記されていないのだからね」

言われてみればそうだと思う。ずっと日本に住んでいたせいで忘れかけていたが、ISというものは世界中で使用されている。しかしながらわざわざ東がその国の言語で翻訳などしている筈がない。となれば日本語を最低でも読めるようになっていなければ話にすらならないのだ。

部屋の中央に置かれた如何にもなソファに腰を下ろす白髪の男性に促されて、織村も対面のソファに座った。

「まずはお互い自己紹介といこう。私はウィリアム・ハワード、国家安全保障問題補佐官を任されている。君と会えるのを楽しみにしていたよ、ようこそ合衆国へ」

「丁寧にどうも。織村一華です」

そう言つて差し出された手を織村は取つた。

一見友好そうに見える男だが腹の中では何を考えているのか分からない。警戒だけは怠らず見据える。

「君の噂は聞いているよ、何でもI S学園では大層な活躍ぶりだったそうじゃないか」

「そんな大したもんじゃないですよ」

「謙遜などしなくてもいい。我が国としても君を迎え入れられるのも心待ちにしていたのだよ」

笑顔を浮かべるハワードを見て、率直に織村はキナ臭いと感じた。

ここに来るまでの間のアメリカ人の反応は、お世辞にも良いものとは言えなかった。突然アメリカという枠組みの中に日本人という異物が混じるのだからその拒否反応は必然と言えるし、また織村もそれについてとやかく言うような真似はしなかった。寧ろこの程度の反発であれば想定内だ。

だからこそ、今向けられている笑顔が白々しく、また薄っぺらく感じしてしまう。

外交の場に立ち会つたことはないが、これが自身の立場を優位に進めようとしているが故の笑顔であることくらいは理解できる。

「さて、ここで本題と行きたいのだが、構わないかな?」

一度タイを正してハワードは言った。織村も無言で先を促す。

「先ずはこの書類に目を通してもらいたい。我が国の代表となるための規約などが記されている、承諾の意味を込めて下段に自筆のサインを書いてくれたまえ」

胸ポケットに差されていた万年筆を織村に差し出して、ハワードは先程の笑顔そのままに書類を机の上へと置いた。

それを手に取り、上から下まで余すことなく読み込んでいく。

渡された書類は三枚。一枚目代表になる上での守らなくてはならない規約、二枚目にアメリカ国民となる上での心構え、三枚目にそれらに付随した規約が記されていた。

その全てを読み終えて、織村はその書類を無造作に机の上に放つた。

ピクリ、とハワードの鱗谷がひくつく。

「趣味が悪いな、アンタ」

「……どういう意味だい？」

「見て分かるだろうが、日本語が分かるくせに、どうしてこの書類は全部 英語で書かれてんだ？」

織村が読んだ書類は、三枚全てが英語で記されていた。英語が分からなければその意味を全く理解することが出来ないまま、不信感さえ抱くこと無く最後の部分に名前を書いていたことだろう。

態度を一変させた織村を見て多少の驚きを見せたものの、ハワードはその指摘に表情を崩すことなく答える。

「その書類を作成したのは私ではないのだよ。その彼は日本語は堪能ではなくてね、君は英語も堪能だと聞いていたので、確認の意味も込めて翻訳することはしなかったのだよ」

取ってつけたような言葉に、織村は鼻で笑いたくなるのを堪えて書類を手取る。

「じゃあこの部分、分かった上で書いたってことか？」

一枚目のとある部分を指差して織村はハワードを見据えた。

その部分は国家代表となる上で順守しなくてはならない規約が書き連ねられた箇所だ。そこにはおおまかにはこのように記載されていた。

—— アメリカ政府の命令は絶対遵守。

—— IS 研究区画以外での IS 展開は禁止。

—— 篠ノ之博士から入手している情報は全て開示すること。

どれもがアメリカにとって優位になることばかりが並べ立てられており、織村にとってのリターンとなるものが一切明記されていない。表向きはアメリカが織村を招聘した形だが、その実織村の意思によつてアメリカへ向かったことから、立場の違いを明確にしておこうという魂胆なのかもしれない。

が、そんな子供だましのような真似は織村には通用しない。

「いい加減その取ってつけたような笑いはやめろ。元々今日の会談だって本来なら大統領と直々に会って行う手筈だった。それが入っ



てみればアンタだ、一体どういうつもりだ？」

ここに来て、ようやくハワードは顔から笑を消した。

「……いやはや、中々頭が回るようだ。この分だと私が大統領の予定からわざとずらしてこの会談を行っていることも気づいているかな」  
背もたれから身体を話して、膝の上で腕を組む。

「腹の探り合いはヤメにしようか。率直に言う、織村一華。君には我が国の広告塔として働いてもらう」

「……あん？」

「言い方が悪かったかな。そうだな、シンボルとでも言おうか。祖国の繁栄のためにだ」

ハワードの言う言葉の真意を凶ろうと、織村は口を噤んだ。それに気をよくしたのか、白髪の男は徐々に饒舌になっていく。

「正直な所、困るのだよI Sという兵器の存在は。我々ステイツは世界の最先端を行かねばならん、これは義務だ、全世界のトップをひた走る我々に課せられたね。政治でも武力でも常に他国よりも前を走らなくてはならないのだ、そうでなければ我々は我慢できない」

つい数年前まではそれに何の問題もなかったのだ、とハワードは続けて。

「ところがだ。極東の島国で開発されたI S、今や世界の中心は間違はなくこの兵器だ。I Sの前では既存の兵器など塵芥に等しい。開発者以外に複製は不可能、また絶対数も決まっている。それを各国に分配したとして、我が国の優位性はどうなると思う？」

織村は答えない。尚も男の演説じみた言葉は止まらない。

「並んでしまった。いや、日本という国に追い抜かれてしまったかもしれない。もしもI Sを使って戦争を行えば、その所有数の多い日本が他国を蹂躪して終わるだろう。勿論既存の兵器も数に物を言わせれば太刀打ちすることは可能だろう。だが数を用意するには金がいる。そしてそれは恐らく、軍事費全てを費やすことになる」

そうでもしなければ太刀打ちできないのだ、たかが小柄なパワードスーツごときに。

「そんな時だよ、君が我が国の国家代表に立候補したのは」

「……………」

「まさに天啓、神は我々を見放したりはしなかった。織村一華という世界でもトップクラスの戦力を手中に収めることに成功したのだから。ああ、今更辞退しようとしても無駄だよ。既に国民には知らせてあるし、衛星中継で全世界に発表してある」

そこまで言い切って、ようやく男は話を終えた。

ハワードの大仰な話を受けた当の本人、織村一華はというと。

「くだらねえな、アンタ」

これまでの長々とした話の内容を、そう一言で切り捨てた。

「……………どうしてかね」

「アンタの言う根本は間違ってるねえよ。ISは兵器になっちゃった、あんなだけ兵器としての性能を見せつけられりや反論する気なんざ起ころねえ。例え開発者が別の目的で開発したんだとしても、それを使う人間が兵器として扱えばそれはその瞬間からただの人殺しの機械になる」

「ならば……………」

「気に入らねえんだよ、アンタの自分たちが一番じゃなくちやいけないつつう考え方が」

ハワードの言葉を遮って織村は睨み付ける。

どこまで言っても祖国至上主義。アメリカという国が他国に追隨されることが許せないのだ。

確かに一昔前、アメリカは間違いなく世界トップの大国であった。しかし今はISが開発されたことで戦力は以前ほどの開きはない。それを他国が生み出したISで再び開こうというのだから矛盾しているように思えるが、利用できるものは何でも利用していくという考えなのかもしれない。

会って間もないが、この短時間でもハワードという男の性格は概ね把握できたと言っている。

プライドの高い男の典型例とでも言おうか。無意識かは定かでないが常に上からの物言い、それが昔の自分を想起させて苛立ちが募る。

「気に入らない、ね。そんな理由が通じるのはジュニアハイスクールまでだ。これは国と国との交渉、会談なのだよ。余計な私情は切り捨ててもらいたいものだ」

「良いのかよ、今ここで俺がアメリカ代表を辞退すれば既に情報を流してたアンタらが酷い目に会うんじゃないか?」

「それこそまさかだ。君がそんな行動を取ればアメリカ政府は日本政府に喧嘩を吹っ掛けることになるかもしれない。そんな浅はかなことを君がするはずない」

クハツ、と思わず笑いが漏れた。

随分と目の前の男は自身のことを買ってくれているようだが、表面上だけのデータを見ただけで何を分かった気になっているのだろうかと問いかけてやりたい。

「……買い被りすぎだ、アンタ」

「っ、!?!」

背筋に氷柱をぶち込まれたような寒気がハワードを襲う。その出処は織村の眼。光を宿さない、漆黒の瞳からだ。

「俺がアメリカを選んだのはナターシャ・ファイルスがこの国の人間だからだ。国家代表なんて座に就く以上は必要なことはやってやる。だがな、俺を利用しようなんざ考えないほうがいい。俺にとってもアンタにとってもな」

「それは脅しのつもりか? 私のバックにはアメリカそのものが控えているんだぞ。取引できるような立場だと思っっているのかね?」

額に滲む冷や汗を拭うことすら忘れて、ハワードは尚も威圧感を感じたまま織村へと言葉を投げた。

「いいや、」

その問いかけに、織村は一拍おいてから。

「これは脅迫でも、交渉でも、提案でも、取引でも、懇願でも、協定でも、妥協でもない」

一瞬のことだった。

室内を満たす暖かな空気が、瞬く間に極寒の冷氣へと姿を変える。

第二位の超能力、『未元物質』によるものだ。

スーツ姿のハワードは急激な気温の低下に身をすくませ、歯が噛み合わずにガチガチと不快な音を鳴らしている。対して、織村はこれまでとなんら変わらない態度でただこう宣言した。

「――決定事項だ、アメリカ様」

ハワードはこの瞬間理解する。

アメリカが招き入れた日本人は、狂犬程度の生易しいものではないか、ということ。

これは、暴龍だ。

「それに俺が気に入らないって言ったのはな、何もさっきまでのことだけじゃない」

「……？」

「ISを兵器だと言い切った、アンタの考えが気に入らねえ」

「な、何を……」

「ISってのはな、篠ノ之が自分の夢のために開発したもんだ。例えそれが兵器としての側面を評価されちまったとしても、国がISを兵器と言いつちやいけねえんだよ」

「へ、兵器であることに異論はないと、君も言っていたではないか」

「ああ、言った。でもそれは実際に軍人たちが本気で戦争を起こそうとした場合だ。アラスカ条約でISの軍事利用は禁止されてんだろうが」

部屋の気温の低下は尚も止まらない。パキパキと氷の膜が張っていくのが目に見えて分かるほどだ。

「それにISを兵器って言うならよ、それに乗る俺たちだって兵器だ。アンタ、俺を使いこなせると思ってたのか？」

織村一華は、大国一つを相手にしたぐらいでたじろぐような人間ではない。

それをハワードも本能の部分で理解したのだろう。言い返すことはできなかった。

先手を打って釘を打つつもりが、逆に釘を刺されてしまう結果である。

◇

「いや、さつきは俺の部下が失礼をして悪かったな」

「はあ……」

先程の会談を終えて通されたのは、オーバルオフィスと呼ばれる大統領執務室だった。

やはり先程の会談はハウードの独断で行われていたらしく、大統領にも内密に進められていたものらしい。そのことを語りながら部下の失態を恥ずかしそうに語る大柄な男。

トール・オバマ。

アメリカ合衆国の現大統領であり、アフリカ系では二人目となる黒人の大統領だ。

もみあげと髭を繋げた大男は秘書官らしき女性から受け取ったコーヒーを豪快に飲み干して、正面のソファに腰掛ける織村へと視線を向けた。

「さつきのはハウードが勝手にやったことだが、部下の責任は上司たる俺の責任でもある。さぞ不快な思いをしたことだろうが、どうか腹に収めてやって欲しい」

話を聞くに、どうやら織村のアメリカ国籍取得について議院内でも意見賛成派と反対派で分かれているらしい。ハウードは反対派の急先鋒だったようだ。

「それで、こっちが本当の書類だ」

手渡された書類は一枚きり、英語で書かれていることに違いはないが、日本の中学生でも理解できるような簡単な文法で簡潔に書かれていた。

——アメリカと日本の互いにとって不利益な行動を取らないことを誓います。

「……これだけ？」

「ん？ 何だ、もっと小難しいのを並べ立てられると思ったのか？」

そんなことしねえよ、俺は君に期待してんだ。アメリカ一期の国家代表に日本人が登録されるのは波紋を呼んでるみたいだが、俺は君なら

実力ですぐに国民を味方に付けられると思ってるぜ」

ハワードとは違って屈託の無い笑顔を浮かべる大統領に、織村は苦笑を漏らした。

これくらい豪快なほうが、大国を率いるのにはいいのかもしれない。そんなことを思う。

「それにだ。うちの連中が猫可愛がりしてる箱入り娘、ナタルを落としたんだろう?」

「ぶはッ!？」

「……なあ、まじでどうやって落としたんだ? 俺も役立てるからそこんところ詳しく教えて……」

「大統領。ご婦人に報告させていただいても?」

「ごめんなさいシエリルさん黙っていてくださいお願いしますカミラには言わないでください」

秘書官であるシエリルにそう指摘され一瞬で頭を下げる大統領。そんなんでいいのかアメリカのトップ。

「んん! まあ、なんだ。あの子はアメリカのアイドルも真つ青な人気者だからな。せいぜい後ろから刺されないように注意しな」

呆気に取られたままの織村を見て、また大統領はケラケラと笑った。

## # 青年は中枢へと向かう

大統領との面会を終えた織村は空港から乗ってきた特別車両に押し込まれ、再びワシントン・ダレス空港へと向かった。

聞くに織村の最終目的地はこのホワイトハウスから車で移動するには時間がかかりすぎるようで、国内便を使用して移動するというこ  
とらしい。

移動の車内には織村の他に三人、いずれも護衛のSPであるが最初の疑念の眼を向けてきた三人ではない。大統領が気を利かせて交代させたのか単に勤務時間の都合で変更になったのか定かでないが、少なくとも今回の三人は友好的なようだった。運転している一人を除けば、しきりに織村にISについての質問を投げかけてくる。

その質問の中にナターシャ・ファイルスについての質問が無かったのは織村にとって幸運だった。どうやらアメリカ国内でのナタルの人気は予想を超えたものだったようで、移動の景色の中に混じって彼女の看板なんかひっきりなしに視界に飛び込んでくるのだ。  
(大変な女を好きになったかもしれないねえなあ、こりや)

とは言え、織村はナタルがIS学園を卒業するまでは彼女とこれ以上どうこうなろうとは考えていない。何せナターシャは飛び級で学園に入学してきたのだ。その年齢は今年で十四、今手を出せば立派な犯罪者の仲間入りである。

故に彼女との交際は出来ればひた隠しにしたまま彼女の卒業を待ちたかったのだが、ぼつちりと大統領の耳には届いていたらしい。しかも情報の出処はナタル本人、なんでも二人は以前からの知り合いなのだとか。大統領と知り合いとかどんな交友関係を構築しているのか非常に気になるが、それ以上踏み込むことはプライバシーにも関わってくるためにしない方が良いと判断。

ISに関連しての会話をSPと交わしながら空港に到着した織村は、そのまま案内されて用意された飛行機へと乗り込む。

行き先はミシガン州にあるメトロポリタン・ウェイン・ガウンティ

空港。アメリカで十番目に利用客の多い空港だ。

◇

ワシントンを下してやってきたのはミシガン州にあるメトロポリタン・ウエイン・ガウンティ空港。その空港を出て向かった先はデトロイトだ。南北をエリー湖とヒューロン湖に囲まれているアメリカ中西部有数の世界都市であるこの街には、アメリカ最大の自動車メーカーであるゼネラルモーターズ社の本社があり、自動車の街と言われている。

そんな街の一角に聳え立つ巨大な施設の前に、織村は立っていた。今回は荷物も全て所持した状態で車を降りたのでその手にはスーツケースが握られている。

「それではミスター織村。私たちはここで失礼させていただきます」

「ああ、ありがとうな」

「いえいえ、これが仕事ですので。それでは」

護衛のSPたちに礼を言うと、彼らに乗せた特別車両はすぐに街の中へと消えていった。

一先ず中に入ろうと考えて歩きだそうとしたところで、建物の影からこちらに走ってくる少年に気がついた。

「……？」

首を傾げる織村に向かって駆け寄ってきた少年は、かなり訛りの強い英語で何かを叫んでいる。余りにも訛りが強すぎて織村も何を言っているのか正確に把握できないままにその言葉を聞いていると、今度は背後から別の少年が近づいていることに気が付いた。顔は動かさないまま気配だけを察知したので向こうは織村が気がついていることに気がついていないだろう。

忍び足で近づいてきた少年はそろそろ織村のスーツケースへ手を伸ばす。

（ああ、成程。そういうことか）

スーツケースの取手に少年の手が触れた瞬間、顔は前の少年へ向け



たままその腕を掴む。

「っ!？」

「Don't have the face which isn't believed, boy (信じられないって顔してるな、少年)」

明らかに東洋人だと分かる風貌をしている人間が英語を話したことに驚いたのだろう。スーツケースを持ち去ろうとしたスキンヘッドの少年は眼を丸くしていた。

(置き引きか。俺も無用心だったな、まさかこんなガキどもが当たり前みたいにするなんて)

「Hey, Because I'll over look, go quickly. (オラ、見逃してやるからとつと行け)」

掴んでいた手を離すと、二人の少年たちは何かを叫びながら暗い路地裏へと消えていった。その後ろ姿を見つめていると、不意にガラガラと何かが開く音が届く。

振り返れば眼前の施設の門が開かれ、中から黒のスーツを着たブロンド髪の女性が歩いてきた。首を傾げる織村の前にまでやってきたその女性は胸ポケットから名刺を取り出し、それを織村へと差し出す。

「織村一華さんですね。私はこのIS開発研究・訓練機関の第二研究室室長、セリナ・フォスターと言います。今日貴方を内部まで案内させていただくことになっていますので、どうぞよろしくお願ひします」

丁寧な頭を下げられ、反射的に織村も頭を下げていた。

「織村一華です。えーとフォスターさん？ 日本語上手いですね」

「ありがとうございます。所内の人間は全員日本語を習得していますので、言語の面で不便は感じないと思います」

「そりや安心だ」

そう返した織村は、監視員の立つ門を跨いで施設の敷地内へと足を踏み入れた。都心の中心部を円状にくり抜いて強引に建物を詰め込んだような構造をしているこの施設は、アメリカ国内に二箇所あるI

S 専門の研究機関の一つであり、唯一その訓練も行っているところでもある。

日本に I S 学園を設立しろと要求したのはアメリカだと言われているが、その実際はアメリカという後ろ盾を持っている途上国や先進国が要求してきたものだ。アメリカ自体、日本に相応の情報開示は求めたものの何も専門の養成所まで作れとは言っていない。正確には、大統領は言っていない。アメリカ政府の一部が他国へ日本の印象操作などを行った形跡は見られないが、現状を見れば一部の政治家たちが何を言ったのかは察することができるだろう。

そういった経緯もあり設立された I S 学園は世界中の国籍の学生が集まっているが、この訓練機関に居るのは全員がアメリカ人である。年齢は十歳から十八歳までの少女が全体の約九割。残りは二十までの少女だ。その人数は少なく十四人。いずれも I S 適性 A 以上だそうだ。

「そっぴやフォスターさん。さつき俺のスーツケースが置き引きされそうになったんだが、この街ってあんまり治安はよくないのか？」

ガラガラと引かれるスーツケースに視線だけを向けて問いかける。

その問いに、フォスターは首を縦に振ることで答えた。

「このデトロイトは治安が悪いことでも有名ですよ。アメリカ国内の百ある都市の中でも犯罪率は最悪です」

「アメリカー治安の悪い都市ね、」

「昔起きた暴動がその発端なんですけどね。今もダウンウンには浮浪者が溢れていますよ」

歩みを止めないままに、彼女は続ける。

「この治安の悪さを抑制、改善するためにアメリカ政府は I S の専門機関をデトロイトに置いたんです」

「I S による犯罪の抑止か。妥当な判断だな」

「実際この機関が出来てから犯罪率は多少は軽減されました。と言っても、本当に僅かなものです」

「ま、本当に I S で生身の人間を傷付けるわけにはいかねえよな。そうなつちまったら叩かれるのは政府だ」

「それを浮浪者たちは分かっているんですよ。だから犯罪は無くなりません」

困ったものです、と彼女は小さく息を吐いた。日本では置き引きしようなものなら直ぐ様警察が駆けつけてくるだろうが、ここでは数が多すぎて圧倒的に警察の人手が足りないのだとか。

「と、すみません。長話が過ぎました。ここから先がIS研究区画になります。今日は見学も兼ねて見ていこうと思いますが、先に荷物を部屋に置きにいきますか？」

親切心からだろうフォスターの言葉に、織村は小さく首を横に振って答えた。

「いや、大した荷物じゃないしこのままで結構だ」

「そうですか。ではこのカードを首に掛けて下さい。中に埋め込まれたチップで扉のロックが解除されるようになっていきます」

渡されたカードには自身の名前と顔写真、何桁かの数字が羅列されていた。言われるがままにそれを首に駆け、織村はフォスターの後に続いて建物の中へと入っていった。

内部からの情報を遮断するためなのか、窓などは一切見当たらない。

細長い通路を歩いていくと、再び扉。どうやらここから先が研究区画と呼ばれている場所らしい。フォスターがやったのと同じように自分のカードを認証台に当て、扉の先へと踏み込む。

「ここはISの基礎理論研究が行われている区画ですね。ここで考案されたデータが開発室へと回されて、それを元にパーツが作成されます」

十人ほどの男女がそれぞれいくつも液晶のあるパソコンを前に格闘していた。遠くからでは詳細なデータまで見ることは出来ないが、どうやら一番手前の男性は駆動系パーツの領域向上を思案しているようだ。

「思ったより人数が少ないんだな」

「いえ、ここに居るのは一部ですよ。外から見て分かるとおり、この機関は四つの開発研究区画と一つの訓練区画で構成されています。こ

の場所は第四研究室と呼ばれる場所で、先程も言ったようにISの基礎理論の研究、構築が主な仕事です。ここで考案された理論やデータを受けて第三研、通称開発室と呼ばれる区画で試作品が作成されるんです」

「つうことはほぼデスクワークなんだな、ここの人らは」

「そうなりますね、あ、彼女が第四研の室長です」

そう言つて示されたほうを見れば、所員の前で資料片手に説明を続けている女性の姿があつた。肩に届かないほどの黒髪をカチューシャでオールバックにしたその女性はこちらに気がつくやいなや、白衣の裾をはためかせながらこちらへ小走りでやって来た。

間近で見るとその顔つきが純粋なアメリカ人のものではないことに気がつく。

「やーセリナ！ その色男つてもしかして例の彼かい？」

「ええ、そうよスー。彼が世界で二番目の男性IS操縦者、織村一華さん」

「おー！ 近くで見るとおつきいなあ君！ あたしスージー・コックス、チャイニーズアメリカン中国系アメリカ人なんだ。こここの研究室の室長やつてんものよろしくねー！」

差し出したわけでもないのに両手を掴まれぶんと上下に振られる。この他者の追隨を許さないフリーダム具合。どことなくテンションも天災と似ているなど織村は思った。

「織村一華です。よろしくコックスさん」

「やだなー堅いつて、スーでいいよ。これからここの一員になるんではよ？ 遠慮なんかいらないつて！」

「は、はあ」

「スー、貴方のテンションが高すぎて織村さんが引いているわ」

「おつとこりや失敬！ そんじやあたしは仕事に戻るよ、明後日までに第三研に可動領域拡張のデータ送んなきゃいけないんだ」

「そう、頑張つてね」

おうともさー、と息巻いて彼女は自らのデスクへと戻つていった。なんともまあ自由気ままな人間だ。

フォスターが言うにはあれでもかなりの頭脳の持ち主であるらしい。確かにそうでなければISの理論構築など行える筈がないのだが。

第四区画は基本的にこういったパソコンの並んだ部屋が幾つかあり、その都度必要に応じて使用しているらしい。部屋を抜けて突き当たりのエレベーターに乗って、フォスターは三階のボタンを押した。「三階にはなにが？」

「第三区画と繋がっている連絡橋があるんです。そこを通って区画内、第三研へ行きましょう」

エレベーター特有の浮遊感を味わいながら、三階へと向かう。

停止したエレベーターを出ると、目の前に幅二メートル程の連絡橋が続いていた。建物の外装と同じく白く塗られたその通路をフォスターを先頭に歩いていく。地上約十メートルの高さにあるこの連絡橋を歩いたことで、織村はようやくこの敷地内の建物の位置を把握した。門の正面にあった第四研から第三研、そして恐らく第二研と第一研であろう区画は全て連絡橋で繋がっており、正方形を作っている。それらの中心にある他と比べればやや小さな建物は何なのかは今不明だが、それも追々フォスターに説明を受けることになるのだろう。

第三区画と呼ばれた建物の内部は一変して工場のような空間だった。ワンフロアぶち抜きなのは第四研から送られてきたデータを元に試作品を作るため、それなりに大掛かりな設備が必要だからだ。

「この室長は現在私用で出払っているとのことなので、作業を横目に見ながら次の区画へと向かう。」

第四区画と第三区画とを繋いでいた連絡橋と同じものを通り抜けると、そこはもう第二区画だ。

「そーいやフォスターさん。自己紹介のとき、」

「ええ、私がこの第二研の室長です。驚かれましたか？」

「いや、出来る女性の雰囲気出てるから驚いたりしないけど、秘書とかの方が向いてそうだと思うよ」

「お上手ですね織村さんは。ナタルもそれにコロツとやられたのかし

ら」

「ぶはッ!？」

フォスターのいきなりの発言に織村が咳き込む。

それを面白そうに眺める彼女は第二区画を進みながら言葉が続けた。

「安心してください。そのことは極一部の者しか知りませんから」

「情報漏洩は重大な問題だと思っただが」

「出処が本人ですからどうしようもないですね」

「どっだけ言いふらしてんだあいつ……」

思わず頭を抱える織村を横目に見ながら、フォスターは自らの受け持ちでもある第二研のおおまかな説明を始めた。

ここ第二研は先程通ってきた第四研や第三研とは異なり、それぞれの目的の為の部屋がそれぞれ独立している。基本の仕事は第三研から送られてくる作成されたパーツのテスト、そしてパーツとパーツの組み合わせなどを考えることでISとして完成させる。リスクテストなども行った上で改善点を洗い出すことだ。ISとしての形はこの第二研で完成し、何も不具合が生じない限りは第一研へと仕事が回ることはないらしい。

そう言われてようやく織村は気が付いた。

ということは、現在のアメリカのIS製作において実質的なトップは今日の前にいるセリナ・フォスターだということだ。

「勿論全ての権限が私にあるわけではありません。第二研の全員の意見を纏める立場にあるだけですから」

「いやそれが十分すごいことだと思っただが」

謙遜気味に微笑むフォスターから視線を移して、第二研の内観を見渡す。パーツの作成が第三研で既に終わっているため、そういった作業に割り振られた部屋はなさそうだ。代わりに様々な試験機器がずらりと並べられている。

作成されたパーツのテスト、と一口に言ってもその内容は多岐にわたる。それは構造上の欠陥や使用上の強度を確認するためのものであったり、使用者への負担を軽減させるためのものであったり。今眼

の前で行われているのがどんなテストであるのか一目で判断することとは出来ないが、この第二研が特大重要な位置づけにあることは織村もすぐに理解した。

いくつかの場所を見てまわり、織村とフォスターは次のフロアへと進んでいく。

第二研から繋がる連絡橋の先に見えるのが第一研と呼ばれる場所だが、フォスターの話によればその室長は少しばかり変わっているようだ。

「変わっているというか、変人というか……」

言葉を濁すフォスターを見て、織村は心持ち不安になった。

彼女をして変人と言わしめる人間である。まずまともではないだろう。流石に束を上回る奇人変人っぷりはないだろうが、それに迫る人種は少ないながらも存在しないわけではない。

「いえ、悪い子ではないんですよ」

「悪い子……?」

言葉のニュアンスに違和感を覚えながら、織村は第一研の区画へと足を踏み入れた。

第一研の区画内に、部屋はたった一つしか存在していなかった。

建物の中央に置かれた二つのデスク、その正面に設置された何十ものディスプレイ。

二つのデスクに着いているのは、白衣を纏った少女と女性だった。

デスクで何がしかの作業を行っていた女性はフォスターと織村がやってきたのを見るとすぐに席を立ち、こちらに歩いてくる。フォスター同様、歩き方に品を感じさせる女性だった。

銀縁の眼鏡を掛けた織村よりも明るい茶髪その女性は、二人の前にまでやってくるとペこりと頭を下げる。

「初めましてミスター織村。第一研のヴィクトリア・ベルと申します」

「どうも、織村一華です」

相手につられて頭を下げる。

「気軽にヴィツキーと呼んでください」

「……はこ?」

下げていた頭を反射的に上げる。正面に立つ女性は、どこまでも無表情にもう一度言った。

「気軽にヴィツキーと……」

「ヴィツキー、ヴィツキー。あなた表情に出にくいんだから脅迫にか見えないわ」

どうすればいいか分からない、というように顔を強ばらせる織村に、すかさずフォスターがフォローを入れる。

「どうやらこの女性、言動と表情がどこまでも一致しない女性であるらしい。というか、感情が表に出てこないのだそうだ。」

そんな彼女は無表情のまま、言葉を続ける。

「貴方に会えるのをとても楽しみにしていました。今後共よろしくお願ひします」

「はあ」

そう曖昧な返事を返すしかなかったのは、やはり彼女が顔色の一切を変化させずに無表情だったからだだった。

と、ここまでベルの後ろにこそこそと隠れていた少女が、ひよつこりと顔を覗かせる。

そしてこう切り出した。

「フン、日本人ってどうしてこう曖昧な返事しかできないのかしら。ヘラヘラしててバツカみたい」

ピシリ、と織村の動きが止まる。

「あーやだやだ。こんなのがウチの国家代表なんて、あのおっさんどうかしてんじゃないの?」

あのおっさん? と疑問に思う織村に、横からフォスターが大統領のことだと教えてくれた。

「というかこの少女は一体どこの誰なのだろうか。この第一研に居る以上は関係者なのだろうが、いくらなんでも幼すぎる。海外の子供は大人びて見えるともいうが、目の前の少女はどう見ても十歳くらいにしか見えなかった。」

ブロンドの腰にまで届く髪はよく手入れされているのか美しく、顔つきもそんじょそこの少女より余程整っている。端的に言っ



まあば美少女なのだが、今しがたの罵倒にも似た言葉と大きめの白衣がそれを台無しにしていた。

どうみても背伸びをしている小学生にしか見えないのである。

「なあフォスターさん。このチビ一体なんなんだ？」

織村の指摘に、言葉を返したのはフォスターではなく。

「チビって言った!?! ねえ今チビって言った!?! お母さんにもお姉ちゃんにも言われたことないのに!!」

「よかったなチビ。人生で初めての相手だぞ俺は」

うがーっ！ と癩癩を起こす少女を前に、フォスターも苦笑いを浮かべるしかないようだった。

「認めないわよ！ 私はアンタがお姉ちゃんのボーイフレンドだなんて絶対認めないんだから!!」

「あん？ お姉ちゃん？」

確認の意味合いも兼ねて、織村が隣のフォスターへと視線を向ける。

その意味を正確に理解している彼女は、一つ頷いて。

「遅れながら紹介しますね。彼女はエマ・ファイルス。第一研の室長です」

そう紹介された少女、エマは鼻息荒く織村を睨み付けていた。